台東区

元浅草遺跡

― 都立白鷗高等学校附属中学校仮設校舎建設に伴う埋蔵文化財調査 ―

2024・7

東京都埋蔵文化財センター

元浅草遺跡（台東区 No.11）の調査成果

台東区元浅草遺跡（台東区遺跡 No.11）は、台東区元浅草 1 丁目にある遺跡です。遺跡の範囲は、都立白鷗高等学校の敷地にあたります。

台東区は、地形的に見ると上野台を中心とした台地地域と、台地縁辺から隅田川西岸にかけての低地地域に大きく分かれます。元浅草遺跡は、このうち低地地域にあります。武蔵野台地縁辺から約 0.5km、隅田川から約 1km の位置にあり、現地表面は海抜 2 ～ 3m を測ります。

台東区の低地地域では、隅田川西岸で弥生時代ごろから遺跡が遺されていますが、元浅草遺跡に遺跡が形成されるのは江戸時代以降です。江戸時代の当地付近は、歴史史料から旗本・御家人の組屋敷や大名の屋敷として利用されていたことがわかりました。元浅草遺跡の範囲は、江戸時代の初頭には南北に分割され、それぞれに組屋敷が設けられていました。その後、岡山藩池田家が一帯を取得し、大名屋敷として利用されるようになりました。池田家以降、浅川藩本多家、松山藩酒井家が屋敷を構え、大政奉還を迎えます。酒井家は廃藩置県以降も引き続き当地を所有していたようです。明治期の当地周辺の地図には、庭に池を持つ屋敷が多く記録されており、酒井家の庭にも池があったようです。

明治 35（1902）年になると、東京府立第一高等女学校が当地に移転してきます。府立第一高等女学校は、東京府初の高等女学校として明治 21（1888）年に認可された学校です。当初は築地、次いで神田に校舎がありましたが、女子中等教育需要の高まりにともなって生徒数が増加したため、より広い校舎が必要になりました。そこで、酒井家などから当地を購入して新校舎を建設し、移転することとなりました。その後、府立第一高等女学校は、東京都立第一女子高等学校、都立白鷗高等学校へと名称・体制を変えながら、現在まで当地に所在しています。

元浅草遺跡では、昭和 62（1988）年に都立白鷗高等学校の建替えにともなって最初の発掘調査が行われました。この発掘調査では、江戸時代の遺構や府立第一高等女学校校舎の建物基礎を検出し、陶磁器など多数の遺物が出土しました。

今回報告する発掘調査は、2 回目の調査となります。調査地点は都立白鷗高等学校の校庭にあたり、前回の調査地点の南側に位置します。発掘調査は令和 4（2022）年 7 月から開始し、令和 5（2023）年 6 月に終了しました。また、報告書刊行に向けた整理作業を令和 5 年 4 月から令和 6（2024）年 4 月まで行い、7 月に本報告書が刊行となりました。

今回調査で検出した遺構の多くは、盛土の上面で確認されました。元浅草遺跡は低地にあり、人々は盛土によってかさ上げした土地で生活していたようです。本報告書では、盛土の形成時期から 3 つの遺構確認面を設定しました。現地表面をⅠ面とし、Ⅱ面、Ⅲ面、Ⅳ面が遺構確認面です。

Ⅱ面は、府立第一高等女学校の学校校舎の時期にあたります。Ⅱ面を埋める第 1 層の遺物（写真 16）や、Ⅱ面を形成する第 2・3 層（写真 17・18）の遺物には、江戸時代のものも含まれますが、明治時代や大正時代のものも多く含まれます。特に、絵の具の容器（写真 16 最前列左端）など、学校に関係すると考えられる遺物も出土しており、遺物からも学校であったことが示唆されます。

Ⅱ面に属する遺構の中で最も注目されるのは、府立第一高等女学校の校舎と考えられる建物基礎です（写真 1）。校舎の建物基礎は、講堂と考えられる建物基礎 1 棟（35 号遺構）と校舎棟と考えられ

る建物基礎２棟（52・56 号遺構）を検出しました。発掘調査により、建物基礎の詳しい構築方法がわかりました。

建物基礎は、３層の構造を持ちます（写真 2)。最下部では、まず多数の杭を打った上に横木を設置し、次いで横木の上に胴木を２条設置したあと、胴木や横木の合間に人頭大の礫を多数敷き詰めていました。胴木の上部には、コンクリートによる土台を設けています。コンクリート製土台の上部には、煉瓦積による建物基礎がつくられていました。煉瓦の積み方はイギリス積みを基本としていますが、規則性を大きく逸脱した部分も見られます。52 号遺構ではアーチ状の積み方も確認されました。さらに、煉瓦積の最上段には表面を黒っぽく仕上げた「花黒」の煉瓦が使用されていました（写真 3・21 奥)。建物基礎のうち地表面に出ている部分に「花黒」を利用していたようです。また、積まれた煉瓦の中には炭で「ロ」「ハ」「ニ」といった文字が書かれたものがありました（写真 4)。同じ文字の書かれた煉瓦は一定の場所に固まっていることから、建物基礎を作る際に煉瓦を積む位置を表すために書き込まれたものと考えられます。

35 号遺構の一部では煉瓦の積み方が変化している部分がありました（写真 3)。講堂を南側に増築したものと考えられます。また、35 号遺構の南辺に沿うように土管列と木製の枡が組み合わさった遺構（37 号遺構）がありました（写真 5)。講堂に伴う排水施設と考えられます。このような土管と木製・煉瓦製の枡を組み合わせた遺構は、合計９系統を確認しました。それぞれ、明治・大正の校舎や昭和の頃の校舎に伴うものと考えられます。

Ⅲ面は、35 号遺構の下層から見つかった池遺構が利用された時期にあたります。Ⅲ面を形成する第４層の出土遺物は、18 世紀後葉から 19 世紀前葉のものが中心です（写真 19)。先述のとおり、池遺構は明治時代の絵図にも描かれており、Ⅲ面も明治時代まで機能していたと考えられます。

Ⅲ面に属する遺構の中で最も注目されるのは、調査範囲のほぼ中央で検出された池遺構です（写真 6)。池遺構は東岸、北岸、西岸を検出しましたが、南岸は調査範囲外となっています。池遺構の全体の規模は不明ですが、検出した範囲でも東西約 32m、南北約 19 mを測る大きなものでした。

池遺構は、周囲に間知石でできた護岸を持っていました（61 号遺構、写真 7)。細い胴木を設置し、その上に２段から４段の間知石を積み上げて護岸を構築していました。また、池の中央北寄りには中の島（93 号遺構）がありました。調査の結果、構築当初の 93 号遺構は、周囲に間知石の護岸を持つものであったことがわかりました（写真 8)。その後、中の島に土を被せた後に、池の北岸との間に土橋を構築していました。このように池遺構は幾度か改修されながら利用されていたようです。

池遺構の改修の様子は別の場所でも確認できます。池の北東部には、池への導水施設と考えられる木樋・竹樋と木製枡を組み合わせた遺構が接続していました（写真７・9)。導水施設の出口にあたる部分は、61 号遺構の石積の間に組み込まれて池側に突き出ていました（写真 7)。このような導水施設は３系統確認されました。調査の結果、導水施設は１つずつ順番に利用されており、前の導水施設を使い終わると栓をして利用を停止し、新たな導水施設を設置していたようです。そのたびに 61 号遺構を積み直して木樋を設置したものと考えられます。第４層はこれらの導水施設の設置に伴って形成された盛土と考えられ、導水施設の設置時期は 18 世紀後葉から 19 世紀前葉と考えられます。

また、調査では池遺構を埋立てる過程も確認しました。池遺構の覆土には、覆土を仕切るように数列の土留板が設置されていました（48 号遺構、写真 10)。土留板列は段階的に設置されており、大

まかに西から東に向かって埋立てが行われたようです。

池遺構上層からは多くの遺物が出土しました（写真 23 ～ 25）。出土遺物は 18 世紀後葉から 19 世紀前葉に属するものが中心です。一方で、池遺構下層の出土遺物には、17 世紀後葉から 18 世紀前葉に属するものも目に付きますが、それ以降の遺物も出土しています（写真 26）。先述のとおり池遺構は幾度か改修されており、それぞれの改修に伴って各時代の遺物が混入したものと考えられ、池遺構の構築は最も早くて 17 世紀後葉から 18 世紀前葉の遺物であると推測されます。

Ⅳ面は、江戸時代の中でも池遺構が構築される以前の盛土（第 5 層）や自然堆積層（第 6 層）の上面に遺された遺構が属します。調査範囲の東端、西端では、第 6 層まで撹乱されており、第 6 層上面で遺構を検出しました。調査範囲東端の第 6 層上面の遺物集中部（6 号遺構）からは、18 世紀後葉から 19 世紀前葉のものを中心に、17 世紀後葉から 18 世紀前葉に属するものも出土しており（写真 27）、長期間使用された遺構と考えられます。調査範囲西端の土坑（69・70・74 号遺構）からも 17 世紀後葉から 18 世紀前葉に属する出土遺物があり（写真 29）、第 6 層上面の遺構には比較的早い時期から利用された遺構が含まれるようです。

また、6 号遺構からは賤機焼（しずはたやき）と考えられる施釉（せゆう）の土器が出土しました（写真 28）。賤機焼は徳川家康が駿府に在所した頃に興された窯で、徳川家の御用窯となっていました。元浅草遺跡には徳川家と縁戚関係にある池田家や、本多家、酒井家といった譜代大名が屋敷を構えており、徳川家との親密な関係を示すと考えられます。

そのほかに、土製の鳩笛や型が、Ⅳ面の遺構をはじめ、第 1 層などから出土しました。鳩のほかにも馬や福助（ふくすけ）とみられる型も出土しています。元浅草遺跡の各層は盛土であり、外部から持ち込まれたと考えられるため、この型や土製品が元浅草遺跡で使われたものかどうかは不明ですが、江戸時代の土製品製作の一端を垣間見ることができる資料です。

Ⅳ面に属する遺構で特に注目されるのは、調査範囲の東側で見られた赤褐色の盛土面（第 5 層）とそれに伴う遺構です（写真 11）。第 5 層は調査範囲の北側で途切れており、その境界には間知石の列がありました（写真 12）。この間知石列を調査したところ、胴木を設け、その上に間知石を 3 段積み上げた石積遺構であることがわかりました（33 号遺構、写真 13）。石積を設け、その南側に赤褐色土の盛土を行って、居住可能な土地としていたようです。33 号遺構は、調査範囲を東西に横断しており、西側では調査範囲外に続いていることがわかりました。先述のとおり、元浅草遺跡では江戸時代の初頭に南北に分割されてそれぞれに組屋敷が設けられていた時期がありました。33 号遺構は、その時の境界にあたる可能性があります。土層を確認すると 33 号遺構の北側は溝となっていたようですが、調査範囲内で対岸となる石積遺構を検出することができませんでした。33 号遺構の北側の溝は、幅の広い水路などがあったのかもしれません。

一方、33 号遺構の南側の赤褐色土の盛土面（第 5 層）には、建物基礎や土坑などの遺構が遺されていました。建物基礎は、南側に開いた「コ」の字の形をした浅い溝状の遺構です（写真 14）。この溝の中に焼けた瓦が敷き詰められていました（写真 15）。焼けた瓦の中には、家紋と考えられる文様を持つものがありました（写真 31）。この家紋は「蝶」を模しています。元浅草遺跡に屋敷を構えた大名の中では、池田家の家紋に蝶が使われています。池田家の家紋と、出土した瓦の文様とは少し形が違いますが、池田家との関係が示唆される遺構です。



写真 1　府立第一高等女学校の講堂と考えられる建物基礎（35 号遺構）



写真 2　35 号遺構の南側側面



写真 3　35 号遺構の東側側面



写真 4　煉瓦の炭書き「口」



写真 5　35 号遺構に沿う土管列（37 号遺構）



写真 6　池遺構（61・93 号遺構）（池中央にある杭列は、35 号遺構下部の杭）



写真 7　61 号遺構の石積（北西部分）



写真 8　構築当初の 93 号遺構



写真 9　池遺構に接続する導水施設（75 ～ 80 号遺構）



写真 10　池遺構の埋立て用土留板列（48 号遺構）



写真 11　Ⅳ面の赤褐色盛土（第 5 層）の上面



写真 12　石積遺構の検出状況（33 号遺構）



写真 13　石積遺構の側面（33 号遺構）



写真 14　第 5 層上面で検出された建物基礎（24 号遺構）



写真 15　24 号遺構の瓦充填の様子



写真 16　第 1 層の出土遺物



写真 17　第 2-1・3 層・第 3 層の出土遺物



写真 18　第 2-2 層の出土遺物



写真 19　第 4 層の出土遺物



写真 20　35 号遺構の出土遺物



写真 21　35 号遺構に使用された煉瓦



写真 22　煉瓦製枡に使用された煉瓦



写真 23　池遺構上層の出土遺物（1）



写真 24　池遺構上層の出土遺物（2）



写真 25　池遺構上層の出土遺物（3）



写真 26　池遺構下層の出土遺物



写真 27　6 号遺構の出土遺物



写真 28　6 号遺構から出土した賤機焼



写真 29　69・70・74 号遺構の出土遺物



写真 30　鳩笛とその型



写真 31　24 号遺構から出土した瓦

Summary

The Motoasakusa Site 2nd excavation report.

The Motoasakusa Site is located in Motoasakusa, Taito-ku, Tokyo. The site is located on a lowland between the Musashino Plateau and the Sumida River. The current elevation is about 2 m above sea level. In the Edo period, there were residences of samurai and feudal lords, and in the Meiji period, there was Tokyo Prefecture First High School for Girls. Currently, Tokyo Metropolitan Hakuou High School is located there.

Through this archaeological excavation, we unearthed remains and artifacts mainly from the Edo period and the Meiji period. The remains were mainly located on piles of embankments. We categorized the results into three phases according to the order of embankment, giving them the names Phase II, Phase III, and Phase IV.

Phase II corresponded to the middle of the Meiji period or later. We found three foundations of Tokyo Prefecture First High School for Girls. The foundations were constructed of wood, concrete, and bricks. We believe that the foundations were built solidly to cope with the soft ground of the lowland area. We also found clay pipes along the building foundations. We believe they were intended to collect rainwater and drain it off.

Phase III corresponded to the late Edo period to the early Meiji period. We found a large pond in the center of the survey area. The pond was surrounded by wedge-shaped stones, and a central island was built in the center of the pond. We assume that it was a garden pond used by feudal lords. The pond was gradually filled in from the end of the Edo period, and we assume that the reclamation was completed before the construction of the Tokyo Prefecture First High School for Girls. We also found three water-conducting facilities made of wooden flumes and wooden boxes in the northwest of the pond. These would be the facilities for regulating the pond's water.

Phase IV corresponded to the early Edo period. We found masonry remains crossing the survey area from east to west. This masonry remains consisted of three wedge-shaped stones piled up and was accompanied by a retaining plate. Based on an Edo period map, we assume that the masonry remains demarcated in this area. We also found a reddish-brown soil embankment to the south of the masonry remains. This embankment was made after the masonry remains were built, and there were remains of buildings on this embankment. The masonry remains may have been constructed in preparation for embankment to create ground for human habitation.

Each phase of this survey yielded interesting results. We hope that this report will be useful in understanding this site.

序　言

元浅草遺跡は、武蔵野台地縁辺と隅田川との中間にあたる低地部に遺された遺跡です。今回の調査地点は、都立白鷗高等学校の校庭部分にあたります。

今回の調査は都立白鷗高等学校附属中学校の仮設校舎建設に先立って行われました。調査期間は令和４年７月から令和６年４月までで、調査面積は 1,800㎡です。

調査の結果、近世から近代の遺構・遺物を確認しました。近世の成果として特に注目されるものは、調査範囲の中央を占める池遺構です。周囲に間知石の護岸を持ち、中央に中の島を伴う大きなものでした。近世から近代まで継続して利用されており、当地を利用した大名屋敷に伴うものと考えられます。近代の成果として特に注目されるものは、現在の白鷗高等学校の前身となった東京府立第一高等女学校の建物基礎です。胴木、コンクリート、煉瓦を用いて強固に作られており、関東大震災でも校舎の倒壊は免れたようです。

これらの調査成果をまとめた本報告書が、多くの人々に活用され、地域の歴史を解明する資料となることを期待いたします。また、本報告書を通じて、埋蔵文化財に対する都民の皆様の関心とご理解を深めていただくことができれば幸いです。

本報告書の刊行にあたり、ご協力とご指導をいただきました東京都教育委員会、台東区教育委員会に厚く御礼を申し上げるとともに、ご教示いただきました研究者の皆様、近接地での調査にご理解とご協力をいただきました都立白鷗高等学校関係者の皆様、地域の住民の皆様に心より感謝を申し上げます。

令和６年７月

公益財団法人　東京都教育支援機構
理事長　坂東　眞理子

例　言

1　本書は、東京都立白鷗高等学校附属中学校仮設校舎建設予定地における台東区元浅草遺跡（台東区 No.11）の発掘調査報告（東京都埋蔵文化財センター調査報告第 386 集）である。

2　調査は、東京都教育庁都立学校教育支援部の委託を受け、公益財団法人東京都スポーツ文化事業団東京都埋蔵文化財センターが開始し、令和 5 年 4 月 1 日に公益財団法人東京学校支援機構東京都埋蔵文化財センターへ事業を移管した。その後、令和 5 年 7 月 1 日からは公益財団法人東京都教育支援機構東京都埋蔵文化財センターと改称し、事業を継続実施した。

3　遺跡所在地：台東区元浅草一丁目 6 番 22 号　都立白鷗高等学校校庭

4　調査面積：1,800㎡

5　調査期間

発掘調査　令和 4 年 7 月 25 日～令和 5 年 6 月 27 日

一次整理　令和 5 年 2 月 20 日～令和 5 年 4 月 28 日

二次整理及び報告書作成期間　令和 5 年 4 月 15 日～令和 6 年 4 月 30 日

6　本事業における事業者との調整などは、東京都教育庁地域教育支援部管理課が担当・指導した。

課長代理　鈴木徳子

埋蔵文化財担当　野口　舞（令和 4 年 7 月 25 日～令和 6 年 4 月 30 日）

7　調査担当者

東京都埋蔵文化財センター台東区白鴎高校分室

調査課課長代理　小林　裕（令和4年7月25日～令和6年4月30日）

調査研究員　山﨑太郎（令和4年8月1日～令和6年4月30日、令和5年4月1日より主任調査研究員）

調査研究員　両角まり（令和4年8月1日～令和5年12月31日）

調査協力

株式会社鴻池組東京本店（請負会社）

株式会社ジオダイナミック（協力会社）

8　本報告書は「Ⅰ　調査の経緯」「Ⅲ　層序」「Ⅳ　遺構と遺物　1　遺構」を山﨑が執筆し、「Ⅱ　遺跡の位置と環境」「Ⅵ　調査の成果と課題」を山﨑と両角が分担して執筆した。「Ⅲ　遺構と遺物　2　遺物」については、「1）　中世以前の遺物」の一部を及川良彦（東京都埋蔵文化財センター）が、「14）　動物遺体」を宮本由子（東京都埋蔵文化財センター）、江田真毅氏・許開軒氏（北海道大学）、阿部常樹氏（國學院大學）が執筆し、その他は両角が執筆した。また、「Ⅳ　分析と考察」については後述のとおり、ご寄稿を賜った。編集は山﨑が行った。

9　出土した陶磁器・土器の胎土分析、金属製品、銭貨、煉瓦の分析、及び金属製品、木製品の保存処理は長佐古真也（東京都埋蔵文化財センター）が行った。煉瓦の分析結果については、Ⅳに報告を記載した。

10　遺跡から出土した木樋の樹種同定及び年輪年代の測定は、鈴木伸哉（東京都埋蔵文化財センター）・大山幹成（東北大学植物園）が行った。分析結果については、Ⅳに報告を記載した。

11　本報告に関わる現地指導は次のとおりである。

（1）33 号遺構出土の間知石の調査：柴田徹氏（石器石材研究所）

（2）動物遺体等の調査：阿部常樹氏（國學院大學）

（3）文献・史料等の調査：渋谷葉子氏（徳川林政史研究所）

調査成果について、（1）についてはご指導いただいた内容をⅢの報告に反映させるかたちで掲載した。（2）について、ご寄稿いただき、Ⅲに掲載した。（3）について、ご寄稿いただき、Ⅳに掲載した。ご寄稿いただいた文章は、独立したものである。

12　出土遺物及び発掘・整理調査に関わる図面・写真記録等は、東京都教育委員会で保管している。

13　本調査については以下で報告しているが、本書の刊行をもって正式報告とする。

山﨑太郎　2023 「台東区元浅草遺跡」『たまのよこやま』132　5 頁

山﨑太郎　2024 「台東区元浅草遺跡」『東京都埋蔵文化財センター年報』43　22 頁

山﨑太郎　2024 「台東区元浅草遺跡」『東京都埋蔵文化財センター遺跡調査発表会』7-8 頁

14　本文用例等

・土色及び遺物の色調の表記には、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』を用いた。

・各挿図の縮尺及び記号の判例はそれぞれ図中に示した。図中の方位記号は真北を示す。遺構断面図中に表記した標高値は T.P.（東京湾平均海面 : Tokyo Peil）を基準とした計測値を用いている。

・調査に伴う測量は、（測地成果 2011）平面直角座標Ⅸ系を基準とした。

・本調査地点の標準座標は調査範囲を包括するグリッドの北西端 A1、平面直角座標 X ＝ -32406.779 m・北緯 35° 42、Y ＝ -4598.286 m・東経 139° 46 を代表値とした。

・各挿図のトーン、各遺物の計測位置は、後述の凡例のとおりである。

・出土遺物の注記略号は「MA22」である。

・第 1 図及び第 6 図に使用した「東京都縮尺 2,500 分の 1 地形図」は、東京都知事の承認を受けて使用した。（承認番号）6 都市基交著第 26 号、6 都市基交測第 62 号

15　発掘調査及び整理・報告書作成について、下記の方々にご指導・ご協力を賜った。記して深謝します（敬称略・五十音順）。

幾島　審、岩淵令治、小俣　悟、金子　智、斉藤　進、清野利明、谷川章雄、中野光将、仲光克顕、長佐古美奈子、深井明比古

一般社団法人鷗友会、臼杵市教育委員会、公益財団法人三井文庫、静岡市観光交流文化局文化財課、台東区教育委員会、東京都教育員会、東京都立白鷗高等学校、鶴岡市郷土資料館

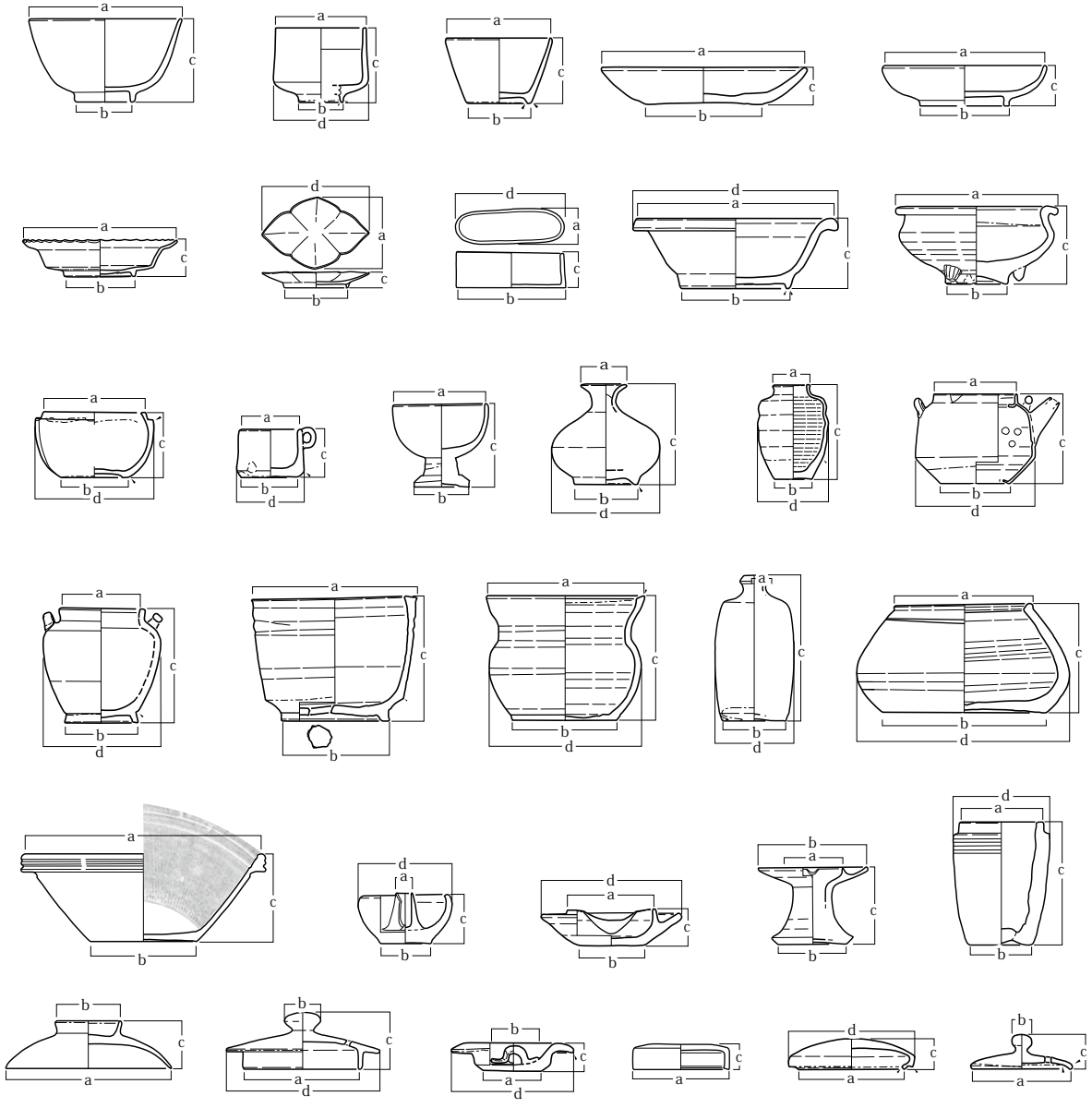
16　本報告書の著作権（日本国著作権法第 21 条から第 28 条までに規定された権利）、及び編集著作権（著作権法第 12 条第 1 項）は、公益財団法人東京都教育支援機構東京都埋蔵文化財センターが保有する。

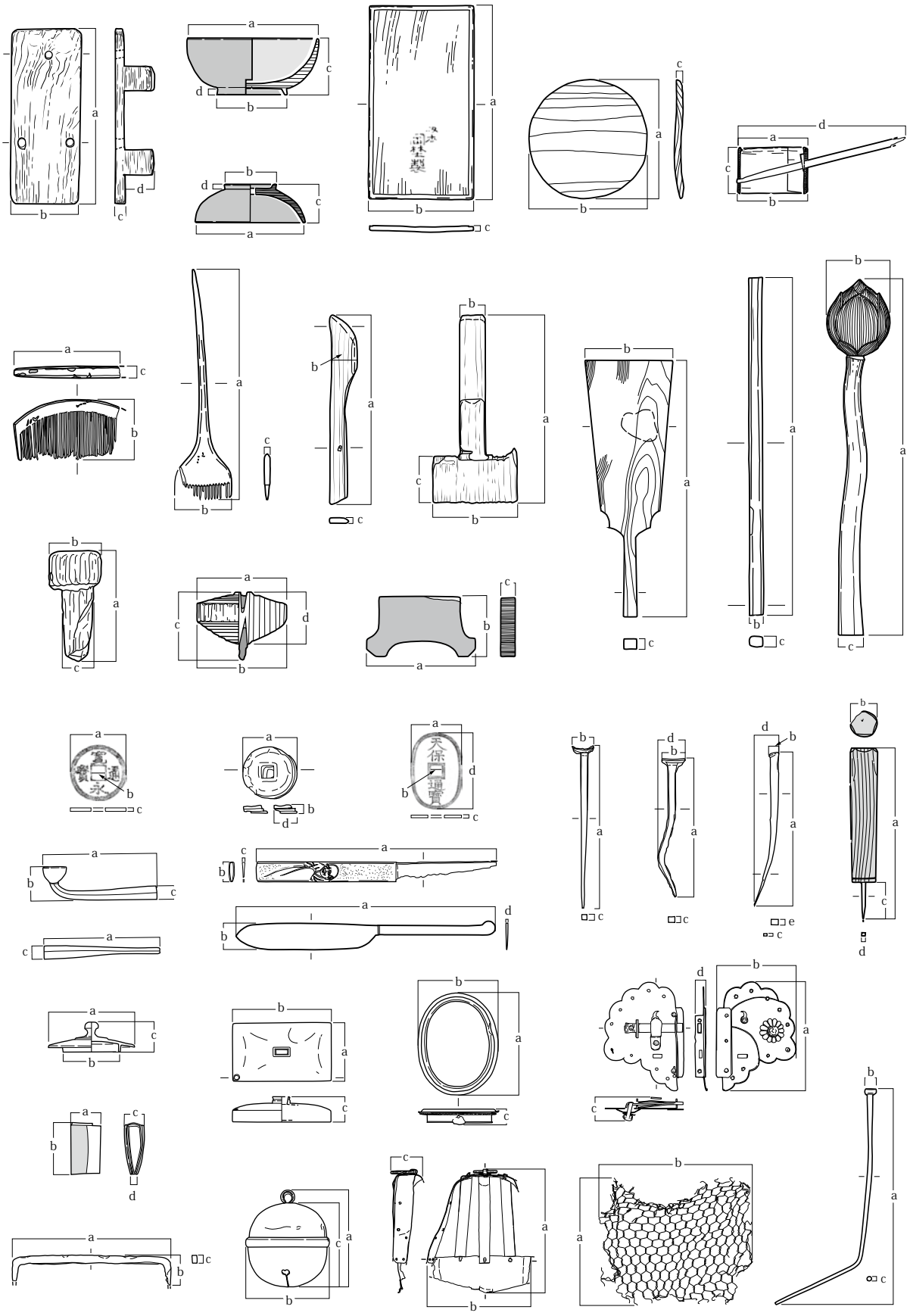
凡　例

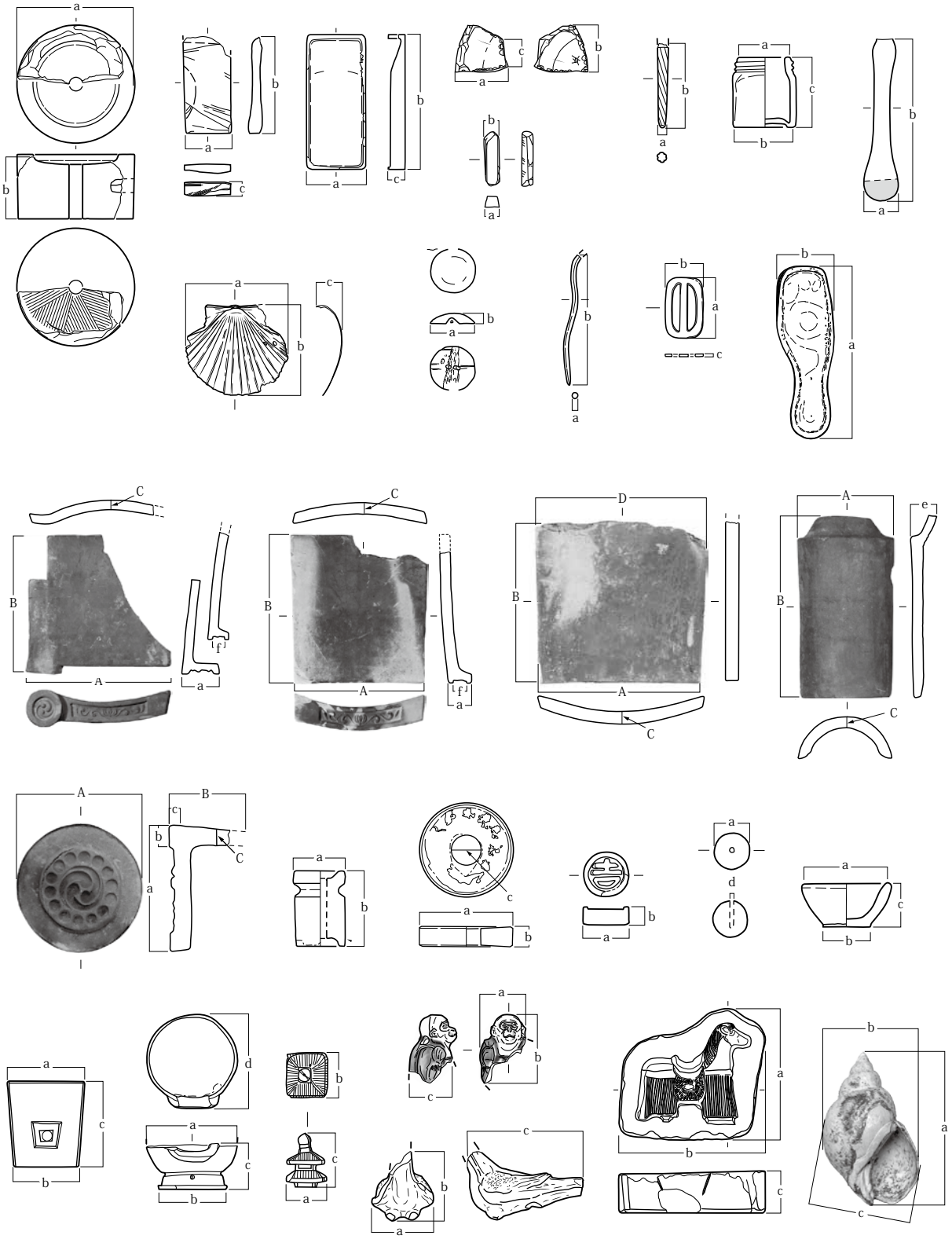
遺構凡例

石　　木材　　杭　　他遺構　　撹乱

遺物凡例







目　次

元浅草遺跡（台東区 No.11）の調査成果
Summary
序言
例言・凡例
目次
巻頭写真図版目次
挿図目次
表目次
図版目次
Ⅰ　発掘調査の概要
1　調査に至る経緯 …… 1
2　調査の方法と経過 …… 2
1）調査の方法 …… 2
2）発掘作業の経過 …… 6
3）整理作業等の経過 …… 8
Ⅱ　遺跡の位置と環境
1　地理的環境 …… 9
2　歴史的環境 …… 10
1）周辺の遺跡 …… 10
2）調査地点の概要 …… 13
Ⅲ　層序 …… 22
Ⅳ　調査の成果
1　遺構 …… 28
1）Ⅱ面の遺構 …… 28
2）Ⅲ面の遺構 …… 55
3）Ⅳ面の遺構 …… 95
2　遺物 …… 124
1）中世以前の遺物 …… 124
2）陶磁器・土器 …… 127
3）木製品 …… 209
4）金属製品 …… 227
5）石製品 …… 236
6）ガラス製品 …… 237
7）植物質製品 …… 240

8） 骨角貝製品 …… 240
9） その他の素材製品 …… 241
10） 瓦 …… 243
11） 煉瓦 …… 244
12） その他（建材など） …… 266
13） ミニチュア、人形、玩具 …… 266
14） 動物遺体 …… 274
A. 貝類・魚類遺体 …… 275
B. 鳥類 …… 283
C. 爬虫類 …… 286
D. 哺乳類 …… 286
15） 植物遺体 …… 286
Ⅴ 分析と考察
1 元浅草遺跡・白鷗高校地区の江戸時代における土地利用…… 287
2 元浅草遺跡 2次地点から出土した遺構構成材の樹種同定と年輪年代学的検討 …… 308
3 EDXを用いた元素分析による元浅草遺跡出土煉瓦の分類 …… 311
Ⅵ 調査の成果 …… 323
引用・参考文献 …… 332
写真図版
報告書抄録

巻頭写真図版

写真 1 府立第一高等女学校の講堂と考えられる建物基礎（35 号遺構） …… iv
写真 2 35 号遺構の南側側面 …… iv
写真 3 35 号遺構の東側側面 …… iv
写真 4 煉瓦の炭書き「ロ」…… iv
写真 5 35 号遺構に沿う土管列（37 号遺構）…… iv
写真 6 池遺構（61・93 号遺構）（池中央にある杭列は、35 号遺構下部の杭） …… v
写真 7 61 号遺構の石積（北西部分）…… v
写真 8 構築当初の 93 号遺構 …… v
写真 9 池遺構に接続する導水施設（75 ～ 80 号遺構） v
写真 10 池遺構の埋立て用土留板列（48 号遺構） v
写真 11 Ⅳ面の赤褐色盛土（第 5 層）の上面 …… vi
写真 12 石積遺構の検出状況（33 号遺構）…… vi
写真 13 石積遺構の側面（33 号遺構）…… vi
写真 14 第 5 層上面で検出された建物基礎（24 号遺構）…… vi
写真 15 24 号遺構の瓦充填の様子 …… vi
写真 16 第 1 層の出土遺物 …… vii
写真 17 第 2-1・3 層・第 3 層の出土遺物 …… vii
写真 18 第 2-2 層の出土遺物 …… vii
写真 19 第 4 層の出土遺物 …… vii
写真 20 35 号遺構の出土遺物 …… vii
写真 21 35 号遺構に使用された煉瓦 …… vii
写真 22 煉瓦製枡に使用された煉瓦 …… vii
写真 23 池遺構上層の出土遺物（1）…… vii
写真 24 池遺構上層の出土遺物（2）…… viii
写真 25 池遺構上層の出土遺物（3）…… viii

写真 26　池遺構下層の出土遺物 …… viii
写真 27　6 号遺構の出土遺物 …… viii
写真 28　6 号遺構から出土した賤機焼 …… viii
写真 29　69・70・74 号遺構の出土遺物 …… viii
写真 30　鳩笛とその型 …… viii
写真 31　24 号遺構から出土した瓦 …… viii

挿図目次

第1図　遺跡の位置 …… 1
第2図　試掘の成果(1) …… 3
第3図　試掘の成果(2) …… 4
第4図　グリッドと調査区の設定 …… 6
第5図　周辺の地形図 …… 9
第6図　台東区の遺跡(1/30,000) …… 11
第7図　明治時代の調査地点付近 …… 15
第8図　府立第一高等女学校校舎配置図 …… 16
第9図　府立第一高等女学校校舎の写真 …… 17
第10図　トレンチの位置と土層模式図 …… 23
第11図　調査範囲の土層(1) …… 24
第12図　調査範囲の土層(2) …… 25
第13図　Ⅱ面遺構全体図(1/350) …… 39
第14図　35号遺構(1)(1/100) …… 40
第15図　35号遺構(2)(1/60) …… 41
第16図　35号遺構(3)(1/60) …… 42
第17図　35号遺構(4)(1/60) …… 43
第18図　35号遺構(5)(1/40) …… 44
第19図　35号遺構(6)(1/250・1/100) …… 45
第20図　35号遺構(7)(1/30) …… 46
第21図　52・58・63号遺構(1/100) …… 47
第22図　56・60号遺構(1/60) …… 48
第23図　7・10・15・18・19号遺構(1/80・1/60) …… 49
第24図　39・40・62・67・14・30・36・57号遺構(1/60・1/40) …… 50
第25図　8・13・34・46号遺構(1/60) …… 51
第26図　37・38・41・44号遺構(1/120・1/40・1/20) … 52
第27図　11・53・59号遺構(1/80) …… 53
第28図　42・43・49・50・54・55号遺構(1/40) …… 54
第29図　Ⅲ面遺構全体図(1/350) …… 66
第30図　池遺構全体図(1/150) …… 67
第31図　池遺構掘方(1/150) …… 69
第32図　61号遺構(1)(1/60) …… 70
第33図　61号遺構(2)(1/60) …… 71
第34図　61号遺構(3)(1/60) …… 72
第35図　61号遺構(4)(1/60) …… 73
第36図　61号遺構(5)(1/60) …… 74
第37図　61号遺構(6)(1/60) …… 75
第38図　61号遺構(7)(1/30) …… 76
第39図　48・93号遺構(1/80) …… 77
第40図　93・47号遺構(1/60) …… 78
第41図　48号遺構(1/60) …… 79
第42図　51号遺構(1/100・1/60) …… 80
第43図　91号遺構(1/60) …… 81
第44図　73・90・64号遺構(1/20・1/40) …… 82
第45図　75・76・77・78・79・80号遺構(1/40) …… 83
第46図　80号遺構木樋(1/30) …… 84
第47図　88・92号遺構(1)(1/40) …… 85
第48図　88・92号遺構(2)(1/40・1/20) …… 86
第49図　88号遺構木樋(1)(1/30) …… 87
第50図　88号遺構木樋(2)(1/30) …… 88
第51図　88号遺構木樋(3)(1/30) …… 89
第52図　81・94号遺構(1/80・1/60) …… 90
第53図　32・45号遺構(1/100・1/20) …… 91
第54図　66・82号遺構(1/20) …… 92
第55図　83・84号遺構(1/100・1/20) …… 93
第56図　87号遺構(1/40) …… 94
第57図　Ⅳ面遺構全体図(1/350) …… 103
第58図　33号遺構(1)(1/120) …… 104
第59図　33号遺構(2)(1/80) …… 105
第60図　33号遺構(3)(1/60) …… 106
第61図　33号遺構(4)(1/30) …… 107

第62図　33号遺構(5)(1/30) …… 108
第63図　33号遺構(6)(1/30) …… 109
第64図　33号遺構(7)(1/30) …… 110
第65図　2号遺構(1)(1/80) …… 113
第66図　2号遺構(2)(1/30) …… 114
第67図　24号遺構(1/60・1/40) …… 115
第68図　12・26号遺構(1/20) …… 116
第69図　95・96・97・98・1・3・4号遺構(1/40・1/20) …… 117
第70図　96号遺構木樋(1/30) …… 118
第71図　22・9・23・21号遺構(1/40・1/20) …… 119
第72図　25・29・27・85・89・17号遺構(1/20・1/40・1/80) …… 120
第73図　31・68・70・69・74・71・72号遺構(1/40) … 121
第74図　6号遺構(1/40) …… 122
第75図　池遺構関連の注記 …… 125
第76図　中世以前の遺物 …… 126
第77図　陶磁器・土器(1) …… 142
第78図　陶磁器・土器(2) …… 143
第79図　陶磁器・土器(3) …… 144
第80図　陶磁器・土器(4) …… 145
第81図　陶磁器・土器(5) …… 146
第82図　陶磁器・土器(6) …… 147
第83図　陶磁器・土器(7) …… 148
第84図　陶磁器・土器(8) …… 149
第85図　陶磁器・土器(9) …… 150
第86図　陶磁器・土器(10) …… 151
第87図　陶磁器・土器(11) …… 152
第88図　陶磁器・土器(12) …… 153
第89図　陶磁器・土器(13) …… 154
第90図　陶磁器・土器(14) …… 155
第91図　陶磁器・土器(15) …… 156
第92図　陶磁器・土器(16) …… 157
第93図　陶磁器・土器(17) …… 158
第94図　陶磁器・土器(18) …… 159
第95図　陶磁器・土器(19) …… 160
第96図　陶磁器・土器(20) …… 161
第97図　陶磁器・土器(21) …… 162
第98図　陶磁器・土器(22) …… 163
第99図　陶磁器・土器(23) …… 164
第100図　陶磁器・土器(24) …… 165
第101図　陶磁器・土器(25) …… 166
第102図　陶磁器・土器(26) …… 167
第103図　陶磁器・土器(27) …… 168
第104図　陶磁器・土器(28) …… 169
第105図　陶磁器・土器(29) …… 170
第106図　陶磁器・土器(30) …… 171
第107図　陶磁器・土器(31) …… 172
第108図　陶磁器・土器(32) …… 173
第109図　陶磁器・土器(33) …… 174
第110図　陶磁器・土器(34) …… 175
第111図　陶磁器・土器(35) …… 176
第112図　陶磁器・土器(36) …… 177
第113図　陶磁器・土器(37) …… 178
第114図　陶磁器・土器(38) …… 179
第115図　陶磁器・土器(39) …… 180
第116図　陶磁器・土器(40) …… 181
第117図　陶磁器・土器(41) …… 182
第118図　陶磁器・土器(42) …… 183
第119図　陶磁器・土器(43) …… 184
第120図　陶磁器・土器(44) …… 185
第121図　陶磁器・土器(45) …… 186
第122図　陶磁器・土器(46) …… 187
第123図　陶磁器・土器(47) …… 188
第124図　陶磁器・土器(48) …… 189
第125図　陶磁器・土器(49) …… 190
第126図　陶磁器・土器(50) …… 191
第127図　陶磁器・土器(51) …… 192
第128図　陶磁器・土器(52) …… 193
第129図　陶磁器・土器(53) …… 194
第130図　陶磁器・土器(54) …… 195
第131図　木製品(1) …… 211
第132図　木製品(2) …… 212
第133図　木製品(3) …… 213

第134図　木製品(4) …… 214
第135図　木製品(5) …… 215
第136図　木製品(6) …… 216
第137図　木製品(7) …… 217
第138図　木製品(8) …… 218
第139図　木製品(9) …… 219
第140図　木製品(10) …… 220
第141図　木製品(11) …… 221
第142図　木製品(12) …… 222
第143図　木製品(13) …… 223
第144図　木製品(14) …… 224
第145図　金属製品(1) …… 229
第146図　金属製品(2) …… 230
第147図　金属製品(3) …… 231
第148図　金属製品(4) …… 232
第149図　金属製品(5) …… 233
第150図　金属製品(6) …… 234
第151図　石製品…… 238
第152図　ガラス製品…… 239
第153図　骨角貝製品…… 241
第154図　その他の素材の製品…… 242
第155図　瓦(1) …… 245
第156図　瓦(2) …… 246
第157図　瓦(3) …… 247
第158図　瓦(4) …… 248
第159図　煉瓦サンプル採取位置…… 255
第160図　煉瓦(1) …… 256
第161図　煉瓦(2) …… 257
第162図　煉瓦(3) …… 258
第163図　煉瓦(4) …… 259
第164図　煉瓦刻印の種類…… 260
第165図　その他の建材など…… 265
第166図　玩具・ミニチュア・人形(1) …… 269
第167図　玩具・ミニチュア・人形(2) …… 270
第168図　玩具・ミニチュア・人形(3) …… 271
第169図　玩具・ミニチュア・人形(4) …… 272
第170図　出土バイ殻高・殻幅分布(N＝5以上)… 282
第171図　池遺構出土オオタニシ殻高分布…… 283
第172図　江戸全図(部分、臼杵市教育委員会所蔵) …298
第173図　江戸大絵図(部分、公益財団法人三井文庫所蔵) …… 298
第174図　新板江戸外全図 東ハ浅草、北ハ染井、西ハ小石川(部分、国立国会図書館デジタルコレクション)…… 298
第175図　御府内往還其外沿革図書 延宝年中の形(部分、国立国会図書館デジタルコレクション) … 298
第176図　御府内往還其外沿革図書 貞享四卯年之形(部分、国立国会図書館デジタルコレクション) ……298
第177図　御府内往還其外沿革図書 元禄十一寅年之形(部分、国立国会図書館デジタルコレクション) …298
第178図　御府内往還其外沿革図書 宝永二酉年之形(部分、国立国会図書館デジタルコレクション) ……299
第179図　御府内往還其外沿革図書 享保年中之形(部分、国立国会図書館デジタルコレクション) … 299
第180図　御府内往還其外沿革図書 当時(弘化2年)之形(部分、国立国会図書館デジタルコレクション) … 299
第181図　〔江戸屋敷間取図〕(鶴岡市郷土資料館「阿部正己文庫」のうち「松山藩史料」345)…… 300
第182図　〔松山藩江戸屋敷間取図〕(鶴岡市郷土資料館「阿部正己文庫」のうち「松山藩史料」346) …… 300
第183図　元浅草遺跡第2次地点から出土した遺構構築材の顕微鏡写真 ……310
第184図　元浅草遺跡第2次調査地点から出土した木樋用材の横断面写真 ……310
第185図　元浅草遺跡第2次調査地点から出土した木樋用材と都内墓地遺跡出土木棺材の標準年輪曲線とのクロスデーティング結果 ……311
第186図　板目(手抜き成形)[「さ」・「サ」刻印]煉瓦分析値の二元分布図 …… 317
第187図　板目(手抜き成形)[他刻印、無刻印・不明]煉瓦分析値の二元分布図 ……318
第188図　チヂレ目(機械成形)煉瓦各種分析値の二元分布図 …… 319
第189図　出土煉瓦分析値の遺構別二元分布図… 320
第190図　器種別出土パターン…… 325

第191図　時期別出土パターン…… 325
第192図　Ⅱ面の遺構と学校校舎の配置図(1/800)…330
第193図　池遺構と周辺の遺構の変遷(1/500)… 331

表目次

第1表　都立白鷗高等学校附属中学校仮設校舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査工程表 …… 7
第2表　台東区の遺跡一覧 …… 11
第3表　元浅草遺跡の土地利用の概略 …… 14
第4表　煉瓦製建物基礎計測表 …… 54
第5表　56号遺構内部土坑計測表…… 54
第6表　近代コンクリート製構築物計測表 …… 54
第7表　鉄管・土管計測表 …… 54
第8表　コンクリート製・煉瓦製枡計測表 …… 55
第9表　木製枡計測表 …… 55
第10表　土坑計測表 …… 55
第11表　86号遺構礎石計測表 …… 55
第12表　石積遺構計測表 …… 81
第13表　中の島計測表 …… 81
第14表　池遺構内土留板計測表 …… 81
第15表　池遺構内瓦集中部計測表 …… 81
第16表　土留板計測表 …… 81
第17表　木樋計測表 …… 94
第18表　竹樋計測表 …… 94
第19表　木製枡計測表 …… 94
第20表　32号遺構板基礎計測表 …… 95
第21表　45号遺構礎石計測表 …… 95
第22表　井戸計測表 …… 95
第23表　箱状木枠計測表 …… 95
第24表　溝計測表 …… 95
第25表　土坑計測表 …… 95
第26表　石積遺構計測表 …… 111
第27表　33号遺構間知石一覧表 …… 111
第28表　土留板計測表 …… 112
第29表　建物基礎計測表 …… 123
第30表　井戸計測表 …… 123
第31表　木樋計測表 …… 123
第32表　埋設桶計測表 …… 123
第33表　土坑計測表 …… 123
第34表　溝計測表 …… 123
第35表　遺物集中部計測表 …… 123
第36表　中世以前の遺物観察表 …… 127
第37表　陶磁器・土器観察表…… 196
第38表　文字や記号が記された陶磁器・土器の一覧表 …207
第39表　木製品観察表 …… 225
第40表　金属製品観察表 …… 235
第41表　石製品観察表 …… 239
第42表　ガラス製品観察表 …… 240
第43表　植物質製品観察表 …… 240
第44表　骨角貝製品観察表 …… 241
第45表　その他の素材の製品観察表 …… 243
第46表　瓦観察表 …… 249
第47表　煉瓦観察表 …… 261
第48表　煉瓦刻印の歪みと押印の作業方向 …… 266
第49表　その他の建材など観察表 …… 267
第50表　玩具・人形・ミニチュア観察表 …… 273
第51表　動物遺体一覧表 …… 274
第52表　貝類・魚類種名表…… 276
第53表　出土貝類遺体同定結果 …… 279
第54表　出土魚類遺体同定結果 …… 280
第55表　出土ハマグリ計測結果 …… 280
第56表　出土バイ計測結果 …… 281
第57表　池遺構出土オオタニシ計測結果 …… 282
第58表　鳥類種名表 …… 285
第59表　元浅草遺跡における鳥類の出土量 …… 285
第60表　爬虫類・哺乳類種名表…… 286
第61表　屋敷地所有者等履歴 …… 301
第62表　元浅草遺跡白鷗高校地区　江戸時代屋敷関係年表 …… 302

第63表　元浅草遺跡第2次調査地点から出土した遺構構築材の樹種 …… 312
第64表　元浅草遺跡第2次調査地点から出土した木樋用材の年輪計測値 …… 312
第65表　分析結果 …… 321
第66表　器種別出土量 …… 326
第67表　時期別出土量(パーセンテージ) …… 327
第68表　遺構別素材別出土量 …… 328

図版目次

図版１　1. Ⅰ区Ⅳ面全景(南から)
2. Ⅲ区Ⅱ面全景(西から)
図版２　1. Ⅱ・Ⅲ区Ⅲ・Ⅳ面全景(西から)
図版３　1. Ⅰ区北壁土層堆積状況(南から)
2. Ⅱ区北壁土層堆積状況(南から)
3. Ⅲ区北壁土層堆積状況(南から)
4. 35号遺構建物基礎南側土層堆積状況(東から)
図版４　1. Ⅰ区南北トレンチ土層堆積状況(1)(西から)
2. Ⅰ区南北トレンチ土層堆積状況(2)(西から)
3. Ⅰ区南北トレンチ土層堆積状況(3)(西から)
4. Ⅰ区南北トレンチ土層堆積状況(4)(西から)
5. Ⅰ区南北トレンチ土層堆積状況(5)(西から)
6. Ⅰ区東西トレンチ土層堆積状況(1)(南から)
7. Ⅰ区東西トレンチ土層堆積状況(2)(南から)
8. Ⅰ区東西トレンチ土層堆積状況(3)(南から)
図版５　1. Ⅰ区東西トレンチ土層堆積状況(4)(南から)
2. Ⅰ区東西トレンチ土層堆積状況(5)(南から)
3. Ⅰ区東西トレンチ土層堆積状況(6)(南から)
4. Ⅱ区深掘トレンチ土層堆積状況(南から)
5. 35号遺構東張出部(北から)
6. 35号遺構東辺内部側面(西から)
7. 35号遺構拡張部東辺内部側面(西から)
図版６　1. 35号遺構東辺外部側面(東から)
2. 35号遺構南辺外部側面(南から)
3. 35号遺構中辺内部側面(北から)
4. 35号遺構中辺中央炭書き「ロ下」
5. 35号遺構中辺中央炭書き「ハ下」
図版７　1. 35号遺構西辺中央炭書き「ニ下」
2. 35号遺構中辺中央炭書き「ヘ下」
3. 35号遺構西辺炭書き「と下」
4. 35号遺構東辺中央炭書き(文字不明)
5. 35号遺構拡張部土層堆積状況(西から)
6. 35号遺構東辺外側土層堆積状況(北東から)
7. 35号遺構中辺南側土層堆積状況(西から)
図版８　1. 35号遺構胴木検出状況(北から)
2. 35号遺構拡張部胴木検出状況(西から)
3. 35号遺構東辺・南辺胴木結合部(南から)
4. 35号遺構南辺胴木・横木撤去状況(西から)
5. 35号遺構南辺胴木・横木撤去状況(南から)
図版９　1. 52号遺構東辺内部側面(西から)
2. 56号遺構北辺外部側面(北から)
3. 39・40号遺構検出状況(東から)
4. 15号遺構上段(南から)
5. 15号遺構下段消火栓検出状況(南から)
図版10　1. 7号遺構北側(北から)
2. 7号遺構南側(南から)
3. 13・34号遺構検出状況(西から)
4. 13・38・46号遺構検出状況(東から)
5. 34号遺構検出状況(南から)
6. 46号遺構検出状況(西から)
7. 62号遺構検出状況(南から)
8. 67号遺構検出状況(北西から)
図版11　1. 14号遺構検出状況(東から)
2. 36号遺構検出状況(北から)
3. 37号遺構検出状況(東から)
4. 37号遺構木製枡a遺物検出状況(南から)
5. 37号遺構木製枡b底面検出状況(南から)
6 44号遺構底面検出状況(南から)
7. 63号遺構土管検出状況(南から)
8. 10号遺構検出状況(南から)
図版12　1. 30号遺構検出状況(西から)
2. 38号遺構検出状況(南から)
3. 41号遺構検出状況(東から)
4. 60号遺構検出状況(北東から)
5. 59号遺構-1完掘(南から)
6. 53号遺構-1完掘(南から)
7. 11号遺構検出状況(北から)
図版13　1. 42号遺構底面検出状況(南から)
2. 50号遺構底面検出状況(北から)
3. 43号遺構完掘(南から)

4. 49号遺構完掘(西から)
5. 54号遺構完掘(北から)
6. 55号遺構礫検出状況(北から)
7. 35号遺構調査作業
8. 30号遺構煉瓦サンプル採取作業

図版14 1. 池遺構検出状況(南から)
2. 47・48・51・61・93号遺構検出状況(南から)

図版15 1. 池遺構底面検出状況(南から)
2. 池遺構完掘(南から)

図版16 1. 61号遺構(A)石積検出状況(北東から)
2. 61号遺構(B)石積前面(東から)
3. 61号遺構(B・C)石積前面(北東から)
4. 61号遺構(C・D)石積前面(東から)
5. 61号遺構(D)石積前面・木樋出口部分(東から)
6. 61号遺構(E)石積前面(南から)
7. 61号遺構(F)石積前面(南西から)
8. 61号遺構(F)石積前面(南西から)

図版17 1. 61号遺構(G)石積上面(北西から)
2. 61号遺構(G)石積前面(南西から)
3. 61号遺構(F・H)石積前面(南から)
4. 61号遺構(H)石積前面(南東から)
5. 61号遺構(I)石積前面(南西から)
6. 61号遺構(I・J)石積前面(西から)
7. 61号遺構(K・L)石積前面(西から)
8. 61号遺構(L)石積検出状況(北西から)

図版18 1. 61号遺構(C)胴木検出状況(北から)
2. 61号遺構(D)胴木検出状況(北から)
3. 61号遺構(G)胴木検出状況(西から)
4. 93号遺構土層堆積状況(東から)
5. 93号遺構土層堆積状況(北から)
6. 47号遺構検出状況(西から)
7. 47号遺構土留板側面(北西から)
8. 47号遺構土層堆積状況(北東から)

図版19 1. 48号遺構(南1)検出状況(東から)
2. 48号遺構(南1)コモ状繊維検出状況(1)(東から)
3. 48号遺構(南1)コモ状繊維検出状況(2)(東から)
4. 48号遺構(南2)側面検出状況(東から)
5. 48号遺構(南3)側面検出状況(東から)
6. 48号遺構(南4)側面検出状況(東から)
7. 48号遺構(南5)側面検出状況(東から)
8. 48号遺構(南4)側面(東から)

図版20 1. 48号遺構(南5)側面(東から)
2. 48号遺構(北1)検出状況(東から)
3. 48号遺構(北2)検出状況
4. 48号遺構(北2)完掘(東から)
5. 91号遺構瓦集中部検出状況(南から)
6. 90号遺構底面・礫検出状況(西から)
7. 64a号遺構竹樋検出状況(東から)
8. 64b号遺構木樋検出状況(東から)

図版21 1. 75・76・77・78・79・80号遺構完掘(東から)
2. 76・80号遺構木樋検出状況(東から)
3. 77号遺構底面検出状況(西から)
4. 75号遺構底面検出状況(西から)
5. 80号遺構木樋内部堆積状況(東から)
6. 81・88・92・94号遺構検出状況(東から)
7. 88・92号遺構検出状況(東から)

図版22 1 88号遺構a木樋継手部分
2. 92号遺構底面検出状況(南から)
3. 81・94号遺構検出状況(東から)
4. 81号遺構側面(南から)
5. 81号遺構側面(南から)
6. 94号遺構側面(南から)
7. 94号遺構側面(南から)
8. 32号遺構-1礫面検出状況(南から)

図版23 1. 32号遺構-2検出状況(南から)
2. 32号遺構-3検出状況(南から)
3. 32号遺構-4検出状況(南から)
4. 32号遺構-4礫面検出状況(南から)
5. 32号遺構-5検出状況(南から)
6. 45号遺構土層堆積状況(南から)
7. 66号遺構検出状況(北から)
8. 66号遺構底面検出状況(北から)

図版24 1. 82号遺構瓦出土状況(西から)
2. 84号遺構-2礫出土状況(北から)
3. 84号遺構-3完掘(北から)
4. 83号遺構完掘(北から)
5. 87号遺構掘削状況(北から)
6. 33号遺構検出状況(Ⅰ区東)(北から)
7. 33号遺構検出状況(Ⅰ区～Ⅱ区東)(西から)

図版25 1. 33号遺構検出状況(Ⅰ区西～Ⅱ区東)(北から)
2. 33号遺構石積近影(Ⅰ区)(1)(北から)
3. 33号遺構石積近影(Ⅰ区)(2)(北から)

4. 33号遺構石積近影(Ⅰ区)(3)(北から)
5. 33号遺構石積近影(Ⅰ区)(4)(北から)
6. 33号遺構石積近影(Ⅰ区)(5)(北から)
7. 33号遺構石積近影(Ⅰ区)(6)(北から)
8. 33号遺構石積近影(Ⅰ区)(7)(北から)

図版26 1. 33号遺構石積近影(Ⅰ区)(8)(北から)
2. 33号遺構石積近影(Ⅰ区)(9)(北から)
3. 33号遺構石積近影(Ⅰ区)(10)(北から)
4. 33号遺構石積近影(Ⅰ区)(11)(北から)
5. 33号遺構石積前面(Ⅰ区東)(北から)
6. 33号遺構石積前面(Ⅰ区西)(北から)
7. 33号遺構石積前面(Ⅱ区東)(北から)
8. 33号遺構石積前面(Ⅱ区西)(北から)

図版27 1. 33号遺構石積前面近影(Ⅰ区西)(北から)
2. 33号遺構アンカー状木製品あ出土状況(北東から)
3. 33号遺構アンカー状木製品い出土状況(西から)
4. 33号遺構アンカー状木製品う出土状況(南西から)
5. 33号遺構アンカー状木製品え出土状況(北東から)
6. 33号遺構アンカー状木製品お出土状況(西から)
7. 33号遺構アンカー状木製品か出土状況(北西から)
8. 33号遺構アンカー状木製品き出土状況(北から)

図版28 1. 33号遺構土留板検出状況(北から)
2. 33号遺構胴木検出状況(胴木①～④)(北から)
3. 33号遺構胴木検出状況(胴木⑤～⑧)(北から)
4. 33号遺構胴木検出状況(⑦～⑩)(北から)
5. 33号遺構胴木検出状況(胴木⑪・⑫)(北から)
6. 33号遺構胴木撤去後(胴木支え②～⑤)(北から)
7. 33号遺構胴木撤去後近影(胴木支え④・⑤)(北から)
8. 33号遺構胴木撤去後近影(胴木支え②・③)(北から)

図版29 1. 33号遺構完掘(Ⅰ区東)(北から)
2. 33号遺構完掘(Ⅰ区西～Ⅱ区東)(北から)
3. 33号遺構完掘(Ⅱ区西)(北から)
4. 33号遺構裏込め土層堆積状況(Ⅰ区東)(西から)
5. 33号遺構土層堆積状況(Ⅰ区東)(西から)
6. 33号遺構石積前面(Ⅲ区)(北から)
7. 33号遺構胴木検出状況(胴木⑬～⑯)(北から)
8. 33号遺構胴木撤去後(Ⅲ区)(北から)

図版30 1. 33号遺構土層堆積状況(Ⅲ区)(東から)
2. 99号遺構検出状況(南から)
3. 2号遺構検出状況(東から)
4. 24号遺構西辺瓦面検出状況(南から)
5. 12号遺構検出状況(南から)
6. 12号遺構土層堆積状況(南から)
7. 12号遺構井戸下段検出状況(南から)

図版31 1. 26号遺構土層堆積状況(西から)
2. 95・96・97号遺構検出状況(西から)
3. 95号遺構内部完掘(北から)
4. 95号遺構木樋出口部分近影(東から)
5. 96・97・98号遺構断割状況(北から)
6. 1号遺構底面検出状況(北東から)
7. 3号遺構遺物出土状況(西から)
8. 4号遺構遺物出土状況(西から)

図版32 1. 22号遺構底面検出状況(西から)
2. 21号遺構底面検出状況(南から)
3. 9号遺構側板検出状況(西から)
4. 23号遺構側板検出状況(南から)
5. 25号遺構側板・底面検出状況(南から)
6. 29号遺構底面検出状況(南から)
7. 85号遺構完掘(東から)
8. 89号遺構完掘(南から)

図版33 1. 27号遺構礫面検出状況(南から)
2. 31号遺構完掘(南から)
3. 68号遺構木材出土状況(南から)
4. 68号遺構完掘(南から)
5. 69・74号遺構完掘(西から)
6. 71号遺構完掘(北から)
7. 72号遺構遺物出土状況(北から)
8. 72号遺構完掘(北から)

図版34 1. 6号遺構完掘(東から)
2. 遺跡説明会(学校向け)(1)
3. 遺跡説明会(学校向け)(2)
4. 33号遺構土留板取上げ作業
5. 33号遺構胴木取上げ作業
6. 61号遺構調査作業

7. 61号遺構調査作業
8. Ⅰ・Ⅱ区雨天後水抜き作業
図版35　中世以前の遺物
図版36　文字や記号が記された陶磁器・土器(1)
図版37　文字や記号が記された陶磁器・土器(2)
図版38　木製品(1)
図版39　木製品(2)
図版40　木製品(3)
図版41　木製品(4)
図版42　木製品(5)
図版43　金属製品(1)
図版44　金属製品(2)
図版45　金属製品(3)
図版46　金属製品(4)
図版47　石製品、ガラス製品
図版48　植物質製品、骨角貝製品、その他の素材の製品
図版49　瓦
図版50　煉瓦(1)
図版51　煉瓦(2)
図版52　煉瓦(3)
図版53　煉瓦(4)
図版54　煉瓦(5)
図版55　煉瓦(6)
図版56　煉瓦(7)
図版57　その他建材など、玩具・ミニチュア・人形
図版58　動物遺体(貝類)
図版59　動物遺体(魚類)
図版60　動物遺体(鳥類)(1)
図版61　動物遺体(鳥類)(2)
図版62　動物遺体(爬虫類・哺乳類)

Ⅰ　発掘調査の概要

1　調査に至る経緯

東京都教育庁都立学校教育部（以下、「都立学校教育部」という。）は、都立白鷗高等学校附属中学校の建替え工事に伴い、仮設校舎を都立白鷗高等学校校庭に建設することとなった。この都立白鷗高等学校（以下、「白鷗高校」という。）の敷地は周知の埋蔵文化財包蔵地である「元浅草遺跡（台東区No.11）」の範囲にあたる。このため、都立学校教育部から東京都教育庁地域教育支援部（以下、「地域教育支援部」という。）へ、令和３年 12 月 24 日付で法 94 条第１項に基づく通知（３教学高埋第 2551 号）を行った。地域教育支援部から都立学校教育部へ令和３年 12 月 24 日付で法 94 条第１項に基づく通知（３教地管埋第 3999 号）があり、試掘調査を行うこととなった。試掘調査は東京都教育委員会教育長（以下､「都教育長」という。）が発注し､台東区教育委員会（以下､「区教委」という。）の立会いの下、トキオ文化財株式会社が令和３年 12 月 25 日から令和４年１月８日まで行った。この結果、江戸時代及び明治時代の遺構を検出したため、区教委は都教育長へ令和４年２月 14 日付でこの旨を回答（３台教生第 1395 号）した。

このような経緯をふまえ、都立学校教育部から地域教育支援部へ令和４年２月 21 日付で埋蔵文化財発掘調査の取り扱いについての照会（３教学高第 3146 号）があった。地域教育支援部は令和２年２月 24 日付で本発掘調査は地域教育支援部が対応し、調査については東京都スポーツ文化事業団東



「東京都縮尺2,500分の１地形図」を利用して作成。

第１図　遺跡の位置図

京都埋蔵文化財センター（令和 5 年 4 月 1 日より東京学校支援機構東京都埋蔵文化財センター、令和 5 年 7 月 1 日より東京都教育支援機構東京都埋蔵文化財センター、以下「都埋文」という。）が実施する旨を回答（3 教地管第 2770 号）、関係機関と調査実施に向けての協議を行うように通知した。

上記通知をうけて、都埋文から令和 4 年 3 月 7 日付で承諾書（3 ス文事埋文第 3098 号）を提出した。令和 4 年 3 月 31 日付で協定書（3 教地管第 3110 号）、令和 4 年 5 月 27 日付で契約書（4 教総契学第 35 号）が締結された。

調査開始にあたり、令和 4 年 6 月 30 日付で都埋文から都教育長へ法 92 条第 1 項に基づく埋蔵文化財の発掘届（4 ス文事埋文第 2191 号）を提出し、令和 4 年 7 月 19 日付で都教育長から都埋文へ通知（3 教地管埋第 1322 号）を受け取った。これに基づき、令和 4 年 7 月末から準備工を行うこととなった。

■試掘調査

試掘調査は、先述のとおり、都教育長が発注し、区教委の立会いの下、トキオ文化財株式会社が行った。調査は 3 か所のトレンチを設定し、総調査面積は 40㎡である。調査期間は、令和 3 年 12 月 25 日から令和 4 年 1 月 8 日である。重機による表土除去の後、遺構確認・精査を人力にて行った。その結果、トレンチ 1 では地表下 1.6m で江戸時代の基礎杭列と石列が検出された。また、トレンチ 2 では地表下 0.65m、トレンチ 3 では地表下 0.85m で明治時代以降の煉瓦基礎が検出された。各トレンチにおいて平面図と土層断面図、写真撮影により記録した。埋戻しはトレンチ脇に仮置きした発生土を用いて行った。また表層についてはダスト舗装を行い、旧状に復した。

試掘調査では、江戸時代から明治時代の遺構が 10 基、遺物が 35 点確認された。各トレンチの位置と調査成果は第 2・3 図のとおりである。

トレンチ 1 においては、江戸時代と考えられる杭列 7 本、石列 1 基が検出された。遺物は 8 層から 18 世紀前半頃の磁器 1 点、陶器 3 点、土器 1 点、木製品 1 点の計 6 点が出土した。

トレンチ 2 においては、明治時代以降の煉瓦基礎が検出された。煉瓦基礎は大型礫を敷設した後、胴木とコンクリート土台を設置し、その上面に煉瓦が 10 段積み上げられていた。遺物は江戸時代から明治時代にかけての磁器 10 点、陶器 11 点、瓦 3 点、計 24 点が出土した。

トレンチ 3 においては、明治時代以降の煉瓦基礎が検出された。最深部の煉瓦基礎は煉瓦が 9 段積み上げられていた。遺物は 12 層から 18 世紀前半頃の磁器 2 点、陶器 3 点、計 5 点が出土した。

2　調査の方法と経過

1）調査の方法

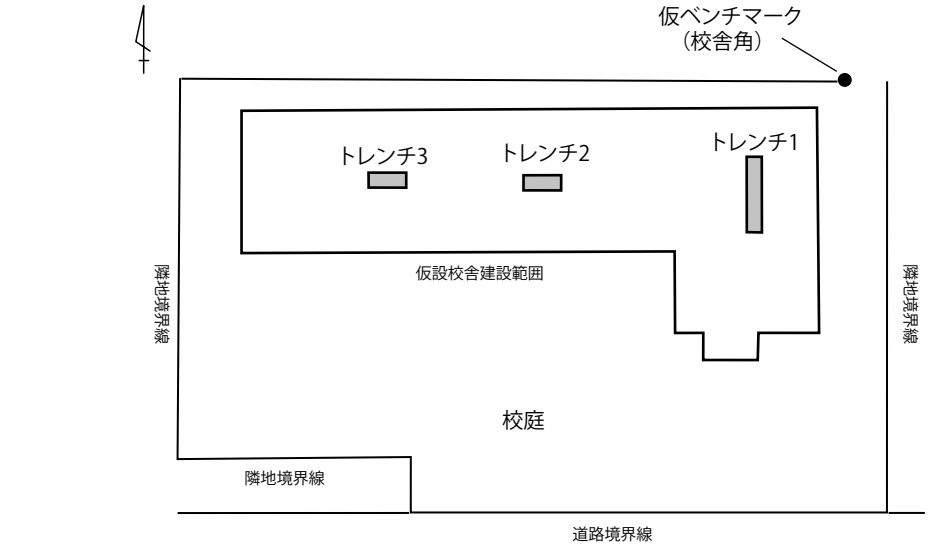
調査の方法は、地域教育支援部や区教委との協議の上で決定した。元浅草遺跡では昭和 62 年に都立学校遺跡調査会による調査（以下、「第 1 次調査」という。）が行われているが、今回の調査では第 1 次調査における遺構番号や遺構名称を用いずに、土坑や井戸等の遺構を区別せず、全ての遺構に新規の通し番号を用いている。また、遺構調査の方法や作図、写真撮影などの記録については、第 1 次調査との互換性を保持し出来るように凡そ準拠している。なお、第 1 次調査と対比するため、本報告書では今回調査を「第 2 次調査」と呼ぶ。

発掘調査の作業手順については、都埋文の作業工程水準表及び掘削作業標準に従って実施した。ま

た、作業時間短縮のため、手作業による作図に加えて、遺構の記録には写真撮影による三次元測量を用いて作業を行った。

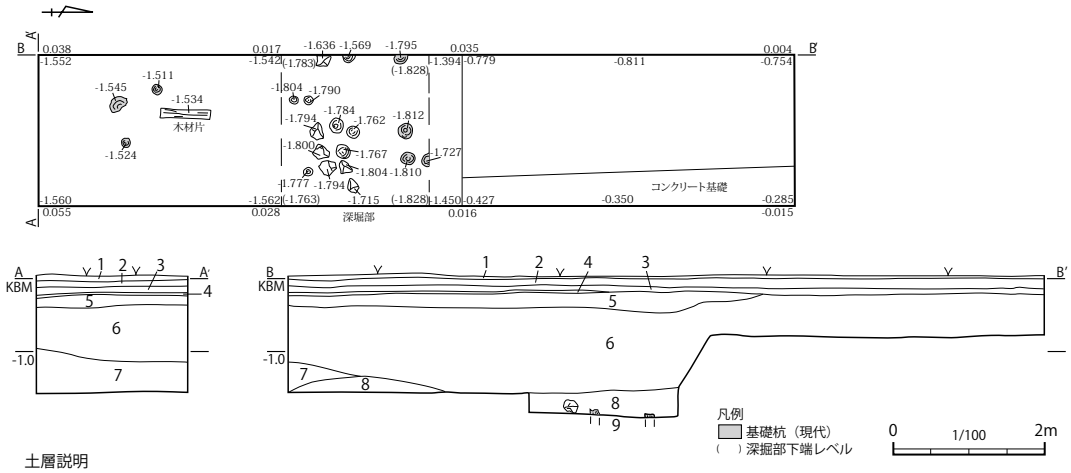
先述のとおり、調査地は白鷗高校の校庭であり、白鷗高校構内への入退場は原則８時 30 分から 17 時 00 分までと定められた。このため、都立学校教育部と都埋文は事前に協議を行い、調査地点に設置する仮設事務所（以下、「仮設事務所」という。）は朝礼や夕礼、作業時の休憩施設として利用することとし、白鷗高校の外部に調査事務所（以下、「調査事務所」という。）を設置して、調査に係る事務作業や測量データ処理、作業員の更衣等を行うこととした。また、整理作業についても、発掘調査終了後に調査事務所にて引き続き行うこととなった。調査事務所は令和４年８月９日から令和６年３月 22 日まで利用した。

また、調査にあたり、月に一回程度、都立学校教育部、地域教育支援部、白鷗高校、都埋文の四者で、仮設事務所、調査事務所、及び白鷗高校会議室において定例会議を行い、発掘調査の進捗状況や



トレンチ配置図（1/1000）

■トレンチ1

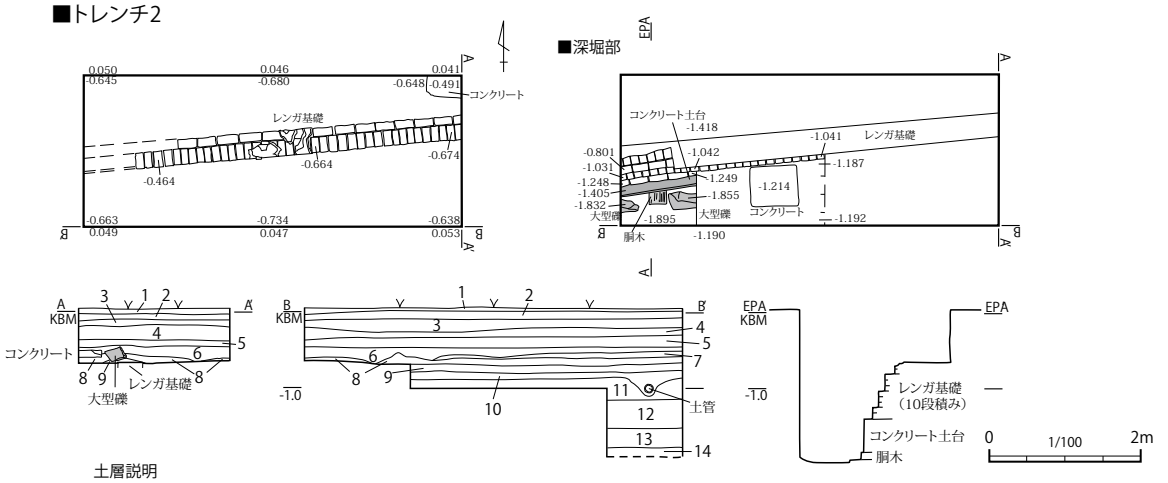


土層説明

1　グランド表層砂。
2　ローム主体盛土。
3　砕石。
4　黒褐色土(10YR3/2)。締まり強い。粘性普通。ローム粒子多量。ロームブロック多量。粘土少量。土管片、煉瓦片含む。
5　コンクリート片、砂利、木材片含む。
6　灰色土(7.5Y5/1)。締まり強い。粘性普通。コンクリート片、砂利、土管片、鉄筋含む。
7　灰色土(7.5Y5/1)。締まり普通。粘性普通。ロームブック少量。焼土少量。砂利、木材片含む。
8　オリーブ灰色土(2.5GY5/1)。締まり普通。粘性普通。砂利含む。
9　オリーブ灰色土(2.5GY5/1)。締まり普通。粘性強い。

第２図　試掘の成果（1）

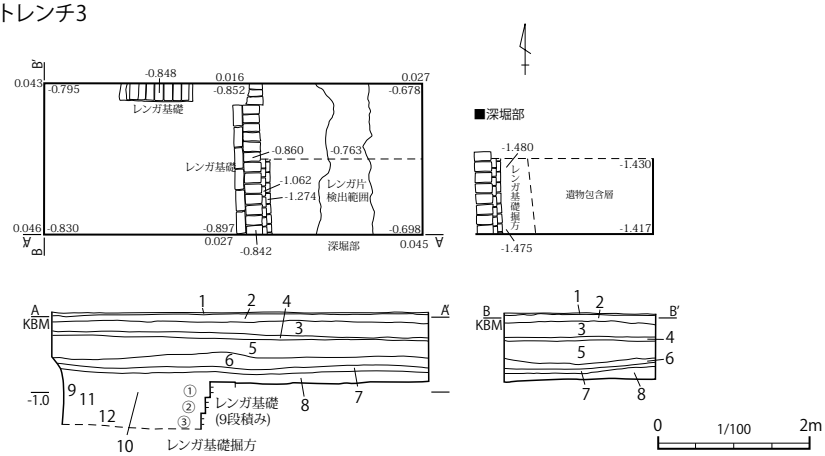
■トレンチ2



土層説明

1　グランド表層砂。
2　ローム主体盛土。
3　砕石。
4　砂、煉瓦片含む。
5　コンクリート片、砂利、木材片含む。
6　灰色土 (7.5Y5/1)。締まり強い。粘性普通。焼土多量。炭化物多量。コンクリート片、煉瓦片、礫含む。
7　明黄褐色 (10YR6/8) ローム主体土。締まり強い。粘性普通。焼土少量。礫少量。灰色土 (7.5Y5/1) 中量。
8　黒褐色土 (10YR3/2)。締まり強い。粘性普通。ローム粒子多量。ロームブロック多量。粘土少量。土管片、煉瓦片含む。
9　灰色土 (7.5Y5/1)。締まり強い。粘性強い。ローム粒子少量。焼土少量。礫少量。
10　灰色土 (7.5Y5/1)。締まり強い。粘性強い。ローム粒子多量。焼土多量。炭化物多量。シルト質土多量。礫多量。
11　灰色土 (7.5Y5/1)。締まり普通。粘性強い。ローム土多量。焼土少量。瓦片、貝片含む。
12　灰色土 (7.5Y5/1)。締まり強い。粘性普通。ローム土少量。焼土中量。炭化物少量。瓦片含む。
13　オリーブ灰色土 (2.5GY5/1)。締まり普通。粘性強い。炭化物少量。漆喰微量。煉瓦片含む。
14　オリーブ灰色土 (2.5GY5/1)。締まり普通。粘性強い。木材片含む。

■トレンチ3



土層説明

1　グランド表層砂。
2　ローム主体盛土。
3　砕石。
4　砂、煉瓦片含む。
5　コンクリート片、砂利、木材片含む。
6　灰色土 (7.5Y5/1)。締まり強い。粘性普通。焼土多量。炭化物多量。コンクリート片、煉瓦片、礫含む。
7　明黄褐色 (10YR6/8) ローム主体土。締まり強い。粘性普通。焼土少量。礫少量。灰色土 (7.5Y5/1) 中量。
8　黒褐色土 (10YR3/2)。締まり強い。粘性普通。ローム粒子多量。ロームブロック多量。粘土少量。土管片、煉瓦片含む。
9　灰色土 (7.5Y5/1)。締まり普通。粘性普通。ローム土微量。漆喰中量。粘質土少量。
10　灰色土 (7.5Y5/1)。締まり普通。粘性強い。ローム土少量。漆喰少量。礫少量。土管含む。
11　明黄褐色 (10YR6/8) ローム土。締まり普通。粘性強い。灰色土 (7.5Y5/1) 中量。
12　オリーブ灰色土 (2.5GY5/1)。締まり普通。粘性普通。焼土少量。炭化物少量。礫微量。煉瓦片含む。

煉瓦基礎掘方　土層説明

①　オリーブ灰色土 (2.5GY5/1)。締まり強い。粘性強い。焼土少量。貝片微量。コンクリート片含む。
②　オリーブ灰色土 (2.5GY5/1)。締まり普通。粘性強い。焼土微量。貝片微量。
③　オリーブ灰色土 (2.5GY5/1)。締まり弱い。粘性強い。

第 3 図　試掘の成果（2）

調査工程の確認、調査状況の把握・共有を行い、調査を円滑に進めるための協議を行った。特に、定期試験などの学校行事へ配慮して作業を行う必要から、白鷗高校との情報共有を適時行った。

■グリッドと調査区の設定（第 4 図）

調査範囲を包括し、軸線方向を調査範囲に準拠させた 4 × 4m 方眼で区画し、その方眼の単位を 1

グリッドとした。グリッド名は北西隅を基点に、西から東へアラビア数字を 1 ～ 21、北から南へアルファベットを A ～ I の順で付した。また、発生残土の処理を場内で行うため、調査範囲を I 区からⅢ区の調査区に区分して作業を行った。

座標軸の基点は、グリッドの北西端 A1 を 0 基点とし、世界測地系（測地成果 2011）に基づく座標値は、平面直角座標 X ＝ -32406.779 m・北緯 35° 42、Y ＝ -4598.286 m・東経 139° 46、真北 -0° 01 を示す。

■遺構の図化・遺物の取り上げ

本遺跡は第 1 次調査や試掘調査の結果から、近代から近世にいたるまでの遺物及び遺構が遺存していることが想定された。調査では、近代及び近世の 2 つの遺構確認面を検出し、遺構確認面までの掘り下げは重機を用いて掘削した。また、遺構の掘削や図化には基本的に人力を用いたが、本調査区には厚い覆土や盛土を伴う遺構や、間知石や胴木などの重量の重い構築物を含む遺構があり、これらの遺構では重機と人力を併用して掘削や取り上げを行った。また、遺構の記録には、手作業による作図に加えて、光波測量機器（トータルステーション）による測量や写真撮影による三次元測量を用いた。

Ⅲにて詳述する通り、本遺跡は客土の積み上げにより土層を形成しているため、包含層出土の遺物は必ずしも本遺跡で使用されたものとは限らない。このため、表土や包含層から出土したものについては層位ごとに一括して取り上げている。遺構出土のものについては、遺構ごとに一括して遺物を取り上げた。なお、池遺構については段階的な埋立てが確認されたため、埋立ての段階ごとに一括して取り上げている。

■写真撮影

記録写真の撮影はフルサイズデジタルカメラのみを用いて行っている。また、そのカメラを用いて高所作業車による撮影を適宜実施した。先述のとおり、発生残土の処理を場内で行うため、調査区を分割して順次発掘と埋め戻しを繰り返しながら調査を行った。そのため、調査範囲全体の写真撮影を行うことは適わず、各区の調査進捗に合わせて高所作業車を用いて写真を撮影した。

■遺構・遺物精査

検出された遺構と遺物について、調査時と整理作業時に精査し、出土遺物やその配置、及び文献や古地図等の情報から帰属時期を決定している。さらに、遺構の性格や帰属時期における特性を踏まえて報告書への掲載を判断し、個別遺構図・遺構全体図及び各種観察表を作成している。

出土遺物については、各時期の遺構や出土層位に鑑みて器種の分類を行い、特徴的な資料や遺存状態が良好な資料を中心に抽出して掲載している。

■報告書作成

報告書作成について、挿図・図版・表などは全てパソコン上で作業を行った。遺構図版は、手書き図面についてはスキャナで取り込み下図とし、三次元測量を行ったものは適宜方向を定めて切り取ることで下図とした。それらの下図をドローソフト（Adobe Illustrator CC）に取り込み、トレース及び版組を行った。遺物図版は、手書きにより作成した実測図をスキャナで取り込んだものを上記のドローソフトでトレースし、拓本をスキャナで取り込んだ画像や、デジタルカメラで撮影した画像と組み合わせて版組を行った。



第４図　グリットと調査区の設定

これらのデータを編集ソフト（Adobe InDesign CC）に貼付け、文章と共にレイアウトして編集したものを印刷業者に入稿した。

2）発掘作業の経過（第 1 表）

調査に先立つ準備工は令和 4 年 7 月 25 日から開始した。当初、学校と調査区である校庭との境界に鋼板塀を設置する予定であったが、試掘により、境界部分に校庭の設備の配線が通っていることが確認された。そのため、鋼板塀ではなく、B 型バリケードを用いて調査地を隔離した。

調査準備の整った令和 4 年 8 月 8 日から I 区の発掘調査を開始した。発掘調査期間は当初令和 5 年 3 月末までの予定であったが、調査開始の遅れもあり、協議の結果、令和 5 年 4 月末までに発掘調査を終了することとなった。

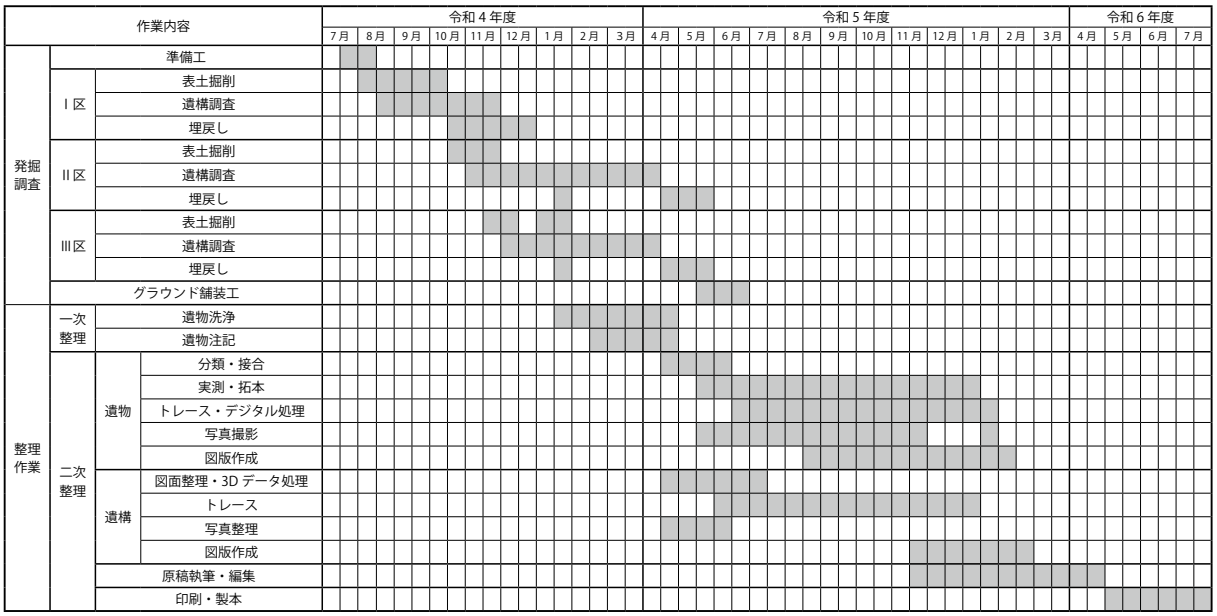
発掘調査に伴う排土については場内に仮置きし、各調査区の終了後、埋め戻しを行った。Ⅰ区の調査に伴う排土は、調査区南側の排土置き場とⅡ・Ⅲ区に仮置きし、Ⅰ区の調査終了後に戻しを行った。Ⅱ・Ⅲ区の調査に伴う排土は排土置き場とⅠ区に仮置きした。排土置き場については、防塵シートを設置し、水撒きを適宜行って、粉塵の飛散防止に努めた。

Ⅰ区の発掘調査は令和4年8月8日から着手した。表土中には改良材やガレキの混入があるためとても硬く、表土掘削には時間を要した。さらに、多量のガレキを排土から分離し、場外搬出する必要が生じた。江戸時代の遺構確認面（以下、「近世面」という。）は現地表面から約1.5m掘り下げた地点で確認された。近世面には撹乱された箇所が多く、特にⅠ区南側で撹乱の影響が大きかった。その中で、江戸時代の埋設桶や井戸、木枠、明治時代以降の建物基礎などを検出した。また、調査範囲内では無数の杭を検出している。杭は、近世以降に断続的に打ち込まれたものと考えられる。これらの木杭について協議を行い、調査と無関係のものについては残置とし、調査に影響のあるもののみ撤去し、場外へ搬出して廃棄物として処理を行った。

Ⅰ区は令和4年10月27日に終了確認を行ったが、Ⅰ区北側に間知石の石積と土留遺構（33号遺構）を検出したため、その部分を追加で調査することとなった。その後の調査により、33号遺構はⅠ区からⅡ・Ⅲ区にまたがり、調査範囲全体に東西に延びる遺構であることがわかった。遺構はⅠ区の範囲から分割して調査を行い、間知石列とその下の胴木の取り上げを行って終了した。なお、この取り上げた33号遺構の石材について、考古石材研究所の柴田徹氏に現地指導を依頼した。Ⅰ区の埋戻しは33号遺構の調査後の12月27日に完了した。

Ⅱ区の発掘調査は令和4年10月17日に開始した。Ⅰ区とⅡ区の境界周辺から西側で近代の盛土層を確認した。この近代の盛土層の上面を確認面（以下、「近代面」という）として調査を行った。近代の確認面は現地表面から約1m掘り下げた地点である。近代面からは、煉瓦製建物基礎（35号遺構）や土管、煉瓦製の枡などを検出した。35号遺構はⅡ・Ⅲ区にまたがって検出され、明治時代に建設された府立第一高等女学校の講堂と考えられる。35号遺構の調査後、これを解体して近世面

第1表　都立白鷗高等学校附属中学校仮設校舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査工程表



まで掘削を行った。35 号遺構は煉瓦の他にコンクリートや胴木等を使用しており、これらについては一部サンプルを採取したのち、場外へ搬出して廃棄物として処理を行った。

Ⅱ区の近世面からは、Ⅰ区に続いて 33 号遺構を検出したほか、建物基礎やⅡ区西部からⅢ区東部にまたがる広大な池遺構などの遺構を検出した。Ⅱ区東側は令和 5 年 2 月 2 日に調査を終了し、埋戻しを開始した。残るⅡ区の範囲は池遺構にあたるため、Ⅲ区東部と同時に調査を行い、令和 5 年 4 月 14 日に調査を終了し、埋戻しを行った。

Ⅲ区の調査は、Ⅱ区に引き続いて令和 4 年 11 月 30 日から開始した。35 号遺構を検出するため、まずⅢ区東部の表土掘削を開始し、近代面の調査を行った。Ⅲ区東側の近代面の調査終了後、、令和 4 年 12 月 27 日からはⅢ区西部の表土掘削を開始した。Ⅲ区西側の近代面では、旧府立第一高等女学校の教室棟と考えられる煉瓦製建物基礎を検出した。近代面の調査後、続いて近世面の調査を行った。Ⅲ区の近世面では、東側で池遺構とそれに伴う木樋列を検出し、西側では 33 号遺構のほか、土坑や井戸などを検出した。Ⅲ区西側では、令和 5 年 2 月 21 日と 3 月 3 日の 2 度に分けて終了確認を行い、埋戻しを開始した。一方でⅢ区東側は池遺構にあたるため、Ⅱ区西側と同時に調査を行い、令和 5 年 4 月 14 日に全ての調査を終了した。

発掘調査終了後、都立学校教育部の要請により、現地を学校グラウンドとして利用できるように埋戻し及び舗装工事を行うこととなった。そのため、令和 5 年 5 月 26 日までにⅡ・Ⅲ区の埋戻しを行い、引き続いてグラウンド舗装工事を行った。グラウンド舗装工事は 6 月 23 日までに終了し、6 月 27 日に都立学校教育部へ調査地の引渡しを行った。

3）整理作業等の経過

整理作業は令和 5 年 2 月 20 日から令和 6 年 3 月 22 日まで、調査地及び調査事務所にて行った。一次整理作業は、令和 5 年 2 月 20 日から 4 月 17 日まで行った。主な作業は、遺物の水洗、注記、粗分類、計測等である。注記作業は手作業の他、一部機械を用いて行った。

二次整理作業は、令和 5 年 4 月 15 日から令和 6 年 3 月 22 日まで、調査事務所にて行った。主な作業は、遺物の接合、実測、拓本、計測、写真撮影、遺構図面の修正、トレース、測量データ処理、原稿執筆、報告書編集などである。また、二次整理作業と並行して、徳川林政史研究所の渋谷葉子氏に文献調査について、國學院大學の阿部常樹氏、北海道大学の江田真毅氏に動物遺体の分析について、それぞれ現地指導を依頼した。令和 6 年 3 月 11 日に東京都五色橋収蔵庫へ遺物を移管し、3 月 22 日に調査事務所から撤収した。

調査事務所での作業終了後、令和 6 年 3 月 25 日から都埋文に移り、引き続き報告書編集作業を行った。編集作業は令和 6 年 4 月 30 日まで行い、報告書は令和 6 年 7 月 31 日に刊行された。

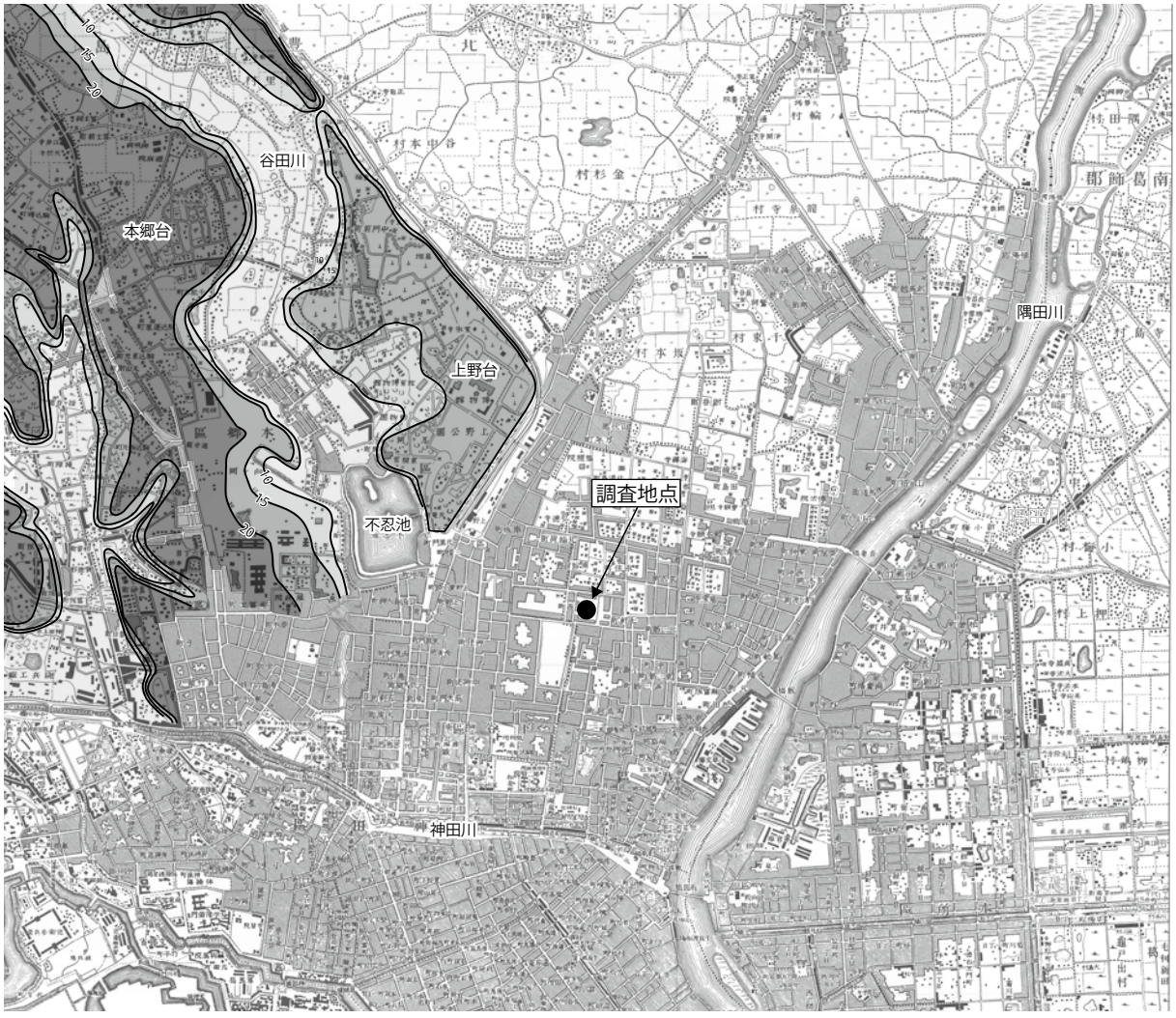
Ⅱ　遺跡の位置と環境

1　地理的環境

元浅草遺跡は、台東区元浅草一丁目に所在する。遺跡の範囲は都立白鷗高等学校の敷地に相当し、現在の上野駅から東に約 848m、新御徒町駅から北に約 192m の位置にある（第 5 図）。

元浅草遺跡の所在する台東区は、東側に広がる隅田川の氾濫原である低地部と、西側の武蔵野台地東縁にあたる上野台の台地部に大きく分かれる。低地部は、標高 2m から 3m の平坦な地形にある。低地全体は、東側及び南側に僅かに傾斜しているものの、ほぼ平坦である。ただし、隅田川西岸は微高地となっており、標高 4m から 5m を測る。

本遺跡は、隅田川と神田川に挟まれた低地部に所在する。武蔵野台地東縁部までの距離は約 0.5km、隅田川までの距離は約 1㎞の位置にあり、現地表面の海抜は 2.8m である。



『地図で見る東京の変遷Ⅱ』（財団法人日本地図センター）を元にトレースして作成。

第 5 図　周辺の地形図

2　歴史的環境

1）周辺の遺跡

元浅草遺跡の所在する台東区では、現在 142 ヶ所、150 地点の遺跡が確認されている（第 6 図、第 2 表）。元浅草遺跡は台東区遺跡 No.11 に相当する。以下、本遺跡周辺の遺跡を概観する。なお、遺跡名の後ろに示した番号は、第 6 図及び第 2 表の遺跡番号と対応する。

台東区には古くから数多くの遺跡が残されている。特に先史時代の遺跡が多く残されているのは上野台を中心とした武蔵野台地上である。旧石器時代から遺跡が確認されており、上野台の南端部を占める上野忍岡遺跡群では、国立西洋美術館地点（4-1）で立川ロームⅢ層下部から黒曜石の剥片、Ⅴ層からメノウの剥片が出土しているほか、谷際に礫群や焼け石等が検出されている。

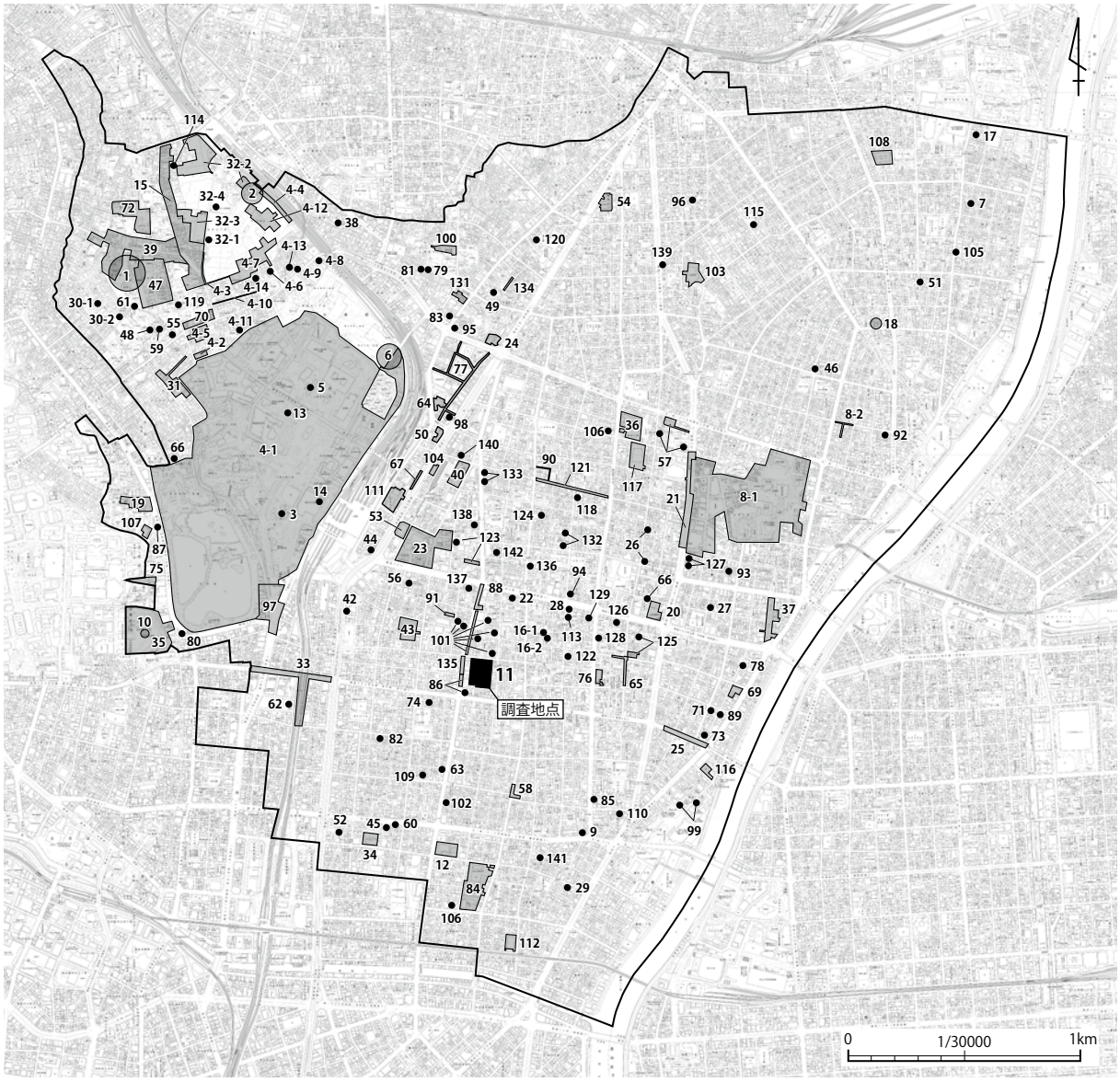
縄文時代においても台地上に占める遺跡が多く、上野忍岡遺跡群の国立西洋美術館地点、上野駅東西自由通路地点で前期の住居跡、上野動物園五重塔隣接地点で中期の住居跡、東京芸術大学奏楽堂建設予定地地点で後期の住居跡が検出されている。また、上野台縁辺部には多数の貝塚が残されており、谷田川に解析された上野台西側には領玄貝塚（1）、湯島貝塚（10）、茅町遺跡（35）など、低地部に面する上野台東側には天王寺貝塚（2）、新坂貝塚（6）などがある。

弥生時代に入っても台地上に占める遺跡が多く、上野台上の上野忍岡遺跡群西洋美術館地点に弥生時代後期の住居跡、国立科学博物館たんけん館地点に弥生時代末の住居跡、上野駅東西道路地点に弥生時代末から古墳初頭の住居跡がそれぞれ検出されている。低地部からも三好町遺跡（116）などから遺物が出土しているものの、検出例は少ない。

古墳時代には、上野台に古墳がつくられている。摺鉢山古墳（3）は前方後円墳である。そのほか、表慶館古墳（5）、鳥越古墳（9）、蛇塚古墳（13）、桜雲台古墳（14）などの古墳がある。上野忍岡遺跡群の東京国立博物館平成館地点、上野動物園ゾウ舎地点、上野駅東西自由通路建設地点のほか、谷中真島町遺跡（30）などで住居跡が検出されている。特に上野駅東西自由通路建設地点から出土した後期の金環と土器群は台東区の有形文化財に指定されている。この時代には隅田川西岸の微高地にも遺跡があり、駒形遺跡（69）、浅草駒形二丁目遺跡（78）で古墳時代の貝塚が確認されたほか、三好町遺跡では掘立柱建物跡が検出されている。

古代から中世にかけて、人々の活動が低地でも活発に行われるようになる。その顕著なものとして浅草寺遺跡（8）がある。浅草寺は、隅田川西岸の微高地に所在し、推古天皇 36（628）年の創建と伝わる区内最古の寺院である。境内の発掘調査では、古代の遺構が検出され、仏具等の須恵器や和同開珎等の皇朝十二銭が出土している。また、中世では『吾妻鏡』にも浅草寺の名前が見え、発掘調査では中世の瓦も多量に出土している。古代から中世の住居跡は台地上の上野忍岡遺跡群の各地点や、隅田川西岸の微高地上の駒形遺跡など検出されている。

徳川家康の江戸転封を機に、台東区は江戸の辺縁地域として開発を受けることとなった。このため、近世に入ると遺跡数が急激に増加する。台東区を代表する近世遺跡は社寺跡であり、台東区に登録された近世の遺跡 150 地点のうち、実に 96 地点の種別が社寺となっている。著名なものとして上野忍岡遺跡群（4）内部にある寛永寺がある。寛永寺は徳川家の菩提寺となっており、それに関わる発掘成果が多数得られている。例えば、都立上野高等学校地点では護国院の旧墓所が明らかとなり、東京



「東京都縮尺2,500分の１地形図」及び「東京都遺跡地図情報インターネット提供サービス」（東京都教育員会）を元に作成。

第６図　台東区の遺跡（1/30,000）

第２表　台東区の遺跡一覧

「東京都遺跡地図情報インターネット提供サービス」（東京都教育員会）を元に作成。

番号	遺　跡　名	所　在　地	種　　別	時　　代
1	領玄寺貝塚	台東区谷中四丁目	包蔵地・貝塚	縄文（中期～後期）・近世
2	天王寺貝塚	台東区谷中七丁目	包蔵地・貝塚	縄文（後期）・古墳
3	摺鉢山古墳	台東区上野公園	古墳	古墳
4-1	上野忍岡遺跡群	台東区上野公園・上野二丁目・池之端三丁目	包蔵地・集落・社寺・屋敷・その他の墓・花卉園	旧石器・縄文（早期～晩期）・弥生（後期）・古墳・奈良・平安・中世・近世・近代
4-2	上野忍岡遺跡群	台東区上野桜木一丁目	包蔵地・集落・社寺	奈良・平安・近世
4-3	上野忍岡遺跡群	台東区谷中七丁目	包蔵地・社寺	奈良・平安・近世
4-4	上野忍岡遺跡群	台東区谷中七丁目	包蔵地・社寺	縄文・近世
4-5	上野忍岡遺跡群	台東区上野桜木一丁目	包蔵地・集落・貝塚・社寺	旧石器・縄文・古墳・奈良・平安・中世・近世
4-6	上野忍岡遺跡群	台東区上野桜木二丁目・	包蔵地・集落・社寺	古墳・奈良・平安・中世・近世
4-7	上野忍岡遺跡群	台東区谷中七丁目・上野桜木二丁目	包蔵地・集落・社寺	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・近世
4-8	上野忍岡遺跡群	台東区上野桜木一丁目	包蔵地・集落・社寺	旧石器・縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世
4-9	上野忍岡遺跡群	台東区上野桜木二丁目	包蔵地・集落・社寺	縄文・古墳・奈良・平安・近世
4-10	上野忍岡遺跡群	台東区上野桜木二丁目	包蔵地・社寺	奈良・平安・近世
4-11	上野忍岡遺跡群	台東区上野桜木一丁目	包蔵地・集落・社寺	古墳・奈良・平安・近世
4-12	上野忍岡遺跡群	台東区谷中七丁目	包蔵地・集落・社寺	縄文・弥生・奈良・平安・近世
4-13	上野忍岡遺跡群	台東区上野桜木二丁目	包蔵地・社寺	縄文・古墳・奈良・平安・近世
4-14	上野忍岡遺跡群	台東区上野桜木二丁目	包蔵地・社寺	奈良・平安・近世
5	表慶館古墳	台東区上野公園	古墳	古墳

番号	遺　跡　名	所　在　地	種　　別	時　　代
6	新坂貝塚	台東区上野桜木一丁目・上野公園	貝塚	縄文（後期）・弥生（後期）
7	妙亀塚	台東区橋場一丁目	塚？	近世？
8-1	浅草寺遺跡	台東区浅草一丁目・浅草二丁目	包蔵地・集落・社寺・火除地・公園地	縄文（晩期）・弥生・奈良・平安・中世・近世・近代
8-2	浅草寺遺跡	台東区浅草六丁目	社寺	近世
9	烏越古墳	台東区烏越二丁目	古墳	古墳
10	湯島（切通し北）貝塚	台東区池之端一丁目	貝塚	縄文（前期～晩期）
11	元浅草遺跡	台東区元浅草一丁目	社寺・屋敷	近世
12	台東区№ 12 遺跡	台東区浅草橋五丁目	屋敷	近世
13	蛇塚古墳	台東区上野公園	古墳	古墳
14	桜雲台古墳	台東区上野公園	古墳	古墳
15	天王寺門前町遺跡	台東区谷中七丁目・谷中六丁目	包蔵地・町屋	縄文近世
16-1	菊屋橋二丁目遺跡	台東区元浅草四丁目	社寺	近世
16-2	菊屋橋二丁目遺跡	台東区元浅草四丁目	社寺	近世
17	台東区№ 17 遺跡	台東区橋場二丁目	社寺	近世
18	台東区№ 18 遺跡	台東区東浅草一丁目	社寺	近世
19	池之端七軒町遺跡	台東区池之端二丁目	包蔵地・社寺・屋敷	縄文・弥生・古墳・近世
20	浅草松清町遺跡	台東区西浅草一丁目	社寺	近世
21	浅草寺西遺跡	台東区西浅草二丁目・西浅草三丁目・浅草一丁目・浅草二丁目	社寺・屋敷・道路水路	近世
22	台東区№ 22 遺跡	台東区元浅草二丁目	屋敷	近世
23	北稲荷町（広徳寺跡）遺跡	台東区東上野四丁目	包蔵地・社寺	古墳・奈良・平安・中世・近世
24	入谷遺跡	台東区下谷二丁目	社寺・町屋・農村地	近世
25	台東区№ 25 遺跡	台東区蔵前三丁目	包蔵地・社寺	奈良・平安・近世
26	浅草田島町遺跡	台東区西浅草二丁目	社寺・町屋	近世
27	台東区№ 27 遺跡	台東区雷門一丁目	町屋	近世
28	台東区№ 28 遺跡	台東区元浅草四丁目	社寺	近世
29	台東区№ 29 遺跡	台東区浅草橋二丁目	社寺	近世
30-1	谷中真島町遺跡	台東区谷中二丁目	集落・屋敷	縄文・古墳・奈良・平安・近世
30-2	谷中真島町遺跡	台東区谷中二丁目	包蔵地・屋敷	縄文（中期）・古墳・奈良・平安・近世
31	谷中清水町遺跡	台東区池之端四丁目	包蔵地・集落・屋敷	弥生・古墳・奈良・平安時代・近世
32-1	天王寺遺跡	台東区谷中七丁目	包蔵地・集落・社寺	奈良・平安・近世
32-2	天王寺遺跡	台東区谷中七丁目	包蔵地・集落・社寺	古墳・奈良・平安・中世・近世
32-3	天王寺遺跡	台東区谷中七丁目	包蔵地・集落・社寺	古墳・奈良・平安・近世
32-4	天王寺遺跡	台東区谷中七丁目	社寺	近世
33	仲御徒町三丁目遺跡	台東区上野四丁目・上野五丁目	社寺・屋敷・町屋	近世
34	二長町遺跡	台東区台東一丁目・	屋敷	近世
35	茅町遺跡	台東区池之端一丁目	包蔵地・集落・屋敷・邸宅	縄文（早期・後～晩期）・弥生（後期）・古墳・奈良・平安・近世・近代
36	浅草芝崎町遺跡	台東区西浅草三丁目	包蔵地・屋敷	奈良・平安・中世・近世
37	雷門遺跡	台東区雷門二丁目	集落・町屋	奈良・平安・近世
38	台東区№ 38 遺跡	台東区根岸二丁目	町屋	近世
39	谷中三崎町遺跡	台東区谷中二丁目・谷中三丁目・谷中四丁目・谷中五丁目・谷中六丁目	包蔵地・集落・社寺・町屋	旧石器・縄文（前期～中期）・古墳・奈良・平安・近世
40	台東区№ 40 遺跡	台東区東上野四丁目	社寺	近世
42	台東区№ 42 遺跡	台東区東上野二丁目	屋敷	近世
43	西町遺跡	台東区東上野二丁目	包蔵地・屋敷	中世近世
44	台東区№ 44 遺跡	台東区上野七丁目	社寺	近世
45	二長町北遺跡	台東区台東一丁目	屋敷	近世
46	浅間神社遺跡	台東区浅草五丁目	包蔵地・社寺・塚	中世近世
47	上三崎南遺跡	台東区谷中四丁目	集落・社寺	縄文・奈良・平安・中世・近世
48	台東区№ 48 遺跡	台東区谷中一丁目	社寺・町屋	近世
49	小野照崎神社遺跡	台東区下谷二丁目	社寺・塚	近世
50	台東区№ 50 遺跡	台東区上野七丁目	町屋	近世
51	台東区№ 51 遺跡	台東区今戸二丁目	社寺	近世
52	台東区№ 52 遺跡	台東区台東一丁目	屋敷	近世
53	上車坂町遺跡	台東区東上野四丁目	包蔵地・集落・屋敷	古墳・奈良・平安・中世・近世
54	竜泉寺町遺跡	台東区竜泉二丁目	包蔵地・社寺・屋敷	奈良・近世
55	台東区№ 55 遺跡	台東区谷中一丁目	包蔵地・社寺・町屋・道	奈良・平安・近世
56	車坂町遺跡	台東区東上野三丁目	屋敷	近世
57	芝崎町三丁目遺跡	台東区西浅草三丁目	社寺	近世
58	台東区№ 58 遺跡	台東区三筋一丁目	屋敷	近世
59	台東区№ 59 遺跡	台東区谷中一丁目	包蔵地・社寺・町屋	奈良・平安・近世
60	二長町東遺跡	台東区台東一丁目	屋敷	近世
61	台東区№ 61 遺跡	台東区谷中四丁目	包蔵地・社寺	縄文・近世
62	下谷同朋町遺跡	台東区上野三丁目	包蔵地・社寺・町屋・道路	縄文（中期～後期）・奈良・平安・中世・近世
63	台東区№ 63 遺跡	台東区台東三丁目	屋敷・塀	近世
64	豊住町遺跡	台東区下谷一丁目	包蔵地・社寺・町屋	縄文・古墳・近世
65	浅草菊屋橋遺跡	台東区寿一丁目	社寺・道路	近世
66	上野花園町遺跡	台東区池之端三丁目	社寺・屋敷	近世
67	台東区№ 67 遺跡	台東区上野七丁目	社寺	近世
69	駒形遺跡	台東区駒形一丁目	集落・その他の墓・社寺・町屋	古墳・奈良・平安・中世・近世
70	台東区№ 70 遺跡	台東区谷中六丁目	町屋	近世
71	台東区№ 71 遺跡	台東区駒形一丁目	町屋	近世
72	谷中下三崎遺跡	台東区谷中五丁目	包蔵地・集落・社寺・屋敷	縄文・弥生（後期）・奈良・平安・中世・近世
73	台東区№ 73 遺跡	台東区駒形一丁目	包蔵地・町屋	奈良・平安・中世・近世
74	台東区№ 74 遺跡	台東区台東四丁目	屋敷	近世
75	茅町二丁目遺跡	台東区池之端一丁目	包蔵地・社寺・屋敷・町屋	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世
76	台東区№ 76 遺跡	台東区寿一丁目	社寺・町屋	近世
77	台東区№ 77 遺跡	台東区下谷一丁目	社寺・町屋	近世
78	浅草駒形二丁目遺跡	台東区駒形一丁目	包蔵地・貝塚・社寺・町屋	古墳・奈良・平安・近世
79	台東区№ 79 遺跡	台東区根岸三丁目	社寺	近世
80	台東区№ 80 遺跡	台東区池之端一丁目	水路	近世
81	上根岸町遺跡	台東区根岸三丁目	包蔵地・社寺	古墳・奈良・平安・近世
82	台東区№ 82 遺跡	台東区台東三丁目	屋敷	近世
83	台東区№ 83 遺跡	台東区根岸三丁目	屋敷	近世
84	向柳原町遺跡	台東区浅草橋五丁目	屋敷	近世
85	台東区№ 85 遺跡	台東区蔵前四丁目	社寺	近世
86	台東区№ 86 遺跡	台東区元浅草一丁目	社寺・屋敷・町屋	近世
87	台東区№ 87 遺跡	台東区池之端二丁目	道路	近世
88	台東区№ 88 遺跡	台東区元浅草二丁目	社寺・町屋	近世
89	台東区№ 89 遺跡	台東区駒形一丁目	集落・町屋	古墳・奈良・平安・近世
90	台東区№ 90 遺跡	台東区松が谷三丁目	社寺	近世
91	台東区№ 91 遺跡	台東区東上野三丁目	屋敷	近世
92	台東区№ 92 遺跡	台東区浅草六丁目	町屋	近世
93	台東区№ 93 遺跡	台東区浅草一丁目	町屋	近世
94	台東区№ 94 遺跡	台東区松が谷一丁目	社寺・町屋	近世
95	台東区№ 95 遺跡	台東区下谷二丁目	町屋	近世
96	台東区№ 96 遺跡	台東区竜泉三丁目	町屋・農村地	近世
97	上野広小路遺跡	台東区上野一丁目・二丁目	包蔵地・水路	縄文・奈良・平安・中世・近世
98	台東区№ 98 遺跡	台東区下谷一丁目	町屋	近世
99	南元町遺跡	台東区蔵前二丁目	包蔵地・蔵屋敷・発電所	古墳・奈良・平安・中世・近世・近代
100	中根岸遺跡	台東区根岸三丁目	包蔵地・集落・社寺・農村地	縄文・奈良・平安・中世・近世

番号	遺　跡　名	所　在　地	種　　別	時　　代
101	浅草永住町遺跡	台東区元浅草一丁目・二丁目・東上野三丁目	社寺	近世
102	台東区№102遺跡	台東区鳥越一丁目	包蔵地・屋敷	奈良・平安・近世
103	浅草千束町二丁目遺跡	台東区千束三丁目	集落・農村地	近世
104	台東区№104遺跡	台東区東上野四丁目	社寺・町屋	近世
105	台東区№105遺跡	台東区橋場一丁目	包蔵地・社寺・農村地	奈良・平安・近世
106	向柳原町一丁目遺跡	台東区浅草橋五丁目	屋敷	近世
107	池之端七軒町南遺跡	台東区池之端二丁目	包蔵地・社寺	奈良・平安・近世
108	台東区№108遺跡	台東区清川二丁目	社寺・農村地	近世
109	台東区№109遺跡	台東区台東三丁目	屋敷	近世
110	台東区№110遺跡	台東区蔵前四丁目	社寺・町屋	近世
111	台東区№111遺跡	台東区上野七丁目	社寺・屋敷	近世
112	浅草福井町遺跡	台東区浅草橋一丁目	屋敷・町屋	近世
113	台東区№113遺跡	台東区元浅草四丁目	社寺	近世
114	台東区№114遺跡	台東区谷中七丁目	包蔵地・社寺・町屋	奈良・平安・近世
115	台東区№115遺跡	台東区千束四丁目	町屋	近世
116	三好町遺跡	台東区蔵前二丁目	包蔵地・集落・その他の墓・町屋	弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世
117	芝崎町二丁目遺跡	台東区西浅草三丁目	包蔵地・社寺・狩猟場	縄文・近世
118	台東区№118遺跡	台東区松が谷二丁目	社寺	近世
119	台東区№119遺跡	台東区谷中六丁目	社寺・町屋	近世
120	台東区№120遺跡	台東区下谷三丁目	社寺	近世
121	合羽橋通り遺跡	台東区松が谷二丁目・松が谷三丁目	社寺・道路・水路	近世
122	台東区№122遺跡	台東区元浅草三丁目	社寺・町屋	近世
123	台東区№123遺跡	台東区東上野五丁目	社寺・町屋	近世
124	台東区№124遺跡	台東区松が谷二丁目	社寺	近世
125	浅草高原町遺跡	台東区寿二丁目	包蔵地・社寺	中世近世
126	台東区№126遺跡	台東区寿二丁目	社寺・町屋	近世
127	台東区№127遺跡	台東区浅草一丁目	町屋	近世
128	台東区№128遺跡	台東区寿二丁目	社寺	近世
129	台東区№129遺跡	台東区元浅草四丁目	社寺	近世
131	台東区№131遺跡	台東区根岸三丁目	町屋	近世
132	台東区№132遺跡	台東区松が谷二丁目	社寺	近世
133	台東区№133遺跡	台東区東上野六丁目	社寺	近世
134	台東区№134遺跡	台東区下谷二丁目	社寺	近世
135	台東区№135遺跡	台東区元浅草一丁目	屋敷	近世
136	台東区№136遺跡	台東区松が谷一丁目	社寺	近世
137	南稲荷町遺跡	台東区東上野三丁目	社寺	近世
138	神吉町遺跡	台東区五丁目	社寺	近世
139	浅草龍泉寺町遺跡	台東区千束三丁目	社寺	近世
140	台東区№140遺跡	台東区北上野一丁目	社寺	近世
141	台東区№141遺跡	台東区浅草南三丁目	その他の墓・町屋	近世
142	台東区№142遺跡	台東区東上野六丁目	屋敷	近世

国立博物館地点では徳川将軍家の霊廟へ通じる参道や広場、本坊が検出された。また、国立西洋美術館から上野駅前にかけて、徳川御三卿の清水家・一橋家墓所が検出されている。

低地部では、明暦３（1657）年の大火以降、神田周辺の寺社が台東区域に移転され、寺町が形成された。浅草松清町遺跡（20）、北稲荷町遺跡（23）、入谷遺跡（24）をはじめとして、多数の寺院跡がある。

また、台東区域には大名や旗本・御家人の屋敷も多く残されている。屋敷地は低地域に多く、西町遺跡（43）、上車坂町遺跡（53）、竜泉寺町遺跡（54）、向柳原町遺跡（84）では、本遺跡と同じく屋敷地として利用される中で池跡が検出されており注目される。

2）調査地点の概要

先述のように、台東区の低地部に遺跡が形成されるのは弥生時代以降である。しかし、多くは隅田川西岸の微高地にあり、元浅草遺跡を含む台地縁辺と隅田川の中間地点において遺跡が多く形成されるのは近世以降である。第３表は、元浅草遺跡の土地利用の概略である。近世は武家屋敷として利用されており、近代に入っても酒井子爵家により利用されていた。その後、東京府が土地を取得し、以降現在まで学校地として利用されてきた。

なお、元浅草遺跡の近世における土地利用について、渋谷葉子氏に文献調査を依頼し、詳細な調査をしていただいた。その成果をまとめた玉稿を賜り、Ⅳに掲載した。ここでは、概略を述べるにとどめ、詳細は渋谷氏の論考を参照されたい。

■近世

江戸時代の元浅草遺跡周辺は、大名屋敷、組屋敷などの武家地と寺社地が混在していた地域であった。『江戸全図』（1642 ～ 43）では、元浅草遺跡は南北に分断され、「御徒組」、「御土蔵番」、「新庄美作与力同心」とある。敷地は細分され、それぞれ徒組・土蔵番や書院番頭の与力同心の組屋敷とし

て利用されていたことがわかる。一方、『江戸大全図』（1657）では、南北の敷地が統合され、書院番頭酒井飛騨守重之配下の与力同心の組屋敷として利用されていたようである。

『江戸大全図』の描かれたとされる明暦３（1657）年は著名な明暦の大火が起こった年であり、その影響から各地で屋敷地の変更が行われた。元浅草遺跡もこの対象となり、明暦３年５月には所有者が備前岡山藩池田家へと移った。翌年の万治元（1658）年には池田家による屋敷の建設に及び大規模な土木工事を行ったようである。

しかし、寛文８（1668）年には再度大火に見舞われ、藩主池田光政は再度屋敷の移転を検討したようである。この結果、寛文 10（1670）年に池田家は大崎へと移転することとなった。池田家が元浅草遺跡を利用したのは約 10 年間である。

池田家の去った元浅草遺跡は一度幕府に上地となったが、寛文 10 年中に陸奥浅川藩本多家が元御竹蔵上屋敷に替えて当地を拝領した。翌寛文 11（1671）年に描かれた『新版江戸外絵図』（1671）には調査地に「本多タン正」とあり、本多弾正少弼忠晴の屋敷であったことが確認できる。

本多家は天和元（1681）年に三河伊保、宝永７（1710）年に遠江相良、延享３（1746）年に陸奥泉と移封が繰り返されるが、屋敷は元浅草遺跡に所在したままであった。しかし、天明７（1787）年に藩主本多忠籌が若年寄に任命されると、大手前に上屋敷を拝領したため移転した。本多家が元浅草遺跡を利用したのは、約 130 年間である。

陸奥泉藩本多家の退去と同時に、屋敷を交換するかたちで、出羽松山藩酒井大学頭忠崇が家屋そのままに当地を拝領した。その後、大政奉還に至るまで、元浅草遺跡は出羽松山藩酒井家の上屋敷として利用された。（山﨑太郎）

■近代以降

明治以降の当地の土地履歴を地図で辿ると、明治２（1869）年刊行の『東京御繪圖』(1) では「酒井大ガク」の文字、明治９（1874）年刊行の『明治東京全図』(2) では「酒井忠匡」の文字、明治 17（1884）年測量の『東京図測量原図』(3) では屋敷と苑池のある邸宅が確認できる。また、明治 42（1909）年大日本帝国陸軍陸地測量局測量の一万分の一地形図以降では、都立白鷗高等学校の前身である東京府立「第一高等女学校」が記されている（第７図）。後述するように同校は明治 35（1902）年に当地に新校舎を建設し、翌明治 36（1903）年移転してきている。ここではその移転前と移転後に大きく分けて、土地と建物に係わる履歴について記す。

【明治維新から第一高等女学校移転（明治 35 年）まで】

大政奉還が成り、江戸幕府が瓦解した慶應４（1868）年１月３日、当地は出羽松山藩の江戸上屋

第３表　元浅草遺跡の土地利用の概略

所有者または利用状況	利用期間	備考
御徒組・御土蔵番・新庄美作与力同心	（1642 ～ 43）	『江戸全図』にて確認。
酒井飛騨与力足軽	（1657）	『江戸大全図』にて確認。
備前岡山藩池田家	1657 ～ 1670	
陸奥奥川藩本多家	1670 ～ 1787	
出羽松山藩酒井家	1787 ～ 1901	大政奉還により松嶺藩酒井家、華族令により酒井子爵家と変遷するが、元浅草遺跡は所有。
酒井子爵家ほか	（1869）	『東京全図』にて確認。酒井子爵家による切り売りがあったとみられる。
東京府立第一高等女学校	1901 ～現在	酒井子爵家ほかの地権者より取得。1903 年校舎落成・移転。
東京都立白鷗高等学校		府立第一高等女学校から、都立第一高等女学校を経て、都立白鷗高等学校に改称。

※（ ）としたものは確認した絵図等の年代である。

敷であった。藩主は７代酒井忠良であったが、戊辰戦争で幕府方に与したため隠居、同年 12 月、三男忠匡が家督を継いだ。明治２（1869）年、版籍奉還により出羽松山藩は松嶺藩と改称、藩主忠匡は松嶺藩知藩事となるも、明治４（1871）年、廃藩置県で罷免。明治 17（1884）年、華族令により子爵となる。

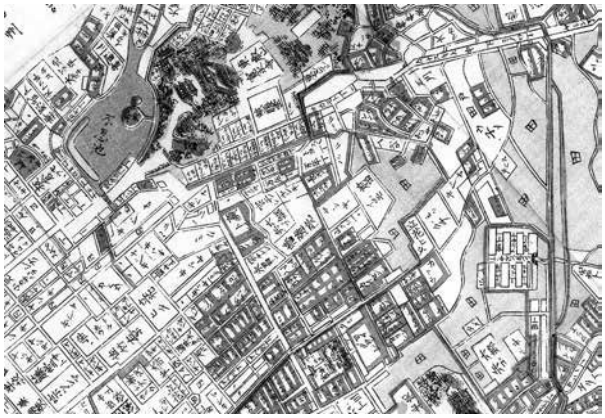
明治以降、諸大名の江戸藩邸については、中屋敷・下屋敷は旧藩主の所有が認められたが、上屋敷は基本的に明治政府に接収された。出羽松山藩は、旧幕時代、当地に上屋敷、四ツ谷千駄ヶ谷に下屋敷を拝領していたが、いずれを私邸とするかは暫し保留としていたようで、明治４（1871 ／辛未）年、四ツ谷千駄ヶ谷の下邸（下屋敷）は不便なので、上邸（上屋敷）を私邸とし、下邸を返還したい旨、東京府に願い出ている（史料①）。

以降、当地屋敷については、以下のような屋敷周りの改変が酒井忠匡の名で行われている。

(1) 明治６(1873)年：埋立工事。屋敷南側表門以西の外側下水溝幅を長さ 20 間(約 36.4 m)にわたって、９尺（約 2.7 m）から２尺（約 60㎝）に縮小（史料②、③）。

(2) 明治 10（1877）年：埋立工事。明治６年工事箇所の東隣、表門前の外側下水溝幅を長さ３間（約 5.5 m）にわたって、９尺（約 2.7 m）から２尺（約 60㎝）に縮小（史料④、⑤）。

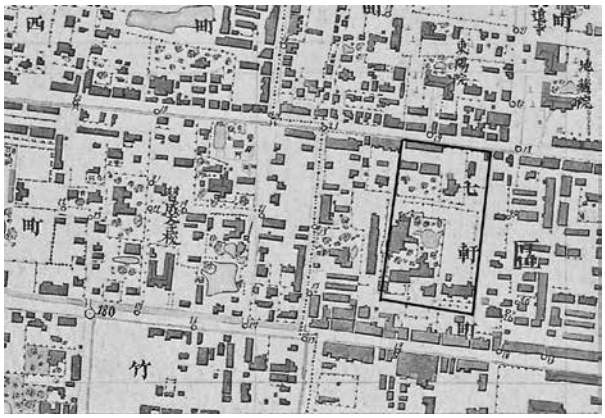
いずれの工事についても、下水溝縮小の理由として、外周長屋に開店した商店にとって（幅広の溝が）不便であるため、という記述がある。おそらくは、街路に面した部分に酒井家の貸地・貸家があり、借主の商売に便宜を図るため、下水溝の縮小が行われたのであろう。また、添付された工事箇所の概略図では、この一郭は四筆に分筆されており、最も東側の四番地には「御払下ヶ地」と記され



（部分、『東京御繪圖　全』吉田屋文三郎）
東京御繪圖



（部分、国立公文書館デジタルアーカイブ蔵）
明治東京全図

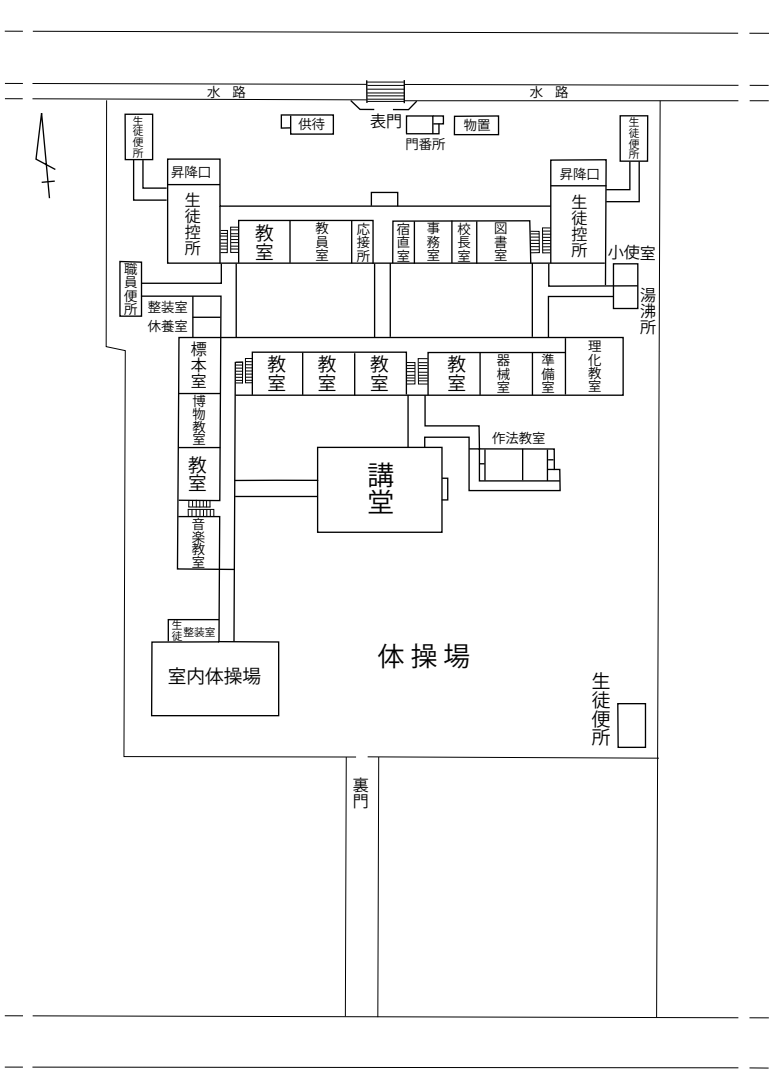


（部分、『地図で見る東京の変遷Ⅰ』財団法人日本地図センター）
東京府武蔵國下谷地図



（部分、『明治・大正・昭和　一万分の一地形図集成』柏書房）
明治 42 年陸地測量部 上野

第７図　明治時代の調査地点付近



『東京府立第一高等女学校一覧明治40年度』（国立国会図書館デジタルコレクション蔵）をトレースして作成。

第 8 図　府立第一高等女学校校舎配置図

ている。土地が売却され、酒井家の屋敷地範囲が旧上屋敷より縮小していることが伺われる。出羽松前藩旧上屋敷は南は七軒町通り（現春日通り）、西は現清洲橋通りの西まで広がる範囲を持っていたと言われるが、当該範囲には、前述『明治２年東京全図』でも他家の屋敷が確認できるので、早い段階から周囲の切り売りが行われていたのかもしれない。そのようにして売却されたと思われる隣地（七軒町二番地一号）について、名義書き換えの手続きと地券交付を浅草区役所に指示する東京府からの訓令も確認されている（史料⑥）。明治 34（1901）年、当地が第一高等女学校移転先の候補地に挙がると、現在の元浅草 1 丁目 6 番地にあたる範囲に対して、立ち退き保証を視野に入れた上物調査が行われているが、調査に応じた人々の一覧には、地主・借地人・借家人など 100 人以上が名を連ねており（酒井家を除く）、一郭は、北側校門周辺と南側校門周辺を除く四辺に家屋が密集する現在の状況に近くなっていたと考えられる。調査の過程で提出された酒井忠匡所有地の土地登記簿抄本には、「所有者本郷区駒込本町参拾七番地　酒井忠匡」とあることから、浅草七軒町邸がこれまでの間に居宅としての役割を終え、酒井家は転居していることがわかる。第一高等女学校の建設以前に、建物が取り壊され、整地が行われていた可能性もある。

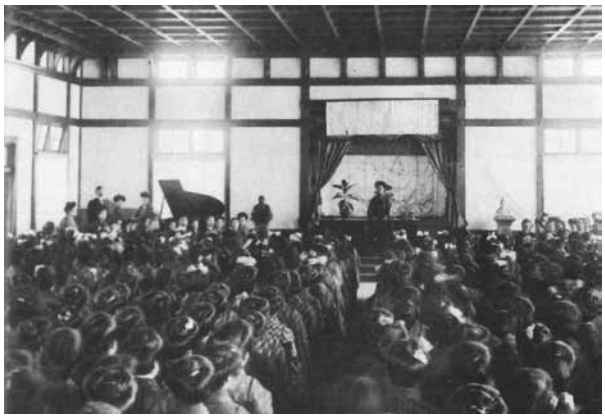
【第一高等女学校移転（明治 35 年）からアジア太平洋戦争終結まで】

東京都立白鷗高等学校は、前身校を含め長い歴史を持った伝統校である。その変遷は、東京府高等女学校（明治 21 ～ 33 年／ 1888 ～ 1900 年）→東京府第一高等女学校（明治 33 ～ 34 年／ 1900 ～ 01 年）→東京府立第一高等女学校（明治 34 ～昭和 18 年／ 1901 ～ 43 年）→東京都立第一高等女学校（昭和 18 ～ 23 年／ 1943 ～ 48 年）→東京都立第一女子高等学校（昭和 23 ～ 25 年／ 1948 ～ 50 年）→東京都立白鷗高等学校（昭和 25 年～／ 1950 年～）と 135 年にわたる。以下、都立白鷗高等学校によって編集・刊行された『百年史』を中心に、公文書などから、土地と建物に関する出来事を辿る[(4)]。

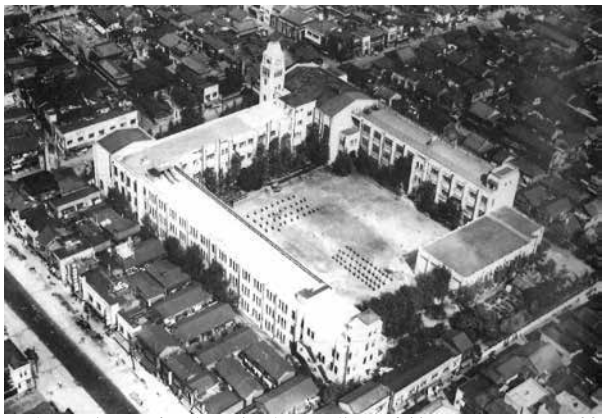

明治 45 年頃（敷地北辺にある表門。敷地境に溝がある。）


明治 43 年頃（右手前が講堂、左奥は西側校舎か。間に渡り廊下が見える。）


明治 43 年頃（奥の西側校舎の手前に増築部が見える。）


明治 43 年頃（講堂の中、中央に見えるのは演壇か。）


大正 12 年頃（関東大震災直後。講堂は焼失。奥は焼け残った西側コンクリート校舎か。）


昭和 10 年頃（昭和 3 年竣工の復興建築コンクリート校舎）

第 9 図　府立第一高等女学校校舎の写真（1989『百年史』都立白鷗高等学校）

移転への経緯　東京府高等女学校は、明治 21（1888）年 12 月 22 日認可され、翌明治 22（1889）年 4 月、京橋区南小田原町 4 丁目 8 番地（現中央区築地 7 丁目 3 番地）所在の手工学校（現工学院大学／当時夜間制）校舎を昼間のみ借用して開校した。入学希望者の増加に伴い、恒常的な教室不足に陥ったため、明治 27（1894）年 1 月、内務省所管河岸地神田区錦町 1 丁目 20 番地 2 号の土地（現千代田区神田錦町）を借用して自前校舎の新築を企てるも、明治東京地震（同年 6 月）、日清戦争の影響、

資金難などによって計画は頓挫した。そうこうしているうちに、明治 29（1896）年 2 月 10 日、借用していた手工学校が火災のため全焼。一切の記録と校舎を失う。当面の措置として、神田区今川小路二丁目八番地（現千代田区神保町 3 丁目 8 番地）の専修学校（現専修大学）校舎を借用して授業を再開したが、同年 6 月 30 日、神田錦町の地に新校舎が竣工したため移転した。施設は拡充されたものの、折からの女子中等教育需要の高まりから、生徒数は増大の一途を辿り、明治 30（1897）年には運動場用地の追加借用、明治 31（1898）年には校舎の増築を行っている。また、明治 33（1900）年には、生徒の一部を新設の東京府立女子師範学校、東京府第二高等女学校（現都立竹早高等学校）へ移籍させ、教育空間の確保に努めているが、運動場用地のほとんどを返還余儀なくされるなど、事態は悪化の一途をたどった。なお、東京府第二高等女学校の設立と同時に、東京府高等女学校は東京府第一高等女学校と改称されている。

明治〜大正期の校舎　さて、上記のような事態に対し、東京府は、明治 34（1901）年、新校舎建設用地として浅草区七軒町 2 番地の土地を取得、翌明治 35（1902）年 5 月、校舎建築のための地ならしに着工している。明治 36（1903）年 3 月に第一期工事落成、 5 月に第二期工事落成、 8 月に第三期工事落成、これらの校舎は 9 月に学校に引き渡された。校舎の配置は第 8 図のごとくで、敷地北辺中央に表門、北側に総二階建て教室棟 2 棟、教室棟の南に講堂や作法教室、屋内体操場を配し、南側に校庭と裏門があることがわかる。建物の素材についての言及はないが、『百年史』収録の写真資料を見ると、煉瓦積み基礎の木造であったようである（第 9 図）。

爾後、関東大震災で甚大な損害を被るまで、敷地や校舎の改変記事として、以下のような記録が見られる。

(1) 明治 38（1905）年 3 月、裏門より街路に通じる道路の敷地 35 坪 7 合 2 勺を追加購入。

(2) 明治 39（1906）年 8 月、割烹教室（建坪 24 坪）竣工。

(3) 大正 4（1915）年 11 月、教室模様替増築 1 棟、教室増築 1 棟、便所増築 1 棟、手洗所増築 1 棟（史料⑦）。

(4) 大正 6（1917）年 9 月、南側隣接地を買収して運動場を拡張することを府知事に願い出る。

(5) 大正 11（1922）年 3 月、第二号館（どの校舎を指すのか不明。北から二番目の L 字形校舎か。）中央階段の東側の壁間より出火し、校舎の一部を焼失。

(6) 大正 12（1923）年 7 月、婦人体育館（位置不明。前述の屋内体操場とは別のものであろうか。）落成。

『百年史』の写真資料には、建築記録がない建物がいくつも写っており、増改築が頻繁に行われていたことが伺われる。ボヤなどは度々発生したようで、屋内体操場なども何らかの理由で失われ、婦人体育館として再建されたのではないかと考えられる。

関東大震災被災と校舎再建　大正 12（1923）年 9 月 1 日関東災大震災が発生する。周辺民家より出火し、 2 日午前 11 時過ぎ校舎に飛び火、鉄筋コンクリートの新校舎（大正 11 年に焼失した第二号館に代わって建てられたものか。）を除いて全焼、完成したばかりの婦人体育館も焼失した。鎮火後焼け残った西館に付近の罹災者を受け入れる。10 月 15 日、焼け残った校舎で授業再開。一部の生徒は府立第五高等女学校（現都立富士高等学校／新宿区）の教室を借用した。翌大正 13（1924）年 3 月、仮校舎 2 棟、講堂 1 棟が完成。また、11 月、校庭に防災用掘り抜き井戸を設置。大正 14（1925）

年 10 月、復興第一期建築工事に着手。大正 15（1926）年 5 月、第二期基礎工事（本館教員室・特別教室）に着手、4 月第二期工事完了。昭和 2（1927）年 2 月、復興第三期工事（東館校舎）に着手、10 月完成。11 月、バラック校舎から新館校舎への全部の移転を終わる。新校舎の設計者は、歌舞伎座、明治生命館、鳩山一郎邸などを設計した建築家岡田信一郎。倒壊・消失をまぬかれた西側の校舎を生かした校庭を取り囲むような配置である。いわゆる復興建築であり、コンクリート造りで曲線やアーチの多用などが特徴であった。こういった意匠は、平成 10（1998）年に建て替えられた現校舎にも引き継がれている。昭和 8（1933）年 3 月、賀陽宮恒憲王敏子妃が日本女子教育視察のため来校。これを記念し、敷地南西角に、翌昭和 9（1934）年、行啓記念館を建設。 1 階運動場、 2 階購買部売店及び調理室、 3 階読書室兼会議室、 4 階行啓記念室。

アジア太平洋戦争と東京大空襲被災　アジア太平洋戦争が激化した昭和 19（1944）年、勤労動員が始まり、校舎は託児所や軍需工場へ転用される。工場では無線部品の生産や携帯食料包装が行われた。同年 12 月 31 日、夜半の空襲では体育館屋上及び校地内に被弾し、火災が発生。ほどなく鎮火している。翌昭和 20（1945）年 3 月 10 日、前夜より早朝にかけて東京大空襲。焼夷弾に被弾し、出火する。倉庫を焼失するも全焼はまぬかれ、同日夜から 6 日間、付近罹災者のために体育館を開放、4,546 名を受け入れた [(5)]。 3 月 17 日、集団疎開決定。校舎内の軍需工場は閉鎖となり、警視庁刑事部、浅草区第三配給所、第一陸軍造兵廠などが校舎建物を利用することになる。 これらは 8 月 15 日の終戦以降も一部残留するが、 9 月 20 日には学校が疎開から戻り、授業が再開された。　（両角まり）

［史料①］東京都公文書館 605.C2.09（343）
第二套　第十一編　府限願伺留　第八

先年下賜候浅草永住町上邸四ツ谷
千駄ヶ谷下邸両所之内右下邸之儀ハ
不都合之場所二付是迄官私取極之儀
御猶預願置候然ル扁近々出京仕候二付
浅草永住町上邸之内手廣ニモ有之
縣廳ニテモ差支無之趣二候間別紙絵
図面朱引之通区別相立私邸二取極申
度奉存候就テハ四ツ谷千駄ヶ谷下邸
之儀ハ上地仕度奉存候依之別紙絵図
面二枚相添此段奉伺候　以上
辛未
八月　従五位酒井忠匡
東京府
御中

［史料②］東京都公文書館 606.D4.04
明治六年　管民願伺届　第四部　土木

以書付奉願候
第五大区六小区浅草七軒町弐番地
酒井忠匡拝領邸表長屋西乃方商
店相開候二不都合二付邸外下水別紙
絵図面乃通長延弐拾間幅九尺之処
今度長延其儘ニテ幅九尺乃方自費ヲ以
弐尺取縮申度奉存候此条御聞済
被成下置度奉願候以上
明治六年十二月
第五大区六小区
浅草七軒町弐番地
酒井忠匡家令
武藤旭山
戸長　髙木孝勝
－図面添付－

［史料③］東京都公文書館　606.D4 .10
明治六年　管民願伺届　第四部　土木

以書付御届申上候
第五大区六小区浅草七軒町貳番地
酒井忠匡拝領邸外下水悪■奉願
取縮埋立之儀此日出来仕候此如御届
申上候　以上

酉十二月廿三日
第五大区六小区浅草七軒町二番地
従五位酒井忠匡家令
武藤旭山
戸長　山田靖直
東京府知事
大久保一翁殿

［史料④］東京都公文書館 608.C4.1
明治十年　管民願伺届　従一月至二月　土木掛

第四■■
第五大区六小区
浅草七軒町弐番地
華族
従五位酒井忠匡
私賜邸
南表通長屋御度貸家商店等間度
ヲル處邸外長サ三間巾九尺之堀有之
甚不都合二此間別紙絵図之通巾
九尺之處弐尺取縮メ自費ヲ以埋立
申度奉存候右之段御聞■被下度
奉願候也
明治九年十二月廿八日　従五位酒井忠匡
前書之通■■■奥印仕奉也
六区戸長　内満志作
東京府権知事　楠本正隆殿
－図面添付－

［史料⑤］東京都公文書館 608.C4.1
明治十年　管民願伺届　従一月至二月　土木掛

己三〇八號
堀埋立落成届
東京府華族
従五位酒井忠匡
第五大区六小区浅草
七軒町弐番地住
私賜邸表通三間巾九尺之預テ
自費ヲ以埋立願之本月落成
二付此段及御届候也
明治十年二月廿三日　右従五位酒井忠匡
東京府知事楠本正隆殿

［史料⑥］東京都公文書館 616.D3.16（124）
明治二十年　訓令

自第四〇五二至四〇五七号
…（略）
浅草区浅草七軒町二番地ノ内第一号酒井
忠匡浅草永住町九十八番地盛泰寺浅
草今戸町廿三番地伊達宗城へ払下及下渡
民有道敷宅地ニ地種組換候以下前仝文（該地地券下付等
取計フヘシ）
…（略）
浅草七軒町二番地一号
一市街宅地拾九坪五合弐勺　酒井忠匡
　此地價金九円六拾六銭弐厘
　全額金弐拾四銭弐厘
　此地粗金拾六銭壱厘　但月割粗額五月ヨリ十二月マテ八ヶ月分
　外金八銭壱厘　未廿一年ヨリ可増分
…（略）

［史料⑦］東京都公文書館　301.G4.1
大正四年　学事　府立学校　第一號　冊ノ三六

第二八三號
一教室模様替増築　木造二階建て　瓦葺　貳ヶ所　四拾坪
一教室増築　木造平屋建　瓦葺　壹棟　貳拾坪
一便所　仝上　壹棟　四坪四合五勺
一手洗所　木造平屋建　生子板葺　壹ヶ所　六合五勺
右御引継相成正ニ受領候也
大正四年十一月二十四日
東京府立第一高等女学校長　伊藤貞勝
東京府内務部長　岡田忠彦殿
※文字の判読できなかった箇所については■で示した。

■第 1 次調査の成果

Ⅰで述べたとおり、元浅草遺跡の第 1 次調査は、都立学校遺跡調査会により、白鷗高校の校舎建替えに先立って行われた。発掘調査は昭和 62（1987）年に行われ、整理作業は昭和 63（1988）年から平成 2（1990）年まで行われた。報告書は平成 2 年に刊行された(6)。以下、発掘報告書をもとに、第 1 次調査の主な成果を記述する。

第 1 次調査の主な検出遺構は、明治時代の煉瓦製基礎、礎石、煉瓦溜、江戸時代の廃棄土坑、瓦列、石組、井戸、穴蔵、溝、木組、墓跡などである。出土遺構は 5 つの時期に分割され、Ⅰ期からⅣ期を江戸時代、Ⅴ期を明治時代の遺構としている。特に注目されるのは、Ⅰ期に属す墓跡である。29 基が検出され、多くは埋設桶の底板ないし底部付近が残存したものである。第 1 次調査では、これらを屋敷地としての利用に先立って社寺が置かれた痕跡と推定している。また、Ⅲ期には廃棄土坑が 13 基検出された。廃棄土坑は安政地震の廃棄物層とされる遺物の多い土層を掘り込んでおり、廃棄土坑からは、木材や炭化物、瓦片をはじめ、陶磁器など 18 世紀後葉から 19 世紀初頭の遺物が出土している。廃棄物層の出土遺物と廃棄土坑の出土遺物での接合もあるため、第 1 次調査では廃棄土坑群は比較的短期間に掘削され、廃棄物とともに埋戻されたと推測している。Ⅲ期の上位にあるⅣ期には、石組や瓦列などの遺構が属す。第 1 次調査では、これらを庭園の設備と推測している。

主な出土遺物は、陶磁器を中心に、土器、土製品、瓦、石製品、金属製品、硝子製品、漆器、木製品、骨角貝製品などである。特に陶磁器の出土が多く、磁器は 1 万 4 千点余、陶器は 5 万 6 千点余を数え、他の遺物に卓越している。遺構から出土した陶磁器はわずかであり、大部分は土層から出土したものである。陶磁器は、17 世紀後半から 19 世紀のものが見られるものの、磁器では 18 世紀後半から 19 世紀初頭にかけての碗・皿類が主体をなし、陶器も 18 世紀後半から 19 世紀にかけてのものが大半を占める。18 世紀後半から 19 世紀にかけての時期に元浅草遺跡を利用したのは松山藩酒井家であり、酒井家との関係が注目される。（山﨑太郎）

【註】

（1）近世の絵地図の系譜を引く絵図で、版元は江戸時代からの地本問屋（江戸で出版された大衆本の版元）、吉田屋文三郎。

（2）海岸線や河川の形状は測量図の様を呈すが、街路などについては絵地図風。方位が記載されているので、伊能図など既存の測量図を参照して作成した可能性もあろう。原著者は市原正秀、出版人は小林新兵衛・中村熊次郎。小林新兵衛は江戸時代からの有力な書籍版元である。

（3）参謀本部陸軍部測量局作成。近代測量によるもので、縮尺は 1 ／ 5,000 である。

（4）1989『百年史』都立白鷗高等学校。公文書に記録のある記事については出典を記した。『百年史』抜粋の記事については、特に注釈はしない。

（5）2002『台東区史』通史編Ⅲ下巻　第四章庶民社会の諸相第四節下谷・浅草の戦災　東京都台東区

（6）1990『白鷗』都立学校遺跡調査会。

Ⅲ　層序

元浅草遺跡は、武蔵野台地縁辺部と隅田川の間に位置する低地に遺された遺跡である。遺跡は、自然堆積層である砂混じりの粘土質土の上に、盛土を行って形成されている。盛土は、出土遺物や遺構との前後関係から、近世から近代、現代にかけて断続的に行われていることがわかった。また、盛土には二種ある。ひとつは本調査地点の自然堆積層である暗緑灰色粘土層を主とした盛土である。もうひとつは、一見するとローム層のような褐色土を主とした盛土である。調査地点は低地域にあり、褐色土が元来堆積していたものとは考えにくく、外部から搬入された客土であると推測される。

第 10 図下部の土層模式図は、第２次調査で確認した土層を大別したものであり、第１～６層を確認した。なお、土層番号は第 1 次調査や試掘調査と共通するものではなく、本調査において独自に整理した番号である。また、本報告書では、基本土層を表す際には「第○層」と表記して、遺構覆土などの土層と区別している。

第１層は、最上位にあたる盛土層である。調査区北壁の土層観察から、第１層はさらに 4 層に細別される（第 11 図)。最上層の 1-1 層は現在の都立白鷗高等学校のグラウンドの整地層で、上面は現地表面である。グラウンドは排水のために、中央を頂点として東西に傾斜しているため、東端部分では中央よりも低い位置で 1-1 層が出現している。1-2 層は、コンクリートガラが多量に混じる層である。改良材等で固めた影響か、重機の歯が立たないほどに固く締まった層であった。第Ⅱ章で言及した昭和３年のコンクリート製校舎（以下、「昭和校舎」という。）を解体、埋戻した際の撹乱と考えられる。1-3 層は砂礫を含む整地層である。1-2 層に切られることから、昭和校舎が健在であった頃に整地された層と考えられる。1-4 層は固く締まった整地層である。35 号遺構（明治期の煉瓦製建物基礎）を埋めるように整地されていることから、関東大震災に伴う火災のあと、臨時校舎を建てる際に埋戻した盛土層と考えられる。以上から、第１層は昭和から現在に至るまで、白鷗高校の校舎建替えにともなって形成された盛土と考えられる。

第２層は、Ⅰ区西側からⅢ区東側までの範囲で検出された盛土層である。調査区北壁の土層観察から、第２層には 35 号遺構が掘り込まれるため、明治期の煉瓦製建物基礎が構築される以前に整地された土層であると考えられる。調査区北壁及びⅡ区南北ベルトの土層観察から、第２層は最上面に黄褐色土を硬く締め固めた層があり、その下層に褐色、暗褐色、黒褐色を呈する土層があることがわかる。後述の池遺構や第４・５層などの前の時代の土層を埋めるように褐色土、暗褐色土、黒褐色土で盛土を行い、その上層に黄褐色土で整地を行ったものと考えられる。以上から、第２層は近代に形成された盛土層と考えられる。

第３層は、第２層と同じ高さに形成された盛土層である。土層は主として暗褐色土を呈し、遺物を含む。調査区北壁の観察から、池遺構の覆土に流れ込む 91 号遺構の土層が第３層の上位にあることが確認できる。このため、池を埋立てる以前には既に第３層は形成されていたことがわかる。第４層形成以降から池遺構の埋立て以前に形成された盛土層と考えられ､近世から近代初頭に比定される。

第４層は、第３層の下層にあり、池遺構西岸に形成された黒色からオリーブ褐色の盛土層である。一見して第６層と色合いに差がなく、当初は判別ができなかったものの、81・94 号遺構の土層観察

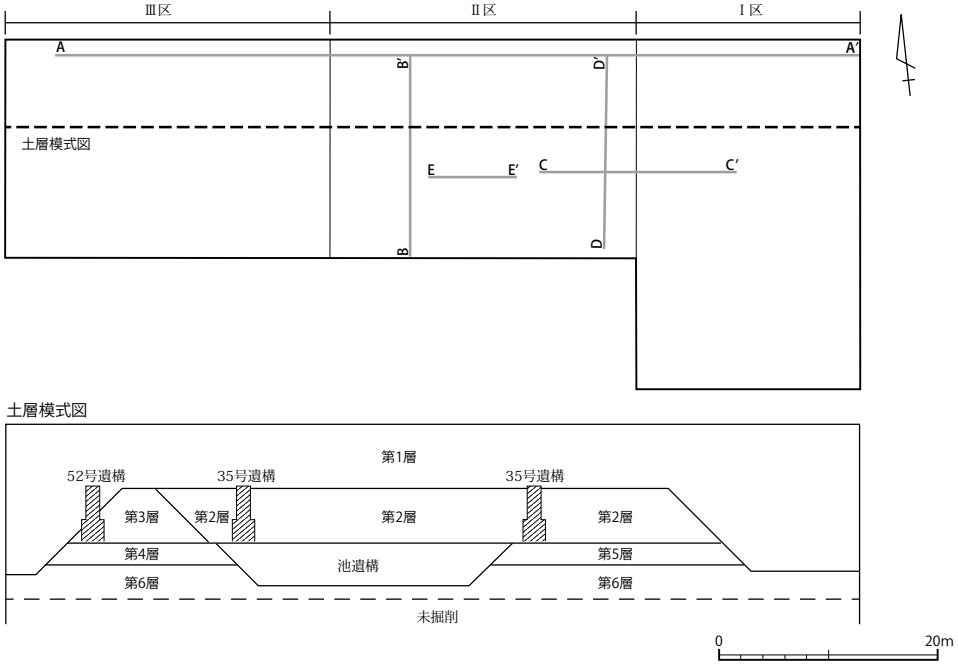
により、33 号遺構の間知石を取り除いたのちに、61 号遺構と連結する木樋列（76・80・88 号遺構）を盛土内に設置したことを確認した（第 52 図 C-C'）。木樋列は 3 条を確認し、木樋列の設置と盛土は交互に行われていたことを確認した。そのため、第 4 層は木樋列と同時期に形成された盛土層であり、池遺構よりもやや新しく第 3 層よりも古い。近世の後半に比定される土層であると考えられる。

第 5 層は、第 2 層下位に確認された。発掘時に第 6 層と異なる褐色土の面を確認し、東西・南北の 2 本のトレンチを入れて調査を行った（第 12 図 C-C'・D-D'）。トレンチや 33 号遺構裏込め土（第 58 図 C-C'）の土層観察から、33 号遺構の裏込め土の上位に形成された盛土整地層であることがわかった。土層は細かく分かれていることから、整地は何層もの土層を重ねながら行われており、堆積の先後関係から、整地は西から東へ行われたことがわかった。また、大別して 3 層に分かれ、最上位は褐色土層、中位は黒褐色やオリーブ黒色の土層が混在して細かく堆積し、下位はオリーブ黒色土層を中心に灰オリーブ色の粘土質土が一部に混在して堆積していた。盛土からは瓦や木材の小破片が出土している。また、61 号遺構は第 5 層を切って構築されることから、第 5 層は、33 号遺構の構築から池遺構の構築までの間に形成された、近世に比定される土層であると考えられる。

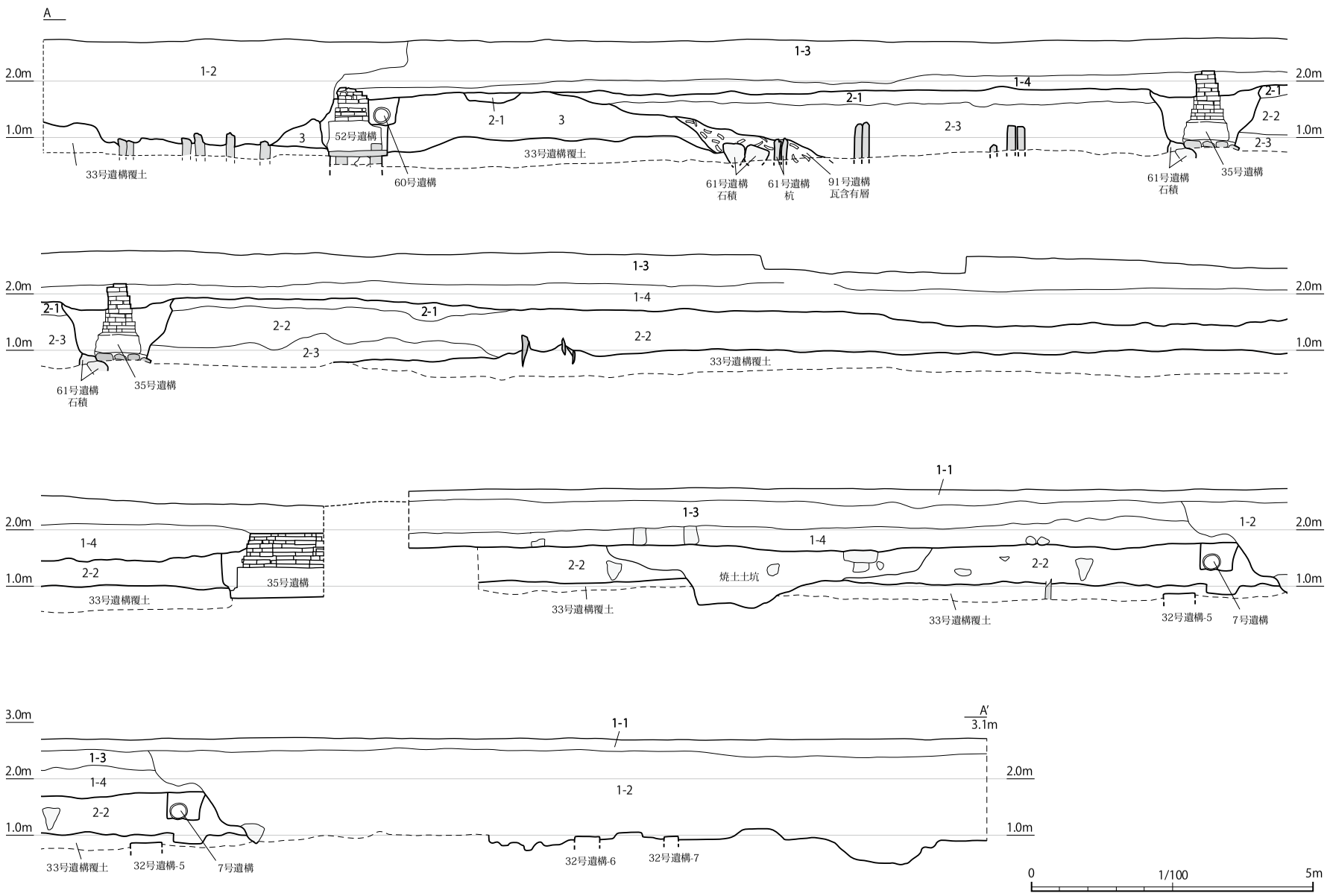
なお、第 4・5 層の上面、池遺構の埋立て土の上面、33 号遺構覆土の上面は、ほぼ同一の海抜 1m 付近となっている。第 4・5 層上面の遺構の上端が削平されていることから、第 2・3 層の盛土を行う際に一度削平、整地したものと推測される。

第 6 層は、自然堆積層であり、本遺跡における地山層である。調査は調査区東側の Ⅰ 区から行ったため、1 層の撹乱層を掘削してすぐに暗緑灰色粘土層を確認した。2 号遺構や 12 号遺構の調査により、自然堆積層であることを確認した。総じて暗緑灰色を呈する砂混じりの粘土層であるが、深掘トレンチ（第 12 図 E-E'）から、深部では砂の混入に濃淡があることがわかった。

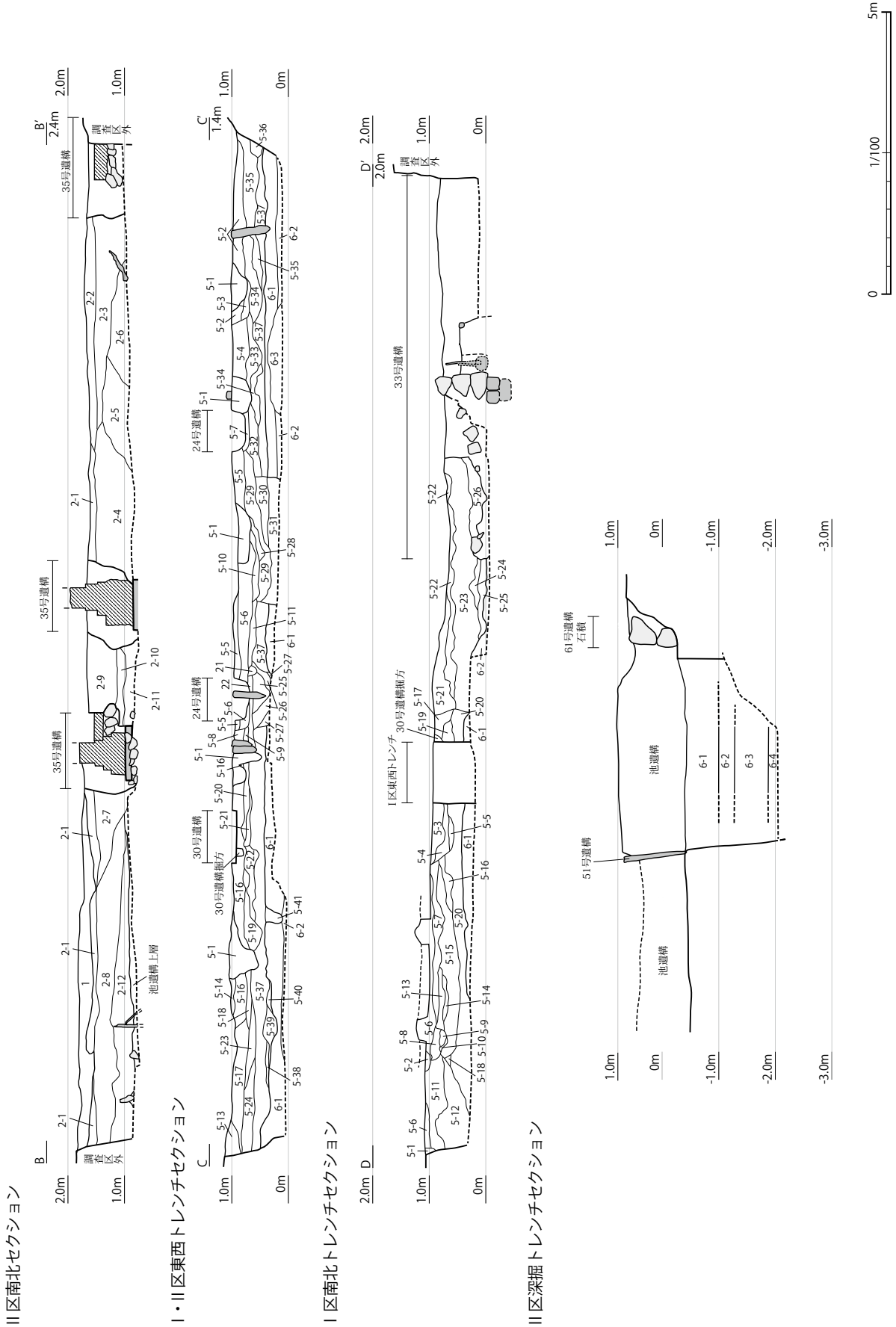
第 2 次調査地点の土層は以上の 6 層に大別される。この 6 層と検出した大規模な遺構との新旧関係は、古い方から順に第 6 層→ 33 号遺構→第 5 層→池遺構（61 号遺構）→第 4 層→第 3 層→第 2 層→ 35・52 号遺構→第 1 層となる。



第 10 図　トレンチの位置と土層模式図



第11図　調査区の土層（1）



第 12 図　調査区の土層（2）

調査区北壁東西セクション（第11図A-A′）

1-1　現在の都立白鷗高等学校グラウンド整備に伴う整地層。上面は現地表面。
1-2　コンクリートガラを多量に含む撹乱層。昭和校舎の解体による撹乱と考えられる。
1-3　礫や砂利を含む層。1-2層に切られるため、昭和校舎時代の整地層と考えられる。
1-4　固く締まる整地層。煉瓦製校舎基礎を埋め戻したものか。
2-1　黄褐色土を中心とした盛土層。遺物（木材、瓦、陶磁器等）が混じる。35号遺構の周囲に薄く広がっている。
2-2　褐色土を中心とした盛土層。遺物（木材、瓦、陶磁器等）が混じる。35号遺構内部からⅠ区西側まで広がる。
2-3　暗褐色土を中心とした盛土層。遺物（木材、瓦、陶磁器等）が混じる。35号遺構内部から西側にかけてある。
3　暗褐色土を中心とした盛土層。江戸時代から明治初期の整地層と考えられる。

Ⅱ区南北セクション（第12図B-B′）

1　10YR2/1（黒色）締り強、粘性やや強。瓦片3～5％混、φ10～30mm礫3～5％混。整地層。
2-1　10YR4/3（にぶい黄褐色）締り強、粘性やや強。φ10～20mmロームブロック3～5％混。整地層。
2-2　2.5Y3/1（黒褐色）締り強、粘性やや強。φ3～5mm焼土粒・炭化物粒・貝片各2%・遺物（瓦）多。粘土層だがやや土っぽい。
2-3　2.5Y3/1（黒褐色）締り強、粘度強。φ20～50mm炭化材微、礫・遺物多。ブロック状の粘土充填。
2-4　2.5Y3/1（黒褐色）締り強、粘性強。φ5～8mm焼土粒・炭化物粒・貝片各7%混、遺物（瓦）多。粘土層。
2-5　2.5Y3/1（黒褐色）締り強、粘性強。φ8～10mm焼土粒・炭化物粒・貝片各10%混、遺物（瓦）多。2-4層に似る。粘土質土。
2-6　2.5Y3/2（黒褐色）締り強、粘性強。φ5～8mm焼土粒・炭化物粒各5％混。
2-7　10YR3/2（黒褐色）締りとても強、粘性やや強。φ20～30mm炭化物5～7％混、φ10～50mm礫・瓦片各7～10％混。炭化物は北側に多い。整地層で上面は硬化している。
2-8　10YR3/4（暗褐色）締り強、粘性やや強。φ10～20mm炭化物3～5％混。整地層だが､2-7層のような上面の硬化は見られない。
2-9　7.5YR3/1（黒褐色）締り強、粘性強。φ5～8mm焼土粒・炭化物粒各10～15％混、遺物（瓦）・礫・貝片多。粘土層。
2-10　7.5YR3/1（黒褐色）締り強、粘性やや強。層状の淡黄褐色砂質粒子混。砂混じり粘土層で砂多。
2-11　7.5YR2/1（黒色）締り強、粘性やや強。遺物・貝片・木材多。砂混じり粘土層で砂多。ブロック状の粘土充填。
2-12　10YR2/2（黒褐色）締り強、粘性強。木片・貝片各1～3％混、φ5～10mm炭化物・φ10～20mm礫各3～5％混。

Ⅰ・Ⅱ区東西トレンチセクション（第12図C-C′）

5-1　7.5Y2/1から2.5Y4/3（黒色からオリーブ褐色）締り強、粘性やや弱。、φ3～5mm炭化物・φ5～10mm黒色土ブロック各3～5％混、φ5～10mm黄褐色砂粒5～7％混、φ10～30mm青灰色粘土ブロック7～10％混。混入物の濃淡により色調は変わる。砂混じり粘土層。杭の掘方。
5-2　5Y4/2（灰オリーブ色）締りやや強、粘性やや強。黄褐色砂粒3～5％混。砂混じり粘土質土のブロックで埋戻した層。
5-3　5Y3/2（オリーブ黒色）締りやや強、粘性やや強。にぶい黄褐色砂粒5～7％混、φ5～10mm黒色土ブロック10～20％混。5-37層と同質だが、混入物が異なる。
5-4　2.5Y4/2（オリーブ褐色）締り強、粘性有。φ5～10mm黒色土ブロック5～7％混、黄褐色砂粒10～15％混。砂混じり土。黒色土ブロックの集中する箇所がある。
5-5　2.5Y4/6（オリーブ褐色）締りやや強、粘性やや弱。φ10～20mm黒褐色土ブロック5～7％混、黄褐色砂粒多。砂質土。
5-6　2.5Y3/2（黒褐色）締りやや強、粘性有。φ1～3mm炭化物粒子1～3％混、にぶい黄褐色砂粒7～10％混。砂混じり粘土質土。
5-7　10YR3/3（暗褐色）締り有、粘性やや弱。φ10～30mm礫3～5％混。砂混じり土。
5-8　2.5Y3/3（暗オリーブ褐色）締りやや強、粘性やや弱。φ3～5mm白色粒子・φ5～7mm黒褐色土ブロック各3～5％混。
5-9　10YR3/4（暗褐色）締りやや強、粘性有。φ3～5mm黒色粒子1～3％混、褐色砂粒10～15％混。
5-10　2.5Y3/2（黒褐色）締り強、粘性有。瓦片3～5％混、φ3～5mm炭化物粒子・にぶい黄褐色砂粒各5～7％混。
5-11　2.5Y4/2（暗灰黄色）締り強、粘性弱。φ10～30mm青灰色粘土ブロック7～10％混。にぶい黄褐色砂粒を中心に、僅かに黄褐色砂粒も混じる砂質土。
5-12　2.5Y3/2（黒褐色）締り強、粘性強。にぶい黄褐色砂粒3～5％混。粘土質土。
5-13　2.5Y3/2（黒褐色）締り強、粘性有。にぶい黄褐色砂粒7～10％混、φ10～30mm青灰色粘土ブロック10～15％混。
5-14　2.5Y4/4（オリーブ褐色）締り強、粘性有。φ10～20mm青灰色粘土ブロック7～10％混。
5-15　10YR3/4（暗褐色）締り有、粘性弱。φ5mm黄褐色粒子3～5％混、φ10～30mm青灰色粘土ブロック5～7％混。
5-16　2.5Y4/4（オリーブ褐色）締り強、粘性やや弱。φ10～30mm青灰色粘土ブロック20～30％混。砂質土。一部黄褐色に変色。
5-17　2.5Y3/3（暗オリーブ褐色）締り強、粘性やや弱。φ10～30mm黄褐色土ブロック3～5％混、φ10～30mm青灰色粘土ブロック20～30％混。
5-18　2.5Y3/3（暗オリーブ褐色）締り強、粘性有。暗褐色砂質土（一部にぶい黄褐色）ブロック20～30％混。粘土質土。
5-19　2.5Y3/1（暗褐色）締り強、粘性有。φ5mm炭化物粒子3～5％混、φ10～20mm灰色砂質土ブロック7～10％混。5-37層に近い粘土質土に、5-38層に近い砂質土ブロックが混じる。
5-20　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り強、粘性弱。砂混じり粘土層。
5-21　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り強、粘性弱。φ3～5mm黒色粒子5～7％混。砂混じり粘土層
5-22　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り強、粘性有。φ3～5mm黒色粒子3～5％混。粘土と褐色砂質土が混じる。砂質土は一部にぶい黄褐色。
5-23　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り強、粘性強。暗褐色砂質土ブロック10～20％混。5-18層に近く、さらに粘土質土が多い。
5-24　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り強、粘性強。黒色土ブロック・黄褐色土ブロック３～5％混、暗褐色土ブロック5～7％混。粘土質土。
5-25　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り強、粘性強。にぶい黄褐色砂粒7～10％混。粘土質土。
5-26　7.5Y3/2（オリーブ黒色）締り強、粘性強。黄褐色砂粒微、にぶい黄褐色砂粒20～30％混。砂混じり粘土質土。
5-27　5GY3/1（暗オリーブ灰色）締り強、粘性強。にぶい黄褐色砂粒5～7％混。5-37層と似るがやや青黒い。
5-28　2.5Y3/2（黒褐色）締りやや強、粘性やや弱。φ3～5mm炭化物粒子1～3％混、φ5～10％黒褐色粘土ブロック3～5％混、褐色砂粒10～15％混。
5-29　5Y3/2（オリーブ黒色）締り強、粘性強。暗褐色砂粒・青灰色粘土ブロック各7～10％混。粘土質土。下層ほど青灰色粘土ブロックが多い。
5-30　2.5Y3/2（黒褐色）締りやや強、粘性やや弱。φ10～30mm黒褐色粘土ブロック7～10％混、褐色砂粒15～20％混。砂混じり土。
5-31　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り強、粘性有。φ3～5mm炭化物・φ5～10mm褐色土ブロック各1～3％混。6-1層に近い粘土質土だが、や

や暗く、混入物が異なる。
5-32　2.5Y3/3（暗オリーブ褐色）締り強、粘性有。黄褐色砂粒1～3％混、φ10～20mm青灰色粘土ブロック3～5％混、褐色砂粒・にぶい黄褐色砂粒各7～10％混、砂混じり土。
5-33　2.5Y3/2（黒褐色）締り強、粘性やや強。黄褐色砂粒10～15％混。砂混じり粘土質土。砂粒はブロック状を呈する。
5-34　5Y3/1（オリーブ黒色）締り強、粘性強。にぶい黄褐色砂粒15～20％混。砂混じり粘土質土。砂粒はブロック状呈する。
5-35　5Y3/1（オリーブ黒色）締り強、粘性強。にぶい黄褐色砂粒10～15％混。砂混じり粘土質土。砂粒はブロック状を呈する。砂粒は5-39層、5-40層と同質だが、やや褐色に近い。
5-36　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り強、粘性強。暗褐色土ブロック7～10％混。粘土質土。
5-37　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り強、粘性強。黄褐色粒子1～3％混、暗褐色土ブロック5～7％混。粘土質土。暗褐色土ブロックは西側に多い。
5-38　7.5Y4/2（灰オリーブ色）締り強、粘性強。φ10～20mm灰オリーブ色砂質土ブロック3～5％混。砂混じり粘土質土。
5-39　7.5Y4/1（灰色）締り強、粘性強。φ3～5mm砂質土ブロック1～3％混。5-38層と同質の粘土質土。
5-40　7.5Y4/2（灰オリーブ色）締り強、粘性強。φ5～10mm暗褐色砂質土ブロック5～7％混。5-38層と同質の砂混じり粘土質土。
5-41　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り強、粘性強。φ20mm礫1～3％混。5-37層と同質の粘土質土。6-1層への掘り込みか。
6-1　10Y3/1から7.5GY3/1（オリーブ黒色から暗緑灰色）締り強、粘性有。線状の黄褐色土5～7％混。砂混じり粘土質土。水が湧く。
6-2　10Y3/1から7.5GY3/1（オリーブ黒色から暗緑灰色）締り強、粘性有。線状の褐色土5～7％混。砂混じり粘土質土。水が湧く。6-1層よりやや暗い。
6-3　5Y4/2（灰オリーブ色）締り強、粘性有。φ10～30mm褐色土ブロック3～5％混。砂混じり粘土質土。水が湧く。

Ⅰ区南北トレンチセクション（第12図D-D′）
5-1　7.5YR3/2（黒褐色）締り弱、粘性弱。礫・焼土・炭化物多。
5-2　7.5YR4/4（褐色）締りやや弱、粘性弱。φ1～3cm小礫多。
5-3　7.5YR3/2（黒褐色）締りやや弱、粘性弱。φ2～3cm炭化物上層に多、φ5mm小礫多。砂混じり土。
5-4　7.5Y4/1（灰色）締り強、粘性強。φ5mm～2cm炭化物・φ5mm焼土ブロック斑状に混。粘土層も、僅かに砂混じる。
5-5　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り強、粘性強。φ5mm炭化物1%。粘土層。
5-6　7.5YR4/4（褐色）締り強、粘性やや強。ローム混じりの土層。やや砂っぽい。所々灰白色化している。
5-7　7.5YR4/2（褐色）締りやや強、粘性やや弱。φ2～3mm焼土粒微、φ2～3mm炭化物粒3%混。やや砂っぽい。ローム混じり所々褐色化。遺物混。
5-8　7.5YR4/4（褐色）締り強、粘性弱。5-７層類似だが、より砂っぽい。
5-9　7.5YR3/4（暗褐色）締り強、粘性弱。φ3mm炭化物粒・φ3mm焼土粒各1%。
5-10　7.5YR4/4（褐色）締り強、粘性やや強。φ1mm焼土粒・φ2mm炭化物粒微。
5-11　7.5YR4/3（褐色）締り強、粘性無。φ1mm以下の焼土粒多。やや赤っぽい色調。
5-12　7.5YR3/1（黒褐色）締り弱、粘性弱。φ3mm焼土粒・φ5mm小礫混。砂質土層。
5-13　7.5YR3/2（褐色）締り強、粘性強。2～3mm焼土粒微、φ2～3mm炭化物粒3%。遺物混。粘土質土。
5-14　7.5YR4/3（褐色）締り強、粘性やや強。やや砂っぽい。ローム混か。
5-15　7.5YR3/2（黒褐色）締り強、粘性強。褐灰色粘土ブロックが所々に斑状に混じる。
5-16　7.5YR3/2（褐色）締り強、粘性やや強。水玉状に褐色化した部分有。
5-17　7.5YR3/2（黒褐色）締りやや弱、粘性弱。φ2～3cm炭化物上層に多、φ5mm小礫多。砂混じり土。
5-18　7.5Y3/2（オリーブ黒色）締り強、粘性強。φ3mm炭化物粒3%。粘土層。
5-19　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り強、粘性弱。砂混じり粘土層。やや褐色。
5-20　7.5YR3/1（黒褐色）締り強、粘性強。粘土層。
5-21　7.5YR4/3（褐色）締り強、粘性無。φ3mm炭化物粒1％混、φ1～3cm小礫多。ローム混。
5-22　7.5YR4/1（褐灰色）締り強、粘性弱。φ1～2cm小礫・遺物・焼土混じる。褐色がやや強い。
5-23　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締りきわめて弱、粘性無。φ2～5cmの小礫多。砂質土層。砂礫は多量かつ、粒度が大きいため締りが悪い。
5-24　7.5Y3/2（黒褐色）締り弱、粘性強。φ10～15mm粘土ブロック主体。僅かに砂混じり、灰オリーブ色がかる。
5-25　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り強、粘性やや強。砂混じり粘土層。砂粒が多いが締りは良い。含水有。
5-26　7.5YR3/2（黒褐色）締りやや弱、粘性やや強。ローム混か。砂混じりで、やや含水が多い。
6-1　7.5YR3/1（黒褐色）締り強、粘性やや強。砂混じり粘土層。砂混じりで、湧水がある。自然堆積土か。
6-2　7.5Y2/1（黒色）締りやや強、粘性無。砂質層。やや青灰色がかる。
※ 南北トレンチセクション5-19層は東西トレンチセクション5-20層、南北トレンチセクション5-20層は東西セクション5-37層、南北セクション6-1層は東西セクション6-1層とそれぞれ対応する。

Ⅱ区深掘トレンチセクション（第12図E-E′）
6-1　10GY2/1（緑黒色）締り有、粘性やや強。φ5～10mm粘土ブロック7～10％混。砂層。
6-2　10GY3/1（暗緑灰色）締りやや強、粘性有。φ5～10mm粘土ブロック7～10％混。
6-3　10G3/1（暗緑灰色）締り有、粘性やや強。φ10～20mm粘土ブロック10～15％混。
6-4　5G3/1（暗緑灰色）締り強、粘性無。粘土ブロック微。砂層。湧水がある。

Ⅳ　遺構と遺物

1　遺構

第２次調査で検出した遺構は、煉瓦製建物基礎３基、円礫充填建物基礎１基、瓦充填建物基礎１基、コンクリート礎石列１条、板基礎列１条、十字形土坑列１条、礎石列３条、コンクリート三和土１基、コンクリート縁石列１条、鉄管列１条、土管列 10 条、コンクリート製枡１基、煉瓦製枡 12 基、木製枡６基、木樋列６条、竹樋３条、溝２条、石積遺構２条、土留板列 13 条、中の島１基、井戸５基、井戸囲い枠１基、埋設桶４基、木枠土坑５基、土坑 16 基、木枠２基、瓦集中部１ヶ所、遺物集中１ヶ所である。これらのうち、石積遺構１条、中の島１基、土留板列 10 条、瓦集中部といった遺構は、庭園に用いられた池跡に関連するものとして、池遺構としてまとめて取り扱った。また、土管と煉瓦製枡、木樋と木製枡など接続が確認できる遺構については、系統としてまとめて取り扱った。

層序の項で確認したとおり、調査地点の土層は自然堆積層の上に盛土を行って形成されており、それぞれの盛土の上面で遺構を検出した。このため、各遺構は平面的には重なり合って検出されている。そこで、遺構の堆積順序に応じて遺構面を設定し、それぞれの遺構面ごとに整理し報告を行った。

Ⅰ面は、第１層上面、すなわち現地表面である。相当する遺構はない。

Ⅱ面は、第２・３層上面にあたる。煉瓦製建物基礎や、煉瓦製枡、土管などを検出した。近代に相当する確認面である。遺構確認面は概ね海抜 1.5m であるが、第１層の厚い調査範囲の東側ではやや低い位置から検出している。

Ⅲ面は、第４層の上面にあたり、池遺構やそれに伴う木樋、木製枡などを検出した。近世から近代に相当する。遺構確認面は概ね海抜 1m である。

Ⅳ面は、第５・６層上面にあたり、石積遺構や円礫充填建物基礎、瓦充填建物基礎、井戸などを検出した。池遺構以前の近世に相当する確認面である。遺構確認面は海抜 0.5 mから 1m である。Ⅰ区東側やⅢ区西側では第１層の撹乱が深く、遺構を確認できたのは第６層上面であったものの、本来第４・５層のような盛土があった可能性もある。しかし、調査では確認できなかったため、Ⅳ面の遺構とした。

１）Ⅱ面の遺構（第 13 図）

Ⅱ面から検出された遺構は、煉瓦製建物基礎３基、コンクリート礎石列１条、十字形土坑列１条、礎石列１条、コンクリート三和土１基、コンクリート縁石列１条、鉄管列１条、土管列 10 条、コンクリート製枡１基、煉瓦製枡 12 基、木製枡３基、土坑４基である。煉瓦製建物基礎は、第Ⅱ章で述べた府立第一高等女学校の講堂及び校舎棟に比定される。また、コンクリート三和土もこの校舎に伴う渡り廊下に比定される。多数出土した鉄管列・土管列とコンクリート製・煉瓦製・木製の枡は、明治 35 年築造の校舎ないし、昭和校舎に伴う導水施設と考えられる。導水施設は、鉄管列・土管列とコンクリート製・煉瓦製・木製の枡の組み合わせから、10 の系統が考えられる。鉄管列・土管列との接続が考えられない煉瓦製枡については、独立したものとして報告した。

■府立第一高等女学校の建物基礎

【校舎の建物基礎】

35 号遺構（第 14 ～ 20 図、第４表、図版５～８）　Ⅱ区からⅢ区の北側で検出された。東辺、南辺、

西辺、中辺を検出し、北側は調査範囲外へ続いている。東西に長軸を持つ長方形の基礎であり、前回の発掘調査や試掘でも確認されている。

35 号遺構の構造は、下位から、杭→横木・胴木→コンクリート製土台→煉瓦製基礎の順序で構築されている。第 18 図 R-R' の土層確認から第 2 層から後述の池遺構上層まで掘り込んだ掘方があり、当時の地表面であったと考えられる第 2 層上面から杭の上面まで、約 1m 掘り込みを行っていたようである。掘方の幅は約 1.3m であるのに対して、横木が約 1 m であるため、掘方の掘削幅は最小限にとどめていたようである。横木の下位にある杭の長さは、中辺で約 2.5m、南辺で約 1.7m あり、これらを打ち込むことを考えても、掘方の掘削幅はやや狭いように考えられる。しかし、杭や横木・胴木を設置した上で、上位の基礎のための掘方を正確に設定し、調整しながら地面をかさ上げすることは非常に困難と考えられるため、すべての作業は第２・3 層上面から行われたと考えられる。

杭は 2 列を基本としているが、部分的に 3 列となっている箇所や、列から外れて打ち込まれている箇所もある。また、杭同士の幅も一定ではなく、東辺から中辺にかけてはやや密に、南辺では比較的間隔を開いて打ち込まれている。杭は枝を落とし皮を剥いた幹を用いた丸木材で、採取したサンプルは中辺で約 2.5m、南辺で約 1.7m の長さを測る。杭の上位には長さ約 1m の横木を一定間隔で設置している。横木は杭の頂部に合釘で打ち付けられ固定している。また、杭頂部と接する下面には円形の凹みがみられた。横木は、東辺から中辺にかけてはやや密に、南辺では比較的間隔を開いて設置されており、南辺とその他で構築に差があることが見て取れる。横木の上には 2 条の胴木を設置している。胴木は長さ約 4m の材を用い、側面に加工痕は見られないが、胴木同士を連結するために木口を加工している。一方で、横木と胴木は加工して連結しておらず、太い犬釘を打ち込んで固定している。横木・胴木の間には拳大から人頭大の角礫・円礫を充填している。

胴木の上には、コンクリート製土台が設置される。土台は高さ約 40cm、幅約 70cm を測る。使用されるコンクリートはやや粗雑であり、砂利が大きいため、人力でも剥がれ落ちる部分がある。特に東辺から北辺では砂利の粒度と割合が大きく、外面が部分的に崩れている。一方、南辺は比較的粒度が小さく詰まっている印象である。

コンクリート製土台の上には、煉瓦製基礎が設けられている。煉瓦は、最大で 11 段積まれているが、煉瓦の積み方が一様でないため、段数や積み方を捉えることは難しい。東辺を一例とすると、11 段の煉瓦積みが確認できる。最下段から 3 段は幅約 60cm、次の 3 段は幅約 50cm、その上は幅 40cm を測り、裾に向かって広がるように積まれている。確認した最上段から 2 段は、黒化した煉瓦を用いている。この黒化煉瓦は、火災等の被熱により黒化したものではなく、煉瓦一個体の全面が黒色に仕上げられているもので、地上に露出した部分を装飾する目的で利用されたと考えられる。黒化煉瓦よりも下位の煉瓦は赤褐色の煉瓦である。煉瓦の積み方は、建物外側面（第 15 図 C-C'）から見て、上から小口→長手→長手→小口→長手→小口→長手→小口→小口→長手→小口の順で積まれており、変則的である。内側面（第 15 図 D-D'）を見るとさらに積み方の規則は崩れており、確認した最上段から 2 段目は長手面を水平に、小口を外面にして積まれている。また、長手面を打ち欠いて細長い形状とした煉瓦や平手面を打ち欠いて厚みを減じた煉瓦が多く利用されている。煉瓦の目地にはモルタルを使用しているが、目地の幅も一定ではなく、外側面の確認した最上段から 3 段目と 4 段目の間は、煉瓦をもう一段積めるほどの幅の目地となっている。他所に目を移すと、例えば中辺の内外の

側面（第 17 図 L-L’・M-M’）では、最下段で長手面を水平とした煉瓦積みがみられる。その他の箇所もモルタルの目地の幅や煉瓦の厚みを調整している箇所が多く見られた。コンクリート製土台の上面は一見して水平であるが、例えば中辺の中央よりも東端は約 10cm 下がっている。これは土台設置時の不備というよりも、軟弱な地盤のため、土台や煉瓦積みの重みで基礎全体が部分的に沈み込んでいったものと考えられる。このため、煉瓦の積み方の変化や煉瓦の加工、モルタル目地の調整は、建物基礎の最上面を水平とするために、他所と高さをすり合わせる目的で行われたものと考えられる。

また、煉瓦積みの中には、平手面に炭で文字を書いたものが見られた。確認した炭書きは「ロ」「ロ下」「ハ下」「ニ」「ニ下」「ヘ」「ヘ下」「ト」「と下」と不明の炭書きの 10 種である。文字は「いろは」に相当すると考えられ、グルーピングのために書き込まれたものであろう。また、東辺・中辺・西辺の各所に各文字は一定範囲に固まって確認されたものの、南辺には見られなかった（第 19 図上）。また、「ロ下」は「ロ」のすぐ下段から確認された一方、「下」と書かれた煉瓦の下段には特に炭書きは見られなかった。各文字は煉瓦の設置場所を示しており、煉瓦積み基礎を構築する際に間違いのないように記されたものと考えられる。先述のとおり、煉瓦積みは高さの調整のために様々な工夫をしており、調節の最終段階において利用する煉瓦を明確にするように炭書きを行ったものと考えられる。また、煉瓦には刻印も多数見られ、それらについては遺物の項で詳述する。

煉瓦基礎の各辺には、幅約 70cm にわたって上段から数段部の煉瓦が抉られている部分がある。東辺・南辺・西辺では抉られたままとなっているが、中辺では抉られた部分にモルタルを厚く塗って煉瓦を積み直している。煉瓦を積んでいるというよりも、モルタルで煉瓦片を固めて充填していると言った方が適切な表現かもしれない。おそらく配管等を通すため抉られたものと考えられ、中辺は必要がなくなったために埋められたと考えられるが、詳細は不明である。

さて、東辺には、南端から約 2.7m にわたって、煉瓦の積み方が著しく変化している箇所がある。土台及び煉瓦積みに継目が生じている部分があり、煉瓦を打ち欠いて幅を調整しながら噛み合わせて基礎を継いでいる。煉瓦が裾に向かって広がるように構築されていることは変わらないが、裾の最も広がった部分の段数が３段から２段へ減じ、積み方も２段とも外側面に小口が出ている積み方である。その上段も小口と長手が混在するような積み方であり、変則的である。また、南辺の目地もモルタルであるが、厚く塗られており、非常に強く固着している。一方で、確認した最上段の黒化煉瓦は東辺と同様に積まれており、東辺から引き続いて積んでいるようである。先述のとおり、南辺と中辺以北には、杭や横木、コンクリート製土台においても構造の差があり、同時に作られたものとは考えにくい。府立第一高等女学校校舎配置図（第 8 図）と比較すると、35 号遺構は講堂に比定される。出土した遺構と重ね合わせると、当初の講堂は中辺までの規模であったと考えられる。いずれかの時期に南側へ約 1 間半にわたって増築したようである。なお、当初建築部分と増築部分には、煉瓦積みに用いられた煉瓦の種類や構成にも違いが見られるが、それらについては遺物の項で詳述する。

講堂の建物基礎には、東辺・南辺・西辺に張出部が設けられている。東張出し部は東辺から南北 4m、東西 1.2m が張出しており、他の基礎と同様に杭→横木・胴木→土台→煉瓦積みの順で構築されている。張出し部の中部には炭化材の多く混じる層が埋め戻されていた。東張出し部は、講堂内部の写真（第 9 図 4）の演壇にあたる箇所と考えられる。

西張出し部は、南北 2.2m、東西 1m を測る。拳大から人頭大の角礫を敷き詰め、その中に崩れた

煉瓦が混じる。煉瓦については、35 号遺構が崩された際に混入したものと推測される。南西張出し部は南北 0.6m、東西 2.2m を測る。南辺に沿う 37 号遺構の上位にある。拳大から人頭大の角礫を敷き詰め、東西の端部はコンクリートで固められている。また、中辺の南側にも砂利と人頭大の角礫が敷き詰められた箇所があり、同様の張出し部であった可能性がある。府立第一高等女学校の写真（第 9 図 2）を見ると、講堂の南側から校庭に出るための扉が見られる。写真では東西に 2 か所の扉が見られるため、これは中辺の張出し部に相当するものと推測される。南西張出し部や西張出し部も同様の出入口施設であったと考えられる。

第 9 図から、府立第一高等女学校の校舎は木造で、建物基礎のみを煉瓦積みで構築している。講堂を含む木造校舎は明治 35（1902）年に完成し、大正 12（1923）年の関東大震災に伴う火災によって全体が焼失したと記録が残る。東張出部に詰まっていた炭化物はこの際に投棄された可能性がある。一方で、地震による被害はあまりなかったと記録され、建物基礎に地震の痕跡は見られなかった。

35 号遺構と同様の遺構に、墨田区横綱一丁目遺跡（第二地点）の 01 号遺構がある [(1)]。01 号遺構は陸軍被服工廠の基礎とされ、下位から根切り溝・土留板→杭→枕木・胴木→モルタル？→レンガ積み（原文ママ）の順で構築している。01 号遺構の上位には煉瓦製建物があったとされ、35 号遺構よりもさらに重量のかかる建物基礎であったと考えられる。同様の工法を採用した 35 号遺構も強固な建物基礎となることを目指して構築されたと考えられる。

52 号遺構（第 21 図、第 4 表、図版 9）　Ⅲ区西寄りで検出された。35・56 号遺構と同様の建物基礎で、北側、南側はともに調査範囲外へ続いている。52 号遺構の西側は撹乱を受けており、35 号遺構よりも残存状況が悪い。南北の建物基礎は煉瓦積み部分まで検出されたが、東西の桟にあたる建物基礎は胴木以下の木材、杭のみ検出している。

52 号遺構の構造は、基本的には 35 号遺構と同様であるが、細部で異なっている。第 3 層に掘り込んだ掘方に 2 列の杭を打ち込み、その上に横木を設置している。横木は杭を繋ぐように設置されているが、部分的に斜行して設置されており、一部では X 字状に設置されている。これが基礎の強度などにどのように影響しているのか不明である。横木の上に 2 条の胴木を設置しており、胴木、横木の間は円礫や砂利で充填している。胴木の上にはコンクリート製土台を設けている。土台に使われているコンクリートは砂利の粒度が粗く、ボロボロと崩れる部分がある。土台の上位には煉瓦積みの建物基礎が設けられている。煉瓦は確認できた範囲で最大 11 段確認されたが、撹乱を受けており、11 段の煉瓦積みを確認できた箇所は少ない。煉瓦は全て赤褐色の煉瓦を積んでおり、上から 5 段は、建物内側面から見て、上から小口→小口→長手→小口→長手の順で積まれている。その下の 3 段は少し幅を広げて煉瓦を積んでおり、上から小口→長手→小口の順で積んでいる。最終の 3 段はさらに幅を広げて積んでおり、上から小口→長手→小口の順で積んでいる。

52 号遺構で最も特徴的なものは、北側で見られたアーチ状の煉瓦積みである。最下段から下から 8 段目までの高さで、小口を表に、長手面を下面として 2 段のアーチ状に組まれている。アーチの上部、下部は上記の規則に従って積まれており、アーチに接する部分は煉瓦を打ち欠いてサイズを調整したうえで積んでいる。このアーチ部分が露出していたことは考えにくいため装飾とも考えにくく、また地下室等の施設があったことも確認できなかった。積み方にアーチを採用した理由は不明である。

府立第一高等女学校校舎配置図（第 8 図）と比較すると、52 号遺構は西側の校舎に比定される。

西側の校舎は関東大震災以前に建替わっているため、明治 35（1902）年から大正 11（1922）年頃まで利用された校舎であると考えられる。

56 号遺構（第 22 図、第 4・5 表、図版 9） Ⅲ区中央で検出された。35・52 号遺構と同様の建物基礎で、平面形状は方形である。56 号遺構の西側には 63 号遺構が掘り込まれており、52 号遺構との接合部の様子は不明である。

56 号遺構の構造は、基本的に 35・52 号遺構と同様であるが、より整然としている印象を受ける。第 2・3 層を掘り込んだ掘方に 2 列の杭を打ち込み、その上に横木を設置している。その横木の上に 2 条の胴木を設置し、横木と胴木の間に拳大から人頭大の礫を充填している。胴木の上にはコンクリート製土台を設けている。土台には砂利の多いコンクリートが使われているが、35・52 号遺構と比べてより緻密なコンクリートが使用されている。土台の上には煉瓦積みの建物基礎が設けられている。煉瓦は確認できた範囲で 12 段あり、下段にむけて裾の広がった構造をしている。煉瓦は上から 2 段は黒化した煉瓦を利用し、その下の 4 段は赤褐色の煉瓦を黒化した煉瓦と同じ幅で積んでいる。その下の 3 段は少し幅を広げて赤褐色の煉瓦を積んでおり、最終の 3 段はさらに幅を広げて赤褐色の煉瓦を積んでいる。それぞれの組み合わせは基本的にイギリス積みで積まれており、最上の 6 段は、建物外側面から見て、上から長手→小口→長手→小口→長手→小口の順に積み、次の 3 段も小口→長手→小口の順に積み、最下の 3 段は上から小口→長手→小口の順に積んでいる。つまり、幅が広がる前と後で小口を表とする積み方が連続している。また、56 号遺構北辺の中央には最上位から 4 段分の煉瓦が抉り取られ、そこにコンクリートを詰めている箇所がある。35 号遺構中辺や南辺でも、煉瓦が崩された箇所がモルタルと煉瓦片で固められており、それと同様のものかもしれない。

建物基礎の内部には浅い土坑が 25 基検出された。56 号遺構 -3 は土坑の際に礫が並べられており、56 号遺構 -18 には根固めと考えられる煉瓦片が敷き詰められているが、その他の土坑には設置されたものはない。これらの遺構は 56 号遺構の床を支えるためのツカなどを設置するためのものであったと推定される。

56 号遺構は校舎配置図には描かれていないため、当初から建てられた校舎ではないと考えられる。府立第一高等女学校の明治 43 年頃の写真（第 9 図 3）には西校舎手前に増築された方形の建物が見え、56 号遺構と考えられる。生徒数の増加に対応して増築したものと考えられる。関東大震災後の写真（第 9 図 5）には増築部がないため、56 号遺構は 52 号遺構の建替えの際に壊されたものと考えられる。

【校舎に付属する施設】

39 号遺構（第 24 図、第 6 表、図版 9） 35 号遺構西張出し部の西側から検出した。53・59 号遺構の上位にあり、40 号遺構に壊される。南北 2 条のコンクリート製縁石列の間にコンクリート製三和土が設置された遺構である。縁石は北側の遺存状態が良く、南側は縁石の一部と、縁石の痕跡を検出した。縁石は、方形の縁石の間に、長辺の長い長方形の縁石を 4 つ並べる規則的な配置をしている。南北の縁石の延長線は、西張出し部の北辺と南辺とちょうど合うようである。三和土は、縁石の間に下層に細かい砂利を敷き詰め、その上に縁石と同じ高さまでコンクリート製三和土を設けている。三和土の上面は平滑に作られている。

府立第一高等女学校校舎配置図（第 8 図）を見ると、講堂と西の校舎棟を繋ぐ通路とみられる線が引かれており、明治 43 年頃の写真（第 9 図 2）には講堂と西の校舎棟を繋ぐ渡り廊下がみられる。

39 号遺構の縁石と三和土は講堂と校舎棟を結ぶ渡り廊下であろう。35 号遺構西張出し部は講堂からの出口部分であると考えられる。一方で、校舎棟側の出入口にあたる位置には 57・63 号遺構が設置されており、痕跡はない。40・57・63 号遺構を設置した際に、撤去されたものと考えられる。

■導水施設

先述のとおり、鉄管列・土管列とコンクリート製・煉瓦製・木製の枡の組み合わせから、10 の系統に分類し、系統に属さないとみられるものはその他の煉瓦製枡・木製枡として報告した。

導水系統は、遺構の切り合い関係から、時代の新しい順に番号を附している。土管系統 1・2 は、関東大震災以降に建設された昭和校舎に伴うものであると推定され、土管系統 2・3 は明治期の校舎を壊して設置したものと考えられる。一方、土管系統 5・6 は 35 号遺構に、土管系統 7 は 56 号遺構にそれぞれ伴うものと考えられる。土管系統 8 は 56 号遺構に、土管系統 9 は 35 号遺構の南辺にそれぞれ壊されていることから、明治期の校舎の増築以前に機能していた導水施設と考えらる。

【鉄管系統 1】

鉄管系統 1 には、鉄管列である 19 号遺構と、接続する 15・18 号遺構が属す。18・19 号遺構は 7 号遺構に切られるため、鉄管系統 1 は土管系統 1 より古いものである。しかし、金属製の消火栓を伴うものであることから、昭和校舎に伴って利用されたものと推測される。

19 号遺構（第 23 図、第 7 表） 15・18 号遺構を接続する鉄管である。径は 8cm と他の土管と比べると細く、出土した状態では錆ており、劣化が進んでいた。15 号遺構内部の消火栓と接続しており、防火設備として設置されたものと考えられる。

15 号遺構（第 23 図、第 8 表、図版 9） 煉瓦製枡である。また、15 号遺構は上下で構造が異なっている。上部は小口積みとした煉瓦をコンクリートで強く固着しており、コンクリートが煉瓦製枡の周囲にも固着している。下部はモルタル目地であり、煉瓦は小口積みを基礎としている。上部は下部の煉瓦製枡を再利用するために設けたものと考えられる。また、下部の煉瓦製枡内部には消火栓とみられる金属製品があり（図版 9）、この消火栓と 18 号遺構が接続していた。

18 号遺構（第 23 図、第 8 表） コンクリート製枡である。7・10 号遺構に切られており、東側の一辺のみ検出した。この一辺は 60cm を測る。同じ鉄管系統 1 の 15 号遺構が一辺 1m の規模であったことを考えると、この遺構も同様の規模であった可能性も考えられる。

【土管系統 1】

土管系統 1 には土管列である 7 号遺構のみが属す。土管系統 1 は鉄管系統 1 や土管系統 4 を切って通されており、導水系統としては新しいものと考えられる。土管系統 2 は調査範囲の東側を南北に縦断する系統である。明治期の校舎の中には敷地東側に南北に建つものはないが、昭和校舎は南側が開いた「コ」の字状の校舎であり、土管系統 1 は昭和校舎の東翼に沿う導水施設と考えられる。

７号遺構（第 23 図、第 7 表、図版 10） 土管列である。Ⅰ区の西寄りで検出した。調査範囲を南北に縦断しており、北側、南側ともに調査範囲外へ続いている。7 号遺構の上位には 11 号遺構があり、10 号遺構に一部を切られている。遺構の北側がやや高く、南側に向かって緩やかに傾斜しており、継手も北を向いて設置されているため、北から南に向かって水を流したものと考えられる。土管列は土圧のためかやや崩れた状態で出土した。土管の直径 38cm は第 2 次調査で出土した土管列の中で最も太い。出土したその他の土管列のうち径 30cm を超える 40・63 号遺構は、切り合い関係から明治

期の校舎よりも新しいものと考えられる。先述のとおり、7 号遺構は昭和校舎に伴う導水施設と考えられ、第 2 次調査で検出した土管列は新しいものほど太い傾向にあるといえる。

【土管系統 2】

土管系統 2 には、土管列である 63 号遺構と接続する 58 号遺構が属す。土管系統 2 は、土管系統 3・7 を切って通されている。土管系統 2 は 52 号遺構に沿うように南北に敷設されるものの、52・56 号遺構を壊しているため、明治期の校舎を利用しなくなった後に敷設されたと考えられる。土管系統 2 は昭和校舎の西翼に伴うものと考えられる。

63 号遺構（第 21 図、第 7 表、図版 11） 土管列である。Ⅲ区の中央付近で検出した。調査範囲を南北に縦断しており、北側、南側ともに調査範囲外へ続いている。土管の継手は北を向いており、北から南へ水が流れていたと推定される。63 号遺構は 56・57 号遺構を壊して設置される。先述のとおり、本遺構は昭和校舎に伴うものと考えられ、遺構の年代は新しいものと推定される。

58 号遺構（第 21 図、第 8 表） 煉瓦製枡である。52 号遺構の一部を壊して設置され、63 号遺構に接続する。モルタル目地で、煉瓦は長手積みである。他の煉瓦製枡が概ね一片 1m 程度であるのに対し、58 号遺構は一辺 72cm とやや小型である。同様に小型の煉瓦製枡は土管系統 1 を壊す 10 号遺構であり、時代の新しい煉瓦製枡はやや小型となる可能性がある。

【土管系統 3】

土管系統 3 には、土管列である 40 号遺構と、14・36・57 号遺構が属す。14・36・57 号遺構はそれぞれ 40 号遺構と接続しないものの、各煉瓦製枡に土管の接続痕跡があり、全てが 40 号遺構の延長線上にあることから接続するものと想定した。土管系統 3 は、39 号遺構を壊して設置されており、明治期の校舎を利用しなくなった後に敷設されたと考えられる。しかし、57 号遺構は土管系統 2 に壊されており、土管系統 2 を敷設するとともに使われなくなったと考えられる。

40 号遺構（第 24 図、第 7 表、図版 9） 土管列である。39 号遺構を壊して設置されている。撹乱を受けており、検出状態は悪い。土管列はほぼ東西方向に設置されている。継手は西を向いているため、西から東へ水を流していたと考えられる。また、40 号遺構の延長線上にあたる 35 号遺構西辺の一部には、煉瓦が除去されてくぼんでいる箇所があり、40 号遺構を通していた可能性がある。

14 号遺構（第 24 図、第 8 表、図版 11） 煉瓦製枡の上に、コンクリート製の角枠で鉄格子上の蓋を固定している遺構である。Ⅱ区北側にあり、35 号遺構東側にある。煉瓦製枡はモルタル目地で、小口積みである。西辺の残存部最上段には土管が設置された箇所があり、14 号遺構から 36 号遺構方向へ土管が接続していたものと考えられる。また、元々の煉瓦製枡はさらに上段まであったものと考えられ、蓋は煉瓦製枡の再利用のために設置されたものと考えられる。

36 号遺構（第 24 図、第 8 表、図版 11） 煉瓦製枡である。35 号遺構の内側で検出した。東辺を欠いている。煉瓦製枡は、西辺や北辺の一部では小口積みであるが、北西角や南辺では、長手を水平にし、小口を外側に向けて煉瓦を積んでおり、積み方が一様ではない。目地は全体的にモルタルである。北辺の残存部最上段に土管の接続口があるが、延長線上は調査範囲外にあたる。また、元々の煉瓦製枡はさらに上段まであったものと考えられる。

57 号遺構（第 24 図、第 8 表） 煉瓦製枡である。西辺は 63 号遺構により壊されている。煉瓦は小口積みであり、目地はモルタルである。東辺に土管の接続口があり、40 号遺構と接続していたと考

えられるが、接続口の径 21cm と、40 号遺構の径 32cm とは合わない。40 号遺構との間に接続部が設けられていたか、あるいは 40 号遺構と接続しない可能性もある。

【土管系統 4】

土管系統 4 には、土管列である 13 号遺構と、接続する 8・34・46 号遺構が属す。土管系統 1 に切られ、土管系統 9 を切る。Ⅰ区からⅡ区にかけて東西に延びる。8 号遺構以東にも延びていた可能性があるが、撹乱され消失している。また、土管系統 4 の西側の延長線上には土管系統 8 があるが、接続していた様子は見られない。

13 号遺構（第 25 図、第 7 表、図版 10） 土管列である。Ⅰ区中央からⅡ区南側にかけて、8・34・46 号遺構と接続しながら東西に延びている。土管列は、土圧や撹乱の影響で多くは崩れた状態で出土したが、一部良好に出土したものがあった。土管の直径は 25cm であり、土管系統 1・2・3 と比べて一回り細身の土管が使用されている。また、8・34 号遺構間よりも、34・46 号遺構間の方がやや細身の土管が使用されている。継手は 8・34 号遺構間では東を向いており、34・46 号遺構間では西を向いている。つまり、8・46 号遺構から 34 号遺構に向けて水が流れていたと推定される。34 号遺構に集まった水をどのようにしていたかは不明である。

また、出土した土管の中には「¬○神谷」という刻印のある土管があった。常滑市民俗資料館のまとめた全国の土管工場の一覧 (2) によると、「神谷」という名前は、知多郡小鈴谷村の「神谷出張所小鈴谷工場」（工場主：神谷太一郎）のみに確認できる。この工場の操業が明治 44（1911）年であることから、13 号遺構は明治 44 年以降に構築された遺構と推定される。

8 号遺構（第 25 図、第 8 表） 煉瓦製枡である。Ⅰ区中央西寄りで検出された。7 号遺構に壊され、西辺が失われてる。一辺は約 1.2m あり、他の煉瓦製枡よりも一回り大きい。煉瓦は小口積みであり、目地はモルタルである。東辺の北寄りに土管の接続部があり、さらに東へ土管が延びていた可能性がある。

34 号遺構（第 25 図、第 8 表、図版 10） 煉瓦製枡である。Ⅱ区南側で検出された。一辺は約 1.2m あり、8 号遺構と同様の規模で、他の煉瓦製枡よりも一回り大きい。煉瓦は小口積みであり、目地はモルタルである。13 号遺構が東西に接続する。先述のとおり、13 号遺構の継手の向きから、34 号遺構に水を集めていたと推定される。西側の接続口は残存部最上段にあり、元々の煉瓦製枡はさらに上段まであったものと考えられる。

46 号遺構（第 25 図、第 8 表、図版 10） 煉瓦製枡である。Ⅱ区南側で検出された。一辺は 1m に及ばず、8・34 号遺構と比べると一回り小さい。煉瓦は小口積みであり、目地はモルタルである。東側に 13 号遺構が接続する。東側の接続口は残存部最上段にあり、元々の煉瓦製枡はさらに上段まであったものと考えられる。

【土管系統 5】

土管系統 5 には 41 号遺構のみが属す。35 号遺構の南辺にあり、開口部が上向きに開くことから、35 号遺構の上屋の雨樋等から水を流した導水施設と考えられる。土管系統 6 の上位にあるが、直接的に壊してはいない。そのため、土管系統 6 と併存していた可能性がある。

41 号遺構（第 26 図、第 7 表、図版 12） 土管列である。垂直方向上向きに開口し、90 度折れて南西方向へ延びている。南西側は土管の痕跡を検出したものの、撹乱のため土管の出土はなかった。

【土管系統 6】

土管系統 6 には、土管列である 37 号遺構と、接続する 37 号遺構の木製枡、44 号遺構が属する。35 号遺構の南辺に沿うように東西に延びている。西側は、35 号遺構より西側では検出されず、東側も 35 号遺構から離れると消失している。先述のとおり、土管系統 6 は土管系統 5 の下位にあるが、切り合い関係はない。また、土管系統 6 の下位に土管系統 9 がある。

37 号遺構（第 26 図、第 7・9 表、図版 11） 土管列と接続する木製枡を組み合わせた遺構である。35 号遺構の南辺に沿うように検出された。土管列の遺存状態は悪く、東側、西側は 35 号遺構から離れると、撹乱され消失している。西側延長部分には一部煉瓦で土管列を支えているような箇所も見られた。土管列の遺存状態の良かった部分では、継手は西を向いており、西から東へ水が流れていたと推定される。しかし、37 号遺構の東側の延長線上には接続する枡や土管がみられず、どのような導水の構造であったかは不明である。

37 号遺構の木製枡は、2 基検出した。東を 37 号遺構木製枡 a、西を 37 号遺構木製枡 b としている。木製枡は、浅く掘り込んだ方形の土坑に、平手面を水平にして煉瓦を並べて底面としている。底面の煉瓦の並べ方は一様ではなく、敷き詰めることを目的としているようである。使用された煉瓦は、完形のものもあれば、欠けたものや打ち割られたものも利用されている。煉瓦製底面の上に木枠を設けて枡としている。木枠の一片は約 30cm であり、高さは約 10cm である。木製枡 a は木枠が全周するが、木製枡 b では西辺が失われ、南辺、東辺も一部のみ遺存している。また、木製枡 a の覆土からはズック靴のような靴底が出土している。37 号遺構と 44 号遺構の木製枡は 35 号遺構の軒下と考えられる位置に設置されており、雨水等を集めるための施設であったと推測される。

44 号遺構（第 26 図、第 9 表、図版 11） 木製枡である。37 号遺構の木製枡と同様に、掘方に煉瓦を並べて底面とし、木枠を設置した構造である。木枠の一片は 32cm で、37 号遺構の木製枡と同様の規模である。

【土管系統 7】

土管系統 7 には 60 号遺構のみが属す。土管系統 7 は 56 号遺構の北辺に沿うようにあり、土管系統 2 に壊されている。また、東側も撹乱等により消失しているため不明である。

60 号遺構（第 22 図、第 7 表、図版 12） 土管列である。56 号遺構北辺に沿って東西方向に検出された。西は 63 号遺構に切られ、東側は撹乱により消失している。土管は土圧や撹乱により、遺存状態が悪い。土管の継手は西を向いており、西から東に水が流れていたと推定される。仮に東側へ直線的に延伸すると 35 号遺構に突き当たるため、どこかで南北に折れていたと推測されるが、不明である。

【土管系統 8】

土管系統 8 には土管列である 65・67 号遺構と、62 号遺構が属す。土管系統 8 はⅢ区南側にあり、北西、西、南西、南、南東の 5 方向へ土管の接続がみられる。土管系統 8 は 56 号遺構に切られており、明治期の校舎の増築の際に壊されたものと考えられる。

65 号遺構（第 24 図、第 7 表） 土管列である。Ⅲ区南側で検出された。62 号遺構から西へ、緩く北寄りに曲がりながら延びる痕跡が検出された。土管列は撹乱を受け、遺存状態が悪い。土管の継手方向は不明だが、67 号遺構を見ると、西から東へ、62 号遺構方向に水が流れていたと推測される。

67 号遺構（第 24 図、第 7 表、図版 10） 土管列である。Ⅲ区南側から中央にかけて検出された。

62 号遺構の北西方向に延びる土管列で、56 号遺構の内部にも痕跡が見つかった。56 号遺構の建設の際に壊されたと考えられる。土管列は撹乱を受け遺存状態が悪いが、62 号遺構付近では継手が北西を向いており、北西から南東に向けて水が流れていたと推測される。

62 号遺構（第 24 図、第 8 表、図版 10）　煉瓦製枡である。Ⅲ区南側で検出された。一辺は 1.1 ～ 1.2m であり、8・34 号遺構と同様の規模である。煉瓦は小口積みであり、目地はモルタルである。土管の接続口が、西側に 3 基、南側に 1 基、東側に 1 基ある。西側・南側の接続口は残存部最上段にあり、元々の煉瓦製枡はさらに上段まであったものと考えられる。また、接続口に残存する土管から、西側・南側の接続口は全て 62 号遺構へ流し込むためのものであったと考えられる。東側の接続口は他の接続口よりも下段にある。さらに継手を西にして接続しており、62 号遺構から流れ出るための土管であったと推測される。

【土管系統 9】

土管系統 9 には 38 号遺構のみが属す。35 号遺構と土管系統 4 に切られ、土管系統 6 の下位にある。

38 号遺構（第 26 図、第 7 表、図版 12）　土管列である。Ⅱ区南側で検出された。35 号遺構南辺から延び、調査範囲外まで続いている。37 号遺構の下位にあり、13・35 号遺構に切られる。土管列は継手を北にして並べられており、北から南へ水が流れていたようである。土管列の北端は 35 号遺構南辺によって切られているが、35 号遺構南辺が増築部であることから、当初の南辺であった 35 号遺構中辺に伴う土管であった可能性も考えられる。

【その他の煉瓦製枡・木製枡】

上記の土管系統に属さない、独立した煉瓦製・木製枡を検出した。各遺構の形状は、土管系統に属する煉瓦製・木製枡とよく似ており、本来は土管等を伴う遺構であったと考えられる。

10 号遺構（第 23 図、第 8 表、図版 11）　煉瓦製枡である。Ⅰ区中央西寄りにあり、7・18 号遺構を壊している。煉瓦製枡は一辺 60 ～ 70cm であり、検出された煉瓦製枡のなかでは 58 号遺構と並んで比較的小型である。煉瓦は長手積みであり、東辺は 2 列の長手積みが確認された。また、上段は煉瓦の積直しが行われている。接続する土管列は確認されなかった。

20 号遺構（第 13 図、第 8 表）　煉瓦製枡である。Ⅰ区中央北寄りで検出された。撹乱を受けており、一部残存するのみである。煉瓦の積み方は不明で、モルタル目地である。接続する土管等は確認されなかった。

30 号遺構（第 24 図、第 8 表、図版 12）　煉瓦製枡とそれを壊して設置されたコンクリート製礎石である。Ⅱ区中央東側で検出された。コンクリート製礎石は一辺約 60cm で、側面は平らに仕上げられているものの、上面は波打っている。中央に方形のくぼみがあることから、柱等が乗っていた礎石であると考えられる。煉瓦製枡は一辺 1m を測り、小口積みでモルタル目地である。接続する土管等は確認されなかった。

42 号遺構（第 28 図、第 9 表、図版 13）　木製枡である。Ⅲ区北側の 35 号遺構内部で検出された。37・44 号遺構の木製枡と同様に、掘方に煉瓦を並べて底面とし、木枠を設置した構造である。底面の煉瓦は木枠の設置範囲を超えて並べられている。また、木枠の一辺は 45cm で、同様の構造を持つ他の木製枡よりも一回り大型である。接続する土管等は確認されなかった。

50 号遺構（第 28 図、第 9 表、図版 13）　木製枡である。Ⅲ区北側で検出された。37・44 号遺構の

木製枡と同様に、掘方に煉瓦を並べて底面とし、木枠を設置した構造である。木枠は北辺のみ検出した。一辺 38cm で、37・44 号遺構よりもやや大きく、42 号遺構よりもやや小型である。接続する土管等は確認されなかった。

■土坑

【建物基礎】

59 号遺構（第 27 図、第 10 表、図版 12） Ⅲ区北側にあり、39 号遺構を取り除いた第 3 層上面で検出した。方形の土坑の中に、方形のコンクリート製礎石が設置されていた。59 号遺構 -1 から 4 は、同様の規模の方形土坑が東西に並んでいる。59 号遺構 -1 を掘削したところ、内部に方形のコンクリート製礎石を検出した。礎石の一辺は約 60cm である。59 号遺構 -5 は東西方向を長辺とする長方形の土坑で、59 号遺構 -1 と同様のコンクリート製礎石を 2 基検出した。59 号遺構 -5 と並ぶ土坑はなかったが、同一の遺構と考えられる。39 号遺構の下位にあることから、明治期の校舎の建設以前の建物の基礎と考えられる。

53 号遺構（第 27 図、第 10 表、図版 12） Ⅲ区北側にあり、39 号遺構の縁石列の下位にある。十字形の土坑を東西 2 列、南北に 4 列の計 8 基検出した。南端にあたる 53 号遺構 -8 は 56 号遺構の掘方により切られている。53 号遺構 -1 を掘削したところ、用途不明の金属製品が出土したものの、礎石等はみられなかった。39 号遺構の下位にあることから、明治期の校舎の建設以前の建物の基礎と考えられる

【その他の土坑】

43 号遺構（第 28 図、第 10 表、図版 13） Ⅲ区北側で検出された。東西方向を長軸とする長方形の浅い土坑である。43・49・54・55 号遺構は東西に並んで検出されたが、形状がそれぞれ異なっており、別の用途で設けられたものと考えられる。

49 号遺構（第 28 図、第 10 表、図版 13） Ⅲ区北側で検出された。やや南北方向に長い方形の土坑で、底面に方形の掘り込みを持つ。掘り込みは底面からさらに約 30cm 掘り込まれており、柱穴と考えられる。39 号遺構が渡り廊下であり、明治 43 年頃の写真（第 9 図右上）から渡り廊下に屋根がかかっていることがわかる。49 号遺構は渡り廊下の屋根の支柱の柱痕の可能性がある。

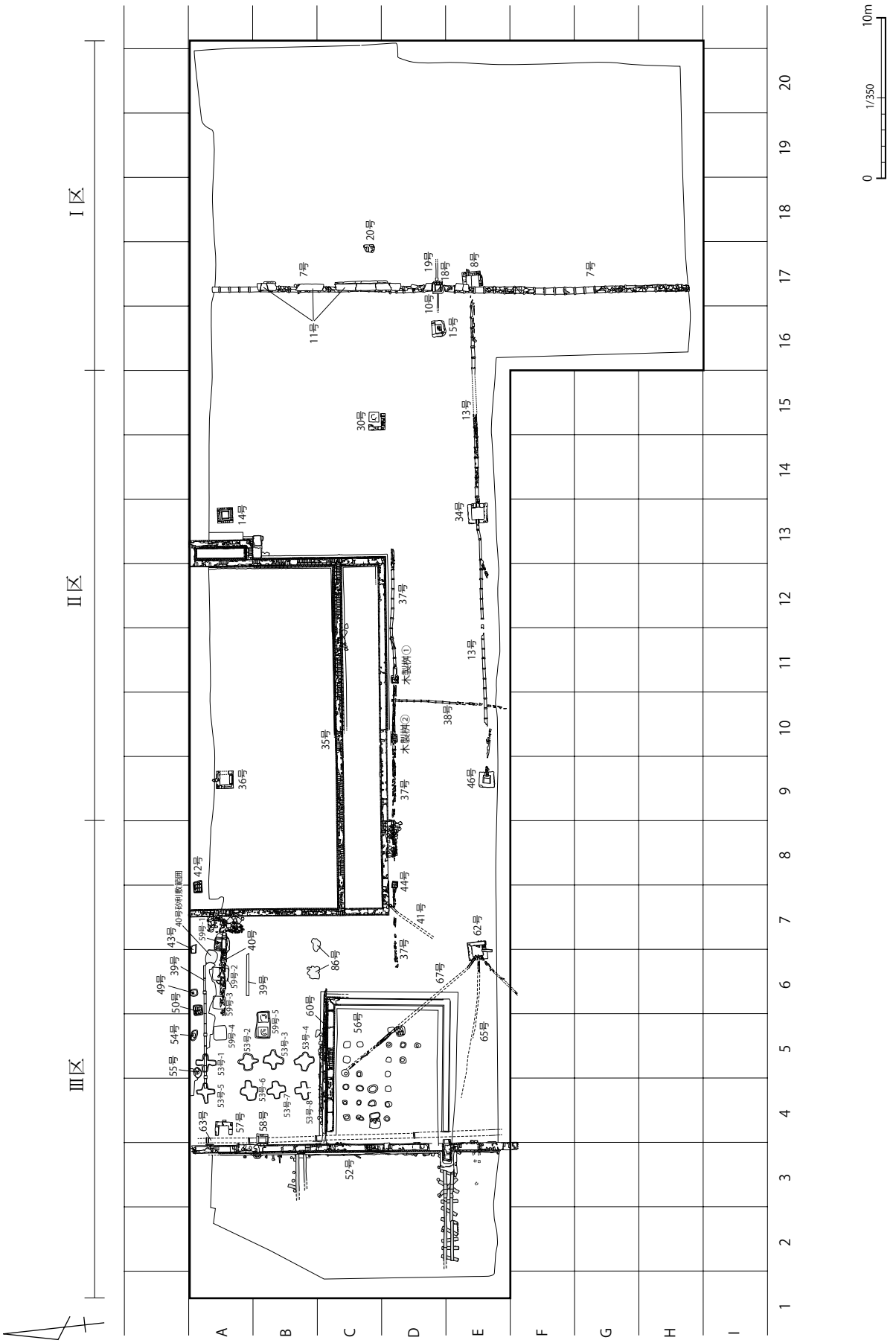
54 号遺構（第 28 図、第 10 表、図版 13） Ⅲ区北側で検出された。東西方向を長軸とする楕円形の土坑で、底面に不定形の掘り込みを持つ。掘り込みは底面からさらに約 15cm 掘り込まれている。49 号遺構と同様の柱穴と考えられ、渡り廊下の屋根の支柱の柱痕の可能性がある。

55 号遺構（第 28 図、第 10 表、図版 13） Ⅲ区北側で検出された。東西方向を長軸とする楕円形の土坑で、底面に人頭大の礫が 2 点置かれている。

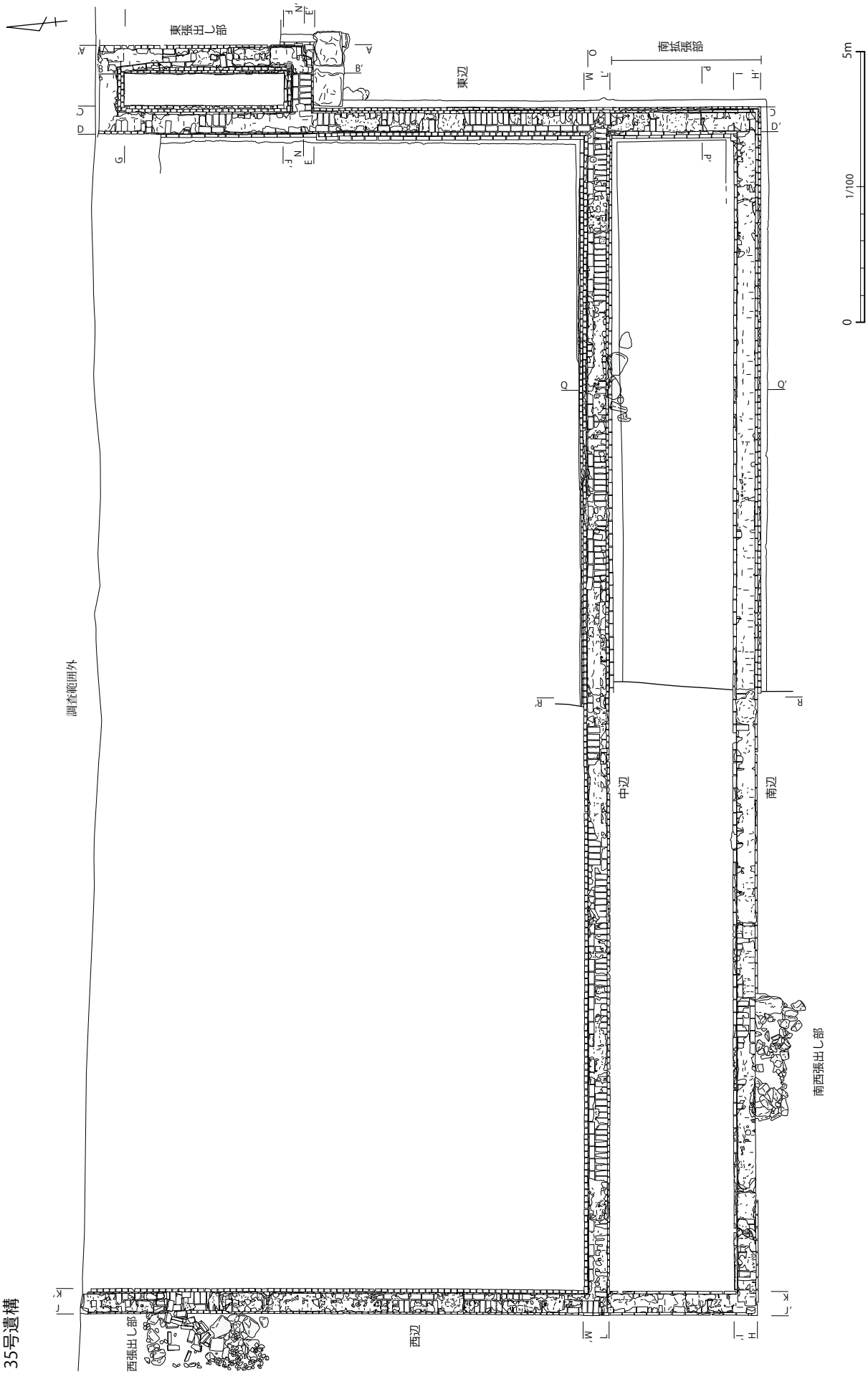
■その他の遺構

11 号遺構（第 27 図、第 6 表、図版 12） Ⅰ区西寄りに南北に検出されたコンクリート縁石列である。幅約 70cm を測る板状のコンクリートを南北に並べている。コンクリートの東側面には高さ約 20cm の縁石が並べられているが、西側面にはない。7 号遺構の上位にあり、土層確認からは 7 号遺構の掘方に蓋をするように設置されているように見えるが、7 号遺構全体に伴うものではない。

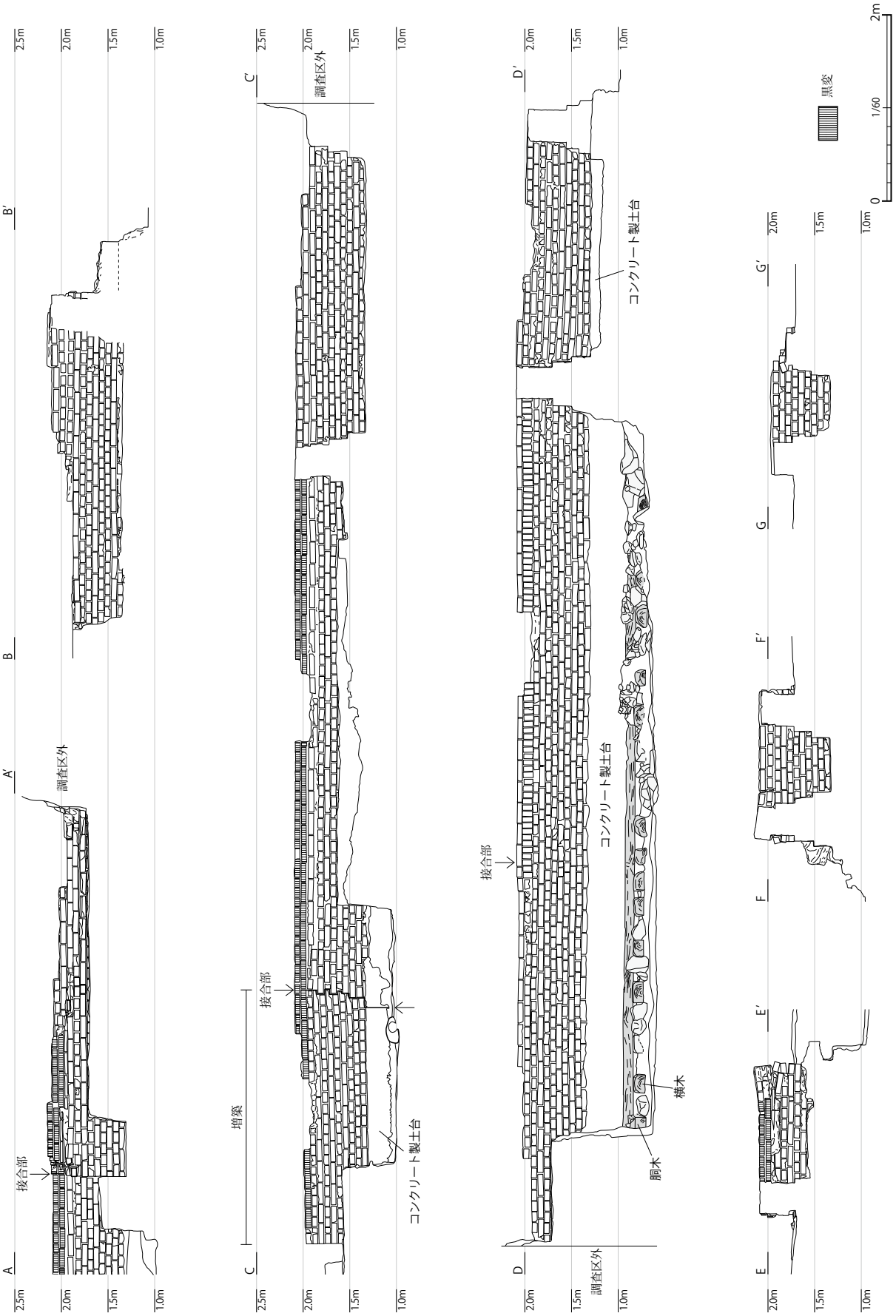
86 号遺構（第 13 図、第 11 表） Ⅲ区中央東寄りで検出された礎石列ある。根固めと考えられる角礫の集積である。東西 2 か所で検出した。35・56 号遺構の中間にあるが、関連は不明である。



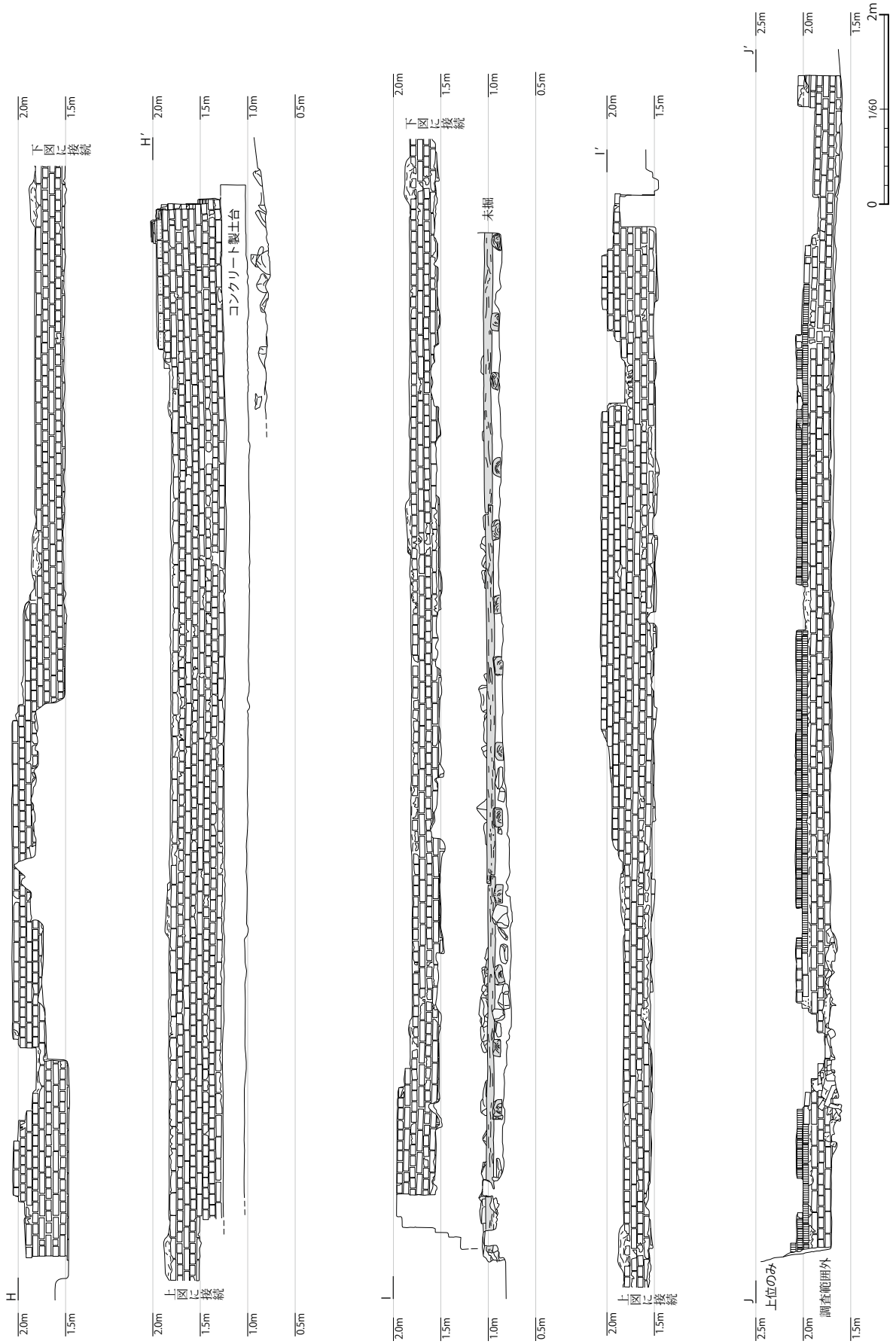
第 13 図　Ⅱ面遺構全体図（1/350）



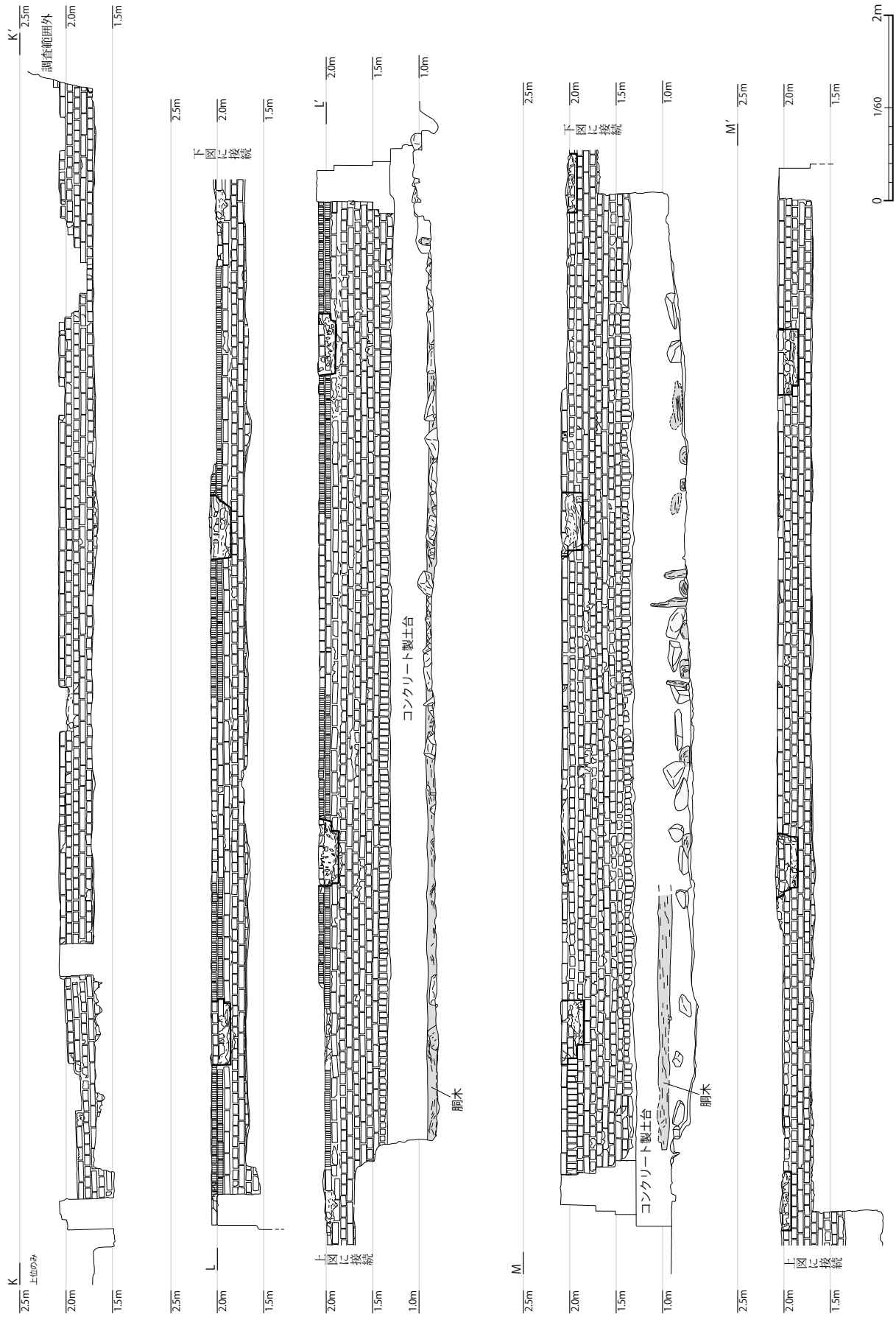
第 14 図　35 号遺構（1）（1/100）



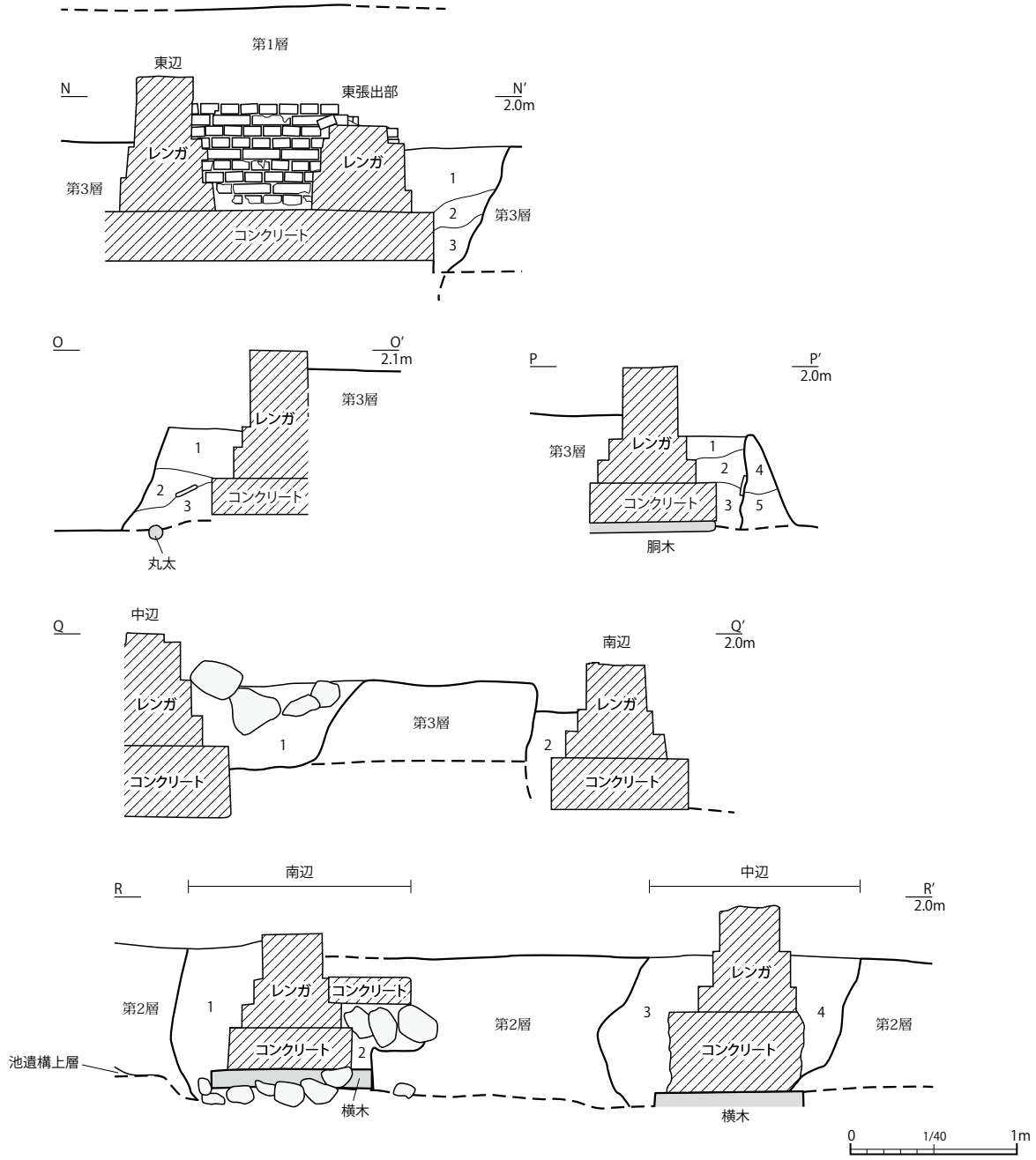
第 15 図　35 号遺構（2）（1/60）



第 16 図　35 号遺構（3）（1/60）



第 17 図　35 号遺構（4）（1/60）



35号遺構

N-N′

1　7.5Y3/1　オリーブ黒色　締り強　粘性やや強。φ3～5cm小礫・遺物を含む。ブロック。粘土層。
2　7.5Y3/1　オリーブ黒色　締り強　粘性やや強。やや粘土っぽい。1と同様だが1と2の間に明らかに面がある。粘土層。
3　7.5Y3/1　オリーブ黒色　締り強　粘性やや強。1・2層と同様だが小礫がやや少ない。粘土層。

O-O′・P-P′

1　7.5Y3/1　オリーブ黒色　締り弱　粘性やや弱。貝殻片含む。ボソボソ。やや材木質。
2　7.5YR3/2　黒褐色　締り強　粘性やや強。下半はより褐色っぽい。角礫・レンガ・砂利・砂等混。
3　7.5YR3/2　黒褐色　締り強　粘性やや弱。ロームブロックをたたきしめている。瓦・砂利・礫・レンガ混。

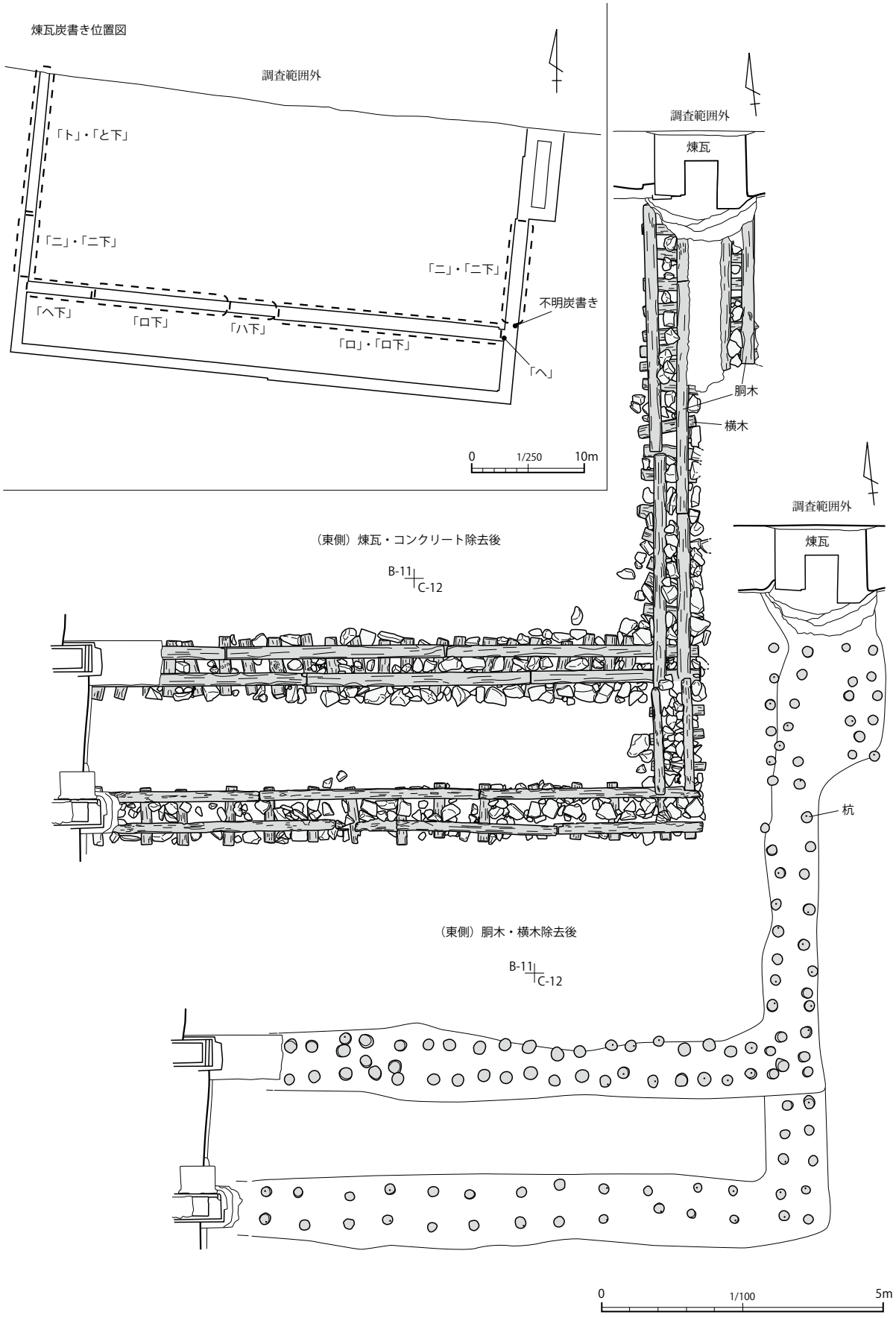
Q-Q′

1　7.5Y4/1　灰色　締り強　粘性やや強。φ50～80mm粘土ブロック主体　φ1cmレンガ片・異物片多数。粘土層。
2　7.5YR3/2　黒褐色　締り強　粘性やや強。φ30～50mmロームブロック混。ブロックをつきかためた感じ。遺物・礫混。

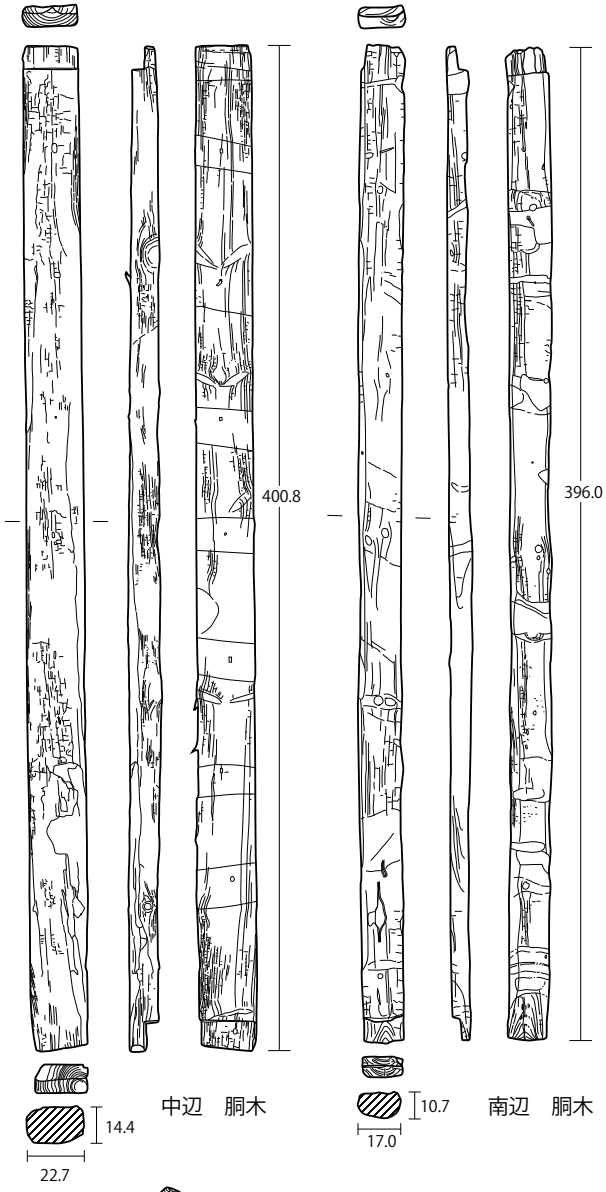
R-R′

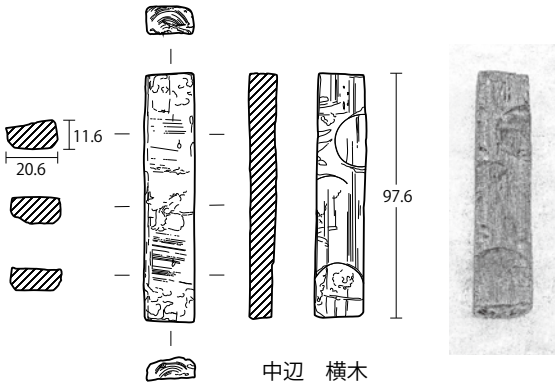
1　10YR2/2　黒褐色　締り有　粘性有。礫5～7%　瓦片5～7%　炭化物5～7%。煉瓦基礎の掘方。
2　7.5YR3/2　黒褐色　締り強　粘性やや強。φ1~3mm焼土粒・炭化物粒10%。角礫多。粘土層。
3　7.5YR3/1　黒褐色　締り弱　粘性弱。コンクリート基礎の掘方。小砂利・礫混　遺物少しあり。
4　7.5YR3/1　黒褐色　締り強　粘性やや強。φ1mm炭化物粒微量。粘土っぽい　ブロック状のものが充填されている。遺物・木片・礫多。

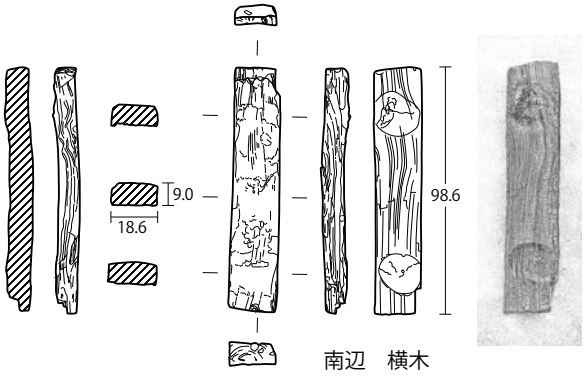
第 18 図　35 号遺構（5）（1/40）

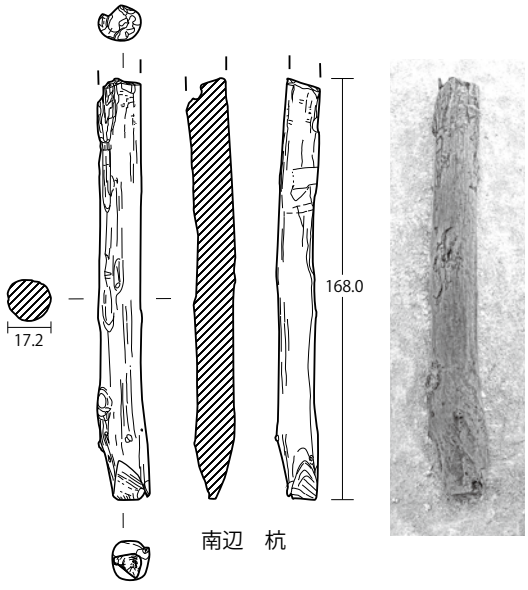


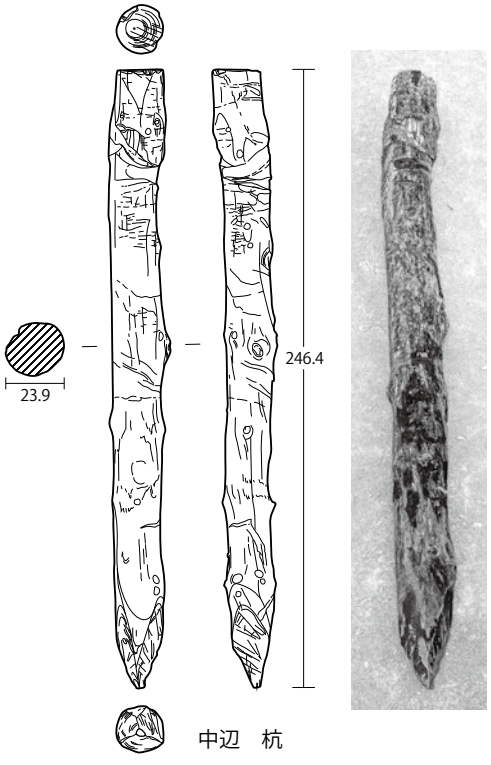
第 19 図　35 号遺構（6）（1/250・1/100）







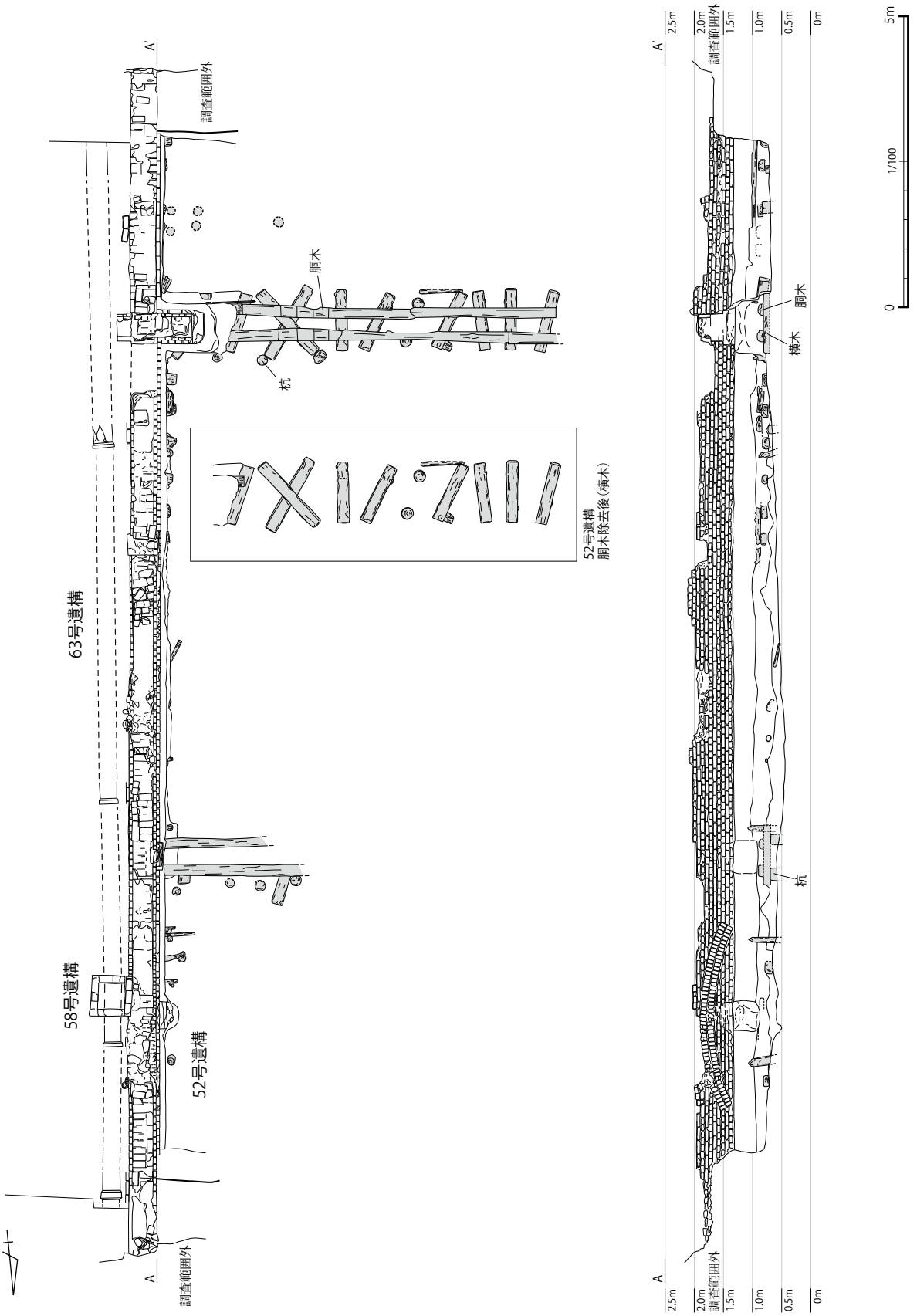




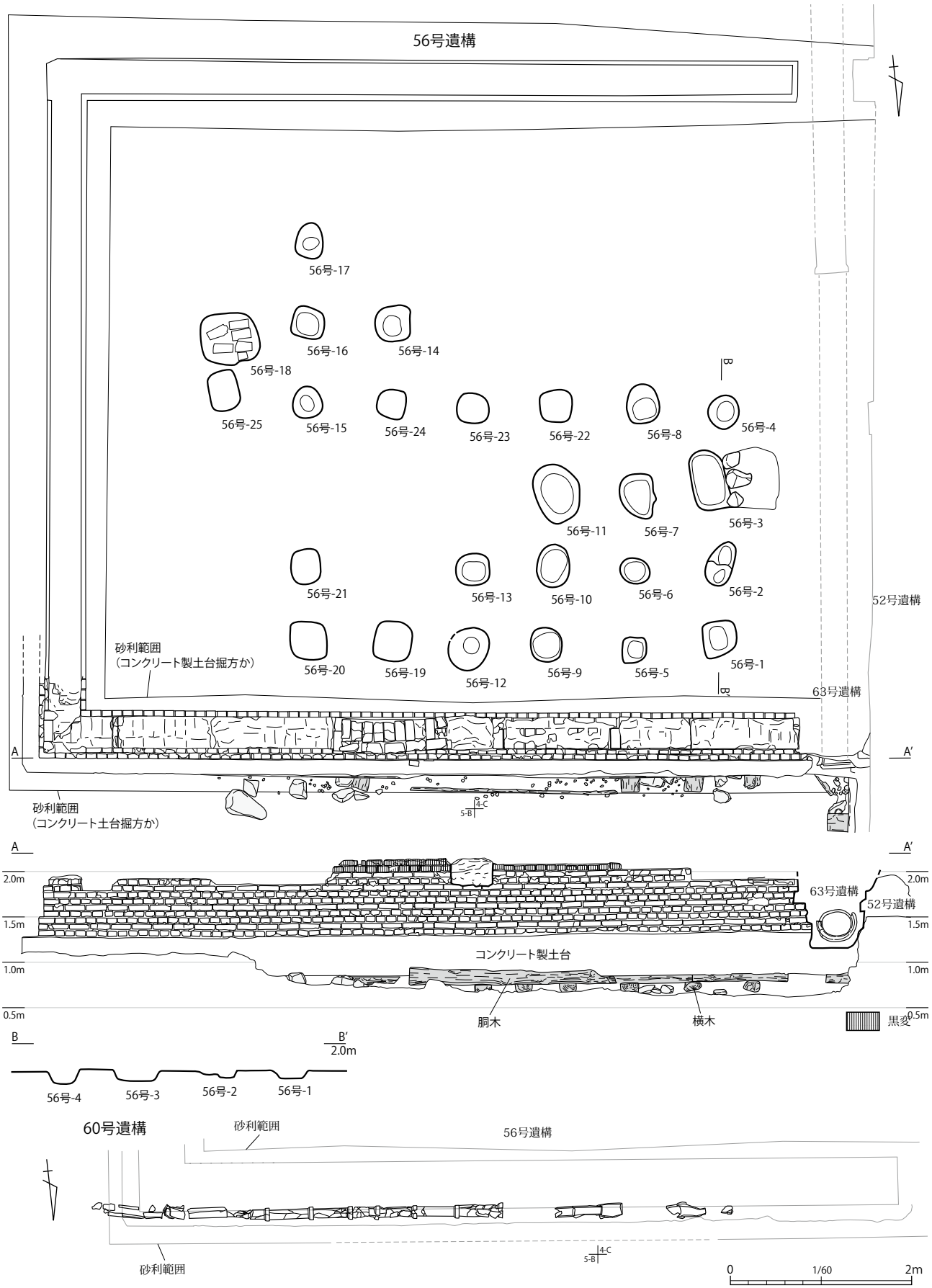
※計測値は残存値。単位は cm。

0　1/30　50cm

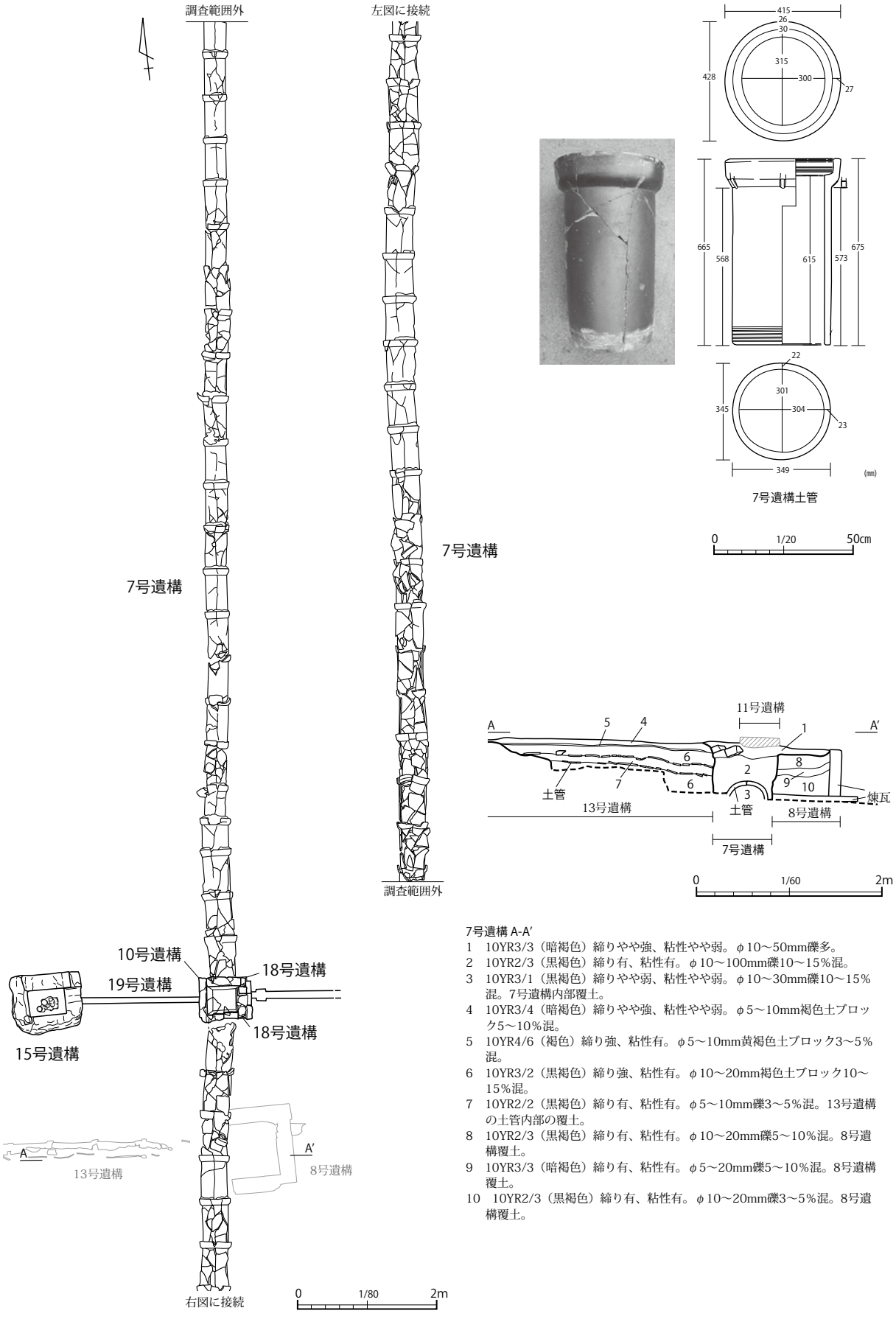
第 20 図　35 号遺構（7）（1/30）



第 21 図　52・58・63 号遺構（1/100）



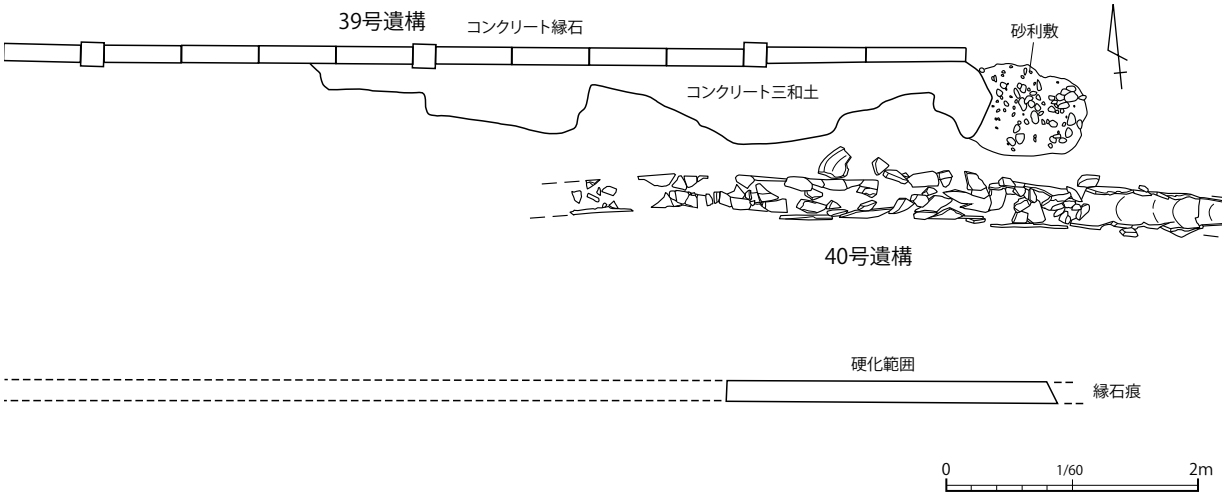
第 22 図　56・60 号遺構（1/60）

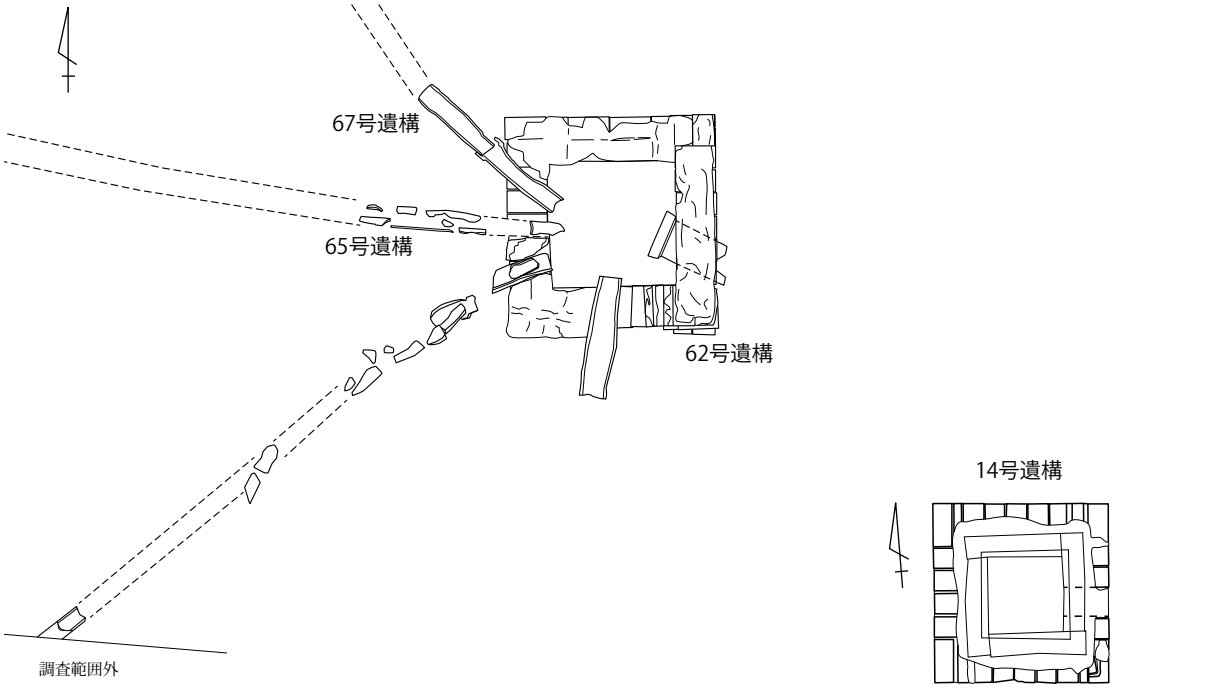


7号遺構 A-A′

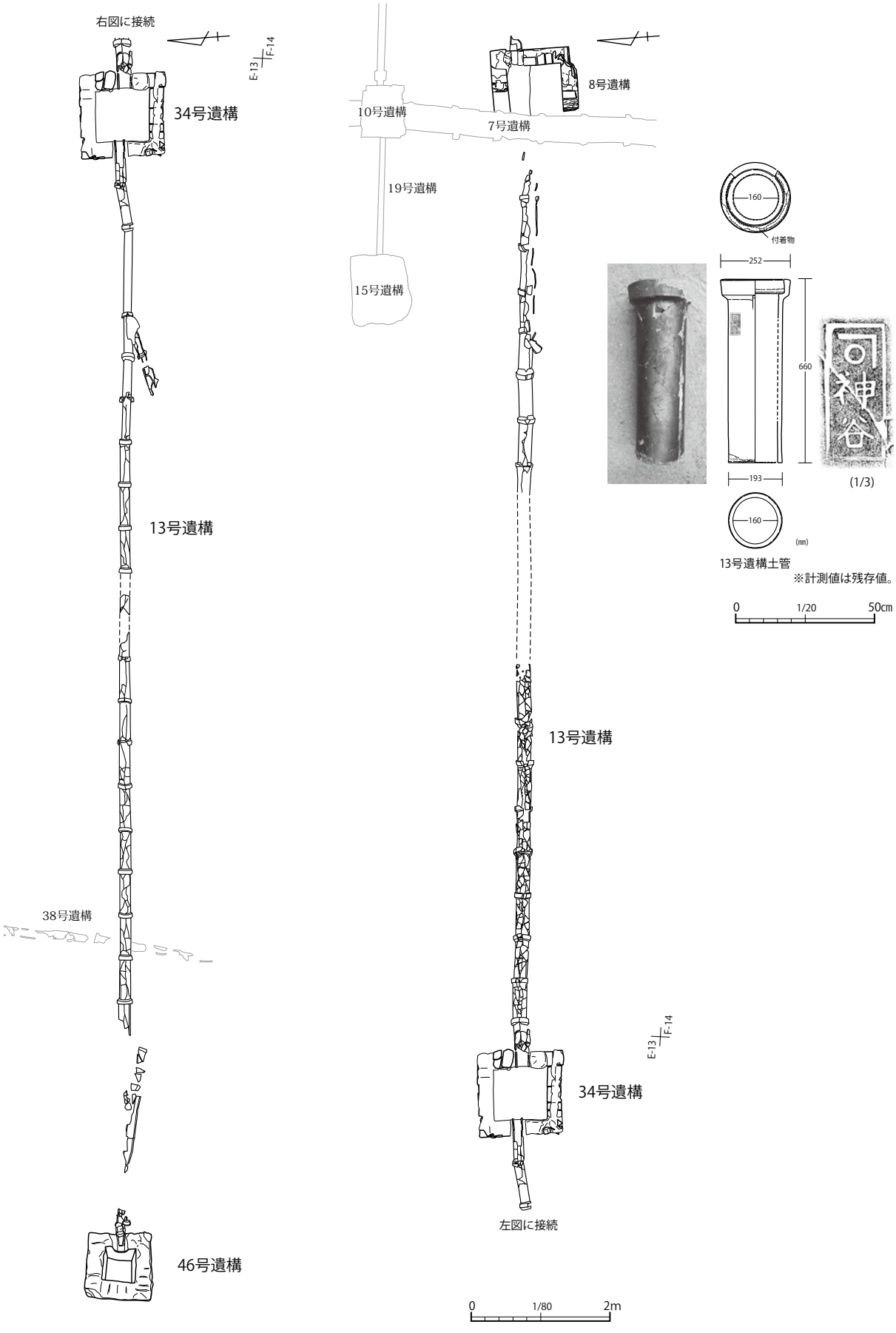
1　10YR3/3（暗褐色）締りやや強、粘性やや弱。φ10～50mm礫多。
2　10YR2/3（黒褐色）締り有、粘性有。φ10～100mm礫10～15%混。
3　10YR3/1（黒褐色）締りやや弱、粘性やや弱。φ10～30mm礫10～15%混。7号遺構内部覆土。
4　10YR3/4（暗褐色）締りやや強、粘性やや弱。φ5～10mm褐色土ブロック5～10%混。
5　10YR4/6（褐色）締り強、粘性有。φ5～10mm黄褐色土ブロック3～5%混。
6　10YR3/2（黒褐色）締り強、粘性有。φ10～20mm褐色土ブロック10～15%混。
7　10YR2/2（黒褐色）締り有、粘性有。φ5～10mm礫3～5%混。13号遺構の土管内部の覆土。
8　10YR2/3（黒褐色）締り有、粘性有。φ10～20mm礫5～10%混。8号遺構覆土。
9　10YR3/3（暗褐色）締り有、粘性有。φ5～20mm礫5～10%混。8号遺構覆土。
10　10YR2/3（黒褐色）締り有、粘性有。φ10～20mm礫3～5%混。8号遺構覆土。

第 23 図　7・10・15・18・19 号遺構（1/80・1/20・1/60）

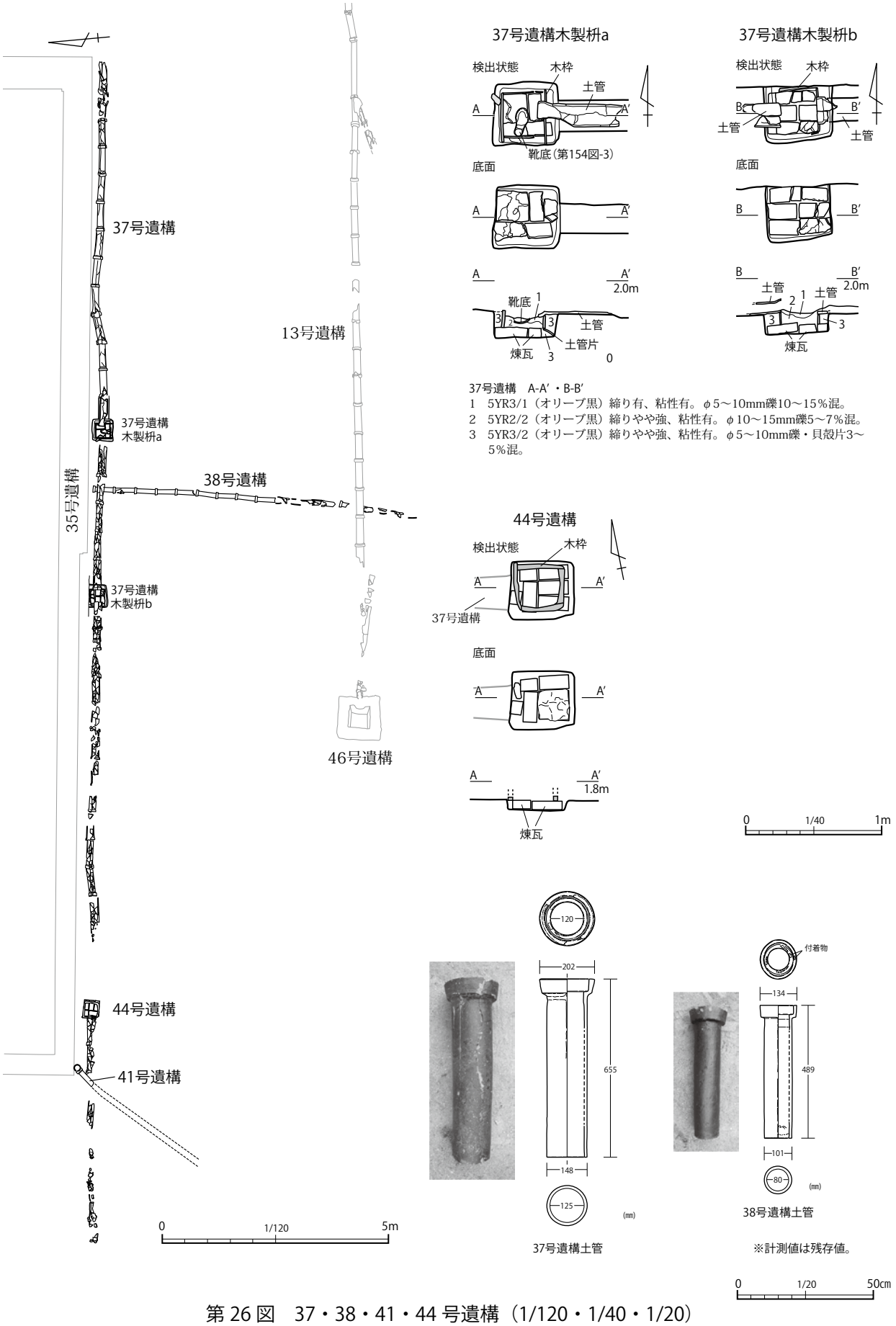




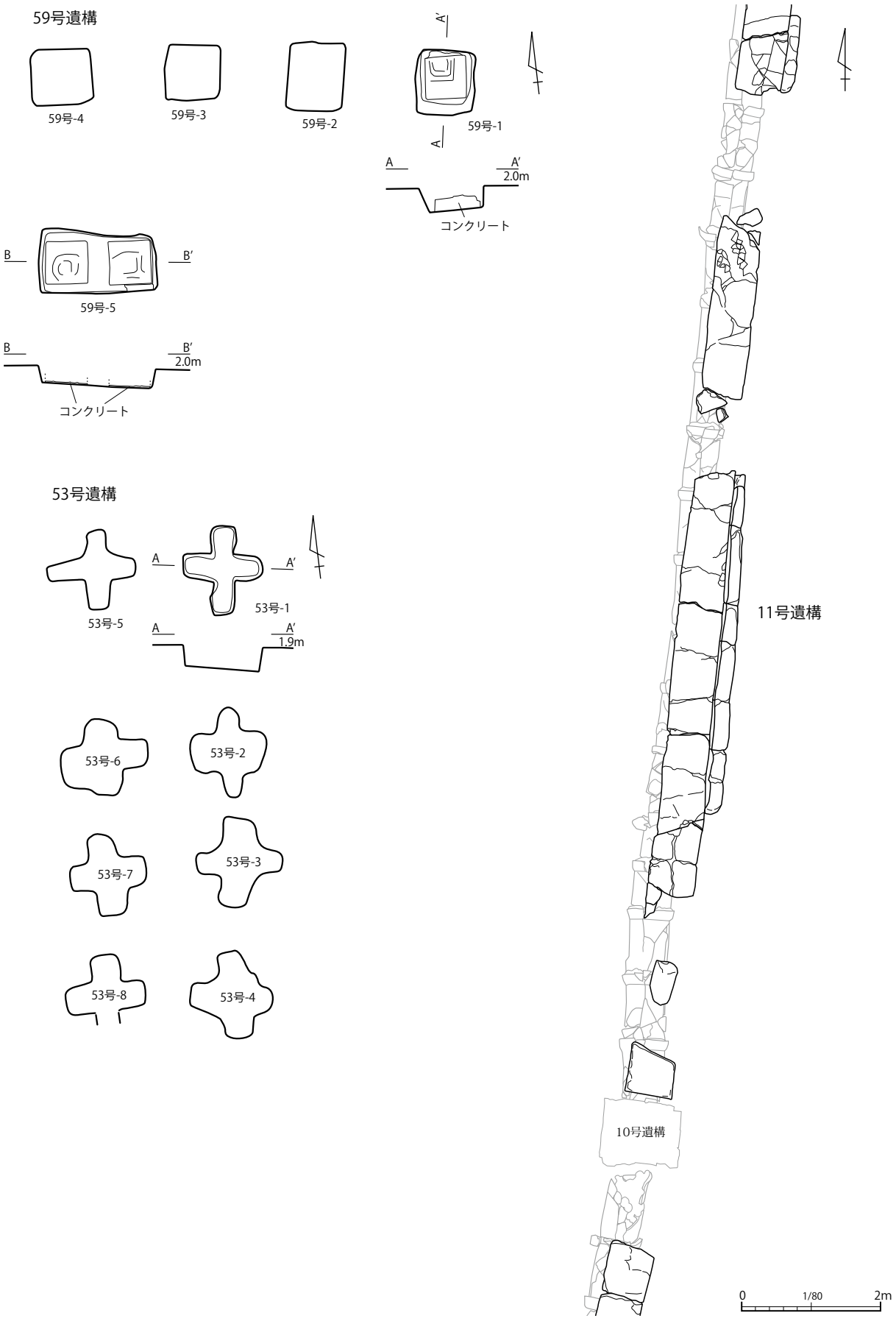
第 24 図　39・40・62・67・14・30・36・57 号遺構（1/60・1/40）



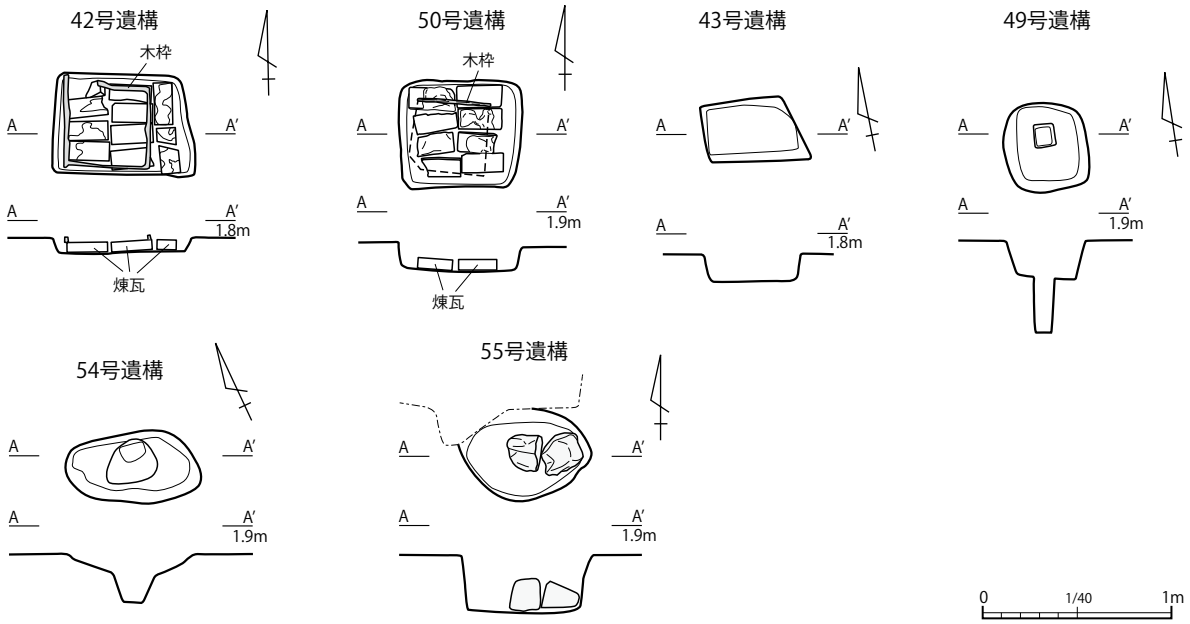
第 25 図　8・13・34・46 号遺構（1/60）



第 26 図　37・38・41・44 号遺構（1/120・1/40・1/20）



第 27 図　11・53・59（1/80）



第 28 図　42・43・49・50・54・55 号遺構（1/40）

第 4 表　煉瓦製建物基礎計測表

遺構名	挿図番号	図版番号	調査区	グリッド	確認層位	確認面	規模（m）				長軸方向	推定時期	備　考
							長軸	短軸	幅	深さ			
35号遺構	第14～20図	図版5～8	Ⅱ～Ⅲ区	A-6～13	第2層	Ⅱ面	23.4	(12.1)	0.6	1.4	N-90°-E	近代	旧府立第一高等女学校講堂か
52号遺構	第21図	図版9	Ⅲ区	A～E-3	第3層	Ⅱ面	(20.6)	(7.5)	1.2	1.6	N-5°-W	近代	旧府立第一高等女学校西側校舎か
56号遺構	第22図	図版9	Ⅲ区	C・D-4～6	第3層	Ⅱ面	9.9	8.5	0.9	0.7	N-96°-E	近代	旧府立第一高等女学校西側校舎拡張部か

第 5 表　56 号遺構内部土坑計測表

遺構名	挿図番号	図版番号	調査区	グリッド	確認層位	確認面	種類	規模（cm）			長軸方向	平面形	推定時期	備　考
								長軸	短軸	深さ				
56号遺構-1	第22図	—	Ⅲ区	C-4	第2層	Ⅱ面	土坑	39	37	9	N	方形	近代	
56号遺構-2	第22図	—	Ⅲ区	C-4	第2層	Ⅱ面	土坑	50	30	10	N-30°-W	楕円形	近代	
56号遺構-3	第22図	—	Ⅲ区	C-4	第2層	Ⅱ面	土坑	67	40	15	N-5°-E	方形	近代	上面に礫がある。
56号遺構-4	第22図	—	Ⅲ区	D-4	第2層	Ⅱ面	土坑	32	31	18	N-47°-W	楕円形	近代	
56号遺構-5	第22図	—	Ⅲ区	C-4	第2層	Ⅱ面	土坑	29	27	13	N-9°-W	方形	近代	
56号遺構-6	第22図	—	Ⅲ区	C-4	第2層	Ⅱ面	土坑	34	28	13	N-61°-E	楕円形	近代	
56号遺構-7	第22図	—	Ⅲ区	C-4	第2層	Ⅱ面	土坑	48	37	6	N-18°-E	不定形	近代	
56号遺構-8	第22図	—	Ⅲ区	D-4	第2層	Ⅱ面	土坑	42	37	10	N-4°-E	楕円形	近代	
56号遺構-9	第22図	—	Ⅲ区	C-4	第2層	Ⅱ面	土坑	35	33	21	N-4°-E	楕円形	近代	
56号遺構-10	第22図	—	Ⅲ区	C-4	第2層	Ⅱ面	土坑	47	35	13	N-22°-W	楕円形	近代	
56号遺構-11	第22図	—	Ⅲ区	C-4	第2層	Ⅱ面	土坑	64	50	34	N-22°-E	楕円形	近代	
56号遺構-12	第22図	—	Ⅲ区	C-5	第2層	Ⅱ面	土坑	50	42	18	N-44°-E	楕円形	近代	
56号遺構-13	第22図	—	Ⅲ区	C-5	第2層	Ⅱ面	土坑	37	34	9	N-83°-E	方形	近代	
56号遺構-14	第22図	—	Ⅲ区	D-5	第2層	Ⅱ面	土坑	39	38	20	N	方形	近代	
56号遺構-15	第22図	—	Ⅲ区	D-5	第2層	Ⅱ面	土坑	36	32	19	N-16°-E	楕円形	近代	
56号遺構-16	第22図	—	Ⅲ区	D-5	第2層	Ⅱ面	土坑	34	33	18	N-20°-W	方形	近代	
56号遺構-17	第22図	—	Ⅲ区	D-5	第2層	Ⅱ面	土坑	39	31	25	N-13°-W	楕円形	近代	
56号遺構-18	第22図	—	Ⅲ区	D-5	第2層	Ⅱ面	土坑	65	57	—	N-84°-E	方形	近代	底面に煉瓦が敷かれている。
56号遺構-19	第22図	—	Ⅲ区	C-5	第2層	Ⅱ面	土坑	43	39	—	N-18°-W	方形	近代	
56号遺構-20	第22図	—	Ⅲ区	C-5	第2層	Ⅱ面	土坑	41	40	—	N-17°-W	方形	近代	
56号遺構-21	第22図	—	Ⅲ区	C-5	第2層	Ⅱ面	土坑	36	31	—	N	方形	近代	
56号遺構-22	第22図	—	Ⅲ区	D-4	第2層	Ⅱ面	土坑	35	34	—	N	方形	近代	
56号遺構-23	第22図	—	Ⅲ区	D-5	第2層	Ⅱ面	土坑	34	31	—	N-74°-E	方形	近代	
56号遺構-24	第22図	—	Ⅲ区	D-5	第2層	Ⅱ面	土坑	32	31	—	N-24°-W	方形	近代	
56号遺構-25	第22図	—	Ⅲ区	D-5	第2層	Ⅱ面	土坑	44	32	—	N-8°-E	方形	近代	

第 6 表　近代コンクリート製構築物計測表

遺構名	挿図番号	図版番号	調査区	グリッド	確認層位	確認面	種類	検出総延長（m）	幅（m）	延伸方向	推定時期	備　考
39号遺構	第24図	図版9	Ⅲ区	A-6	第2・3層	Ⅱ面	コンクリート三和土	(8.6)	(2.9)	N-82°-W	近代	40号遺構に切られる。35号遺構と52号遺構をつなぐ渡り廊下と考えられる。
11号遺構	第27図	図版12	Ⅰ区	B～D-17	第2層	Ⅱ面	コンクリート縁石列	(13.2)	0.6	N-6°-E	近代	7号遺構の上面にある。7号遺構を蓋するように並べられているが、直接的な関係は不明。

第 7 表　鉄管・土管計測表

遺構名	挿図番号	図版番号	調査区	グリッド	確認層位	確認面	種類	検出総延長（m）	径（cm）	延伸方向	推定時期	備　考
19号遺構	第23図	—	Ⅰ区	D-16・17	第2層	Ⅱ面	鉄管	3.6	8	N-85°-W	近代	鉄管系統1。7号遺構に切られる。15号遺構の消火栓に接続する。
7号遺構	第23図	図版10	Ⅰ区	E～H-17	第2層	Ⅱ面	土管列	29.8	38	N-5°-W	近代	土管系統1。昭和校舎に沿うか。
13号遺構	第25図	図版10	Ⅰ区	E-9～17	第2層	Ⅱ面	土管列	29.7	26	N-85°-W	近代	土管系統4。7号遺構に切られ、38号遺構を切る。
37号遺構	第26図	図版11	Ⅱ～Ⅲ区	D-8～12	第2・3層	Ⅱ面	土管列	25.4	17	N-85°-W	近代	土管系統6。41号遺構に切られ、38号遺構を切る。35号遺構拡張部南辺に沿う。木製枡を持つ。
38号遺構	第26図	図版12	Ⅱ区	D-10	第2層	Ⅱ面	土管列	7.7	11	N-10°-E	近代	土管系統9。13・35・37号遺構に切られる。拡張以前の35号遺構に伴う可能性がある。
40号遺構	第24図	図版9	Ⅲ区	A-6	第2層	Ⅱ面	土管列	5.4	32	N-82°-W	近代	土管系統3。39号遺構を切る。35号遺構東辺の一部が崩れており、40号遺構を通したとみられる。
41号遺構	第26図	図版12	Ⅲ区	D-7	第2層	Ⅱ面	土管列	0.6	11	N-51°-E	近代	土管系統5。37号遺構の上位にある。35号遺構拡張部に伴う。
60号遺構	第22図	図版12	Ⅲ区	C-4～6	第3層	Ⅱ面	土管列	8.9	12	N-83°-W	近代	土管系統7。63号遺構に切られる。56号遺構に沿う。
63号遺構	第21図	図版11	Ⅲ区	A～E-4	第3層	Ⅱ面	土管列	18.2	31	N-5°-E	近代	土管系統2。40・56・60号遺構を切る。52号遺構に沿うが、煉瓦基礎を壊すことから、昭和校舎に伴う可能性がある。
65号遺構	第24図	-	Ⅲ区	E-4～6	第3層	Ⅱ面	土管列	1.7	12	N-86°-W	近代	土管系統8。
67号遺構	第24図	図版10	Ⅲ区	C～E-5・6	第3層	Ⅱ面	土管列	11.3	12	N-50°-W	近代	土管系統8。56号遺構に切られる。

第 8 表　コンクリート製・煉瓦製枡計測表

遺構名	挿図番号	図版番号	調査区	グリッド	確認層位	確認面	種類	規模（cm）				長軸方向	平面形	推定時期	備　考
								長軸	短軸	高さ	幅				
18号遺構	第23図	—	Ⅰ区	D-17	第2層	Ⅱ面	コンクリート製枡	60	—	—	11	N-9°-E	方形	近代	鉄管系統1。7・10号遺構に切られる。
8 号遺構	第25図	—	Ⅰ区	E-17	第2層	Ⅱ面	煉瓦製枡	120	(87)	53	24	N	方形	近代	土管系統4。7 号遺構に切られる。
10号遺構	第23図	図版11	Ⅰ区	D-17	第2層	Ⅱ面	煉瓦製枡	74	63	35	20	N-6°-E	方形	近代	7・18号遺構を切る。接続はなく独立している。
14号遺構	第24図	図版11	Ⅱ区	A-13	第2層	Ⅱ面	煉瓦製枡	94	94	26	28	N-5°-E	方形	近代	土管系統3。
15号遺構	第23図	図版9	Ⅰ区	D-16	第2層	Ⅱ面	煉瓦製枡	104	75	34	25	N-88°-W	方形	近代	鉄管系統1。上下に分離しており、上段はコンクリートで固められている。内部に消火栓を持つ。
20号遺構	—	—	Ⅰ区	C-17	第2層	Ⅱ面	煉瓦製枡	(68)	(43)	—	—	N-12°-E	方形	近代	接続はなく独立している。
30号遺構	第24図	図版12	Ⅱ区	C-15	第2層	Ⅱ面	煉瓦製枡	113	99	—	—	N-84°-W	方形	近代	接続はなく独立している。煉瓦製枡を壊して、建物基礎とみられるコンクリートが埋設される。
34号遺構	第25図	図版10	Ⅱ区	E-13	第2層	Ⅱ面	煉瓦製枡	120	116	10	24	N-1°-E	方形	近代	土管系統4。
36号遺構	第24図	図版11	Ⅱ区	A-9	第2層	Ⅱ面	煉瓦製枡	106	106	—	28	N-7°-E	方形	近代	土管系統3。35号遺構内側にある。北向きに土管の接続部あり。
46号遺構	第25図	図版10	Ⅱ区	E-9	第2層	Ⅱ面	煉瓦製枡	98	92	32	27	N	方形	近代	土管系統4。
57号遺構	第24図	—	Ⅲ区	A-4	第3層	Ⅱ面	煉瓦製枡	105	75	—	23	N-8°-E	方形	近代	土管系統3。63号遺構に切られる。東向きに土管の接続部あり。40号遺構と接続するとみられる。
58号遺構	第21図	—	Ⅲ区	B-4	第3層	Ⅱ面	煉瓦製枡	72	72	24	14	N-3°-E	方形	近代	土管系統2。52号遺構の一部を切る。
62号遺構	第24図	図版10	Ⅲ区	E-6・7	第3層	Ⅱ面	煉瓦製枡	117	112	23	24	N	方形	近代	土管系統8。北西方向に67号遺構、西方向に65号遺構が延びるほか、東向き、南西向きにそれぞれ土管の接続部あり。

第 9 表　木製枡計測表

遺構名	挿図番号	図版番号	調査区	グリッド	確認層位	確認面	種類	規模（cm）			長軸方向	平面形	推定時期	備　考
								長軸	短軸	深さ				
37号遺構a	第26図	図版11	Ⅲ区	D-10	第2層	Ⅱ面	木製枡	26	23	10	N-90°-W	方形	近代	土管系統6。底面に煉瓦を敷き、側面に木枠を設けて枡としている。内部から靴底を出土。
37号遺構b	第26図	図版11	Ⅲ区	D-11	第2層	Ⅱ面	木製枡	25	(21)	8	N-85°-E	方形	近代	土管系統6。37号遺構木製枡aと同様の構造。木製枡部分は劣化している。
42号遺構	第28図	図版13	Ⅲ区	A-7・8	第2層	Ⅱ面	木製枡	60	44	8	N-88°-W	方形	近代	35号遺構内部にある。37号遺構木製枡aと同様の構造。
44号遺構	第26図	図版11	Ⅲ区	D-7・8	第2層	Ⅱ面	木製枡	42	32	14	N-75°-E	方形	近代	土管系統6。37号遺構木製枡aと同様の構造。北辺の一部が失われる。
50号遺構	第28図	図版13	Ⅲ区	A-6	第2層	Ⅱ面	木製枡	65	55	13	N-90°-W	方形	近代	37号遺構木製枡aと同様の構造。木製枡は北辺のみ出土。

第 10 表　土坑計測表

遺構名	挿図番号	図版番号	調査区	グリッド	確認層位	確認面	種類	規模（cm）			長軸方向	平面形	推定時期	備　考
								長軸	短軸	深さ				
43号遺構	第28図	図版13	Ⅲ区	A-6・7	第2層	Ⅱ面	土坑	53	30	15	N-99°-E	長方形	近代	
49号遺構	第28図	図版13	Ⅲ区	A-6	第2層	Ⅱ面	土坑	47	41	48	N-2.5°-E	方形	近代	底面中央西寄りに方形のくぼみがある。
53号遺構-1	第27図	図版12	Ⅲ区	A-5	第3層	Ⅱ面	土坑	132	108	38	N	十字形	近代	平面十字形の土坑。コンクリートなどは設置されない。
53号遺構-2	第27図	図版12	Ⅲ区	A・B-5	第3層	Ⅱ面	土坑	128	100	—	N	十字形	近代	53号遺構-1と同様の遺構。
53号遺構-3	第27図	図版12	Ⅲ区	B-5	第3層	Ⅱ面	土坑	132	120	—	N	十字形	近代	53号遺構-1と同様の遺構。
53号遺構-4	第27図	図版12	Ⅲ区	B-5	第3層	Ⅱ面	土坑	128	92	—	N	十字形	近代	53号遺構-1と同様の遺構。
53号遺構-5	第27図	図版12	Ⅲ区	A-4	第3層	Ⅱ面	土坑	128	112	—	N	十字形	近代	53号遺構-1と同様の遺構。
53号遺構-6	第27図	図版12	Ⅲ区	A・B-4	第3層	Ⅱ面	土坑	128	112	—	N	十字形	近代	53号遺構-1と同様の遺構。
53号遺構-7	第27図	図版12	Ⅲ区	B-4	第3層	Ⅱ面	土坑	120	112	—	N	十字形	近代	53号遺構-1と同様の遺構。
53号遺構-8	第27図	図版12	Ⅲ区	B-4	第3層	Ⅱ面	土坑	116	(104)	—	N	十字形	近代	53号遺構-1と同様の遺構。
54号遺構	第28図	図版13	Ⅲ区	A-5	第3層	Ⅱ面	土坑	72	32	25	N-56°-W	楕円形？	近代	底面北側に不定形のくぼみがある。
55号遺構	第28図	図版13	Ⅲ区	A-5	第3層	Ⅱ面	土坑	(69)	(41)	30	N-89°-W	楕円形？	近代	底面に人頭大の石が2個ある。
59号遺構-1	第27図	図版12	Ⅲ区	A-6・7	第3層	Ⅱ面	土坑	84	84	40	N-5°-E	方形	近代	底面に方形のコンクリートが設置される。建物基礎か。39号遺構の下層にある。
59号遺構-2	第27図	図版12	Ⅲ区	A-6	第3層	Ⅱ面	土坑	80	80	—	N-6°-E	方形	近代	59号遺構-1と同様の遺構。39号遺構の下層にある。
59号遺構-3	第27図	図版12	Ⅲ区	A-6	第3層	Ⅱ面	土坑	104	80	—	N-4°-E	方形	近代	59号遺構-1と同様の遺構。39号遺構の下層にある。
59号遺構-4	第27図	図版12	Ⅲ区	A-5	第2層	Ⅱ面	土坑	96	80	—	N-87°-W	方形	近代	59号遺構-1と同様の遺構。39号遺構の下層にある。
59号遺構-5	第27図	図版12	Ⅲ区	B-5・6	第2層	Ⅱ面	土坑	172	80	30	N-84°-W	長方形	近代	底面に方形のコンクリートが2基、東西に並んで設置される。建物基礎か。

第 11 表　86 号遺構礎石計測表

遺構名	挿図番号	図版番号	調査区	グリッド	確認層位	確認面	種類	規模（cm）		長軸方向	推定時期	備　考
								長軸	短軸			
86号遺構左	—	—	Ⅲ区	C-6	第2層	Ⅱ面	礎石	79	60	N	近代	人頭大の礫が集まる。礎石と推定される。
86号遺構右	—	—	Ⅲ区	C-7	第2層	Ⅱ面	礎石	82	41	N	近代	人頭大の礫が集まる。礎石と推定される。

2）Ⅲ面の遺構

Ⅲ面から検出された遺構は、板基礎列 1 条、礎石列 1 条、木製枡 3 基、木樋列 5 条、竹樋 3 条、溝 1 条、石積遺構 1 条、土留板列 12 条、中の島 1 基、井戸 1 基、土坑 4 基、木枠 2 基、瓦集中部 1 ヶ所である。検出した遺構のうち、石積遺構と中の島は 1 つの池を構成するものと考えられ、池遺構として報告した。また、池遺構内部に構築された土留板列 10 基、池遺構の覆土内にある瓦集中部、木樋、木枠遺構も、池遺構に伴うものとして、池遺構の項で報告している。また、池遺構の北西から、竹樋・木樋列と木製枡の組み合わさった遺構が検出された。組み合わせから 3 系統を確認し、系統ごとに報告している。

また、32・45 号遺構は 33 号遺構北側の溝の覆土上面に構築された遺構である。後述のとおり、33 号遺構北側の溝は自然堆積に近い形で埋没したものであり、33 号遺構や第 5 層の形成時期とは異なる時期に作られたと推定される。一方で、池遺構は 33 号遺構北側の溝も切って形成されるため、33 号遺構北側の溝は少なくとも池遺構形成までには埋没していたと考えられる。そのため、32・45 号遺構は池遺構形成と同時期からそれ以降につくられた遺構と捉え、Ⅲ面の検出とした。

■池遺構

調査区Ⅱ区からⅢ区にまたがって検出された。検出当初、調査地が35号遺構の胴木・横木や杭によって分断されており、個別に47・51号遺構の杭列や、61号遺構の間知石上面を検出したため、それぞれの遺構に個別の番号を付して調査を進めた。その後、池遺構の全面を検出し、61号遺構が周回する間知石列であること、61号遺構の内部の中央北側に93号遺構があり、48号遺構が93号遺構と47・61号遺構を繋ぐように設置されていることが判明し、一連の遺構であることがわかった。このため、本報告書では、外縁部にあたる61号遺構の内部から検出された一連の遺構を総じて「池遺構」と呼称し、池遺構が内包するそれぞれの遺構については遺構番号で呼んでいる。

【池遺構の構造】

池岸を周回する間知石の石積（61号遺構）と、池遺構の中央北側に設けられた中の島（93号遺構）がある。池として利用されていたころは、61号遺構の内側に水が張られ、93号遺構が浮かんでいるような光景であったのだろう。調査の結果、池遺構の造成は、まず海抜0m近辺まで掘削を行ったと考えられる。その際に33号遺構の石積を撤去し、95～98号遺構の井戸を壊している。本来は武家屋敷に伴う遺構も多数あったものと考えられるが、池の掘削のために失われたと考えられる。

掘削後、次いで池の底面に厚さ30～50cmほどの粘土層を設けている。池水の過剰な浸透や湧水を防いで水量を安定的かつ清浄を保つために、粘土層を設けたと考えられる。本報告書では、この底面の粘土層を「池遺構下層」と呼称し、遺物の報告もこの名称で行っている。池遺構下層は西がやや高く、東に向かって緩やかに傾斜している。

池遺構下層を設けるのと同時期に、間知石の石積による護岸が行われたようである。ただし、61号遺構の北辺には二重の石積みを検出した箇所や、石積の間に時期の異なる木樋を通した箇所があり、石積は適宜修正や改修を行っていたようである。また、93号遺構は池遺構下層を設けた直後に構築されたようである。93号遺構の基盤となる盛土が池遺構下層の直上に積まれていることが土層観察からわかる（第30図B-B'の24～29層）。池遺構が池として利用されたころは、61・93号遺構のみがあったと考えられる。

その後、何らかの理由で池遺構の幅を狭めるため、48・51号遺構の土留板列が設けられ、部分的に池を埋立てた。さらに池遺構を完全に埋立てるにあたり、47号遺構を設けて西半分を埋立て、次いで東半分を埋立てた。本報告書では、これら一連の作業にともなって池遺構内部に埋戻された土層を「池遺構上層」と呼称し、遺物の報告もこの名称で行っている。

61号遺構（第32～38図、第12表、図版16～18） 西辺、北辺、東辺を検出し、南辺は調査範囲外である。検出した池遺構の外縁部の全てに間知石による石積遺構があった。使用された間知石は、33号遺構の間知石と同質の石材と考えられ、大きさも同様である。先述のとおり、池遺構は33号遺構を壊して造成されたことから、間知石を転用した可能性がある。間知石の前面は池の内部を向いており、池岸を護岸するための石積と考えられる。池遺構の外形は、北西がやや突き出ており、北辺や東辺は波打った形状であるため、A～Lに分割して図化を行った。各記号が表す位置は第32図上の図のとおりである。D-E間、I-J間はほぼ直角に折れていることから、A～Dが西辺、E～Iが北辺、J～Lが東辺と捉えることができる。

A～Cは西辺の中央から南側である。Aの南端は調査範囲外で、調査範囲の壁に近く、石積遺構の

方向を確認するにとどまった。A は北西 - 南東方向、B は南北方向、C は北西 - 南東方向に設置される。南端は緩やかな弧を描いて東へ向かっており、池の南西隅にあたる位置と考えられる。石積は最大で 3 段を確認した。使用されている間知石の大きさはほぼそろっており、整然と積まれてた印象である。石積の正面に細い杭が設けられ、石積を支えている。石積下層には胴木が 1 条あり、石積の沈み込みを防いでいたようである。胴木は、枝を払った径 10 ～ 15cm 程度の幹を使用しており、表面を焼いて防腐処理を施している。胴木同士には接手のような加工はなく、僅かに隙間を設けて設置されている。後述のいずれの地点でも、同様の木材が胴木に利用されていた。また、C の胴木は北側に向けて緩やかに上がって設置されているため、石積自体も北に向かって緩やかに上がっている。石積の後背には、やや小さい間知石や拳大から人頭大の角礫が詰まっていた。裏込めと考えられる。

D は、西辺の北側にあたる。石積遺構は南北方向に設置され、最大で 3 段を確認した。使用された間知石はほぼそろっており、整然と積まれているが、D の中央付近では平たい間知石が横長に設置されており、その合間には 76 号遺構の木樋が通っている。76 号遺構の周辺は拳大の礫で充填される。また、76 号遺構より北側には 80 号遺構の木樋が通っている。木樋に損傷がないことから、石積を積み直して木樋を設置したものと考えられる。石積下層には胴木があり、胴木は 1 条であるが、2 条となっている箇所もある。また、胴木と同じ高さに D の南端と C の北端を補強するように横木が渡されている。胴木の下には 88 号遺構の木樋が通っており、石積遺構の構築前に作られたものと考えられる。また、D の南端にあたる箇所では、最上段の石が池の縁辺よりもやや南を向いて向いて積まれている。D は木樋の設置の際に石積を積み直していたと考えられ、その際に異なる方向を向いたものと考えられる。そのため、D は他の石積よりも後の時期に作られたものであり、池遺構の構築当初は異なる形状であったと推定される。

E は、北辺の西端にあたる。調査範囲の壁に近く、石積遺構の方向を確認するにとどまり、石積下層の確認はできなかった。石積遺構は東西方向に設置されている。石積遺構の平面形は、他所では緩やかな波状を呈するが、E-F 間のみ弧が連なった形状である。F から波状を呈するように延びる間知石も検出されており、調査範囲外に外縁の石積遺構が続いている可能性がある。

F・G は、北辺の西側にあたり、石積遺構を二重に検出した。G は F の後背にあり、F 以前に利用された石積と考えられる。石積遺構は北西 - 南東方向に設置され、F で最大 4 段、G で最大 2 段を検出したが、F は、西側で石積がやや崩れている箇所があった。F・G ともに石積下層には 2 条の胴木があり、F の胴木の下位には横木が 1 本設けられている。両者とも前面には密に杭が打ち込まれている。F・G はともに石積が胴木よりも池遺構の内側にせり出して作られており、不安定な石積を支えるために密に杭を打ち込んだものと考えられる。

H は、北辺中央にあたる。石積遺構は東西方向に設置され、最大で 3 段を確認した。西側は F・G が重なる地点であるため石積は雑然としており、一部は崩れて前面の杭にかろうじて支えられていた。また、石積の最下段が東に向かって緩やかに上がりながら設置されている。石積下層西側には胴木があったが、H の石積とは方向が異なるため、G に伴うものと考えられる。石積の後背には砂を多く含むにぶい黄褐色土や黒褐色土が充填されており、裏込めの土層と考えられる。

I は、北辺の中央から東端にあたる。石積遺構は緩やかに波打ちながら概ね北西 - 南東方向に設置されている。最大で 3 段を確認したが、3 段あるのは東端部のみで、概ね 2 段で構築されている。

積まれた間知石は下段が小さく、上段が大きい傾向があり、特にIの中央で顕著である。石積遺構下層西側には胴木が1条あったが、東側では確認できなかった。石積の前面には細い杭が打ち込まれており、石積を支えていた。

J・Kは、東辺の中央から北側にあたる。Jは北東 - 南西方向、Kは南北方向に設置され、最大で3段を確認した。35号遺構の杭が打ち込まれているため、部分的に間知石が動き、原位置でないと考えられる。特にKでは間知石の前面がそろっておらず、池遺構の内面を向いていないものや、他の間知石と異なる方向を向いているものがみられ、これらは原位置を保っていない可能性が高い。石積の前面は細い杭によって支えられていたが、周辺には51号遺構の杭列があり、全ての杭が61号遺構に伴うものではない可能性がある。石積の後背には裏込めとして拳大から人頭大の角礫が詰まってる。

Lは、東辺南端にあたる。石積遺構は南北方向から北東 - 南西方向に湾曲しており、池遺構の南東隅にあたると考えられる。石積は2段を検出し、上段の間知石が大きく、下段の間知石がやや小さい。石積は整然と積まれているが、一部間知石が抜き取られ、裏込めに使われた角礫が散乱している箇所があった。

93号遺構（第39・40図、第13表、図版18） 池遺構の中央北寄りにある。調査の結果、93号遺構は上下2段階に分かれることがわかった。本報告書では「93号遺構上層・下層」と呼称して報告た。

93号遺構上層は、61・93号遺構をつなぐ土橋を伴う中の島である。93号遺構下層を土台に、黒褐色土を被せて中の島としている。この黒褐色土には小礫が多量に含まれ､池の水に洗われたためか、小礫が黒褐色土上面に露出している。特に93号遺構の北から東にかけて顕著である。その上に、オリーブ黒色土を中心とした土層を盛り、61号遺構H付近と93号遺構北側をつなぐように土橋としている。土橋は93号遺構の外形から緩やかに細くなり61号遺構に接続している。土橋の上面は61号遺構よりもやや高く、東西方向の断面をみると、中心が最も高く、東西の裾に向かって緩やかに傾斜している。土橋の上面には瓦が多く出土しており、敷き詰められたようである。土橋の中心が水面より上にあり、通ることができたと考えられる。

93号遺構下層は円形に作られ、周囲に間知石の石積による護岸を持つ中の島であり、池遺構の造成当初の姿と考えられる。一部を35号遺構下層の杭列によって撹乱されており、南東部分の石積が崩れている。中の島は、まず池遺構下層の上面にオリーブ黒色の粘土層を盛って基盤とし、盛土の外周に2段の石積遺構を設けている。使用された間知石は61号遺構に積まれたものと同質の石材を用いているが、やや小さい印象である。石積の前面は細い杭が密に打ち込まれ、石積を支えている。石積を設けた後、中の島上部に黒色土を充填して、中の島の上面としている。この中の島に渡るための橋は検出されず、中の島の上面や土橋の下層等にも橋を架けた痕跡はなかった。中の島が池の中でどのように使われていたかは不明である。

【池遺構内の土留板列・杭列】

池遺構の内部に土留板と杭によって構築された土留板列・杭列を検出した。池遺構の中央から東側にかけて設置されており、西側には51号遺構の端部が設置されているに過ぎない。遺構の先後関係から、51号遺構→47号遺構→48号遺構の順に設置されたと考えられる。

51号遺構（第30・42図、第14表） 池遺構の北から東にかけて、曲がりながら設置されている。

大部分で杭のみを検出し、東側で土留板をともなっている。また、北西端では、土留板と角礫をともなっている。角礫は土留により堰き止められたものであろう。51 号遺構の土留板は最大で 2 段検出した。土留板の西側に杭が打ち込まれており、埋立ては東から西へ行われ、池を狭めるためのものと考えられる。51 号遺構の杭列のとおりに池を狭めたと考えると、池は北東に細長く突き出た部分を持つ形となる。この形状は明治 17（1884）年の『東京図測量原図』（第 7 図左下）の池の形状とよく似ており、明治 17 年段階では 51 号遺構の範囲まで埋立てを行ったと考えられる。

47 号遺構（第 30・40 図、第 14 表、図版 18） 池遺構の南東で検出した。平面形は北側を弦とする弧状を呈する。検出範囲で 3 段の土留板を確認し、北側を杭で固定している。このため、南側からの埋立てを行うための土留板列と考えられ、池の南岸を狭めるような埋立てを行ったと考えられる。また、土留板の南側には製材や丸木材があった。土留板列に沿うものや、直交するものがあり、これらの木材は土留の補強であったと考えられる。

48 号遺構（第 30・39・41 図、第 14 表、図版 19・20） 池遺構中央の 93 号遺構の南北で検出した。北側で 2 条、南側で 6 条を確認した。北側のものは、東から北 1・2、南側のものは、東から南 0 ～ 5 の番号を付している。

北 1・2 は、93 号遺構と 61 号遺構北岸を繋ぐように設置されている。杭列は見られず、土留板が土圧によって東へ押し倒されている様子が確認された。南 0 は 93 号遺構と 47 号遺構を繋ぐように設置されていたようである。残存状況が悪く、土層確認と僅かに残った杭と土留板から確認した。土圧等により押し流されたものと考えられる。南 1 は南 0 の西側にある。北端は 93 号遺構と接し、南端は調査範囲外である。最大で 3 段の土留板を検出し、土留板列の東側を杭で固定していた。南 2 は南 3 の一部を繋ぐように設置されている。最大で 2 段の土留板を検出し、土留板列の東側を杭で固定していた。また、南 2 と南 1 の間の埋立て土の下面に、コモ状繊維の土嚢を検出した。埋立て前に設置されたものと考えられる。また、南 2 と南 1 の間の南側には、東西方向の土留板列を検出した。土留板の北側を杭で支えているため、47 号遺構と同様の機能を持っていると考えられる。南 3 は南 1・2 の西側にある。北端は 93 号遺構に接し、南端は調査範囲外である。最大で 3 段の土留板を検出し、土留板列の東側を杭で固定していた。南 4 は南 3 の西側にある。北端は 93 号遺構に接し、南端は調査範囲外である。最大で 3 段の土留板を検出したほか、垂直方向に打ち込まれた土留板も検出した。杭は概ね土留板列の西側に設置され、垂直方向の土留板は水平方向の土留板の東側に打ち込まれていた。また、この垂直方向の土留板のさらに西側から補強するように、水平方向の土留板 3 段と杭が設置されている。土留板が崩れ、その部分を補強したものと推定される。南 5 は南 4 の西側にある。北端は 93 号遺構に接続し、南端は調査範囲外である。下層は細い竹材を用いた柵でつくられており、竹材の東側を杭で固定している。上層は土留板に変化している。さらに杭の東側に土留板を垂直方向に打ち込んで、補強している。おそらく、当初柵にて土留を行ったが、土圧に負けてしまったため、土留板で補強したものと推測される。

48 号遺構の各土留板列を見ると、概ね西からの土圧に耐えるように土留板列と杭が設置されている。そのため、池遺構の埋立ては西から東へ行ったものと考えられる。土留の方法を見ると、西にある南 5 では、柵と土留板を併用しているものの、強度が足りなかったためか垂直方向に土留板を打ち込んで補強している。また、南 4 でも土留板列の崩れたような部分があり、埋立ての初期段階に

おける土圧が強かったことがわかる。あるいは、土圧ではなく、西から東へ追い込まれた池の水の水圧による崩壊の可能性もある。南２も南３の補強と考えられ、南２と南１の間にコモ状繊維による土嚢が埋め戻されていることも、土圧ないし水圧に対するための補強であったと考えられる。その結果、南０～５の６段階に及ぶ土留板列が形成されたと考えられる。

【池遺構上層の遺構】

91 号遺構（第 43 図、第 15 表、図版 20） 池遺構の北西側にあり、池遺構上層中にある瓦集中部である。瓦は池遺構の西辺付近に多く、池の中心方向にかけて少なくなる。含まれる瓦の大部分は平瓦片であり、被熱していた。また、瓦の含まれる土層も焼土を多く含んでいる。池遺構の西にある第３層の盛土の側面から池遺構上層に流れ込んでおり、91 号遺構の上層には池遺構上層、第２層の順に盛土が行われている。つまり、第３層の盛土造成後にも継続して池遺構の埋立てが行われていたということになり、第３層は池遺構を完全に埋立てる以前から造成された盛土であることがわかる。

73 号遺構（第 44 図、第 17 表） Ⅱ・Ⅲ区の境界線の南側で検出した。池遺構上層にあり、南側は調査範囲外へ続いている。底板と側板を検出したが、側板は削平されており、南側の一部で残存している。底板は２枚確認し、南北に連なっていた。底板は特に接手加工等はされておらず、並べられているに過ぎない。形状から木樋と考えられるが、本遺跡から検出したいずれの木樋よりもかなり太い。また接続する遺構も不明であるため、機能等は不明である。

90 号遺構（第 44 図、第 23 表、図版 20） 池遺構の中央西寄りの上層内にある。底板と側板を組み合わせ､巻頭釘で留めた箱状の木枠である。内部に人頭大の礫が１つある。木枠の周辺に掘方はない。池遺構が機能していた時期に、人頭大の礫を重石として沈められたものと推定される。

■池遺構の導水施設

池遺構の北西、61 号遺構 D にあたる護岸に木樋が３条組み込まれ、それらの端部は池遺構の内部に突き出ていた。これらの木樋は池遺構の外部にあたる西側から続いており、調査の結果、木樋・竹樋・木製枡を組み合わせた遺構であることがわかった。これらを池遺構に水を流し込むため、あるいは池から水を取水するための施設であったと推定し、導水施設として報告する。

池遺構の導水施設は３系統確認された。本報告では、新しいものから順に、導水系統１～３と分けて記述する。後述の 66 号遺構も導水施設の一部であった可能性があるが、直接の接続が見られなかったため、分けて報告している。なお、各遺構出土の木樋について、樹種同定ならびに年輪年代学的検討を依頼し、Ⅳにご寄稿いただいた。

【導水系統 1】

木樋１条（80 号遺構）、竹樋２条（78・79 号遺構）、木製枡１基（75 号遺構）からなる。78～80 号遺構は全て 75 号遺構に接続する。78 号遺構が 77 号遺構の上層に通っていることから、導水系統２よりも新しいものである。

80 号遺構（第 45・46 図、第 17 表、図版 21） 西端は 75 号遺構に連結する。東端は 61 号遺構の石積に組み込まれ、胴木に接して設置されている。ほぼ水平に設置されており、木樋内部には砂を多量に含む粘土質土が詰まっていた。止水の栓をともなわないため、池遺構の廃絶時まで機能していたものと考えられる。使用した木樋の蓋は一枚蓋であり、胴は一本の木材をくりぬいたものである。蓋と胴は釘で留められている。釘は細身で長身の巻頭釘が主体だが、犬釘もある。75 号遺構に差し込

んで連結するため、連結孔に合わせて少し削っている。また、61 号遺構側も、石積に合わせて削られている。

78 号遺構（第 45 図、第 18 表） 南北に設置された竹樋で、77 号遺構の上位にある。腐敗しており、遺存状態は悪い。北端は 75 号遺構の側板に連結孔を設け、差し込んで連結している。南側には木製継手があり、継手に差し込まれた状態で検出した。継手より南側は検出できなかった。

79 号遺構（第 45 図、第 18 表） 東西に設置された竹樋である。腐敗しており、遺存状態は悪い。東端は 75 号遺構側板に連結孔を設け、差し込んで連結している。西端は検出できなかった。なお、79 号遺構を西に延伸した先に 66 号遺構がある。66 号遺構の側面には孔が穿たれていたことから、79 号遺構が 66 号遺構に接続していた可能性がある。

75 号遺構（第 45 図、第 19 表、図版 21） 平面方形の木製枡である。数枚の板材を連結した底板の上に、側板を乗せ、外側から釘留めしている。側板は上下 2 段を確認し、上段の上端部は削平のためか削られていた。また、75 号遺構の外側に崩落した側板と考えられる板材もあり、さらに上段まで側板があった可能性がある。西側面に 79 号遺構との連結孔、南側面に 78 号遺構との連結孔、東側面に 80 号遺構との連結孔がある。西と南の連結孔はやや高く、東の連結孔は底面に近い高さにあるため、75 号遺構は 78・79 号遺構から集めた水を、80 号遺構へ流す機能があったと考えられる。

【導水系統 2】

木樋列　2 条（64b・76 号遺構）、木製枡 1 基（77 号遺構）からなる。77 号遺構が 78 号遺構に切られることから、導水系統 1 よりも前に作られたものであると考えられる。導水系統 3 は導水系統 2 の下位にあるため、導水系統 2 が新しいものである。

64 号遺構（第 44 図、第 17・18 表、図版 20） 64 号遺構は竹樋（64a 号遺構）と木樋（64b 号遺構）からなる。当初同一の遺構と考えたが、掘方の観察により、64b 号遺構の掘方を掘削して 64a 号遺構を設置していることがわかった。両者を別の遺構と分けて報告する。

64a 号遺構は、竹樋とそれに接続する木製継手を検出した。竹樋の東端は木製継手に接続し、西端は調査範囲外まで延びている。また、52 号遺構の下層でも竹樋の痕跡を検出したため、継手から東へ向けて竹樋が延びていたものと考えられる。

64b 号遺構は、64a 号遺構の下位で検出した木樋である。西端は 64a 号遺構付近で途切れている。東端は 52 号遺構で壊されているものの、延伸先には 76 号遺構があるため、両者は接続していたものと考えられる。なお、64b 号遺構周辺は第 1 層の撹乱や 52 号遺構の建物基礎があり、当初 64b 号遺構も撹乱に含まれると同一の木材と認識して掘削してしまったため、中央部分の木樋や、木樋の蓋は失われている。接続すると考えられる 76 号遺構も組み合わせの木樋であり、64b 号遺構の木樋も組み合わせであったと考えられる。

76 号遺構（第 45 図、第 17 表、図版 21） 77 号遺構の東西にあり、どちらも 77 号遺構に連結する。西側を 76 号遺構 a、東側を 76 号遺構 b として報告する。76 号遺構 a は西端を 52 号遺構によって失っているが、延伸先に 64b 号遺構があるため、接続していたものと考えられる。東端は 77 号遺構に連結する。木樋の蓋は腐敗して崩れており、部分的な検出となった。胴は組み合わせである。77 号遺構との連結箇所に、特に加工は見られなかった。内部には、砂と灰色粘土ブロックを含む黒色土が詰まっていた。

76 号遺構 b の西端は 77 号遺構に連結し、連結箇所には木製の栓が設けられていた。栓は角状で 76 号遺構 b に合うように加工されている。東端は 61 号遺構の石組に組み込まれ、池遺構に接続する。木樋の蓋は撹乱を受けているうえ、全体的に腐敗しており、細かく割れていた。胴は組み合わせである。東端、西端ともに接続のための加工は見られなかった。また、内部には 76 号遺構 a と同様に砂と灰色粘土ブロックを含む黒色土が詰まっていた。76 号遺構 a・b はほぼ水平に設置されているが、僅かに東に向かって傾斜している。西から東へ、池遺構方向に向かって導水していたと想定される。

77 号遺構（第 45 図、第 17 表、図版 21） 平面方形の枡である。底板の上に側板を乗せ、外側から釘留めしている。上半は壊されており、78 号遺構が通っていたことから、導水系統 1 を設置した際に壊されたと考えられる。東西で 76 号遺構 a･b と連結する。両者は底板に乗るように連結されており、高さの差はない。

【導水系統 3】

木樋列 1 条（88 号遺構）と木製枡 1 基（92 号遺構）からなる。導水系統 2 の下位にあり、導水系統 3 の後に導水系統 2 が設置されている。

88 号遺構（第 47 ～ 51 図、第 17 表、図版 21 ～ 22） 92 号遺構の東西に検出した木樋と木製継手の組み合わさった遺構である。木樋は 4 本検出し、a ～ d の記号を振った。88 号遺構 d と継手は 52 号遺構の杭の合間で検出したが、杭による損傷はなかった。西から a → d →木製継手→ b → 92 号遺構→ c の順に接続しており、継手から西ではやや北に折れて木樋が設置されている。また、88 号遺構 a･d は、33 号遺構の裏込めを掘り込み、裏込めに混入する割栗石を残して木樋の支えとして設置している。52 号遺構以東では 33 号遺構の石積遺構が撤去されており、埋立て土中に 88 号遺構 b・c と 92 号遺構が設置されている。

88 号遺構 a の西端は調査範囲外、東端は 88 号遺構 d と連結している。木樋の東端は凸状に加工され、88 号遺構 d の西端に連結する。木樋の蓋は一枚蓋、胴は組み合わせである。組み合わせられた板は、底板が 8 cm、側板が 6cm と厚手であり、くりぬきの木樋に見まがうほどである。

88 号遺構 d の西端は凹状に加工され、88 号遺構 a の東端と連結する。東端は凸状に加工され、木製継手と連結する。蓋は一枚蓋で、手斧による加工痕が著しい。胴は組み合わせである。88 号遺構 a と同様に厚手の板材を使用している。木製継手の西端は凹状に加工され、88 号遺構 d の東端と連結する。東端は凸状に加工され、88 号遺構 b と連結する。

88 号遺構 b の西端は凹状に加工され、木製継手と連結する。東端は凸状に加工され、92 号遺構に連結する。88 号遺構 a・d の東端が台形の凸状に加工されているのに対し、88 号遺構 b の東端は長方形の凸状に加工されており、92 号遺構の連結部の形状に合わせていると考えられる。蓋は一枚蓋で、胴はくりぬきである。胴に使用した材は四つ割り材とみられる。

88 号遺構 c の西端は 92 号遺構に連結するが、特に加工は見られない。東端は 61 号遺構の胴木下部から池遺構内部に向けて突き出ている。61 号遺構の構築より前に設置されたものと考えられる。また、東端は削られて、断面円形となっている。さらに円柱状の栓が設置され、木樋の上から金輪を嵌めて固定している。金輪を嵌める部分は一段掘り込まれ、金輪が外れないようになっている。蓋は一枚蓋で、胴はくりぬきである。88 号遺構 b と同様に四つ割り材が使用されている。

92 号遺構（第 47・48 図、第 19 表、図版 21 ～ 22） 平面方形の木製枡である。底板に側板を乗せ

て外側から釘留めしている。釘は細身で長大であり、先端部の鋭い巻頭釘である。西側面には方形の孔を設けて、88 号遺構 b 東端が連結する。東側面にも方形の孔を設けて 88 号遺構 c が接続する。88 号遺構 b の連結孔がやや高く、88 号遺構 c の連結孔はやや低い位置に設けられている。底面もやや東に傾いていることから、88 号遺構 b から 88 号遺構 c の方向へ導水したものと考えられる。また、覆土からは側板の一部とみられる炭化材や、金属製の網（第 150 図 110）が出土している。網は枡内部に設置された可能性が考えられる。

■土留板列

池遺構北西に接続する導水施設の調査を行ったところ、導水施設と並行して土留板列を 2 条検出した。33 号遺構前面の土留板列とほぼ同じ位置で検出したため、当初 33 号遺構が導水施設の下層にあるものと考えた。しかし、周囲を掘削しても石積遺構はなく、別の遺構であると判断した。

81 号遺構（第 52 図、第 16 表、図版 22）　Ⅲ区北側で検出した。西端は 52 号遺構の杭により失われ、東側は池遺構の底面まで続き、61 号遺構と接するあたりまで検出した。土留板は最大で 2 段検出し、土留板列の北側に杭が打ち込まれていた。81 号遺構の下層には、33 号遺構の土留板列を支えるためのアンカー状木製品が残置されていたものの、石積遺構の間知石や裏込め、胴木、胴木支えは遺存せず、痕跡も見られなかった。つまり、33 号遺構に関連したものは意図的に撤去されたと考えられる。

94 号遺構（第 52 図、第 16 表、図版 22）　81 号の北側に並行する土留板列である。西端は 52 号遺構の杭により失われ、東端は池遺構底面まで検出した。土留板は 1 段検出し、土留板列に伴う杭はなかった。

81・94 号遺構はともに、61 号遺構 D の下位から池遺構の底面まで続いている。池遺構北西部を改修に際して、61 号遺構 D の周辺の石積を一度解体し、33 号遺構を胴木まで撤去した後、81・94 号遺構を設置して土留めを行いながら埋立てを行ったものと考えられる。

76･80･88 号遺構の木樋は、81･94 号遺構によって埋め戻された土層を掘り込んで設けられている。81･94 号遺構の土層（第 52 図 C-C'）をみると、埋立て土は 81･94 号遺構を境にして変化している。各木樋は 81 号遺構より南側に設けられており、81 号遺構以南の 1 ～ 5 層は木樋の設置に伴う盛土層と考えられる。

94 号遺構は 81 号遺構以北の盛土の中にある。81 号遺構の杭が北側に設置されていることから、埋立ては南から行われたと考えられる。まず 81 号遺構以南を埋立て、次いで、81 号遺構以北を埋立てたのだろう。最初に 18 ～ 20 層を埋立てた後、94 号遺構を設置し、13 ～ 17 層を順次埋め戻したと考えられる。その後、10 ～ 12 層を埋立てて 81 号遺構以北の埋立てを完了した。先述のとおり、81 号遺構以南は 76・80・88 号遺構の設置のために再度掘削され、5 層より上層に木樋が設置されている。6 層上面は水平であり、また、6 層の立ち上がりを超えて水平面が続いている。これは 88 号遺構の設置前に一度削平して 5 層の盛土で整地したと考えられる。そうであれば、6 ～ 9 層は 33 号遺構撤去直後に埋立てた土層という可能性がある。また、5 層上面も水平であり、3 層の盛土を行った際にも削平があったのかもしれない。76・80・88 号遺構の設置に伴って順序立てて盛土や整地が行われていたと考えられる。

これら 1 ～ 5 層の盛土は、基本土層の第 4 層を形成する盛土である。つまり、第 4 層は導水系統 1 ～ 3 の設置に伴って設けられた盛土であると考えられる。

■その他の遺構

【板基礎列】

32 号遺構（第 53 図、第 20 表、図版 22 ～ 23）　Ⅰ区北側の 33 号遺構の覆土上面に構築された遺構である。方形の板が東西方向に一定間隔を隔てて並べられており、上面のレベルもほぼそろっているため、一連の板基礎列であると考えられる。使用されている基礎板は、概ね、長軸 40 ～ 50cm、短軸 30 ～ 40cm、厚さ 5 ～ 15cm の範囲に入るが、32 号遺構 -4 のみ長軸 60cm とやや大きい。なお、32 号遺構 -8 は基礎板が取り除かれ、基礎板の痕跡のみ検出した。また、32 号遺構 -6 は確認面以下に沈みこんでおり、原位置から動いている可能性がある。基礎板の下部には径 15 ～ 20cm の杭があり、基礎板と杭は合釘で固定している。基礎板の下層はそれぞれ構造が異なり、32 号遺構 -1・4 は基礎板の下部に掘方を持ち、そのほかのものは杭の上に基礎板が乗せられているだけである。杭は調査範囲の北壁際であり、杭を抜き取ることはできなかった。32 号遺構 -1・4 の掘方は、平面は隅丸方形を呈し、基礎板の下層は径 5 ～ 8cm の小礫や貝片を含んだ土層で埋められている。各基礎板間の芯々間の距離は、32 号遺構 -1・2 間が 2m、32 号遺構 -2・3 間が 0.8m、32 号遺構 -3・8 間が 2m、32 号遺構 -8・4 間が 2.2m、32 号遺構 -4・5 間が 4.5m、32 号遺構 -5・6 間が 6m、32 号遺構 -6・7 間が 1.9m を測る。やや異なる間隔もあるが、32 号遺構 -1・2 間、32 号遺構 -3・8 間、32 号遺構 -6・7 間は概ね約 2m 間隔であり、京間を採用したものと推測される。これに従えば、32 号遺構 -5・6 間が 6m は 3 間となるだろう。一方で、32 号遺構 -4・5 間は京間では 2 間と 4 分の 1 となり、江戸間とすれば 2 間半となる。32 号遺構 -2・3 間も京間の半間とするよりも、江戸間の半間の方が近いであろう。32 号遺構 -8・4 間は京間、江戸間のどちらでもやや広い。全体に、どちらの尺度を採用したか判然としない。また、32 号遺構 -1 の掘方からガラス製品の破片が出土している。小破片であり未報告だが、近代に属するものと考えられ、本遺構は近代の遺構と考えられる。

【礎石列】

45 号遺構（第 53 図、第 21 表、図版 23）　32 号遺構の南側にあり、同様に 33 号遺構の覆土上面に構築された遺構である。2 個体の人頭大の礫が並んでおり、礫は長径 40cm 前後のほぼ同じ大きさのものを使用している。礫の下部には掘方があり、瓦片や小礫が詰まっていた。礫の芯々間は 1.8m である。こちらは江戸間を採用したと考えられる。人頭大の礫は他に見られず、周囲に礫を抜き取った痕跡はないため、この 2 個体のみと考えられる。32 号遺構と関係する遺構である可能性もあるが、不明である。

【井戸】

66 号遺構（第 54 図、第 22 表、図版 23）　Ⅲ区北西隅にあり、33 号遺構の間知石護岸の一部を取り除いて設置されている。底板の下位には 33 号遺構の間知石護岸の最下段が残る。後世の撹乱の影響を受けて出土状況は良くないものの、側板と底板、掘方を確認した。確認した側板は 1 段であり、底板は北側の一部で消失していたものの、多くを検出した。溜井であったと考えられる。また、破損した側板の端部には円形の穴があり、64 号遺構 a や 79 号遺構などの竹樋と接続していた可能性がある。このため、先述の池遺構に関連する導水施設の一部であった可能性も考えられる。

【箱状木枠】

82 号遺構（第 54 図、第 23 表、図版 24）　Ⅲ区中央で検出した。確認面とした第 4 層上面よりも少

し高い位置にあり、さらに上位から掘り込んだ掘方が存在した可能性もあるが、調査では確認できなかった。検出した際には周囲に多くの焼土が散っており、箱状の木枠の内部には焼土・炭化物が多く含まれており、上層ほど焼土や炭化物は多い。底面付近には平瓦片が幾重にも重なって出土した。平瓦片の接合率は高く、完形に復元できるものもいくつか見られ、完形の平瓦が敷き詰められている様であった。また、下層の瓦には被熱の痕跡は少ないが、上層の瓦には顕著な被熱痕がみられた。木枠は巻頭釘留めで、東辺側板の内側には焼けた痕跡が見られた。また、周囲を取り囲むように、5 本の杭を検出した。箱状木枠との関連は不明であるが､82 号遺構に伴う可能性もあるので､図中に示した。

本遺構は、箱状木枠の中に焼土、炭化物、瓦などを投棄した廃棄土坑と考えられる。しかし、木枠の東側内面には焼けた形跡があり、その付近には焼失が固まって投棄されていた。焼土の中に投棄された瓦は被熱し赤褐色に変色していた。木枠や瓦が被熱するということは、高温を保ったままの焼土を投棄したか、木枠内で火が熾ったということである。一方で、底面直上の土層には焼土の混入が少なく、その上層の瓦片は被熱していない。つまり、82 号遺構は火炉付近で焼土等をそのまま投棄するための遺構か、内部で火を扱うために設けられた遺構であった可能性が考えられる。瓦片や底面付近の土層は木枠底面を火から保護する目的であったと推測される。しかし、恒常的に火を扱う施設であれば底面同様に側面も保護していたと考えられるため、82 号遺構は火炉付近で焼土等をそのまま投棄するための遺構であったと推測される。

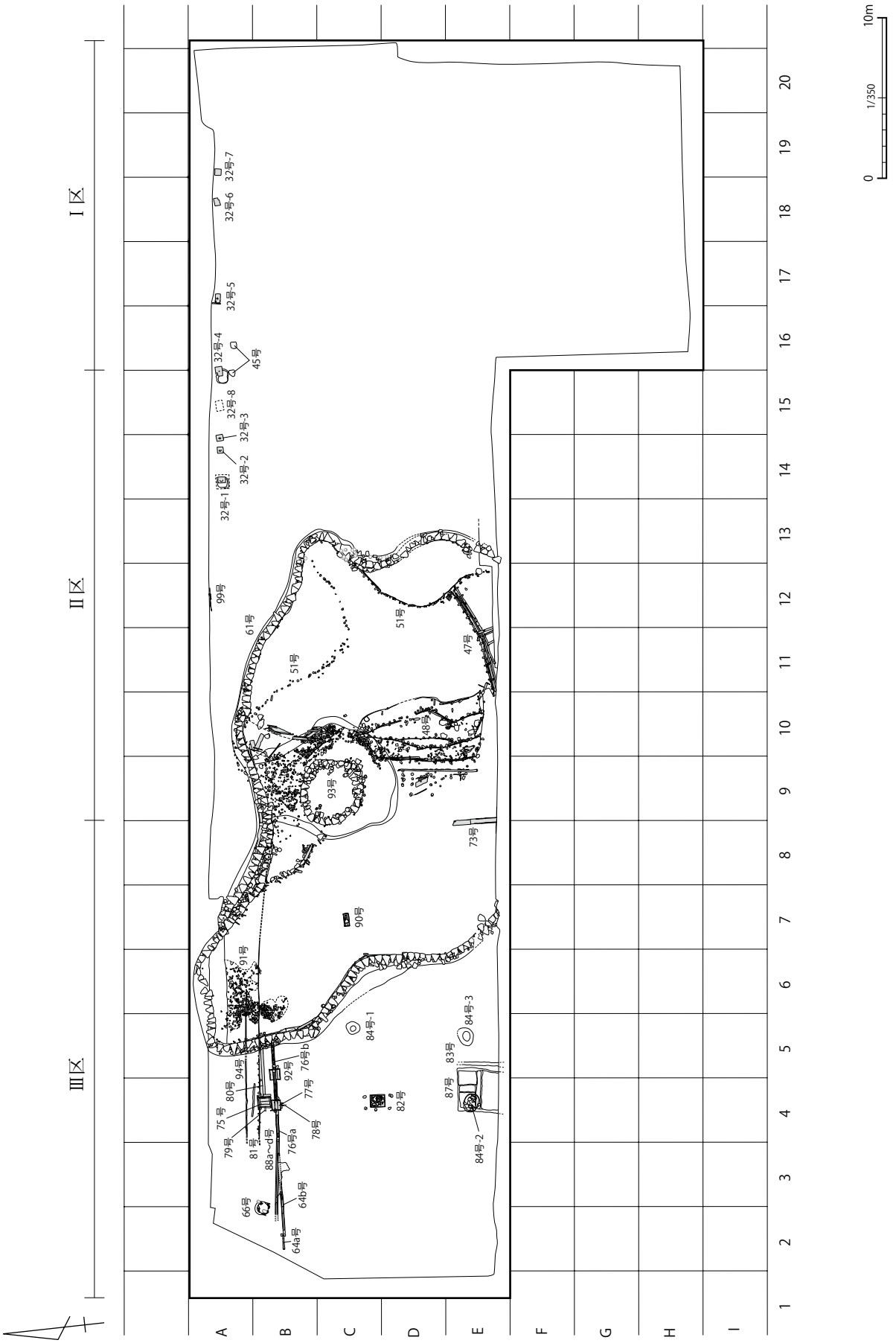
【溝】

83 号遺構（第 55 図、第 24 表、図版 24）　Ⅲ区南側で検出した。56 号遺構南辺の横木・胴木と調査範囲の南壁の間で検出したものの、56 号遺構の内側へは延びていないため、北端は 56 号遺構の杭や横木・胴木の設置によって失われたものと考えられる。深さ 40cm ほどの溝で、覆土には二枚貝の破片が充填されていた。貝種はアサリが目立つ。貝片は溝の範囲を超えて､一部で溝の西側に広がっている。他の遺構との関連が考えにくく、遺構の性格は不明である。

【土坑】

84 号遺構（第 55 図、第 25 表、図版 24）　Ⅲ区南側で検出した。87 号遺構の覆土上面に構築される。同様の形状の浅い円形土坑 3 基を検出し、方形を呈するように並ぶことから一連の土坑とした。各土坑の芯々間は、84 号遺構 -1・3 間は 7.2m、84 号遺構 -2・3 間は 4.2m を測る。84 号遺構 -1・3 は立ち上がりの緩やかな土坑で、出土遺物はない。84 号遺構 -2 は他の 2 基に比べて鋭角に立ち上がり、土坑内に礎石と考えられる角礫が充填されていた。建物基礎と推測され、84 号遺構 -2 に充填された角礫は礎石であると考えられる。

87 号遺構（第 56 図、第 25 表、図版 24）　Ⅲ区南側の調査範囲の壁際で検出したため、南側は調査範囲外である。83 号遺構に隣接し、84 号遺構は 87 号遺構を掘り込んで構築される。検出範囲の東西軸で 2.7m、深さ 1.7m を測り、第 2 次調査で検出した土坑の中ではもっとも大規模なものである。壁際から段階的に掘り下げて遺構を確認した。87 号遺構は第 4 面から掘り下げられ、自然堆積層まで掘り込まれていた。覆土中には遺物を多く含み、特に小礫、貝片、瓦片のほか、細かく砕いた木片を多く含んでいた。廃棄土坑と推測される。



第 29 図　III面遺構全体図（1/350）

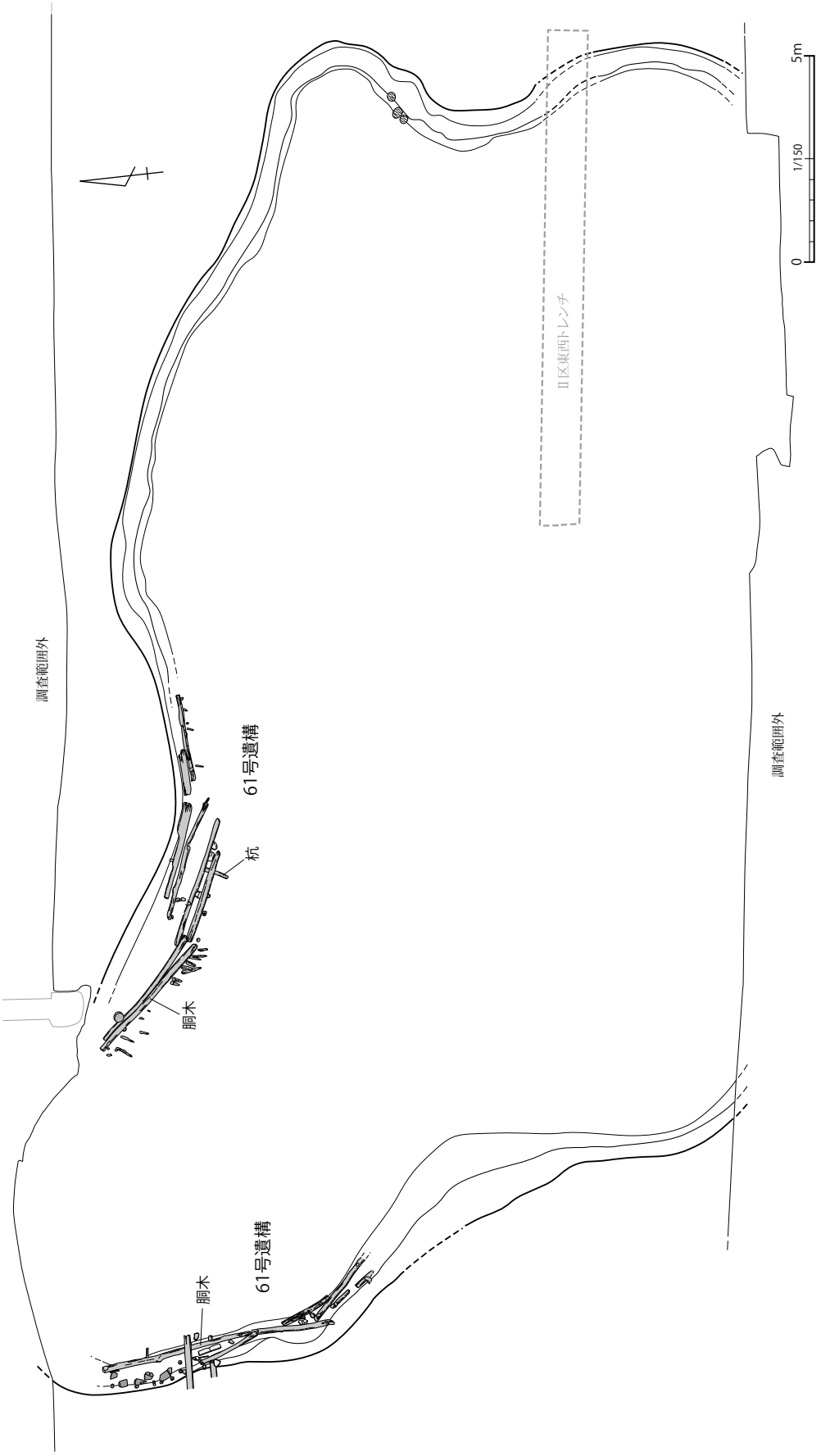
第 30 図　池遺構全体図（1/150）

第30図A-A′

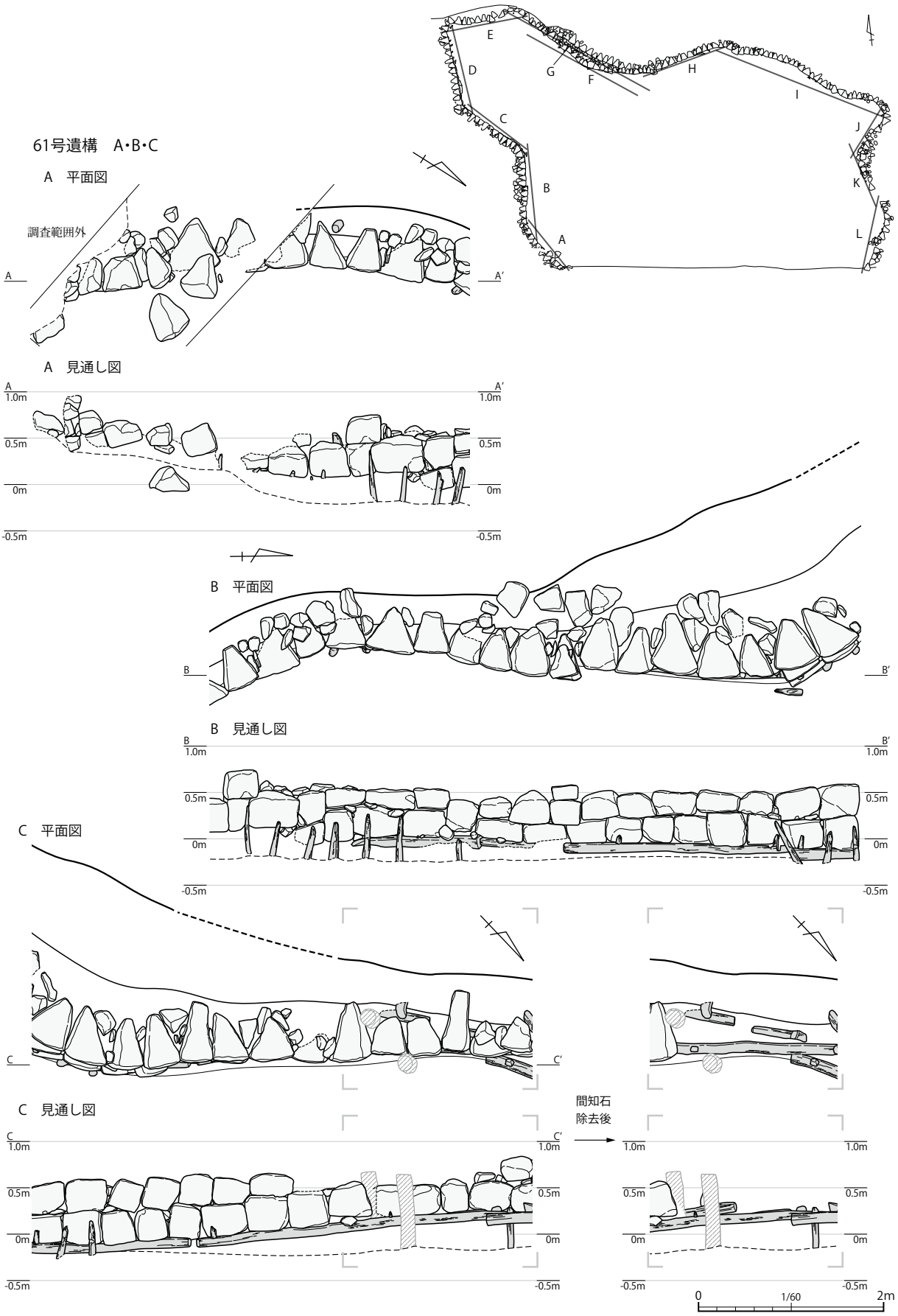
1　7.5YR3/2（黒褐色）締り強、粘性やや強。小礫・貝片・木片混、遺物（瓦）多。粘土質土層。
2　7.5YR3/2（黒褐色）締り弱、粘性弱。木片・薄板片・遺物・葉枝（植物片）多。
3　空洞
4　7.5Ｙ3/1（オリーブ黒色）締りやや強、粘性強。焼土粒・炭化物粒微。含水粘土層。
5　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締りやや強、粘性やや強。φ30mm焼土・貝片・遺物混。φ30mm青灰色粘土ブロックを主体とし、僅かに砂混じる。
6　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締りやや強、粘性強。小礫・瓦片・遺物多。φ50～80mm青灰色粘土ブロック主体とし青灰色砂質土がシア状に入る。
7　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締りやや強、粘性強。φ10～20mm青灰色粘土ブロック微、φ2mm炭化物粒5%混、φ10mm以下焼土粒・小礫・貝片・木片・遺物（瓦）混。焼けた瓦片有。砂混じり粘土層。やや褐色がかる。
8　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り強、粘性やや弱。φ30mm以下炭化物微、小礫混。７層に近似するが、より黒色がかり、粒度が僅かに大きい。僅かに含水する。
9　7.5Y2/1（黒色）締り強、粘性やや強。φ5～10mm焼土粒5%混、小礫混。粘土層。
10　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締りやや強、粘性強。φ8mm焼土粒・φ5mm炭化物粒微、貝片混。粘土層。やや褐色がかる。
11　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締りやや弱、粘性強。φ10～30mm焼土粒微、小礫・瓦片・貝片・木片混。砂混じり粘土層。含水量が多い。
12　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締りやや弱、粘性強。φ3～5mm焼土粒・遺物微。粘土層。含水量が多い。
13　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締りやや強、粘性やや強。φ10～30mm焼け瓦片・小礫・遺物・木片多。やや褐色がかる。砂混じり粘土層。
14　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締りやや強、粘性強。瓦片混。含水のある粘土ブロック層。
15　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り強、粘性やや強。14層類似だがより締っている。粘土ブロック層。
16　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締りやや強、粘性やや強。貝片混。14層類似だがやや黒色がかる。粘土ブロック層。
17　3.5Y3/1（オリーブ黒色）締りやや強、粘性やや弱。瓦片・木片・薄板片混。粘土質土。
18　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り強、粘性弱。φ3～10mm焼土粒・φ2mm炭化物粒10%混、貝片・瓦。遺物多。砂質土層。
19　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り強、粘性やや弱。20層類似。砂混じる。
20　7.5Y2/2（オリーブ黒色）締りやや強、粘性やや強。19層類似だが砂粒なし。
21　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締りやや強、粘性やや弱。19・20層類似。
22　10Y2/1（黒色）締りやや弱、粘性やや強。φ3～5mm炭化物粒3%。含水のある粘土質土。
23　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締りやや強、粘性やや強。小礫多。砂混じり粘土層。粒度大きい。
24　10Y2/1（黒色）締りやや強、粘性強。含水のある粘土層。
25　7.5Y2/1（黒色）締り弱、粘性強。瓦・木片遺物多。ややオリーブ色がかる。粘土層。
26　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り弱、粘性強。貝片・木片・瓦・遺物多。粘土層。ワラ状繊維によるムシロ状の編物が下面にしかれている。
27　7.5Y2/1（黒色）締り強、粘性強。やや青灰色がかる。瓦を多く含む。粘土層。
28　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締りやや強、粘性強。φ5mm焼土粒微、小礫混。砂質粘土層。
29　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締りやや強、粘性強。φ5～10mm青灰色粘土ブロック30～50%混、小礫混。28層より砂粒多い。砂混じり粘土層。
30　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締りやや弱、粘性強。コモ状繊維多。含水のある粘土層。粒子やや細かい。
31　7.5Y2/1（黒色）締りやや弱、粘性やや強。やや灰色がかる。瓦・コモ状繊維・小礫混。含水のある粘土層。やや粒度大きい。
32　7.5Y2/2（オリーブ黒色）締りやや強、粘性やや強。φ1～3mm焼土粒微。砂混じり粘土層。
33　7.5Y2/2（オリーブ黒色）締りやや強、粘性強。砂混じり粘土層。砂粒の多い部分と少ない部分が斑状。
34　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り強、粘性強。貝片少。粘土層。やや褐色がかる。
35　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り強、粘性やや強。砂混じり粘土層。やや黒色がかる。
36　7.5YR3/2（黒褐色）締りやや強、粘性弱。遺物（瓦・木片）多。2層類似。
37　7.5YR3/2（黒褐色）締りやや弱、粘性やや弱。遺物（植物片・木片）多。
38　7.5YR3/2（黒褐色）締りやや強、粘性やや弱。遺物（貝片・木端・植物片・瓦）多。
39　7.5YR3/2（黒褐色）締りやや強、粘性やや強。遺物混。粘土層。
40　7.5YR3/2（黒褐色）締りやや強、粘性弱。遺物（貝片・瓦・木片）上層に多。
41　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り強、粘性強。植物片僅か、φ3～5mm炭化物粒5～7%混。粘土層。
42　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り強、粘性強。粘土層。φ50mm程度のやや褐色がかった粘土ブロックを斑状。
43　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締りやや強、粘性強。粘土層。石積遺構掘方。
44　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り強、粘性強。粘土層。やや褐色がかる。
45　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り強、粘性強。φ1～3mm炭化物粒3～5%混。粘土層。ややオリーブがかる。緑黄褐色の色素有。
46　7.5Y2/1（黒色）締り強、粘性無。砂質層。やや青灰色がかる。
47　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り強、粘性強。粘土層。

第30・39図B-B′・C-C′

1　7.5Ｙ4/1（灰色）小礫混。粘土層。
2　7.5Y2/1（黒色）締り強、粘性やや強。φ5～10mm焼土粒5%。小礫混。粘土層。
3　7.5Ｙ4/1（灰色）小礫混。粘土層。
4　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締りやや強、粘性強。φ8mm焼土粒・φ5mm炭化物粒微、貝片混。含水のある粘土層。やや褐色がかる。
5　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締りやや弱、粘性強。φ10～30mm焼土粒微、小礫・瓦片・貝片・木片混。含水のある砂質粘土層。
6　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締りやや強、粘性やや強。φ10～30mmの焼土・焼け瓦混、φ10～30mmの炭化物・木片・遺物・貝片多。粘土ブロックを主体とし、含水がある。やや褐色がかる。
7　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締りやや強、粘性強。φ1～3mm炭化物粒・φ20～30mm焼け瓦片・φ30～40mm小礫混。砂混じり青灰色粘土ブロック層。
8　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締りやや弱、粘性強。φ3～5mm焼土粒・遺物微。含水の多い粘土層。
9　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締りやや強、粘性強。小礫少、青灰色粘土ブロック20%混。含水のある砂質粘土層。
10　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締りやや強、粘性やや弱。瓦・礫多。含水のある粘土質土。瓦・礫多。
11　7.5YR3/1（黒褐色）締り強、粘性やや弱。φ3～5mm炭化物粒3～5%混、φ3～8cm焼土粒10～20%混、遺物・木片・瓦・小礫・繊維質多。やや褐色がかる。島の拡張部分。
12　7.5YR3/1（黒褐色）締りやや弱、粘性やや強。φ1～3mm焼土粒・φ1mm炭化物粒微、貝片・小礫少。含水のある粘土層。粒度やや大きい。
13　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締りやや弱、粘性やや弱。φ1～3mm焼土粒・小礫微、貝片多。粘土質土。
14　7.5Ｙ3/1（オリーブ黒　締り強、粘性やや強。小礫・遺物（瓦）多。砂混じり粘土層。瓦を敷き詰めたように重複している。
15　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締りやや強、粘性やや強。木片少、瓦・小礫・遺物多。砂質粘土層。
16　7.5YR3/1（黒褐色）締り強、粘性弱。φ1～5cm焼土・φ1～3mm炭化物粒5～10%混、小礫・瓦片・木片・遺物多。19層よりやや褐色がかる。中の島構築土。
17　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り弱、粘性強。遺物微。粘土層。やや褐色がかる。池遺構下層の土層と同一。
18　7.5YR3/2（黒褐色）締りやや弱、粘性強。φ5mm焼土粒・φ3mm炭化物粒各5%混。含水のある粘土層。
19　7.5YR3/1（黒褐色）締り弱、粘性弱。木片混、遺物・貝片・小礫多。
20　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り強、粘性やや強。やや砂っぽい。小礫含む。池底の貼り粘土の一部か。粘土層。
21　7.5YR3/2（黒褐色）締り強、粘性やや弱。φ5～20cm褐色粘土ブロック（ロームか？）・小礫多。砂質粘土層。砂粒の粒度が大きい。
22　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り弱、粘性強。5層よりやや褐色がかる。含水のある粘土層。褐色土ブロック斑状に混じる。
23　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り弱、粘性強。φ3mm炭化物粒微。含水のある粘土層。
24　10YR2/2（黒褐色）締り弱、粘性有。φ10～30mm礫7～10%混。砂まじり土。石垣の裏込め。
25　7.5YR3/2（黒褐色）締り強、粘性やや弱。φ5～20cm褐色粘土ブロック（ロームか？）・小礫多量。砂混じり粘土層。小礫のためか粒度大きい。
26　7.5GY3/1（暗緑灰色）締り有、粘性強。炭化物・木片微。粘土質。中の島の基盤層。
27　7.5YR2/1（黒色）締り弱、粘性強。粘土層。やや粒度が大きい。
28　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締りやや弱、粘性強。φ1～3cm白色粘土ブロック微。含水の多い粘土層。
29　5Y3/1（オリーブ黒色）締りやや強、粘性強。遺物1%混、φ3～5mm褐色粒子1～3%混。粘土質。自然堆積層に近い盛土。中の島の基盤層。
30　7.5Ｙ3/1（オリーブ黒　締り強、粘性やや強。木片・小礫多。粘土層。やや粒度大きい。
31　7.5Ｙ3/1（オリーブ黒　締り弱、粘性強。φ８～10㎜木質繊維ブロックを斑状に混。含水のある粘土層。
32　10YR4/3（にぶい黄褐色）締りやや強、粘性有。φ5～20mm 礫10～15%混。砂混じり土層。石積遺構の充填土。
33　2.5Y3/1（黒褐色）締りやや弱、粘性有。φ5～20mm礫5～7%混、瓦10%混。粘土ブロックと砂粒が混在する。間知石裏込めか。
34　5Y3/2（オリーブ黒色）締りやや強、粘性有。φ1～10mm砂粒 5～7%混。砂混じり粘土層。石積遺構の基盤か。



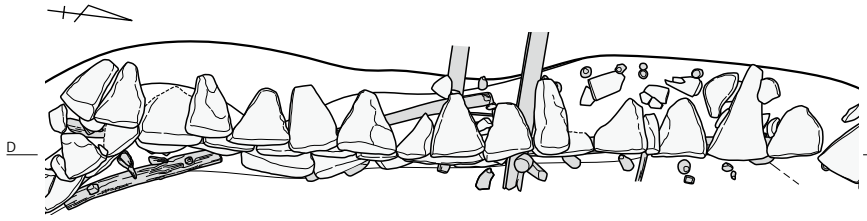
第 31 図　池遺構掘方（1/150）



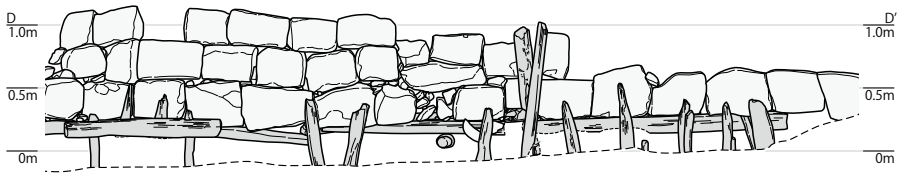
第 32 図　61 号遺構（1）（1/60）

61号遺構　D･E

D　平面図

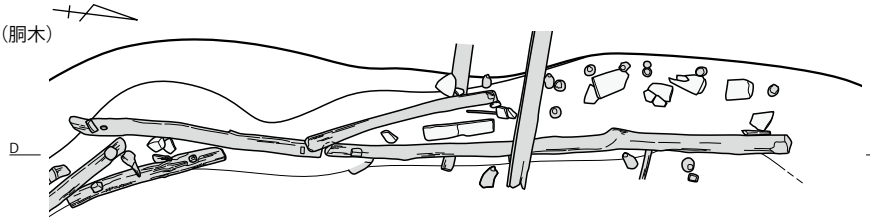


D　見通し図

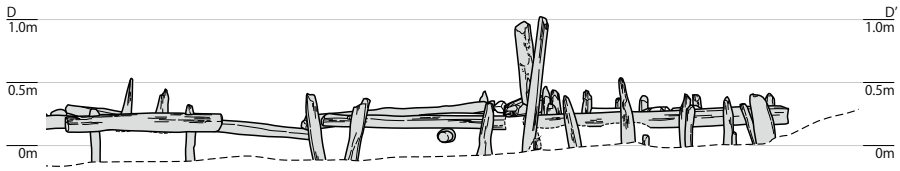


間知石
除去後

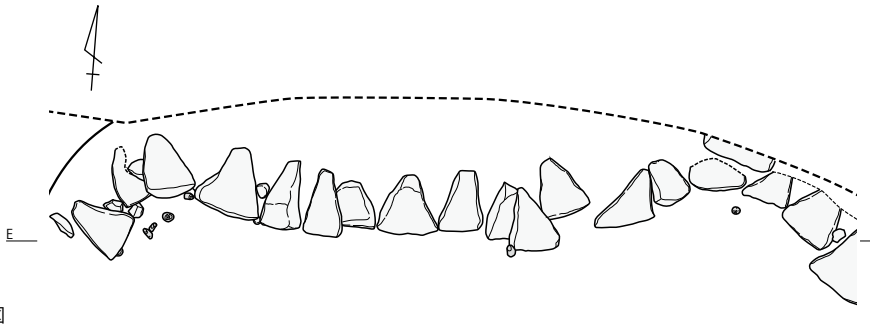
D　平面図（胴木）



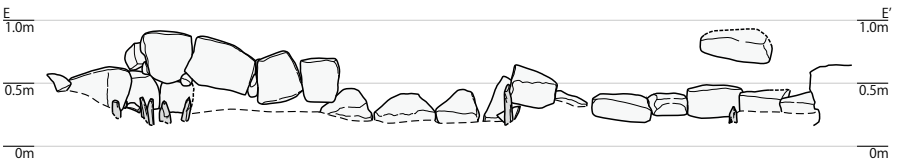
D　見通し図（胴木）

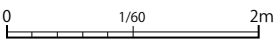


E　平面図



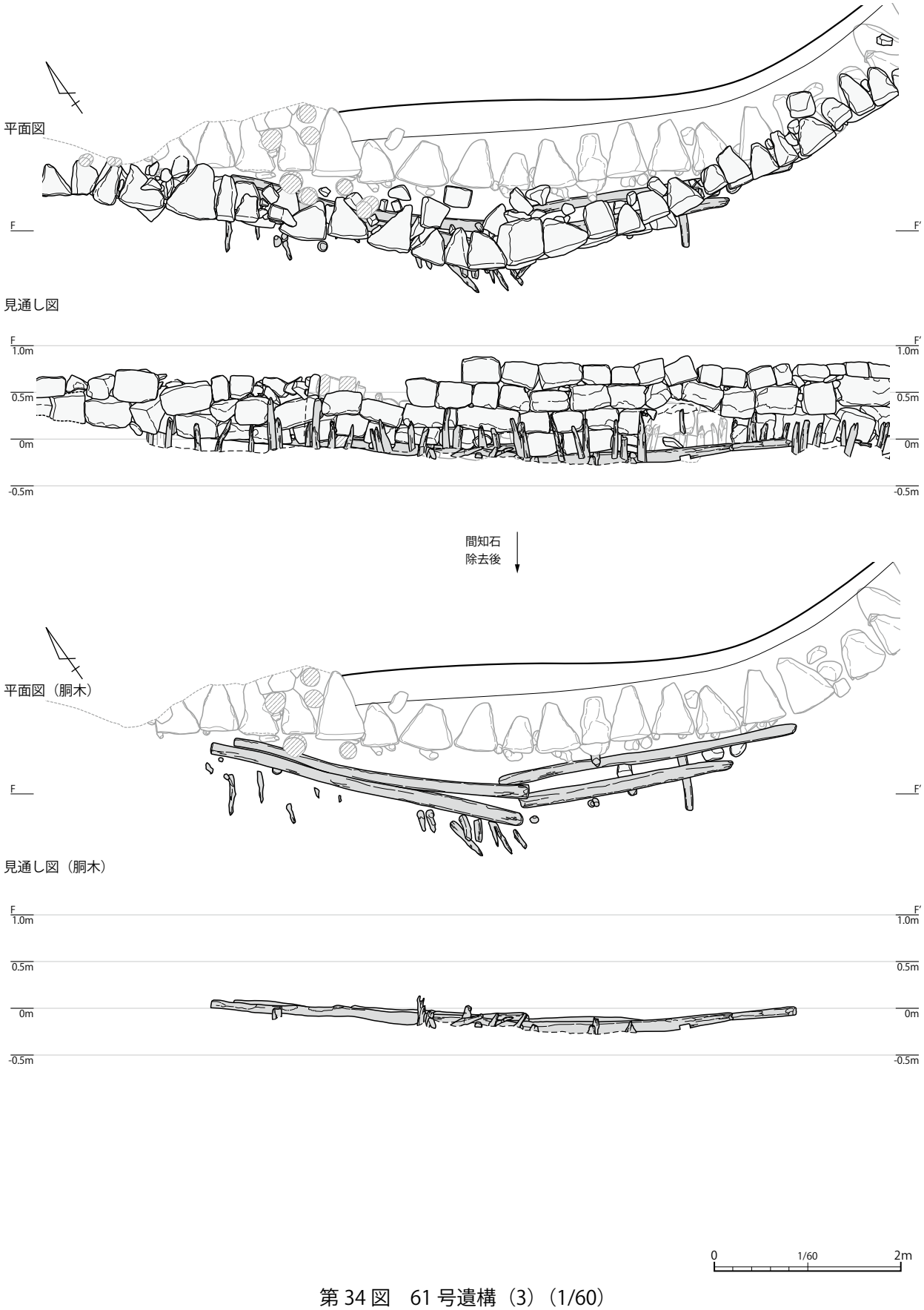
E　見通し図



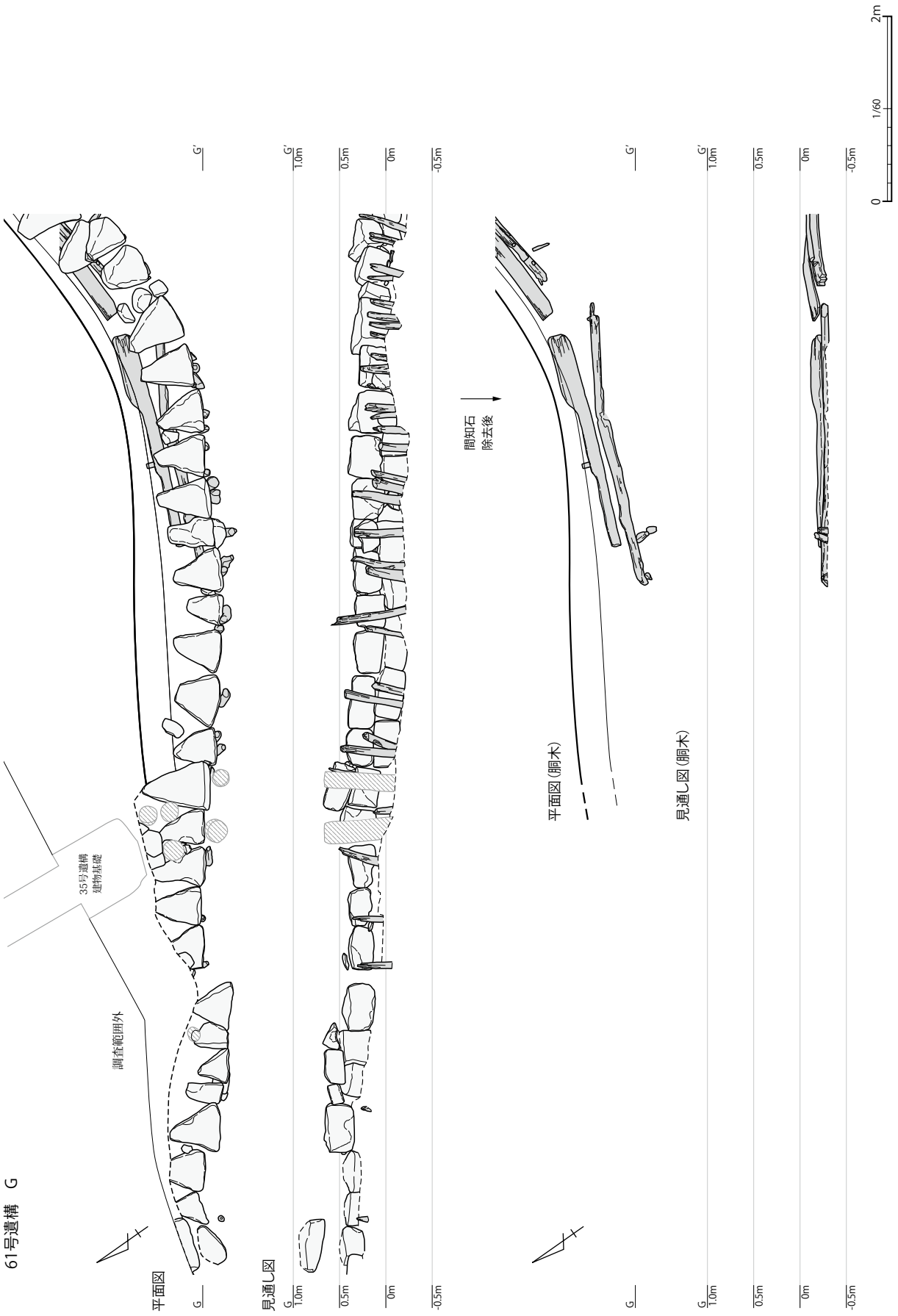


第 33 図　61 号遺構（2）（1/60）

61号遺構　F

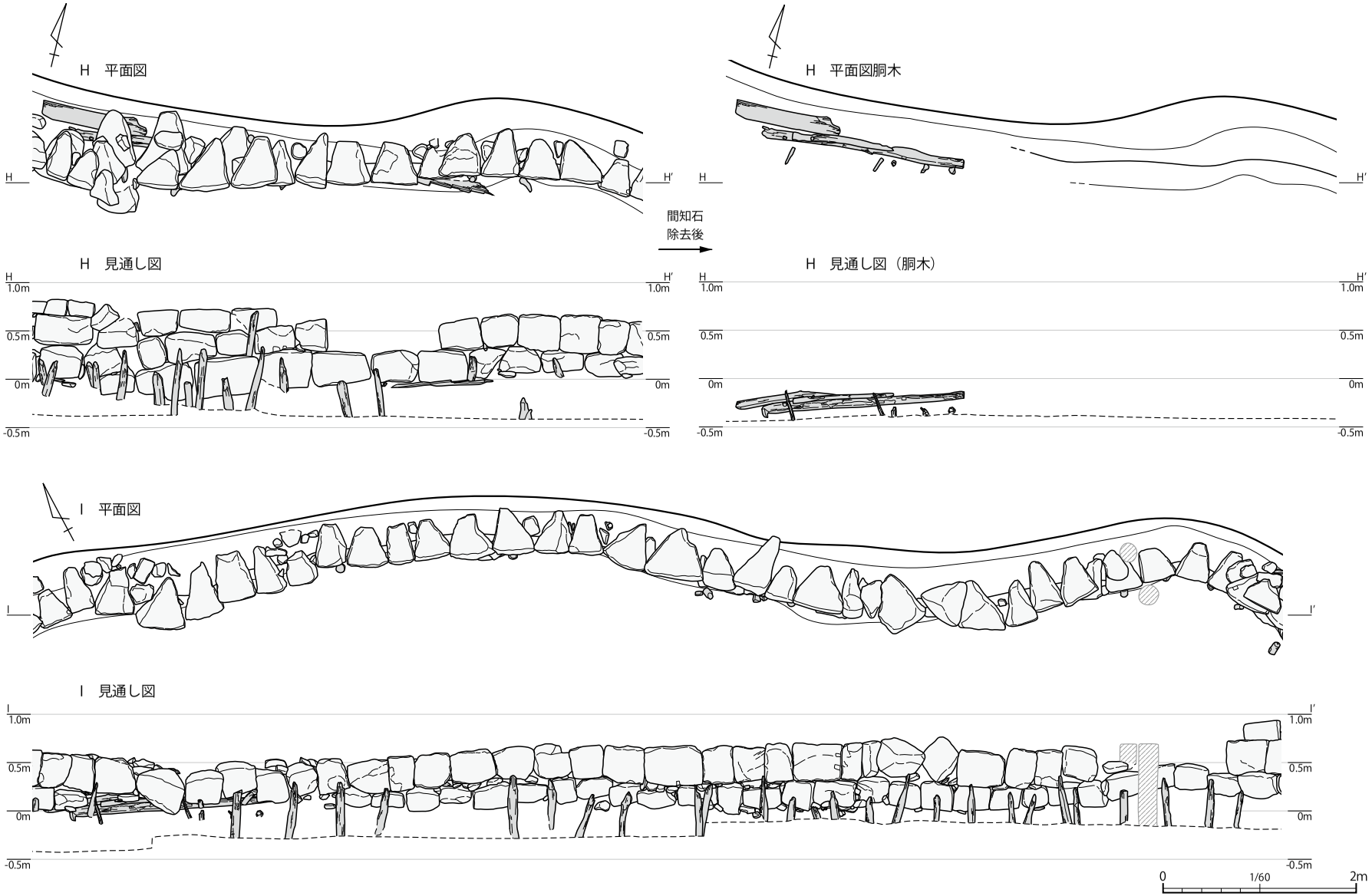


第 34 図　61 号遺構（3）（1/60）



第 35 図　61 号遺構（4）（1/60）

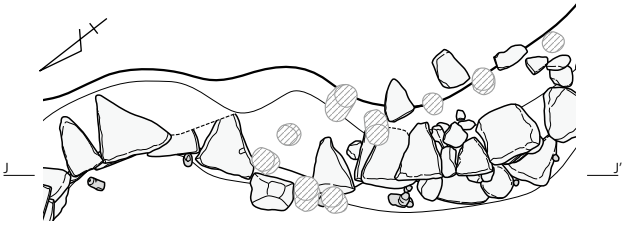
61号遺構　H・I



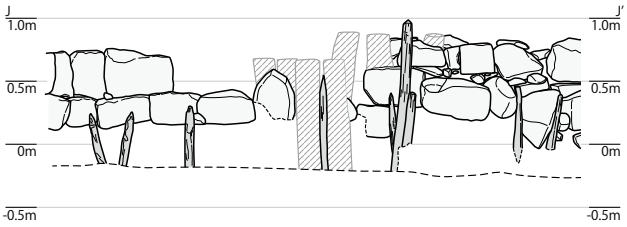
第36図　61号遺構（5）（1/60）

61号遺構　J・K・L

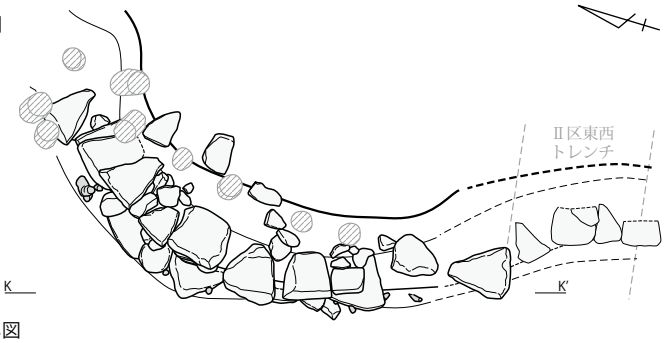
J　平面図



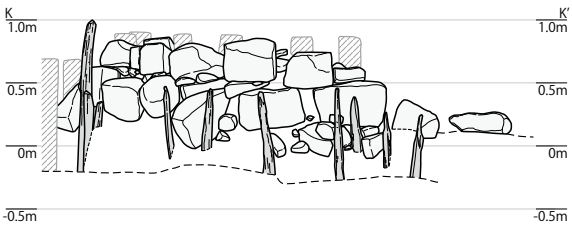
J　見通し図



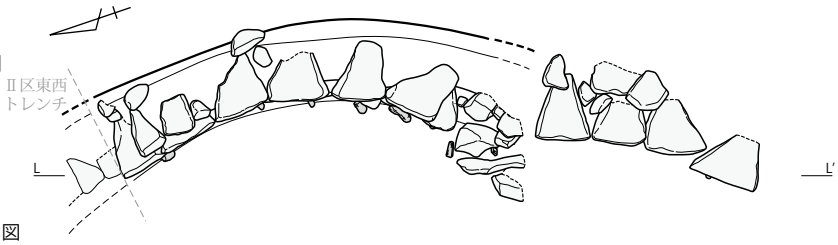
K　平面図



K　見通し図

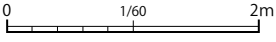


L　平面図



L　見通し図





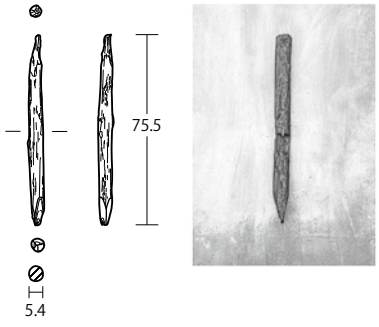
第 37 図　61 号遺構（6）（1/60）



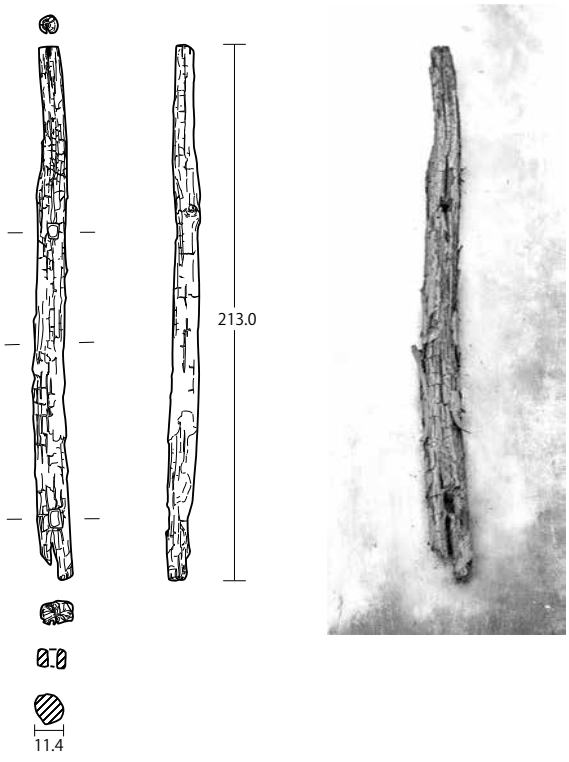
61号遺構　C　胴木



61号遺構　F　胴木



61号遺構　B　石積前面杭



61号遺構　G　胴木

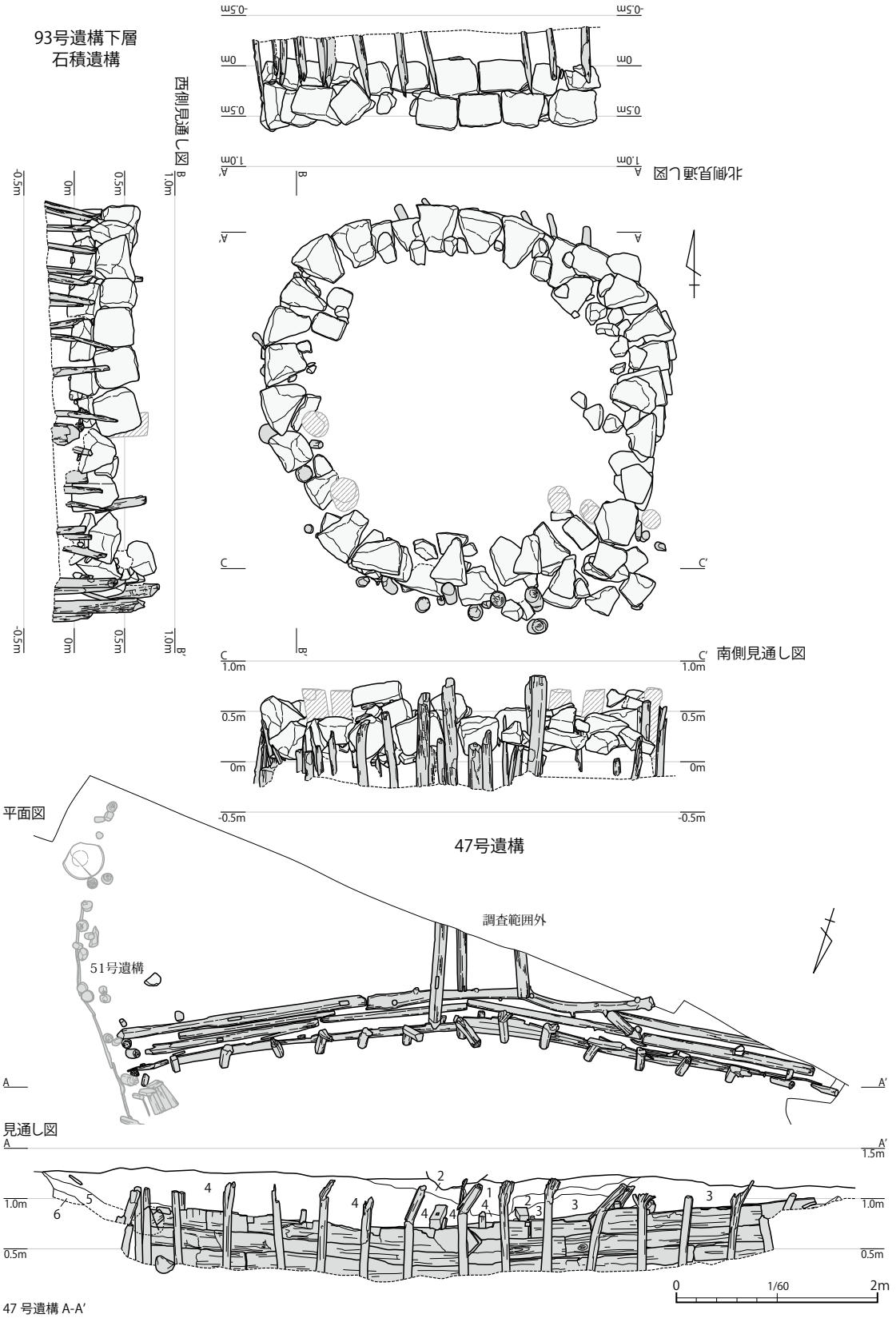
※計測値は残存値。単位は cm。

0　1/30　50cm

第 38 図　61 号遺構（7）（1/30）



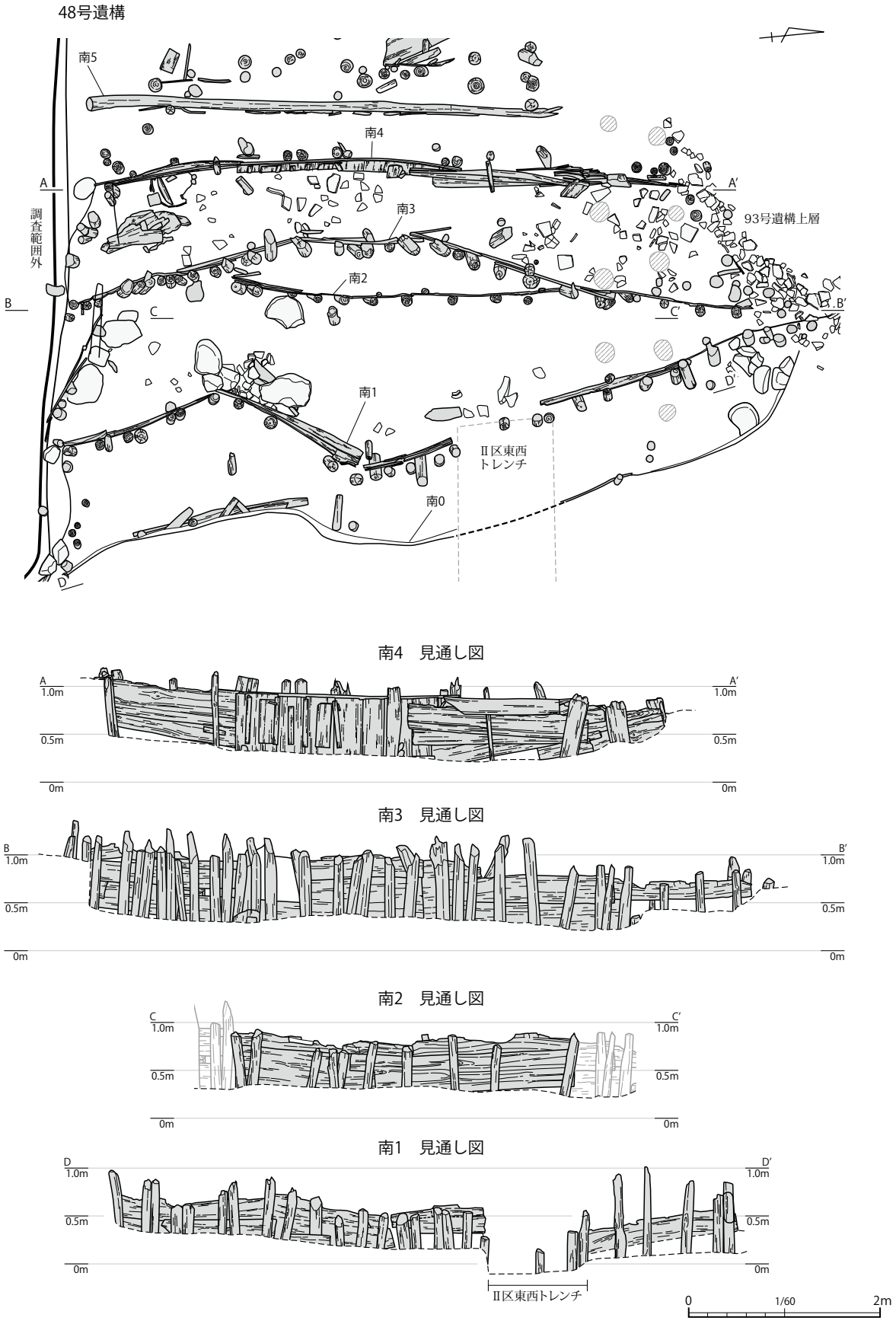
第 39 図　48・93 号遺構（1/80）



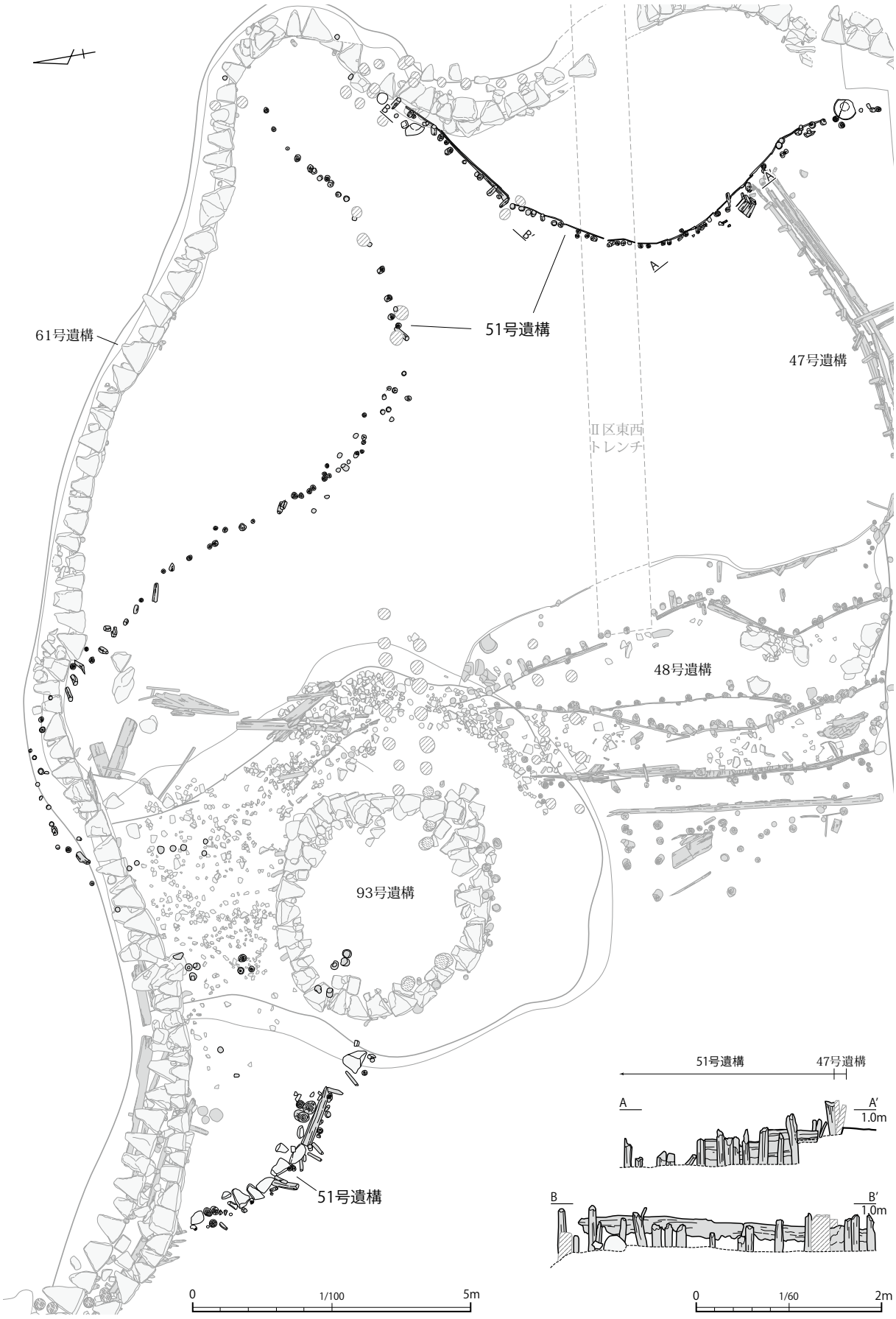
47 号遺構 A-A′

1　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締りやや強、粘性強。φ5mm焼土・白色粘土・炭化物5～7%混、遺物多。砂混じり粘土層。焼土により褐色がかる。
2　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締りやや強、粘性強。φ1～3mm焼土粒・炭化物粒1～3％混、遺物多。砂混じり粘土層。
3　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締りやや強、粘性強。φ1～3mm焼土粒・炭化物粒1～3％混、木材混、遺物・貝片多。砂混じり粘土層。
4　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締りやや強、粘性強。φ1mm炭化物粒・φ1～5mm焼土粒・φ3cm程度白色粘土ブロック1～3%混、遺物多。砂混じり粘土層。
5　7.5Y2/1（黒色）締りやや強、粘性強。φ1～3mm礫・焼土粒混、遺物多。砂混じり粘土層。
6　7.5Y2/1（黒色）締りやや強、粘性強。遺物微。砂混じり粘土層。

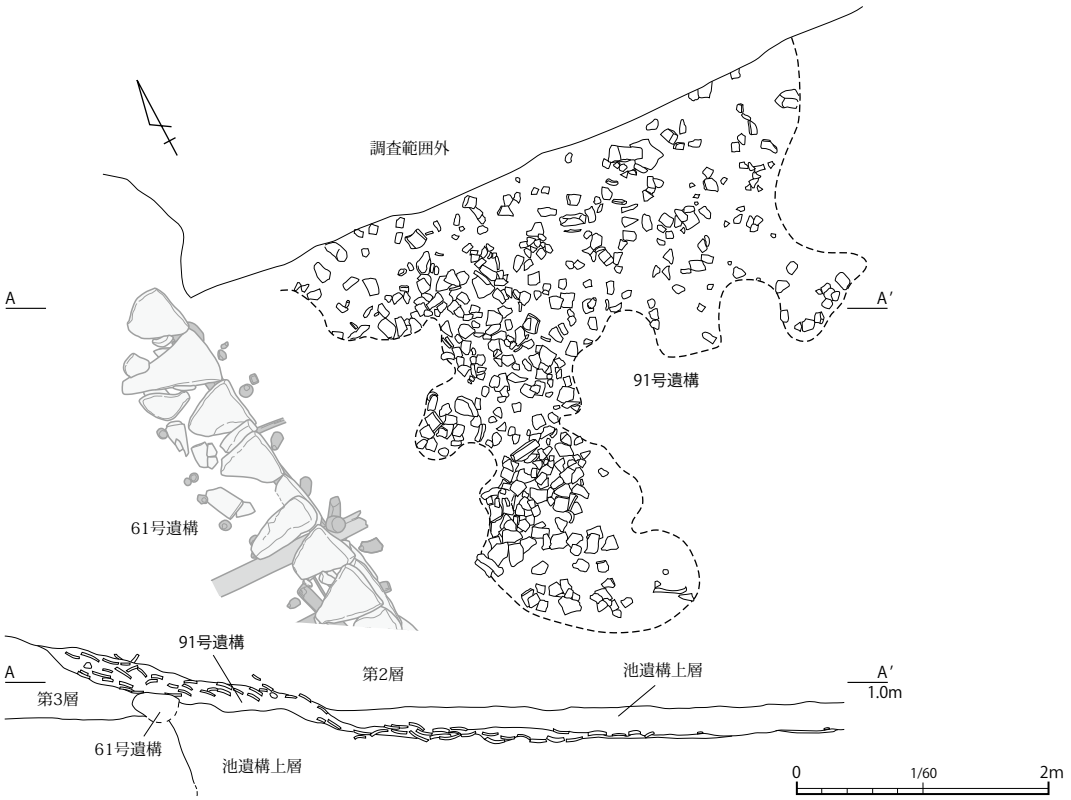
第 40 図　93・47 号遺構（1/60）



第 41 図　48 号遺構（1/60）



第 42 図　51 号遺構（1/100・1/60）



第 43 図　91 号遺構（1/60）

第 12 表　石積遺構計測表

遺構名	挿図番号	図版番号	調査区	グリッド	確認層位	確認面	検出総延長（m）	高さ（m）	長軸方向	推定時期	備　考
61号遺構	第32～38図	図版16～18	Ⅱ・Ⅲ区	A～E-5～13	第4層	Ⅲ面	(67.9)	1.2	N-58°-W	近世～近代	北辺の一部石積遺構が二重になっており、記載の総延長は最後段階のもの。改修前の総延長は67.4m。

第 13 表　中の島計測表

遺構名	挿図番号	図版番号	調査区	グリッド	確認層位	確認面	長軸	短軸	高さ	長軸方向	平面形	推定時期	備　考
93号遺構上層	第39図	図版18	Ⅱ区	B・C-8・9	第4層	Ⅲ面	8.9	7.6	1.0	N-5°-E	不定形	近世～近代	長軸、短軸は土橋を含む大きさ。高さは池遺構下層上面から測ったもの。
93号遺構下層	第40図	図版18	Ⅱ区	B・C-8・9	第4層	Ⅲ面	4.9	4.3	0.7	N	円形	近世～近代	当初の中の島。高さは池遺構下層上面から測ったもの。

第 14 表　池遺構内土留板計測表

遺構名	挿図番号	図版番号	調査区	グリッド	確認層位	確認面	種類	検出総延長（m）	高さ（m）	長軸方向	推定時期	備　考
47号遺構	第30・40図	図版18	Ⅱ区	E-11～12	池遺構上層	Ⅲ面	土留板列	(7.2)	1.1	N-5°-E	近世～近代	西端は調査範囲外。
48号遺構南0	第30・41図	図版19	Ⅱ区	C～E-10・11	池遺構上層	Ⅲ面	土留板列	(5.1)	-	N	近世～近代	一部で土留板が失われている。
48号遺構南1	第30・41図	図版19	Ⅱ区	C～E-10	池遺構上層	Ⅲ面	土留板列	(7.1)	1.2	N-4°-W	近世～近代	南端は調査範囲外。
48号遺構南2	第30・41図	図版19	Ⅱ区	C～E-10	池遺構上層	Ⅲ面	土留板列	3.6	0.7	N-4°-E	近世～近代	南3の一部を補強するように設置される。
48号遺構南3	第30・41図	図版19	Ⅱ区	C～E-10	池遺構上層	Ⅲ面	土留板列	(7.6)	1.1	N-7°-E	近世～近代	南端は調査範囲外。
48号遺構南4	第30・41図	図版19	Ⅱ区	C～E-10・11	池遺構上層	Ⅲ面	土留板列	(6.0)	0.9	N-7°-E	近世～近代	南端は調査範囲外。
48号遺構南5	第30・41図	図版19・20	Ⅱ区	D・E-11	池遺構上層	Ⅲ面	土留板列	(5.0)	-	N-7°-E	近世～近代	南端は調査範囲外。
48号遺構北1	第30・39図	図版20	Ⅱ区	A～C-10	池遺構上層	Ⅲ面	土留板列	(3.7)	-	N-18°-E	近世～近代	土圧のためか崩れている。
48号遺構北2	第30・39図	図版20	Ⅱ区	A・B-10	池遺構上層	Ⅲ面	土留板列	(1.3)	-	N-24°-E	近世～近代	土圧のためか崩れている。
51号遺構	第30・42図	-	Ⅱ区	A～E-8～13	池遺構上層	Ⅲ面	土留板・柵列	(32.5)	0.6	-	近世～近代	北側では土留板の検出できず、杭列のみ検出している。93号遺構で挟んで一度途切れる。61号遺構の石垣の外側にも続いている。

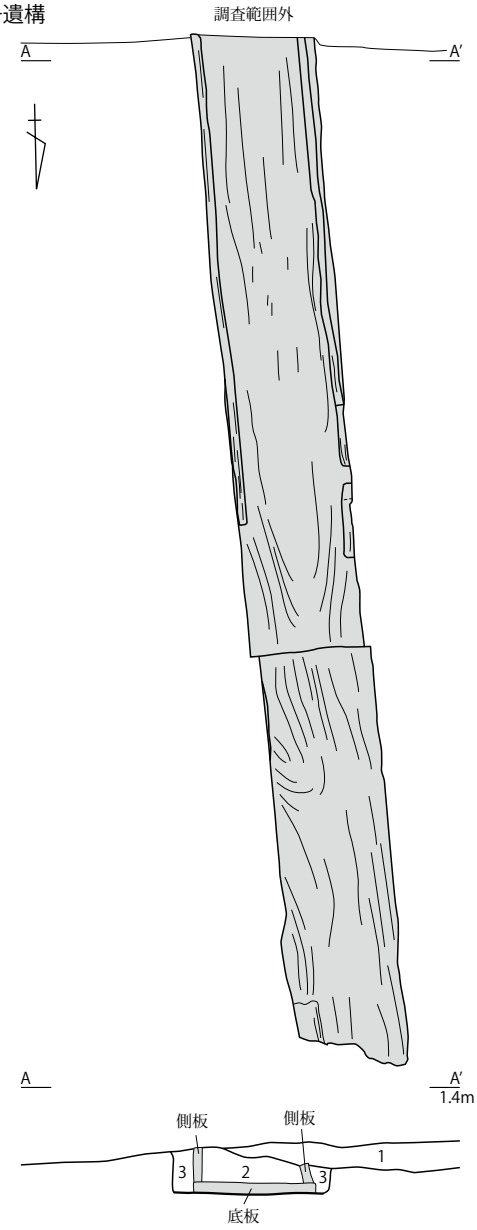
第 15 表　池遺構内瓦集中部計測表

遺構名	挿図番号	図版番号	調査区	グリッド	確認層位	確認面	規模（m）			長軸方向	平面形	推定時期	備　考
							長軸	短軸	深さ				
91号遺構	第43図	図版20	Ⅲ区	A・B-5・6	池遺構上層	Ⅲ面	(4.0)	(4.0)	1.0	N-84°-W	-	近世～近代	北側は調査範囲外。平面は不定形。

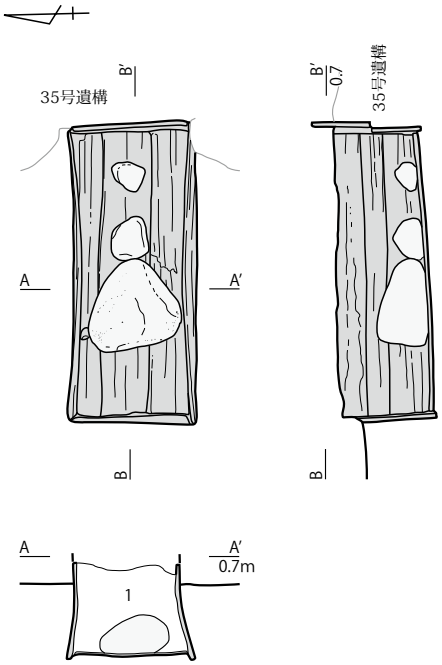
第 16 表　土留板計測表

遺構名	挿図番号	図版番号	調査区	グリッド	確認層位	確認面	種類	検出総延長（m）	高さ（m）	長軸方向	推定時期	備　考
81号遺構	第52図	図版22	Ⅲ区	B-4～7	第6層	Ⅲ面	土留板列	(13.7)	0.5	N-82°-W	近世～近代	西端は52号遺遺構により壊される。東端は池遺構下層の中で見えなくなる。
94号遺構	第52図	図版22	Ⅲ区	A-4～7	第6層	Ⅲ面	土留板列	(8.9)	0.3	N-96°-E	近世～近代	西端は52号遺遺構により壊される。東端は池遺構下層の中で見えなくなる。

73号遺構



90号遺構

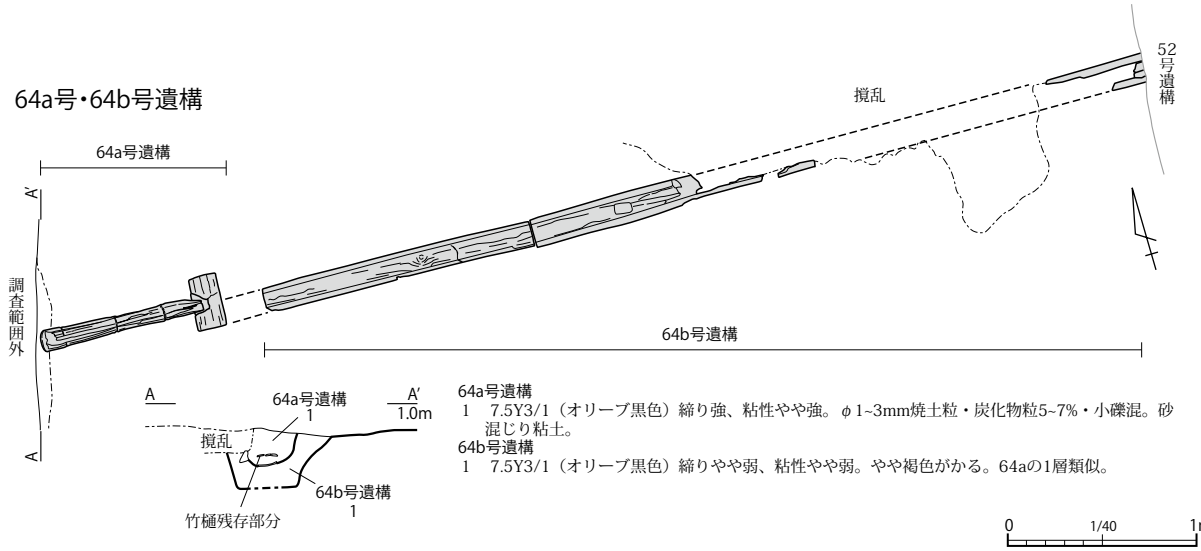


90号遺構
1　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締りやや強、粘性強。φ3~5mm焼土混。砂混じり粘土層。

73号遺構
1　10Y2/1（黒色）締りやや強、粘性弱。φ1~2mm炭化物粒微、遺物混。砂質土層。
2　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締りやや弱、粘性強。粘土層。
3　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り強、粘性弱。φ3~5mm瓦片3%混。砂混じり粘土層。

0　1/20　50cm

64a号・64b号遺構

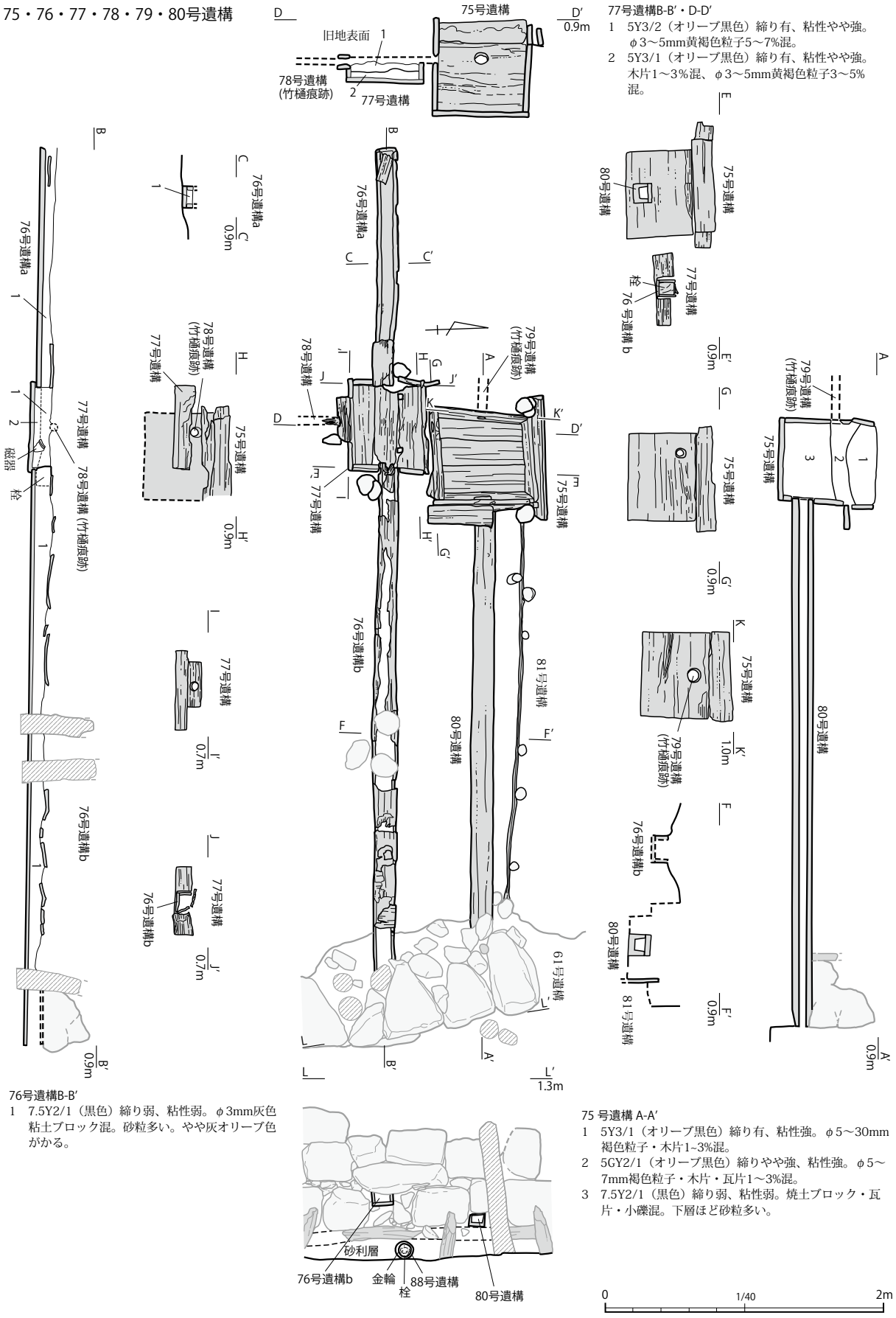


64a号遺構
1　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り強、粘性やや強。φ1~3mm焼土粒・炭化物粒5~7%・小礫混。砂混じり粘土。

64b号遺構
1　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締りやや弱、粘性やや弱。やや褐色がかる。64aの1層類似。

0　1/40　1m

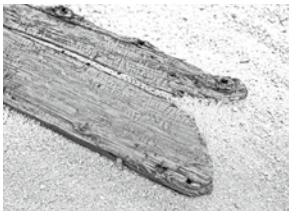
第 44 図　73・90・64 号遺構（1/20・1/40）



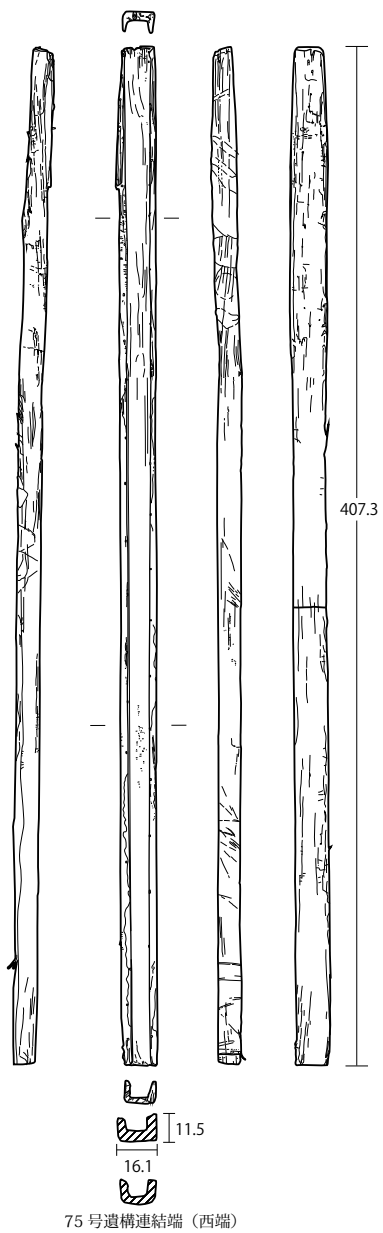
第 45 図　75・76・77・78・79・80 号遺構（1/40）



池遺構連結端（東端）

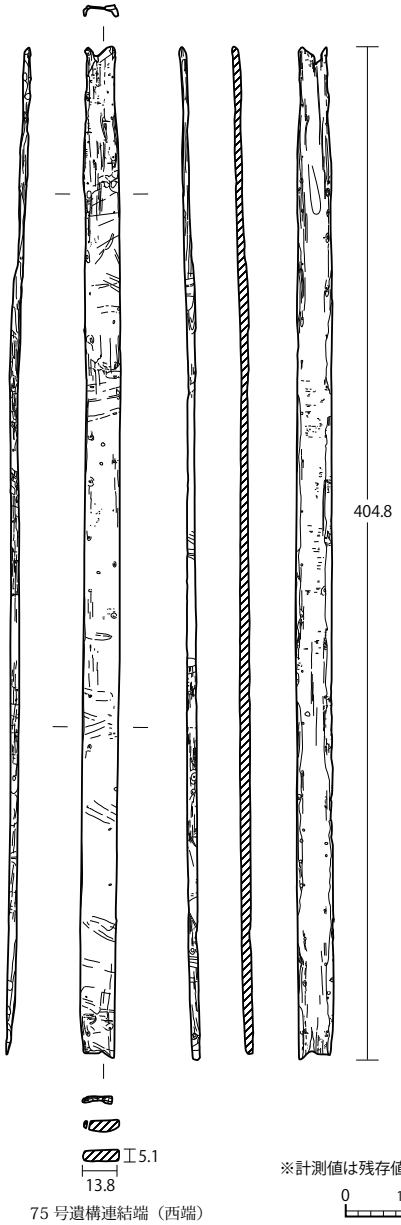


池遺構連結端（東端）



75 号遺構連結端（西端）

80号遺構　木樋胴



75 号遺構連結端（西端）

80号遺構　木樋蓋

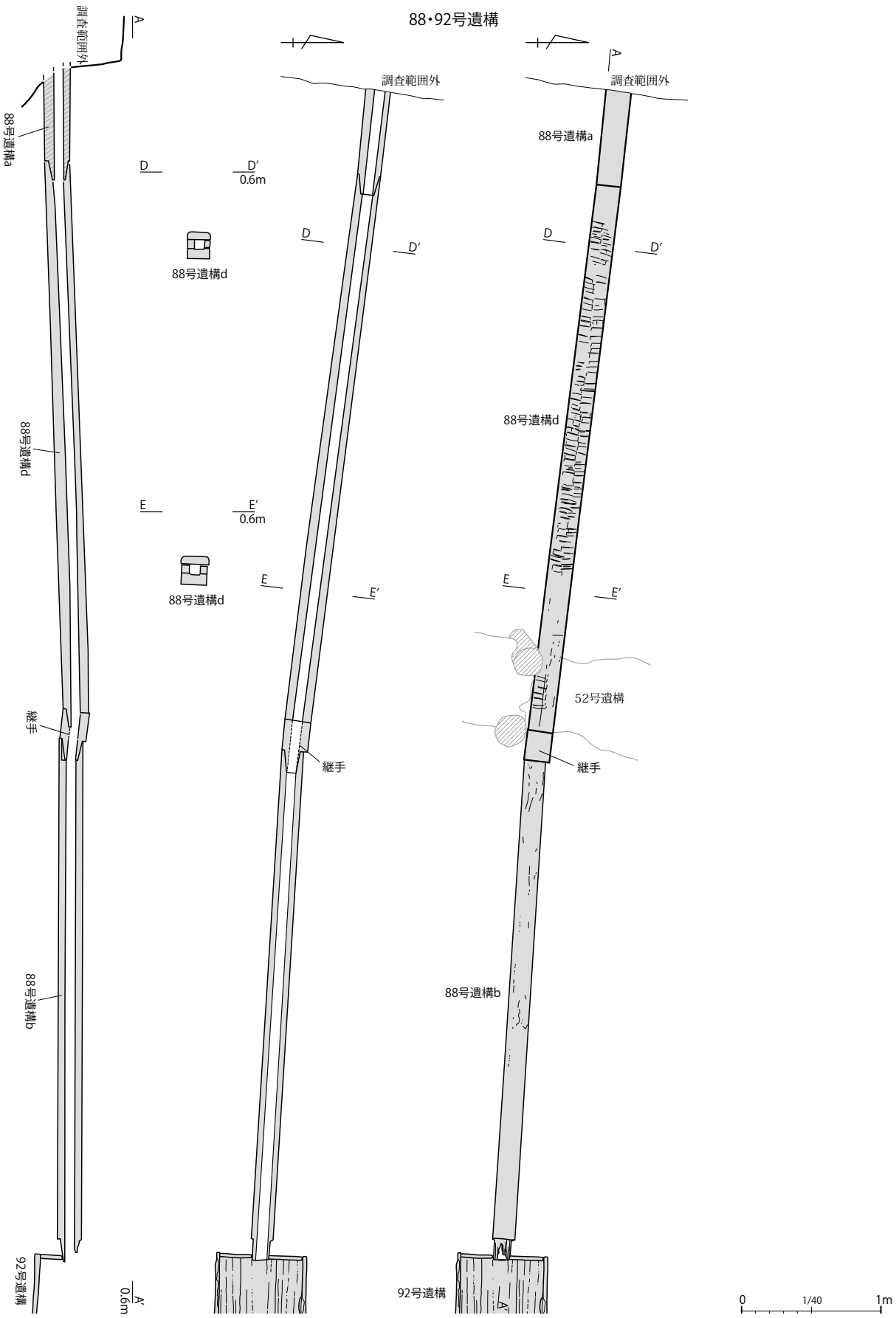
※計測値は残存値。単位は cm。

0　1/30　50cm

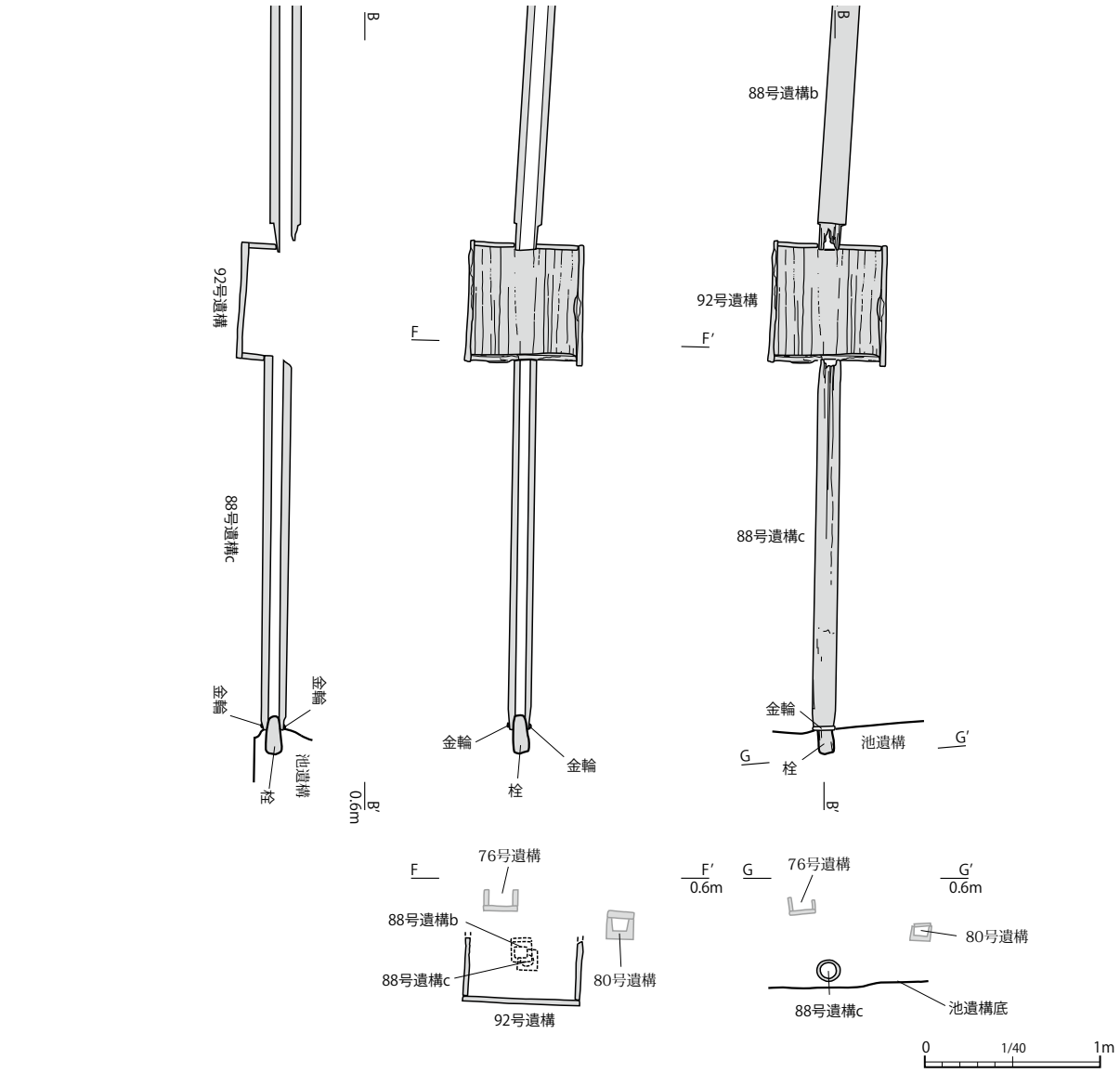


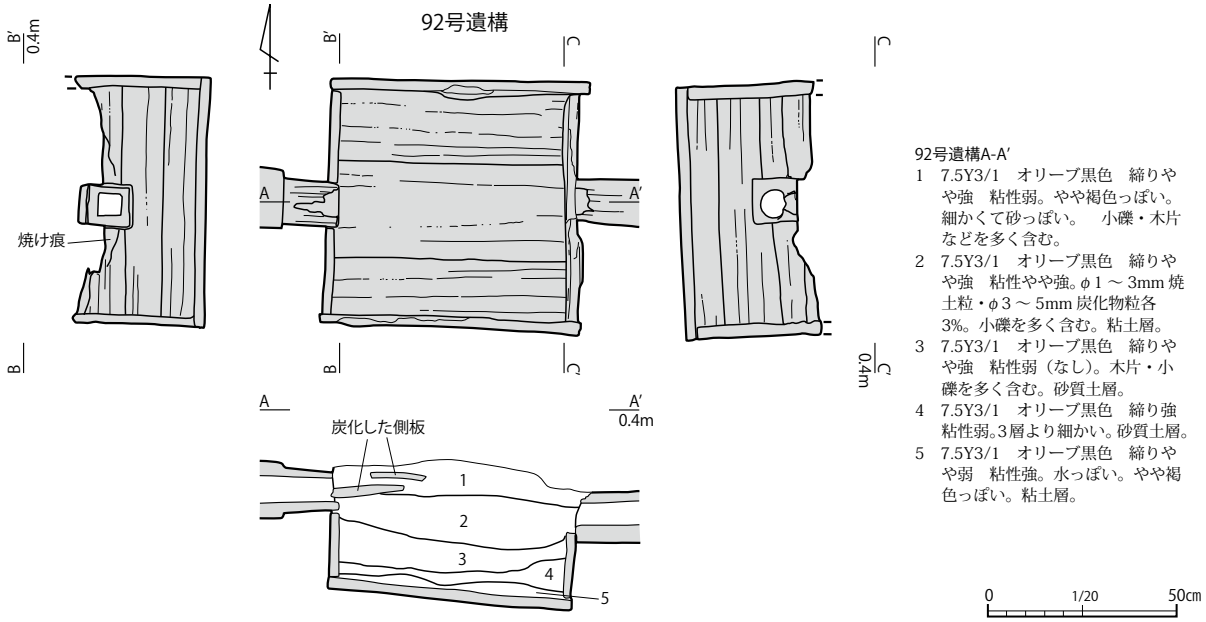


第 46 図　80 号遺構木樋（1/30）



第 47 図　88・92 号遺構（1）（1/40）





92号遺構A-A′

1　7.5Y3/1　オリーブ黒色　締りやや強　粘性弱。やや褐色っぽい。細かくて砂っぽい。　小礫・木片などを多く含む。

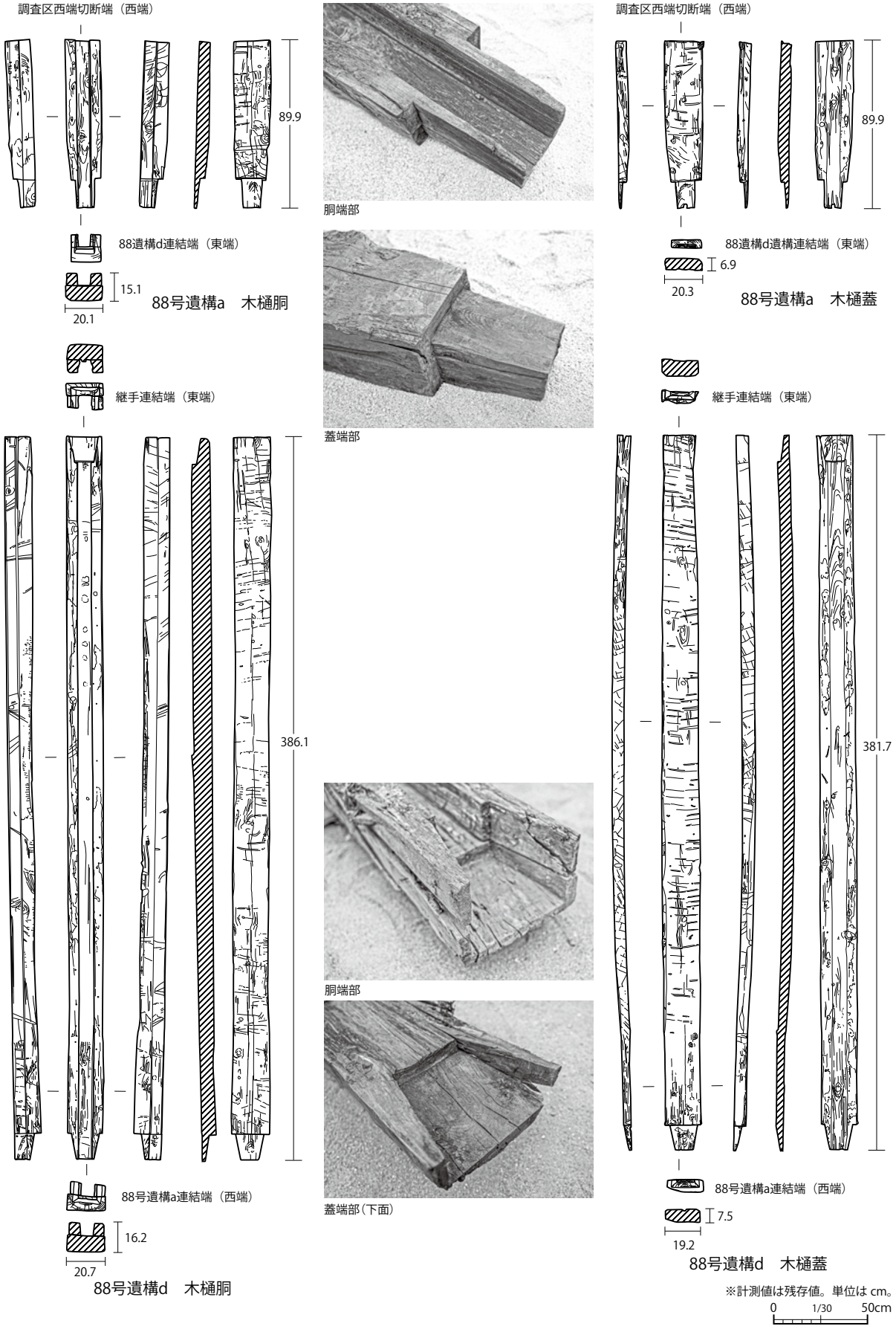
2　7.5Y3/1　オリーブ黒色　締りやや強　粘性やや強。φ1 ～ 3mm 焼土粒・φ3 ～ 5mm 炭化物粒各3%。小礫を多く含む。粘土層。

3　7.5Y3/1　オリーブ黒色　締りやや強　粘性弱（なし）。木片・小礫を多く含む。砂質土層。

4　7.5Y3/1　オリーブ黒色　締り強　粘性弱。3層より細かい。砂質土層。

5　7.5Y3/1　オリーブ黒色　締りやや弱　粘性強。水っぽい。やや褐色っぽい。粘土層。

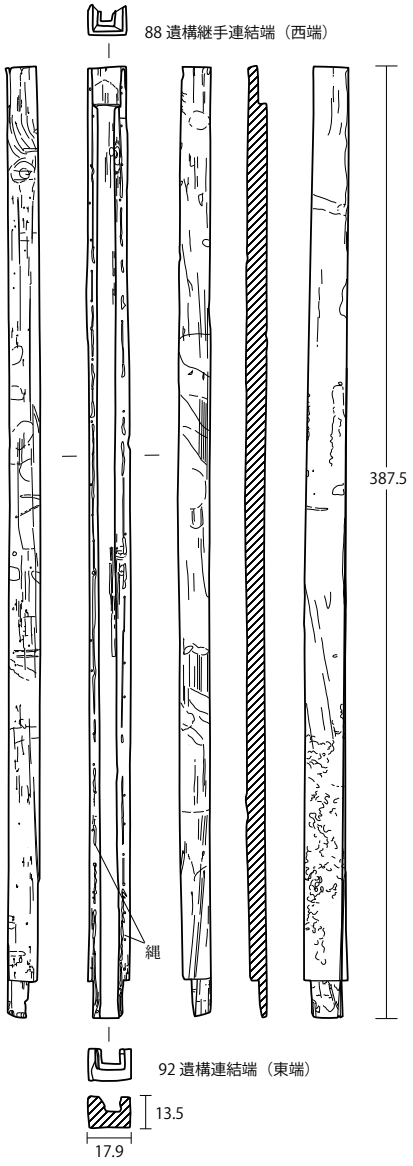
第 48 図　88・92 号遺構（2）（1/40・1/20）

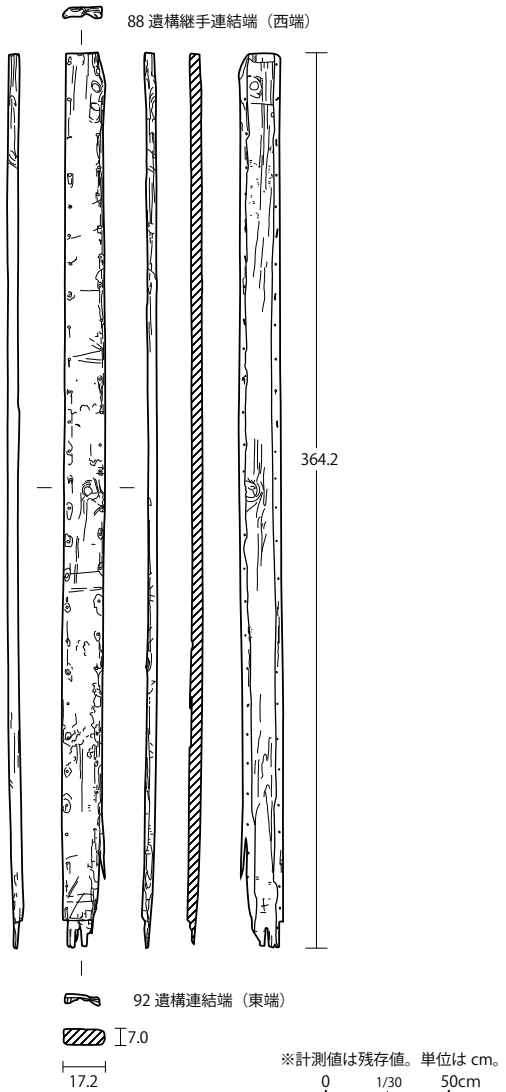


第 49 図　88 号遺構木樋（1）（1/30）









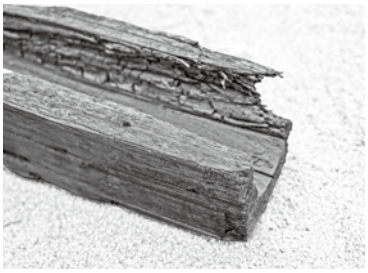
88号遺構b　木樋胴

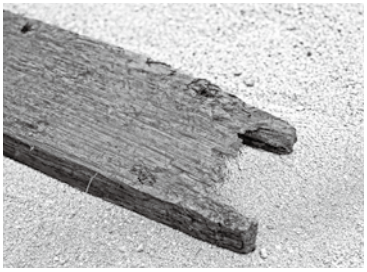
88号遺構b　木樋蓋

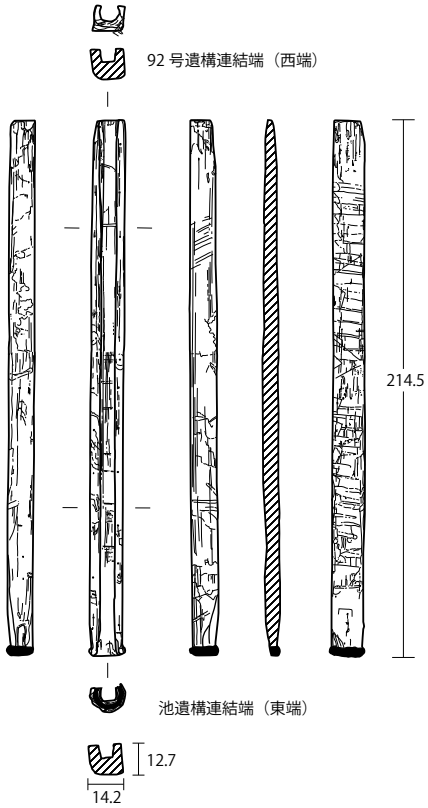




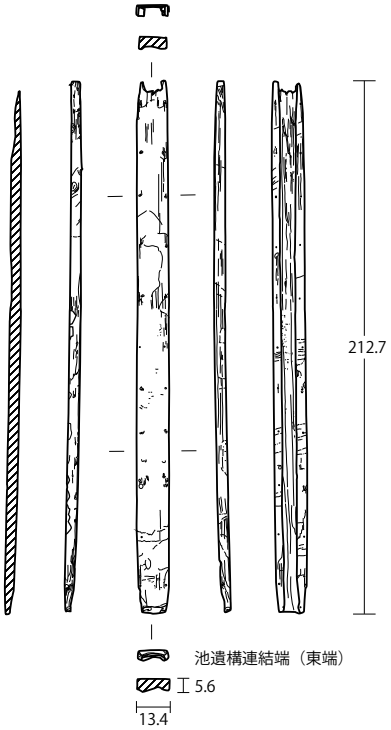
第 50 図　88 号遺構木樋（2）（1/30）



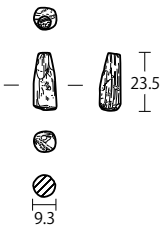




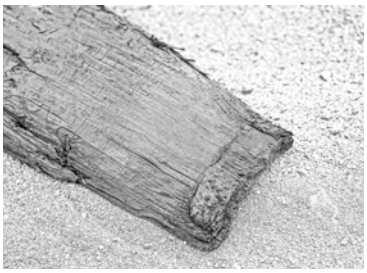
88号遺構c　木樋胴

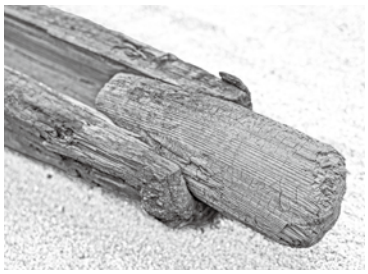


88号遺構c　木樋蓋



88号遺構c　栓

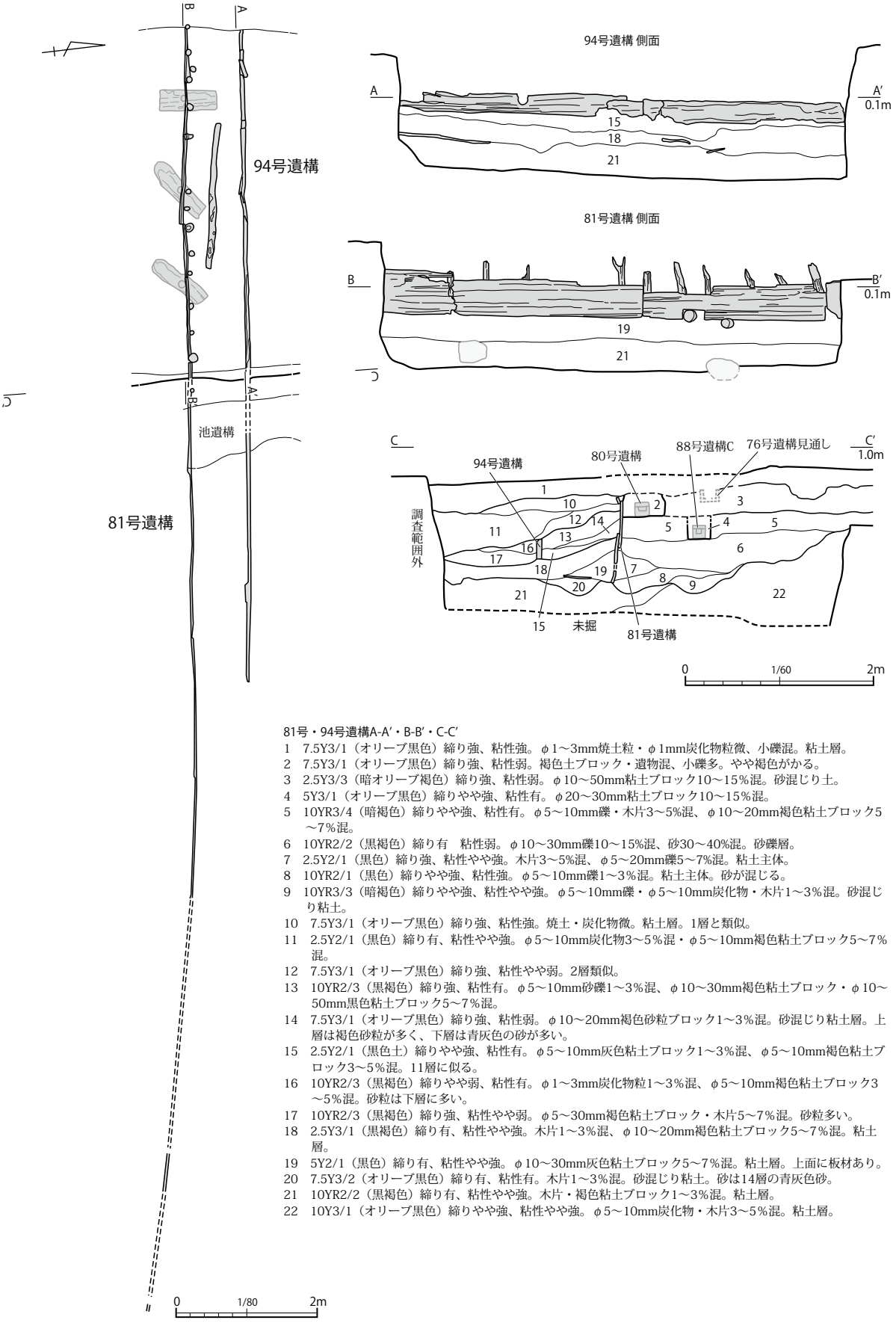




※計測値は残存値。単位は cm。

0　1/30　50cm

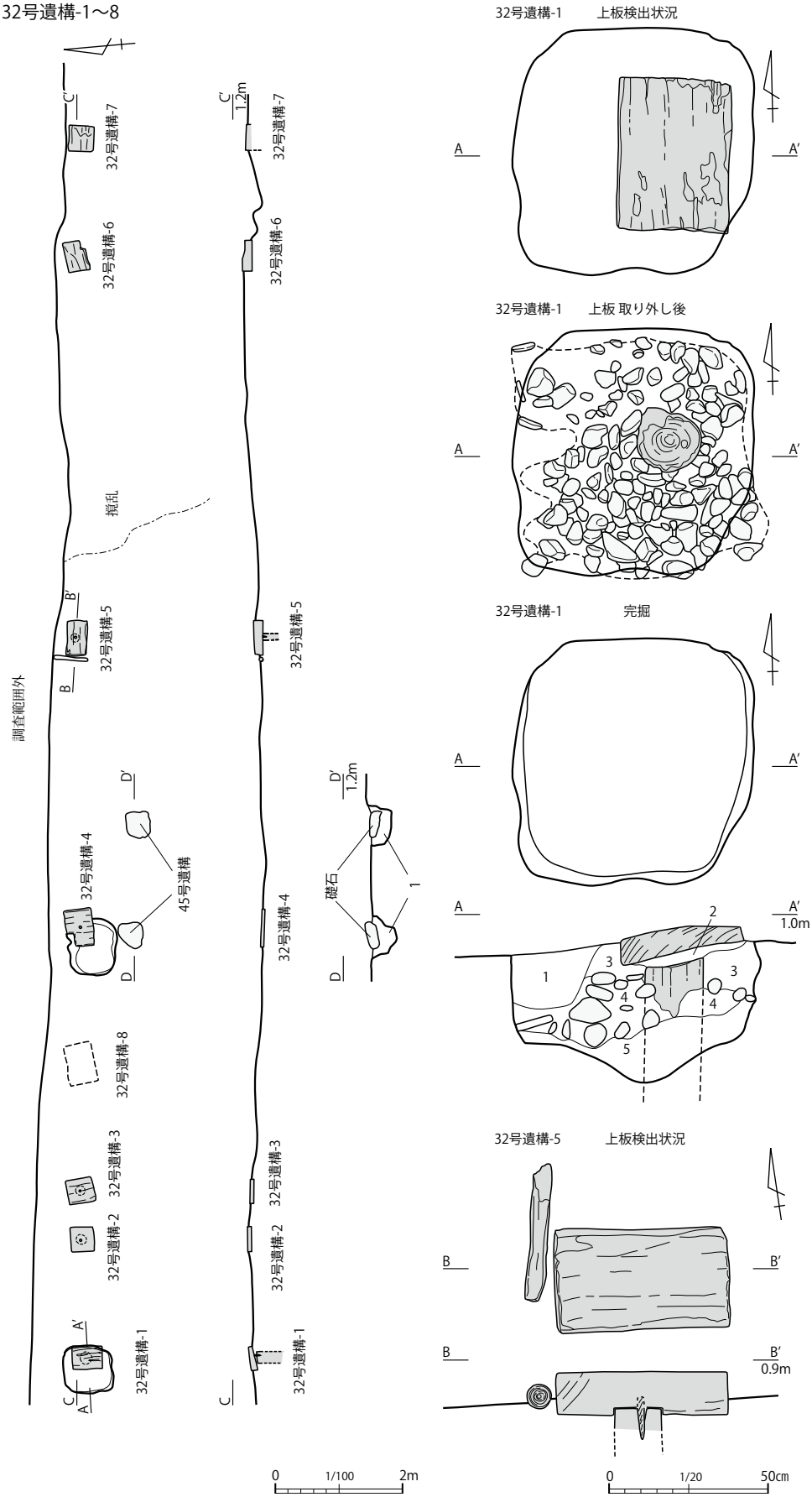
第 51 図　88 号遺構木樋（3）（1/30）



81号・94号遺構A-A′・B-B′・C-C′

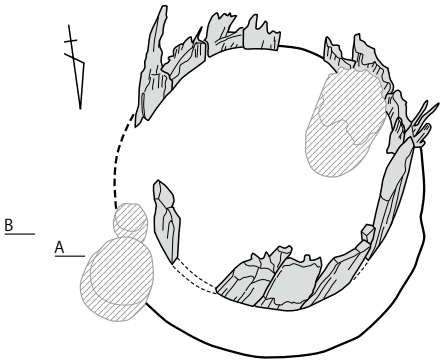
1　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り強、粘性強。φ1～3mm焼土粒・φ1mm炭化物粒微、小礫混。粘土層。
2　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り強、粘性弱。褐色土ブロック・遺物混、小礫多。やや褐色がかる。
3　2.5Y3/3（暗オリーブ褐色）締り強、粘性弱。φ10～50mm粘土ブロック10～15%混。砂混じり土。
4　5Y3/1（オリーブ黒色）締りやや強、粘性有。φ20～30mm粘土ブロック10～15%混。
5　10YR3/4（暗褐色）締りやや強、粘性有。φ5～10mm礫・木片3～5%混、φ10～20mm褐色粘土ブロック5～7%混。
6　10YR2/2（黒褐色）締り有　粘性弱。φ10～30mm礫10～15%混、砂30～40%混。砂礫層。
7　2.5Y2/1（黒色）締り強、粘性やや強。木片3～5%混、φ5～20mm礫5～7%混。粘土主体。
8　10YR2/1（黒色）締りやや強、粘性強。φ5～10mm礫1～3%混。粘土主体。砂が混じる。
9　10YR3/3（暗褐色）締りやや強、粘性やや強。φ5～10mm礫・φ5～10mm炭化物・木片1～3%混。砂混じり粘土。
10　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り強、粘性強。焼土・炭化物微。粘土層。1層と類似。
11　2.5Y2/1（黒色）締り有、粘性やや強。φ5～10mm炭化物3～5%混・φ5～10mm褐色粘土ブロック5～7%混。
12　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り強、粘性やや弱。2層類似。
13　10YR2/3（黒褐色）締り強、粘性有。φ5～10mm砂礫1～3%混、φ10～30mm褐色粘土ブロック・φ10～50mm黒色粘土ブロック5～7%混。
14　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り強、粘性弱。φ10～20mm褐色砂粒ブロック1～3%混。砂混じり粘土層。上層は褐色砂粒が多く、下層は青灰色の砂が多い。
15　2.5Y2/1（黒色土）締りやや強、粘性有。φ5～10mm灰色粘土ブロック1～3%混、φ5～10mm褐色粘土ブロック3～5%混。11層に似る。
16　10YR2/3（黒褐色）締りやや弱、粘性有。φ1～3mm炭化物粒1～3%混、φ5～10mm褐色粘土ブロック3～5%混。砂粒は下層に多い。
17　10YR2/3（黒褐色）締り強、粘性やや弱。φ5～30mm褐色粘土ブロック・木片5～7%混。砂粒多い。
18　2.5Y3/1（黒褐色）締り有、粘性やや強。木片1～3%混、φ10～20mm褐色粘土ブロック5～7%混。粘土層。
19　5Y2/1（黒色）締り有、粘性やや強。φ10～30mm灰色粘土ブロック5～7%混。粘土層。上面に板材あり。
20　7.5Y3/2（オリーブ黒色）締り有、粘性有。木片1～3%混。砂混じり粘土。砂は14層の青灰色砂。
21　10YR2/2（黒褐色）締り有、粘性やや強。木片・褐色粘土ブロック1～3%混。粘土層。
22　10Y3/1（オリーブ黒色）締りやや強、粘性やや強。φ5～10mm炭化物・木片3～5%混。粘土層。

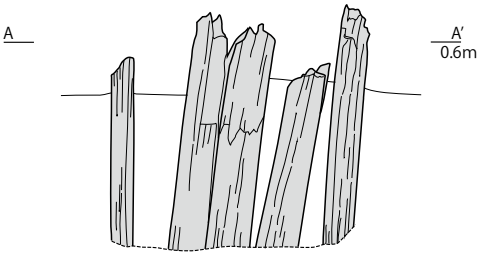
第 52 図　81・94 号遺構（1/80・1/60）

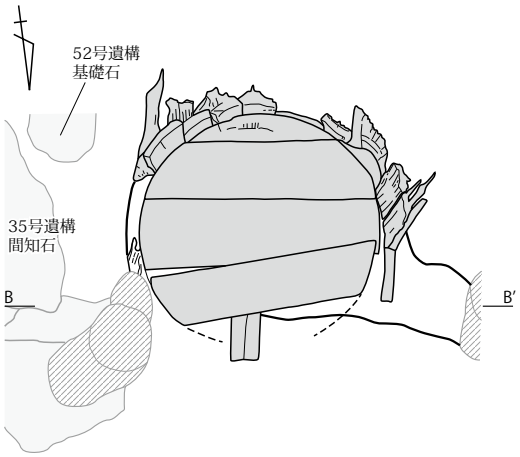


第 53 図　32・45 号遺構（1/100・1/20）

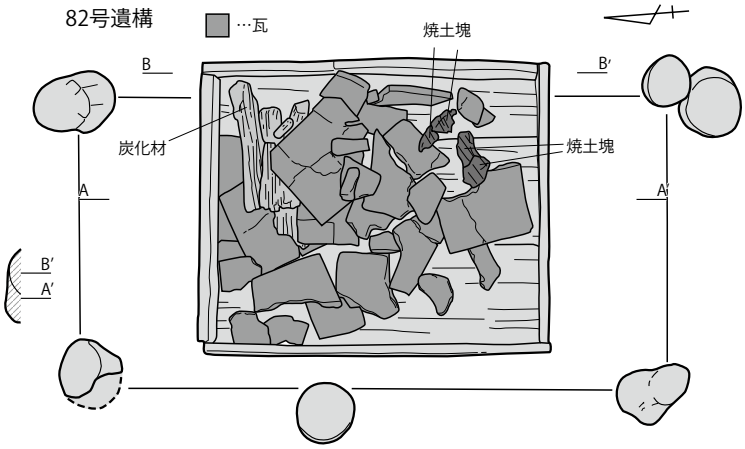
66号遺構

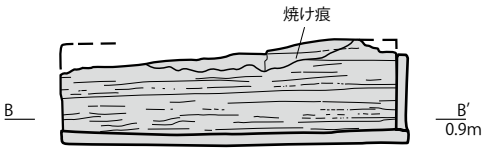


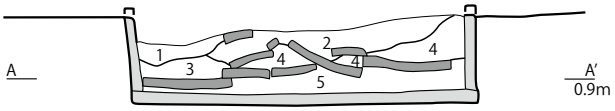




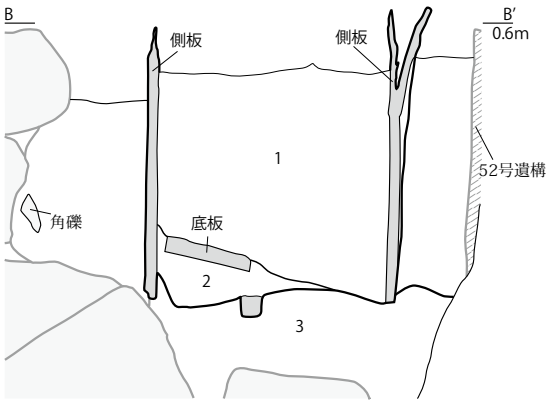
82号遺構



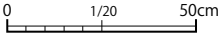




82号遺構A-A′
1　7.5YR1.7/1（黒色）締り弱、粘性弱。焼土5~7%混、炭化物多。
2　焼土層。締り弱、 粘性無。
3　7.5YR3/2（黒褐色）締り弱、粘性弱。φ1mm焼土粒40～50%混、瓦片混。
4　7.5YR3/2（黒褐色）締り弱、粘性弱。焼土・瓦片混。3層類似だが、焼土やや少。
5　7.5YR2/3（極暗褐色）締り弱、粘性弱。φ1mm焼土粒5%混。砂混じり土。瓦の下。

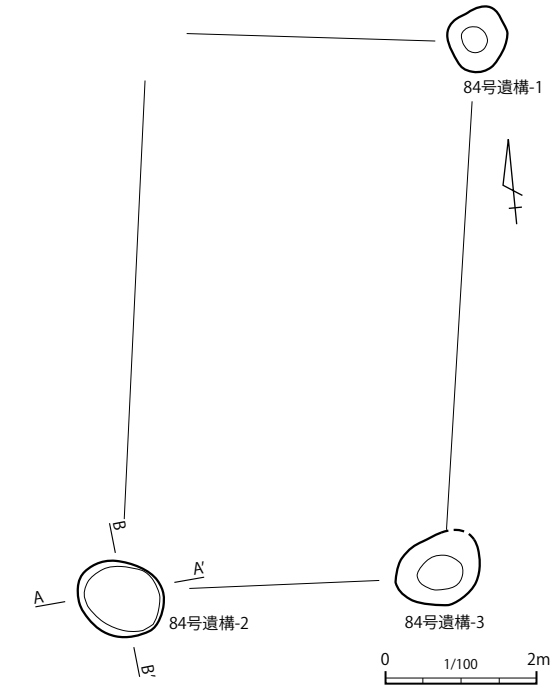


66号遺構B-B′
1　10YR2/2（黒褐色）締り無、粘性やや弱。木片1～3%混、砂粒5～7%混。含水が多い。井戸内部の堆積層。
2　10YR2/3（黒褐色）締り有、粘性有。φ3～5mm炭化物・φ5～7mm黄褐色粒子・瓦片3～5%混。井戸掘方の浮き上がり。
3　10GY2/1（緑黒色）締り有、粘性なし。砂粒5～7%混。湧水層。井戸掘方。

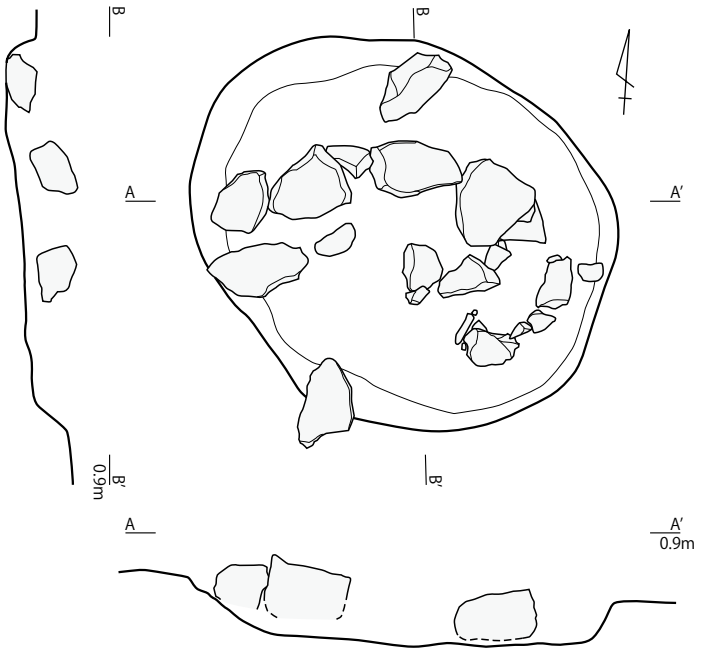


第 54 図　66・82 号遺構（1/20）

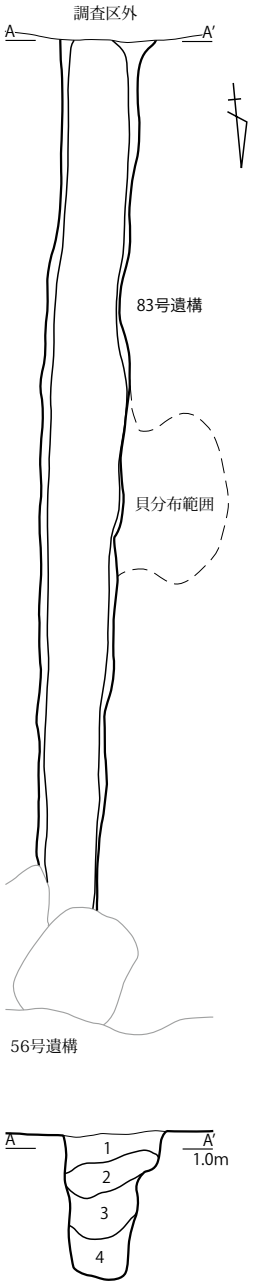
84号遺構-1～3



84号遺構-2



83号遺構



83号遺構A-A′

1　5Y2/2（オリーブ黒色）締り有、粘性強。貝殻の小破片微。

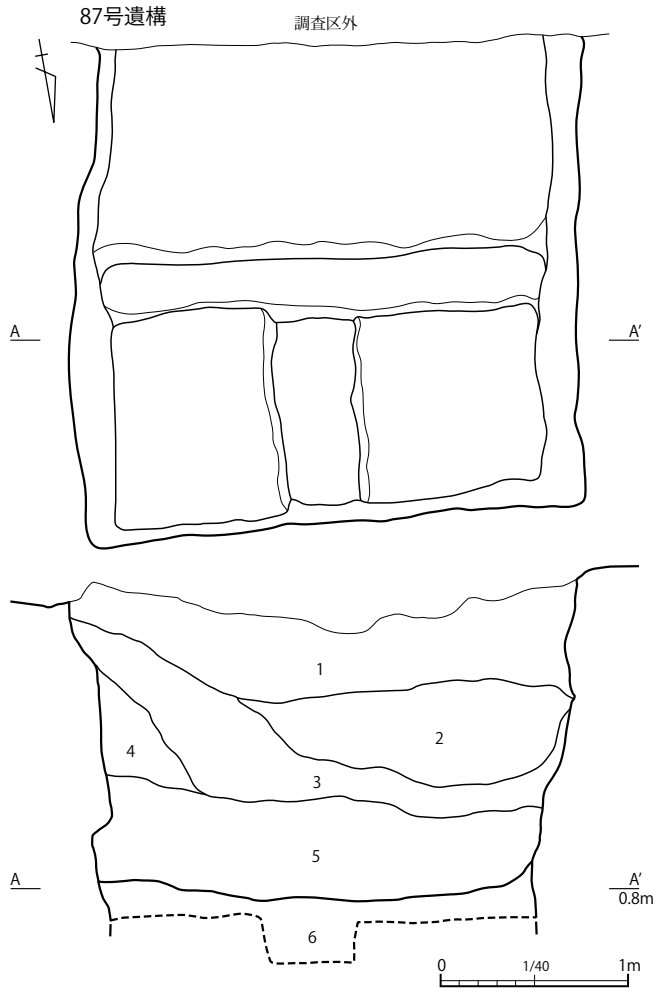
2　5Y3/1（オリーブ黒色）締り有、粘性強。φ20～50mm 二枚貝破片 30%混。

3　5Y3/1（オリーブ黒色）締り有、粘性強。φ20～50mm 二枚貝破片 30%混。2 層よりも小さい貝殻が多い。

4　5Y3/1（オリーブ黒色）締り有、粘性強。φ10～30mm 二枚貝破片 10～15%混。

0　1/20　50cm

第 55 図　83・84 号遺構（1/100・1/20）



87号遺構
1　7.5YR3/1（オリーブ黒色）締り強、粘性強。遺物（木片・礫・貝片）混。砂と粘土ブロックの混合層。
2　7.5YR3/1（オリーブ黒色）締り強、粘性強。遺物（木片・礫・貝片）多。粘土ブロック層1層類似だが、やや砂粒多い。
3　7.5YR2/3（極暗褐色）締りやや弱、粘性強。遺物（木片・礫・貝片）多。砂混じり粘土層。含水有。
4　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締りやや強、粘性やや弱。φ5～8mm焼土粒・φ5～8mm炭化物粒10％混。
5　7.5YR3/1（黒褐色）締り弱、粘性やや強。遺物（薄板状木片・貝片・瓦）多。砂混じり粘土質土。含水有。
6　10YR3/1（オリーブ黒色）締りやや強、粘性強。小礫混。含水有。自然堆積層か。

第 56 図　87 号遺構（1/40）

第 17 表　木樋計測表

遺構名	挿図番号	図版番号	調査区	グリッド	確認層位	確認面	種類	検出総延長(m)	幅(cm)	長軸方向	推定時期	備　考
64b号遺構	第44図	図版20	Ⅲ区	B-2・3	第4層	Ⅲ面	木樋	(4.8)	16	N-90°-E	近世～近代	導水系統1。64a号遺構とは接続しない。東端は52号遺構により消失。
73号遺構	第44図	-	Ⅲ区	E-8	池遺構上層	Ⅲ面	木樋	(2.7)	34	N-4°-W	近世～近代	やや太い木樋。接続は不明。
76a号遺構	第45図	図版21	Ⅲ区	B-4	第4層	Ⅲ面	木樋	1.7	15	N-85°-W	近世～近代	導水系統1。
76b号遺構	第45図	図版21	Ⅲ区	B-4・5	第4層	Ⅲ面	木樋	(3.6)	16	N-85°-W	近世～近代	導水系統1。木製の栓で止水。
80号遺構	第45・46図	図版21	Ⅲ区	B-4・5	第4層	Ⅲ面	木樋	(4.1)	15	N-85°-W	近世～近代	導水系統2。
88号遺構a	第47・49図	図版21～22	Ⅲ区	B-2・3	第4層	Ⅲ面	木樋	(0.8)	18	N-84°-W	近世～近代	導水系統3。33号遺構に掘り込まれる。
88号遺構b	第47・48・50図	図版21～22	Ⅲ区	B-4・5	第4層	Ⅲ面	木樋	3.7	16	N-85°-W	近世～近代	導水系統3。88号遺構dとの継手あり。
88号遺構c	第48・51図	図版21～22	Ⅲ区	B-5	第4層	Ⅲ面	木樋	(2.1)	13	N-90°-E	近世～近代	導水系統3。池遺構に突き出す。木製の栓と金輪で止水。
88号遺構d	第47・49図	図版21～22	Ⅲ区	B-3・4	第4層	Ⅲ面	木樋	(4.2)	19	N-84°-W	近世～近代	導水系統3。88号遺構bとの接続部あり。

第 18 表　竹樋計測表

遺構名	挿図番号	図版番号	調査区	グリッド	確認層位	確認面	種類	検出総延長(cm)	幅(cm)	長軸方向	推定時期	備　考
64a号遺構	第44図	図版20	Ⅲ区	B-2	第4層	Ⅲ面	竹樋	(98)	10	N-90°-E	近世～近代	端部と継手を検出。西側は調査範囲外。東端は撹乱される。接手は長軸29×短軸16cmを測る。掘方の深さは19cmを測る。64b号遺構の上位に掘り込まれる。
78号遺構	第45図	-	Ⅲ区	B-4	第4層	Ⅲ面	竹樋	(9)	(6)	N-2°-E	近世～近代	導水系統2。部分的に残存する。土圧や撹乱により崩れている。77号遺構を切って設置される。
79号遺構	第45図	-	Ⅲ区	B-4	第4層	Ⅲ面	竹樋	―	(8)	N-85°-W	近世～近代	導水系統2。痕跡を検出。土圧や撹乱により崩れている。

第 19 表　木製枡計測表

遺構名	挿図番号	図版番号	調査区	グリッド	確認層位	確認面	種類	規模（cm）			長軸方向	平面形	推定時期	備　考
								長軸	短軸	深さ				
75号遺構	第45図	図版21	Ⅲ区	B-4	第4層	Ⅲ面	木製枡	85	66	70	N-90°-W	方形	近世～近代	導水系統2。
77号遺構	第45図	図版21	Ⅲ区	B-4	第4層	Ⅲ面	木製枡	65	64	14	N-89°-W	方形	近世～近代	導水系統1。78号遺構設置時に切られている。
92号遺構	第47・48図	図版21～22	Ⅲ区	B-5	第4層	Ⅲ面	木製枡	67	66	19	N	方形	近世～近代	導水系統3。

第 20 表　32 号遺構板基礎計測表

遺構名	挿図番号	図版番号	調査区	グリッド	確認層位	確認面	規模（cm）			掘方規模（cm）			長軸方向	推定時期	備　考
							長軸	短軸	厚み	長軸	短軸	深さ			
32号遺構-1	第53図	図版22～23	Ⅰ～Ⅱ区	A-14	33号遺構覆土上	Ⅲ～Ⅳ面	47	35	10	79	76	46	N-1.5°-E	近世～近代	上板・掘方を検出。
32号遺構-2	第53図	図版22～23	Ⅰ～Ⅱ区	A-14	33号遺構覆土上	Ⅲ～Ⅳ面	40	35	5	-	-	-	N-90°-E	近世～近代	
32号遺構-3	第53図	図版22～23	Ⅰ～Ⅱ区	A-14	33号遺構覆土上	Ⅲ～Ⅳ面	40	35	5	-	-	-	N-4.7°-W	近世～近代	
32号遺構-4	第53図	図版22～23	Ⅰ～Ⅱ区	A-14・15	33号遺構覆土上	Ⅲ～Ⅳ面	60	40	5	91	70	27	N-90°-E	近世～近代	上板・掘方を検出。
32号遺構-5	第53図	図版22～23	Ⅰ～Ⅱ区	A-17	33号遺構覆土上	Ⅲ～Ⅳ面	55	30	15	-	-	-	N-80°-W	近世～近代	
32号遺構-6	第53図	図版22～23	Ⅰ～Ⅱ区	A-18	33号遺構覆土上	Ⅲ～Ⅳ面	50	35	15	-	-	-	N-85°-E	近世～近代	
32号遺構-7	第53図	図版22～23	Ⅰ～Ⅱ区	A-19	33号遺構覆土上	Ⅲ～Ⅳ面	40	40	10	-	-	-	N-85°-W	近世～近代	
32号遺構-8	第53図	図版22～23	Ⅰ～Ⅱ区	A-15	33号遺構覆土上	Ⅲ～Ⅳ面	(60)	(45)	ー	-	-	-	N-85°-E	近世～近代	板の痕跡のみ検出。

第 21 表　45 号遺構礎石計測表

遺構名	挿図番号	図版番号	調査区	グリッド	確認層位	確認面	規模（cm）		長軸方向	推定時期	備　考
							長軸	短軸			
45号遺構-1	第53図	図版23	Ⅰ区	A-15	33号遺構覆土上	Ⅲ～Ⅳ面	38	36	N-90°-W	近世～近代	33号遺構の覆土上面で検出。人頭大の礫1点。
45号遺構-2	第53図	図版23	Ⅰ区	A-16	33号遺構覆土上	Ⅲ～Ⅳ面	42	41	N-90°-W	近世～近代	33号遺構の覆土上面で検出。人頭大の礫1点。

第 22 表　井戸計測表

遺構名	挿図番号	図版番号	調査区	グリッド	確認層位	確認面	種類	規模（cm）			長軸方向	推定時期	備　考
								長軸	短軸	深さ			
66号遺構	第54図	図版23	Ⅲ区	B-2	33号遺構覆土中	Ⅲ面	井戸	70	62	76	N-80°-E	近世～近代	側板・底板を伴う。33号遺構を壊して作られている。側板の一部に円形のくり貫き痕跡があり、竹樋などが接続していた可能性有。79号遺構と接続か。

第 23 表　箱状木枠計測表

遺構名	挿図番号	図版番号	調査区	グリッド	確認層位	確認面	種類	規模（cm）			長軸方向	平面形	推定時期	備　考
								長軸	短軸	深さ				
82号遺構	第54図	図版24	Ⅲ区	C-4	第4層	Ⅲ面	箱状木枠	93	78	26	N-5°-W	方形	近世～近代	覆土に焼土塊、黒炭、焼けた瓦などを多量に含む。火炉の可能性あり。
90号遺構	第44図	図版20	Ⅲ区	C-7	61号遺構覆土中	Ⅲ面	箱状木枠	80	33	26	N-90°-E	方形	近世～近代	61号遺構覆土中に検出。掘方はない。箱内部に人頭大の石があり、箱を池底に沈めたものか。

第 24 表　溝計測表

遺構名	挿図番号	図版番号	調査区	グリッド	確認層位	確認面	種類	検出総延長（m）	幅（cm）	深さ（cm）	長軸方向	推定時期	備　考
83号遺構	第55図	図版24	Ⅲ区	E-5	第4層	Ⅲ面	溝	(2.4)	24	40	N-8°-E	近世～近代	覆土に二枚貝を多量に含む。

第 25 表　土坑計測表

遺構名	挿図番号	図版番号	調査区	グリッド	確認層位	確認面	種類	規模（cm）			長軸方向	平面形	推定時期	備　考
								長軸	短軸	深さ				
84号遺構-1	第55図	図版24	Ⅲ区	C-5	第4層	Ⅲ面	土坑（建物基礎）	90	80	18	N-22°-E	楕円形	近世～近代	歪んだ円形を呈する浅い土坑。
84号遺構-2	第55図	図版24	Ⅲ区	E-4	第4層	Ⅲ面	土坑（建物基礎）	120	91	18	N-50°-W	楕円形	近世～近代	覆土に人頭大の礫が多数見られた。
84号遺構-3	第55図	図版24	Ⅲ区	E-5	第4層	Ⅲ面	土坑（建物基礎）	120	90	13	N-56°-E	楕円形	近世～近代	歪んだ円形を呈する浅い土坑。
87号遺構	第56図	図版24	Ⅲ区	E-4・5	第4層	Ⅲ面	土坑	(260)	270	171	N-10°-E	方形？	近世～近代	南側は調査範囲外で全体の規模は不明。湧水層まで掘り込まれ、かなり深い。覆土には木片や瓦等が多く含まれる。

3）Ⅳ面の遺構（第 57 図）

Ⅳ面から検出された遺構は、円礫充填建物基礎 1 基、瓦充填建物基礎 1 基、石積遺構 1 条、土留板列 1 条、井戸 4 基、井戸囲い枠 1 基、埋設桶 4 基、木枠土坑 5 基、土坑 10 基、遺物集中 1 ヶ所である。先述のとおり、第Ⅳ面には第 5 層上面と第 6 層上面の遺構が含まれる。特に調査範囲の東側、西側で第 1 層による撹乱の影響が大きく、本来は第 4・5 層のような盛土の上面に形成された遺構であったと考えられる。そのため、同一の検出面であっても、本来の帰属時期は異なる可能性がある。

■石積遺構

33 号遺構（第 58 ～ 64 図、第 26 ～ 28 表、図版 24 ～ 30）　Ⅰ区からⅢ区の北側で東西に延びる石積遺構を検出し、西端は調査範囲外まで続いていることを確認した。33 号遺構の東側は第 1 層による撹乱を受けているほか、Ⅱ区からⅢ区にかけて、池遺構のある範囲では失われている。81・94 号遺構の下層から 33 号遺構で見られたアンカー状木製品を検出したため、池遺構は 33 号遺構を撤去した後に掘削して設けられたと考えられる。また、1・3・4 号遺構の周囲で石積遺構を確認できなかったため、33 号遺構の東端は検出した位置に近いものと考えられる。

33 号遺構は石積遺構とその裏込め、石積遺構前面の土留板列からなる遺構である。また、石積遺構の北側は溝であったと考えられ、溝内には棚状の遺構も検出したため、これも 33 号遺構の項でまとめて報告する。また、池を挟んで東西で遺構の様子が異なることから、Ⅰ・Ⅱ区で検出した箇所を「33 号遺構東側」、Ⅲ区で検出した箇所を「33 号遺構西側」と呼称し、分けて報告する。なお、石積遺構の間知石は人力で運搬することができず、重機により取り上げを行った。

33 号遺構東側では、石積遺構と裏込め、土留板列、溝内の遺構を検出した。石積遺構は、まず裏込め部分を掘削し、その底面に胴木を支える材を設置して、その上に胴木を渡している。胴木支えには木材を使用しているが、この木材の形状は一様でなく、丸太状あるいは面取り丸太状の木材が使用されている。他所で使われていた木材のうち、適当なものを転用したと考えられる。また、胴木支え同士の間隔も一様ではなく、必要な箇所に適宜設置したものと考えられる。これらの胴木支えの上に胴木を 2 条、並行して渡している。胴木は西から東に向けて僅かに上がりながら設置されている。胴木の長さは 3.5 ～ 5m 程度を測り、幅は 15 ～ 25cm を測る。胴木は面取り程度の粗製材を含む材が多いが、丸太材に近い曲がり材も見られる。また、製材のなかには中央に臍穴があるものもあることから、他所で使われた建材を転用したものと考えられる。胴木の端部は互い違いの組手状に加工されて、接手としている。接手には計 9 cm ほどの円孔が穿たれ、円柱状のダボを通して固定している。胴木④の接手には墨書がみられたが、文字の判別には至らなかった。また、胴木の脇を細い杭で固定しているものもあった。なお、胴木③～⑤、⑭について、樹種同定及び年輪年代学的検討を依頼し、Ⅳにご寄稿いただいた。

胴木の上には間知石による石積遺構がある。石積遺構は概ね 3 段が確認され、最も残存している箇所で 4 段を確認した。一方、池遺構に近い西側では、先述のとおり胴木が上がっている影響か、1 段のみを確認した。また、撹乱等の影響により、2 段となっている箇所もある。石積遺構に利用された間知石は、概ね下段ほど大きく、上段ほど小さい。しかし、間知石同士のバランスをとるためか、下段であっても小さな間知石を使用している箇所もある。間知石は概ね前面を揃えて設置されているが、撹乱の影響か崩れている箇所もある。

使用された間知石は、前面が方形または長方形を呈し、尾に向かって細くなる四角錘を呈している。また、間知石の前面や側面には矢穴を持つものが多く見られたほか、工具痕や自然面を残すものもあった（第 59 図下）。特に矢穴を持つものは多く、観察した間知石のうち、半数近くが矢穴を持っていた。なお、出土した間知石の考古学的所見、及び柴田徹氏に依頼した岩石学的所見については第 27 表に取りまとめている。先述のとおり、間知石の段数は検出した位置によって異なるため、検出時の最上段を「初段」、以下、初段の下位を「次段」「次々段」と順に表記している。また、第 27 表中の No.1-1 から 1-38 については第 58 図中の間知石に付した番号に対応する。その他については、取り上げた後に任意に番号を付したため、第 58 図には記載がない。

石積遺構の裏込めは、間知石の後背にあり、広いところで間知石列から約 6m、狭いところで約 2m を確認した。第 6 層とみられる粘土質土に木材や角礫を交えて充填している。この充填土の上層に第 5 層の赤褐色土層があるため、33 号遺構は第 5 層に先行してつくられたものであることがわかる。このことから、石積遺構は、第 5 層を整地する前に設けられた護岸であると考えられる。

石積遺構前面の土留板列は、1 段の土留板が杭によって支えられていた。土留板は薄く、水に浸かっ

ていた影響か非常に脆い状態であったため、多くは破損している。杭は細い角材や丸木材が用いられていたが、杭を単体で打ち込んだものと、杭の先端にアンカー状の木製品を取り付けたものがあった。このアンカー状木製品は丸太様の木材で、材の上面中央付近に径 10cm、深さ 10cm 程度の孔を穿ち、そこに杭を差し込んでいるものである。孔は杭の形状に合わせて作られており、杭の径に合わせて孔を穿ったものもあれば、杭の下端を加工して固定して、その形状に孔を合わせているものもあった（第 61 図上）。アンカー状木製品は、概ね石積遺構の胴木から間知石の最下段の高さ、海抜 0m となるあたりに、一定間隔を離して設置されていた。海抜 0m を下回る土層からは湧水があり、土層は水を含んで非常に軟質であるため、軟質の土層に杭を打ち込んでも固定できないだろう。アンカー状木製品は、丸太様の木材を利用して接地面を増やし、重量を分散することで、杭の沈降を防ぎつつ、木材の重量によって重心を安定させて、杭の浮遊や傾斜を防いだものと考えられる。

石積遺構北側には黒褐色からオリーブ黒色の土層があり、第 5 層の赤褐色土と明確に異なっている（冒頭概要写真 11）。掘削の結果、溝内の土層はいわゆるレンズ状の堆積をしており、自然堆積に近い形で堆積したと考えられる。このため、石積遺構や第 5 層の形成後に、自然に埋め戻っていったものと考えられる。一方で、石積遺構や土留板列の前面には棚状の盛土遺構がみられた。第 59 図 D-D’ では棚状遺構の肩には細い横木があり、棚状遺構を区画したものと考えられる。一方で、E-E‘ には横木が検出されなかったため、全体に設置されたものではないと推定される。

33 号遺構西側では、石積遺構とその裏込めを確認した。調査範囲の西側壁と 52 号遺構の間の約 4m の範囲で確認した。遺構の西側は調査範囲外まで続いており、東側は 52 号遺構の杭によって失われていた。また、西側には 66 号遺構が掘り込まれ、石積が消失している。土留板列や溝内の棚状遺構は確認できなかった。胴木支えには丸太材ではなく、俗に土丹と呼ばれる軟質の石材 (3) を利用している。胴木は、調査範囲外まで続いており正確な長さ等は不明だが、使われている材は製材であった。また、端部の接手も 33 号遺構東側と同様に円形の孔を穿ち、ダボで固定している。また、胴木⑬のように長さ 1.3m と短いものもあった。胴木の上には石積遺構があり、利用されている間知石は東側と比べてやや大きい。また、東側と比べると、前面が揃わず雑然と積まれた印象を受ける。66 号遺構の設置時等に、一度積み直された可能性がある。また、裏込めには木材や角礫は少なく、代わりに土丹を交えた土層が充填されていた。土丹は裏込めの下層に多く、最下層は土丹が密に詰まっていた。

99 号遺構（第 24 表、図版 30）　33 号遺構の対岸を検出する目的で、Ⅱ区の調査範囲の北壁の一部を掘削したところ、土留板列を検出した。33 号遺構の石積遺構から北に 3.5m を測る。33 号遺構に伴う土留板列と対になる土留板である可能性があるが、99 号遺構の周囲では間知石は確認できなかった。溝の埋立てに利用された土留板列と考えられる。

■建物基礎

２号遺構（第 65・66 図、第 29 表、図版 30）　Ⅰ区東側で検出した。北辺、西辺、南辺を確認し、北辺と南辺は調査範囲外へ続くようである。検出範囲で南北 10m、東西 9m を測り、方形の遺構であると推定される。第 1 層の撹乱により、西辺、南辺は残存状況が悪かったものの、北辺は良好に残存していたため、ここでは北辺の観察をもとに報告する。

遺構は、深さ約 40cm の溝を掘り、そこに杭を 2 列打ち込み、その間を拳大から人頭大の円礫で

充填している。このため、本遺構は円礫充填建物基礎と呼称して報告する。円礫はほぼ全面が自然面であり、白色に近い堆積岩であった。杭は径 15 ～ 20cm のものを利用しており、地中深く打ち込まれていた。杭のうち良好な 2 点をサンプルとして抜き取り、観察、図化した（第 66 図）。杭は枝を落として皮を剥いた幹を用いた丸木材で、長さは約 3 m である。上端部には敲打痕がみられる。特に杭 2 では顕著である。敲打痕が上端部の縁辺にもみられ、縁辺部が削れている。敲打痕は杭ごとに程度が異なるため、杭を打ち込んだ際に遺されたものであろう。また、上端部に釘などを打ち込んだ痕跡はなかった。側面には明確な加工痕はなく、下端部は先端を尖らせるように加工していた。

2 号遺構は、35 号遺構などの建物基礎下部の構造によく似ている。しかし、35 号遺構では杭に伴う掘方は見られず、充填される礫も角礫が含まれていた。また、35 号遺構では杭の上端を繋ぐように横木が設置されて釘で留められていたが、2 号遺構では横木や釘の痕跡が見られないなど、各所に違いが認められる。府立第一高等女学校校舎配置図（第 8 図）や府立第一高等女学校（第 9 図）の写真にも 2 号遺構の位置に建物は認められず、府立第一高等女学校時代以前の建物と推測される。

24 号遺構（第 67 図、第 29 表、図版 30）　Ⅰ・Ⅱ区にまたがって検出した。第 5 層上面にあり、西辺、北辺、東辺を確認した。一方で南辺は確認できず、撹乱を受けた形跡もないため、平面形は南側が開いたコの字形である。遺構は幅 1m の溝状であり、溝の中には覆土とともに多量の瓦片が充填されていた。遺構から出土した瓦片のほとんどが平瓦であり、一部に軒丸瓦、軒平瓦が混入する。特徴的な瓦片については遺物の項で詳述するが、軒丸瓦は揚羽蝶紋、軒平瓦は古手のものである。また、瓦片の多くは被熱しており、覆土にも焼土が多く含まれているため、火災等を受けたものを利用して建物基礎を構築したと考えられる。

Ⅳにて詳述のとおり、元浅草遺跡の土地は明暦 3（1657）年より岡山藩池田家が所有しており、その屋敷は寛文 8（1668）年の火災にて焼失している。岡山藩池田家の家紋は揚羽蝶であるが、24 号遺構出土の蝶紋とはやや異なっている。しかし、後続して屋敷を構えた本多家、酒井家は揚羽蝶紋を利用しないことから、出土した瓦は池田家に関連する軒丸瓦であると考えられ、軒平瓦の年代観とも一致する。本遺構は、焼失した池田家屋敷の瓦を用いて構築したものと考えられ、本多家時代の初期である 17 世紀後葉から 18 世紀初頭の遺構と推測される。

■井戸

12 号遺構（第 68 図、第 30 表、図版 30）　Ⅰ区南側で検出した。第 1 層による撹乱を受けており、側板上端は破断していた。断割り調査により側板を 2 段確認し、また、側板の上段は竹製のタガによって留められていることがわかった。湧水のある粘土層まで掘り込まれていることから崩落の危険があるため、側板下段の上端を確認した時点で調査を打ち切った。湧水層まで掘り込まれることから掘り抜き井戸であると考えられる。また、側板には掘方があり、掘方は第 5 層の最下層部の土層により埋められていることから、第 5 層の盛土を行う以前から井戸が設置されていた可能性がある。

26 号遺構（第 68 図、第 30 表、図版 31）　Ⅰ区南側で検出した。平面は円形で、ほぼ垂直に掘り込まれている。覆土は第 6 層に近いオリーブ黒色の粘土で、礫や瓦片、焼土を含む。当初土坑の可能性もあったが、湧水層に達しても竪坑が掘られていることから、側板をともなわない素掘りの掘り抜き井戸であると考えられる。深度が深く、底面の確認には至っていない。

【池遺構底面検出の井戸】

池遺構下層の調査を行っていたところ、南西隅の底面に円形の側板列を検出した。このため周囲を調査したところ井戸２基（95･97 号遺構）とそれを繋ぐ木樋（96 号遺構）、95 号遺構を囲う木枠（98 号遺構）を検出した。池遺構の底面にあり、それぞれの遺構は海抜 0m 前後で確認された。遺構の周囲は湧水のある軟質な粘土層であったため崩落の危険性が高く、全体を掘削することはできなかった。

95 号遺構（第 69 図、第 30 表、図版 31）　上下２段の側板を確認したが、先述のとおり全体を掘削しておらず、上段は上端から中位まで、下段は上端部のみを確認した。側板上段の上端で海抜 0.3m であり、他の盛土上面と比較するとかなり低いため、さらに上段の側板があったものと推定される。底板を確認できなかったため、掘り抜き井戸であると考えられる。

96 号遺構（第 69・70 図、第 31 表、図版 31）　95 号遺構と 97 号遺構を連結する木樋である。95 号遺構側が高く、97 号遺構に向けて導水していたと考えられるが、97 号遺構側の連結部が板によって止水されていたため、いずれかの段階で止水したものと考えられる。使用された木樋は、胴は芯材のくりぬきで、蓋は一枚蓋である。なお、木樋について、樹種同及び年輪年代学的検討を依頼し、Ⅳにご寄稿をいただいた。

97 号遺構（第 69 図、第 30 表、図版 31）　側板１段と底板を確認した。側板は 96 号遺構接続部以下のみ検出している。底板は一部のみ残存していた。側板上端で海抜 0m を下回り、覆土にも側板の破片が含まれることから、本来はさらに上位まで側板が設置されていたと考えられる。また、底板があることから溜井戸であったと考えられる。当初掘り抜き井戸（95 号遺構）から木樋（96 号遺構）を通して導水し、溜井戸（97 号遺構）として利用していたものが、何らかの理由で板による止水を行い、97 号遺構を廃絶したものと考えられる。95 号遺構も同時に廃絶するのであれば 96 号遺構を止水する必要はないため、97 号遺構廃絶後も 95 号遺構が一定期間利用されていたと推定される。

98 号遺構（第 69 図、図版 31）　95 号遺構を囲う木枠である。西辺と北辺を確認した。東辺は掘削範囲では確認できず、南辺は調査範囲外である。西辺は 96 号遺構の下位にあり、上端部は 96 号遺構の底面に接していた。そのため、98 号遺構は 96 号遺構の設置前に構築されたと考えられ、95 号遺構の構築の際に、軟質土壌の崩落を防ぐために設けられた土留板と推測される。

■その他の遺構

【埋設桶】

埋設桶は４基あり、全てⅠ区北東で検出した。それぞれの埋設桶は南北に、ほぼ等間隔で並んでいる。それぞれの芯々間は約 1.5m である。第１次調査でも同様の遺構を多数検出しており、墓と報告されている。第２次調査では、墓跡と断定できるような痕跡は認められなかったため、埋設桶として報告する。

１号遺構（第 69 図、第 32 表、図版 31）　底板と掘方を確認した。削平を受けており、北側の一部や、側板は検出できなかった。土層には側板の痕跡が遺されていたため、埋設桶であったと考えられる。底板は４枚の板からなり、南北方向に長軸を持つ楕円形を呈する。掘方も類する形状であったと考えられるが、削平のため不明である。

３号遺構（第 69 図、第 32 表、図版 31）　底板と一段の側板、掘方を確認した。当初円形の遺構を確認し、掘削したところ側板と底板が残存する埋設桶であった。覆土から板状の木片を検出しており、埋没時に側板が落下したものと考えられる。また、側板の下端は底板を超えて地中に沈みこんでいた。側板

の設置時に押し込まれたものと考えられる。

４号遺構（第69図、第32表、図版31）　底板と一段の側板、掘方を確認した。当初円形の遺構を確認し、掘削したところ側板と底板が残存する埋設桶であった。3号遺構と同様に、覆土には埋設時に落下したと考えられる側板が含まれ、側板の下端部は下位の土層に沈みこんでいた。また、遺構南側の掘方と側板の間には瓦片が設置されていた。側板を支えるための裏込めと考えられる。

22号遺構（第71図、第32表、図版32）　底板と一段の側板、掘方を確認した。当初円形の遺構と側板の上端を検出し、掘削したところ側板と底板が残存する埋設桶であった。3・4号遺構と同様に側板の下端部が下位の土層に沈みこんでいた。また、検出面で瓦片も検出しており、4号遺構の裏込めの瓦片と同様の機能を担っていた可能性が考えられる。

【木枠土坑】

９号遺構（第71図、第33表、図版32）　Ⅰ区北東で検出した。東側に17号遺構があり、17号遺構の覆土を掘り込んで構築される。平面形は南北方向に長軸を持つ長方形を呈する。掘方の壁面に側板を貼付けて構築されており、掘方壁面、側板ともにほぼ垂直に立ち上がる。覆土に遺物や小礫、木片、灰色砂粒、炭化物、焼土ブロック等を含んでおり、廃棄土坑であった可能性が考えられる。

23号遺構（第71図、第33表、図版32）　Ⅰ区中央西側で検出した。24号遺構と同様に、第5層上面に掘り込まれた遺構である。平面形は南北に長軸を持つ隅丸長方形を呈する。掘方はやや開きながら立ち上がり、西辺・北辺・東辺の掘方壁面に側板が設置されていた。側板は薄く、剥がれて底面に落下したものもある。また、北辺（C-C'）・東辺（D-D'）の側板をみると、本来は長方形の側板であったものの、削平等により上端が削られているようである。第5層も含め、本来はさらに高い位置に上面があったものと推測される。

21号遺構（第71図、第33表、図版32）　Ⅰ区中央西側で検出した。23号遺構の南側にある。上面及び覆土に撹乱を受けており、特に南側で撹乱の影響が大きいものの、平面方形の遺構を検出した。木枠は板ではなく角状の木材を利用しており、西辺・北辺に沿って設置されている。また、北辺・東辺・南辺では、木材より低い壁面に漆喰が塗られていた。湿気を抑制するためのものと推測されるが、底面には塗られておらず、詳細は不明である。

25号遺構（第72図、第33表、図版32）　Ⅰ区中央北側で検出した。遺構上面に第1層による撹乱を受けている。底板と側板、掘方を検出した。掘方の平面形は長方形を呈し、底板は掘方底面とほぼ同規模である。側板も掘方に沿って設置されたと考えられ、木枠は箱状を呈する。覆土には小礫や木片などを含むが、貯蔵や埋納したと考えられる遺物などは出土しなかった。

29号遺構（第72図、第33表、図版32）　Ⅰ区中央北側の第6層上面で検出した。遺構上面に第1層による撹乱を受けている。底板と掘方を検出し、土層観察から側板は腐ってしまったものと考えられる。堀方の平面形はほぼ方形であり、底板は掘方底面とほぼ同規模である。腐敗した側板の外側に掘方の土層が認められず、掘方に沿って側板を設置したと考えられる。25号遺構と同様に木枠は箱状を呈していたと考えられる。覆土には炭化物粒子を含むものの遺物はなく、この土坑の性格は不明である。

【その他の土坑】

85号遺構（第72図、第33表、図版32）　Ⅲ区中央で検出した。一辺3mを超える方形の土坑である。

西辺・北辺の壁際には灰褐色粘土が貼り付けられていた。また、中央北側の壁沿いで 10cm 程度掘り込まれ、段状になっている箇所があった。しかし、西側及び南側に緩やかに立ち上がり、同一の底面となっている。遺構の覆土は第 6 層に近い黒褐色の粘土層であり、遺物や貝片を含むほか、遺構西側では拳大から人頭大の礫が多数含まれていた。

89 号遺構（第 72 図、第 33 表、図版 32） 89 号遺構の底面で検出した。平面形は東西方向に長軸を持つ隅丸長方形を呈する土坑である。底面に深さ 3cm 程度の掘り込みがある。覆土は第 6 層に近いオリーブ黒色粘土質土で、砂を多く含んでいる。

27 号遺構（第 72 図、第 33 表、図版 33） Ⅰ・Ⅱ区の境界付近のⅠ区側にあり、24 号遺構の内部にある。円形の土坑で、覆土及び周囲に小礫が散っている。また、覆土にもロームのような粒子が含まれており、第 5 層の土層が流れ込んだものと考えられる。先述のように 24 号遺構の内部にあるが、関係は不明である。

31 号遺構（第 73 図、第 33 表、図版 33） Ⅱ区東側の第 5 層上面で検出した円形の土坑である。壁面はやや開いて立ち上がる。覆土は黒褐色土で、焼土や炭化物、小礫を多く含む。また、下層は灰色粘土を含む。

68 号遺構（第 73 図、第 33 表、図版 33） Ⅲ区南西で検出した。北側に 52 号遺構の杭が打ち込まれておりその周囲は撹乱されている。平面形は北側に向かって細くなる隅丸長方形であり、断面は南側で直に立ち上がるものの、北側は緩やかに立ち上がる。いわゆる舟形の土坑である。遺構の内部には木材が多量にあり、木材の隙間に黒褐色土が充填されているような状況であった。木材には板状のものや角状のものなど様々な形状があり、一部には臍穴のような加工が施されていた。建材として利用された木材を投棄した土坑と考えられる。

72 号遺構（第 73 図、第 33 表、図版 33） Ⅲ区南西隅で検出した。68 号遺構に隣接する。南側は調査範囲外であり、検出範囲の平面形は長方形を呈する。壁面は僅かに開きながら立ち上がる。68 号遺構と同様に、覆土には多量の木材を含むが、検出したうち上層は遺物が少なく、下層には木材や木っ端がぎっしりと詰まっているような状態であった。68 号遺構と同様に木材を投棄するための土坑であったと考えられる。68 号遺構に投棄された木材と比べると、72 号遺構のものは細かい破片が多くみられる。

69 号遺構（第 73 図、第 33 表、図版 33） Ⅲ区南西で検出した。69・70・74 号遺構は連なって検出し、新しいものから 70 号遺構→ 69 号遺構→ 74 号遺構の順である。当初、69・74 号遺構は一つの土坑として調査を開始したが、土層観察や 69 号遺構の立ち上がりから別の遺構であることが判明した。69 号遺構は不定形の平面を呈し、底面は中央部でやや深くなり、南側に向けて緩やかに立ち上がる。一方北側はやや垂直に立ち上がるようである。覆土には遺物や木片、小礫が多く、68・72 号遺構と同様の廃棄土坑であったものが、削平されて浅い状態で検出されたと考えられる。

70 号遺構（第 73 図、第 33 表、図版 33） 69・74 号遺構と重なり合う遺構で、一連の中では最も新しい土坑である。土坑壁面は緩やかに立ち上がるが、これは削平を受けて底面付近のみ検出した影響であると考えられる。覆土には遺物や木片、小礫が多く、69 号遺構と同様に、廃棄土坑であったものが、削平されて浅い状態で検出されたと考えられる。

74 号遺構（第 73 図、第 33 表、図版 33） 69・70 号遺構と重なり合う遺構で、一連の中で最も古

い遺構である。他の 2 遺構に比べると遺構は良好に残存している。平面は隅丸方形を呈し、壁面はほぼ直に立ち上がる。覆土には遺物や木片、小礫が多く、69・70 号遺構と同様に、廃棄土坑であったと考えられる。

71 号遺構（第 73 図、第 33 表、図版 33） Ⅲ区中央東側で検出した。円形の浅い土坑である。覆土には木片や遺物が含まれ、69・70・74 号遺構と同様に、廃棄土坑であったものが、削平されて浅い状態で検出されたと考えられる。

【溝】

17 号遺構（第 72 図、第 34 表） Ⅰ区東側にあり、調査範囲の壁際に沿って南北に延びる溝である。一部を 2・9 号遺構に切られる。調査範囲の壁面はコンクリートガラなどを多く含んでおり、崩落の危険性があったため、17 号遺構の調査はプランの確認と一部の掘削に留めた。幅は 1.2 ～ 1.5m を測り、掘削した部分では深さ 13cm と浅い溝であった。覆土には炭化物や瓦片などの遺物が混じる。

【遺物集中部】

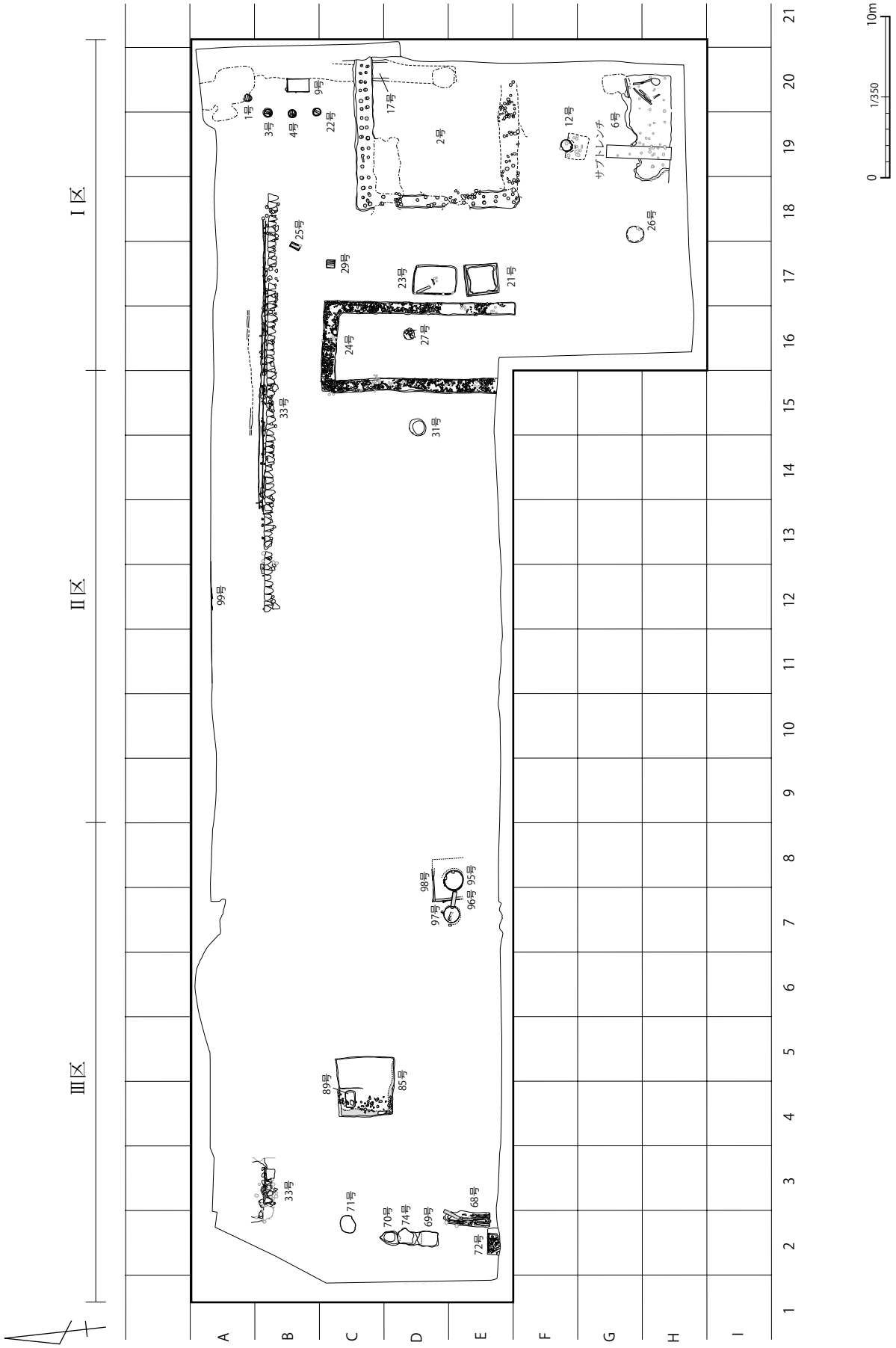
６号遺構（第 74 図、第 35 表、図版 34） Ⅰ区南東から南側で検出した。東側及び南側は調査範囲外である。多数の遺物を包含する土層を検出したものの、周囲は第 1 層による撹乱を受け、範囲が不明であった。このため、サブトレンチを設定し、土層の確認と範囲の確認を行ったが、やはり範囲や形状は不明瞭であった。このため、遺物を多く含む土層（第 74 図 A-A’ の 1 層）をこの遺構の覆土と定め、この覆土の範囲を 6 号遺構として掘削した。覆土中には木片や貝片のほか、多数の遺物が含まれていた。68・72 号遺構のような遺物の廃棄土坑である可能性が高いが、土坑としての形状を確認できなかったため、遺物集中部として報告した。 （山﨑太郎）

【註】

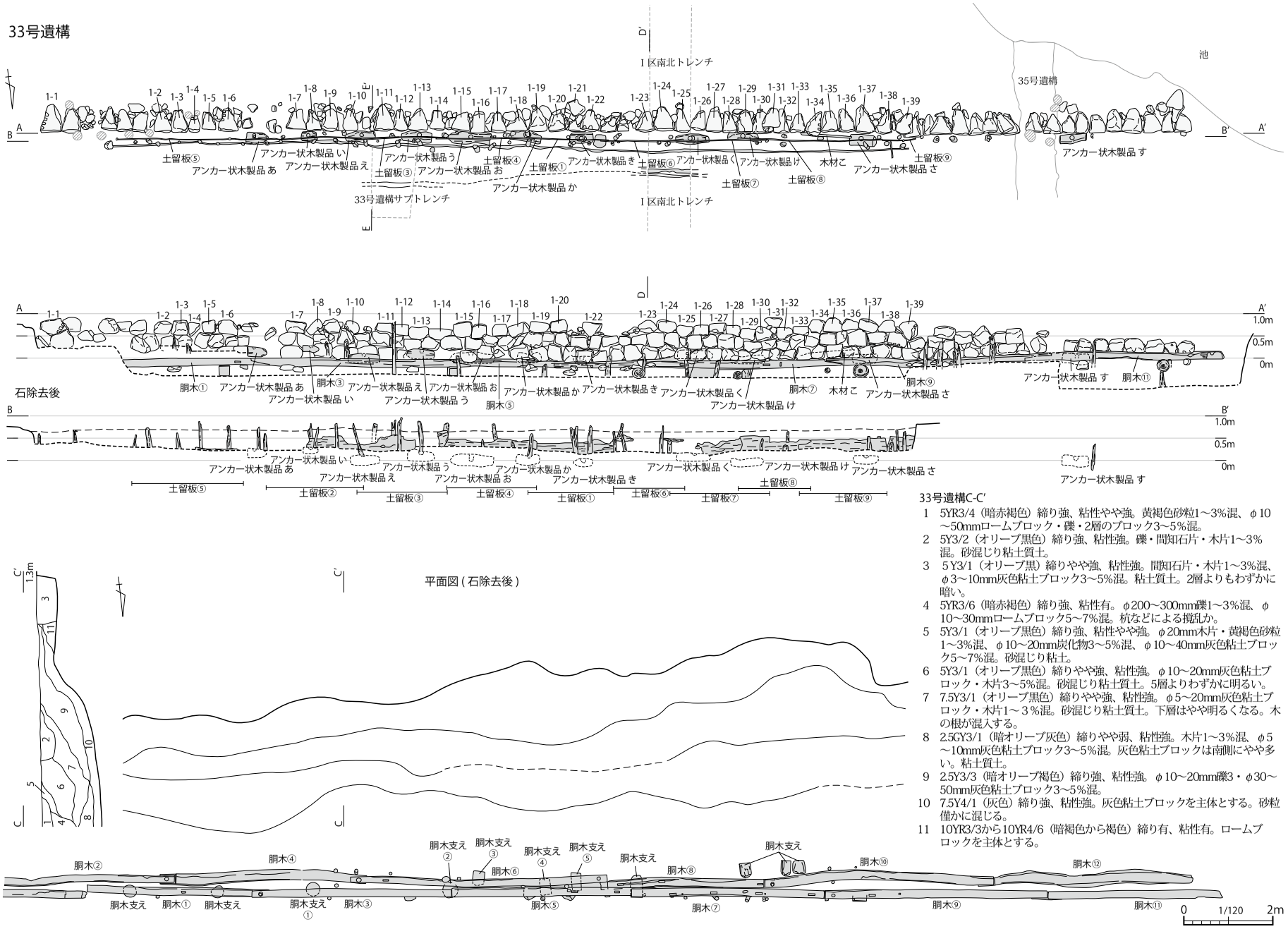
（1）墨田区横綱一丁目埋蔵文化財調査会『本所御蔵跡・陸軍被服工廠跡』株式会社 NTT ドコモ・東日本電信電話株式会社、株式会社ＮＴＴドコモファシリティーズ、墨田区横綱一丁目埋蔵文化財調査会

（2）常滑市教育委員会編 1994『特別展　土管の歴史展～飛鳥から現代まで～』常滑市

（3）正確には岩石ではなく、シルトや粘土が固結したものとされる。本遺跡の土丹は青灰色で、第 6 層が固結したものであると考えられる。



第 57 図　Ⅳ面遺構全体図（1/350）



33号遺構C-C′

1　5YR3/4（暗赤褐色）締り強、粘性やや強。黄褐色砂粒1～3%混、φ10～50mmロームブロック・礫・2層のブロック3～5%混。

2　5Y3/2（オリーブ黒色）締り強、粘性強。礫・間知石片・木片1～3%混。砂混じり粘土質土。

3　5Y3/1（オリーブ黒）締りやや強、粘性強。間知石片・木片1～3%混、φ3～10mm灰色粘土ブロック3～5%混。粘土質土。2層よりもわずかに暗い。

4　5YR3/6（暗赤褐色）締り強、粘性有。φ200～300mm礫1～3%混、φ10～30mmロームブロック5～7%混。杭などによる撹乱か。

5　5Y3/1（オリーブ黒色）締り強、粘性やや強。φ20mm木片・黄褐色砂粒1～3%混、φ10～20mm炭化物3～5%混、φ10～40mm灰色粘土ブロック5～7%混。砂混じり粘土。

6　5Y3/1（オリーブ黒色）締りやや強、粘性強。φ10～20mm灰色粘土ブロック・木片3～5%混。砂混じり粘土質土。5層よりわずかに明るい。

7　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締りやや強、粘性強。φ5～20mm灰色粘土ブロック・木片1～3%混。砂混じり粘土質土。下層はやや明るくなる。木の根が混入する。

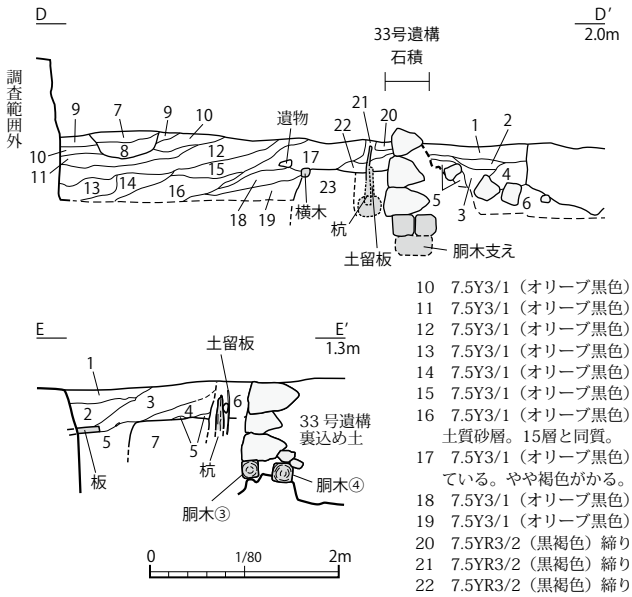
8　2.5GY3/1（暗オリーブ灰色）締りやや弱、粘性強。木片1～3%混、φ5～10mm灰色粘土ブロック3～5%混。灰色粘土ブロックは南側にやや多い。粘土質土。

9　2.5Y3/3（暗オリーブ褐色）締り強、粘性強。φ10～20mm礫3・φ30～50mm灰色粘土ブロック3～5%混。

10　7.5Y4/1（灰色）締り強、粘性強。灰色粘土ブロックを主体とする。砂粒僅かに混じる。

11　10YR3/3から10YR4/6（暗褐色から褐色）締り有、粘性有。ロームブロックを主体とする。

33号遺構

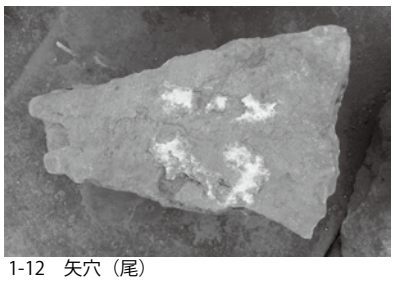


33号遺構D-D′

1　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り強、粘性やや弱。砂混じり土。わずかに褐色がかる。
2　7.5Y2/1（黒色）締りやや弱、粘性やや弱。上層に礫混。砂混じり粘土層。ややオリーブ色がかる。
3　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締りやや弱、粘性強。含水多い砂混じり粘土層
4　7.5Y2/2（オリーブ黒色）締りやや強、粘性弱。φ3mm炭化物粒微。砂混じり粘土層
5　7.5YR3/1（黒褐色）締り強、粘性強。灰白粘土ブロック微。粘土ブロックが強く突き固められている。
6　7.5Y2/2（オリーブ黒色）締りやや弱、粘性強。地山層。
7　7.5Y2/2（オリーブ黒色）締りやや強、粘性弱。φ1~10mm小礫混。砂層。上位からの攪乱か。
8　7.5Y3/1（黒色）締り弱、粘性やや弱。φ5~15cm円礫混。攪乱か。
9　7.5Y3/2（オリーブ黒色）φ1~2mm焼土粒微。砂質土層。
10　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締りやや弱、粘性弱。白色貝片？微。砂混じり土。
11　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締りやや弱、粘性弱。白色貝殻片5%混。砂混じり土。10層より砂粒多い。
12　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締りやや強、粘性無。白色貝殻片3%混。砂層。
13　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締りやや強、粘性弱　砂層。12層よりやや粘性強い。
14　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り強、粘性やや強。砂混じり粘土層。11層より粘土っぽい。
15　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締りやや強、粘性弱。砂混じり粘土層。砂粒多い。
16　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締りやや弱、粘性やや強。φ5~8cmオリーブ黒色粘土ブロック斑状に混。粘土質砂層。15層と同質。
17　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締りやや弱、粘性やや弱。φ3~5cm小礫混。砂混じり粘土層で、ボソボソしている。やや褐色がかる。砂混じりボソボソしている。流れ込みか。
18　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り強、粘性やや強。粘土層。粒子細かく、やや褐色がかる。
19　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り強、粘性やや強。砂混じり粘土層。18層類似だが砂混じる。
20　7.5YR3/2（黒褐色）締りやや強、粘性やや強。φ3~5cm黒褐色ロームブロック多。
21　7.5YR3/2（黒褐色）締り強、粘性やや強。20層類似だが締りより強く、ブロックが大きい。
22　7.5YR3/2（黒褐色）締り強、粘性やや強。褐色土ブロック主体。20・21層よりやや暗い。
23　7.5YR3/2（黒褐色）締り強、粘性やや強。22層と同質。強く突き固められている。

33号遺構E-E′

1　7.5YR3/2（暗褐色）締りやや強、粘性弱。φ1cm小礫・ローム・焼土混。砂が多量に混じる。
2　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締りやや強、粘性やや弱。貝殻片微。砂混じり粘土層。
3　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締りやや弱、粘性やや強。φ1～2cm小礫混。2粘土ブロックと砂粒の混合層。 層類似だが2層より粘性強い。
4　7.5Y3/2（オリーブ黒色）締り強、粘性やや強。粘土ブロックを主体とし、砂粒混じる。褐色がかる。
5　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り強、粘性強。僅かに砂が混じる粘土層。
6　7.5YR4/3（褐色）締り弱、粘性やや弱。φ3～5cm小礫混。ロームブロック主体。ブロックを密に充填するが、崩れやすい。
7　7.5YR3/2（黒褐色）締り強、粘性強。ローム混。ロームブロック多く、かなり均質。


1-12　矢穴（尾）


1-34　矢穴（側面）


3-23　矢穴（側面）


2-19　矢穴（前面）

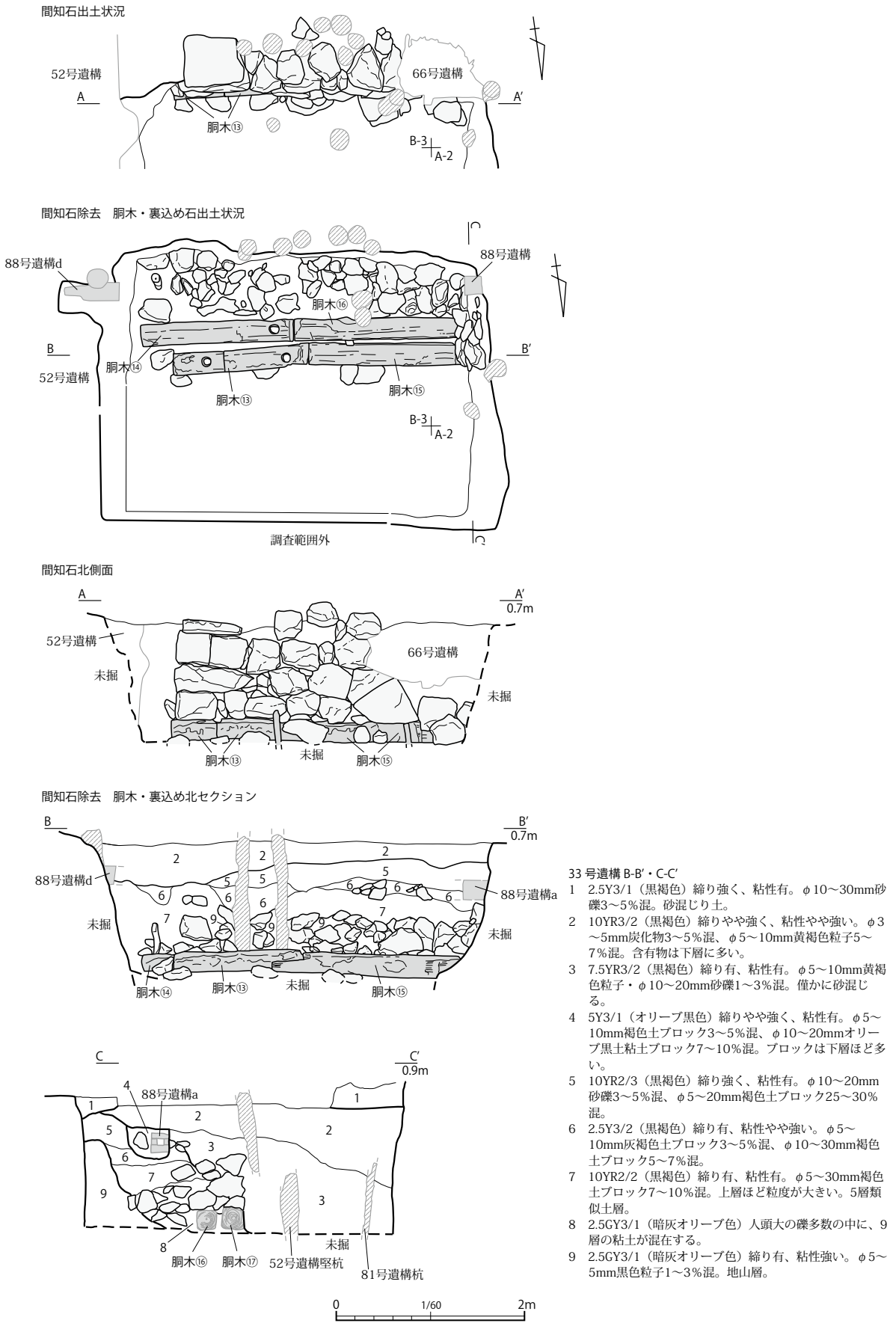

3-2　矢穴（前面）


3-29　矢穴（側面）


3-4　工具痕（前面）


3-32　自然面（側面）

第 59 図　33 号遺構（2）（1/80）



33 号遺構 B-B′・C-C′

1　2.5Y3/1（黒褐色）締り強く、粘性有。φ10～30mm砂礫3～5%混。砂混じり土。

2　10YR3/2（黒褐色）締りやや強く、粘性やや強い。φ3～5mm炭化物3～5%混、φ5～10mm黄褐色粒子5～7%混。含有物は下層に多い。

3　7.5YR3/2（黒褐色）締り有、粘性有。φ5～10mm黄褐色粒子・φ10～20mm砂礫1～3%混。僅かに砂混じる。

4　5Y3/1（オリーブ黒色）締りやや強く、粘性有。φ5～10mm褐色土ブロック3～5%混、φ10～20mmオリーブ黒土粘土ブロック7～10%混。ブロックは下層ほど多い。

5　10YR2/3（黒褐色）締り強く、粘性有。φ10～20mm砂礫3～5%混、φ5～20mm褐色土ブロック25～30%混。

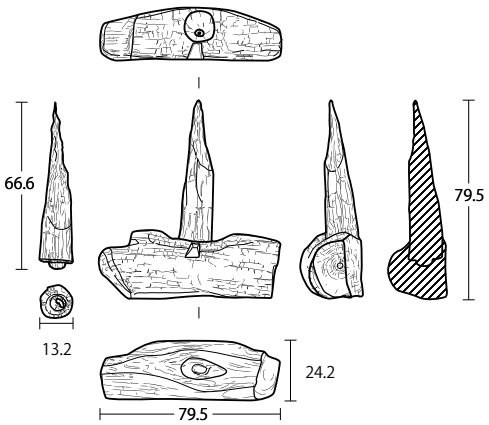
6　2.5Y3/2（黒褐色）締り有、粘性やや強い。φ5～10mm灰褐色土ブロック3～5%混、φ10～30mm褐色土ブロック5～7%混。

7　10YR2/2（黒褐色）締り有、粘性有。φ5～30mm褐色土ブロック7～10%混。上層ほど粒度が大きい。5層類似土層。

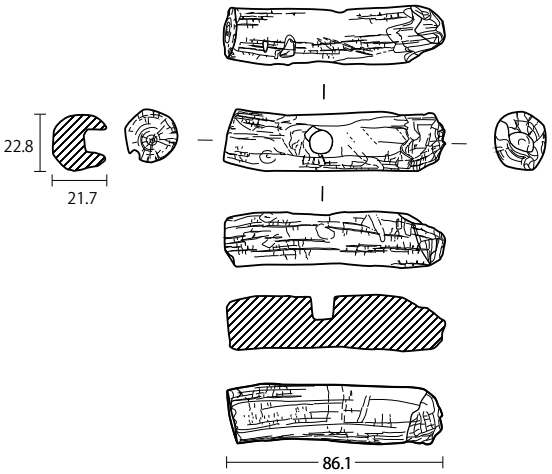
8　2.5GY3/1（暗灰オリーブ色）人頭大の礫多数の中に、9層の粘土が混在する。

9　2.5GY3/1（暗灰オリーブ色）締り有、粘性強い。φ5～5mm黒色粒子1～3%混。地山層。

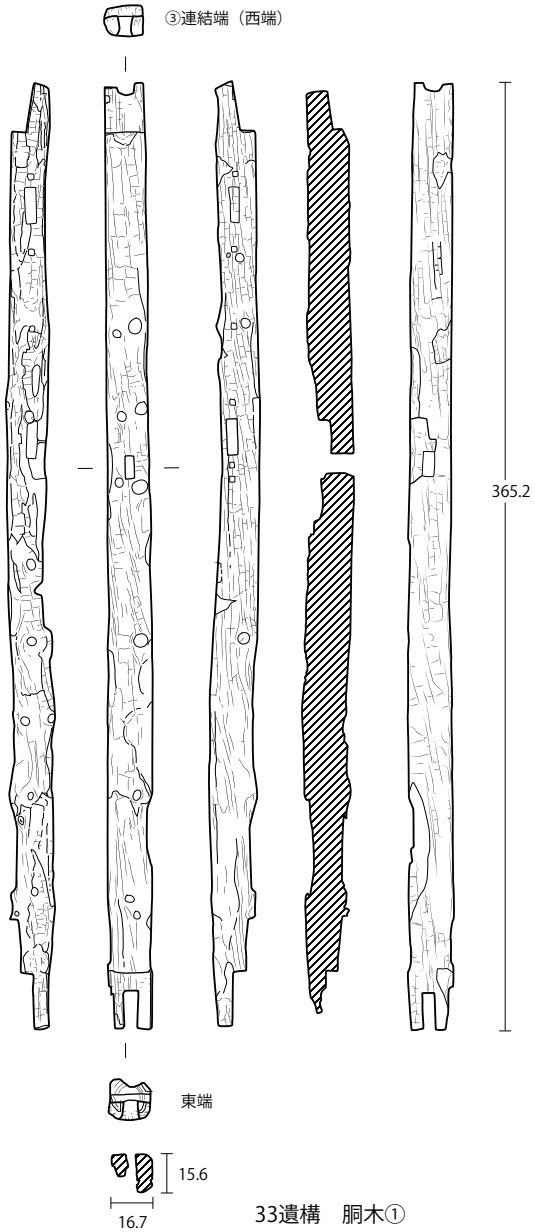
第 60 図　33 号遺構（3）（1/60）



33号遺構　杭＋アンカー状木製品か



81号遺構下出土　アンカー状木製品



33遺構　胴木①

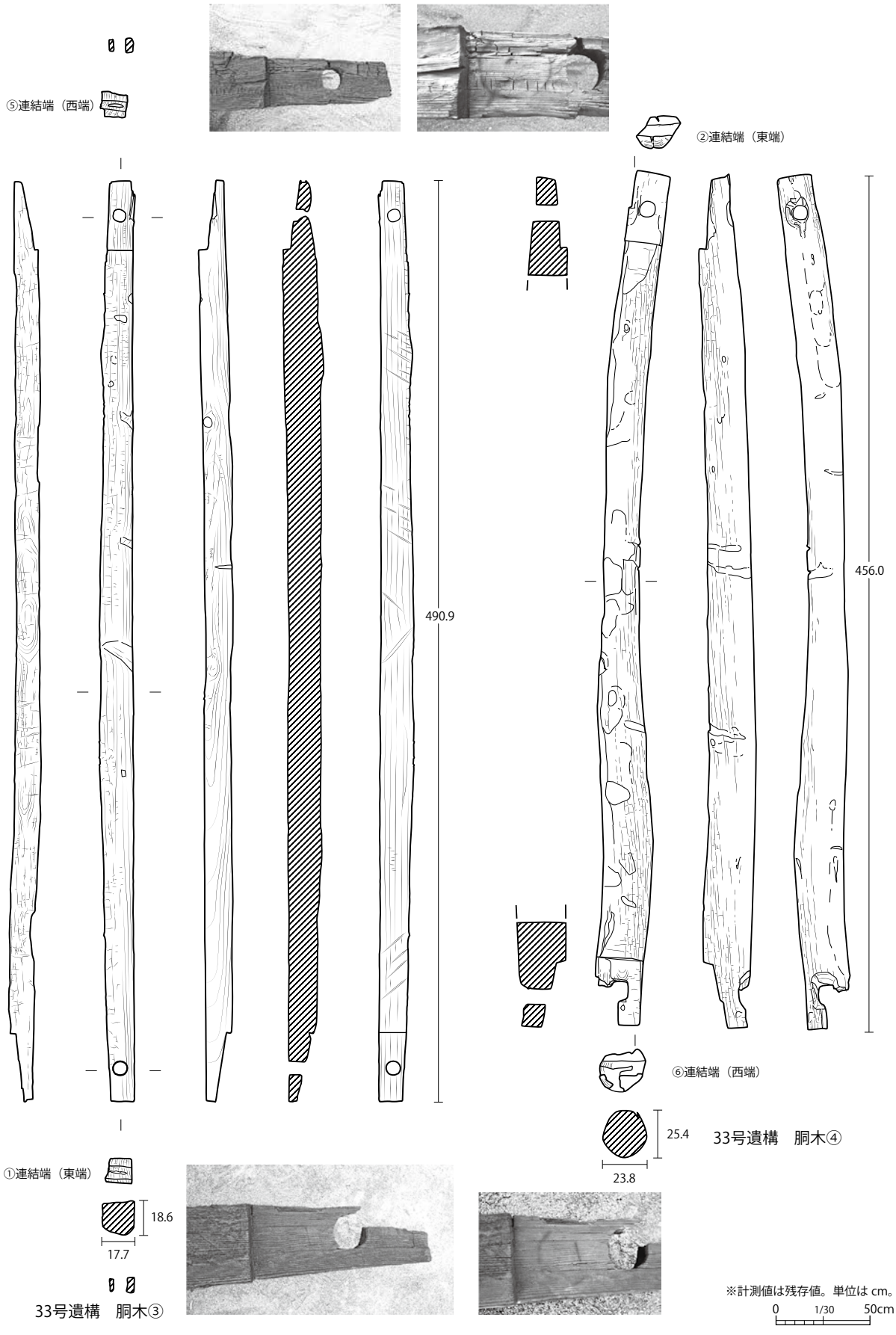


33遺構　土留め板⑨　（残存部分のみ）

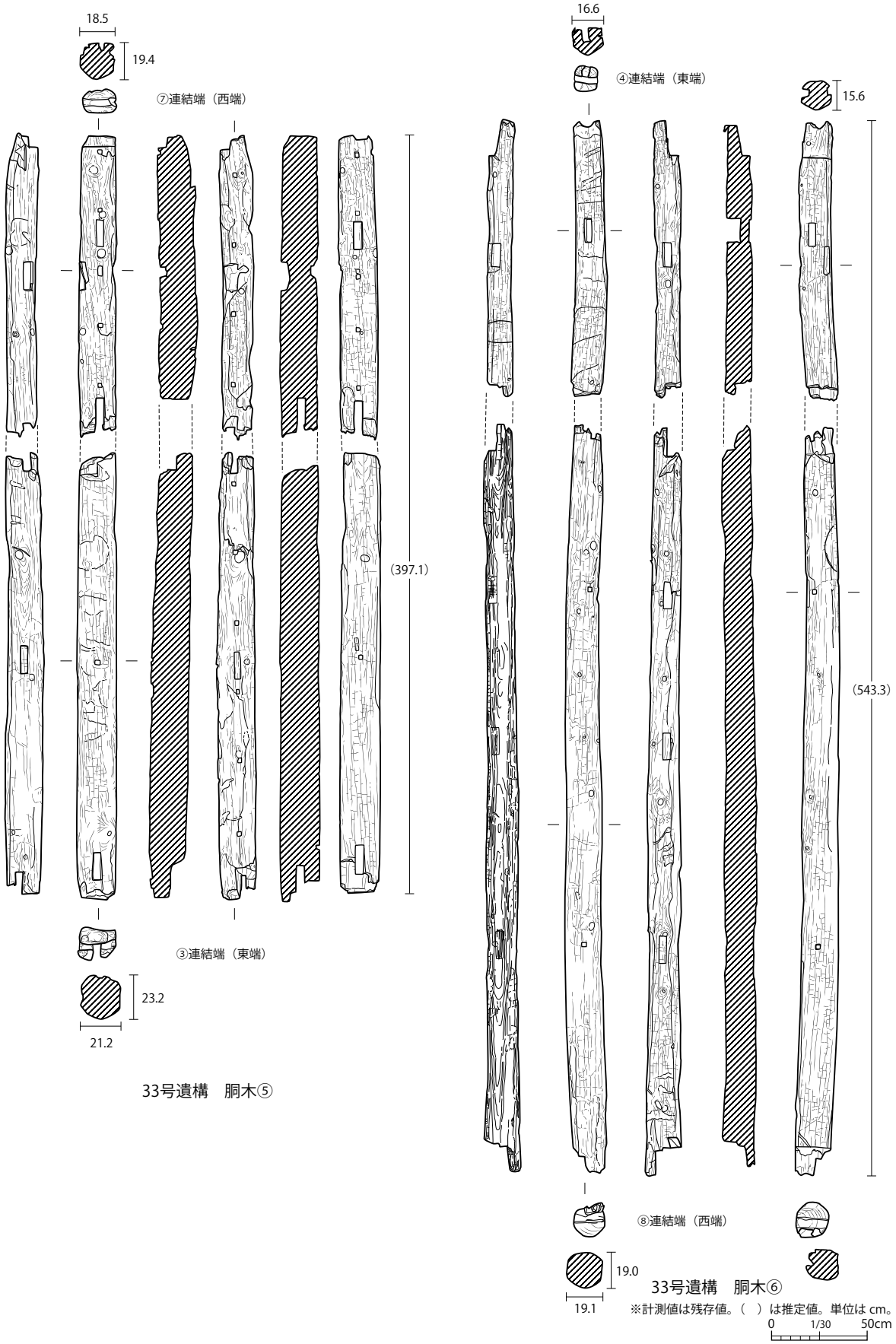
※計測値は残存値。単位は cm。

0　1/30　50cm

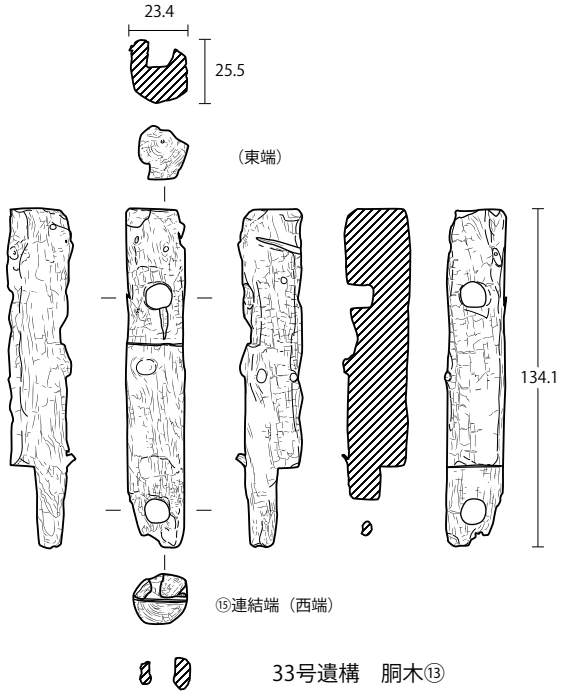
第 61 図　33 号遺構（4）（1/30）



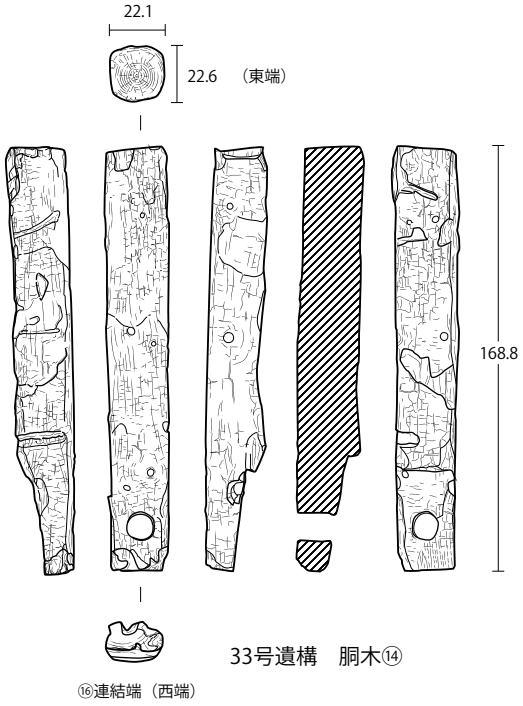
第 62 図　33 号遺構（5）（1/30）



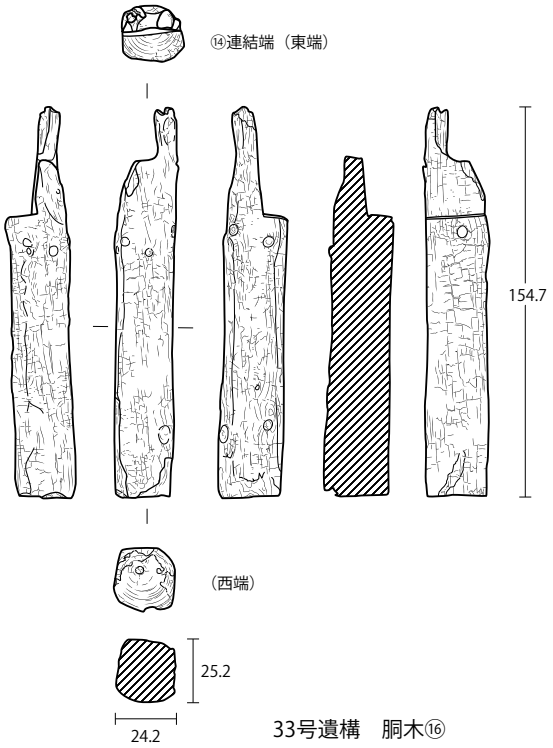
第 63 図　33 号遺構（6）（1/30）



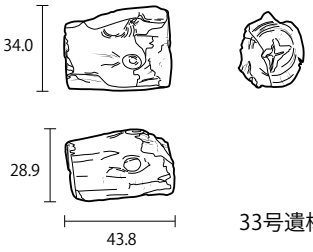
33号遺構　胴木⑬



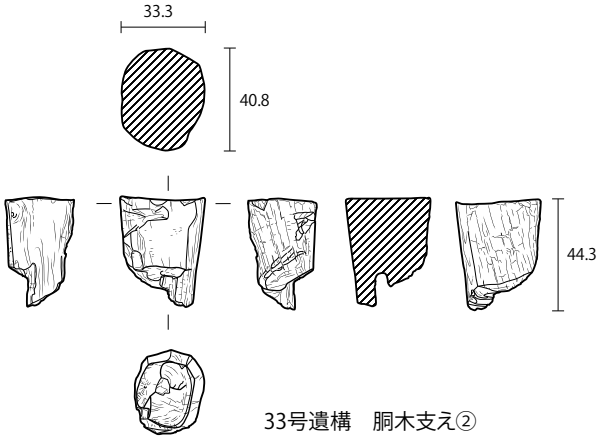
33号遺構　胴木⑭



33号遺構　胴木⑯



33号遺構　胴木支え①



33号遺構　胴木支え②

※計測値は残存値。単位は cm。

0　1/30　50cm

第 64 図　33 号遺構（7）（1/30）

第 26 表　石積遺構計測表

遺構名	挿図番号	図版番号	調査区	グリッド	確認層位	確認面	種類	検出総延長（m）	高さ（m）	長軸方向	推定時期	備　考
33号遺構	第58～64図	図版24～30	Ⅰ～Ⅲ区	B-12～18 B3	第6層	Ⅳ面	石積遺構	(62.7)	0.6	N-83°-E	近世	調査範囲を東西に横断するように位置する。西側は調査範囲外へ続く。

第 27 表　33 号遺構間知石一覧表

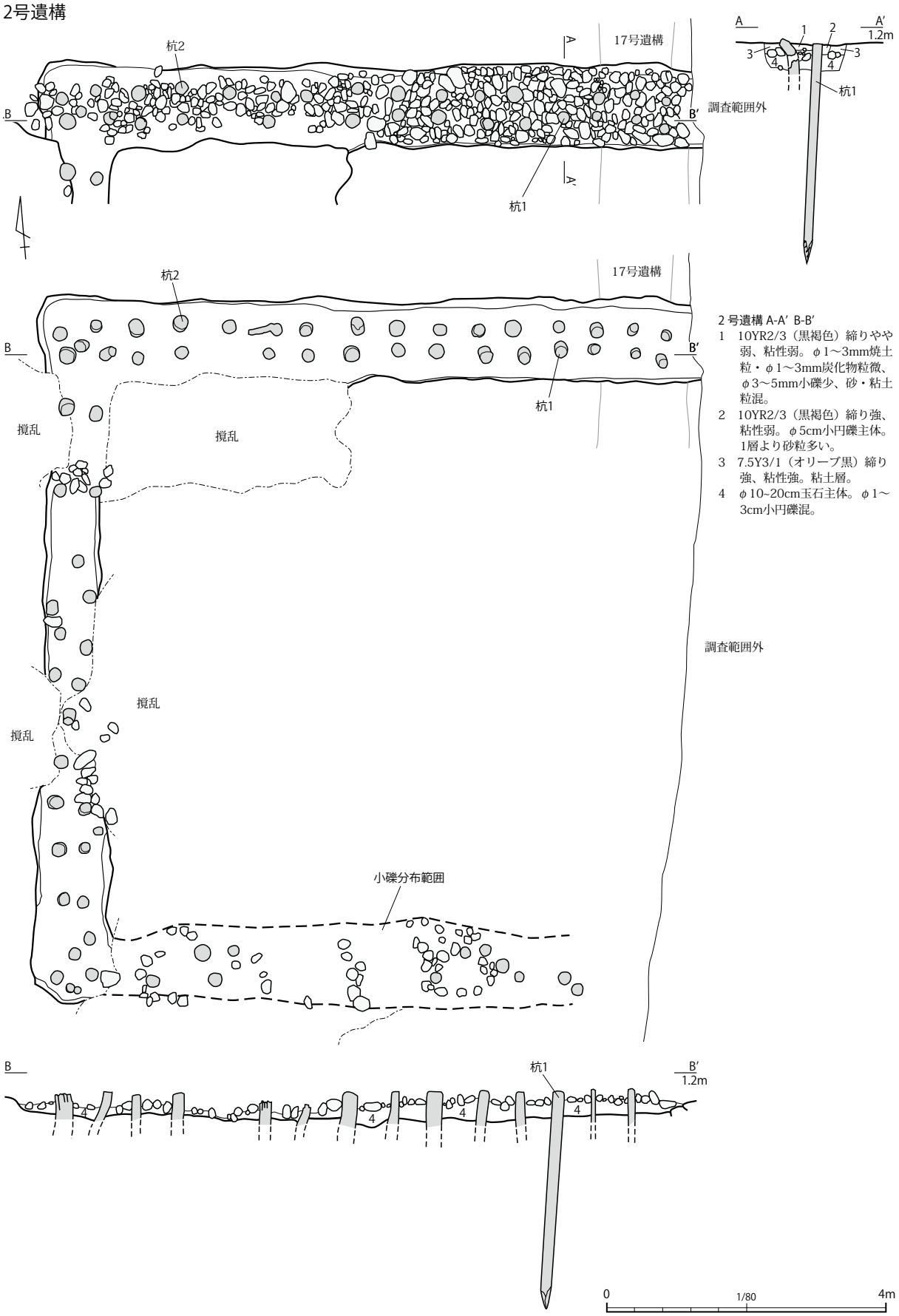
No.	位置	段数	考古学的所見				岩石学的所見								
			大きさ（cm）							斜長石		輝石		多孔質か	備　考
			長軸	短軸	奥行き	備考・矢穴　位置　数（縦×横×深さ　cm）	岩石名	色	粒度	粒径 mm	量	粒径 mm	量		
1-1	Ⅰ区東	初段	48	35	58	矢穴前3（6.0×3.0×1.0/7.0×7.0×1.0/7.0×5.0×2.0）	安山岩	灰	粗	2-10	多	0.5-1	少	多孔質	
1-2	Ⅰ区東	初段	40	30	45		安山岩	灰	粗	2-10	多	0.5-1	少	多孔質	
1-3	Ⅰ区東	初段	33	35	48		安山岩	灰	中	0.5-2	中	1-3	多	×	
1-4	Ⅰ区東	初段	28	26	44		安山岩	赤灰	細	1-3	中	1 ±	少	×	
1-5	Ⅰ区東	初段	29	29	41	矢穴側1（6.0×5.0×1.0）	安山岩	赤灰	細	1-3	中	1 ±	少	×	
1-6	Ⅰ区東	初段	44	31	43	自然面有　前面工具痕有　矢穴：側1（7.0×6.0×1.0）	安山岩	灰	粗	1-3	中	0.5 ±	少	多孔質	
1-7	Ⅰ区東	初段	46	28	44	矢穴側1（5.0×5.0×3.0）	安山岩	灰	細	1-2	少	1 ±	少	×	
1-9	Ⅰ区東	初段	34	33	48		安山岩	灰	粗	2-10	多	0.5-1	少	多孔質	
1-10	Ⅰ区東	初段	32	27	43		安山岩	灰	粗	2-10	多	0.5-1	少	多孔質	
1-11	Ⅰ区東	初段	44	19	58	矢穴前1（6.0×6.0×0.5）	安山岩	灰	粗	2-10	多	0.5-1	少	多孔質	
1-12	Ⅰ区東	初段	34	24	48	矢穴側2（5.0×5.0×1.5/5.0×5.0×1.0）　尾1（5.0×6.0×2.0）	安山岩	灰	細	2-3	少	0.5>	少	×	
1-13	Ⅰ区東	初段	30	30	46		安山岩	赤灰・灰	細	1-3	少	不明		×	
1-14	Ⅰ区東	初段	48	28	45		安山岩	灰	粗	2-10	多	0.5-1	少	多孔質	
1-15	Ⅰ区東	初段	41	36	42		安山岩	暗灰	粗	2-10	多	不明		多孔質	
1-16	Ⅰ区東	初段	30	30	58		安山岩	灰	中	1-4	多	不明		多孔質	
1-17	Ⅰ区東	初段	33	28	44	自然面有	安山岩	灰	中	1-4	多	不明		多孔質	
1-18	Ⅰ区東	初段	47	23	49	矢穴側1（5.0×5.0×2.0）	安山岩	灰	細	1-3	中	1-2	少	×	
1-19	Ⅰ区東	初段	43	26	59	前面工具痕有	安山岩	灰	中	1-4	多	不明		多孔質	
1-20	Ⅰ区東	初段	39	27	52	自然面有	安山岩	灰	中	1-4	多	不明		多孔質	
1-21	Ⅰ区東	初段	42	30	50	自然面有	安山岩	灰	中	1-4	多	不明		多孔質	
1-22	Ⅰ区東	初段	40	30	48	矢穴前1（7.0×5.0×2.0）	安山岩	灰	細	1-2	少	1 ±	少	×	
1-23	Ⅰ区東	初段	45	32	43		安山岩	灰	中	1-4	多	不明		多孔質	
1-25	Ⅰ区東	初段	32	21	53		安山岩	灰	中	1 ±	多	不明		多孔質	斜長石 2 ～ 3mm 点在
1-26	Ⅰ区西	初段	30	20	44		安山岩	灰	中	1-3	多	1-2	中	×	斜長石 5 ±少し
1-27	Ⅰ区西	初段	37	17	60		安山岩	灰	中	0.5-3	多	不明		多孔質	
1-28	Ⅰ区西	初段	30	16	46	矢穴側1（6.0×4.5×1.5）	安山岩	灰	中	1-2	中	1-2	中	×	
1-29	Ⅰ区西	初段	30	22	68	矢穴側1（5.0×5.0×2.5）	安山岩	灰	中	1-3	多	不明		多孔質	
1-31	Ⅰ区西	初段	32	22	47	矢穴側1（5.0×4.0×0.3）	安山岩	灰	中～細	1 ±	中	不明		×	
1-32	Ⅰ区西	初段	31	15	59	矢穴側1（4.0×4.0×1.0）	安山岩	灰	中	1-4	多	不明		多孔質	
1-33	Ⅰ区西	初段	33	19	43	矢穴前2（4.0×5.0×1.5/6.0×5.0×2.0）	安山岩	灰	粗	2-7	多	不明		多孔質	
1-34	Ⅰ区西	初段	31	27	51	矢穴側3（4.0×4.0×1.0/7.0×6.0×1.5/5.0×6.0×2.5） 側2（3.5×5.0×1.5/4.0×4.0×0.3）	安山岩	灰	中～細	1-3	中	1 ±	少	×	輝石小さく見つけにくい
1-35	Ⅰ区西	初段	40	28	61	矢穴側1（6.0×7.0×2.0）	安山岩	赤灰・暗灰	中	1-3	多	不明		×	
1-36	Ⅰ区西	初段	35	19	62		安山岩	灰	中	1-3	多	不明		多孔質	斜長石 8mm 少し
1-37	Ⅰ区西	初段	38	17	71	矢穴側4（5.5×5.5×2.5/4.5×6.0×2.0/6.0×5.0×2.5/4.5×5.0×2.0）	安山岩	灰	中～細	1-3	多	不明		多孔質	
1-38	Ⅰ区西	初段	37	22	53	矢穴側1（5.0×5.0×0.5）	安山岩	灰	中～細	1 ±	中	不明		×	
1-①	—	初段	41	20	46	矢穴前1（5.0×5.0×2.0）	安山岩	赤灰・灰	細	1-2	中	1 ±	少	×	
1-②	—	初段	36	30	45	矢穴前2（3.0×4.0×2.0/3.0×4.0×2.0）	安山岩	灰	細	1-2	中	0.5 ±	少	×	
1-③	—	初段	37	27	53	矢穴前2（6.0×5.5×0.5/5.0×5.0×1.0）	安山岩	灰	中～細	1-2	中	1 ±	少	×	
1-④	—	初段	39	27	68	前面工具痕有　矢穴前3（7.0×6.0×2.5/6.0×7.0×2.0/6.0×6.0×2.0）側5（5.5×5.0×2.5/6.0×4.5×2.5/4.0×5.5×2.0/4.0×4.0×2.5/5.5×5.0×1.5）	安山岩	灰	中	2-10	多	不明		多孔質	
2-1	—	次段	34	24	57	矢穴側3（6.0×4.0×1.0/6.0×5.0×1.5/6.0×4.0×1.0）	安山岩	灰	細	1-3	中	0.5 ±	少		
2-2	—	次段	26	28	49	矢穴側3（5.0×4.0×1.5/6.0×4.0×1.0/4.0×4.0×1.0）	安山岩	灰	細	1-2	中	不明		多孔質	
2-3	—	次段	29	27	43		安山岩	灰	細	2-3	中	不明			
2-4	—	次段	46	30	44	矢穴前4（8.0×7.0×0.5/5.0×4.0×1.0/5.0×4.0×1.0/4.0×4.0×1.0）	安山岩	灰	細	1-2	少	1 ±	少	×	
2-5	—	次段	37	32	58	側面工具痕有	安山岩	暗灰	中	1-2	多	不明		多孔質	
2-6	—	次段	44	29	54	前面工具痕有	安山岩	灰	粗	2-10	多	0.5-1	少	多孔質	
2-7	—	次段	24	33	54		安山岩	暗灰	中	1-2	多	不明		多孔質	
2-8	—	次段	31	23	47	直方体　側面工具痕有　矢穴前1（5.0×3.0×1.0） 側2（6.0×5.0×1.5/7.0×6.0×2.0）	花崗岩								
2-9	—	次段	39	30	62		安山岩	やや暗灰	中	1-3	多	不明		多孔質	
2-10	—	次段	22	20	44		安山岩	灰	粗	1-3	多	不明		多孔質	
2-11	—	次段	22	18	41		安山岩	灰	細	1 ±	少	不明		×	
2-12	—	次段	26	24	44	矢穴前1（5.0×5.0×1.5）	安山岩	灰	細	1 ±	少	不明		×	
2-13	—	次段	33	32	54	矢穴前2（6.0×6.0×1.0/6.0×6.0×1.5）　側2（5.0×5.0×1.0/5.0×5.0×1.0）	安山岩	灰	細	1 ±	少	不明		×	
2-14	—	次段	30	25	59	矢穴側2（5.0×6.0×1.5/5.0×4.0×1.5）	安山岩	暗灰	中	1-3	中	不明		多孔質	
2-15	—	次段	36	29	47	矢穴側2（6.0×5.0×1.0/4.0×5.0×0.5）	安山岩	暗灰	中	1-3	中	不明		多孔質	
2-16	—	次段	31	23	48	矢穴前2（7.0×7.0×2.0/5.0×5.0×0.5）	安山岩	暗灰	中	1-3	少	不明		多孔質	
2-17	—	次段	37	27	56		安山岩	灰	中	1-3	多	1-2	中	×	
2-18	—	次段	35	33	50	矢穴側3（7.0×6.0×0.5/7.0×5.5×1.5/4.0×4.0×1.0）	安山岩	暗灰	中	1-3	多	1 ±	多	多孔質	
2-19	—	次段	38	30	60	矢穴前2（6.0×6.0×1.0/6.0×5.0×1.5）	安山岩	灰	中	1-3	多	1 ± 3 点在	多	多孔質	
2-20	—	次段	37	35	48	矢穴前2（4.0×4.0×1.0/5.0×7.0×1.5）側3（5.0×6.0×2.0/6.0×6.0×1.5/4.0×6.0×1.5）	安山岩	灰	中	1-2	中	1-5	中	×	
2-21	—	次段	37	32	54	前面工具痕有	安山岩	灰	粗	1-3(5)	多	2-5	少	多孔質	
2-22	—	次段	37	36	56	矢穴側2（5.5×5.5×0.5/4.0×5.5×0.5）	安山岩	灰	粗	2-10	多	0.5-1	少	多孔質	
2-23	—	次段	35	31	60		安山岩	灰	中	1-3	中	不明		多孔質	
2-24	—	次段	32	37	54		安山岩	灰	粗	2-10	多	不明		多孔質	
2-25	—	次段	35	24	39	前面工具痕有　矢穴側2（5.0×4.0×0.5/7.0×5.0×1.5）	安山岩	灰	中	0.5-3	中	不明	5 1 個	多孔質	
2-26	—	次段	38	30	51	矢穴前4（7.0×6.0×2.0/6.0×6.0×1.5/6.0×6.0×0.5/6.0×6.0×1.5）側3（6.0×5.0×1.0/5.0×5.0×0.5/5.0×5.0×0.5）	安山岩	灰	中	0.5-3	中	不明	5 1 個	多孔質	
2-27	—	次段	42	37	60	矢穴側3（5.5×5.0×1.5/5.0×4.0×0.5/5.0×4.0×1.0）	安山岩	暗灰	粗	1-3	中	2-4	少	多孔質	
2-28	—	次段	35	31	47	矢穴側1（6.0×4.0×0.5）	安山岩	赤灰	細	1-2	少	不明		×	
2-29	—	次段	43	32	52		安山岩	灰	細	1-2	少	不明		×	
2-30	—	次段	37	35	48		安山岩	灰	中	1-2	中	2-5	少	多孔質	
2-31	—	次段	38	35	61	矢穴前2（6.0×6.0×2.0/7.0×6.0×2.0）	安山岩	暗灰	粗	2-8	多	不明		多孔質	
2-32	—	次段	37	27	57	矢穴側3（6.0×6.0×1.5/7.0×6.0×3.0/6.0×7.0×2.0）	安山岩	灰	粗	2-4	中	不明		多孔質	
2-33	—	次段	36	20	56	前面工具痕有	安山岩	暗灰	粗	1-4	多	不明		多孔質	

No.	位置	段数	考古学的所見				岩石学的所見								
			大きさ（cm）			備考・矢穴　位置　数（縦×横×深さ　cm）	岩石名	色	粒度	斜長石		輝石		多孔質か	備　考
			長軸	短軸	奥行き					粒径 mm	量	粒径 mm	量		
2-34	—	次段	37	29	43	矢穴側1（6.0×3.0×1.5）　側2（6.0×5.0×1.5/6.0×4.5×2.0）	安山岩	暗灰	粗	1-4	多	不明		多孔質	
2-35	—	次段	37	18	38	矢穴側1（6.0×5.0×1.5）	安山岩	暗灰	粗	1-4	多	不明		多孔質	
2-36	—	次段	37	25	54		安山岩	灰・赤灰	中-細	1-3	少	不明		×	風化したような感じ
2-37	—	次段	20	27	50		安山岩	灰・赤灰	中-細	1-3	少	不明		×	風化したような感じ
2-38	—	次段	42	28	55	矢穴前3（5.0×6.0×1.5/6.0×6.0×2.0/5.0×6.0×1.0）	安山岩	灰	粗	1-3	多	不明		多孔質	斜長石 5mm 少
2-39	—	次段	39	21	50		安山岩	灰	中	2-3	中	1-4	多	×	輝石目立つ
2-40	—	次段	40	15	55	矢穴側3（5.0×4.0×1.5/6.0×4.0×1.0/6.0×4.0×1.0）	安山岩	灰	粗	2-10	極多	不明		多孔質	
2-41	—	次段	39	22	50	矢穴側3（5.0×6.0×2.0/5.0×5.0×1.0/5.0×6.0×0.5）側3（4.0×4.5×1.0/4.5×5.5×2.0/5.0×5.0×2.5）	安山岩	やや暗灰	中-細	2±	少-中	不明		×	斑晶見つけにくい
2-42	—	次段	34	29	50		安山岩	灰	粗	1-3	多	不明		多孔質	
2-43	—	次段	32	17	56	矢穴側3（6.5×6.0×1.5/6.0×6.0×1.5/6.0×6.0×1.5）	安山岩	灰	粗	2-10	極多	不明		多孔質	
2-44	—	次段	35	27	64		安山岩	灰	中	1-3	多	1±	少	多孔質	
2-45	—	次段	41	27	51	矢穴前1（4.0×4.0×1.5）	安山岩	灰	中	1-3	多	1±	少	多孔質	
2-46	—	次段	35	13	45		安山岩	灰	中-細	2±	中	不明		×	斜長石 7mm 少し
2-47	—	次段	40	22	52	矢穴前1（4.0×4.5×1.5）	安山岩	灰	中-細	2±	中	不明		×	
2-48	—	次段	35	18	42		安山岩	灰	中-細	2±	中	1-2	中	×	節理面あり、節理面で輝石明瞭
3-1	—	次々段	38	28	38		安山岩	灰	細	不明		0.5>	中	×	
3-2	—	次々段	44	30	45	矢穴前3（6.0×5.0×2.0/5.0×5.0×2.0/5.0×4.0×1.0）	安山岩	暗灰	中	1-3	中	1-3	中	多孔質	
3-3	—	次々段	43	29	44	矢穴側2（6.0×4.0×1.5/3.0×4.0×0.5）　側2（5.0×4.0×2.0/5.0×7.0×3.0）	安山岩	暗灰	中	1-3	中	1-3	中	多孔質	
3-4	—	次々段	35	28	47	前面工具痕有　矢穴側1（6.0×5.0×1.0）	安山岩	暗灰	中	1-3	中	1-3	中	多孔質	
3-5	—	次々段	36	38	49	矢穴前4（5.0×5.0×0.5/6.0×6.0×1.0/6.0×5.0×0.3/5.0×5.0×0.5）	安山岩	暗灰	粗	1-4	多	1±	少	多孔質	
3-6	—	次々段	44	32	54	矢穴側3（6.0×4.0×1.0/6.0×5.0×1.0/6.0×5.0×2.0）	安山岩	暗灰	粗	1-10	多	1±	少	多孔質	
3-7	—	次々段	32	29	45	矢穴側3（6.0×5.0×0.3/6.0×4.5×0.2/4.0×5.0×0.1）	安山岩	暗灰	粗	1-10	多	1±	少	多孔質	
3-8	—	次々段	34	27	51	矢穴前2（6.0×6.0×0.5/5.0×5.0×0.3）	安山岩	暗灰	中	1-3	多	3±	少	多孔質	
3-9	—	次々段	40	27	49		安山岩	暗灰	中	1-3	多	3±	少	多孔質	
3-10	—	次々段	33	35	42		安山岩	暗灰	中	0.5-2	中	2-3	少	多孔質	
3-11	—	次々段	40	26	50		安山岩	暗灰	中	0.5-2	中	2-3	少	多孔質	
3-12	—	次々段	31	29	43		安山岩	暗灰	中	0.5-2	中	3-6	少	多孔質	
3-13	—	次々段	38	32	54	矢穴前2（5.0×6.0×1.5/4.0×5.0×1.0）　側2（4.5×6.0×1.5/6.0×6.0×2.0）	安山岩	暗灰	中	1-2	中	1-3	中	×	
3-14	—	次々段	45	23	36		安山岩	暗灰	粗	1-10	多	1±	少	多孔質	
3-15	—	次々段	32	31	47	前面工具痕有　矢穴側1（5.0×6.0×1.0）	安山岩	暗灰	粗	1-3	多	不明		多孔質	
3-16	—	次々段	37	22	47		安山岩	灰	細	2-3	少	1-2	中	×	
3-17	—	次々段	45	31	48		安山岩	暗灰	中	1-3	中	不明		多孔質	
3-18	—	次々段	33	29	58	前面工具痕有	安山岩	暗灰	中	1-3	中	1± (3)	中	多孔質	
3-19	—	次々段	38	25	63	自然面有	安山岩	暗灰	中	1-3	中	不明		多孔質	
3-20	—	次々段	35	35	41		安山岩	暗灰	中	1-3	中	不明		多孔質	
3-21	—	次々段	40	22	55		安山岩	灰	細	不明		1± (3-5)	多	×	
3-22	—	次々段	37	29	46		安山岩	赤灰	細	1-3	少	0.5-2	中	×	
3-23	—	次々段	29	22	45	矢穴側4（4.0×5.5×0.5/5.0×4.0×2.0/6.0×5.0×1.0/5.0×4.0×0.3）	安山岩	暗灰	粗	2-3	多	1-2	中	×	
3-24	—	次々段	37	28	47		安山岩	灰	細	1-3	少	1-2	多	×	
3-25	—	次々段	47	29	46	矢穴側2（5.5×5.5×1.0/5.5×6.0×1.5）	安山岩	灰	細	1-3	少	2-3	少	×	
3-26	—	次々段	37	34	46		安山岩	暗灰	中	1-3	多	2-6	少	多孔質	
3-27	—	次々段	34	32	44	矢穴側3（6.0×5.0×0.5/4.5×4.5×0.5/6.0×6.0×0.3）	安山岩	暗灰	中	1-3	多	2-6	少	多孔質	
3-28	—	次々段	35	26	57		安山岩	暗灰	中	1-3	多	2-6	少	多孔質	
3-29	—	次々段	31	27	49	矢穴前2（6.0×5.0×0.5/5.5×5.0×1.5）側6（7.0×4.0×1.0/7.0×6.0×2.5/7.0×5.0×2.0/8.0×5.0×1.5/7.0×5.0×1.5/7.0×4.0×1.0）	安山岩	暗灰	中	1-3	多	不明		多孔質	
3-30	—	次々段	39	33	51		安山岩	暗灰	中	1-3	多	2-6	少	多孔質	
3-31	—	次々段	34	29	43	前面工具痕有　矢穴側2（5.0×6.0×2.0/4.5×6.0×2.0）	安山岩	暗灰	中	1-3	多	2-6	少	多孔質	
3-32	—	次々段	41	34	50	自然面有	安山岩	暗灰	粗	1-10	多	1±	少	多孔質	
3-33	—	次々段	32	39	43	前面工具痕有　矢穴前1（4.0×4.0×1.0）	安山岩	暗灰	粗	1-10	多	1±	少	多孔質	
3-34	—	次々段	42	29	44	矢穴前2（5.0×3.0×3.0/6.0×6.0×2.5）	安山岩	暗灰	中	1-3	多	2-6	少	多孔質	
3-35	—	次々段	54	34	59		安山岩	暗灰	中	1-3	多	不明		多孔質	
3-36	—	次々段	38	29	58	矢穴前2（6.0×6.0×2.0/6.0×6.0×1.0）	安山岩	暗灰	粗	1-10	多	1±	少	多孔質	
3-37	—	次々段	30	24	48		安山岩	暗灰	中	1-3	多	2-6	少	多孔質	
3-38	—	次々段	36	27	44	矢穴前1（5.0×5.0×1.5）	安山岩	灰	中	1-3	多	不明		多孔質	
3-39	—	次々段	34	17	57	前面工具痕有　矢穴前1（5.5×5.5×1.0）	安山岩	灰	粗	1-5	多	不明		多孔質	斜長石 10mm 少し
3-40	—	次々段	39	20	58	前面工具痕有　矢穴側2（3.0×5.0×2.0/5.0×5.0×3.0）	安山岩	灰	粗	1-5	多	不明		多孔質	
3-41	—	次々段	41	17	56		安山岩	灰	粗	1-5	多	不明		多孔質	
3-42	—	次々段	28	24	50	前面工具痕有　矢穴側2（5.0×6.0×2.5/5.0×6.5×3.0）	安山岩	灰	粗	1-5	多	不明		多孔質	
3-43	—	次々段	38	19	51	矢穴前2（5.0×6.0×1.0/6.0×5.5×1.0）	安山岩	暗灰	中	1-3	多	不明		多孔質	
3-44	—	次々段	37	22	56	矢穴前2（6.0×3.0×0.3/5.5×5.0×0.2）側3（3.5×5.0×0.5/5.0×5.0×1.0/6.5×5.5×1.0）側3（7.0×4.5×1.5/3.5×3.5×1.0/3.0×3.0×1.0）	安山岩	灰	中	1-3	多	不明		多孔質	
3-45	—	次々段	30	15	47	前面工具痕有　矢穴側1（7.0×4.0×2.0）	安山岩	灰	中	1-3	多	不明		多孔質	
3-46	—	次々段	35	12	60		安山岩	灰	中	1-3	多	不明		多孔質	
3-47	—	次々段	29	23	49	矢穴尾2（4.5×6.0×2.5/5.0×4.0×1.0）	安山岩	灰	中	1-3	多	不明		多孔質	
3-48	—	次々段	26	17	54		安山岩	灰	中	1-3	多	不明		多孔質	
3-49	—	次々段	26	22	43		安山岩	暗灰	中	1-2	多	3-5	少し	多孔質	斜長石 5mm 少し
3-50	—	次々段	26	17	45		安山岩	暗灰	中	1-2	多	3-5	少し	多孔質	
3-51	—	次々段	36	21	50		安山岩	灰	中	1-3	多	不明		多孔質	
3-52	—	次々段	30	17	56	矢穴前1（6.0×6.0×2.0）	安山岩	暗灰	中	1-2	多	3-5	少し	多孔質	斜長石 5mm 少し

第 28 表　土留板計測表

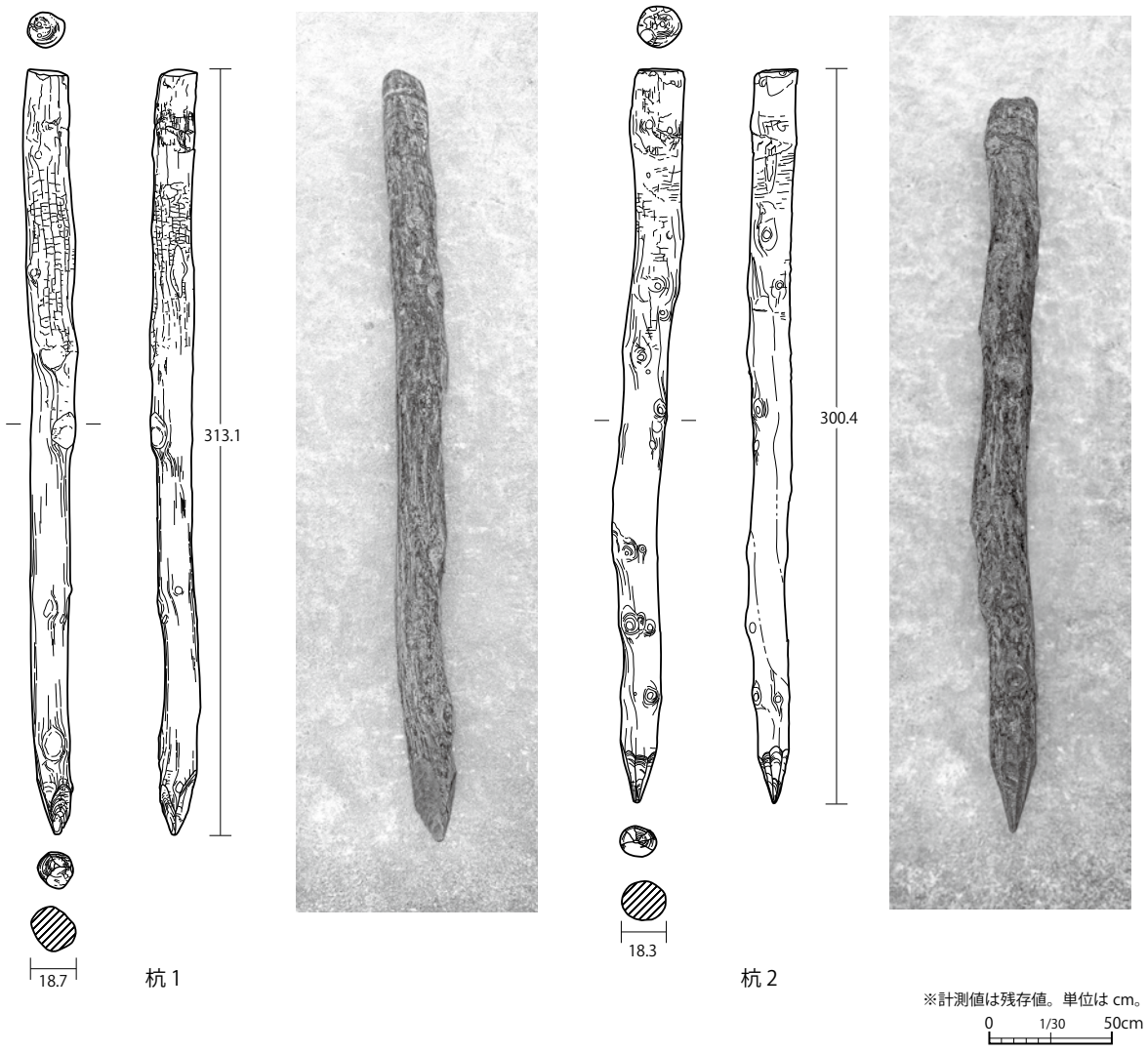
遺構名	挿図番号	図版番号	調査区	グリッド	確認層位	確認面	種類	検出総延長（m）	高さ（m）	長軸方向	推定時期	備　考
33号遺構	第58図	図版24～30	Ⅰ～Ⅱ区 Ⅲ区	B-12～18 B3	33号遺構覆土内	Ⅳ面	土留板列	17.9	0.6	N-83°-E	近世	33号遺構の石垣に伴う土留遺構だが、33号遺構全てに伴うものではない。石積を支えるように設置される。
99号遺構	-	図版30	Ⅱ区	A-12	33号遺構覆土内	Ⅲ～Ⅳ面	土留板	(1.4)	—	N-90°-W	近世～近代	覆土内で一部を検出したのみ。

2号遺構



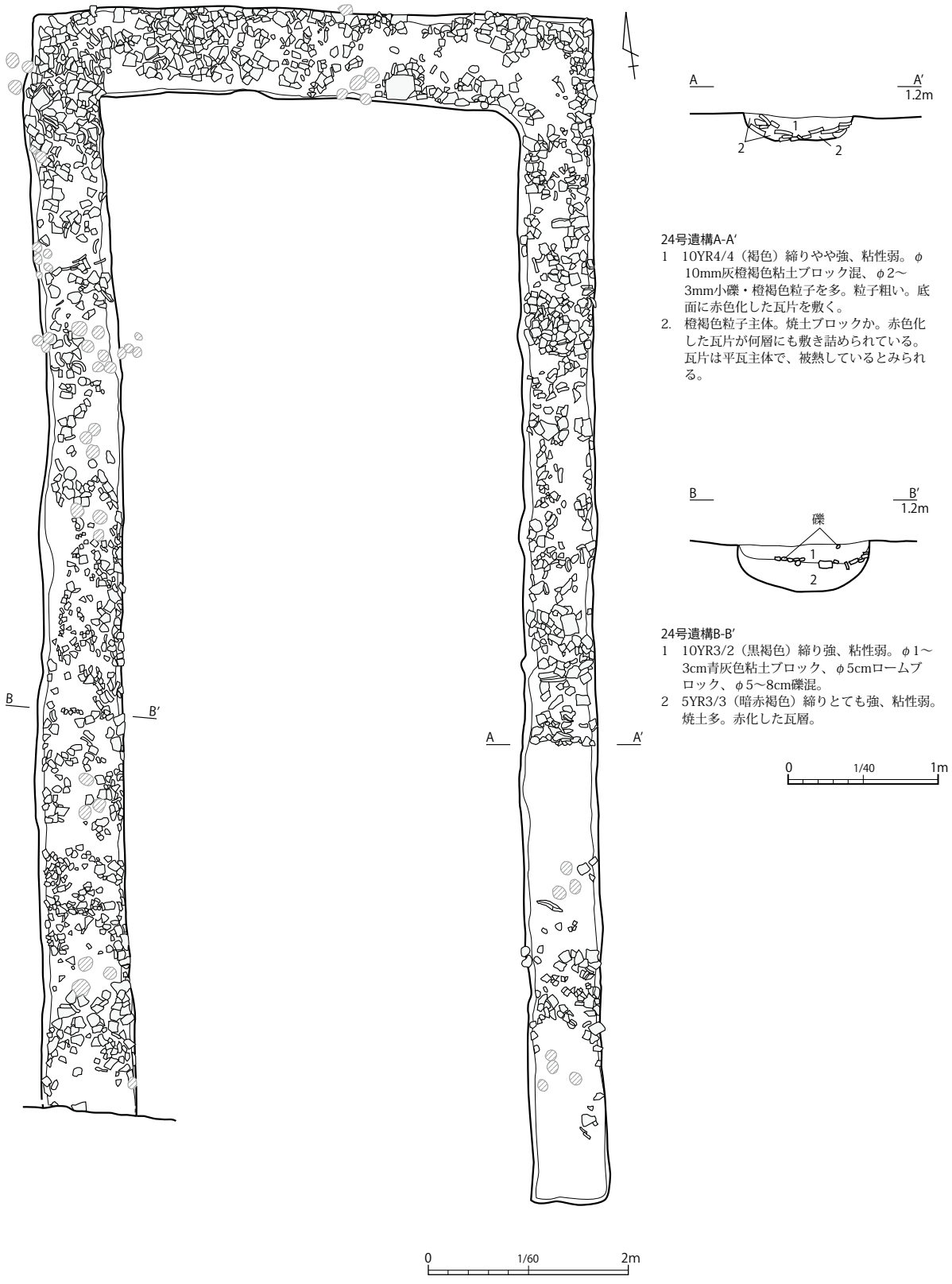
2 号遺構 A-A′ B-B′
1　10YR2/3（黒褐色）締りやや弱、粘性弱。φ1～3mm焼土粒・φ1～3mm炭化物粒微、φ3～5mm小礫少、砂・粘土粒混。
2　10YR2/3（黒褐色）締り強、粘性弱。φ5cm小円礫主体。1層より砂粒多い。
3　7.5Y3/1（オリーブ黒）締り強、粘性強。粘土層。
4　φ10~20cm玉石主体。φ1～3cm小円礫混。

第 65 図　2 号遺構（1）（1/80）



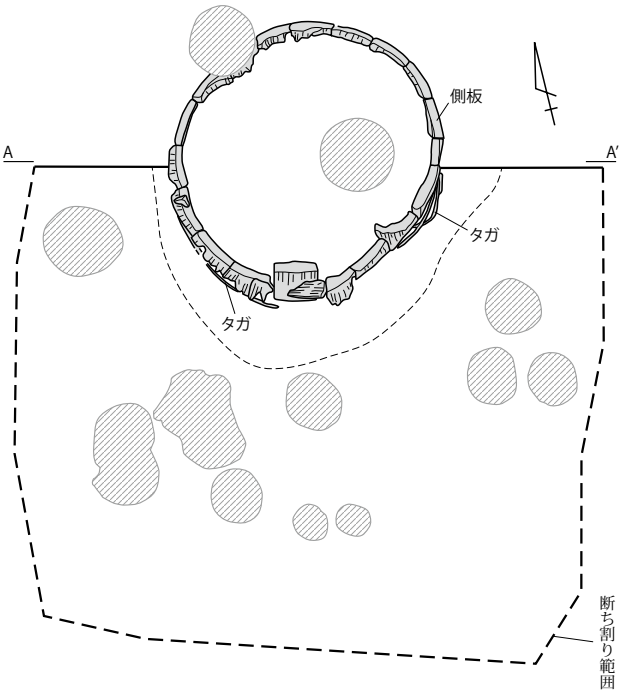
第 66 図　2 号遺構（2）（1/30）

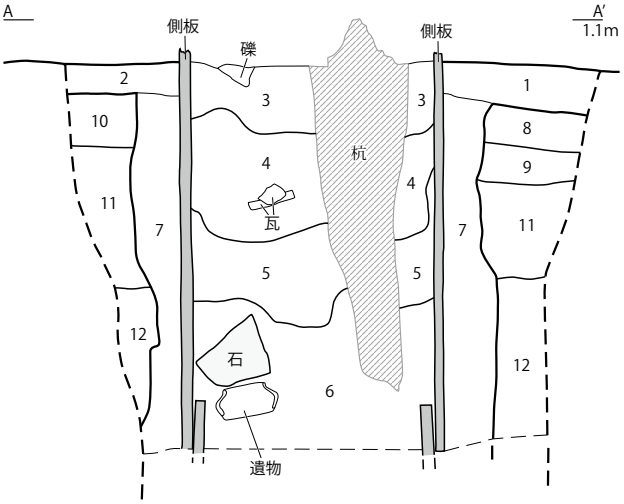
24号遺構

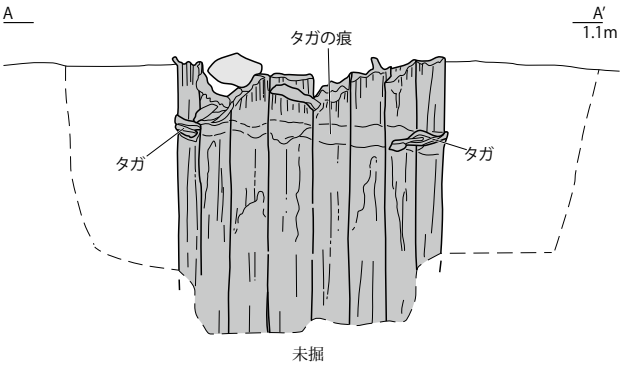


第 67 図　24 号遺構（1/60・1/40）

12号遺構







12号遺構A-A′

1・2層…基本土層5層　3～6層…井戸覆土　7層…井戸掘り方　8～12層…地山

1　7.5Y3/2（オリーブ黒色）締り強、粘性やや強。砂礫3～5%混、φ3～10mm褐色粒子7～10%混。後世の攪乱か。

2　5Y3/2（オリーブ黒色）締り強、粘性有。φ5～10mm褐色土ブロック7～10%混。10層と似るが砂粒を含む。

3　7.5Y3/2（オリーブ黒色）締り強、粘性有。φ3～5mm褐色粒子・砂礫3～5%混、瓦混。井戸の埋め土。

4　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り弱、粘性やや強。φ1～3mm焼土粒1%混、φ1～3mm青灰色粘土ブロック、φ1～2cm小礫混。やや褐色がかる。

5　7.5Y2/2（オリーブ黒色）締り弱、粘性弱。φ1mm焼土粒微。4層より締るが空隙多い。砂粒多く、僅かに粘土混じる。

6　7.5Y2/1（黒色）締り弱、粘性弱。礫・遺物・木片多。わずかに粘土っぽい。砂粒多く、僅かに粘土混じる。含水有。

7　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り強、粘性やや強。φ20～30mmオリーブ黒色粘土ブロック20～30%混。砂粒混じる。土層井戸掘り方。

8　10Y3/2（オリーブ黒色）締り強、粘性有。φ5～20mm褐色土ブロック5～7%混。砂混じり粘土層。

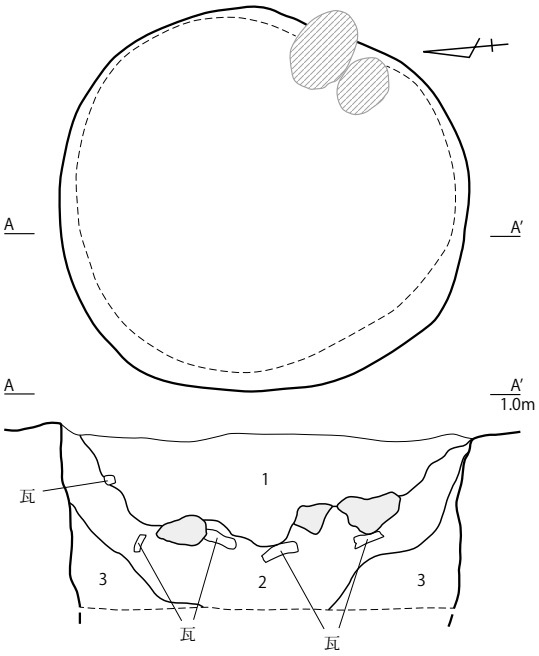
9　5Y3/2（オリーブ黒色）締り強、粘性やや強。褐色土ブロック3～5%混、φ5～10mm11層粘土ブロック5～7%混。

10　5Y3/2（オリーブ黒色）締り強、粘性強。φ5～10mm褐色粒子7～10%混。11層に似た粘土質の土層。9層に対応するか。

11　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り強、粘性強。僅かに砂粒を含む粘土層。地山

12　7.5Y2/1（黒色）締りやや弱、粘性強。粒子細かい粘土層。やや灰色がかる。

26号遺構

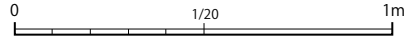


26号遺構A-A′

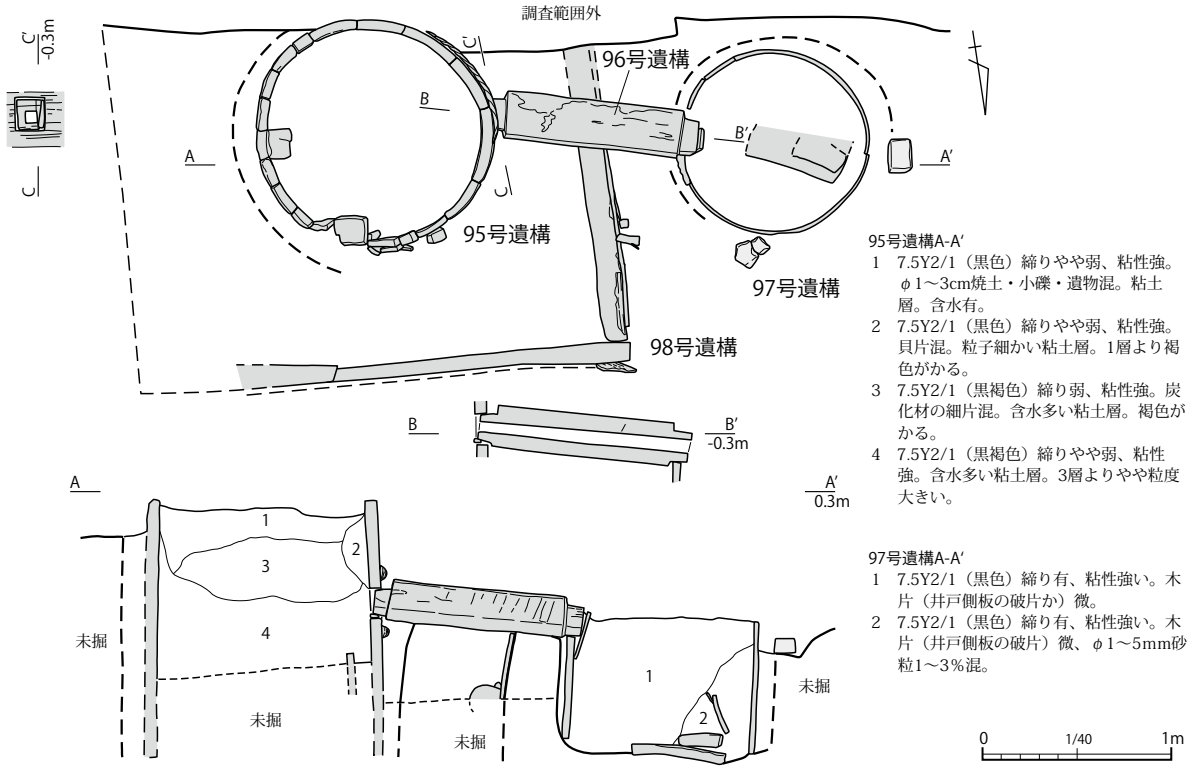
1　7.5Y2/2（オリーブ黒色）締り弱、粘性やや弱。φ3～5mm焼土粒・φ5mm炭化物粒1%混、遺物多。やや褐色がかる。含水多い。

2　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り弱、粘性強。人頭大の礫・瓦混。含水多い粘土層。全体に青色がかる。1層との境目付近はやや黒色がかり、砂っぽい。

3　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締りやや弱、粘性やや強。φ1～3mm焼土粒1%混。砂混じり粘土層。粘土は地山のものか。



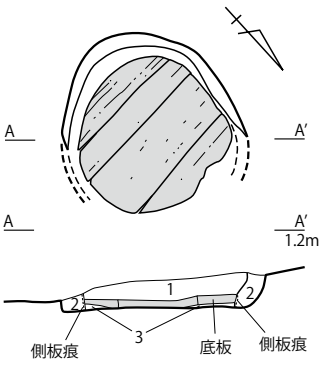
第 68 図　12・26 号遺構（1/20）



95号遺構A-A′
1　7.5Y2/1（黒色）締りやや弱、粘性強。φ1～3cm焼土・小礫・遺物混。粘土層。含水有。
2　7.5Y2/1（黒色）締りやや弱、粘性強。貝片混。粒子細かい粘土層。1層より褐色がかる。
3　7.5Y2/1（黒褐色）締り弱、粘性強。炭化材の細片混。含水多い粘土層。褐色がかる。
4　7.5Y2/1（黒褐色）締りやや弱、粘性強。含水多い粘土層。3層よりやや粒度大きい。

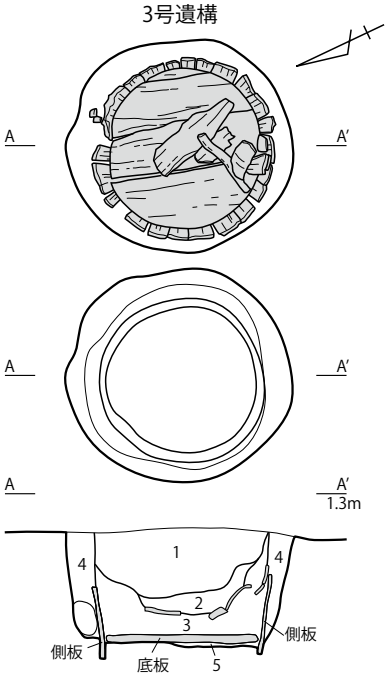
97号遺構A-A′
1　7.5Y2/1（黒色）締り有、粘性強い。木片（井戸側板の破片か）微。
2　7.5Y2/1（黒色）締り有、粘性強い。木片（井戸側板の破片）微、φ1～5mm砂粒1～3%混。

1号遺構

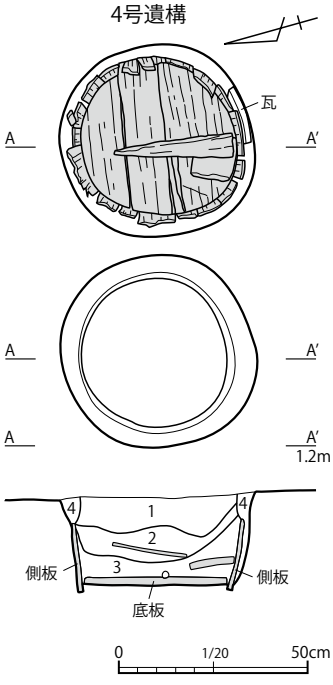


1号遺構A-A′
1　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り極強、粘性弱。φ1～3mm焼土粒・φ2～3mm炭化物微。砂混じり粘土。
2　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り強、粘性弱。φ1mm炭化物粒・φ1~3mm焼土粒微。砂混じり土。1層より砂粒多く黒色がかる。
3　7.5Y2/1（黒色）締り強、粘性有。φ1～5mm砂粒・木片（底板破片か）1～3%混。砂混じり土。

3号遺構



4号遺構



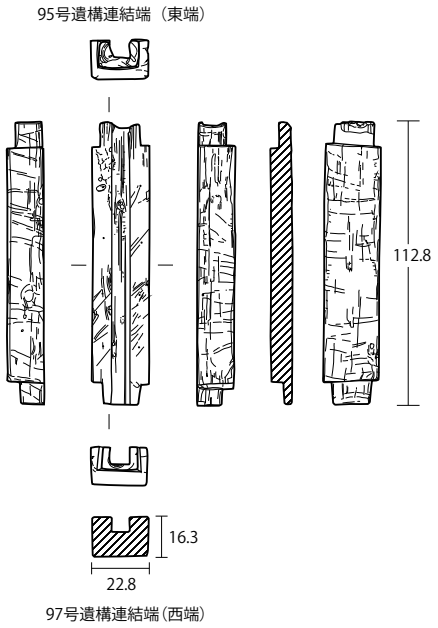
3号遺構A-A′
1　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締りやや強、粘性やや弱。φ1mm炭化物粒・φ1～3mm焼土粒2%混。砂混じり粘土。やや黄色がかる。
2　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締りやや弱、粘性やや強。φ0.5mm焼土粒・炭化物微。砂混じり粘土。1層より暗い。含水有。
3　7.5Y2/1（黒色）締りやや弱、粘性やや強。φ1mm焼土粒1%混、φ1～3mm炭化物粒2%混、遺物多。やや青灰色かかる粘土。含水有。
4　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り強、粘性やや強。φ1～3mm焼土粒・φ1～3mm炭化物粒1～3%混。砂混じり粘土。3層類似。1層より青灰色がかる。
5　7.5GY2/1（緑黒色）締りやや強、粘性やや強。小礫・白色粒子・底板破片混。地山土層を主体に、砂混じる。青灰色がかり、部分的に黒色。

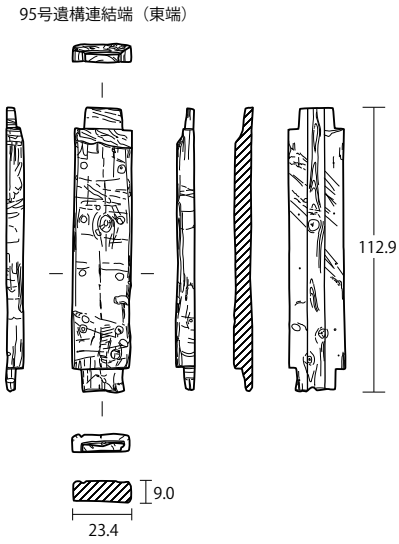
4号遺構A-A′
1　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り強、粘性やや弱。φ1mm焼土粒1~2%混、φ1mm炭化物粒2~3%混。砂混じり粘土質土。
2　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締りやや強、粘性やや弱。φ3～5mm焼土粒・φ5mm炭化物粒3%混。粘土質土。1層よりやや黒色がかる。
3　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締りやや弱、粘性やや強。焼土粒・炭化物粒微。2層類似だがやや締り強。
4　7.5Y3/2（オリーブ黒色）締り強、粘性弱。砂混じり粘土層。

第 69 図　95・96・97・98・1・3・4 号遺構（1/40・1/20）









※計測値は残存値。単位は cm。

0 1/30 50cm



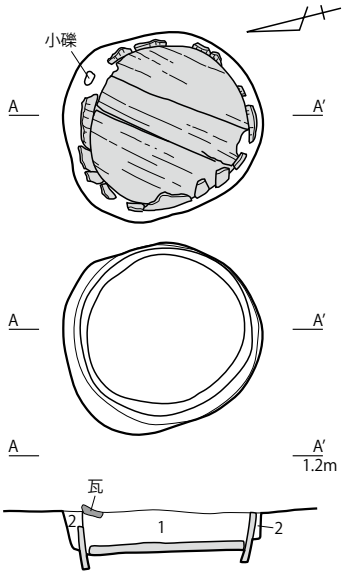
96号遺構　木樋胴



96号遺構　木樋蓋

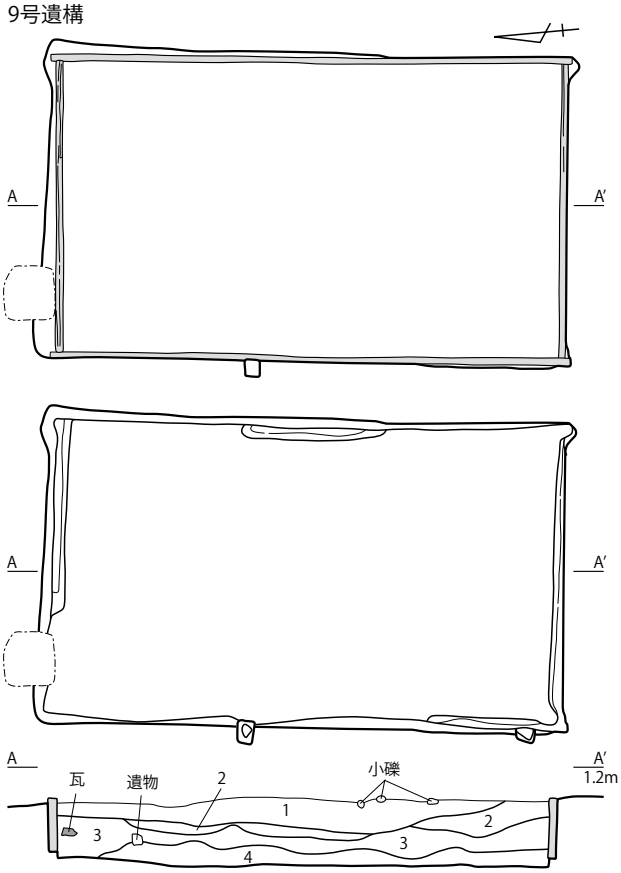
第 70 図　96 号遺構 木樋（1/30）

22号遺構



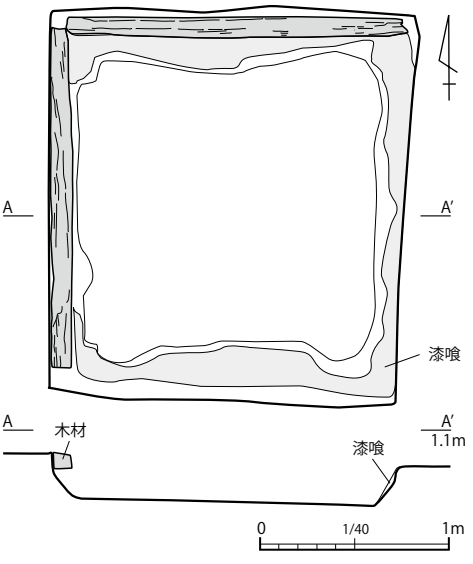
22号遺構A-A′
1　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り強く、粘性弱い。砂質粘土層。
2　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り強く、粘性弱い。φ1mm焼土粒・1mm炭化物微。

9号遺構

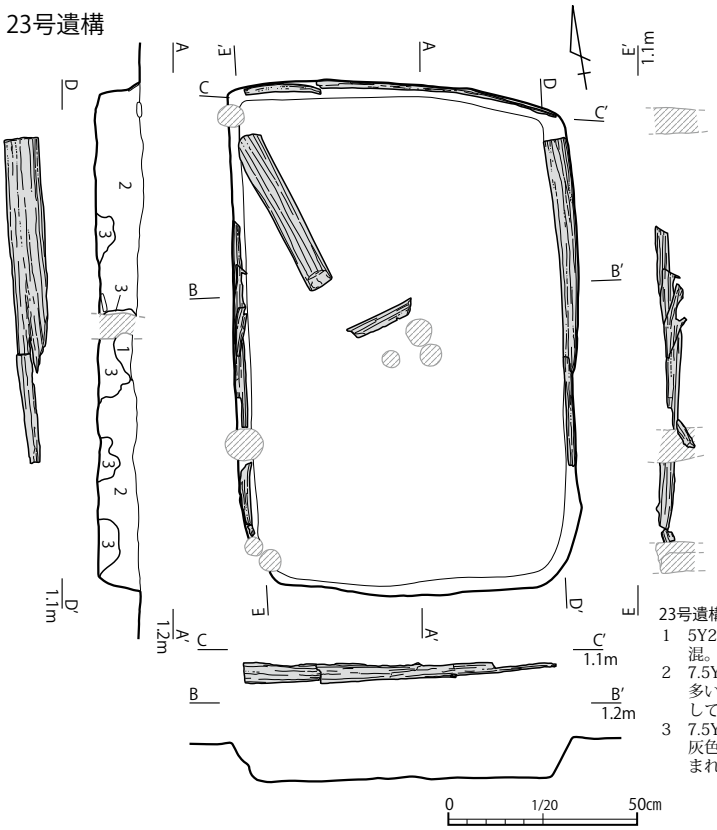


9号遺構A-A′
1　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締りやや弱、粘性強。小礫・木材片少。粘土層。
2　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締りやや弱、粘性弱。灰色砂粒60～70%混。
3　7.5Y3/2（オリーブ黒色）締りやや弱、粘性強。φ1～3mm焼土粒・φ1～3mm炭化物粒1%混。砂っぽい粘土層。含水多い。
4　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り強、粘性やや弱。φ1～3mm焼土粒・φ1～3mm炭化物粒微。焼土・褐色土ブロック斑状に混。1層より黒色がかる。下層は砂粒やや多く黒色がかる。砂混じり粘土層。

21号遺構

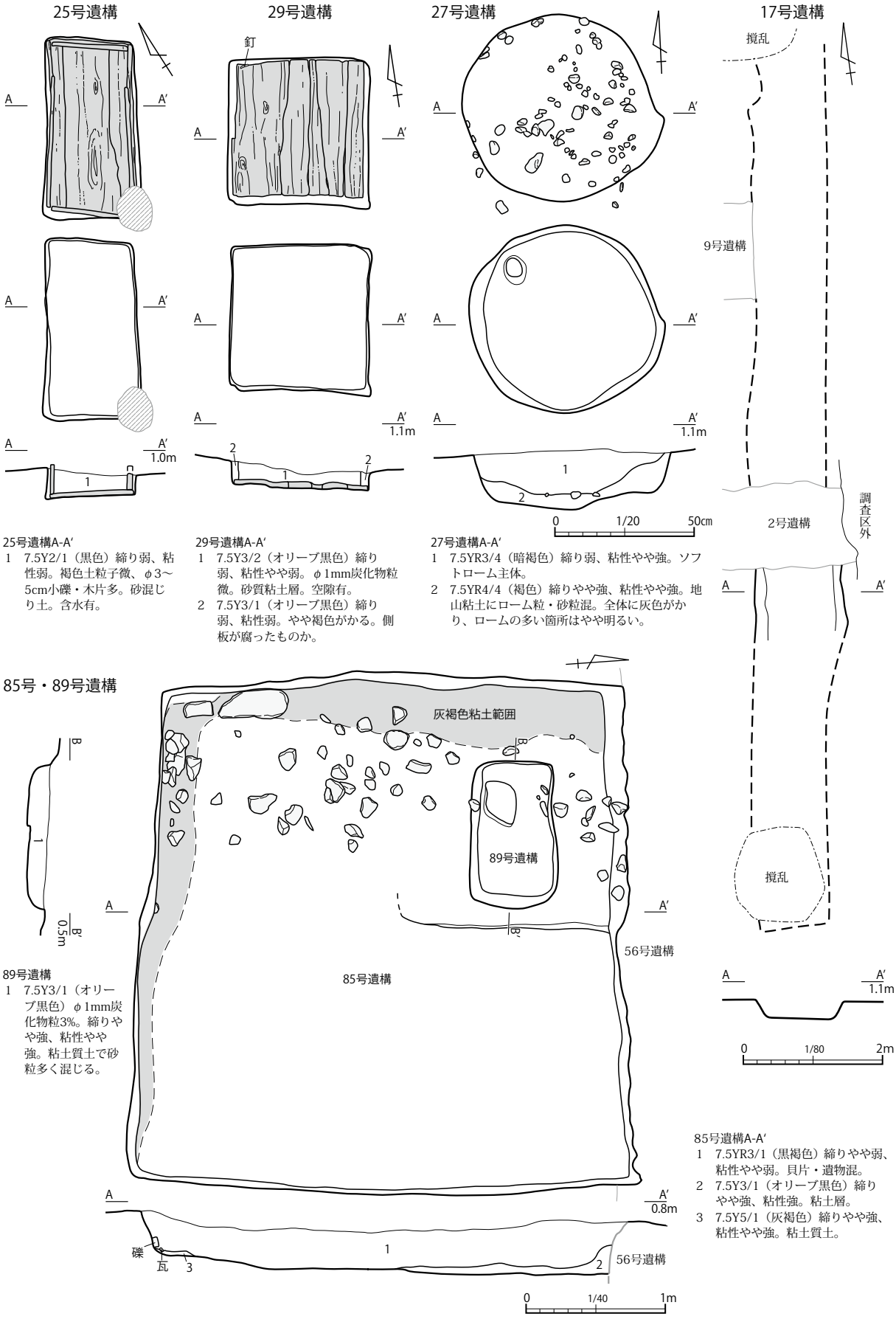


23号遺構



23号遺構A-A′
1　5Y2/2（オリーブ黒色）締り弱、粘性弱。φ1～3mm小礫・木片・遺物混。粒度大きく、砂粒やや多い。。
2　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り強、粘性やや強。砂混じり粘土層。含水多い。垂直方向のヒビが多数入り、ヒビに沿って褐色化（鉄分析出か）している。
3　7.5Y2/2（オリーブ黒色）締り強、粘性強。粘土層。含水多い。やや青灰色がかる。上位から打ち込まれた杭のまわりに見られる。杭が打ち込まれたことにより下位から上がってきた地山層か。

第 71 図　22・9・23・21 号遺構（1/40・1/20）



25号遺構A-A′
1 7.5Y2/1（黒色）締り弱、粘性弱。褐色土粒子微、φ3～5cm小礫・木片多。砂混じり土。含水有。

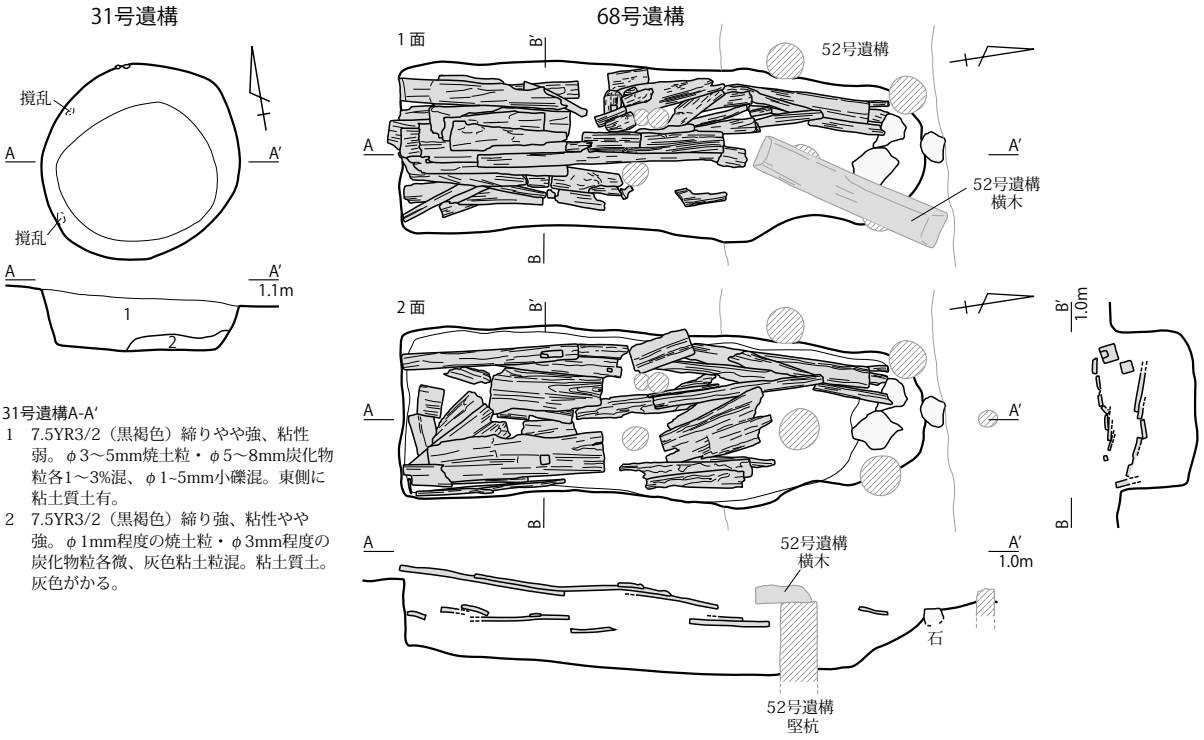
29号遺構A-A′
1 7.5Y3/2（オリーブ黒色）締り弱、粘性やや弱。φ1mm炭化物粒微。砂質粘土層。空隙有。
2 7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り弱、粘性弱。やや褐色がかる。側板が腐ったものか。

27号遺構A-A′
1 7.5YR3/4（暗褐色）締り弱、粘性やや強。ソフトローム主体。
2 7.5YR4/4（褐色）締りやや強、粘性やや強。地山粘土にローム粒・砂粒混。全体に灰色がかり、ロームの多い箇所はやや明るい。

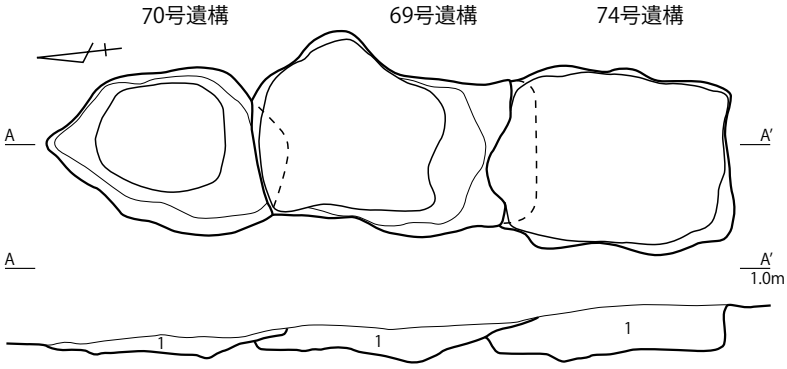
89号遺構
1 7.5Y3/1（オリーブ黒色）φ1mm炭化物粒3%。締りやや強、粘性やや強。粘土質土で砂粒多く混じる。

85号遺構A-A′
1 7.5YR3/1（黒褐色）締りやや弱、粘性やや弱。貝片・遺物混。
2 7.5Y3/1（オリーブ黒色）締りやや強、粘性強。粘土層。
3 7.5Y5/1（灰褐色）締りやや強、粘性やや強。粘土質土。

第 72 図　25・29・27・85・89・17 号遺構（1/20・1/40・1/80）



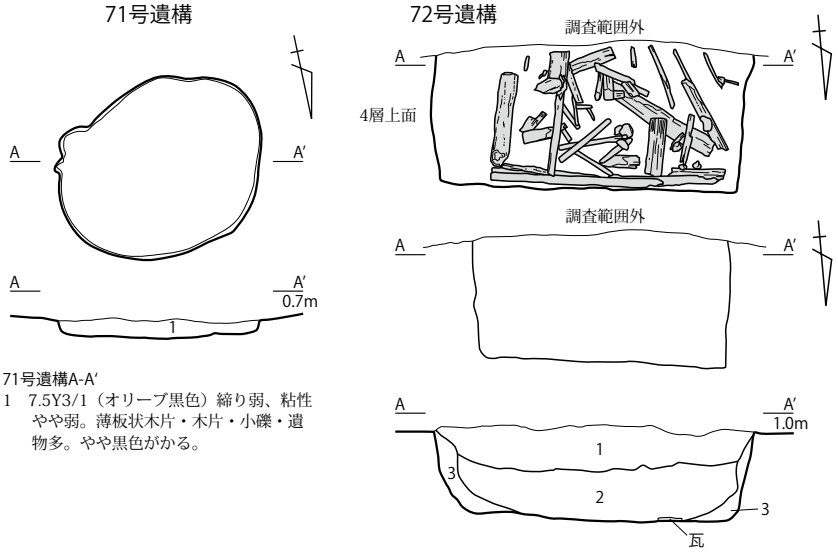
31号遺構A-A′
1　7.5YR3/2（黒褐色）締りやや強、粘性弱。φ3～5mm焼土粒・φ5～8mm炭化物粒各1～3%混、φ1~5mm小礫混。東側に粘土質土有。
2　7.5YR3/2（黒褐色）締り強、粘性やや強。φ1mm程度の焼土粒・φ3mm程度の炭化物粒各微、灰色粘土粒混。粘土質土。灰色がかる。



69号遺構A-A′
1　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り弱、粘性やや弱。小礫混、遺物（木片・薄板片等）多。やや黒色がかる。

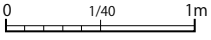
70号遺構A-A′
1　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り弱、粘性やや弱。小礫混、遺物（木片・薄板片等）多。やや黒色がかる。

74号遺構A-A′
1　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り弱、粘性やや弱。小礫混、遺物（木片・薄板片等）多。やや黒色がかる。

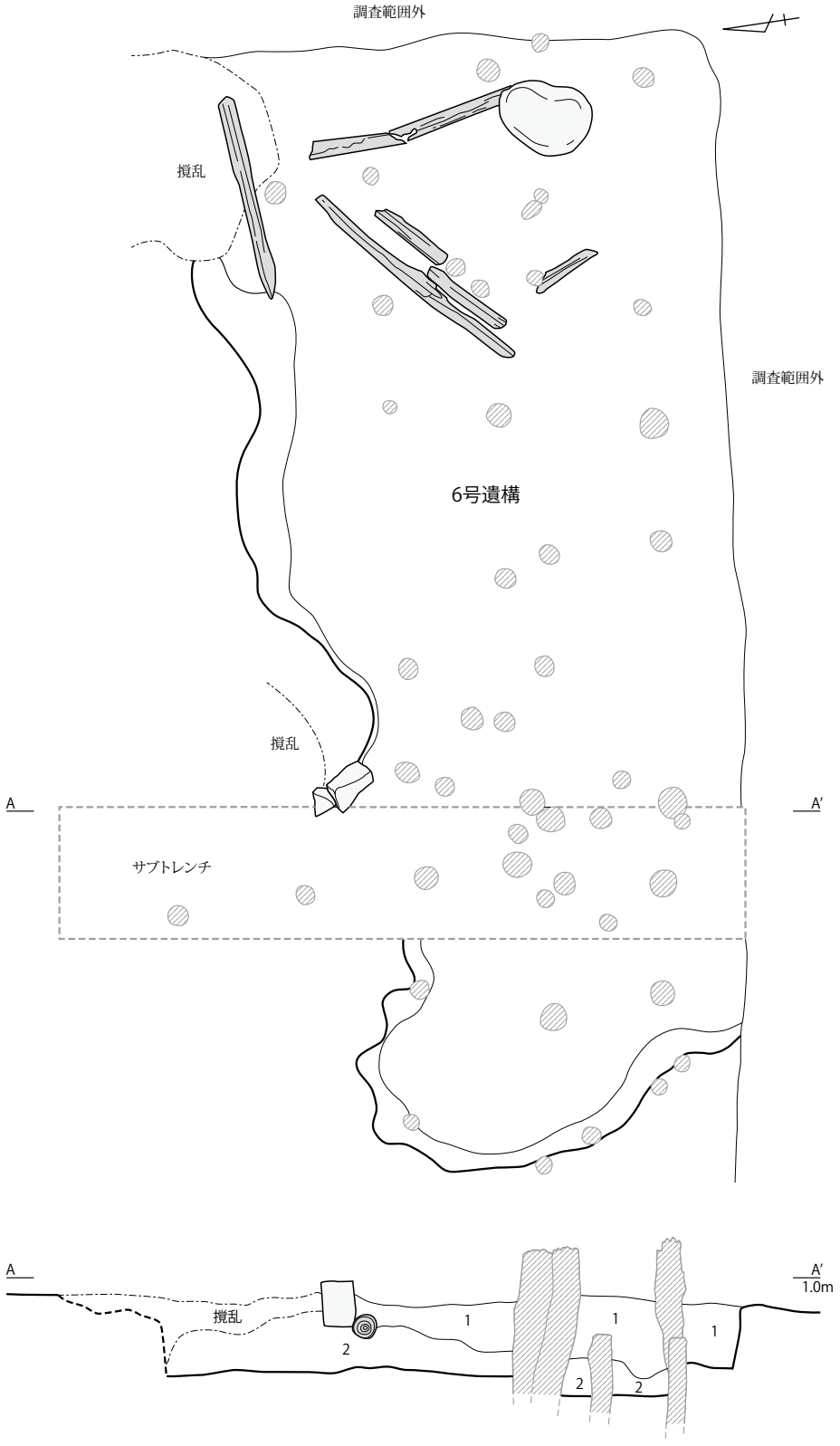


71号遺構A-A′
1　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り弱、粘性やや弱。薄板状木片・木片・小礫・遺物多。やや黒色がかる。

72号遺構A-A′
1　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り強、粘性強。斑状。遺物少。粘土層。
2　木っ端層。材・薄板状木片・木片等密に詰まる。
3　7.5Y3/1（オリーブ黒色）締り強、粘性強。粘土層。1層類似。



第 73 図　31・68・70・69・74・71・72 号遺構（1/40）



6号遺構A-A′

1. 7.5Y2/1（黒色）締りやや強、粘性強。貝片・木片・遺物多。粘土層。やや青灰色がかる。含水有。
2. 7.5Y1/1（黒色）締り強、粘性強。土圧により上位から貝片・遺物がもぐり込む。1層より黒色がかる。地山粘土層。

第 74 図　6 号遺構（1/40）

第 29 表　建物基礎計測表

遺構名	挿図番号	図版番号	調査区	グリッド	確認層位	確認面	種類	規模（m）				長軸方向	平面形	推定時期	備　考
								長軸	短軸	幅	深さ				
2号遺構	第65・66図	図版30	Ⅰ区	C～F-18～20	第6層	Ⅳ面	円礫充填建物基礎	10.2	(9.4)	1.2	3.7	N-6°-E	方形？	近世～近代	東側は調査範囲外。南側は撹乱を受け形が不明瞭。35・52号遺構の胴木下部の構造とよく似ている。
24号遺構	第67図	図版30	Ⅰ区	C～E-15～17	第5層	Ⅳ面	瓦充填建物基礎	(11.8)	5.6	1.0	0.2	N-7°-E	長方形	近世	溝に瓦充填。瓦は被熱したものが多数。平瓦中心。丸瓦の瓦当に蝶紋有。火災を受けた家屋から転用したか。

第 30 表　井戸計測表

遺構名	挿図番号	図版番号	調査区	グリッド	確認層位	確認面	種類	規模（cm）			長軸方向	推定時期	備　考
								長軸	短軸	深さ			
12号遺構	第68図	図版30	Ⅰ区	F-19	第6層	Ⅳ面	井戸	72	69	(104)	N-76°-W	近世	側板を2段検出。下段の側板より下層は深度が深く未確認。
26号遺構	第68図	図版31	Ⅰ区	G-18	第6層	Ⅳ面	井戸	109	101	49	N-4°-W	近世	掘方のみ。
95号遺構	第69図	図版31	Ⅲ区	D・E-7・8	第6層	Ⅳ面	井戸	128	124	138	N-83°-W	近世	側板を2段検出も下段は深度が深く詳細不明。上段西側に96号遺構が接続。
97号遺構	第69図	図版31	Ⅲ区	D・E-7	第6層	Ⅳ面	井戸	99	97	76	N-60°-E	近世	側板を1段検出。東側に96号遺構が接続。

第 31 表　木樋計測表

遺構名	挿図番号	図版番号	調査区	グリッド	確認層位	確認面	種類	検出総延長（m）	幅（cm）	長軸方向	推定時期	備　考
96号遺構	第69・70図	図版31	Ⅲ区	E-7	第6層	Ⅳ面	木樋	1.2	16	N-74°-W	近世	95号遺構と97号遺構の井戸をつなぐ。95号遺構から97号遺構へ向けて傾斜。

第 32 表　埋設桶計測表

遺構名	挿図番号	図版番号	調査区	グリッド	確認層位	確認面	種類	規模（cm）			長軸方向	平面形	推定時期	備　考
								長軸	短軸	深さ				
1号遺構	第69図	図版31	Ⅰ区	A-20	第6層	Ⅳ面	埋設桶	52	(26)	8	N-47°-E	円形	近世	底板のみ検出。
3号遺構	第69図	図版31	Ⅰ区	B-19・20	第6層	Ⅳ面	埋設桶	60	55	31	N-25°-E	円形	近世	底板と側板を検出。覆土内に遺物あり。
4号遺構	第69図	図版31	Ⅰ区	B-19・20	第6層	Ⅳ面	埋設桶	52	50	24	N-15°-E	円形	近世	底板と側板を検出。
22号遺構	第71図	図版32	Ⅰ区	B-19・20	第6層	Ⅳ面	埋設桶	53	47	12	N-14°-E	円形	近世	底板と側板を検出。

第 33 表　土坑計測表

遺構名	挿図番号	図版番号	調査区	グリッド	確認層位	確認面	種類	規模（cm）			長軸方向	平面形	推定時期	備　考
								長軸	短軸	深さ				
9号遺構	第71図	図版32	Ⅰ区	B-20	第6層	Ⅳ面	木枠土坑	140	80	18	N-6°-E	方形	近世	土坑の側面に板材を設置して木枠とする。17号遺構を切る。
21号遺構	第71図	図版32	Ⅰ区	E-17	第5層	Ⅳ面	木枠土坑	210	183	35	N	方形	近世	土坑の北、西の壁際に木材を設置して木枠とする。土坑側面に漆喰塗。
23号遺構	第71図	図版32	Ⅰ区	C・D-16	第5層	Ⅳ面	木枠土坑	135	89	12	N-8°-E	方形	近世	土坑の側面に板材を設置して木枠とする。
25号遺構	第72図	図版32	Ⅰ区	B-17	第5層	Ⅳ面	木枠土坑	65	31	11	N-32°-E	方形	近世	土坑の側面・底面に板材を設置して箱状とする。
29号遺構	第72図	図版32	Ⅰ区	C-17	第5層	Ⅳ面	木枠土坑	53	48	8	N-9°-E	方形	近世	土坑の側面・底面に板材を設置して箱状とする。
27号遺構	第72図	図版33	Ⅰ区	D-16	第5層	Ⅳ面	土坑	70	66	21	N-83°-W	円形	近世	覆土内に小礫多。
31号遺構	第73図	図版33	Ⅱ区	D-15	第5層	Ⅳ面	土坑	113	88	28	N-54°-E	円形	近世	
68号遺構	第73図	図版33	Ⅲ区	E-2	第6層	Ⅳ面	土坑	277	70	45	N-7°-E	舟形？	近世	覆土に木材多。
69号遺構	第73図	図版33	Ⅲ区	D-2	第6層	Ⅳ面	土坑	136	85	18	N-6°-E	不定形	近世	74号遺構を切り、70号遺構に切られる。
70号遺構	第73図	-	Ⅲ区	D-2	第6層	Ⅳ面	土坑	125	(88)	16	N-6°-E	不定形	近世	69号遺構を切る。
74号遺構	第73図	図版33	Ⅲ区	D-2	第6層	Ⅳ面	土坑	132	(98)	25	N-6°-E	不定形	近世	69号遺構に切られる。
71号遺構	第73図	図版33	Ⅲ区	C-2	第6層	Ⅳ面	土坑	116	92	10	N-67°-W	円形	近世	
72号遺構	第73図	図版33	Ⅲ区	E-2	第6層	Ⅳ面	土坑	169	(78)	51	N-85°-W	方形	近世	南側は調査範囲外であり、全体の規模は不明。覆土に木材多。
85号遺構	第72図	図版32	Ⅲ区	C・D-4・5	第6層	Ⅳ面	土坑	374	335	38	N-87°-W	方形	近世	北西側底面が、浅くくぼんでいる。
89号遺構	第72図	図版32	Ⅲ区	C-4	第6層	Ⅳ面	土坑	106	57	15	N-83°-E	長方形	近世	85号遺構の底面にある。底面に不定形のくぼみ有。

第 34 表　溝計測表

遺構名	挿図番号	図版番号	調査区	グリッド	確認層位	確認面	種類	検出総延長（m）	幅（cm）	深さ（cm）	長軸方向	推定時期	備　考
17号遺構	第72図	-	Ⅰ区	B～D-20	第6層	Ⅳ面	溝	(12.7)	146	13	N8.4°-E	近世	調査範囲の東際に南北にある。南側は撹乱、北側は調査範囲外。覆土に炭化物・瓦混。

第 35 表　遺物集中部計測表

遺構名	挿図番号	図版番号	調査区	グリッド	確認層位	確認面	規模（m）			長軸方向	平面形	推定時期	備　考
							長軸	短軸	深さ				
6号遺構	第74図	図版34	Ⅰ区	H－19～20	第6層	Ⅳ面	(6.7)	(2.8)	0.3	N-82°-W	不定形	近世	南側は調査範囲外。遺物廃棄土坑か。

2　遺物

陶磁器・土器を中心に、コンテナ約 80 箱の遺物を取り上げた。ほとんどの遺物が近世以降に属すもので、中世以前の遺物は 7 点に過ぎなかったため一括して報告する。近世以降の遺物については、陶磁器・土器、木製品、金属製品、石製品、ガラス製品、植物質製品、骨角貝製品、その他の素材の製品など、素材で大別して報告し、瓦、煉瓦、その他の建材、玩具・人形・ミニチュア類については、素材を横断して種別でまとめて報告する。

また、池遺構をはじめ、33 号遺構、35 号遺構など、本遺跡において重要な遺構の多くが大型であったため、より具体的な出土位置を示すために、観察表出土地点欄に注記を併記した。特に、池遺構とこれに関連する 93 号遺構については、細かく範囲を区切って遺物を取り上げたので、注記の示す範囲について第 75 図に示す。上層（47 イコウ、47 イコウ下、51 イコウ、61 イコウ、モリ土 4 北 1 ～ 5、モリ土 4 南 0 ～ 7、モリ土 4 西 1 ～ 2）は覆土にあたり、埋立盛土である。下層は底（池北、池南、池西、池北西）および間知石護岸（池北キシ 1 ～ 6、池南キシ 1 ～ 2、池西キシ 1 ～ 3、池東キシ 1 ～ 3）の掘方にあたる。また、93 号遺構については、円形に組まれた間知石を伴う部分を下層（93 イコウ北東上、北西上。南東上、南西上）、これを覆い土橋を伴う部分を上層（93 イコウ北東下、北西下、南東下、南西下）とした。なお、基本土層に関しては、調査時に第 2-1・3 層と第 3 層を掘り分けることができず、遺物は同一土層のものとして取り上げたため、一括して扱う。

1）中世以前の遺物（第 76 図、第 36 表、図版 35）

弥生土器 2 点、古墳時代土師器 1 点、古代須恵器 2 点が出土した。また、時期不明の土器 1 点も便宜的にこの項で扱い、計 6 点を報告する。（両角まり）

■弥生土器

1 は壺頸部片で、1/6 片からの推定復元である。頸部径は現状で 10.6cm であるが、もう少し細頸かもしれない。頸部の屈曲は強くなく緩やかに外湾する。外面は 3 条の S 字状結節文を 3 条施す。結節文の下端に LR 縄文が部分的に認められている。結節文の末端圧痕か横位施文の LR か明確にできない。文様帯以外は横位ヘラミガキの後赤彩である。内面は横位ヘラミガキ、肩部内面は指ナデである。胎土は砂質で径 2 ～ 5 mm 大の赤褐色のシャモットをわずかに含む。焼成は良好で、堅緻。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）、赤彩部分は赤褐色（2.5YR4/6）である。 2 は壺の胴部下半 1/10 片からの推定復元である。現状の胴部最大径は 22.5cm である。球胴形を呈すると思われる。外面は粗い横位の横ヘラミガキで、上部は赤彩される。ヘラミガキが雑なため、砂粒が器面に沈み込むことなく多数浮き出ている。内面は横位のナデの後ヘラナデである。胎土は砂粒が多く黄白色の軟質粒子を大量に含む。焼成は良好で外面は黒斑が残る。色調は灰黄褐色（10YR5/2）、赤彩は暗赤褐色（2.5YR3/6）である。 1 、 2 、いずれも弥生時代後期後半である。 1 は池遺構上層、 2 は第 1 層からの出土である。（及川良彦）

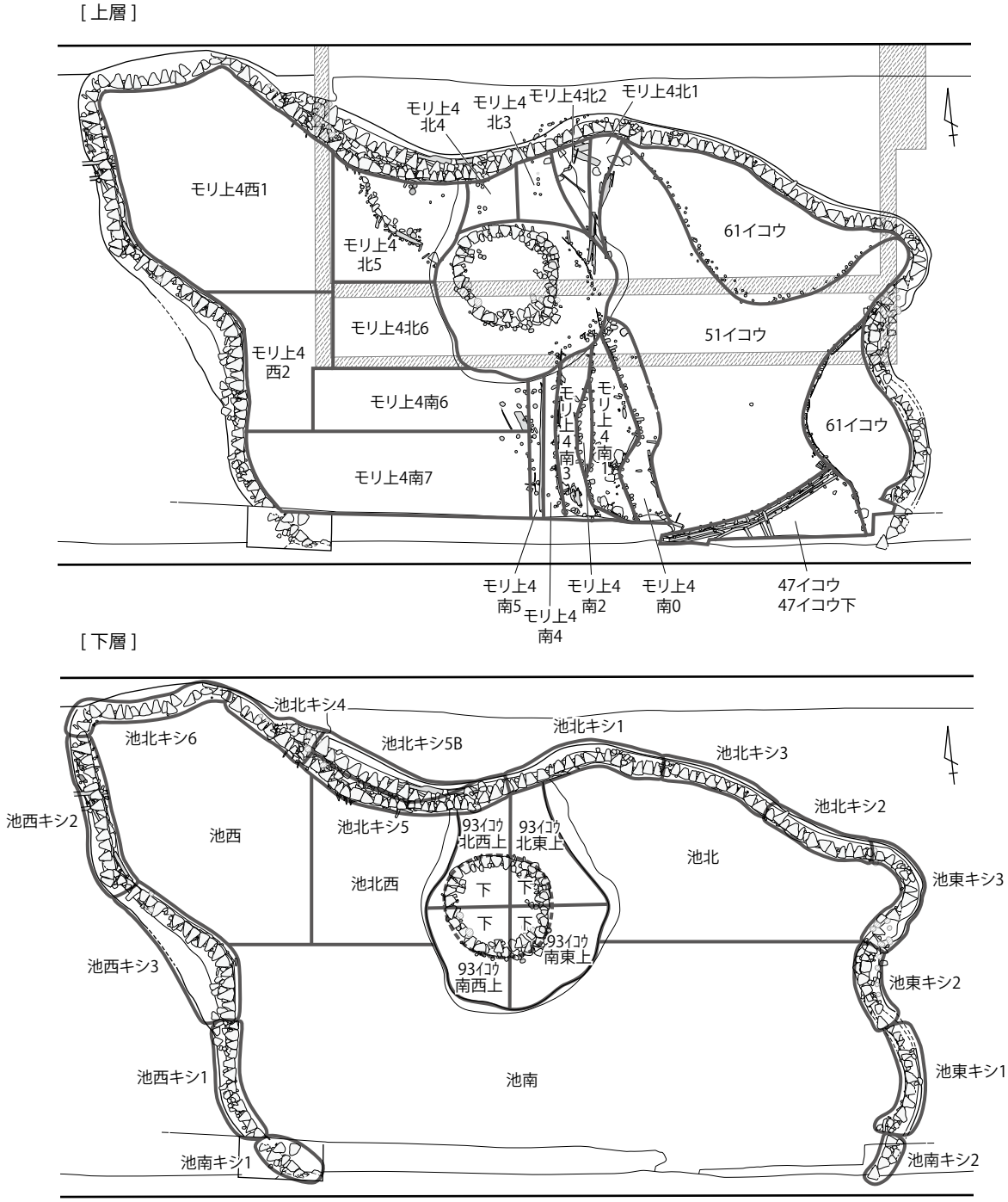
■古墳時代土師器

3 はごくゆるく丸みを帯びた土器破片である。胎土は灰褐色～にぶい褐色（7.5YR5/2 ～ 5/3）でやや砂っぽく、よく焼きしまっている。径 1 ㎜以下の褐色軟質粒子を多く含み、径 1 ㎜程度の白色粒子を少量含む。また、量はわずかながら、黒色で光沢のある針状粒子が特徴的にみられる。内面

は平滑で、丁寧にナデ調整されており、外面にはケズリによる複数の面が観察される。ケズリ方向は横位もしくは斜位で、破片の半ばあたりで面が接するためごく弱い稜のようになっている。古墳時代中期から後期の壺もしくは甕の胴部、最大径よりやや底に近い部分の破片であろう。内面および破断面の一部に明褐色（7.5YR5/8）の変色がみられる。小破片のため、径を正確に復元することはできないが、丸みの程度から、胴部最大径は 20 ～ 30㎝程度と考えられる。池遺構上層出土である。

■古代須恵器

4、5は須恵器の破片である。4は厚みが均一で、ゆるく丸みを帯びている。胎土は灰色（7.5Y5/1）で、粒子は細かく、よく焼きしまっている。径 1 ㎜以下の褐色粒子を少量含み、内面、外面ともに



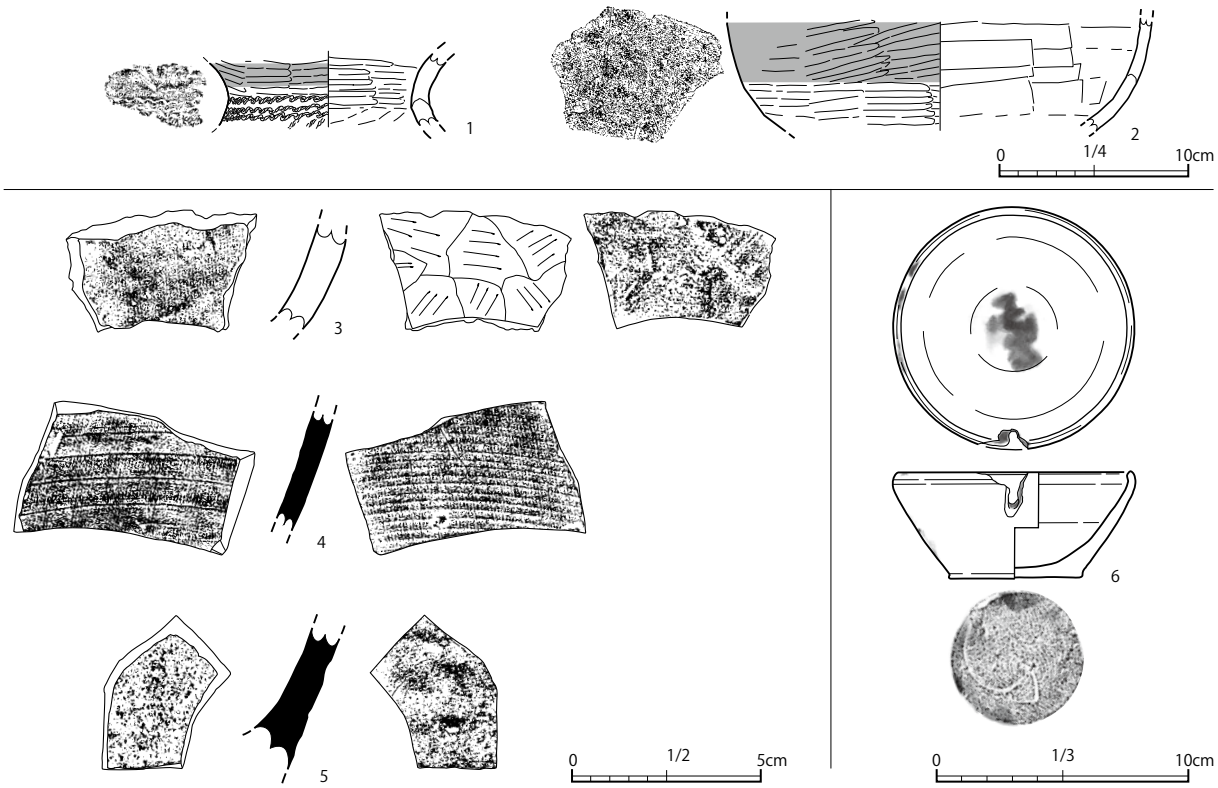
第 75 図　池遺構関連の注記

顕著な水挽き痕が観察される。古代前半、丸みの程度からは、甕のようなやや大ぶりの器種の胴部下半の破片と推定できよう。５は厚みが均一でなく、丸みが強い。胎土は灰色（7.5Y5/1）で、やや粗く、径１～２㎜程度の白色粒子を含む。内面は平滑、外面はゆるく波打っている。古代前半、長頸瓶などのように径が比較的小さい瓶類で、底部に近い部分の破片と考えられる。４、５いずれも池遺構上層出土である。

■時期不明土器

６は完形の坏形土器である。体部は、底部から口縁部に向かって直に開き、口縁端部は内湾する。底部縁辺はエッジが立っており、外面には左回転の回転糸切痕が残る。糸切の支点は縁辺と中央付近の２ヵ所にみられるが、縁辺の方が古く、中央付近の方が新しい。俗に二重糸切りと言われる痕跡である。胎土は灰白色（7.5Y7/2）で、やや砂っぽい。径１㎜以下の黒色粒子を多く含み、径１㎜程度の白色粒子を少量含む。表面はざらついた感触である。内面口縁端部直下の内湾する部分に顕著な水挽痕がみられ、水分を多く含む粘土であったことがうかがわれる。口縁の１ヵ所が深く抉られ、打ち欠いた痕跡が数ヵ所みられること、内面の底部中央、口縁端部の数か所、外面の底部周辺にススもしくはタール状の炭化物が付着していることから、灯火具に転用されたと考えられる。

坏形の器形は古代あるいは中世末などに見られるが、それらの口縁部には本資料のような内湾は見られない。また、エッジの立った底部の立ち上がりや左回転の二重糸切りは 18 世紀後半以降の江戸の土器、特に胞衣皿などの大きめのロクロ製品に顕著な特徴であるが、江戸の土器に坏形の器形は見られず、砂っぽくざらざらと粗い胎土も、江戸の細かく均質な胎土とは異なる。以上の所見から、本資料については時代・時期・地域ともに不明とせざるを得ない。口径 9.9㎝、底径 5.3㎝、器高 4.4㎝、第４層出土である。



第 76 図　中世以前の遺物

第 36 表　中世以前の遺物観察表

挿図番号	写真図版	出土地点	注記	種別	時代	時期	器種	遺存部位	重さ（g）	備　考
76-1	35-1	池遺構　上層	ｾﾘ土 4 南 1	土器	弥生時代	後期	壺	頸部	23.0	推定頸部径 10.6㎝程度
76-2	35-2	第 1 層	Ⅱ区表土	土器	弥生時代	後期	壺	胴部	47.0	現状胴部最大径 22.5㎝
76-3	35-3	池遺構　上層	51 ｲｺｳ	土師器	古墳時代	中期～後期	壺または甕	胴部下半	15.9	推定胴部最大径 20 ～ 30㎝
76-4	35-4	池遺構　上層	ｾﾘ土 4 南 4	須恵器	古代	前半	甕ヵ	胴部下半	15.6	
76-5	35-5	池遺構　上層	ｾﾘ土 4 南 4	須恵器	古代	前半	長頸瓶ヵ	胴部下半	14.7	
76-6	35-6	第 4 層	ｾﾘ土 3	土器	不明	不明	坏形土器	完形	102.6	口径 9.9㎝、底径 5.3㎝、器高 4.4㎝　灯火具に転用

2）　陶磁器・土器（第 77 ～ 130 図、第 37・38 表）

遺構から 15009 片 338499.5g（磁器 3695 片 44633.9g、陶器 10627 片 278565.0g、土器 687 片 15300.6g）、遺構外から 4179 片 124434.1g（磁器 1470 片 30622.7g、陶器 2539 片 88753.9g、土器 170 片 5057.5g）、計 19188 片 462933.6g（磁器 5165 片 75256.6g、陶器 13166 片 367318.9g、土器 857 片 20358.1g）が出土した。遺構出土のものとしては、池遺構のものが最も多く、9743 片 235869.7g（磁器 2475 片 30707.0g、陶器 6880 片 197178.6g、土器 388 片 7984.1g）で、遺構出土全体に占める割合は破片数で約 64.9％、重量で約 69.7％であった。遺構外出土のものは、第 1 層が 1965 片 59467.0g（磁器 746 片 16608.8g、陶器 1134 片 40543.7g、土器 85 片 2314.5g）第 2 ・ 3 層が 1273 片 40737.9g（磁器 425 片 9883.4g、陶器 825 片 40737.9g、土器 23 片 477.8g）、第 4 層が 716 片 19590.1g（磁器 211 片 2844.5g、陶器 466 片 15261.6g、土器 39 片 1484.0g）、第 5 層が 8 片 99.0g（磁器 3 片 31.0g、陶器 4 片 51.0g、土器 1 片 17.0g）、層位不明のものが 217 片 4540.1g（磁器 85 片 1255.0g、陶器 110 片 2720.9g、土器 22 片 564.2g）で、第 1 層出土のものが最も多かった。これらのすべてについて接合を行った結果、層位間、遺構間、遺構－遺構外の接合例が 10 例（層位間 1 例、遺構間 4 例、遺構－遺構外 5 例）確認されたが、これは、陶磁器・土器の総量に対して非常に少ない事例数と言えよう。

これら出土した遺物のうち、磁器 312 点、陶器 216 点、土器 119 点の計 647 点を報告する。以下、各個体に関する基本情報と観察内容については観察表に記載し、特筆すべき事柄がある場合のみ、本文に記した。

観察表の項目として、挿図番号、出土地点（注記を併記）、素材、器種、遺存部位、法量、重さ、観察内容、産地・時期、遺物番号の欄を設けた。器種名は一般的な呼称を採用し、より具体的に器形や用途示す通称があればこれを下段に付記した。法量は、△が推定値、▲が残存値、―は計測不可を示す。観察内容については、全面…全、内面…内、外面…外、口縁部…口縁、端部…端、胴部…胴、体部…体、底部…底、高台部…高などの略称を用い、器物そのものが持つ属性と共に、焼成後の穿孔や敲打痕、付着物、墨書、釘書、焼継痕と焼継印などの使用痕について記載した。また、これらの観察内容から推定される産地と時期を次項に記し、不明な箇所は―で示しめした。以下、素材や器種ごとに観察事項と表記について記す。

磁器：主文様を中心に記載した。施文方法については特に記載がない場合は手描きである。また、皿を中心に、見込が圏線などで区画されている場合、区画された縁側を「縁帯」、見込中央に描かれる小型の文様を「一点文」と便宜的に表現した。

陶器：釉の種類や施釉範囲を中心に記載した。

土器：器面の成形・整形痕を中心に記載した。焙烙や火消壺の蓋の離材痕として「砂目」と「チヂレ目」を用いたが、前者は細かい砂粒状の付着物、後者は細かくひび割れたような皺状の痕跡を指す。回転糸切痕については回転方向が判別できる場合は（　）内に記した。

その他：文字については□が一文字欠損、■が判読不可を示し、…は文字数不明かつ判読不可を示す。

■基本土層出土の陶磁器・土器

【Ⅰ面】

第１層出土（第 77 ～ 84 図） 磁器 71 点、陶器 26 点、土器 11 点の計 108 点を報告する。

１～ 71 は磁器である。 4 はコバルト染付の小杯で、転写紙を用いた施文だが、ぼんやりと不鮮明なので石版転写であろう。形状から 20 世紀第２四半期のものと考えられる。 5 は小碗で、染付で施文された宝珠文は線描きである。18 世紀末～ 19 世紀前葉のものと考えられるが、口縁の反りがやや弱いので、19 世紀中葉に近い時期のものであろう。 6、8、9 の小碗は細身小振りの端反り器形で、幕末～明治前半のものと考えられる。いずれも施文は手描きだが、 6、 8 は呉須染付、 9 はコバルト染付である。10 は高台が厚く畳付の内側がわずかに浮く特徴的な器形で、手描き染付の区画唐草文である。文様は一見して区画唐草文とは見えないほど著しく崩れており、圏線で区画された見込の中央に見える一点文も破損のため詳らかではない。18 世紀末の中国産である。11 は刃のついた工具を外面に当てて軽く削って作りだした凹凸に、鮮やかなクロム青磁釉が施されている。高台内は兜巾状である。17 ～ 22 は端反碗である。いずれも、唐草文や区画唐草文など、同時期の中国産舶載磁器を意識した文様である。23 の染付広東碗は線描きで施文されている。24 ～ 29 は近代の飯碗である。いずれもコバルト染付で、体部が直に大きく開く、背の低い器形である。

27 は青磁染付で、内面に籠に入った九つの枇杷の実が描かれ、「金丹九成」の四文字が配されている。

「金丹九成」は、文人画の謎語画題（寓意を込めてつけた画題）で、「枇杷実九つ」を意味する。外面にある「誰知水陸分木蓮花蓮種」は意味が分からないが、同様の謎語画題の可能性もあろう。37 は菊花文の小皿で外面には山水のモチーフが配されている。高台内に「宣喜年□」の銘あり。器表が細かく泡立って曇った色調と質感になっている。被熱したのであろう。41 は内面を二重圏線で区画し、縁帯に蜘蛛の巣文、見込中央にコンニャク印判の五弁花を配す。縁帯の蜘蛛の巣は墨弾きで表現されている。44 は櫛高台が特徴的な肥前鍋島の皿である。わずかな遺存部分に柳の葉が枝垂れる様子が描かれている。高台の櫛歯文は縁取りの無い筆描きで、18 世紀末～ 19 世紀前葉の製品と考えられる。池遺構上層でも同様のものが出土しているが、櫛高台の筆致が異なるので、別個体であろう。同時期の柳モチーフ櫛高台鍋島皿は第 1 次調査でも数点出土している。49 は輪花の小鉢３個体分が融着したものである。外面は微塵唐草文、二重圏線で区画された見込の中央に手描き五弁花が配されている。高台内の「或化…」は「成化（年製）」銘を模倣したものであろう。第２-1・2・3 層でも同様の状態で 4 個体が融着しているものが出土している（122）。器形や文様がほぼ同一で、出土地点も近いことから、元は一緒に保管されていて、同時に被災した可能性が高い。50、51 の鉢は蛇の目高台で、口縁が肥厚しながら大きく反る器形。コバルト染付の線描きで施文されている。口縁部の帯文や見込に環状松竹梅文を配す文様構成が近世的だが、文様の崩れ具合などから幕末～明治初頭のものと考えられる。52 も鉢で、口縁部が外反する器形、内外両面に銅板転写で鳳凰文を描き、高台内には「□峰園製」の銘が見える。文様モチーフは中国風で、19 世紀第 4 四半期～ 20 世紀第 1 四半期以降盛んに生産されるようになった東アジア（主に中華圏）向け輸出用の器種である。59 はコバルト染付の銅版転写で丸文が施された卵形合子の身である。67 ～ 69 は急須の蓋である。いずれにも通気孔が見られること、コバルト染付を用いていることなどから近代以降のものと考えられる。70、71 は

文房具である。70 は岩絵の具の容器、71 は絵具の筆洗いである。いずれも学生がよく用いる画材であり、明治末～大正期にかけて販売されるようになったとされる。府立第一高等女学校の時期のものと考えられよう。

72 ～ 97 は陶器である。74 は腰張碗で、やや大ぶり、器壁は厚く、黒っぽくざらざらした粗い胎土で、薄墨様の色調の釉で施文されている。肥前産、17 世紀末～ 18 世紀前葉のものである。75 は近代の硬質陶器製の碗である。口縁部にクロム緑釉で二重圏線を巡らす、いわゆる集団食器である。20 世紀第２四半期のもので、府立第一高等女学校の備品の可能性もあろう。79 は灰釉で、蛇の目釉ハギの皿である。高台内に「九十／以奴」の墨書がある。80 は灰釉の捏鉢であろうか。高台内に「…二ツ之内」と墨書がある。81 は大鉢である。遺存部分には鉄釉が認められるが、恐らくは緑釉も用いた施文がなされていたであろう。高台内に「…出来」と墨書がある。82 は灰落としで、高台内に「火キ」と墨書がある。79 ～ 81 に見られる墨書の意味はいずれも不明。82 は灰落としなので、墨書の「火キ」は、「火器」の意であろう。84 は炻器質で、浅い盤状の器形だが、器種不明である。胎土はわずかに紫がかった暗褐色で、志戸呂産、刻印があるが判読できない。91 は徳利自体の年代も古いが、釘書きの書き方もしっかり釉を削っており、古い様相を示している。93、95 は土瓶の蓋である。いずれも通気孔がないことから、近世のものと考えられる。95 は外面鉄釉で、内面に「文化八未年　三月三日　■之」と墨書されている。購入年月日であろうか。文化八年は 1811 年に当たり、器形からの年代観とも合致する。

98 ～ 108 は土器である。98 ～ 101 は大きさから灯火皿と考えられる。101 はやや大きく、体部が直に開く形状から 17 世紀後葉のものと考えられる。100 は底部外面に「中」の墨書が見られる。102、103 は大きさから胞衣皿と判断される。底部外面に回転糸切痕が見られることから、近世のものと考えられる。同様の皿形の胞衣皿は明治に入っても見られるが、底部外面に回転糸切痕が見られなくなる。105 は板づくりの塩壺で、胴部上半の内面に離材の布目圧痕が残る。隅切り角枠の銘が見られ、「…伊織」と読める。「堺湊伊織」銘であろう。106 の焙烙は内耳が遺存している。江戸においては、都市化に伴って焙烙をもっぱらカマドや焜炉にかけて使うようになり、釣り手である内耳が消滅する。概ね 17 世紀末ごろから 18 世紀前葉にかけて消滅してゆくが、この資料は形状などから、消滅の進行している時期のものと考えられる。108 は形状も用途もよくわからない土製の製品の一部である。全体を復元すると、かなり大きなものになりそうなので、大型の土製品と考えた方が良いかもしれない。庭園などに設置する置物などの可能性もある。

【Ⅱ面】

第 2-1・3 層・第 3 層出土（第 85・86 図）　磁器 18 点、陶器８点、土器２点の計 28 点を報告する。

109 ～ 126 は磁器である。120 は極浅い小型の段重で、微塵唐草文である。化粧道具ででもあろうか。121 は蓋であるが、やや大きめの通気孔が３か所に設けられている。摘みは菊のような花のモチーフで、その横に木葉のモチーフが添えられている。香炉のようなものの蓋であろうか。122 は輪花の小鉢が４個体分が重なって融着しているものである。４個体は同じ器形、同じ文様で、組み物だと考えらえる。また、器表の釉が発泡してくもった風合いになっている。重ねて保管していたものが、火災などで被熱したのであろう。外面は微塵唐草文、見込を二重圏線で区画して、中央に手描きの五弁花を配す。高台内に「或化年製」とあるが、「成化年製」を写し違えたものであろう。第１層でも

同様の状態のものが３個体融着しているものが出土しているが（49）、器形や文様がほぼ同一で、出土地点も近いことから、元は一緒に保管されていて、同時に被災した可能性が高い。

127 ～ 134 は陶器である。127 は筒形碗で内外面に鉄釉を施す。鉄釉のムラは文様状である。高台内に角枠の「志戸呂」銘がある。濃い褐色の胎土は良く焼き締まっており、器壁が薄い点も志戸呂らしい。129、130 は美濃高田産の灰釉徳利である。129 は肩部のすぐ下に横書きの釘書がある。左読みで「々　ち　し　七」と読めそうである。131 は鉄釉の土瓶である。胎土は橙褐色でかなり粗く、径１㎜程度の白色粒子を多く含む。丸みが強く、深さのある器形で、やや古手。18 世紀末ごろのものと考えておく。外面には、スス・タールが厚くこびりついている。132 は欠損部分が大きく、全体の形状がわからないが、鍋の可能性があろう。全面に灰釉が施釉されている。

135、136 は土器である。135 は脚付の灯火受皿、136 は大きさから 17 世紀後葉の灯火皿と考えられる。

第 2-2 層出土（第 87 ～ 89 図）　磁器 23 点、陶器６点、土器３点の計 32 点を報告する。

137 ～ 159 は磁器である。139 ～ 141 は染付で手描きされており、文様モチーフも近世から用いられてきたものであるが、器形は近代に入ってから一般的になる小振りの碗である。近世から近代にかけてのものと考えられる。140、141 は 19 世紀第３四半期、139 はやや新しく 19 世紀第４四半期に入っているかもしれない。142 は広東碗の高台部で、中央に内側からの穿孔がある。破断面の処理が雑ではあるが、何らかに転用されたのであろう。147 は型打ちで草花文を施した淡い色調のクロム青白磁である。高台内に錆釉が施されており、かなり新しい時期のものの可能性が高い。151 は型紙刷のコバルト染付で草花文を施している。口縁端部の太い圏線やぼかしを用いた意匠は明治末～大正期にかけてよく見られる。152 は 18 世紀後葉に盛行するタイプだが、高台が極端に低く、周囲のケズリ調整がないことなどから 19 世紀に入ってからのものの可能性が高い。155 はかなり鮮やかな色調ではあるが呉須染付で、外面の流水文は墨弾きで表現されている。159 は一抱えもあるような大鉢である。腰部以下の形状は不明、外面には大輪の牡丹が丁寧に染付されている。特徴的な形状の口縁部は、内面が牡丹唐草、外面が唐草文である。用途は不明であるが、見込みにも文様があるようなので、水鉢のようなものかもしれない。

160 ～ 165 は陶器である。163 は鉄釉の半胴甕で、底部中央付近に内側からの穿孔があり、高台内には墨書が見られる。判読できる部分は「文月七□付」と読めそうである。164 は焼締陶で、底部外面にはかなりくっきりとした回転糸切様の痕跡が見られる。円弧状の条線は一定幅で均等、通常は見られる糸尻の乱れもない。全体の形状なども考え合わせると、建水などの茶陶と考えられ、意識的に施した可能性もある。備前産であろう。165 は袋状の脚部を持つ灰釉の灯火受皿である。19 世紀以降の京・信楽産のものと類似しているが、胎土や形状のディテールを見ると、京・信楽産とは言い難く、産地は不明である。

166～168は土器である。166のロクロ成形塩壺は底部中央付近に外側からの焼成後穿孔が見られ、植木鉢に転用されたものと考えられる。

【Ⅲ面】

第４層出土（第 90 ～ 92 図）　磁器 14 点、陶器９点、土器８点の計 31 点を報告する。

169 ～ 182 は磁器である。170 は花唐草文の端反りの小碗で、19 世紀中葉以降の中国産である。

179 は青磁の皿で、高台は低く、碁笥底に近い形状である。
183 ～ 191 は陶器である。185 ～ 189、191 は灰釉の徳利で、美濃高田産である。口縁部と肩部の形状、胴部の膨らみ具合などから、いずれも 18 世紀後葉～ 19 世紀前葉の幅に収まる時期のものと考えられる。胴部には釘書が見られるものも多く、185 が「…屋」、186 が「○」、187 が「へ本／イ」、188・189 が「七　々　ち　し」と読める。

192 ～ 199 は土器である。192 は大きさと体部の直な立ち上がりから 17 世紀後葉の灯火皿と考えられる。193、194 は瓦質植木鉢で、前者は、ロクロ目が著しく、指頭によって底部中央付近に穿孔されている点などから近世のものと考えられ、後者は回転糸切痕が見られないこと、筒状工具によって底部に穿孔されていること、内外面が回転ナデによって滑らかに調整されていることなどから近代のものと考えられる。195、196 は口縁に段のある板づくり成形の塩壺である。いずれも内芯の離材痕である布目圧痕が見られ、底は外側から塞がれている。銘部分は遺存していないが、形状から 18 世紀前～中葉のものと考えられる。199 は焙烙である。口径復元は困難ながら、全体に小振りな印象で、体部も浅いことから 18 世紀末～ 19 世紀中葉ごろのものと考えられる。

■遺構出土の陶磁器・土器

【Ⅱ面確認の遺構】（第 93 ～ 96 図）

7 号遺構（200 ～ 205）　磁器 5 点、陶器 2 点、土器 1 点の計 8 点を報告する。201、202、204、205 は、明治後半～大正期（19 世紀第 4 四半期から 20 世紀第 1 四半期）を中心とした近代の製品である。201 は磁器、器高がやや低い端反りの小碗で、コバルト染付の銅板転写で松竹梅に亀甲を配した文様を施している。20 世紀第 1 四半期の製品と考えられる。202 は磁器の飯碗である。体部は直に開き、コバルト染付で手描きの木賊文が施されている。器形と釉から 19 世紀第 4 四半期のものと考えられる。204 は磁器、色絵葡萄文の急須の蓋である。内面に染付スタンプによる「岐 870」の統制番号があることから、昭和 10 年代後半～ 20 年前後（20 世紀第 2 四半期）のものと判断できる。205 は陶器の土瓶の蓋である。通気孔があり、白泥を施した上にコバルト染付で施文している。19 世紀第 4 四半期のものであろう。その他は 18 世紀葉～ 19 世紀前葉を中心とする時期のものである。

14 号遺構（208 ～ 209）　磁器 2 点を報告する。208 は染付草花文の厚手底碗で、見込中央の五弁花はコンニャク印判である。18 世紀中～後葉のものであろう。209 は高台が高く、丸味のある蓋物の身である。染付で、丸文仕立ての松竹梅文が施されている。胎土から肥前産と考えられるが、時期は不明である。

63 号遺構（210）　陶器 1 点を報告する。210 は高台周りに段があり、体部が直に開く、灰釉の皿で、17 世紀後葉～ 18 世紀の瀬戸美濃産であろう。

13 号遺構（211）　土器 1 点を報告する。211 は灯火受皿で、透明釉が施されている。18 世紀末から 19 世紀前葉の江戸産である。

46 号遺構（212）　陶器 1 点を報告する。212 は灰釉の脚付灯火受皿で、脚部は袋状である。19 世紀中葉の信楽産である。

35 号遺構（213 ～ 248）　磁器 16 点、陶器 17 点、土器 3 点の計 36 点を報告する。

213 ～ 228 は磁器である。214、215、219、222、223、244 は近代以降の製品である。214 は

薄手酒杯で、いわゆる紀念杯である。見込に朱色の上絵付で日章旗と旭日旗が描かれているが、遺存部分が小さく、紀念文字は確認できない。杯の形態から 20 世紀第 1 四半期までのものと考えられ、日露戦争など該期の戦勝などを紀念したものの可能性が高い。215 は薄手の端反り小碗である。中国の製品を模倣したであろう花鳥文が染付で施されているが、絵柄はかなり崩れている。高台内に「大明成化年製」銘が見られ、19 世紀第 4 四半期の瀬戸産である。219 は小皿で、コバルト染付型紙刷で松と鶴らしきモチーフが描かれている。口縁端部に巡らされた太い圏線が特徴的で、19 世紀第 4 四半期のものであろう。223 はクロム青磁の皿で、型紙刷で色絵の花鳥文が施されている。19 世紀第 4 四半期のものであろう。

229 ～ 245 は陶器である。232 は太白手染付施文の皿で、縁帯には割菊文を配し、圏線で見込を区画している。これは該期の磁器皿と同様の文様構成で、18 世紀後葉の瀬戸美濃産である。283 は瀬戸美濃の大皿の口縁部破片である。体部があまり開かずに立ち上がる器形は近世のものである。237 は炻器質の鉢で、胴部にくびれとくぼみのある特徴的な器形、白泥の刷毛目文が施されている。池遺構上層でも同様のもの（367）が出土している。煎茶道で用いる湯冷ましなどであろうか。

246 ～ 248 は土器である。246 は「泉州麻生」銘の板作り塩壺である。銘は内側二段角枠である。

37 号遺構（249） 陶器 1 点を報告する。249 は鉄釉の灯火受皿である。受部の切り込みは四角く、外面腰付近に環状の重焼痕が巡る。18 世紀末～ 19 世紀初頭の瀬戸美濃産である。

52 号遺構（250 ～ 252） 磁器 1 点、陶器 2 点の計 3 点を報告する。250 は陶器のいわゆる柳茶碗である。18 世紀後葉の瀬戸美濃産である。251、252 は油壺である。251 は陶器の灰釉鉄絵で肩部に文様がある。252 は磁器で染付葡萄文である。前者は 17 世紀後葉～ 18 世紀前葉の瀬戸美濃産、後者は 18 世紀の肥前産である。

56 号遺構（253） 陶器 1 点を報告する。253 は白地で口縁部に青い圏線を巡らせた洋皿、硬質陶器である。胎土は均質で多孔質、サイズ感の割に軽い印象である。硬質陶器は明治末～大正にかけて開発されていることや、口縁部に圏線を巡らせた意匠が集団食器などに多用される時期などを考え合わせると、昭和初期（20 世紀第 2 四半期）のものと考えられる。

55 号遺構（254） 磁器 1 点を報告する。254 は小形で、口縁がわずかに玉縁状の皿である。染付梅花氷裂文で、19 世紀前～中葉の瀬戸美濃産である。

59 号遺構（255） 磁器 1 点を報告する。255 は丸みを帯びた筒形の小鉢である。外面には染付で微塵唐草文が施され、見込みには環状松竹梅文が細筆書きされている。高台内に「太明年製」銘あり。

86 号遺構（256） 土器 1 点を報告する。256 は丸底の背の低い焙烙である。底部外面にチヂレ目が見られる。背の低さから 18 世紀後葉～ 19 世紀前葉の江戸産と考えられる。

【Ⅲ面、Ⅲ～Ⅳ面確認の遺構】（第 97 ～ 123 図）

77 号遺構（257） 陶器 1 点を報告する。257 は無釉、円板に手づくねの三足を付けたもので、円板部分と三足部分では胎土が異なる。前者は明赤褐色で粗い粒子に白色粒子が目立ち、後者は橙褐色で粒子が細かい。上面に環状の焼痕のようなものが見られ、小形製品を焼くための窯道具である可能性が指摘できる。時期、産地ともに不明。同様のものが池遺構上層でも出土している。

75 号遺構（258 ～ 260） 磁器 3 点を報告する。258 は角皿である、型打ち成形で、貼り付け高台。小破片のため全容は不明であるが、四辺の内の一辺側に溝状の区画がしつらえてある。この区画の機

能・用途は不明である。胎土や細部の作りなどから 17 世紀後葉の肥前産と考えられる。259 は輪花の染付大皿である。縁帯部は微塵花唐草文、二重圏線で画された見込には環状松竹梅文が配されている。また、弧状に残る重焼痕が見られる。18 世紀後葉～ 19 世紀前葉の肥前産である。260 は大振りの輪花の鉢である。外面には染付牡丹唐草文が施され、見込みには環状の繋ぎ文、口縁内側には蛸唐草文が配されている。17 世紀後葉の肥前産である。

87 号遺構（261 ～ 264） 磁器 2 点、陶器 1 点、土器 1 点の計 4 点を報告する。261、262 は磁器染付の皿である。前者は蛇の目釉ハギで 18 世紀後葉のもの、後者は輪花で、縁帯は染付微塵花唐草文、二重圏線で区画された見込にも文様があり、18 世紀末～ 19 世紀前葉のものと考えられる。いずれも肥前の製品である。263 は陶器飴釉、見込に胎土目痕が見られる。捏鉢と思われるが、片口鉢の可能性もある。高台内に墨書があるが、「…沢」と読める部分しか遺存しておらず、意味は不明である。底部中央付近に焼成後内側からの穿孔が見られ、植木鉢に転用されたと考えられる。18 世紀後葉以降の瀬戸美濃産。264 は土器で焜炉類であろう。口縁端部を中心に、所々にススが付着している。18 世紀後葉以降の江戸産である。

池遺構　上層（265 ～ 447） 磁器 79 点、陶器 71 点、土器 33 点の計 183 点を報告する。

265 ～ 343 は磁器である。289 はやや大ぶりの筒形碗で青磁染付、見込中央の五弁花は手描きである。高台内の銘は二重角枠の渦「福」もしくは異体字銘であろう。290、291 も青磁染付の筒形碗である。見込中央の五弁花はかなり崩れており、最早五つの点の集まりにしか見えない。手描きかコンニャク印判かの判別は難しいが、290 についてはコンニャク印判の可能性があろう。292 は背の高い腰張り筒状の碗である。釉は厚く生掛けされおり、口縁部と腰部に二重圏線を施して区画した中に草花文と思われる文様を配している。畳付には砂の付着が著しい。1630 年代の初期伊万里である。295 は角形の小皿の隅部分である。高台は幅広の畳付が特徴的で、楕円形と思われる。長方形の角皿と考えられよう。302 ～ 307 はいずれも輪花の小皿である。302、304、305 は、器形は底厚で腰折れ、体部は急激に薄くなりながら真っ直ぐに開き、口縁部に至ってさらに開いて端部の薄い輪花となる。器面装飾は、体部内面に内型を用いて鎬や草文などの地文を打ち出し、二重圏線で区画した円窓状の見込に文様を配す。これらは、該期の輪花小皿にはあまり見られない特徴である。一方、306、307 は、底部～口縁部まで比較的厚みが均一で内面いっぱいに一枚絵の施文がされるという、該期によく見られる輪花小皿の特徴を持つ。313 の皿は一枚絵で反物のモチーフが施文されているが、反物の文様表現に墨弾きが用いられている手の込んだ製品である。315 は付着物によって内面の様子が観察できないが、器形や破断面の胎土から肥前産と考えられる。付着しているのは土壌と思われるが、発泡して軽くなっている。かなりの高温に晒されたものであろう。317 は櫛高台で、肥前鍋島の柳文の皿である。同様のものが第 1 層でも出土しているが、櫛高台の描き方がやや異なるので、別個体である。第 1 層出土のものとほぼ同じ時期、18 世紀後葉～ 19 世紀前葉のものであろう。323 の鉢はコバルト染付で手描き文様を施文しており、幕末～明治初頭のものと考えられる。蛇の目高台内に見られる圏線状の痕跡は、高台の高さを考慮すると、重焼痕というより窯道具の痕跡かもしれない。325 は青磁で、内面無釉である。径が小さく器高が高いので花瓶としたが、上端付近の内面に釉だれが見られるので、花瓶としてはやや背が低い感もある。深手の香炉などの可能性もあろう。332 は器形から厚手底碗の蓋と考えられるが、縁辺部を打ち欠いて丁寧に調整し、円盤状に形を整えている。転

用品であろうか。338 は器形から朝顔形の厚手底碗の蓋と考えられる。青磁染付で、二重圏線で区画された見込中央にコンニャク印判の五弁花、高台内に角枠の渦「福」銘が見られる。

344 ～ 414 は陶器である。344 は腰部以下しか遺存していない。外面は線刻の文様（木葉文か）の上に透明釉が施されており、内面にも透明釉が施釉されている。高台内に小判枠の「萬古」銘が見られる。万古産であろうか。353 は隅切りの変わり角皿の口縁部破片である。胎土、特徴的な形状、鉄釉使いの文様などから、18 世紀後葉の京焼と考えられる。358 は瀬戸美濃の大皿で、体部が浅く開いた器形から近代以降のものと考えられる。吹墨と型紙刷を用いた草文は一見鉄釉に見えるが、わずかに青みがかかっておりコバルト染付と考えられる。364、365、367 はいずれも深手の鉢で、胴部にくびれとくぼみのある特徴的な器形である。煎茶道で用いられる湯冷ましの可能性があろう。371 はいわゆる青土瓶、377、380 はその蓋で、いずれも 19 世紀第２四半期のものと考えられる。380 は内面に「寅／六月」の墨書がある。「寅」が「寅年」を指すとすると、天保元（1830）年庚寅年、天保 13（1842）年壬寅年あたりが候補となろうが、サイズがやや大きく、摘みのつくりなども丁寧で、19 世紀第１四半期末ぐらいまで遡る可能性もあり、文政元（1818）年もしくは天保元（1830）年を「寅」年として想定しておきたい。384、386 は無釉である。384 は円板に手づくねの三足を付けたもので、円板部分と三足部分の胎土は異なる。円板部分の胎土は明赤褐色で粗く、径１㎜以下の白色粒子が目立つ。一方、三足部分の胎土は橙褐色で粒子は細かい。同様のものが 77 号遺構でも出土している。386 はかなり粗い胎土。いずれも窯道具の可能性が高い。384 は焼台、386 は匣鉢であろう。398 は美濃高田産の灰釉徳利で頸部を打ち欠いて除去している。破断面の処理も丁寧で、内面に鉄錆が付着していることから、鉄漿壺に転用したと考えられる。408 は美濃高田産の飴釉徳利で上半は欠損している。胴部の一部は窓状に打ち欠いて除去されており、破断面の処理も丁寧である。瓦灯もしくは手焙りに転用したと考えられる。

415 ～ 447 は土器である。415、416、418 ～ 422 は大きさから言って灯火皿であろう。415 は底部外面に墨書がある。おそらくは「中」であろう。423 ～ 427 は植木鉢である。423、424 は、体部に顕著なロクロ水挽痕が見られること、口縁端部のエッジが鋭角的であることなどから近世のものと考えられるが、425 ～ 427 は、体部が内面～外面にかけて連続的にナデ調整されており、口縁端部が滑らかに整えられていながらも、底部の穿孔が内側から指によって施されていることから、幕末～明治初頭のものと考えられる。429 は器壁がかなり薄く、三足も小型化してボタン状になっていることから、幕末～明治初頭のものと考えられる。431、432 は塩壺で、形状や内面の離材痕から、前者は 17 世紀にまで遡る輪積成形のもの、後者は 18 世紀中葉～後葉の板作り成形のものと考えられる。442 は胴部破片で、色絵で赤い実のついた木の枝のモチーフが描かれ、透明釉が施されている。口縁部を中心に、ススやタールの付着が著しい。直接火にかける鍋であろう。447 は無釉で、底部の外周縁辺部が面取りされている。体部の形状は不明、底部は、面取りされた部分の内側に高台があるのかもしれないが、詳細は不明である。

池遺構　下層（448 ～ 508） 磁器 20 点、陶器 29 点、土器 12 点の計 61 点を報告する。

448 ～ 466 は磁器である。466 は碗蓋であるが、高台の内側際がやや滑らかで深い器形が、望料碗の蓋に近い。

467 ～ 496 は陶器である。470 は碗で、腰部以下しか遺存していない。灰釉で、高台部は無釉、

丸みを帯びた高台の刳りと「瀬戸助」の刻印が特徴である。枠なしだが、「瀬戸助」の文字周りには長方形の印体の痕跡が見える。特徴的な胎土は、にぶい橙色（7.5YR7/4）で、均質だが砂っぽく、破断面は粗い印象。胎土分析の結果、京焼と類似性の高い土であった。474 は大皿で、口縁部が「く」の字状に内弯する特徴的な器形である。遺存部分が小さく、文様全体の様相は不明だが、鉄釉の渦文などが配されているのがわかる。17 世紀第 1 四半期の織部である。478 は大ぶりの灰釉の香炉である。上端部に顕著な敲打痕が見られ、灰落としとして利用されたものと思われるが、全体的な器形としてはやや浅いので、口縁部をある程度打ち欠いて背を低く整えた可能性もある。479 は大皿で、体部が立って深さのある器形から近世のものと考えられる。高台内に「表／御臺所」とあり、注目される。表御殿（藩主の執務空間）の台所ということであろうか。487 は美濃高田産の灰釉徳利で、底部に外側から打ち欠いて穿孔がされている。孔の大きさが底面の大きさに比して大きい印象。破断面の処理は丁寧である。転用品と考えられるが、頸部が遺存しているので、口が狭く、植木鉢には向かない器形である。

497 ～ 508 は土器である。498、500、501 は植木鉢である。498 は外面がナデ調整で、底は指による穿孔なので、幕末～明治初頭のもの、500 は内面～外面の連続的ナデ調整と外面の波形線刻文から近代以降のもの、501 は内面の顕著なロクロ水挽痕、エッジの立った口縁端部、指による底の穿孔などから近世のものと考えられる。499 は灯火皿であろうが、底から体部へ立ち上る部分が厚く、口縁に向かって急激に薄くなる器形が江戸のものとは異なる。17 世紀初頭まで遡る可能性もある。505、506 の塩壺蓋は内面に布目圧痕が残る。いずれも布は平織りのようである。

93 号遺構（509 ～ 542）　磁器 15 点、陶器 11 点、土器 8 点の計 34 点を報告する。

509 ～ 523 は磁器である。515 は丸碗だが、やや高く、径が大きめの高台と底部中央が下がる器形は広東碗に近く、特徴的である。高台内に「大明年製」銘が見られ、18 世紀末～ 19 世紀前葉の肥前産である。

524 ～ 534 は陶器である。525 は腰張の碗で、高台内に「中金」の刻印がある。体部外面にかなり暗い色調の呉須で文様を描いている。17 世紀末～ 18 世紀前葉の肥前産、京焼写しである。526 は三島手の大皿で、肥前産 17 世紀末～ 18 世紀前葉のものである。陰刻文様の線に溜まっている白泥が薄いことから、18 世紀に入ってからのものと考えられる。527 は発色がやや鈍く、白濁した印象だが、17 世紀末～ 18 世紀前葉の肥前産青緑釉の大皿である。532 ～ 534 は美濃高田産の徳利である。532 は 18 世紀前葉のもので、胴部を打ち欠いて、縦楕円形の窓状にしている。破断面は丁寧に敲打して調整しており、内面にはススが付着している。瓦灯もしくは手焙りなどに転用したのであろう。533、534 は 18 世紀後葉～ 19 世紀前葉の幅に収まる時期のものである。「久・」「市￢」の釘書きがある。

535 ～ 542 は土器である。535 は型打ち成形の皿形土器である。中央部を意識的に黒く焼いてある。536 はロクロ成形で、口縁部にスス・タールが著しく付着しており、灯火皿と考えられる。底部外面に墨書が見られるが、遺存状態が悪くて判読できない。口径 15㎝とサイズが大きく 18 世紀以降のものの可能性が高い。

32 号遺構（543）　磁器 1 点を報告する。543 は 32 － 1 号遺構出土で、蓋である。コバルト染付で同心円を内外両面に施す。飯碗の蓋であろうか、やや丸みが強く、深手なので、丸みのある飯碗と対

になるのかもしれない。近代以降の製品と思われるが、時期、産地ともに不明。

90 号遺構（544） 土器 1 点を報告する。544 は円板状の塩壺の蓋である。ロクロ成形の塩壺と対になる。18 世紀後葉～ 19 世紀前葉の江戸産である。

94 号遺構（545） 磁器 1 点を報告する。545 は皿で、碁笥底、染付で施文。17 世紀後半の肥前産である。

66 号遺構（546 ～ 548） 磁器 2 点、土器 1 点の計 3 点を報告する。546 は染付で周縁部に紅葉文を巡らす皿で、17 世紀後葉～ 18 世紀初頭の肥前産。547 は内面一面に型打ちでレリーフ文を施した白磁の輪花皿である。見込みは花文、周縁部は葡萄文、口縁端部には口錆が巡る。高台内中央付近に目痕が見られる。17 世紀後葉の肥前産である。548 は土器で大形の皿である。推定口径 15.5㎝と、灯火皿としてはやや大きいが、口縁端部のスス・タール付着が著しいことから灯火皿とした。

【Ⅳ面確認の遺構】（第 124 ～ 130 図）

2 号遺構（549 ～ 555） 磁器 3 点、陶器 1 点、土器 3 点の計 7 点を報告する。549、550 は磁器の碗である、いずれも染付で施文しており、肥前産。前者は 19 世紀以降、後者は 18 世紀末～ 19 世紀前葉のものである。551 は磁器の中皿である。染付山水楼閣文の輪花皿で、口縁端部には口錆が施されている。19 世紀前～中葉の肥前産である。552 は陶器大皿である。高台が高く、見込みに染付の施文がある。おそらくは形骸化した山水楼閣文であろう。また、高台内に「中／金村」の刻印がある。17 世紀後葉の肥前産、いわゆる京焼写しである。553、554、555 はいずれも土器で、江戸産、553 は灯火皿、554 は瓦質の植木鉢、555 は口縁部が内湾し、全体に丸みを帯びたタイプの火鉢である。後二者は、それぞれ 18 世紀末～ 19 世紀中葉、19 世紀前～中葉のものである。灯火皿は時期による変化に乏しく、553 は 18 世紀以降のものとしか言えない。

３号遺構（556） 磁器 1 点を報告する。556 は縁帯に蔓草文を巡らせ、二重圏線で見込を区画した蛇の目釉ハギの皿である。見込中央にコンニャク印判の五弁花が見られ、18 世紀後葉の肥前産と考えられる。

６号遺構（557 ～ 566） 磁器 17 点、陶器 15 点、土器 11 点の計 43 点を報告する。

557 ～ 573 は磁器である。557 は薄手極小の小杯で、染付で「み■■　□町紅」とある。欠損してはいるが、おそらく「町」字の前は「小」字で、高級ブランド紅「小町紅」の容器と考えられる。18 世紀末以降の肥前産であろう。562、563、565、566 は、18 世紀末～ 19 世紀前葉の端反碗であるが、562 はやや大ぶりで文様も丁寧に描かれていることから古め、566 は文様の崩れ具合などから新しめのものと思われる。567 は深目の鉢である。欠損部分が多く文様の全容は不明だが、文人風の人物の足元が確認できる。二重圏線で画された見込に松樹が描かれ、高台内には異形字銘がある。体部から底部にかけて幾筋もの焼継痕が見られ、高台内に焼継印が記されているが、破損していて判読不可である。中国産の舶載磁器で、18 世紀後葉～ 19 世紀前葉のものである。

574 ～ 587 は陶器である。579 ～ 581 は大振りの灰釉丸碗である。高台のつくりや高台周りの処理、施釉範囲などからいずれも 17 世紀末のものと判断される。瀬戸美濃産である。581 は高台内側の際に墨書で圏線が描かれている。582 は流し飴釉の碗である。腰部から直に開く体部の中ほどに屈曲のある特徴的な器形で、高台は兜巾ケズリ。1760 ～ 70 年代の萩焼である。584 は白色釉、口縁から緑釉を流し掛けした灰落としで、18 世紀末～ 19 世紀前葉の京焼である。586、587 は徳利である。前者は灰釉で 19 世紀前葉、後者は飴釉で 17 世紀末のもの、いずれも瀬戸美濃産である。胴部に釘

書があり、586 は「久○」、587 は「市¬」と読める。前者は点書で、一見しただけでは認識できないが、後者はしっかり釉が削り取られた線書で、はっきりと読み取れる。釘書については、より新しい時期になると簡略化が進むことが知られているが、この二点はそれぞれの時期の釘書の実態を反映していると言える。

588 ～ 599 は土器である。588 は外面が鬼面のモチーフの小杯である、内面中央には宝珠が刻まれており、外面に鉄釉、内面に透明釉が施釉されている。鬼の顎部分にあたる側面に「賤機」と刻まれていることから、駿府城近郊で焼かれた賤機焼と考えられる。賤機焼は静岡県静岡市で生産されてきたやきもので、現在は静岡県伝統工芸品に認定されている。静岡県郷土工芸品振興会や静岡市のＨＰなどによると、江戸時代初期、駿府に隠棲した徳川家康の家臣太田七郎右ヱ門によって賤機山麓に開窯されたという。家康から朱印地と「賤機焼」の呼称を賜り、徳川家の御用窯として茶陶などを生産したが、文政年間（1818 ～ 31 年）末頃、付近を流れる安倍川の氾濫によって窯場が流され、途絶えた。明治に入ってから、太田家の後継萬治郎が再興を試みるも、不調に終わり、その後、静岡市内の陶工青島庄助によって、ようやく現在の復興賤機焼が生産されるようになったという。

賤機焼には、外面が鬼面、内面が福面の「鬼福」と称される伝統的なモチーフが伝わっており、これは、家康が武田信玄に攻められ、窮地に陥った際に、「鬼は外、福は内」と叫びながら打って出て勝利したことに因んだものとされている。本資料は、内面が福面ではないものの、この「鬼福」に準じるものと考えられる。また、初期の製品は 900℃程度の比較的低い温度で焼成され、釉薬と胎土のなじみが悪く脆いとされ、本資料の土師質の胎土や低温で融解する鉛釉に類似点を見出すことができるが、埋蔵文化財としての窯や製品は確認されておらず（静岡市教育委員会による）、検証することはできない。本資料は、共伴遺物の年代観が概ね 19 世紀前葉以前であることに照らすと、窯が一旦途絶える文政年間以前のものと考えられよう。

591 は塩壺の蓋で、口縁に段のある板づくり成形の塩壺に対応する。内面は一面にスス・タールが付着しており、外面に十字の刻みが見られる。また、十字の交点には、もみ切りのようにして凹ませた径６㎜程の凹みがある。孔をあけようとして、途中であきらめた痕跡であろうか。また、側面の下端部を磨って面取りしたような痕跡も見られる。温石などに転用しようとした可能性が指摘できる。594 は灰落としであろう。外面に松樹のモチーフがレリーフ状に施され、漆を塗った痕跡が見られる。近代に入ってからの製品である。595 は灯火皿である。江戸産で、直に開く体部とサイズから、17 世紀後葉のものと考えられる。596 は大きさから胞衣皿として使われたものと考えられる。胞衣皿は近代になっても継続する器種であるが、近代には底部の切り離しに糸を使わなくなることから、近世のものと考えられる。

９号遺構（600 ～ 601）　陶器１点、土器１点の計２点を報告する。600 は陶器鉄釉の土瓶の蓋である。19 世紀前葉のものであろう。601 は土器の焙烙である。非常に浅く、復元はできないものの口径も焙烙としてはかなり小さい印象である。江戸産ではあるが 19 世紀中葉以降のもので、近代の製品の可能性もある。

12 号遺構（602）　土器１点を報告する。602 は火消し壺か、袋状の灰落としである。胎土からは江戸産と考えられ、同様の器形のものが 18 世紀中葉ごろに出現することから 18 世紀中葉以降のものとしたが、ロクロ成形で底部の切り離し道具として糸を使っていない点を考慮すると近代以降のもの

である可能性が高い。

17 号遺構（603 ～第 128 図 609） 磁器 4 点、陶器 2 点、土器 1 点の計 7 点を報告する。605 は磁器の染付皿で、海浜文であろう。輪花皿で口縁端部には口錆が施され、高台内に「頭」と読める墨書が見られる。606 は磁器の植木鉢で、装飾的な三足を持つ。染付のモチーフは山水楼閣文と思われ、絵付けは丁寧で発色も鮮やかである。19 世紀前葉以降の瀬戸美濃産と考えられる。609 は土器の焙烙で、浅く、口径が小さい印象。19 世紀中葉以降の江戸産である。近代のものである可能性もある。

24 号遺構（610 ～ 614） 磁器 1 点、陶器 1 点、土器 3 点の計 5 点を報告する。610 は染付の磁器大皿で、葡萄短冊文を施す。やや腰の張る器形で、高台内中央付近に二重の角枠が見られる。渦「福」銘であろう。17 世紀後葉～ 18 世紀前葉の肥前産である。611 は陶器である。焼き締めのようであるが、被熱による器表の剥離が著しく、断言はできない。底部のみで器種は不明であるが、底部外面に「◇」の刻印がある点、体部がかなり開いて立ち上がる点を考慮すると擂目は確認できないものの、擂鉢の可能性もあろう。時期・産地は不明である。612 ～ 614 は土器で江戸産、それぞれ炉形土器、焙烙、灯火皿である。612 の炉形土器は民具に見られるコタツ（掘りごたつ）のオトシのように、床の一部に設けた方形の穴に落とし込んで用いる。外側に張り出した炉縁によって穴の中に落ち込んでしまうことなく設置でき、茶室の炉などとして用いたと考えられる。

25 号遺構（615） 土器 1 点を報告する。615 は浅く口縁の開いた焙烙で、18 世紀後葉～ 19 世紀前葉の江戸産である。底部外面にチヂレ目が遺る。

33 号遺構（616） 磁器 1 点を報告する。616 は内面縁帯部を型打ち成形した輪花の大皿である。見込に染付の施文がある。被熱によって細かい破片が融着している。17 世紀後葉～ 18 世紀初頭の肥前産である。

68 号遺構（617 ～ 623） 磁器 1 点、陶器 5 点、土器 1 点の計 7 点を報告する。617 は磁器小碗で染付草文、見込には一重圏線が巡り中央に五弁花が手描きされる。17 世紀後葉～ 18 世紀前葉の肥前産である。619、620、621、622 は陶器で、619 は灰釉鉄絵の若松碗で文様の崩れ具合などから 18 世紀後葉～ 19 世紀前葉の京・信楽産と考えられる。620 は、鎧手碗である。体部外面は無釉、内面～口縁部外側にかけて鉄釉が施される。19 世紀前葉の瀬戸美濃産である。622 は鉄釉の灯火皿で、内外両面に環状の重ね焼き痕が遺る。18 世紀末～ 19 世紀前葉の瀬戸美濃産である。また、621 は徳利で、底部だけの破片である。時期は絞り切れないが、19 世紀以降、美濃産である。底部に墨書があるが、薄くなってしまっており判読不可である。

69・74 号遺構、70 号遺構（624 ～ 637） 磁器 5 点、陶器 1 点、土器 8 点の計 14 点を報告する。624、625、626 は磁器である。624 は極めて薄手で、体部が直に開く特徴的な器形である。小杯であろうか。高台内に「雅」とある。18 世紀後葉～ 19 世紀前葉、中国産の船載磁器である。629 は陶器の三島手大皿である。17 世紀後葉～ 18 世紀前葉の肥前産であるが、陰刻文様の上から施された白泥が薄いので 18 世紀前葉のものであろう。高台内に「賄所」の墨書がある。630 ～ 636 は土器の灯火皿である。いずれもサイズから 17 世紀後葉のものと考えられる。634、635 は底部外面に墨書があるが、薄くなっており判読不可である。637 は土器の火鉢である。サイズが大きいので、17 世紀代のものの可能性がある。

70 号遺構（638） 磁器 1 点を報告する。638 は丸碗で、染付で藤文を描く。18 世紀中葉の肥前産

である。

71 号遺構（639）　土器 1 点を報告する。639 は焙烙で、一定の深さがあり、体部が底部からしっかり立ち上がる器形である。17 世紀末～ 18 世紀初頭の江戸産で、底部外面にチヂレ目が遺る。

72 号遺構（640）　磁器 1 点を報告する。640 は小振りの丸碗で、染付で花形窓に草花文を配した文様である。18 世紀後葉～ 19 世紀前葉の肥前産である。

85 号遺構（641 ～ 647）　磁器 2 点、陶器 3 点、土器 2 点の計 7 点を報告する。644 は陶器の碗、高台内に「瀬戸助」（枠なし）の刻印がある。胎土は明褐灰色（7.5YR7/2）で均質だが、やや粗い印象で、特徴的である。腰部に段状の沈線が巡らされており、碁笥底状の高台にはかまぼこ形の切れ込みがあり、畳付以外は施釉されている。胎土分析の結果、京焼と類似性の高い土であった。池遺構下層でも「瀬戸助」銘の陶器碗が出土しているが（470）、銘の形状は異なる。647 は陶器飴釉の徳利で、胴部に「サ」の釘書がある。釉がしっかり削り取られ、文字の形も崩れていない古い時期の釘書と考えられる。また、胴部破断部分にわずかに整えた痕跡が見られ、楕円形の窓をあけて瓦灯もしくは手焙りなどに転用した可能性がある。

■文字や記号が記された陶磁器・土器（第 38 表、図版 36 ～ 37）

釘書、墨書、焼継印、刻印などの、文字や記号が記されたもの 183 点（184 例／墨書の上に釘書を施したものが 1 点あるため）を報告する。内訳は、釘書 114 点（115 例）、墨書 46 点（46 例）、焼継印 11 点（11 例）、刻印 12 点（12 例）である。釘書・墨書・焼継印は製品が利用される過程で付加されたもので、使用痕として捉えられるが、刻印は製品の一要素である。両者の性質は異なるが、ここでは文字や記号を「マーク」として捉え、同列に扱うこととする。以下、「マーク」の示す内容につい報告する。なお、それぞれの「マーク」を個別に検討するため、例数を以て数量を検討することとする。また、一覧表のうち、挿図番号あるものは、実測図を掲載 したもので、図化しなかった破片については、判読できたものを中心に写真図版（図版 36 ～ 37）を以て報告する。

釘書（Kg1 ～ 114）　釘書の施された製品の内訳は、美濃高田産の徳利が 111 例（95.7％）、磁器皿が 4 例（3.5％）、磁器小鉢が 1 例（0.8％）と、器種に著しい偏りが見られる。

徳利 111 例の釘書内容の内訳は以下の通りである。①「久○」17 例＋これに準ずるもの（「久」「久・」など）9 例＝ 26 例（23.6％）②「七　々　ち　し」9 例＋これに準ずるもの 10 例＝ 19 例（17.3％）③「市￢」9 例＋これに準ずるもの（「市」など）3 例＝ 12 例（10.9％）④「サ」5 例（4.5％）⑤「木■」2 例（1.8％）、「上」1 例＋これに準じるもの（「へ上」など）1 例＝ 2 例（1.8％）、上記以外 15 例（13.6％）、判読不可 29 例（26.4％）。判読不可のものが最も多いのは、釘書の書体がかなり雑な列点状のものが多いことに起因しているのであろう。判読できたものの中で、最も多いのは「久○」に類するもので、「久○」の他、これに準ずるものとして「久」6 例（Kg14、53、65、68、78、84）、「久ゝ」「久ト」「久・」が各 1 例づつ（Kg5、15、17）見られる。「久・」については、木製品の中に「久・」の焼き印のある蓋（第 137 図 44）があり、関連があると考えられる。なにがしかの業者もしくは店舗を指し示すものであろうか。次に多いのは「七　々　ち　し」に類するものである。肩部のすぐ下に、横書きで一周するように 4 文字が配されており、恐らくは「七／々／ちし」（右読みで「しち／々／七」）、すなわち「七」の繰り返しと推測される。当地が「七軒町」であることを勘案すると興味深いが、具体的に指し示すものについては不明である。屋号の一部であろうか。これに準ずるものとして、肩

部のすぐ下に「七」「々」「ち」「し」の四文字のうちのいずれかが見られるもの 10 例（Kg10、25、42、55、58、60、67、80、96、108）がある。三番目に多いのは「市¬」に類するもので、これに準ずるものとして「市」が 3 例（Kg74、95、103 ）見られる。「市¬」については、墨書の中にも 2 例（B17､34）が見られる。いずれも徳利の底部に記されている。屋号であろう。また､前述の「久○」類や「七　々　ち　し」類の書体は列点状の点書ものがほとんどであるが､「市¬」類の書体については線状もしくは太線状の線書ものが目立つ。これら 3 類で 57 例（51.4％）になり､以下は「サ」5 例､「木■」類 2 例､「上」類 2 例、 1 例のみのものが 16 類 16 例となる。「サ」は磁器にも 2 例見られ（Kg36 、85）､「上」に準じる「へに上」は墨書にも見られる（B32）。各 1 例のものは､「へに本　イ」「へにト」「へに三」「へに清」「山笠に五」「○」「○にさ」「○に川」「○十」「…屋」「…や」「丹」「四方」「や…」「り」である。「丹」については、木製品の中に「松平丹後守様／御おくに而／八千代■」の墨書のある荷札があり、丹後守屋敷の使用人にあてたものと考えられるので、丹後守屋敷に関するものを指し示すものかもしれない。それ以外については､屋号もしくはその一部と考えられよう。また、「…や」は B3 の墨書の上に釘書きを施したものである。

磁器については､「六芒星に右」（Kg105 ／皿高台内）､「松」（Kg106 ／皿見込）､「イ」（Kg37 ／皿高台内）､「サ」（Kg85 ／皿高台内）､「サ」（Kg36 ／小鉢胴部外面）の 5 例で､「サ」が 2 例見られる。「サ」は前述の徳利にも 5 例見られ、料理屋などを指し示すものかもしれない。

なお､第 1 次調査では､美濃高田産灰釉徳利の釘書きとして､「久○」97 例､これに類するもの（「久」「久○サ」「久○ち」「久ト」「久上」「サ久○」など）8 例の計 105 例､「七　しち　々」1 例､「市¬」1 例､「○に二」1 例､「サ」1 例､「丹」1 例､「四方」1 例が確認されている。

墨書（B1 ～ 46） 確認された 46 例のうち判読不可のものが 19 例（41.3％）、一部が判読できたものの意味が分からないものが 9 例（19.6％）であった。判読できたものの内訳は、屋号もしくはその一部を示すと思われるものが 8 例（17.4％／ B1、 3 、17、24、32、34、36、39）、場所を示すと思われるものが 4 例（8.7％／ B22、26、30、37）、日付を示すと思われるものが 4 例（8.7％／ B4、16、19、20）、その他が 2 例（4.3％／ B5、14）である。屋号を示すものの中には「市¬」2 例、「へに上」1 例など、釘書にも見られるものが確認された。場所を示すもの 4 例の中には、「表／御臺所」（B22）､「臺所」（B30）､「賄所」（B37）と、3 例の食事を整える場所を示すものが見られた。これらの器物が用いられた場所であろう。「表」が表御殿（藩主の執務空間）を示すのであれば、これに対して「奥」＝奥御殿（藩主家族の居住空間）が想定でき、それぞれに食事を整える場所があったとも考えられよう。日付を示すものの中では「文化八未年／三月三日／■之」（B16）が注目される。鉄釉の陶器土瓶蓋で 19 世紀前葉のものと推定できるが、文化八年は 1811 年で、時期的に合致する。また、「寅／六月」（B20）については、京焼の緑釉土瓶蓋で 19 世紀第 2 四半期ぐらいのものなので、天保元（1830）年庚寅、天保 13（1842）年壬寅あたりが候補となろうが、器形がやや古めで 19 世紀第 1 四半期にまで遡る可能性もあるので、文政元（1818）年もしくは天保元（1830）年を想定しておきたい。第 1 次調査でも「天明三年□所五月」「茶　文化三年九月□」「文化十年御門　とり七月五日」「文化十年　□澤□片口正求之」など（天明三年は 1783 年、文化三年は 1806 年、同十年は 1813 年）､18 世紀後葉～ 19 世紀前葉の同じような時期を示す墨書が確認されている。その他、「火キ」（B5）は灰落としに書かれた墨書で、火器の意であろう。

焼継印（Y1 ～ 12、Y7 は欠番）　11 例中、焼継印かどうか断言できないものが２例、判読不可のものが３例である。判読できた６例の内訳は、「イ」「一」が各２例、「ハ」「大」が各１例である。６例のうち、焼継痕の見られたものは４例である。

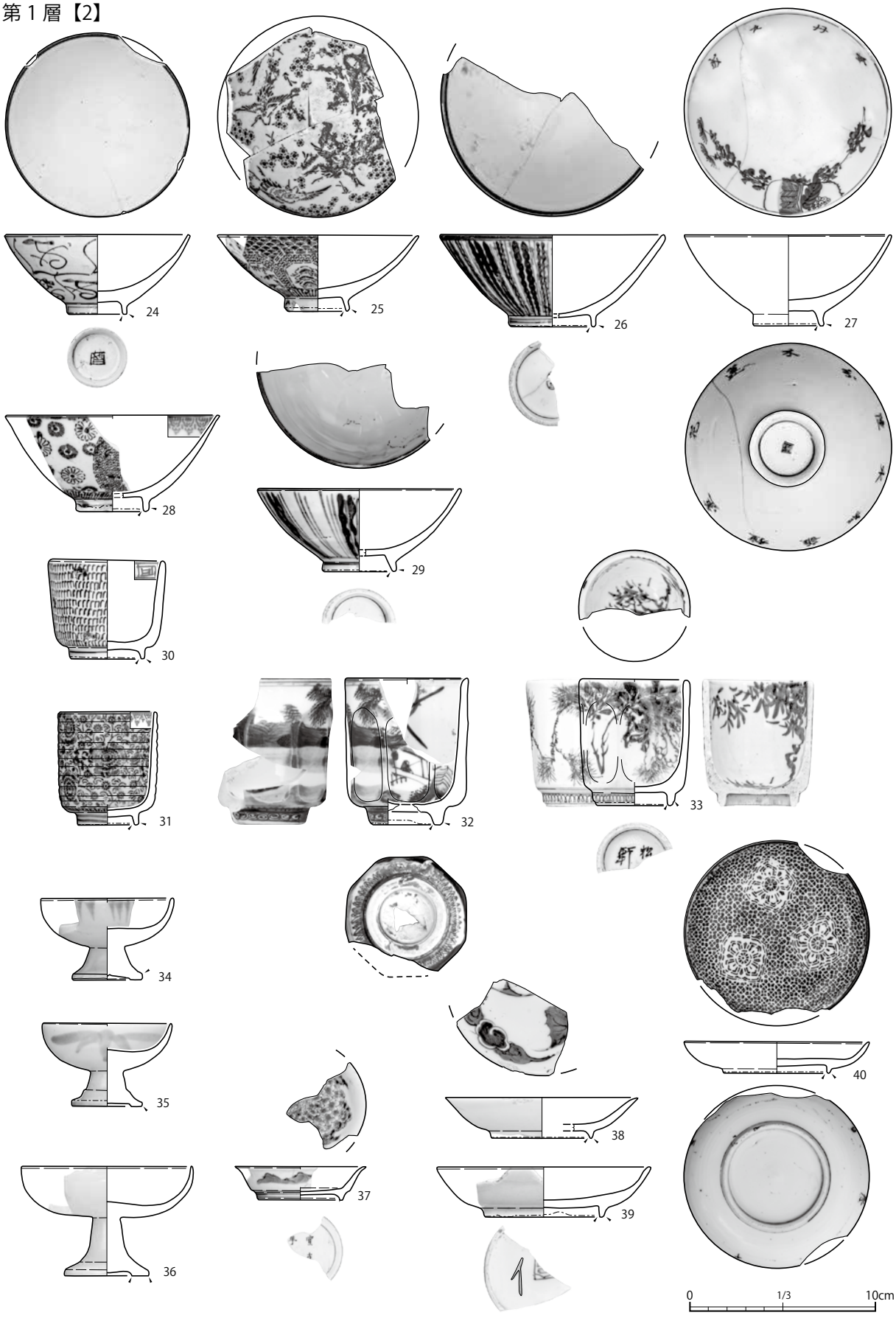
刻印（Ko1 ～ 15、５・７・９は欠番）　12 例中、判読不可のものが１例（Ko2）、産地を表すと思われるものが２例（Ko3、6）、生産者を表すと思われるものが 10 例（Ko1、４、８、10 ～ 15）である。Ko2 は円枠で、印影はハッキリとしているが、枠内の文字が判読できない。なじみのない盤状の器形だが、胎土から志戸呂産と考えられる。Ko8、15 の「瀬戸助」については、いずれも枠なしだがタイプが異なる。第１次調査でも１例（底部小破片のため器種不明）が確認されており、印体は Ko8 と類似している。Ko1 の「中金」、10 の「中／金村」は、いずれも京焼写しの肥前陶器である。

第 1 層【1】



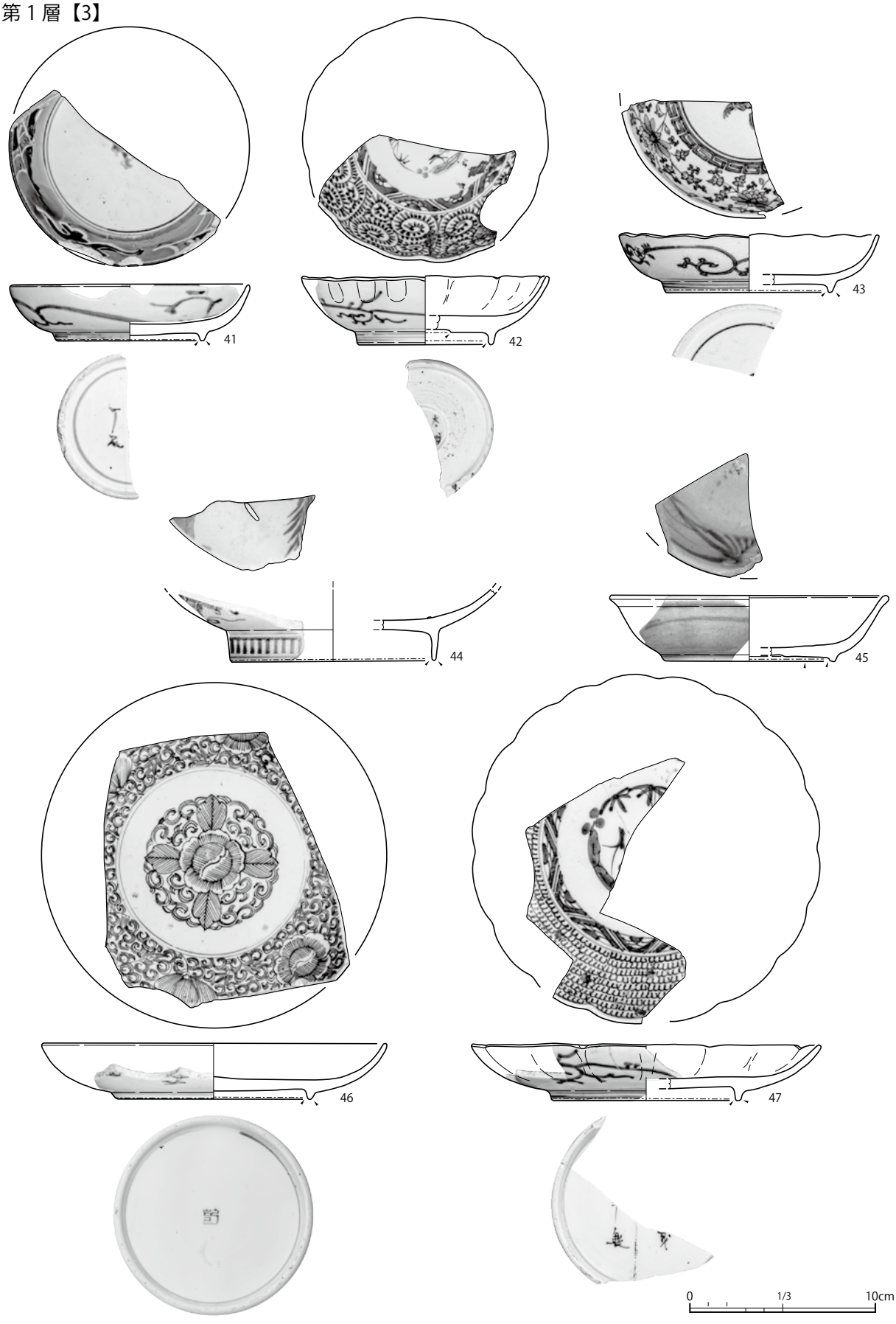
第 77 図　陶磁器・土器（1）

第 1 層【2】



第 78 図　陶磁器・土器（2）

第 1 層【3】



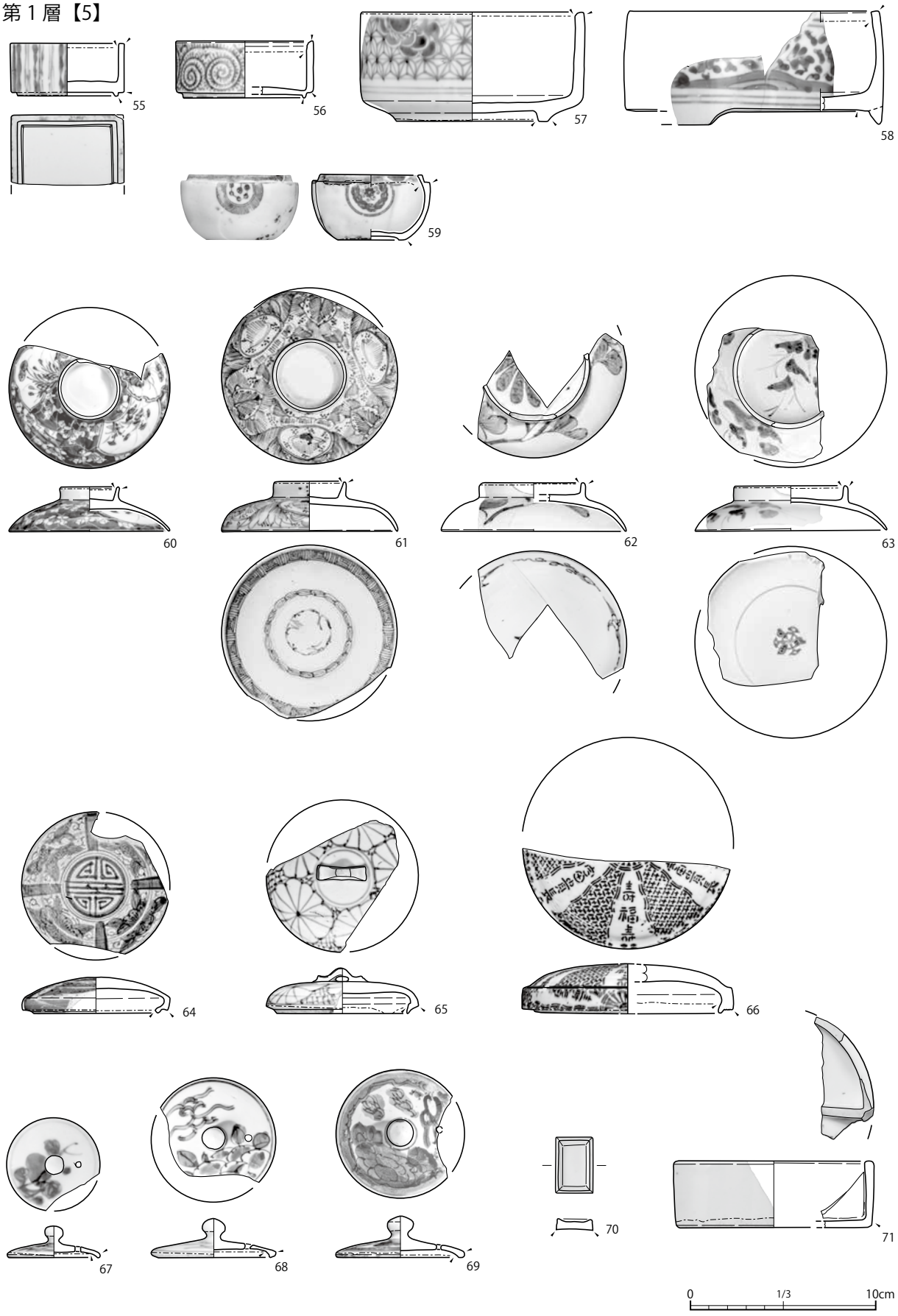
第 79 図　陶磁器・土器（3）

第 1 層【4】

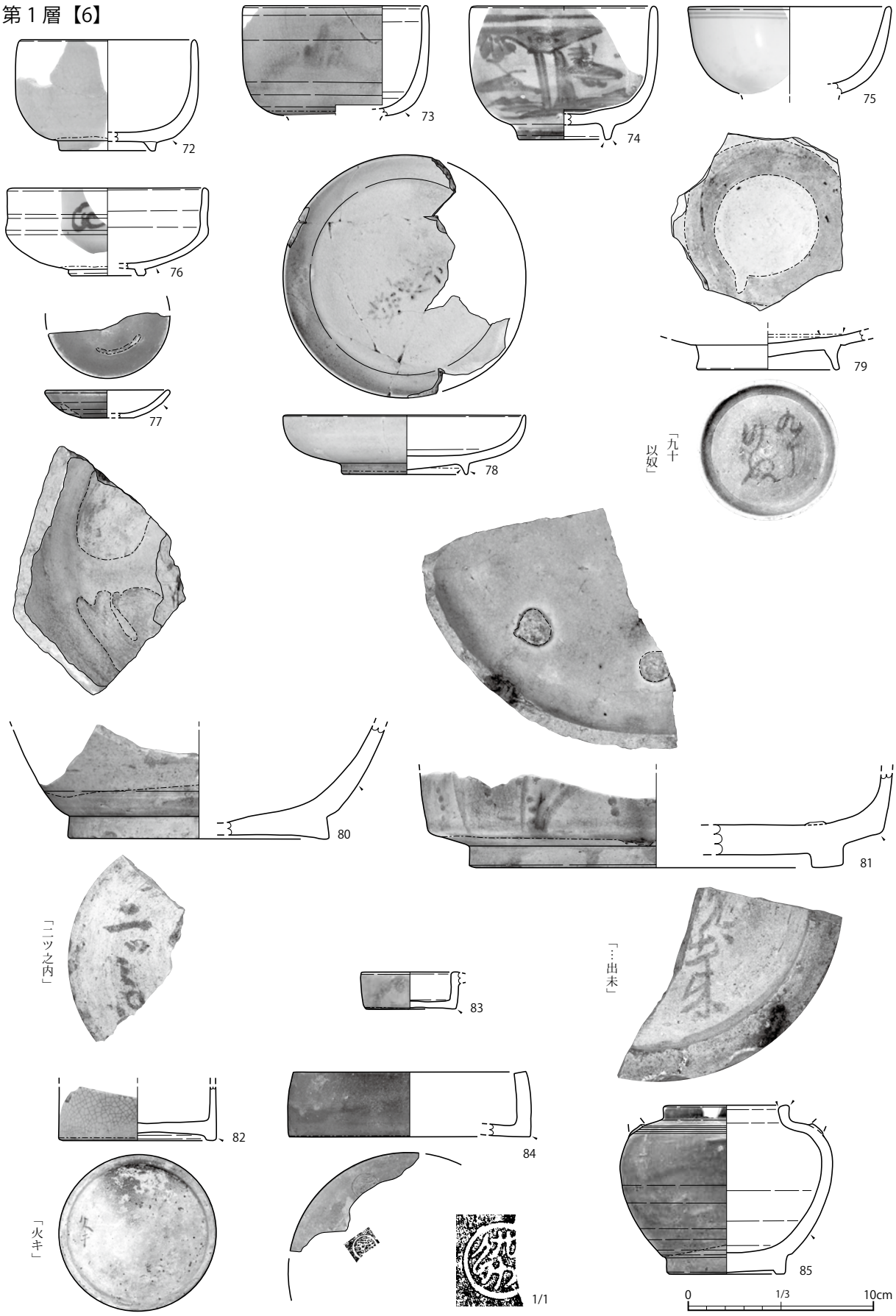


第 80 図　陶磁器・土器（4）

第 1 層【5】

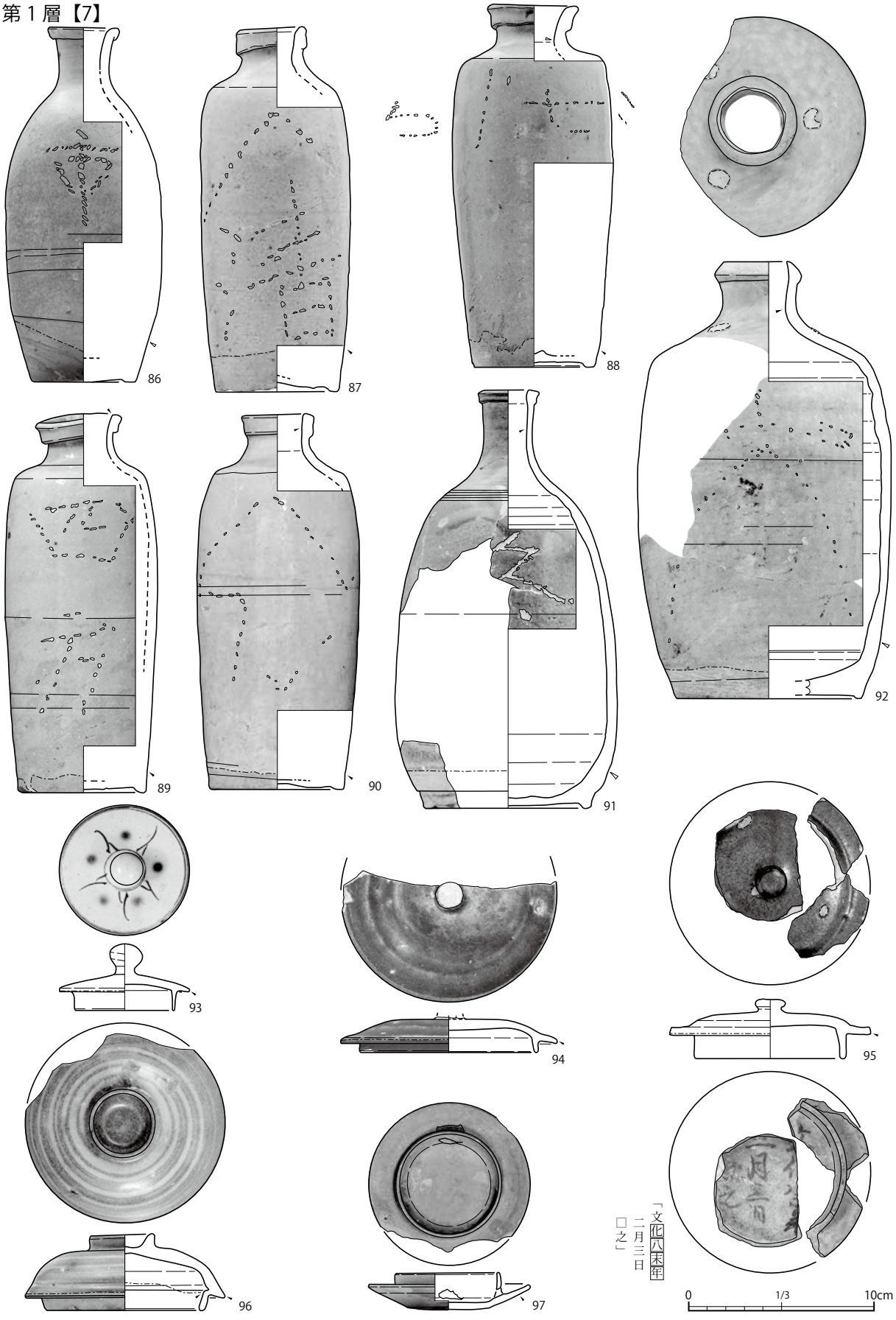


第 81 図　陶磁器・土器（5）


第 1 層【6】
72
73
74
75
76
77
78
79
「九十
以奴」
80
81
「二ツ之内」
「…出未」
82
83
84
「火キ」
85
1/1
0
1/3
10cm

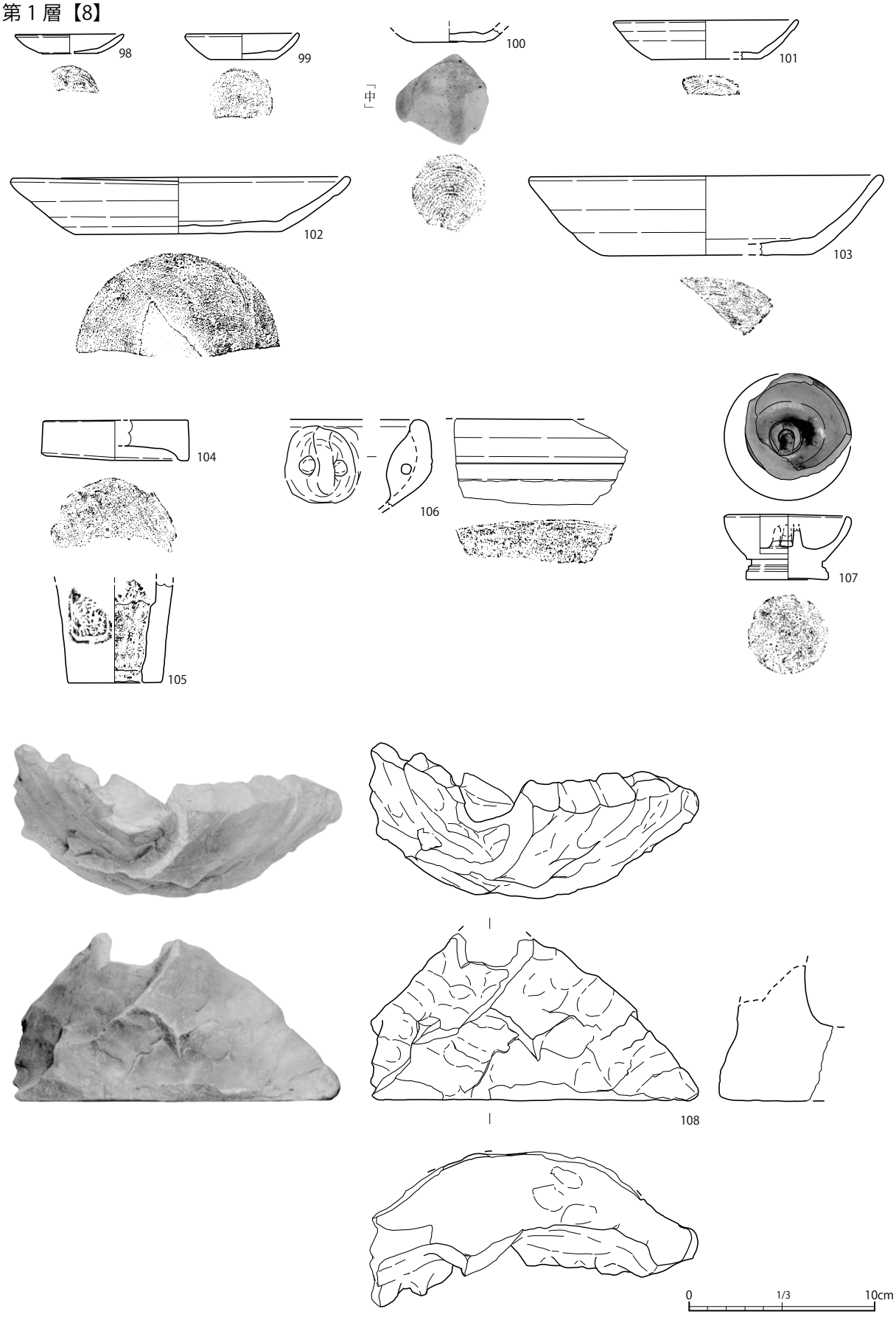
第 82 図　陶磁器・土器（6）

第 1 層【7】



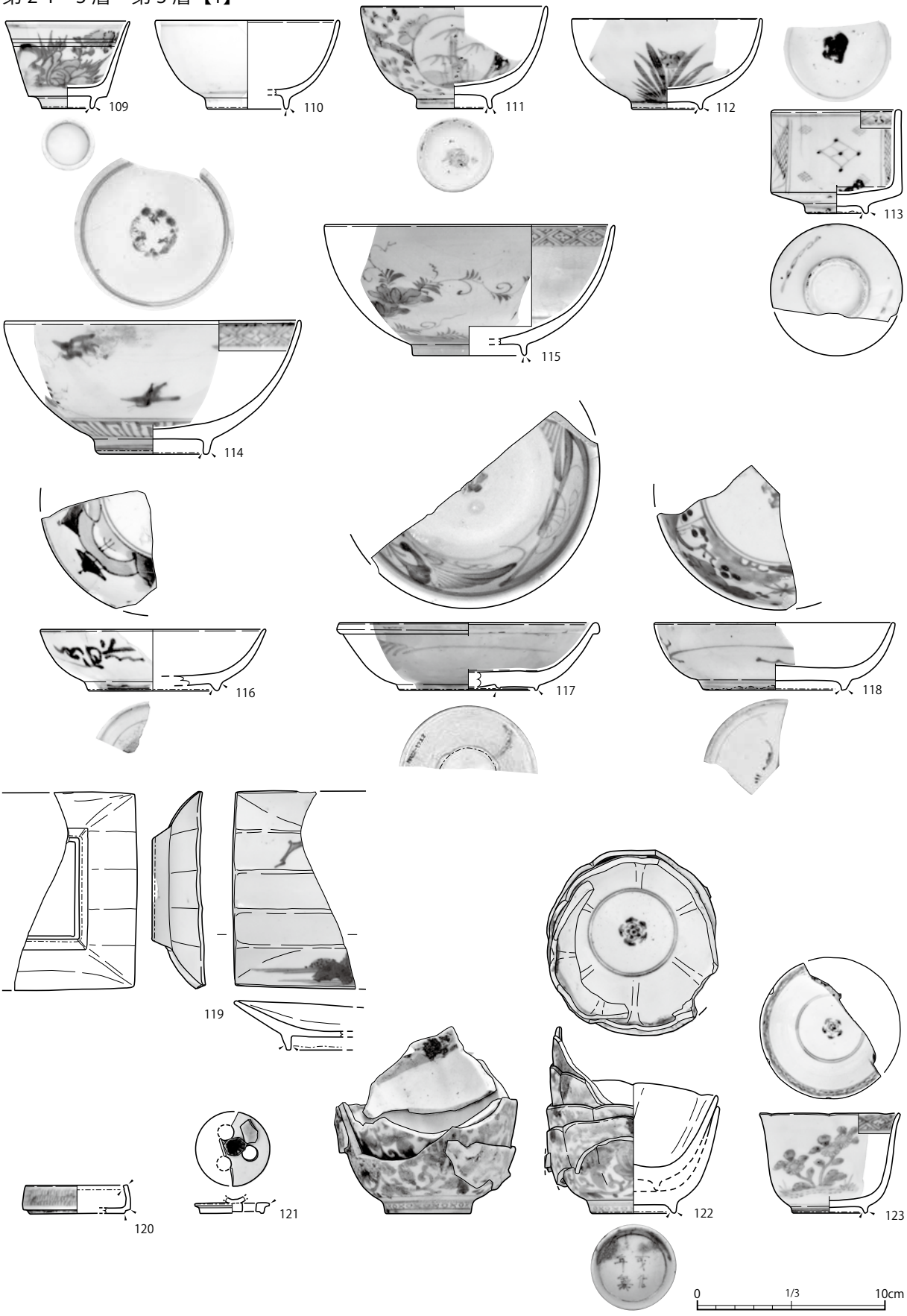
第 83 図　陶磁器・土器（7）

第 1 層【8】



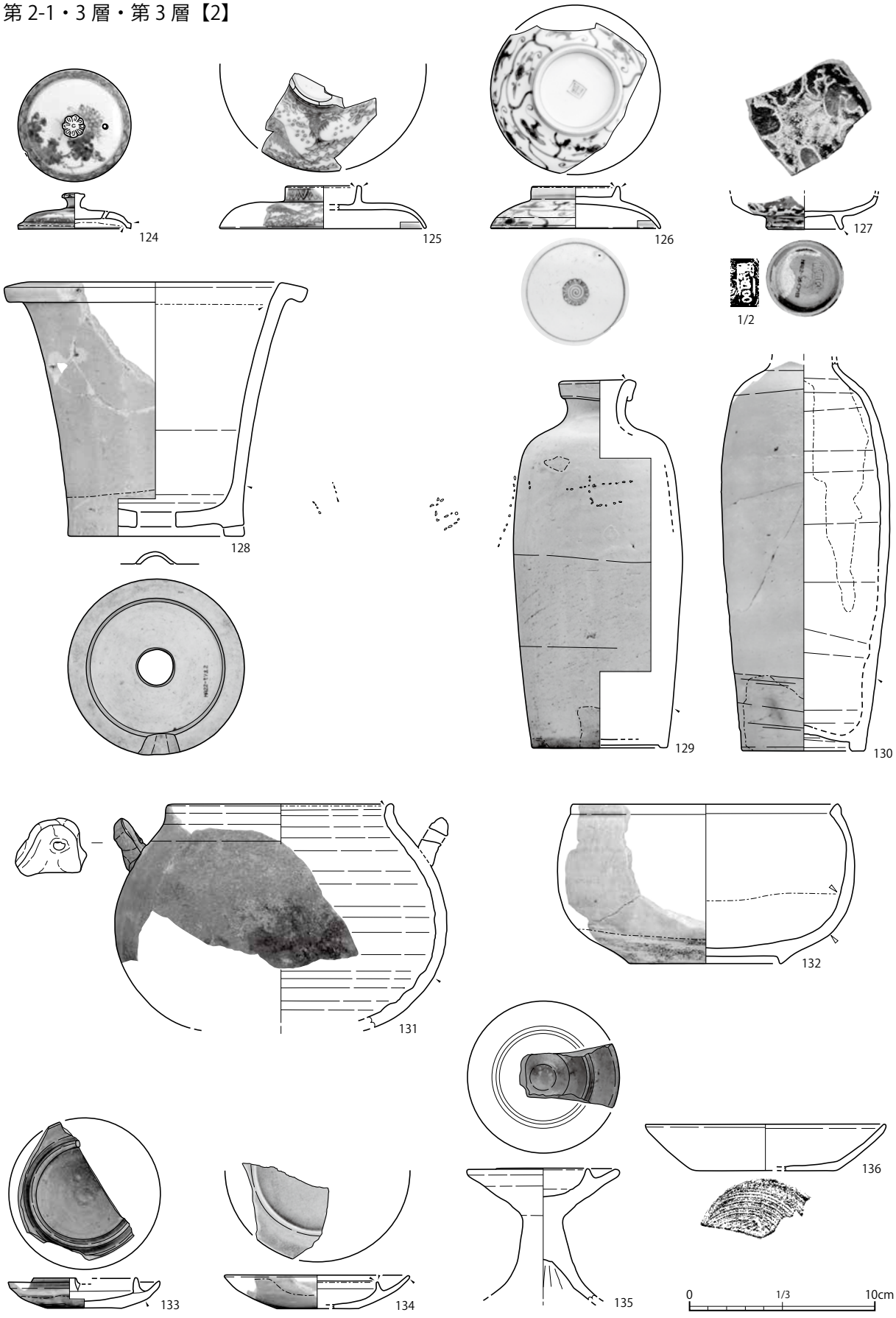
第 84 図　陶磁器・土器（8）

第 2-1・3 層・第 3 層【1】



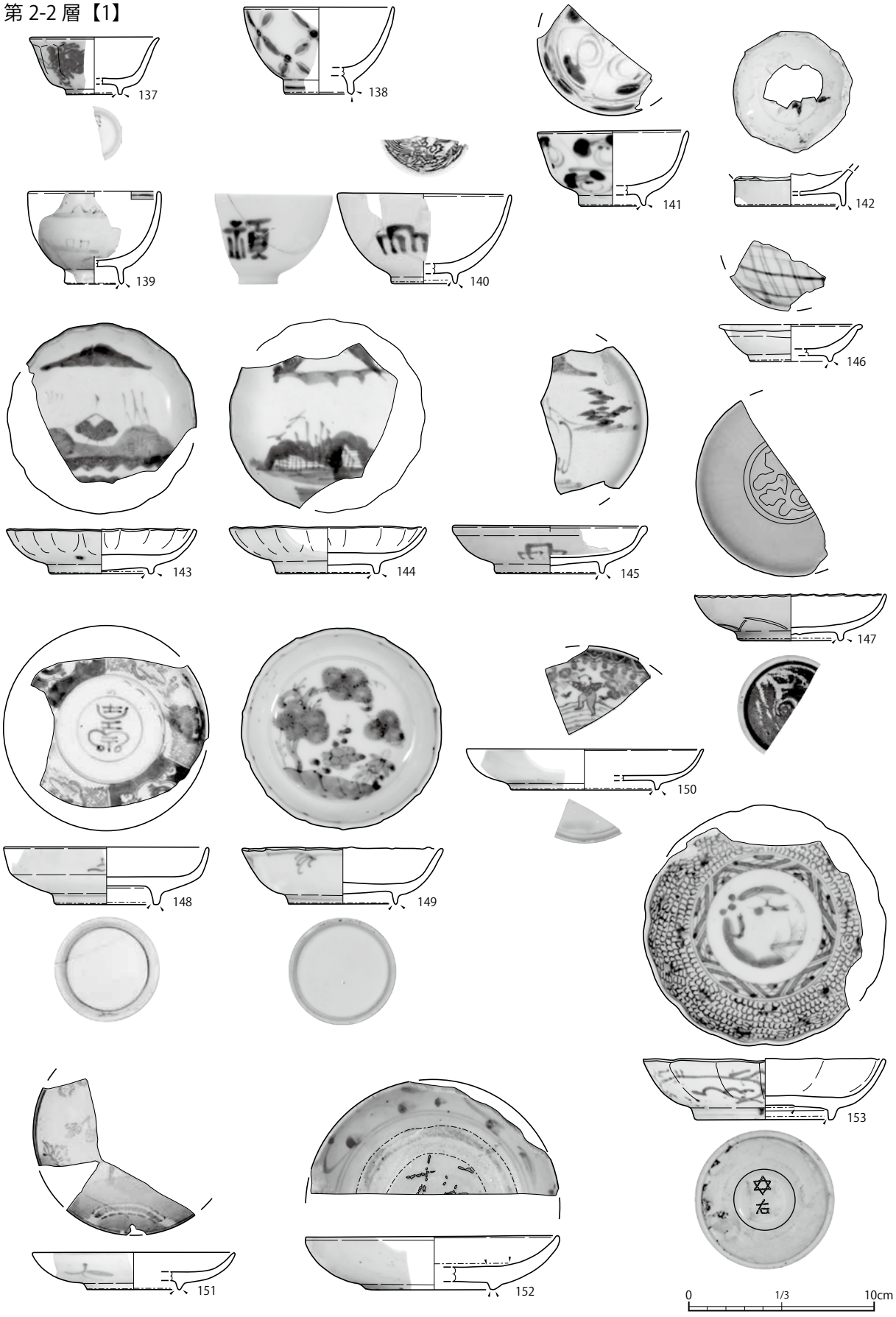
第 85 図　陶磁器・土器（9）

第 2-1・3 層・第 3 層【2】



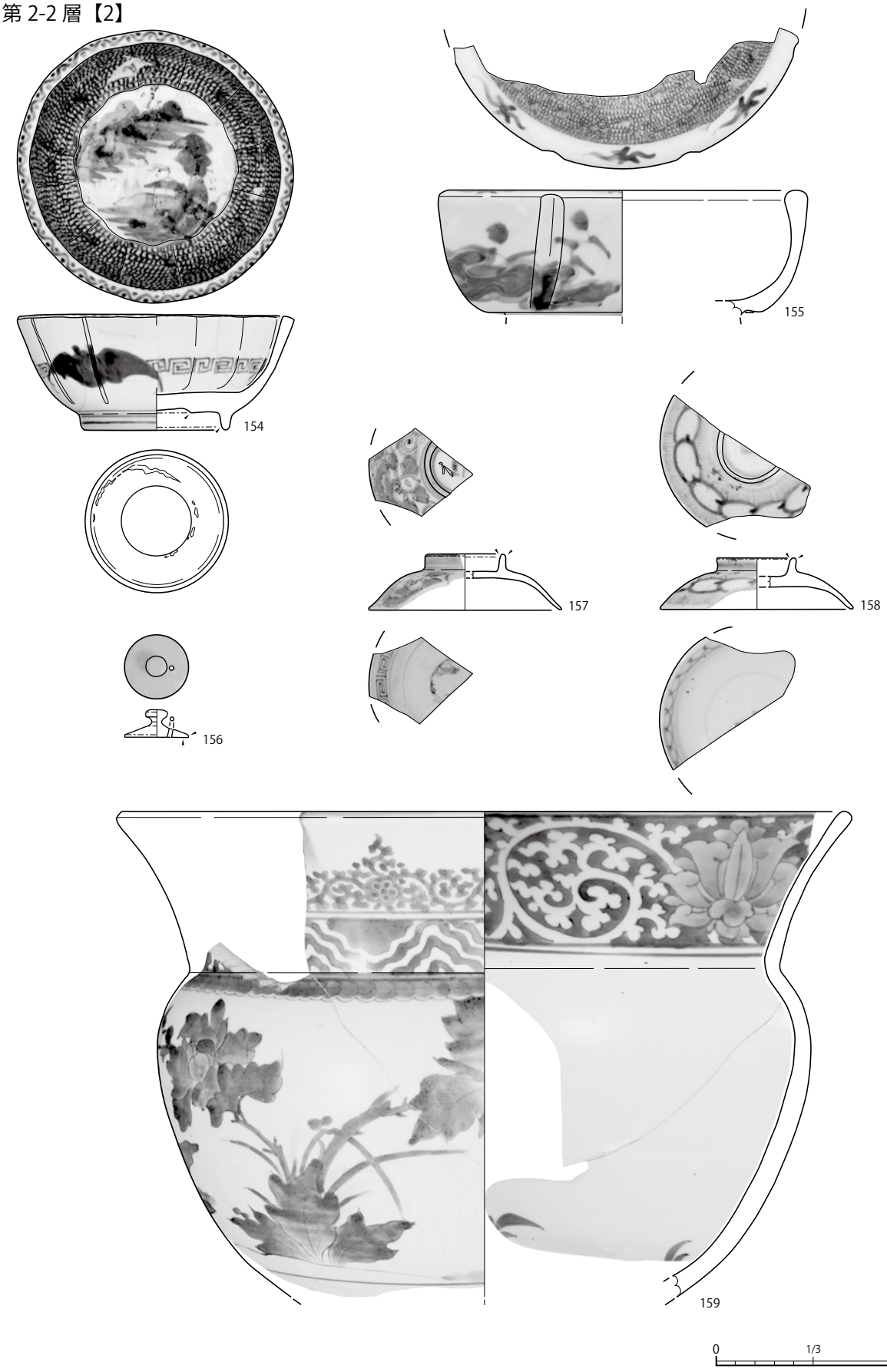
第 86 図　陶磁器・土器（10）

第 2-2 層【1】



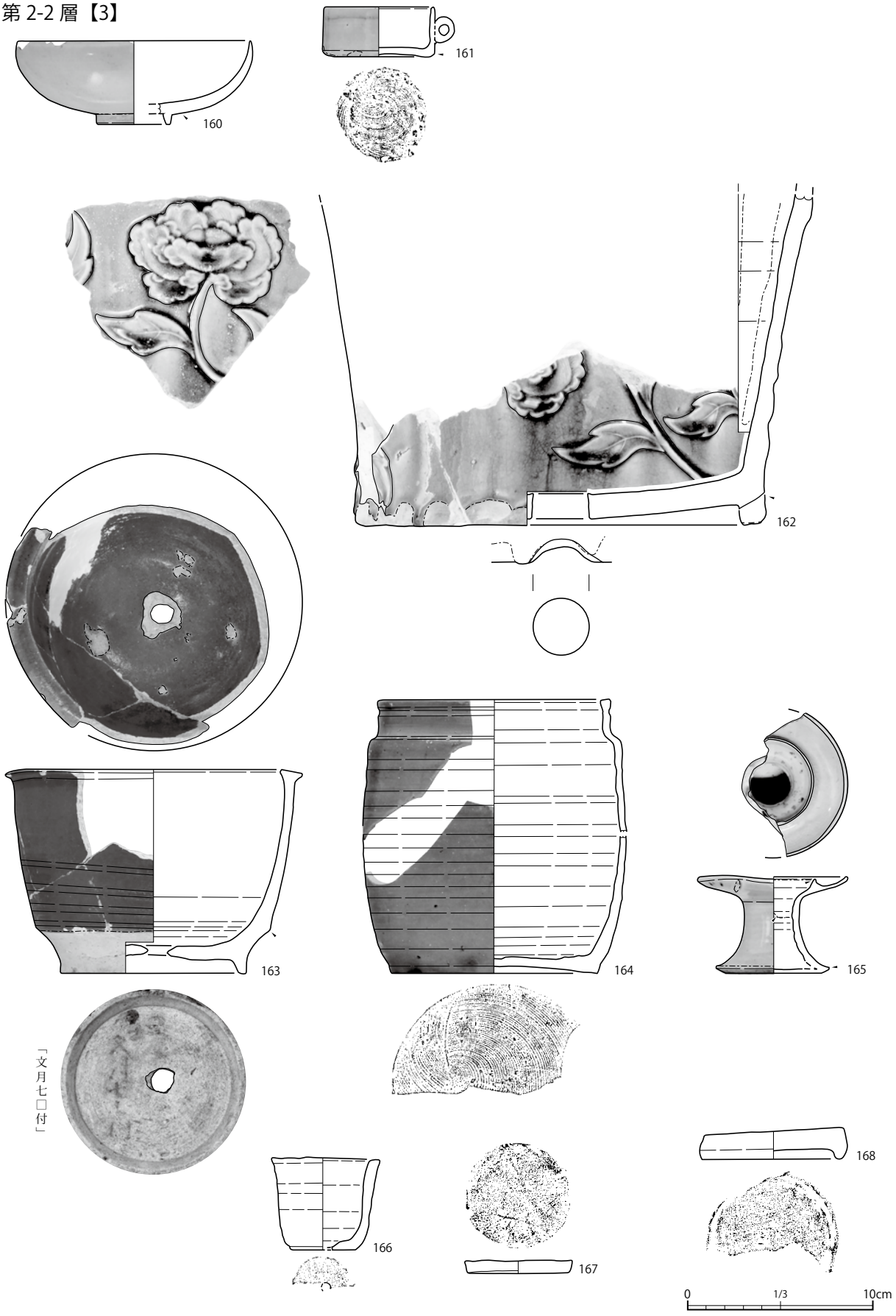
第 87 図　陶磁器・土器（11）

第 2-2 層【2】



第 88 図　陶磁器・土器（12）

第 2-2 層【3】



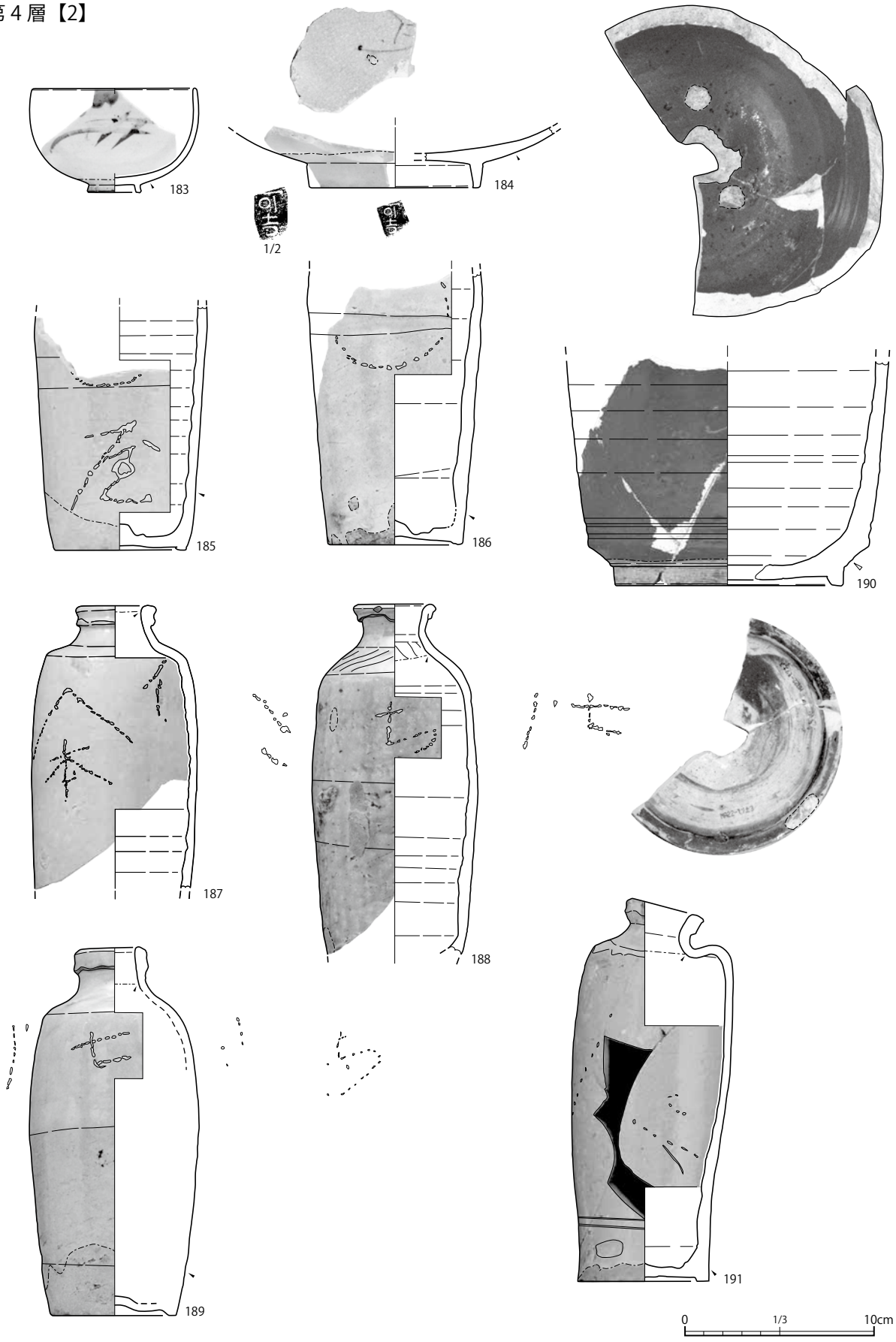
第 89 図　陶磁器・土器（13）

第４層【1】

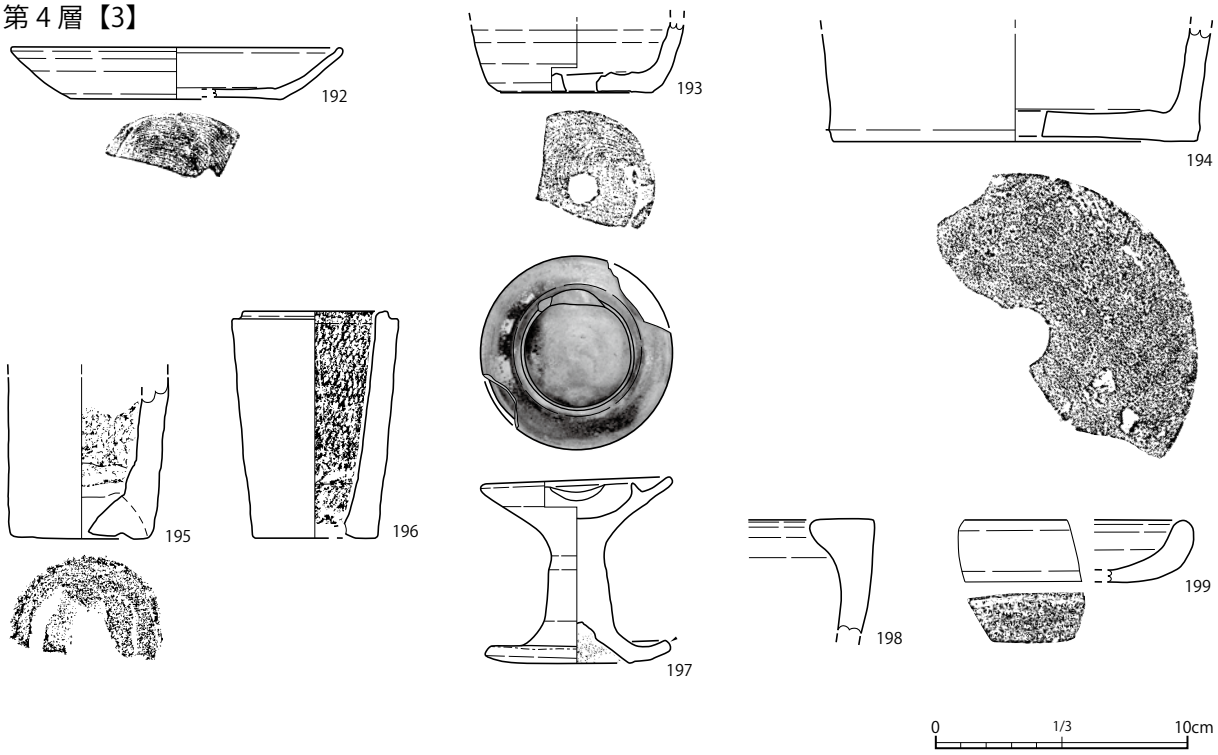


第 90 図　陶磁器・土器（14）

第 4 層【2】



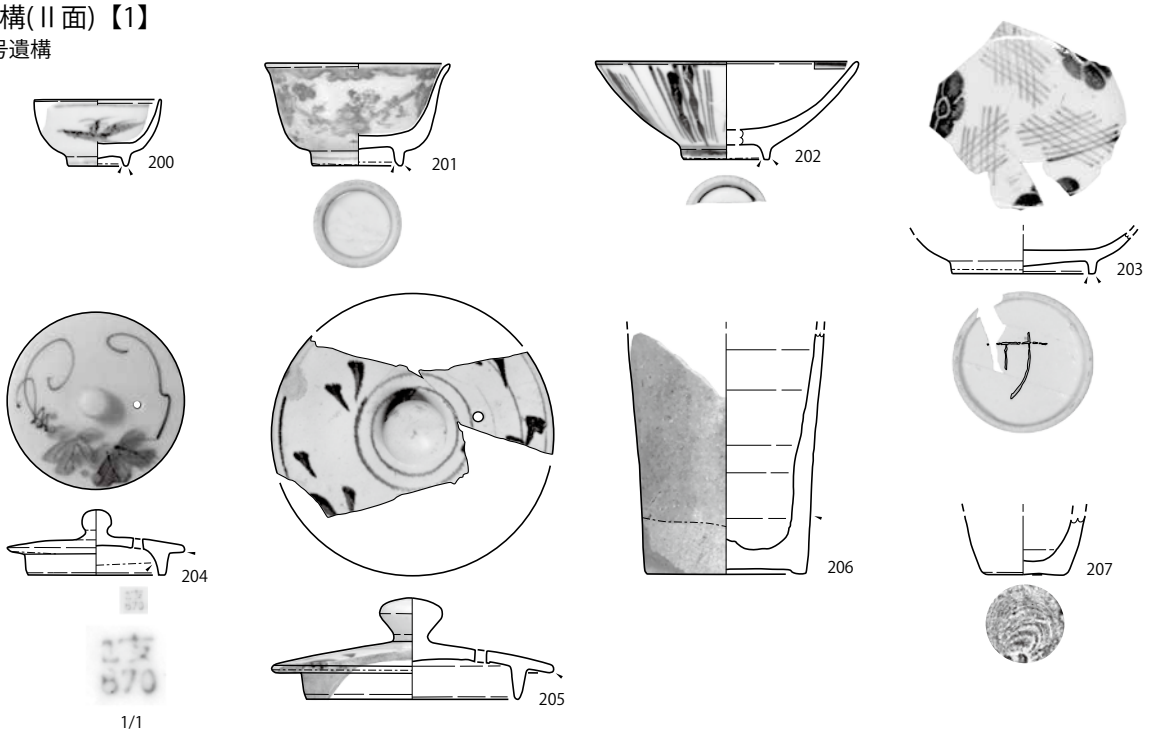
第 91 図　陶磁器・土器（15）



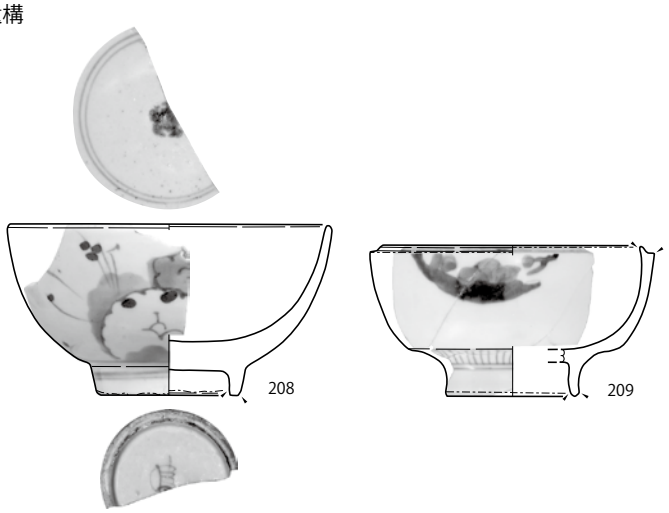
第 92 図　陶磁器・土器（16）

遺構(Ⅱ面)【1】

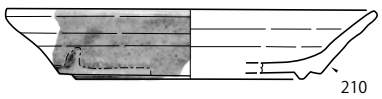
7号遺構



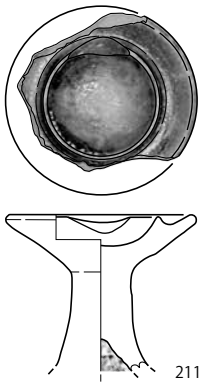
14号遺構



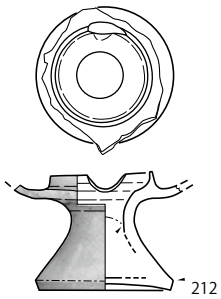
63号遺構

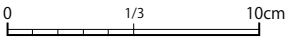


13号遺構



46号遺構

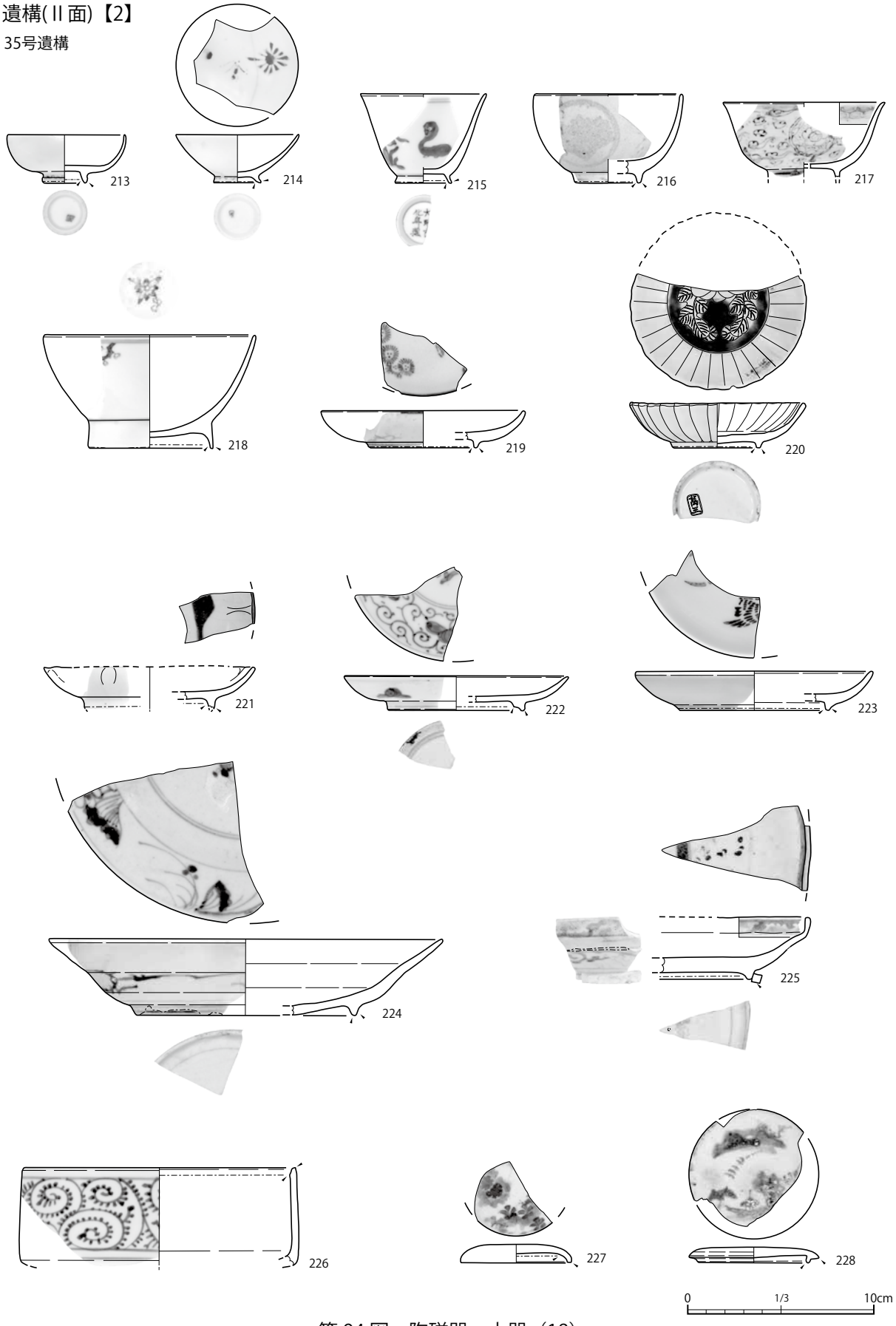




第 93 図　陶磁器・土器（17）

遺構(Ⅱ面)【2】

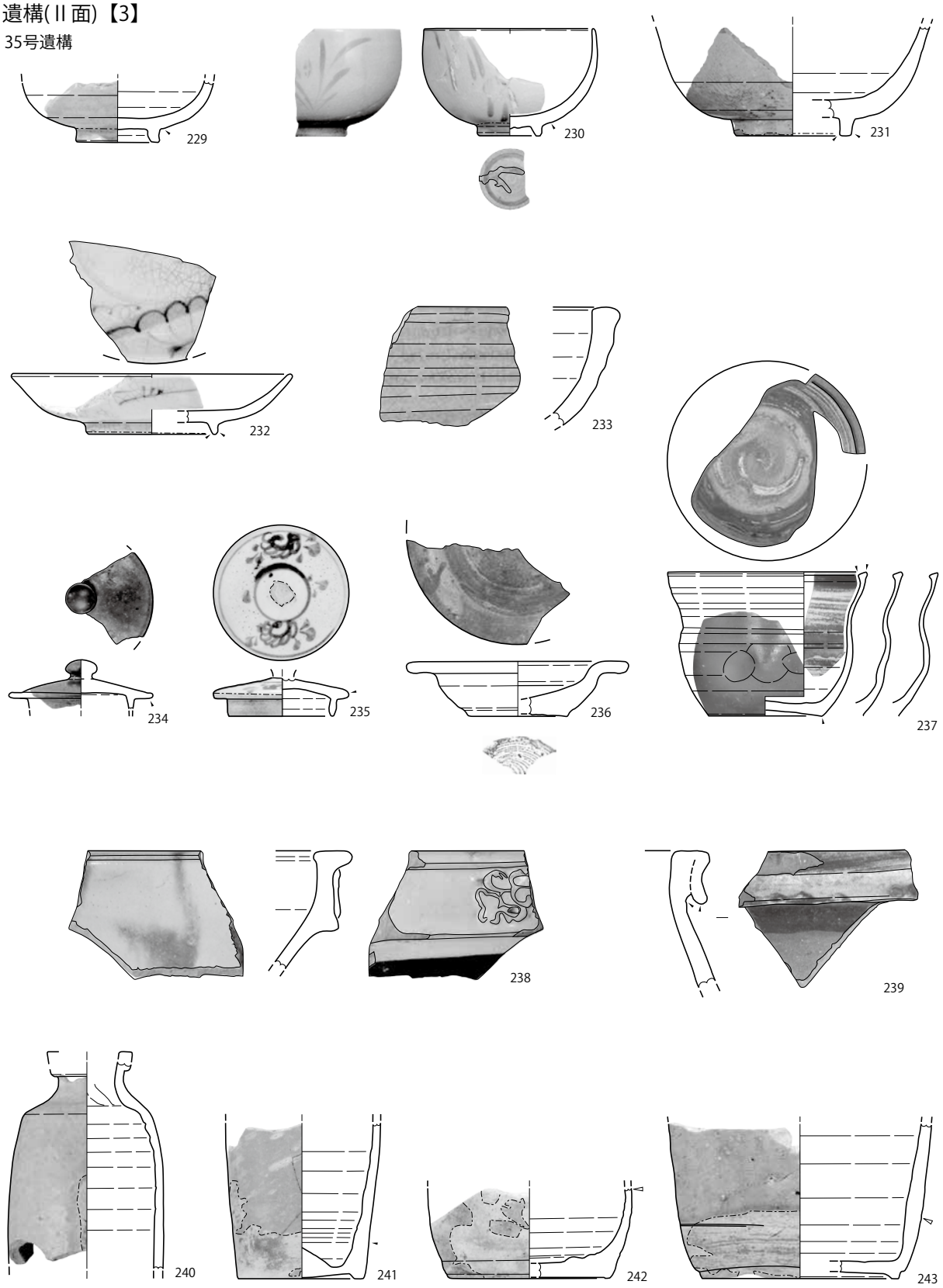
35号遺構



第 94 図　陶磁器・土器（18）

遺構(Ⅱ面)【3】

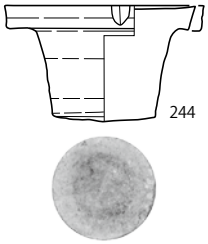
35号遺構

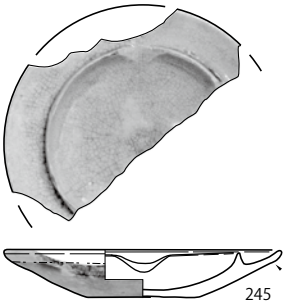


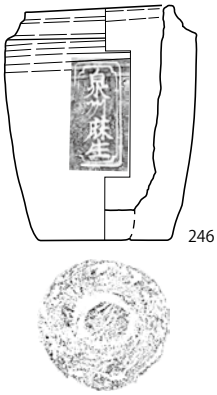
第 95 図　陶磁器・土器（19）

遺構(Ⅱ面)【4】

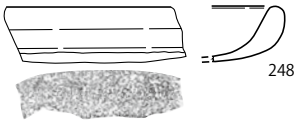
35号遺構





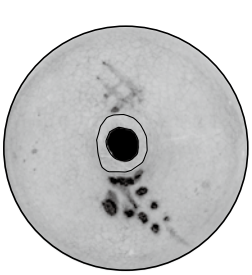


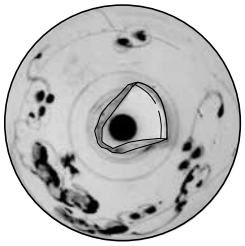




37号遺構

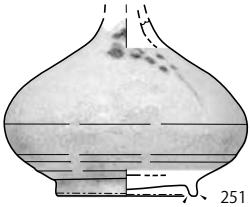






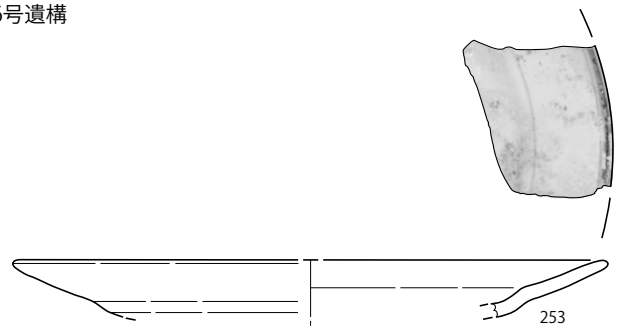
52号遺構



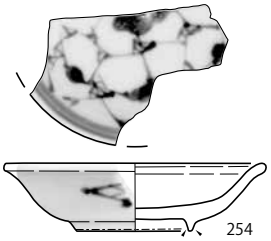




56号遺構



55号遺構

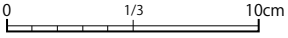


59号遺構



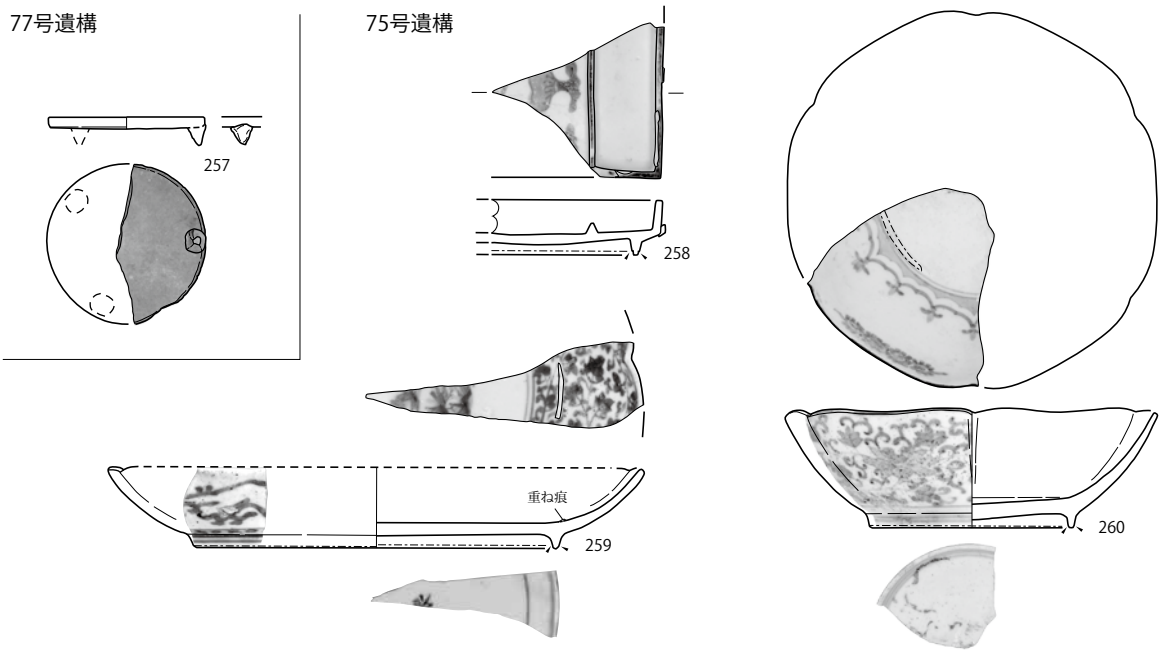
86号遺構

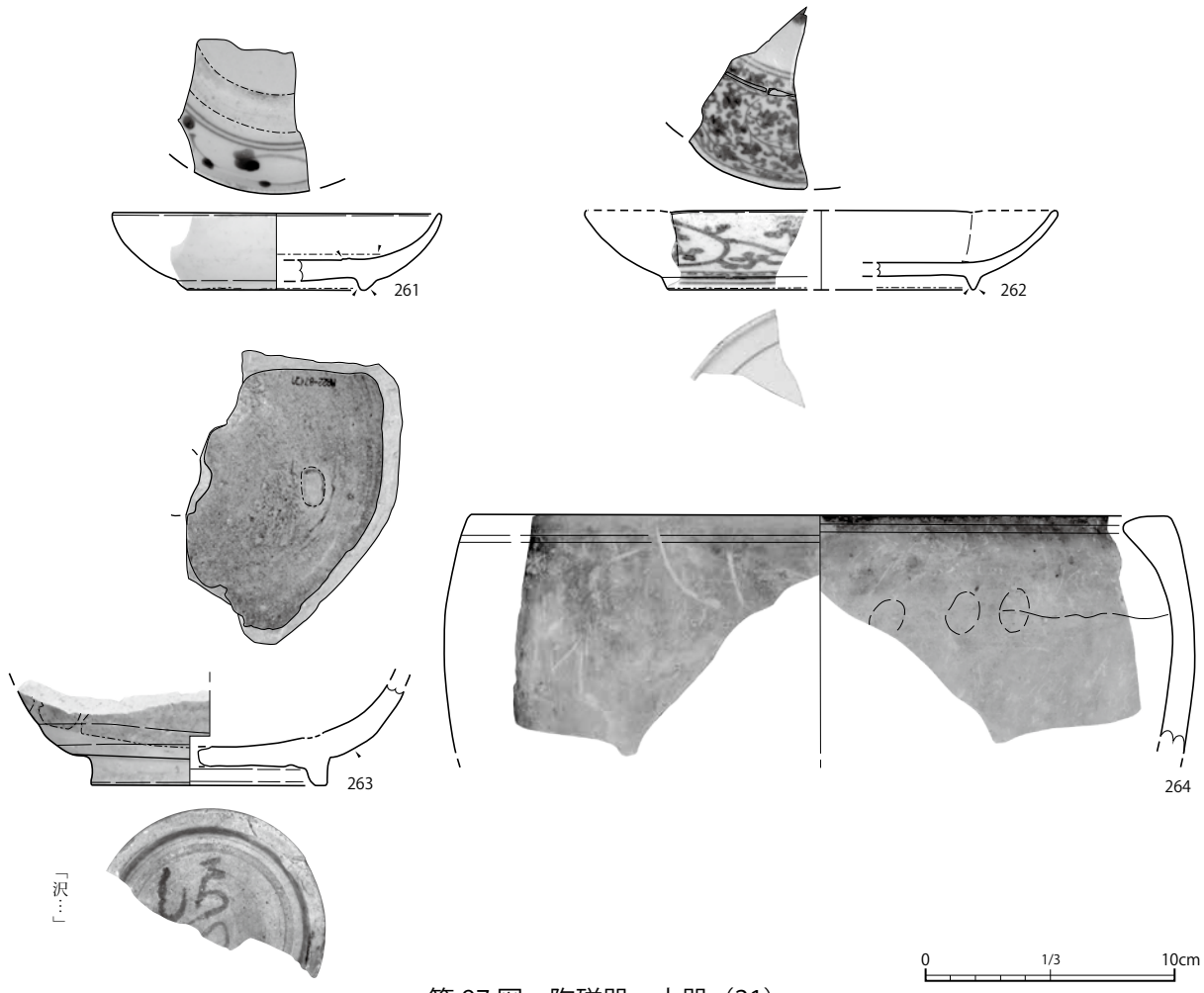




第 96 図　陶磁器・土器（20）

遺構(Ⅲ面)【1】





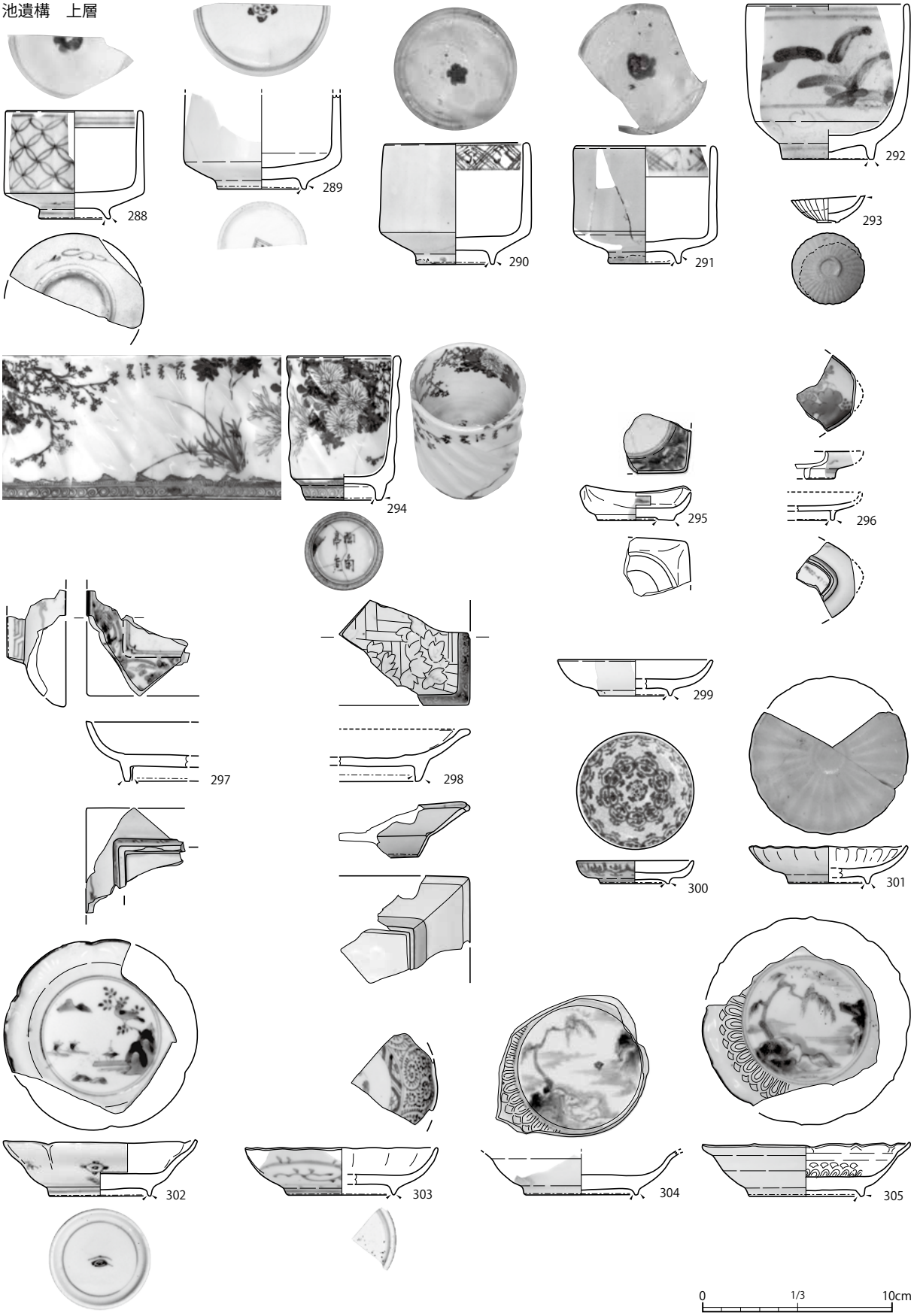
第 97 図　陶磁器・土器（21）

遺構（Ⅲ面）【2】
池遺構　上層



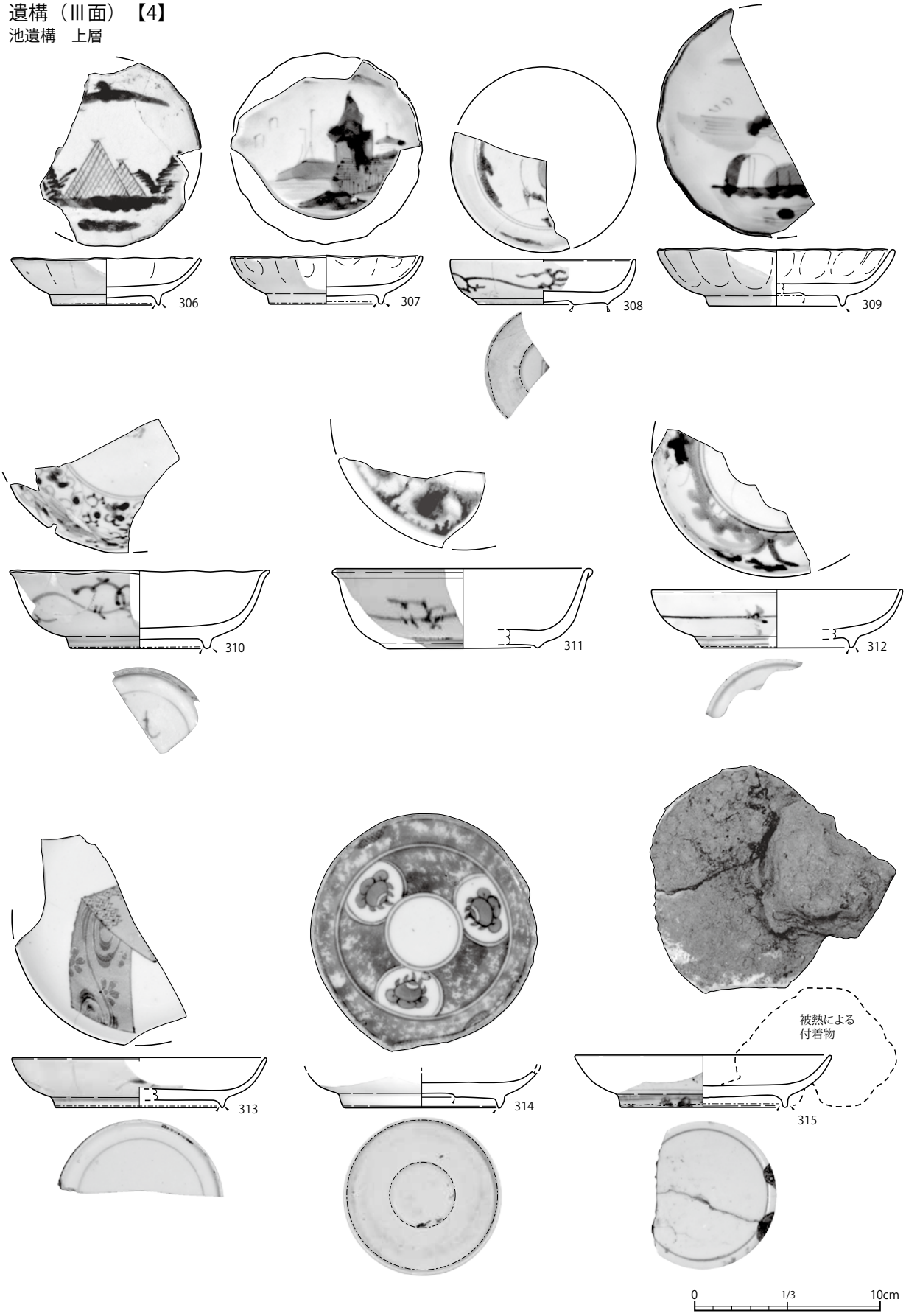
第 98 図　陶磁器・土器（22）

遺構（Ⅲ面）【3】
池遺構　上層



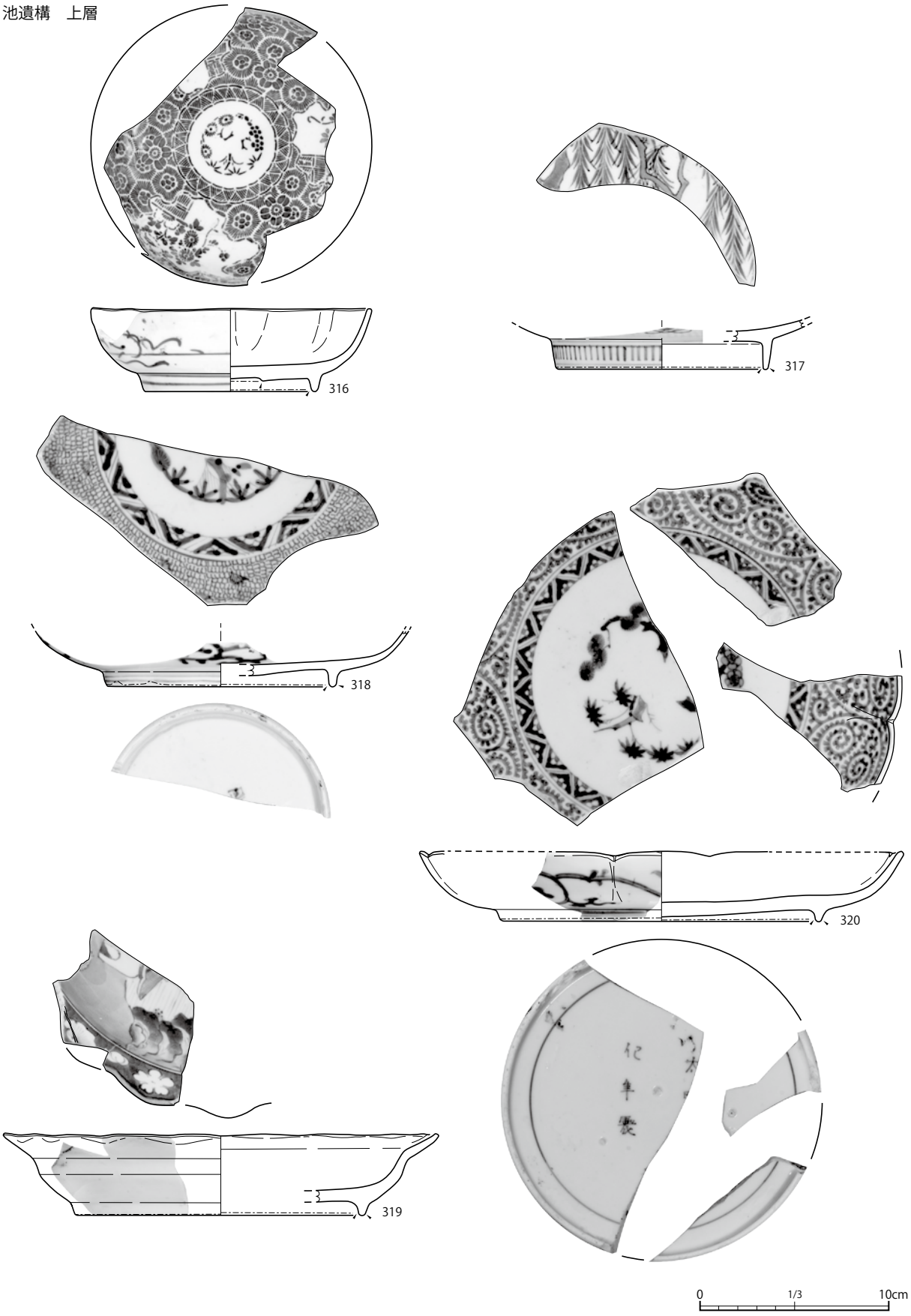
第 99 図　陶磁器・土器（23）

遺構（Ⅲ面）【4】
池遺構　上層



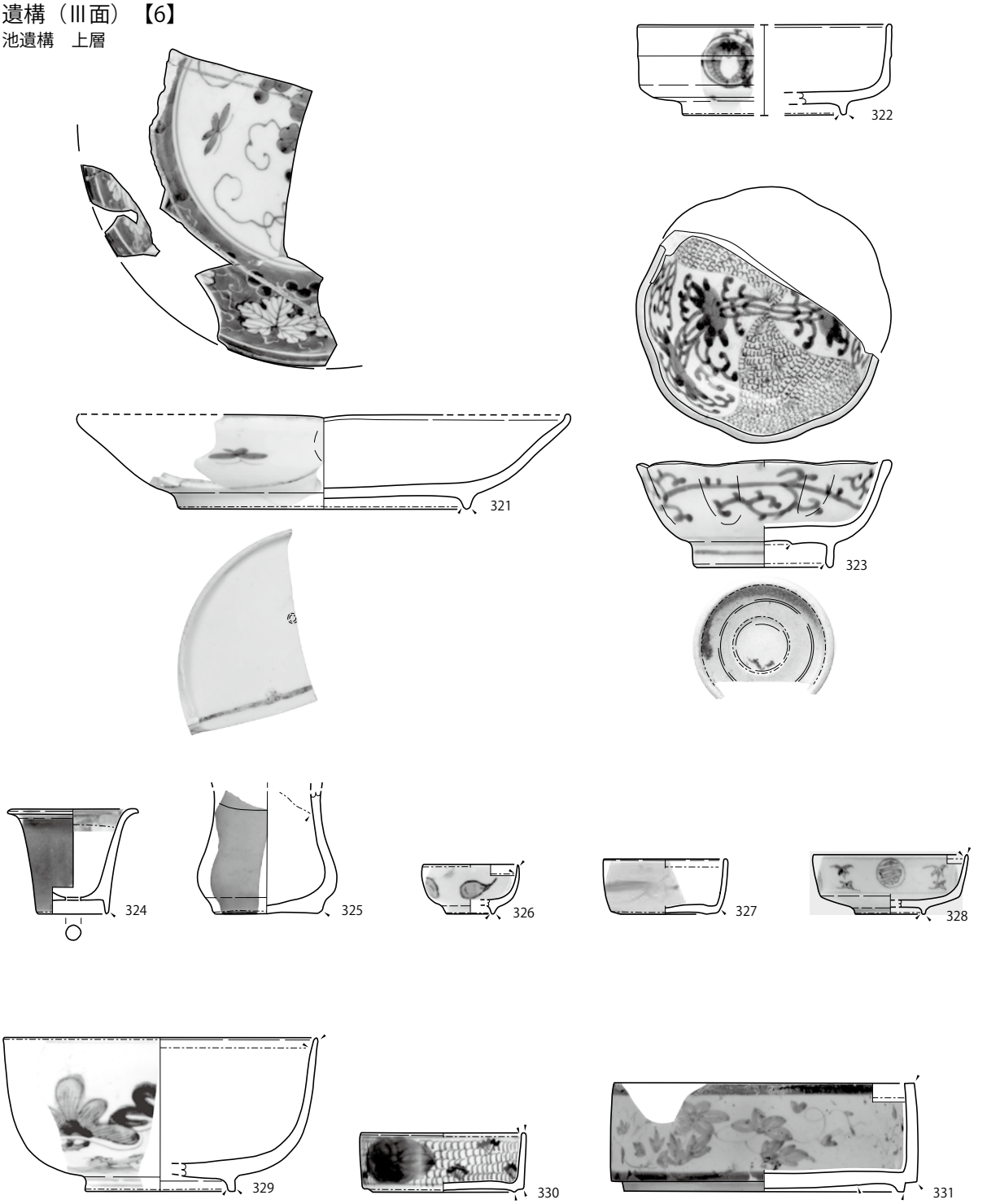
第 100 図　陶磁器・土器（24）

遺構（Ⅲ面）【5】
池遺構　上層



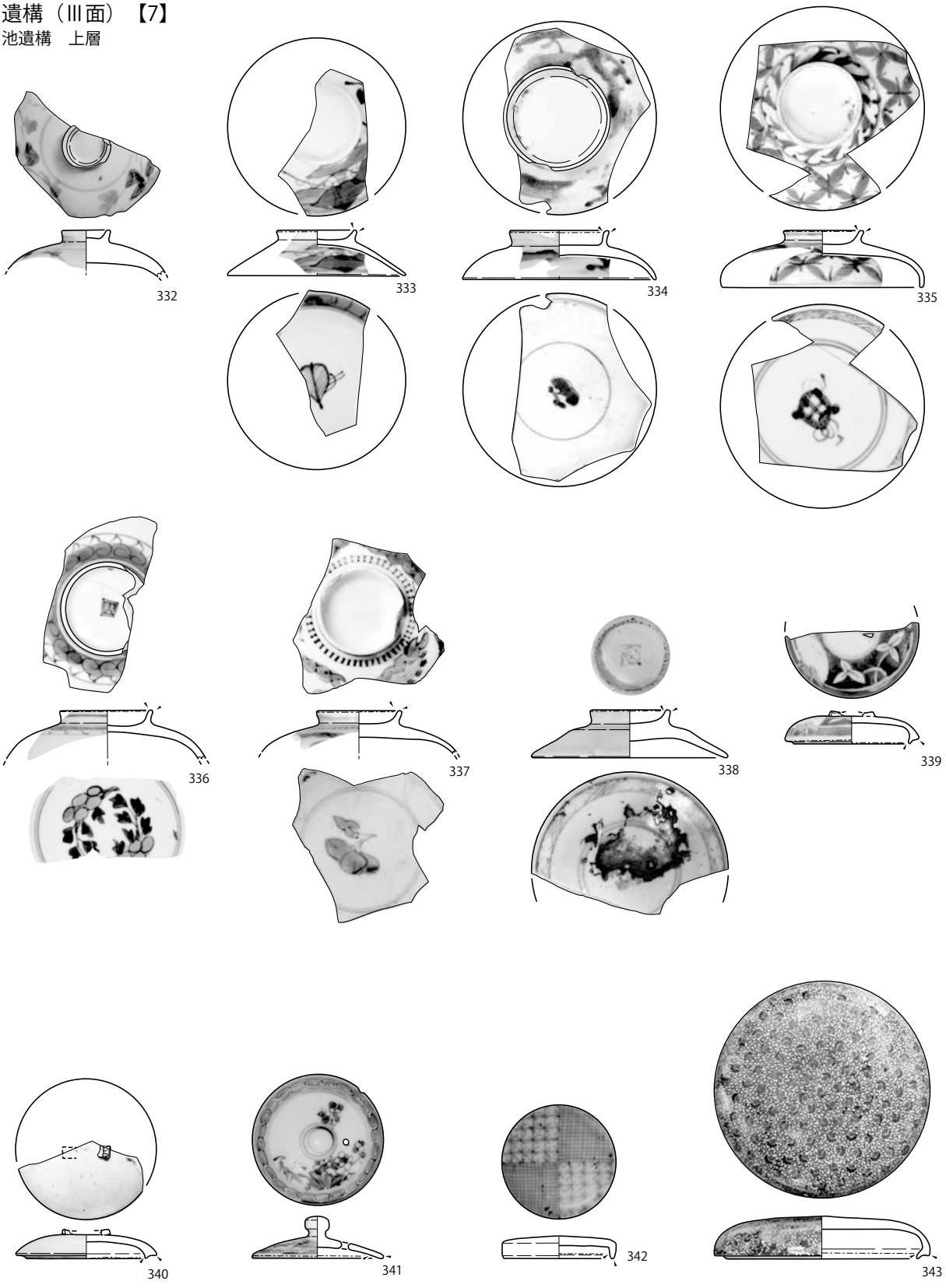
第 101 図　陶磁器・土器（25）

遺構（Ⅲ面）【6】
池遺構　上層



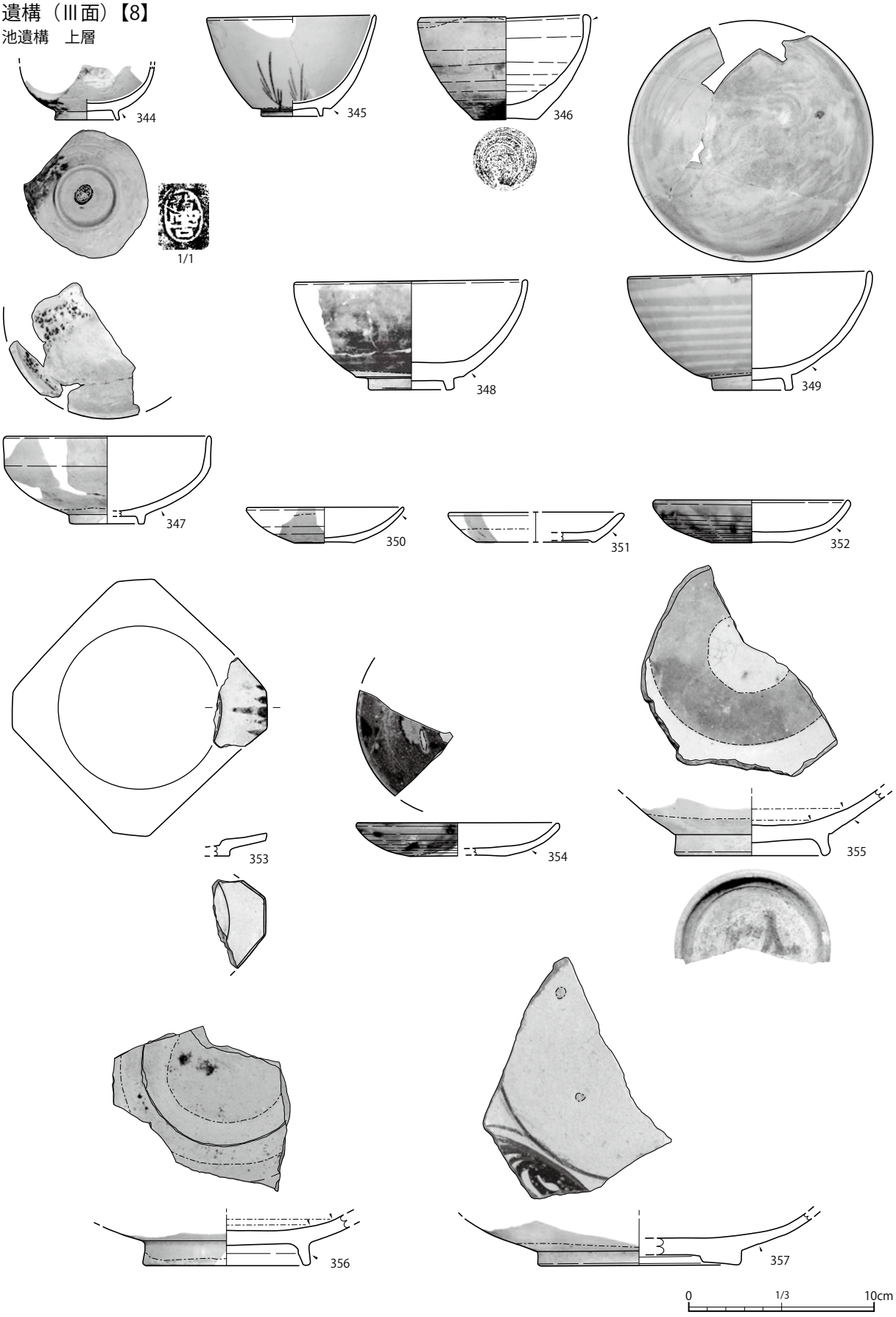
第 102 図　陶磁器・土器（26）

遺構（Ⅲ面）【7】
池遺構　上層



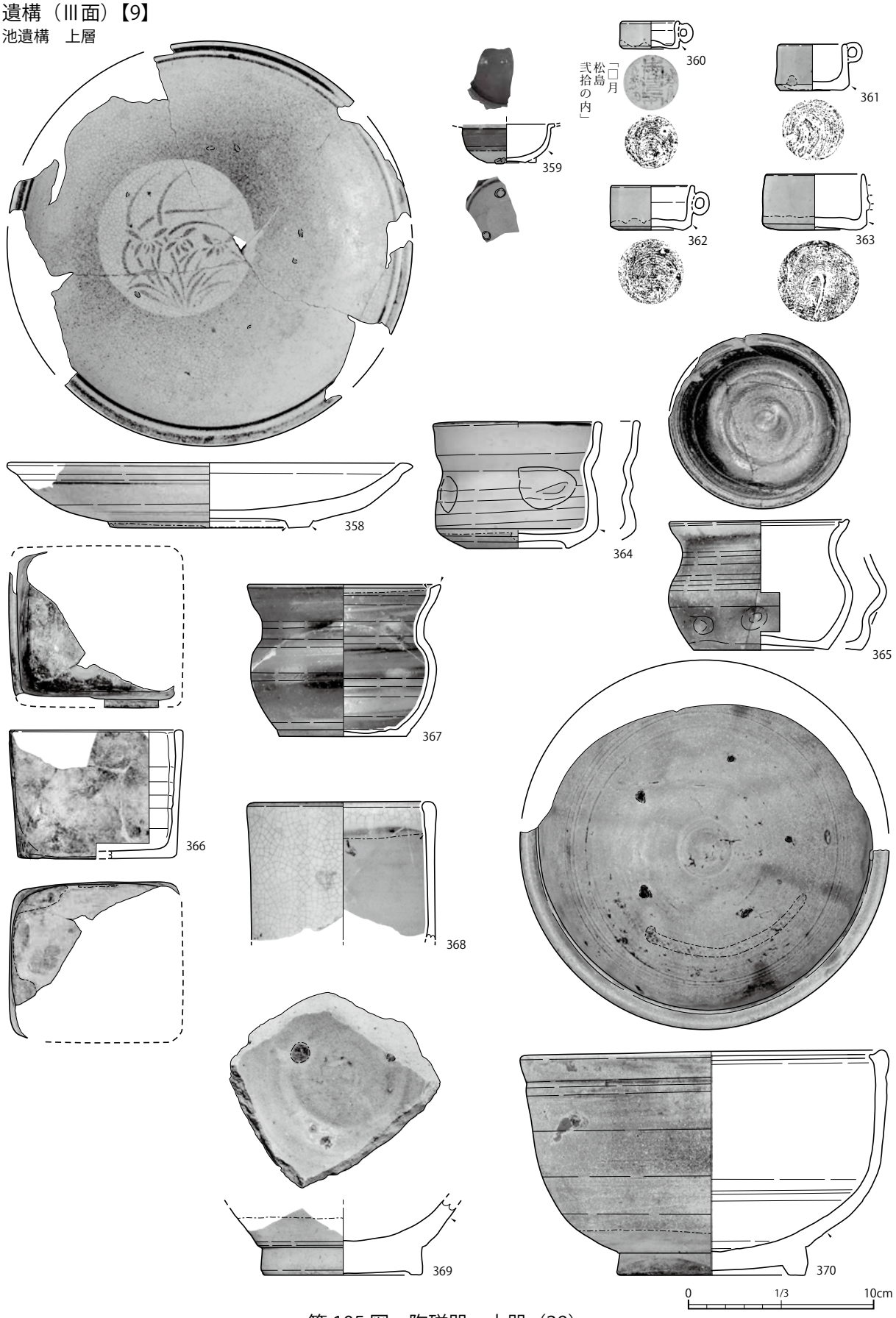
第 103 図　陶磁器・土器（27）

遺構（Ⅲ面）【8】
池遺構　上層



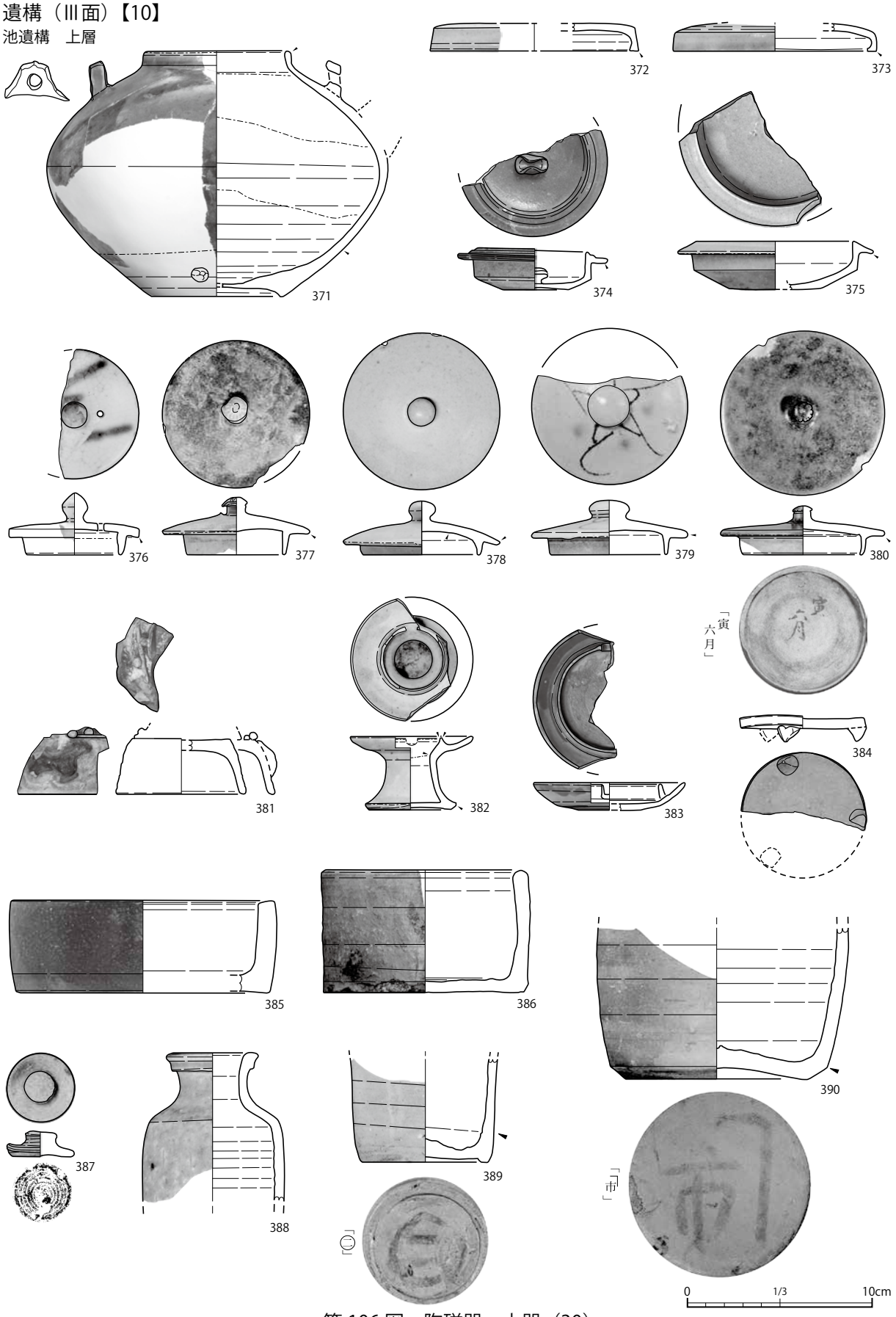
第 104 図　陶磁器・土器（28）

遺構（Ⅲ面）【9】
池遺構　上層



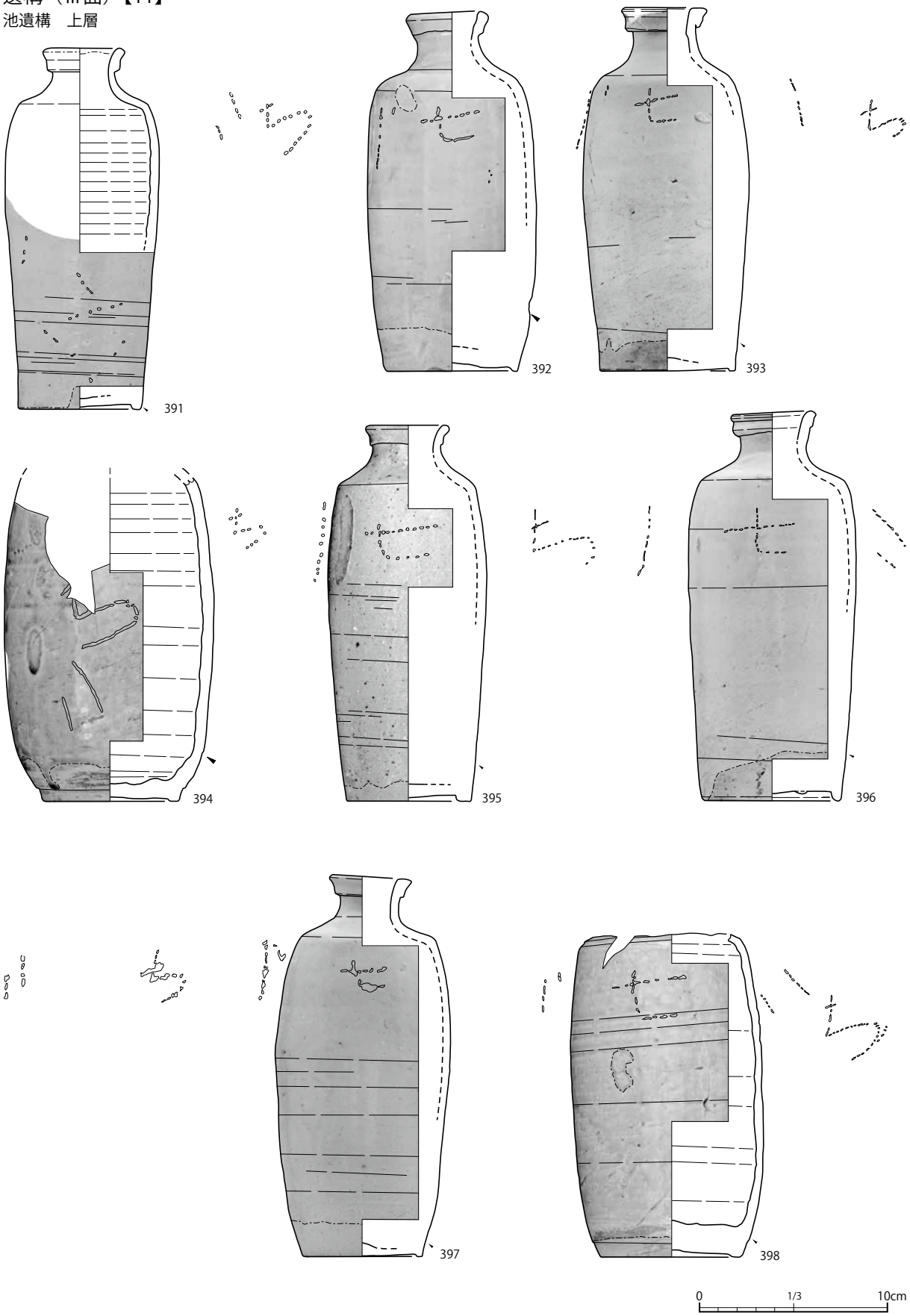
第 105 図　陶磁器・土器（29）

遺構（Ⅲ面）【10】
池遺構　上層



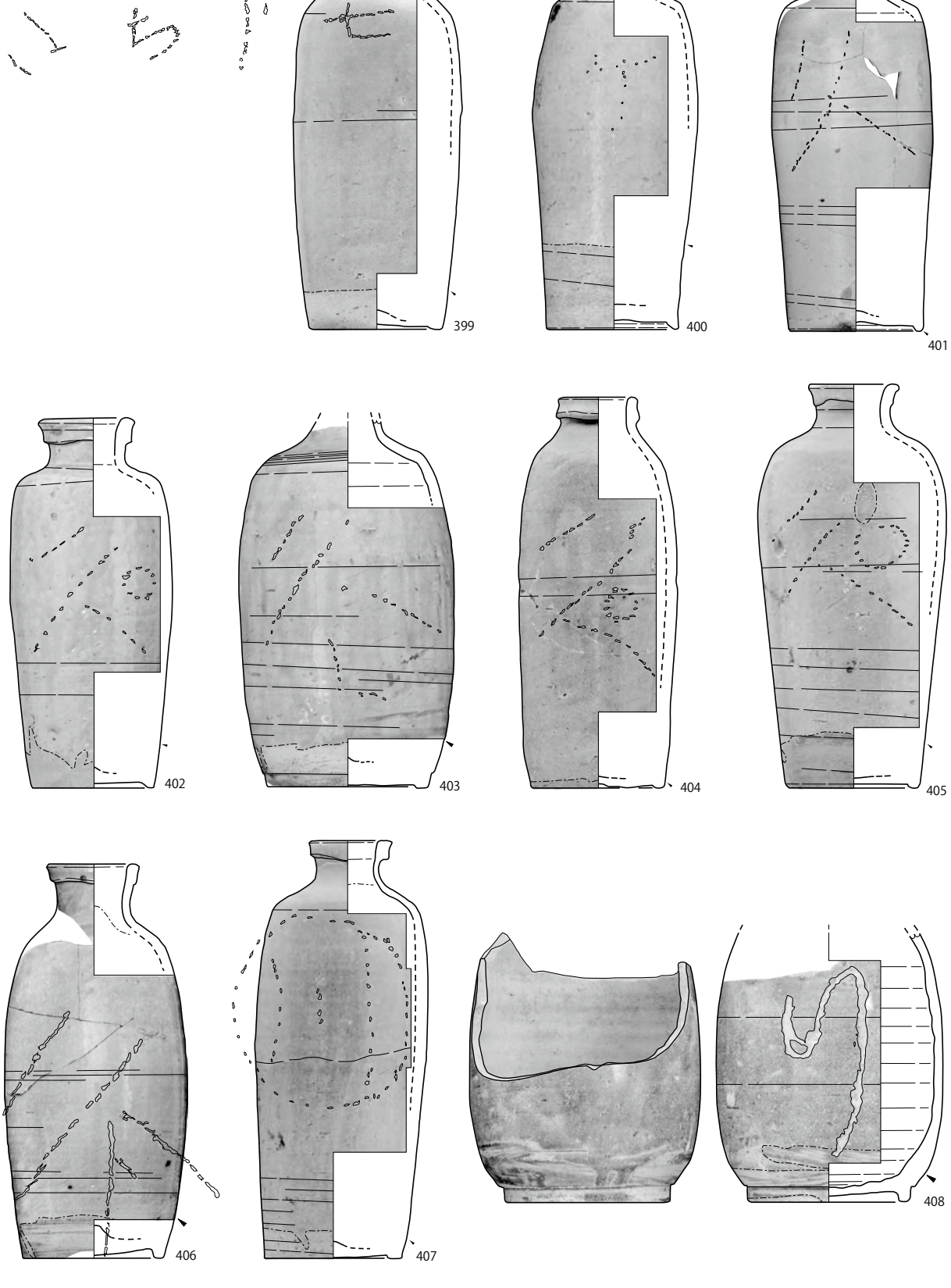
第 106 図　陶磁器・土器（30）

遺構（Ⅲ面）【11】
池遺構　上層



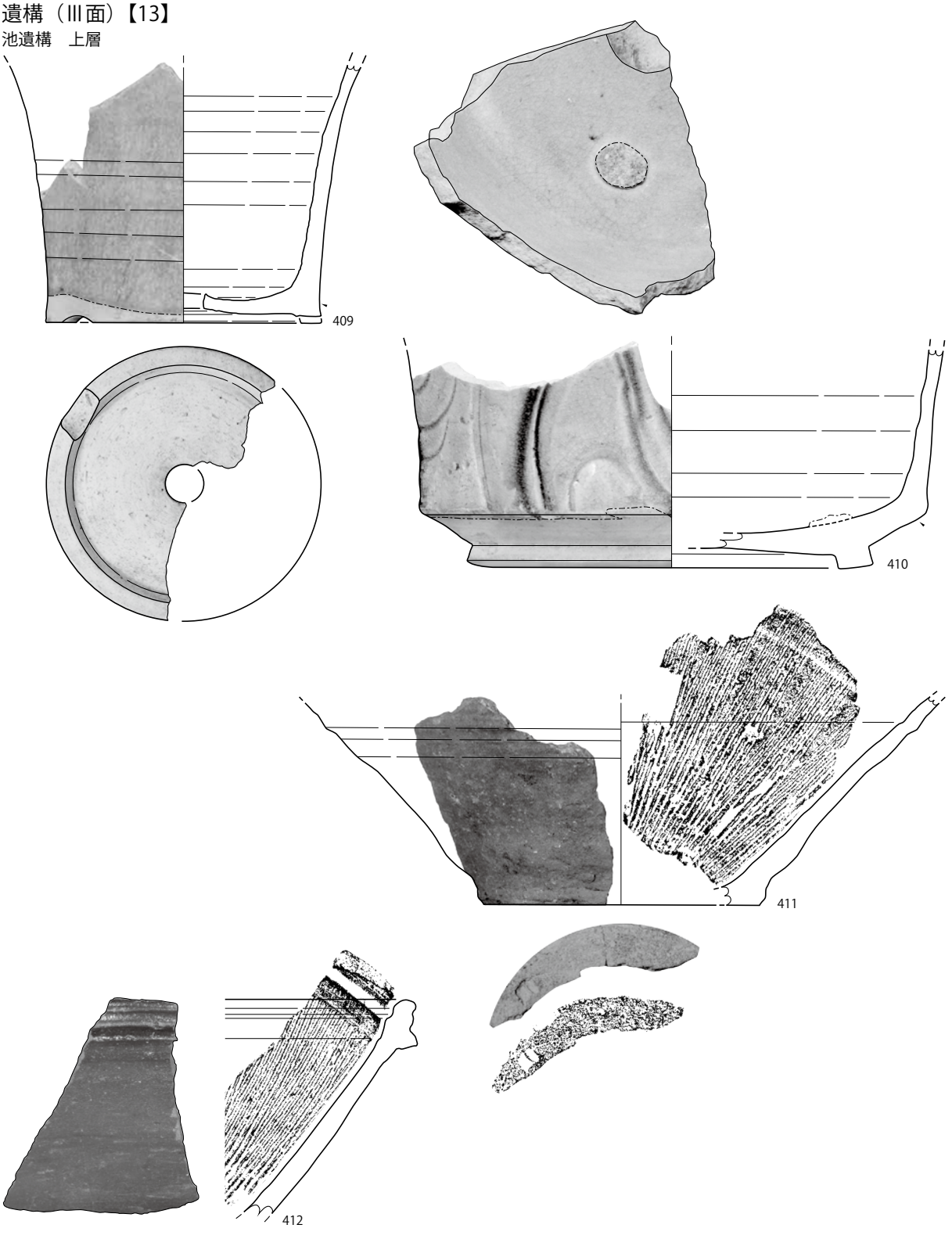
第 107 図　陶磁器・土器（31）

遺構（Ⅲ面）【12】
池遺構　上層



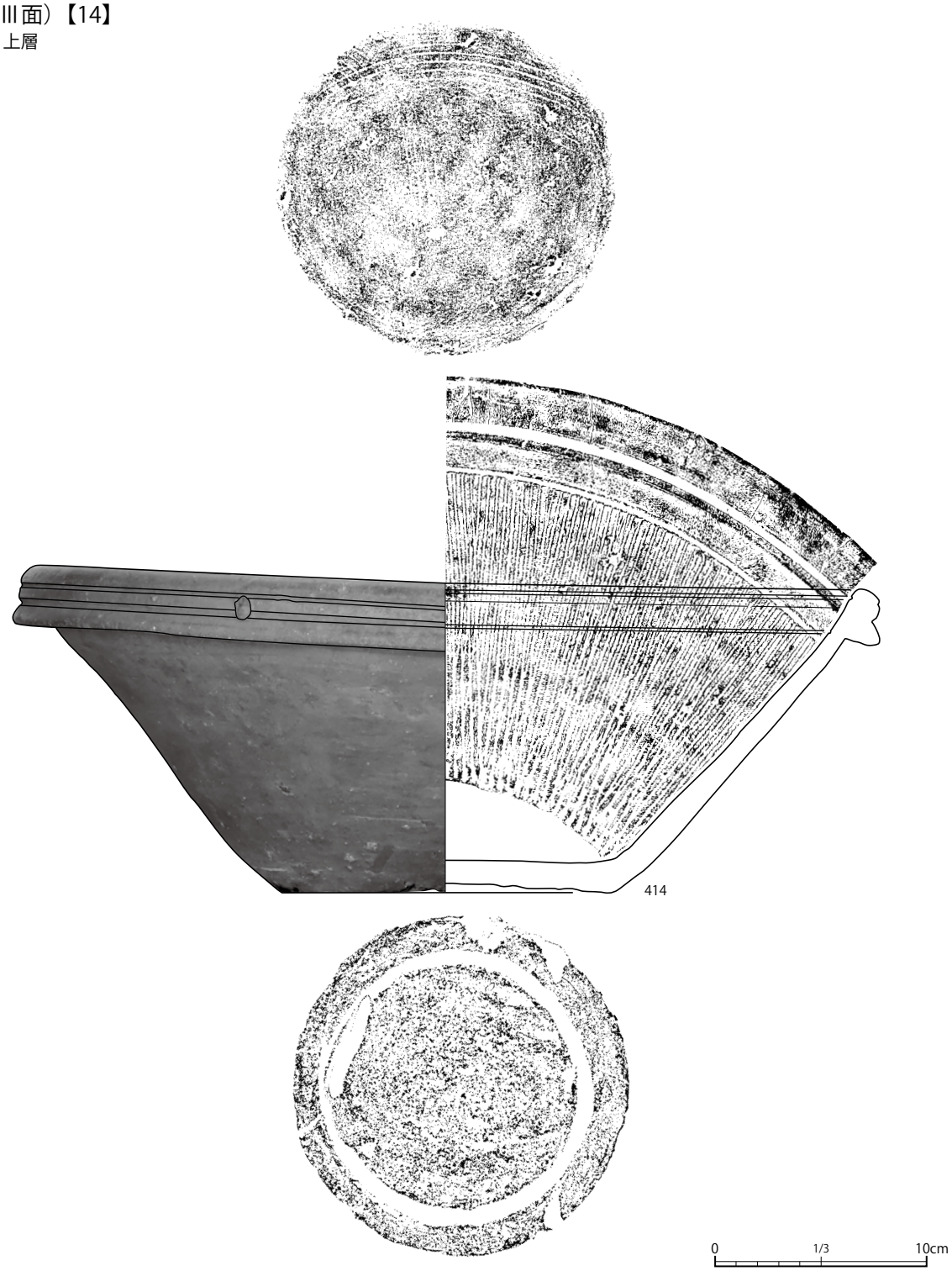
第 108 図　陶磁器・土器（32）

遺構（Ⅲ面）【13】
池遺構　上層



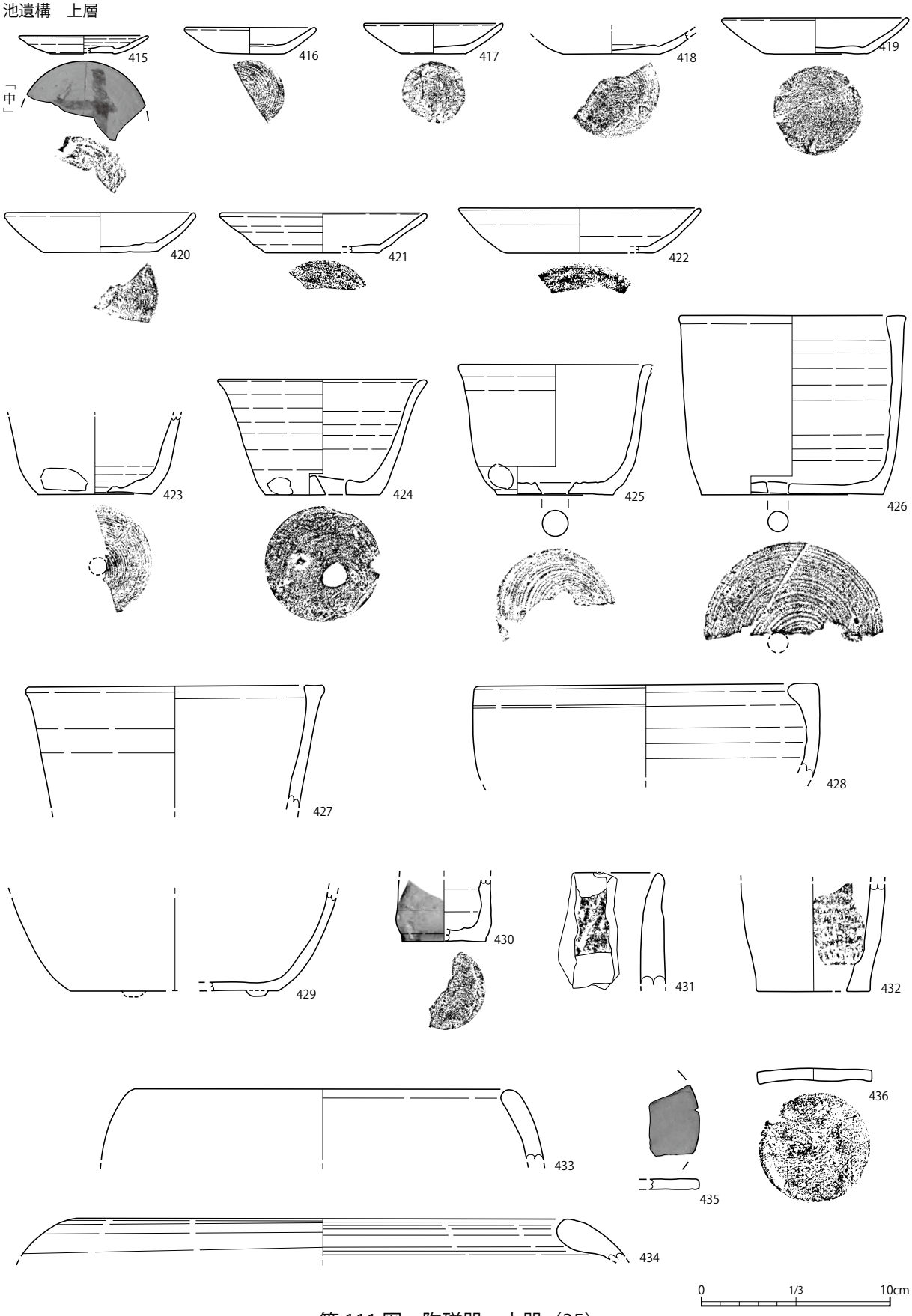
第 109 図　陶磁器・土器（33）

遺構（Ⅲ面）【14】
池遺構　上層



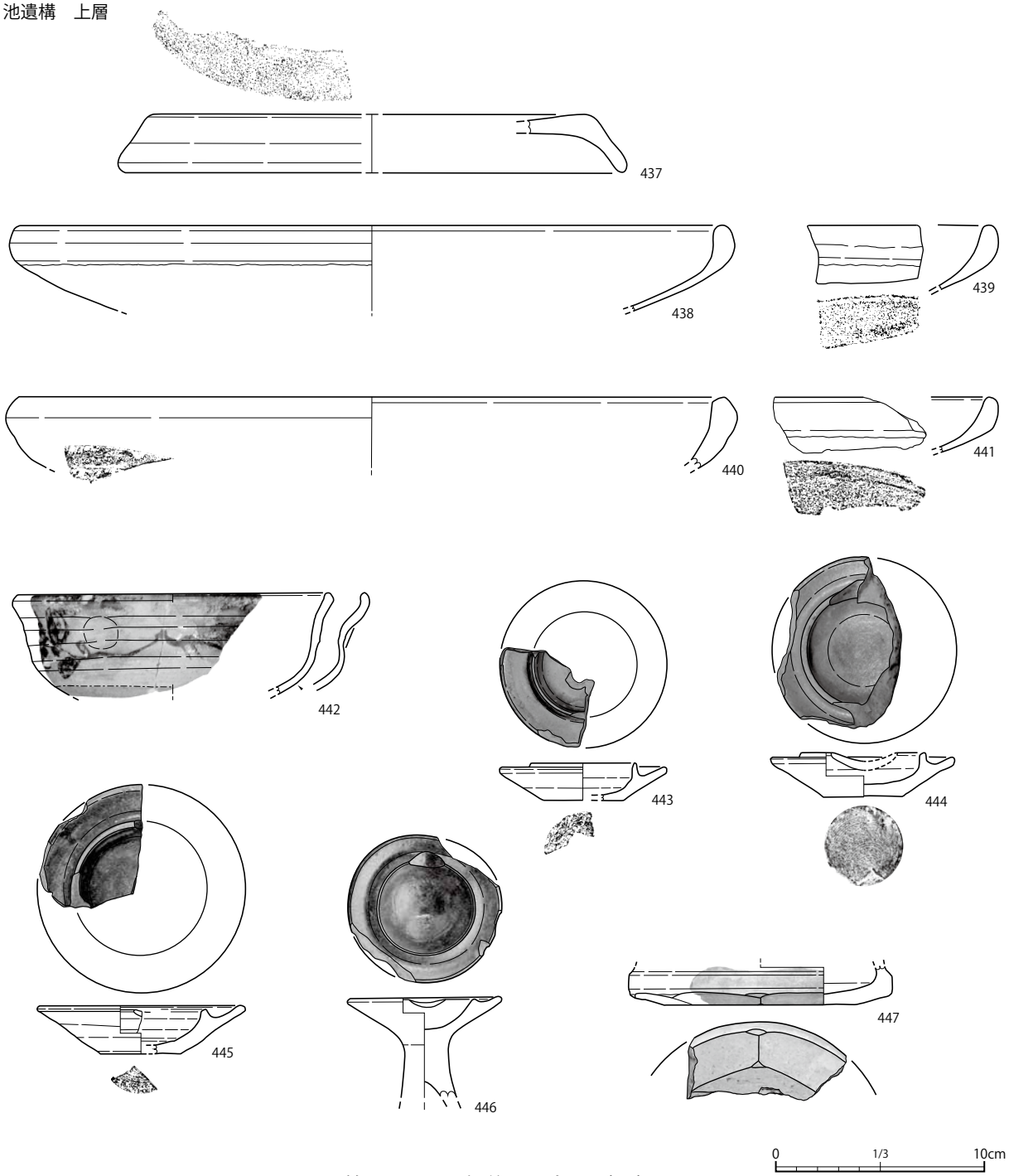
第 110 図　陶磁器・土器（34）

遺構（Ⅲ面）【15】
池遺構　上層



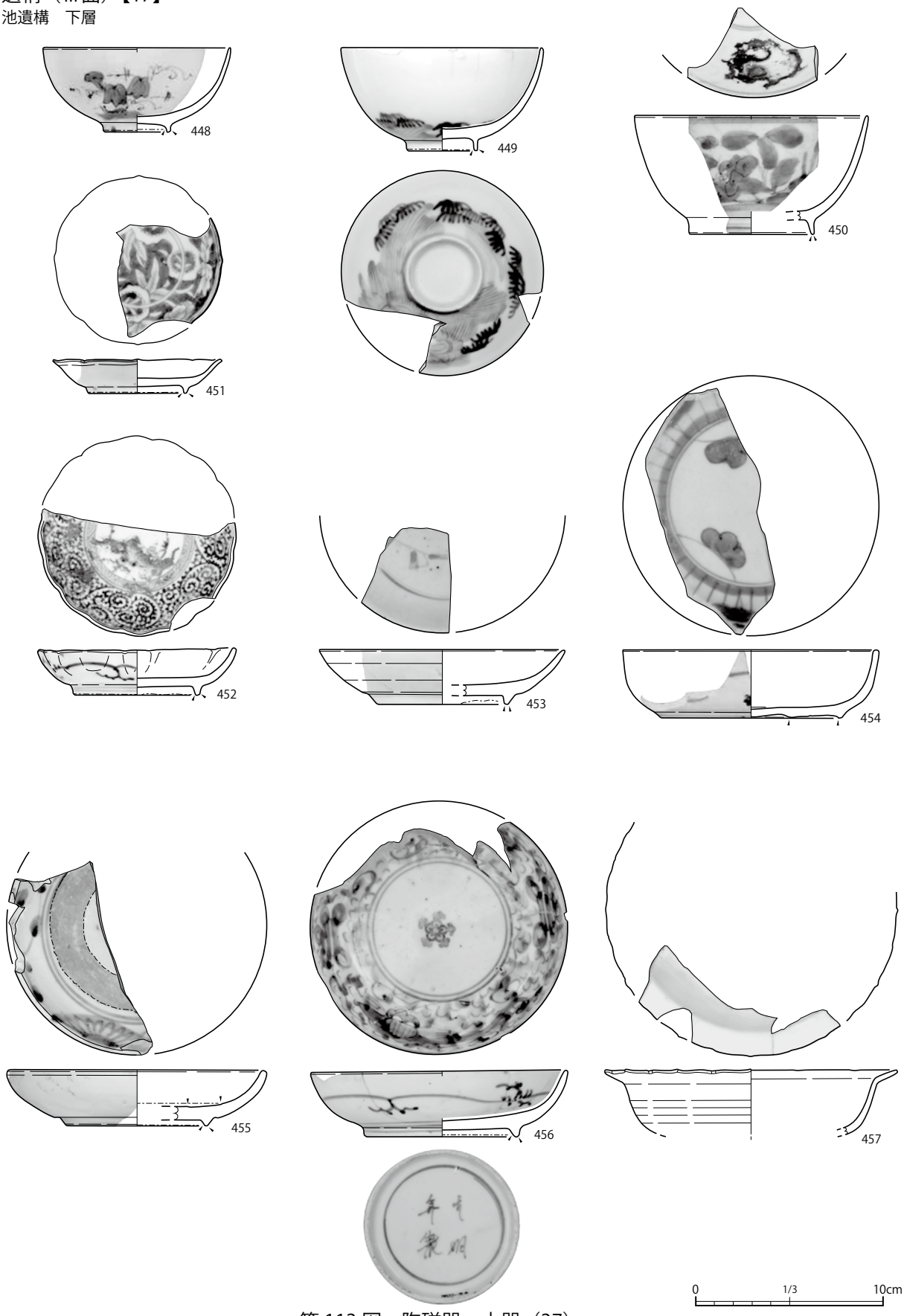
第 111 図　陶磁器・土器（35）

遺構（Ⅲ面）【16】
池遺構　上層



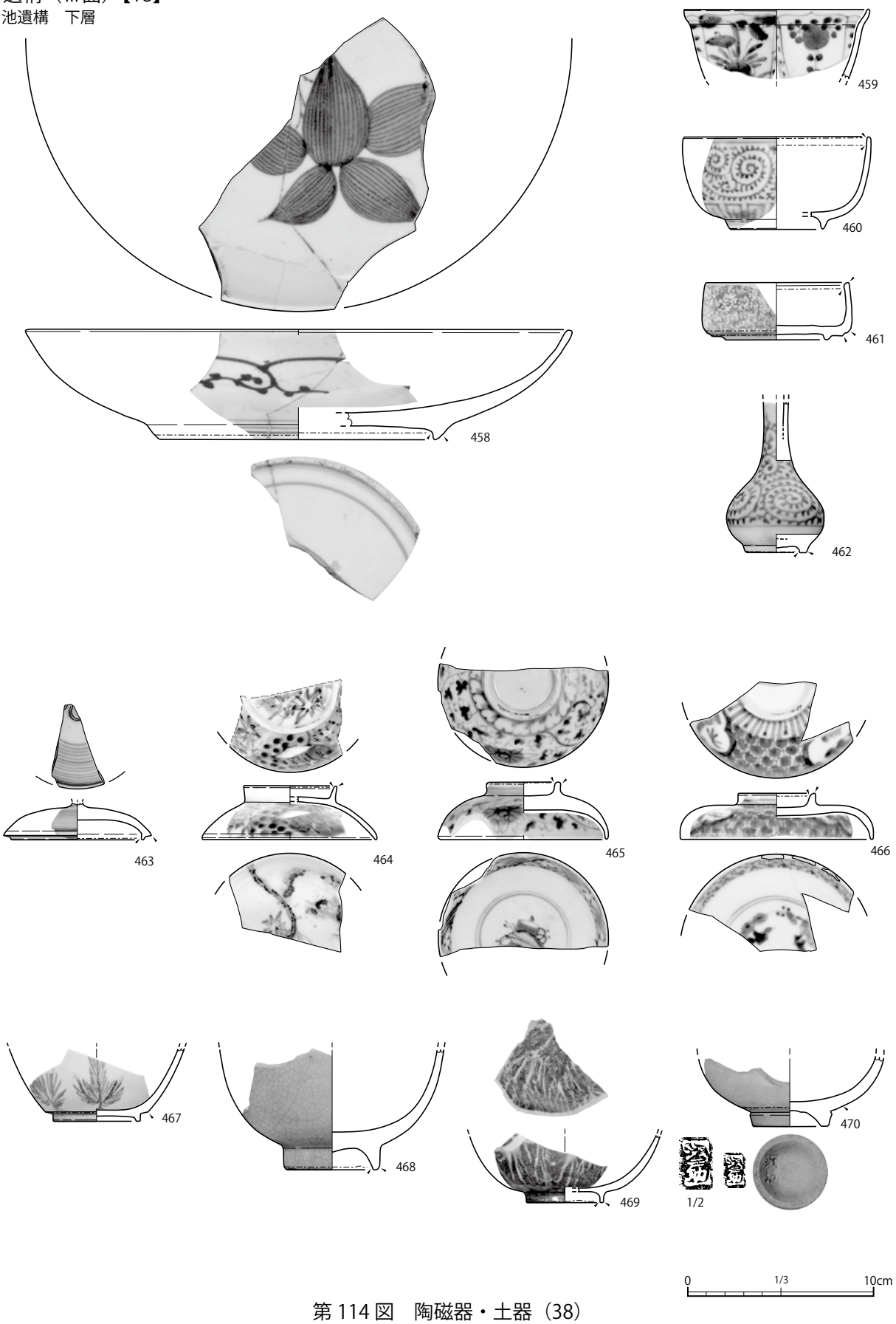
第 112 図　陶磁器・土器（36）

遺構（Ⅲ面）【17】
池遺構　下層



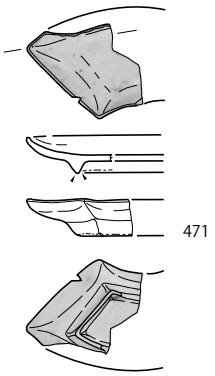
第 113 図　陶磁器・土器（37）

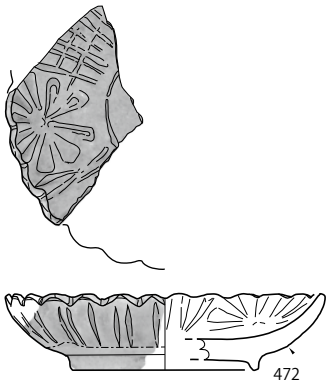
遺構（Ⅲ面）【18】
池遺構　下層

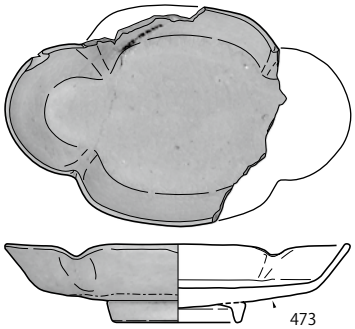


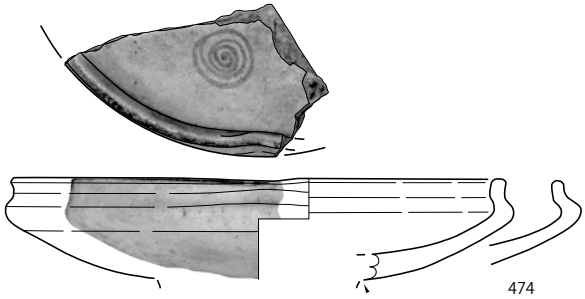
第 114 図　陶磁器・土器（38）

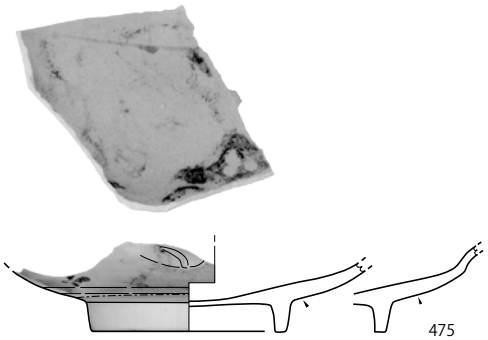
遺構（Ⅲ面）【19】
池遺構　下層

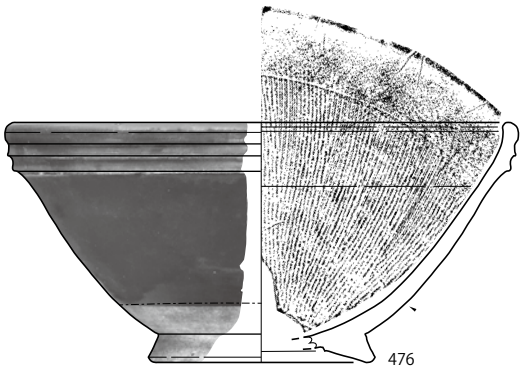


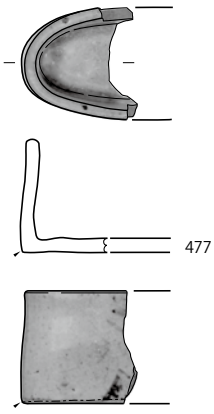


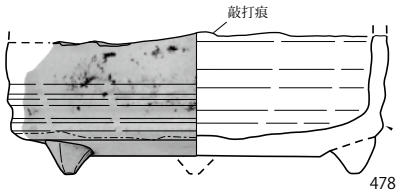








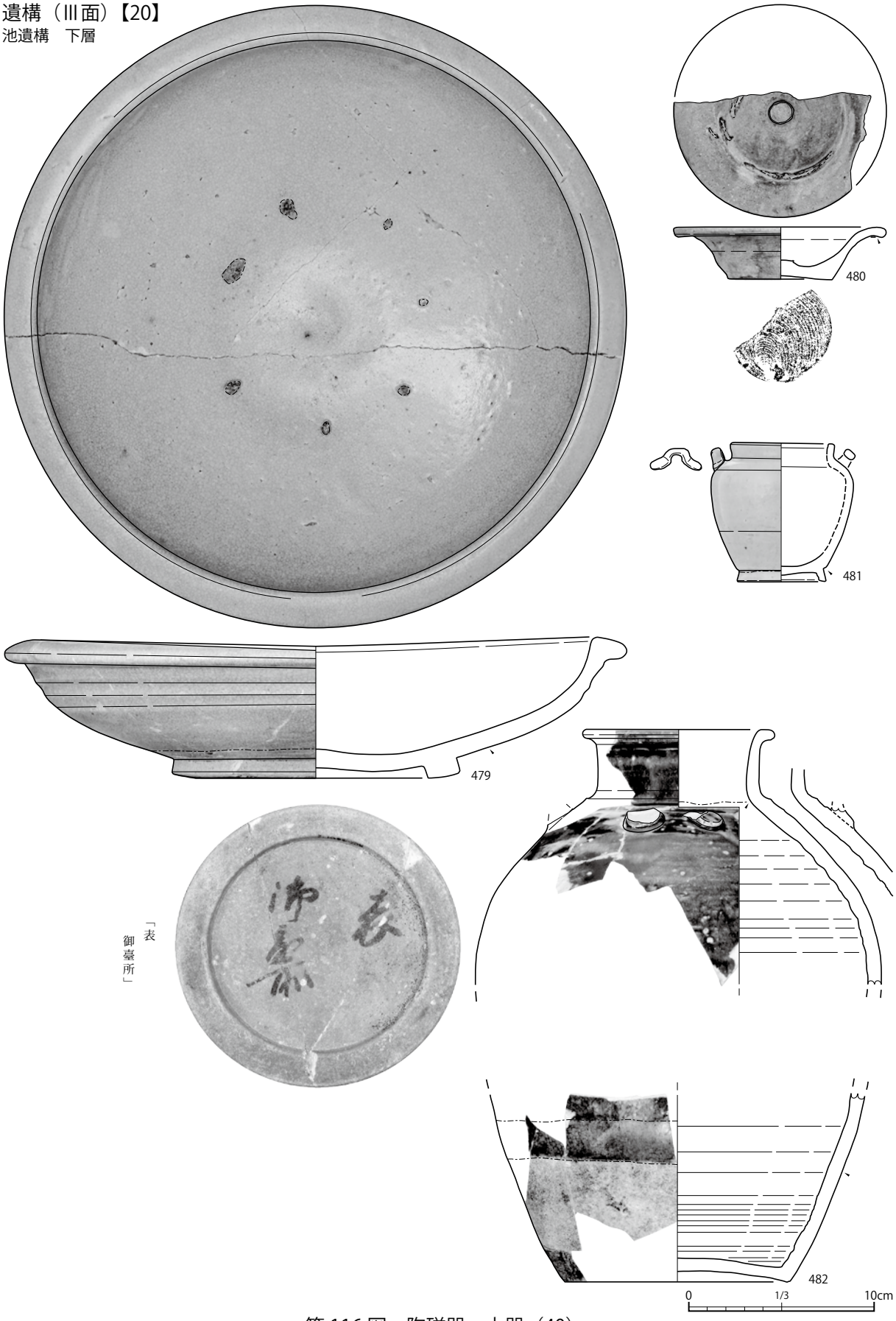




0　1/3　10cm

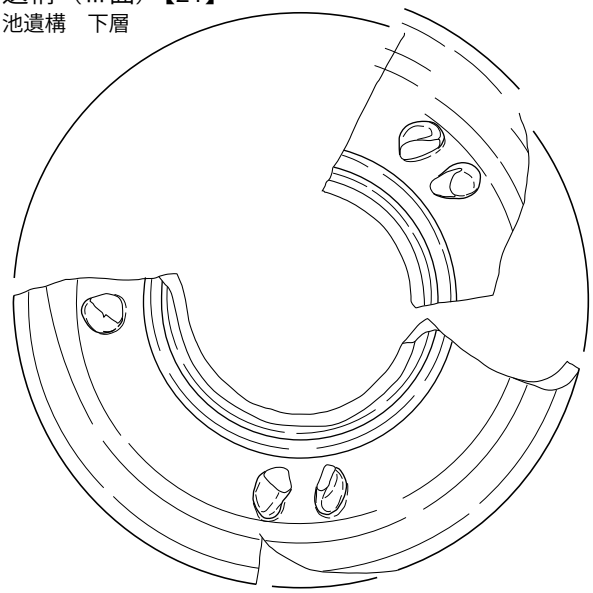
第 115 図　陶磁器・土器（39）

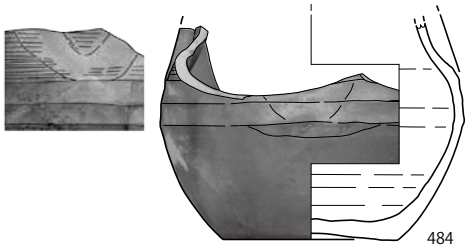
遺構（Ⅲ面）【20】
池遺構　下層

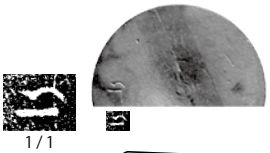


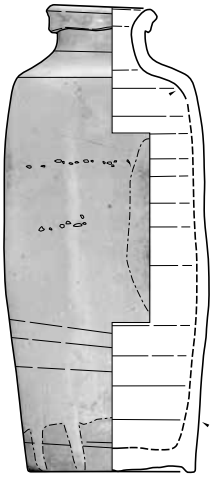
第 116 図　陶磁器・土器（40）

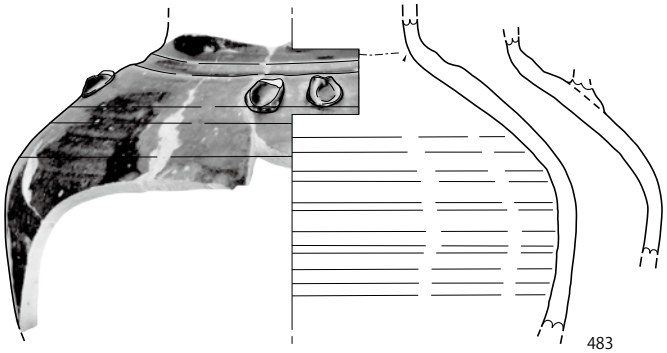
遺構（Ⅲ面）【21】
池遺構　下層

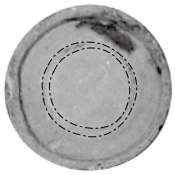


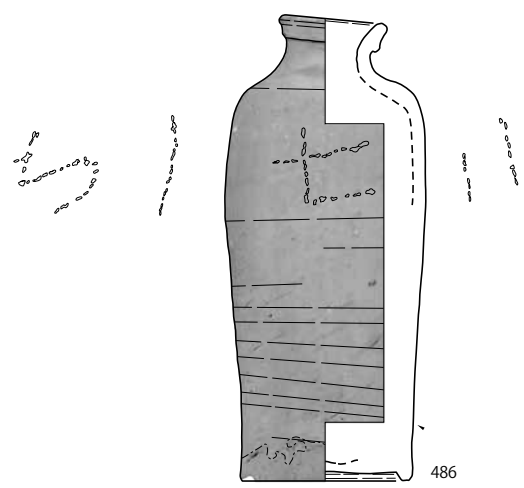


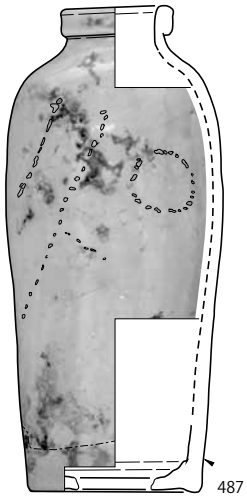


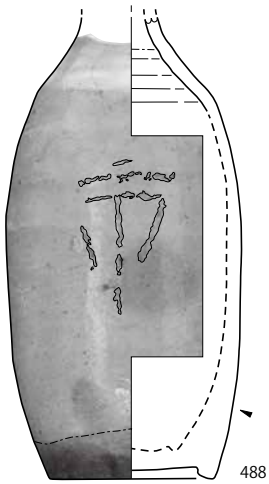




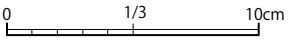






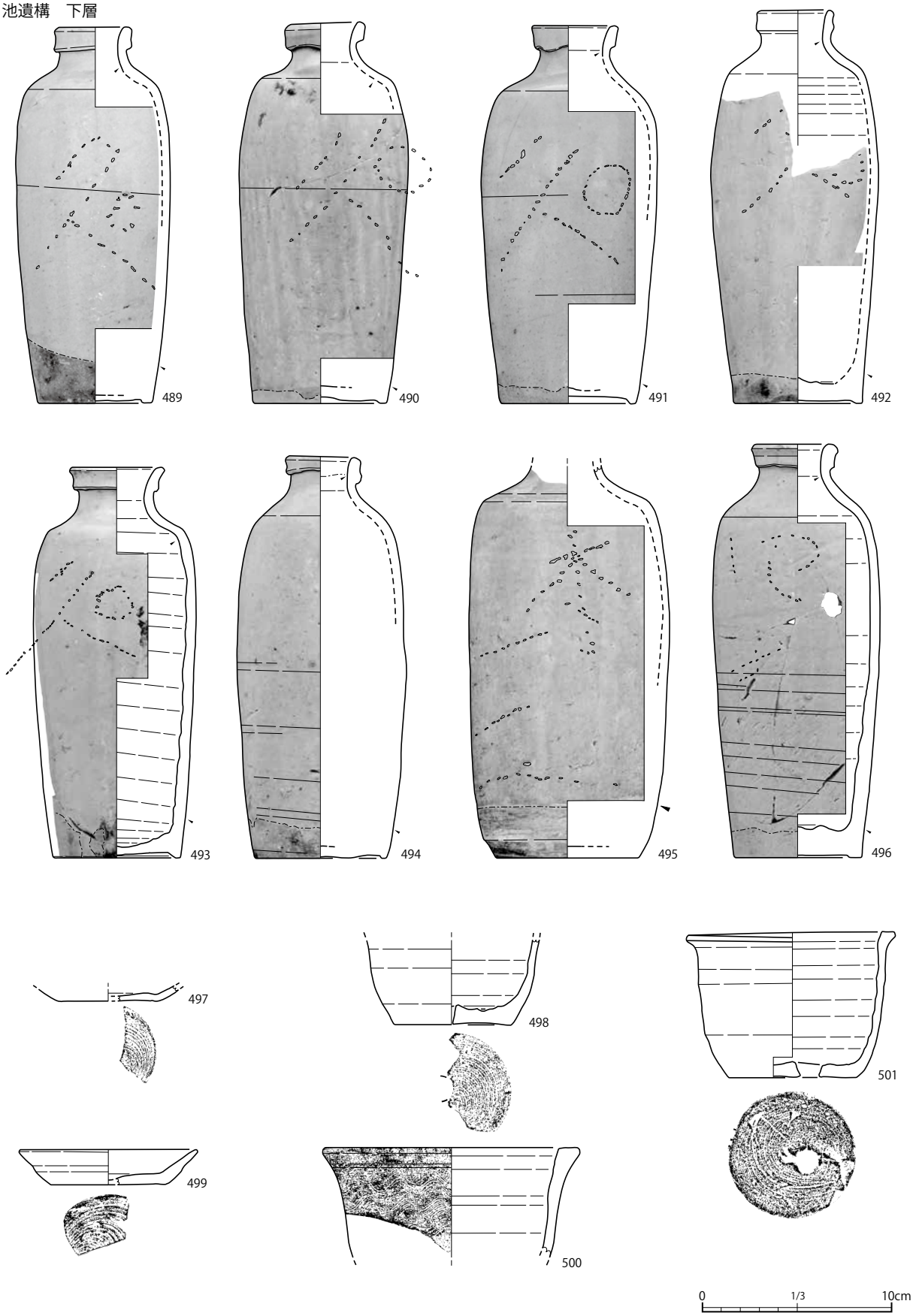






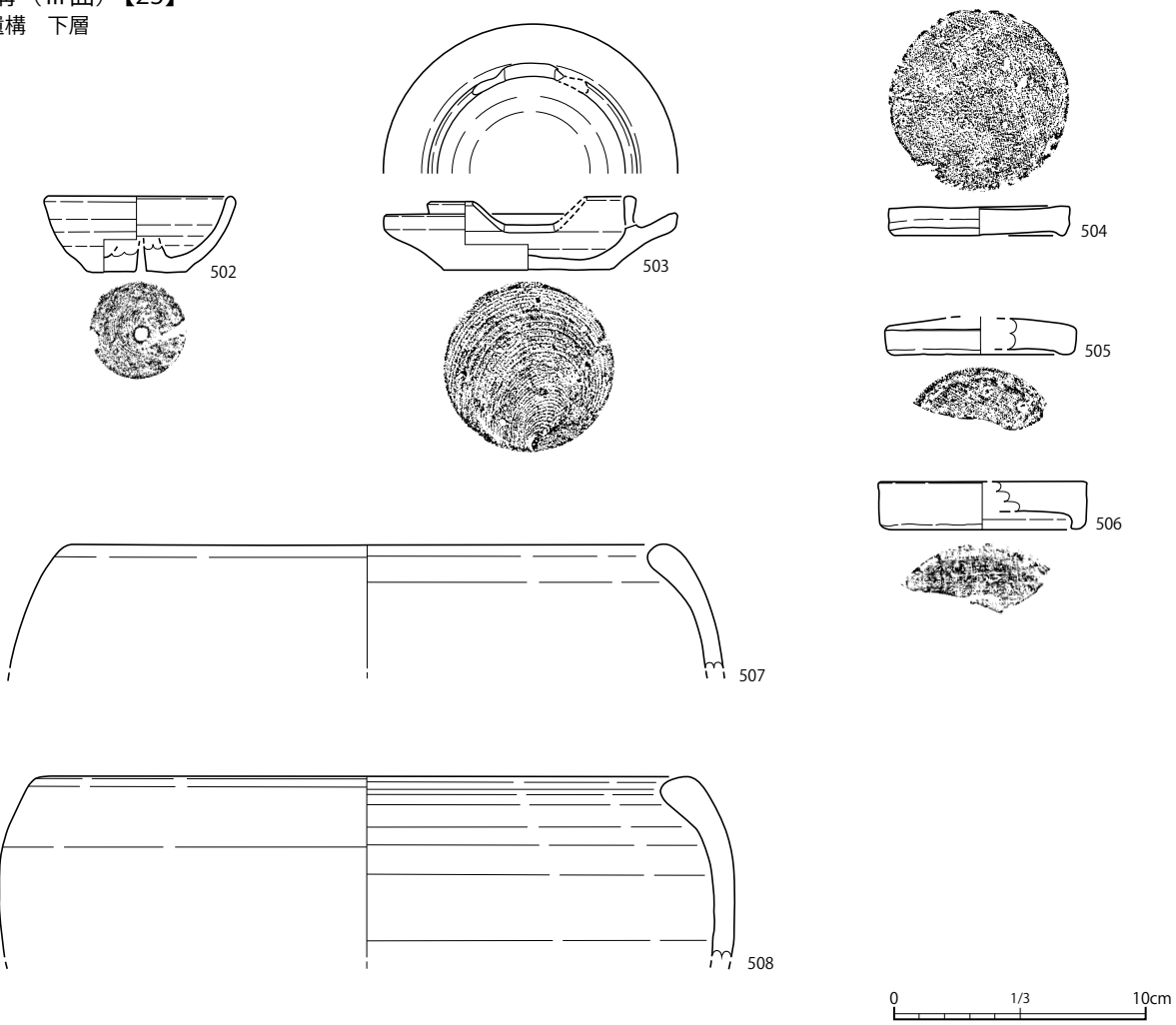
第 117 図　陶磁器・土器（41）

遺構（Ⅲ面）【22】
池遺構　下層



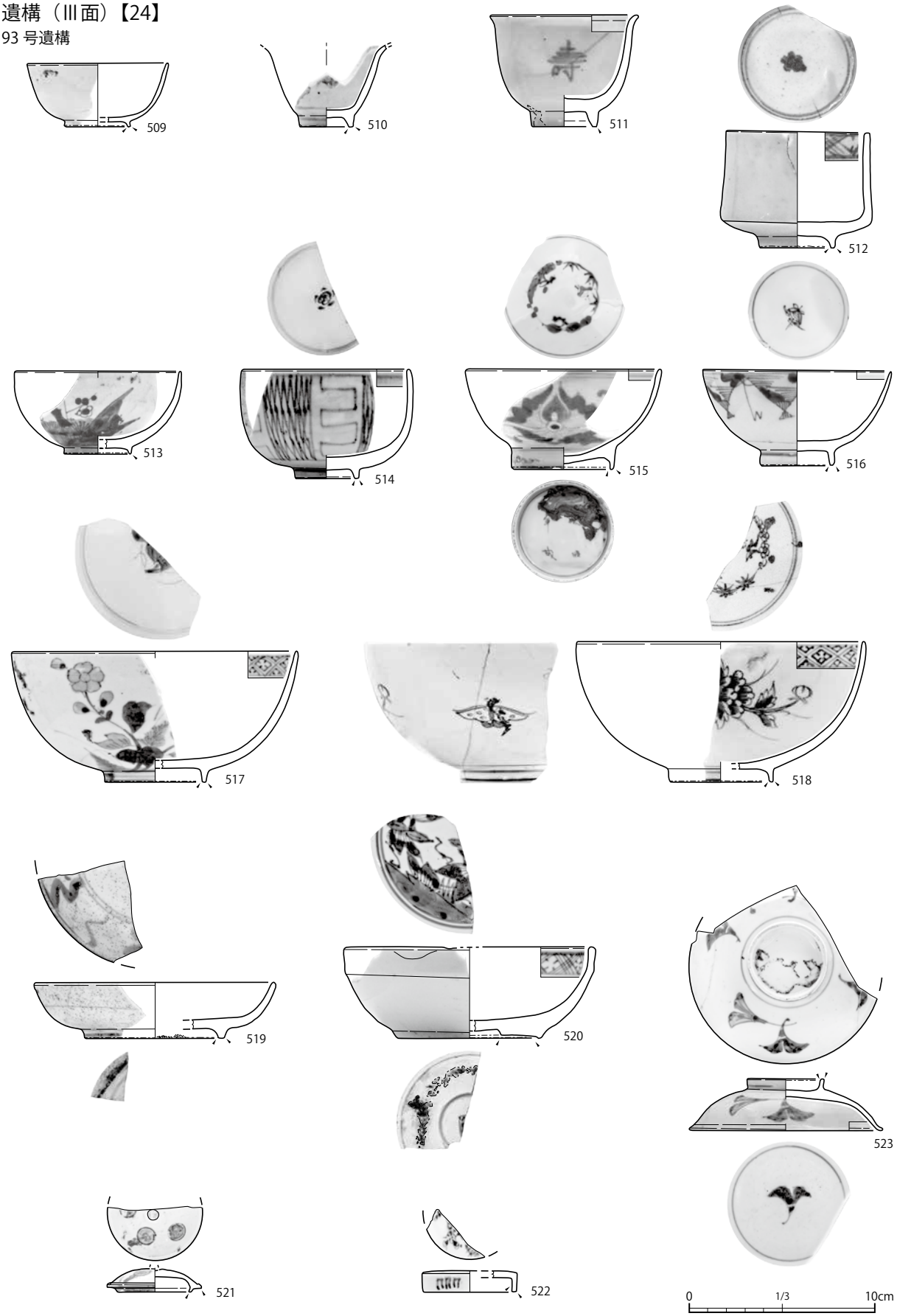
第 118 図　陶磁器・土器（42）

遺構（Ⅲ面）【23】
池遺構　下層



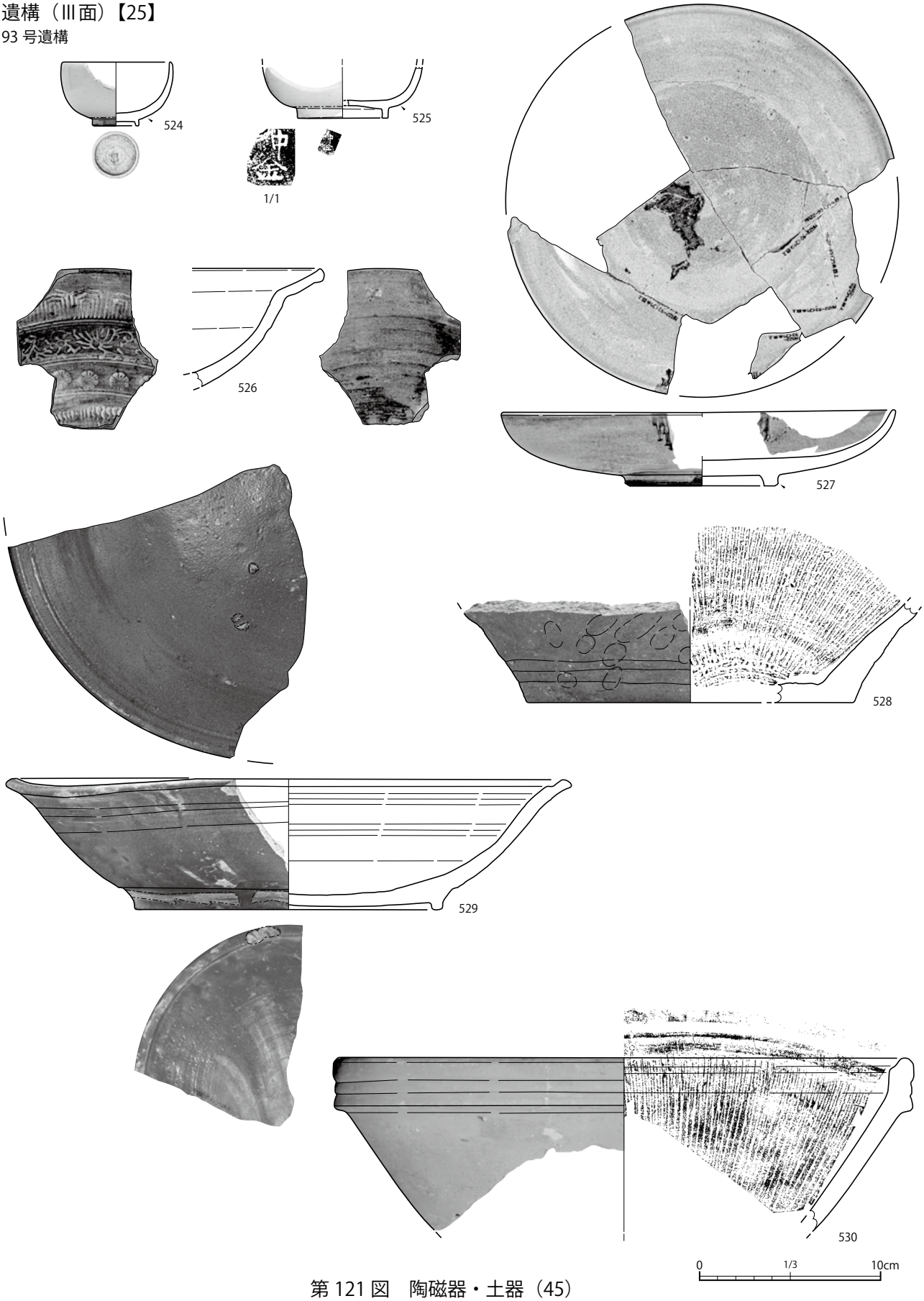
第 119 図　陶磁器・土器（43）

遺構（Ⅲ面）【24】
93 号遺構



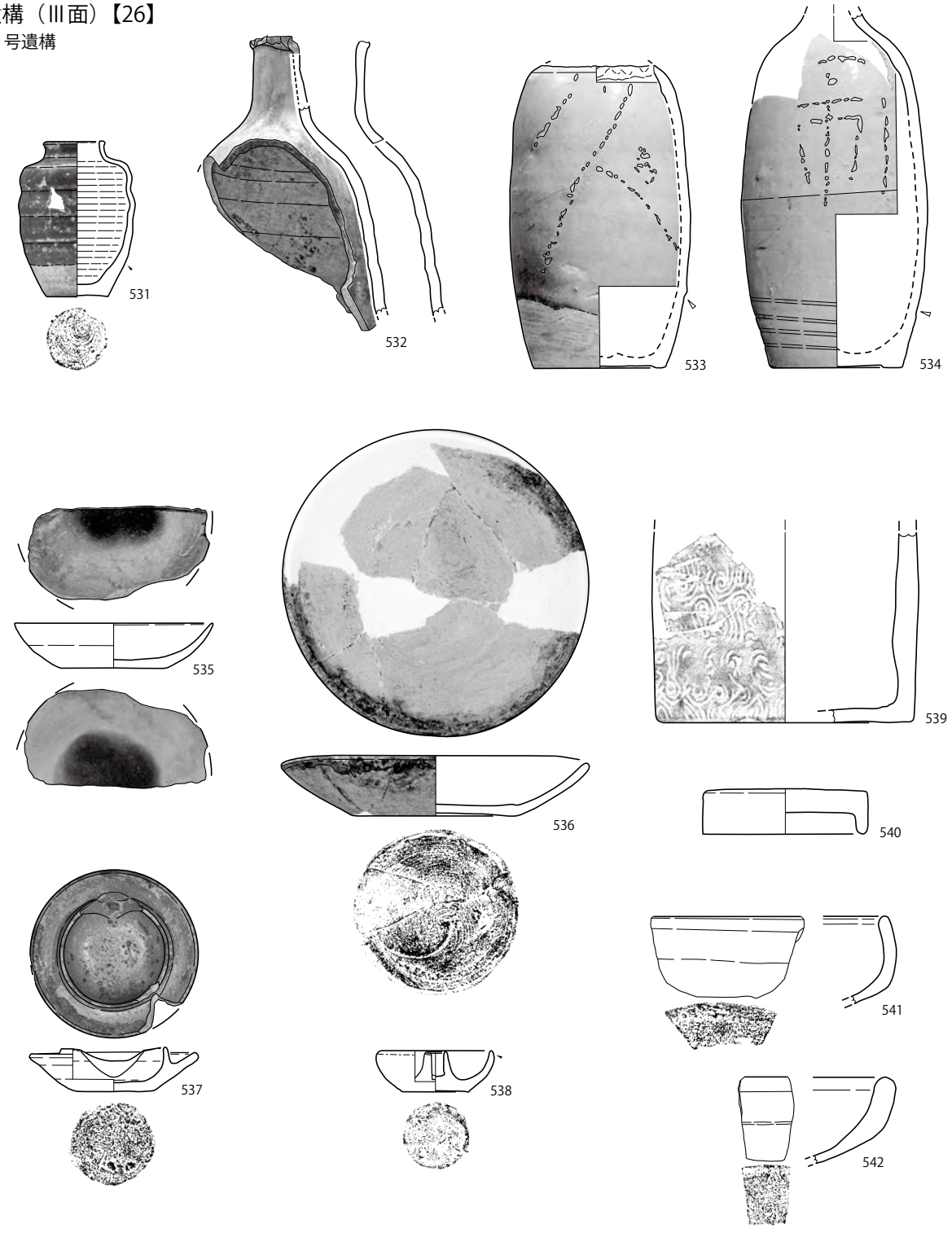
第 120 図　陶磁器・土器（44）

遺構（Ⅲ面）【25】
93 号遺構



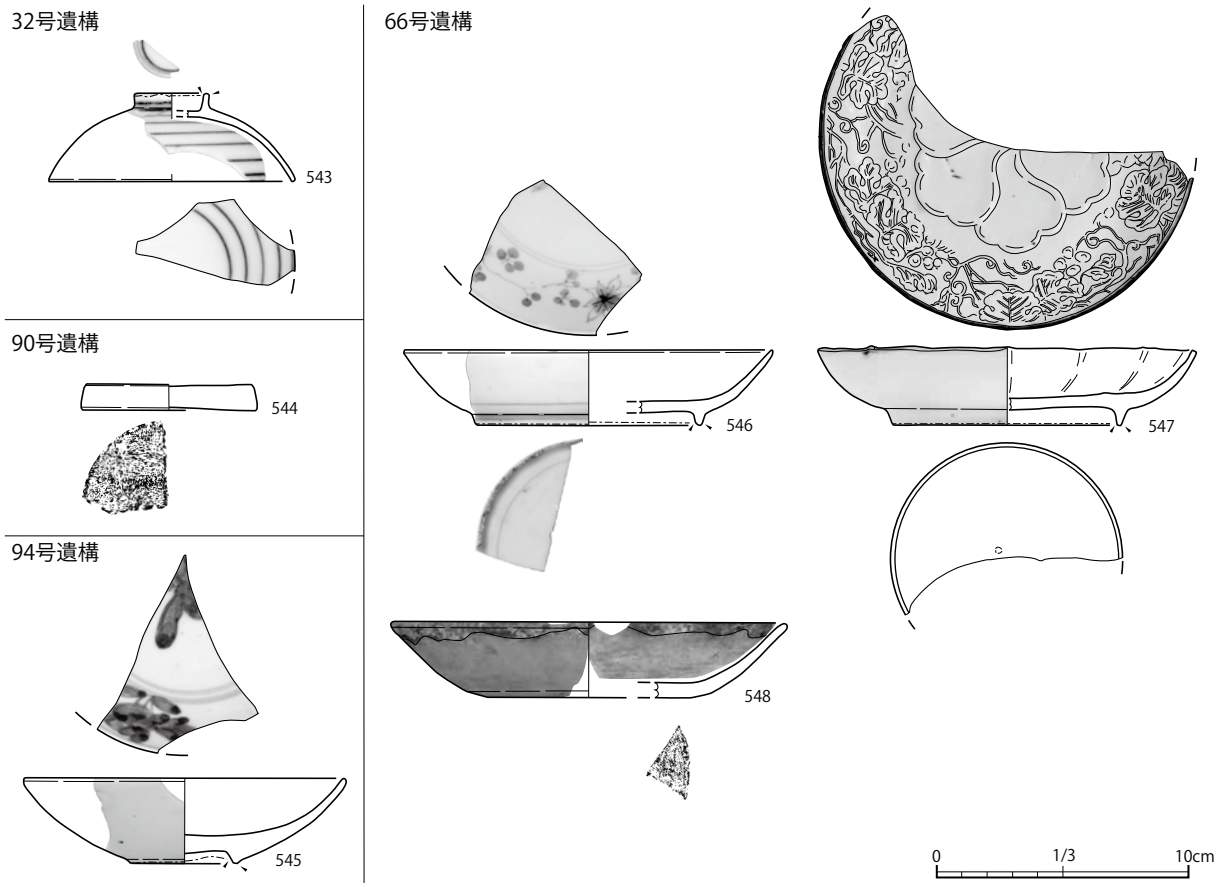
第 121 図　陶磁器・土器（45）

遺構（Ⅲ面）【26】
93 号遺構



第 122 図　陶磁器・土器（46）

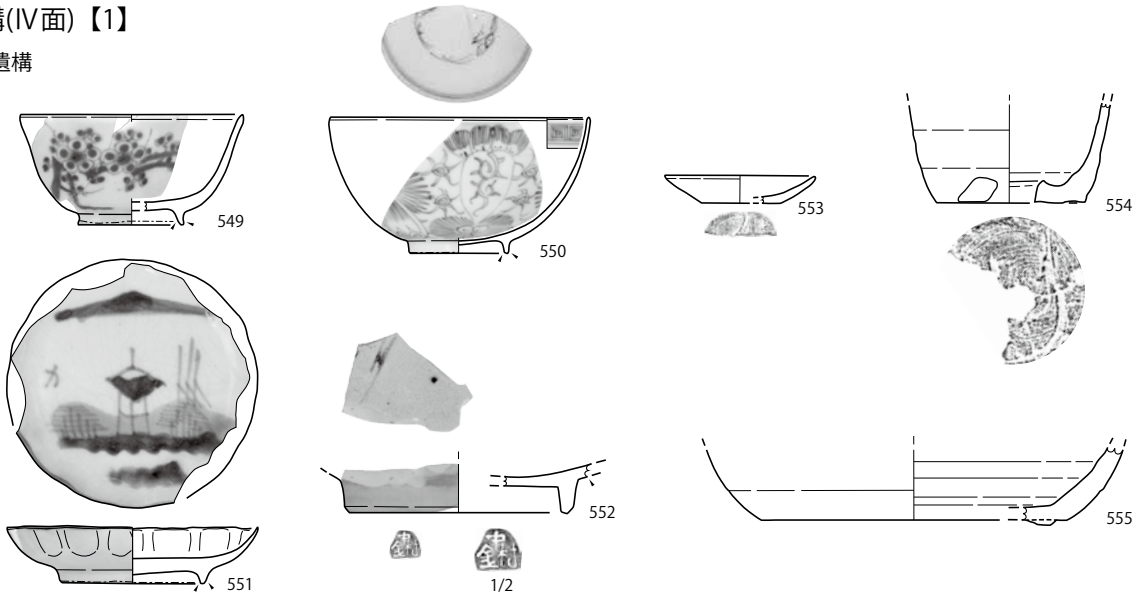
遺構(Ⅲ～Ⅳ面)



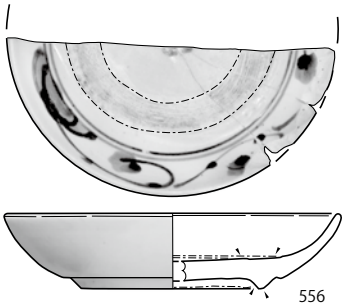
第 123 図　陶磁器・土器（47）

遺構(Ⅳ面)【1】

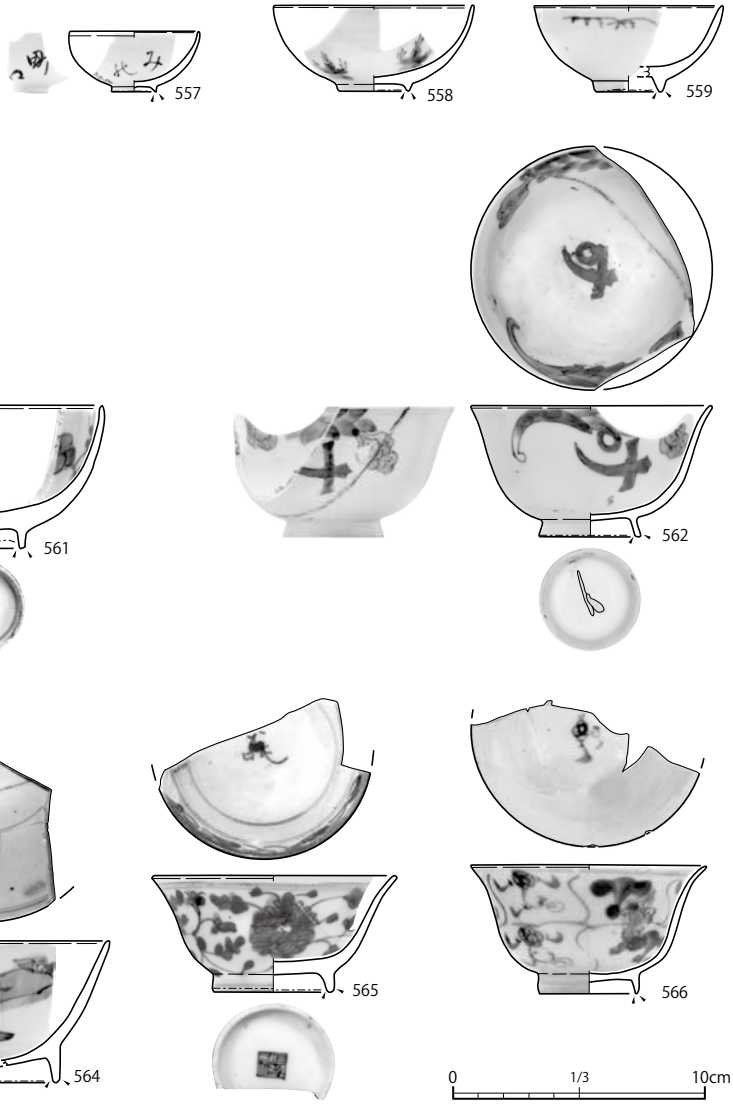
2号遺構



3号遺構



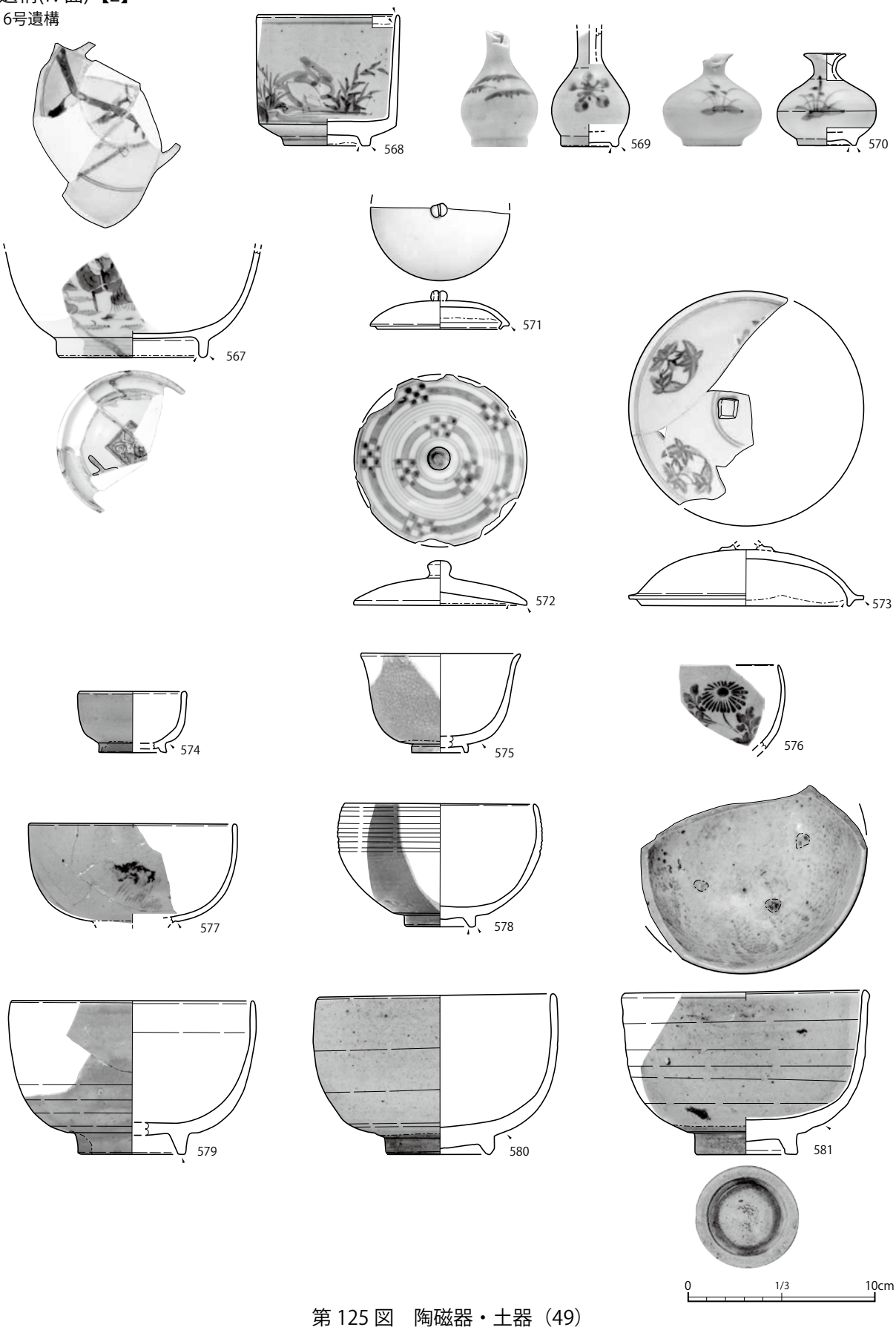
6号遺構



第 124 図　陶磁器・土器（48）

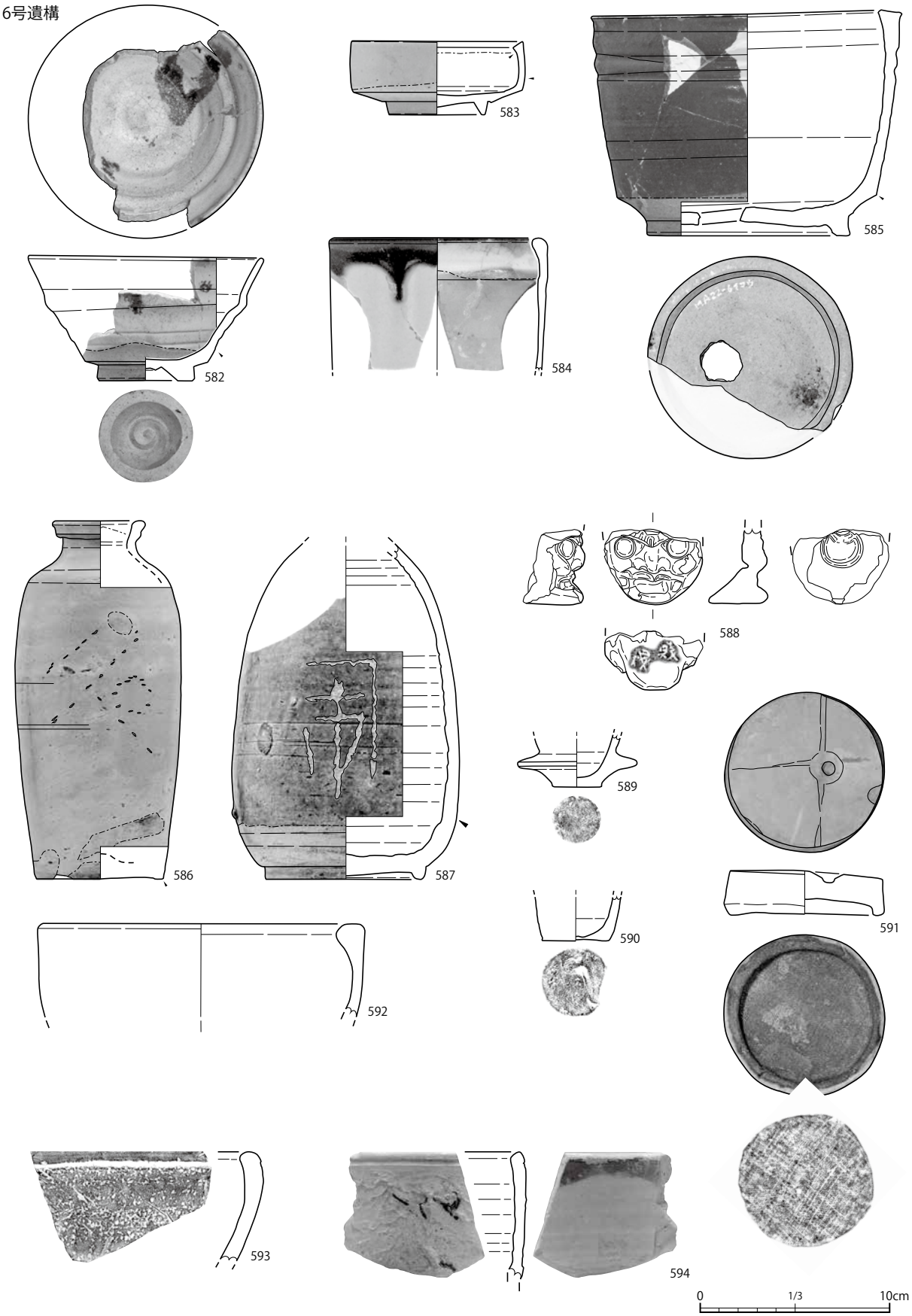
遺構(Ⅳ面)【2】

6号遺構



第 125 図　陶磁器・土器（49）

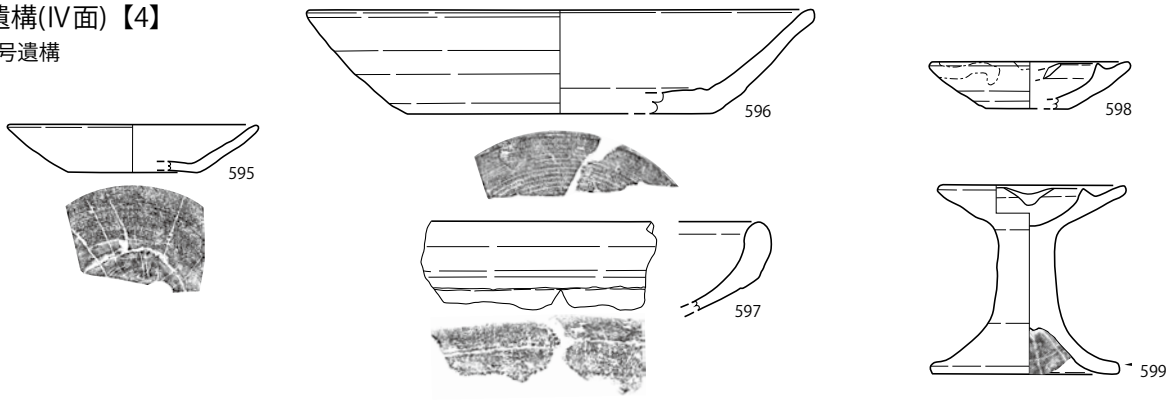
遺構(Ⅳ面)【3】
6号遺構



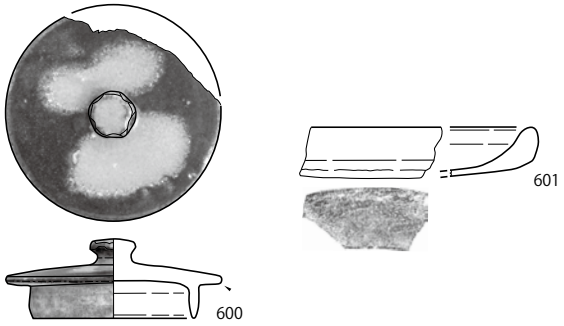
第 126 図　陶磁器・土器（50）

遺構(Ⅳ面)【4】

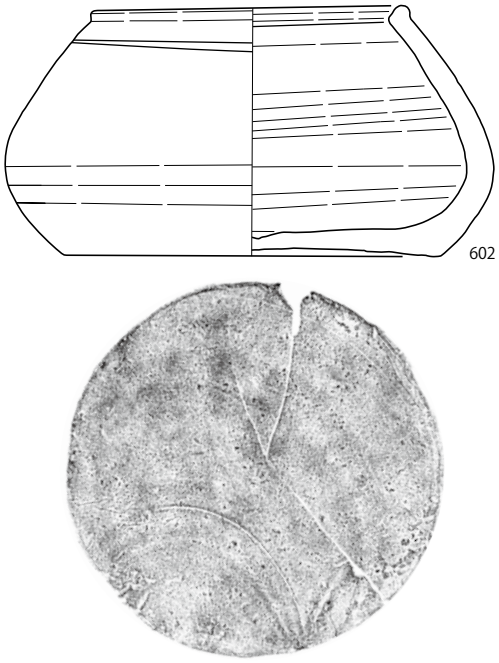
6号遺構



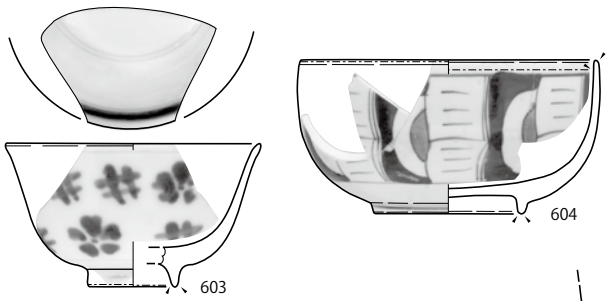
9号遺構

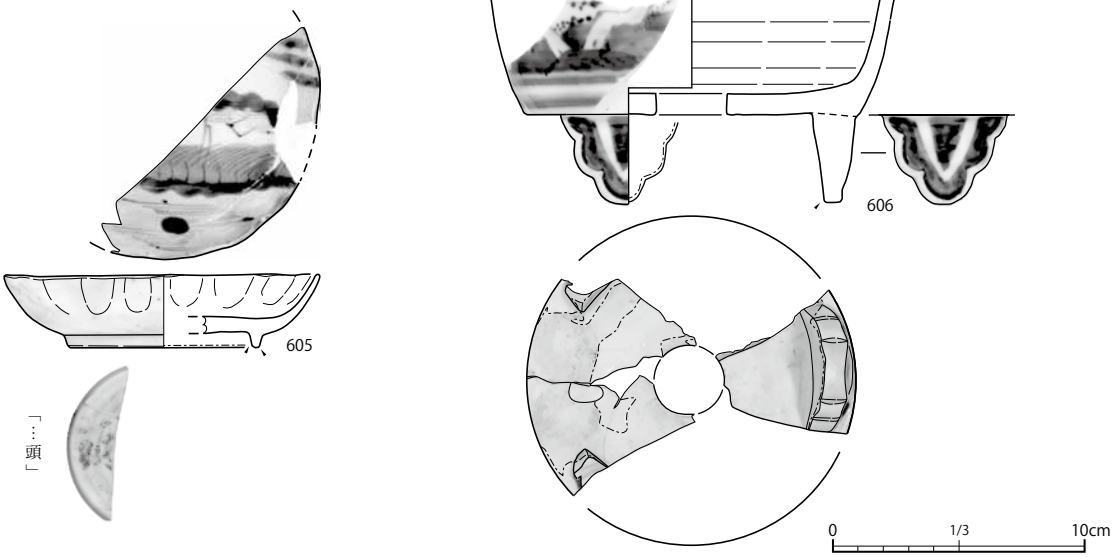


12号遺構



17号遺構

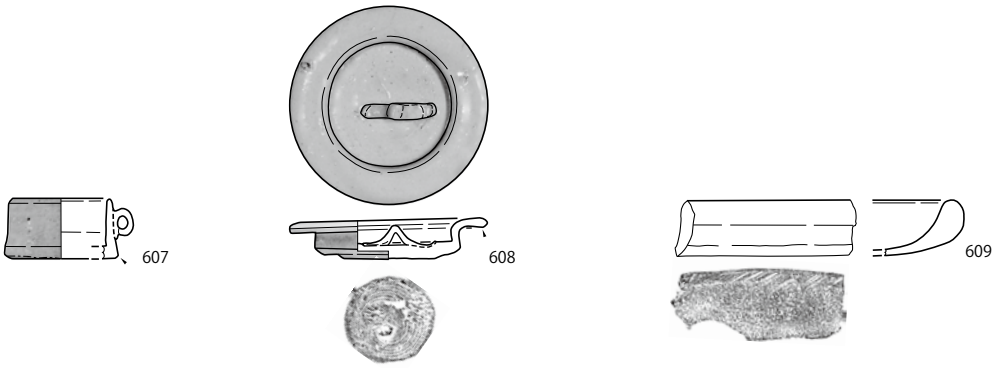




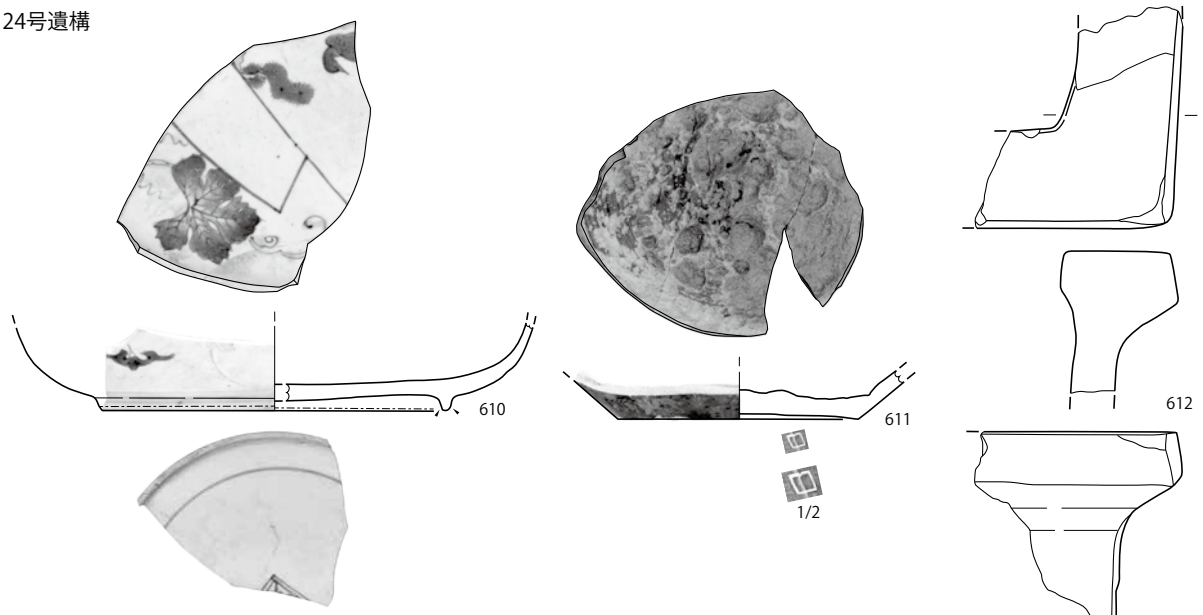
第 127 図　陶磁器・土器（51）

遺構(Ⅳ面)【5】

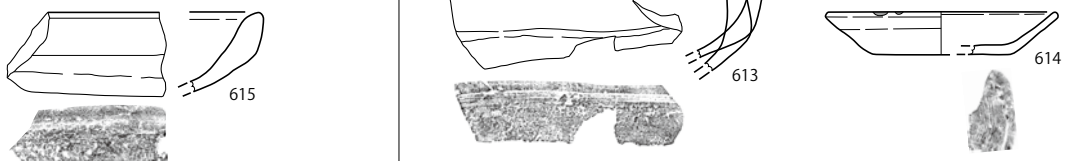
17号遺構



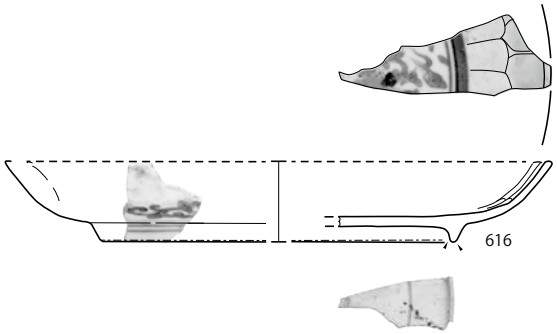
24号遺構

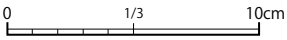


25号遺構



33号遺構

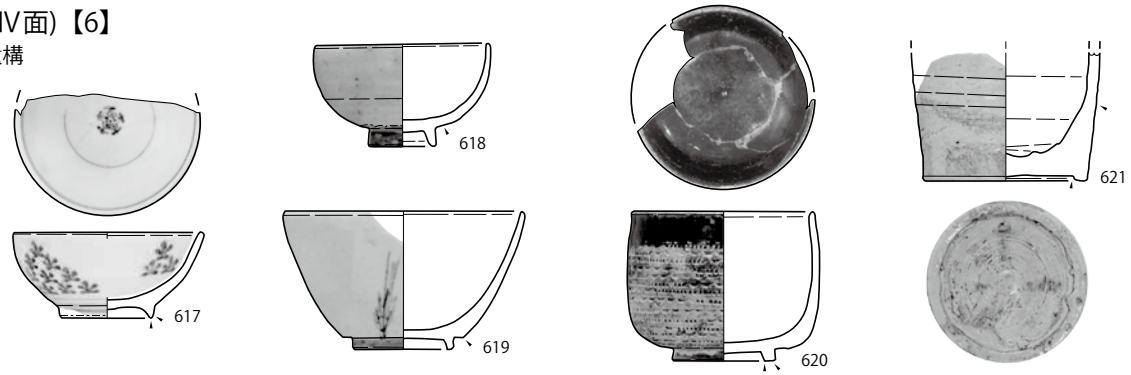




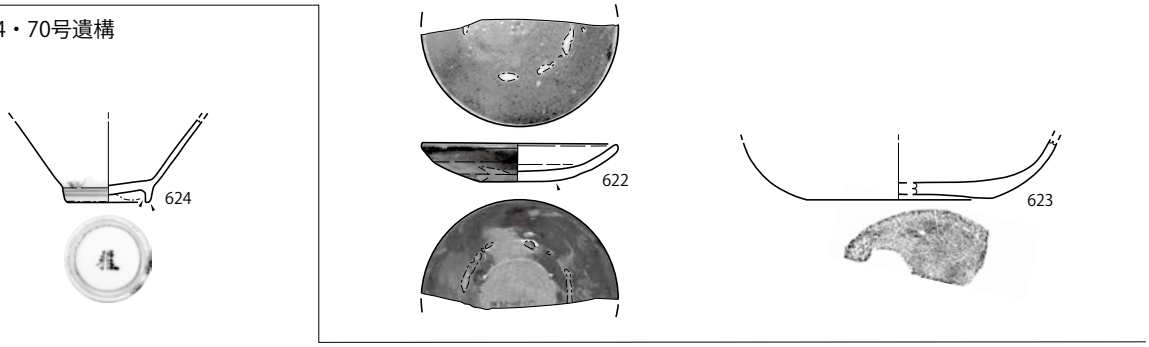
第 128 図　陶磁器・土器（52）

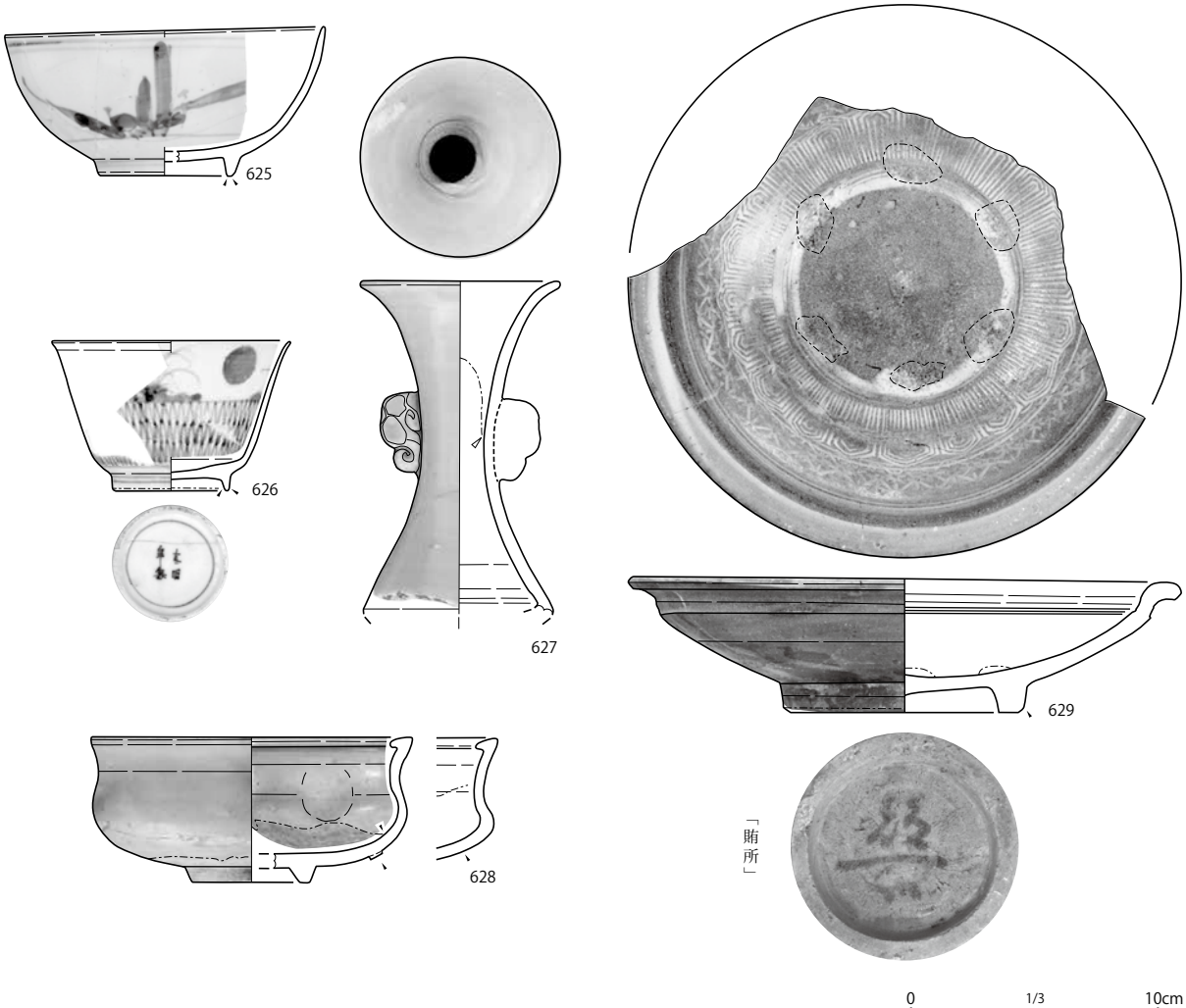
遺構(Ⅳ面)【6】

68号遺構



69・74・70号遺構

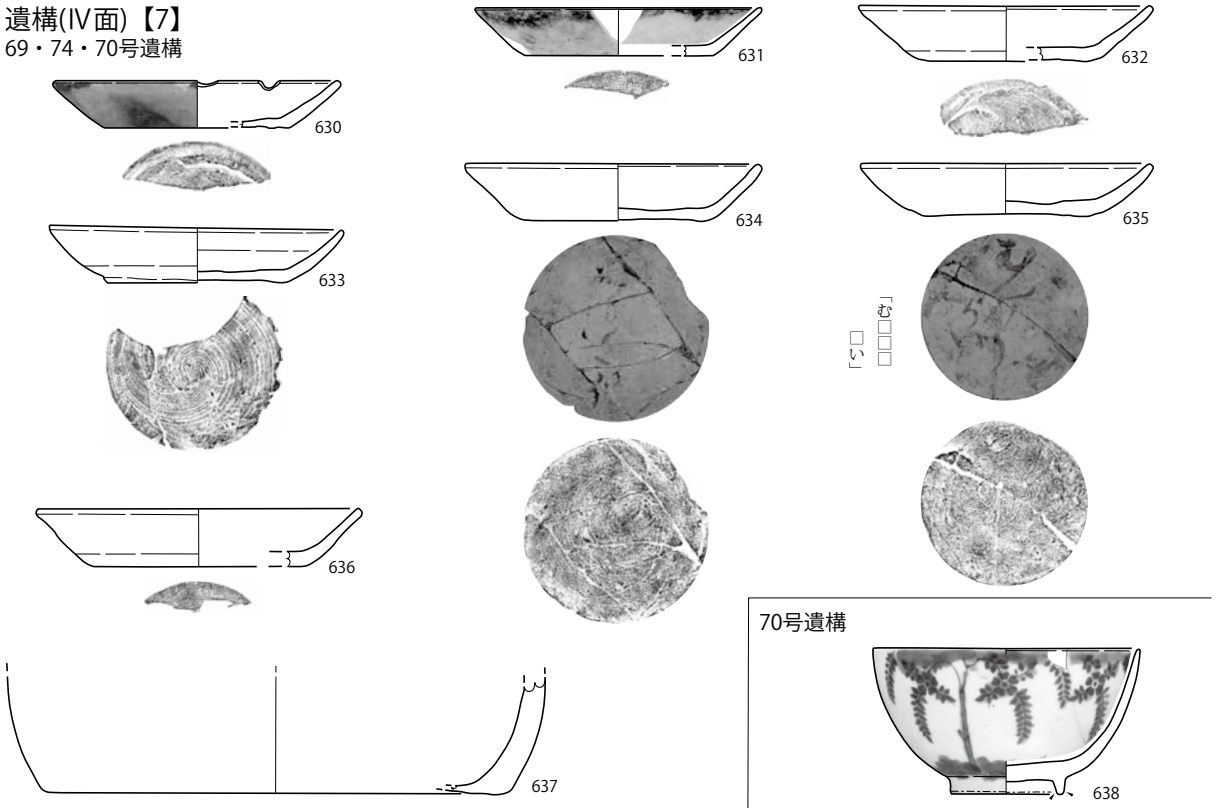




0 1/3 10cm

第 129 図　陶磁器・土器（53）

遺構(Ⅳ面)【7】
69・74・70号遺構



第 130 図　陶磁器・土器（54）

第 37 表　陶磁器・土器 観察表

挿図番号	出土地点	注記	素材	器種	遺存部位	法量（cm） a	b	c	d	重さ（g）	観察内容	産地	時期
77-1	第1層	Ⅰ区旧校舎	磁器	小杯 酒杯ヵ	口～底	3.9	1.8	2.6	—	10.9	コバルト上絵染付　外:型紙刷卍文	—	近代
77-2	第1層	Ⅱ区表土	磁器	小杯	口～底	△5.2	△1.5	2.3	—	12.8	染付　外:秋草文	肥前	18c中葉～
77-3	第1層	Ⅱ区表土	磁器	小杯 厚手底	口～底	△7.6	2.6	2.9	—	37.6	染付　外:コンニャク印判蝶文	肥前	18c中葉～後葉
77-4	第1層	Ⅱ区表土	磁器	小杯 酒杯	口～底	△5.2	△2.3	2.9	—	11.1	コバルト染付　外:石版転写若松文	—	近代（20c2ndQ～）
77-5	第1層	Ⅰ区旧校舎	磁器	小碗	口～底	△7.9	△3.7	3.8	—	22.7	染付　外:線描宝珠文	瀬戸美濃	18c末～19c前葉
77-6	第1層	Ⅱ区表土	磁器	小碗 端反	口～底	6.7	3.2	4.4	—	32.6	染付　外:草花文	瀬戸美濃	幕末～明治初頭
77-7	第1層	Ⅱ区表土	磁器	小杯	ほぼ完	6.9	2.6	2.7	—	28.1	コバルト染付　外:松葉梅花文　内:杉枝短冊文 口縁端:太圏線	—	近代（19c4thQ）
77-8	第1層	Ⅱ区表土	磁器	小碗 端反	完	6.7	2.7	4.3	—	66.0	染付　外:樹木文ヵ　内:口縁圏線、見込圏線区画草花文ヵ	関西	幕末～明治初頭
77-9	第1層	Ⅱ区表土	磁器	小碗 端反	ほぼ完	6.7	3.1	4.4	—	56.4	コバルト染付　内外:口縁圏線、草花文	—	幕末～明治初頭
77-10	第1層	シトレ2	磁器	小碗	口～底	6.9	3.2	3.6	—	31.3	染付　外:区画花唐草文　内:見込二重圏線区画文様有	中国	18c末～
77-11	第1層	Ⅰ区旧校舎	磁器	小碗	口～底	△7.5	3	3.7	—	33.3	クロム青磁　高:兜巾ケズリ	—	近代（19c4thQ～20c1stQ）
77-12	第1層	Ⅱ区表土	磁器	小碗 端反	口～底	△7.7	3.4	4.2	—	31.9	白磁	—	近代
77-13	第1層	シトレ2	磁器	小碗 丸	口～底	△8.6	△3.9	4.5	—	26.7	色上絵　外:草花文　内:口縁楕円繋帯文	—	近代
77-14	第1層	Ⅰ区旧校舎	磁器	碗 腰張	口～底	△9.3	△4.1	5.4	—	29.2	白磁　外:上色絵唐草文	肥前	17c後葉
77-15	第1層	Ⅰ区表土	磁器	碗 丸	口～底	△9.8	△4.1	5	—	30.5	染付　外:松竹梅文	肥前	18c中葉～後葉
77-16	第1層	Ⅲ区旧校舎	磁器	碗 腰張	口～底	△9.9	△5.5	6.3	—	28.8	染付　外:文様有	肥前	17c中葉
77-17	第1層	Ⅰ区旧校舎	磁器	碗 端反	口～底	△9.0	△3.6	4.7	—	48.3	染付　外:草花文　内:口縁帯圏線、見込圏線区画草花文	瀬戸美濃	19c前葉
77-18	第1層	Ⅱ区表土	磁器	碗 端反	口～底	△9.6	4.6	4.6	—	69.1	染付　内外:区画牡丹唐草文	瀬戸美濃	19c前葉
77-19	第1層	Ⅰ区旧校舎	磁器	碗 端反	口～底	9.4	3.8	5.2	—	39.3	染付　外:梅花文　内:口縁帯圏線、見込二重圏線区画文様有	瀬戸美濃	19c前葉
77-20	第1層	Ⅱ区表土	磁器	碗 端反	口～底	△9.6	△4.3	5.2	—	26.6	染付　外:花唐草文　内:口縁帯圏線、見込二重圏線区画	瀬戸美濃	19c前葉
77-21	第1層	Ⅱ区表土	磁器	碗 端反	口～底	△9.6	△4.1	5.3	—	26.6	染付　外:草花文ヵ　内:口縁帯圏線	瀬戸美濃	19c前葉
77-22	第1層	Ⅱ区表土	磁器	碗 端反	口～底	△11.4	△4.8	5.8	—	22.4	染付　外:山水楼閣文ヵ　内:口縁雲繋文帯圏線、見込二重圏線区画	瀬戸美濃	19c前葉
77-23	第1層	Ⅱ区表土	磁器	碗 広東	口～底	△11.1	6.2	6.1	—	67.9	染付　外:藁束文ヵ　内:口縁二重圏線、見込圏線区画飛鳥文	肥前	18c末～19c初頭
78-24	第1層	Ⅱ区表土	磁器	飯碗	完	9.8	3.2	4.3	—	103.4	コバルト染付　外:区画花唐草文　口縁端:太圏線 高:異体字銘有	—	近代（19c4thQ）
78-25	第1層	Ⅱ区表土	磁器	飯碗	ほぼ完	△10.8	△3.5	4.1	—	88.3	コバルト染付　外:型紙刷八角窓松竹梅文　内:飛鶴亀甲文　口縁端:太圏線　内面に付着物有	—	近代（19c4thQ）
78-26	第1層	Ⅱ区表土	磁器	飯碗	口～底	△12.0	△4.7	5	—	76.0	コバルト染付　外:木賊文　口縁端:太圏線　高:銘有	—	近代（19c4thQ）
78-27	第1層	Ⅱ区表土	磁器	飯碗	完	11	3.8	4.9	—	140.7	クロム青磁コバルト染付　外:「木蓮花蓮種誰知水陸分」　内:竹籠枇杷実文、「金丹九成」　高:異体字銘有	—	近代（19c4thQ）
78-28	第1層	Ⅱ区表土	磁器	飯碗	口～底	△11.4	△3.9	5.2	—	24.5	コバルト染付 外:型紙刷菊花散文　内:口縁瓔珞繋文	—	近代（19c4thQ）
78-29	第1層	Ⅱ区表土	磁器	飯碗	口～底	△10.8	△4.0	4.5	—	44.3	コバルト染付　外:木賊文　口縁端:太圏線	—	近代（19c4thQ）
78-30	第1層	Ⅱ区表土	磁器	湯呑碗 筒形	完	6	4	5.4	—	103.6	コバルト染付　外:微塵唐草文　内:口縁雷文繋文	—	近代（19c4thQ～）
78-31	第1層	Ⅱ区表土	磁器	湯呑碗 筒形	完	5.1	3.3	6.1	—	95.8	コバルト染付　外:型紙刷牡丹唐草文　内:口縁瓔珞繋文	—	近代（19c4thQ～）
78-32	第1層	Ⅱ区表土	磁器	湯呑碗 八角筒形	口～底	△6.5	3.9	7.9	—	89.0	コバルト染付　外:松原文　内:文様有　口縁端:太圏線　高:焼成後穿孔有（転用ヵ）	—	近代（20c1stQ～）
78-33	第1層	Ⅱ区表土	磁器	湯呑碗 筒形	口～底	5.7	△4.2	6.8	—	62.9	コバルト染付　内外:樹木文　高:「松□軒□」銘	—	近代（20c1stQ～）
78-34	第1層	Ⅰ区旧校舎	磁器	仏飯	口～底	△7.0	3.8	4.4	—	52.9	染付　外:柳葉文　底:無釉	肥前	18c中葉～後葉
78-35	第1層	Ⅰ区旧校舎	磁器	仏飯	ほぼ完	6.9	3.8	4.5	—	83.8	染付　外:笹文　底:無釉	肥前	18c中葉～後葉
78-36	第1層	Ⅰ区旧校舎	磁器	仏飯	口～底	△9.2	4.6	5.9	—	63.4	白磁ヵ　底:畳付のみ無釉	肥前	18c
78-37	第1層	Ⅱ区表土	磁器	小皿 腰折端反	口～底	△7.0	△4.6	1.8	—	10.7	染付　内:菊花文　外:山水文　高:「宣喜年□」銘　器表くもり（被熱ヵ）	肥前	17c末～18c前葉
78-38	第1層	Ⅰ区	磁器	小皿	口～底	△10.3	△5.5	2.2	—	18.8	染付　内:草花文ヵ	肥前	19c前葉
78-39	第1層	Ⅱ区表土	磁器	小皿	口～底	△11.4	△6.5	2.7	—	30.7	青磁　内外:施釉　高:異体字銘有、釘書「イ」（Kg37）	肥前	18c
78-40	第1層		磁器	皿	ほぼ完	9.9	5.7	1.7	—	72.7	コバルト染付　内:型紙刷花文　口縁端:太圏線	—	近代（19c4thQ～）
79-41	第1層	Ⅰ区旧校舎	磁器	皿	口～底	△12.8	△8.1	3	—	93.7	染付　内:縁帯蜘蛛巣文、見込二重圏線区画コンニャク印判五弁花　口縁端:口錆　外:如意唐草文　高:「…年製」銘	肥前	18c後葉
79-42	第1層	Ⅱ区表土	磁器	皿 輪花	口～底	△13.2	△7.3	3.7	—	78.5	染付　内:縁帯蛸唐草文、見込帯文区画環状松竹梅文、外:如意唐草文　高:蛇の目高台、「太明…」銘	肥前	18c後葉～19c前葉
79-43	第1層	Ⅱ区表土	磁器	皿 輪花	口～底	△13.8	△9.1	3.2	—	40.4	染付　内:縁帯花唐草文、見込帯文区画文様有　外:如意唐草文　高:銘有	肥前	17c末～18c中葉
79-44	第1層	Ⅲ区旧校舎	磁器	皿	腰～底	—	△11.2	▲6.0	—	29.7	染付　内:柳文　外:七宝文　高：櫛高台　器表荒れ、砕片融着、変形（被熱ヵ）	肥前（鍋島）	18c末～19c前葉
79-45	第1層	シトレ2	磁器	皿 玉縁	口～底	△14.8	△9.3	3.6	—	69.2	染付　内:縁帯扇文、見込圏線区画文様有　外:如意唐草文　高:蛇の目高台	瀬戸美濃	18c後葉～19c前葉
79-46	第1層	Ⅱ区表土	磁器	大皿	口～底	△18.5	10.6	3	—	220.6	染付　内:縁帯牡丹唐草文、見込二重圏線区画牡丹唐草文、目痕3　外:如意牡丹唐草文　高:異体字銘有	肥前	18c末～19c前葉
79-47	第1層	Ⅱ区表土	磁器	大皿 輪花	口～底	△8.8	△10.2	3	—	86.2	染付　内:縁帯微塵唐草文、見込帯文区画環状松竹梅文　外:如意唐草文　高:「…成年製」銘	肥前	18c後葉～19c前葉
80-48	第1層	Ⅱ区表土	磁器	猪口	口～底	△10.6	△6.4	6.7	—	32.8	染付　外:草花文	肥前	18c
80-49	第1層	Ⅲ区旧校舎	磁器	小鉢 輪花	口～底	△8.7	4.7	5.8	—	99.4	染付　外:花唐草文　内:口縁草花帯文、見込二重圏線区画五弁花　高:「或化…」銘　3個体分融着（被熱ヵ）	肥前	18c後葉～19c前葉
80-50	第1層	Ⅱ区表土	磁器	鉢	口～底	△11.9	6.8	4.3	—	128.3	コバルト染付　内:口縁櫛歯帯文、見込圏線区画環状松竹梅文ヵ　外:源氏香文　高:蛇の目高台	肥前	幕末～明治初頭
80-51	第1層	Ⅱ区表土	磁器	鉢	口～底	12.7	7.3	5	—	207.1	コバルト染付　内:口縁櫛歯帯文、見込環状松竹梅文ヵ　外:源氏香文　高:蛇の目高台	肥前	幕末～明治初頭
80-52	第1層	Ⅱ区表土	磁器	鉢	口～底	△14.5	5.5	5.8	—	95.2	コバルト染付　内外:口縁圏線、銅版転写桐鳳凰文　高:「□蜂園製」銘	—	近代（19c4thQ～20c1stQ）
80-53	第1層	Ⅱ区表土	磁器	鉢	口～底	△15.9 △17.7	△6.0	5.9	—	165.4	クロム青磁・緑釉　内外:蓮葉脈文　高:渦状削り高台	—	近代
80-54	第1層	Ⅰ区	磁器	鉢	口～底	△17.7	△8.6	6	—	131.3	コバルト染付　内:口縁圏線、見込圏線区画銅版転写「…飛坊清酒/…○留彦/マル…」　高:蛇の目高台	—	近代（20c1stQ～）
81-55	第1層	Ⅱ区表土	磁器	段重 角	口～底	—	—	2.8	—	49.6	コバルト染付　外:木賊文	—	近代
81-56	第1層	Ⅱ区表土	磁器	段重	口～底	△7.3	△6.6	3.1	—	30.1	染付　外:蛸唐草文	肥前	18c後葉

挿図番号	出土地点	注記	素材	器種	遺存部位	法量（cm） a	b	c	d	重さ（g）	観察内容	産地	時期
81-57	第1層	Ⅰ区旧校舎	磁器	段重	口～底	△11.9	△8.2	5.9	—	154.2	染付　外:牡丹麻葉文	肥前	18c末～19c前葉
81-58	第1層	Ⅱ区表土	磁器	段重 飯台形カ	口～底	△13.4	△13.8	6.1	—	62.3	染付　外:草文	肥前	18c後葉
81-59	第1層	Ⅱ区表土	磁器	合子カ	完	5.5	3.5	3.5	6.4	49.9	コバルト染付　外:銅版転写丸文	—	近代
81-60	第1層	Ⅱ区表土	磁器	碗蓋	口～天	8.7	3.1	2.4	—	35.8	染付　外:梅花氷裂文変わり窓草花文	関西	18c末～19c前葉
81-61	第1層	Ⅱ区表土	磁器	碗蓋	ほぼ完	9.4	3.8	2.2	—	61.6	染付　外:草花文　内:口縁桝形繋帯文、見込帯文区画環状松竹梅文	肥前	18c末～19c前葉
81-62	第1層	Ⅱ区表土	磁器	碗蓋 広東	口～天	△9.9	△5.4	2.6	—	29.8	染付　外:草花文　高:草花文　内:口縁花唐草繋文、見込文様有	肥前	18c末～19c初頭
81-63	第1層	Ⅱ区表土	磁器	碗蓋 広東	口～天	△10.3	6	2.4	—	32.3	染付　外:草花文　高:草花文　内:口縁二重圏線、見込圏線区画五弁花	肥前	18c末～19c初頭
81-64	第1層	Ⅰ区	磁器	段重蓋	ほぼ完	6.7	—	2	8	46.5	染付　外:四割区画花唐草文	肥前	18c末～19c前葉
81-65	第1層	Ⅰ区旧校舎	磁器	蓋物蓋	口～天	△7.1	3	2.5	△8.2	37.0	染付　外:菊花文	肥前	18c後葉～
81-66	第1層	Ⅱ区表土	磁器	段重蓋	口～天	△10.0	—	2.6	△11.4	77.5	コバルト染付　型紙刷放射区画吉祥文字文	—	近代（19c4thQ～）
81-67	第1層	Ⅰ区	磁器	急須蓋	ほぼ完	4.9	1	1.7	—	12.6	コバルト染付褐色釉　外:草花文　通気孔有	—	近代
81-68	第1層	Ⅱ区表土	磁器	急須蓋	ほぼ完	6.7	1.3	2.1	—	20.9	染付　外:木葉文　通気孔有	—	近代
81-69	第1層	Ⅱ区表土	磁器	急須蓋	ほぼ完	6.9	1.4	2.2	—	30.0	染付　外:草花文カ　通気孔有	—	近代（19c4thQ～）
81-70	第1層	Ⅱ区表土	磁器	岩絵具 容器	完	1.8	2	0.6	—	6.0	白磁	—	近代
81-71	第1層	Ⅰ区旧校舎	磁器	筆洗い	口～底	△10.3	△10.4	3.6	—	31.0	白磁	—	近代
82-72	第1層	Ⅰ区旧校舎	陶器	碗 灰釉丸	口～底	△9.3	△5.1	6	—	62.3	内～胴外:灰釉、貫入　高:無釉、貼付高台	瀬戸美濃	18c後葉
82-73	第1層	Ⅰ区旧校舎	陶器	碗 灰釉丸	口～腰	△9.8	—	▲5.9	—	64.4	内～胴外:灰釉、染付文様有　高：無釉	瀬戸美濃	18c後葉
82-74	第1層	Ⅰ区旧校舎	陶器	碗 腰張	口～底	△9.8	△4.9	7.2	—	104.4	内外:長石釉　外:黒色釉草花文カ　高:畳付に砂付着	肥前	17c末～18c前葉
82-75	第1層	Ⅱ区表土	陶器 ［硬質］	碗 集団食器	口～腰	△10.8	—	▲4.7	—	56.5	クロム緑釉　外:口縁二重圏線	—	近代（20c2ndQ）
82-76	第1層	Ⅰ区旧校舎	陶器	碗 せんじ	口～底	△10.6	△4.2	4.7	—	49.8	内～胴外:灰釉、鉄絵雲形文　高:無釉	京・信楽	18c
82-77	第1層	Ⅰ区表土	陶器	皿 灯火皿	口～底	△6.6	△2.9	1.5	—	14.0	内:鉄釉、重焼痕有　外:釉拭取り	瀬戸美濃	19c前葉
82-78	第1層	Ⅰ区旧校舎	陶器	皿	口～底	12.9	6.8	3.2	—	119.0	内外:灰釉鉄絵型紙刷花文カ　高:畳付のみ無釉	瀬戸美濃	17c後葉～18c前葉
82-79	第1層	Ⅰ区旧校舎	陶器	皿	底	—	7.8	▲2.1	—	108.8	内:灰釉、蛇の目釉剥　高:墨書「九十／以奴」（B14）	瀬戸美濃	18c末～19c前葉
82-80	第1層	Ⅱ区表土	陶器	捏鉢カ	腰～底	—	△14.0	▲6.5	—	180.1	内・胴外:灰釉、見込胎土目痕有　高:無釉、墨書「…二ツ之内」（B6）	瀬戸美濃	18c後葉～19c中葉
82-81	第1層	Ⅱ区表土	陶器	大鉢 手水鉢カ	腰～底	—	△20.2	▲5.0	—	417.2	内外:灰釉、鉄釉掛流し、見込胎土目 有　腰～底:無釉　高:墨書「…出来」（B18 ）	瀬戸美濃	18c末～19c前葉
82-82	第1層	Ⅱ区表土	陶器	灰落とし	底	—	8.5	—	—	100.7	外:白色化粧土　内:無釉　底:無釉、スス付着、墨書「火キ」（B5）	京	18c末～19c前葉
82-83	第1層	Ⅰ区旧校舎	陶器	鳥の餌入れ	ほぼ完	5.3	4.8	2	—	34.4	内～体外:灰釉　底:無釉	瀬戸美濃	18c前葉～中葉
82-84	第1層	Ⅰ区旧校舎	陶器 ［炻器］	盤カ	口～底	△12.5	△12.9	3.5	—	61.8	内～胴外:鉄釉　高:無釉、刻印有（Ko2）	志戸呂	—
82-85	第1層	Ⅰ区旧校舎	陶器	壺 双耳壺	ほぼ完	6.4	6.4	9.1	11.5	397.9	口縁内～胴外:飴釉　腰～底：無釉　底:タール付着	瀬戸美濃	18c
83-86	第1層	Ⅲ区	陶器	徳利	完	3.7	5.6	19.1	8.4	524.1	口縁内～底外:飴釉、釘書「市」（Kg103）　腰～底:釉拭取り　底:重焼痕有、スス付着	美濃（高田）	18c中葉
83-87	第1層	Ⅲ区表土	陶器	徳利	完	3.4	6.6	19.6	8	518.4	口縁内～胴外:灰釉、釘書「〆に清」（Kg104 ）　腰～底:無釉	美濃（高田）	19c中葉
83-88	第1層	Ⅱ区	陶器	徳利	完	4.5	6.6	19.6	8.7	524.2	口縁内～胴外:灰釉、釘書「七　々　ち　し」（Kg101）　腰～底:無釉	美濃（高田）	19c前葉
83-89	第1層	Ⅱ区	陶器	徳利	完	4.2	6.9	20.4	8.2	544.8	口縁内～胴外:灰釉、釘書「四方」（Kg100）　腰～底:無釉　歪みあり	美濃（高田）	19c前葉
83-90	第1層	Ⅱ区表土	陶器	徳利	完	3.2	7.3	20.2	8.8	568.2	口縁内～胴外:灰釉、釘書有（Kg102）　腰～底:無釉　底:タール付着	美濃（高田）	19c前葉
83-91	第1層	Ⅰ区旧校舎	陶器	徳利	ほぼ完	2.4	△9.1	22.5	△11.9	351.4	口縁内～底外:飴釉、釘書「久●」ヵ（Kg7）　腰～底:釉拭取り	美濃（高田）	17c末
83-92	第1層	Ⅱ区表土	陶器	徳利	ほぼ完	3.4	10	23.5	13.7	982.0	口縁内～底外:飴釉、釘書「久〇」ヵ（Kg99）　肩:胎土目痕3　腰～底:釉拭取り	美濃（高田）	19c前葉～中葉
83-93	第1層	Ⅰ区旧校舎	陶器	土瓶蓋	完	5.3	1.8	3.6	7	44.9	外:白泥鉄絵緑釉文　内:無釉	—	19c中葉～
83-94	第1層	Ⅰ区旧校舎	陶器	蓋	口～天	9.6	—	▲2.0	11.7	63.0	外:鉄釉　内:無釉	瀬戸美濃	18c
83-95	第1層	Ⅱ区表土	陶器	土瓶蓋	口～天	△8.1	1.6	△3.2	△10.9	51.6	外:鉄釉　内:無釉、墨書「文化八未年／三月三日／■之」（B16 ）	—	19c前葉
83-96	第1層	Ⅰ区旧校舎	陶器	壺蓋	ほぼ完	8.8	3.5	4.2	11	136.0	外:白泥刷毛目文　内:施釉　受:無釉	肥前	17c末～18c前葉
83-97	第1層	Ⅰ区旧校舎	陶器	灯火受皿	ほぼ完	5.6	4.4	2.1	8.8	52.8	内:鉄釉　受端:タール付着　外:無釉	志戸呂	17c末～18c前葉
84-98	第1層	Ⅰ区旧校舎	土器	皿 灯火皿	口～底	△5.7	△3.0	1	—	4.2	内～体外:回転ナデ　底外：回転糸切	江戸	18c～
84-99	第1層	Ⅰ区旧校舎	土器	皿 灯火皿	口～底	△6.0	3.1	1.4	—	7.5	内～体外:回転ナデ　底外：回転糸切	江戸	18c～
84-100	第1層	Ⅰ区旧校舎	土器	皿 灯火皿	底	—	△3.9	▲0.7	—	11.8	内～体外:回転ナデ　底外:回転糸切（左）、墨書「中」カ（B26）	江戸	18c～
84-101	第1層	Ⅲ区旧校舎	土器	皿 灯火皿	口～底	△9.8	△6.0	2.1	—	11.2	内～体外:回転ナデ　底外:回転糸切	江戸	17 c後葉
84-102	第1層	NSトレ1	土器	皿 胆衣皿	口～底	△18.1	11.2	3.1	—	111.2	内～体外:回転ナデ　底外:回転糸切（左）	江戸	18c末～19c中葉
84-103	第1層	Ⅰ区旧校舎	土器	皿 胆衣皿	口～底	△19.0	△11.0	4.3	—	71.8	内～体外:回転ナデ　底外:回転糸切	江戸	18c末～19c中葉
84-104	第1層	Ⅲ区表土	土器	塩壺蓋	口～天	△8.0	—	2.2	—	67.5	下:布目圧痕	関西	18c初頭～前葉
84-105	第1層	Ⅰ区表土	土器	塩壺	胴	—	△5.0	▲5.5	—	32.2	内:布目圧痕　体外:刻印隅切角枠「…伊織」	関西	18c中葉～後葉
84-106	第1層	Ⅰ区旧校舎	土器	焙烙	口～底	—	—	▲4.8	—	62.2	内～体外:回転ナデ、中実内耳有　底外:チヂレ目	江戸	17c後葉～18c初頭
84-107	第1層	Ⅲ区表土	土器 ［施釉］	乗燭	口～底	△6.6	4.5	3.5	—	47.0	全面施釉　底外:回転糸切（左）	江戸	18c末～19c前葉
84-108	第1層	Ⅰ区旧校舎	土器	不明	不明	幅▲17.6	奥▲4.9	高▲9.0	—	556.9		—	—
85-109	第2-1・3層・第3層	35ｲｳ西	磁器	小碗	完	6.6	2.8	4.7	—	58.8	コバルト染付　外:菊文	—	近代（19c4thQ～）
85-110	第2-1・3層・第3層	35ｲｳ西	磁器	碗 丸	口～底	△9.6	△4.4	4.8	—	19.9	染付　外:文様有	肥前	18c
85-111	第2-1・3層・第3層	56ｲｳ下	磁器	碗 厚手底	口～脚	△9.8	4	5.5	—	94.3	染付　外:梅樹丸窓笹文　高:枠なし渦「福」銘	肥前	18c2ndQ
85-112	第2-1・3層・第3層	56ｲｳ下	磁器	碗 丸	口～脚	△10.0	3.8	4.9	—	75.2	染付　外:菖蒲文　内面付着物有	肥前	18c中葉～後葉
85-113	第2-1・3層・第3層	ﾓﾘ土2	磁器	碗 筒形	口～底	△6.7	3.4	5.5	—	83.2	染付　外:四割区画文　内:口縁四方襷、見込圏線区画コンニャク印判五弁花	肥前	18c中葉～後葉
85-114	第2-1・3層・第3層	ﾓﾘ土2	磁器	碗 大形丸	口～脚	△15.7	6	7.1	—	223.0	染付　外:飛鶴文　内:口縁四方襷、見込二重圏線区画環状松竹梅文	肥前	19c前葉

挿図番号	出土地点	注記	素材	器種	遺存部位	法量（cm）				重さ（g）	観察内容	産地	時期
						a	b	c	d				
85-115	第2-1・3層・第3層	ﾓﾘ土2	磁器	碗 大形丸	口～脚	△15.4	△6.1	7	—	65.3	染付　外:牡丹唐草文　内:口縁四方襷、見込圏線区画 焼継痕有	肥前	18c末～19c前葉
85-116	第2-1・3層・第3層	56ｲｺｳ下	磁器	小皿 輪花	口～底	△11.9	△6.9	3.3	—	26.3	染付　内:縁帯山水楼閣文、見込二重圏線区画　外:如意唐草文　口縁端:口錆	瀬戸美濃	18c後葉～19c前葉
85-117	第2-1・3層・第3層	ﾓﾘ土2	磁器	皿 玉縁	口～底	△13.7	△7.4	3.6	—	120.6	染付　内:縁帯鶴文、見込圏線区画コンニャク印判五弁花　外:如意唐草文　高:蛇の目高台	瀬戸美濃	18c後葉～19c前葉
85-118	第2-1・3層・第3層	56ｲｺｳ下	磁器	皿	口～底	△12.6	△7.7	3.6	—	62.5	染付　内:縁帯梅樹文、見込二重圏線区画コンニャク印判五弁花　外:如意唐草文　高:銘有	肥前	18c後葉
85-119	第2-1・3層・第3層	56ｲｺｳ下	磁器	皿 角	口～底	—	—	2.9	—	63.1	コバルト染付　内:海浜文ヵ	—	近代
85-120	第2-1・3層・第3層	35ｲｺｳ西	磁器	段重	口～底	△5.4	△5.7	1.5	—	4.7	染付　外:微塵唐草文	肥前	18c末～
85-121	第2-1・3層・第3層	ﾓﾘ土2	磁器	香炉蓋ヵ	口～天	△3.4	—	▲0.9	△4.0	6.0	外:花葉モチーフ貼付　内:無釉　器表くもり（被熱）	肥前	—
85-122	第2-1・3層・第3層	ﾓﾘ土2	磁器	小鉢 輪花	口～底	—	4.6	—	—	321.1	染付　外:牡丹唐草文　内:口縁帯文、見込二重圏線区画五弁花　高:「或化年製」銘　4個体分が融着	肥前	18c3rdQ
85-123	第2-1・3層・第3層	56ｲｺｳ下	磁器	猪口 輪花	口～底	7.3	4	5.3	—	54.6	染付　外:菊文　内:口縁四方襷、見込二重圏線区画五弁花	肥前	18c前葉
86-124	第2-1・3層・第3層	35ｲｺｳ西	磁器	急須蓋	完	6.1	1.2	1.9	—	26.9	コバルト染付　外:菊文　通気孔有	—	近代（19c4thQ～）
86-125	第2-1・3層・第3層	56ｲｺｳ下	磁器	碗蓋	口～天	△11.0	△4.0	2.3	—	16.5	コバルト染付　外:銅版転写海洋波濤文　内:口縁二重圏線	—	近代（20c1stQ～）
86-126	第2-1・3層・第3層	ﾓﾘ土2	磁器	碗蓋	口～天	△9.0	4.6	2.3	—	45.9	染付　外:区画牡丹唐草文　内:口縁二重圏線、見込圏線区画菊花文　高:異体字銘有	—	18c後葉～19c前葉
86-127	第2-1・3層・第3層	35ｲｺｳ西	陶器	碗 筒形	腰～底	—	4.2	▲1.8	—	23.2	内外:鉄釉　高:無釉、刻印「志戸呂」（Ko3）	—	18c後葉～
86-128	第2-1・3層・第3層	ﾓﾘ土2	陶器	植木鉢	口～底	△13.7	9.5	13.7	△16.3	481.6	口縁内～胴外:灰釉　高:無釉、半円形けずり1、中央穿孔	瀬戸美濃	18c末以降
86-129	第2-1・3層・第3層	ﾓﾘ土2	陶器	徳利	完	3.9	7.3	19.8	9	535.7	口縁内～胴外:灰釉、釘書Kg1「七　々　ち　□」（Kg1）　腰～底:釉拭取り　底:重焼痕	美濃（高田）	19c前葉
86-130	第2-1・3層・第3層	ﾓﾘ土2	陶器	徳利	頸～底	—	6.7	▲20.9	△9.0	452.2	内:無釉　胴外:灰釉　腰～底:無釉、重焼痕	美濃（高田）	19c初頭～前葉
86-131	第2-1・3層・第3層 ＋52号遺構	56ｲｺｳ下 52ｲｺｳ胴木下	陶器	土瓶	口～胴	△11.9	—	▲12.0	△18.1	230.4	外:輪積痕有、上半鉄釉、下半無釉、スス・タール付着	—	18c末
86-132	第2-1・3層・第3層	ﾓﾘ土2	陶器	鍋ヵ	口～底	△14.3	△8.3	8.6	16	110.6	内～胴外：灰釉、見込胎土目痕有　内下半・底外:釉拭取りヵ	瀬戸美濃	18c後葉～19c前葉
86-133	第2-1・3層・第3層	35ｲｺｳ西	陶器	灯火受皿	口～底	5.5	4	1.6	△8.2	31.0	内～口縁外:鉄釉　底外:無釉、重焼痕	瀬戸美濃	18c末～19c初頭
86-134	第2-1・3層・第3層	35ｲｺｳ西	陶器	灯火受皿	口～底	△6.5	△4.5	1.8	△10.0	14.0	内:灰釉　外:無釉	京・信楽	19c～
86-135	第2-1・3層・第3層	ﾓﾘ土2	土器［施釉］	灯火受皿 脚付	口～脚	△5.0	—	座7.1	△8.0	48.8	内～脚外:回転ナデ、透明釉　脚内：ケズリ、無釉	江戸	18c末～19c前葉
86-136	第2-1・3層・第3層	ﾓﾘ土2	土器	皿 灯火皿	口～底	△12.9	△7.8	2.5	—	19.0	内～体外:回転ナデ　底外:回転糸切	江戸	17c後葉～
87-137	第2-2層	35ｲｺｳ東	磁器	小碗	口～底	△6.8	△3.1	3.1	—	15.8	クロム青磁・上色絵　外:木枝文	—	近代（19c4thQ～）
87-138	第2-2層	ﾓﾘ土1	磁器	小碗	口～底	△8.0	△3.8	4.7	—	33.5	コバルト染付　外:ゴム版七宝繋文	—	近代（20c2ndQ）
87-139	第2-2層	ﾓﾘ土1	磁器	小碗	口～底	△7.0	△3.2	5	—	20.7	染付　外:海浜文	—	近代（19c4thQ～）
87-140	第2-2層	35ｲｺｳ東	磁器	小碗 丸	口～底	△9.3	△3.1	4.9	—	44.6	染付　外:源氏香文　内:見込型打線刻龍文に釉掛け	瀬戸美濃	19c3rdQ
87-141	第2-2層	35ｲｺｳ東	磁器	小碗 端反	口～底	△8.0	△3.1	4.1	—	33.8	染付　内外:区画草花文　口縁端:口錆	瀬戸美濃	19c3rdQ
87-142	第2-2層	35ｲｺｳ東	磁器	碗 広東	底	−	6	2	—	37.7	染付ヵ　内:見込文様有、焼成後穿孔（転用ヵ）	肥前	18c末～19c初頭
87-143	第2-2層	35ｲｺｳ東	磁器	小皿 輪花	ほぼ完	△10.2	5.7	2.4	—	83.1	染付　内:海浜文　口縁端:口錆	肥前	19c前葉～中葉
87-144	第2-2層	35ｲｺｳ東	磁器	小皿 輪花	ほぼ完	△10.5	5.6	2.5	—	71.2	染付　内:海浜文　口縁端:口錆	肥前	19c前葉～中葉
87-145	第2-2層	35ｲｺｳ東	磁器	小皿 玉縁	口～底	△10.4	△5.9	2.6	—	39.7	染付　内:海浜文　外:源氏香文	肥前	18c後葉～19c前葉
87-146	第2-2層	ﾓﾘ土1	磁器	小皿 玉縁	口～底	△7.5	△4.5	2	—	12.3	染付　内:格子網手文	肥前	18c後葉～19c前葉
87-147	第2-2層	35ｲｺｳ東	磁器	小皿 輪花	口～底	△10.2	5.8	2.5	—	38.2	クロム青磁　内:型打草花文　高:錆釉	—	近代～
87-148	第2-2層	ﾓﾘ土1	磁器	小皿	口～底	△10.9	5.7	3.1	—	108.6	染付　内:縁帯銅版転写海浜雲形窓龍文、見込二重圏線区画異体字丸文　外:如意唐草文ヶ	—	近代（20c1stQ～）
87-149	第2-2層	35ｲｺｳ東	磁器	小皿 輪花	完	10.7	5.9	3.1	—	112.7	染付　内:口縁圏線、見込圏線区画松竹梅文　外:如意唐草文ヵ　口縁端:口錆	肥前	19c前葉～中葉
87-150	第2-2層	ﾓﾘ土1	磁器	小皿	口～底	△12.2	△8.0	2.2	—	12.5	コバルト染付　内:銅版転写唐子文	—	近代（20c1stQ～）
87-151	第2-2層	35ｲｺｳ東	磁器	小皿	口～底	△10.8	△5.1	2	—	32.4	コバルト染付　内:型紙刷草花文　口縁端:太圏線	—	近代（19c4thQ～）
87-152	第2-2層	35ｲｺｳ東	磁器	皿	口～底	△13.6	△7.1	2.9	—	125.0	染付　内:縁帯唐草文、見込二重圏線区画、釘書「松」（Kg106）、蛇の目釉剥、重焼痕有	肥前	18c後葉
87-153	第2-2層	35ｲｺｳ東	磁器	皿 輪花	口～底	13.1	7.6	3.3	—	154.1	染付　内:縁帯微塵唐草文、見込帯文区画環状松竹梅文　外:如意唐草文　高:蛇の目高台、「成化年製」銘、釘書「六芒星に右」（Kg105）	肥前	18c後葉～19c前葉
88-154	第2-2層	35ｲｺｳ東	磁器	鉢 輪花	完	13.6	17.7	6	—	374.9	コバルト染付　内:縁帯微塵唐草文、見込山水楼閣文　外:蝙蝠・雷文　高:蛇の目高台	—	幕末～明治初頭
88-155	第2-2層	35ｲｺｳ東	磁器	鉢 鎬	口～腰	△18.3	—	▲6.4	—	220.4	染付　内:縁帯微塵唐草文　外:流水飛鳥文	肥前	19c3rdQ
88-156	第2-2層	35ｲｺｳ東	磁器	蓋	完	3.3	1.1	1.4	—	6.8	白磁	—	近代
88-157	第2-2層	35ｲｺｳ東	磁器	碗蓋 端反	口～底	△9.8	△4.2	2.9	—	138.0	染付　外:牡丹唐草文　内:口縁雷文繋、見込圏線区画環状松竹梅文　高:銘有、焼継印「イ」（Y9）	肥前	19c前葉～中葉
88-158	第2-2層	35ｲｺｳ東	磁器	碗蓋	口～底	△9.8	△4.1	2.7	—	33.5	染付　外:桜花弁繋文　内:口縁円弧繋文、見込圏線区画文様有　高:銘有	瀬戸美濃	19c前葉
88-159	第2-2層	ﾓﾘ土1	磁器	大鉢	口～腰	△37.3	—	▲25.0	—	1283.0	染付　外:縁帯唐草割菱文、牡丹文　内:縁帯牡丹唐草文　見込中央文様有	肥前	18c～
89-160	第2-2層	ﾓﾘ土1	陶器	碗 平	口～底	△12.5	△4.1	4.5	—	70.9	内～体外:灰釉、口縁端敲打痕有　高:無釉	京	18c末～
89-161	第2-2層	35ｲｺｳ東	陶器	鳥の餌入れ	口～底	△5.9	6	2.7	△7.1	37.5	内～体外:灰釉　底外:無釉、回転糸切（右）	瀬戸美濃	18c～
89-162	第2-2層	ﾓﾘ土1	陶器	植木鉢	胴～底	—	22.1	—	—	1337.6	内:無釉　体外:型打レリーフ牡丹唐草文緑釉掛流し　高:無釉、半円形けずり4、中央穿孔	瀬戸美濃	18c末～
89-163	第2-2層	ﾓﾘ土1	陶器	半胴甕	口～底	△13.9	10.1	11	—	361.3	内～胴外:鉄釉、見込胎土目痕4　腰～底:無釉　高:中央焼成後穿孔、墨書「文月七□付」ヵ（B19）	美濃	19c前葉
89-164	第2-2層	ﾓﾘ土1	陶器［焼締］	壺 建水ヵ	口～底	△12.5	△11.2	△17.0	—	218.6	底外:回転糸切（左）	備前	—
89-165	第2-2層	35ｲｺｳ東	陶器	灯火受皿 脚付	口～底	△4.4	6.2	5.2	△8.0	66.9	口縁内～体外:灰釉　底:無釉	—	19c～
89-166	第2-2層	35ｲｺｳ東	土器	塩壺	口～底	△5.8	△3.6	5	—	29.6	内～体外:回転ロクロ水挽痕　底外:回転糸切、中央焼成後穿孔	江戸	18c末～19c中葉
89-167	第2-2層	35ｲｺｳ東	土器	塩壺蓋	完	5.5	—	0.7	—	28.4	内:掌圧痕	江戸	18c末～19c中葉
89-168	第2-2層	ﾓﾘ土1	土器	塩壺蓋	口～天	7.6	—	1.7	—	69.3	内:布目圧痕	関西	18c前葉～中葉
90-169	第4層	ﾓﾘ土3	磁器	小碗 端反	口～底	△7.3	4.2	4.7	—	40.1	白磁　内:見込型打「壽」文　外:釘書「サ」（Kg36）	瀬戸美濃	19c中葉～
90-170	第4層	ﾓﾘ土3	磁器	小碗 端反	口～底	△9.3	△4.7	4.6	—	28.9	染付　外:花唐草文　内:口縁草花繋帯文、見込二重圏線区画　口縁端:太圏線	中国	19c中葉～

挿図番号	出土地点	注記	素材	器種	遺存部位	法量（cm） a	b	c	d	重さ（g）	観察内容	産地	時期
90-171	第4層	ﾓﾘ土3	磁器	碗 丸	胴～底	—	3.6	▲4.3	—	30.6	染付　外:草花文　内:見込圏線区画見草花文	肥前	18c末
90-172	第4層	ﾓﾘ土3	磁器	飯碗	胴～底	—	3.7	▲3.2	—	11.1	コバルト染付　外:型紙刷青海波文	—	近代（19c4thQ～）
90-173	第4層	ﾓﾘ土3	磁器	碗 厚手底	口～底	△10.1	4.1	5.2	—	79.8	染付　外:草花文　高:枠無渦「福」銘ヵ	肥前	17c末～18c中葉
90-174	第4層	ﾓﾘ土3	磁器	碗 腰張	口～底	△11.3	△4.9	6.3	——	36.1	染付　外:山水楼閣文　内:見込二重圏線区画松竹梅文　高:「…製」銘	肥前	17c末
90-175	第4層	ﾓﾘ土3	磁器	碗 筒形	口～底	△7.3	△3.8	6.3	—	51.3	青磁染付　外:青磁釉　内:口縁四方襷、見込二重圏線区画	肥前	18c中葉～後葉
90-176	第4層	ﾓﾘ土3	磁器	小皿 輪花	口～底	10.1	6.1	2.8	—	83.4	染付　内:海浜文	肥前	19c前葉～中葉
90-177	第4層	ﾓﾘ土3	磁器	皿	口～底	△12.8	7.5	2.3	—	61.9	染付　内:草花文　外:如意唐草文	瀬戸美濃	—
90-178	第4層	ﾓﾘ土3	磁器	小皿 輪花	口～底	△10.3	5.7	2.3	—	31.2	染付　内:草花文　外:如意唐草文　器表くもり（被熱ヵ）	肥前	17c末
90-179	第4層	ﾓﾘ土3	磁器	皿	口～底	14.9	6.6	4.3	—	151.3	青磁　高:碁笥底に近い、外面のみ無釉	肥前	17c後葉～18c前葉
90-180	第4層	ﾓﾘ土3	磁器	蓋物	口～底	5.3	2.6	2.7	—	16.4	染付　外:六角繋文	肥前	18c
90-181	第4層	ﾓﾘ土3	磁器	蓋物	口～底	△7.4	△3.7	4	—	22.3	染付　外:算木文	肥前	18c後葉～
90-182	第4層	ﾓﾘ土3	磁器	蓋物蓋	口～天	△11.0	—	▲3.2	△12.7	75.0	染付　外:花唐草文	肥前	18c末～
91-183	第4層	ﾓﾘ土3	陶器	碗 半球	口～底	△8.6	2.9	5.5	—	40.5	内～体外:灰釉、色絵草花文　高:無釉	京	18c2ndQ
91-184	第4層	ﾓﾘ土3	陶器	大皿	腰～底	—	△9.1	▲3.3	—	41.3	内～体外:灰釉、染付山水文ヵ　高:刻印「可吉」（Ko4）	肥前	17c後葉
91-185	第4層	ﾓﾘ土3	陶器	徳利	胴～底	—	7	▲12.9	—	347.8	内:無釉、タール付着　胴外:灰釉、釘書「…屋」（Kg12）　底:無釉、中央回転糸切、周囲ナデ	美濃（高田）	18c後葉以降
91-186	第4層	ﾓﾘ土3	陶器	徳利	胴～底	—	7.1	▲13.9	—	374.5	内:無釉　体外:灰釉、釘書「○」（Kg9）　底:無釉、タール付着	美濃（高田）	18c後葉以降
91-187	第4層	ﾓﾘ土3	陶器	徳利	口～胴	3.7	—	▲15.0	△8.8	260.2	口縁内～胴外:灰釉、釘書「へ本　イ」（Kg8）	美濃（高田）	19c前葉
91-188	第4層	ﾓﾘ土3	陶器	徳利	口～胴	3.9	—	▲18.5	△8.8	297.8	口縁内～胴外:灰釉、釘書「七　々　ち　し」（Kg6）	美濃（高田）	19c初頭
91-189	第4層	ﾓﾘ土3	陶器	徳利	完	3.2	6.7	19.4	9	608.4	口縁内～胴外:灰釉、釘書「七　々　ち　し」（Kg2）　腰～底:無釉、タール付着	美濃（高田）	19c前葉
91-190	第4層	ﾓﾘ土3	陶器	半胴甕	胴～底	—	12.1	▲11.9	—	454.0	内外:鉄釉、見込胎土目痕3　腰～底外:釉拭取り、畳付胎土目痕有 、中央焼成後穿孔	美濃	18c後葉～
91-191	第4層	ﾓﾘ土3	陶器	徳利	ほぼ完	3.6	7	20.3	8.4	525.0	口縁内～体外:灰釉、釘書有（Kg107）　底:無釉、歪み顕著	美濃（高田）	19c前葉
92-192	第4層	ﾓﾘ土3	土器	皿 灯火皿	口～底	△13.0	△8.3	2.1	—	12.5	内～体外:回転ナデ　底外:回転糸切	江戸	17c中葉～
92-193	第4層	ﾓﾘ土3	土器［瓦質］	植木鉢	胴～底	—	6.2	▲2.8	—	29.8	内:回転ロクロ水挽痕　腰外:回転ナデ　底外:回転糸切（左）、中央穿孔	江戸	18c末～19c中葉
92-194	第4層	ﾓﾘ土3	土器［瓦質］	植木鉢	胴～底	—	△14.7	▲4.5	—	180.7	内・体外:回転ナデ　底外:静止挽切（工具不明）、中央穿孔	江戸・東京	近代（19c4thQ～）
92-195	第4層	ﾓﾘ土3	土器	塩壺	胴～底	—	5.6	▲6.4	—	95.9	体内:布目圧痕　底:環状粘土充填	関西	18c中葉
92-196	第4層	ﾓﾘ土3	土器	塩壺	口～体	△15.7	△5.1	9	△6.6	64.3	体内:布目圧痕　口端:ケズリ蓋受	関西	18c中葉
92-197	第4層	ﾓﾘ土3	土器［施釉］	灯火受皿 脚付	ほぼ完	4.4	7.4	7.4	7.7	118.3	内～脚外:透明釉、回転ナデ　底～脚内:無釉、ケズリ	江戸	18c末～19c初頭
92-198	第4層	ﾓﾘ土3	土器［瓦質］	火鉢	口	—	—	▲4.6	—	124.3	内・体外:回転ナデ　口縁端:弱いミガキ	江戸	18c末～
92-199	第4層	ﾓﾘ土3	土器	焙烙	口～底	—	—	▲2.5	—	22.9	内～体外:回転ナデ　底外:砂目	江戸	18c末～19c前葉
93-200	7号遺構	7ｲｺｳ	磁器	小杯	ほぼ完	4.9	2.4	2.7	—	21.9	染付　外:草花文	肥前	18c～
93-201	7号遺構	7ｲｺｳ	磁器	小碗	完	7.2	.6	4.1	—	83.7	コバルト染付　外:銅版転写松竹梅亀甲文	—	近代（20c1stQ～）
93-202	7号遺構	7ｲｺｳ	磁器	飯碗	口～底	△10.3	△3.5	3.9	—	43.2	コバルト染付　外:木賊文　口縁端:圏線	—	近代（19c4thQ）
93-203	7号遺構	7ｲｺｳ	磁器	鉢	口～底	—	5.7	▲2.1	—	53.8	染付　内:片喰竹垣文　高:釘書「サ」（Kg85）	肥前	18c後葉～19c前葉
93-204	7号遺構	7ｲｺｳ	磁器	急須蓋	完	5.4	7	2.6	7	45.6	色絵　外:葡萄文　内:染付スタンプ「岐870」	美濃	近代（20c2ndQ）
93-205	7号遺構	7ｲｺｳ	陶器	土瓶蓋	ほぼ完	8.4	2.5	4	11.1	70.2	コバルト染付　外:白泥草文　内:無釉		近代（19c4thQ～）
93-206	7号遺構	7ｲｺｳ	陶器	徳利	腰～底	—	6.4	▲9.6	—	162.1	内・胴外:灰釉、楕円形打ち欠き窓ヵ（転用）　腰～底:無釉	美濃（高田）	19c～
93-207	7号遺構	7ｲｺｳ	土器	植木鉢	胴～底	—	3.4	▲2.3	—	18.8	内面：回転ロクロ水挽痕　底部外面：回転糸切（左）	江戸	18c末～19c前葉
93-208	14号遺構	14ｲｺｳ	磁器	碗 厚手底	口～底	△12.6	5.6	6.8	—	141.7	染付　外:草花文　内:見込二重圏線区画コンニャク印判五弁花　高:枠無渦「福」銘ヵ	肥前	18c中葉～後葉
93-209	14号遺構	14ｲｺｳ	磁器	蓋物	口～底	△10.2	△5.3 △5.3	6	—	46.4	染付　外:松竹梅丸文、櫛歯文	肥前	—
93-210	63号遺構	63ｲｺｳ	陶器	皿	口～底	△14.5	△9.1	2.8	—	32.4	内～体外:灰釉　高:無釉	瀬戸美濃	17c後葉～18c
93-211	13号遺構	13ｲｺｳ	土器［施釉］	灯火受皿 脚付	口～脚	3.7	—	▲6.1	△7.6	80.2	内～脚外:施釉、受端タール付着　脚内:ケズリ	江戸	18c末～19c初頭
93-212	46号遺構	46ｲｺｳ	陶器	灯火受皿 脚付	胴～底	3.9	5.3	4.7	—	72.2	内～体外:灰釉　底:無釉、重焼痕有	信楽	19c中葉～
94-213	35号遺構	35ｲｺｳ胴木下	磁器	小杯 酒杯	口～底	△6.3	2.4	2.6	—	12.70	白磁　高:異体字銘有	瀬戸美濃	19c前葉～
94-214	35号遺構	35ｲｺｳ	磁器	小杯 酒杯	口～底	△6.6	2.6	2.1	—	17.10	上色絵　内:日章旭日旗文　高:異体字銘有	—	近代（20c1stQ）
94-215	35号遺構	35ｲｺｳ	磁器	小碗 端反	口～底	△6.7	3	4.8	—	17.20	染付　外:花鳥文　高:「大明成化年製」銘	瀬戸	近代（19c4thQ～）
94-216	35号遺構	35ｲｺｳ	磁器	碗 厚手底	口～底	△7.9	△3.7	4.8	—	24.70	染付　外:コンニャク印判桐丸文　器表くもり（被熱ヵ）	肥前	18c中葉～後葉
94-217	35号遺構	35ｲｺｳ	磁器	碗 端反	口～底	△8.7	—	▲4.1	—	17.60	染付　外:花唐草牡丹窓絵文　内:口縁楕円繋文　器表くもり（被熱ヵ）	肥前	18c末～
94-218	35号遺構	35ｲｺｳ	磁器	碗 広東	口～底	△11.2	6.7	6.1	—	87.80	染付　外:梅樹文ヵ　内:見込中央草花文	肥前	18c末～19c初頭
94-219	35号遺構	35ｲｺｳ	磁器	小皿	口～底	△10.8	△5.8	2	—	14.70	コバルト染付　内:型紙刷松鶴文ヵ　口縁端:太圏線	—	近代（19c4thQ～）
94-220	35号遺構	35ｲｺｳ胴木下	磁器	小皿 輪花	口～底	9.3	4.8	2.4	—	45.70	染付　内:見込型打レリーフ桐文に釉掛け　高:刻印「萬王」（Ko12）	瀬戸美濃	19c中葉～
94-221	35号遺構	35ｲｺｳ胴木下	磁器	小皿 輪花	口～底	△11.2	—	▲2.1	—	8.10	染付　内:山水楼閣文ヵ	瀬戸美濃	19c前葉～中葉
94-222	35号遺構	35ｲｺｳ	磁器	小皿	口～底	△11.8	△7.4	1.9	—	15.80	染付　内:縁帯花唐草文、見込二重圏線区画文様有　外:松文ヵ	—	近代
94-223	35号遺構	35ｲｺｳ	磁器	小皿	口～底	△12.6	△8.1	2.1	—	36.80	クロム青磁上色絵　内:型紙刷花鳥文	—	近代（19c4thQ～）
94-224	35号遺構	35ｲｺｳ胴木下	磁器	皿	口～底	△21.0	△11.9	4.1	—	71.40	染付　内:縁帯草花文、見込二重圏線区画文様有　外:如意唐草文	肥前	18c
94-225	35号遺構	35ｲｺｳ胴木下	磁器	大皿 輪花	口～底	—	—	3.4	—	36.70	染付上色絵　内:口縁波濤帯文、見込文様有　外:口縁波濤帯文、如意唐草文　高:目痕有　器表に磁器砕片融着（被熱ヵ）	肥前	17c後葉
94-226	35号遺構	35ｲｺｳ	磁器	段重	口～底	△14.6	—	▲5.2	—	35.90	コバルト染付　外:蛸唐草文	—	19c中葉～
94-227	35号遺構	35ｲｺｳ	磁器	合子蓋	口～天	△5.9	—	1	—	10.50	染付　外:花文	肥前	18c
94-228	35号遺構	35ｲｺｳ胴木下	磁器	蓋	口～天	△5.8	—	0.8	△7.0	27.30	染付　外:山水楼閣文　器表発泡くもり（被熱）	瀬戸美濃	19c前葉
95-229	35号遺構	35ｲｺｳ	陶器	碗	胴～底	—	△4.3	▲3.2	—	50.40	内・体外:灰釉　高:無釉、墨書「○」（B39）	瀬戸美濃	18c中葉～
95-230	35号遺構	35ｲｺｳ胴木下	陶器	碗 半球	口～底	△8.5	3.3	5.5	—	78.00	内～体外:灰釉、色絵草花文　高:無釉、付着物有	京	17c後半

挿図番号	出土地点	注記	素材	器種	遺存部位	法量（cm）				重さ（g）	観察内容	産地	時期
						a	b	c	d				
95-231	35号遺構	35ｲﾄｳ	陶器	碗 灰釉丸	胴～底	—	△6.0	▲5.6	—	55.80	内外:灰釉　高:釉拭取り	瀬戸美濃	17c末～18c前葉
95-232	35号遺構	35ｲﾄｳ胴木下	陶器	皿	口～底	△14.2	△6.8	3.1	—	42.10	太白手染付　内:縁帯割菊文、見込圏線区画　外:如意唐草文	瀬戸美濃	18c後葉
95-233	35号遺構	35ｲﾄｳ	陶器	大皿	口～胴	—	—	▲6.1	—	74.90	内～体外:飴釉	瀬戸美濃	19c前葉
95-234	35号遺構	35ｲﾄｳ	陶器	蓋	口～天	—	1.6	▲2.8	△7.4	14.70	外:鉄釉　内:無釉	—	—
95-235	35号遺構	35ｲﾄｳ胴木下	陶器	土瓶蓋	ほぼ完	5.3	—	▲1.9	6.9	51.70	外:白泥に染付草花文　内:無釉	—	19c中葉～
95-236	35号遺構	35ｲﾄｳ	陶器	蓋	口～天	△5.1	—	2.7	△11.4	52.10	全:鉄釉　下:回転糸切	瀬戸美濃	18c～
95-237	35号遺構＋第2-1・3層・第3層	35ｲﾄｳ胴木下 35ｲﾄｳ東	陶器 [焔器質]	鉢	口～底	△10.1	6	7.4	—	61.70	内:白泥刷毛目文	—	—
95-238	35号遺構	35ｲﾄｳ	陶器	大鉢	口～胴	—	—	▲6.0	—	144.60	内外口縁:貼付モチーフ花文にうのふ釉、緑釉掛け　体外:鉄釉ヵ	—	近代ヵ
95-239	35号遺構	35ｲﾄｳ	陶器	大甕	口	—	—	▲7.0	—	98.20	内外:鉄釉ヵ	常滑	
95-240	35号遺構	35ｲﾄｳ	陶器	徳利	頸～胴	—	—	▲10.6	—	144.30	内・胴外:灰釉	美濃（高田）	19c前葉
95-241	35号遺構	35ｲﾄｳ	陶器	徳利	胴～底	—	6.5	▲8.0	—	214.00	内:無釉　胴外:灰釉　腰～底:無釉	美濃（高田）	19c前葉
95-242	35号遺構	35ｲﾄｳ	陶器	徳利	胴～底	—	8.4	▲4.6	—	122.00	内・外:飴釉　腰～底・釉拭取り	美濃（高田）	18c末～19c中葉
95-243	35号遺構	35ｲﾄｳ	陶器	徳利	胴～底	—	△10.1	▲7.9	—	165.40	内・外:飴釉　腰～底:釉拭取り	美濃（高田）	18c末～19c中葉
96-244	35号遺構	35ｲﾄｳ	陶器	硫酸瓶 栓ヵ	ほぼ完	7.9	4.1	4.6	—	164.80	無釉　下:墨書「○」（B24）	—	近代ヵ
96-245	35号遺構	35ｲﾄｳ胴木下	陶器	灯火受皿	口～底	7.5	4.5	1.9	△11.0	47.40	内～口縁外:灰釉、受端スス付着　体外～底:無釉	信楽	19c前葉
96-246	35号遺構	35ｲﾄｳ	土器	塩壺	完	5.7	5.5	9.3	7.6	420.10	内:布目圧痕　胴外:線条痕、刻印「泉州麻生」銘	関西	18c前葉
96-247	35号遺構	35ｲﾄｳ胴木下	土器	焙烙	口～底	—	—	▲3.5	—	35.30	内～体外:回転ナデ　底外:砂目	江戸	18c後葉～19c前葉
96-248	35号遺構	35ｲﾄｳ胴木下	土器	焙烙	口～底	—	—	▲2.2	—	24.40	内面～体部外面：回転ナデ　底部外面：砂目	江戸	19c中葉～
96-249	37号遺構	37ｲﾄｳ	陶器	灯火受皿	口～底	△9.7	—	▲2.3	—	19.4	内～体外:鉄釉、腰重焼痕有　底外:無釉	瀬戸美濃	18c末～19c初頭
96-250	52号遺構	52ｲﾄｳ胴木下	陶器	碗 柳	口～底	△12.0 △9.3	4.2	5.9	—	79.5	内～体外:灰釉、鉄絵柳文　高:無釉	瀬戸美濃	18c後葉
96-251	52号遺構	52ｲﾄｳ胴木下	陶器	油壺	ほぼ完	—	5.6	▲7.1	9.6	188.1	内:無釉　外:灰釉、鉄絵藤文ヵ	瀬戸美濃	17c後葉～18c前葉
96-252	52号遺構	52ｲﾄｳ胴木下	磁器	油壺	ほぼ完	△3.0	5.4	8.9	9.4	234.6	染付　外:頸二重圏線、肩腰圏線区画葡萄文	肥前	18c
96-253	56号遺構	56ｲﾄｳ	陶器 [硬質]	洋皿	口～腰	△25.6	—	▲2.3	—	30.8	コバルト染付　内:口縁三重圏線、見込圏線区画　器表:ガラス砕片融着（被熱ヵ）		近代（20c2ndQ）
96-254	55号遺構	55ｲﾄｳ	磁器	皿 玉縁	口～底	△10.2	4.7	2.7	—	38.0	染付　内:梅花氷裂文　外:七宝文	瀬戸美濃	19c前葉～中葉
96-255	59号遺構	59-5ｲﾄｳ	磁器	小鉢	口～底	△6.2	4	5.6	—	24.9	染付　外:微塵唐草文、腰櫛歯文　内:口縁四方襷、見込二重圏線区画環状松竹梅文　高:「太明年製」銘	肥前	18c末～19c前葉
96-256	86号遺構	86ｲﾄｳ	土器	焙烙	口～底	—	—	▲2.9	—	35.2	内～体外:回転ナデ　底外:チヂレ目ヵ	江戸	18c後葉～19c前葉
96-257	77号遺構	77ｲﾄｳ	陶器	三足台 窯道具ヵ	口～底	—	6.2	1.1	—	13.6	無釉　上面に環状の焼痕ヵ	—	—
97-258	75号遺構	75ｲﾄｳ	磁器	皿 仕切角	口～底	—	—	2.2	—	140.8	染付　内:吉祥文様有　口縁端:口錆　器表変形変色、砕片融着（被熱）	肥前	17c後葉
97-259	75号遺構	75ｲﾄｳ	磁器	大皿 輪花	口～底	△21.1	△14.4	3.2	—	144.2	染付　内:縁帯微塵唐草文、見込二重圏線区画環状松竹梅文　外:如意唐草文　高:「…製」銘　器表変形変色、砕片融着（被熱）	肥前	18c末～19c前葉
97-260	75号遺構	75ｲﾄｳ	磁器	鉢 輪花	口～底	△14.5	△8.1	4.7	—	54.3	染付　外:牡丹唐草文　内:口縁蛸唐草文、環状瓔珞繋文区画　口縁端:口錆　器表くもり、砕片溶着（被熱）	肥前	17c後葉
97-261	87号遺構	87ｲﾄｳ	磁器	皿	口～底	△13.1	△7.3	3.1	—	44.6	染付　内:縁帯草花文、見込二重圏線区画、蛇の目釉剥	肥前	18c後葉
97-262	87号遺構	87ｲﾄｳ	磁器	大皿 輪花	口～底	—	—	3.2	—	30.0	染付　内:縁帯微塵唐草文、見込二重圏線区画文様有　外:如意唐草文　高:「…製」銘　器表荒れ変形、砕片融着（被熱）	肥前	18c末～19c前葉
97-263	87号遺構	87ｲﾄｳ	陶器	捏鉢ヵ	腰～底	—	△9.5	▲4.0	—	164.9	内・腰外:飴釉、見込胎土目痕有　高:無釉、中央焼成後穿孔（植木鉢転用）、墨書「沢…」ヵ（B35）	瀬戸美濃	18c後葉～
97-264	87号遺構	87ｲﾄｳ	土器	焜炉類	口～胴	△28.0	—	▲9.4	—	204.9	内:輪積痕、指頭圧痕　口縁内～外:弱いミガキ、スス付着	江戸	18c後葉～
98-265	池遺構　上層	ﾓﾘ土4西2	磁器	小杯	口～底	△5.8	2.8	2.8	—	12.0	染付　外:笹文ヵ	肥前	—
98-266	池遺構　上層	51ｲﾄｳ	磁器	小杯 厚手底	口～底	△6.1	2.2	2.7	—	26.20	染付　外:笹文	肥前	18c
98-267	池遺構　上層	47ｲﾄｳ	磁器	小杯	口～底	△4.9	△3.4	3	—	6.10	白磁	肥前	—
98-268	池遺構　上層	ﾓﾘ土4西2	磁器	小杯	完	4.9	3	3.2	—	26.0	染付　環状文	肥前	—
98-269	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北1	磁器	小碗	ほぼ完	△6.8	2.9	4.5	—	23.0	コバルト染付　外:口縁圏線、文様有	—	近代（19c4thQ）
98-270	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北1	磁器	小碗 端反	ほぼ完	5.9	3.1	4.2	—	56.8	コバルト染付　外:口縁圏線、木賊文	—	近代（19c4thQ）
98-271	池遺構　上層	47ｲﾄｳ下	磁器	小碗 厚手底	口～底	7.1	3.1	3.2	—	38.60	染付　外:草花文ヵ	肥前	18c
98-272	池遺構　上層	91ｲﾄｳ	磁器	小碗 丸	口～底	△7.6	△2.6	3.6	—	10.8	上色絵　外:桜花文	肥前	18c後葉
98-273	池遺構　上層	91ｲﾄｳ	磁器	碗 広東	口～底	△9.1	△5.6	4.8	—	17.8	染付　外:四割区画青海波花車文　内:口縁圏線、見込圏線区画	肥前	18c末～19c初頭
98-274	池遺構　上層	47ｲﾄｳ	磁器	碗 端反	口～底	△9.0	△4.0	5	—	29.60	染付　外:海浜松原文ヵ　内:見込圏線区画文様有	瀬戸美濃	19c2ndQ
98-275	池遺構　上層	ﾓﾘ土4南1 ﾓﾘ土4南3	磁器	碗 腰張	口～底	△8.4	△3.6	4.8	—	34.7	染付　外:口縁腰圏線区画割菊文　内:見込圏線区画五弁花	肥前	18c末～19c初頭
98-276	池遺構　上層	ﾓﾘ土4南1	磁器	碗 腰張	口～底	8.6	3.2	5.5	—	73.2	染付　外:紫陽花飛鳥文　内:見込花文	肥前	18c後葉
98-277	池遺構　上層	91ｲﾄｳ	磁器	碗 腰張	口～底	△8.7	3.6	5.6	—	63.8	染付　外:竹林花窓百姓文　内:口縁二重圏線、見込圏線区画草文ヵ	肥前	18c後葉
98-278	池遺構　上層	ﾓﾘ土4南0 ﾓﾘ土4南1	磁器	碗 小広東	口～底	—	3.3	▲4.0	—	33.6	染付　外:暴馬文ヵ　内:見込一重圏線区画花文	肥前	18c末～19c初頭
98-279	池遺構　上層	ﾓﾘ土4西	磁器	碗 厚手底	口～底	△9.5	△3.9	5	—	40.8	染付　外:二重網手文　内:網手文	肥前	18c末～19c前葉
98-280	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北2	磁器	碗 広東	口～底	△9.2	△5.0	5.2	—	30.2	染付　外:花文　内:口縁圏線、見込圏線区画	肥前	18c末～19c初頭
98-281	池遺構　上層	ﾓﾘ土4南0 ﾓﾘ土4南1	磁器	碗 端反	ほぼ完	9.3	4.2	5	—	105.8	染付　外:口縁圏線、山水楼閣文　内:口縁帯圏線、見込圏線区画海浜文ヵ	瀬戸美濃	19c前葉
98-282	池遺構　上層	47ｲﾄｳ	磁器	碗 端反	口～底	△9.9	△4.0	5	—	29.80	染付　外:口縁圏線、区画唐草文　内:口縁二重圏線、見込圏線区画文様有	瀬戸美濃	19c2ndQ
98-283	池遺構　上層	ﾓﾘ土4南0	磁器	碗 端反	口～胴	△11.1	—	▲5.6	—	34.3	染付　外:牡丹文　内:見込一点文様有	肥前	18c末～19c初頭
98-284	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北1	磁器	碗 丸	口～底	△10.5	3.8	4.8	—	39.2	染付　外:草花蝶文	肥前	18c末
98-285	池遺構　上層	ﾓﾘ土4南5	磁器	碗 丸	口～底	△11.8	△4.0	6	—	32.8	染付　外:口縁圏線、巻子文　内:口縁二重圏線、見込圏線区画一点文様有	肥前	18c末～19c初頭
98-286	池遺構　上層	47ｲﾄｳ	磁器	碗 厚手底	口～底	△12.8	—	6.5	—	129.60	染付　外:梅樹文　内:見込二重圏線区画　口縁端:蔵打痕	肥前	17c末～18c後葉
98-287	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北1	磁器	碗 大形丸	口～底	△15.0	△5.6	6.5	—	53.6	染付　外:松竹梅文　内:口縁四方襷、見込二重圏線区画花文ヵ	肥前	19c前葉
99-288	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北2	磁器	碗 筒形	口～底	△6.9	△3.7	5.7	—	47.8	染付　外:七宝繋文　内:口縁二重圏線、見込圏線区画コンニャク印判五弁花ヵ	肥前	18c後葉
99-289	池遺構　上層	ﾓﾘ土4西2	磁器	碗 筒形	胴～底	—	4.7	▲5.0	—	68.3	青磁染付　外:青磁釉　内:見込二重圏線区画五弁花高:銘有	肥前	18c中葉～後葉
99-290	池遺構　上層	ﾓﾘ土4西2	磁器	碗 筒形	完	7.5	4	6.4	—	176.0	青磁染付　外:青磁釉　内:口縁四方襷、見込二重圏線区画コンニャク印判五弁花ヵ	肥前	18c後葉

挿図番号	出土地点	注記	素材	器種	遺存部位	法量（cm） a	b	c	d	重さ（g）	観察内容	産地	時期
99-291	池遺構　上層	ﾓﾘ土4南1	磁器	碗 筒形	口～底	△7.3	3.7	6.2	—	77.6	青磁染付　外:青磁釉　内:口縁四方襷、見込二重圏線区画コンニャク印判五弁花ヵ	肥前	18c後葉
99-292	池遺構　上層	61ｲﾂｳ	磁器	碗 腰張	口～底	△8.2	4.9	8.2	—	109.50	染付　外:口縁腰二重圏線区画草花文　高:畳付砂付着顕著	肥前（初期伊万里）	1730年代
99-293	池遺構　上層	91ｲﾂｳ	磁器	紅猪口 輪花	完	3.8	1.1	1.4	—	8.9	白磁　内:施釉　外:無釉	—	17c～
99-294	池遺構　上層	47ｲﾂｳ	磁器	湯呑碗 擂筒形	完	6	4.1	7.6	—	123.70	コバルト染付　内外:菊花秋草文、「霞□清□」　高:「陶角亭造」　釉剥落有	—	近代（20c1stQ～）
99-295	池遺構　上層	61ｲﾂｳ	磁器	小皿 角	口～底	—	△4.0	1.8	—	10.50	染付　内:縁帯獅子文、見込二重圏線区画　外:如意唐草文　器表くもり（被熱ヵ）	肥前	17c後葉
99-296	池遺構　上層	47ｲﾂｳ	磁器	小皿 変形	口～底	▲4.1	▲2.2	1.5	—	5.30	染付　内:草花文　外:如意唐草文　口縁端:口錆　高:貼付け高台　器表くもり（被熱ヵ）	肥前	17c後葉～18c前葉
99-297	池遺構　上層	47ｲﾂｳ	磁器	Ⅲ 角	口～底	▲5.3	▲3.2	3.2	—	19.30	染付　内:縁帯牡丹唐草文ヵ、二重角線区画　外:如意唐草文　高:貼付け高台、雷文繋　口縁端:口錆　器表くもり（被熱ヵ）	肥前	17c後葉～18c前葉
99-298	池遺構　上層	51ｲﾂｳ	磁器	Ⅲ 角	口～底	▲6.9	▲4.2	2.8	—	26.40	染付上色絵　内:口縁帯角枠、型打網代葡萄レリーフ文に上色絵　高:貼付け高台　器表くもり（被熱ヵ）	肥前	17c後葉～18c前葉
99-299	池遺構　上層	47ｲﾂｳ下	磁器	小皿	口～底	△8.1	△3.9	1.9	—	5.90	白磁	—	—
99-300	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北5	磁器	小皿	完	6.1	3.6	1.2	—	23.5	コバルト染付　内外:瓔珞文	—	—
99-301	池遺構　上層	51ｲﾂｳ ﾓﾘ土4南0	磁器	小皿 輪花	口～底	△8.2	△4.3	2	—	41.1	青白磁	肥前	17c後葉～
99-302	池遺構　上層	ﾓﾘ土4南1	磁器	小皿 輪花	ほぼ完	△10.1	5.4	3	—	83.7	染付　内:縁帯型打レリーフ草文ヵ、見込二重圏線区画山水楼閣文　外:七宝文　口縁端:口錆　高:一点文有	肥前	19c前葉～中葉
99-303	池遺構　上層	51ｲﾂｳ	磁器	小皿 輪花	口～底	△10.1	△5.3	2.5	—	17.90	染付　内:縁帯蛸唐草文、見込帯文区画文様有　外:如意唐草文	肥前	18c後葉～19c前葉
99-304	池遺構　上層	ﾓﾘ土4南1	磁器	小皿 輪花	ほぼ完	—	6	▲2.3	—	82.7	染付　内:縁帯型打レリーフ鏑文、見込二重圏線区画柳文	肥前	19c前葉～中葉
99-305	池遺構　上層	51ｲﾂｳ	磁器	小皿 輪花	口～底	△10.9	6	2.9	—	76.80	染付　内:縁帯型打レリーフ鏑文、見込二重圏線区画柳文　口縁端:口錆	肥前	19c前葉～中葉
100-306	池遺構　上層	ﾓﾘ土4南1	磁器	小皿 輪花	ほぼ完	△10.1	5.7	2.5	—	67.7	染付　内:海浜文　口縁端:口錆	肥前	19c前葉～中葉
100-307	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北3	磁器	小皿 輪花	ほぼ完	△10.3	6.1	2.1	—	71.1	染付　内:海浜文	肥前	19c前葉～中葉
100-308	池遺構　上層	ﾓﾘ土4南5 ﾓﾘ土4北6	磁器	小皿	口～底	△9.8	△7.0	2.5	—	40.8	青磁染付　内:見込二重圏線区画文様有　外:如意唐草文　高:蛇の目高台、角枠渦「福」銘	肥前	18c後葉
100-309	池遺構　上層	47ｲﾂｳ	磁器	Ⅲ 輪花	口～底	△12.1	7.4	3.1	—	82.40	染付　内:海浜文ヵ　口縁端:口錆　高:蛇の目高台	肥前	19c前葉～中葉
100-310	池遺構　上層	47ｲﾂｳ	磁器	Ⅲ 輪花	口～底	△13.9	△7.7	4.2	—	49.00	染付　内:縁帯牡丹唐草文、見込二重圏線区画コンニャク印判五弁花　外:如意唐草文　高:「大…」銘	肥前	18c中葉～後葉
100-311	池遺構　上層	ﾓﾘ土4西2	磁器	Ⅲ 玉縁	口～底	△13.6	△8.2	4.3	—	45.0	染付　内:縁帯花文ヵ、見込圏線区画文様有　外:如唐草文　高:蛇の目高台、タール付着	肥前	18c末～19c前葉
100-312	池遺構　上層	ﾓﾘ土4南5	磁器	Ⅲ	口～底	△13.3	△8.2	3.1	—	41.0	染付　内:縁帯草花文ヵ、見込二重圏線区画　外:結文	肥前	18c後葉
100-313	池遺構　上層	ﾓﾘ土4西	磁器	Ⅲ	口～底	△13.6	△9.1	2.7	—	70.5	染付　内:反物文	肥前	18c後葉～19c前葉
100-314	池遺構　上層	61ｲﾂｳ	磁器	Ⅲ	底	—	8.6	▲2.0	—	176.70	染付　内:見込二重圏線区画丸窓宝珠文　高:蛇の目高台　焼継痕有	肥前	19c
100-315	池遺構　上層	61ｲﾂｳ	磁器	Ⅲ	口～底	△13.7	9	2.8	—	220.80	土壌融着（被熱）	肥前	—
101-316	池遺構　上層	47ｲﾂｳ	磁器	Ⅲ 輪花	口～底	14.7	9.3	4.4	—	200.80	コバルト染付　内:型紙刷梅花文雲窓菊花文、見込帯文区画環状松竹梅文　外:如意唐草文　高:蛇の目高台	—	近代（19c4thQ～）
101-317	池遺構　上層	61ｲﾂｳ	磁器	Ⅲ	底	—	△11.2	▲2.6	—	63.90	染付　内:柳文　外:七宝文　高:櫛高台	肥前（鍋島）	19c
101-318	池遺構　上層	47ｲﾂｳ	磁器	大皿	胴～底	—	△12.1	▲2.9	—	122.50	染付　内:縁帯微塵唐草文、見込帯文区画環状松竹梅文　外:如意唐草文　高:異体字銘有	肥前	18c後葉～19c前葉
101-319	池遺構　上層	ﾓﾘ土4南1	磁器	大皿 輪花	口～底	△22.6	△15.2	4.3	—	66.2	染付　内:口縁梅花帯文、山水楼閣文、焼継印有（Y8）	肥前	19c前葉
101-320	池遺構　上層	ﾓﾘ土4西1 ﾓﾘ土4南4	磁器	大皿 輪花	口～底	—	△4.6	▲5.1	—	328.8	染付　内:縁帯蛸唐草文、見込帯文区画環状松竹梅文　外:如意唐草文　高:「太□□化年製」銘	肥前	18c後葉～19c前葉
102-321	池遺構　上層	47ｲﾂｳ	磁器	大皿	口～底	△23.8	△14.2	4.6	—	128.50	染付　内:縁帯葡萄文、見込二重圏線区画葡萄飛蝶文　外:飛蝶文　高:目痕有　焼継痕有	肥前	19c～
102-322	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北3	磁器	鉢	口～底	△12.1	△8.0	4.4	—	11.8	染付　外:下り藤丸文	肥前	—
102-323	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北1	磁器	鉢	口～底	12.2	6.8	5.2	—	172.4	コバルト染付　内:捻区画微塵唐草牡丹文　外:如意唐草文　高:蛇の目高台、重焼痕有	—	幕末～明治初頭
102-324	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北2	磁器	植木鉢	口～底	△5.9	△3.5	5.1	—	26.7	瑠璃釉　口縁内～体外:施釉　高:無釉、中央穿孔	瀬戸	19c中葉～
102-325	池遺構　上層	61ｲﾂｳ	磁器	花瓶ヵ	胴～底	—	△5.3	▲6.0	—	21.00	青磁　外:施釉　内:無釉　器表くもり（被熱ヵ）	肥前	17c後葉～18c
102-326	池遺構　上層	61ｲﾂｳ	磁器	蓋物	口～底	△4.6	△2.4	2.4	—	6.50	染付　外:茄子文	肥前	—
102-327	池遺構　上層	51ｲﾂｳ	磁器	蓋物	口～底	△6.0	5.3	2.7	—	13.00	染付　外:文様有	肥前	—
102-328	池遺構　上層	61ｲﾂｳ	磁器	蓋物	口～底	△7.5	△3.4	2.9	—	22.90	染付　外:口縁腰圏線区画壽鶴文	肥前	—
102-329	池遺構　上層	ﾓﾘ土4西	磁器	蓋物	口～底	△15.2	△7.3	7.5	—	49.5	染付　外:松文	肥前	18c末～19c初頭
102-330	池遺構　上層	47ｲﾂｳ	磁器	段重	口～底	△8.0	△7.1	2.9	—	46.10	コバルト染付　外:微塵花唐草文	—	幕末～明治初頭
102-331	池遺構　上層	91ｲﾂｳ	磁器	段重	口～底	14.6	13.6	5.3	14.9	302.0	染付　外:口縁腰帯圏線区画花唐草文　底:釉拭取り　器表の荒れ、破片溶着（被熱）	肥前	18c後葉～19c前葉
103-332	池遺構　上層	ﾓﾘ土4南4	磁器	碗蓋 厚手底ヵ	天	—	2.3	▲2.4	—	43.4	染付　外:圏線区画草花文　縁辺に敲打痕有	肥前	18c中葉
103-333	池遺構　上層	ﾓﾘ土4南2	磁器	碗蓋 端反	口～天	△9.0	3.9	2.4	—	20.3	染付　外:朝顔文　内:口縁帯文、見込木葉文	肥前	18c末
103-334	池遺構　上層	ﾓﾘ土4南4	磁器	碗蓋 広東	口～天	△9.8	4.9	2.5	—	53.0	染付　外:草花文ヵ　内:口縁二重圏線、見込圏線区画草花文ヵ	肥前	18c末～19c初頭
103-335	池遺構　上層 ＋35号遺構	ﾓﾘ土4北3 35ｲﾂｳ	磁器	碗蓋 望料	口～天	△9.8	3.9	2.9	—	64.6	染付　外:繋帯文、七宝繋文　内:口縁四方襷、見込二重圏線区画七宝文	肥前	18c末～19c前葉
103-336	池遺構　上層	ﾓﾘ土4南0 ﾓﾘ土4南4	磁器	碗蓋 望料	胴～天	—	4.6	▲2.5	—	41.0	染付　外:繋帯文　内:見込二重圏線区画枇杷文ヵ　高:異体字銘有	肥前	18c末～19c前葉
103-337	池遺構　上層	ﾓﾘ土4南3	磁器	碗蓋 望料	胴～天	—	4.2	▲2.2	—	56.7	染付　外:櫛歯帯文、牡丹文　内:口縁四方襷ヵ、見込二重圏線区画枇杷文ヵ	肥前	18c末～19ｃ前葉
103-338	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北4	磁器	碗蓋 厚手底ヵ	口～天	△9.8	3.8	2.4	—	74.8	青磁染付　外:青磁釉　内:口縁四方襷、見込二重圏線区画コンニャク印判五弁花　高:角枠渦「福」銘	肥前	18c中葉～後葉
103-339	池遺構　上層	47ｲﾂｳ	磁器	蓋物蓋	口～天	6	△2.5	▲1.7	6.9	18.20	染付　外:ハシバミ鷺文	肥前	18c後葉～19c前葉
103-340	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北2	磁器	蓋物蓋	口～天	△6.1	△2.5	1.5	△7.2	15.6	白磁	—	—
103-341	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北2	磁器	急須蓋	完	6.5	1.2	2.2	—	25.8	コバルト染付　外:楕円繋帯文、梅笹文　通気孔有	—	近代（19c4rdQ～）
103-342	池遺構　上層	51ｲﾂｳ	磁器	合子蓋	完	5.6	—	1.2	—	30.00	染付　外:四割区画格子文	肥前	18c後葉～
103-343	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北1	磁器	段重蓋	完	9.7	—	2.2	11	122.4	コバルト染付　外:型紙刷微塵花唐草文	—	近代（19c4thQ～）
104-344	池遺構　上層	ﾓﾘ土4南0	陶器	碗	胴～底	—	3.5	▲2.9	—	40.0	内・体外:鉛釉ヵ、線刻木葉文　高:無釉、刻印「萬古」（Ko6）　変色（被熱ヵ）	万古	18c末～
104-345	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北5	陶器	碗 若松	ほぼ完	8.9	3.3	5.5	—	99.7	内～胴外:灰釉、鉄絵若松文　高:無釉	京・信楽	18c末～19c初頭
104-346	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北1	陶器	碗	ほぼ完	8.9	3.5	5.6	—	137.9	内:灰釉　外:無釉　底外:回転糸切（右）	瀬戸美濃ヵ	
104-347	池遺構　上層	ﾓﾘ土4南0	陶器	碗	口～底	△10.9	△4.0	4.7	—	27.6	内～胴外:灰釉、見込染付梅花文ヵ　外:スス付着	瀬戸美濃	18c後葉～19c前葉
104-348	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北4	陶器	碗	口～底	12.4	4.6	5.9	—	132.0	内～胴外:緑釉　高:無釉	瀬戸美濃	18c3rdQ～4thQ
104-349	池遺構　上層	ﾓﾘ土4南0 ﾓﾘ土4南4 ﾓﾘ土4南5	陶器	碗 刷毛目	ほぼ完	12.9	4.3	6.4	—	184.3	白泥　内:打ち刷毛目　胴外:横位刷毛目　高:無釉	肥前	18c後葉
104-350	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北1	陶器	灯火皿	口～底	△8.4	△3.2	1.9	—	7.6	内～口縁端:灰釉　外:無釉		19c

挿図番号	出土地点	注記	素材	器種	遺存部位	法量（cm） a	b	c	d	重さ（g）	観察内容	産地	時期
104-351	池遺構　上層	61ｲｺｳ	陶器	小皿	口～底	△9.2	△5.8	1.7	—	5.50	内～口縁外:灰釉　胴～底外:無釉	瀬戸美濃	17c後葉～18c
104-352	池遺構　上層	ｾﾘ土4北4	陶器	灯火皿	完	10.2	4.4	2.3	—	96.7	内～胴外:鉄釉　腰～底外:無釉	瀬戸美濃	18c後葉～19c前葉
104-353	池遺構　上層	ｾﾘ土4南2	陶器	皿 八角	口～底	△13.6	△8.8	1.2	—	8.6	内:口縁鉄絵笹文ヵ、見込圏線区画	京	18c後葉～
104-354	池遺構　上層	ｾﾘ土4北4	陶器	灯火皿	口～底	△10.7	△5.0	2	—	24.8	内～胴外:鉄釉　腰～底:無釉	瀬戸美濃	18c後葉～19c前葉
104-355	池遺構　上層	ｾﾘ土4北4	陶器	大皿	胴～底	—	△8.4	▲3.5	—	124.4	内・胴外:灰釉、蛇の目釉剥、ススﾞ付着　高:無釉、墨書有（B12）	瀬戸美濃	18c末～19c
104-356	池遺構　上層	ｾﾘ土4北6	陶器	大皿	胴～底	—	△9.0	▲2.8	—	101.1	内・体外:灰釉、蛇の目釉剥　高:無釉	瀬戸美濃	18c末～19c
104-357	池遺構　上層	ｾﾘ土4南1	陶器	大皿 馬目	胴～底	—	△10.9	▲2.8	—	124.3	内・外:灰釉、縁帯鉄釉馬目文、見込圏線区画、目痕有　高:無釉	瀬戸美濃	19c2ndQ
105-358	池遺構　上層	47ｲｺｳ	陶器	大皿	ほぼ完	21.5	10.7	3.5	—	601.30	内外:灰釉、黒色釉吹墨型紙刷草花文　高:畳付のみ無釉	瀬戸美濃	近代
105-359	池遺構　上層	47ｲｺｳ	陶器	薬味入れヵ	口～底	—	2.1	▲2.1	—	6.60	内～体外:鉄釉　腰～底:無釉	—	近代
105-360	池遺構　上層	ｾﾘ土4南1	陶器	烏のエサ入れ	完	2.9	3.2	1.5	4	10.8	内～体外:灰釉　底:無釉、回転糸切（右）、墨書「□月/松島/弐拾の内」（B4）	瀬戸美濃	18c～
105-361	池遺構　上層	51ｲｺｳ	陶器	烏のエサ入れ	完	3.7	4	2.5	4.7	29.70	内～体外:灰釉　底:無釉、回転糸切（左ヵ）	瀬戸美濃	18c～
105-362	池遺構　上層	ｾﾘ土4北5	陶器	烏のエサ入れ	完	4.3	4.3	2.4	5.3	30.7	内～体外:灰釉　底:無釉、回転糸切（右）	瀬戸美濃	18c～
105-363	池遺構　上層	ｾﾘ土4北3	陶器	烏のエサ入れ	ほぼ完	5.1	5.6	3	—	58.7	内～体外:灰釉　底:無釉、回転糸切（右）	瀬戸美濃	18c～
105-364	池遺構　上層	47ｲｺｳ	陶器	鉢	完	8.9	5.7	6.9	—	201.70	内～体外:白色釉　口縁端：コバルト染付太圏線	—	近代
105-365	池遺構　上層	ｾﾘ土4北1	陶器［炻器質］	鉢	完	9.5	7.2	7		215.4	内～体外：鉄釉　底：無釉	—	—
105-366	池遺構　上層	47ｲｺｳ	陶器	鉢	口～底	△9.2	△8.5	7	—	83.40	全面に被熱による変色、釉銀化　鉛透明釉に上色絵ヵ	京	17c後葉～18c前葉
105-367	池遺構　上層	47ｲｺｳ	陶器［炻器質］	鉢ヵ	口～底	△10.4	△6.9	8.2	—	75.60	内外：鉄釉　口縁端のみ無釉	—	近代
105-368	池遺構　上層	61ｲｺｳ	陶器	灰落とし	口～胴	9.4	—	▲7.5	—	152.70	口縁内～胴外:白色釉、貫入	瀬戸美濃	18c末～
105-369	池遺構　上層	ｾﾘ土4北2	陶器	捏鉢	胴～底	—	8.6	▲4.1	—	242.0	内・体外:灰釉、見込胎土目痕3　高:無釉	瀬戸美濃	18c末～
105-370	池遺構　上層	61ｲｺｳ	陶器	捏鉢	口～底	19.1	10.2	12.1	—	948.10	内～体外：飴釉、見込胎土目痕4　高:無釉	瀬戸美濃	18c後葉～19c前葉
106-371	池遺構　上層	ｾﾘ土4南0 ｾﾘ土4南3	陶器	土瓶	口～底	△7.4	△7.0	13.3	▲18.3	362.9	内上半～胴外:緑釉　腰～底外:無釉、ススﾞ・タール付着、墨書有（B21）	京	19c2ndQ
106-372	池遺構　上層	61ｲｺｳ	陶器	蓋	口～天	△12.0	—	1.2	—	13.80	外:灰釉　内:無釉	瀬戸美濃	18c末～19c
106-373	池遺構　上層	ｾﾘ土4南0	陶器	蓋	口～天	109	—	▲1.5	—	15.3	外:灰釉　内:無釉	瀬戸美濃	18c後葉～19c
106-374	池遺構　上層	61ｲｺｳ	陶器	土瓶蓋	口～天	6.3	1.8	2.3	8.2	29.70	外:鉄釉　内:無釉	—	19c前葉
106-375	池遺構　上層	ｾﾘ土4南2	陶器	土瓶蓋	口～天	△8.8	—	2.6	△10.6	34.5	外:灰釉　内:無釉、墨書有（B40）	—	19c前葉
106-376	池遺構　上層	61ｲｺｳ	陶器	土瓶蓋	口～天	△5.0	1.4	3.4	7	29.10	外:長石釉、緑釉文様有　内:長石釉　受:無釉　通気孔有	—	近代
106-377	池遺構　上層	51ｲｺｳ	陶器	土瓶蓋	ほぼ完	7.3	1.4	3.1	8	64.50	外:緑釉、変色（被熱）　内:無釉	京	京　19c2ndQ
106-378	池遺構　上層	51ｲｺｳ	陶器	土瓶蓋	完	6.3	1.4	2.9	8.5	62.00	外:灰釉　内:中央のみ灰釉刷毛塗	—	19c前葉
106-379	池遺構　上層	47ｲｺｳ	陶器	土瓶蓋	口～天	6.3	2.2	3	8.5	57.20	外:灰釉、鉄絵緑釉草花文ヵ　内:無釉	—	幕末～明治初頭
106-380	池遺構　上層	ｾﾘ土4北1	陶器	土瓶蓋	ほぼ完	6.3	1.1	2.6	8.9	61.7	外:緑釉　内:無釉、墨書「寅／六月」（B20）	京	19c2ndQ
106-381	池遺構　上層	ｾﾘ土4西1	陶器	蓋ヵ	口～底	△6.8	△5.2	▲3.9	—	20.6	貼付松樹モチーフ文ヵ　器表荒れ、変色（被熱ヵ）	—	—
106-382	池遺構　上層	ｾﾘ土4北1	陶器	灯火受皿 脚付	ほぼ完	3.4	4.4	3.9	△6.6	49.5	口縁内～脚外:灰釉　底:無釉	—	19c中葉
106-383	池遺構　上層	51ｲｺｳ	陶器	灯火受皿	口～底	△5.6	△3.4	1.5	△8.2	21.40	内～口縁外:鉄釉　底:無釉、重焼痕有	瀬戸美濃	18c末～19c前葉
106-384	池遺構　上層	ｾﾘ土4南1	陶器	三足台 窯道具ヵ	口～底	—	6.7	1.5	—	23.4	無釉	—	—
106-385	池遺構　上層	51ｲｺｳ	陶器［炻器質］	盤	口～底	△14.2	△13.3	5	—	125.00	内外:鉄釉	—	—
106-386	池遺構　上層	ｾﾘ土4南1	陶器	鉢 窯道具ヵ	口～底	△10.4	10.8	6.6	—	187.1	無釉	—	—
106-387	池遺構　上層	ｾﾘ土4北3	陶器	不明	完	3	1.7	1.4	3.6	11.7	無釉　上下:回転糸切（右）	瀬戸美濃	
106-388	池遺構　上層	ｾﾘ土4北5	陶器	徳利	口～肩	4.2	—	▲8.0	—	103.2	内:無釉　口縁内～胴外:灰釉	美濃（高田）	19c前葉
106-389	池遺構　上層	91ｲｺｳ	陶器	徳利	腰～底	—	6.9	▲5.6	—	154.7	内:無釉　外:灰釉　腰～底外:釉拭取り、墨書「○に二」（B36）	美濃（高田）	18c後葉以降
106-390	池遺構　上層	ｾﾘ土4北1	陶器［炻器質］	徳利	胴～底	—	9.9	▲8.2	—	481.1	内:無釉　胴外:鉄釉　底:無釉、墨書「市¬」（B17）	志戸呂	18c末～19c前葉
107-391	池遺構　上層	91ｲｺｳ	陶器	徳利	ほぼ完	△3.8	6.5	19.2	8.2	385.1	口縁内～体外:灰釉、釘書有（Kg91）　底:無釉	美濃（高田）	19c前葉
107-392	池遺構　上層	ｾﾘ土4南5	陶器	徳利	完	3.7	7	19.1	9	562.4	口縁内～胴外:灰釉、釘書「七　々　ち　し」（Kg3）　腰～底外:釉拭取り	美濃（高田）	19c前葉～
107-393	池遺構　上層	61ｲｺｳ	陶器	徳利	ほぼ完	4	7.2	19.3	8.8	477.00	口縁内～胴外:灰釉、釘書「七　々　ち　し」（Kg62）　腰～底外:無釉	美濃（高田）	19c前葉
107-394	池遺構　上層	ｾﾘ土4西2	陶器	徳利	胴～底	—	7.3	▲17.3	11.2	503.4	内:薄い飴釉　胴外:飴釉、釘書「…ち　々」（Kg10）　腰～底外:釉拭取り	美濃（高田）	18c後葉以降
107-395	池遺構　上層	ｾﾘ土4北5	陶器	徳利	完	4	6.6	20	8.9	536.7	胴外:灰釉、釘書「七　ち　し」（Kg108）　腰～底外:無釉	美濃（高田）	19c前葉～
107-396	池遺構　上層	61ｲｺｳ	陶器	徳利	完	4.2	7.3	20.7	8.9	546.00	口縁内～胴外:灰釉、釘書「七　々　ち　し」（Kg60）　腰～底:無釉、重焼痕有	美濃（高田）	19c前葉
107-397	池遺構　上層	61ｲｺｳ	陶器	徳利	完	4.1	6.4	20.3	9.3	490.60	口縁内～胴外:灰釉、釘書「七　々　ち　□」（Kg58）　腰～底外:無釉	美濃（高田）	19c前葉
107-398	池遺構　上層	ｾﾘ土4北6	陶器	徳利	肩～底	7.5	7.5	17.3	10.1	638.0	内:鉄錆付着　胴外:灰釉、釘書「七　々　ち　し」（Kg110）　腰～底外:釉拭取り　頸部打ち欠き除去（鉄漿壺転用）	美濃（高田）	19c初頭以降
108-399	池遺構　上層	61ｲｺｳ	陶器	徳利	完	3.5 3.6	6.8	20.4	8.5	546.10	口縁部内側～胴部外面：灰釉　胴部外面：釘書Kg61「こ　ち　□　七」　腰部～底部外面：無釉	美濃（高田）	19c初頭
108-400	池遺構　上層	ｾﾘ土4北1	陶器	徳利	完	3.1	6.5	19.4	8.3	485.8	胴外:灰釉、釘書「○十」（Kg109）　腰～底外:無釉、タール付着	美濃（高田）	19c中葉～
108-401	池遺構　上層	61ｲｺｳ	陶器	徳利	肩～底	—	6.8	▲18.7	8.2	490.50	口縁内～体外:灰釉、釘書「久」（Kg65）　底外:無釉	美濃（高田）	19c前葉～中葉
108-402	池遺構　上層	47ｲｺｳ	陶器	徳利	完	4.2	6.2	18.8	8.2	502.20	口縁内～胴外:灰釉、釘書「久○」（Kg4）　腰～底外:無釉	美濃（高田）	19c前葉
108-403	池遺構　上層	ｾﾘ土4西	陶器	徳利	胴～底	—	8.2	▲18.9	10.9	796.1	内:薄い飴釉　胴外:飴釉、釘書「久ゝ」（Kg5）　腰～底外:釉拭取り　口縁部除去（転用ヵ）	美濃（高田）	19c初頭以降
108-404	池遺構　上層	61ｲｺｳ	陶器	徳利	完	3.6	6.8	19.8	8.1	580.20	口縁内～胴外:灰釉、釘書「久○」（Kg59）　腰～底外:無釉	美濃（高田）	19c初頭
108-405	池遺構　上層	61ｲｺｳ	陶器	徳利	完	4.2	6.7	20.4	9.6	570.80	口縁内～胴外:灰釉、釘書「久○」（Kg63）　腰～底外:無釉、重焼痕有	美濃（高田）	19c前葉
108-406	池遺構　上層	ｾﾘ土4南0 ｾﾘ土4南1	陶器	徳利	完	4.1	7.2	20	9.2	563.2	胴外:灰釉、釘書「久ト」（Kg15）　腰～底外:釉拭取り	美濃（高田）	18c後葉以降
108-407	池遺構　上層	61ｲｺｳ	陶器	徳利	ほぼ完	3.8	7	21.2	8.7	559.70	口縁内～胴外:灰釉、釘書Kg64「○に川」（Kg64）　腰～底外:無釉	美濃（高田）	19c前葉
108-408	池遺構　上層	ｾﾘ土4西1	陶器	徳利	胴～底	—	8.3	▲13.6	11.5	444.6	内:無釉　胴外:飴釉、釘書「り」（Kg16）　腰～底外:釉拭取り　胴部窓状打ち欠き除去（転用）	美濃（高田）	17c後葉～18c前葉
109-409	池遺構　上層	ｾﾘ土4西1	陶器	植木鉢	胴～底	—	13.9	▲13.1	—	464.9	内:無釉　胴外:灰釉　腰～底外:無釉、中央成後穿孔	瀬戸美濃	18c後葉～
109-410	池遺構　上層	ｾﾘ土4北5	陶器	鉢 手水鉢ヵ	胴～底	—	△20.6	▲11.1	—	554.5	内・胴外:レリーフ文に灰釉・鉄釉掛流し、見込胎土目痕有　腰～底外:無釉	瀬戸美濃	18c後葉～19c前葉
109-411	池遺構　上層	ｾﾘ土4南0	陶器［焼締］	擂鉢	胴～底	—	△13.9	▲10.6	—	290.3	内:擂目1単位7条　底外:刻印「□」カ（Ko13）	丹波	～18c前葉
109-412	池遺構　上層	ｾﾘ土4南1	陶器［焼締］	擂鉢	口～胴	—	—	▲9.2	—	179.6	口縁内～体外:錆釉、擂目1単位8条	堺	18c末～19c前葉
109-413	池遺構　上層	61ｲｺｳ	陶器	大甕	口	△55.0	—	▲5.5	—	525.40	内外:鉄釉	常滑ヵ	—

挿図番号	出土地点	注記	素材	器種	遺存部位	法量（cm） a	b	c	d	重さ（g）	観察内容	産地	時期
110-414	池遺構　上層	47ｲｺｳ	陶器［焼締］	擂鉢	ほぼ完	38.9	15.8	15.5	—	3910.00	内:擂目1単位12条　口縁外:鉄釉　底外：無釉、砂目、円環状の痕跡と工具によるケズリ有	堺または明石	19c2ndQ
111-415	池遺構　上層	ﾓﾘ土4南1	土器	Ⅲ 灯火皿	口～底	△6.8	△3.1	1	—	8.1	内～体外:回転ナデ　底外:回転糸切、墨書有（B25）	江戸	18c～
111-416	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北5	土器	Ⅲ 灯火皿	口～底	△6.8	3	1.4	—	14.7	内～体外:回転ナデ　底外:回転糸切	江戸	18c～
111-417	池遺構　上層	47ｲｺｳ	土器［施釉］	灯火皿	口～底	△7.3	3.6	1.6	—	16.00	全面施釉　内～体外:回転ナデ　底外:回転糸切（左）	江戸	18c末～19c前葉
111-418	池遺構　上層	47ｲｺｳ	土器	Ⅲ 灯火皿	胴～底	—	5.1	▲1.2	—	16.40	内～体外:回転ナデ　底外:回転糸切（右）	江戸	18c～
111-419	池遺構　上層	ﾓﾘ土4西1	土器	Ⅲ 灯火皿	口～底	△9.6	5.4	1.9	—	22.4	内～体外:回転ナデ　底外:回転糸切（左）	江戸	17c 後葉
111-420	池遺構　上層	ﾓﾘ土4南5	土器	Ⅲ 灯火皿	口～底	△9.9	△6.0	2.1	—	10.0	内～体外:回転ナデ　底外:回転糸切	江戸	17c 後葉
111-421	池遺構　上層	ﾓﾘ土4西2	土器	Ⅲ 灯火皿	口～底	△10.8	△6.1	2.1	—	13.0	内～体外:回転ナデ　底外:回転糸切　器表発泡・変形（被熱）	江戸	17c 後葉
111-422	池遺構　上層	ﾓﾘ土4西1	土器	Ⅲ 灯火皿	口～底	△12.7	△7.7	2.4	—	10.8	内～体外:回転ナデ、口縁端ｽｽ・タール付着　底外:回転糸切	江戸	17c 後葉
111-423	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北4	土器	植木鉢	胴～底	—	△6.0	▲4.1	—	63.0	内:回転ロクロ水挽痕　体外:回転ナデ　底外:回転糸切、中央付近穿孔	江戸	18c末～19c中葉
111-424	池遺構　上層	91ｲｺｳ	土器	植木鉢	完	11	6	6.1	—	174.0	内～胴外:回転ロクロ水挽痕　腰外:底部立ち上がり部指頭圧痕　底外:回転糸切（左）、中央付近穿孔	江戸	18c末～19c中葉
111-425	池遺構　上層	51ｲｺｳ	土器	植木鉢	口～底	△10.3	6.2	6.9	—	88.70	底内:回転ロクロ水挽痕　体内～胴外:回転ナデ、底部立ち上がり部指頭厚痕　底外:回転糸切、中央穿付近孔	江戸	幕末～明治初頭
111-426	池遺構　上層	47ｲｺｳ	土器［瓦質］	植木鉢	口～底	△11.8	△9.6	△9.5	—	124.10	内:回転ロクロ水挽痕　口縁端～体外:回転ナデ　底外:回転糸切、中央付近穿孔	江戸	幕末～明治初頭
111-427	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北5	土器［瓦質］	植木鉢	口	△15.7	—	▲6.5	—	27.9	内～体外:回転ナデ	江戸	幕末～明治初頭
111-428	池遺構　上層	ﾓﾘ土4南3	土器	火鉢	口	△17.9	—	▲5.0	—	41.9	内:回転ナデ　口縁端:敲打痕有	江戸	18c後葉～19c中葉
111-429	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北3	土器［瓦質］	火鉢	胴～底	—	△10.9	▲5.6	—	86.6	内:回転ナデ	江戸	幕末～明治初頭
111-430	池遺構　上層	47ｲｺｳ	土器	塩壺	胴～底	—	4.4	▲3.3	—	20.00	内～体外:回転ロクロ水挽痕　底外:回転糸切（左）	江戸	18c後葉～19c中葉
111-431	池遺構　上層	61ｲｺｳ	土器	塩壺	口～胴	—	—	▲6.2	—	28.30	胴内:輪積痕、布目圧痕	関西	17c中葉～後葉
111-432	池遺構　上層	47ｲｺｳ下	土器	塩壺	胴	—	△6.1	▲5.8	—	24.40	内:布目圧痕　雲母を多く含む胎土	関西ヵ	18c中葉～後葉
111-433	池遺構　上層	47ｲｺｳ下	土器	火消壺	口	△19.9	—	▲3.7	—	39.30	内:ｽｽ付着	江戸	17c後葉～
111-434	池遺構　上層	47ｲｺｳ	土器［瓦質］	火消壺	口	△26.0	—	▲2.1	—	94.10	内:ｽｽ・タール付着	—	近代
111-435	池遺構　上層	47ｲｺｳ	土器	塩壺蓋	口～天	△8.0	—	0.6	—	7.00	上:弱い掌圧痕	江戸	18c後葉～19c中葉
111-436	池遺構　上層	ﾓﾘ土4南1	土器	塩壺蓋	完	5.9	—	0.8	—	30.9	下:掌痕	江戸	18c後葉～19c中葉
112-437	池遺構　上層	47ｲｺｳ下	土器	蓋	口～天	△23.8	△21.3	2.8	—	72.30	内～体外:回転ナデ　上:砂目	江戸	17c後葉～
112-438	池遺構　上層＋第2-2層	ﾓﾘ土4南0 35ｲｺｳ西	土器	焙烙	口～底	△33.4	—	▲4.1	—	337.2	内～体外:回転ナデ　底外:ﾁﾁﾚ目	江戸	18c後葉～19c前葉
112-439	池遺構　上層	47ｲｺｳ下	土器	焙烙	口～底	—	—	△3.0	—	23.40	内～体外:回転ナデ　底外:砂目	江戸	19c中葉～
112-440	池遺構　上層	47ｲｺｳ	土器	焙烙	口～底	△33.9	—	▲3.4	—	32.60	内～胴:回転ナデ　底外:砂目、ｽｽ・タール付着	江戸	18c後葉～19c前葉
112-441	池遺構　上層	ﾓﾘ土4南1	土器	焙烙	口～底	—	—	▲2.6	—	28.0	内～体外:回転ナデ　底外:砂目	江戸	19c中葉
112-442	池遺構　上層	ﾓﾘ土4南0	土器［施釉］	鍋	口～胴	△15.0	—	▲4.8	—	37.3	内～体外:透明釉、色絵木実文、ｽｽ・タール付着	江戸ヵ	幕末～明治初頭
112-443	池遺構　上層	ﾓﾘ土4南1	土器［施釉］	灯火受皿	口～底	△5.0	△3.8	1.8	△8.0	14.0	全面施釉　内～体外:回転ナデ　底外:回転糸切、中央焼成後穿孔	江戸	18c末～19c前葉
112-444	池遺構　上層	ﾓﾘ土4西	土器［施釉］	灯火受皿	口～底	△5.9	3.8	2.1	△8.8	41.4	全面施釉　内～体外:回転ナデ　底外:回転糸切（左）	江戸	18c末～19c前葉
112-445	池遺構　上層	ﾓﾘ土4南4	土器［施釉］	灯火受皿	口～底	△6.2	△3.9	2.3	△10.0	21.0	全面施釉　内～体外:回転ナデ　底外:回転糸切	江戸	18c末～19c前葉
112-446	池遺構　上層	ﾓﾘ土4南1	土器［施釉］	灯火受皿 脚付	口～脚	4.7	—	▲4.8	7.4	59.6	内～脚外:施釉　脚内:ケズリ	江戸	18c末～19c前葉
112-447	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北6	土器	不明	底ヵ	—	△9.1	▲1.8	—	31.2	体外:ナデ　腰:面取り　橙褐色で粒子の粗い胎土、径1㎜程度の白色粒子を含む	—	—
113-448	池遺構　下層	池北西	磁器	碗 丸	口～底	△9.9	△3.6	4.5	—	45.60	染付　外:朝顔竹垣文	肥前	18c後葉
113-449	池遺構　下層（間知石掘方）	池北ｷｼ6	磁器	碗 丸	口～底	10.6	3.8	5.5	—	139.00	染付　外:植物文	肥前	18c後葉
113-450	池遺構　下層（間知石掘方）	池西ｷｼ2	磁器	碗	口～底	△12.3	△6.7	6.4	—	27.20	染付　外:草花文　内:口縁圏線、見込圏線区画　器表くもり（被熱）、内面付着物有	肥前	17c後葉
113-451	池遺構　下層	池西	磁器	小皿 輪花	口～底	△8.9	△5.3	1.8	—	22.50	染付　内:草花文　口縁端:口錆	肥前	17c後葉
113-452	池遺構　下層	池南	磁器	小皿 輪花	口～底	10.5	6.8	2.5	—	57.60	染付　内:縁帯蛸唐草文、見込帯文区画環状松竹梅文　外:如意唐草文	肥前	18c 後葉～19c前葉
113-453	池遺構　下層	池西	磁器	Ⅲ	口～底	△12.9	△7.1	2.9	—	26.90	染付　内:見込圏線区画海浜文　高:畳付砂付着顕著	肥前	17c中葉
113-454	池遺構　下層	池北ｷｼ6	磁器	Ⅲ	口～底	△13.4	9.8	3.7	—	77.70	染付　内:縁帯松文ヵ、見込圏線区画松文　外:如意唐草文　高:蛇の目高台　器表荒れ・くもり（被熱ヵ）	肥前	18c後葉
113-455	池遺構　下層	池西	磁器	Ⅲ	口～底	△13.5	△7.6	3	—	71.90	染付　内:縁帯割菊文、見込二重圏線区画、蛇の目釉剥	肥前	18c後葉
113-456	池遺構　下層	池南 池東ｷｼ1	磁器	Ⅲ	口～底	13.6	8.2	3.6	—	166.00	染付　内:縁帯牡丹唐草文、見込二重圏線区画コンニャク印判五弁花　外:如意唐草文　高:「大明年製」銘　口縁端:口錆	肥前	18c2ndQ
113-457	池遺構　下層	池南	磁器	Ⅲヵ 輪花	口～胴	△15.5	—	▲3.4	—	22.40	白磁	肥前	17c後葉
114-458	池遺構　下層	池北ｷｼ6	磁器	大皿	口～底	△29.1	△15.0	5.9	—	228.20	染付　内:植物文　外:如意唐草文　高:目痕有　焼または漆継痕有	肥前	18c後葉～
114-459	池遺構　下層	池北	磁器	鉢	口～胴	△9.9	—	▲3.8	—	10.90	染付　内外:区画草花文　器表くもり（被熱）	肥前	17c後葉
114-460	池遺構　下層	池北西	磁器	蓋物	口～底	△9.9	△5.1	5	—	17.70	染付　外:口縁圏線腰櫛歯帯文区画蛸唐草文	肥前	18c末～
114-461	池遺構　下層	池南ｷｼ2	磁器	段重	口～底	△7.7	7.7	3.1	—	35.90	染付　外:微塵唐草文	肥前	18c末～
114-462	池遺構　下層	池南	磁器	瓶 御神酒徳利	頸～底	—	3.3	▲8.1	5.3	55.00	染付　外:蛸唐草文　器表くもり（被熱）	肥前	18c後葉～
114-463	池遺構　下層	池	磁器	蓋物蓋	口～天	△7.9	—	▲1.9	8	8.20	染付　外:同心円文	肥前	18c末～
114-464	池遺構　下層	池南	磁器	碗蓋 広東	口～天	△9.3	△4.9	2.9	—	20.50	染付　外:紅葉文　高:紅葉文　内:見込中央紅葉枝文、付着物有	肥前	18ｃ末～19c初頭
114-465	池遺構　下層	池北西	磁器	碗蓋 厚手底	口～天	8.8	△3.8	3.1	—	75.30	染付　外:繋帯文、花唐草文　外:口縁四方襷、見込二重圏線区画巻子文	肥前	18c後葉
114-466	池遺構　下層	池西	磁器	碗蓋	口～天	△10.5	△4.3	2.3	—	31.40	染付　外:櫛歯帯文、花文雲窓松竹梅文ヵ　内:口縁四方襷、見込二重圏線区画環状松竹梅文	肥前	18c後葉～19c前葉
114-467	池遺構　下層	池北ｷｼ6	陶器	碗 若松	胴～底	—	4.7	▲3.9	—	31.50	内・胴外:灰釉、鉄絵染付若松文	京	18c2ndQ
114-468	池遺構　下層	池西	陶器	碗 灰釉丸	胴～底	—	5.1	▲6.5	—	141.40	全:灰釉、貫入　高:畳付のみ無釉	瀬戸美濃	17c後葉～18c前葉
114-469	池遺構　下層	池東ｷｼ1	陶器	碗 端反刷毛目	胴～底	—	△4.2	▲3.6	—	20.20	内外:白泥打ち刷毛目	肥前（現川）	17c後葉～18c前葉
114-470	池遺構　下層	池北	陶器	碗 半球ヵ	胴～底	—	4.1	▲3.7	—	71.50	内・胴外:灰釉　高:無釉、刻印「瀬戸助」（Ko8）	京ヵ	—

挿図番号	出土地点	注記	素材	器種	遺存部位	法量（cm）				重さ（g）	観察内容	産地	時期
						a	b	c	d				
115-471	池遺構　下層	池北	陶器	小皿 扇形	口～底	—	▲2.2	1.5	—	7.60	全:灰釉　型打、貼付高台	信楽	18c後葉
115-472	池遺構　下層	池南	陶器	皿 輪花	口～底	△12.5	△7.5	3	—	37.80	内～胴外:灰釉　腰～底外:無釉、型打、貼付高台	瀬戸美濃	17c後葉
115-473	池遺構　下層	池東ｷｼ2	陶器	皿 雲形	口～底	△8.7	5.1	3.1	△13.6	96.20	内～胴外:灰釉　腰～底外:無釉　型打、貼付高台	瀬戸美濃	18c2ndQ
115-474	池遺構　下層	池南ｷｼ2	陶器	大皿	口～胴	△19.4	—	▲4.1	△20.1	71.90	内～体外:灰釉、鉄絵　口縁端:口錆	瀬戸美濃（織部）	17c1stQ
115-475	池遺構　下層	池東ｷｼ1・2	陶器	大皿	胴～底	—	△7.8	▲3.6	—	74.30	内・体外:灰釉、染付文様有、タール付着	肥前	17c後葉
115-476	池遺構　下層	池南	陶器	擂鉢	口～底	△9.8	△9.0	9.5	—	138.30	内～胴外:鉄釉、摺目1単位12条		近代
115-477	池遺構　下層	池北ｷｼ2	陶器	鬢水入れ	口～底	—	▲4.1	4.5	▲3.5	54.60	内～体外:灰釉、鉄絵有　底外:無釉	瀬戸美濃	17c後葉
115-478	池遺構　下層	池東ｷｼ1・2	陶器	香炉	胴～底	△14.9	△14.7	5.6	—	233.90	内・体外:灰釉、上端敲打痕有（転用ヵ）、タール付着 底外:無釉	瀬戸美濃	17c後葉
116-479	池遺構　下層	池東ｷｼ1・2	陶器	大皿	完	30.7	15.5	7.6	33.5	2187.00	内～体外:灰釉、見込胎土目痕7　高:無釉、墨書「表／御臺所」（B22）	瀬戸美濃	19c中葉～
116-480	池遺構　下層	池南	陶器	蓋	口～天	5.6	—	2.8	△11.4	72.90	口縁端～外:鉄釉、重焼痕有　下:無釉、回転糸切（右）	瀬戸美濃	
116-481	池遺構　下層	池北	陶器	小壺 双耳	完	5.4	4.8	7.5	7.7	139.70	内～体外:灰釉　高:無釉	瀬戸美濃	18c後葉～
116-482	池遺構　下層	池西 池南 池東ｷｼ1・2	磁器	壺 腰白三耳	口～肩 胴～底	△10.0	△12.2	—	—	475.60	頸内～胴外:鉄釉　腰～底外:無釉	信楽	～18c中葉
117-483	池遺構　下層	池北ｷｼ4 池南	陶器	壺 腰白三耳	頸～肩	—	—	▲12.3	△22.7	498.50	頸内～胴外:鉄釉	信楽	～18c中葉
117-484	池遺構　下層	池北	陶器 [炻器]	徳利 べこかん	胴～底	—	7	▲8.7	12.3	296.60	底外:刻印「｜）」（Ko14）	備前	—
117-485	池遺構　下層	池南ｷｼ2	陶器	徳利	ほぼ完	3.8	6.7	18.5	8.1	449.70	口縁内～胴外:灰釉　腰～底外:無釉、重焼痕有	美濃（高田）	19c中葉
117-486	池遺構　下層	池南	陶器	徳利	完	3.9	6.8	18.5	8	483.50	口縁内～胴外:灰釉、釘書「七　々　ち　□」（Kg69）　腰～底外:無釉	美濃（高田）	19c前葉
117-487	池遺構　下層	池南	陶器	徳利	完	4.1	6.8	19.2	8.6	537.80	内～胴外:灰釉、釘書「久〇」（Kg72）　腰～底外:無釉、中央焼成後穿孔（転用）	美濃（高田）	19c初頭
117-488	池遺構　下層	池南	陶器	徳利	頸～底	—	6.6	▲18.2	9.4	493.90	口縁内～外:灰釉、釘書「市」（Kg74）　腰～底外:釉拭取り、スス付着	美濃（高田）	18c中葉
118-489	池遺構　下層	池南	陶器	徳利	完	3.7	6.1	19.8	8.2	480.20	口縁内～胴外:灰釉、釘書『久〇」（Kg71）　腰～底外:無釉	美濃（高田）	19c前葉
118-490	池遺構　下層	池南	陶器	徳利	ほぼ完	3.5	7.1	20.1	8.9	529.10	口縁内～体外:灰釉、釘書「久〇」（Kg113）　底外:無釉	美濃（高田）	19c前葉
118-491	池遺構　下層	池南	陶器	徳利	完	4.1	7.2	20	9.2	614.80	口縁内～胴外:灰釉、釘書『久〇」（Kg70）　腰～底外:無釉	美濃（高田）	19c初頭
118-492	池遺構　下層	池南	陶器	徳利	口～底	△3.7	6.8	20.7	8.9	491.70	口縁内～胴外:灰釉、釘書『久〇」（Kg73）　腰～底外:無釉	美濃（高田）	19c初頭
118-493	池遺構　下層	池南	陶器	徳利	口～底	4.7	6.8	20.6	8.6	323.80	口縁内～胴外:灰釉、釘書「久〇」（Kg111）　腰～底外:無釉、重焼痕有	美濃（高田）	19c前葉
118-494	池遺構　下層	池南	陶器	徳利	完	3.6	7	21.2	8.9	647.90	口縁内～胴外:灰釉、釘書『久〇」ヵ（Kg112）　腰～底外:無釉	美濃（高田）	19c初頭
118-495	池遺構　下層	池南ｷｼ2	陶器	徳利	頸～底	—	7.6	▲20.7	10.6	815.90	口縁内～胴外:飴釉、釘書「木□」ヵ（Kg77）　腰～底外:釉拭取り	美濃（高田）	19c前葉～
118-496	池遺構　下層	池南ｷｼ2	陶器	徳利	完	3.7	6.8	21.8	8.8	611.50	口縁内～胴外:灰釉、釘書有（Kg76）、タール付着 底外:無釉、重焼痕有	美濃（高田）	19c初頭
118-497	池遺構　下層	池西	土器	皿 灯火皿	胴～底	—	△5.4	▲0.7	—	4.20	内・体外:回転ナデ　底外:回転糸切	江戸	18c～
118-498	池遺構　下層	池北西	土器	植木鉢	胴～底	—	△6.4	▲4.5	—	42.70	内:回転ロクロ水挽痕　体外:回転ナデ　底外:回転糸切、中央穿孔	江戸	幕末～明治初頭
118-499	池遺構　下層	池北ｷｼ2	土器	皿 灯火皿	口～底	△9.3	△6.2	1.9	—	14.30	内～体外:回転ナデ、内面スス・タール付着　底外:回転糸切（左）、中央焼成後穿孔	—	19c前葉～
118-500	池遺構　下層	池南ｷｼ2	土器 [瓦質]	植木鉢	口～胴	△13.4	—	▲5.8	—	50.70	内～体外:回転ナデ、櫛歯状工具で波形の線刻文	江戸	近代（19c4thQ）
118-501	池遺構　下層	池北西 池北	土器 [瓦質]	植木鉢	ほぼ完	10.7	6.8	7.8	10.9	205.20	内～体外:回転ロクロ水挽痕　底外:回転糸切（左）、中央穿孔	江戸	18c末～19c中葉
119-502	池遺構　下層	池南	土器 [施釉]	乗燭	灯芯立て欠損	—	4	3.1	7.7	49.70	全:透明釉　内～体外:回転ナデ　底外:回転糸切（左）、中央芯立裏に穿孔	江戸	18c末～19c初頭
119-503	池遺構　下層	池北ｷｼ4	土器	灯火受皿	ほぼ完	8	6.7	2.3	11.6	144.60	内～体外:回転ナデ、一部に銀色粒子　底外:回転糸切（左）	江戸	18c前葉
119-504	池遺構　下層	池南ｷｼ2	土器	塩壺蓋	完	6.9		1.2	—	72.30	外:掌痕　側～内:ナデ、側面にバリ有	関西	18c中葉～後葉
119-505	池遺構　下層	池南	土器	塩壺蓋	口～天	△7.0	—	▲1.5	—	27.40	外～側:ナデ　内:布目圧痕	関西	18c中葉～後葉
119-506	池遺構　下層	池東ｷｼ1・2	土器	塩壺蓋	口～天	△7.9		1.9	—	37.70	外～側:ナデ　内:布目圧痕	関西	18c初頭～前葉
119-507	池遺構　下層	池北	土器	火消壺	口	△237	—	▲4.9	—	76.40	内外:回転ナデ、スス・タール付着	江戸	17c後葉～
119-508	池遺構　下層	池西	土器 [瓦質]	火消壺	口	△25.7	—	▲7.1	—	113.70	内外:回転ナデ、スス・タール付着	—	近代
120-509	93号遺構　上層	93ｲｳ南西上	磁器	小杯	口～底	△7.6	△3.6	3.4	—	7.30	白磁　極めて薄手	肥前	17c4thQ
120-510	93号遺構　上層	93ｲｳ西上	磁器	小杯 端反	口～底	—	2.4	▲4.3	—	19.60	染付　外:文様有	瀬戸美濃	18c後葉
120-511	93号遺構　上層	93ｲｳ北東上	磁器	小杯 端反	口～底	△7.8	3.5	6	—	79.10	染付　外:「壽」字文	肥前（初期伊万里）	1630～40年代
120-512	93号遺構　上層	93ｲｳ南西上	磁器	碗 筒形	口～底	7.6	4.1	6.3	—	119.80	青磁染付　外:青磁釉　内:口縁四方襷、見込二重圏線区画五弁花	肥前	18c中葉～後葉
120-513	93号遺構　下層	93ｲｳ北西下	磁器	碗 丸	口～底	△8.9	△3.6	4.5	—	31.60	染付　外:梅樹文　内:擦痕顕著　漆継痕有	肥前	18c後葉
120-514	93号遺構　下層	93ｲｳ北西下	磁器	碗 腰張	口～底	△9.0	3.4	5.9	—	92.20	染付　外:縦区画幾何学文　内:口縁帯圏線、見込二重圏線区画五弁花	肥前	18c後葉
120-515	93号遺構　上層 ＋下層	93ｲｳ南東上 93ｲｳ北西下	磁器	碗 丸	口～底	△10.4	5.5	5.4	—	58.60	染付　外:牡丹文　内:口縁二重圏線、見込圏線区画環状松竹梅文　高:「大明年成」銘　付着物有	肥前	18c末～19c前葉
120-516	93号遺構　上層	93ｲｳ南西上	磁器	碗 丸	ほぼ完	10.1	3.9	5.2	—	90.80	染付　外:扇連結文　内:口縁二重圏線、見込圏線区画草花文ヵ　付着物有	肥前	18c後葉
120-517	93号遺構　下層	93ｲｳ北西下	磁器	碗 大形丸	口～底	△15.3	△5.5	7.1	—	104.30	染付　外:草花文　内:口縁四方襷、見込二重圏線区画草花文　付着物あり	肥前	19c前葉
120-518	93号遺構　上層	93ｲｳ南東上	磁器	碗 大形丸	口～底	△15.4	△5.6	7.6	—	103.60	染付　外:牡丹蝶文　内:口縁四方襷、見込二重圏線区画環状松竹梅文　付着物あり	肥前	19c前葉
120-519	93号遺構　上層	93ｲｳ西上	磁器	皿	口～底	△12.9	△7.6	3	—	20.80	染付　内:縁帯文様有、見込二重圏線区画　外:圏線ヵ器表発泡（被熱ヵ）	肥前	18c後葉
120-520	93号遺構　下層	93ｲｳ北西下	磁器	深皿	口～底	△13.2	△7.9	4.9	—	86.90	青磁染付　外:青磁釉　内:口縁四方襷、見込二重圏線区画かたばみ鷺文　高:蛇の目高台、角枠うず「福」銘ヵ	肥前	18c後葉
120-521	93号遺構　上層	93ｲｳ北西上	磁器	蓋	口～天	△4.0	—	▲1.3	5.1	8.80	上色絵　外:丸文	肥前	17c
120-522	93号遺構　上層	93ｲｳ西上	磁器	合子蓋	口～天	5	—	▲1.2	—	4.20	染付　外:松竹梅文ヵ	肥前	18c末～19c前葉
120-523	93号遺構　下層	93ｲｳ北西下	磁器	碗蓋 端反	口～天	10.2	4.1	2.8	—	54.10	染付　外:銀杏文　内:口縁二重圏線、見込圏線区画銀杏文	肥前	19c前葉
121-524	93号遺構　上層	93ｲｳ南西上	陶器	小碗	口～底	△6.0	2.6	3.5	—	22.00	内～体外:灰釉　高:無釉、墨書有（B23）	京・信楽	
121-525	93号遺構　上層	93ｲｳ西上	陶器	碗	底	—	△5.0	▲2.8	—	26.00	内・体外:灰釉　体外:染付文様有　高:無釉、刻印「中金」（Ko1）	肥前	17c末～18c前葉
121-526	93号遺構　上層	93ｲｳ北西上	陶器	大皿 三島手	口～胴	—	—	▲7.5	—	69.60	内:スタンプ陰刻幾何学文に白泥流し込み	肥前	17c末～18c前葉
121-527	93号遺構　上層	93ｲｳ西上 93ｲｳ南東上 93ｲｳ南西上	陶器	大皿	口～底	21.5	8.4	4.2	—	453.00	内～体外:青緑釉　高:無釉	肥前	17c末～18c前葉
121-528	93号遺構　上層	93ｲｳ西上	陶器 [焼締]	擂鉢	口～底	—	△18.0	▲5.5	—	216.10	内:擂目1単位8条　外:鉄釉、指頭圧痕顕著	丹波	17c中葉～18c前葉

挿図番号	出土地点	注記	素材	器種	遺存部位	法量（cm）				重さ（g）	観察内容	産地	時期
						a	b	c	d				
121-529	93号遺構　上層	93ｲｺｳ西上	陶器	大鉢	口～底	△30.5	△17.0	7.2	—	400.50	全:鉄釉、見込と畳付に胎土目有	瀬戸美濃	17c前葉～中葉
121-530	93号遺構　上層	93ｲｺｳ西上	陶器［焼締］	擂鉢	口～胴	△31.5	—	▲9.6	—	385.50	内:摺目1単位10条	堺	18c3rdQ
122-531	93号遺構　下層	93ｲｺｳ北西下	陶器	小壺	ほぼ完	2.7	3.1	7.6	5.7	74.40	内～体外:鉄釉　腰～底外:無釉、回転糸切（右）	瀬戸美濃ヵ	—
122-532	93号遺構	93ｲｺｳ	陶器	徳利	口～胴	—	—	▲14.4	—	172.40	口縁内～体外:飴釉　胴:楕円形打ち欠き窓（転用）、スス付着	美濃（高田）	18c前葉
122-533	93号遺構　下層	93ｲｺｳ北西下	陶器	徳利	肩～底	5.5	6.5	14.8	8.8	450.50	口縁内～体外:灰釉、釘書「久・」（Kg46）　腰～底外:釉拭取り、鉄錆付着　頸部打ち欠き（鉄漿壺転用）	美濃（高田）	18c後葉～19c前葉
122-534	93号遺構　上層	93ｲｺｳ南西上	陶器	徳利	肩～底	—	6.5	▲17.3	9.1	478.60	口縁内～体外:灰釉、釘書「¬市」（Kg47）　腰～底外:釉拭取り	美濃（高田）	～19c初頭
122-535	93号遺構	93ｲｺｳ	土器	皿 灯火皿	口～底	△9.6	5.1	2.2	—	30.90	内:回転ナデ　体外:回転ケズリ　底:黒変	江戸	17c後葉～
122-536	93号遺構　上層	93ｲｺｳ北西上	土器	皿	ほぼ完	14.8	8.2	3	—	121.50	内～体外:回転ナデ、口縁端にスス・タール付着　底外:回転糸（中央右ヵ）、墨書有（B46）	江戸	18c～
122-537	93号遺構　上層	93ｲｺｳ南東上	土器［施釉］	皿 灯火皿	ほぼ完	5.1	4	2.2	8.3	59.70	全:透明釉　内～体外:回転ナデ、口縁端スス・タール付着　底外:回転糸切（左）	江戸	18c末～19c初頭
122-538	93号遺構　上層	93ｲｺｳ西上	土器［施釉］	乗燭	完	1	3.3	2	5.8	32.90	全:透明釉　内～体外:回転ナデ、灯芯立て端部にスス・タール付着　底外:回転糸切（左）	江戸	18c末～19c初頭
122-539	93号遺構　上層	93ｲｺｳ南西上 93ｲｺｳ南東上	土器［瓦質］	灰落とし	胴～底	—	△12.5	▲9.3	—	122.60	内:回転ナデ　体外:渦状回転陰刻文施文後ミガキ　底:中央焼成後穿孔	江戸	18c末～
122-540	93号遺構　下層	93ｲｺｳ南東下	土器	塩壺蓋	完	7.8	—	2.2	—	120.00	外～側:回転ナデ　内:ナデの下に布目圧痕	関西	17c末～18c初頭
122-541	93号遺構　上層	93ｲｺｳ南西上	土器	焙烙	口～底	—	—	—	—	31.80	内～体外:回転ナデ　底外:砂目	江戸	17c後葉～18c初頭
122-542	93号遺構	93ｲｺｳ	土器	焙烙	口～底	—	—	—	—	24.50	内～体外:回転ナデ　底外:砂目	江戸	18c
123-543	32号遺構	32-1ｲｺｳ	磁器	飯碗蓋	口～天	△9.8	△2.8	3.5	—	10.0	コバルト染付　内外:同心円文	—	近代
123-544	90号遺構	90ｲｺｳ	土器	塩壺蓋	口～天	8.8	—	1.1	—	16.1	上～側:ナデ　下:掌痕、部分的に摩滅	江戸	18c後葉～19c中葉
123-545	94号遺構	94ｲｺｳ	磁器	皿	口～底	△12.7	△4.3	3.4	—	33.5	染付　内:縁帯草花文、見込二重圏線区画文様有　高:碁笥底	肥前	17c後半
123-546	66号遺構	66ｲｺｳ	磁器	皿	口～底	△14.5	△9.0	3	—	27.1	染付　内:縁帯紅葉帯文、見込二重圏線区画一点文有	肥前	17c後葉～18c初頭
123-547	66号遺構	66ｲｺｳ	磁器	皿 輪花	口～底	14.8	9.1	3.1	—	127.8	白磁　内:型打レリーフ縁帯葡萄文、見込花文ヵ　高:畳付のみ無釉、目痕有　口縁端:口錆	肥前	17c後葉
123-548	66号遺構	66ｲｺｳ	土器	皿	口～底	△15.5	△8.1	3	—	26.6	内～体外:回転ナデ、口縁端タール付着　底外:回転糸切	江戸	17c中葉～
124-549	2号遺構	2ｲｺｳ	磁器	小碗	口～底	△8.8	△4.2	4.4	—	20.1	染付　外:梅樹文	肥前	19c～
124-550	2号遺構	2ｲｺｳ	磁器	碗 丸	口～底	△10.2	4	5.4	—	29.9	染付　外:牡丹唐草文　内:口縁内重枡形帯文、見込二重圏線区画環状松竹梅文	肥前	18c末～19c前葉
124-551	2号遺構	2ｲｺｳ	磁器	小皿 輪花	口～底	△9.9	5.8	2.2	—	72.3	染付　内:山水楼閣文　口縁端:口錆	肥前	19c前葉～中葉
124-552	2号遺構	2ｲｺｳ	陶器	大皿	底	—	△9.0	▲20	—	20.6	内:灰釉、染付山水楼閣文ヵ　高:無釉、刻印「中／金村」（Ko10）	肥前	17c後葉
124-553	2号遺構	2ｲｺｳ	土器	皿	口～底	△6.8	△4.0	1.1	—	6.6	内～体外:回転ナデ　底外:回転糸切（左）	江戸	18c～
124-554	2号遺構	2ｲｺｳ	土器［瓦質］	植木鉢	胴～底	—	59	▲4.0	—	59.2	内・体外:回転ロクロ水挽痕、立ち上がり部に指頭圧痕　底外:回転糸切（左）、中央穿孔	江戸	18c末～19c中葉
124-555	2号遺構	2ｲｺｳ	土器	火鉢	腰～底	—	△12.1	▲2.9	—	32.6	内:回転ロクロ水挽痕　体外:弱いミガキ	江戸	19c前葉～中葉
124-556	3号遺構	3ｲｺｳ	磁器	皿	口～底	△13.1	△7.3	3	—	103.9	染付　内:縁帯蔓草文、見込二重圏線区画五弁花、蛇の目釉剥	肥前	18c後葉
124-557	6号遺構	6ｲｺｳ	磁器	小杯 紅猪口	口～底	△5.1	1.8	2.4	—	8.80	鉄釉　外:「み□□／小町紅」	肥前	18c末～
124-558	6号遺構	6ｲｺｳ	磁器	小杯	口～底	△7.9	2.8	3.4	—	20.30	染付　外:若松文	肥前	19c前葉
124-559	6号遺構	6ｲｺｳ	磁器	小杯	口～底	△7.4	△2.7	3.4	—	20.40	染付　外:笹文	肥前	18c
124-560	6号遺構	6ｲｺｳ	磁器	碗 小広東	口～底	△9.8	△4.1	5.3	—	22.80	染付　外:縦割区画幾何学文　内:口縁二重圏線、見込圏線区画	肥前	18c末～19c初頭
124-561	6号遺構	6ｲｺｳ	磁器	碗 厚手底	口～底	△9.8	3.5	5.7	—	89.70	染付　外:梅樹文	肥前	17c末～18c中葉
124-562	6号遺構	6ｲｺｳ	磁器	碗 端反	ほぼ完	9.6	4	5.2	—	76.30	内～体外:茗荷文　高:焼継印「イ」カ（Y1）　焼継痕有、墨付着	肥前	18c末～19c前葉
124-563	6号遺構	6ｲｺｳ	磁器	碗 端反	口～底	△9.5	△4.5	5.7	—	37.00	染付　外:瓢箪文	肥前	18c末～19c前葉
124-564	6号遺構	6ｲｺｳ	磁器	碗 広東	口～底	△10.3	△6.3	5.6	—	37.00	染付　外:山水文　焼継痕有	肥前	18c末～19c初頭
124-565	6号遺構	6ｲｺｳ	磁器	碗 端反	口～底	△9.6 △9.5	4.7	4.6	—	54.50	染付　外:牡丹唐草文　内:口縁楕円繋ヵ、見込二重圏線区画昆虫文カ　高:異体字銘有	中国	18c後葉～19c前葉
124-566	6号遺構	6ｲｺｳ	磁器	碗 端反	口～底	△9.3	3.9	5.1	—	38.40	染付　外:区画牡丹唐草文　内:見込中央草花文	瀬戸美濃	18c末～19c前葉
125-567	6号遺構	6ｲｺｳ	磁器	鉢	胴～底	—	7.8	▲5.7	—	48.80	染付　外:文人文　内:見込二重圏線区画松樹文　高:異体字銘有、焼継印有（Y2）　焼継痕有	中国	18c後葉～19c前葉
125-568	6号遺構	6ｲｺｳ	磁器	蓋物	ほぼ完	7.5	4.5	7	—	124.90	染付　外:水辺鷺文	肥前	17c末
125-569	6号遺構	6ｲｺｳ	磁器	瓶 御神酒徳利	ほぼ完	—	2.9	▲5.9	4.2	46.20	染付　外:梅花笹文	肥前	18c～
125-570	6号遺構	6ｲｺｳ	磁器	瓶	ほぼ完	△2.0	2.1	5	5.3	46.40	染付　外:草花文	肥前	18c～
125-571	6号遺構	6ｲｺｳ	磁器	蓋	口～天	6.6	0.8	2.1	7.4	17.00	白磁	肥前	
125-572	6号遺構	6ｲｺｳ	磁器	蓋	ほぼ完	9.2	1.2	2.4		97.40	染付　外:同心円幾何学文	肥前	18c後葉
125-573	6号遺構	6ｲｺｳ	磁器	蓋	口～天	△11.2	△3.1	▲3.3	△12.6	56.00	染付　外:コンニャク印判笹竜胆丸文	肥前	18c中葉～
125-574	6号遺構	6ｲｺｳ	陶器	小杯	口～底	△5.6	△3.5	3.3	—	16.80	内～体外:灰釉　底外:無釉	瀬戸美濃	18c
125-575	6号遺構	6ｲｺｳ	磁器	碗 灰釉端反	口～底	△8.5 △11.2	△3.0	5.3	—	26.00	内～体外:灰釉、貫入　高:無釉	京・信楽	19c中葉
125-576	6号遺構	6ｲｺｳ	陶器	碗 半球	口	—	—	▲4.5	—	9.90	内・外:灰釉、上色絵菊文	京	17c末～18c前葉
125-577	6号遺構	6ｲｺｳ	陶器	碗 丸腰	口	△11.0	—	▲5.3	—	29.50	内～体外:灰釉、上色絵笹文ヵ	京	17c末～18c前葉
125-578	6号遺構	6ｲｺｳ	陶器	碗 渋紙手	口～底	△10.1	3.8	6.6	—	53.80	全:鉄釉、畳付のみ釉拭取り	瀬戸美濃	18c後葉
125-579	6号遺構	6ｲｺｳ	陶器	碗 灰釉丸	口～底	△12.9	△5.8	8.7	—	92.10	内～体外:灰釉　高:無釉	瀬戸美濃	17c末
125-580	6号遺構	6ｲｺｳ	陶器	碗 灰釉丸	口～底	△12.5	5.8	8.6	—	264.20	内～体外:灰釉、見込胎土目痕3　高:無釉	瀬戸美濃	17c末
125-581	6号遺構	6ｲｺｳ	陶器	碗 灰釉丸	口～底	△12.8	5.5	8.8	—	245.80	内～体外:灰釉　高:無釉、圏線状に墨溜り	瀬戸美濃	17c末
126-582	6号遺構	6ｲｺｳ	陶器	碗 流し飴釉	口～底	△12.3	4.9	6.6	—	125.20	内～胴外:飴釉に鉄釉流し掛け　高:無釉、兜巾ケズリ	萩	1760～70年代
126-583	6号遺構	6ｲｺｳ	陶器	香炉	口～底	△9.0	5	3.9	—	81.40	口縁端～胴外:灰釉　腰～底外:無釉	瀬戸美濃	18c後葉～
126-584	6号遺構	6ｲｺｳ	陶器	灰落とし	口	△10.8	—	▲6.9	—	64.00	口縁内～体外:長石釉に緑釉流し掛け　内:無釉	京	18c末～19c前葉
126-585	6号遺構	6ｲｺｳ	陶器	半胴甕	口～底	16.4	10.7	11.9	—	479.10	内～胴外:鉄釉　腰～底外:無釉、中央付近焼成後穿孔	美濃	18c末～
126-586	6号遺構	6ｲｺｳ	陶器	徳利	ほぼ完	4.8	6.7	18.9	8.9	510.60	口縁端～体外:灰釉、釘書「久〇」（Kg114）　底外:無釉、スス付着	美濃（高田）	19c前葉
126-587	6号遺構	6ｲｺｳ	陶器	徳利	肩～底	—	8.2	▲17.7	12	760.60	内面：無釉　体部外面：飴釉　底部外面：釉拭き取り　体部外面：釘書Kg39「¬市」	美濃（高田）	17c末
126-588	6号遺構	6ｲｺｳ	土器［施釉］	小杯 鬼福杯	口～底	▲4.0	▲3.5	3	—	29.50	内:透明釉　外:鉄釉、型打ち鬼面、鬼面顎に陰刻「賤機」　内:陰刻宝珠文	駿府	19c前葉以前
126-589	6号遺構	6ｲｺｳ	土器	釜形製品	底	—	2.6	▲2.8	6.3	38.20	内～体外:回転ナデ　底外:回転糸切（左）	江戸	18c～

挿図番号	出土地点	注記	素材	器種	遺存部位	法量（cm） a	b	c	d	重さ（g）	観察内容	産地	時期
126-590	6号遺構	6ｲｺｳ	土器	塩壺	底	—	3.5	▲2.3	—	17.00	内～体外:ロクロ水挽痕　底外:.回転糸切（左）	江戸	18c末～19c前葉
126-591	6号遺構	6ｲｺｳ	土器	塩壺蓋	完	8		2.4	—	153.20	外～側:ナデ、縁辺面取り、中央よりやや偏って穿孔（転用ヵ）　内:布目圧痕、スス・タール付着	関西	18c前葉～中葉
126-592	6号遺構	6ｲｺｳ	土器	火鉢	口	△16.7	—	▲4.9	—	64.80	内:回転ナデ、スス・タール付着　外:ミガキ　口縁端:敲打痕有	江戸	18c後葉～19c前葉
126-593	6号遺構	6ｲｺｳ	土器［瓦質］	火鉢	口	—	—	▲5.7	—	59.20	内:回転ナデ、口縁スス付着　外:回転陰刻かのこ文　口縁端:ミガキ	江戸	18c後葉～19c前葉
126-594	6号遺構	6ｲｺｳ	土器	灰落としヵ	口	—	—	▲6.7	—	59.60	内:回転ナデ、口縁スス付着　体外:松樹レリーフ文に漆塗り	—	近代
127-595	6号遺構	6ｲｺｳ	土器	Ⅲ灯火皿	口～底	△9.8	△5.2.	1.9	—	11.70	内～体外:回転ナデ、放射状線刻　底外:回転糸切痕（左）、中央焼成後穿孔	江戸	17c後
127-596	6号遺構	6ｲｺｳ	土器	Ⅲ胞衣皿	口～底	△20.0	△12.0	4.1	—	96.20	内～体外:回転ナデ　底外:回転糸切	江戸	18c後葉～19c中葉
127-597	6号遺構	6ｲｺｳ	土器	焙烙	口～底	—	—	▲8.0	—	37.90	内～体外:回転ナデ　底外:チヂレ目	江戸	18c後葉～19c前葉
127-598	6号遺構	6ｲｺｳ	土器［施釉］	Ⅲ灯火皿	口～底	△5.2	△3.2	1.8	△8.0	19.70	全:透明釉　内～体外:回転ナデ　底外:回転糸切（左）	江戸	18c末～19c初頭
127-599	6号遺構	6ｲｺｳ	土器［施釉］	灯火皿脚付	口～底	4.7	7.5	7.5	7.5	103.90	内～体外:透明釉　脚内:ケズリ	江戸	18c末～19c初頭
127-600	9号遺構	9ｲｺｳ	陶器	土瓶蓋	ほぼ完	6.4	1.8	3.2	8.6	73.3	外:鉄釉に飴釉　内:無釉	—	19c前葉
127-601	9号遺構	9ｲｺｳ	土器	焙烙	口～底	—	—	▲1.9	—	17.7	内～体外:回転ナデ　底外:砂目　部分的に透明釉付着	江戸	19c中葉～
127-602	12号遺構	12ｲｺｳ	土器	灰落とし	ほぼ完	12.3	15	10	19.4	993.3	内:回転ロクロ水挽痕、スス・タール付着　底外:静止挽切	江戸	18c中葉～
127-603	17号遺構	17ｲｺｳ	磁器	碗端反	口～底	△10.0	△3.6	5.7	—	41.5	染付　外:桜花竹垣文　内:口縁帯圏線、見込圏線区画	瀬戸美濃	19c前葉～中葉
127-604	17号遺構	17ｲｺｳ	磁器	蓋物	口～底	△11.7	△6.0	6.1	—	76.6	染付　外:冊子文	肥前	19c前葉
127-605	17号遺構	17ｲｺｳ	磁器	小皿輪花	口～底	△12.3	△7.6	2.9	—	50.5	染付　内:海浜文ヵ　口縁端:口錆　高:墨書「…頭」ヵ（B42）	肥前	19c前葉～中葉
127-606	17号遺構	17ｲｺｳ	磁器	植木鉢	腰～底	—	13.1	▲9.0	—	241.9	染付　外:山水楼閣文ヵ　底:割菱形三足、中央穿孔	瀬戸美濃	19c前葉～
128-607	17号遺構	17ｲｺｳ	陶器	鳥の餌入れ	口～底	△3.8	△4.5	2.4	5.1	6.9	内～体外:灰釉　底外:回転糸切	瀬戸美濃	18c～
128-608	17号遺構	17ｲｺｳ	陶器	土瓶蓋	完	5.8	2.9	1.6	7.8	50.7	外:灰釉　内:無釉	—	19c前葉
128-609	17号遺構	17ｲｺｳ	土器	焙烙	口～底	—	—	▲2.2	—	24.9	内～体外:回転ナデ　底外:砂目　部分的に透明釉付着	江戸	19c中葉～
128-610	24号遺構	24ｲｺｳ	磁器	大皿	腰～底	—	△13.9	▲3.5	—	101.3	染付　内:葡萄短冊文　外:葡萄唐草文ヵ　高:二重角枠渦「福」銘ヵ	肥前	17c後葉～18c前葉
128-611	24号遺構	24ｲｺｳ	陶器［焼締ヵ］	不明	底	—	9.5	▲1.9	—	116.9	体外:鉄釉　底外:刻印「◇」（Ko11）器表剥落（被熱ヵ）、破断面一部摩滅（転用砥）	—	—
128-612	24ｲｺｳ	24ｲｺｳ	土器	炉形土器	口	—	—	▲7.8	—	242.5	内:ナデ、スス付着	江戸	
128-613	24号遺構	24ｲｺｳ	土器	焙烙	口～底	—	—	▲4.5	—	48.0	内～体外:回転ナデ　底外:チヂレ目　変形・赤化（被熱）	江戸	17c末～18c初頭
128-614	24号遺構	24ｲｺｳ	土器	Ⅲ	口～底	△9.0	△5.3	1.7	—	7.6	内～体外:回転ナデ、口縁端スス・タール付着　底外:回転糸切	江戸	17c後葉～
128-615	25号遺構	25ｲｺｳ掘方	土器	焙烙	口～底	—	—	▲3.2	—	27.5	内～体外:回転ナデ　底外:チヂレ目	江戸	18c後葉～19c前葉
128-616	33号遺構	Ⅱ区33ｲｺｳ	磁器	大皿	口～底	△21.5	△14.1	3.2	—	13.6	染付　内:縁帯型打亀甲文ヵ、見込二重圏線区画草花文ヵ　器表に砕片融着（被熱）	肥前	17c後葉～18c初頭
129-617	68号遺構	68ｲｺｳ	磁器	小碗丸	口～底	7.4	3.7	3.4	—	39.1	染付　外:花小文　内:口縁圏線、見込圏線区画五弁花	肥前	17c後葉～18c前葉
129-618	68号遺構	68ｲｺｳ	陶器	小碗	口～底	6.8	2.7	4.1	7	46.0	内～胴外:灰釉　高:無釉	瀬戸美濃	
129-619	68号遺構	68ｲｺｳ	陶器	碗若松	口～底	△9.3	4	5	—	49.4	内～胴外:灰釉、鉄絵若松文　高:無釉	京・信楽	18c後葉～19c前葉
129-620	68号遺構	68ｲｺｳ	陶器	碗鐙手	口～底	7.1	4.1	6	—	99.2	内～口縁外:濃い鉄釉　胴～底外:横位連続刺突文に鉄釉	瀬戸美濃	19c前葉
129-621	68号遺構	68ｲｺｳ	陶器	徳利	腰～底	—	6.6	▲5.0	—	134.5	内:無釉　胴外:灰釉　腰～底外:釉拭取り、墨書有（B43）	美濃（高田）	19c～
129-622	68号遺	68ｲｺｳ	陶器	灯火皿	口～底	7.7	2.9	1.5	—	23.6	内～体外:鉄釉、重焼痕有　底外:無釉	瀬戸美濃	18c末～19c前葉
129-623	68号遺構	68ｲｺｳ	土器	Ⅲ	口～底	—	△7.4	▲2.3	—	40.9	内・体外:回転ナデ、タール付着　底外:回転糸切（左）、中央焼成後穿孔	江戸	17c後葉～
129-624	69・74号遺構	69・74ｲｺｳ	磁器	小杯ヵ	胴～底	—	3.4	▲3.3	—	16.9	染付　外:文様有　高:「雅」銘ヵ	中国	18c後葉～19c前葉
129-625	69・74号遺構	69・74ｲｺｳ	磁器	碗丸	口～底	△13.0	5.6	5.9	—	73.2	染付　外:草文ヵ	肥前	17c 後半
129-626	69・74号遺構＋70号遺構	69・74ｲｺｳ 70ｲｺｳ	磁器	碗腰折端反	口～底	9.5	4.7	6.1	—	52.9	染付　外:草花竹垣文　高:「大明年製」銘	肥前	17c後葉～18c前葉
129-627	69・74号遺構	69・74ｲｺｳ	磁器	瓶	口～胴	7.9	—	▲13.4	—	208.0	青磁	肥前	
129-628	69・74号遺構	69・74ｲｺｳ	磁器	香炉	口～底	△12.9	△4.7	5.9	—	94.3	青磁　腰外:目痕4	肥前	
129-629	69・74号遺構	69・74ｲｺｳ	陶器	大皿三島手	口～底	△21.8	9.7	5.5	—	527.6	内:スタンプ陰刻幾何学文に白泥流し込み　高:墨書「賄所」（B37）	肥前	18c前葉
130-630	69・74号遺構	69・74ｲｺｳ	土器	Ⅲ灯火皿	口～底	△11.8	△8.0	1.8	—	22.5	内～体外:回転ナデ、口縁端を打ち欠いて窪みを作る、スス・タール付着　底外:回転糸切	江戸	17c後葉～
130-631	69・74号遺構	69・74ｲｺｳ	土器	Ⅲ灯火皿	口～底	△11.2	△7.4	1.9	—	17.5	内～体外:回転ナデ、口縁端スス・タール付着　底外:回転糸切	江戸	17c後葉～
130-632	69・74号遺構	69・74ｲｺｳ	土器	Ⅲ灯火皿	口～底	△11.5	△6.0	2.2	—	19.9	内～体外:回転ナデ　底外:回転糸切（左）	江戸	17c後葉～
130-633	69・74号遺構	69・74ｲｺｳ	土器	Ⅲ灯火皿	ほぼ完	11.6	7	2.3	—	56.1	内～体外:回転ナデ、見込タール付着　底外:回転二重糸切（左）	江戸	17c後葉～
130-634	69・74号遺構＋70号遺構	69・74ｲｺｳ 70ｲｺｳ	土器	Ⅲ灯火皿	ほぼ完	11.6	7.5	2.3	—	55.9	内～体外:回転ナデ　底外:回転糸切（左）、墨書有（B45）	江戸	17c後葉～
130-635	69・74号遺構＋70号遺構	69・74ｲｺｳ 70ｲｺｳ	土器	Ⅲ灯火皿	完	11.4	6.7	2	—	107.8	内～体外:回転ナデ、口縁端スス・タール付着　底外:回転糸切（左）、墨書「む□□□／□い」（B44）	江戸	17c後葉～
130-636	69・74号遺構	69・74ｲｺｳ	土器	Ⅲ灯火皿	口～底	△12.7	△8.4	2.3	—	18.8	内～体外:回転ナデ　底外:回転糸切	江戸	17c後葉～
130-637	69・74号遺構	69・74ｲｺｳ	土器	火鉢	腰～底	—	△18.5	▲4.7	—	71.2	内・外:ナデ　底:摩耗（転用砥ヵ）	江戸	17c前葉～
130-638	70号遺構	70ｲｺｳ	磁器	碗丸	ほぼ完	10.5	4.5	5.8	—	123.6	染付　外:藤樹文	肥前	18c中葉
130-639	71号遺構	71ｲｺｳ	土器	焙烙	口～底	△19.8	—	▲5.2	—	28.8	内～体外:回転ナデ　底外:チヂレ目	江戸	17c末～18c初頭
130-640	72号遺構	72ｲｺｳ	磁器	小碗丸	口～底	△8.0	△3.1	3.9	—	18.6	染付　外:斜格子花窓草花文	肥前	18c後葉～19c中葉
130-641	85号遺構	85ｲｺｳ	磁器	小杯	口～底	△5.5	2.5	2.2	—	19.5	染付　外:草花蝶文	肥前	18c～
130-642	85号遺構	85ｲｺｳ	磁器	小碗厚手底	口～底	△8.2	3.8	4.9	—	72.2	染付　外:草花文	肥前	17c末～18c後葉
130-643	85号遺構	85ｲｺｳ	陶器	土瓶蓋	ほぼ完	4.5	2.9	1.7	7.4	44.6	外:鉄釉　内:無釉	—	19c前葉
130-644	85ｲｺｳ	85ｲｺｳ	陶器	碗	底	—	△5.0	▲2.6	—	27.5	内・外:灰釉、畳付のみ無釉　高:碁笥底、切り込み有、刻印「瀬戸助」（Ko15）	京ヵ	—
130-645	85号遺構	85ｲｺｳ	土器	Ⅲ灯火皿	口～底	△8.3	4.4	1.6	—	19.4	内～体外:回転ナデ　底外:回転糸切（左）	江戸	17c中葉～
130-646	85号遺構	85ｲｺｳ	土器	塩壺	口～体	△5.4	—	▲8.4	—	78.9	外:ナデ　内:布目圧痕　口縁端:ケズリ蓋受け成形	関西	18c前葉～中葉
130-647	85号遺構	85ｲｺｳ	陶器	徳利	ほぼ完	—	8.4	▲21.0	12.1	668.9	胴外:飴釉、釘書「サ」（Kg92）、楕円形の打ち欠き窯（転用ヵ）　腰～底外:釉拭取り	美濃（高田）	17c末～18c前葉

第 38 表　文字や記号が記された陶磁器・土器の一覧表

資料番号	挿図番号	図版番号	出土地点	注記	素材	器種	部位	内容	備考
Kg1	129		第 2-1・3 層・第 3 層	ﾓﾘ土 2	陶器	徳利	胴部	七　々　ち　し	点書
Kg2	189		第 4 層	ﾓﾘ土 3	陶器	徳利	胴部	七　々　ち　し	点書
Kg3	392		池遺構　上層	ﾓﾘ土 4 南 5	陶器	徳利	胴部	七　々　ち　し	点書
Kg4	402		池遺構　上層	47 ｲｺｳ	陶器	徳利	胴部	久○	点書
Kg5	403		池遺構　上層	ﾓﾘ土 4 西	陶器	徳利	胴部	久　ヽ	点書
Kg6	188		第 4 層	ﾓﾘ土 3	陶器	徳利	胴部	七　々　ち　し	点書
Kg7	91		第 1 層	Ⅰ区旧ｺｳｼｬ	陶器	徳利	胴部	久○	線書
Kg8	187		第 4 層	ﾓﾘ土 3	陶器	徳利	胴部	⌒に本　イ	点書
Kg9	186		第 4 層	ﾓﾘ土 3	陶器	徳利	胴部	○カ	点書
Kg10	394		池遺構　上層	ﾓﾘ土 4 西 2	陶器	徳利	胴部	…ち　し…	点書
Kg11	—		第 2 層	ﾓﾘ土 2	陶器	徳利	胴部	判読不可	点書
Kg12	185		第 4 層	ﾓﾘ土 3	陶器	徳利	胴部	…屋	点書
Kg13	—	36-Kg13	池遺構　上層	ﾓﾘ土 4 南 6	陶器	徳利	胴部	山笠に五カ	点書
Kg14	—	36-Kg14	池遺構　上層	ﾓﾘ土 4 北 5	陶器	徳利	胴部	久	点書
Kg15	406		池遺構　上層	ﾓﾘ土 4 南 1	陶器	徳利	胴部	久ト	点書
Kg16	408		池遺構　上層	ﾓﾘ土 4 西 1	陶器	徳利	胴部	り	線書
Kg17	—	36-Kg17	第 4 層	ﾓﾘ土 3	陶器	徳利	胴部	久・	点書
Kg18	—	36-Kg18	第 4 層	ﾓﾘ土 3	陶器	徳利	胴部	市¬カ	点書
Kg19	—	36-Kg19	第 4 層	ﾓﾘ土 3	陶器	徳利	胴部	○にさカ	線書
Kg20	—		第 4 層	ﾓﾘ土 3	陶器	徳利	胴部	判読不可	点書
Kg21	—	36-Kg21	池遺構　上層	ﾓﾘ土 4 北 6	陶器	徳利	胴部	判読不可	点書
Kg22	—		第 2 層	ﾓﾘ土 2	陶器	徳利	胴部	判読不可	点書
Kg23	—	36-Kg23	池遺構　上層	ﾓﾘ土 4 西 1	陶器	徳利	胴部	サカ	線書
Kg24	—	36-Kg24	第 1 層	Ⅰ区旧ｺｳｼｬ	陶器	徳利	胴部	サカ	点書
Kg25	—		第 1 層	Ⅰ区旧ｺｳｼｬ	陶器	徳利	胴部	…ち…	点書
Kg26	—		第 1 層	Ⅰ区旧ｺｳｼｬ	陶器	徳利	胴部	市¬カ	線書
Kg27	—		第 1 層	Ⅰ区旧ｺｳｼｬ	陶器	徳利	胴部	判読不可	点書
Kg28	—		第 1 層	Ⅱ区表土	陶器	徳利	胴部	サカ	点書
Kg29	—		池遺構　上層	ﾓﾘ土 4 北 3	陶器	徳利	胴部	木■	線書
Kg30	—		池遺構　上層	ﾓﾘ土 4 南 1	陶器	徳利	胴部	判読不可	点書
Kg31	—		池遺構　上層	ﾓﾘ土 4 南 5	陶器	徳利	胴部	市¬	線書
Kg32	—		第 1 層	Ⅱ区表土	陶器	徳利	胴部	判読不可	点書
Kg33	—		第 1 層	Ⅱ区表土	陶器	徳利	胴部	判読不可	点書
Kg34	—		池遺構　上層	ﾓﾘ土 4 西	陶器	徳利	胴部	判読不可	点書
Kg35	—		池遺構　上層	ﾓﾘ土 4 北 6	陶器	徳利	胴部	判読不可	点書
Kg36	169		第 4 層	ﾓﾘ土 3	磁器	小鉢	胴部	サ	線書
Kg37	39		第 1 層	Ⅱ区表土	磁器	Ⅲ	高台内	イ	線書
Kg38	—		池遺構　下層	池北西 池西	陶器	徳利	胴部	判読不可	点書
Kg39	586		6 号遺構	6 ｲｺｳ	陶器	徳利	胴部	市¬	点書
Kg40	—	36-Kg40	6 号遺構	6 ｲｺｳ	陶器	徳利	胴部	久○	点書
Kg41	—	36-Kg41	6 号遺構	6 ｲｺｳ	陶器	徳利	胴部	判読不可	点書
Kg42	—		6 号遺構	6 ｲｺｳ	陶器	徳利	胴部	…七…	点書
Kg43	—		6 号遺構	6 ｲｺｳ	陶器	徳利	胴部	判読不可	点書
Kg44	—		池遺構　上層	51 ｲｺｳ	陶器	徳利	胴部	判読不可	点書
Kg45	—		池遺構　上層	51 ｲｺｳ	陶器	徳利	胴部	判読不可	点書
Kg46	533		93 号遺構　下層	93 ｲｺｳ北西下	陶器	徳利	胴部	久○	点書
Kg47	534		93 号遺構　上層	93 ｲｺｳ南西上	陶器	徳利	胴部	市¬	点書
Kg48	—		93 号遺構　上層	93 ｲｺｳ西上	陶器	徳利	胴部	判読不可	点書
Kg49	—	36-Kg49	93 号遺構	93 ｲｺｳ	陶器	徳利	胴部	判読不可	点書
Kg50	—		93 号遺構　上層	93 ｲｺｳ北東上	陶器	徳利	胴部	市¬カ	線書
Kg51	—		池遺構　上層	47 ｲｺｳ下	陶器	徳利	胴部	判読不可	点書
Kg52	—		池遺構　上層	47 ｲｺｳ下	陶器	徳利	胴部	判読不可	点書
Kg53	—	36-Kg53	池遺構　上層	47 ｲｺｳ下	陶器	徳利	胴部	久	点書
Kg54	—		池遺構　上層	47 ｲｺｳ下	陶器	徳利	胴部	久○カ	点書
Kg55	—		池遺構　上層	47 ｲｺｳ下	陶器	徳利	胴部	…々…	点書
Kg56	—		池遺構　上層	47 ｲｺｳ下	陶器	徳利	胴部	判読不可	点書
Kg57	—		池遺構　上層	47 ｲｺｳ下	陶器	徳利	胴部	判読不可	点書
Kg58	397		池遺構　上層	61 ｲｺｳ	陶器	徳利	胴部	七　々　ち　□	点書
Kg59	404		池遺構　上層	61 ｲｺｳ	陶器	徳利	胴部	久○	点書
Kg60	396		池遺構　上層	61 ｲｺｳ	陶器	徳利	胴部	七　々　ち　□	点書
Kg61	399		池遺構　上層	61 ｲｺｳ	陶器	徳利	胴部	七　々　ち　し	点書
Kg62	393		池遺構　上層	61 ｲｺｳ	陶器	徳利	胴部	七　々　ち　し	点書
Kg63	405		池遺構　上層	61 ｲｺｳ	陶器	徳利	胴部	久○	点書
Kg64	407		池遺構　上層	61 ｲｺｳ	陶器	徳利	胴部	○に川	点書
Kg65	401		池遺構　上層	61 ｲｺｳ	陶器	徳利	胴部	久	点書
Kg66	—	36-Kg66	池遺構　上層	61 ｲｺｳ	陶器	徳利	胴部	判読不可	点書
Kg67	—		池遺構　上層	61 ｲｺｳ	陶器	徳利	胴部	…し…	点書
Kg68	—		池遺構　上層	61 ｲｺｳ	陶器	徳利	胴部	久	点書
Kg69	486		池遺構　下層	池南	陶器	徳利	胴部	七　々　ち　し	点書
Kg70	491		池遺構　下層		陶器	徳利	胴部	久○	点書
Kg71	489		池遺構　下層	池南	陶器	徳利	胴部	久○	点書
Kg72	487		池遺構　下層	池南	陶器	徳利	胴部	久○	点書　植木鉢に転用
Kg73	492		池遺構　下層	池南	陶器	徳利	胴部	久○	点書
Kg74	488		池遺構　下層	池南	陶器	徳利	胴部	市	点書
Kg75	—	36-Kg75	池遺構　下層	池南	陶器	徳利	胴部	…や	点書
Kg76	496		池遺構　下層	池南キシ 2	陶器	徳利	胴部	判読不可	点書
Kg77	495		池遺構　下層	池南キシ 2	陶器	徳利	胴部	木　□	点書
Kg78	—	36-Kg78	池遺構　下層	池南キシ 2	陶器	徳利	胴部	久	点書
Kg79	—	36-Kg79	池遺構　下層	池南キシ 2	陶器	徳利	胴部	⌒に三	点書
Kg80	—		池遺構　下層	池北キシ 5	陶器	徳利	胴部	…し　七…	点書
Kg81	—	36-Kg81	池遺構　下層	池北キシ 5	陶器	徳利	胴部	市¬	線書
Kg82	—		池遺構　下層	池北	陶器	徳利	胴部	判読不可	点書
Kg83	—	36-Kg83	72 号遺構	72 ｲｺｳ	陶器	徳利	胴部	や…	点書
Kg84	—		7 号遺構	7 ｲｺｳ	陶器	徳利	胴部	久カ	点書
Kg85	203		7 号遺構	7 ｲｺｳ	磁器	Ⅲ	高台内	サ	線書
Kg86	—		第 2-1・3 層・第 3 層	56 ｲｺｳ下	陶器	徳利	胴部	上カ	点書
Kg87	—		52 号遺構	52 ｲｺｳ胴木下	陶器	徳利	胴部	判読不可	点書
Kg88	—	36-Kg88	85 号遺構	85 ｲｺｳ	陶器	徳利	胴部	市¬	線書
Kg89	—		85 号遺構	85 ｲｺｳ	陶器	徳利	胴部	市¬カ	線書
Kg90	—	36-Kg90	87 号遺構	87 ｲｺｳ	陶器	徳利	胴部	⌒に上	線書
Kg91	391		池遺構　上層	91 ｲｺｳ	陶器	徳利	胴部	判読不可	点書
Kg92	647		85 号遺構	85 ｲｺｳ	陶器	徳利	胴部	サ	線書
Kg93	—		6 号遺構	6 ｲｺｳ	陶器	徳利	胴部	判読不可	点書
Kg94	—	37-Kg94	池遺構　下層	ﾓﾘ土 3	陶器	徳利	胴部	⌒にトカ	点書
Kg95	—		池遺構　下層	池北西	陶器	徳利	胴部	市カ	線書
Kg96	—		池遺構　上層	51 ｲｺｳ	陶器	徳利	胴部	…ち…	点書
Kg97	—	37-Kg97	池遺構　下層	池北キシ 6	陶器	徳利	胴部	久○	点書
Kg98	—	37-Kg98	第 1 層	Ⅱ区表土	陶器	徳利	胴部	丹	点書
Kg99	92		第 1 層	Ⅱ区表土	陶器	徳利	胴部	久○	点書
Kg100	89		第 1 層	Ⅱ区	陶器	徳利	胴部	四方	点書

資料番号	挿図番号	図版番号	出土地点	注記	素材	器種	部位	内容	備考
Kg101	88		第１層	Ⅱ区	陶器	徳利	胴部	七　々　ち　し	点書
Kg102	90		第１層	Ⅱ区表土	陶器	徳利	胴部	判読不可	点書
Kg103	86		第１層	Ⅲ区	陶器	徳利	胴部	市	点書
Kg104	87		第１層	Ⅲ区表土	陶器	徳利	胴部	へに清	点書
Kg105	153		第 2-2 層	35 ｲｺｳ東	磁器	皿	高台内	六芒星　右	線書
Kg106	152		第 2-2 層	35 ｲｺｳ東	磁器	皿	見込	松ヵ	点書
Kg107	191		第４層	ﾓﾘ土３	陶器	徳利	胴部	判読不可	点書
Kg108	395		池遺構　上層	盛土４北５	陶器	徳利	胴部	七　ち　し	点書
Kg109	400		池遺構　上層	盛土４北１	陶器	徳利	胴部	○　十	点書
Kg110	398		池遺構　上層	盛土４北６	陶器	徳利	胴部	七　々　ち　し	点書
Kg111	493		池遺構　下層	池南	陶器	徳利	胴部	久○	点書
Kg112	494		池遺構　下層	池南	陶器	徳利	胴部	久○	点書
Kg113	490		池遺構　下層	池南	陶器	徳利	胴部	久○	点書
Kg114	586		６号遺構	６ｲｺｳ	陶器	徳利	胴部	久○	点書
B1	－	37-B1	池遺構　上層	47 ｲｺｳ	陶器	捏鉢または片口鉢	高台内	…や	
B2	－		池遺構　上層	ﾓﾘ土４北３	陶器	壺ヵ	胴部 高台側面	判読不可	
B3	－	37-B3	池遺構　上層	ﾓﾘ土４南５	陶器	徳利	胴部	…や	墨書の上に釘書を施す
B4	360		池遺構　上層	ﾓﾘ土４南１	陶器	烏のエサ入れ	底部	□月／松島／弐拾の内	
B5	82		第１層	Ⅱ区表土	陶器	灰落とし	底部	火キ	
B6	80		第１層	Ⅱ区表土	陶器	捏鉢	底部	…二ツ之内	
B7	－	37-B7	池遺構　上層	61 ｲｺｳ	陶器	徳利	底部	判読不可	
B8	－		池遺構　上層	ﾓﾘ土４南５	陶器	徳利	胴部	判読不可	
B9	－		池遺構　上層	61 ｲｺｳ	陶器	徳利	胴部	判読不可	
B10	－		池遺構　上層	61 ｲｺｳ	陶器	徳利	底部	判読不可	
B11	－		池遺構　上層	51 ｲｺｳ	陶器	半胴甕	高台内	判読不可	
B12	355		池遺構　上層	ﾓﾘ土４北４	陶器	壺	底部	判読不可	
B13	－	37-B13	池遺構　下層	池北キシ６	陶器	徳利	底部	や□	
B14	79		第１層	Ⅰ区旧ｺｳｼｬ	陶器	皿	底部	九十／以奴	
B15	－	37-B15	池遺構　上層	47 ｲｺｳ下	陶器	甕	高台内	…上…	
B16	95		第１層	Ⅱ区表土	陶器	土瓶須蓋	蓋内	文化八未年／三月三日／■之	
B17	390		池遺構　上層	ﾓﾘ土４北１	陶器	徳利	底部	ㄱ市	
B18	81		第１層	Ⅱ区表土	陶器	甕	底部	…出来	
B19	163		第 2-2 層	ﾓﾘ土１	陶器	半胴甕	底部	文月七■付	
B20	380		池遺構　上層	ﾓﾘ土４北１	陶器	土瓶蓋	蓋内	寅／六月	
B21	371		池遺構　上層	ﾓﾘ土４南３	陶器	土瓶	底部キワ側面	判読不可	
B22	479		池遺構　下層	池東キシ１・２	陶器	大皿	底部	表／御臺所	
B23	524		93 号遺構　上層	93 ｲｺｳ南西上	陶器	盃	底部	判読不可	
B24	244		35 号遺構	35 ｲｺｳ	陶器	硫酸瓶		○ヵ	
B25	415		池遺構　上層	ﾓﾘ土４南１	土器	カワラケ	底部	判読不可	
B26	100		第１層	Ⅰ区旧ｺｳｼｬ	土器	カワラケ	底部	中	
B27	－		第 2-1・3 層・第 3 層	ﾓﾘ土２	陶器	大皿	高台内	判読不可	
B28	－	37-B28	35 号遺構	35 ｲｺｳドウ木下	陶器	土瓶	底部	…マン…	
B29	－	37-B29	35 号遺構	35 ｲｺｳドウ木下	陶器	碗	高台脇	ナラ…	
B30	－	37-B30	池遺構　上層	47 ｲｺｳ下	陶器	大皿	高台内	臺所	
B31	－		池遺構　上層	47 ｲｺｳ下	陶器	碗	高台内	判読不可	
B32	－	37-B32	池遺構　下層	池南キシ２	陶器	徳利ヵ	胴部	へ上ヵ	
B33	－		池遺構　下層	池南	陶器	皿ヵ	高台内	判読不可	
B34	－	37-B34	池遺構　下層	池北西	陶器	徳利	畳付	市ㄱヵ	
B35	263		87 号遺構	87 ｲｺｳ	陶器	壺	底部	沢…	
B36	389		池遺構　上層	91 ｲｺｳ	陶器	徳利	底部	○二	
B37	629		69・74 号遺構	69・74 ｲｺｳ	陶器	皿	底部	賄所	
B38	－		６号遺構	６ｲｺｳ	陶器	皿ヵ	高台内	判読不可	
B39	229		35 号遺構	35 ｲｺｳ	陶器	碗	高台内	○	
B40	375		池遺構　上層	盛土４南２	陶器	土瓶蓋	内	判読不可	
B41	－		池遺構　下層（間知石掘方）	池南キシ２	陶器	徳利	底部	判読不可	
B42	604		17 号遺構	17 ｲｺｳ	磁器	皿	高台内	…頭ヵ	
B43	621		68 号遺構	68 ｲｺｳ	陶器	徳利	底	判読不可	
B44	635		69・74 号遺構 ＋ 70 号遺構	69・74 ｲｺｳ 70 ｲｺｳ	土器	皿	底	む□□□／□い	
B45	634		69・74 号遺構 ＋ 70 号遺構	69・74 ｲｺｳ 70 ｲｺｳ	土器	皿	底	判読不可	
B46	536		93 号遺構　上層	93 ｲｺｳ北西上	土器	灯火皿	底部外面	判読不可	
Y1	562		６号遺構	６ｲｺｳ	磁器	碗	高台内	イ	
Y2	567		６号遺構	６ｲｺｳ	磁器	皿	高台内	判読不可	
Y3	－	37-Y3	池遺構　上層	ﾓﾘ土４南１	磁器	大皿	高台内	焼継印ヵ	焼継痕あり
Y4	－	37-Y4	池遺構　下層	池西キシ３	磁器	皿	高台内	焼継印ヵ	
Y5	－		池遺構　上層	47 ｲｺｳ下	磁器	鉢ヵ	高台内	判読不可	
Y6	－	37-Y6	池遺構　上層	47 ｲｺｳ下	磁器	碗	高台内	ハ	焼継痕あり
Y8	319		池遺構　上層	ﾓﾘ土４南下	磁器	小鉢	高台内	判読不可	
Y9	157		第 2-2 層	35 ｲｺｳ東	磁器	小鉢	高台内	イ	
Y10	－	37-Y10	第１層	Ⅱ区表土	磁器	皿	高台内	々	焼継痕あり
Y11	－	37-Y11	池遺構　下層	池南	磁器	皿	高台内	大	焼継痕あり
Y12	－	37-Y12	池遺構　下層	池西	磁器	小鉢ヵ	高台内	一	焼継痕あり
Ko1	525		93 号遺構　上層	93 ｲｺｳ西上	陶器	碗	高台内	中金	京焼写し（肥前産）
Ko2	84		第１層	Ⅰ区旧ｺｳｼｬ	陶器	鉢	底部	○に■	志戸呂産
Ko3	127		第 2-1・3 層・第 3 層	35 ｲｺｳ西	陶器	碗	高台内	志戸呂	志戸呂産
Ko4	184		第４層	ﾓﾘ土３	陶器	皿	高台内	可吉	
Ko6	344		池遺構　上層	ﾓﾘ土４南０	陶器	碗	高台内	萬古	
Ko8	470		池遺構　下層	池北	土器	碗	高台内	瀬戸助（枠なし）	京焼ヵ
Ko10	552		２号遺構	２ｲｺｳ	陶器	皿	高台内	中／金村	京焼写し（肥前産）
Ko11	611		24 号遺構	24 ｲｺｳ	陶器	土瓶	底部	◇	
Ko12	220		35 号遺構	35 ｲｺｳ胴木下	陶器	皿	高台内	萬王（角枠）	
Ko13	411		池遺構　上層	ﾓﾘ土４南０	陶器	擂鉢	底	□ヵ	
Ko14	484		池遺構　下層	池北	陶器 ［炻器］	徳利	底	｜）	
Ko15	644		85 号遺構	85 ｲｺｳ	陶器	碗	高台内	瀬戸助（枠なし）	京焼ヵ

3）木製品（第 131 ～ 144 図、第 39 表、図版 38 ～ 42）

水分を多く含む土壌特性のため、遺存状態は比較的良好である。用途不明の木材片や木っ端、著しく破損したもの以外の 157 点を取り上げ、うち 103 点を報告する。

履物（1 ～ 17）　下駄（13 点）とその他の履物（4 点）に大別する。民具学なども含めて様々な視点からの履物分類が知られるが、本稿では、鼻緒をすげるための孔＝坪があるものを下駄とし、坪のないものをその他の履物として報告する。下駄については、連歯下駄 8 点、露卯の差歯下駄が 4 点（うち 1 点は歯）、陰卯の差歯下駄が 1 点である。いずれも横木取り板目の素材を用いており、連歯下駄は長方形もしくは隅丸長方形、差歯下駄は舟形のものが多い。前坪はいずれもつま先の真ん中に穿たれており、後坪が後歯より前方のものが 7 点、後方のものが 5 点である。連歯下駄には前方のものも後方のものも見られるが、差歯下駄はすべて後方である。

特徴的なものとしては、8、12 があげられる。8 は幅に対して長さがかなり短く、著しく稚拙なつくりである。特に後歯から踵部分にかけては非対称に削り出され、鑿痕は粗い。職人の手業とはとうてい思えない品で、素人が下駄以外の木製品を加工して自作した再生品であろう。12 は差歯下駄の台だが、差歯溝が前歯用の 1 条しかなく、後歯用の溝があったと思われる部分は切断されている。元は舟形だったと思われるが、一端が不自然に平坦な形になっており、後坪が新たに穿たれている。歯が破損した台を加工した再生品で、子供用と考えられる。また、10 と 11 は出土遺構が同じで、形状、大きさなどもほぼ同様であることから、対の可能性がある。

下駄以外のものについても、周縁部や縁辺に複数の穿孔がみられ、何らかの装着物が想定されるが、鼻緒を想定できる形状ではなく、具体的には不明である。16 は半楕円形の厚手板を平坦な部分でつき合わせたような形状で、全体としては長楕円形を呈している。2 孔 1 対の小孔が周縁に沿って 14 ヶ所に配され、下面では対になる 2 孔をつなぐような細い溝がみられる。前後の半楕円板が接した状態で出土しており、本来は何らかの方法で両者を結束した上で一個体として機能したものと考えられよう。周縁に配された小孔の機能は明らかでないが、下面の溝と合わせて考えると、糸もしくは紐などを通して被甲物を縫い付けた可能性も考えられよう。あるいは、これらの小孔のうちの幾つかについては、前後を結束するために用いたのかもしれない。特徴的な形状や周縁に小孔を配す点が『尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅹ』無歯下駄Ⅵ D2e 類と似ているが、尾張藩上屋敷跡資料が使用後に切断されたと考えられているのに対し、本資料は全周が調整されており、別々に作られた上で結束されたと考えられることから、ひとまず異なる背景を持つものと考えておくこととする。17 も 16 と同種のものであろう。

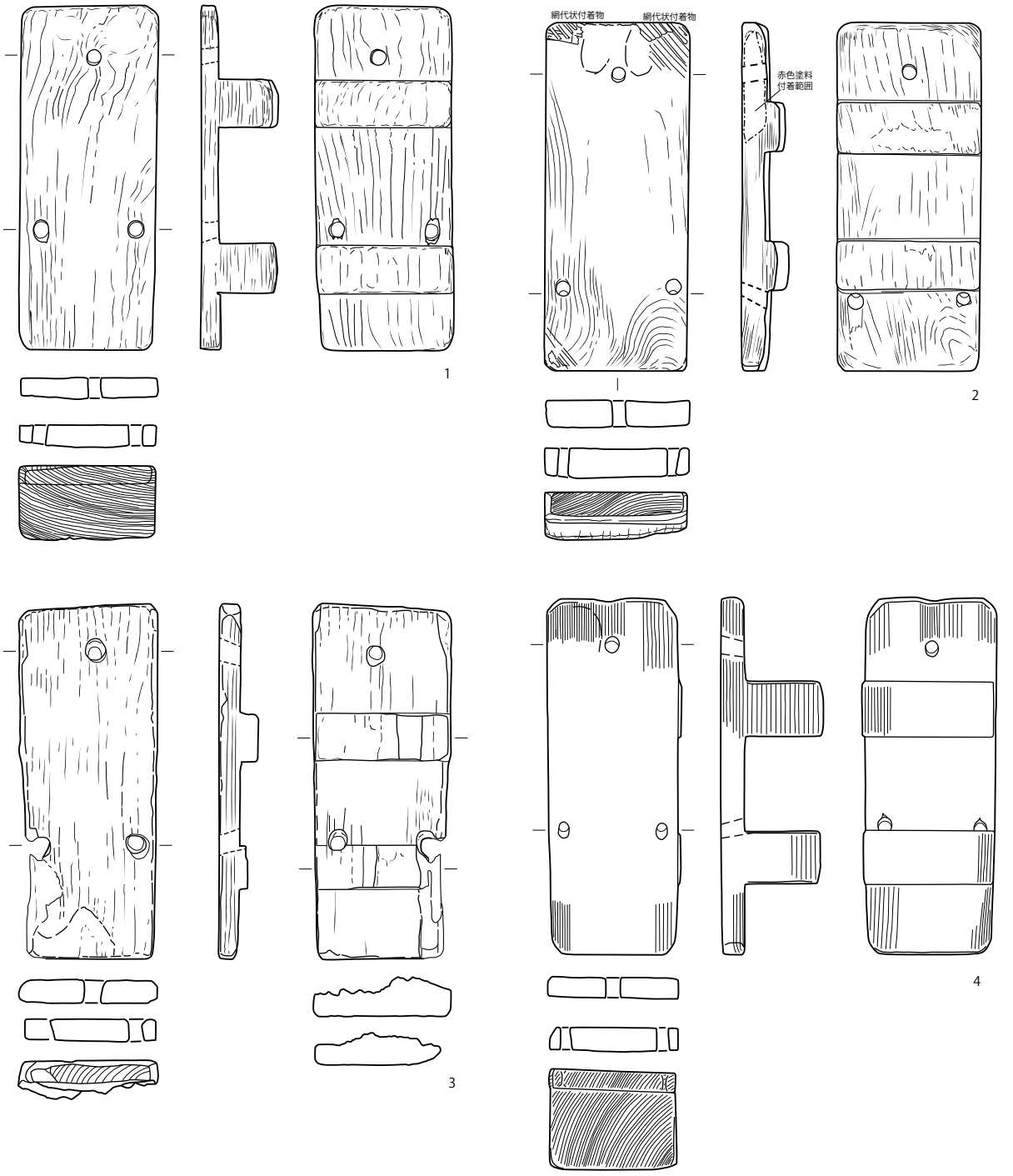
椀（18 ～ 26、29）・椀蓋（27、28、30）　いずれも漆塗りである。椀のほとんどが腰丸椀で、平椀は 2 点のみである。腰丸椀 7 点のうち 5 点が高台の高いタイプである。椀は横木取り 7 点、縦木取り 3 点、椀蓋は横木取り 2 点、縦木取り 1 点で、横木取りの方が多い。18 は高台内に「十」もしくは「×」の刻みがある。何かの目印であろうか。

高足膳（34 ～ 40）　いずれも黒漆塗りである。底板 1 点、脚 5 点、底板の中央下面に渡す桟と考えられる木片が 1 点ある。脚はロの字形であるが、一枚の素材板から切り出すのではなく、コの字形の部材を上下に継いでロの字形にする構造である。35、39 は破断部分に刃物による加工がみられ、他器種に再生しようとしたと考えられる。

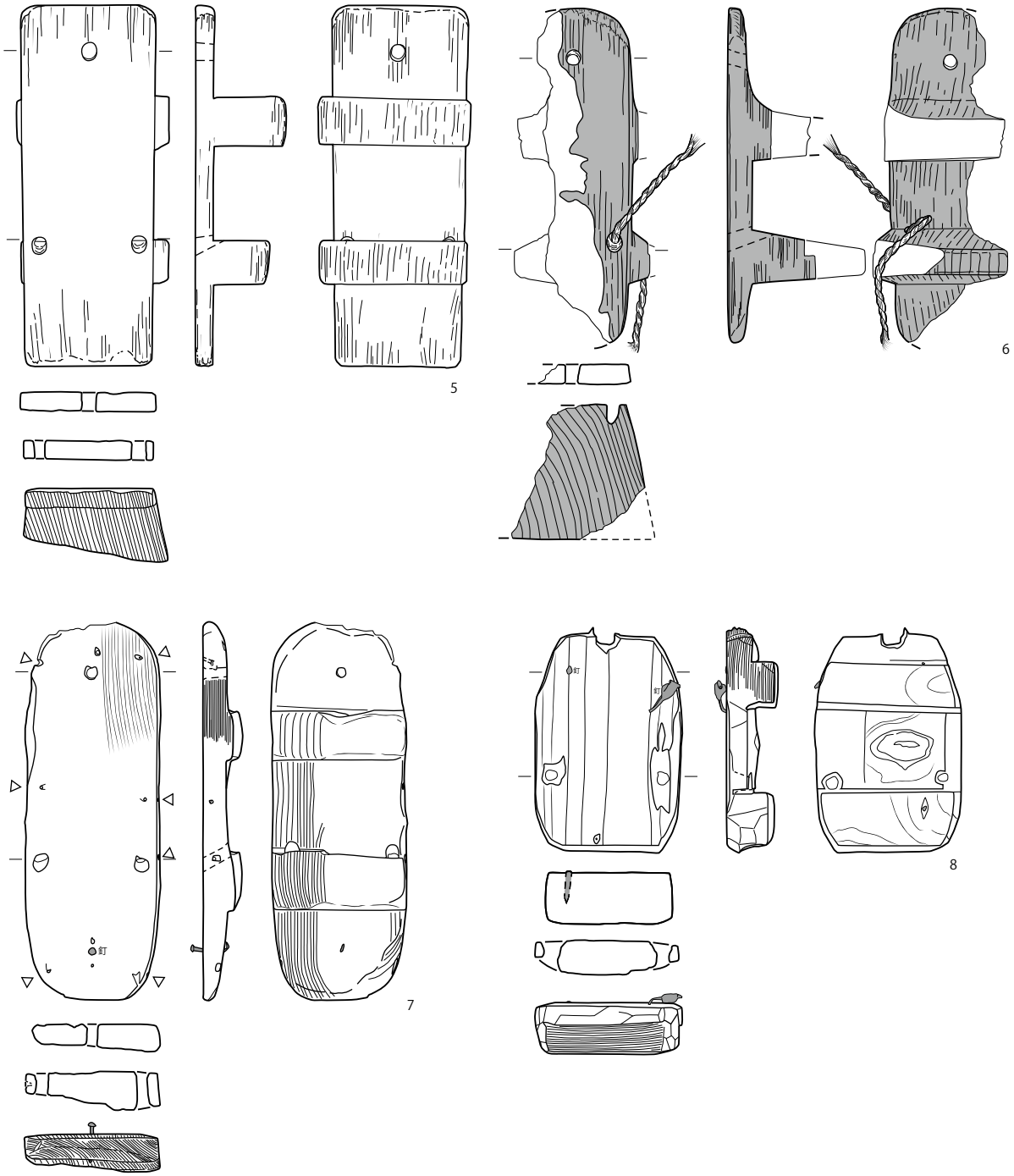
曲物（50 ～ 59） 柄杓１点、容器胴２点、容器底板３点、容器蓋４点である。中央に摘みの痕跡があるものを蓋とし、縁辺に胴を留めた痕跡（釘や木釘、釘穴などの残存）が見られるものを底板とした。柾目のものも板目のものもみられる。

結物（60 ～ 66） 注ぎ口となる穴があるものを天板、ないものを底板ととらえ、天板のあるものを樽、天板のないものを桶とする。樽については、天板、底板ともに、径 10㎝程度の小型のものが多い。また、底板は縁辺が摩耗しているものが多い。60 は側板で、３枚が接するような状態で出土した。内面の底板痕跡が顕著であるのに比して天板の痕跡がみられないこと、付着物が底付近から縁まで連続的に観察されることから、天板がない桶と判断した。

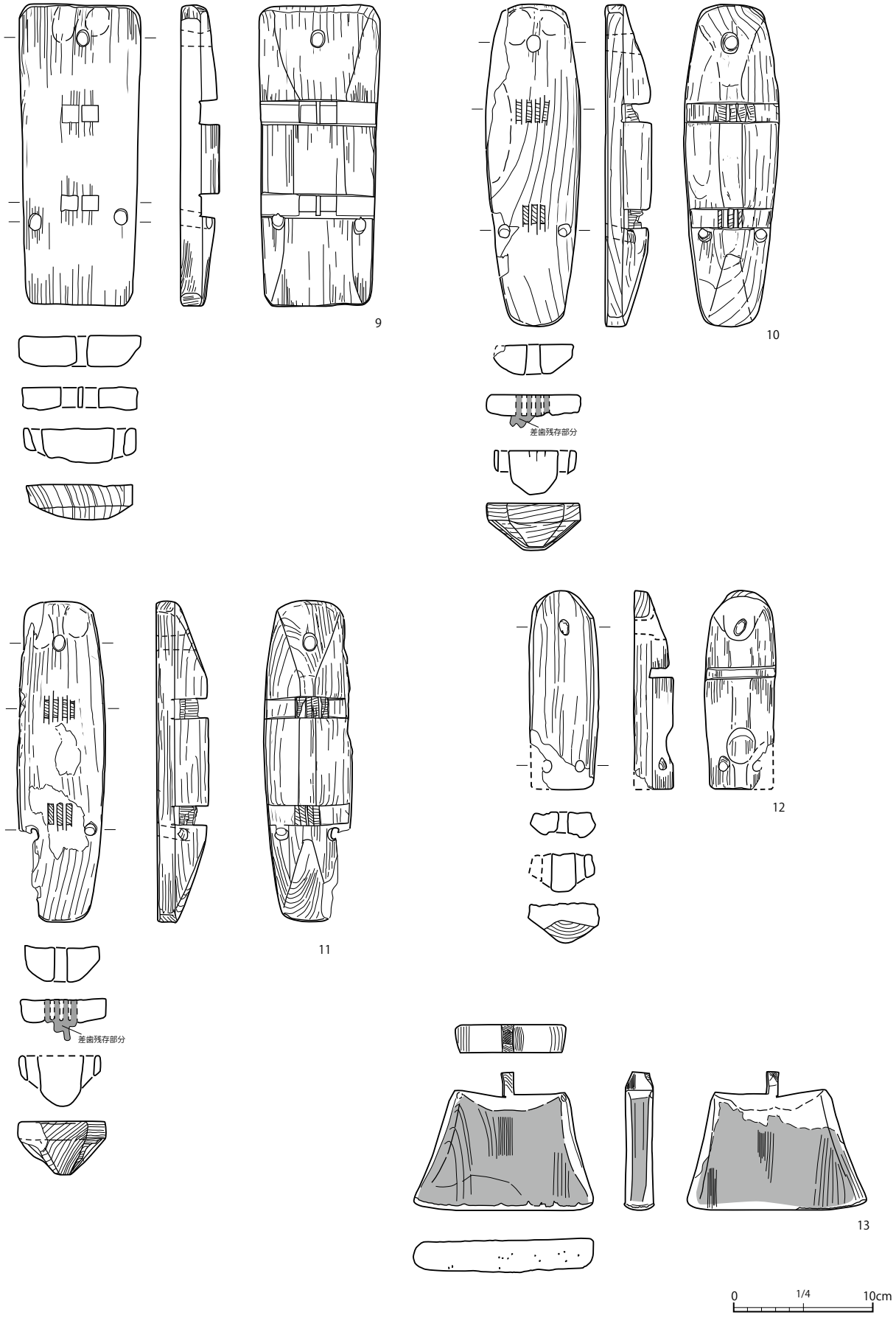
その他　32 は漆塗りの合子の蓋で、下面に見られる同心円状の凹凸は、木地や漆を加工して作り出したものではなく、木目である。41、42 は脚付の丸盆の盆と脚である。やや距離はあるが、同じ池遺構上層からの出土で、41 下面の脚の痕跡と 42 の上端（盆と接する部分であろう）の形状や大きさが同じであることから、同一個体と考えられよう。盆の縁は曲物で、木釘で底板に装着した上で漆を塗布している。下面の脚の痕跡は３ヵ所、木釘などの痕が見られないことから、漆や膠で接着したものと考えられる。44 は蓋で、焼印の「久・」は徳利の釘書にも散見される。49 は長方形の箱蓋で、「坂本／岡埜製」と焼印がある。明治後半以降、現台東区根岸１丁目交差点角（旧坂本通り沿い）に店舗を構えていた和菓子店「岡埜栄泉」の菓子折り箱と考えられる。71 は破断面にはっきりした木目が観察できなかったが、側面に節が観察されたため木製品とした。重さや硬さといった質感からは、炭化しているように思われる。扁平な孔が貫通しており、刃物の柄の可能性があるが、断面の長軸と孔の軸がややずれるため断言はできない。75 は独楽で、芯は鉄製、一本が貫通しているのではなく、上下から別々のものが差し込まれている。76 ～ 80 は札である。76 には「平向平治様／新町／桑地より」の墨書があり、荷札と考えられる。77 にも「松平丹波守様／御おくに而／八千代■（殿ヵ）」「西■（浦ヵ）［　］／［　］小兵衛」との墨書がある。これも、荷札であろう。小兵衛という人物から、松平丹後守邸奥向きの八千代という人物に宛てたものであろうか。近世以降、松平丹波守を名乗る大名家はいくつかあるが、18 世紀後半から幕末までは、駿河小島藩滝脇松平家がほぼ世襲的に丹後守に叙せられ、現文京区春日一丁目の地下鉄後楽園駅付近に上屋敷を構えていた。本資料の出土層位は第１層（第２～４層攪乱土）で、第２層以下が他所からの搬入土であろうことを考え合わせると興味深い。79 にも墨書が見られるが、判読できない。86、87 は半杓文字形のヘラである。86 は左利き用、87 は右利き用であろうか。いずれも、柄に細い穿孔があるが、紐などを通すにはいささか細すぎるので、木釘などの痕跡と考えた方よいだろう。他器種からの再生、転用品の可能性がある。89 は羽子板で、一方の面にはわずかに凹凸がみられた。羽根の痕であろうか。90 は馬の脚をかたどった木彫である。上端に径３㎜程の穴があり、木釘などで胴体に装着されていたと考えられる。91 は蓮華の蕾をかたどった木彫である。仏具であろう。あるいは仏像の部品かもしれない。92 ～ 103 は、機能、用途ともに不明のものである。92 は黒漆塗りで、赤漆で松葉文が描かれている。下端に木釘が残っていることから、底板があったと考えられるが、全体の形状は不明である。93 も黒漆塗りであるが、側面は漆を塗布した後に切り出されており、再生品である可能性が高い。98 には鑿痕がみられ、波型の形は意図的なものと考えられる。103 は、不規則に凹凸が作り出されたような形状で、所々に切り込んでは放置したような細い溝がみられる。建材の一端、もしくは破損品の可能性がある。



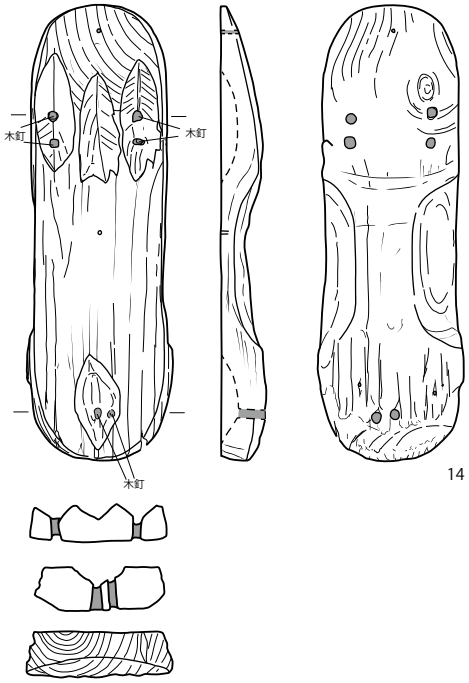
第 131 図　木製品（1）

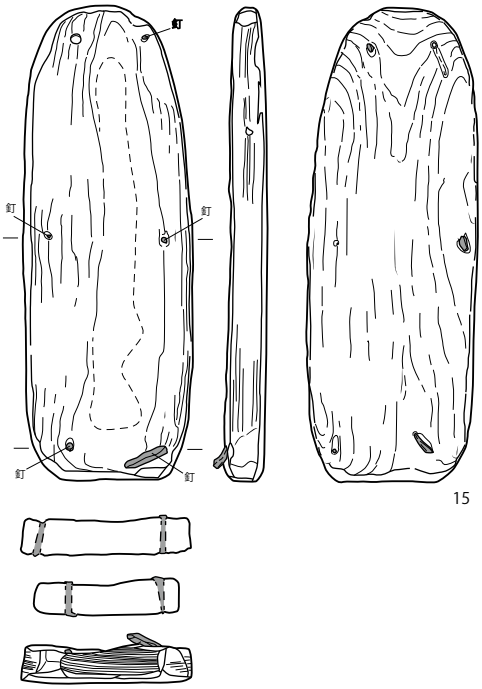


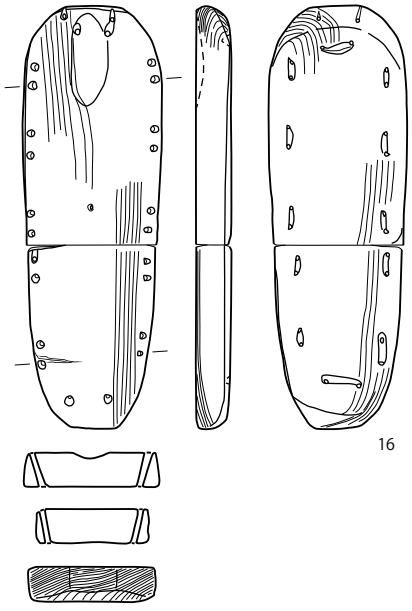
第 132 図　木製品（2）

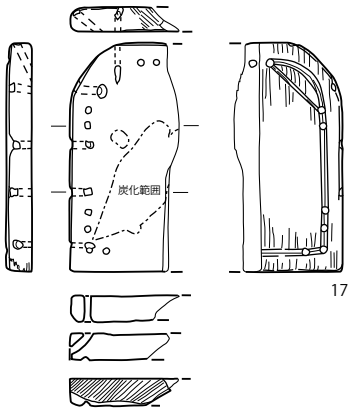


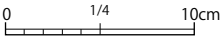
第 133 図　木製品（3）



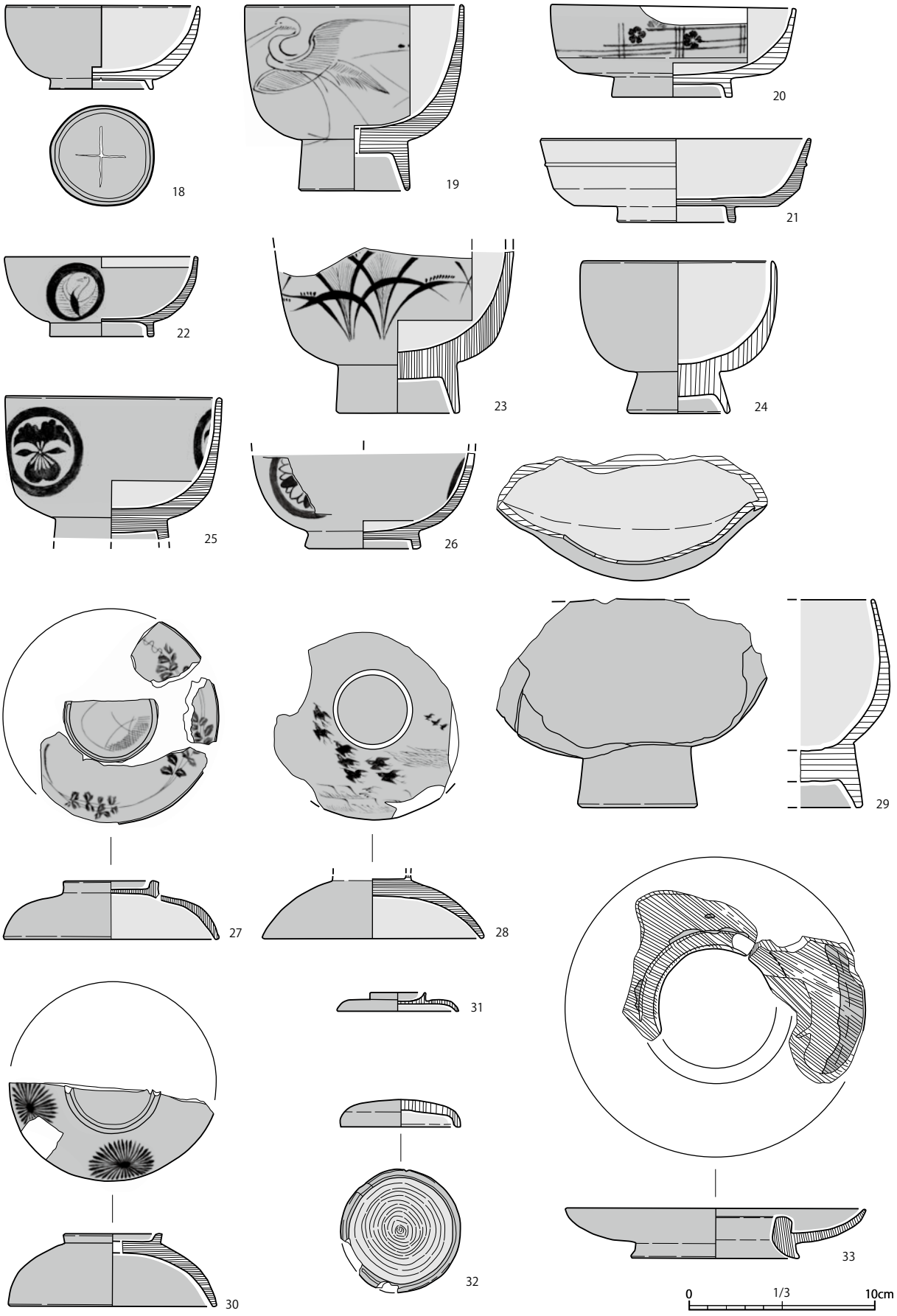




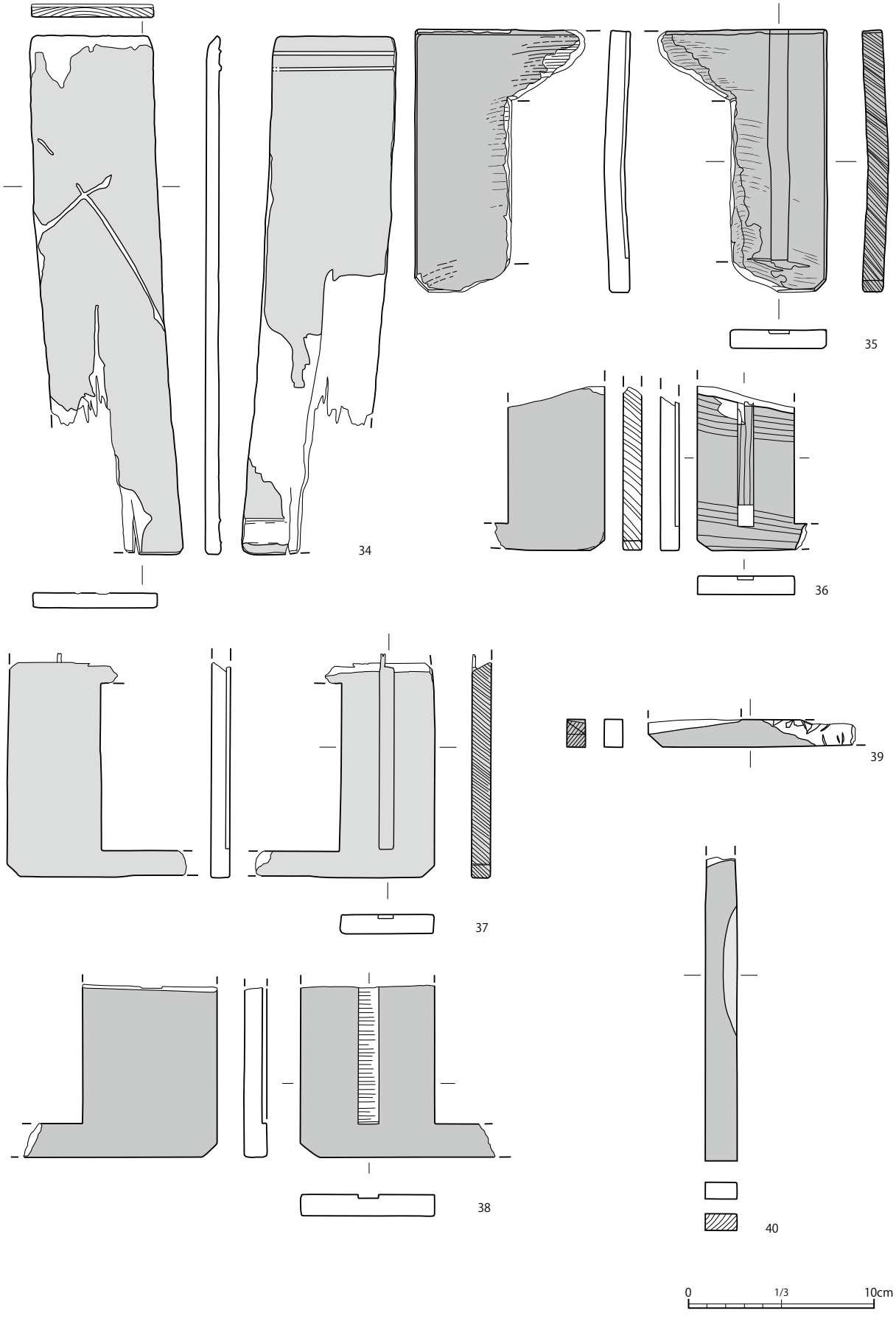




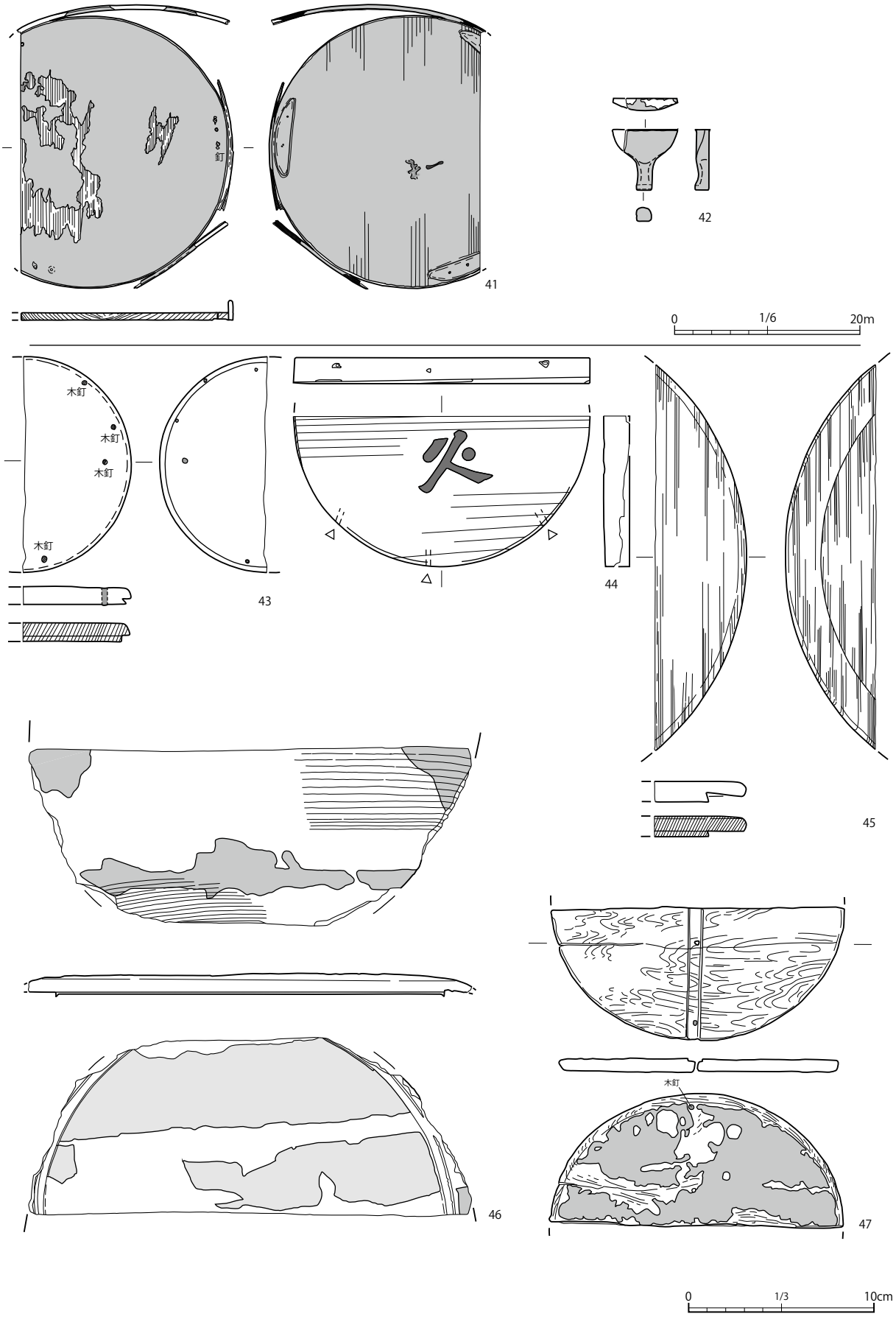
第 134 図　木製品（4）



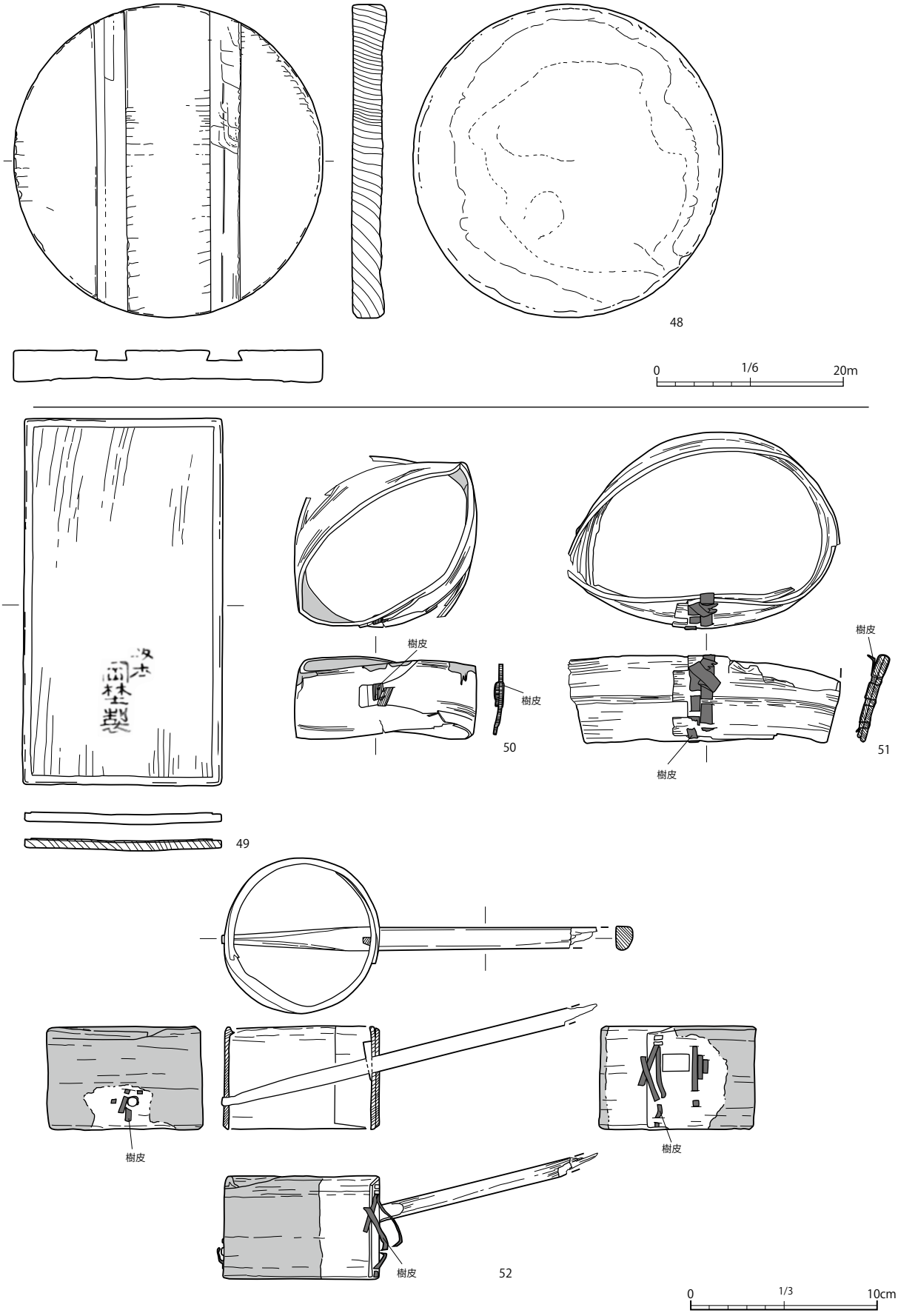
第 135 図　木製品（5）



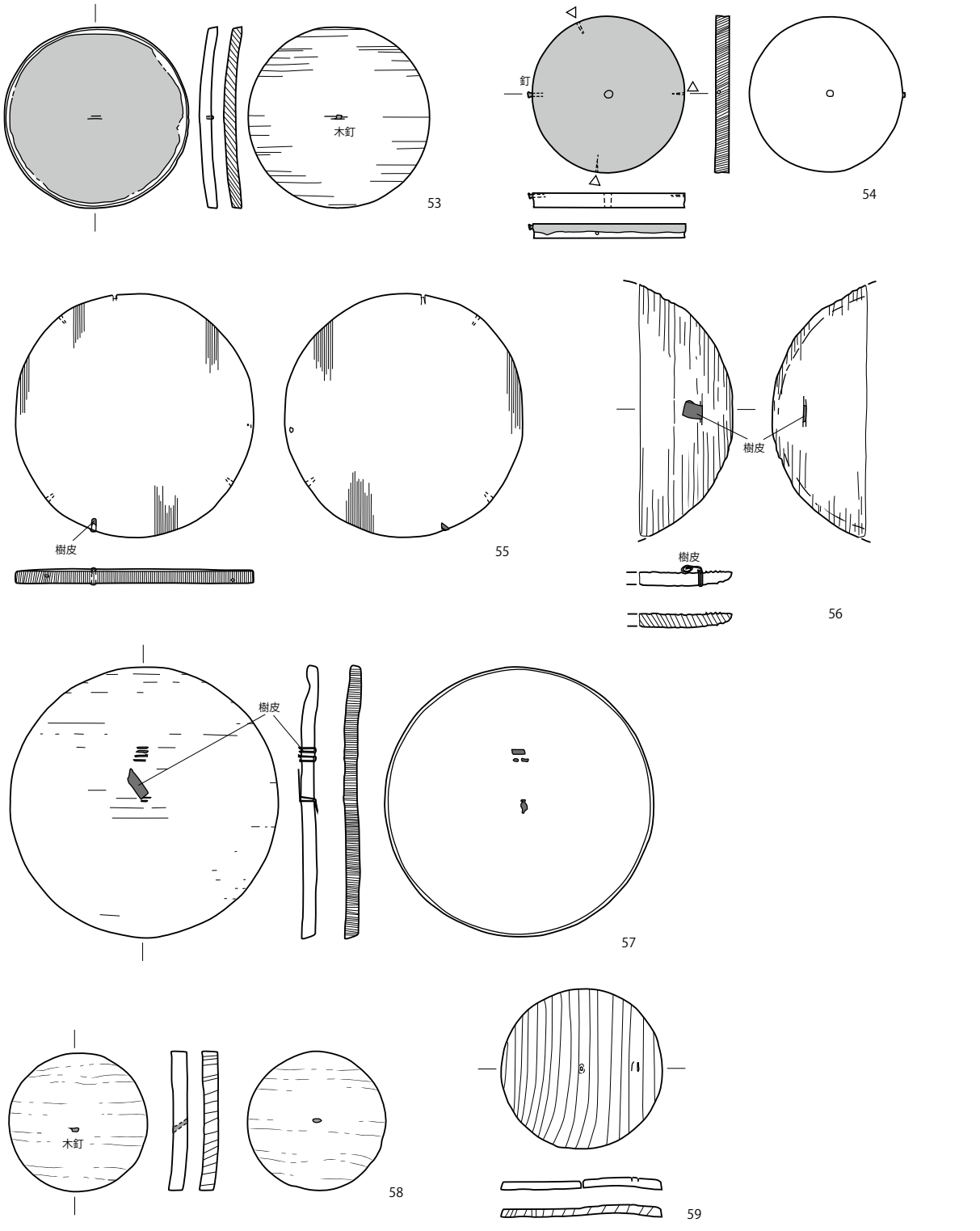
第 136 図　木製品（6）



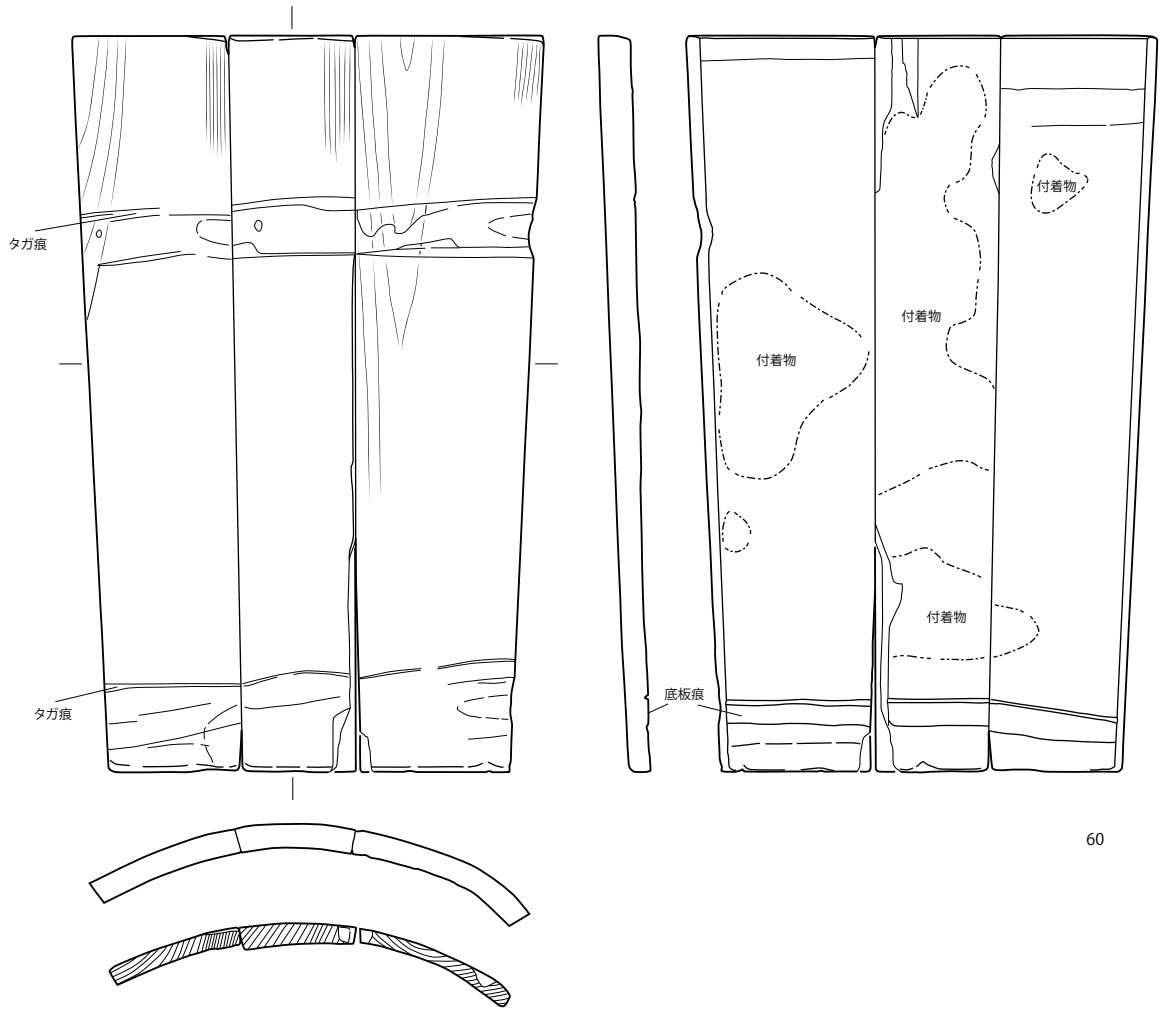
第 137 図　木製品（7）



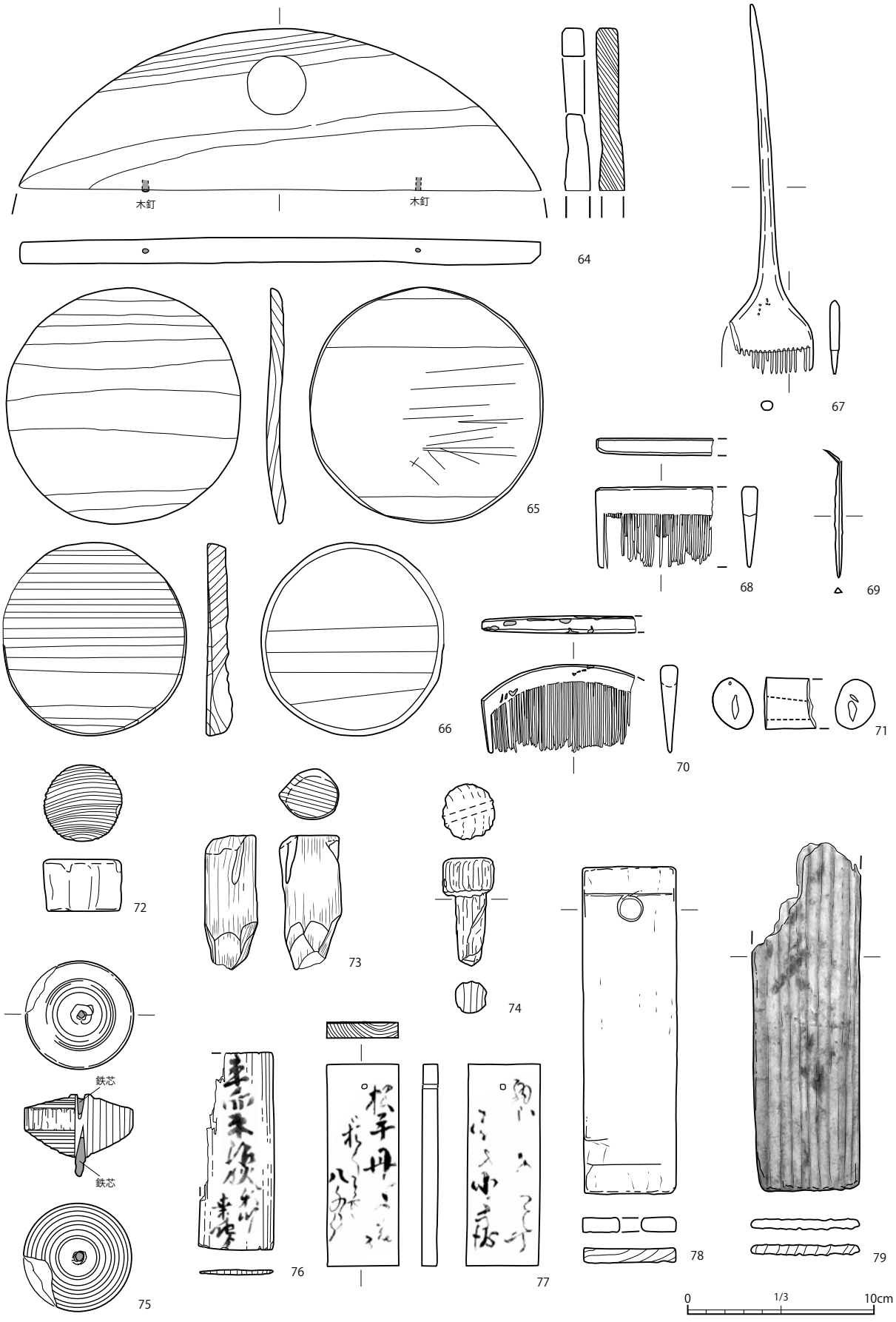
第 138 図　木製品（8）



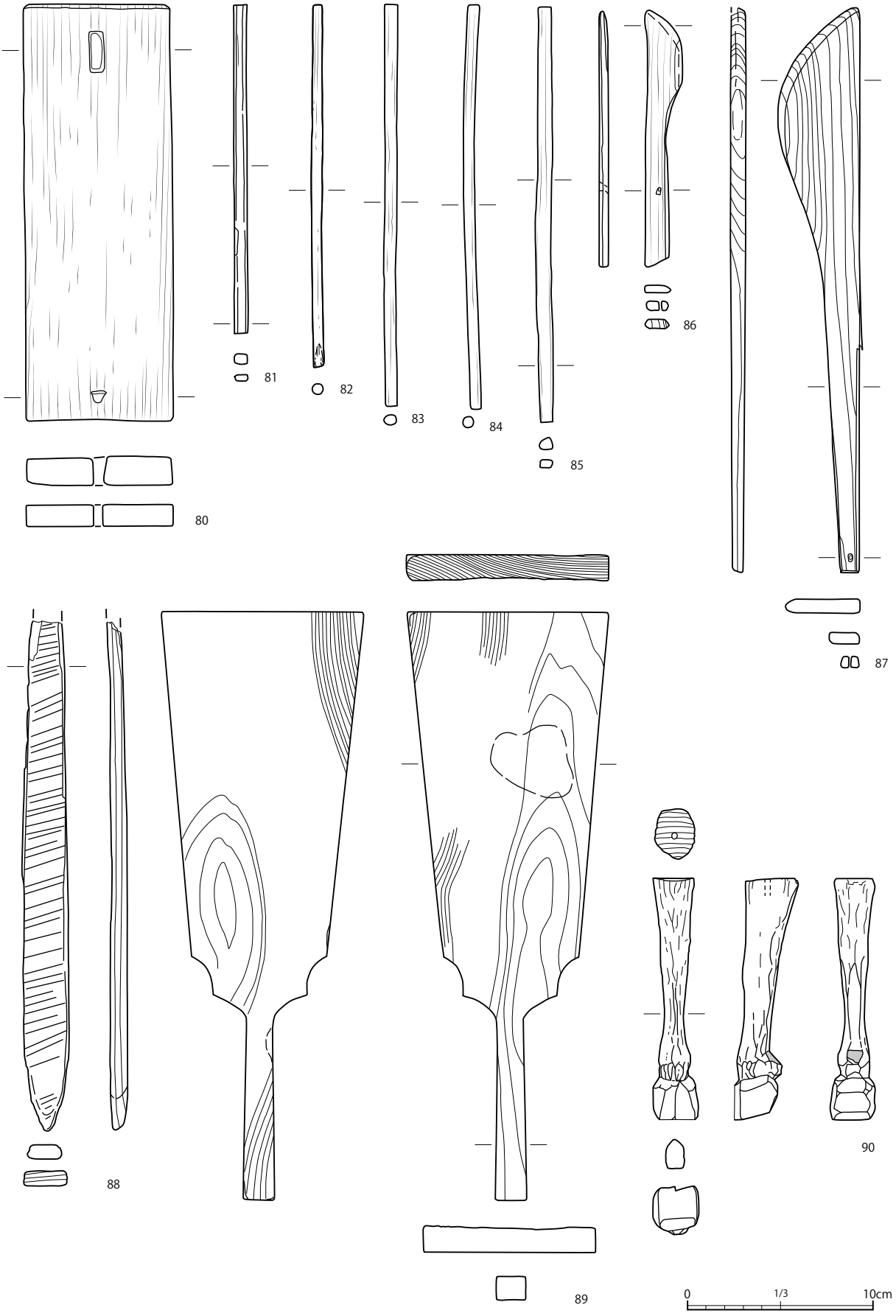
第 139 図　木製品（9）



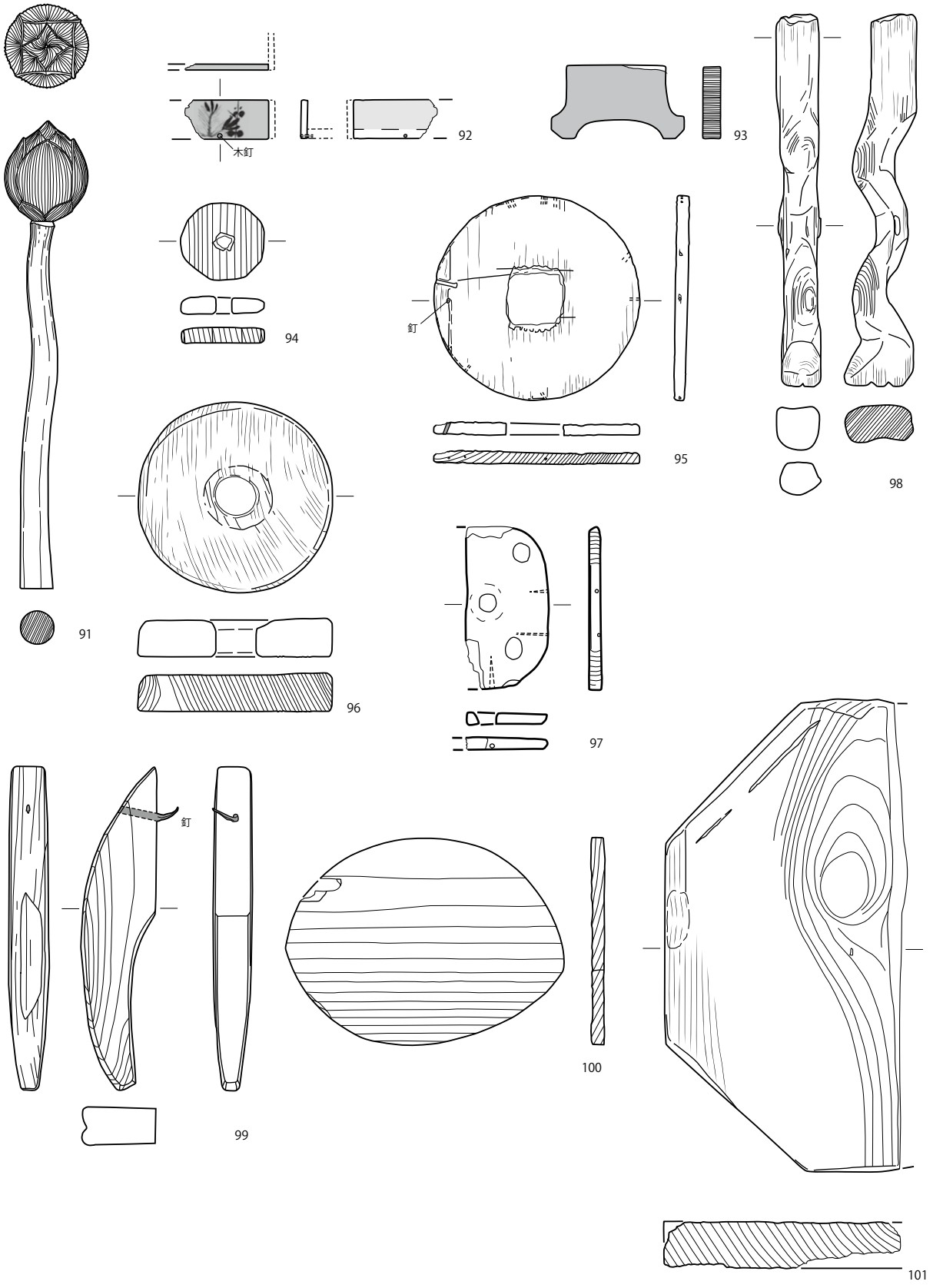
第 140 図　木製品（10）



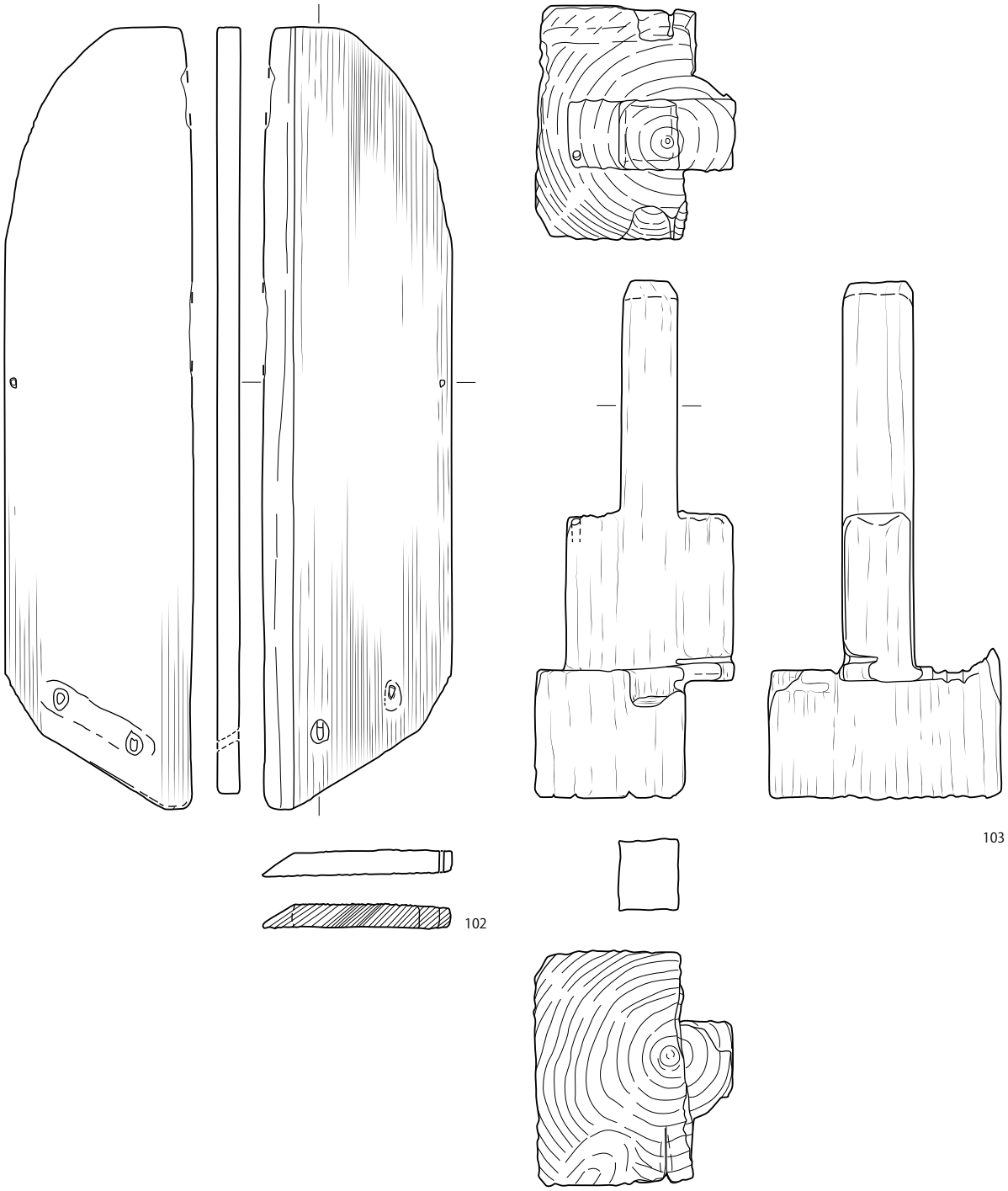
第 141 図　木製品（11）



第 142 図　木製品（12）



第 143 図　木製品（13）



第 144 図　木製品（14）

第 39 表　木製品観察表

挿図番号	写真図版	出土地点	注記	器種	遺存状態	法量（cm） a	b	c	d	備　考
131-1	38-1	池遺構　下層	池西	履物（下駄/連歯）	完形	21.8	8.6	4.7	3.6	長方形　前坪中心、後坪後歯前方　前坪周辺に弱い指痕 横木取り板目
131-2	38-2	69・74号遺構	69・74ｲｺｳ	履物（下駄/連歯）	完形	22.1	9.0	3.0	1.5	長方形　前坪中心、後坪後歯後方、先端上面に網代状付着物（竹皮表の痕跡ヵ）、側面の一部に赤色塗料付着　前坪周辺に指痕顕著 横木取り板目
131-3	38-3	第2層	ﾓﾘ土2	履物（下駄/連歯）	ほぼ完形	22.5	8.8	2.5	1.2	長方形　前坪中心、後坪後歯前方　歯が著しく摩滅 横木取り板目
131-4	38-4	池遺構	池東キシ3	履物（下駄/連歯）	完形	22.6	8.0	6.5	4.8	長方形　前坪中心、後坪後歯前方　前坪周辺に弱い指痕 横木取り板目
132-5	38-5	6号遺構	6ｲｺｳ	履物（下駄/連歯）	ほぼ完形	22.6	8.2	5.6	4.5	長方形　前坪中心、後坪後歯前方　歯は非対称に摩滅 横木取り板目
132-6	38-6	第4層	ﾓﾘ土3	履物（下駄/連歯）	約1/2	20.9	5.7	8.4	7.1	黒漆塗り　隅丸長方形　前坪中心、後坪後歯前方、歯は台形　縄製の鼻緒が残存　破断面炭化 横木取り板目
132-7	38-7	第1層	Ⅰ区旧ｺｳｼｬ	履物（下駄/連歯）	完形	23.6	8.4	2.4	1.6	隅丸長方形　前坪中心（貫通していない）、後坪後歯前方　歯が著しく摩滅　踵部分に釘 横木取り板目
132-8	38-8	池遺構　下層	池北キシ4B	履物（下駄/連歯）	完形	14.0	9.2	3.0	1.2	隅丸長方形、幅に対して長さがかなり短い　前坪中心（破損）、後坪後歯前方整形が著しく稚拙　下駄以外の製品の破損品を利用して自作した再生品ヵ 横木取り板目
133-9	38-9	69・74号遺構	69・74ｲｺｳ	履物（下駄/差歯、露卯）	台完形	21.5	8.7	2.8	—	長方形　前坪中心、後坪後歯後方　前坪周辺に指痕顕著 横木取り板目
133-10	38-10	69・74号遺構	69・74ｲｺｳ	履物（下駄/差歯、露卯）	台完形	23.1	6.7	3.4	1.3	舟形　前坪中心、後坪後歯後方　前坪周辺に指痕 横木取り板目　№49と対ヵ
133-11	38-11	69・74号遺構	69・74ｲｺｳ	履物（下駄/差歯、露卯）	台完形	23.0	6.3	3.8	1.6	舟形　前坪中心、後坪後歯後方　前坪周辺に指痕 横木取り板目　№48と対ヵ
133-12	38-12	6号遺構	6ｲｺｳ	履物（下駄/差歯、陰卯）	台完形	14.0	5.1	2.8	—	変則舟形　差歯溝が一条しかなく、踵部分が不自然に切断されている　歯が破損した差歯下駄の台を加工した再生品ヵ 横木取り板目
133-13	38-13	93号遺構　下層	93ｲｺｳ西下	履物（下駄/差歯、露卯）	歯完形	12.9	9.9	2.0	1.8	黒漆塗り　台形 横木取り板目
134-14	38-14	第1層	Ⅰ区旧ｺｳｼｬ	履物（その他）	ほぼ完形	24.0	7.7	2.4	—	楕円形　薬研状に削り込んだ窪みが3ヵ所あり、各窪みの底に2穴1対の穿孔がある　孔中に木釘残存 横木取り板目
134-15	38-15	69・74号遺構	69・74ｲｺｳ	履物（その他）	完形	25.1	9.9	2.0	—	楕円形　周縁部の4ヵ所に釘残存、側縁の2ヵ所に穿孔 横木取り板目
134-16	38-16	69・74号遺構	69・74ｲｺｳ	履物（その他）	完形	22.3	6.7	1.8	—	楕円形（半楕円形を連結）　側縁部14ヵ所に2孔1対の穿孔、下面では2孔をつなぐように細い溝が切られている 横木取り板目
134-17	38-17	70号遺構	70ｲｺｳ	履物（その他）	約1/2	12.1	▲5.8	1.3	—	半楕円形ヵ　側縁部数ヵ所に2孔1対の穿孔、下面ではこれらの孔をつなぐように細い溝が切られている 横木取り板目
135-18	39-18	池遺構　上層	61ｲｺｳ	椀（腰丸椀）	約1/2	10.5	5.6	4.5	0.5	外面：黒漆塗り　内面：赤漆塗り　高台内：刻み「十」 横木取り
135-19	39-19	93号遺構　下層	93ｲｺｳ西下	椀（腰丸椀）	約1/3	11.8	6.0	10.0	2.8	外面：黒漆塗り、赤漆鶴文　内面：赤漆塗り 縦木取り
135-20	39-20	第2-2層	ﾓﾘ土1	椀（平椀）	ほぼ完形	13.3	6.5	5.0	1.0	外面：黒漆塗り、漆竹垣草花文　内面：赤漆塗り 横木取り
135-21	39-21	35号遺構	35ｲｺｳ胴木	椀（平椀）	約1/2	14.5	6.4	4.5	0.8	外面：赤漆塗り　内面：赤漆塗り　口縁端部：黒漆塗り 横木取り
135-22	39-22	33号遺構	3Ⅰ区33ｲｺｳ	椀（腰丸椀）	約1/2	10.4	5.6	4.3	0.8	外面：黒漆塗り、赤漆鶴丸文　内面：赤漆塗り 横木取り
135-23	39-23	93号遺構　下層	93ｲｺｳ北東下	椀（腰丸椀）	ほぼ完形	▲10.8	8.7	8.7	2.6	外面：黒漆塗り、赤漆塗り草花文　内面：赤漆塗り 縦木取り
135-24	39-24	33号遺構	3Ⅰ区33ｲｺｳ胴木	椀（腰丸椀）	ほぼ完形	10.5	5.1	8.2	3.2	外面：黒漆塗り　内面：赤漆塗り 縦木取り
135-25	39-25	第4層	ﾓﾘ土3	椀（腰丸椀）	ほぼ完形高台欠損	11.7	6.3	▲7.5	▲1.0	外面：黒漆塗り、赤漆塗り蕪丸文　内面：赤漆塗り 横木取り
135-26	39-26	33号遺構	3Ⅰ区33ｲｺｳ	椀（腰丸椀）	約1/3	▲12.0	6.3	5.0	0.9	外面：黒漆塗り、赤漆菊花丸文　内面：赤漆塗り 横木取り
135-27	39-27	33号遺構	3Ⅲ33ｲｺｳ胴木	椀蓋	約1/2	11.6	5.1	3.2	1.7	外面：黒漆塗り、漆草花文　内面：赤漆塗り　高台内：漆草文 縦木取り
135-28	39-28	17号遺構	17ｲｺｳ	椀蓋	ほぼ完形高台欠損	11.9	4.2	3.2	欠	外面：黒漆塗り、金彩波千鳥文　内面：赤漆塗り 横木取り
135-29	39-29	93号遺構　下層	93ｲｺｳ北東下	椀（腰丸椀）	約1/2	▲14.7	6.8	11.2	3.3	外面：黒漆塗り　内面：赤漆塗り 変形が著しい 横木取り
135-30	39-30	33号遺構	3Ⅰ区33ｲｺｳ	椀蓋	約1/2	11.2	5.3	3.9	0.5	外面：黒漆塗り、赤漆菊花丸文　内面：黒漆塗り　口縁端部：赤漆塗り 横木取り
135-31	39-31	池遺構　上層	91ｲｺｳ	向付蓋	ほぼ完形	6.6	3.0	1.0	0.4	外面：黒漆塗り　内面：赤漆塗り 縦木取り
135-32	39-32	池遺構　上層	61ｲｺｳ	合子蓋	完形	6.5	—	1.5	—	外面：黒漆塗り　内面：赤漆塗り 縦木取り
135-33	39-33	69・74号遺構	69・74ｲｺｳ	天目台	約1/3	16.2	9.1	2.7	0.8	黒漆塗り 縦木取り
136-34	39-34	第2-1・3層・第3層	ﾓﾘ土2	高足膳　底板	破片	27.9	6.6	0.8	—	黒漆塗り 下面縁辺付近に脚の装着痕 板目
136-35	39-35	池遺構　上層	91ｲｺｳ	高足膳　脚	破片	14.1	▲9.1	1.0	—	黒漆塗り 変形　上下の横桟に刃物による刻み（他器種への転用ヵ） 板目
136-36	39-36	池遺構　下層	池西	高足膳　脚	破片	▲8.8	▲5.2	1.0	—	黒漆塗り　側面は漆が剥離 板目
136-37	39-37	池遺構　上層	ﾓﾘ土4南4	高足膳　脚	破片	▲11.5	▲9.7	1.0	—	黒漆塗り 板目
136-38	39-38	池遺構　上層	ﾓﾘ土4西	高足膳　脚	破片	▲10.4	▲9.3	1.1	—	黒漆塗り 板目ヵ
136-39	39-39	池遺構　上層	ﾓﾘ土4西	高足膳　脚	破片	▲11.1	▲1.5	1.0	—	黒漆塗り 一端に刃物による刻み（他器種への転用ヵ）
136-40	39-40	池遺構　下層	池西	高足膳　底板桟ヵ	破片	▲16.9	1.6	0.9	—	黒漆塗り　一部円弧状に赤漆塗り 板目ヵ
137-41	40-41	池遺構　上層	ﾓﾘ土4西	脚付丸盆　盆	ほぼ完形	△29.3	—	0.8	—	黒漆塗り　曲物の縁を木釘で底板縁辺に装着した上に漆を塗布　下面は縁辺際3ヵ所に円弧形の脚の装着痕（№63の脚が装着されていた可能性が高い）、中央に赤漆で「一」の文字がみられる 板目
137-42	40-42	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北4	脚付丸盆　脚	完形	△7.2	5.5	1.5	—	黒漆塗り 上端の断面形は円弧形　№77に装着されていた脚の可能性が高い
137-43	40-43	池遺構　下層	池北キシ4B	蓋	約1/2	11.7	10.8	1.0	—	縁辺の4ヵ所に木釘残存 柾目

挿図番号	写真図版	出土地点	注記	器種	遺存状態	法量（cm）				備　考
						a	b	c	d	
137-44	40-44	6号遺構	6ｲｺｳ	蓋	約1/2	16.9	16.9	1.4	—	側縁の3ヵ所に木釘残存　上面に「久・」の焼印 板目
137-45	40-45	93号遺構　下層	93ｲｺｳ北東下	蓋	約1/5	△27.0	△23.3	1.1	—	柾目
137-46	40-46	池遺構　下層	池北キシ6	蓋	約1/2	△24.3	—	1.1	—	上面：黒漆塗り　下面：赤漆塗り　上面の一部に炭化がみられる 板目ヵ
137-47	40-47	93号遺構　上層	93ｲｺｳ北東上	鍋蓋	約1/2 摘み欠	△15.8	—	0.7	—	下面：黒漆塗り　上面に摘み装着用の溝1条 板目
138-48	40-48	池遺構　上層	61ｲｺｳ	羽釜蓋	ほぼ完形 摘み欠	33.5	—	3.7	—	上面に摘み装着用の溝2条　下面には不整形の円環状に摩耗による凹凸がみられる 板目
138-49	40-49	池遺構　上層	47ｲｺｳ	箱蓋	完形	19.6	10.8	0.5	—	上面に「坂本／岡埜製」の焼印 板目
138-50	40-50	第4層	ﾓﾘ土3	曲物（容器）	胴	9.7	—	4.3	—	結束用樹皮残存
138-51	40-51	6号遺構	6ｲｺｳ	曲物（容器）	胴	13.2	—	4.8	—	結束用樹皮残存
138-52	40-52	池遺構　下層	池西キシ3	曲物（柄杓）	ほぼ完形 底板欠損	8.4	—	5.5	△20.1	胴外面：黒漆塗り　結束用樹皮残存
139-53	40-53	第4層	ﾓﾘ土3	曲物（容器）	底板	9.1	—	0.6	—	片面のみ黒漆塗り　下面中央に木釘残存 板目
139-54	40-54	池遺構　下層	池西キシ3	曲物（容器）	底板	7.8	—	0.7	—	片面のみ黒漆塗り　縁辺の4ヵ所に釘穴　中央に径4㎜の穿孔 柾目
139-55	40-55	33号遺構	3Ⅱ区33ｲｺｳ	曲物（容器）	底板	11.9	—	0.6	—	縁辺の6ヵ所に釘穴 柾目
139-56	40-56	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北1	曲物（容器）	蓋	△12.9	—	0.6	—	上面に樹皮製の摘みあり 柾目
139-57	40-57	69・74号遺構	69・74ｲｺｳ	曲物（容器）	蓋	13.3	—	0.7	—	上面に樹皮製の摘みあり 柾目
139-58	40-58	池遺構　上層	47ｲｺｳ	曲物（容器）	蓋ヵ	6.8	—	0.8	—	全面：赤色塗料付着　　上面中央に木釘残存 板目
139-59	40-59	6号遺構	6ｲｺｳ	曲物（容器）	蓋ヵ	7.8	—	0.4	—	中央に径2㎜の穿孔 板目
140-60	41-60	6号遺構	6ｲｺｳ	結物（桶）	側板	29.2	▲18.7	1.3	—	3枚が隣接した状態で出土　内側に淡黄白色の付着物 板目
140-61	41-61	33号遺構	3Ⅱ区33ｲｺｳ	結物（樽）	天板	11.1	—	0.5	2.3	縁辺寄りに径2.3㎝の注ぎ口 板目
140-62	41-62	69・74号遺構	69・74ｲｺｳ	結物（樽）	天板	11.2	—	1.0	1.2	縁辺寄りに径1.2㎝の注ぎ口 柾目
140-63	41-63	93号遺構	93ｲｺｳ	結物（樽）	天板	12.9	—	1.0	3.0	縁辺寄りに径3.0㎝の注ぎ口 板目
141-64	41-64	69・74号遺構	69・74ｲｺｳ	結物（樽）	天板	△30.0	—	1.2	3.0	縁辺寄りに径3.0㎝の注ぎ口　2ヵ所に木釘残存 板目
141-65	41-65	6号遺構	6ｲｺｳ	結物（樽）	底板	12.6	—	0.7	—	板目
141-66	41-66	第2-1・3層・第3層	ﾓﾘ土2	結物（樽）	底板	10.3	—	1.4	—	板目
141-67	41-67	第4層	ﾓﾘ土3	櫛（結髪用縦櫛）	ほぼ完形	△7.8	19.8	0.5	—	板目
141-68	41-68	69・74号遺構	69・74ｲｺｳ	櫛（横櫛）	端部欠	▲6.2	4.3	0.9	—	柾目ヵ
141-69	41-69	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北4	木釘	完形	7.2	0.4	—	—	
141-70	41-70	70号遺構	70ｲｺｳ	櫛（横櫛）	端部欠	△10.7	4.7	0.9	—	黒漆塗り 柾目ヵ
141-71	41-71	池遺構　下層	池南	刃物の柄ヵ	破片	2.8	2.1	?	—	炭化ヵ
141-72	41-72	池遺構　上層	61ｲｺｳ	栓	完形	4.1	—	2.8	—	板目
141-73	41-73	6号遺構	6ｲｺｳ	栓	完形	3.2	—	7.2	—	板目
141-74	41-74	63号遺構	63ｲｺｳ	栓	完形	5.8	2.7	1.7	—	板目
141-75	41-75	池遺構　上層	61ｲｺｳ	独楽	完形	5.8	—	4.4	3.4	鉄芯は上下別々 縦木取り　柾目ヵ
141-76	41-76	6号遺構	6ｲｺｳ	札	ほぼ完形	10.6	4.0	0.3	—	墨書「平向平治様／新町／桑地より」 柾目ヵ
141-77	41-77	第1層	Ⅰ区	札（荷札）	完形	10.8	3.9	0.8	—	上端近くに2.5㎜四方の穿孔 墨書「松平丹波守様／御おくに而／八千代■（殿ヵ）」「西■（浦ヵ）［　］／［　］小兵衛」 板目
141-78	41-78	池遺構　上層	51ｲｺｳ	札	完形	17.5	5.0	0.7	—	上端近くに径12㎜の穿孔 板目
141-79	41-79	6号遺構	6ｲｺｳ	札	破片	▲18.6	5.8	0.5	—	墨書あり（判読不能） 板目
142-80	41-80	93号遺構　下層	93ｲｺｳ西下	札	完形	22.4	7.9	1.6	—	上端近くに6×21㎜の長方形の穿孔、下端近くに径18㎜の穿孔 柾目
142-81	42-81	6号遺構	6ｲｺｳ	箸	完形	17.7	—	0.7	—	
142-82	42-82	池遺構　上層	47ｲｺｳ	箸	完形	19.5	—	0.6	—	
142-83	42-83	69・74号遺構	69・74ｲｺｳ	箸	完形	21.7	—	0.7	—	
142-84	42-84	85号遺構	85ｲｺｳ	箸	完形	21.8	—	0.6	—	
142-85	42-85	33号遺構　間知石掘方	Ⅰ区33ｲｺｳ裏	箸	完形	22.2	—	0.8	—	
142-86	42-86	6号遺構	6ｲｺｳ	ヘラ	完形	13.9	1.9	0.5	—	絵中央に径3㎜の穿孔　左利き用 板目
142-87	42-87	95号遺構	95ｲｺｳ	ヘラ	完形	30.5	4.5	0.8	—	柄端部に径3㎜の穿孔　右利き用 板目
142-88	42-88	17号遺構	17ｲｺｳ	ヘラヵ	完形	▲27.4	2.4	0.9	—	板目
142-89	42-89	69・74号遺構	69・74ｲｺｳ	羽子板	完形	31.7	10.8	1.3	—	板目
142-90	42-90	第2-1層	56ｲｺｳ下	木彫（馬の脚）	完形	13.0	2.7	2.5	—	木像の一部ヵ
143-91	42-91	第1層	Ⅱ区表土	木彫（蓮華の蕾）	完形	24.2	4.3	1.7	—	仏具もしくは仏像の一部ヵ
143-92	42-92	6号遺構	6ｲｺｳ	不明	箱縁ヵ	▲4.3	2.0	0.3	—	外面：黒漆塗り、赤漆松葉文　内面：黒漆塗り　下端部1ヵ所に木釘残存
143-93	42-93	66号遺構	66ｲｺｳ	不明	完形ヵ	6.9	3.7	0.9	—	黒漆塗り　側面には漆が塗布されていない 柾目ヵ
143-94	42-94	6号遺構	6ｲｺｳ	不明	完形	4.0	—	0.9	—	円板状　中央に径9㎜の穿孔 柾目
143-95	42-95	池遺構　下層	池南	不明	完形	10.4	—	0.7	—	円板状　中央に29㎜×27㎜の方形の穿孔　縁辺の8ヵ所に釘穴 曲物の底板を転用ヵ 板目
143-96	42-96	94号遺構	94ｲｺｳ	不明	完形	10.1	—	0.2	—	円板状　中央に径21㎜の穿孔 板目
143-97	42-97	35号遺構	35ｲｺｳ胴木下	不明	約1/2	8.4	▲4.2	0.6	—	丸太を輪切りにしたような木取り
143-98	42-98	32号遺構-1	32号遺構-1 32-1ｲｺｳ	不明	完形	19.1	3.5	2.1	—	
143-99	42-99	93号遺構　下層	93ｲｺｳ西下	不明	約1/2	16.7	3.8	2.0	—	板目
143-100	42-100	26号遺構	226ｲｺｳ	不明	完形	10.7	14.3	0.6	—	楕円形の板 板目
143-101	42-101	第1層	Ⅰ区旧ｺｳｼｬ	不明	約1/2	24.3	▲12.2	2.4	—	八角形の板 板目
144-102	42-102	69・74号遺構	69・74ｲｺｳ	不明	完形ヵ	36.8	8.9	1.1	—	隅切の板 板目
144-103	42-103	6号遺構	6ｲｺｳ	不明	ほぼ完形	21.9	18.0	48.9	—	建材ヵ

4）金属製品（第 145 ～ 150 図、第 40 表、図版 43 ～ 46）

水分を多く含む粘土質の土で、遺存状態は、銅合金製品は良好な一方、鉄製品についてはかなり悪かった。破損や腐食によって原形をとどめていないもの以外の 223 点を取り上げ、うち、116 点を報告する。なお、素材については、磁石に付くものは鉄を主体とすると判断し、それ以外のものについては、蛍光Ｘ線分析（エネルギー分散型／表面照射）によって、素材同定を行った。

銭貨（1 ～ 35）　1 ～ 32 は寛永通寶、33 は文久永寶、35 は天保通寶、34 は明治政府発行の半銭硬貨である。9 は 3 枚が重なって錆び着いており、分離することができなかったが、CT とＸ線撮影によって銭文を読むことができた。これら 3 枚も含めて寛永通寶は 34 枚、うち古寛永が 9 枚、新寛永が 25 枚である。古寛永は、銭文「寶」字の下のはらいが「ス」の字状になっている（俗に「ス」寶と称される）もので、一文銭である。新寛永については、裏面背に「文」の文字が入る文銭が 8 枚、裏面に青海波文がみられる波銭が 9 枚（21 波 1 枚、11 波 8 枚）、銭文以外に文字や文様が入らないものが 8 枚である。波銭は四文銭、それ以外は一文銭である。鋳造年代は、古寛永が寛永 13（1636）年～明暦頃（1650 年代）、新寛永が寛文頃（1660 年代）以降。33 の文久永寶は、銭文「文」字が「攵」となっている草文のものである。11 波の波銭で、四文銭である。鋳造期間は文久 3（1863）年 2 月～慶応 3（1867）年で、昭和 28（1953）年通用停止になるまで法的には通用した。また、天保通寶は天保 6（1835）年初鋳で、明治 24（1896）年に通用停止となった。半銭硬貨は明治 6 ～ 21（1873 ～ 88）年の間製造されており、本資料は明治 10 年銘である。

煙管（36 ～ 46）　36 ～ 42 は雁首、43 ～ 46 は吸口である。いずれも真鍮製で鍛金によって成形されている。蝋着けは概ね脇合わせだが、37 のみ上合わせである。また、38 は外面からは蝋着痕が全くわからないが、小口から内側を見ると、脇に合わせ目があることがわかる。39、44 には淡い凹凸が見られ、文様が打ち出されていたと思われるが、摩滅してしまっており、モチーフは不明である。44 には、さらに鍍金の痕が見られ、蛍光Ｘ線分析によって、蝋着とともに錫が用いられたことがわかった。それぞれの形状を検討すると、雁首については、いずれも油返しが顕著ではなく、火皿は大きめの半球状（39、41）、やや小ぶりで漏斗のような形状（40）、補強帯とまでは言えないが、太めのしっかりした蝋着痕といった特徴から、18 世紀前葉～後葉頃のものと考えられる。また、吸口については、いずれも、肩がなく比較的真直ぐであり、18 世紀後葉頃のものと考えられよう。

釘（47 ～ 70、72 ～ 77）　角釘を中心に取り上げた。角釘は断面形が方形の、日本古来の釘で、近世以前の日本の釘はすべて角釘であった。様々な種類があるが、ここでは端部の形状によって、頭部を平たく打ち広げて巻いた巻頭釘、端部をそのままの太さに折り叩いて頭部とした皆折釘、両端が尖らせてある合釘の 3 種に分類した。47、48 は頭部欠損のため不明、49 ～ 66 は巻頭釘、67 ～ 69 は合釘、70 ～ 72、77 は皆折釘である。なお、56（巻頭釘）、69（合釘）、72（皆折釘）は 92 号遺構の木製枡、70（皆折釘）は 88 号遺構の木樋蓋、59（巻頭釘）は 96 号遺構の木樋蓋、64（巻頭釘）は 35 号遺構の煉瓦製建物基礎の胴木に、それぞれ打たれていたものである。

工具類（71、78 ～ 81）　71 はタガネ、78 はカスガイ、79 は片切の金槌、80、81 は錐状の工具と考えられる。

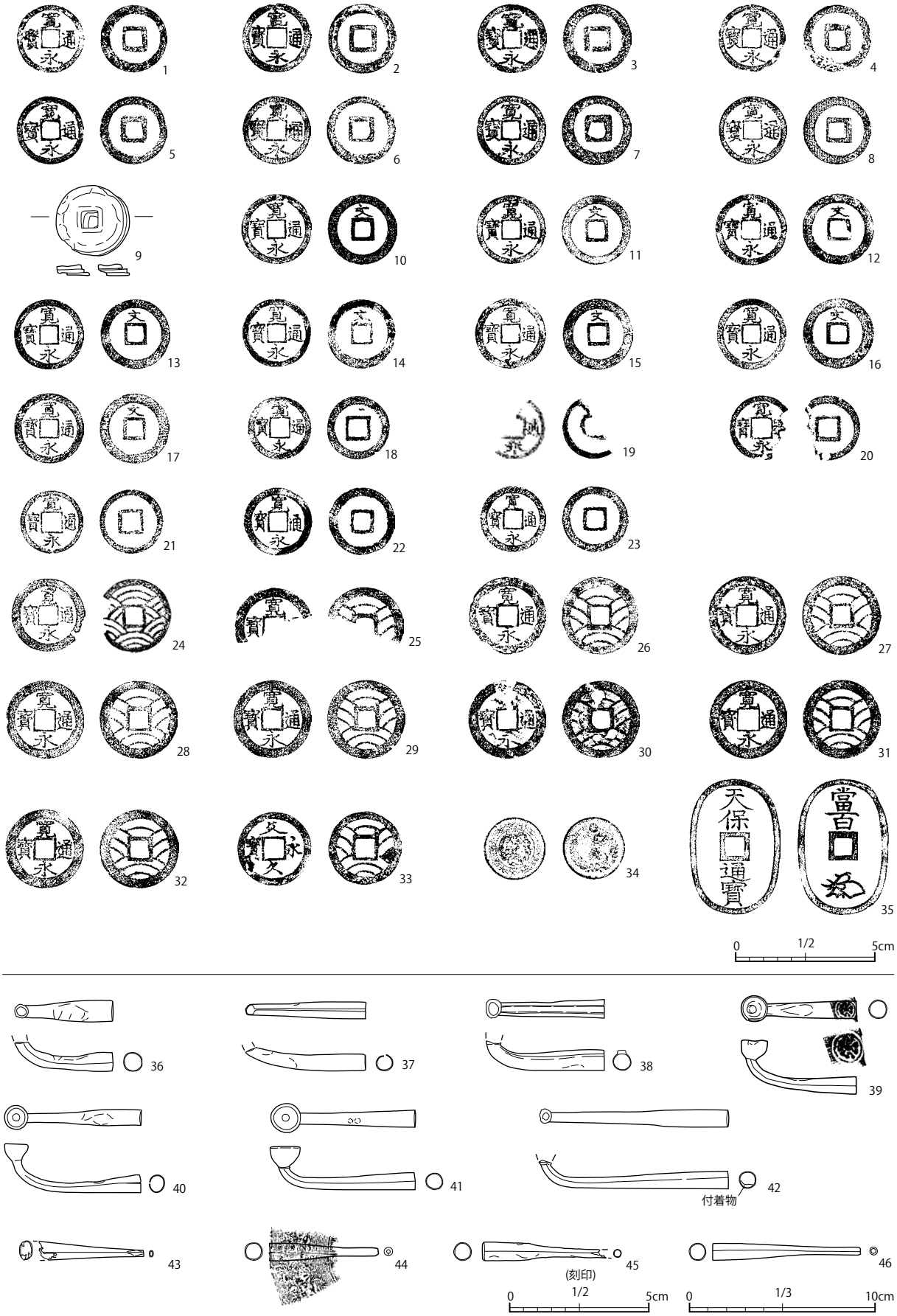
建具類（82 ～ 87）　82 は鉄製で、建具の金具と考えられる。83 は襖などの引手金具で純銅製である。一部は黒ずんだ色調になる煮色加工が施されているようである。84 は純銅製で、L 字状を呈す。葵唐

草文の線刻が施されており、径２㎜弱の釘穴が各辺にみられる。襖屏風などの建具の角を補強・装飾する金具であろう。85 は錠前付きの指物金具である。鉄製で全体に黒光りする色調の煮色加工が施されている。箪笥などの開き戸に取り付けられたものであろうか。86、87 は具体的な用法は不明であるが、建具などの金具であろう。

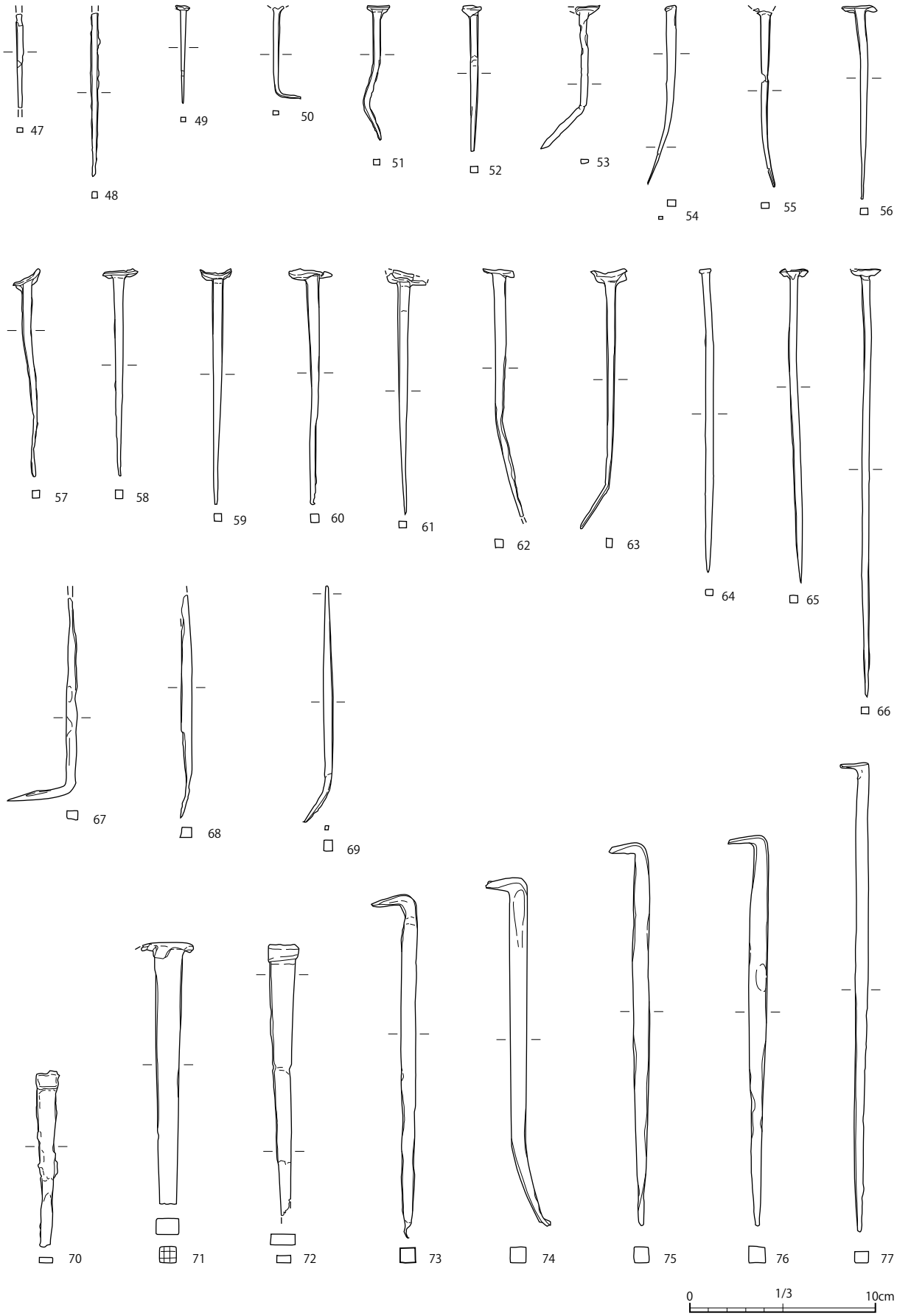
刀装具（88、89、91） 88 は鍔である。下地である下貝部分は純銅、台尻側を覆う上貝部分は真鍮製である。89 は鞘口で、純銅製。91 は小柄で、刀身は鉄製、柄は純銅製である。柄の表側には達磨和尚のモチーフが刻まれており、和尚の着物の襟部分には真鍮の象嵌が施されている。裏側には「光■」の銘が刻まれている。

その他（90、92 ～ 113） 90 は端部に向かって太くなる円管である。太い方の端部は閉じられており、小さな球状の突起が付く。もう一方の端部には棒状の管が差し込まれていたようだが、根元から折れているため、全体の形は不明である。打ち出しで文様が施された扇形の青銅板を巻いて成形されている。92 は純銅製の杓子、96 は純銅製のスプーンである。94、95 は真鍮製の洋食用ナイフであろう。同じセットのうちの２本の可能性が高い。93 は鉄製で、錆の付着が著しい。X線撮影によって金属部分の形状を確かめたところ、先端が丸く断面の中央に厚みのある形状であった。ヘラなどの刃の付かない器種の可能性が高い。97 は純銅製用途不明の筒である。両端が銅円板によって閉じられていたようであるが、現状では一方のみが閉じられている。閉じられていない方の端部にも、切り取り痕などの破断はみられない。98 は真鍮製の水滴である。99 は鈴である。CT 撮影し、構造を確認したところ、半球状の上下を組み合わせて作られており、胴の上寄りに修復痕が確認できた。破損は表からはほとんど認識できない状態であったが、内側から方形の薄板を貼り付けて溶接し、丁寧に補修したようである。胴は真鍮製、中の玉は細かい多面体で純銅製である。100 は純銅製で、表裏に極細い線刻で、亀甲文や鏡面文字が刻まれている。銅版かと思われる。101、102 は火箸で真鍮製である。103 ～ 105 は純銅製の蓋である。薬缶などのものであろうか。106 ～ 108 は用途不明である。106 は真鍮製、107 は鉄製。108 も鉄製で、箕のような形状で底がスリット状になっている。環がついていて提げられるようになっているが、詳細は不明である。109、110 は、いずれも純銅製の網である。109 にはややたるみがあり、円形の枠に張って、漉し網としたものであろう。110 は 92 号遺構の木製枡から出土したもので、水廻り施設に用いられていた可能性もある。111 ～ 113 は 53 号遺構－１（十字形の土坑）から出土したもので、土坑施設に設置された部材の可能性が高い。111 は長尺のボルト、112、113 はで長めの釘で、いずれも、もともとは板状であったと思われる木質が付着している。その木目が不規則な方向を向いていることから、複数枚の板が使われており、ボルトや釘は、それらを側面から貫通するように留める役割を果たしていたと考えられる。同じ土坑内には、他にもやや小ぶりで同様の状態の釘などが検出されたが、相互の関係性は不明である。

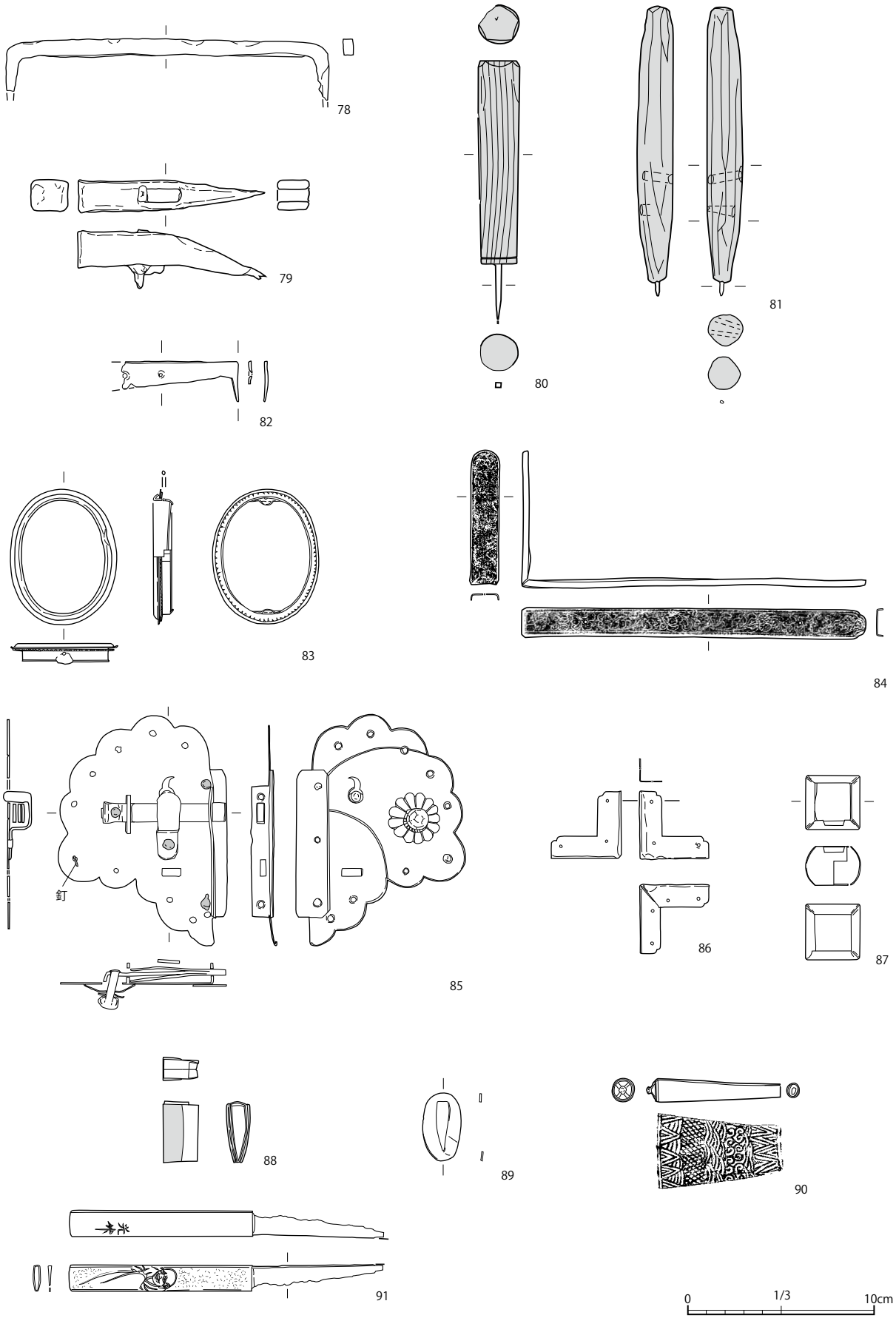
以下は、写真図版のみでの報告である。114 は鉄と銅を用いた避雷針のアース部分、115 は建築金具と考えられる。116 はコンクリートの鉄筋で、丸鋼と呼ばれる、凹凸のないものである。1960 年代後半以降には、表面に凹凸の付けてある異形鉄筋が普及すること、昭和３（1928）年竣工の旧校舎跡出土であることなどから、同校舎のものと考えられる。同校舎は大正 12（1923）年の関東大震災で焼失した明治 35 年竣工の校舎に替わって建設された、いわゆる復興建築である。復興建築の部材として貴重である。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
天保□通寶
當百□
35
0　1/2　5cm
36
37
38
39
40
41
42
付着物
43
44
(刻印)
45
46
0　1/2　5cm
0　1/3　10cm

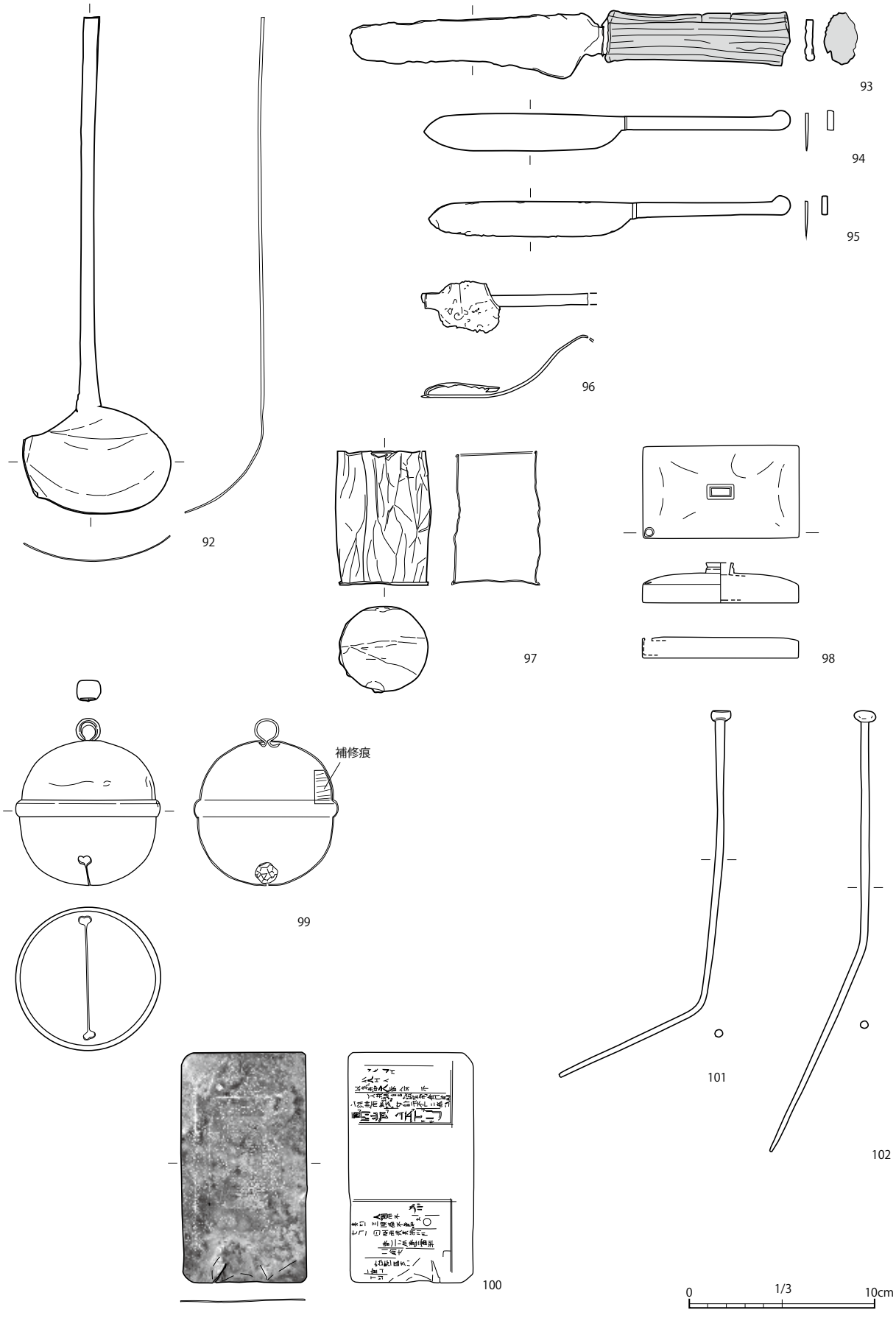
第 145 図　金属製品（1）


47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
0
1/3
10cm

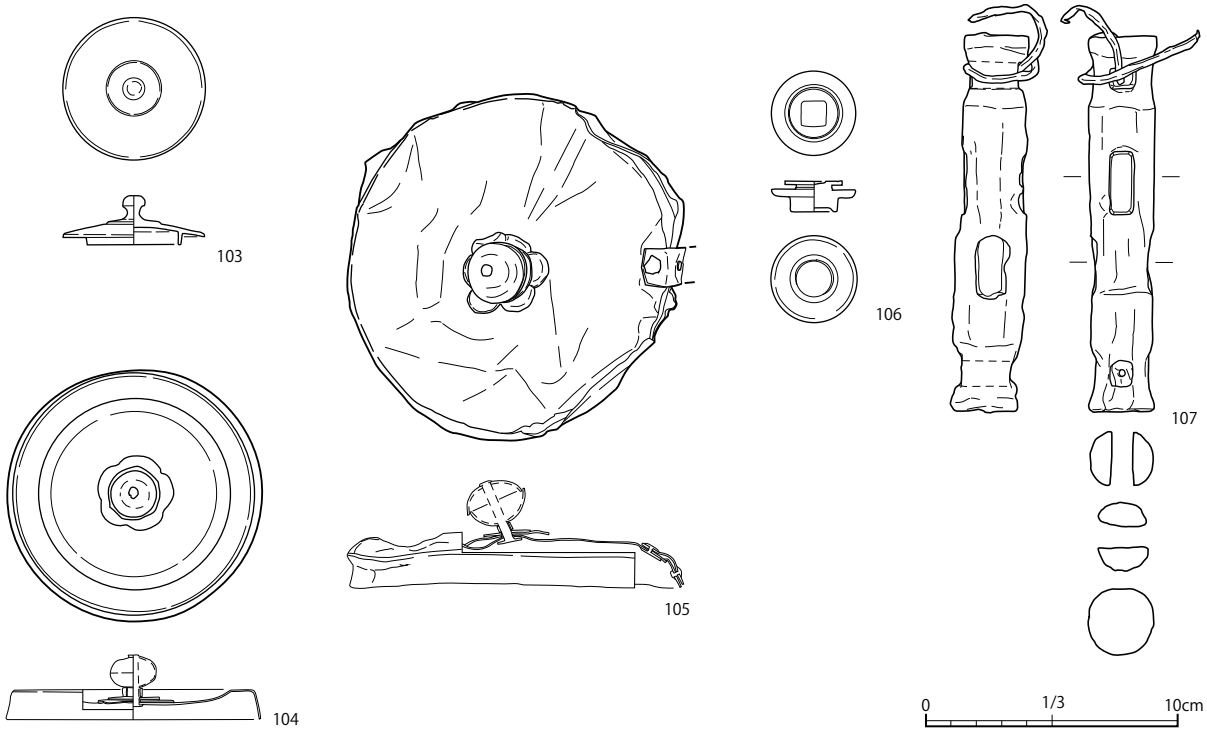
第 146 図　金属製品（2）

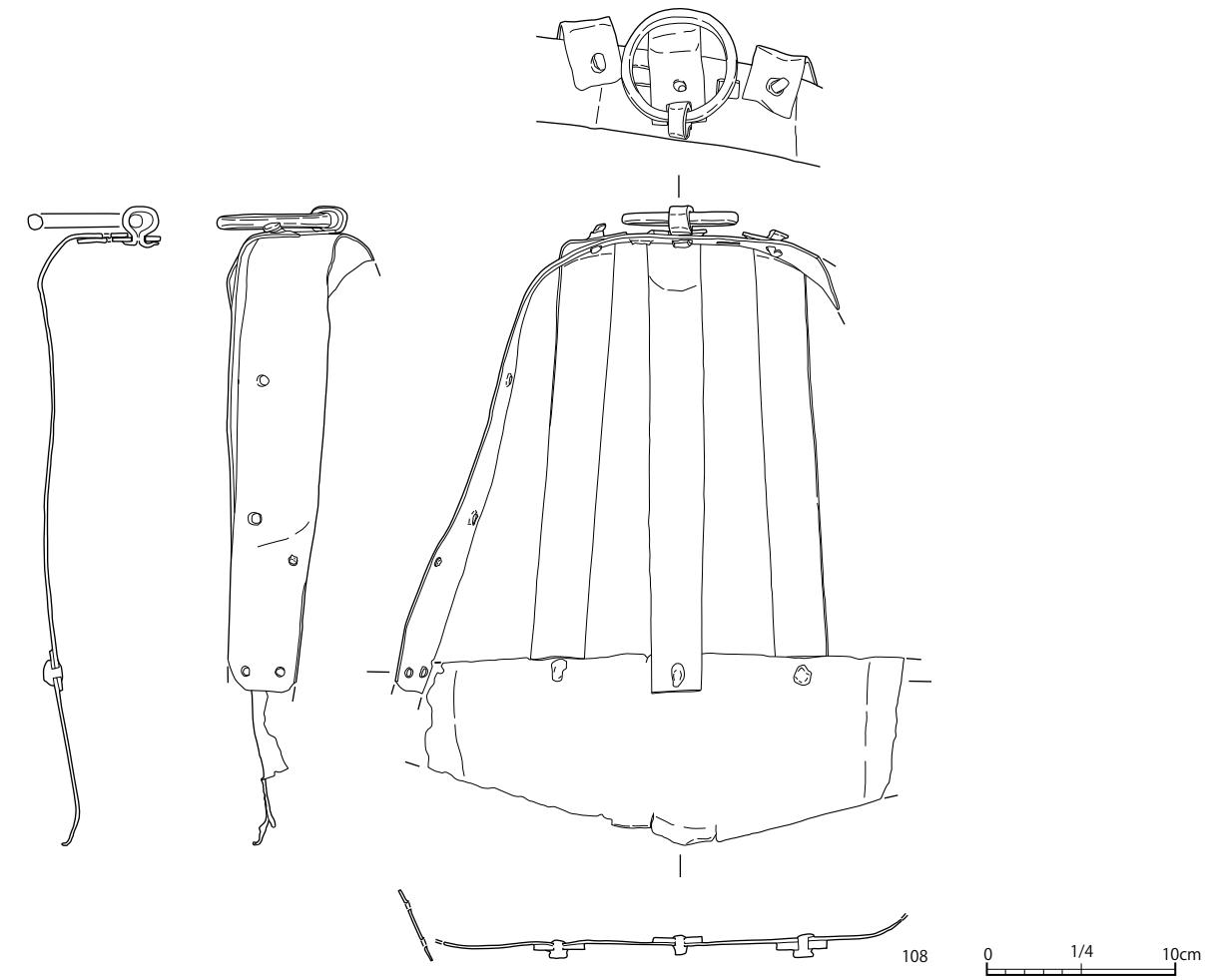


第 147 図　金属製品（3）

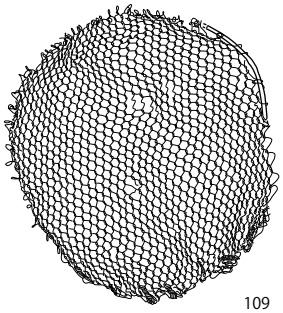


第 148 図　金属製品（4）

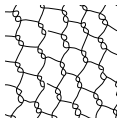




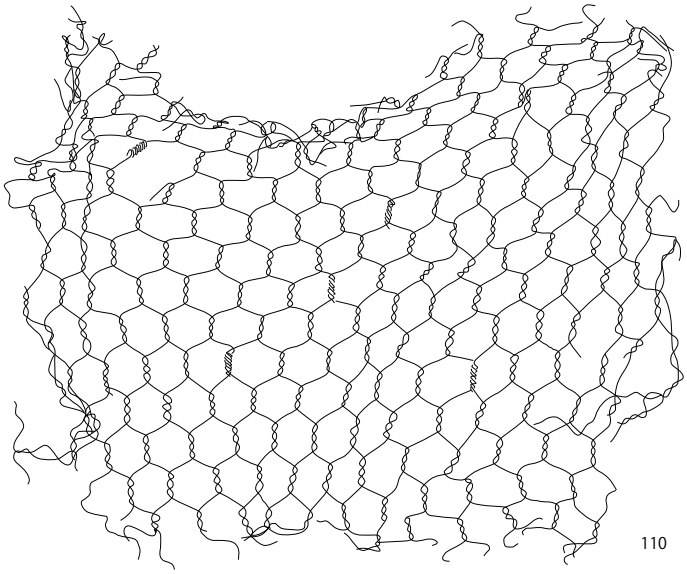
第 149 図　金属製品（5）



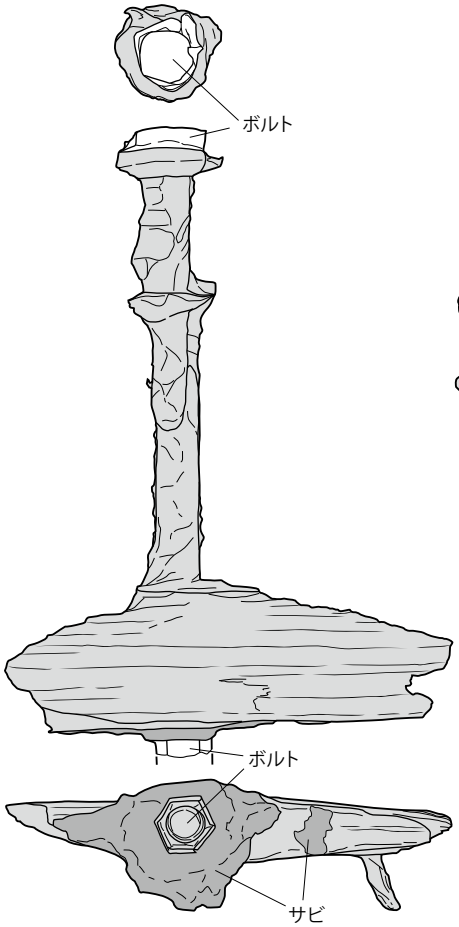
109

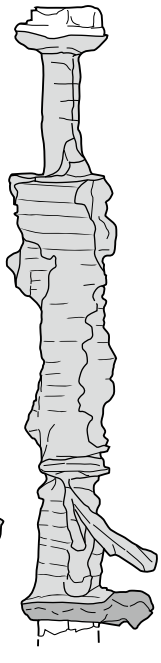


網目 1/1

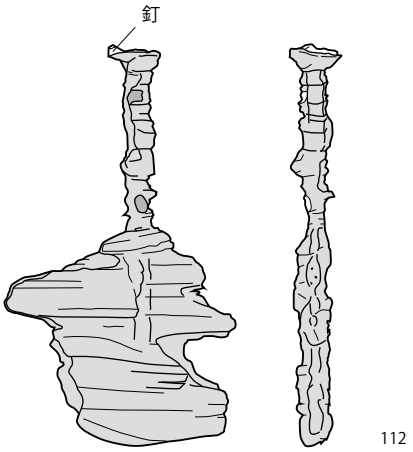


110

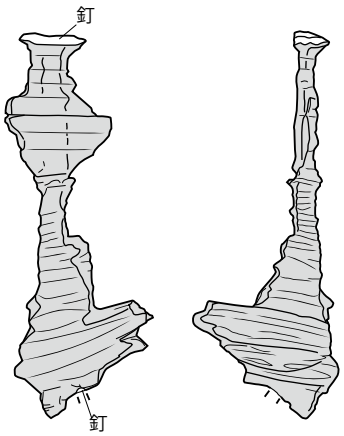




111



112



113

0 1/3 10cm

第 150 図　金属製品（6）

第 40 表　金属製品観察表

挿図番号	写真図版	出土地点	注記	器　種	遺存状態	法量（cm） a	b	c	d	重さ（g）	備　考
145-1	43-1	第1層	Ⅰ区旧ｺｳｼｬ	銭貨 寛永通寶[古]	完形	2.42	0.55	0.09		2.2	青銅［鉛錫銅］製 「ス」寛永
145-2	43-2	93号遺構	93ｲｺｳ	銭貨 寛永通寶[古]	完形	2.50	0.64	0.09		2.8	青銅［鉛錫銅］製 「ス」寶
145-3	43-3	第1層		銭貨 寛永通寶[古]	完形	2.47	0.55	0.12		3.7	青銅［鉛錫（ヒ素）銅］製 「ス」寶
145-4	43-4	第4層	ﾓﾘ土3	銭貨 寛永通寶[古]	完形	2.44	0.57	0.13		3.2	青銅［鉛錫（ヒ素）銅］製 「ス」寶
145-5	43-5	池遺構　下層	池東キシ1	銭貨 寛永通寶[古]	完形	2.44	0.58	0.13		3.4	青銅［鉛錫（ヒ素）銅］製 「ス」寶
145-6	43-6	池遺構　上層	61ｲｺｳ	銭貨 寛永通寶[古]	完形	2.45	0.54	0.13		4.6	青銅［鉛錫銅］製 「ス」寶
145-7	43-7	80号遺構	80ｲｺｳ	銭貨 寛永通寶[古]	完形	2.50	0.6	0.1		3.2	青銅［鉛錫（ヒ素）銅］製 「ス」寶
145-8	43-8	池遺構　上層	61ｲｺｳ	銭貨 寛永通寶[古]	完形	2.43	0.54	0.12		3.5	青銅［鉛錫銅］製 「ス」寶
145-9	43-9	82号遺構	882ｲｺｳ	銭貨 寛永通寶[新]	3枚癒着	2.37	0.55	—		5.5	青銅［鉛銅］製
				銭貨 寛永通寶[古]		—	—	—			青銅［鉛錫銅］製 「ス」寶
				銭貨 寛永通寶[新]		2.22	0.66	—			青銅［（鉛）銅］製
145-10	43-10	池遺構　下層	池東キシ1・2	銭貨 寛永通寶[新/文]	完形	2.53	0.57	0.13		3.6	青銅［鉛錫銅］製 背面「文」
145-11	43-11	池遺構　上層	ﾓﾘ土4南1	銭貨 寛永通寶[新/文]	完形	2.49	0.60	0.12		3.1	青銅［鉛錫銅］製 背面「文」
145-12	43-12	35号遺構	35ｲｺｳ	銭貨 寛永通寶[新/文]	完形	2.58	0.57	0.11		2.8	青銅［鉛錫銅］製 背面「文」
145-13	43-13	池遺構　下層	池西キシ3	銭貨 寛永通寶[新/文]	完形	2.55	0.58	0.12		3.5	青銅［鉛錫銅］製 背面「文」
145-14	43-14	池遺構　上層	61ｲｺｳ	銭貨 寛永通寶[新/文]	完形	2.50	0.57	0.11		2.4	青銅［鉛錫銅］製 背面「文」
145-15	43-15	93号遺構	93ｲｺｳ	銭貨 寛永通寶[新/文]	完形	2.53	0.57	0.12		3.3	青銅［鉛錫銅］製 背面「文」
145-16	43-16	93号遺構	93ｲｺｳ	銭貨 寛永通寶[新/文]	完形	2.53	0.58	0.10		2.7	青銅［鉛錫銅］製 背面「文」
145-17	43-17	93号遺構	93ｲｺｳ	銭貨 寛永通寶[新/文]	完形	2.52	0.56	0.12		3.5	青銅［鉛錫銅］製 背面「文」
145-18	43-18	池遺構　上層	ﾓﾘ土4南1	銭貨 寛永通寶[新]	完形	2.25	0.64	0.08		1.8	青銅［鉛（錫ヒ素）銅］製
145-19	43-19	池遺構　上層	ﾓﾘ土4南4	銭貨 寛永通寶[新]	1/2	2.20	0.59	0.09		1.2	青銅［錫鉛銅］製
145-20	43-20	池遺構　上層	51ｲｺｳ	銭貨 寛永通寶[新]	ほぼ完形	2.30	0.65	0.08		1.8	青銅［鉛錫（ヒ素）銅］製
145-21	43-21	池遺構　上層	51ｲｺｳ	銭貨 寛永通寶[新]	完形	2.23	0.65	0.08		1.8	青銅［錫鉛銅］製
145-22	43-22	37号遺構	37ｲｺｳ	銭貨 寛永通寶[新]	完形	2.42	0.60	0.10		2.5	青銅［鉛（アンチモンヒ素）銅］製
145-23	43-23	85号遺構	85ｲｺｳ	銭貨 寛永通寶[新]	完形	2.36	0.60	0.08		2.2	青銅［鉛（錫ヒ素）銅］製
145-24	43-24	第2-2層	35ｲｺｳ東	銭貨 寛永通寶［新／波］	完形	2.66	0.60	0.12		3.8	真鍮［亜鉛ヒ素（鉛）銅］製 背面二十一波
145-25	43-25	池遺構　上層	47ｲｺｳ	銭貨 寛永通寶［新／波］	1/2	2.78	0.63	0.13		2.8	真鍮［亜鉛ヒ素（鉛）銅］製 背面十一波
145-26	43-26	池遺構　上層	51ｲｺｳ	銭貨 寛永通寶［新／波］	完形	2.79	0.63	0.13		3.9	真鍮［亜鉛ヒ素（鉛錫）銅］製 背面十一波
145-27	43-27	93号遺構	93ｲｺｳ	銭貨 寛永通寶［新／波］	完形	2.80	0.64	0.10		3.6	真鍮［亜鉛（アンチモン鉛錫）銅 背面十一波
145-28	43-28	池遺構　上層	51ｲｺｳ	銭貨 寛永通寶［新／波］	完形	2.80	0.65	0.12		4.0	真鍮［亜鉛（ヒ素鉛錫）銅］製 背面十一波
145-29	43-29	池遺構　下層	池西	銭貨 寛永通寶［新／波］	完形	2.82	0.60	0.13		5.6	真鍮［亜鉛鉛（アンチモン錫）銅］製 背面十一波
145-30	43-30	池遺構　上層	51ｲｺｳ	銭貨 寛永通寶［新／波］	完形	2.80	0.64	0.11		3.6	真鍮［亜鉛ヒ素（鉛）銅］製 背面十一波
145-31	43-31	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北4	銭貨 寛永通寶［新／波］	完形	2.82	0.68	0.12		4.4	真鍮［亜鉛ヒ素（鉛）銅］製 背面十一波
145-32	43-32	池遺構　下層	池南	銭貨 寛永通寶［新／波］	完形	2.82	0.62	0.12		4.7	真鍮［亜鉛（鉛錫）銅］製 背面十一波
145-33	43-33	53号遺構-1	53－1ｲｺｳ	銭貨 文久永寶［草／波］	完形	2.64	0.66	0.10		3.4	青銅［鉛錫（ヒ素アンチモン）銅］製 草文　背面十一波
145-34	43-34	第2-2層	35ｲｺｳ東	銭貨 半銭硬貨	完形	2.23	—	0.12		3.1	青銅［錫鉛亜（鉛）銅］製 表「大日本　明治十年　1/2 SEN」裏「半銭　二百枚換一圓」
145-35	43-35	池遺構　上層	47ｲｺｳ下	銭貨 天保通寶	完形	3.25	0.62	0.25	4.80	20.7	青銅［錫鉛銅］製 背面「當百　花押」
145-36	43-36	6号遺構	6ｲｺｳ	煙管　雁首	火皿欠	▲5.3	1.0	▲0.7	▲1.6	6.5	真鍮製
145-37	43-37	池遺構　上層	61ｲｺｳ	煙管　雁首	火皿欠	▲6.5	0.8	▲0.5	▲1.3	10.1	真鍮製
145-38	43-38	6号遺構	6ｲｺｳ	煙管　雁首	火皿欠	▲6.3	1.1	0.8	▲1.6	10.7	真鍮製 火打付
145-39	43-39	6号遺構	6ｲｺｳ	煙管　雁首	完形	6.2	1.0	1.4	2.9	8.0	真鍮製
145-40	43-40	93号遺構　上層	93ｲｺｳ　北東上	煙管　雁首	完形	7.3	1.0	1.2	2.5	7.0	真鍮製
145-41	43-41	池遺構　下層	池東キシ1	煙管　雁首	完形	7.8	0.9	1.6	2.3	12.1	真鍮製
145-42	43-42	69・74号遺構	69・74ｲｺｳ	煙管　雁首	火皿欠	▲10.2	0.9	▲0.7	▲1.5	11.8	真鍮製
145-43	43-43	33号遺構	3Ⅰ区33ｲｺｳ	煙管　吸口	破片	▲5.7	▲1.0	0.4		1.5	真鍮製ヵ
145-44	43-44	第1層	Ⅱ区	煙管　吸口	完形	5.8	0.9	0.4		4.9	真鍮製 錫鍍金、錫蝋着ヵ
145-45	43-45	第4層	ﾓﾘ土3	煙管　吸口	ほぼ完形	6.7	1.0	0.4		4.3	真鍮製
145-46	43-46	池遺構　下層	池東キシ1	煙管　吸口	完形	8.0	0.9	0.4		6.1	真鍮製
146-47	44-47	93号遺構	93ｲｺｳ	角釘	頭欠	▲5.0	▲0.3	0.2		5.8	鉄製
146-48	44-48	6号遺構	6ｲｺｳ	角釘	頭欠	▲8.8	▲0.3	0.4		6.1	鉄製
146-49	44-49	池遺構　下層	池西	角釘（巻頭）	完形	5.2	0.8	0.3		2.0	鉄製
146-50	44-50	80号遺構	80ｲｺｳ	角釘（巻頭）	完形	4.9	▲0.6	0.2		2.1	鉄製
146-51	44-51	池遺構　下層	池南	角釘（巻頭）	完形	7.3	2.2	0.3		4.6	鉄製
146-52	44-52	75号遺構	75ｲｺｳ	角釘（巻頭）	完形	8.9	1.0	0.3		6.0	鉄製
146-53	44-53	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北6	角釘（巻頭）	完形	7.1	▲1.3	0.2		4.1	鉄製
146-54	44-54	90号遺構	90ｲｺｳ	角釘（巻頭）	完形	9.6	0.6	0.4		6.3	鉄製
146-55	44-55	80号遺構	80ｲｺｳ	角釘（巻頭）	ほぼ完形	▲9.6	▲1.0	0.3		5.9	鉄製 木樋堆積物内

挿図番号	写真図版	出土地点	注記	器　種	遺存状態	法量（cm）				重さ（g）	備　考
						a	b	c	d		
146-56	44-56	92号遺構	992ｲｺｳ	角釘（巻頭）	完形	10.4	1.9	0.3		9.9	鉄製 枡に打たれていた
146-57	44-57	6号遺構	6ｲｺｳ	角釘（巻頭）	ほぼ完形	10.0	1.5	0.4		8.7	鉄製
146-58	44-58	75号遺構	75ｲｺｳ	角釘（巻頭）	完形	10.1	2.9	0.5		12.2	鉄製
146-59	44-59	96号遺構	996ｲｺｳ	角釘（巻頭）	完形	12.7	1.7	0.4		16.1	鉄製 木樋の蓋を打ち付けていた
146-60	44-60	88号遺構	88号遺構 88ｲｺｳ	角釘（巻頭）	完形	12.7	2.3	0.4		20.9	鉄製
146-61	44-61	85号遺構	85ｲｺｳ	角釘（巻頭）	完形	13.1	▲2.1	0.3		13.7	鉄製
146-62	44-62	池遺構　上層	51ｲｺｳ	角釘（巻頭）	完形	13.3	2.2	0.5		20.6	鉄製
146-63	44-63	85号遺構	85ｲｺｳ	角釘（巻頭）	完形	14.0	2.0	0.5		14.8	鉄製
146-64	44-64	35号遺構	35ｲｺｳ胴木	角釘（巻頭）	ほぼ完形	15.4	0.7	0.3		17.3	鉄製 胴木に打たれていた
146-65	44-65	池遺構　上層	47ｲｺｳ	角釘（巻頭）	完形	16.9	1.5	0.4		1.7	鉄製
146-66	44-66	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北2	角釘（巻頭）	完形	23.0	1.6	0.4		20.7	鉄製
146-67	44-67	75号遺構	75ｲｺｳ	角釘（合）	完形	▲12.0	3.8	0.5		14.2	鉄製
146-68	44-68	第4層	ﾓﾘ土3	角釘（合）	破片	▲11.8	0.5			15.9	鉄製
146-69	44-69	92号遺構	992ｲｺｳ	角釘（合）	完形	12.2	0.5			16.9	鉄製 枡に打たれていた
146-70	44-70	88号遺構	88号遺構 88ｲｺｳ	角釘（皆折ヵ）	ほぼ完形	▲9.5	▲1.2	0.3		14.5	鉄製 木樋の蓋を打ち付けていた
146-71	44-71	池遺構　下層	池北	タガネ	ほぼ完形	14.1	▲2.8	0.9		119.3	鉄製
146-72	44-72	92号遺構	992ｲｺｳ	角釘（皆折）	完形	▲14.7	1.2	1.4	0.6	38.3	鉄製 枡に打たれていた
146-73	44-73	93号遺構　上層	93ｲｺｳ　南東上	角釘（皆折）	完形	18.5	2.4	0.8		73.2	鉄製
146-74	44-74	35号遺構	35ｲｺｳ胴木	角釘（皆折）	完形	18.8	2.2	2.9		91.3	鉄製
146-75	44-75	池遺構　下層	池西	角釘（皆折）	完形	20.5	2.2	0.9		77.8	鉄製
146-76	44-76	第2-2層	第2-2層 35ｲｺｳ西	角釘（皆折）	完形	21.0	2.2	1.0		81.4	鉄製
146-77	44-77	池遺構　上層	ﾓﾘ土4南4	角釘（皆折）	完形	25.3	1.6	0.6		61.9	鉄製
147-78	44-78	第4層	ﾓﾘ土3	カスガイ	ほぼ完形	27.4	3.2	0.3		53.6	鉄製
147-79	44-79	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北2	金槌（片切）	ほぼ完形	10.0	1.6	2.0		129.3	鉄製
147-80	44-80	6号遺構	6ｲｺｳ	錐ヵ	先端欠	13.8	2.2	3.0	0.3	19.2	鉄製
147-81	44-81	95号遺構	95ｲｺｳ	錐ヵ	完形	15.5	1.7	0.7	0.2	9.6	鉄製
147-82	44-82	池遺構　下層	MA23－池北	建具の金具		▲6.3	▲1.3	0.2		5.9	鉄製
147-83	44-83	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北6	引手金具	完形	7.3	5.3	1.1		33.5	純銅製 部分的に煮色加工ヵ
147-84	44-84	池遺構　下層	池東キシ1	縁金具	完形	18.45	7.2	1.6		32.4	純銅製 葵唐草文様
147-85	44-85	池遺構　下層	池西	指物金具（錠前付）	完形	12.5	9.0	2.6		96.8	鉄製 煮色加工ヵ
147-86	44-86	第4層	第4層 56ｲｺｳ下	建具の金具	完形	3.6	3.6	3.6		4.1	真鍮製
147-87	44-87	第2-2層	35ｲｺｳ東	建具の金具	完形	2.9	2.9	2.0		12.0	真鍮製ヵ
147-88	44-88	池遺構　下層	池南	繩	完形	2.9	3.2	1.3	0.4	17.3	上貝は真鍮製、下貝は純銅製
147-89	44-89	第4層	ﾓﾘ土3	鞘口	ほぼ完形	3.6	2.0	0.1		3.5	純銅製
147-90	45-90	池遺構　下層	池南	不明	完形	7.2	1.3	0.8		14.3	（鉛）青銅製
147-91	45-91	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北6	小柄	ほぼ完形	16.9	1.4			34.0	刀身は鉄製　柄は純銅製だが、表側 文様の和尚の襟元のみ真鍮の象嵌　裏側には「光□」の銘
148-92	45-92	池遺構　下層	池西	杓子	完形	26.8	7.9	6.0		41.7	純銅製
148-93	45-93	池遺構　上層	51ｲｺｳ	ヘラヵ	完形	23.6	3.8	13.8	0.6	76.8	鉄製
148-94	45-94	池遺構　下層	池南	ナイフ	完形	19.6	2.0	10.5	0.1	37.2	真鍮製
148-95	45-95	池遺構　下層	池東キシ1	ナイフ	完形	19.5	1.9	10.8	0.1	31.7	真鍮製
148-96	45-96	32号遺構-1	32号遺構－1 32－1ｲｺｳ	スプーン	完形	2.8	▲14.0	3.2		10.0	純銅製ヵ
148-97	45-97	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北2	筒	ほぼ完形	5.1	7.2			15.7	純銅製 変形あり
148-98	45-98	池遺構　下層	池南	水滴	完形	5.0	8.4	2.2		98.1	真鍮製
148-99	45-99	池遺構　下層	池南キシ1	鈴	完形	7.8	7.7	1.2		118.0	真鍮製　玉は純銅製
148-100	45-100	第2-2層	35ｲｺｳ東	銅版ヵ	完形	12.4	6.8	0.1		27.4	純銅製 線刻亀甲松鶴文
148-101	45-101	池遺構　上層	47ｲｺｳ	火箸	完形	24.5	1.1	0.4		27.1	真鍮製
148-102	45-102	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北4	火箸	完形	25.0	1.2	0.4		28.1	真鍮製
149-103	45-103	池遺構　上層	ﾓﾘ土4南1	蓋	完形	5.6	3.7	2.0		45.4	青銅製
149-104	45-104	第2-1・3層・第3層	ﾓﾘ土2	蓋	完形	10.0	2.5			57.8	純銅製
149-105	45-105	池遺構　下層	池西	蓋	ほぼ完形	15.4	13.7	4.2		86.5	純銅製 変形あり
149-106	45-106	59号遺構-4	59－5ｲｺｳ	不明	完形	3.4	1.9	1.2		32.0	真鍮製
149-107	45-107	93号遺構　上層	93ｲｺｳ　北東上	不明	完形	15.0	2.7			410.6	鉄製
149-108	46-108	95号遺構	95ｲｺｳ	不明	ほぼ完形	33.8	▲27.0	6.0		1018.3	鉄製
150-109	46-109	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北2	金網	完形	11.8	10.9			9.6	純銅製
150-110	46-110	92号遺構	992ｲｺｳ	金網	完形	▲22.4	▲27.0			63.0	純銅製
150-111	46-111	53号遺構-1	53－1ｲｺｳ	不明	不明	▲25.0	▲17.7	▲5.1	2.2	429.7	鉄製　木片が付着 土坑内に設置されていた
150-112	46-112	53号遺構-1	53－1ｲｺｳ	不明	不明	▲15.8	▲9.2	▲2.0	0.6	74.2	鉄製　木片が付着 土坑内に設置されていた
150-113	46-113	53号遺構-1	53－1ｲｺｳ	不明	不明	▲15.2	▲5.7	▲5.7	0.6	45.0	鉄製　木片が付着 土坑内に設置されていた
—	46-114	第1層	Ⅰ区旧ｺｳｼｬ	鉄筋	破片					370.0	鉄製
—	46-115	35号遺構	35ｲｺｳ	避雷針（アース）ヵ	破片					401.3	鉄および胴製
—	46-116	35号遺構	35ｲｺｳ	建築金具ヵ	破片					1194.2	鉄製

5）石製品（第 151 図、第 41 表、図版 47）

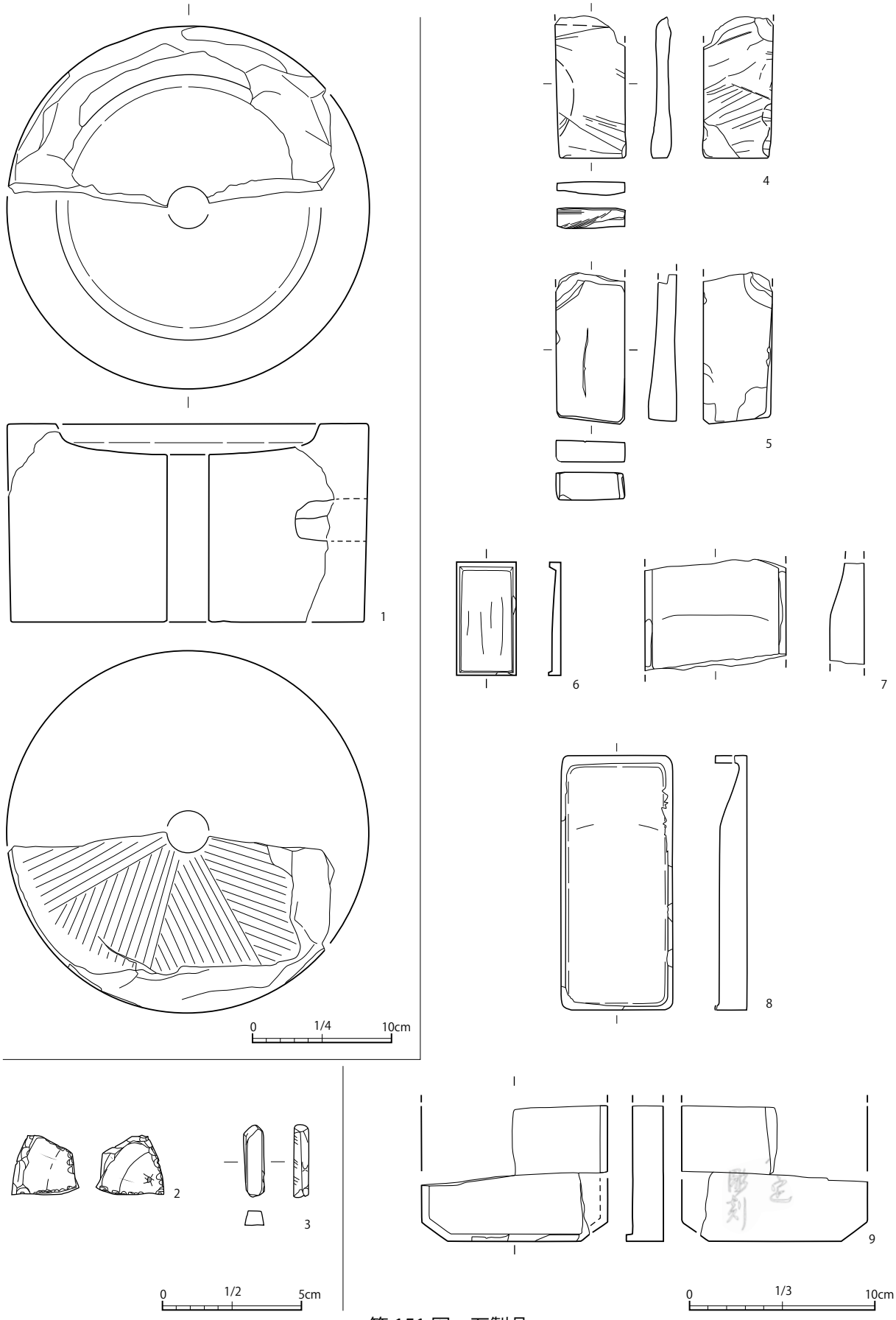
硯 10 点、砥石 12 点、石筆 1 点、火打石 1 点、石臼様石製品 1 点、その他 7 点の計 32 点が出土した。うち、9点を報告する。

1 は挽き石臼（上臼）の形状を示す石製品である。通常、上臼の下面は凹面となり、回転させるための木製ハンドルを差し込む穴が上面の縁辺近くに設けられるが、本資料は下面が平坦で、ハンドルの差し込み穴に相当すると思われる菱形の穴が側面から穿たれている。また、切ってある目は細く浅

いため、製粉には適さない。石臼としての機能を果たし得るかどうか、構造的に極めて疑問である。石臼そのものではなく、石臼を模したものである可能性が高い。２は石英製の火打石である。厚みが６㎜程度の三角形で、縁辺に連続する細かい不規則剥離は敲打によって潰れている。３は滑石製の石筆である。両端を除く四面には、石材からの切り出し痕と考えられる斜行線条痕がみられ、両端は斜めに減っている。端部には擦痕がうっすら認められ、石板への板書によってすり減ったと考えられる。４、５は珪質頁岩製で、京都産の鳴滝砥石であろう。いずれも長方形の置き砥で、砥面中央が摩滅のため湾曲している。擦痕は肉眼ではほとんどみられず、手触りは極めて滑らかである。４は磨り面が破断面にも及んでおり、破損後は持ち砥として使用したと考えられる。下面全体に斜位の平刃の工具痕がみられる。５は下面に断面Ｖ字の深い線が一筋刻まれているが、意味するところは不明である。６～９は硯である。６は黒色粘板岩製、平面形は小ぶりの長方形を呈す。陸と海の高さがほとんど同じで、実際に墨をするのには適さないので、墨置きなどに使われたのかもしれない。内面全体には縦方向の細い線条痕がまとまってみられるが、著しい摩滅は見られず、隅にわずかに朱墨の痕跡がみられる。７は輝緑凝灰岩製で、陸から海にかけての部分の破片である。線条痕は認められないが、内面の滑らかな手触りは摩滅のためと考えられ、ある程度使い込まれたものと思われる。外面には黒色の着色が見られる。元々の石材の色調が白っぽいことから、意図的なものと考えられるが、使用による墨の付着である可能性も否定できない。また、陸側の破断面全面にスス様の黒色付着物がみられるが、外面の着色とはやや異質のように思える。８は黒色粘板岩製で、平面形は長方形、海側の縁辺が破損している。陸部分を中心に縦方向の線条痕がみられるが、摩滅はほとんどしていない。９は輝緑凝灰岩（紫雲石）製で、山口県下関近辺産の赤間硯と考えられる。陸側の一郭の２片が接合したものである。各々の破片の形状は角柱状の直方体に近く、縁辺部に残る硯縁を打ち欠いて形を整えていることから、意図的に分割されたものと考えられる。方形印款の素材として再利用しようとしたのであろう。全体の平面形状は、おそらく隅切の長方形で、線条痕や摩滅はほとんどみられない。また、底部外面には「…定／彫刻」と陰刻されている。職人の銘であろうか。断面Ｖ字状の刻み内には部分的に薄い付着物が見られ、文字が彩色されていた可能性が指摘できる。

６）ガラス製品（第 152 図、第 42 表、図版 47）

瓶類を中心に 35 点を取り上げた。うち、簪２点、瓶５点、乳棒１点の８点を報告する。１、２は簪である。いずれも鼈甲色で、表面に弱い曇りが出ている。１は断面形がほぼ正方形で、両端を欠損する破片である。２は先端部の小破片である。側面を螺旋状に巻き上げるように６本の条線がめぐらされており、断面形が６弁の花形になっている。３～６は瓶で、いずれも商品容器と考えられる。３は無色透明の小型寸胴形の瓶である。透明度は高く、割り型痕が底部縁周部と脇２ヵ所にみられる。口縁部にはネジヤマが作出されており、スクリュー蓋であったことがわかる。中に濃紺の固形物が残存していることから、内容物は絵具もしくは染料などと考えられよう。４、５はインク瓶である。いずれも、気泡を多く含み、割り型痕が底部縁周部と脇２ヵ所にみられる。口縁端部は玉縁状で、コルク栓と考えられる。４は薄水色透明、５は無色透明。５には、肩に「MARUZEN'S INK　ATHENES INK」の文字、底部外面に丸善マークがエンボスで記されており、丸善のアテナインキの容器と知れる。ガラスの質などからみて、大正６（1917）年の発売に近い時期のものであろう。６は無色透明の背の低い寸胴形の瓶である。透明度が高く、割り型の痕跡はみられない。口縁部にはネジヤマが作出さ



第 151 図　石製品

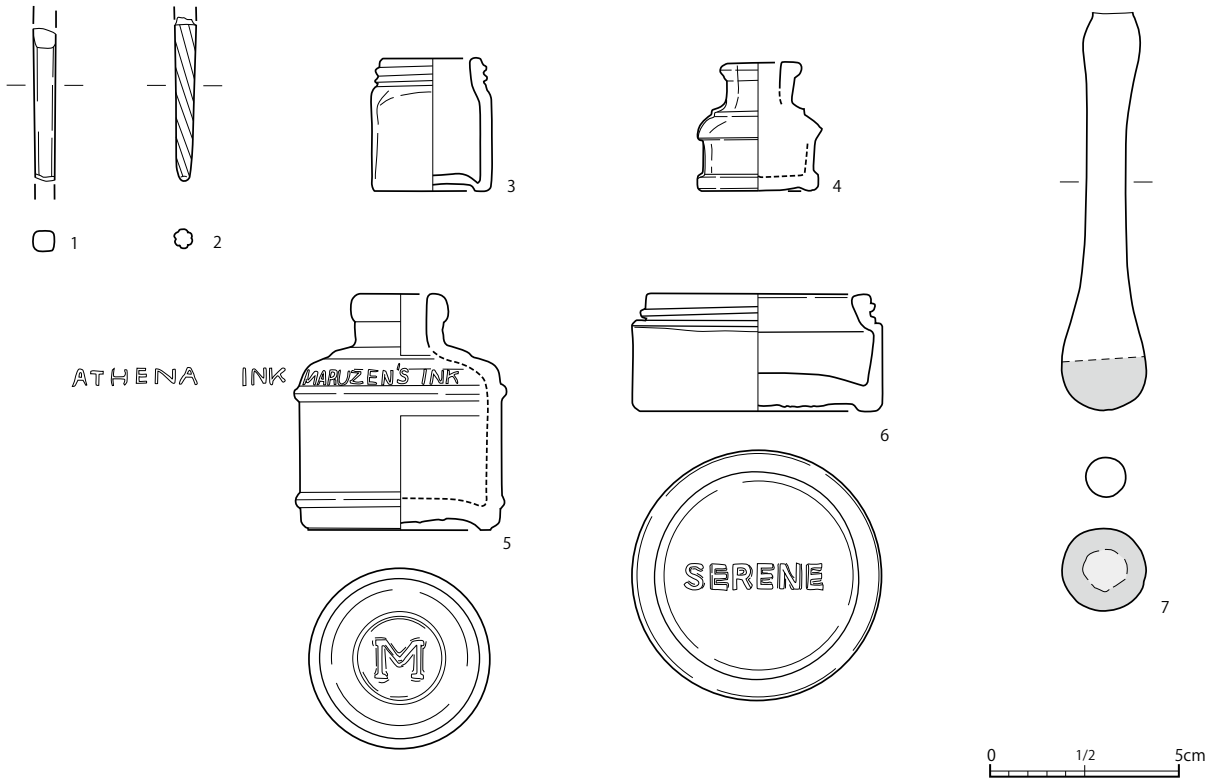
第 41 表　石製品観察表

挿図番号	写真図版	出土地点	注記	器　種	遺存状態	法量（cm）			重さ（g）	備　考
						a	b	c		
151-1	47-1	93 号遺構　上層	93 ｲｺｳ南西上	石臼（上臼）様石製品	1/2	△ 26.0	13.6	－	6350.0	下面は平坦　側面から菱形の穴が穿たれる、目は細く浅い
151-2	47-2	池遺構　上層	ﾓﾘ土 4 南 1	火打石	完形	2.4	2.2	1.4	5.9	石英製
151-3	47-3	37 号遺構木製枡 a	37 ｲｺｳ東マス	石筆	完形	0.5	2.5	－	1.9	滑石製
151-4	47-4	第 1 層	Ⅱ区表土	砥石	1/4	3.6	▲ 7.7	1.2	42.2	珪質頁岩製　鳴滝砥石（京都産） 置き砥から持ち砥へ転用
151-4	47-5	池遺構　上層	51 ｲｺｳ× 2	砥石	1/3	3.6	▲ 7.8	1.5	67.9	珪質頁岩製　鳴滝砥石（京都産） 置き砥
151-6	47-6	池遺構　上層	ﾓﾘ土 4 北 4	硯	完形	3.3	6.0	0.8	23.2	黒色粘板岩製 隅にわずかに朱墨の痕跡
151-7	47-7	6 号遺構	6 ｲｺｳ	硯	1/4	7.8	▲ 5.4	1.5	127.8	輝緑凝灰岩製 外面を黒色に着色ヵ、陸側破断面スス付着
151-8	47-8	池遺構　上層	47 ｲｺｳ	硯	完形	6.0	13.8	1.7	299.6	黒色粘板岩製
151-9	47-9	池遺構　上層	ﾓﾘ土 4 南 1 × 2	硯	1/3	10.1	▲ 7.2	2.0	205.1	輝緑凝灰岩（紫雲石）製　赤間硯（下関近辺産） 底部外面に「…定／彫刻」の陰刻、文字彩色ヵ 方形印款素材として再利用ヵ

れており、スクリュー蓋であったことがわかる。底部外面に「SERENE」のエンボスがある。内容物は不明である。7 は無色透明の乳棒である。全体の透明度は高く、肥厚した先端は磨り潰しに適した粗面に仕上げられている。持ち手側もグリップがよいように小さく肥厚しているが、端部はざらついており、円形の粗面がみられる。以下、写真図版のみでの報告である。8 は無色透明の瓶で、なで肩で首の長い器形、頸部には縦に筋状の凹凸がデザインされている。油膜様の光沢があり、割り型痕が底部縁周部と脇 2 ヵ所にみられる。口縁部にはネジヤマが作出されており、スクリュー蓋であったと考えられる。胴部にはエンボスでヒゲタマークと「HIGETA」「ヒゲタしょうゆ」の文字がみられるほか、黄色で坊やモチーフとヒゲタマークがプリントされている。同様の柄のホーロー看板があることから、戦後のものと考えられる。

7）植物質製品（第 43 表、図版 48）

ここでは、木製品を除く植物質素材の製品を報告する。繊維製品 17 点、炭 10 点の計 27 点を取り上げ、うち 16 点を報告する。いずれも、図化が困難な遺存状態であるため、写真図版のみで報告する。



第 152 図　ガラス製品

第 42 表　ガラス製品観察表

挿図番号	写真図版	出土地点	注記	器　種	遺存状態	法量（cm）			重さ（g）	備　考
						a	b	c		
152-1	47-1	35号遺構	35ｲｺｳ	簪	両端欠	0.6	▲3.9	-	3.7	鼈甲色
152-2	47-2	第1層	Ⅰ区旧ｺｳｼｬ	簪	端部欠	0.5	▲4.2	-	2.4	鼈甲色　ねじり
152-3	47-3	第1層	Ⅱ区表土	瓶	完形	2.7	3.1	3.5	33.0	無色透明　スクリュー蓋 中に濃紺の残存物
152-4	47-4	第1層	Ⅲ区旧ｺｳｼｬ	瓶	完形	2.1	3.6	3.7	20.7	薄水色透明　コルク栓
152-5	47-5	7号遺構	7ｲｺｳ	瓶	完形	2.5	4.9	6.2	92.2	無色透明　コルク栓 エンボス 肩「MARUZEN'S INK ATHENES INK」底丸善マーク
152-6	47-6	第2-2層	ﾓﾘ土1	瓶	完形	5.9	6.3	3.1	90.4	無色透明　スクリュー蓋 底エンボス「SERENE」
152-7	47-7	7号遺構	7ｲｺｳ	乳棒	完形	2.2	10.5	-	43.5	無色透明
—	47-8	第1層	Ⅰ区旧ｺｳｼｬ	瓶	完形	1.6	4.4	12.7	95.0	無色透明　スクリュー蓋 胴エンボス「ヒゲタマーク／HIGETA」「ヒゲタ／しょう油」　黄プリント「ヒゲタマーク／坊やモチーフ」

1は縦型のタワシである。棕櫚製であろう。径 2.8㎝ほどの太さで、長さは 6.3㎝ほど、先端は揃っている。棕櫚繊維を束ね、さらにひっくり返して逆方向へ向けた上で、再度束ねて作られている。束ねているのはやはり棕櫚製と思われる細縄である。2も棕櫚繊維を束ねたものである。径 2.0㎝ほどの太さで穂先はあまり揃っていない。刷毛のようなものであろうか。中心に径 0.2㎝ほどの竹串状の棒が折れて遺っている。3～13 は縄である。単純に2～3束の繊維束を撚ったものがほとんどだが、8などは撚ったものをさらに2～3本撚り合わせて太い縄にしている。いずれも造園などで用いられる、いわゆる荒縄である。棕櫚製であろう。14、15 は繊維束である。造園資材であろうか。

なお、池遺構の上層、93 号遺構南側の土留板列、48 号遺構 - 南1と南2の間で検出されたコモ状繊維については、面的に広がっていたこと、筵のように繊維が交差する部分があったこと、繊維の下に小砂利の混ざった粘土状の塊がまとまって見られたこと、さらにその下にも繊維が面的に広がっていたことから、叺を用いた土嚢であったろうと考えられる。土から剥がして取り上げることが困難であったため、土ごとサンプルとして採取・保存した。

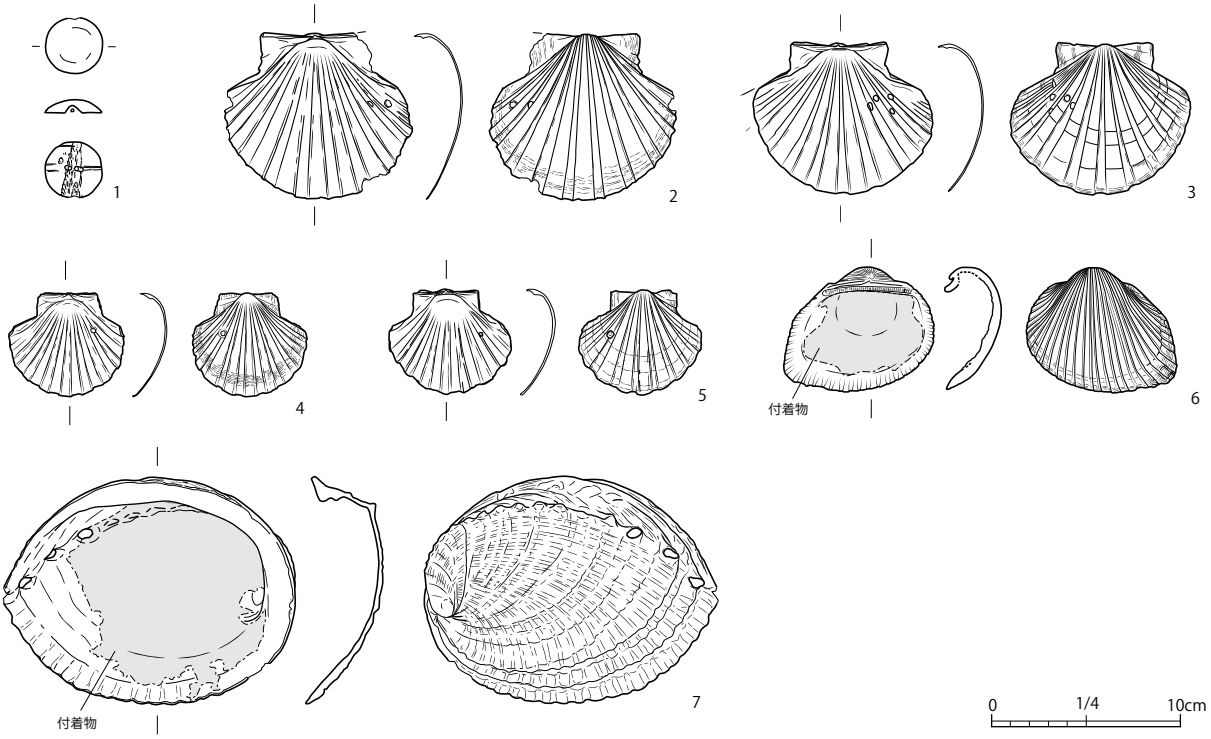
第 43 表　植物質製品観察表

写真図版	出土地点	注記	器　種	遺存状態	法量（cm）			重さ（g）	備　考
					a	b	c		
48-1	第1層	Ⅱ区表土	タワシ	完形	2.8	6.3	—	14.4	棕櫚製ヵ
48-2	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北3	刷毛ヵ	柄欠損	2.0	▲10.1	—	5.6	棕櫚製ヵ
48-8	12号遺構	112ｲｺｳ	縄	—	0.8	—	—	22.0	棕櫚製ヵ
48-10	17号遺構	17ｲｺｳ	縄	—	0.3	—	—	0.8	棕櫚製ヵ
48-11	池遺構　上層	47ｲｺｳ	縄	—	0.6	—	—	12.1	棕櫚製ヵ
48-3	池遺構　上層	47ｲｺｳ下	縄	—	0.3	—	—	1.9	棕櫚製ヵ
48-6	池遺構　上層	47ｲｺｳ下	縄	—	0.3	—	—	13.8	棕櫚製ヵ
48-7	池遺構　上層	47ｲｺｳ下	縄	—	0.2	—	—	12.2	棕櫚製ヵ
48-4	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北3	縄	—	0.2	—	—	10.9	棕櫚製ヵ
48-9	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北3	縄	—	0.3	—	—	0.9	棕櫚製ヵ
48-5	池遺構　上層	ﾓﾘ土4南1	縄	—	0.3	—	—	11.0	棕櫚製ヵ
48-12	93号遺構　上層	93ｲｺｳ北西上	縄	—	0.3	—	—	0.6	棕櫚製ヵ
48-13	93号遺構	93ｲｺｳ	縄	—	0.2	—	—	8.9	棕櫚製ヵ
48-15	69・74号遺構	69・74ｲｺｳ	繊維束	—	—	—	—	62.2	棕櫚ヵ
48-14	池遺構　下層	池南	繊維束	—	—	—	—	23.5	棕櫚ヵ
—	6号遺構	6ｲｺｳ	炭	完形	1.7	7.4	—	12.5	

8）骨角貝製品（第 153 図、第 44 表、図版 48）

ボタン1点、貝柄杓4点、パレット2点の計7点が出土し、すべてを報告する。1は鹿角製のボタンである。ドーム状で、上面には光沢があり滑らかな手触りである。下面は概ね平坦だが、中心付近を縦断するように鹿角表面の凹凸が弱く残っている。また、中央には径2㎜ほどのトンネル状の糸通し孔がある。着色の痕跡はみられない。2～5はイタヤガイ製の貝柄杓である。イタヤガイは左右の殻の形状が非対称で、左殻が平たく、右殻に丸みがある。その右殻を利用して作られており、柄を装着するための孔はいずれも右寄りに穿たれている。2、3は幅 75㎜前後、着柄孔は2は2ヵ所、3は2孔1対が2ヵ所の計4ヵ所にみられる。4、5は幅 50㎜弱と小ぶりで、いずれも径2㎜程度の着柄孔が1ヵ所で、5の孔には角釘様の鉄製部品の破片が残存している。6、7は内面の広い

範囲に顕著な付着物がみられることから、パレットと考えられる。６はアカガイの左殻、７はアワビの殻を利用したものである。いずれも、内面のほぼ全面に付着物がみられる。漆もしくは膠の可能性があろう。



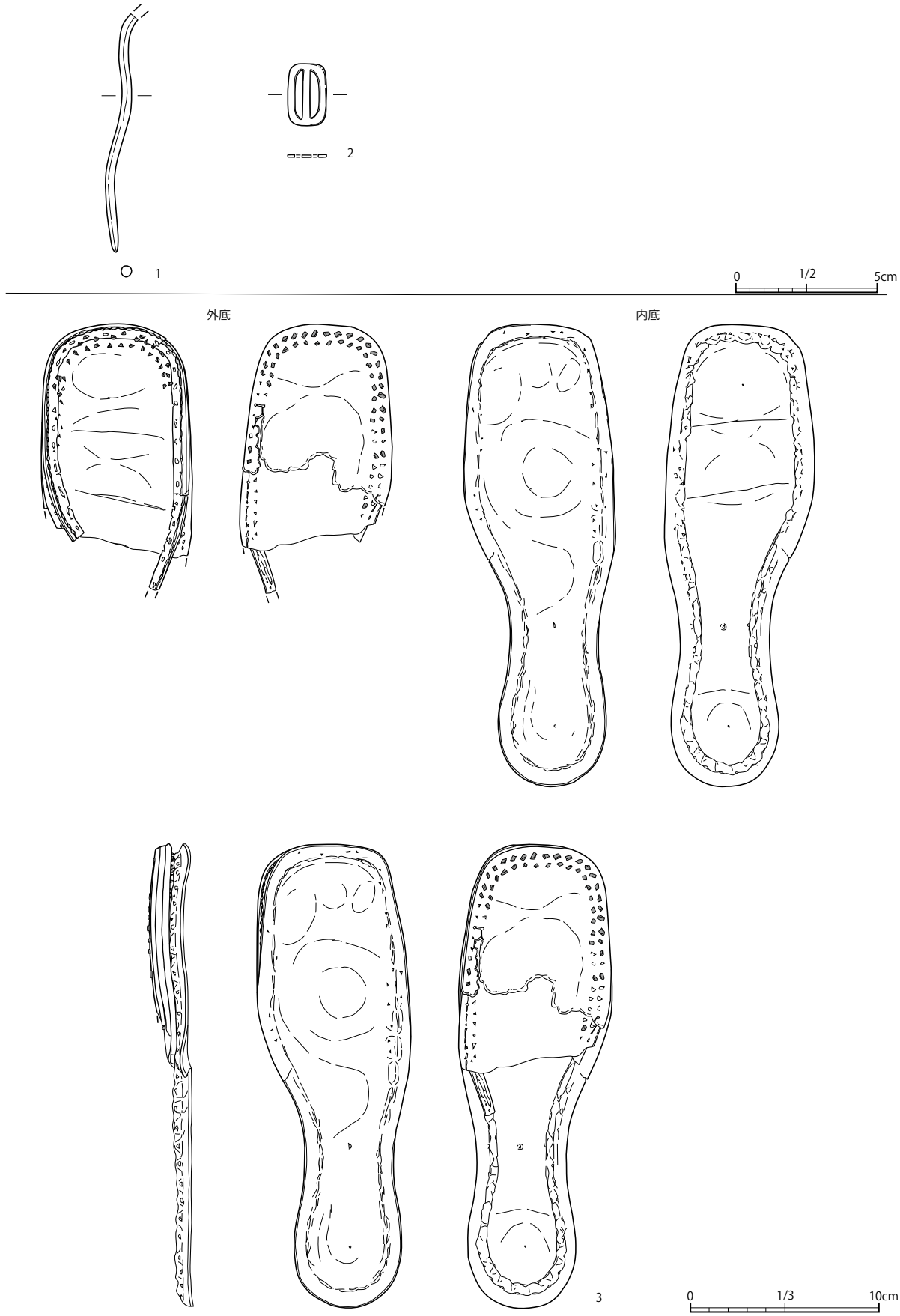
第 153 図　骨角貝製品

第 44 表　骨角貝製品観察表

挿図番号	写真図版	出土地点	注記	器　種	遺存状態	法量（cm） a	b	c	重さ（g）	備　考
153-1	48-1	第4層	ﾓﾘ土3	ボタン	完形	3.0	0.7	—	5.3	鹿角製
153-2	48-2	池遺構　上層	91ｲｺｳ	貝柄杓	完形	7.5	3.8	2.0	25.6	イタヤガイ製
153-3	48-3	93号遺構　下層	93ｲｺｳ北西下	貝柄杓	完形	7.2	6.0	1.8	23.7	イタヤガイ製
153-4	48-4	第1層	Ⅰ区旧ｺｳｼｬ	貝柄杓	完形	4.5	4.1	1.4	10.9	イタヤガイ製
153-5	48-5	第2-1・3層	56ｲｺｳ下	貝柄杓	完形	4.8	4.2	1.5	11.9	イタヤガイ製
153-6	48-6	60号遺構	60号遺構 60ｲｺｳ	パレット	完形	6.0	5.1	2.3	49.5	アカガイ製 内面に付着物
153-7	48-7	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北3	パレット	完形	11.7	9.2	3.0	157.0	アワビ製 内面に付着物

9）その他の素材の製品（第 154 図、第 45 表、図版 48）

皮革、ゴム、合成樹脂などの素材を用いた製品４点を報告する。１はセルロイド製と思われるヘアピンである。本来はＵ字状を呈すものだが、本資料はゆるく波打っており、屈曲部で破損してしまっている。２はバックルである。これもセルロイド製と思われる。留め金はなく、孔のない細身のベルトに装着し、長さ調整などを目的としたものと考えられる。３は革靴の底である。先端がスクエアなデザインで、３枚の革を合わせて縫い、外側から角釘様の鋲を二重に巡らせて打った堅牢なつくりである。また、外側２枚と内側の１枚の間の縁辺部分は細い平紐状の革を挟むように縫製されている。長さ 25.0㎝、最大幅 7.6㎝である。４は、遺存状態が悪く、図化が困難であったため写真図版のみで報告する。底部分はゴム製であろうか、幾重にも重ねられた内底と爪先に少しだけ残る被甲部分は布製のようなのでズック靴と考えられる。長さ 23.5㎝、最大幅 9.4㎝。靴底の大きさはいずれも外法であることを考慮すると、内法は 0.5 ～ 1 ㎝程小さいと考えられる、３は微妙な大きさであるが４は女性用と考えてよいであろう。



第 154 図　その他の素材の製品

第 45 表　その他の素材の製品観察表

挿図番号	写真図版	出土地点	注記	素材	器種	遺存状態	法量（㎜）			重さ（g）	備　考
							a	b	c		
154-1	48-1	35号遺構	35ｲｺｳ	合成樹脂	ヘアピン	1/2	0.4	8.4	—	1.0	セルロイド製ヵ
154-2	48-2	第4層	ﾓﾘ土3	合成樹脂	バックル	完形	2.2	1.9	0.1	0.2	セルロイド製ヵ
154-3	48-3	池遺構　上層	47ｲｺｳ	皮革	靴底	底	25.0	7.6	—	80.1	
—	48-4	37号遺構木製枡a	37ｲｺｳ東枡	布など	靴底	底～爪先	23.5	9.4	—	142.4	

10）瓦（第 155 ～ 158 図、第 46 表、図版 49）

瓦当のあるものを中心に、遺存状態のよいもの、変わった形状のものなども含め 203 点を取り上げた。ほとんどが盛土や遺構覆土に包含されていたものであるが、24 号遺構と 82 号遺構は瓦の破片を構築材として用いていたため、ある程度まとまった量を取り上げた。24 号遺構は破片を敷き詰めた長方形の溝で建物基礎と考えられ、82 号遺構は木製の枡形で、覆土中に幾重にも積まれた平瓦の破片と炭化材が検出された。

これらのうち、丸瓦 26 点、平瓦 5 点、桟瓦 42 点、平瓦もしくは桟瓦 27 点、蝋燭桟瓦 3 点、廻隅瓦 3 点、棟瓦 3 点、鬼瓦 6 点の計 115 点を報告する。なお、軒平瓦・軒丸瓦瓦当の文様パターンについては加藤晃氏による論考（加藤 1989）に則って分類する。

1 ～ 26 は丸瓦で、うち 21 までは瓦当が遺存する。瓦当文様は、ほとんどが三つ巴の周りに連珠を配した連珠三つ巴文だが、1 、 4 ～ 7 の 5 点は揚羽蝶紋である。三つ巴は 19 のみが左巻きで、他は右巻き、尾はいずれも長く引く。また、3 、8 、10、13、15、18、19 には連珠との間に圏線が巡る。連珠の数は 16 珠が 10 点、14 珠が 4 点、12 珠が 1 点（推定含む）で、16 珠が多い。22 ～ 26 は胴から瓦尻にかけての破片で、瓦当の有無は不明である。24 の背には、円枠に「一」の刻印がみられる。これらの丸瓦のうち、胴内面を観察できるものは 11 点、うち 1 、 2 、 4 、21、22、24 ～ 26 の 9 点にはムシロ様の圧痕がみられ、 2 、21、22、25、26 の 5 点には、さらに幅 0.5㎝ほどの縦位の帯条痕がみられる。内型成形で、ムシロ様の繊維を離材とし、これを剥がす際の工具痕が帯条痕として残ったのであろう。一方、 3 には帯条痕のみがみられ、ムシロ様の圧痕はみられない。胴外面については、いずれの個体も丁寧に縦位のケズリを施して仕上げている。27 ～ 31 は平瓦である。瓦当が遺存するものは 31 のみで、江戸式文様、中心飾りのみが二重線表現である。27 には、円枠に「一」、28 には円枠に「合」、29 には「吉」の刻印がある。30 は 82 号遺構出土で、 9 点の小破片が接合したものである。33 は蝋燭桟瓦である。34 も蝋燭桟瓦の可能性が高いが、玉縁の形状と左切れである点が典型的ではない。また、32 は全体の形状が不明であるが、反りがなく平坦であることから、蝋燭桟瓦の可能性が高いと考えられよう。35 ～ 76 は桟瓦で、35 ～ 49 は小丸部から平部にかけて、50 ～ 76 は小丸部のみが遺存している。77 ～ 103 は軒平部周辺のみの破片で、軒平瓦か軒桟瓦かの判別が難しい。桟瓦は基本的に右切れなので、左端部が切れている 85 ～ 90 は平瓦である可能性が高いと言えるが、80 ～ 84 は右端部が切れている破片、77 ～ 79、91 ～ 103 は端部のない破片なので、いずれとも言い難い。瓦当文様については、小丸部は三つ巴文 24 点、連珠三つ巴文 13 点、無文 1 点。三つ巴は連珠三つ巴も含めた 38 例中 36 例が右巻きで、右巻きが圧倒的に多い。連珠三つ巴文の連珠の数は 8 珠 3 点、 9 珠 4 点、10 珠 3 点、12 珠 1 点、15 珠 1 点、不明 1 点と、特に大きな傾向はみられない。平部は、35、38 が大坂式文様、79 が東海式文様で、その他はいずれも江戸式文様である。中心飾り・唐草・子葉のいずれもが二重線で表現される古手のものからすべてが肥大化した太線表現のものまで様々な組み合わせのものが認められる。なお、46 には長方形枠に「鬼平」、79 には円枠に「一」の刻印がみられる。

104 ～ 106、112 は寄棟屋根の隅に用いる廻隅瓦である。104 は小丸部が 12 珠の連珠右巻き三つ巴文、平部が江戸式文様である。107 ～ 109 は棟瓦で、いずれも比較的平たい形状の伏間瓦であろう。110、111、113 ～ 115 は鬼瓦の小破片であろう。いずれも、小破片すぎて、全体のモチーフがイメージできないが、114 は鬼の口元、115 は鬼の髭もしくは髪を表現したものであろう。

■構築材として用いられた瓦の特徴

24 号遺構には大量の破片が敷きこまれていたため、瓦当のあるものを中心に、12 点をサンプルとして取り上げた。1 、 4 ～ 7 、22、23 が丸瓦、27 が平瓦、77、78、94、97 については平瓦か桟瓦か判断がつかない。丸瓦の瓦当はすべて揚羽蝶紋である。また、平瓦か桟瓦か判断のつかないものも含め、平部瓦当の文様はすべて二重線表現の江戸式文様なので、これらは古手の時期のものと考えられる。この時期は、桟瓦がほとんど見られない時期に当たるので、形状からは平瓦か桟瓦か判断できないものの、平瓦である可能性が高い。種類にかかわらず赤化しているものが多く、被熱したと考えられる。

82 号遺構からは 82 点の平瓦小破片が出土しており、10 個体の接合資料と 13 点の小破片に収斂する。出土状態をみると、埋没後に割れたと思われる状況が複数ヵ所に見られることから、完形の平瓦と小破片を取り混ぜて積んだものと思われる。覆土は灰層ではなく、焼土を主体としていたこと、瓦積みの上には炭化材が乗っていたことなどを考え合わせると、瓦片が枡の枠や底の材を被熱から遠ざける役割りを果たしていたものと考えられる。

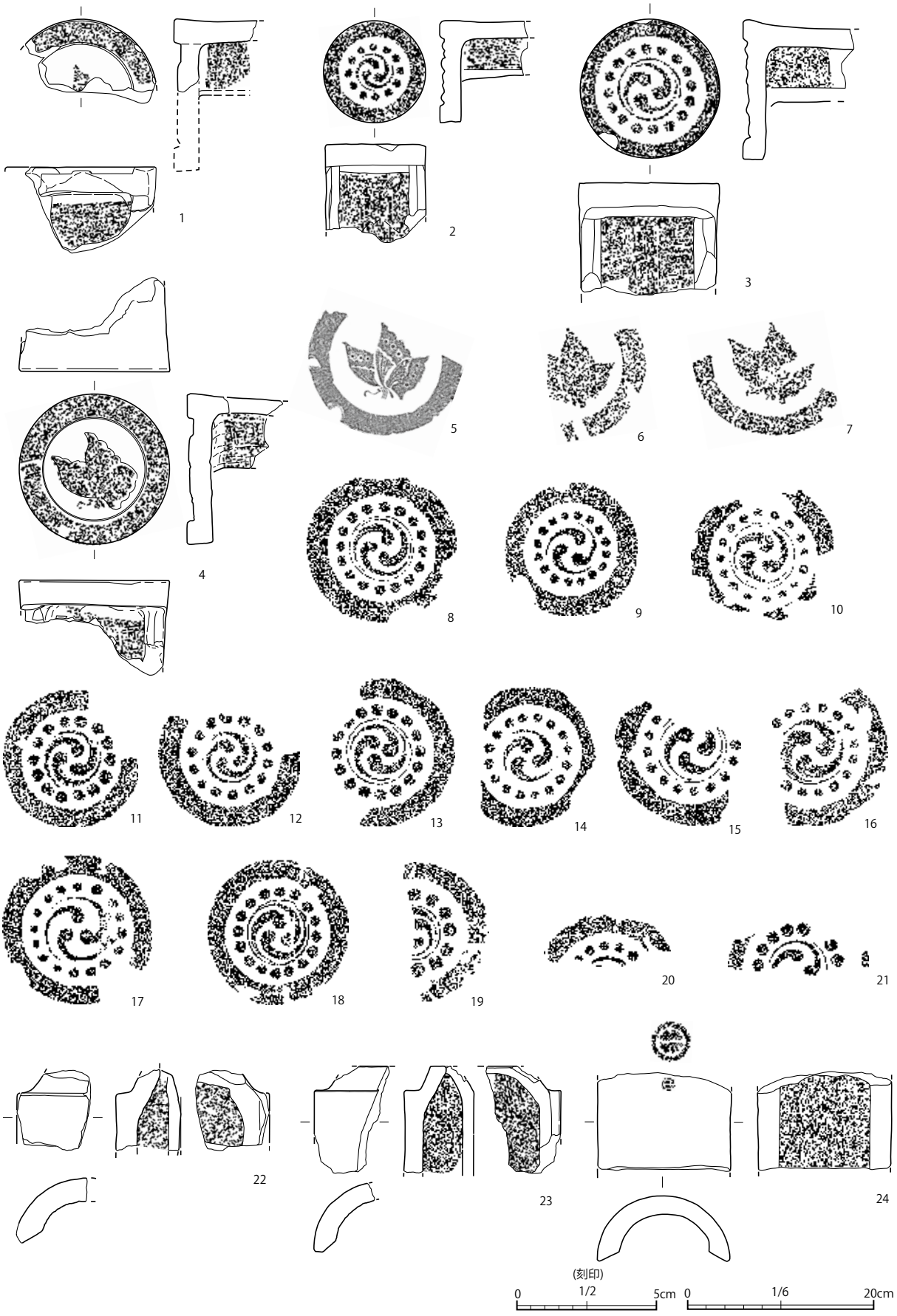
11）煉瓦（第 159 ～ 164 図、表 47・48、図版 50 ～ 56）

遺構の構築材として用いられているもの 145 点について、属性の観察と記録を行った上で胎土分析用サンプルを採取した。また、そのうちの代表的なもの 38 点については個体ごと保存することとした。

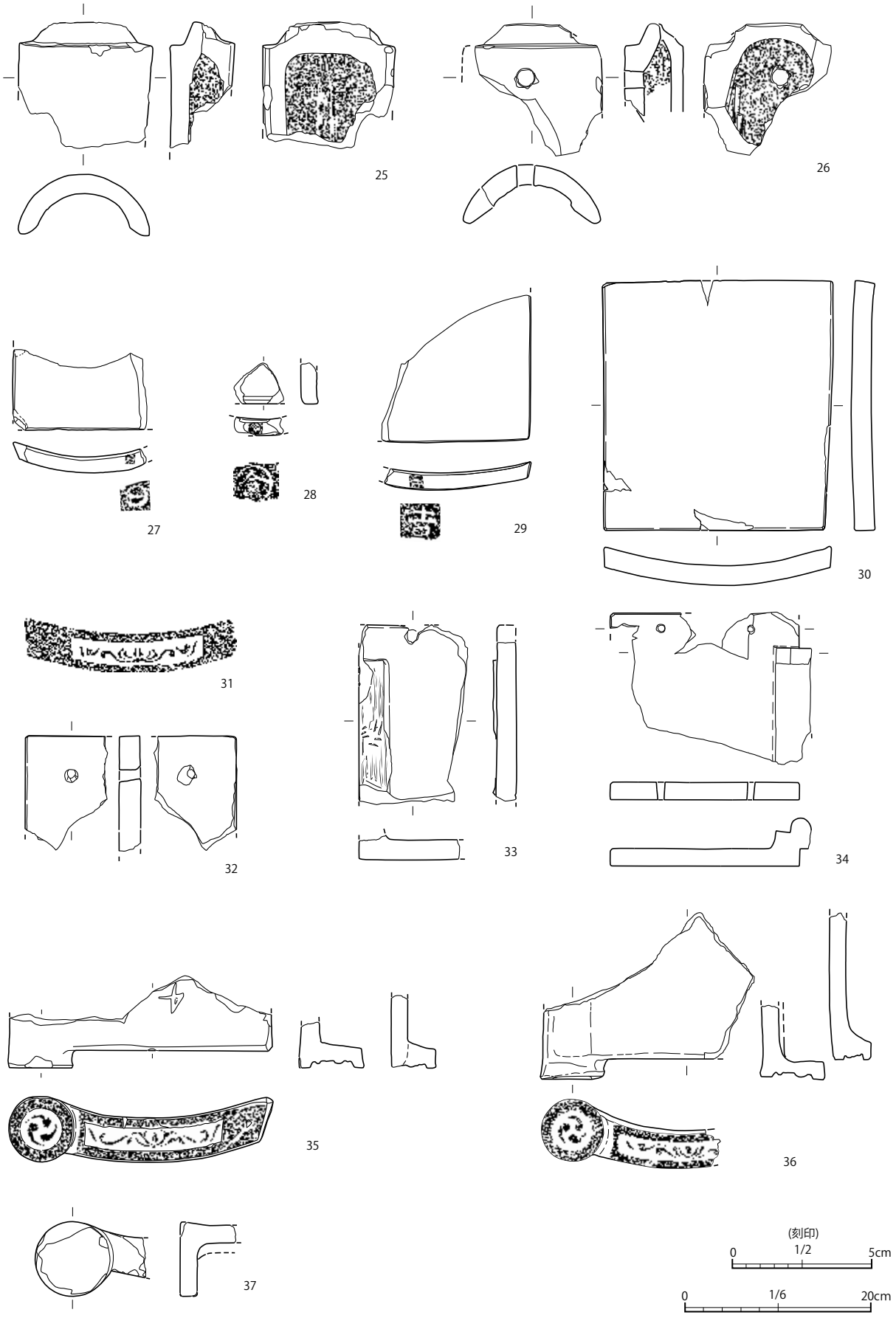
35 号遺構（煉瓦製建物基礎）については、現場段階で既に東京府立第一高等女学校（白鷗高校の前身）の講堂基礎であることが判明しており、種類や積み方も含めた施工状況に顕著な特徴が認められたため、可能な限り詳細に調査を行った。調査を進める中で、①確認初段は外側面に露出する部分が黒く焼き締まった特徴的な煉瓦を中心に構成されていること、②次段内側には初段とは異なる種類の煉瓦が利用されていること、③次々段以下および南辺についてはさらにまた異なる種類の煉瓦が主体となっていることが看取されたため、各段各種類について、ある程度まとまった数の個体を取り上げることとした。また、平手面が露出している初段については、刻印の見られるものすべてを取り上げるとともに、「イ」「ロ」「ハ」などの炭書きが見られるものも適宜取り上げることとした。このようにして取り上げた 80 個体については、位置情報の詳細な三次元記録を行い（159 図）、上記の資料群を補完するような特徴を持った資料 29 点を 35 号遺構一括資料として取り上げた。その結果、35 号遺構については計 109 点のサンプルを採取することとなった。

観察項目は、成形痕、形状、器表の状態、法量（長手、小口、厚さ）、重さ、胎土（色調、特徴）、刻印（種類、大きさ、位置）、炭書（文字、位置）で、大別 8 項目、細別 14 項目である。また、観察から導き出された胎土の類型、総合的な類型も記載した。

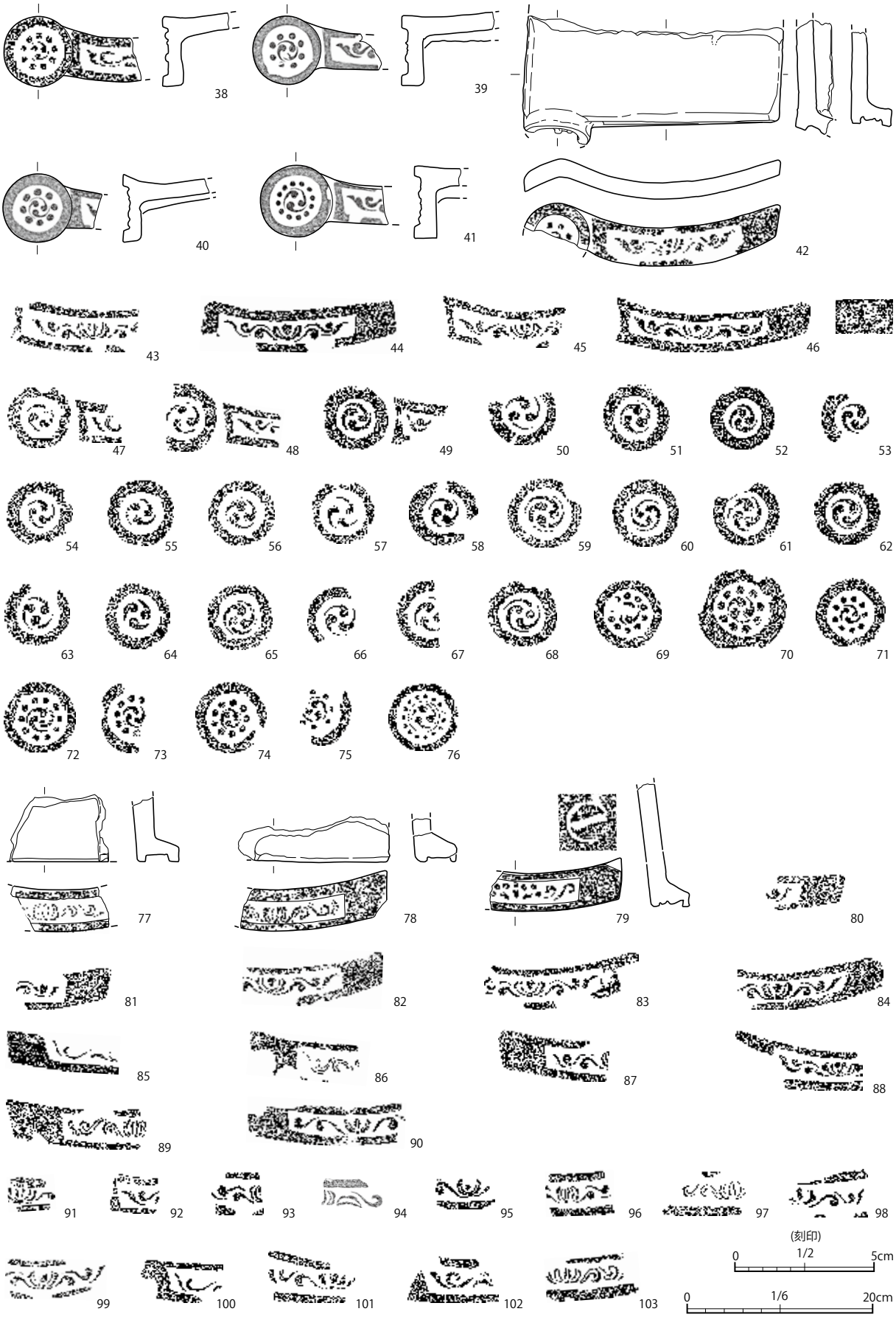
以下、各観察項目について説明を加える。刻印の大きさは、円枠のものについて、その大きさと歪み具合を検討するために計測したもので、枠内の文字を正置して縦×横（幅）を測ったものである。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
(刻印)
0
1/2
5cm
0
1/6
20cm

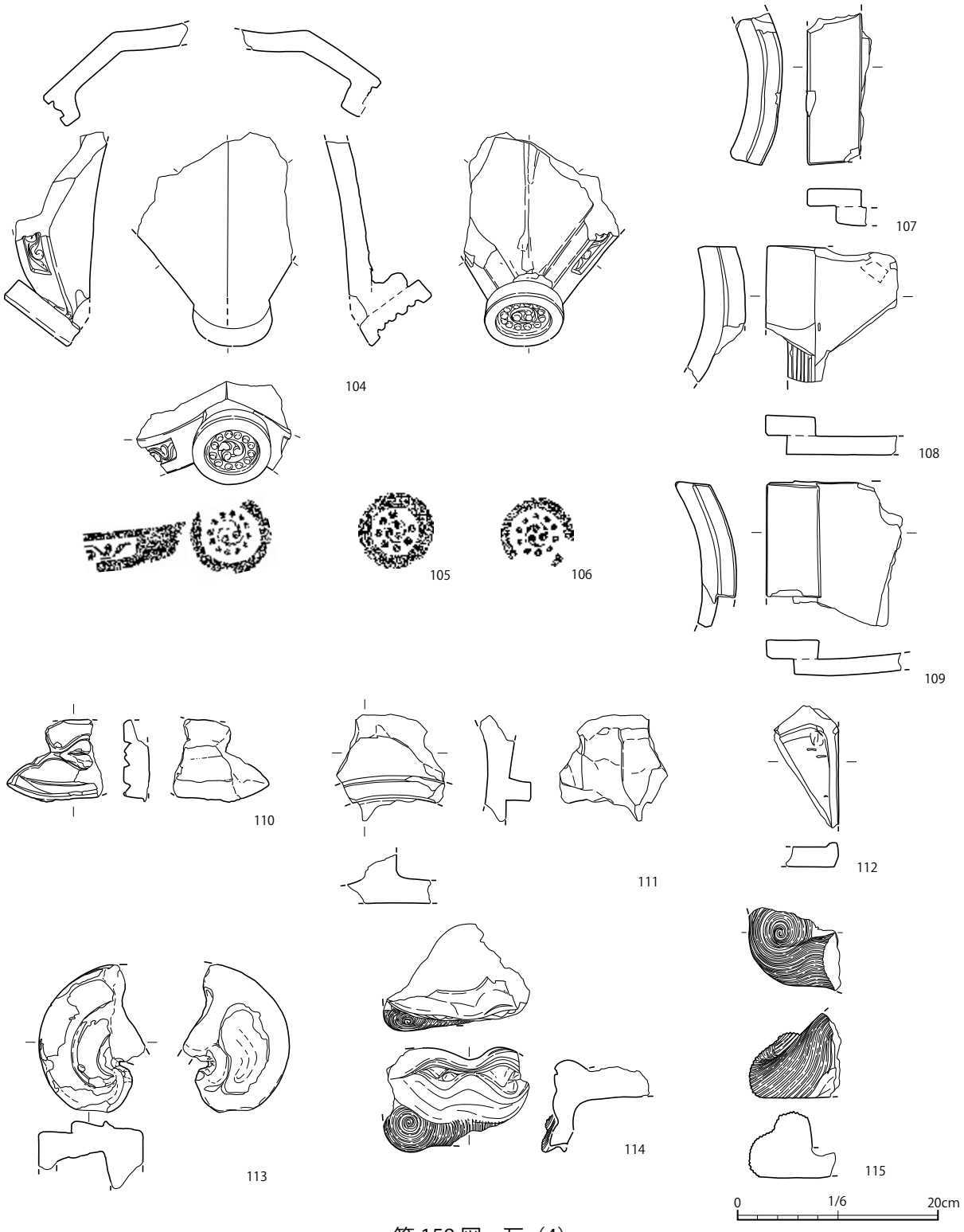
第 155 図　瓦（1）



第 156 図　瓦（2）


38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
(刻印)
0
1/2
5cm
0
1/6
20cm

第 157 図　瓦（3）



第 158 図　瓦（4）

第 46 表　瓦観察表

挿図番号	写真図版	出土地点	注記	器種	遺存状態	法量（cm）										重さ（g）	備考
						A	B	C	D	a	b	c	d	e	f		
155-1	49-1	24号遺構	24ｲｺｳ	軒丸	瓦当付近	▲14.6	▲9.0	2.2		7.9	2.6	0.8				525.0	揚羽蝶紋 胴内面ムシロ様圧痕　被熱赤化
155-2	49-2	第1層	Ⅲ区	軒丸	瓦当付近	11.1	▲9.7	1.8		11.1					7.1	813.4	右三つ巴12珠 胴内面ムシロ様圧痕＋縦位帯条線
155-3	49-3	93号遺構　上層	93ｲｺｳ南西上	軒丸	瓦当付近	14.9	▲12.3	2.4		15.3	2.1	3.0				1270.7	右三つ巴16珠 内面縦位帯条線
155-4	49-4	24号遺構	24ｲｺｳ	軒丸	瓦当付近	16.2	▲10.3	1.7		16.2	2.6	0.7				951.5	揚羽蝶紋
155-5	—	24号遺構	24ｲｺｳ	軒丸	瓦当のみ 2/3	16.5	▲2.7	▲—		16.5	2.8	0.6				586.0	揚羽蝶紋 被熱赤化
155-6	—	24号遺構	24ｲｺｳ	軒丸	瓦当のみ 1/4	▲11.0	▲5.5	▲2.1		▲13.7	2.6	0.7				450.6	揚羽蝶紋 被熱赤化
155-7	—	24号遺構	24ｲｺｳ	軒丸	瓦当のみ 1/3	△16.3	▲2.8	▲—		▲13.3	▲2.5	0.7				510.8	揚羽蝶紋 被熱赤化
155-8	—	池遺構　下層	池	軒丸	瓦当のみ	16.2	▲3.2	▲2.4		16.2	2.8	0.8				724.4	右三つ巴16珠　圏線あり 被熱赤化
155-9	—	池遺構　上層	盛土4南4	軒丸	瓦当のみ	14.7	▲3.8	2.2		14.6	2.5	0.5				603.3	右三つ巴16珠 被熱赤化
155-10	—	第2-1・3層・第3層	ﾓﾘ土2	軒丸	瓦当のみ	15.5	▲5.2	2.3		15.0	▲2.3	▲0.7				876.3	右三つ巴16珠 被熱赤化
155-11	—	6号遺構	6ｲｺｳ	軒丸	瓦当のみ	▲12.5	▲4.1	2.4		14.3	2.4	0.5				553.9	右三つ巴14珠 被熱タール付着
155-12	—	17号遺構	17ｲｺｳ	軒丸	瓦当のみ	▲12.8	▲3.6	2.5		▲12.5	2.3	0.4				497.3	右三つ巴14珠 被熱赤化
155-13	—	93号遺構　下層	93ｲｺｳ南東下	軒丸	瓦当のみ	▲14.4	▲2.6	▲1.6		15.8	2.3	0.6				502.5	右三つ巴16珠　圏線あり 被熱赤化
155-14	—	池遺構　下層	池西	軒丸	瓦当のみ	▲12.7	▲3.1	▲2.0		▲15.0	▲2.0	▲0.5				573.6	右三つ巴16珠 被熱赤化
155-15	—	93号遺構　上層	93ｲｺｳ南東上	軒丸	瓦当のみ 2/3	▲11.7	▲2.1	▲—		▲13.3	▲—	▲—				418.0	右三つ巴16珠ヵ　圏線あり 被熱赤化
155-16	—	池遺構　下層	池北岸4	軒丸	瓦当のみ 3/4	▲12.4	▲2.6	▲—		▲13.0	▲—	▲—				495.0	右三つ巴16珠ヵ 被熱赤化
155-17	—	33号遺構	3Ⅱ区33ｲｺｳ裏	軒丸	瓦当のみ	15.7	4.1	2.8		16.0	2.3	0.8				619.9	右三つ巴16珠 被熱赤化
155-18	—	池遺構　上層	61ｲｺｳ	軒丸	瓦当のみ	15.5	▲3.6	▲2.1		15.7	2.3	0.7				632.1	右三つ巴16珠　圏線あり 被熱赤化
155-19	—	池遺構　上層	91ｲｺｳ	軒丸	瓦当のみ 1/2	▲8.0	▲3.4	▲2.4		15.0	2.3	0.8				451.4	左三つ巴14珠ヵ　圏線あり 被熱変形赤化
155-20	—	37号遺構	37ｲｺｳ	軒丸	瓦当のみ 1/5	▲13.0	▲3.2	▲2.5		▲10.0	2.3	0.6				240.6	中央欠16珠ヵ　圏線あり
155-21	—	池遺構　上層	47ｲｺｳ下	軒丸	瓦当のみ 1/2	▲8.0	▲14.5	2.1		▲10.2	2.0	▲0.2				612.6	右三つ巴16珠ヵ 胴内面ムシロ様圧痕＋縦位帯条痕
155-22	49-5	24号遺構	24ｲｺｳ	丸	瓦尻付近 1/2	▲7.7	▲8.6	2.4						4.7		270.6	胴内面ムシロ様圧痕　被熱赤化
155-23	49-6	24号遺構	24ｲｺｳ	丸	瓦尻付近 1/2	▲7.4	▲11.5	2.1						4.5		259.9	胴内面ムシロ様圧痕　被熱赤化
155-24	49-7	池遺構　上層	51ｲｺｳ	丸	胴のみ	14.5	▲10.3	2.3								576.0	背に刻印「○に一」 胴内面ムシロ様圧痕　被熱赤化
156-25	49-8	池遺構　上層	47ｲｺｳ	丸	瓦尻付近	14.4	▲13.6	2.0						3.6		611.5	胴内面ムシロ様圧痕＋縦位帯条痕 被熱赤化
156-26	49-9	93号遺構　上層	93ｲｺｳ南西上	丸	瓦尻付近	▲13.6	▲14.2	2.2						3.8		448.9	胴内面ムシロ様圧痕＋縦位帯条痕 被熱赤化
156-27	49-10	24号遺構	24ｲｺｳ	平	1/6	▲14.3	▲8.7	1.7	▲14.0							270.5	側面刻印「○一」
156-28	49-11	第1層	Ⅰ区旧校舎	平	小破片	▲5.3	▲4.4	1.8								38.7	側面刻印「○合」
156-29	49-12	17号遺構	17ｲｺｳ	平	1/4	▲16.0	▲15.9	1.9								494.9	側面刻印「吉」
156-30	49-13	82号遺構	882ｲｺｳ	平	完形	24.1	26.9	2.2	2.5							2136.4	被熱赤化
156-31	—	75号遺構	75ｲｺｳ	軒平	瓦当のみ	▲24.0	▲11.3	2.1		4.4					2.1	956.6	江戸式文様　ⅠKa
156-32	49-14	第1層	Ⅰ区第1層	蝋燭桟ヵ	1/6	▲12.4	▲9.0	2.3								292.7	被熱赤化
156-33	—	33号遺構	333ｲｺｳ	蝋燭桟	1/3	▲10.3	▲19.3	2.2	11.6							634.9	
156-34	49-15	第5層	EWトレ1	蝋燭桟ヵ	2/3	▲21.6	▲16.4	1.9								641.8	器表剥離
156-35	49-16	26号遺構	226ｲｺｳ	軒桟	瓦当付近	28.3	▲9.1	1.8		7.0		0.5			2.5	761.2	右三つ巴　大坂式文様
156-36	49-17	池遺構　上層	盛土4南3	軒桟	瓦当付近	▲23.0	▲17.8	1.8		6.7					2.1	827.4	右三つ巴　江戸式文様　ⅢKi
156-37	49-18	35号遺構	35ｲｺｳ胴木下	軒桟	瓦当付近 1/4	▲11.7	▲7.4	1.7		8.0					▲—	314.4	
157-38	49-19	池遺構　上層	47ｲｺｳ下	軒桟	瓦当付近 1/2	▲14.8	▲9.4	1.9		7.5					5.2	480.4	右三つ巴9珠　大坂式文様
157-39	49-20	第2-2層	35ｲｺｳ東	軒桟	瓦当付近 1/2	▲14.3	▲15.6	1.9		7.3					4.9	528.6	右三つ巴8珠　江戸式文様　欠Ki
157-40	49-22	池遺構　上層	盛土4南1	軒桟	瓦当付近 1/4	▲11.9	▲10.4	1.7		7.3					4.6	365.7	右三つ巴8珠　江戸式文様　欠欠ｊ
157-41	49-23	池遺構　上層	盛土4南3	軒桟	瓦当付近 1/3	▲15.0	▲9.1	1.9		7.8					5.2	361.6	右三つ巴12珠　江戸式文様　欠ｋJ
157-42	49-21	35号遺構	35ｲｺｳ胴木	軒桟	瓦当付近	27.7	▲12.3	1.6		▲4.0					2.1	880.0	右三つ巴8珠ヵ　江戸式文様　ⅢKi
157-43	—	池遺構　上層	盛土4南4	軒桟	平部瓦当のみ 2/3	▲16.1	▲6.4	1.6		4.2					2.2	286.1	江戸式文様　ⅠKJ
157-44	—	池遺構　上層	盛土4南4	軒桟	平部瓦当のみ	▲22.0	▲10.3	1.6		4.4					2.4	569.4	江戸式文様　ⅠKJ
157-45	—	池遺構　上層	盛土4南3	軒桟	平部瓦当のみ 2/3	▲15.5	▲8.1	1.8		4.3					2.2	352.1	江戸式文様　ⅠKJ
157-46	—	17号遺構	17ｲｺｳ	軒桟	平部瓦当のみ	28.2	▲22.0	2.1		4.3					1.9	1836.4	江戸式文様　分類外 刻印「□に鬼平」
157-47	49-24	6号遺構	6ｲｺｳ	軒桟	瓦当のみ 1/3	▲12.5	▲5.9	1.9		7.7					4.2	306.2	右三つ巴　江戸式文様　欠欠i
157-48	49-25	池遺構　上層	盛土4南0	軒桟	瓦当のみ 1/2	▲14.1	▲5.4	▲—		7.4					4.5	275.2	右三つ巴　江戸式文様　欠KJ
157-49	49-26	池遺構　上層	47ｲｺｳ	軒桟	瓦当のみ 1/3	▲14.9	▲5.7	1.7		7.2					4.1	327.4	右三つ巴　江戸式文様　欠KJ
157-50	—	6号遺構	6ｲｺｳ	軒桟	小丸瓦当のみ	▲11.7	▲6.8	2.0		7.0					2.7	253.5	右三つ巴
157-51	—	第2層	35ｲｺｳ東	軒桟	小丸瓦当のみ	7.4	▲4.0	2.0		7.3						118.5	右三つ巴

挿図番号	写真図版	出土地点	注記	器種	遺存状態	法量（cm）										重さ（g）	備考
						A	B	C	D	a	b	c	d	e	f		
157-52	—	17号遺構	17ｲｺｳ	軒桟	小丸瓦当のみ	▲10.7	▲4.3	1.7		7.0	2.9				0.5	153.4	右三つ巴
157-53	—	6号遺構	6ｲｺｳ	軒桟	小丸瓦当のみ	6.5	3.0	▲1.5		7.1						78.7	右三つ巴 被熱赤化
157-54	—	第4層	ﾓﾘ土3	軒桟	小丸瓦当のみ	—	▲2.3	▲2.1		7.2						94.1	右三つ巴
157-55	—	17号遺構	17ｲｺｳ	軒桟	小丸瓦当のみ	—	▲2.6	—		7.2						87.9	右三つ巴
157-56	—	6号遺構	6ｲｺｳ	軒桟	小丸瓦当のみ	—	▲2.4	—		8.8						98.3	右三つ巴
157-57	—	池遺構　上層	61ｲｺｳ	軒桟	小丸瓦当のみ	—	▲2.3	—		6.8						87.5	右三つ巴
157-58	—	7号遺構	7ｲｺｳ	軒桟	小丸瓦当のみ	—	▲2.2	—		7.8						112.1	右三つ巴
157-59	—	池遺構　上層	盛土4南4	軒桟	小丸瓦当のみ	—	▲2.5	—		7.8						136.5	右三つ巴
157-60	—	池遺構　下層	池南	軒桟	小丸瓦当のみ	—	▲2.2	—		7.4						113.3	右三つ巴
157-61	—	池遺構　上層	盛土4南4	軒桟	小丸瓦当のみ	—	▲2.4	—		7.4						110.1	右三つ巴
157-62	—	第4層	ﾓﾘ土3	軒桟	小丸瓦当のみ	—	▲8.3	2.0		7.1						192.8	右三つ巴
157-63	—	2号遺構	2ｲｺｳ	軒桟	小丸瓦当のみ	—	▲5.3	2.0		7.1						172.4	右三つ巴
157-64	—	池遺構　上層	盛土4北1	軒桟	小丸瓦当のみ	—	▲9.0	▲1.7		6.8						257.4	右三つ巴
157-65	—	93号遺構	93ｲｺｳ	軒桟	小丸瓦当のみ	—	▲5.2	2.0		6.9						144.6	右三つ巴 被熱赤化
157-66	—	池遺構　上層	51ｲｺｳ	軒桟	小丸瓦当のみ	—	▲4.6	▲1.4		▲5.2						71.9	右三つ巴
157-67	—	17号遺構	17ｲｺｳ	軒桟	小丸瓦当のみ	—	▲2.4	—		▲4.3						70.1	右三つ巴
157-68	—	第2-2層	35ｲｺｳ東	軒桟	小丸瓦当のみ	—	▲5.1	2.0		7.4						139.4	右三つ巴
157-69	—	35号遺構	35ｲｺｳ	軒桟	小丸瓦当のみ	10.5	▲6.5	1.7		7.2						235.6	右三つ巴10珠
157-70	—	池遺構　上層	51ｲｺｳ	軒桟	小丸瓦当のみ	—	▲7.0	1.8		8.8						383.6	右三つ巴9珠
157-71	—	池遺構　上層	盛土4北1	軒桟	小丸瓦当のみ	—	▲2.9	—		7.7						142.7	右三つ巴9珠
157-72	—	第2-1・3層・第3層	ﾓﾘ土2	軒桟	小丸瓦当のみ	—	▲2.9	—		7.8						69.4	右三つ巴10珠
157-73	—	93号遺構	93ｲｺｳ	軒桟	小丸瓦当のみ	—	▲5.1	—		▲5.0						116.0	右三つ巴10珠ヵ
157-74	—	35号遺構	35ｲｺｳ	軒桟	小丸瓦当のみ	—	▲3.0	—		7.6						146.0	右三つ巴9珠
157-75	—	17号遺構	17ｲｺｳ	軒桟	小丸瓦当のみ	—	▲2.4	—		7.4						103.8	左三つ巴8珠ヵ
157-76	—	第1層	１区旧校舎	軒桟	小丸瓦当のみ	—	▲4.7	2.0		7.4						131.1	右三つ巴15珠　圏線あり
157-77	49-27	24号遺構	24ｲｺｳ	軒平または軒桟	平部瓦当付近1/3	▲10.8	▲7.4	2.1		4.5					2.2	224.4	江戸式文様　ⅠA欠 被熱赤化
157-78	49-28	24号遺構	24ｲｺｳ	軒平または軒桟	平部瓦当付近1/2	▲16.3	▲4.9	1.9		4.5					2.3	300.2	江戸式文様　ⅠAc 被熱赤化
157-79	49-29	池遺構　上層	盛土4南1	軒平または軒桟	平部瓦当付近2/3	▲14.7	▲13.8	1.9							2.5	497.2	東海式文様　刻印「○一」
157-80	—	26号遺構	226ｲｺｳ	軒平または軒桟	平部瓦当のみ右端部小破片	▲9.3	▲3.4	2.0		3.7					1.9	87.1	江戸式文様　欠欠ｊ 被熱赤化
157-81	—	93号遺構	93ｲｺｳ	軒平または軒桟	平部瓦当のみ右端部1/3	▲11.0	▲8.9	1.6		3.8					▲1.8	221.2	江戸式文様　欠Ki
157-82	—	第2-1・3層・第3層	ﾓﾘ土2	軒平または軒桟	平部瓦当のみ右端部3/4	▲15.8	▲5.6	2.1		▲4.5					▲2.1	281.6	江戸式文様　ⅠKJ
157-83	—	池遺構　上層	盛土4南1	軒平または軒桟	平部瓦当のみ右端部3/4	▲17.5	▲11.5	1.6		4.2					2.2	445.8	江戸式文様　ⅢKJ
157-84	—	35号遺構	35ｲｺｳ胴木下	軒平または軒桟	平部瓦当のみ右端部3/4	▲16.7	▲10.8	▲1.9		4.2					2.1	480.7	江戸式文様　ⅢKJ
157-85	—	第2-1・3層・第3層	ﾓﾘ土2	軒平または軒桟	平部瓦当のみ左端部小破片	▲12.0	▲2.0	▲—		▲3.6					▲2.4	105.7	江戸式文様　欠Fa 被熱赤化
157-86	—	池遺構　下層	池北岸4B	軒平または軒桟	平部瓦当のみ左端部1/2	▲13.9	▲10.5	1.8		▲4.4					▲2.1	345.0	江戸式文様　欠Aa　左切れ
157-87	—	12号遺構	112ｲｺｳ	軒平または軒桟	平部瓦当のみ左端部1/2	▲13.0	▲10.0	1.8		4.8					2.2	294.7	江戸式文様　欠Ka
157-88	—	池遺構　上層	盛土4南1	軒平または軒桟	平部瓦当のみ左端部2/3	▲10.5	▲15.0	2.2		4.3					1.9	412.8	江戸式文様　ⅠKi
157-89	—	第4層	第4層 盛土3	軒平または軒桟	平部瓦当のみ左端部1/2	▲15.5	▲6.1	▲2.0		▲5.0					2.4	350.0	江戸式文様　ⅠAc 被熱赤化
157-90	—	池遺構　上層	61ｲｺｳ	軒平または軒桟	平部瓦当のみ左端部2/3	▲17.5	▲6.1	2.1		▲4.1					2.2	322.5	江戸式文様　分類外
157-91	—	26号遺構	226ｲｺｳ	軒平または軒桟	平部瓦当のみ小破片	▲8.0	▲12.0	2.0		3.9					1.9	206.6	江戸式文様　ⅠK欠 被熱赤化
157-92	—	池遺構　上層	51ｲｺｳ	軒平または軒桟	平部瓦当のみ小破片	▲7.8	▲4.7	1.8		4.2					2.1	115.2	江戸式文様　欠Kj 被熱赤化
157-93	—	池遺構　上層	47ｲｺｳ	軒平または軒桟	平部瓦当のみ小破片	▲5.8	▲5.0	2.1		4.7					2.5	118.5	江戸式文様　ⅠK欠 被熱赤化
157-94	—	24号遺構	24ｲｺｳ	軒平または軒桟	平部瓦当のみ1/2	▲7.0	▲13.7	▲1.3		▲4.4						104.1	江戸式文様　Ⅰ分類外欠 被熱赤化
157-95	—	池遺構　上層	47ｲｺｳ	軒平または軒桟	平部瓦当のみ小破片	▲7.0	▲2.3	▲—		▲3.3					▲2.2	50.6	江戸式文様　ⅢK欠 被熱赤化
157-96	—	93号遺構　上層	93ｲｺｳ北西上	軒平または軒桟	平部瓦当のみ1/3	▲7.6	▲9.1	2.0		4.8					2.5	211.9	江戸式文様　ⅠK欠 被熱赤化
157-97	—	24号遺構	24ｲｺｳ	軒平または軒桟	平部瓦当のみ1/3	▲10.2	▲2.9	▲1.8		4.4						96.3	江戸式文様　ⅠA欠 被熱赤化
157-98	—	池遺構　上層	47ｲｺｳ	軒平または軒桟	平部瓦当のみ小破片	▲11.1	▲3.1	▲—		▲4.8					2.4	109.7	江戸式文様　ⅣKｊ 被熱赤化
157-99	—	池遺構　上層	盛土4南1	軒平または軒桟	平部瓦当のみ2/3	▲12.7	▲4.7	▲—		▲4.3					▲2.3	155.4	江戸式文様　分類外
157-100	—	池遺構　上層	61ｲｺｳ	軒平または軒桟	平部瓦当のみ小破片	▲9.5	▲6.6	1.7		4.5					2.3	184.2	江戸式文様　欠Fa 被熱赤化
157-101	—	35号遺構	35ｲｺｳ胴木下	軒平または軒桟	平部瓦当のみ小破片	▲10.5	▲4.0	2.1		4.4					2.3	123.0	江戸式文様　ⅣJk 被熱赤化
157-102	—	池遺構　上層	51ｲｺｳ	軒平または軒桟	平部瓦当のみ小破片	▲10.7	▲4.2	▲—		4.5					2.2	116.0	江戸式文様　分類外 被熱赤化
157-103	—	池遺構　下層	池西岸2	軒平または軒桟	平部瓦当のみ小破片	▲12.0	▲3.2	▲—		4.5					2.0	149.8	江戸式文様　ⅠE欠 被熱赤化
158-104	49-30	池遺構　上層	盛土4南3	廻隅	小丸瓦当付近	▲15.4	▲21.3	2.2		7.9					2.0	902.0	右三つ巴12珠　江戸式文様　欠ｋJ
158-105	—	池遺構　上層	47ｲｺｳ下	廻隅	小丸瓦当のみ	—	▲6.8	—		7.7						223.0	右三つ巴8珠　＝
158-106	—	池遺構　上層	盛土4南1	廻隅	小丸瓦当のみ	—	▲9.7	—		7.4						240.7	右三つ巴10珠　—
158-107	49-31	池遺構　上層	盛土4南1	棟	縁のみ小破片	▲15.1	▲6.4	3.7								319.2	
158-108	49-32	池遺構　上層	盛土4南3	棟	縁付近小破片	▲13.5	▲13.2	▲4.0								438.5	
158-109	49-33	池遺構　上層	盛土4南0	棟	縁付近小破片	▲14.5	▲13.5	3.5								476.5	
158-110	49-34	池遺構　上層	盛土4南3	鬼ヵ	小破片	▲9.6	▲8.1	▲2.3								130.7	被熱赤化
158-111	49-35	池遺構　上層	61ｲｺｳ	鬼ヵ	小破片	▲10.8	▲10.7	▲4.5								306.1	被熱赤化
158-112	49-36	池遺構　下層	池西	鬼ヵ	小破片	▲6.5	▲12.1	1.9								133.1	
158-113	49-37	池遺構　上層	61ｲｺｳ	鬼ヵ	小破片	▲10.5	▲14.7	▲6.7								588.7	被熱赤化
158-114	49-38	第2-1・3層・第3層	ﾓﾘ土2	鬼ヵ	小破片	▲14.3	▲10.4	▲9.7								635.4	被熱赤化
158-115	49-39	第2-2層	35ｲｺｳ東	鬼ヵ	小破片	▲9.2	▲7.8	▲8.5								419.8	被熱赤化

成形痕については、一定幅のパターンを持った帯条痕を「板目」、縮れたような粘土の皺を「チヂレ目」とした。胎土については、肉眼観察とともにデジタル実態顕微鏡による 24 倍拡大写真を用いて観察を行った。観察表の胎土欄、色調および特徴欄は上段が肉眼、下段が拡大写真による観察結果を記したものである（「白」は白色鉱物粒子、「黒」は黒色鉱物粒子、「隙」は細かい気泡、「縞」は縞状のムラを示し、×・△・○・◎で視認程度を示した。さらに「ざりざり」「ガサガサ」は手触りで、前者は粘土粒子が粒立って硬く角の立った手触り、後者は触ると容易に粘土粒子が脱落するような脆い手触りを表す。）。また、成形痕やディテールの形状、調整痕などから総合的な類型分けを行った。なお、35 号遺構を中心に、特定の面を細かく打ち欠いて整え（便宜的に「ハツリ」と表現する）、サイズダウンしたと考えられる個体がかなり多くみられた。本稿では、この「ハツリ」をサイズ調整を目指した意図的な加工と捉え、ハツリ個体を元々の製品からすると完形ではないが破損品ではないという意味で「準完形」とした（観察表の法量欄で太字表記した値はハツリ後の数値）。

■総合的な類型

成形痕、形状、器表状態を中心に、細かい器形のディテールを併せ検討し、ａ～ｃの３類型を抽出した。各類型は、ａ：堅く、よく焼き締まっており、平手面に板目がみられ、片小口もしくは片長手に焼成による黒変とにぶいツヤがみられる。縁辺のエッジはやや鈍く、全体の形状としては端正さに欠ける（77 点）。ｂ：平手面に板目がみられる。縁辺はエッジが立っており、端正な直方体。全面が同じような色味に焼成されている（７点）。　ｃ：焼成がやや脆く、平手面にチヂレ目がみられる。縁辺のエッジは鈍く、つくりが雑な印象　である（30 点）。である。ａ類型については、胎土に縞状のムラが見られるものが多く、小口、長手面の孕みや傾斜などの歪み、積み痕と思われる変形や焼ムラがあるものが一定量あり、円枠に「サ」もしくは「さ」の刻印（大・中・小・極小の４サイズ）を持つものが多い。また、黒変のある面に直交する側面（黒変が小口面なら長手面、黒変が長手面なら小口面）にハツリがみられるものが多い。

■類型別の大きさについて

完形・準完形のものを対象に、上記の類型別に法量を検討した。

ａ類型完形のものは 15 点、長手平均が 22.12㎝、小口平均が 10.33㎝、厚さ平均が 5.62㎝で、それぞれの標準偏差は 0.46、0.31、0.15 である。準完形で長手にハツリのあるもの（小口が短くなるように調整されている）は、長手平均が 22.14㎝、小口平均が 9.68㎝、厚さ平均が 5.73㎝、それぞれの標準偏差は 0.46、0.24、0.25 である。準完形で小口にハツリのあるもの（長手が短くなるように調整されている）は、長手平均が 20.26㎝、小口平均が 10.60㎝、厚さ平均が 5.66㎝で、それぞれの標準偏差は 0.69、0.28、0.20 である。即ち、ａ類型のものは完形品が 22.1 × 10.3 × 5.7㎝程度で、準完形のものは長手 0.7㎝、小口 1.9㎝程度がそれぞれハツリによって短く調整されていることになる。また、標準偏差を見ると、長手については小口ハツリの準完形が、他の小口に手を加えていないもの（完形 0.46、長手ハツリ準完形 0.46）に比して、0.69 とばらつきが大きく、小口については長手ハツリの準完形が、他の長手に手を加えていないもの（完形 0.31、小口ハツリ準完形 0.28）に比して、0.21 とばらつきが小さいことがわかる。これは、長手ハツリ後の小口の長さがハツリ前より揃っており、反対に、小口ハツリ後の長手の長さはハツリ前より揃っていないということであり、ハツリ作業に際して、長手と小口では精度に差があったことを示している。その要因につい

ては、今のところ不明である。また、以上はあくまでも単純な数値上の話なので、これらの数値が実態をある程度反映しているのかも含めて、より具体的な検討が必要であろう。

b類型は7点すべてが完形、長手平均が22.35㎝、小口平均が10.55㎝、厚さ平均が5.80㎝で、それぞれの標準偏差は0.29、0.08、0.00である。長手、小口、厚さいずれにおいても、標準偏差が非常に小さく、全体的に整っていて斉一性が高いことがわかる。

c類型は30点、遺存部位が小さく分析に適さない2点を除いて検討した。長手平均は22.34㎝、小口平均は10.56㎝、厚さ平均は5.67㎝で、それぞれの標準偏差は0.42、0.27、0.21であった。

3類型を比較すると、b、c類型は概ね22.3～4×10.6×5.7～8㎝で、いずれの辺もa類型の完形品に比して2㎜ほど大きいことがわかる。標準偏差については、b類型において格段に小さい点が類型分けの要件でもある端正な印象に合致する一方、a類型完形品とc類型はほとんど変わらず、c類型の方がa類型よりつくりが雑な印象とは合致しないことがわかった。「つくりが雑な印象」は単に大きさが揃っているということだけではない、細部のディテールにも起因しているのであろうか。今後も検討を続けたい。

■胎土の観察と類型化について

通常の肉眼観察だけでは、個体間の類似性を端的に把握し難いと考え、デジタル実態顕微鏡による拡大写真を併用して類型化を試みた。肉眼観察では、土色帳（主に2.5YR）と直接比較した色調、鉱物粒子の色や大きさ、縞状の色ムラ、手触りなど、各個体の目立った特徴を抽出して記述した。一方、拡大写真については、第一印象における視覚的特徴によって類型分けし、粘土粒子の粗さ、鉱物粒子の種類（白、黒）と量、細かい気泡（隙）の有無、縞状の色ムラについても観察した。認識できた類型は、「縞」「粗」「細」「砂」の4類型（縞：最も大きな特徴は縞状の色ムラがある点である。中小の白色鉱物粒子が目立ち、細かい気泡がしばしば見られる。粗：粘土粒子が粗く、中～大の白色鉱物粒子を多く含む。細：粘土粒子が細かく、白色鉱物粒子は少なく、小さい。細かい気泡もほとんど見られない。砂:粘土粒子は比較的細かく砂っぽい。中小の白色鉱物粒子が満遍なくかなりの量見られる。）で、各類型の名称には最も特徴的な点を表す語を用いた。また、これらの類型に当てはまらないものは類型外とした。こうしてグルーピングした視覚的類型と胎土分析によるグルーピングが整合するようであれば、いずれ、全資料を分析せずとも、類型毎の選択的な分析で大方の資料をグルーピングすることが可能になるであろう。

また、肉眼観察と拡大写真、それぞれの方法で得られた情報を併せ検討した結果、拡大写真を並べて比較することで、鉱物粒子の種類や大きさ、分布状態といったマトリックスの類似性を把握することが容易になることが確認できた。しかし、一方で、拡大写真はカバーする範囲が小さいため、縞状の色ムラのような局所的な特徴は、全体を見渡せる肉眼観察でしか確認できない場合があること、肉眼観察、拡大写真いずれによっても、黒色鉱物粒子と細かい気泡のように形状や色調の類似するものは判別が難しく、色調のはっきりしない鉱物粒子は視認が難しいこともわかった。従って、当面は注意深く両者を併用しながら、胎土に関する記載と類型化にあたってゆくことが必要であろう。なお、「ざりざり」「ガサガサ」といった手触りについては、粘土粒子や鉱物粒子の粗さや種類、多寡などと特に相関はないようであったが、焼成具合など、他の要素に関連性がある可能性も見据え、今後も注目して情報を集積してゆきたい。

■刻印の種類について（第 164 図）

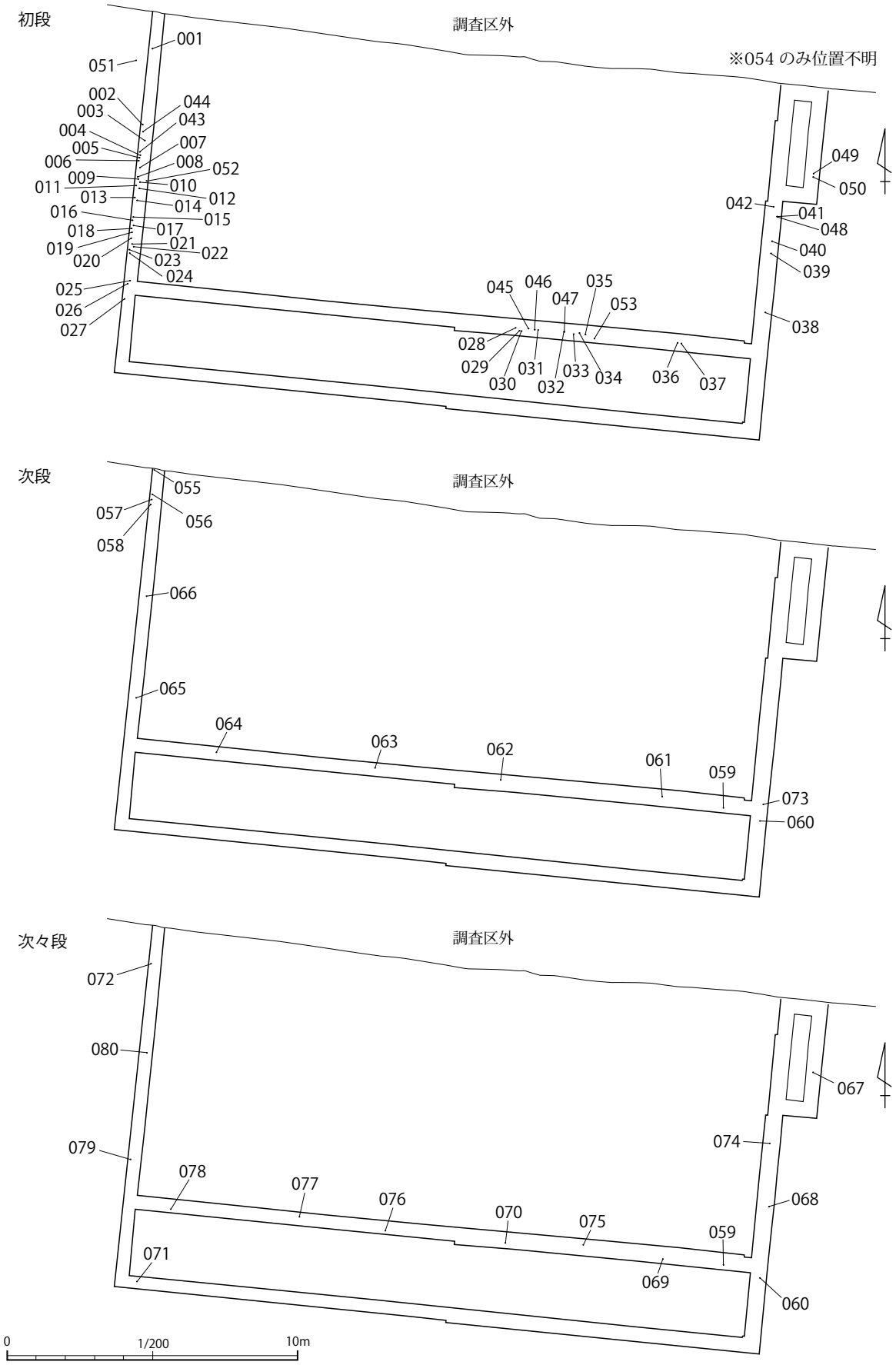
145 点中刻印のあるものは 98 点、主な刻印の印影を図にあげた。ほとんどが「サ」「さ」に類するもので、内訳は大円枠「サ」（径 2.5㎝程度）が 29 点、中円枠「さ」（径 2.0㎝程度）が 2 点、小円枠「サ」（径 1.5㎝程度）が 26 点、小円枠「さ」（径 1.5㎝程度）が 1 点、極小円枠「さ」（径 1.0㎝程度）が 3 点である。その他、円枠「吉」（板目 / 1 点）、円枠「千」（1 点）、角枠「千葉本家」（板目 / 2 点）、菱十字＋「二」「○」（板目 / 1 点）、「◇」（板目 / 1 点）、扇形枠（板目ヵ / 1 点）、「□」（チヂレ目 / 2 点）、楕円枠（チヂレ目 / 3 点）、輪違＋？（チヂレ目 / 1 点）、「ス」ヵ（チヂレ目 / 1 点）、「ク」ヵ（チヂレ目 / 1 点）、「フ」ヵ（チヂレ目 / 1 点）が確認され、印影がはっきりしないため不詳のもの（板目 / 1 点）もあった。「サ」「さ」に類する刻印は、煉瓦研究ネットワーク関東による清泉女子大学事務棟の調査でも、大円枠「サ」、小円枠「サ」、小円枠「さ」の 3 種が確認されており、足立区鹿浜で操業していた斎藤煉瓦工場のものであるとされているが（1992 足立区）、同報告でも触れられているように、足立区から北区にかけての荒川沿いには斎藤姓の煉瓦製造者が複数確認されること、そもそも「サ」「さ」は「斎藤」を示しているのではなく「佐藤」など、他の「さ」を頭文字に持つ生産者を示す可能性もあることを併せ考えると、胎土分析の結果なども踏まえて慎重に考えてゆく必要があろう。同地域には、千葉姓の煉瓦製造者も複数確認されることから、円枠「千」と角枠「千葉本家」の刻印はそれらの製造者のものである可能性が、輪違に付属印（不詳）の見られる刻印については、葛飾区金町で操業していた金町煉瓦製造所のものである可能性が指摘できるが、いずれについても断定することはできない。

なお、140 ～ 145 については破片資料のため刻印の有無を確認することができず不明とした。

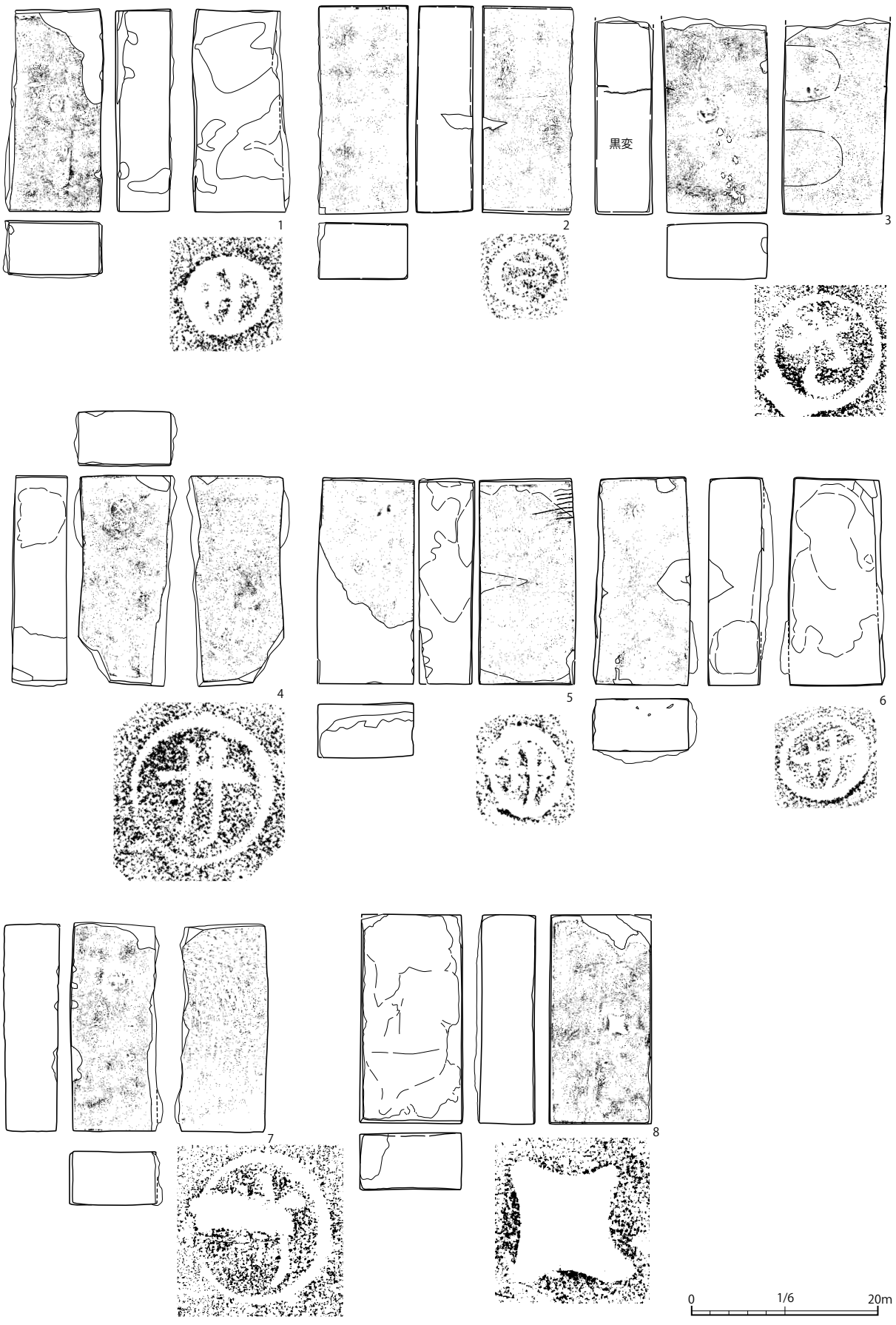
■刻印の歪みと押印の作業方向について（第 48 表）

刻印の中でも、特に円枠を用いるタイプのものについて、枠と文字が共につぶれて楕円形に変形し、枠の際に粘土が押されて盛り上がったような痕跡が見られるものが多く確認された。そこで、円枠のものについては、歪み具合を検討するために枠の縦横を計測した。円枠のものは全部で 63 点、内訳は、大円枠「サ」29 点、中円枠「さ」2 点、小円枠「サ」26 点、小円枠「さ」1 点、極小円枠「さ」3 点、円枠「吉」1 点、円枠「千」1 点である。うち、破損などによって刻印の縦横を計測できなかった 5 点を除いた 58 点のうち、歪みがなく縦横の長さが等しいものは 13 点で、それ以外の 45 点には、歪みがあることが分かった。次に、歪みのあるものについて、文字を正置した場合、縦横どちらの方向に歪みが生じているのかを検討した。縦が長く横が短い楕円形に変形しているのであれば縦歪み、逆に横が長く縦が短い楕円形に変形しているのであれば横歪み、斜め方向に変形しているのであれば斜歪みとしたところ、縦歪みが 23 点、横歪みが 21 点、斜歪みが 1 点であった。これを刻印種類別に見ると、大円枠「サ」の検討可能個体 26 点中、歪みなしが 5 点、縦歪みが 20 点、横歪みが 1 点、中円枠「さ」2 点中、歪みなしと縦歪みが各 1 点、小円枠「サ」の検討可能個体 24 中、歪みなしが 4 点、縦歪みが 1 点、横歪みが 18 点、斜歪みが 1 点、小円枠「さ」1 点は歪みなし、極小円枠「さ」3 点中、歪みなしが 2 点、横歪みが 2 点、円枠「吉」は縦歪み、円枠「千」は歪みなしである。総じてみれば、大円枠「サ」は、ほとんどが縦歪みもしくは歪みなしで、横歪みのものはほとんどなく、小円枠「サ」は、ほとんどが横歪みもしくは歪みなしで、縦歪みのものはほとんどないということが言えよう。こういった歪みがどのようにして生じるかを推測すると、刻印の印体を真上から推す

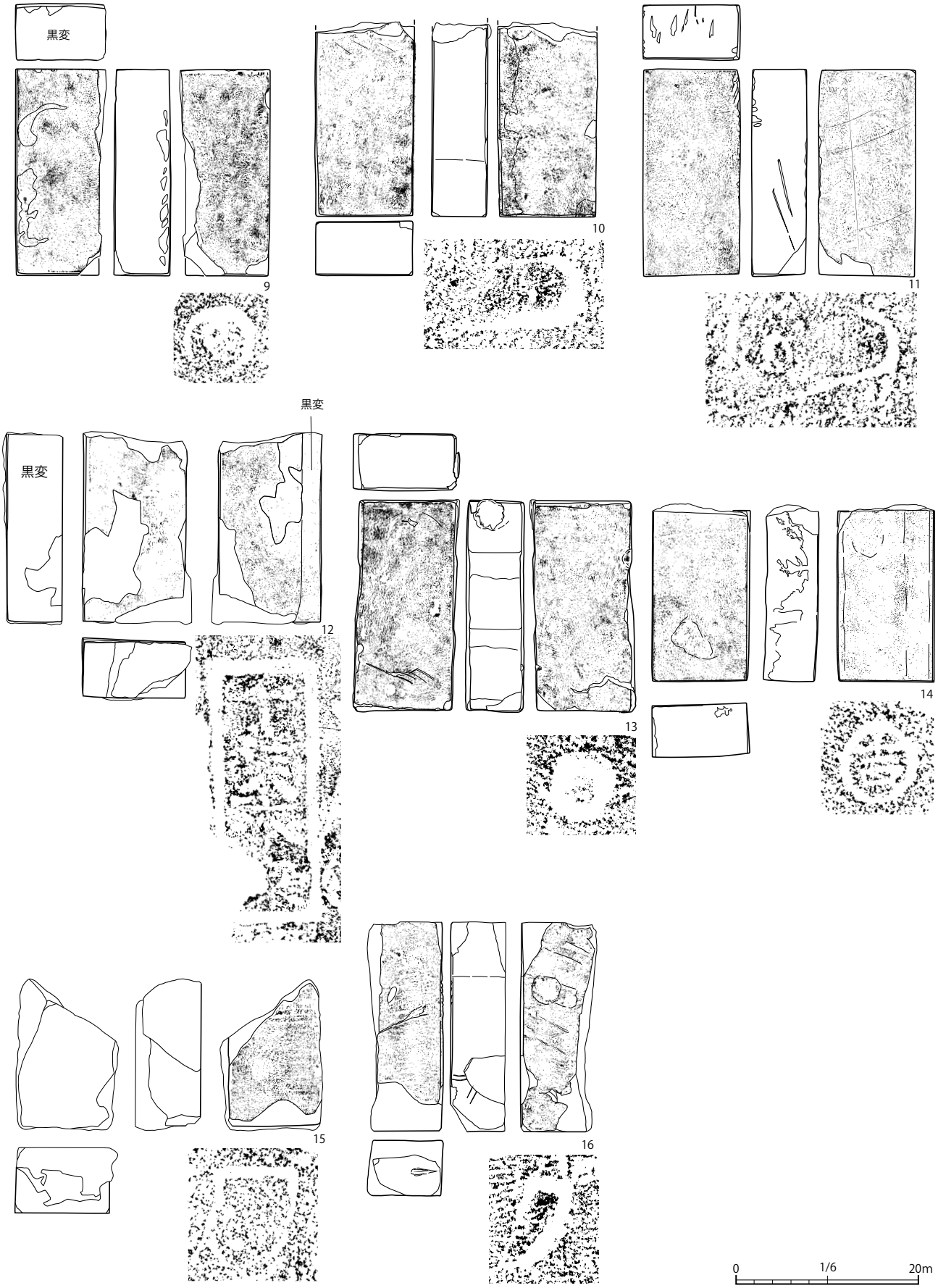
のではなく、上から下（もしくは下から上）というように縦方向に動かしながら打つと縦歪みが、右から左（もしくは左から右）というように動かしながら打つと横歪みが生じると考えられるので、刻印種類によって歪み方向が異なるということは、工具に対する扱い方が異なる集団がそれぞれの刻印を用いていたことを示唆しているのではないだろうかと考えた。そこで、この点をさらに検討するために、刻印が煉瓦の軸に対してどのような方向で押されているかを確認した。刻印文字の縦軸が煉瓦の長手方向と一致する場合は長手軸、小口方向と一致する場合は小口軸とし、それぞれの軸から右方向にやや振れている場合は「+」、左方向にやや振れている場合は「－」を付して記載した。その結果、縦歪みの刻印 23 点中、長手軸押印は 21 点、小口軸押印のものは 2 点に過ぎず、横歪み刻印 21 点中、小口軸押印のものが 20 点、長手軸押印のものは 1 点に過ぎないことがわかった。つまり縦歪み刻印は、長手を縦にして置いた煉瓦に、印体を縦方向に動かしながら打刻されたと考えられ、ヒトの身体構造（特に体幹と腕）にとって最も合理的な動作を想定すると、打刻者は並べられた煉瓦の長手方向に沿って煉瓦列の脇を縦に移動しながら打刻を行ったと考えられるのである。同様に、横歪み刻印は、小口を縦にして置いた煉瓦に、印体を横方向に動かしながら打刻されたと考えられ、打刻者は並べられた煉瓦の長手方向に沿って煉瓦列の脇を横に移動しながら打刻を行ったと考えられるのである。こういった、作業動作は、個々の作業場の広さやレイアウトなどに影響を受けていると考えられるだけでなく、作業集団ごとに工具の種類や形状とともに継承されていく可能性もあり、大円枠「サ」の刻印を用いる集団と小円枠「サ」の刻印を用いる集団は、異なる集団であった可能性が指摘できる。そういった意味では、大円枠「サ」と同様、縦方向長手軸の歪みが見られる中円枠「さ」の刻印を用いる集団は、大円枠「サ」の刻印を用いる集団と類縁性がある可能性があり、小円枠「サ」と同様、横方向小口軸の歪みが見られる極小円枠「さ」の刻印を用いる集団は、小円枠「サ」の刻印を用いる集団と類縁性がある可能性があろう。



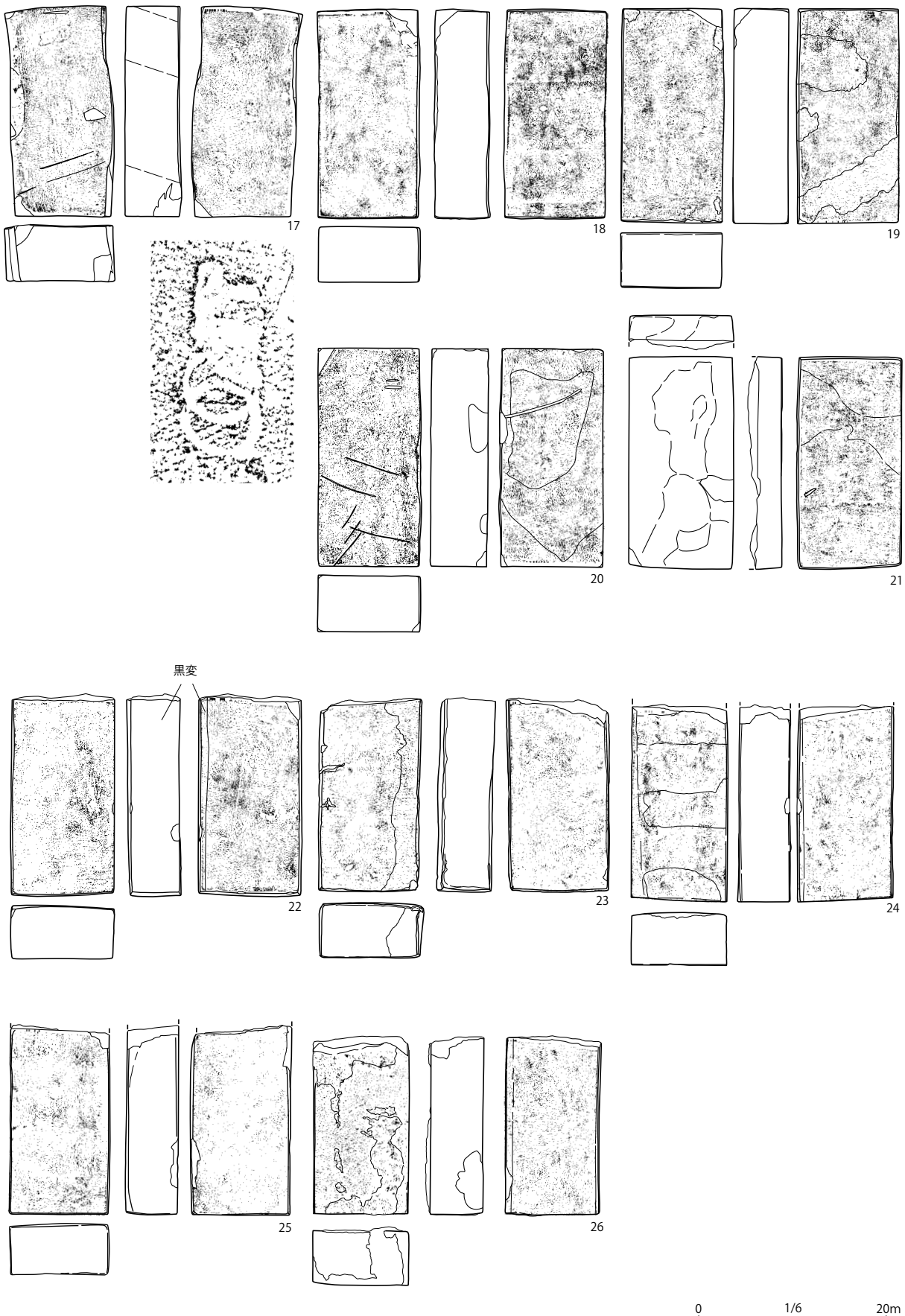
第 159 図　煉瓦サンプル採取位置



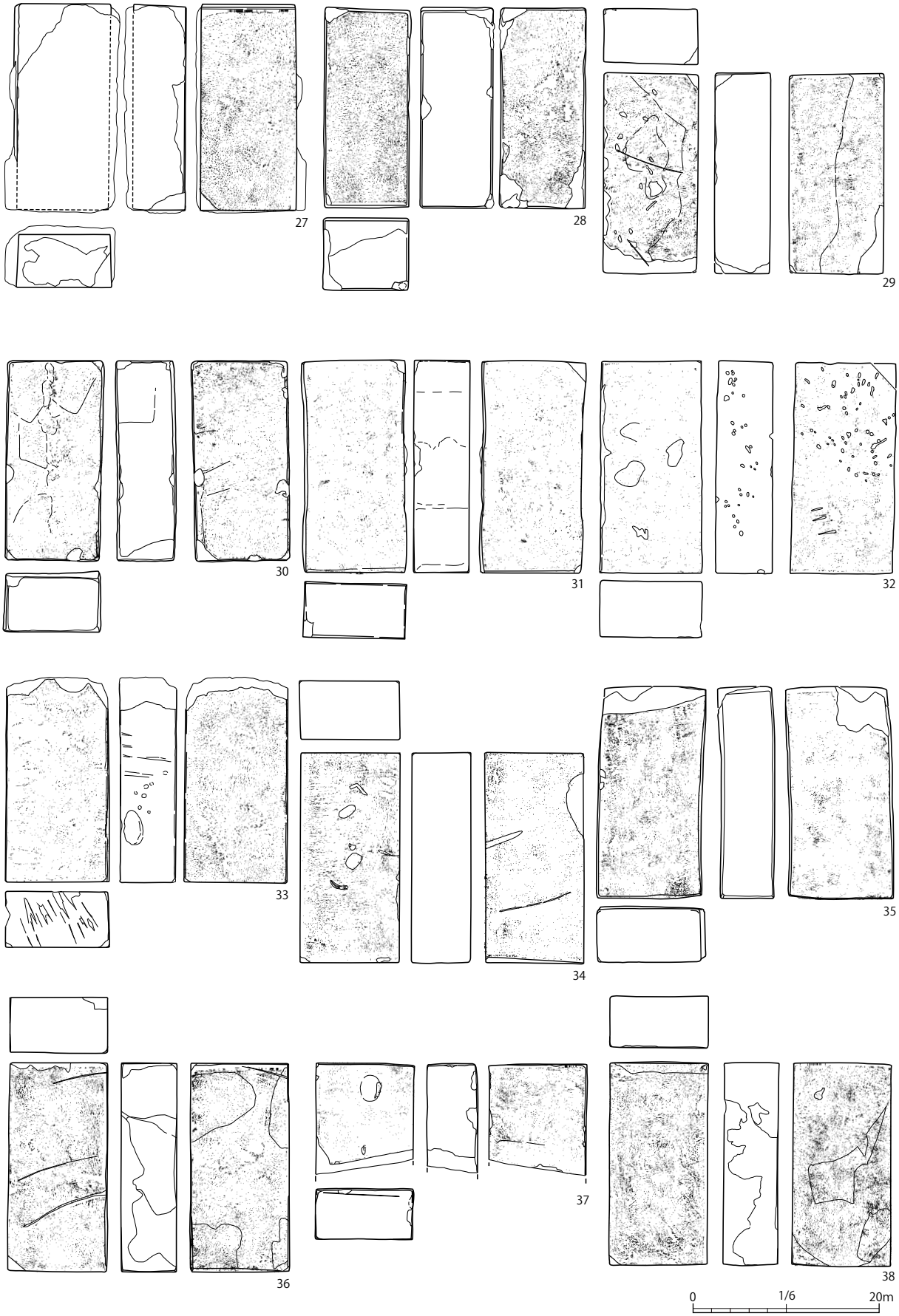
第 160 図　煉瓦（1）



第 161 図　煉瓦（2）



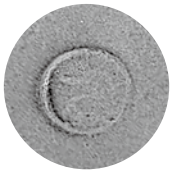
第 162 図　煉瓦（3）



第 163 図　煉瓦（4）



1. 001 35号遺構
○サ　小円枠



2. 017 35号遺構
○さ　小円枠



3. 027 35号遺構
○サ　中円枠（傷あり）



4. 041 35号遺構
○サ　大円枠



5. 046 35号遺構
○サ　小円枠（歪み）



6. 048 35号遺構
○サ　小円枠（歪み）



7. 051 35号遺構
◇



8. 053 35号遺構
○さ　極小円枠



9. 057 35号遺構
○サ　小円枠



10. 058 35号遺構
○サ　大円枠



11. 072 35号遺構
楕円枠



12. 075 35号遺構
（不詳）



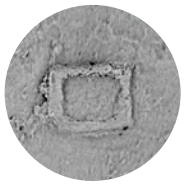
13. 078 35号遺構
楕円枠



14. 084 35号遺構
角枠「千葉本家」



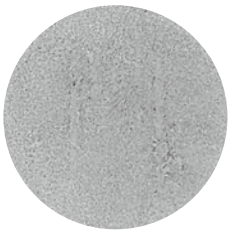
15. 086 35号遺構
○さ　中円枠



16. 087 35号遺構
□（片側に印体縁）



17. 088 35号遺構
□（片側に印体縁）



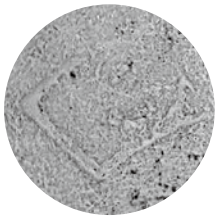
18. 089 35号遺構
（不詳）



19. 093 35号遺構
○吉



20. 103 8号遺構
「ク」カ



21. 107 10号遺構
扇型枠カ



22. 129 42号遺構
菱十字+「二」⌒



23. 136 56号遺構
輪違＋？

第 164 図　刻印の種類

第 47 表　煉瓦観察表

資料番号	挿図番号	出土地点		成形痕	形状	器表の状態	法量（cm）			重さ（g）	胎土			刻印			炭書		綜合的類型
		遺構	位置　段数				長手	小口	厚さ		色調（2.5YR）	特徴	類型	種類	大きさ（cm）	位置	文字	位置	
001	160-1	煉瓦製建物基礎	西辺　初	板目	準完形［片長手ハツリ］歪みあり	片小口黒変 片長手に積み痕	21.5	10.0	5.7	2140	4/6	白 並　白○　黒×　隙○　縞◎m	縞	小円枠「サ」	1.5×1.6	上面	ト	上面	a
002		煉瓦製建物基礎	西辺　初	板目	準完形［片長手ハツリ］歪みあり	片小口黒変 モルタル付着	22.0	9.9	6.0	2550	4/6	白 並　白○　黒×　隙○　縞◎m	縞	大円枠「サ」	2.6×2.3	上面	ト	上面	a
003		煉瓦製建物基礎	西辺　初	板目	準完形［片長手ハツリ］	片小口黒変 モルタル付着	22.0	9.8	6.0	2200	4/6	白　縞 並　白◎　黒×　隙△　縞◎m	縞	大円枠「サ」	2.6×2.5	上面	ト	上面	a
004		煉瓦製建物基礎	西辺　初	板目	準完形［片長手ハツリ］歪みあり	片小口黒変 モルタル付着	22.0	9.7	6.0	2520	4/6 3/6	白　縞 並　白◎　黒×　隙○　縞×	粗	大円枠「サ」	2.5×2.6	上面	ト	上面	a
005		煉瓦製建物基礎	西辺　初	板目	準完形［片長手ハツリ］歪みあり	片小口黒変	22.4	9.7	6.6	2250	5/6 4/6	白 並　白○　黒×　隙△　縞◎m	縞	大円枠「サ」	2.5×2.4	上面	ト	上面	a
006		煉瓦製建物基礎	西辺　初	板目	準完形［片長手ハツリ］　角欠 歪みあり	片小口黒変	22.3	9.7	6.4	2050	5/6 4/6	白　縞 並　白◎　黒×　隙△　縞△	縞	大円枠「サ」	2.5×2.4	上面	ト	上面	a
007		煉瓦製建物基礎	西辺　初	板目	準完形［片長手ハツリ］歪みあり	片小口黒変	22.4	10.0	5.8	2150	5/6～4/6 4/6	白 並　白○　黒×　隙◎　縞○s	縞	小円枠「サ」	1.4×1.8	上面	ト	上面	a
008		煉瓦製建物基礎	西辺　初	板目	準完形［片長手ハツリ］	片小口黒変	22.3	9.8	6.0	2110	5/6 4/6	白 並　白○　黒×　隙◎　縞◎m	縞	大円枠「サ」	2.6×2.4	上面	ト	上面	a
009		煉瓦製建物基礎	西辺　初	板目	準完形［片長手ハツリ］　割れ 歪みあり	片小口黒変	22.8	9.5	6.0	2130	5/6 4/6	白　縞 並　白◎　黒×　隙◎　縞○s	縞	大円枠「サ」	2.6×2.6	上面	ト	上面	a
010		煉瓦製建物基礎	西辺　初	板目	準完形［片長手ハツリ］歪みあり	片小口黒変	22.5	9.9	5.8	2250	5/6 4/6	白 並　白◎　黒×　隙◎　縞◎s	縞	大円枠「サ」	2.7×2.5	上面	ト	上面	a
011		煉瓦製建物基礎	西辺　初	板目	準完形［片長手ハツリ］歪みあり	片小口黒変	22.0	10.0	6.0	2170	5/6 4/6	白 並　白○　黒×　隙△　縞◎m	縞	小円枠「サ」	1.4×1.7	上面	ト	上面	a
012		煉瓦製建物基礎	西辺　初	板目	準完形［片長手ハツリ］　角欠	片小口黒変	22.0	9.9	5.9	1980	5/6 4/6	白　縞 並　白○　黒×　隙△　縞◎s	縞	小円枠「サ」	1.5×1.5	上面	ト	上面	a
013		煉瓦製建物基礎	西辺　初	板目	準完形［片長手ハツリ］歪みあり	片小口黒変	21.7	9.8	5.8	2170	4/6	白 並　白◎　黒×　隙◎　縞◎s	縞	大円枠「サ」	2.8×2.5	上面	ト	上面	a
014		煉瓦製建物基礎	西辺　初	板目	準完形［片長手ハツリ］　角欠 歪みあり	片小口黒変	21.5	9.5	5.9	2050	4/6～5/6 4/6	白 並　白○　黒×　隙○　縞○	縞	小円枠「サ」	1.4×1.7	上面	ー	ー	a
015		煉瓦製建物基礎	西辺　初	板目	準完形［両長手ハツリ］	片小口黒変	21.7	6.3	5.9	1300	4/6～5/6 4/6	白 並　白○　黒×　隙△　縞×		大円枠「サ」	2.5×2.4	上面	ー	ー	a
016		煉瓦製建物基礎	西辺　初	板目	準完形［片長手ハツリ］歪みあり	片小口黒変	22.5	9.7	5.7	2150	4/6～5/6 4/6	白 並　白○　黒×　隙△　縞◎m	縞	大円枠「サ」	2.8×2.5	上面	ニ	下面	a
017	160-2	煉瓦製建物基礎	西辺　初	板目	準完形［片長手ハツリ］	片小口黒変	22.3	9.8	5.7	2110	4/6～5/6 4/6	白　縞 並　白○　黒×　隙○　縞◎m	縞	小円枠「さ」	1.6×1.6	上面	ニ	下面	a
018		煉瓦製建物基礎	西辺　初	板目	準完形［片長手ハツリ］歪みあり	片小口黒変 平手に指頭痕	220	9.5	5.8	2860	4/6～5/6 4/6	白　縞 並　白○　黒×　隙○　縞◎m	縞	小円枠「サ」	1.4×1.5	上面	ニ	下面	a
019		煉瓦製建物基礎	西辺　初	板目	準完形［片長手ハツリ］歪みあり	片小口黒変 片長手に積み痕	22.3	9.6	5.8	2110	5/6 4/6	白 並　白○　黒×　隙△　縞◎	縞	小円枠「サ」	1.2×1.5	上面	ニ	下面	a
020		煉瓦製建物基礎	西辺　初	板目	準完形［片長手ハツリ］	片小口黒変	21.8	9.8	5.7	2100	5/6 4/6	白 並　白○　黒×　隙◎　縞◎m	縞	大円枠「サ」	2.7×2.4	上面	ニ	下面	a
021		煉瓦製建物基礎	西辺　初	板目	準完形［片長手ハツリ］歪みあり	片小口黒変 片長手に積み痕	21.9	9.8	5.6	2100	5/6 4/6	白　縞 並　白◎　黒×　隙○　縞◎s	縞	小円枠「サ」	1.4×1.6	上面	ニ	下面	a
022		煉瓦製建物基礎	西辺　初	板目	準完形［片長手ハツリ］歪みあり	片小口黒変 片長手に積み痕	22.0	9.8	5.6	2040	4/6～5/6 4/6	白　縞 並　白◎　黒×　隙◎　縞○	縞	小円枠「サ」	1.4×1.5	上面	ニ	下面	a
023		煉瓦製建物基礎	西辺　初	板目	準完形［片長手ハツリ］　角欠	片小口黒変 平手に指頭痕	22.0	9.5	5.8	2020	4/6	白　縞 並　白◎　黒×　隙○　縞×	粗	小円枠「サ」	1.5×1.5	上面	ー	ー	a
024		煉瓦製建物基礎	西辺　初	板目	準完形［片長手ハツリ］	片小口黒変 平手に指頭痕	22.2	9.7	5.8	2130	4/6	白 並　白○　黒×　隙△　縞○	縞	小円枠「サ」	1.3×1.5	上面	ニ	下面	a
025		煉瓦製建物基礎	西辺　初	板目	準完形［片長手ハツリ］歪みあり	片小口黒変 片長手に積み痕	22.1	9.5	5.8	2090	4/6	白 並　白◎　黒×　隙○　縞◎m	縞	大円枠「サ」	2.7×2.5	上面	ニ	下面	a
026		煉瓦製建物基礎	西辺　初	板目	準完形［片長手ハツリ］歪みあり	片小口黒変 片長手に積み痕	22.5	9.9	6.0	2070	5/6 4/6	白 並　白◎　黒×　隙◎　縞◎m	縞	大円枠「サ」	2.5×2.5	上面	ニ	下面	a
027	160-3	煉瓦製建物基礎	西辺　初	板目	準完形［片小口ハツリ］	片長手黒変	20.7	10.8	6.0	2430	4/6	白 並　白○　黒×　隙△　縞×	粗	中円枠「さ」	2.0×2.0	上面	ー	ー	a
028		煉瓦製建物基礎	中辺　初	板目	準完形［片長手ハツリ］	片小口黒変 モルタル付着	22.5	10.0	5.9	1970	4/6～5/6 4/6	白 並　白◎　黒×　隙○　縞◎s	縞	大円枠「サ」	2.5×2.3	上面	はヵ	下面	a
029		煉瓦製建物基礎	中辺　初	板目	準完形［片長手ハツリ］　角欠	片小口黒変 平手に指頭痕	22.0	10.3	5.7	2220	4/6	白 並　白◎　黒×　隙◎　縞◎m	縞	大円枠「サ」	2.5×2.4	上面	有	下面	a
030		煉瓦製建物基礎	中辺　初	板目	準完形［片長手ハツリ］　角欠	片小口黒変	22.0	10.0	5.4	2180	4/6～5/6 4/6	白　縞 並　白◎　黒×　隙○　縞◎m	縞	大円枠「サ」	2.6×2.4	上面	ー	ー	a

資料番号	挿図番号	出土地点		成形痕	形状	器表の状態	法量（cm）			重さ（g）	胎土			刻印			炭書		綜合的類型
		遺構	位置　段数				長手	小口	厚さ		色調（2.5YR）	特徴	類型	種類	大きさ（cm）	位置	文字	位置	
031		煉瓦製建物基礎	中辺　初	板目	2/3［片長手ハツリ］		▲16.0	10.0	6.0	1470	4/6 3/6	白　縞 並　白◎　黒×　隙○　縞◎m	縞	大円枠「サ」	2.5×2.2	上面	有	下面	a
032		煉瓦製建物基礎	中辺　初	板目	準完形［片長手ハツリ］ 歪みあり	片小口黒変 片長手に積み痕	22.0	9.6	5.3	2050	5/6 4/6	白　縞 並　白◎　黒×　隙○　縞○s	縞	大円枠「サ」	2.5×2.3	上面	ロ	下面	a
033		煉瓦製建物基礎	中辺　初	板目	準完形［片長手ハツリ］　角欠	片小口黒変	22.2	8.9	6.0	1980	4/6～5/6 4/6	白　縞 並　白○　黒×　隙○　縞◎m	縞	小円枠「サ」	1.4×1.6	上面	ロ	下面	a
034		煉瓦製建物基礎	中辺　初	板目	準完形［片長手ハツリ］	片小口黒変 片長手に積み痕	21.5	9.9	5.5	2150	4/6	白　縞 並　白◎　黒×　隙○　縞×	縞	大円枠「サ」	2.4×2.6	上面	ロ	下面	a
035		煉瓦製建物基礎	中辺　初	板目	準完形［片長手ハツリ］	片小口黒変	22.5	9.9	5.7	2170	4/6	白 並　白○　黒×　隙△　縞○	縞	小円枠「サ」	1.4×1.5	上面	ロ	下面	a
036		煉瓦製建物基礎	中辺　初	板目	準完形［片長手ハツリ］　角欠	片小口黒変	22.0	10.0	5.7	2010	4/6 4/8	白　縞 並　白◎　黒×　隙△　縞×	粗	大円枠「サ」	2.6×2.4	上面	ー	ー	a
037		煉瓦製建物基礎	中辺　初	板目	準完形［片長手ハツリ］　角欠	片小口黒変	22.5	9.7	5.7	2140	5/6 4/6	白　縞 並　白○　黒×　隙△　縞◎m	縞	大円枠「サ」	2.6×欠	上面	ロ	下面	a
038		煉瓦製建物基礎	東辺　初	板目	準完形［片長手ハツリ］	片小口黒変	22.8	9.4	5.5	2060	5/6 4/6	白　縞 並　白○　黒×　隙○　縞○	縞	大円枠「サ」	欠×2.5	上面	ニ	下面	a
039		煉瓦製建物基礎	東辺　初	板目	準完形［片長手ハツリ］	片小口黒変	22.0	10.0	5.6	2210	4/6	白　縞 並　白◎　黒×　隙△　縞×	粗	小円枠「サ」	1.2×1.7	上面	ー	ー	a
040		煉瓦製建物基礎	東辺　初	板目	準完形［片長手ハツリ］　割れ	片小口黒変	22.5	10.1	5.5	2150	4/6～5/6 4/6	白　縞 並　白○　黒×　隙○　縞○	縞	大円枠「サ」	欠×2.3	上面	ニ	上面	a
041	160-4	煉瓦製建物基礎	東辺　初	板目	準完形［片長手ハツリ］　割れ 歪みあり	片小口黒変 片長手に積み痕	22.0	10.0	5.7	2050	5/6 4/6	白 並　白◎　黒×　隙◎　縞◎m	縞	大円枠「サ」	2.7 ×2.5	上面	ハ下	上面	a
042		煉瓦製建物基礎	東辺　初	板目	準完形［片長手ハツリ］ 歪みあり	片小口黒変	21.5	10.0	5.8	2280	5/6 4/6	白 並　白◎　黒×　隙○　縞○m	縞	小円枠「サ」	1.4×1.5	上面	ー	ー	a
043		煉瓦製建物基礎	西辺　初	板目	準完形［片長手ハツリ］	片小口黒変	22.0	9.5	5.5	2110	5/6 4/6	白　縞 並　白◎　黒×　隙◎　縞○s	縞	大円枠「サ」	2.5×2.5	上面	ト	上面	a
044		煉瓦製建物基礎	西辺　初	板目	準完形［片長手ハツリ］ 歪みあり	片小口黒変 モルタル付着	21.1	9.8	5.5	2300	4/6	白 並　白◎　黒×　隙△　縞○m	縞	小円枠「サ」	1.3×1.5	上面	ト	上面	a
045		煉瓦製建物基礎	中辺　初	板目	完形 歪みあり	片小口黒変	21.5	10.1	5.7	2250	4/6	白　縞 並　白◎　黒×　隙△　縞○m	縞	小円枠「サ」	1.4×1.5	上面	—	—	a
046	160-4	煉瓦製建物基礎	中辺　初	板目	完形 歪みあり	片小口黒変 片長手に積み痕	22.0	10.3	6.0	2180	4/6 3/6	白　縞 並　白◎　黒△　隙△　縞△	粗	小円枠「サ」	1.7×1.3	上面	ト下ヵ	下面	a
047		煉瓦製建物基礎	中辺　初	板目	準完形［片長手ハツリ］　割れ 角欠 歪みあり	片小口黒変 片長手に積み痕	22.0	9.5	5.5	1950	5/6 3/6	白　縞 並　白◎　黒×　隙△　縞○s	縞	小円枠「サ」	1.5×1.5	上面	ロ	下面	a
048	160-6	煉瓦製建物基礎	東辺　初	板目	準完形［片長手ハツリ］ 歪みあり	片小口黒変 モルタル付着	22.0	9.3	5.8	2270	5/6 4/6	白　縞 並　白○　黒△　隙△　縞○s	縞	小円枠「サ」	1.3×1.5	上面	はヵ	上面	a
049	160-7	煉瓦製建物基礎	東張出　初	板目	準完形［片長手ハツリ］ 歪みあり	片小口黒変 片長手に積み痕	22.5	9.9	5.7	2090	4/6～5/6 4/6	白　縞 並　白◎　黒△　隙◎　縞○s	縞	大円枠「サ」	2.6×2.3	上面	イ	上面	a
050		煉瓦製建物基礎	東張出　初	板目	準完形［片長手ハツリ］　角欠 歪みあり	片小口黒変　片長手に積み痕　モルタル付着	21.5	9.0	5.5	1980	5/6 4/6	白　縞　ざりざり 並　白◎　黒×　隙○　縞×	縞	小円枠「サ」	欠×欠	上面	ー	ー	a
051	160-8	煉瓦製建物基礎	西張出	板目	完形	モルタル付着	22.2	11.0	6.0	2250	5/6	白　ざりざり 並～細　白△　黒△　隙△　縞×	縞	◇	—	上面	ー	ー	類型外
052	162-18	煉瓦製建物基礎	西辺　初	板目	完形	端正　片平手に積み痕 モルタル付着	22.2	10.5	5.8	2300	5/6 4/6	白　ざりざり 並～細　白△　黒○　隙△　縞×	砂	ー	—	ー	ー	ー	b
053	161-9	煉瓦製建物基礎	中辺　初	板目	準完形［片長手ハツリ］	片小口黒変	22.5	9.3	6.0	1980	5/6 4/6	白 並　白△　黒×　隙△　縞◎s	縞	極小円枠「さ」	1.1×1.2	上面	ロ	下面	a
054		煉瓦製建物基礎	不明　初	板目	準完形［片長手ハツリ］	片小口黒変	21.9	9.9	5.7	2080	5/6 4/6	白　縞 並　白◎　黒×　隙◎　縞◎s	縞	大円枠「サ」	2.5×2.5	上面	ニ	下面	a
055		煉瓦製建物基礎	西辺　次	板目	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー		小円枠「サ」	—	上面	ー	ー	a
056		煉瓦製建物基礎	西辺　次	板目	準完形［片小口ハツリ］	片長手黒変 片平手に積み痕	20.3	10.5	5.6	2190	5/6 4/6	白　縞 並　白◎　黒×　隙△　縞◎m	縞	小円枠「サ」	1.5×1.6	上面	ト	上面	a
057		煉瓦製建物基礎	西辺　次	板目	準完形［片小口ハツリ］	片長手黒変 片長手に積み痕	20.0	10.3	5.8	2110	4/6	白　縞 並　白◎　黒×　隙○　縞◎m	縞	小円枠「サ」	1.5×1.5	上面	ト	上面	a
058		煉瓦製建物基礎	西辺　次	板目	準完形［片小口ハツリ］　角欠 歪みあり	片長手黒変 片平手に指頭痕	20.0	10.1	5.5	2130	4/6 3/6	白　縞 粗　白◎　黒×　隙◎　縞◎点	縞	大円枠「サ」	2.5×2.5	上面	—	—	a
059		煉瓦製建物基礎	中辺　次	板目	3/4［片小口ハツリ］　角欠	片長手黒変	▲18.8	10.4	5.2	1690	4/6～5/6 4/6	白 並　白○　黒×　隙△　縞△	縞	小円枠「サ」	1.5×1.6	上面	へ	上面	a
060		煉瓦製建物基礎	東辺　次	チヂレ目	完形　割れ	モルタル付着	23.0	9.8	5.8	2320	5/6 4/6	白　ざりざり 並～細　白○　黒×　隙×　縞×		ー	ー	ー	ー	ー	c

資料番号	挿図番号	出土地点		成形痕	形状	器表の状態	法量（cm）			重さ（g）	胎土			刻印			炭書		綜合的類型
		遺構	位置　段数				長手	小口	厚さ		色調（2.5YR）	特徴	類型	種類	大きさ（cm）	位置	文字	位置	
061		煉瓦製建物基礎	中辺　次	板目	完形	端正	22.0	10.6	5.8	2280	5/6 4/6	白 並～細　白△　黒×　隙△　縞×	砂	ー	ー	ー	ー	ー	b
062		煉瓦製建物基礎	中辺　次	板目	完形	端正	22.5	11.0	5.8	2370	5/6 4/6	白 並～細　白△　黒×　隙△　縞×	砂	ー	ー	ー	ー	ー	b
063	162-19	煉瓦製建物基礎	中辺　次	板目	完形	端正	22.7	10.7	6.0	2270	5/6 4/6	白　ざりざり 並～細　白△　黒×　隙△　縞×	砂	ー	ー	ー	ー	ー	b
064		煉瓦製建物基礎	中辺　次	板目	完形	両長手積み痕	22.4	10.5	5.8	2230	4/6 3/6	白　ざりざり 並　白○　黒△　隙△　縞×	粗	ー	ー	ー	ー	ー	b
065		煉瓦製建物基礎	西辺　次	板目	完形	端正	21.8	10.5	5.8	2140	ー 4/6	ー 並　白○　黒△　隙△　縞×	粗	ー	ー	ー	ー	ー	b
066		煉瓦製建物基礎	西辺　次	板目	完形	端正 モルタル付着	22.5	10.5	6.0	2370	ー 4/6	ー 並～細　白○　黒△　隙△　縞×	砂	ー	ー	ー	ー	ー	b
067	162-20	煉瓦製建物基礎	東張出 次々	チヂレ目	完形		23.2	11.0	6.0	2210	5/6 4/6	白　ざりざり 並～細　白△　黒×　隙△　縞×	粗	ー	ー	ー	ー	ー	c
068		煉瓦製建物基礎	東辺　次々	チヂレ目	完形		22.0	10.3	6.0	2070	5/6 4/6	白　ざりざり 並～細　白△　黒△　隙×　縞×	細	ー	ー	ー	ー	ー	c
069		煉瓦製建物基礎	中辺　次々	チヂレ目	完形		22.7	11.0	5.8	2120	5/6 4/6	白　ざりざり 並～細　白△　黒△　隙×　縞×	細	ー	ー	ー	ー	ー	c
070		煉瓦製建物基礎	中辺　次々	チヂレ目	完形		23.0	10.8	5.4	2180	5/6 4/6	白　ざりざり 並～細　白△　黒×　隙×　縞×	細	ー	ー	ー	ー	ー	c
071		煉瓦製建物基礎	南辺　次々	チヂレ目	4/5　片小口欠		▲22.0	11.0	5.7	2180	5/6 4/6	白　ざりざり 並～細　白○　黒△　隙△　縞×	細	ー	ー	ー	ー	ー	c
072	161-10	煉瓦製建物基礎	西辺　次々	チヂレ目	4/5　片小口欠		▲21.1	10.8	5.9	2050	5/6 4/6	白　ざりざり 並～細　白△　黒△　隙×　縞×	粗	楕円枠		上面	二ヵ	上面	c
073	162-21	煉瓦製建物基礎	東辺　次	板目	準完形［片平手ハツリ］ 歪みあり	片平手積み痕	22.2	11.0	2.3	1310	4/6	白 並～細　白△　黒×　隙△　縞△s	砂	ー	ー	ー	ー	ー	a
074		煉瓦製建物基礎	東辺　次々	チヂレ目	完形		23.0	11.2	6.0	2200	5/6 4/6	白　ざりざり 並～細　白△　黒×　隙×　縞△	縞	ー	ー	ー	ー	ー	c
075		煉瓦製建物基礎	中辺　次々	チヂレ目	完形		22.5	10.5	6.0	2330	4/6	白　ざりざり 並～細　白△　黒△　隙△　縞×	粗	不詳 楕円枠ヵ		上面	ー	ー	c
076		煉瓦製建物基礎	中辺　次々	チヂレ目	完形	両長手積み痕	21.5	10.5	5.8	2190	4/6	白　ざりざり 並～細　白◎　黒○　隙△　縞×	砂	ー	ー	ー	ー	ー	c
077		煉瓦製建物基礎	中辺　次々	チヂレ目	完形	片長手積み痕	22.4	10.5	5.9	2250	4/6	白　ざりざり 並～細　白△　黒×　隙×　縞×	細	ー	ー	ー	ー	ー	c
078	161-11	煉瓦製建物基礎	中辺　次々	チヂレ目	完形	片長手積み痕	22.8	10.6	6.0	2270	4/6	白　ざりざり 並～細　白△　黒△　隙△　縞×	砂	楕円枠		上面	ー	ー	c
079		煉瓦製建物基礎	西辺　次々	チヂレ目	完形	片長手積み痕	22.7	10.4	6.2	2150	4/6	白　ざりざり 並～細　白△　黒×　隙×　縞×	細	ー	ー	ー	ー	ー	c
080		煉瓦製建物基礎	西辺　次々	チヂレ目	完形		22.0	10.8	6.0	2190	4/6 4/8	白 並～細　白○　黒△　隙×　縞×	砂	ー	ー	ー	ー	ー	c
081		煉瓦製建物基礎	東辺　次	板目	準完形［片小口ハツリ］ 歪みあり	片長手黒変 片長手積み痕	20.0	10.5	5.5	2000	4/6	白　縞 並　白◎　黒△　隙○　縞△s	粗	ー	ー	ー	有	下面	a
082		煉瓦製建物基礎	東辺　次	板目	準完形［片小口ハツリ］ 歪みあり	片長手黒変 片平手積み痕	20.7	10.5	5.5	2210	4/6～5/6 4/6	白 並　白△　黒△　隙△　縞◎s	縞	ー	ー	ー	有	下面	a
083	162-22	煉瓦製建物基礎	東辺　次	板目	準完形［片小口ハツリ］	片長手黒変	21.0	11.0	5.5	2140	4/6～5/6 4/6	白　ややざり 並　白○　黒×　隙△　縞△	粗	ー	ー	ー	ほ下	下面	a
084	161-12	煉瓦製建物基礎	東辺南　次	板目	準完形［片小口ハツリ］	片長手黒変 モルタル付着	20.7	11.2	6.2	2100	5/6 4/6	白　ざりざり 粗～並　白◎　黒○　隙◎　縞×	粗	角枠 「千葉本家」		下面	ー	ー	a
085		煉瓦製建物基礎	東辺南　次	板目	準完形［片小口ハツリ］ 歪みあり	片長手黒変 モルタル付着	20.5	10.8	6.0	2260	4/6 4/8	白　ざりざり 粗　白◎　黒○　隙◎　縞×	粗	角枠 「千葉本家」		下面	ー	ー	a
086		煉瓦製建物基礎	東辺南　次	板目	準完形［片小口ハツリ］ 歪みあり	片長手黒変 モルタル付着	20.3	10.8	6.0	2640	4/6 3/6	白　縞 並　白◎　黒×　隙△　縞×	粗	中円枠「さ」	2.0×1.9	下面	ー	ー	a
087		煉瓦製建物基礎	東張出　不明	チヂレ目	完形		22.5	11.0	6.0	2110	ー 4/6	ー 並～細　白△　黒△　隙△　縞×		□		不明	ー	ー	c
088	161-13	煉瓦製建物基礎	東張出　不明	チヂレ目	完形	両長手積み痕 粘土塊付着	23.0	10.8	6.0	2300	ー 4/6	ー 並～細　白△　黒×　隙×　縞×　灰△	細	□		不明	ー	ー	c
089	162-23	煉瓦製建物基礎	西辺　次	板目	準完形［片小口ハツリ］	片長手黒変	20.5	10.6	5.7	2020	4/6～5/6 3/6	白　ややざり 粗　白◎　黒◎　隙×　縞×	粗	不詳	ー	ー	と下	下面	a

資料番号	挿図番号	出土地点		成形痕	形状	器表の状態	法量（cm）			重さ（g）	胎土			刻印			炭書		綜合的類型
		遺構	位置　段数				長手	小口	厚さ		色調（2.5YR）	特徴	類型	種類	大きさ（cm）	位置	文字	位置	
090	162-24	煉瓦製建物基礎	西辺　次	板目	準完形［片小口ハツリ］	片長手黒変	20.4	10.0	5.5	1990	4/6～5/6 4/6	白　ややざり 並　白◎　黒△　隙△　縞△　灰色々○	粗	ー	ー	ー	ニ下	下面	a
091	162-25	煉瓦製建物基礎	西辺　次	板目	準完形［片小口ハツリ］ 歪みあり	片長手黒変 片平手積み痕	20.3	10.8	5.5	2020	4/6～5/6 4/6	白 並　白○　黒○　隙△　縞×	粗	ー	ー	ー	ロ■下	下面	a
092		煉瓦製建物基礎	中辺　初	板目	1/2［両長手ハツリ］	片小口黒変	22.3	▲8.5	5.8	1530	5/6 4/6	白 並　白△　黒×　隙△　縞◎m	縞	極小円枠「さ」	1.1×1.1	下面	ー	ー	a
093	161-14	煉瓦製建物基礎	中辺　次	板目	準完形［片小口ハツリ］ 歪みあり	片長手黒変 片平手積み痕	18.9	10.8	5.7	2120	4/6	白 並　白◎　黒△　隙△　縞×	粗	円枠「吉」	1.3×1.2	下面	有	下面	a
094		煉瓦製建物基礎	中辺　次	板目	準完形［片小口ハツリ］	片長手黒変 モルタル付着	21.1	10.5	5.8	2460	5/6 3/6	白　縞 並～細　白◎　黒◎　隙×　縞×	粗	ー	ー	ー	ハ下	下面	a
095	162-26	煉瓦製建物基礎	中辺　次	板目	準完形［片小口ハツリ］	片長手黒変 モルタル付着	18.7	10.2	5.8	2040	4/6～5/6 3/6	白 並　白◎　黒◎　隙×　縞×	粗	ー	ー	ー	ヘ下	下面	a
096		煉瓦製建物基礎	南辺　次々以下	チヂレ目	ほぼ完形　角欠	モルタル付着	22.3	10.5	5.5	2720	ー 4/6	ー 並～細　白△　黒△　隙△　縞×	粗	片面なし 片面モルタル		ー	片面なし 片面モルタル	ー	c
097	163-27	煉瓦製建物基礎	南辺　次々以下	チヂレ目	完形	モルタル付着	21.8	10.3	5.4	2680	ー 3/6	ー 並～細　白○　黒×　隙△　縞×	粗	片面なし 片面モルタル		ー	片面なし 片面モルタル	ー	c
098		煉瓦製建物基礎	南辺　次々以下	チヂレ目	完形	モルタル付着	21.8	10.3	5.4	2610	ー 3/6	ー 並～細　白○　黒△　隙△　縞×	粗	片面なし 片面モルタル		ー	片面なし 片面モルタル	ー	c
099		煉瓦製建物基礎	南辺　次々以下	チヂレ目	完形	モルタル付着	21.8	10.3	5.4	2400	ー 3/6	ー 並～細　白○　黒△　隙△　縞×	粗	片面なし 片面モルタル		ー	片面なし 片面モルタル	ー	c
100		煉瓦製建物基礎	東辺南次々以下	チヂレ目	完形	モルタル付着	22.2	10.6	5.4	2760	ー 3/6	ー 並～細　白○　黒△　隙△　縞×	粗	片面なし 片面モルタル		不明	片面なし 片面モルタル	ー	c
101		煉瓦製建物基礎	東辺南次々以下	チヂレ目	完形	モルタル付着	22.0	10.6	5.7	2620	ー 4/6	ー 並～細　白△　黒△　隙×　縞×	粗	片面なし 片面モルタル		ー	片面なし 片面モルタル	ー	c
102		煉瓦製建物基礎	東辺南次々以下	チヂレ目	完形	モルタル付着	22.2	10.6	5.6	2450	ー 3/6	ー 並　白◎　黒○　隙×　縞×	ー	片面なし 片面モルタル		ー	片面なし 片面モルタル	ー	c
103	161-16	8号遺構 煉瓦製枡	北東角　初	チヂレ目	1/2		23.0	▲8.0	6.0	1400	ー 4/6	明るい　粉っぽい 並～細　白△　黒△　隙×　縞×		「ク」カ		不明	ー	ー	類型外
104		8号遺構 煉瓦製枡	ー		ほぼ完形　側欠		21.0	9.0	8.0	3120	4/6 7.5YR　3/6	陶質っぽい　白大きい 粗　白○　黒×　隙△　縞×	ー	ー	ー	ー	ー	ー	類型外
105		8号遺構 煉瓦製枡	ー	チヂレ目	1/2		▲12.3	11.0	6.0	1280	ー 4/6	粉っぽい 並～細　白△　黒△　隙△　縞△		ー	ー	ー	ー	ー	類型外
106		8号遺構 煉瓦製枡	ー	チヂレ目	4/5　片小口欠	片長手積み痕	▲21.3	11.0	6.2	2230	ー 4/6	ー 並～細　白△　黒△　隙×　縞×		ー	ー	ー	ー	ー	類型外
107	161-15	10号遺構 煉瓦製枡	初	板目カ	1/2	モルタル付着	▲15.5	10.5	5.2	1410	ー 6/6	明るい　白微量　砂っぽい 細　白△　黒×　隙△　縞×　色々△	ー	扇形枠		不明	ー	ー	類型外
108	163-28	10号遺構 煉瓦製枡	次以下		完形		21.2	9.2	7.9	3190	4/6 ー	陶質っぽい　大型白多量 ー		ー	ー	ー	ー	ー	類型外
109		15号遺構-a 煉瓦製枡	初	チヂレ目	2/3　角欠	モルタル付着	22.0	11.0	6.0	2010	4/6 3/6	白　ざりざり 並　白○　黒△　隙△　縞×	ー	ー	ー	ー	ー	ー	不明
110	163-29	15号遺構-a 煉瓦製枡	次	チヂレ目	完形		21.3	10.0	6.0	2100	ー 4/6	明るい　粉っぽい 並～細　白○　黒×　隙△　縞×	細	ー	ー	ー	ー	ー	類型外
111		15号遺構-b 煉瓦製枡	次々以下	チヂレ目	完形		21.0	10.3	6.0	2230	5/6 3/6	白　ざりざり 並～細　白◎　黒×　隙×　縞×	粗	「ス」カ	ー	ー	ー	ー	類型外
112	163-30	15号遺構-b 煉瓦製枡	次々以下	チヂレ目	完形		21.5	10.0	6.0	2200	5/6 3/6	白　ざりざり 並～細　白○　黒×　隙×　縞×	粗	ー	ー	ー	ー	ー	類型外
113		15号遺構-b 煉瓦製枡	次々以下	チヂレ目	完形		21.3	10.1	6.2	2280	5/6 4/6	白　ざりざり 並～細　白◎　黒○　隙×　縞×	粗	ー	ー	ー	ー	ー	類型外
114		20号遺構 煉瓦製枡	ー	チヂレ目	3/4　角欠 歪みあり	両長手積み痕 モルタル付着	22.4	10.8	5.7	1950	4/6	白　ざりざり 細　白△　黒×　隙△　縞×	細	ー	ー	ー	ー	ー	類型外
115	163-31	20号遺構 煉瓦製枡	ー	チヂレ目	完形	両長手積み痕	22.5	10.6	6.0	2500	4/6 3/6	4/6より赤っぽい　ガサガサ 並～細　白○　黒×　隙×　縞×	粗	ー	ー	ー	ー	ー	類型外
116		30号遺構 煉瓦製枡	ー	チヂレ目	完形 歪みあり	両長手積み痕	22.8	10.5	6.0	2220	ー 4/6	ー 並～細　白△～○　黒×　隙×　縞×	砂	ー	ー	ー	ー	ー	c カ
117		30号遺構 煉瓦製枡	ー	チヂレ目	完形		22.5	11.1	5.8	2440	明るい 3/4	白　ガサガサ 並　白◎　黒○　隙×　縞×　色々○	ー	ー	ー	ー	ー	ー	c カ
118	163-32	30号遺構 煉瓦製枡	ー	チヂレ目	完形	片長手積み痕	22.6	10.8	6.0	2370	5/6 4/6	粉っぽい 細　白○　黒×　隙×　縞×	細	ー	ー	ー	ー	ー	類型外

資料番号	挿図番号	出土地点		成形痕	形状	器表の状態	法量（cm）			重さ（g）	胎土			刻印			炭書		綜合的類型
		遺構	位置　段数				長手	小口	厚さ		色調（2.5YR）	特徴	類型	種類	大きさ（cm）	位置	文字	位置	
119		30号遺構 煉瓦製枡	ー	チヂレ目	完形	モルタル付着	23.3	11.7	6.0	2400	明るい 4/6	白微量　砂っぽい 細　白△　黒×　隙△　縞×	細	ー	ー	ー	ー	ー	類型外
120	163-33	34号遺構 煉瓦製枡	ー	チヂレ目	ほぼ完形　片小口欠	片長手積み痕 粘土塊付着	▲22.0	11.0	6.0	2230	明るい 4/6	白 細　白△　黒×　隙△　縞△	細	ー	ー	ー	ー	ー	類型外
121		34号遺構 煉瓦製枡	ー	チヂレ目	ほぼ完形　片小口欠	片長手積み痕	▲22.0	11.2	6.0	2210	明るい 4/6	白 細　白△　黒×　隙△　縞×	細	ー	ー	ー	ー	ー	類型外
122		34号遺構 煉瓦製枡	ー	チヂレ目	完形	片長手積み痕	23.0	11.0	6.0	2350	明るい 4/6	白 並～細　白○　黒×　隙△　縞×	細	ー	ー	ー	ー	ー	類型外
123		3煉瓦製枡	ー	チヂレ目	ほぼ完形　角欠		23.0	11.0	5.9	2280	明るい 4/6	白 並～細　白○　黒△　隙△　縞×	細	ー	ー	ー	ー	ー	類型外
124		3煉瓦製枡	ー	チヂレ目	完形		23.0	11.0	6.0	2380	明るい 4/6	白　ざりざり 並～細　白○　黒△　隙×　縞×	細	ー	ー	ー	ー	ー	類型外
125	163-34	3煉瓦製枡	ー	チヂレ目	完形		23.0	11.0	6.0	2330	明るい 4/6	白 細　白△　黒×　隙△　縞×	細	ー	ー	ー	ー	ー	類型外
126	163-35	37号遺構木製枡b 木製枡（底）	底	板目	ほぼ完形　角欠 歪みあり	片長手黒変	22.7	10.9	5.4	2480	4/6	白 並～細　白△　黒×　隙△　縞×	砂	ー	ー	ー	ー	ー	a
127		木製枡（底）	底	チヂレ目	完形		23.0	10.5	5.7	2350	明るい 4/6	ー 並～細　白○　黒○　隙△　縞×	粗	ー	ー	ー	ー	ー	c
128	163-36	37号遺構木製東a 木製枡（底）	底	チヂレ目	完形		22.3	10.5	5.7	2210	明るい 4/6	ー 並～細　白○　黒×　隙△　縞×	粗	ー	ー	ー	ー	ー	c カ
129		4木製枡（底）	底	板目	完形	モルタル付着	22.5	10.5	6.0	2460	明るい 4/6	ー 並　白△　黒△　隙△　縞×		菱十字＋ 「二」 「○」	ー	ー	ー	ー	類型外
130	163-37	4木製枡（底）	底	板目	1/2	片長手黒変 粘土塊付着	▲12.0	10.5	5.6	1110	4/6	白 並　白◎　黒△　隙△　縞△s	粗	ー	ー	ー	ー	ー	a
131		44号遺構 木製枡（底）	底	板目	1/3		▲9.2	▲8.5	5.8	800	5/6 4/6	白　縞 並　白○　黒×　隙○　縞◎m	縞	極小円枠 「さ」	1.1×1.1	不明	ー	ー	類型外
132		44号遺構 木製枡（底）	底	板目	準完形［片長手ハツリ］	片小口黒変	21.4	10.0	5.6	2090	5/6 4/6	白　ガサガサ 並　白◎　黒×　隙△　縞◎m	縞	小円枠「サ」	1.3×1.9	不明	ト	不明	a
133		煉瓦製建物基礎	初	板目	完形	片小口黒変	22.4	10.7	5.6	2520	5/6 4/6	白　ガサガサ 並～細　白△　黒×　隙×　縞×	砂	ー	—	不明	有	不明	a
134		煉瓦製建物基礎	初	板目	準完形［片長手ハツリ］	片小口黒変 モルタル付着	22.8	10.3	5.6	2280	5/6 4/6	白　ガサガサ 並～細　白○　黒△　隙△　縞×	砂	ー	—	不明	有	不明	a
135	163-38	煉瓦製建物基礎	初	板目	完形	片小口黒変	22.1	10.3	5.4	2620	ー 4/6	ー 並～細　白○　黒×　隙△　縞×	砂	ー	—	不明	有	不明	a
136	162-17	煉瓦製建物基礎	初	チヂレ目	完形 歪みあり	両長手積み痕	21.9	10.7	5.9	2360	ー 4/6	ー 並　白○　黒×　隙△　縞×	ー	輪違＋？	—	不明	なし	不明	c
137		煉瓦製建物基礎	初	チヂレ目	3/4　角欠　割れ	モルタル付着	21.0	10.4	5.5	1850	4/6 3/6	白　ガサガサ 並～細　白◎　黒△　隙△　縞×	粗	ー	—	不明	なし	不明	c
138		煉瓦製建物基礎	初	チヂレ目	ほぼ完形　角欠	モルタル付着	22.5	11.0	5.5	2250	ー 3/6	ー 並　白○　黒○　隙×　縞×	ー	「フ」カ	—	不明	なし	不明	c
139		煉瓦製建物基礎	不明	板目	小破片		ー	ー	ー	130.1	4/6～5/6 3/6	白　ざりざり 粗　白○　黒△　隙◎　縞×	粗	円枠「千」	1.7×1.7	不明	—	ー	不明
140		煉瓦製建物基礎	不明	チヂレ目	小破片		ー	ー	ー	61.8	4/6	白　ガサガサ 細　白○　黒○　隙×　縞×	細	不明	—	—	不明	ー	不明
141		煉瓦製建物基礎	不明	ー	小破片		ー	ー	ー	ー	ー 4/6	ー 並～細　白△　黒△　隙△　縞◎s	縞	不明	—	—	不明	ー	不明
142		煉瓦製建物基礎	不明	ー	小破片		ー	ー	ー	ー	ー 4/6	ー 並～細　白△　黒△　隙△　縞△	細	不明	—	—	不明	ー	不明
143		煉瓦製建物基礎	不明	ー	小破片		ー	ー	ー	ー	ー 4/6	ー 並～細　白○　黒○　隙△　縞△m	細	不明	—	—	不明	ー	不明
144		煉瓦製建物基礎	不明	ー	小破片		ー	ー	ー	ー	ー 4/6	ー 並～細　白○　黒○　隙△　縞△m	細	不明	—	—	不明	ー	不明
145		煉瓦製建物基礎	不明	板目ヵ	小破片	端正	ー	ー	ー	43.7	5/6 3/6	白　縞 並　白◎　黒×　隙○　縞◎	縞	不明	—	—	不明	ー	不明

第 48 表　煉瓦刻印の歪みと押印の作業方向

刻印種類	試料№	押印軸方向	歪み方向	刻印サイズ（cm）			刻印位置	成形痕
				縦	横	縦－横		
大円枠「サ」	015	小口－	縦	2.5	2.4	0.1	上面	板目
大円枠「サ」	026	小口＋	なし	2.5	2.5	0.0	上面	板目
大円枠「サ」	030	小口＋	縦	2.6	2.4	0.2	上面	板目
大円枠「サ」	038	小口＋	－	欠	2.5	－	上面	板目
大円枠「サ」	002	長手	縦	2.6	2.3	0.3	上面	板目
大円枠「サ」	006	長手	縦	2.5	2.4	0.1	上面	板目
大円枠「サ」	010	長手	縦	2.7	2.5	0.2	上面	板目
大円枠「サ」	025	長手	縦	2.7	2.5	0.2	上面	板目
大円枠「サ」	032	長手	縦	2.5	2.3	0.2	上面	板目
大円枠「サ」	049	長手	縦	2.6	2.3	0.3	上面	板目
大円枠「サ」	054	長手	なし	2.5	2.5	0.0	上面	板目
大円枠「サ」	058	長手	なし	2.5	2.5	0.0	上面	板目
大円枠「サ」	005	長手＋	縦	2.5	2.4	0.1	上面	板目
大円枠「サ」	009	長手＋	なし	2.6	2.6	0.0	上面	板目
大円枠「サ」	036	長手＋	縦	2.6	2.4	0.2	上面	板目
大円枠「サ」	016	長手－	縦	2.8	2.5	0.3	上面	板目
大円枠「サ」	037	長手－	－	2.6	欠	－	上面	板目
大円枠「サ」	040	長手－	－	欠	2.3	－	上面	板目
大円枠「サ」	041	長手－	縦	2.7	2.5	0.2	上面	板目
大円枠「サ」	043	長手－	なし	2.5	2.5	0.0	上面	板目
大円枠「サ」	003	長手－	縦	2.6	2.5	0.1	上面	板目
大円枠「サ」	004	長手－	縦	2.5	2.6	-0.1	上面	板目
大円枠「サ」	008	長手－	縦	2.6	2.4	0.2	上面	板目
大円枠「サ」	028	長手－	縦	2.5	2.3	0.2	上面	板目
大円枠「サ」	029	長手－	縦	2.5	2.4	0.1	上面	板目
大円枠「サ」	013	長手－	縦	2.8	2.5	0.3	上面	板目
大円枠「サ」	031	長手－	縦	2.5	2.2	0.3	上面	板目
大円枠「サ」	034	長手－	横	2.4	2.6	-0.2	上面	板目
大円枠「サ」	020	長手－	縦	2.7	2.4	0.3	上面	板目
中円枠「さ」	086	長手	縦	2.0	1.9	0.1	下面	板目
中円枠「さ」	027	長手－	なし	2.0	2.0	0.0	上面	板目
小円枠「サ」	021	小口	横	1.4	1.6	-0.2	上面	板目
小円枠「サ」	022	小口	横	1.4	1.5	-0.1	上面	板目
小円枠「サ」	024	小口	横	1.3	1.5	-0.2	上面	板目
小円枠「サ」	035	小口	横	1.4	1.5	-0.1	上面	板目
小円枠「サ」	042	小口	横	1.4	1.5	-0.1	上面	板目
小円枠「サ」	045	小口	横	1.4	1.5	-0.1	上面	板目
小円枠「サ」	011	小口	横	1.4	1.7	-0.3	上面	板目
小円枠「サ」	132	小口	横	1.3	1.9	-0.6	不明	板目
小円枠「サ」	050	小口	－	欠	欠	－	上面	板目
小円枠「サ」	057	小口	なし	1.5	1.5	0.0	上面	板目
小円枠「サ」	059	小口	横	1.5	1.6	-0.1	上面	板目
小円枠「サ」	018	小口－	横	1.4	1.5	-0.1	上面	板目
小円枠「サ」	019	小口－	横	1.2	1.5	-0.3	上面	板目
小円枠「サ」	039	小口－	斜	1.2	1.7	-0.5	上面	板目
小円枠「サ」	044	小口－	横	1.3	1.5	-0.2	上面	板目
小円枠「サ」	056	小口－	横	1.5	1.6	-0.1	上面	板目
小円枠「サ」	007	小口－	横	1.4	1.8	-0.4	上面	板目
小円枠「サ」	012	小口－	なし	1.5	1.5	0.0	上面	板目
小円枠「サ」	014	小口－	横	1.4	1.7	-0.3	上面	板目
小円枠「サ」	001	小口＋	横	1.5	1.6	-0.1	上面	板目
小円枠「サ」	033	小口＋	横	1.4	1.6	-0.2	上面	板目
小円枠「サ」	048	小口＋	横	1.3	1.5	-0.2	上面	板目
小円枠「サ」	046	長手＋	縦	1.7	1.3	0.4	上面	板目
小円枠「サ」	047	長手＋	なし	1.5	1.5	0.0	上面	板目
小円枠「サ」	023	長手－	なし	1.5	1.5	0.0	上面	板目
小円枠「サ」	055	－	－	－	－	－	上面	板目
小円枠「さ」	017	小口＋	なし	1.6	1.6	0.0	上面	板目
極小円枠「さ」	092	小口	横	1.0	1.1	-0.1	下面	板目
極小円枠「さ」	131	小口－	なし	1.1	1.1	0.0	不明	板目
極小円枠「さ」	053	小口－	横	1.1	1.2	-0.1	上面	板目
円枠「吉」	093	長手－	縦	1.3	1.2	0.1	下面	板目
円枠「千」	139	－	なし	1.7	1.7	0.0	不明	板目

12）その他の建材など（第 165 図、第 48 表、図版 57）

タイル 27 点、衛生陶器 16 点、碍子 5 点、便器 1 点、その他 3 点の計 52 点を採取した。うち、タイル 5 点、絶縁体 2 点、便器 1 点、器種不明 1 点の計 9 点を報告する。また、詳細に言及しないが、棒状の植物質繊維の痕跡が見られることから、壁土の破片と推定される未焼成の粘土塊が 18 点、381.5g 出土している。

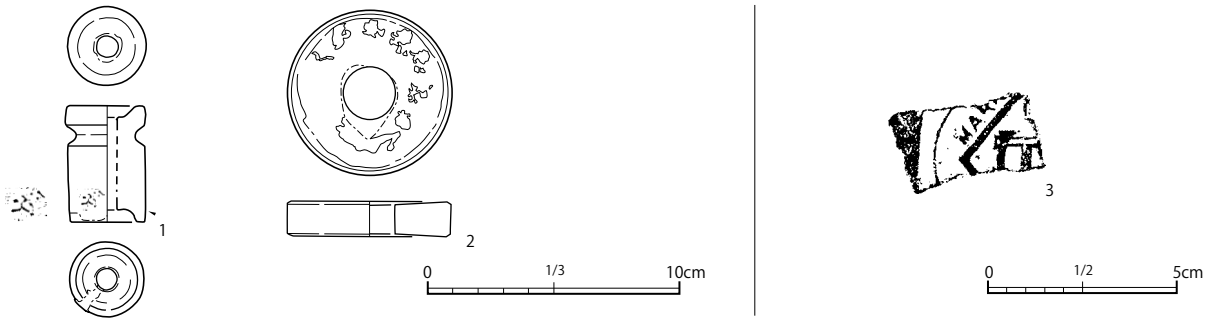
1 は磁製の絶縁体、ノップ碍子である。ノップ碍子は電線を他の建材から離隔するために用いるもので、碍子の中でもスタンダードなものである。裾近くに陽刻があるが、不明瞭で、何が記されているかは判読できない。2 は環状の磁製品で用途不明である。白一色であることや素材の質感などから絶縁体の一種の可能性もある。3 はタイルである。3 は白色タイルの破片で、硬質陶器製である。裏足に断片的に残るシャチホコマークの商標から、岐阜県多治見に本社を置く不二見タイルの製品とわかる。大正期のものであろうか。

以下もタイルであるが、写真図版のみでの報告である。4、5 はスクラッチタイルである。いずれも橙褐色で、粒子の粗い、陶器質の胎土である。縦方向にひっかいたような櫛歯状の文様モチーフ（スクラッチ）が特徴的である。6、7 はセメント原料の焼塊であるクリンカーを材料としたもので、釉薬を塗布して焼成した後に表面をブラッシングして仕上げている。外装用で、透水性がないため、滑り止めの意味もあって、凹凸のある文様モチーフのものが多い。他に、磁製手描コバルト染付の和式大便器の縁辺部極小破片（瀬戸本業焼）が出土しており、注目される。

13）玩具・ミニチュア・人形（第 166 ～ 169 図、第 49 表、図版 57）

ミニチュア、人形などを中心に 92 点を取り上げた。うち、玩具 14 点、ミニチュア 17 点、人形 2 点、カタ 3 点、根付 1 点、用途不明土製品 1 点の計 38 点を報告する。

1、2 は円板状を呈す、俗に「面打」と呼称される泥面子である。1 は円枠に「吉」、2 は三重升のモチーフである。3 は土製、4 は石製の碁石である。4 は粘板岩製と考えられ、片面が層状にはがれるように欠損している。また、縁辺にも抉り状の破損がみられる。5 はガラス製のビー玉で、薄青緑色透明



第 165 図　その他の建材など

第 49 表　その他の建材など観察表

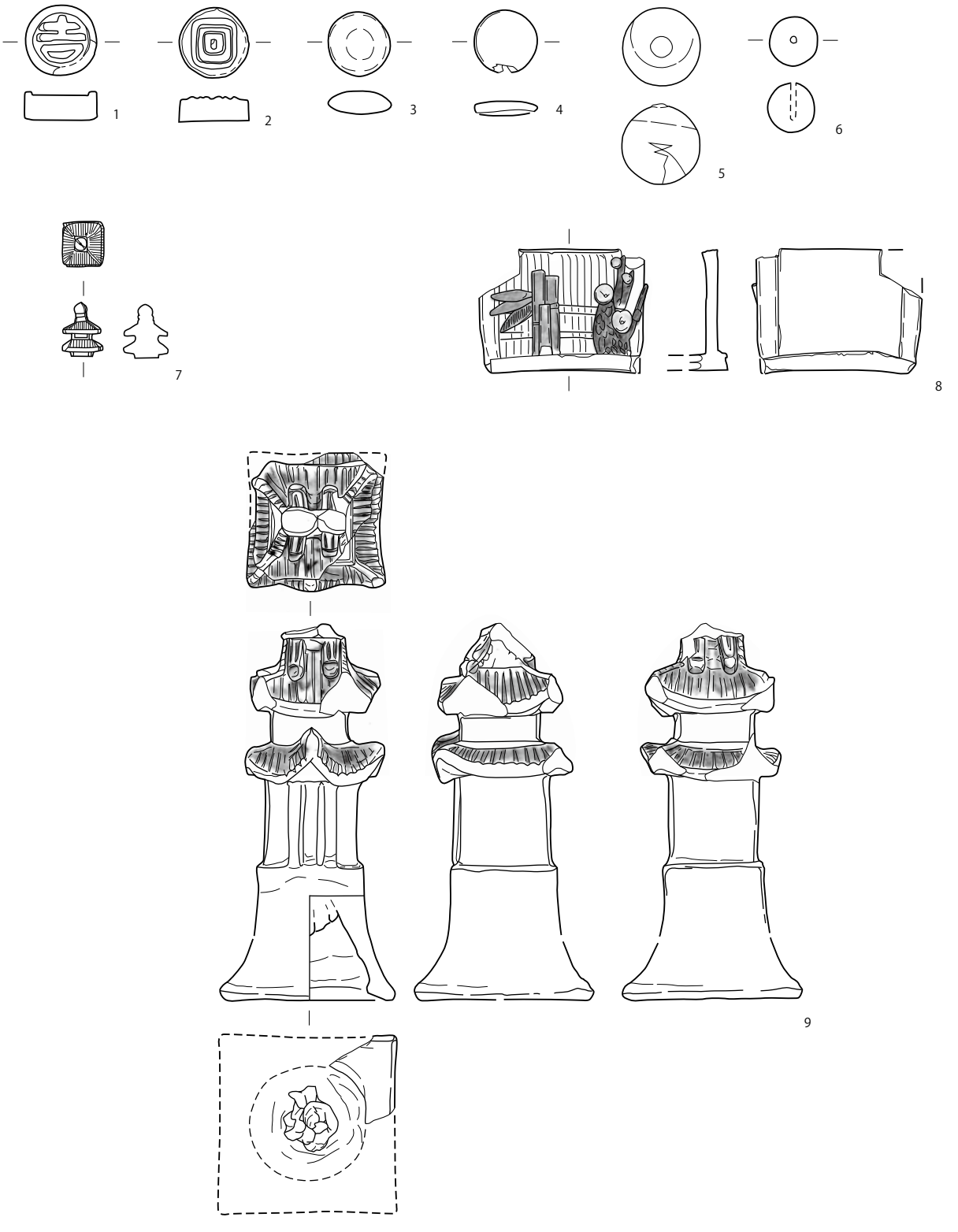
挿図番号	写真図版	出土地点	注記	素材	器種	遺存状態	法量（cm） a	b	c	重さ（g）	備　考
165-1	57-1	第1層	Ⅱ区表土	磁器	絶縁体（碍子）	完形	3.1	4.5	0.8	67.6	ノップ碍子 陽刻あり
165-2	57-2	池遺構　下層	池北	磁器	不明	完形	6.5	1.2	2.1	89.2	
165-3	57-3	第1層	Ⅲ区旧ｺｳｼｬ	陶器（硬質陶器）	タイル	小破片	—	—	—	11.6	不二見タイル
—	57-6	第2-2層	ﾓﾘ土1	クリンカー	タイル	1/2	18.1	▲11.2	2.6	724.4	
—	57-7	第2-2層	ﾓﾘ土1	クリンカー	タイル	1/3	▲15.2	▲10.0	2.6	468.5	
—	57-4	第2-2層	ﾓﾘ土1	陶器	タイル	3/4	▲9.7	6.1	1.9	180.8	スクラッチタイル
—	57-5	46号遺構	46ｲｺｳ	陶器	タイル	2/3	▲6.2	5.7	2.1	95.3	スクラッチタイル
—	—	第1層		磁器	和式大便器	縁辺部小破片	—	—	—	91.8	手描コバルト染付草花文

である。1 ヵ所に径 0.7㎝の素材切り離し痕がみられ、これを中心に渦を巻くように表面が弱く波打っていることから、ガラス棒の端部を溶かして回転させることによって作られたと考えられる。また、硬いものに当たったことによると思われるドット状の破損が多く観察される。6 は土製で、用途不明である。明褐色で粒子は極めて細かく、よく焼き締まっている。径 1.6㎝の球状で、中央に径 0.2㎝、深さ 1.3㎝の貫通しない孔がある。7、9 は土製の楼閣のミニチュアである。7 は、屋根部分のみで、下面の角に径 0.1㎝の孔がある。合わせ型作りで、屋根を斜めに横断するように貼り合わせ痕が観察される。胎土は、乳橙褐色で、緻密、焼成もよい。9 は台座のある楼閣である。台座から建物部分にかけてを外型で作り、手捏ねの屋根部分を後から貼り付けて造形している。また、台座部分の内側は工具を使って円錐状に刳り取り、中空にしている。屋根には瓦葺きの表現がみられ、黒色塗料で着色されている。胎土はやや暗い乳橙褐色で、粒子はやや粗い。8 は竹垣を模したミニチュアである。透明釉施釉の土製で、褐色、緑色、白色の彩色が施されている。竹垣手前の植栽は梅と竹だが、破損している手前側には、さらに松が配されていた可能性もあろう。各部位は型作りで、それらを組み合わせて全体が作られている。胎土は明橙褐色で粒子は細かい。10 は土製の碗のミニチュアである。外型作りと考えられるが、高台内は工具を使って刳り出した可能性がある。白化粧土と黒い斑状の彩色の上から透明釉が施釉されている。胎土は橙褐色で、粒子は細かい。11 は土製の鉢のミニチュアである。底部外面に左回転の回転糸切痕がみられることから、ロクロ成形であると知れる。胎土は明橙褐色で、粒子は細かい。12 は陶製で瓢箪型の袋物のミニチュアと考えられる。合わせ型作りで、貼り合わせ箇所にヒビがみられる。灰釉鉄絵笹文。13 も陶製で、碗のミニチュアである。ロクロ成形で、ごく薄い灰釉、口縁部から白化粧土を掛け流している。14 は土製の徳利のミニチュアである。ロクロ成形。胎土は橙褐色で、やや砂っぽく、透明釉が施釉される。15 は土製で、火鉢のミニチュアの可能性が高い。外型成形で内面には指頭圧痕が顕著である。底にあたる部分はほとんど失われているが、胴部や口縁部の形状から火鉢であろうと思われる。胎土は橙褐色で、粒子は細かい。16 は陶製で、両手鍋のミニチュアである。ロクロ成形で、鉄釉が施される。17 は土製の両手鍋のミニチュア

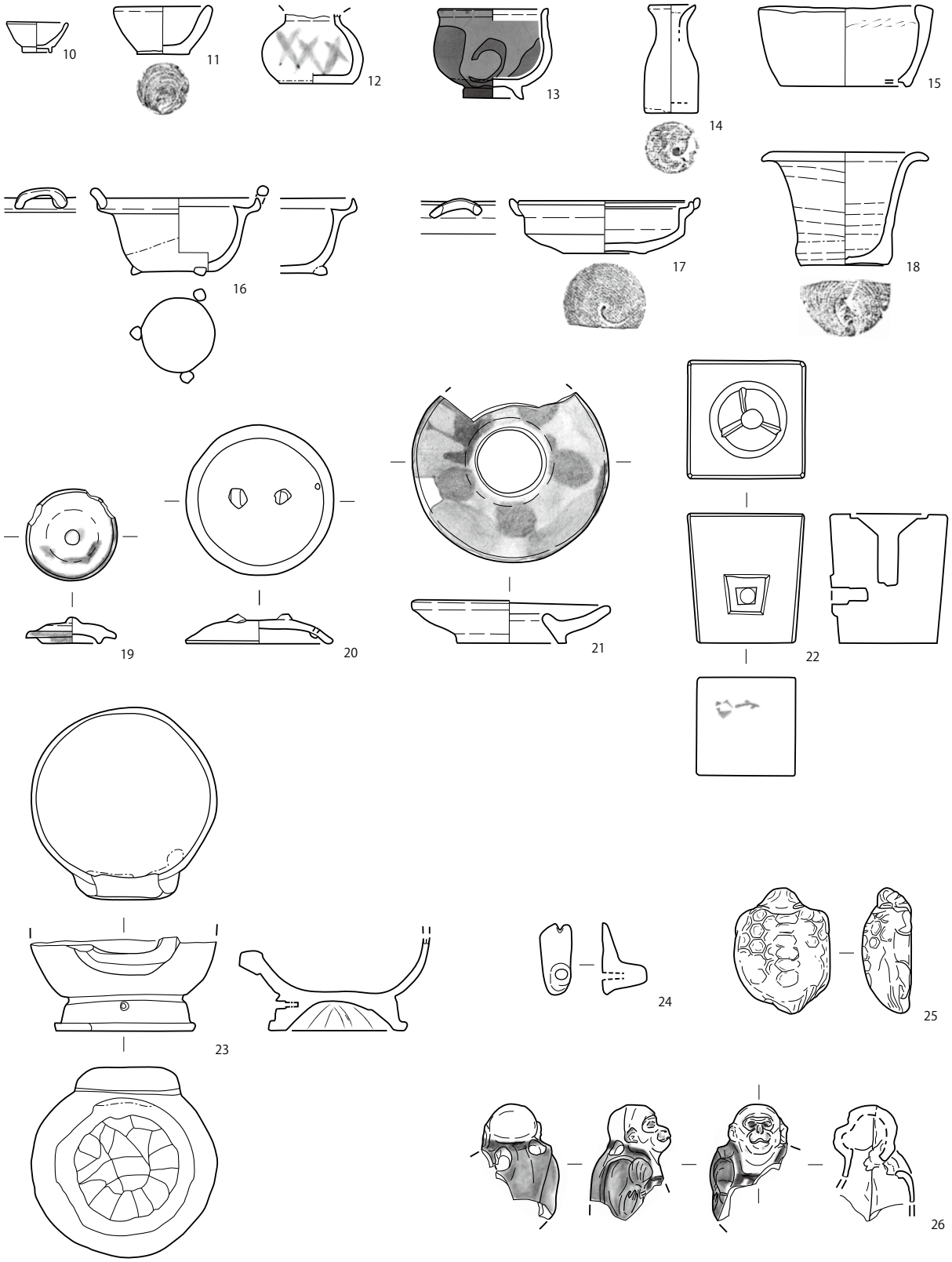
である。器高が低い、いわゆる柳川鍋の形状である。ロクロ成形で、底部外面に、支点が中央付近にある回転糸切痕がみられる。回転方向は左のようである。胎土は灰白色で、いわゆる白色粘土である。粒子はやや粗く、粉っぽい。薄く透明釉が施釉されている。18 は陶器の植木鉢のミニチュアである。ロクロ成形で、底部外面に右回転の回転糸切痕がみられる。穿孔はないようである。鉄釉が施釉されている。19 は土製の蓋のミニチュアである。外型成形。全面に白化粧土が施され、緑色および黒色の斑状の彩色がみられる。胎土は、明橙褐色で粒子は細かい。形状と彩色から土瓶の蓋と考えられる。20 は陶製の蓋のミニチュアである。摘みは取手状で、空気抜きの孔が表現されている。鍋の蓋であろう。21 は土製の天目台のミニチュアである。接地部分に回転糸切痕の一部が遺っており、ロクロ成形であることがわかる。皿状に成形後、底部分を刳り抜いて造形したと考えられる。全面に透明釉を施釉し、白色・黒色・緑色の釉を斑状に配している。胎土は明橙褐色で粒子は細かい。

22 は石製七輪のミニチュアである。石材は細粒緑色凝灰岩であろうか。底部外面に墨書がみられるが、判読できない。23 は土製の置竈のミニチュアである。合わせ型成形で、上半が欠損、灰出し口の下側のみが遺っている。全体に丸みを帯び、高めの高台が付く形状は、江戸在地のものとは異なる。胎土は灰白色の、いわゆる白色粘土で、やや粉っぽい。24 は土製でブラ人形の足先である。外型成形で、足の裏には指頭圧痕と径２㎜ほどの孔がみられる。胎土は明橙褐色で、粒子は細かい。25 は土製で亀の人形である。透明釉が施されているが、かなり摩耗している。胎土は乳橙褐色で、かなり砂っぽい。

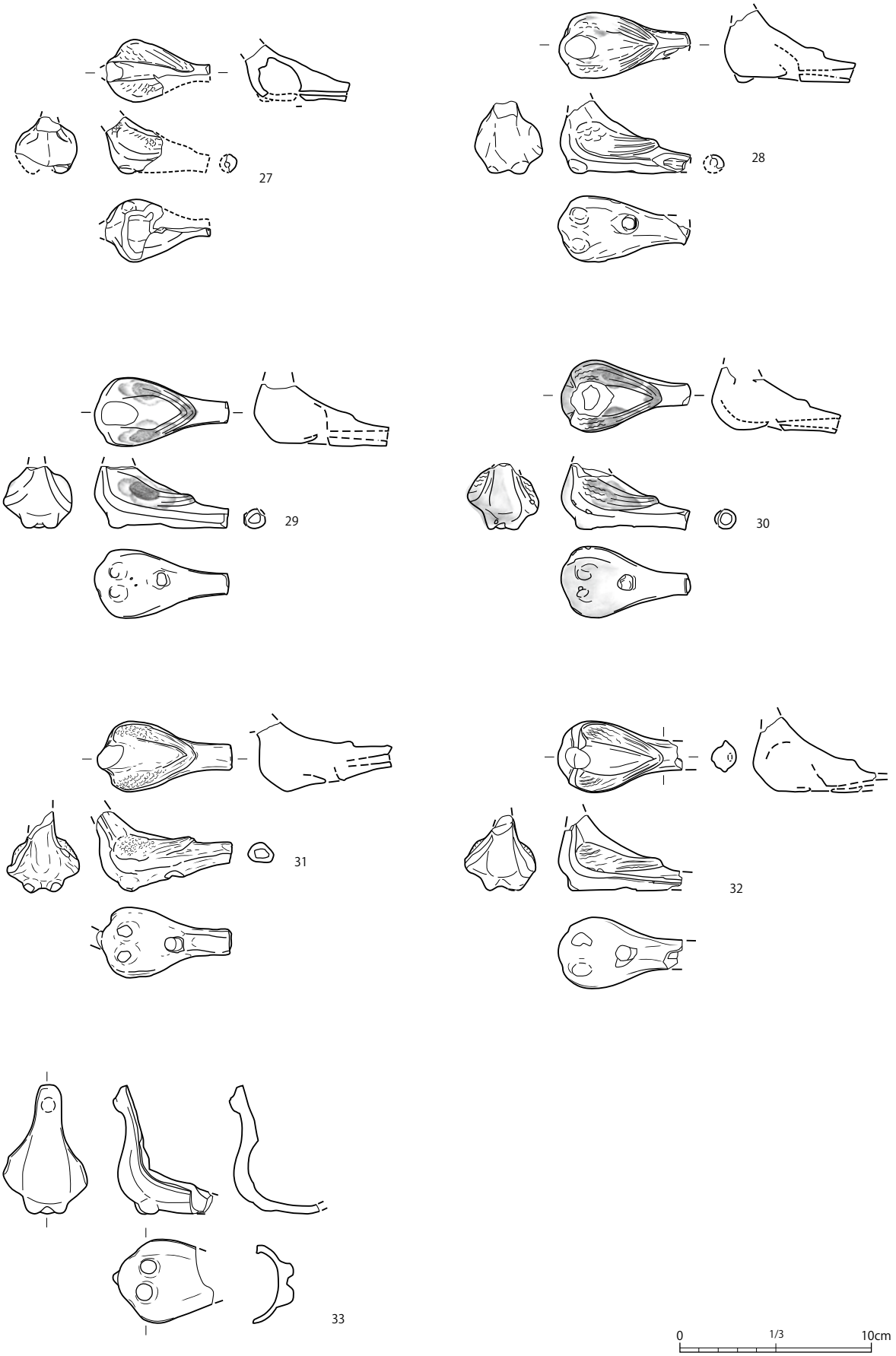
26 は陶製で、サルを模している。合わせ型成形で、背に２ヵ所並んで設けられた孔には、紐などを通したものと考えられる。赤・緑・褐色などで猿の目鼻立ちや着衣が丁寧に上絵付されていることや、背中の孔の存在などから根付と考えられる。27 ～ 33 は土製の鳩笛である。合わせ型成形で、通気孔は工具を使って円形に刳り取られている。吹き口は内面が比較的平滑で、粘土が押しつぶされた形跡もみられないことから、棒状のものを咬ませた上で、割り型を合わせたと考えられる。29、30 は透明釉を施釉し、羽に白色と緑色の彩色がされている。サイズや細部のディテールからみると、28 と 32 は同じ型から成形された可能性があるが、いずれも表面が摩耗しているため確実ではない。胎土は橙褐色で粒子は細かい。34 ～ 36 は土製のカタである。34 は鳩笛、35 は福助、36 は飾り馬のモチーフである。いずれも合わせ型の片方で、35、36 の側面には、もう一方の型と合わせるための合印が複数みられる。また、背面にも何らかの印と思われる刻みや文字が記されている。35 は破損のため全体がわからないが、36 は先端が不揃いな工具で「福」と記されている。これらが示す意味は不明であるが、民具の聞き取り調査などからは、所有者を示す場合があることが知られている。いずれも胎土は橙褐色で粒子は細かい。以下は、写真図版のみでの報告である。37、38 ともに、成形痕が残っておらず、表面が極めて滑らかに仕上げられている点などから、戦後のものと思われるビー玉である。37 は薄青緑色透明、38 は乳白色である。（両角まり）



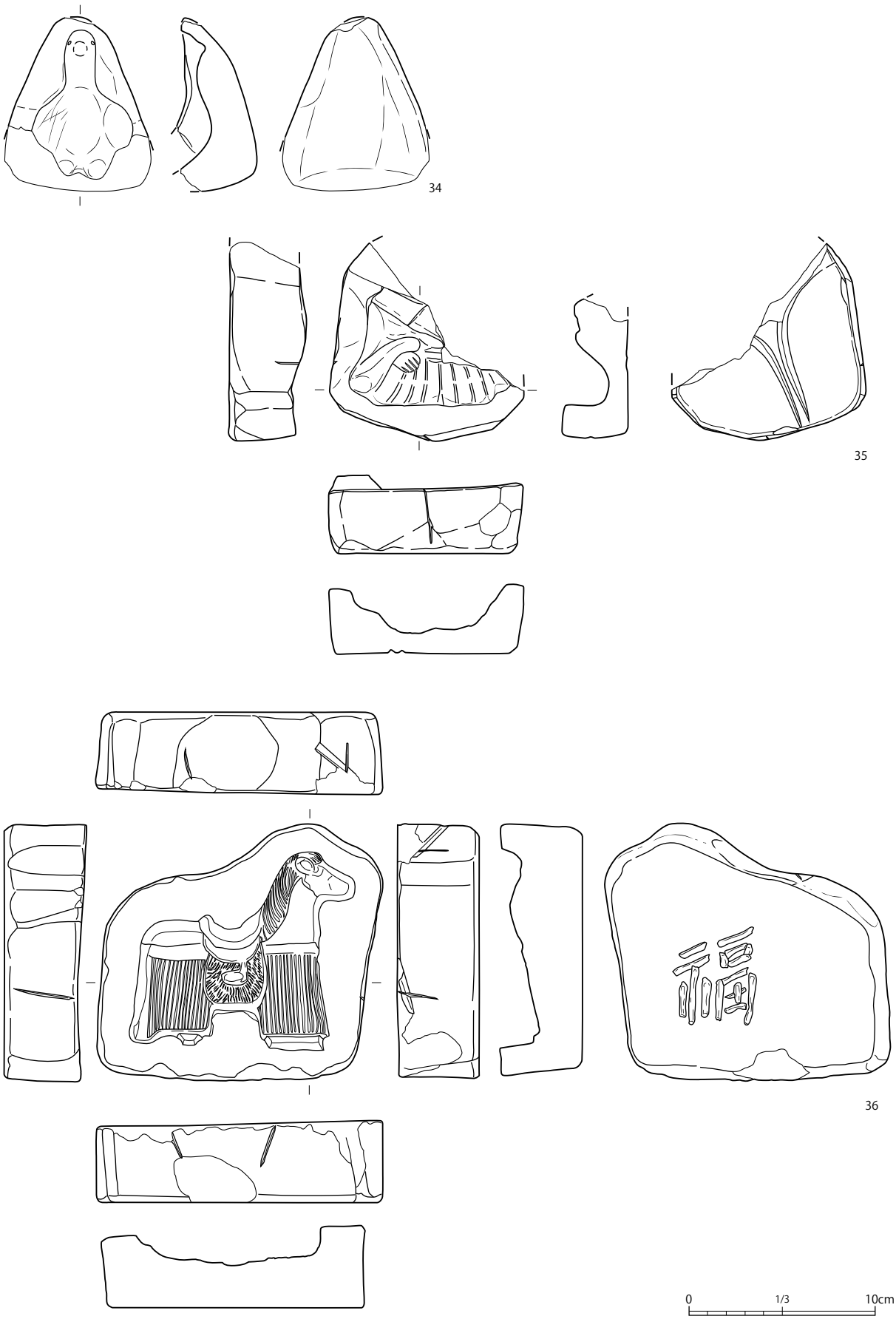
第 166 図　玩具・ミニチュア・人形（1）



第 167 図　玩具・ミニチュア・人形（2）



第 168 図　玩具・ミニチュア・人形（3）



第 169 図　玩具・ミニチュア・人形（4）

第 50 表　玩具・ミニチュア・人形観察表

挿図番号	写真図版	出土地点	注記	素材	器種	遺存状態	法量（cm） a	b	c	d	重さ（g）	備考
166-1	57-1	池遺構　上層	47ｲｺｳ	土器	玩具（泥めんこ　○に吉）	完形	2.4	1.9	—	—	7.1	
166-2	57-2	17号遺構	17ｲｺｳ	土器	玩具（泥めんこ　三重升）	完形	2.4	0.9	—	—	5.9	
166-3	57-3	池遺構　上層	47ｲｺｳ下	土器	玩具（碁石）	完形	2.1	0.9	—	—	3.2	
166-4	57-4	第4層	ﾓﾘ土3	石	碁石	1/2	2.1	△0.5	—	—	2.4	粘板岩製ヵ
166-5	57-5	59号遺構-5	59－5ｲｺｳ	ガラス	ビー玉	完形	2.6	—	—	—	24.8	薄青緑色透明
166-6	57-6	第1層	Ⅰ区旧ｺｳｼｬ	土器	不明	完形	1.6	—	—	—	4.1	
166-7	57-7	池遺構　上層\	61ｲｺｳ	土器	ミニチュア（楼閣屋根）	完形	1.4	1.5	1.8	—	2.4	合わせ型作り 中実
166-8	57-8	17号遺構\	17ｲｺｳ	土器	ミニチュア（竹垣）	ほぼ完形	4.2	5.5	1.3	—	23.2	型作り部品を組み合わせて成形 白、緑、褐色の彩色　透明釉
166-9	57-9	第4層\	ﾓﾘ土3	土器	ミニチュア（楼閣）	ほぼ完形	5.9	6	12.6	—	174.3	外型・手捏ね併用 楼閣部分は中実、台座部分は中空 屋根部分に黒色の彩色
167-10	57-10	池遺構　上層\	ﾓﾘ土4南1	土器	ミニチュア（碗）	完形	2.1	1	1	—	1.5	型作りヵ 白化粧土、黒色の彩色　透明釉
167-11	57-11	32号遺構-6	32－6ｲｺｳ	土器	ミニチュア（鉢）	完形	3.4	1.8	1.6	—	8.5	ロクロ成形　底部外面に回転糸切痕（左）
167-12	57-12	第4層	ﾓﾘ土3	陶器	ミニチュア（袋物）	胴部下半～底部	1.8	欠	▲2.3	3.4	13.3	合わせ型作り 灰釉鉄絵笹文
167-13	57-13	68号遺構	68ｲｺｳ	陶器	ミニチュア（碗）	完形	3.8	2	3	4	18.8	ロクロ成形 灰釉白化粧土掛け流し
167-14	57-14	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北3	土器	ミニチュア（徳利）	ほぼ完形	1.6	1.8	3.7	—	8.3	ロクロ成形 透明釉
167-15	57-15	池遺構　上層	61ｲｺｳ	土器	ミニチュア（火鉢カ）	ほぼ完形	5.9	4.4	2.7	—	19.1	型作り
167-16	57-16	68号遺構	68ｲｺｳ	陶器	ミニチュア（両手鍋）	ほぼ完形	5.5	2.4	2.5	—	22.2	ロクロ成形 鉄釉
167-17	57-17	35号遺構	35ｲｺｳ	土器（白色粘土）	ミニチュア（両手鍋）	ほぼ完形	5.9	2.8	1.8	—	10.5	ロクロ成形 透明釉
167-18	57-18	第4層	ﾓﾘ土3	陶器	ミニチュア（植木鉢）	口縁～底部1/2	5.6	3.2	3.8	—	17.1	ロクロ成形　底部外面に回転糸切痕（右） 鉄釉
167-19	57-19	93号遺構	93ｲｺｳ	土器	ミニチュア（土瓶蓋）	完形	3.1	0.9	—	—	4.7	型作り 白化粧土　黒、緑色の彩色　透明釉
167-20	57-20	第1層	Ⅱ区表土	陶器	ミニチュア（鍋蓋）	ほぼ完形	5	1	—	—	10.9	ロクロ成形
167-21	57-21	池遺構　上層	ﾓﾘ土4南1	土器	ミニチュア（天目台）	ほぼ完形	6.7	3.7	1.3	2.2	22.2	ロクロ成形 白、黒、緑色の釉　透明釉
167-22	57-22	第1層	Ⅱ区表土	石	ミニチュア（七輪）	完形	4	3.3	4.4	—	105.5	底部外面に墨書あり 細粒緑色凝灰岩ヵ
167-23	57-23	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北1	土器（白色粘土）	ミニチュア（置竈）	胴部下半～底部	6.3	4.7	▲3.1	—	43.6	合わせ型作り
167-24	57-24	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北4	土器	人形（ブラ人形の足）	完形	1.1	1.5	2.4	—	1.8	中実　型作り
167-25	57-25	池遺構　下層	池西キシ2	土器	人形（亀）	完形	3.2	4.2	1.7	—	18.6	中実　型作り 透明釉
167-26	57-26	93号遺構　上層	93ｲｺｳ北西上	陶器	根付（猿）	頭～肩部	▲2.6	▲3.8	▲2.5	—	11.7	中空　合わせ型作り 赤、緑、褐色の上絵付
168-27	57-27	2号遺構	2ｲｺｳ	土器	玩具（鳩笛）	胸部以下	3.2	▲2.9	▲5.4	—	16.6	中空　合わせ型作り
168-28	57-28	17号遺構	17ｲｺｳ	土器	玩具（鳩笛）	胸部以下	3.5	▲3.8	6.9	—	29.6	中空　合わせ型作り
168-29	57-29	第1層	Ⅰ区旧ｺｳｼｬ	土器	玩具（鳩笛）	胸部以下	3.8	▲3.2	7	—	25.8	中空　合わせ型作り 白、緑色の彩色　透明釉
168-30	57-30	第1層	Ⅰ区旧ｺｳｼｬ	土器	玩具（鳩笛）	胸部以下	3.7	▲3.4	6.7	—	28.4	中空　合わせ型作り 白、緑色の彩色　透明釉
168-31	57-31	池遺構　上層	ﾓﾘ土4南1	土器	玩具（鳩笛）	胸部以下	3.7	▲4.2	7	—	28.9	中空　合わせ型作り
168-32	57-32	第1層	Ⅱ区	土器	玩具（鳩笛）	胸部以下	3.8	▲3.9	▲6.4	—	30.2	中空　合わせ型作り
168-33	57-33	第1層	Ⅰ区表土	土器	玩具（鳩笛）	頭～胸部	4.4	6.7	▲5.2	—	22.1	中空　合わせ型作り
169-34	57-34	第1層	Ⅰ区	土器	カタ（鳩笛）	頭～胸部	7.8	▲4.1	9.4	—	184.5	
169-35	57-35	17号遺構	17ｲｺｳ	土器	カタ（福助）	膝部以下	▲10.6	▲10.4	3.7	—	254.1	側面に合印　背面に刻み
169-36	57-36	第1層	Ⅰ区旧ｺｳｼｬ	土器	カタ（飾り馬）	完形	13.8	14.2	4.1	—	930.9	側面に合印　背面に「福」
—	57-37	7号遺構	7ｲｺｳ	ガラス	ビー玉	完形	1.6	—	—	—	6.5	薄青緑色透明
—	57-38	第1層		ガラス ビー玉	ビー玉	完形	2.3	—	—	—	17.8	乳白色

14）動物遺体（第 170・171 図、第 51 ～ 60 表、図版 58 ～ 62）

動物骨、魚骨、貝などを検出した。採取されたものすべてについて同定を行い、動物骨については 1 点ごとに番号を付与した一覧表（第 51 表）、貝類については種別点数集計表（第 53 表）の形で以下に報告する。

第 51 表　動物遺体一覧表

資料番号	写真図版	出土地点	注記	大分類	小分類	部位	左右	数量　遺存状態	備　考
1	59-1	第1層	第1層	魚類	マダイ	前頭骨		1	推定体長50cm
2	—	第1層	Ⅱ区	鳥類	キジ科	脛足根骨	右	1　骨体部～遠位端	キジ（EP-143）とほぼ同大
3	59-19	第1層	Ⅲ区旧校舎	魚類	マグロ属	尾椎		1	
4		第2-1・3層・第3層	ﾓﾘ土2	鳥類	カモ亜科	胸骨		1　竜骨突起と烏口骨との関節部	クロガモ（KP117-01）とほぼ同大 形態もクロガモ（KP117-01）と類似。マガモ属とは異なる
5	61-2	第4層	ﾓﾘ土3	鳥類	キジ科	大腿骨	左	1　完存	ヤマドリ（EP-144）より小さい 大転子含気窩なし、キジ以外
6		第4層	ﾓﾘ土3	鳥類	キジ科	胸骨		1　烏口骨との関節部と竜骨突起	キジ（EP-143）より少し大きい
7	59-2	第4層	ﾓﾘ土3	魚類	マダイ	主上顎骨	右	1	推定体長50cm
8	62-7	第4層	ﾓﾘ土3	哺乳類	ウマ	上腕骨	右	1　三角筋粗面部分	
9	62-6	第4層	ﾓﾘ土3	哺乳類	ネコ	大腿骨	右	1　完存	GL:110.04㎜
10	—	第4層	ﾓﾘ土3	鳥類	ニワトリ	脛足根骨	右	1　完存	キジ（EP-143）よりかなり大きい 後腓骨頭靭帯付着部は線状　遠位端不完全、若鳥
11	62-5	池遺構　上層	ﾓﾘ土4西	哺乳類	ネコ	脛骨	左	1　遠位端部欠損	近位端部未癒合、
12	—	池遺構　上層	ﾓﾘ土4西	鳥類	カモ亜科	上腕骨	左	1　骨体部	ホシハジロ（EP-27）とほぼ同大
13	—	池遺構　上層	ﾓﾘ土4西	鳥類	カモ亜科	尺骨	右	1　完存	ホシハジロ（EP-27）とほぼ同大
14	—	池遺構　上層	ﾓﾘ土4西2	鳥類	キジ科	上腕骨	右	1　近位端	キジ（EP-143）とほぼ同大
15	59-9	池遺構　上層	ﾓﾘ土4南1	魚類	メカジキ	腹椎		1	
16	62-4	池遺構　上層	ﾓﾘ土4南1	哺乳類	イルカ類	腰椎		1	
17	—	池遺構　上層	ﾓﾘ土4南1	鳥類	ガン族	手根中手骨	左	1　完存	カリガネ（KP80-2）とマガン（EP-25）の中間 近位端は切断されている
18	—	池遺構　上層	ﾓﾘ土4南6	哺乳類	ネコ	上腕骨	左	1　両端部欠損	成獣
19	—	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北1	鳥類	ガン族	上腕骨	右	1　骨体部破片	カリガネ（KP80-2）とほぼ同大
20	62-3	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北1	哺乳類	ネコ	下顎骨	左	1　完存	（I●●×CP34M）※●歯槽閉鎖。
21	59-23	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北1	魚類	コチ科	腹椎		1	
22	59-22	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北1	魚類	フサカサゴ科	前鰓蓋骨	右	1	
23	—	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北1	鳥類	カモ亜科	下顎骨	左	1　骨体部破片	オナガガモ（EP-4）とほぼ同大
24	59-27	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北1	魚類	未同定	不明		1	
25	62-1	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北1	爬虫類	スッポン	下腹骨板	右	1　中央側	
26	59-24	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北1	魚類	ハタ科	方骨	右	1	
27	—	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北1	鳥類	カモ亜科	肩甲骨	右	1　完存	オナガガモ（EP-4）とほぼ同大
28	62-2	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北1	哺乳類	ウサギ類	脛骨	右	1　近位から中位にかけて	
29	—	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北1	鳥類	カモ亜科	烏口骨	左	1　完存	オナガガモ（EP-4）とほぼ同大
30	60-2	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北2	鳥類	キジ科	上腕骨	左	1　完存	キジ（EP-143）よりかなり大きい 背側顆背縁は一部切断されている
31	60-5	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北2	鳥類	カモ亜科	烏口骨	右	1　完存	ケワタガモ（KP116-1）より少し小さい。カルガモ（EP-84）よりかなり大きい
32	—	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北2	鳥類	ニワトリ	足根中足骨	左	1　骨体部～遠位端	キジ（EP-143）より大きい 内側足底稜なし、距突起なし
33	61-6	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北2	鳥類	カラス科	足根中足骨	左	1　完存	ハシブトガラス（EP-13）とほぼ同大
34	—	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北2	鳥類	ガン族	脛足根骨	右	1　骨体部破片	マガン（EP-25）とほぼ同大
35	—	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北2	鳥類	キジ科	足根中足骨	左	1　完存	キジ（EP-143）とほぼ同大。内側足底稜の有無不明、距突起基部のみあり　遠位端不完全、若鳥
36	—	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北2	鳥類	キジ科	足根中足骨	右	1　完存	キジ（EP-143）より少し小さい　内側足底稜の有無不明、距突起なし　骨端不完全、若鳥
37	61-7	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北2	鳥類	キジ科	足根中足骨	右	1　完存	ヤマドリ（EP-144）より少し大きい 内側足底稜あり、距突起なし
38	—	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北2	鳥類	カモ亜科	尺骨	右	1　近位端～骨体部	オナガガモ（EP-4）とほぼ同大
39	—	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北2	鳥類	カモ亜科	上腕骨	右	1　骨体部～遠位端	カルガモ（EP-84）よりかなり大きい 近位端は切断されている
40	59-6	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北2	魚類	クロダイ属	歯骨	左	1	推定体長30cm
41	59-11	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北2	魚類	マグロ属	尾椎		1	
42	59-4	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北3	魚類	マダイ	尾椎		1	推定体長40cm
43	—	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北3	哺乳類	ネコ	第3足根骨	右	1　完存	
44	61-8	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北3	鳥類	ニワトリ	足根中足骨	右	1　完存	ヤマドリ（EP-144）より小さい 内側足底稜なし、距突起なし
45	60-4	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北3	鳥類	ビロードキンクロ属	上腕骨	右	1　完存	カルガモ（EP-84）とほぼ同大
46	59-28	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北4	魚類	未同定	擬鎖骨？		1	
47	—	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北4	鳥類	カラス科	尺骨	右	0　骨体部破片	ハシブトガラス（EP-13）とほぼ同大
48	61-4	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北4	鳥類	フクロウ科	脛足根骨	右	1　完存	フクロウ（EP-36）より大きい
49	—	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北4	鳥類	カモ亜科	寛骨		1　連合仙椎	カルガモ（EP-84）より少し大きい
50	—	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北4	鳥類	マガモ属	上腕骨	左	1　完存	オナガガモ（EP-4）より少し小さい
51	—	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北4	鳥類	種不明鳥類	肋骨		1	
52	—	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北4	鳥類	カモ亜科	肩甲骨	右	1　完存	カルガモ（EP-84）とほぼ同大だが太い 55 と接合
53	—	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北4	鳥類	種不明鳥類	肋骨		1	
54	—	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北4	鳥類	種不明鳥類	椎骨		1	
55	—	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北4	鳥類	カモ亜科	肩甲骨	右	0	カルガモ（EP-84）とほぼ同大だが太い 52 と接合
56	60-6	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北4	鳥類	カモ亜科	橈骨	右	1　完存	ヒドリガモ（EP-6）とほぼ同大
57	61-1	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北4	鳥類	カモ亜科	大腿骨	右	1　完存	カルガモ（EP-84）とほぼ同大だが太い 小動物の咬痕あり

資料番号	写真図版	出土地点	注記	大分類	小分類	部位	左右	数量　遺存状態	備　考
58	60-9	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北4	鳥類	カモ亜科	手根中手骨	左	1　完存	ヒドリガモ（EP-6）より少し大きい
59	60-8	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北4	鳥類	カラス科	尺骨	右	1　骨体部～遠位端	ハシブトガラス（EP-13）とほぼ同大
60	－	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北4	鳥類	カモ亜科	尺骨	左	1　完存	ホシハジロ（EP-83）とほぼ同大で太い
61	59-18	6号遺構	6ｲｺｳ	魚類	マグロ属	尾椎		1	
62	59-16	6号遺構	6ｲｺｳ	魚類	マグロ属	尾椎		1	
63	61-3	6号遺構	6ｲｺｳ	鳥類	キジ科	大腿骨	左	1　骨体部	シャモロック（HoUMVC31280）より大きい
64	60-10	70号遺構	70ｲｺｳ	鳥類	ガン族	手根中手骨	右	1　完存	マガン（EP-25）とほぼ同大
65	－	75号遺構	75ｲｺｳ	鳥類	カモ亜科	上腕骨	左	1　骨体部破片	カルガモ（EP-84）とほぼ同大
66	60-1	80号遺構	80ｲｺｳ	鳥類	ツル科	上腕骨	左	1　完存	ナベヅル（EP-99）とほぼ同大 腹側顆は切断されている
67	59-5	85号遺構	85ｲｺｳ	魚類	マダイ	尾椎		1	推定体長50cm　切断痕あり
68	59-26	91号遺構	91ｲｺｳ	魚類	カレイ科？	尾椎		1	
69	62-9	池遺構　上層	47ｲｺｳ下	哺乳類	ウシ	頸骨		1　右側のみ残存	右よりで矢上方向に切断。第4ヵ
70	59-13	池遺構　上層	47ｲｺｳ下	魚類	マグロ属	尾椎		1	
71	59-7	池遺構　上層	47ｲｺｳ下	魚類	マカジキ科	腹椎		1	推定体長200cm以上
72	59-8	池遺構　上層	47ｲｺｳ下	魚類	マカジキ科	腹椎		1	推定体長200cm以上
73	－	池遺構　上層	61ｲｺｳ	鳥類	ガン族	上腕骨	右	1　骨体部～遠位端	マガン（EP-25）とコハクチョウ（EP-200）の中間。コハクチョウ（EP-200）より小さい
74	－	池遺構　上層	61ｲｺｳ	鳥類	ニワトリ	脛足根骨	左	1　近位端～骨体部	キジ（EP-143）より少し大きい 後腓骨頭靭帯の付着は線状
75	59-3	池遺構　上層	61ｲｺｳ	魚類	マダイ	上後頭骨		1	推定体長40cm
76	59-12	池遺構　上層	61ｲｺｳ	魚類	マグロ属	尾椎		1	
77	－	池遺構　上層	61ｲｺｳ	鳥類	カモ亜科	大腿骨	左	1　完存	オナガガモ（EP-4）とカルガモ（EP-84）の中間
78	59-15	池遺構　上層	61ｲｺｳ	魚類	マグロ属	尾椎		1	
79	60-3	93号遺構	93ｲｺｳ	鳥類	マガモ属	上腕骨	左	1　完存	ヒドリガモ（EP-6）より少し大きい
80	59-14	93号遺構	93ｲｺｳ	魚類	マグロ属	尾椎		1	
81	－	93号遺構	93ｲｺｳ	鳥類	カラス科	足根中足骨	右	1　骨体部	ハシブトガラス（EP-13）とほぼ同大
82	－	93号遺構	93ｲｺｳ	鳥類	マガモ属	上腕骨	右	1　近位端～骨体部	オナガガモ（EP-4）とほぼ同大
83	－	93号遺構	93ｲｺｳ	鳥類	同定不能鳥類	尺骨		1　骨体部破片	
84	59-17	93号遺構	93ｲｺｳ	魚類	マグロ属	尾椎		1	
85	62-8	93号遺構	93ｲｺｳ	哺乳類	ウシ	頸椎		1　完存	椎体後側椎頭部分未癒合。第5ヵ
86		池遺構　下層	池西	鳥類	ニワトリ	脛足根骨	左	1　近位端～骨体部	キジ（EP-143）よりかなり大きい 後腓骨頭靭帯の付着部は線状
87		池遺構　下層	池西	鳥類	キジ科	脛足根骨	左	1　近位端～骨体部	キジ（EP-143）とほぼ同大。後腓骨頭靭帯の付着部は線状ではない、ニワトリ以外
88		池遺構　下層	池西	鳥類	キジ科	脛足根骨	左	1　遠位端	キジ（EP-143）とほぼ同大
89	61-9	池遺構　下層	池西	鳥類	フクロウ科	足根中足骨	右	1　完存	フクロウ（EP-36）より大きい
90	59-10	池遺構　下層	池西	魚類	メカジキ	腹椎		1	
91	59-25	池遺構　下層	池西	魚類	未同定	鰓条骨		1	
92	61-19	池遺構　下層	池南	鳥類	ニワトリ	脛足根骨	右	1　完存	キジ（EP-143）よりかなり大きい 後腓骨頭靭帯の付着部は線状
93	－	池遺構　下層	池南	哺乳類	ネコ	上腕骨	右	1　完存	GL：95.11㎜
94	－	池遺構　下層	池北西	鳥類	ガン族	脛足根骨	右	1　遠位端	カリガネ（KP80-2）より少し大きい
95	60-7	池遺構　下層	池西岸3	鳥類	カモ亜科	尺骨	右	1　完存	オナガガモ（EP-4）より少し大きい
96	－	第1層	Ⅲ区	哺乳類	同定対象外	肋骨		1	サイズからイヌと推定される
97	59-20	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北2	魚類	マグロ属？	椎骨		1　破損	
98	59-21	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北2	魚類	マグロ属？	椎骨		1　破損	
99	－	池遺構　上層	ﾓﾘ土4北3	鳥類	カモ亜科	胸骨		1　烏口骨との関節部	カルガモ（EP-84）とほぼ同大

A. 貝類・魚類

■資料と方法

資料はすべて、発掘調査中に目視確認され遺構一括で取り上げられたもので、土壌の篩がけは行っていない。調査時の所見によると､取り上げたものの他にもアワビ類などの貝殻片は出土していたが、意図的な破砕の痕跡は認められなかったとのことである。

種同定と魚類の体長推定は現生標本との比較による。最小個体数は遺構ごとに最も大きな数を見込める部位を用い､二枚貝の場合は左殻と右殻のうち多い方を数える。計測可能な資料の多かった種(ハマグリ、バイ、オオタニシ）については殻サイズの計測を行い、結果を 5mm 単位で示す。

■分析結果

未同定とした資料を除き、貝類 16 種 359 点（336 個体)、魚類 9 群 28 点を同定した（第 52 表、図版 58・59)。取り上げ単位ごとの同定結果は貝類が第 53 表、魚類が第 54 表の通りである。貝類の殻サイズの計測結果は第 55 ～ 57 表及び第 170・171 図に示した。以下では取り上げ単位を遺構ごとにまとめ、同定資料数の多い遺構を中心に分析結果を記す。

【近世（池遺構構築以前）の遺構に伴う資料】

6 号遺構

[貝類]　同定資料数は 10 種 31 点（26 個体）で、内訳はバイ 10 個体、アカガイ 4 個体、サザエ

第 52 表　貝類・魚類種名表

軟体動物門 MOLLUSCA
- 腹足綱 Gastropoda
  - 古腹足目 Vetigastropoda
    - サザエ科 Turbinidae
      - ヤコウガイ *Turbo marmoratus*
      - サザエ *Turbo (Batillus) cornutus*
    - ミミガイ科 Haliotidae
      - メガイアワビ *Haliotis (Nordotis) gigantea*
      - マダカアワビ *Haliotis (Nordotis) madaka*
      - クロアワビ *Haliotis (Nordotis) discus discus*
  - 中腹足目 Mesogastropoda
    - タニシ科 Viviparidae
      - オオタニシ *Cipangopaludina japonica*
  - 新生腹足目 Caeno gastropoda
    - バイ科 Babyloniidae
      - バイ *Babylonia japonica*
    - アッキガイ科 Muricidae
      - アカニシ *Rapana venosa*
- 二枚貝綱 BIVALVIA
  - フネガイ目 Arcoida
    - フネガイ科 Arcidae
      - アカガイ *Scapharca broughtonii*
      - サトウガイ *Scapharca satowi*
  - ウグイスガイ目 Pterioida
    - イタボガキ科 Ostreidae
      - マガキ *Crassostrea gigas*
    - ハボウキガイ科 Pinnidae
      - タイラギ *Atrina (Servatrina) japonica*
  - イシガイ目 Unionoifa
    - イシガイ科 Unionidae
      - ドブガイ（ヌマガイ）*Anodonta woodiana*
  - マルスダレガイ目 Veneroida
    - シジミ科 Corbiculidae
      - ヤマトシジミ *Corbicula japonica*
    - マルスダレガイ科 Veneridae
      - アサリ *Ruditapes philippinarum*
      - ハマグリ *Meretrix lusoria*

脊索動物門 CHORDATA
- 硬骨魚綱 Osteichthyes
  - スズキ目 Perciformes
    - フサカサゴ科 Scorpaenidae
      - フサカサゴ科の一種 Scorpaenidae gen. et sp. indet.
    - コチ科 Platycephalidae
      - コチ科の一種　Platycephalidae gen. et sp. Indet.
    - ハタ科 Serranidae
      - ハタ科の一種　Serranidae gen. et sp. Indet.
    - タイ科 Sparidae
      - クロダイ属の一種 Acanthopagrus sp.
      - マダイ *Pagrus major*
    - マカジキ科 Istiophoridae
      - マカジキ科の一種 Istiophoridae sp.
    - メカジキ科 Xiphiidae
      - メカジキ *Xiphias gladius Linnaeus*
    - サバ科 Scombridae
      - マグロ属の一種 Thunnus sp.
  - カレイ目 Pleuronectiformes
    - カレイ科 Pleuronectidae
      - カレイ科の一種？　Pleuronectidae gen. et sp. Indet

※学名表記は以下の文献による。海水産貝類：奥谷喬司 2017『日本近海産貝類 - 鑑』第二版 東海大学出版部、淡水産貝類：世界文化社 2004『改訂新版世界文化生物大 - 鑑』　魚類：東海大学出版会 1993『日本産 魚類検索―全種の同定』第三版

3 個体（殻 1 点、蓋 3 点）、アサリ、ハマグリが各 2 個体、メカイアワビ、マダカアワビ、クロアワビ、アカニシ、ヤマトシジミが各 1 個体であった。バイは殻高 60mm 台を主体として 40 ～ 69mm、ハマグリは殻長 70 ～ 89mm のものが含まれた。

[魚類]　同定資料数は 1 群 2 点で、内訳はマグロ属尾椎 2 点であった。

85 号遺構

[貝類]　同定資料数は 4 種 8 点（6 個体）で、内訳はアカガイ、ハマグリが各 2 個体、クロアワビ、マガキが各 1 個体であった。

[魚類]　同定資料数は 1 種 1 点で、マダイ尾椎であった。推定体長は 50cm で、三枚おろしの痕跡と思われる切断痕が認められた。

その他の 3 遺構からは貝類のみが各 1 ～ 2 点検出された。内訳はサザエ、バイ、メカイアワビ、ハマグリが各 1 点であった。

【Ⅲ面の遺構に伴う資料】

以下の資料は池遺構の覆土から出土したものである。

第 4 層

[貝類]　同定資料数は 7 種 18 点（15 個体）で、内訳はバイ 8 個体、アサリ 2 個体、メカイアワ

ビ、アカガイ、マガキ、ヤマトシジミ、ハマグリが各 1 個体であった。バイは殻高 50 ～ 69mm、ハマグリは殻長 50mm 台・90mm 台のものが含まれた。

［魚類］　同定資料数は 1 種 1 点で、推定体長約 50cm のマダイ右主上顎骨であった。

池遺構　上層

47 号遺構

［貝類］　同定資料数は 11 種 99 点（97 個体）で、内訳はバイ 76 個体、サザエ 4 個体、アカニシ、マガキ、オオタニシが各 3 個体、メカイアワビ、ハマグリが各 2 個体、サトウガイ、ヤマトシジミ、アサリ、ヌマガイが各 1 個体であった。バイは殻高 50 ～ 60mm 台を主体として 25 ～ 69mm、ハマグリは殻長 55 ～ 74mm、オオタニシは殻高 45 ～ 54mm のものが含まれた。

［魚類］　同定資料数は 2 群 3 点で、内訳はマグロ属尾椎 1 点、推定体長は 200cm 以上のマカジキ科腹椎 2 点であった。

48 号遺構

［貝類］　同定資料数は 11 種 64 点（61 個体）で、内訳はバイ 29 個体、オオタニシ 15 個体、サザエ、マガキが各 4 個体、メカイアワビ、クロアワビが各 2 個体、アカニシ、アカガイ、ヤマトシジミ、アサリ、ハマグリが各 2 個体であった。バイは殻高 50 ～ 60mm 台を主体として 40 ～ 69mm、ハマグリは殻長 40・90mm 台、オオタニシは殻高 4 ～ 6mm の胎貝と 20 ～ 65mm の成貝が含まれた。殻高 4 ～ 6mm のオオタニシ 4 個体は、いずれも殻高 50mm 以上の大形個体の殻内に詰まっていた土の中に遺存していた。使用痕の認められるものには、パレットとして利用された可能性のあるハマグリ（殻長 90mm 台）と、熱を受けたマガキがあった。

［魚類］　同定資料数は 10 群 11 点であった。内訳はフサカサゴ科右前鰓蓋骨 1 点、コチ科腹椎 1 点、ハタ科右方骨 1 点、推定体長約 30cm のクロダイ属左歯骨 1 点、推定体長約 40cm のマダイ尾椎 1 点、メカジキ腹椎 1 点、マグロ属尾椎 1 点、マグロ属？の破損した椎骨 2 点、未同定の擬鎖骨？と部位不明が各 1 点であった。以上のうち腹椎・尾椎以外はいずれも魚の鰓周りを構成する部位である。

51 号遺構

［貝類］　同定資料数は 3 種 8 点（8 個体）で、内訳はバイ 4 個体、オオタニシ 3 個体、クロアワビ 1 個体であった。バイは殻高 50 ～ 69mm、オオタニシは殻高 25 ～ 39mm のものが含まれた。

61 号遺構

［貝類］　同定資料数は 2 種 8 点（7 個体）で、内訳はバイ 6 個体、ヌマガイ 1 個体であった。バイは殻高 50 ～ 69mm のものが含まれた。

［魚類］　同定資料数は 2 群 3 点で、内訳は推定体長約 40cm のマダイ上後頭骨 1 点、マグロ属尾椎 2 点であった。

91 号遺構

［貝類］　同定資料数は 1 種 4 点（4 個体）で、すべてバイであった。殻高は 50mm 台を主体として 50 ～ 75mm のものが含まれた。

［魚類］　同定資料数は 1 群 1 点でカレイ科？尾椎であった。

池遺構　下層

［貝類］　同定資料数は 4 種 14 点（14 個体）で、内訳はオオタニシ 10 個体、バイ 2 個体、アカガイ、

ハマグリが各 1 個体であった。バイは殻高 55 ～ 64mm、ハマグリは殻長 80 ～ 84mm、オオタニシは殻高 40 ～ 50mm 台を主体として 25 ～ 59mm のものが含まれた。

[魚類]　同定資料数は 2 群 2 点で、内訳はメカジキ尾椎 1 点、未同定鰓条骨 1 点であった。

93 号遺構

[貝類]　同定資料数は 4 種 7 点（6 個体）で、内訳はバイ 3 個体、ヤマトシジミ、ハマグリ、オオタニシが各 1 個体であった。バイは殻高 45 ～ 64mm、ハマグリは殻長 70 ～ 74mm、オオタニシは殻高 35 ～ 39mm のものが含まれた。

[魚類]　同定資料数は 1 群 2 点で、内訳はマグロ属尾椎 2 点であった。

【Ⅱ面の遺構に伴う資料】

第 2-1・3 層・第 3 層

[貝類]　同定資料数は 5 種 6 点（6 個体）で、内訳はバイ 2 個体、ヤコウガイ（殻）、サザエ（殻）、タイラギ、サトウガイが各 1 個体であった。バイは殻高 40 ～ 64mm のものが含まれた。ヤコウガイは殻口のみが残存しており、螺層と体層は打ち割られたものと推定される。今回の分析資料のうちヤコウガイはこの 1 点のみである。

35 号遺構

[貝類]　同定資料数は 5 種 22 点（22 個体）で、内訳はバイ 18 個体、サザエ、アカニシ、マガキ、ヤマトシジミが各 1 個体であった。ヤマトシジミは殻長 10mm 程度と小形であった。バイは殻高 35 ～ 69mm のものが含まれた。

86 号遺構

[貝類]　同定資料数は 2 種 8 点（5 個体）で、内訳はハマグリ 4 個体、ヤマトシジミ 1 個体であった。ハマグリは殻長 40mm 台を主体として 40 ～ 74mm のものが含まれた。

その他の 9 遺構からは貝類のみが各 1 ～ 3 点検出された。内訳はバイ、サザエ、マガキ、ヤマトシジミ、ハマグリのいずれかを 1 ～ 2 個体ずつ含む組成で、8 遺構からバイが出土している。

【表土および攪乱部から検出された資料】

第 1 層

[貝類]　同定資料数は 3 種 19 点 19 個体で、内訳は Ⅰ 区でサザエ、バイ、ハマグリ各 1 個体、Ⅱ 区でバイ 15 個体、ハマグリ 1 個体であった。Ⅱ 区のバイは殻高 50 ～ 60mm 台を主体として 50 ～ 75mm のものが含まれた。ハマグリの殻長は Ⅰ 区で 30mm 台、Ⅱ 区で 70mm 台のものが含まれた。

第 1 層（昭和校舎跡）

[貝類]　同定資料数は 6 種 22 点（20 個体）で、内訳は Ⅰ 区でバイ 12 個体、アカガイ、ヤマトシジミが各 2 個体、サザエ、メカイアワビが各 1 個体、Ⅲ 区でバイ 2 個体であった。バイの殻高は Ⅰ 区では 50mm 台を主体として 45 ～ 64mm、Ⅲ 区では 60 ～ 64mm のものが含まれた。

[魚類]　同定資料数は 1 群 1 点で、マグロ属尾椎であった。

その他、 Ⅰ 区（1 層）から殻高 70mm 台のバイ 1 個体、ヤマトシジミ 1 個体、殻長 40mm 台のハマグリ 1 個体、推定体長 50cm のマダイ前頭骨 1 点が得られている。

■考察

今回同定した貝類と魚類の多くは、市場などで手に入れ、消費した食糧残滓と考えられる。　ただ

第 53 表　出土貝類遺体同定結果

出土地点			推定時期	取り上げ単位（注記）	貝種																							同定資料数（NISP）	備考
					サザエ		メカイアワビ	マダカアワビ	クロアワビ	バイ	アカニシ	アカガイ		サトウガイ		マガキ			ヤマトシジミ		アサリ		ハマグリ		オオタニシ	その他		
					殻	蓋	-	-	-	-	-	左	右	左	右	左	右	破片	左	右	左	右	左	右	-			
2 号遺構			近世	2 ｲｺｳ		1																					1	
6 号遺構				6 ｲｺｳ	1	3	1	1	1	10	1		4						1	1	1	2	2	2			31	アサリ北海道型に似る
33 号遺構				Ⅲ区 33 ｲｺｳ						1																	1	
85 号遺構				85 ｲｺｳ					1			1	2				1						1	2			8	
95 号遺構				95 ｲｺｳ			1																	1			2	
池遺構	上層	47 号遺構	近世～近代	47 ｲｺｳ	4		2			75	2			1	1	2				1		1	1	2	3		95	
				47 ｲｺｳ下						1	1					1										ヌマガイ左 1	4	
				ﾓﾘ土 4 北 1						1															1		2	
				ﾓﾘ土 4 北 2						5						1									9		15	オオタニシ内 4 つは幼貝（成貝の殻の中に残存していた）、マガキ被熱
				ﾓﾘ土 4 北 3			1												1						1		3	
				ﾓﾘ土 4 北 4						2																	2	
				ﾓﾘ土 4 西	1					6															1		8	
				ﾓﾘ土 4 南 1	2	1	1		2	11	1					3	1					1	1	1	1		26	ハマグリ右はパレットとして利用？、マガキ被熱、アサリ丸いプロポーション
				ﾓﾘ土 4 南 3						1																	1	
				ﾓﾘ土 4 南 4						1																	1	
				ﾓﾘ土 4 南 4		1				2		1													2		6	
		51 号遺構		51 ｲｺｳ					1	4															3		8	
		61 号遺構		61 ｲｺｳ						6																ヌマガイ左 1、右 1	8	
	下層			池北									1												6		7	
				池西						2														1	3		6	
				池南																					1		1	
	93 号遺構			93 ｲｺｳ						3									1	1			1		1		7	
第 4 層				ﾓﾘ土 3			1			8		1				1				1	2	2	1	1			18	アサリ丸いプロポーション 1、ヤマトシジミ小さい（殻長 10mm 程度）
32 号遺構			近代	32 － 1 ｲｺｳ						1																	1	
7 号遺構				7 ｲｺｳ		1				2																	3	
36 号遺構				36 ｲｺｳ						1																	1	
35 号遺構				35 ｲｺｳ		1				18	1								1								21	シジミ小さい（殻長 10mm 程度）
				35 ｲｺｳ胴木下												1											1	
43 号遺構				43 ｲｺｳ						1																	1	
52 号遺構				52 ｲｺｳ						1																	1	
55 号遺構				55 ｲｺｳ						1																	1	
59 号遺構				59 － 5 ｲｺｳ						1						2											3	
63 号遺構				63 ｲｺｳ						1																	1	
66 号遺構				66 ｲｺｳ																			1				1	
86 号遺構				86 ｲｺｳ															1	1			2	4			8	
91 号遺構				91 ｲｺｳ						4																	4	
第 2・3 層				35 ｲｺｳ東						2				1													3	
				ﾓﾘ土 2	1																					ヤコウガイ（殻）1 タイラギ 左 1	3	ヤコウガイは殻口のみ、タイラギは殻頂部のみ残存
第 1 層	表土		近代	Ⅰ区表土	1					1														1			3	
				Ⅱ区表土						15													1				16	
	旧校舎			Ⅰ区旧校舎	1		1			12			2						2	2							20	
				Ⅲ区旧校舎						2																	2	
位置不明				Ⅰ区						1								1		1			1				4	
計					11	8	8	1	5	203	6	3	9	2	1	11	2	1	7	8	3	6	12	15	32	5	359	

し、淡水に棲息する貝類のヌマガイとオオタニシは、ヌマガイがあまり食用に向かないことや、雌と考えられる大型のオオタニシの殻内に胎貝[(1)]が残存していたと考えられること、殻サイズの分布に人為的な偏りが認められないことから（第 171 図）、池に自然に棲息していたものと考えられる。この 2 種は池遺構出土資料にしか確認されていない。（宮本由子）

【謝辞】

種同定に際しては千葉県立中央博物館の黒住耐二氏、東海大学の丸山真史氏、帝京大学の植月学氏に現生標本をお見せいただき、ご助言を賜りました。また、整理作業員の皆さまには殻サイズの計測、図版作成をしていただきました。厚く御礼申し上げます。

【注釈】

（1）大型のオオタニシは長寿の雌である。産まれた直後の新生貝の殻高は 7mm 程度であるため、4 ～ 6mm の本資料は胎貝であったと考えられる。

【参考文献】

黒住耐二 2021『くらべてわかる貝殻』山と渓谷社

第 54 表　出土魚類遺体同定結果

出土地点			時　期	取り上げ単位（注記）	小分類	部位	左右	数量　遺存状態	内　容
6号遺構			近世	6ｲｺｳ	マグロ属	尾椎		2	
85号遺構				85ｲｺｳ	マダイ	尾椎		1　切断痕あり	推定体長50cm
池遺構	上層	47号遺構	近世～近代	47ｲｺｳ下	マカジキ科	腹椎		2	推定体長200cm以上
					マグロ属	尾椎		1	
		48号遺構		ﾓﾘ土4北1	フサカサゴ科	前鰓蓋骨	右	1	
					コチ科	腹椎		1	
					ハタ科	方骨	右	1	
					未同定	不明		1	
				ﾓﾘ土4北2	クロダイ属	歯骨	左	1	推定体長30cm
					マグロ属	尾椎		1	
					マグロ属？	椎骨		2　破損	
				ﾓﾘ土4北3	マダイ	尾椎		1	推定体長40cm
				ﾓﾘ土4北4	未同定	擬鎖骨？		1	
				ﾓﾘ土4南1	メカジキ	腹椎		1	
		61号遺構		61ｲｺｳ	マダイ	上後頭骨		1	推定体長40cm
					マグロ属	尾椎		2	
		91号遺構		91ｲｺｳ	カレイ科？	尾椎		1	
	下層			池西	メカジキ	腹椎		1	
				池西	未同定	鰓条骨		1	
	93号遺構			93ｲｺｳ	マグロ属	尾椎		2	
第4層				ﾓﾘ土3	マダイ	主上顎骨	右	1	推定体長50cm
第1層			近代	Ⅲ区旧校舎	マグロ属	尾椎		1	
不明					マダイ	前頭骨		1	推定体長50cm

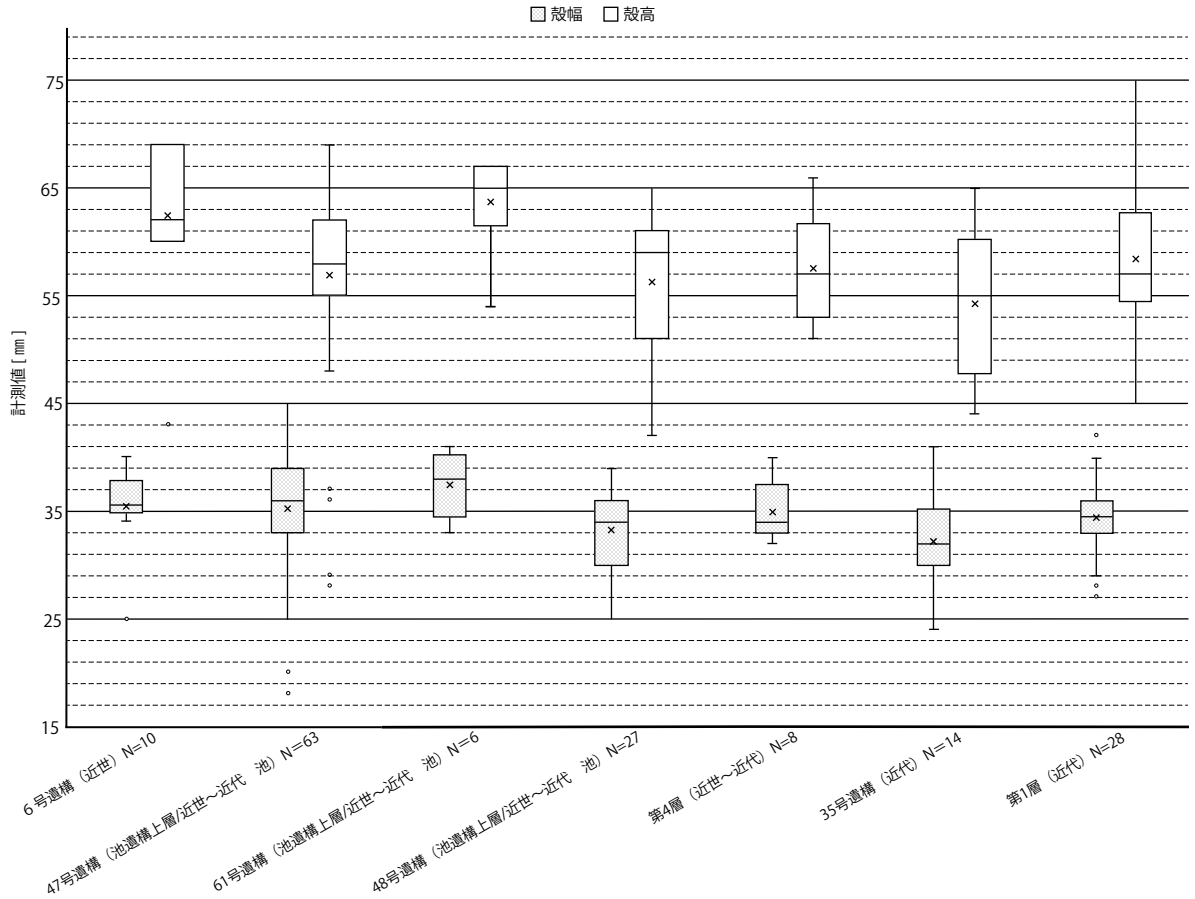
第 55 表　出土ハマグリ計測結果

				殻　長 [mm]											
出土地点			殻高 [mm]	30-34	40-44	45-49	55-59	60-64	65-69	70-74	75-79	80-84	85-89	90-95	総計
6 号遺構（近世）			45-49							1					1
			50-54								1				1
			55-59									1	1		2
池遺構	上層	47 号遺構（近世～近代）	35-39				1								1
			40-44					1	1						2
		48 号遺構（近世～近代）	30-34			1									1
			60-65											1	1
	下層（近世～近代）		55-59									1			1
	93 号遺構（近世～近代）		50-54							1					1
第 4 層（近世～近代）			35-39				1								1
			50-54											1	1
66 号遺構（近代）			45-49						1						1
86 号遺構（近代）			25-29		1	1									2
			30-34			2									2
			45-49					1		1					2
第 1 層	Ⅰ区表土（近代）		15-19	1											1
	Ⅱ区表土（近代）		45-49							1					1
	不明（近代）		35-39		1										1
総　計				1	2	4	2	2	2	4	1	2	1	2	23

第 56 表　出土バイ計測結果

遺構名、層名				殻高 [mm]	殻　幅 [mm] 15-19	20-24	25-29	30-34	35-39	40-45	総計
6 号遺構（近世）				40-44			1				1
				60-64				1	4		5
				65-69					2	2	4
33 号遺構（近世）				45-49				1			1
池遺構	上層	47 号遺構（近世～近代）		25-29	1	1					2
				35-39		1	2				3
				40-44		幅破損 1	幅破損 1				2
				45-49				1			1
				50-54			1 + 幅破損 2	7 + 幅破損 2	1 + 幅破損 1		14
				55-59				7 + 幅破損 3	14	2	26
				60-64				幅破損 1	11 + 幅破損 2	4	18
				65-69					3	7	10
			刈土 4 西	50-54			1	2			3
				60-64					2		2
				65-69					1		1
			刈 4 南 1	40-44			1				1
				50-54				1			1
				55-59					2		2
				60-64				3	4		7
			刈 4 南 3	45-49			1				1
			刈	60-64					1		1
			刈 4 南 4	50-54					1		1
				55-59				1			1
			刈 4 北 1	50-54				1			1
			刈 4 北 2	40-44			1				1
				50-54				1			1
				55-59			1	1			2
				60-64				1			1
		51 号遺構（近世～近代）		50-54				2			2
				60-64					1		1
				65-69						1	1
		61 号遺構（近世～近代）		50-54				1			1
				60-64					1	1	2
				65-69					2	1	3
		91 号遺構（近世～近代）		50-54				3			3
				70-75						1	1
	下層	池西（近世～近代）		55-59					1		1
				60-64					1		1
	93 号遺構（近世～近代）			45-49			1				1
				55-59			1				1
				60-64					1		1
第 4 層（近世～近代）				50-54				3			3
				55-59				1	1		2
				60-64				1	1		2
				65-69						1	1
32 号遺構（近代）				50-54				幅破損 1			1
7 号遺構（近代）				45-49			1				1
				65-69					1		1
36 号遺構（近代）				50-54				1			1
35 号遺構（近代）				35-39		幅破損 1		高・幅破損 1			1
				40-44		1	1				2
				45-49			1 + 幅破損 1	1			3
				50-54				1	1		2
				55-59				4			5
				60-64				1	2		3
				65-69						1	1
第 2-1・3 層・第 3 層（近代）				40-44		1					1
				60-64					1		1
43 号遺構（近代）				50-54				1			1
52 号遺構（近代）				55-59				1			1
55 号遺構（近代）				55-59				1			1
59 号遺構（近代）				30-34		1					1
				50-54				1			1
63 号遺構（近代）				55-59					1		1
第 1 層	表土			50-54				1 + 高・幅破損 1	1		3
				55-59			1 + 幅破損 1	3	1 + 高破損 1		7
				60-64				1	4		5
				70-75						1	1
	Ⅰ区旧校舎			45-49			2				2
				50-54				3			3
				55-59				3	2		5
				60-64					2		2
	Ⅲ区旧校舎			60-64					2		2
	不明			70-75						1	1
総計					1	7	22	71	77	23	201

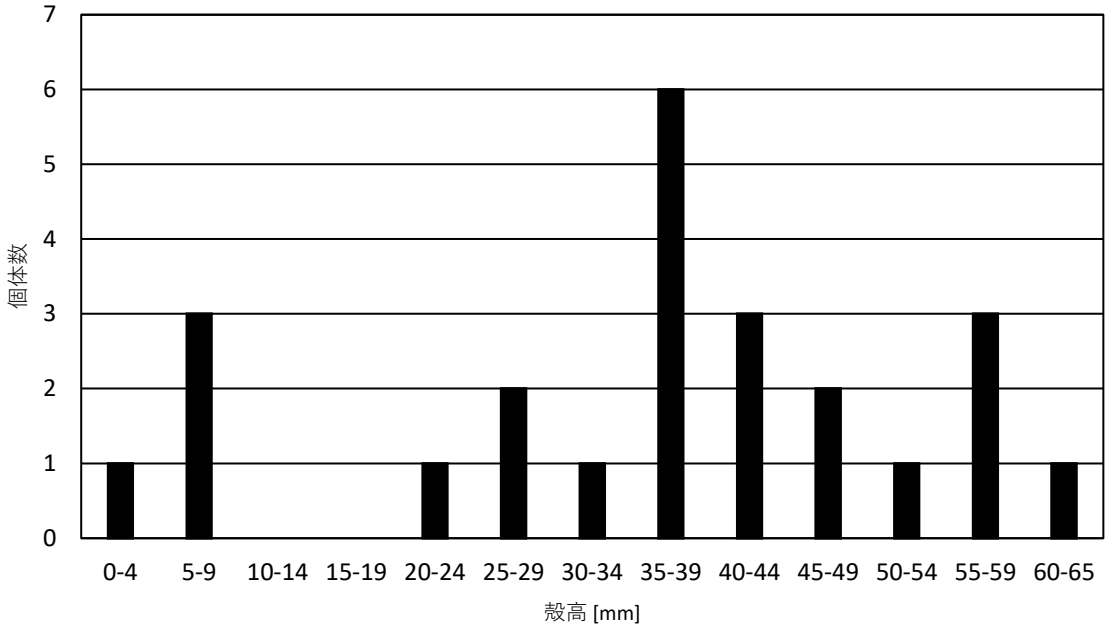
※破損資料は残存長を示した。「高破損」は殻高、「幅破損」は殻幅、「高・幅破損」はいずれもが残存長であることを示す



第 170 図　出土バイ殻高・殻幅分布（N ＝ 5 以上）

第 57 表　池遺構出土オオタニシ計測結果

出土地点			殻高 [mm]	殻幅 [mm] 0-4	5-9	25-29	30-34	35-39	40-44	45-50	総計	備　考
池遺構	上層	47 号遺構	45-49							1	1	
			50-54						1		1	
		48 号遺構	0-4	1							1	
			5-9		3						3	殻高最大 6mm
			20-24			1					1	
			35-39					3			3	
			40-44						1		1	
			55-59							2	2	
			60-65							1	1	
		51 号遺構	25-29				1				1	
			35-39					1			1	
	下層		25-29				1				1	
			30-34				1				1	
			35-39					1			1	
			40-44					2			2	
			45-49							1	1	
			55-59						1		1	
	93 号遺構		35-39					1			1	
総計				1	3	1	3	8	3	5	24	



第 171 図　池遺構出土オオタニシ殻高分布

B. 鳥類

■資料と方法

分析対象に指定された鳥類遺体は 56 点であった。近世～近代に比定される。これらの資料のうち肋骨 2 点と椎骨 1 点を除く 53 点を分析対象とした。資料は現生骨標本との肉眼比較で同定した。現生標本として、北海道大学総合博物館の収蔵標本（HoUMVC）、川上和人氏（森林総合研究所；KP）および江田の所蔵標本（EP）を利用した。骨の部位の名称は Baumel et al（1993）および日本獣医解剖学会（1998）に、分類群名は基本的に日本鳥学会（2012）に従い、同書で言及されていないカモ科の亜科や族の分類は American Ornithologist' Union（1998）に従った。資料の残存状態は、近位や遠位の関節が半分以上残っているものをそれぞれ近位端、遠位端とした。また、主要四肢骨では骨幹のほぼ中央にある栄養孔が残存している骨は骨体部として記載した。上記の近位端、遠位端、骨体部のすべてが残存している資料は完存とした。資料の破損が著しいために鳥綱以下の同定ができなかった資料は同定不能とした。各資料について骨の表面の粗さと骨端の癒合状態に基づく成長段階、同定時に目に付いた解体痕と加工痕を記載した。骨の成長段階は、すべての部位について未癒合のものは幼鳥、癒合しているものの形成が不完全な資料と骨体表面が粗い資料は若鳥とした。また、破損して髄腔を観察できた資料では骨髄骨の有無を記載した。

■結果

同定対象とした 53 点中、52 点（98％）で科以下を単位とした同定ができた（第 58・59 表）。確認された分類群は、キジ科（ニワトリを含む）、カモ科（ガン族、マガモ属、ビロードキンクロ属、カモ亜科を含む）、ツル科、フクロウ科、カラス科の 5 目 5 科である。カモ科が同定破片数の約 56％を占めて主体的で、キジ科が約 33% でこれに続いた。他の分類群は 3 点以下の出土に留まった。若鳥の骨がキジ科で認められた。骨髄骨を含む骨はいずれの分類群でも認められなかった。解体痕はカモ科で 2 例、キジ科とツル科で各 1 例認められた。以下、分類群ごとに特徴を記す。

【カモ科（ガン族、マガモ属、ビロードキンクロ属、カモ亜科を含む）】

29 点が確認された。そのうち 6 点はガン族、23 点はカモ亜科と同定された。ガン族と同定された資料にはカリガネ (KP80-2) とほぼ同大の資料が 2 点、マガン (EP-25) とほぼ同大の資料が 2 点、両者の中間程度の大きさの資料が 1 点、マガン (EP-25) より大きな資料が 1 点認められた。複数種に由来すると考えられる。カモ亜科と同定された資料にはホシハジロ (EP-83) 程度からオナガガモ (EP-4) 程度、カルガモ (EP-84) 程度、ケワタガモ (KP116-1) 程度まで様々なサイズの資料が認められた。とくにオナガガモ (EP-4) 程度とカルガモ (EP-84) 程度の資料が多かった。複数種に由来すると考えられる。近位端の残存するカモ亜科の上腕骨を江田（2005）の基準で分析した結果、3 点がマガモ属、1 点がビロードキンクロ属と同定された。池遺構上層から出土したガン族の手根中手骨とカモ亜科の上腕骨では、ともに近位端が切断されていた。

【キジ科（ニワトリを含む）】

17 点が検出された。そのうち後腓骨頭靭帯の付着部が線状を呈する脛足根骨 4 点と内側足底稜のない足根中足骨 2 点は江田・井上（2011）の基準からニワトリと同定された。ニワトリと同定できた資料のうち 4 点はキジ（EP-143）よりかなり大きい資料であった反面、ヤマドリ (EP-144) と同大の資料も 1 点認められた。ニワトリと同定された 2 点の足根中足骨にはいずれも距突起は認められなかった。一方、池遺構下層出土の脛足根骨は後腓骨頭靭帯の付着部が球状であることから、池遺構上層出土の足根中足骨は内側足底稜があることからニワトリ以外のキジ科と同定できた。後者では距突起は認められなかった。また 4 層出土の大腿骨は大転子含気窩がないことから、キジ以外のキジ科と同定された。同資料はヤマドリ (EP-144) より小さいものであった。池遺構上層からは骨幹の粗い若鳥の足根中足骨が 2 点検出された。両資料ともに内側足底稜はないものの、ニワトリと同定することは保留した。うち 1 点は距突起の基部のみが認められ、もう 1 点では距突起は認められなかった。キジ科と同定した資料中にもキジ（EP-143）より大きく、シャモロック（ニワトリ）（HoUMVC31280）程度の標本が含まれており、ニワトリが少なからず含まれていると考えられた。池遺構上層から出土した左上腕骨は背側顆背縁が一部切断されていた。

【その他の鳥類】

カラス科が3点、フクロウ科が2点、ツル科が1点認められた。カラス科はいずれもハシブトガラス(EP-13)とほぼ同大の資料であった。フクロウ科はいずれもフクロウ(EP-36)より大きい資料であった。ツル科はナベヅル（EP-99）とほぼ同大の上腕骨で、腹側顆は切断されていた。　（江田真毅・許開軒）

【謝辞】

川上和人氏（森林総合研究所）には所有する骨標本を閲覧させていただいた。北海道大学総合博物館のボランティアの皆様には比較骨標本の作成をお手伝いいただいた。記して御礼を申し上げる。

【引用文献】

江田真毅 2005「生活復原資料としての鳥類遺体の研究－カモ亜科遺体の同定とその考古学的意義－」海交史研究会考古学論集刊行会編『海と考古学』、六一書房、387-406。

江田真毅・井上貴央 2011「非計測形質によるキジ科遺存体の同定基準作成と弥生時代のニワトリの再評価の試み」動物考古学 28：23-33。

日本獣医解剖学会 1998『家禽解剖学用語』、日本中央競馬会、東京。

日本鳥学会 2012『日本鳥類目録改訂 7 版』、日本鳥学会、三田。

American Ornithologist' Union. 1998. The AOU Check-list of North American Birds, 7th Edition, American Ornithologist' Union, Washington, D.C.

Baumel, J.J., King, A.S., Breazile, J.E., Evans, H.E., Berge, J.C.V. 1993. Handbook of Avian Anatomy: Nomina Anatomica Avium, Nuttall Ornithological Club, Cambridge.

第 58 表　鳥類種名表

鳥類
- キジ目
  - キジ科
    - ニワトリ　*Gallus gallus domesticus*
    - 属種不明［複数種］　Phasianidae spp.
- カモ目
  - カモ科
    - ガン亜科
      - ガン族・属種不明 [複数種]　Anserini spp.
    - カモ亜科
      - マガモ属 [複数種]　*Anas* spp.
      - ビロードキンクロ属　*Melanitta* sp
      - 属種不明 [複数種]　Anatinae spp.
- ツル目
  - ツル科・属種不明　Gruidae sp.
- フクロウ目
  - フクロウ科・属種不明　Strigidae sp.
- スズメ目
  - カラス科・属種不明　Corvidae sp.

※学名表記は、配列は日本鳥学会（2012）および American Ornithologist'Union（1983）に従った。

第 59 表　元浅草遺跡における鳥類の出土量

整理遺構／包含層		年代	小分類	部位	残存
6 号遺構		近世	キジ科	大腿骨	Lm1
70 号遺構		近世	ガン族	手根中手骨	Rw1 ±
75 号遺構		近世～近代	カモ亜科	上腕骨	Lmfr1
80 号遺構		近世～近代	ツル科	上腕骨	Lw1
池遺構	上層	近世～近代	ニワトリ	脛足根骨	Lp-m1
				足根中足骨	Rw1 ± ; Lm-d1
			キジ科	上腕骨	Rp1; Lw1
				足根中足骨	Rw1*; Rw1; Lw1*
			ガン族	上腕骨	Rm-d1; Rmfr1
				手根中手骨	Lw1
				脛足根骨	Rmfr1
			カモ亜科	下顎骨	Lmfr1
				胸骨	1
				烏口骨	Rw1 ± ; Lw1 ±
				肩甲骨	Rw1 ± ; Rw1
				上腕骨	Rm-d1; Lm1
				尺骨	Rw1; Rp-m1; Lw1 ±
				橈骨	Rw1 ±
				手根中手骨	Lw1 ±
				寛骨	1
				大腿骨	Rw1; Lw1
			マガモ属	上腕骨	Lw1 ±
			ビロードキンクロ属	上腕骨	Rw1 ±
			フクロウ科	脛足根骨	Rw1
			カラス科	尺骨	Rm-d1
				足根中足骨	Lw1 ±
			種不明鳥類	椎骨	1 ±
				肋骨	2
	下層	近世～近代	ニワトリ	脛足根骨	Rw1 ± ; Lp-m1
			キジ科	脛足根骨	Ld1; Lp-m1
			ガン族	脛足根骨	Rd1
			カモ亜科	尺骨	Rw1
			フクロウ科	足根中足骨	Rw1
	93 号遺構	近世～近代	マガモ属	上腕骨	Rp-m1; Lw1
			カラス科	足根中足骨	Rm1
			同定不能鳥類	尺骨	mfr1
第 2-1・3 層・第 3 層		近代	カモ亜科	胸骨	1
第 4 層		近世～近代	ニワトリ	脛足根骨	Rw1*
			キジ科	胸骨	1
				大腿骨	Lw1
表採			キジ科	脛足根骨	Rm-d1

※ R は右、L は左の資料を示す。残存状態は w: 完存、p: 近位端（烏口骨では胸端）、d: 遠位端（烏口骨では肩端）、s: 骨体部、sfr: 骨体部破片。胸骨は竜骨突起のあるものを、寛骨は連合仙椎のあるものをカウントした。また、*: 若鳥、± : 骨髄骨の有無不明を示す。

C. 爬虫類

スッポン（Pelodiscus sinensis）の下腹骨板・右の破片が 1 点出土している。食物残滓と推測される。

D. 哺乳類

6 群 12 点が出土している。ネコが 6 点で最も多く、50.0％を占める。そのほかに、ウシ（2 点・16.7％）、ウサギ科、マイルカ科、ウマ、同定対象外（各 1 点・8.3％）が出土している。なお、同定対象外とした資料は中型哺乳類の肋骨で、サイズからイヌと推定される。種名表では“イヌ？”として掲載した。

その内、ウシとマイルカ科は食物残滓と推定される。ウサギ科もその可能性が高い。なお、ウシの頸椎 1 点（№69）は矢上方向に切断されている。（阿部常樹）

第 60 表　爬虫類・哺乳類種名表

爬虫類
- 爬虫綱　Class Reptilia
  - カメ目　Order Testudines
    - スッポン科　Family Trionychidae
      - ニホンスッポン　*Pelodiscus sinensis*

哺乳類
- 哺乳綱　Class Mammalia
  - ウサギ目　Order Lagomorpha
    - ウサギ科　Family Leporidae
      - 属種不明　gen. et sp. indet.
  - 食肉目　Order Carnivora
    - ネコ科　Family Felidae
      - イエネコ　*Felis silvestris catus*
    - イヌ科　Family Canidae
      - イヌ？　*Canis familiaris*？
  - クジラ目　Order Cetacea
    - ハクジラ亜目　Suborder Odontoceti
      - マイルカ科　Family Delphinidae
        - 属種不明 gen. et sp. indet.
  - 偶蹄目　Order Artiodactyla
    - ウシ科　Family Bovidae
      - ウシ　*Bos taurus*
  - 奇蹄目　Order Perissodactyla
    - ウマ科　Family Equidae
      - ウマ　*Equus caballus*

15）植物遺体

植物学的同定は行っていない。モモまたはウメの内果皮、マテバシイの堅果、サルノコシカケなどとみられるものが数点出土している。一般的に、サルノコシカケは生育中に自然に宿主から離脱することは少ないと言われているので、本資料は人為的に剝がされたものの可能性もある。一部のサルノコシカケは漢方薬の材料として珍重されてきたので、保管されていたものかもしれないが、利用痕跡は見られないので、本項で扱った。なお、ここでは「サルノコシカケ」の語を、半円形から扇形の傘を持ち、木質で硬いキノコの総称として用いた。（両角まり）

Ⅴ　分析と考察

1　元浅草遺跡・白鷗高校地区の江戸時代における土地利用

渋谷 葉子

はじめに

本稿は台東区元浅草遺跡のうち、白鷗高校地区の発掘調査に伴う文献史料の調査である。本調査地は江戸時代には概ね武家地となっており、本稿では文献・絵図史料から、その所持者ごとに変遷と利用のあり方を明らかにしていく。また屋敷絵図の存在も確認されたので、これについても検討を加える。

なお屋敷地所持者等の履歴については「屋敷地所持者等履歴」（第 61 表）、各家及び屋敷地利用の変遷については「元浅草遺跡・白鷗高校地区 江戸時代屋敷地関係年表」（第 62 表）にまとめたので、適宜参照されたい[(1)]。

１．幕府与力・同心組屋敷時代

【寛永～明暦期】

本調査地周辺の土地利用のあり方が判明する最初は、寛永 19 ～ 20 年（1642 ～ 1643）の様相とされる「江戸全図」（第 172 図）からである。それによれば調査地に比定される位置には、「御歩行衆」１筆、「御土蔵番衆」２筆、「新庄美作与力同心」１筆があり、つまり徒組と土蔵番、また新庄美作守直房は当時書院番頭を務めており、その配下の与力・同心の組屋敷があったと確認される。

次ぐ明暦３年（1657）の様相とされる「江戸大絵図」（第 173 図）では、一帯に「酒井飛騨与力足軽」となっている。酒井飛騨守重之は書院番頭であり、したがって調査地周辺にその配下の与力・同心組屋敷が広がったことが判明する。

しかし同じ明暦３年のうちに（月日は不詳）、この組屋敷地は備前岡山藩池田家へとわたることになったのである。

２．岡山藩池田家屋敷時代

【明暦～万治期】

岡山藩池田家は備前・備中国内 31 万 5,000 石を領する大名家である。同家の江戸屋敷は当時、大名小路に上屋敷、その道を隔てた東側に「向屋敷」、向屋敷の道を隔てた南東に「新屋敷」と呼ぶ中屋敷と、さらに浅草鳥越にも中屋敷を所持していた。うち新屋敷が明暦３年正月 18 ～ 19 日に発生した明暦の大火後に幕府が行った大規模な武家屋敷の割り替えで上地となり、その代地として同年５月 15 日、浅草三十三間堂前の 60 間四方の土地が池田家に与えられた。

しかし時の藩主光政は、この地は不便だとして替地を望んで動いたようで、同じ明暦３年のうちに（月日は不詳）、下谷寺町の酒井飛騨守与力同心屋敷との引き替えを約定し、幕府の許しも得てその獲

得に至った。池田家ではこの屋敷を「下谷屋敷」と呼称した。

獲得翌年の万治元年（1658）、下谷屋敷で土木[(2)]が始まった。これは光政の世子綱政の屋敷を建造するためであった。着工時期ははっきりしないが、まず「地形築セ申奉行並大工・役人・諸奉行人ノ小屋懸」が命じられ、それから作業が進められたもようで同年７月に落成、同月 15 日に綱政が引き移った。下谷屋敷はこうして世子の居屋敷として利用されることとなり、それには格式に応じた殿舎、そして武家屋敷には必須の庭園も備えていたと推定される。また当時、綱政は板倉阿波守重郷女と婚約をしており、御殿奥向にはその住居も設けられていたとみられる。重郷女は同じ万治元年の８月９日に没したため入輿には至らなかったが、同３年（1660）４月 14 日、綱政は丹羽左京大夫光重女と婚姻して、光重女が下谷屋敷に入輿した。

【寛文期】

その後、寛文４年（1664）には下谷屋敷で新宅の作事が行われたもようで、同年３月 11 日、成就に当り藩主光政より担当の奉行以下棟梁へ褒美が与えられている。

寛文８年（1668）２月４日、上野車坂からの出火により下谷屋敷は焼失した。在府中であった綱政は夫人とともに大名小路の上屋敷に退避し、同月 19 日に浅草新屋敷に移った。そして光政は同月中に麻布善福寺より寺地の一部を借地する約定を整えて早速作事に着工、それは程なく成就して世子綱政と夫人が入った。この屋敷は「麻布屋敷」と称され、以後綱政一家の住居となった。

一方焼失後の下谷屋敷では、藩主光政の命により土木が止められた。下谷屋敷は卑湿であるため予てより心に適わず、他所に替えたいと光政は思案していたという。そしてその旨を受けて家臣らが下谷屋敷に替わる土地を方々吟味し、上・下大崎村に跨る場所を見出して寛文 10 年（1670）春、その土地と下谷屋敷を替える出願を幕府にしたところ、同年３月１日に許可された。こうして池田家は大崎屋敷を獲得し、下谷屋敷は幕府へ上地されたのであった。

３．泉藩本多家屋敷時代

【寛文～正徳期】

寛文 10 年､本多弾正少弼忠晴へ元竹蔵（浜町）より下谷新寺町に上屋敷を替えることが命じられた。忠晴は当時、陸奥浅川藩１万石の藩主を務めていた。屋敷替えの月日は不明だが、屋敷地は同年３月１日、岡山藩池田家より上地されたものであり、したがって本多家の拝領はそれ以降となる。規模は竪 51 間７寸５分･横 86 間５尺２寸５分（田舎間）､坪数は 4,107 坪５合で､本多家ではこの屋敷を「下谷屋敷」と呼称した。翌寛文 11 年（1671）の様相である「新板江戸外絵図」（第 174 図）に「本田（多）ダン正」と記載されており､所在が確認される。そして以後､この屋敷地は形を変えることなく、幕末まであり続ける（第 175 ～ 180 図「御府内往還其外沿革図書」)。

延宝７年（1679）10 月５日、忠晴は千束龍泉寺村に 2,499 坪の土地を金 150 両で購入し、抱屋敷とした。下谷上屋敷に近く、その控えだったとみられ長屋を設けており、また隠居屋敷や保養地としても用いた。なお享保８年（1723）12 月に「中屋敷」と呼称を定め、宝暦期（1751 ～）頃よりは「金杉中屋敷」と呼ぶようになっている。

さて忠晴は天和元年（1681）９月 15 日、三河伊保１万石に転封されて藩主となった。元禄５年（1692）６月 27 日には大番頭を命じられており、下谷上屋敷もこれに応じた機能を備えたものとみ

られる。

元禄 11 年(1698)９月６日､南鍋町からの出火が南風に煽られて千住にまで及んだ。これは俗に｢勅願火事」また「中堂火事」と呼ばれた大火で、本多家下谷上屋敷も類焼した。このとき忠晴は在府中だったか､避難した屋敷や被害のもようなど全く不明である。また下谷上屋敷は再建されたはずだが、そのようすや成就した時期なども明らかでない。

元禄 14 年（1701）２月５日には本所大横堀（本所三ツ目通）の拝領下屋敷を返上して、西葛西小梅村に 3,000 坪の代地を拝領した。｢小梅下屋敷」と呼称して天明８年（1788）まで所持し、罹災時の臨時の居屋敷や隠居屋敷､また風光明媚な土地柄から療養や保養に訪れる別邸として利用した。

元禄 15 年（1702）６月 10 日、忠晴は奏者番兼寺社奉行に任じられた。寺社奉行は自宅に役屋敷を置くことになっており、したがって下谷上屋敷表向のうちに白洲などの施設が設けられたとみられる。

宝永２年（1705）12 月 11 日、遠江・三河国内に 5,000 石が加増されて、本多家の領知は都合１万 5,000 石となった。また同７年（1710）閏８月、三河国内 9,000 石が遠江国内に改められて、忠晴は同国相良に移封となりその藩主となった。

正徳３年（1713）正月晦日、忠晴は立ち居が不自由となったため奏者番兼寺社奉行の辞任を願い、同年閏正月７日に許可された。そして同５年（1715）４月 12 日に江戸で没し、忠晴の嫡孫忠通が同年６月６日、遺領を継いで遠江相良１万 5,000 石の藩主となった [(3)]。

【享保～寛保期】

享保期に入ると、下谷上屋敷は度重なる火災に見舞われる。まず享保２年（1717）６月９日、小伝馬町三丁目からの出火で全焼、そして翌３年（1718）12 月 11 日に上野屏風坂よりの出火でまた全焼した。この火災後、藩主忠通は小梅下屋敷に居住し、一方下谷上屋敷は再建が進められたもようで、途中享保４年（1719）３月 10 日には下谷七軒町からの出火で表長屋西角から裏門までと内長屋１棟を焼失したものの、同年６月 11 日に忠通は再建がなった下谷上屋敷へ引き移った。

しかしその翌年、享保５年（1720）３月 27 日、中橋箔屋町からの出火で下谷上屋敷は西長屋通りを焼失し、さらに翌６年（1721）３月３日には三河町からの出火でまたも全焼してしまった。これにより忠通は再び小梅下屋敷に引き移ったが、この年の６月から不快を訴えるようになり、そして７月２日、小梅下屋敷で没した。わずか数え 17 歳であった。

下谷上屋敷は焼失から約５ヶ月ののち、享保６年閏７月９日に御殿向と表長屋、その他長屋向の釿始が行われて再建に着手され、同年９月 22 日に出来した。この間、閏７月 23 日に忠通の遺領は本多家宗家より養子入りした忠如が継いだ [(4)]。忠如は相続後も宗家の幡随院下屋敷に滞在していたが、下谷上屋敷の成就に当り、実母自得院（忠直妾しげ）とともにそれへ引き移った。

享保 12 年（1727）５月 25 日、忠如と松浦肥前守篤信女吉との縁組が幕府に認められ、同年９月 19 日に結納が交わされた。享保 20 年（1735）２月 24 日、自得院（忠如実母）が下谷上屋敷より小梅下屋敷に引き移ったが、これは忠如の婚姻に伴い、その室に御殿奥向を明け渡すためだったとみられる。そして同年３月 10 日より下谷上屋敷奥御殿向の建築が開始されて６月までに出来し、同月 27 日に吉が入輿した。

なおこの間、享保 19 年（1734）９月 28 日には、下谷上屋敷の庭園築山後ろの北方にあった稲荷

が、馬場北の末に宮を建てて遷された。

忠如と正室吉の間には、元文４年（1739）12 月８日に長男忠籌（雄之進）が、寛保３年（1743）３月 27 日には長女房が誕生しており、下谷上屋敷奥向にはそれらの部屋が設けられたとみられる。

【延享～宝暦期】

延享３年（1746）９月 25 日、忠如は遠江相良より陸奥泉への転封を命じられ、翌４年（1747）２月 27 日にその受け取りが済んだ。そして以後、本多家が泉藩主を務めることとなる。

下谷上屋敷では延享４年８月 16 日より表長屋の建て直しに着工され、これまでの板屋根が瓦屋根に替えられた。同様の作事が宝暦元年（1751）９月に北長屋で、同４年（1754）４月３日には玄関向で、それぞれ行われた。当時の下谷上屋敷は享保６年閏７月から約２ヶ月半という短期間で出来したもので、また度重なる火災によって財政難だったとみられ、したがって材や格式の多くを簡略に済ませていたと考えられ、それを段々と本式の御殿に造り替えていたことが窺える。

寛延２年（1749）４月７日、忠如正室吉が病のため離縁となる。忠如の妾で男子忠貫（健之丞、八郎）を生んだ八重もまた同日暇を出された。これに伴ってとみられるが、同月 21 日に吉の女子房が中屋敷（千束龍泉寺村抱屋敷）へ、27 日には八重の子忠貫が小梅下屋敷へ、それぞれ下谷上屋敷より移された。この結果、下谷上屋敷には世子忠籌のみが残った。

藩主忠如はこの翌年から病勝ちとなり、さまざま療治を試みたものの快癒せず、宝暦４年（1754）８月 21 日に幕府へ隠居を願い、同月 29 日に許されると同時に、世子忠籌へ家督が下し置かれた。

宝暦９年（1759）３月 18 日、小梅下屋敷に居住していた忠貫が下谷上屋敷のうち西長屋南角に引き移った。忠貫はのちの同年６月 13 日に藩主忠籌の仮養子と認められており、そのための移居だったとみられ、さらに宝暦 11 年（1761）12 月晦日には下谷上屋敷の御殿内に移居した。

宝暦 14 年（明和元・1764）５月 21 日に、隠居忠如が下谷上屋敷より中屋敷（金杉抱屋敷）に引き移り、以後没するまで居住することになった。

そしてこの頃、下谷上屋敷の西長屋と北長屋、その他長屋も建て直しが行われて、宝暦 14 年３月４日までに出来、修復等も行われた。また同年中に中屋敷と小梅下屋敷でも長屋向の建て直しと修復等があった。こうした３屋敷にわたる大幅な長屋の改築は、述べてきたような藩主一家の住み替えと、さらに当時忠籌の婚姻も後述のように決まっており、そういった状況に応じた家臣団の住まいの再構成であったと考えられる。

【明和～安永期】

明和元年６月 13 日、下谷上屋敷の奥御殿向で釿始が執行されて作事が始まった。宝暦 12 年（1762）12 月 29 日、忠籌と松浦肥前守誠信女富との縁組が幕府に認められ、翌宝暦 13 年（1763）６月５日に結納が交わされており、その入輿を控えての奥御殿建設であった。建物の修復に留める場所もあったといい、従来の御殿を利用しつつの作事だったもようで、明和元年９月 21 日、富がこの御殿に入った。なお先立つ同月 16 日には、忠貫が御殿住居から表長屋東角長屋に移居となった。

明和２年（1765）８月２日、富は長男忠雄（雄之進）を出産した。同５年（1768）３月９日には忠満（熊之助）を生んだが、その産後に浮腫を生じて同年５月 15 日に没した。翌明和６年（1769）５月 29 日には表長屋東角長屋に居住していた忠貫も没した。

明和９年（天明元・1772）２月 29 日、目黒行人坂よりの出火が延焼し、同夜下谷上屋敷が全焼した。

藩主忠籌は帰国中で、屋敷には忠雄と忠満がいたはずだが、退避のもようやその後の住まいなど一切不明である。被害は「若殿様（忠雄）御土蔵 弐戸前」・「十番御土蔵」・「米土蔵」・「御服土蔵」・「建具土蔵」が焼失､「壱番御土蔵」・「弐番御土蔵」・「御椀土蔵」・「御小納戸土蔵」・「米土蔵」・「御厩土蔵」・「貸土蔵」が残り、稲荷社も焼失を免れたという。このように耐火性の土蔵も多くが焼失しており、御殿や長屋はほぼ全滅だったと推察される。

焼失から５ヶ月足らずの明和９年７月、下谷上屋敷では長屋が出来して家臣が順次引き移り、仮御殿も造られて、同年９月７日には忠籌が参府しており、それへ入り居住したものとみられる。忠雄と忠満が何れに居住していたかは不明だが、忠満は松浦左京信豊の養子となり、安永７年（1778）閏７月５日に養家に移った。

そして安永８年（1779）11 月 22 日、世子忠雄が下谷上屋敷普請出来につき引き移り、翌安永９年（1780）６月１日には忠籌が、住居向および表門通り玄関等普請出来につき参府と同時にそれへ移徙しており、焼失から約８年を経て漸く下谷上屋敷は本御殿の再建をみた。

【天明期】

天明２年（1782）３月、明和９年の焼失以来仮建てであった裏門が本建てとされ、その西方棟続きには長屋が設けられた。これは世子忠雄の婚姻に関わったものと考えられる。すなわち天明２年５～６月に忠雄と堀田豊前守正穀妹幸との縁組が進められたからで、６月１日には普請金 500 両のうち 300 両が堀田家より本多家へ渡されており、奥御殿建設のためだったとみられる。そして６月５日に結納を取り交したが、７月４日に忠雄が病気のため、暑中保養として中屋敷に内々に移った。そして 12 月９日に奥御殿向の普請が出来したものの、翌天明３年（1783）２月 19 日、両家熟談の上離縁となり、幸がその奥御殿に入ることはなかった。

忠雄は中屋敷に居続けて病は癒えたが再発も計り難く、当人もそう考えて世子退身を望み、天明５年（1785）３月４日にそれが容れられ、世子には忠誠（勇次郎）が立つこととなった。忠誠は忠籌の最初の子で妾腹のため二男とされ泉に暮していたが、忠雄の病によってか天明２年 12 月１日、突如江戸への引っ越しを命じられて、以来下谷上屋敷にあったとみられる。一方忠雄は引続き中屋敷に暮すことになった[(5)]。

天明５年 12 月 23 日、世子忠誠と板倉伊勢守勝暁女八百との縁組が決まり、翌６年（1786）３月 21 日、普請金 300 両のうち 150 両が板倉家より本多家へ渡され、４月４日には下谷上屋敷奥向の「修復」が終った。恐らく離縁となった幸の奥御殿を引き継いで八百に相応に修繕したものとみられ、八百は同月 22 日にそれへ入輿した。

天明６年７月 12 日より続いた大雨で出水が発生し、本多家は上・下・抱屋敷とも甚大な被害を蒙った。まず７月 16 日に小梅下屋敷と中屋敷が被災、忠雄は中屋敷門前の長国寺へ退避し、翌 17 日に娘の曽根らと下谷上屋敷に避難したが次第に増水したため、翌 18 日に中ノ口から乗船して湯島麟祥院に立ち退いた。そして同日夜四半時過ぎ、忠誠室八百が玄関から船に乗り蔵前より駕籠で実家板倉家の小川町上屋敷に退避、忠誠も同屋敷へ子刻過ぎ、蔵前まで船で、以後は平時の供立てで入り、忠籌は翌日寅刻過ぎに馬で三河岡崎藩本多家の日比谷上屋敷に退避した。家中は家族らと主家が用意した雇船で 17 日夕より知己へ避難していた。同月 23 日に下谷上屋敷から大方水が引き忠籌が帰座、翌日から家中が、27 日からは奥女中が追々戻り、28 日に忠誠と八百も帰った。被害状況は不明だが、

戻った家中へは屋敷の所々に居風呂を設置して随意の入湯を命じ、奥女中へは長局多湿につき蒼朮[6]を下し、以後も薬湯や煎じ薬を下賜するなど、復旧作業と浸水家屋に住み続けるに当り、衛生と湿気への対策に腐心したようすが窺われる。

天明７年（1787）７月 17 日、忠籌は若年寄を命じられた。そして同月 25 日、酒井大学頭忠崇の大手前屋敷を家作とも下された。その代替として下谷上屋敷の家作とも差し上げを命じられ、それが酒井に下された。大手前屋敷は幕閣の役屋敷で、若年寄を務めていた酒井忠崇の父忠休が没したため、同役となった忠籌に入れ替えられたものであった。同年８月７日、大手前屋敷を酒井家より受け取り、家中の移居が完了してのち、８月13日に忠籌と世子忠誠、八百とも引き移った。そしてこの翌々15日、下谷屋敷は酒井家に引き渡された。

４．松山藩酒井家屋敷時代

【天明～寛政期】

天明７年７月 25 日、出羽松山藩主酒井大学頭忠崇へ大手前上屋敷の家作とも差し上げが命じられ、本多弾正少弼忠籌の浅草七軒町屋敷の家作とも下賜が伝えられた。若年寄を務めていた忠崇の父忠休が同年４月 18 日に没し、その役屋敷が新たに若年寄となった本多忠籌に与えられて入れ替えとなったのである。８月７日に本多家へ大手前屋敷を引き渡すことが決まり、先立つ８月５日に忠崇らは一旦扇橋抱屋敷に引き、同月 15 日、本多家より浅草七軒町屋敷を受け取ると翌々 17 日から家中の引っ越しが始まり、22 日に忠崇一家の引き移りも済んだ。そして以後幕末まで酒井家上屋敷となるが、述べているように酒井家ではこの屋敷を「浅草七軒町屋敷」と称した。

寛政６年（1794）11 月 25 日、忠崇の聟養子、忠礼が浅草七軒町上屋敷に移り住んだ。忠崇は長男粂次郎を天明８年（1788）８月 16 日に亡くしていたため、宗家の出羽庄内藩本多家より藩主忠温二男忠順の長男忠礼（春之進）を、養女鉞と婚姻させるべく迎えたのである。鉞は忠休三男、つまり忠崇の実兄で旗本水野越中守忠栄の養子となった忠体の女で、時期は不詳だが忠崇の養女となり浅草七軒町屋敷に暮したとみられる。奥向では寛政８年（1796）11 月 11 日に忠崇正室きい、翌９年（1797）８月 19 日には忠崇実母皆如院と立て続けに主人を失い、以後は鉞がその立場を担った可能性がある。

寛政 10 年（1798）６月 15 日、世子忠礼の婚礼が同年秋と定まった。そして翌７月に忠崇の新御殿が普請されることとなり、それが出来して９月 24 日、忠崇と忠礼の御殿の住居替えが行われた。後述の推移からすると、忠崇の新御殿はいわば隠居屋敷だったと理解され、忠崇はそれへ引き移り、表御殿を近く藩主となる忠礼に明け渡したものとみられる。すなわちその４日後、寛政 10 年９月 28 日に忠礼と鉞の結納と婚儀が執り行われて 11 月 26 日に忠崇は隠居し、忠礼が家督を継いだのであった。

【享和～文化期】

享和２年（1802）、浅草七軒町上屋敷の西長屋 35 間のところが建て直された。これには御用部屋、御物頭部屋、御家中部屋、御近習部屋、御手廻部屋、通部屋、弦木啓助・斉藤伝吾・阿部与兵衛の部屋、御小姓部屋、外明部屋があり、うち御用部屋と御物頭部屋は門付きで本多家時代の名残だったという。

文化３年（1806）３月４日の芝田町よりの出火が延焼し、翌５日未明に浅草七軒町上屋敷が類焼

した。藩主忠礼は大坂加番のため不在であった。この火災により隠居忠崇は幕府医師橘隆庵の上野池之端抱屋敷に退き、即日豊後府内藩松平長門守近儔の本所石原中屋敷に移り、忠礼室鉞は息女たちと実家の旗本水野錦之進本郷御弓町屋敷に立ち退いた。忠礼は本腹に３人の女子を儲けていた。また真鶴（忠休二男忠起女、忠休養女、のち勝）は同居していた皆如院の没後も浅草七軒町上屋敷に居残っていたが、この機に実兄忠夷（忠起長男）一家の住まいとなっていた酒井家四谷仲町中屋敷に退避した(7)。

浅草七軒町上屋敷は、文化３年３月のうちに長屋向普請掛、４月になって仮住居・長屋向・隠居御殿普請御用掛が命じられた。５月には上州領桐生町・大間口村から長屋向普請のため御用金を徴収して着工・出来したもようが、同年中に在府・在勤の者へ新長屋への引移費用貸与があったことから推定される。文化３年８月 21 日に忠礼が大坂より帰府した際、何れの屋敷に入ったかは明らかでないが、その後 10 月に家中へ５ヶ年の寸志上米を命じ、領民に上屋敷類焼につき寸志金を上納させ、また手当金を得ようと幕府に大坂加番を内願し、文化４年（1807）２月に命じられて同年７月から翌文化５年（1808）８月８日まで勤めた。そうして調達した資金で御殿向の再建に着工したもようで、同年 11 月には仮御殿と長屋向、さらに隠居忠崇の御殿も建設を終えた(8)。

それから６年後の文化 11 年（1814）10 月、江戸屋敷の御殿普請が計画されて資金調達について調査のため家臣を上州陣屋に派遣し、翌 11 月には上州領分より冥加金 1,550 両が上納された。そして文化 12 年（1815）２月には御殿向普請御用取扱が任命されて着工したもようで、その普請が５ヶ月を経た７月に出来したことから引き移りが行われた。この御殿向普請とは、浅草七軒町上屋敷の仮御殿を正式な御殿に改めたものと考えられ、出来した御殿に引き移ったのは忠礼ら藩主一家とみられる。

【文政～嘉永期】

文政４年（1821）７月 23 日、藩主忠礼が江戸で没して、９月 16 日にその長男で世子となっていた忠方が遺領を継いだ。忠礼室の勇（鉞より改名）は光寿院と号しており剃髪したようである。また文政７年（1824）４月６日には、隠居忠崇も江戸で没した。前述のように忠崇は浅草七軒町上屋敷の隠居御殿に暮していた。

文政 11 年（1828）正月８日、浅草西蓮寺門前よりの出火が浅草七軒町上屋敷にも及んだが、裏手の北長屋と厩が類焼するに留まった。同年８月 25 日には江戸に光寿院の御殿が出来して移居しており、これは浅草七軒町上屋敷のうちであった。

文政 12 年（1829）６月７日、藩主忠方の縁女、豊前中津藩主奥平大膳大夫昌高女鉄が、奥平家屋敷が類焼したため急遽酒井家屋敷に逗留することとなった。既述のように光寿院は前年に別御殿に移居しており、したがって浅草七軒町上屋敷奥向に入ったものとみられる。そして天保２年（1831）６月、鉄は縁女のまま浅草七軒町上屋敷に引き移り、翌同３年（1832）閏 11 月 26 日に内輪の婚儀、さらに翌同４年（1833）４月 22 日に婚姻が整って正式に奥向の主人となった。鉄は天保６年（1835）６月 14 日、嫡子となる男子を生んだが同日に亡くし、以後子のないまま天保 15 年（弘化元・1844）６月晦日に没した。

弘化２年（1845）４月 18 日、忠方の長男忠良（聡七郎）が松山より江戸に着いた。忠良は天保２年５月 24 日に妾腹に出生した忠方最初の男子であった。忠良出府の命は俄だったようで、迎える

江戸屋敷では普請方が大騒ぎで当座の部屋を何とか間に合わせたという。そして弘化２年９月５日に幕府へ忠良世子の届出を済ませ、10 月１日に将軍家慶と世継家祥に初目見した。それから忠方は隠居を出願したもようで、11 月 20 日に許可されて忠良が家督を継いだ。忠方は隠居に当り本所原庭の織田兵部少輔抱屋敷を譲り受けて、弘化２年 12 月 25 日に浅草七軒町上屋敷から移り以後居住した。

嘉永２年（1849）８月、藩主忠良は武蔵岩槻藩主大岡内膳正忠固女晴と婚姻した。これに先立ち同年３月には浅草七軒町上屋敷の奥御殿向普請が行われ、４月に晴が引き移ったもようである。そして嘉永３年（1850）６月 12 日、晴は女子を生んだが死産で、自身も肥立ちが悪く同月 20 日に没した。翌嘉永４年（1851）２月、忠良は志摩鳥羽藩主稲垣摂津守長明の妹鋭と結納、同月 26 日に鋭が浅草七軒町上屋敷に入輿して４月３日には婚姻が成立したもようで、鋭は正式に忠良の継室となった。翌嘉永５年（1852）４月６日に鋭は嫡子となる長男春之進を生んだが、翌年７月 15 日にその子は没した。

【安政～文久期】

安政２年（1855）10 月２日夜、いわゆる安政大地震が発生した。藩主忠良は帰国中であった。浅草七軒町上屋敷では長屋向が所々大破したが、夜四ッ時（午後 10 時）頃の発生で就寝前の人が多く怪我人が少なく、また揺れが東西で南北に延びる長屋は多く潰れたが、それらは勤番の住居か役所で、定府の住居は少なかったため被害も少なく、藩主帰国中の発生だったことが幸いした。御殿向については無事ながら、傾いた箇所も多くあったという。

長屋向の再建は、早速普請奉行等の役人が命じられて着工したもようで、12 月には長屋が潰れた定府らに手当金が下されており、出来したことが窺われる。この再建に際しては、普請奉行下役２名が職人との契約金の１割を着服していたため家名断絶、普請奉行は監督不行届で隠居を命じられるという不祥事もあった。

万延元年（1860）４月 28 日、忠良は正室鋭と離縁し、翌文久元年（1861）10 月 14 日には光寿院が浅草七軒町屋敷の別御殿で没した。その御殿跡には新たに鉄炮角場を設けることとなり、文久３年（1863）２月８日に幕府に伺いを立て、翌々 10 日に場所の見分を受けて同月 30 日に許可された。

【慶応～明治期】

慶応元年（1865）９月９日、忠良の妾腹の男子、忠匡と忠盛が松山より江戸屋敷に着いた。同月 24 日には両人の住居取建総入用と奥広敷大破につき修復等の費用見積りが普請奉行より提出され、10 月６日に資金調達の仕法が示されており、何れも浅草七軒町上屋敷で着工されたとみられる。その後、慶応２年（1866）11 月 15 日に忠匡が世子となった。

慶応３年（1867）12 月９日の王政復古、さらに翌慶応４年（明治元・1868）２月 12 日の将軍慶喜恭順謹慎を受けて、同月 15 日に酒井宗家より家族一同江戸を引き払い、在所で恭順する旨を届け出て下向する積もりが伝えられた。ここから忠良も同月 20 日に帰国の暇を乞う願書を幕府に提出、許可されたことから同月晦日に松山に向けて江戸を発駕し、女中らは先立つ 28 日に出立、忠良男子の忠匡・忠盛と前年に出生した忠堯も３月８日に江戸を発し、同日に定府の面々へも勝手次第在所に下ることが許された。こうして居住者の概ねが帰国したのち浅草七軒町上屋敷は、世間的には旗本甲斐庄帯刀正光の名義とされたもようで、これは慶応４年３～閏４月の江戸城開城前後の混乱の中で留守屋敷を温存する一策だったとみられる。甲斐庄家は忠礼三男忠誠の養子先で、正光はその子であり

屋敷を託したものと考えられる。

その後、慶応４年５月に成立した奥羽越列藩同盟に松山藩も与して新政府軍に対抗したが、結局明治元年９月 16 日、宗家隠居酒井忠発による降伏謝罪の決定に従った。そして忠良は新政府より、11 月５日に官位停止と東京邸取り上げが沙汰され、12 月８日には領知のうち 2,500 石の召し上げと隠居を命じられ、家名については相続が許されて、同月 15 日に世子忠匡が２万 2,500 石を継いだ。
新たに藩主となった忠匡は、新政府より出京を命じられて明治元年 12 月 20 日に松山を発った。そのときの東京での滞在先は不明だが、甲斐庄家名義としてあった浅草七軒町屋敷に入った可能性が高い。そして翌明治２年（1869）１月 25 日に改めて従前のとおり浅草七軒町と四谷千駄ヶ谷の屋敷が下され[9]、さらに同年６月 22 日、忠匡が松嶺藩知事に任命された際に[10]、浅草七軒町屋敷を藩邸、四谷千駄ヶ谷屋敷を私邸としたもようである。

明治３年（1870）７月､廃藩置県により忠匡は松嶺藩知事を免じられた。これと同時に松嶺藩（県）邸である浅草七軒町屋敷を願って酒井家の私邸に転換し、一方四谷千駄ヶ谷屋敷を返上した。こうして浅草七軒町屋敷は、酒井家の住宅としてその後も利用されることになった。

【屋敷絵図について】

今回の史料所在調査で、鶴岡市郷土資料館所蔵「阿部正己文庫」のうち「松山藩史料」に松山藩江戸屋敷の絵図が２点あることが判明した。①「〔江戸屋敷間取図〕」（第 181 図）と②「〔松山藩江戸屋敷間取図〕」（第 182 図）である。ただし①・②とも何れの屋敷か、また年代も不明なため、それらの推定も含めて各々検討する。

①〔江戸屋敷間取図〕…法量 653mm ＊ 950mm、罫線あり（ヘラ引き）、縮尺６分計、彩色、凡例あり

まず、建築物の空間構成や部屋名から、浅草七軒町上屋敷を描いたものと判断される。描写は表門とそれに続く表長屋と西側の長屋、そして殿舎で、罫線によれば南北 54 間･東西 38 間の範囲である。屋敷地全体は南北 86 間５尺２寸５分・東西 51 間７寸５分であり[11]、したがって描かれたのは敷地の一部で、つまり敷地北部の概ねと東部分は描写されていないことになる。

年代は「伊藤猪三（散）太長屋」･「斎藤清太長屋」の記載から、「松嶺史料」によれば伊藤・斎藤とも家臣で文政 10 年（1827）の分限帳に名前があり、また伊藤は天保３年８月にも記述があることからその頃の様相と考えられ、したがって描かれた御殿は文化 12 年７月に出来したものと推定される。御殿内部は、座敷向・板ノ間・庭・塀が色分けされていることが凡例から理解され、部屋名と畳数、天井の有無、建具や窓の仕様の記載が見て取れる。さらに間取り等を修正した貼紙や書き込みが多数あり、のちまで改築に関わって利用されたもようが窺える。

続いて空間構成について、南側中央に表門がある。殿舎は敷地西寄りにあって南から北へと展開しており、その概ね南部が表向、北部が奥向となっている。表向は、表門の向かいに式台（玄関）があり、西方に儀礼等に関わる座敷、東方の南側に藩役所や役人詰所等、北側に当主の居間がある。一方奥向は、西方ほぼ中央に式台（玄関）、その北側に広敷や役人詰所があり、これと廊下を隔てた東側に正室の居間、その北西側に当主子女の部屋がある。また奥向の北東に池が看取され、位置的に今回の発掘調査で検出された池の遺構に相当するものと判断される[12]。

さて敷地北部の描かれていない範囲については、まず文政 11 年正月８日の火災で裏手の北長屋と

厩が類焼しており、そうした施設があったことは確実である。また文政 12 年 8 月 25 日に出来した光寿院の別御殿も、立地可能なのはこの範囲である。さらに絵図の描写に土蔵や馬場、角場が見当たらず、それも北部にあったものと推定される。

②〔松山藩江戸屋敷間取図〕…法量 796mm ＊ 1076mm、罫線なし、縮尺不明、彩色、凡例なし

標題によれば江戸屋敷の図である。描写には表門と表長屋、殿舎・庭園、内長屋と土蔵が見て取れるが、結論から述べれば、どの屋敷のいつ頃の様相かを知る手掛かりは見出されない。

方位が不明なので仮に表門のある側（第 182 図では向かって右）を下にして述べると、殿舎の空間構成はほぼ中央を境に、向かって左が表向で広間･役所等、右が藩主一家の住居と二分されている。左は玄関正面から上へ延びる廊下の両側に部屋が展開し、突き当り右に藩主執務室とみられる部屋がある[(13)]。一方右は下から藩主の居住空間で、これは池を擁した庭園に面している。そこから上へ夫人の居間、そして玄関･広敷等奥向の役所を経て右に屈曲し、子女の居間、さらに隠居住居へと連なっている。

以上の空間構成と部屋のあり方をみると、この御殿は上屋敷的な要素を持つといえ、浅草七軒町屋敷の可能性も考えられる。ただ①の絵図に比すと大幅に小規模で、特に表の役所向は簡素であり、果して江戸時代の屋敷の様相なのかも含めて検討の余地がある。

おわりに

台東区元浅草遺跡のうち、白鷗高校地区は江戸時代初め、幕府組屋敷・同心屋敷地として利用されていたが、その後大名家である岡山藩池田家の手にわたって世子の居住する屋敷となり、以後は泉藩本多家、松山藩酒井家の上屋敷として利用された。当該地区は 1990 年に発掘調査報告書が発行されて、土地利用の変遷および災害についての多少の記述はなされたが、池田家が所持した時代があったことは本稿で新たに判明した事柄である。また酒井家時代の屋敷絵図も見出され、その土地利用のあり方も明らかにすることができた。

【註】

(1) 以下、本稿の記述に関する出典は第 62 表の「出典」欄に記し、それ以外による場合のみ註を付す。

(2) 岡山藩の史料では普請や作事を「土木」と表現している。『日本国語大辞典』(小学館)によれば「土木」には「木材、鉄材、土石などを使ってする建物、道路河川、港湾などの工事。土木工事。」の意がある。

(3) 忠晴の長男忠直は宝永 4 年（1707)、宗家本多能登守忠常の養子となったが、その長男忠通は本多家に残り、忠晴の嫡孫となった。

(4) 忠如は忠直の五男で、忠通には実弟に当る。

(5) 寛政 12 年（1800） 4 月 9 日、養生のため泉に発つまで居住した（いわき市教育文化事業団寄託本多忠晃家文書「系図明細書」)。

(6) 蒼朮は健胃・利尿・解熱・鎮痛や発汗をとめたり湿気を払ったりするのに用いられる生薬である。『日本国語大辞典』)。

(7) 寛政 9 年の皆如院の死後、忠崇は真鶴を忠夷方に逗留させる意向だったが当人が望まず、浅草七軒町屋敷に留まり暮していた。忠夷は寛政元年（1789)、忠崇の後継者問題に不満を持ち幕府に出訴に及んだが、心得

違いとされて押込の処分を受け、赦免後は酒井家の厄介として四谷仲町中屋敷に一家ともども置かれていた。なお真鶴はこの後浅草七軒町屋敷には戻されなかったもようである。

(8)「松山藩史料」によれば、家臣の田口元八郎は文化３年４月に上屋敷類焼につき普請御用扱を命じられ、そして文化５年 11 月になって「一、去寅年御類焼後、御仮住居・御長屋向御普請御用、并此度定崇院様御殿御普請御用掛相勤候、(田口元八郎)」(( ) ママ)、文化３年類焼後、仮御殿・長屋向普請御用と今度隠居忠崇御殿普請の御用掛を務めた、つまり職務を完了したといい、言い換えれば文化５年 11 月にそれらの建設がすべて終ったと理解される。

(9) 四谷千駄ヶ谷屋敷は弘化３年（1846）７月 18 日に相対替により獲得した 300 坪とみられる。

(10) これと同日、松山は松嶺と改称された。

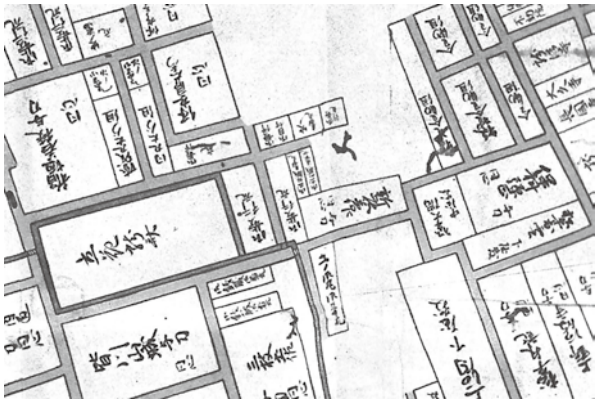
(11)「忠以公忠恕公迄御四代之記　智」(いわき市教育文化事業団寄託「本多忠晃家文書」) のうち「(忠晴履歴)」寛文 10 年条。

(12) 浅草七軒町屋敷は、現在の都立白鷗高校の南側街区の一部、具体的には台東区元浅草一丁目四番の中央～西部と同五番の中央～東部を含む敷地であった。その南の敷地境から検出された池の遺構南端の距離は約 70 メートル＝ 38.5 間と算出される。①の絵図で南側屋敷境から池の南端の距離は 42 間＝ 75.6 メートルで、双方の距離は概ね同様といえ、したがって検出された池は絵図に描かれたものと同じと判断される。

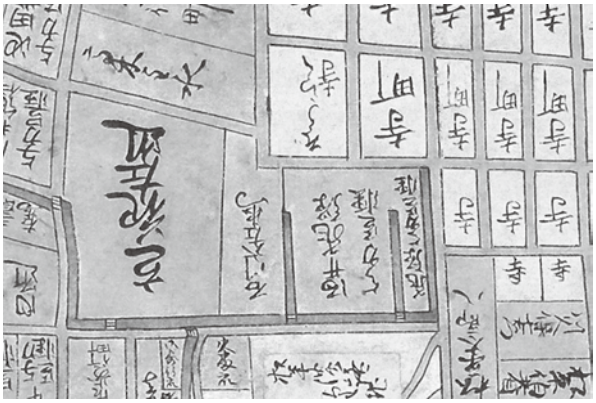
(13) 部屋には「政聴」とあり意味は不明だが、「聴政」は執政することの意がある。この部屋は役所向で唯一、床を備えた格式の高い造りで、したがって藩主の執務室の可能性がある。とすると、あるいは「政廳（庁)」の書き損じだったことも考えられるのではないか。

【謝辞】

史料の所在調査と閲覧に当り、本多忠賴様、中村矩之様、いわき市教育文化事業団木幡成雄様、鶴岡市郷土資料館今野章様、学習院女子大学岩淵令治様にたいへんお世話になりました。記して感謝致します。



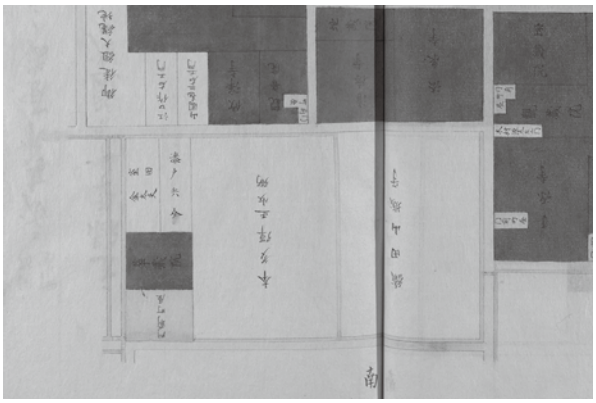
第 172 図　江戸全図（部分、臼杵市教育委員会所蔵）



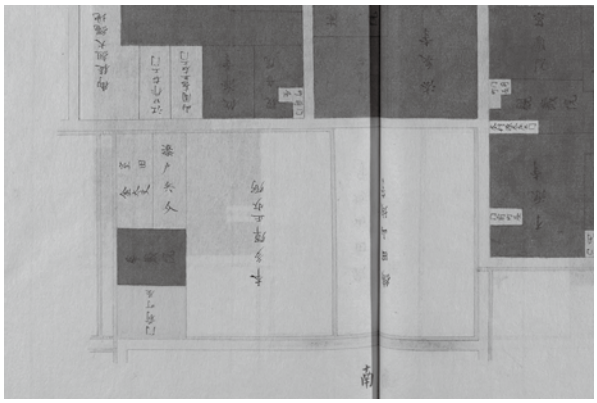
第 173 図　江戸大絵図（部分、公益財団法人三井文庫所蔵）



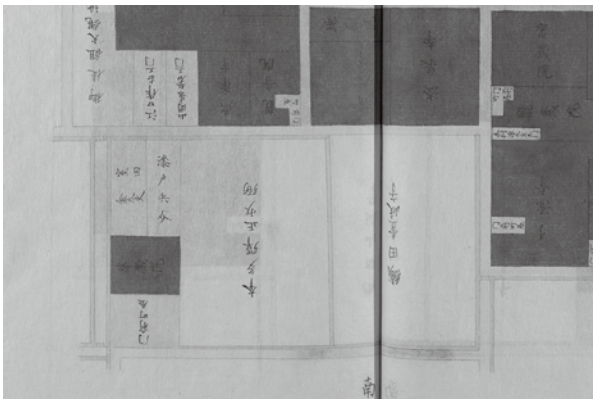
第 174 図　新板江戸外絵図 東ハ浅草、北ハ染井、西ハ小石川（部分、国立国会図書館デジタルコレクション）



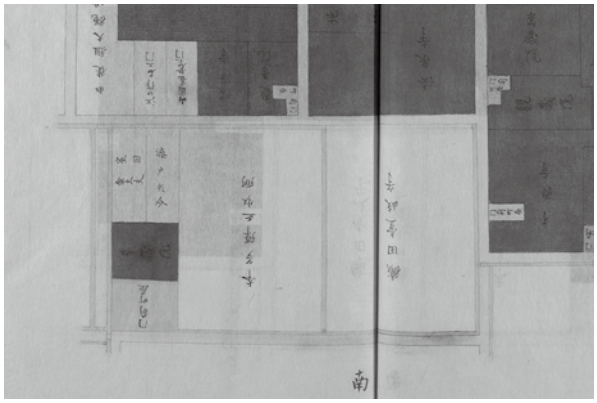
第 175 図　御府内往還其外沿革図書 延宝年中之形（部分、国立国会図書館デジタルコレクション）



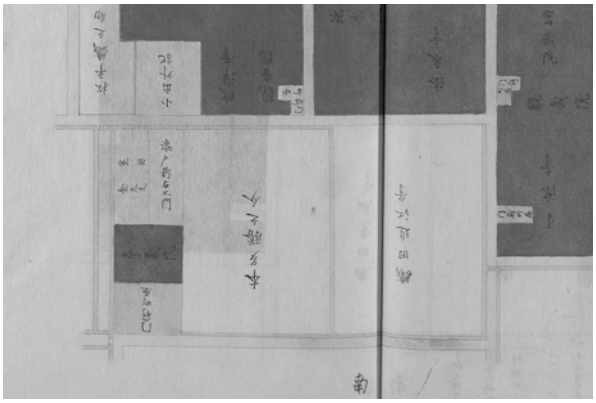
第 176 図　御府内往還其外沿革図書 貞享四卯年之形（部分、国立国会図書館デジタルコレクション）



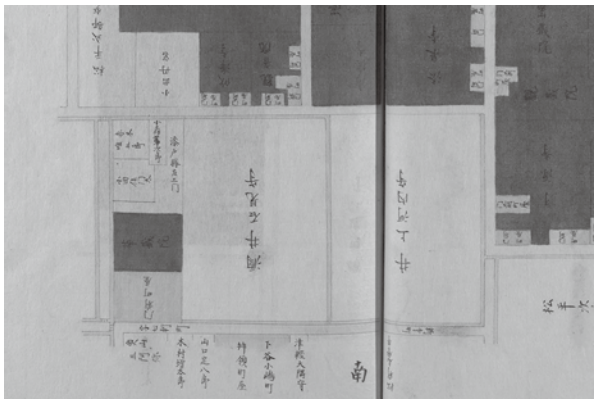
第 177 図　御府内往還其外沿革図書 元禄十一寅年之形（部分、国立国会図書館デジタルコレクション）



第 178 図　御府内往還其外沿革図書 宝永二酉年之形（部分、国立国会図書館デジタルコレクション）



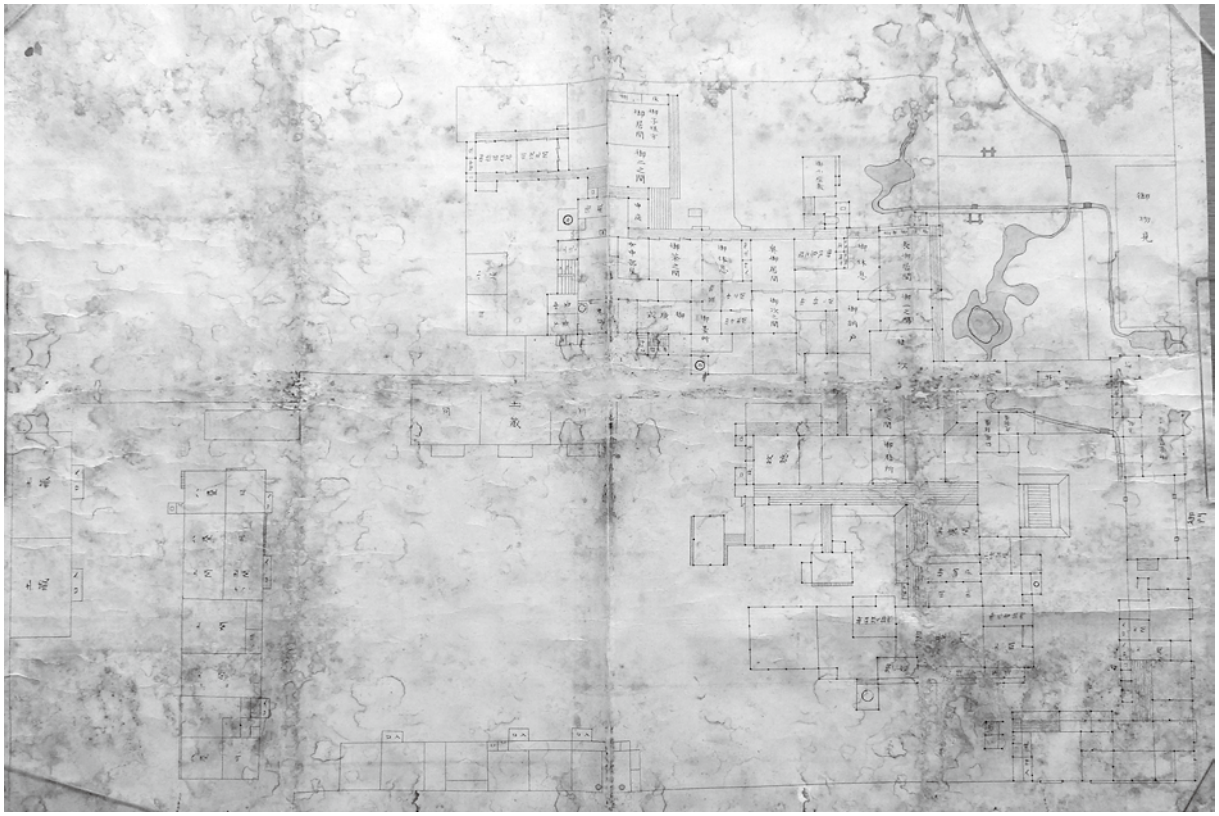
第 179 図　御府内往還其外沿革図書 享保年中之形（部分、国立国会図書館デジタルコレクション）



第 180 図　御府内往還其外沿革図書 当時（弘化２年）之形（部分、国立国会図書館デジタルコレクション）



第 181 図　〔江戸屋敷間取図〕（鶴岡市郷土資料館「阿部正己文庫」のうち「松山藩史料」345）



第 182 図　〔松山藩江戸屋敷間取図〕（鶴岡市郷土資料館「阿部正己文庫」のうち「松山藩史料」346）

第 61 表　屋敷地所有者等履歴

姓名	よみ	通称等	生没年	当主期間	高	実父 / 実母 / 正室妻	履歴	出典
新庄 直房	しんじょう なおふさ	甚助 / 宮内 / 美作守 / 従五位下	文禄 4 ～慶安 2 (1595 ～ 1649)	慶長 18 ～慶安 2 (1613 ～ 1649)	3,000 石 → 4,000 石	新庄駿河守直頼 (四男)/ 佐久間大学介盛重女 / 川口長三郎近次女	慶長 3(1598) 家康に初目見 (4 歳) → 同 18(1613).9.27 父直頼の遺領常陸・下野国内に知行 3,000 石分知、秀忠に勤仕→寛永 7(1630).12.29 従五位下美作守→同 9(1632).5.- 使番→同 .11.- 目付→同 10(1633).12.26 甲斐国内に加増 1,000 石→同 12(1635).11.1 小性組組頭→同 13(1636).9.10 書院番頭→慶安 2(1649).10.22 没、享年 55、法名了智、葬地は牛込天徳寺	寛政譜 13-277
酒井 重之	さかい しげゆき	与九郎 / 作右衛門 / 飛騨守 / 従五位下	慶長 8 ～万治 3 (1603 ～ 1660)	慶長 18 ～万治 3 (1613 ～ 1660)	2,000 石 → 3,000 石	酒井与九郎重正 (長男)/ 菅沼織部正定盈女 / 久世三左衛門広宣女	酒井重正遺腹の子にして祖父酒井作右衛門重勝に養われる→慶長 15(1610) 家康に初目見 (8 歳) → 同 18(1613) 祖父重勝没後、幼きにより遺跡のうち近江国内の知行および与力足軽の給地を収公されて、武蔵・上総国内 2,000 石→元和 2(1616) 小性組→のち書院番→寛永 15(1638).12.16 書院番組頭→同 16(1639).12. 晦日布衣→慶安 3(1650).11.19 小性組番頭→同 4(1651).8.16 従五位下飛騨守→同 .11.21 加増 1,000 石→明暦 2(1656).7.9 書院番頭→万治 3(1660).11.8 没、享年 58、法名寿澗、葬地は比企郡福田村成安寺	寛政譜 2-5664
池田 光政	いけだ みつまさ	初幸隆 / 新太郎 / 侍従 / 従四位下 / 左少将	慶長 14 ～天和 2 (1609 ～ 1682)	元和 2 ～寛文 12 (1616 ～ 1672)	320,000 石 → 315,000 石余	池田武蔵守利隆 (長男)/ 台徳院養女・榊原式部大輔康政女 / 本多中務大輔忠刻女	慶長 16(1611) 秀忠に初目見 (3 歳) →元和 2(1616) 遺領を継ぎ、播磨国姫路城に住す→同 3(1617) 播磨国を改め因幡・伯耆両国 32 万石を領し、因幡国鳥取城に住す→寛永 9(1632).6.18 因幡・伯耆両国を改め備前国および備中国内に 31 万 5,000 石余を領し、備前国岡山城に住す→寛文 12(1672).6.11 致仕→天和 2(1682).5.22 岡山で没、享年 74、法名通源院、葬地は備前国和気郡敦土山 (儒礼)	寛政譜 5-47
池田 綱政	いけだ つなまさ	初輿輝 / 太郎 / 三左衛門 / 伊予守 / 侍従 / 従四位下 / 左少将	寛永 15 ～正徳 4 (1638 ～ 1714)	寛文 12 ～正徳 4 (1672 ～ 1714)	315,000 石余	池田光政 (長男)/ 本多中務大輔忠刻女 / 丹羽左京大夫光重女	寛永 16(1639) 家光に初目見 (2 歳) → 承応 2(1653).12.23 従四位下侍従伊予守、綱政と改名→寛文 12(1672).6.11 封を継ぎ、弟信濃守政言に新墾田 25,000 石、主税輝録に 15,000 石分知→元禄 9(1696).12.5 少将→正徳 4(1714).10.29 岡山で没、享年 77、法名曹源院、葬地は岡山曹源寺	寛政譜 5-48
本多 忠晴	ほんだ ただはる	吉左衛門 / 弾正少弼 / 従五位下	寛永 18 ～正徳 5 (1641 ～ 1715)	寛文 2 ～正徳 5 (1662 ～ 1715)	2,500 石 → 10,000 石 → 15,000 石	本多能登守忠義 (四男)/ 森美作守忠政女 /—	寛文 2(1662).11.25 父忠義の封地白川領のうち新墾田 2,500 石を分知される→同 .12.5 家綱に初目見→同 4(1664).5.- 兄・陸奥浅川藩主本多越中守忠以病篤きに臨み養子となる→同 .7.18 遺領を継ぎ、旧知 2,500 石は宗家下野守忠平に還附→同 .12.28 従五位下弾正少弼→天和 1(1681).9.15 三河国内に移されて、伊保に住す→元禄 5(1692).6.27 大番頭→同 15(1702).6.10 奏者番兼寺社奉行→宝永 2(1705).12.11 遠江・三河国内に加増 5,000 石、都合 15,000 石→同 7(1710). 閏 8.- 三河国内の 9,000 石余を遠江国内に替えられて、相良に住す→正徳 3(1713). 閏 5.7 両職を辞す→同 5(1715).4.12 没、享年 75、法名清源院、葬地は相良宝泉寺	寛政譜 11-230
本多 忠通	ほんだ ただみち	勝之助 / 弾正少弼 / 従五位下	宝永 2 ～享保 6 (1705 ～ 1721)	正徳 5 ～享保 6 (1715 ～ 1721)	15,000 石	本多信濃守忠直 (二男)/ 石井氏 /—	宝永 4(1707).10.10 嫡孫承祖となる → 正徳 5(1715).6.6 祖父忠晴の遺領を継ぐ (11 歳) → 同 . 同 .11 家宣に初目見→享保 4(1719).12.18 従五位下弾正少弼→同 6(1721).7.2 没、享年 17、法名桂光院、葬地は牛島弘福寺	寛政譜 11-231
本多 忠如	ほんだ ただゆき	時之助 / 讃岐守 / 越中守 / 従五位下 / 致仕号冲翁	正徳 2 ～安永 2 (1712 ～ 1773)	享保 6 ～宝暦 4 (1721 ～ 1754)	15,000 石	本多信濃守忠直 (五男)/ 稲垣氏しげ (自得院) / 松浦肥前守篤信女吉	享保 6(1721).7.- 兄忠通の終に臨み養子となる→同 . 閏 7.23 遺領を継ぐ (10 歳) →同 11(1726).8.28 吉宗に初目見→同 .12.16 従五位下讃岐守→同 13(1728).10.6 越中守→延享 3(1746).9.25 相良を転じて陸奥国泉に移される→宝暦 4(1754).8.29 致仕→安永 2(1773).10.24 没、享年 62、法名葆真院、葬地は湯島麟祥院	寛政譜 11-231/ 藩主人名 1-44
本多 忠籌	ほんだ ただかず	雄之進 / 大蔵 / 弾正少弼 / 弾正大弼 / 従五位下 / 従四位下 / 侍従 / 致仕号水翁	元文 4 ～文化 9 (1739 ～ 1812)	宝暦 4 ～寛政 11 (1754 ～ 1799)	15,000 石 → 20,000 石	本多忠如 (長男)/ 松浦肥前守篤信女吉 / 松浦肥前守誠信女富	宝暦 4(1754).7.1 家重に初目見 (16 歳) →同 .8.29 封を継ぐ→同 .12.18 従五位下弾正少弼→天明 7(1787).7.17 若年寄→同 8(1788).4.4 月番を許され、御側のことをも承る→同 .5.15 御側御用人、従四位下→同 . 同 .18 弾正大弼→寛政 2(1790).4.16 老中格、奥の務めを兼ね、武蔵・上野国内に加増 5,000 石、城主に准ぜらる→同 3(1791).12.15 侍従→同 4(1792).10.17 多病により、以来は奥のことを専らとする→同 9(1797).2.15 奥の務めを許される→同 10(1798).10.26 職を許される→同 11(1799).10.23 致仕、泉に住す→文化 9(1812).12.15 没、享年 74、法名賢剛院、葬地は牛島弘福寺	寛政譜 11-231/ 磐城泉本多家譜 (東京大学史料編纂所所蔵)
酒井 忠崇	さかい ただたか	久米次郎 / 大学頭 / 石見守 / 従五位下	宝暦元～文政 7 (1751 ～ 1824)	天明 7 ～寛政 10 (1787 ～ 1798)	25,000 石	酒井石見守忠休 (四男)/ 幕臣前島平左衛門姉千代 / 松平主膳正近形女麟のちきい	明和 4(1767).7.3 嫡子となる → 同 . 閏 9.1 家治に初目見→同 .12.16 従五位下大学頭→天明 7(1787).6.13 遺領を継ぎ、出羽国松山城に住す→寛政 7(1795).9.18 石見守→同 10(1798).11.26 致仕→文政 7(1824).4.6 江戸で没、享年 74、法名定崇院、葬地は牛込光照寺	寛政譜 2-56/ 御家御系譜・酒井氏系図 (鶴岡市郷土資料館所蔵)
酒井 忠礼	さかい ただのり	春之進 / 大学頭 / 従五位下	安永 8 ～文政 4 (1779 ～ 1821)	寛政 10 ～文政 4 (1798 ～ 1821)	25,000 石	酒井左衛門尉忠温二男豊前忠順 (長男)/ 亀菊 / 水野内蔵允忠体女・酒井忠崇養女鉞のち勇	寛政 6(1794).4.24 忠崇の養子となり、その女を室とする→同 7(1795).10.15 家斉に初目見→同 .12.17 従五位下大学頭→同 10(1798).11.26 封を継ぐ→文政 4(1821).7.23 江戸で没、享年 43、法名常智院、葬地は牛込光照寺	寛政譜 2-56/ 酒井氏系図 / 藩主人名 1-210
酒井 忠方	さかい ただみち	春之進 / 大学頭 / 石見守 / 従五位下	文化 5 ～明治 20 (1808 ～ 1887)	文政 4 ～弘化 2 (1821 ～ 1845)	25,000 石	酒井忠礼 (長男)/ とき / 奥平大膳大夫昌高女鉄	文化 8(1811).4.11 忠礼の嫡子となる → 文政 4(1821).9.16 遺領を継ぐ → 同 5(1822).2.15 家斉・家慶に初目見→同 .12.16 従五位下大学頭→同 9(1826).6.18 石見守→弘化 2(1845).11.20 致仕、本所原庭別邸に住す→明治 20(1887).2.14、享年 80、法名高嶽院、葬地は牛込光照寺	酒井氏系図 / 羽後松嶺酒井家譜 (東京大学史料編纂所所蔵) / 藩主人名 1-210
酒井 忠良	さかい ただよし	聟七郎 / 大学頭 / 紀伊守 / 従五位下	天保 2 ～明治 17 (1831 ～ 1884)	弘化 2 ～明治元 (1845 ～ 1868)	25,000 石 → 22,500 石	酒井忠方 / しづ / 大岡主膳正忠固女晴→稲垣摂津守長明妹鋭	弘化 2(1845).10.1 家慶・家祥に初目見→同 .11.20 封を継ぐ→同 .12.16 大学頭→嘉永 4(1851).6.13 奏者番→文久 2(1862). 閏 8.23 職を辞す→慶応 1(1865).8. 晦日 紀伊守→明治 1(1868).12.8 領地のうち 2,500 石召上、隠居を命じられる→明治 17(1884).10.1 没、享年 54、法名松寿院、葬地は牛込光照寺	酒井氏系図 / 羽後松嶺酒井家譜
酒井 忠匡	さかい ただまさ	信三郎 / 大学頭 / 従五位下	安政 3 ～明治 44 (1856 ～ 1911)	明治元～ 44 (1868 ～ 1911)	22,500 石	酒井忠良 / 波 / 稲田邦植妹陽→大木喬任女栄子→武笠幸息女歌	明治 1(1868).12.15 家を継ぐ→同 2(1869).6.22 松嶺藩知事→同 .7.4 大学頭→同 4(1871).7.14 廃藩置県、知藩事を免ぜられ、松嶺県令→同 .11.2 松嶺県、酒田県合併により職を辞す→同 44(1911).4.30 没、享年 56、法名賢光院、葬地は谷中天王寺	酒井氏系図 / 藩主人名 1-210/『松山町史』上 / 松山町史年表

第 62 表　元浅草遺跡白鷗高校地区　江戸時代屋敷関係年表

年	西暦	月	日	記事	出典
幕府与力・同心組屋敷時代～岡山藩池田家屋敷時代					
寛永 19 ～ 20	1642 ～ 43	－	－	調査地に「御歩行衆」・「御土蔵番衆」・「新庄美作与力同心」とあり、徒組・土蔵番と書院番頭新庄美作守（直房）配下の与力同心の組屋敷の所在が確認される	江戸全図
明暦 3	1657	－	－	調査地に「酒井飛騨与力足軽」とあり、書院番頭酒井飛騨守（重之）配下の与力同心組屋敷の所在が確認される	江戸大絵図
明暦 3	1657	5	15	備前岡山藩主池田光政、大名小路中屋敷（新屋敷）上地の代地として、浅草三十三間堂前に 60 間四方の屋敷地拝領、ただし光政の心に適わず土木なし	備藩邸考 (浅草邸)
明暦 3	1657	－	－	池田光政、浅草三十三間堂前屋敷を下谷寺町酒井飛騨守与力同心屋敷に替える	備藩邸考 (浅草邸・下谷邸)
万治 1	1658	－	－	下谷屋敷作事につき、岡山藩士野口伝右衛門が地形担当の奉行と大工・役人・諸奉行人の小屋掛けをする	御家史草稿 (江戸藩邸土木)
万治 1	1658	－	－	下谷屋敷の土木（作事）始まる、船橋小左衛門ら普請奉行を務める、秋に至って落成	備藩邸考 (下谷邸)
万治 1	1658	7	－	下谷屋敷、落成する	御家史草稿 (江戸藩邸土木)
万治 1	1658	7	15	光政世子政綱、下谷屋敷に移徙	備藩邸考 (下谷邸)
万治 1	1658	8	9	世子綱政縁女板倉阿波守重郷女没する	備藩邸考 (下谷邸)
万治 3	1660	4	14	世子綱政、丹羽左京大夫光重女と婚姻、光重女は下谷屋敷に入輿	備藩邸考 (下谷邸)
寛文 4	1664	3	11	綱政の下谷屋敷に新宅成就につき、光政より作事奉行丸山次郎大夫以下棟梁へ時服白銀が与えられる	備藩邸考 (下谷邸)
寛文 8	1668	2	4	上野車坂からの出火により下谷屋敷焼失、世子綱政、夫人とともに大名小路上屋敷に退避、19 日浅草新屋敷へ移る	備藩邸考 (下谷邸)
寛文 8	1668	2	－	麻布善福寺の傍らを借地して早速土木、程なく成就して綱政と夫人が浅草新屋敷より移り住む	備藩邸考 (麻布邸)
寛文 8	1668	－	－	下谷屋敷、焼失後光政の命により土木を止められる	備藩邸考 (下谷邸)
寛文 10	1670	3	1	下谷屋敷、卑湿にして光政の心に適わず替地を吟味のところ、大崎に決して幕府に出願、この日許可され、下谷屋敷は上地となる	備藩邸考 (下谷邸)
泉藩本多家屋敷時代					
寛文 2	1662	11	25	忠以、父本多能登守忠義の隠居により、陸奥白川領のうち浅川 1 万石を分知される	御四代之記
寛文 4	1664	3	8	忠以、大番頭に任じられる	御四代之記
寛文 4	1664	3	22	忠以、元竹蔵（浜町）に上屋敷、本所に下屋敷を拝領	柳営日次記
寛文 4	1664	4	4	忠以、元竹蔵（浜町）に上屋敷請取、坪数田舎間 2,338 坪 5 合 3 勺	御四代之記
寛文 4	1664	5	-	忠以、病により実弟忠晴を養子とする	御四代之記
寛文 4	1664	5	18	忠以、江戸で没す	御四代之記
寛文 4	1664	5	-	忠晴、養父忠以の遺領 1 万石を継ぐ	御四代之記
寛文 4	1664	8	11	忠晴、忠以拝領の浜町（元竹蔵）屋敷を幕府より下される	御四代之記
寛文 4	1664	12	5	忠晴、本所五ッ目に下屋敷を拝領、翌寛文 5 年 3 月 1 日請取、70 間四方、坪数 4,900 坪	御四代之記
寛文 10	1670	－	－	忠晴、下谷新寺町に屋敷替えを命じられる、竪田舎間 51 間 7 寸 5 分・横田舎間 86 間 5 尺 2 寸 5 分、公儀より引渡坪数 4,107 坪 5 合、上屋敷となり「下谷屋敷」と呼称される	御四代之記
寛文 11	1671	－	－	調査地に「本田タン正」とあり、本多弾正少弼忠晴屋敷の所在が確認される	新板江戸外絵図
延宝 6	1678	－	－	忠晴、大坂加番を命じられる	御四代之記
延宝 7	1679	10	5	忠晴、千束龍泉寺村に 2,499 坪（7 反）を購入、抱屋敷とする ※のち「中屋敷」、「金杉中屋敷」と呼称	御四代之記
天和 1	1681	9	15	忠晴、三河伊保に移封	寛政譜
天和 1	1681	11	15	忠晴、帰国のため江戸発駕、同 23 日伊保に着座	御四代之記
天和 2	1682	9	27	忠晴、参府のため伊保発駕、10 月 4 日江戸着	御四代之記
天和 3	1683	6	23	本所屋敷を返上、竪 81 間・横 60 間、坪数 5,000 坪	御四代之記
貞享 5	1688	2	－	忠晴、大坂加番を命じられる	御四代之記
元禄 5	1692	6	27	忠晴、大番頭を命じられる	御四代之記
元禄 6	1693	7	4	先年下屋敷、御用地となり召上につき、代地として南本所（本所三ツ目通）に下屋敷を拝領、同月 11 日請取、竪 45 間・横 33 間、坪数 1,500 坪	柳営日次記 / 御四代之記
元禄 11	1698	9	6	南鍋町からの出火により、下谷上屋敷類焼	御四代之記 / 御当代記
元禄 14	1701	2	5	本所大横堀屋敷（本所三ツ目通屋敷）を返上、代地として西葛西小梅村に下屋敷を拝領、南 85 間・東 39 間・北 72 間 5 尺、西 39 間、坪数 3,000 坪	御四代之記 / 屋敷渡預絵図証文
元禄 15	1702	6	10	忠晴、奏者番兼寺社奉行を命じられる	御四代之記
宝永 2	1705	12	11	忠晴、遠江・三河国内に 5,000 石を加増され、都合 1 万 5,000 石を領す	寛政譜
宝永 3	1706	4	16	小梅下屋敷に御物見二階屋を建てる	御四代之記
宝永 4	1707	10	10	忠直（忠晴長男）、宗家本多能登守忠常の養子となり、忠直長男忠通、忠晴の嫡子となることが許可される	御四代之記
宝永 4	1707	11	1	小梅下屋敷に稲荷宮を勧請、熊一稲荷大明神と称す	御四代之記
宝永 4	1707	12	19	忠直（忠晴長男）、この日宗家本多能登守忠常屋敷に移る	御四代之記
宝永 7	1710	閏 8	－	忠晴、遠江相良に移封	御四代之記
宝永 7	1710	12	22	千束龍泉寺村抱屋敷、勝手次第家作を許される	御四代之記
宝永 8	1711	春	－	千束龍泉寺村抱屋敷に長屋 20 間出来、ほかに 2 間に 3 間の小屋別家あり	御四代之記
正徳 3	1713	1	晦日	忠晴、立ち居不自由となり奏者番兼寺社奉行辞任の願書提出、閏 1 月 7 日に許可される	御四代之記
正徳 5	1715	4	12	忠晴、江戸で没す	御四代之記
正徳 5	1715	6	6	忠通、忠晴の遺領を継ぐ	御四代之記
享保 2	1717	6	9	小伝馬町三丁目からの出火により、下谷上屋敷残らず類焼	御四代之記 / 月堂見聞集
享保 3	1718	12	11	上野屏風坂上からの出火により、下谷上屋敷残らず類焼	御四代之記 / 月堂見聞集
享保 4	1719	3	10	下谷七軒町伊勢屋市郎兵衛宅からの出火により、下谷上屋敷表長屋西の角から裏門までと、内長屋 1 棟類焼	御四代之記 / 月堂見聞集
享保 4	1719	6	11	忠通、去年 12 月類焼後小梅下屋敷に居住のところ、下谷上屋敷普請出来につき引き移る	御四代之記
享保 5	1720	3	27	中橋箔屋町からの出火により、下谷上屋敷西長屋通り焼失	御四代之記 / 月堂見聞集
享保 6	1721	3	3	三河町からの出火により、下谷上屋敷残らず類焼、忠通、小梅下屋敷に引き移る	御四代之記 / 天享吾妻鑑
享保 6	1721	6	28	忠通、不快続きにつき忠如（忠直五男）の養子願を提出	御四代之記
享保 6	1721	7	2	忠通、江戸小梅下屋敷で没す、享年 17	御四代之記
享保 6	1721	閏 7	9	下谷上屋敷、類焼後御殿向・表長屋、その他長屋向新始あり普請にかかる	御四代之記
享保 6	1721	閏 7	23	忠如、忠通の養子となりその遺領を継ぐ、ただし宗家の幡随院下屋敷に居住	御四代之記
享保 6	1721	9	22	下谷上屋敷の普請出来	御四代之記
享保 6	1721	－	－	忠如、下谷上屋敷へ引き移る、実母自得院（忠直妾しげ）もともに移る	御四代之記
享保 8	1723	11	－	本多宗家、忠烈に嗣子なく断絶につき、清浄院（忠直室石井氏）・すみ（忠直五女）を忠如が引き取り、小梅下屋敷に住まわせる	御四代之記
享保 8	1723	12	－	千束龍泉寺村抱屋敷、以後「中屋敷」と唱えるよう命あり	御四代之記
享保 9	1724	7	4	清浄院（忠直室石井氏）・すみ（忠直五女）、中屋敷（千束龍泉寺村抱屋敷）へ引き移る	御四代之記
享保 12	1727	3	－	すみ（忠直五女）、来倉主計頭（保教）に嫁す	御四代之記
享保 12	1727	5	25	忠如、吉（松浦肥前守篤信女）との縁組出願のところ許可される	御四代之記
享保 12	1727	9	19	忠如、吉（松浦肥前守篤信女）と結納	御四代之記
享保 16	1731	6	28	忠如、帰国のため江戸発駕、7 月 3 日相良に着座	御四代之記
享保 17	1732	4	9	忠如、大坂加番を命じられたため、この日参府	御四代之記
享保 17	1732	7	18	忠如、大坂加番のため江戸発駕	御四代之記
享保 18	1733	8	22	忠如、大坂加番を終えて帰府	御四代之記
享保 18	1733	10	13	忠如、帰国のため江戸発駕	御四代之記
享保 19	1734	6	4	忠如、この日参府	御四代之記
享保 19	1734	9	28	下谷上屋敷稲荷、庭園築山後ろ北方にあったものを、馬場北の末に宮を建てて遷宮する、坂本大聖院が勤める	御四代之記
享保 20	1735	2	24	自得院（忠如実母）、下谷上屋敷より小梅下屋敷に引き移る	御四代之記
享保 20	1735	3	10	下谷上屋敷奥御殿向、建て始める	御四代之記
享保 20	1735	6	-	下谷上屋敷奥御殿向、この月までに出来	御四代之記
享保 20	1735	6	27	吉（松浦肥前守篤信女）、下谷上屋敷に入輿	御四代之記
享保 20	1735	7	13	忠如、帰国のため江戸発駕	御四代之記
元文 1	1736	6	8	忠如、この日参府	御四代之記
元文 2	1737	6	24	忠如、帰国のため江戸発駕	御四代之記
元文 3	1738	6	13	忠如、この日参府	御四代之記
元文 3	1738	9	29	隈五郎（忠如男、のち官次郎）、相良で出生、母は妾れん	御四代之記
元文 4	1739	2	15	隈五郎（忠如男）、官次郎と改名	御四代之記
元文 4	1739	6	25	忠如、帰国のため江戸発駕	御四代之記
元文 4	1739	12	8	忠籌（忠如長男、雄之進、大蔵）、江戸下谷上屋敷で出生、母は正室吉	御四代之記
元文 5	1740	3	3	忠籌を以後「若殿様」と称すよう命あり	御四代之記

年	西暦	月	日	記事	出典
元文5	1740	5	8	忠如、疾病のため例より早い参府が許され、この日着府	御四代之記
寛保1	1741	8	20	忠如、帰国のため江戸発駕	御四代之記
寛保2	1742	3	20	忠如、大坂加番を命じられたため、この日参府	御四代之記
寛保2	1742	7	6	忠如、大坂加番のため江戸発駕、途中相良へ立ち寄り、同月 27 日着坂	御四代之記
寛保2	1742	7	28	官次郎（忠如男）、相良で没す	御四代之記
寛保3	1743	3	27	房（忠如女）、江戸で出生、母は正室吉	御四代之記
寛保3	1743	8	20	忠如、大坂加番を終えて帰府	御四代之記
寛保3	1743	9	6	忠如、暇年のところ在所火災で家中長屋の過半焼失、町屋も同断につき、来る参勤の時節まで在府したい旨出願、許される	御四代之記
延享2	1745	7	13	忠如、帰国のため江戸発駕	御四代之記
延享2	1745	12	10	隣（忠如女）、下谷上屋敷長局で出生、母は妾千代	御四代之記
延享3	1746	6	3	忠如、この日参府	御四代之記
延享3	1746	9	25	忠如、陸奥泉に移封	御四代之記
延享4	1747	1	10	隣（忠如女）、江戸で没す	御四代之記
延享4	1747	2	27	陸奥泉の受け取り済み、遠江相良の引き渡しも済む	御四代之記
延享4	1747	7	19	忠如、大坂加番のため江戸発駕	御四代之記
延享4	1747	8	16	下谷上屋敷の表長屋建て直し、これまで板屋根のところ瓦屋根とする、棟上げあり	御四代之記
延享5	1748	2	24	忠貫（忠如男、健之丞）、下谷上屋敷奥長局に出生、母は妾八重	御四代之記
寛延1	1748	8	18	忠如、大坂加番を終えて帰府	御四代之記
寛延2	1749	4	7	吉（忠如正室、松浦肥前守篤信女）、病気につき離縁	御四代之記
寛延2	1749	4	7	千代（忠如妾、隣実母）、永々暇を下される	御四代之記
寛延2	1749	4	21	房（忠如女、母は正室吉）、清浄院（忠直室石井氏）へ預けられることとなり、下谷上屋敷より中屋敷（千束龍泉寺村抱屋敷）へ移る	御四代之記
寛延2	1749	4	27	忠貫（忠如男、健之丞、母は妾八重）、自得院（忠如実母）へ預けられることとなり、下谷上屋敷より小梅下屋敷へ移る	御四代之記
寛延2	1749	6	23	忠如、帰国のため江戸発駕、同月 27 日泉に着座	御四代之記
寛延3	1750	6	3	忠如、この日参府する	御四代之記
寛延3	1750	10	6	忠貫（忠如男、健之丞）の実母妾八重、泉で没す	御四代之記
寛延3	1750	11	27	忠如、痔疾痛発症の節は登城時城内で杖を用いたい旨出願のところ許可される	御四代之記
寛延4	1751	閏6	25	忠如、帰国のため江戸発駕、同月 29 日泉に着座	御四代之記
寛延4	1751	9	—	下谷上屋敷北長屋のうち1棟建て直し、これまで板葺きのところ瓦葺きとする	御四代之記
宝暦1	1751	10	26	清浄院（忠直室石井氏）、中屋敷（千束龍泉寺村抱屋敷）で没	御四代之記
宝暦2	1752	6	26	忠如、この日参府する	御四代之記
宝暦3	1753	6	—	忠如、病気につき滞府となる	御四代之記
宝暦3	1753	8	18	忠如、去年9月以来胸背痛勝れず、保養として歩行のため折々小梅下屋敷を訪れたい旨出願のところ許される	御四代之記
宝暦4	1754	4	3	下谷上屋敷玄関向き建て替えにつき棟上げあり、これまで板屋根のところ瓦屋根となる	御四代之記
宝暦4	1754	8	29	忠如、隠居願を提出のところ許され、世子忠濤に家督が下され、以後忠濤を「殿様」、忠如を「御隠居様」、自得院（忠如実母）を「小梅様」と唱えることになる	御四代之記
宝暦4	1754	9	2	屋敷書上を提出、拝領地浅草七軒町上屋敷 4,007 坪2合・同本庄小梅村下屋敷 3,000 坪、抱屋敷金杉千束村 2,449 坪3合とあり	忠濤御代記
宝暦5	1755	7	16	忠濤、大坂加番のため江戸発駕（着坂不詳）	忠濤御代記
宝暦6	1756	4	3	隠居忠如、冲翁と改名	忠濤御代記
宝暦6	1756	8	18	忠濤、大坂加番を終えて帰府	忠濤御代記
宝暦7	1757	6	29	忠濤、帰国のため江戸発駕、7月4日泉に着座	忠濤御代記
宝暦8	1758	8	19	忠濤、この日参府	忠濤御代記
宝暦9	1759	3	18	忠貫（隠居忠如、健之丞）、自得院（忠如実母）に預け置きのところ、小梅下屋敷より下谷上屋敷に引き移り西長屋南角に住居する	忠濤御代記
宝暦9	1759	6	13	忠濤、忠貫（隠居忠如男、健之丞）を仮養子として出願、許可される	忠濤御代記
宝暦9	1759	7	19	忠濤、帰国のため江戸発駕、同月 23 日泉に着座	忠濤御代記
宝暦10	1760	4	23	忠濤、大坂加番を命じられたため、この日泉発駕、同月 27 日着府	忠濤御代記
宝暦10	1760	6	8	梅樹院（忠如正室・忠濤実母吉、寛延2年離縁）、松浦家本所牛島屋敷で没す	忠濤御代記
宝暦10	1760	7	16	忠濤、大坂加番のため江戸発駕、8月1日着坂	忠濤御代記
宝暦11	1761	1	17	忠誠（忠濤男、勇次郎）、泉に出生、母は妾里瀬	忠濤御代記
宝暦11	1761	8	7	忠濤、大坂加番を終えて出立、8月21日帰府	忠濤御代記
宝暦11	1761	12	晦日	忠貫（隠居忠如男、健之丞）、下谷上屋敷西長屋南角より御殿内へ引き移る	忠濤御代記
宝暦12	1762	6	—	房（忠如女、母は吉）、中屋敷（金杉抱屋敷）より下谷七軒町上屋敷に越した上で、山口兵部と婚姻	忠濤御代記
宝暦12	1762	12	29	忠濤、富（松浦肥前守誠信三女）の縁組出願のところ認められる	忠濤御代記
宝暦13	1763	6	5	忠濤、富（松浦肥前守誠信三女）と結納	忠濤御代記
宝暦13	1763	6	16	忠貫（隠居忠如男、健之丞）、本多肥後守忠可の仮養子となる	忠濤御代記
宝暦13	1763	7	19	忠濤、大坂加番のため江戸発駕、8月1日着坂	忠濤御代記
宝暦13	1763	9	—	下谷上屋敷表通り道造り、ならびに堀浚いあり	忠濤御代記
宝暦14	1764	3	4	下谷上屋敷西長屋・北長屋建て直し、その他長屋とも追々建て直し出来、修復等あり	忠濤御代記
宝暦14	1764	5	21	隠居忠如、下谷上屋敷より中屋敷（金杉抱屋敷）に引き移り住居する	御四代之記 / 忠濤御代記
明和1	1764	—	—	中屋敷（金杉抱屋敷）・小梅下屋敷の長屋向、追々建て直しと修復等あり	忠濤御代記
明和1	1764	6	13	下谷上屋敷、奥御殿向新始あり、建修復にする場もあり	忠濤御代記
明和1	1764	8	20	忠濤、大坂加番を終えて帰府	忠濤御代記
明和1	1764	9	16	忠貫（隠居忠如男、健之丞）、下谷上屋敷御殿住居より表長屋東角長屋へ引き移り	忠濤御代記
明和1	1764	9	21	富（松浦肥前守誠信三女）、忠濤と婚姻、下谷上屋敷に入輿	忠濤御代記
明和2	1765	3	—	忠誠（忠濤男、勇次郎）、以後「殿」附けで呼ぶよう家臣らに命あり	忠濤御代記
明和2	1765	6	27	忠濤、帰国のため江戸発駕、7月1日泉に着座	忠濤御代記
明和2	1765	8	2	忠雄（忠濤男、雄之進）、江戸において出生、母は正室富	忠濤御代記
明和3	1766	4	14	自得院（忠如実母）、病気のところ小梅下屋敷で没す	忠濤御代記
明和3	1766	5	22	忠堅（忠濤男、斧三郎）、泉において出生、母は里瀬	忠濤御代記
明和3	1766	6	2	忠濤、この日参府	忠濤御代記
明和3	1766	10	5	忠晴の代、上屋敷庭内に仏殿堂を建立し本尊を安置するも、仏殿大破して 30 年以前に取り払い、本尊は土蔵入れ置きのところ、この度富（忠濤室）の仏間へ安置することになる ※本尊は明和9年2月 29 日の火災で焼失	忠濤御代記
明和3	1766	11	15	忠晴建立の小梅下屋敷弁天堂大破につき、解体した材で下谷上屋敷に稲荷拝殿を拵えて弁財天を相殿とし、この日遷宮 ※弁財天は明和9年2月 29 日の火災で焼失、稲荷は残る	忠濤御代記
明和4	1767	7	19	忠濤、帰国のため江戸発駕、同月 23 日泉に着座	忠濤御代記
明和5	1768	2	19	忠濤、金森騒動により改易の本多長門守忠央、赦免されてこの日着府のところ、小梅下屋敷に引き取り寓居させる ※宝暦8年改易、遠江国相良1万石没収、松平越後守長孝（美作津山藩主）に召預	忠濤御代記
明和5	1768	3	9	忠満（忠濤男、熊之助）、江戸において出生、母は正室富	忠濤御代記
明和5	1768	5	15	富（忠濤室）、3月中旬より浮腫のところ養生叶わず没す	忠濤御代記
明和5	1768	5	19	みち（忠濤女）、泉において出生、母は妾里瀬	忠濤御代記
明和5	1768	6	17	忠濤、参府のため泉発駕、同月 21 日着府	忠濤御代記
明和5	1768	7	20	里瀬（忠濤妾、斧三郎・おみち母）、産後浮腫あり養生叶わず泉で没す	忠濤御代記
明和6	1769	5	29	忠貫（隠居忠如男、健之丞）、没す	忠濤御代記
明和6	1769	7	23	忠濤、帰国のため江戸発駕、同月 27 日泉に着座	忠濤御代記
明和7	1770	6	3	忠濤、この日参府	忠濤御代記
明和7	1770	7	16	千束龍泉寺村名主より中屋敷（金杉抱屋敷）世話窪田左平まで、新地奉行より抱屋敷坪数・建坪書付差出の命申し越しにより書付差し出す	忠濤御代記
明和8	1771	4	—	忠堅（忠濤男、斧三郎）、星野武左衛門正峻養子、みち（忠濤女）、荒木九兵衛由勇養女となる	忠濤御代記
明和8	1771	7	7	忠濤、帰国のため江戸発駕、同月 11 日泉に着座	忠濤御代記
明和8	1771	8	21	忠順（忠濤男、定六郎）、泉において出生、母は妾その、25 日星野武左衛門政峻引き取り、星野定六郎と称す	忠濤御代記
明和9	1772	2	29	目黒行人坂より出火、同夜下谷上屋敷残らず類焼	忠濤御代記
明和9	1772	7	—	下谷上屋敷家中長屋出来、追々引き移る、「御仮屋」も出来	忠濤御代記
明和9	1772	8	2	強風により下谷上屋敷北長屋 33 間半のうち東より 26、7 間、中長屋のうち6間潰れ、小梅下屋敷では北の方長屋 20 間潰れる	忠濤御代記
明和9	1772	9	3	忠濤、参府のため泉発駕、同月7日着府	忠濤御代記
安永2	1773	2	23	忠純（忠濤男、藤七郎）、泉において出生、母は妾その、同月 28 日荒木九兵衛由政引き取り、荒木藤七郎と称す	忠濤御代記
安永2	1773	7	19	忠濤、帰国のため江戸発駕、同月 23 日泉に着座	忠濤御代記
安永2	1773	10	15	隠居忠如、中屋敷（金杉抱屋敷）で没す	忠濤御代記
安永3	1774	6	2	忠濤、参府する	忠濤御代記
安永4	1775	6	13	忠濤、帰国の暇を下される（江戸発駕日不詳）	忠濤御代記
安永5	1776	1	27	忠濤、参府のため泉発駕、2月1日着府 ※4月の日光社参のため早い参府を命じられたため	忠濤御代記
安永6	1777	7	19	忠濤、帰国のため江戸発駕、同月 23 日泉に着座	忠濤御代記

年	西暦	月	日	記事	出典
安永７	1778	5	27	忠籌、参府のため泉発駕、同月 23 日着府	忠籌御代記
安永７	1778	閏７	5	忠満（忠籌男、熊之助）、松浦左京信豊の養子となり松浦家に引き移る	忠籌御代記
安永８	1779	6	22	忠籌、帰国のため江戸発駕、同月 26 日泉に着座	忠籌御代記
安永８	1779	11	22	忠雄（忠籌世子、雄之進）、下谷上屋敷普請出来につき引き移る	忠籌御代記
安永９	1780	5	26	忠籌、参府のため泉発駕、６月１日着府	忠籌御代記
安永９	1780	6	1	忠籌、下谷上屋敷住居向ならびに表門通玄関等普請出来につき、この日移徙する	忠籌御代記
天明１	1781	8	5	忠籌、６月に帰国の暇を下されたが持病勝れず、当冬中まで滞府して養生したい旨出願、８日許される	忠籌御代記
天明１	1781	8	13	世子忠雄、忠籌の名代として「御住居所」のうち「御泉水之間」において、年寄中・用人・役人へ直に申し渡しあり	忠籌御代記
天明１	1781	10	19	忠籌、未だ不快につき滞府の願書提出、23 日許される	忠籌御代記
天明２	1782	3	11	忠籌、不快につき当夏参勤の時節まで滞府して養生したい旨の願書提出、13 日許される	忠籌御代記
天明２	1782	3	—	明和９年類焼以後、裏門仮建てのところ、この度裏門ならびに西の方続長屋出来	忠籌御代記
天明２	1782	4	19	忠籌、妾腹男子の丈夫届を一同に提出、四男忠堅（斧三郎）、五男忠順（定六郎）、六男忠純（藤七郎）	忠籌御代記
天明２	1782	5	16	忠雄（忠籌世子）、幸（堀田豊前守正穀妹）との縁組が許される	忠籌御代記
天明２	1782	6	1	忠雄（忠籌世子）と幸（堀田豊前守正穀妹）の結納の日取りが決まり、堀田家より普請金 500 両のうち 300 両を受け取る	忠籌御代記
天明２	1782	6	5	忠雄（忠籌世子）、幸（堀田豊前守正穀妹）と結納	忠籌御代記
天明２	1782	6	21	忠籌、病気快復につき出勤	忠籌御代記
天明２	1782	7	4	忠雄（忠籌世子）、病気につき暑中保養として中屋敷（金杉抱屋敷）へ内々に引き移る	忠籌御代記
天明２	1782	12	1	忠誠（忠籌男、勇次郎）、泉より江戸へ引っ越すことになる	忠籌御代記
天明２	1782	12	9	下谷上屋敷奥向普請出来、惣見分済む	忠籌御代記
天明３	1783	2	19	忠雄（忠籌世子）と幸（堀田豊前守正穀妹）の縁組、故障があり熟談のうえ離縁	忠籌御代記
天明３	1783	6	29	その（忠籌召仕女中）、明後日忠籌が泉へ発駕につき、この日江戸を出立	忠籌御代記
天明３	1783	7	1	忠籌、帰国のため江戸発駕、忠誠（忠籌男、勇次郎）も供に発し、同月５日泉に着座	忠籌御代記
天明３	1783	8	18	造酒之丞（世子忠雄男）、江戸（金杉抱屋敷）において出生、母は梅（御物縫女中）	忠籌御代記
天明４	1784	3	1	梅（世子忠雄妾、物縫女中）、思召に応ぜず永の暇を下され桜井養説方へ引き取られる	忠籌御代記
天明４	1784	4	29	満（世子忠雄物縫女中）、召し抱えられ中屋敷（金杉抱屋敷）に入る	忠籌御代記
天明４	1784	6	3	忠籌、癪気と胸痛で乗輿し難く、参勤延引の願書提出、同月 13 日許可、７月 13 日・８月 13 日も同願書提出し許可される	忠籌御代記
天明４	1784	9	6	忠籌、不快快方につき参府のため泉発駕、11 日着府	忠籌御代記
天明４	1784	10	6	梅（世子忠雄妾、物縫女中）、懐妊につき桜井養説方にあり昨夜女子出産、直ちに金杉中屋敷に引き移らせ、曽根と命名	忠籌御代記
天明４	1784	2	28	忠籌、癪気・胸痛につき小梅下屋敷において歩行の願書提出、許可される	忠籌御代記
天明５	1785	3	4	忠雄（忠籌世子）、病気快然も再発の恐れあり、世子退身を望んで容れられ、忠誠（忠籌男、勇次郎）が世子とされる	忠籌御代記
天明５	1785	3	16	忠雄の世子退身と忠誠の世子の願い、幕府に許可される、以後忠誠を「若殿様」、忠雄を「金杉様」と称すこととなる	忠籌御代記
天明５	1785	7	19	忠籌、帰国すべきところ足痛につき乗輿し難く、江戸発駕を延引	忠籌御代記
天明５	1785	8	19	忠籌、足痛のため乗輿し難く、当 10 月までの滞府を出願、許される	忠籌御代記
天明５	1785	10	19	忠籌、足痛・胸痛同篇につき来春までの滞府を出願、許される	忠籌御代記
天明５	1785	12	23	忠誠（忠籌世子）、八百（板倉伊勢守勝暁女）との縁組が決まる	忠籌御代記
天明６	1786	3	21	板倉家より、普請金 300 両のうち 150 両受け取り	忠籌御代記
天明６	1786	4	4	下谷上屋敷奥向修復、皆出来につき年寄共初め見分あり	忠籌御代記
天明６	1786	4	22	忠誠（忠籌世子）、八百（板倉伊勢守勝暁女）と結納、八百入輿、婚姻整う、板倉家より見送の用人斉藤幸左衛門、下谷上屋敷「御泉水之間」で忠誠に目見	忠籌御代記
天明６	1786	5	7	その（忠籌妾、星野定六郎・荒木藤七郎実母）没す	忠籌御代記
天明６	1786	7	9	忠籌、せお（召仕女中）召し抱え、この日御休息所へ引き移り即刻目見	忠籌御代記
天明６	1786	7	11	造酒之丞（忠雄男）、病気養生叶わず没す	忠籌御代記
天明６	1786	7	16	大雨続き、小梅下屋敷出水、下谷上屋敷より家中へ手当の握飯を出す、中屋敷（金杉抱屋敷）も出水、忠雄は門前の長国寺へ退避	忠籌御代記
天明６	1786	7	17	大雨で忠雄ら中屋敷（金杉抱屋敷）より下谷上屋敷へ退避のところ追々出水増し、18 日に湯島麟祥院へ立ち退く	忠籌御代記
天明６	1786	7	18	大雨で下谷上屋敷の出水至って強く、世子忠誠と八百は板倉家の小川町上屋敷へ、忠籌は本多中務大輔忠典（三河岡崎藩主）の日比谷上屋敷へ、それぞれ退避、家中は家内ともども雇船で 17 日夕より知己へ退避	忠籌御代記
天明６	1786	7	19	忠籌・忠誠・八百、それぞれ退避のこと、幕府に届出	忠籌御代記
天明６	1786	7	23	下谷上屋敷、出水大方引き忠籌帰座、休息所居間揚床の上に住居	忠籌御代記
天明６	1786	7	24	家中追々屋敷に帰る、家中の面々悪水に浸るので所々に居風呂を設置させて入湯を命じ、その後も度々薬湯を命じる	忠籌御代記
天明６	1786	7	25	小梅下屋敷門前土手切れ榎大木２本倒れて欠所出来につき幕府へ届け出、14 間半長屋棟と西方物置小屋１ヶ所潰れる	忠籌御代記
天明６	1786	7	27	奥女中追々下谷上屋敷へ帰る、長局は湿深いので女中へ蒼朮２斤下され、薬湯も度々命じられる	忠籌御代記
天明６	1786	7	28	忠誠・八百、下谷上屋敷に帰る	忠籌御代記
天明６	1786	8	4	出水により家中の面々難儀につき、聊かながら金子下される	忠籌御代記
天明６	1786	8	4	忠籌、天明６年６月 29 日より半蔵口御門番勤仕のところ、居屋敷・下屋敷・抱屋敷出水につき御免となる	忠籌御代記
天明６	1786	8	16	小梅下屋敷の欠所届書、絵図面を添えて幕府に提出	忠籌御代記
天明６	1786	8	19	出水により湿瘡吹出の面々もあり、湿払煎薬ならびに薬湯が３日のうち下される	忠籌御代記
天明６	1786	9	5	出水後、野菜高値により家中難儀につき、１人茄子５ッの割で下される	忠籌御代記
天明７	1787	5	22	打ちこわし勃発、下谷上屋敷門前へも来ると風聞あり、色々手配を下知して忠籌・忠誠も玄関で守りを固めるなど、25、６日まで警戒を続ける	忠籌御代記
天明７	1787	5	27	町々へ助扶持米や金子下賜で打ちこわし追々鎮静、下谷上屋敷の警戒解く、ただし遠出は無用、やむを得ない外出以外も禁止	忠籌御代記
天明７	1787	7	17	忠籌、若年寄を命じられる	忠籌御代記
天明７	1787	7	25	忠籌、大手前酒井大学頭忠崇（出羽松山藩主）屋敷を家作とも下される、下谷上屋敷は家作とも差上を命じられ、家作とも酒井大学頭忠崇に下される	忠籌御代記
天明７	1787	8	7	忠籌、酒井大学頭忠崇の家来より大手前屋敷を受け取る	忠籌御代記
天明７	1787	8	8	忠籌、大手前屋敷見分のため登城後に立ち寄る、世子勇次郎（忠誠）は上野参詣より来る	忠籌御代記
天明７	1787	8	13	忠籌、供揃いにて大手前屋敷へ引き移り、表門より入る、世子勇次郎（忠誠）も供揃いにて表門より御部屋玄関を通り引き移る、お八百（勇次郎室）は８月９日より実家板倉肥前守勝暁屋敷に逗留のところ、この日裏門より奥玄関を通り引き移る、家中は前日までに追々移る	忠籌御代記
天明７	1787	8	15	下谷上屋敷、酒井大学頭忠崇へ引き渡しにつき、役人等出役、酒井家家来中に渡す	忠籌御代記
天明７	1787	10	晦日	下谷上屋敷庭内稲荷社、大手前屋敷へ正遷宮済む	忠籌御代記
天明８	1788	12	3	小梅下屋敷と築地戸田源五郎屋敷の相対替を出願、同月 12 日願の通りとなり、同月 23 日に築地屋敷受け取り、同月 25 日に小梅下屋敷を引き渡す	忠籌御代記
松山藩酒井家屋敷時代					
天明７	1787	4	18	忠休、江戸で没す、この日世子忠崇を「殿様」、粂次郎（忠崇長男）を「若殿様」と称すよう命あり	松山藩史料 19
天明７	1787	5	—	麟（忠崇正室、のちきい）を「奥様」と称すよう命あり、千代（忠休妾、忠崇実母）は４月 25 日剃髪、皆如院と号す	松山藩史料 19
天明７	1787	6	13	忠崇、父忠休の遺領、出羽松山２万 5,000 石を継ぐ	松山藩史料 19
天明７	1787	7	25	忠崇、大手前上屋敷を家作とも差し上げを命じられ、本多弾正少弼忠籌浅草七軒町屋敷を家作とも下される、坪数 4,107 坪２合	松山藩史料 19
天明７	1787	8	5	忠籌、明後７日に大手前屋敷を引き渡すこととなり、この日扇橋抱屋敷に引く	松山藩史料 19
天明７	1787	8	7	大手前屋敷を本多家へ引き渡す	松山藩史料 19
天明７	1787	8	15	浅草七軒町屋敷を本多家より請け取る	松山藩史料 19
天明７	1787	8	17	この日より酒井家家中、浅草七軒町上屋敷へ引っ越す	松山藩史料 19
天明７	1787	8	22	忠崇ら、扇橋抱屋敷より浅草七軒町上屋敷へ引き移り済む	松山藩史料 19
天明７	1787	9	28	忠崇、江戸を発す、10 月 12 日松山着	松山藩史料 19
天明７	1787	11	1	仮御殿普請出来、掛りに褒美あり	松山藩史料 19
天明８	1788	5	19	忠崇、参府のため松山を発す	松山藩史料 19
天明８	1788	8	16	粂次郎（忠崇長男）、江戸で没す	松山藩史料 19
寛政１	1789	7	21	忠夷（忠休二男忠起長男、弥市郎）、養子縁組につき心得違い申し立て幕府に出訴に及んだこと不埒につき押込を命じられ、浅草七軒町上屋敷南長屋に差し置かれる	松山藩史料 20
寛政１	1789	9	-	忠崇、在所松山に下る	松山藩史料 20
寛政１	1789	12	15	忠夷（弥市郎）、11 月３日押込御免となり、家内とともに酒井家の四谷仲町中屋敷に移る	松山藩史料 20
寛政２	1790	5	20	忠崇、参府のため松山を発す	松山藩史料 20
寛政３	1791	8	-	扇橋抱屋敷、洪水で座敷床上に水押し上げ、畳・御道具取り片付ける	松山藩史料 20
寛政５	1793	11	—	忠崇、智養子に忠礼（宗家酒井忠温二男忠順男子、春之進）を迎える旨、本家に承知される	松山藩史料 20
寛政６	1794	4	24	忠礼（春之進）、願の通り忠崇の智養子となる	松山藩史料 21
寛政６	1794	11	25	忠礼（春之進）、酒井宗家の柳原屋敷より浅草七軒町上屋敷に移る	松山藩史料 21
寛政８	1796	11	11	きい（忠崇正室、麟）没す、法号赫琳院	松山藩史料 21
寛政９	1797	8	19	皆如院（忠休妾、忠崇実母）、下谷七軒町上屋敷で没す	松山藩史料 21
寛政 10	1798	1	-	真鶴（忠休二男忠起女、忠休養女）、同居の皆如院は没したが浅草七軒町上屋敷のうちに附人等省略で手軽に暮すことになる	松山藩史料 21
寛政 10	1798	6	15	世子忠礼、当秋中婚姻につき、婚礼ならびに普請向御用掛等に松宮儀八郎らが命じられる	松山藩史料 21
寛政 10	1798	7	-	忠崇の住居新御殿普請掛に渡辺辰右衛門が命じられる	松山藩史料 21
寛政 10	1798	9	24	普請出来につき、忠崇と忠礼の御殿、住居替えする	松山藩史料 21
寛政 10	1798	9	28	忠礼、鍼（忠休三男水野忠体女、忠崇養女）と結納、次いで婚礼が整う	松山藩史料 21
寛政 10	1798	11	26	忠崇、願の通り隠居を許され、世子忠礼、出羽松山２万 5,000 石を継ぐ	松山藩史料 21

年	西暦	月	日	記事	出典
寛政 11	1799	7	1	忠礼、江戸を発す、同月 14 日松山着	松山藩史料 21
寛政 11	1799	10	17	形（忠礼女）出生、母は正室鋲	松山藩史料 21
寛政 12	1800	5	21	忠礼、参府のため発駕	松山藩史料 21
享和 1	1801	4	26	品（忠礼女）出生、母は正室鋲	松山藩史料 22
享和 1	1801	7	18	忠礼、江戸発のところ山形辺り百姓騒動のため延期、８月９日松山着	松山町史年表 p.85
享和 1	1801	8	-	忠礼、在所へ発駕、奥女中（喜佐カ）同道	松山藩史料 22
享和 1	1801	10	-	江戸表（下屋敷カ）屋敷相対替につき、左沢大庄屋安藤甚兵衛寸志米上納	松山藩史料 22
享和 2	1802	5	20	忠礼、参府のため発駕、懐妊の奥女中（喜佐カ）同道、６月（月日不詳）着府	松山藩史料 22
享和 2	1802	7	28	周（忠礼女、のち凉）出生、母は喜佐	松山藩史料 22
享和 2	1802	12	—	下屋敷相対替につき、寸志米金上納の命あり	松山藩史料 22
享和 2	1802	-	-	浅草七軒町屋敷の西長屋 35 間のところ建て直しになる	松山藩史料 22
享和 3	1803	2	5	絲（忠礼女、のち里、遊加）出生、母は正室鋲	松山藩史料 22
享和 3	1803	8	21	女子出生、母はきよ、24 日没、法名編照院	松山藩史料 22
享和 3	1803	8	23	忠礼、在所へ下り、この日松山着	松山藩史料 22
文化 1	1804	5	18	忠礼、参府のため松山発駕	松山藩史料 22
文化 2	1805	2	17	為（忠礼女）出生、母は喜佐	松山藩史料 22
文化 2	1805	7	17	忠礼、大坂加番のため江戸発駕、８月６日着坂	松山藩史料 22
文化 2	1805	9	22	与茂（忠礼女）出生、母は八十	松山藩史料 22
文化 3	1806	3	5	３月４日の芝田町よりの出火が延焼、暁８ッ半時ころ浅草七軒町上屋敷類焼、隠居忠崇は上野池之端橘隆庵抱屋敷、のち本所石原松平長門守下屋敷へ退避、鋲（忠礼正室）と息女らは本郷御弓町水野錦之進屋敷へ、真鶴（忠起女、忠休養女）は四谷仲町中屋敷へそれぞれ立ち退く	松山藩史料 22
文化 3	1806	3	-	浅草七軒町上屋敷類焼につき、渡辺甚七へ長屋向普請掛を命じ、甚七は来る文化４年まで詰越となる	松山藩史料 22
文化 3	1806	4	-	浅草七軒町上屋敷類焼につき、用人田口元八郎へ普請御用扱を命じる	松山藩史料 22
文化 3	1806	5	-	浅草七軒町上屋敷長屋向普請のため、上州桐生町・大間口村へ御用金を命じる	松山藩史料 22
文化 3	1806	8	21	忠礼、大坂加番を終えて帰府する	松山藩史料 22
文化 3	1806	10	—	当春類焼、連年勝手向不如意につき当寅～午年まで５年の寸志上米を命じる	松山藩史料 22
文化 3	1806	11	—	浅草七軒町上屋敷類焼につき小田作右衛門、寸志金 50 両３ヶ年に上納	松山藩史料 22
文化 3	1806	12	13	鋲（忠礼室）、隠居忠崇の命により勇と改名	松山藩史料 22
文化 3	1806	—	—	浅草七軒町上屋敷類焼につき斉藤弥右衛門、寸志金 300 両３ヶ年に上納を出願	松山藩史料 22
文化 3	1806	—	—	浅草七軒町上屋敷類焼につき寸志金上納者書上あり	松山藩史料 22
文化 3	1806	—	—	浅草七軒町上屋敷類焼時在府・在勤の者へ、新長屋へ引っ越しの節拝借金書上あり	松山藩史料 22
文化 4	1807	2	7	忠礼、当秋の大坂加番を命じられる	松山藩史料 22
文化 4	1807	6	17	岩（忠礼女）出生、母は喜佐	松山藩史料 22
文化 4	1807	7	—	忠礼、大坂加番のため発駕、７月 29 日着坂	松山藩史料 22
文化 4	1807	7	19	亀久（忠礼女、菊とも）出生、母は八十	松山藩史料 22
文化 5	1808	1	18	忠方（忠礼長男、春之進）、江戸屋敷で出生、母は登喜	松山藩史料 22
文化 5	1808	5	13	江戸３屋敷（浅草七軒町上・四谷仲町中・千駄ヶ谷下屋敷）坪数書上	松山藩史料 22
文化 5	1808	8	23	忠礼、大坂加番を終えて８月８日大坂発、この日着府する	松山藩史料 22
文化 5	1808	11	-	浅草七軒町上屋敷類焼後、仮住居・長屋向普請御用と、この度隠居忠崇御殿普請御用掛、田口元八郎が務める	松山藩史料 22
文化 6	1809	7	10	靛（忠礼女）出生、母は登喜	酒井氏系図
文化 6	1809	8	3	綺（忠礼女、のち徽、貞）、江戸で出生、母は喜佐	酒井氏系図
文化 6	1809	8	18	忠礼、在所へ下るため江戸発駕、９月２日松山着	松山藩史料 23
文化 7	1810	3	12	忠礼、参府のため松山発駕	松山藩史料 23
文化 8	1811	1	6	利弥（忠礼女、のち雅、綱）、江戸で出生、母は登喜	酒井氏系図
文化 8	1811	2	11	市谷谷町よりの出火で、四谷中屋敷類焼	松山藩史料 23
文化 8	1811	4	11	忠方（忠礼長男、春之進）、嫡子届が受理され、以後「若殿様」と称す	松山藩史料 23
文化 8	1811	4	18	式（忠礼女）、江戸に出生、母は喜佐	酒井氏系図
文化 8	1811	8	19	忠礼、在所に下り、この日松山着、奥女中（登喜カ）附添あり	松山藩史料 23
文化 8	1811	11	-	当春、四谷中屋敷類焼につき寸志金の上納あり	松山藩史料 23
文化 9	1812	1	14	式（忠礼女）没す、法号珠光院	酒井氏系図
文化 9	1812	1	15	真鶴（忠起女、忠休養女）、隠居忠崇に願い、勝と改名	松山藩史料 23
文化 9	1812	1	16	岩（忠礼女）没す、享年６、法号玉簾院	松山藩史料 23
文化 9	1812	2	26	忠篤（忠礼二男、大助、のち忠敏）、松山に出生、母は登喜	松山藩史料 23
文化 9	1812	6	1	忠礼、５月 19 日松山発駕、この日着府する、忠篤（大助、のち忠敏）と奥女中（登喜カ）同道	松山藩史料 23
文化 9	1812	12	-	勇（忠礼室、鋲）の土蔵普請につき本間次郎四郎が寸志金上納	松山藩史料 23
文化 10	1813	6	15	忠礼、帰国の暇が下る（出立日不詳）	松山藩史料 23
文化 10	1813	6	-	忠礼子女靛・綺・利弥・忠篤（大助）、勇（忠礼室、鋲）の養いとなり、以来「様」と唱えるよう命あり	松山藩史料 23
文化 10	1813	7	8	登和（忠礼女）出生、母は登喜	松山藩史料 23
文化 11	1814	5	-	忠礼、松山発駕、出府する	松山藩史料 23
文化 11	1814	10	-	江戸屋敷御殿普請目論見のため、五十嵐与右衛門上州陣屋へ出張して資金調達について取調、同月御殿普請掛を命じられる	松山藩史料 23
文化 11	1814	11	-	江戸屋敷御殿普請につき、上州領分冥加金上納総高金 1,550 両	松山藩史料 23
文化 12	1815	2	9	形（忠礼女）、酒井亀之進忠氏に嫁す	松山藩史料 23
文化 12	1815	2	-	江戸屋敷御殿向普請御用、郡代奥本久内が命じられる	松山藩史料 23
文化 12	1815	4	1	忠誠（忠礼男、計之丞、喜右衛門、のち正誼）、江戸に出生、母は登喜	松山藩史料 23
文化 12	1815	7	-	郡代奥本久内、本年２月に普請御用を任せられた御殿向普請出来、引き移り済み、褒美下される	松山藩史料 23
文化 12	1815	9	-	先般江戸御殿向普請出来につき、小花和亦四郎上肴する	松山藩史料 23
文化 13	1816	5	-	忠礼、参府する	松山藩史料 23
文化 13	1816	6	23	忠敬（忠礼男、留太郎、のち頼永）、松山で出生、母は登喜	酒井氏系図
文化 13	1816	閏 11	14	周（忠礼女、凉）、建部伝右衛門正長に嫁す	松山藩史料 23
文化 14	1817	3	26	品（忠礼女）、久永主税幸貞に嫁す	酒井氏系図
文化 14	1817	5	11	忠篤（忠礼二男、大助、のち忠敏）・忠誠（同三男、計之丞、のち正誼）、在所に下り、この日松山着	松山藩史料 23
文化 14	1817	7	5	絲（忠礼女、里、遊加）、小出丹宮英照に嫁す	松山藩史料 23
文化 14	1817	7	23	忠礼、下国のため７月 12 日江戸発駕、この日松山着	松山藩史料 23
文政 1	1818	5	-	忠礼、参府のため松山発駕	松嶺史料 29
文政 2	1819	6	-	忠礼、江戸を発して在所に下る	松嶺史料 29
文政 2	1819	6	21	為（忠礼女）、坪内帯刀定永に嫁す	酒井氏系図
文政 3	1820	5	-	忠礼、江戸を発して在所に下る	松嶺史料 29
文政 4	1821	4	10	要之進（忠礼四男）、江戸に出生、母はみの	酒井氏系図
文政 4	1821	7	23	忠礼、江戸で没す、享年 43	松嶺史料 29
文政 4	1821	8	1	世子忠方（忠礼長男）、この日より「殿様」と称すよう命あり	松嶺史料 29
文政 4	1821	8	-	勇（忠礼室、鋲）、光寿院と称す	松嶺史料 29
文政 4	1821	9	16	忠方、忠礼の遺領出羽松山２万 5,000 石を継ぐ	松嶺史料 29
文政 5	1822	12	2	忠方、和田倉警衛を命じられ、この日江戸へ発駕、18 日着府、19 日和田倉番頭命じられる	松嶺史料 29
文政 5	1822	12	21	与茂（忠礼女）、土屋惣蔵常正に嫁す	松嶺史料 29
文政 6	1823	1	16	要之進（忠礼四男）没す、法名梅林院	松嶺史料 29
文政 6	1823	2	6	御泉水の水替えで、近習までの家臣へ鯉・鮒・なまず下賜あり、御居間にて頂戴する	松嶺史料 29
文政 6	1823	7	28	登和（忠礼女）、逗留として天野三郎右衛門方へ引き移る	松嶺史料 29
文政 7	1824	4	6	隠居忠崇、江戸で没す	酒井氏系図
文政 7	1824	閏 8	-	亀久（忠礼女、菊とも）、保々幸次郎に嫁す	松山藩史料 22
文政 8	1825	7	8	忠方、初めて在所に下り、この日松山に着	松嶺史料 29
文政 8	1825	9	-	与茂（忠礼女）、土屋惣蔵常正と離縁	松山藩史料 22
文政 8	1825	-	-	登和（忠礼女）、天野三郎右衛門と婚姻	酒井氏系図
文政 9	1826	6	5	忠方、参府のため５月 18 日松山発駕、この日着府	松嶺史料 29
文政 9	1826	10	15	利弥（忠礼女、のち雅、綱）、筧新太郎正直に嫁す	酒井氏系図
文政 10	1827	6	-	忠方、文政８年以来松山の古御殿跡に含弟らの御殿を普請し庭の新築もあり、この月移居が済む	松嶺史料 29
文政 10	1827	閏 6	-	忠方、在所に下る	松嶺史料 29
文政 10	1827	8	18	楽（忠方女、のち洛）、松山に出生、母はしづ（くみ）	酒井氏系図
文政 10	1827	-	-	分限帳に伊藤猪散太、斎藤清太の記載あり	松嶺史料 29
文政 11	1828	1	8	浅草西蓮寺門前より出火、浅草七軒町屋敷北長屋と厩類焼	松嶺史料 29
文政 11	1828	2	25	与茂（忠礼女）、彦坂愛之助紹徳に嫁す	松山藩史料 23
文政 11	1828	6	3	忠方、参府のため５月 21 日松山発駕、この日着府	松嶺史料 29
文政 11	1828	8	25	光寿院（忠礼室、勇、鋲）、江戸表に住居普請出来、この日引き移る	松嶺史料 29

年	西暦	月	日	記事	出典
文政 11	1828	10	24	経（忠方女）、江戸に出生、母はしづ	酒井氏系図
文政 12	1829	6	7	鉄（忠方縁女、豊前中津藩主奥平大膳大夫昌高女）、奥平家屋敷類焼したため、急遽酒井家屋敷に逗留する	松嶺史料 29・31
文政 12	1829	9	-	経（忠方女）、江戸より松山に下る	松嶺史料 29
文政 12	1829	7	-	忠方、大坂加番のため江戸を発す	松嶺史料 29
文政 12	1829	12	14	経（忠方女）、江戸で没す、法名玉光院	酒井氏系図
文政 13	1830	8	11	品（忠礼女）、久永主税幸貞と離縁	酒井氏系図
文政 13	1830	8	-	忠方、大坂加番を終えて、江戸に帰る	松嶺史料 30
天保 2	1831	5	24	忠良（忠方長男、聘七郎）、江戸に出生、母はしづ	酒井氏系図
天保 2	1831	6	-	忠方、在所に下る、7月松山着	松嶺史料 30
天保 2	1831	6	-	鉄（忠方縁女、奥平大膳大夫昌高女）、浅草七軒町上屋敷に引き移る	松嶺史料 30
天保 2	1831	-	-	品（忠礼女）、久永主税章貞と離縁	松山藩史料
天保 3	1832	5	-	忠方、参府のため松山を発す	松嶺史料 30
天保 3	1832	11	-	忠篤（忠礼二男、大助、のち忠敏）、松山より出府	松嶺史料 30
天保 3	1832	閏 11	26	忠方、鉄（奥平大膳大夫昌高女）との内婚済む	松嶺史料 30
天保 4	1833	2	28	品（忠礼女）、山田佐渡守利教に再稼、芳と改名	松嶺史料 30
天保 4	1833	4	4	忠篤（忠礼二男、大助、のち忠敏）、酒井因幡守忠質の養子となり、同家屋敷に引き移る	松嶺史料 30
天保 4	1833	4	22	忠方、鉄（奥平大膳大夫昌高女）と婚姻、鉄を「奥様」と称すよう命あり	松嶺史料 30
天保 4	1833	6	26	忠方、江戸を発す、7月8日松山着	松嶺史料 30
天保 5	1834	5	21	貞吉（忠方二男）、松山に出生、母はしづ	酒井氏系図
天保 5	1834	5	-	楽（忠方女、のち洛）、江戸に上る	松嶺史料 30
天保 5	1834	9	-	忠方、参府のため松山を発す	松嶺史料 30
天保 5	1834	10	29	雅（忠礼女、利弥、綱）、筧新太郎正直と離縁	酒井氏系図
天保 5	1834	12	20	貞吉（忠方二男）、没す	酒井氏系図
天保 6	1835	6	14	某（忠方男）、出生するもこの日没、母は鉄（忠方正室）	松嶺史料 30
天保 8	1837	6	-	忠誠（忠礼男、喜右衛門、のち正誼）・忠敬（忠礼男、留太郎、のち頼永）、江戸に上る	松嶺史料 30
天保 8	1837	7	18	忠方、大坂加番のため江戸を発す、同月晦日着坂	松嶺史料 30
天保 9	1838	8	8	忠方、大坂加番を終えて、江戸に帰る	松嶺史料 30
天保 9	1838	8	14	忠方、不快につき当 10 月まで滞府養生を許される	松嶺史料 30
天保 10	1839	10	24	忠方、不快同篇につき来春まで滞府養生を許される	松嶺史料 30
天保 10	1839	12	26	雅（忠礼女、利弥）を綱、楽（忠方女）を洛と改名する命あり	松嶺史料 30
天保 10	1839	12	9	綱（忠礼女、利弥、雅）、依田兵庫に再縁	松嶺史料 30
天保 11	1840	3	12	忠方、持病のため長途の旅行難儀につき、当 6 月中の参勤時節まで滞府養生を許される	松嶺史料 30
天保 11	1840	6	11	忠方、不快追々快方につき江戸城登城、参勤御礼済む	松嶺史料 30
天保 12	1841	7	-	忠誠（忠礼三男、喜右衛門、のち正誼）、甲斐庄兵庫助正道の養子となる	松嶺史料 30
天保 12	1841	7	-	忠方、在所に下る	松嶺史料 30
天保 14	1843	4	-	忠方、日光に発駕、龍円坊口勤番、終って帰府	松嶺史料 30
天保 14	1843	7	-	忠方、在所に下る	松嶺史料 30
天保 15	1844	6	晦日	鉄（忠方室）没す、法号光璉院	松嶺史料 31
弘化 1	1844	12	5	鋭（忠方女）出生、母は千万	酒井氏系図
弘化 2	1845	4	5	忠良（忠方長男、聘七郎）、松山を発す、4 月 18 日に江戸に着す	松嶺史料 31
弘化 2	1845	9	5	忠良（忠方長男、聘七郎）、世子届出済む	松嶺史料 31
弘化 2	1845	9	10	鋭（忠方女）、江戸で没す、法名法性院	松嶺史料 31
弘化 2	1845	10	1	忠良、家慶・家祥に初目見	松嶺史料 31
弘化 2	1845	11	20	忠方、願により隠居、世子忠良（聘七郎）、家督を継ぐ	松嶺史料 31
弘化 2	1845	12	19	洛（忠方女）、酒井右京亮忠嘕に嫁す	松嶺史料 31
弘化 2	1845	12	25	隠居忠方、本所原庭織田兵部少輔抱屋敷を譲り受けて、この日引き移る	松嶺史料 31
弘化 3	1846	7	18	相対替により、本郷御茶之水屋敷 527 坪を内藤伝十郎へ渡し、竹腰兵部少輔四谷千駄ヶ谷屋敷 300 坪を獲得する	相対替書抜 / 松嶺史料 31
弘化 4	1847	6	9	相対替により、千駄ヶ谷屋敷 1,603 坪のうち 150 坪ずつを青沼鎌太郎と田沢甚之助へ渡し、青沼の本所菊川町四丁目屋敷 750 坪を獲得	相対替書抜 / 松嶺史料 31
弘化 4	1847	6	26	忠良、在所に下り、7月7日松山着	松嶺史料 31
弘化 4	1847	12	17	相対替により、北本所横川端（柳島）下屋敷 1,798 坪を白須甲斐守へ、千駄ヶ谷下屋敷 1,303 坪のうち 150 坪を園城寺繁蔵へ渡し、白須の本所四ッ目茅場町下屋敷 3,500 坪を獲得	相対替書抜 / 松嶺史料 31
嘉永 1	1848	6	-	忠良、大坂加番に発駕する	松嶺史料 32
嘉永 2	1849	3	-	浅草七軒町上屋敷の奥御殿向普請開始のもよう	松嶺史料 32(光寿院書翰)
嘉永 2	1849	4	-	晴（忠良縁女、武蔵岩槻藩主大岡主膳正忠固女）、浅草七軒町上屋敷奥向に引き移りのもよう	松嶺史料 32(光寿院書翰)
嘉永 2	1849	8	-	忠良、大坂加番終えて帰府する	松嶺史料 32
嘉永 2	1849	8	-	忠良、晴（武蔵岩槻藩主大岡主膳正忠固女）と婚姻	松嶺史料 32
嘉永 3	1850	6	12	某（忠良女）、死胎で生れる、母は晴（忠良室）	酒井氏系図
嘉永 3	1850	6	20	晴（忠良室）、産後の肥立ち悪く没す、法号真如院	松嶺史料 32
嘉永 4	1851	2	26	忠良、鋭（志摩鳥羽藩主稲垣摂津守長明妹）と内婚、鋭は浅草七軒町上屋敷に入輿	松嶺史料 32
嘉永 4	1851	4	3	鋭（忠良継室）、浅草七軒町屋敷に引き移り、以来「奥様」と称すよう命あり	松嶺史料 32
嘉永 4	1851	6	13	忠良、奏者番を命じられる	松嶺史料 32
嘉永 5	1852	4	6	春之進（忠良長男）、江戸に出生、母は継室鋭	松嶺史料 32
嘉永 6	1853	7	15	春之進（忠良長男）没す、法名真誉院	松嶺史料 32
嘉永 6	1853	7	15	忠良、松山城に着す	松嶺史料 32
安政 1	1854	4	-	忠良、参府のため発駕する	松嶺史料 33
安政 2	1855	7	12	忠良、下国のため江戸発駕、同月 23 日松山着	松嶺史料 33
安政 2	1855	10	2	夜四ッ時、大地震起り、長屋向所々大破、御殿向は無事ながら傾いた箇所多し	松嶺史料 33
安政 2	1855	12	-	10 月 2 日の地震により長屋が潰れた定府家臣らへ手当金が下される	松嶺資料 33
安政 3	1856	2	28	相対替により、本所菊川町屋敷放出、小日向中ノ橋久貝伝治屋敷獲得	松嶺史料 33
安政 3	1856	3	25	小日向中ノ橋屋敷、分家酒井岩之助へ貸与	松嶺史料 33
安政 3	1856	6	15	忠良、参府のため 5 月 19 日発駕、この日着府	松嶺史料 33
安政 3	1856	12	19	忠匡（忠良男、信三郎）出生、母は波	酒井氏系図
安政 4	1857	4	18	原庭屋敷普請落成につき、役人に褒美が与えられる	松嶺史料 33
安政 4	1857	7	-	忠良、在所に下る	松嶺史料 33
安政 4	1857	-	-	安政地震後の長屋向再建につき、普請奉行下役佐藤又次郎・五十嵐熊平、不正を働き家名断絶、普請奉行北瓜五郎兵衛は監督不行届につき隠居を命じられて鶴岡に帰されるが、普請奉行元締鈴木伴亀は咎めなし	松嶺史料 33
安政 5	1858	2	21	鉉（忠良女）、江戸に出生、母は継室鋭	松嶺史料 33
安政 5	1858	3	17	鉉（忠良女）没す、法名光善院	松嶺史料 33
安政 5	1858	6	26	忠良、病を押して参府のため発駕、7月8日着府	松嶺史料 33
安政 5	1858	8	15	忠盛（忠良男、鍬四郎）、松山に出生、母は千代	酒井氏系図
安政 6	1859	10	16	忠良、在所に下る	松嶺史料 33
万延 1	1860	4	28	忠良、鋭（志摩鳥羽藩主稲垣摂津守長明妹）と離縁	酒井氏系図
文久 1	1861	10	14	光寿院（忠礼室、勇、鉞）、浅草七軒町上屋敷別宅で没す、享年 84	松嶺史料 34
文久 2	1862	閏 8	23	忠良、改革により奏者番廃せられ、その職を免ぜられる	松嶺史料 34
文久 2	1862	10	12	忠良、明年まで滞府を命じられる	松嶺史料 34
文久 3	1863	2	-	忠良、将軍上洛留守中火之番を勤める	松嶺史料 34
文久 3	1863	2	8	浅草七軒町屋敷に角場を取り建て、四季家臣へ鉄炮稽古したい旨、幕府に伺い	松嶺史料 34
文久 3	1863	2	10	浅草七軒町屋敷光寿院隠殿跡へ、新規角場地所の見分あり	松嶺史料 34
文久 3	1863	2	30	浅草七軒町屋敷角場取り建てと家来の鉄炮稽古、許可される	松嶺史料 34
文久 3	1863	3	8	定府の者へ、万一異変の節は家内を在所へ差し下す用意をしておくよう申し達し、近郷近在等に身寄りのある者はそれへ立ち退くこと勝手次第とする	松嶺史料 34
文久 3	1863	3	23	定府家内差し下しの件、この度上州領分となり面々心得るよう、出立日限は藩より沙汰のこと	松嶺史料 34
慶応 1	1865	7	21	相対替により、四谷鮫ヶ橋下屋敷 1,150 坪のうち 1,000 坪に替えて、小石川氷川明神坂上跡部伊賀守下屋敷 100 坪を獲得	松嶺史料 36
慶応 1	1865	9	9	忠匡（忠良男、信三郎）と忠盛（忠良男、鍬四郎）、松山より江戸着	松嶺史料 36
慶応 1	1865	9	24	普請奉行へ兼ねて沙汰の忠匡・忠盛らの住居取建懲入用並びに奥広敷大破につき修復および塀廻り修復の見積り出る	松嶺史料 36
慶応 2	1866	11	15	忠匡（忠良男、信三郎）、幕府へ嫡子届済み「若殿様」と称すよう口達あり	松嶺史料 37
慶応 3	1867	3	3	忠堯（忠良男、鏘之丞）、江戸で出生、母はくに	酒井氏系図
慶応 3	1867	7	5	忠良、暇年のところ、将軍上洛中につき引き続き門番（西丸下詰）を勤める	松嶺史料 38
慶応 3	1867	12	25	忠良、西丸下詰の者へ、江戸市中取締を勤める宗家酒井家に加勢して薩摩藩三田（芝）屋敷討ち取りを命じる	松嶺史料 38

年	西暦	月	日	記事	出典
慶応４	1868	2	15	王政復古と将軍慶喜恭順謹慎につき、宗家酒井家より一家在所で恭順する旨届け出て下向の積もりと伝えられる	松嶺史料 39
慶応４	1868	2	20	忠良、幕府へ暇乞いの願書提出、許可される	松嶺史料 39
慶応４	1868	2	20	隠居忠方、幕府に暇乞いを願い早速在所へ下るべき旨忠良へ沙汰、自らは人質の心得で残るとのこと、忠良同意する	松嶺史料 39
慶応４	1868	2	23	西丸下詰残らず引き揚げる	松嶺史料 39
慶応４	1868	2	24	忠良、陸路発駕 30 日と決まり、女中は 28 日出立と決まる	松嶺史料 39
慶応４	1868	2	晦日	忠良、江戸発駕、道中 13 日割くらいで下る旨（松山着不明、３月 13 日頃か）	松嶺史料 39
慶応４	1868	3	8	世子忠匡（忠良男、信三郎）・忠盛（忠良男、鍈四郎）・忠堯（忠良男、鏘之丞）、江戸を発す	松嶺史料 39
慶応４	1868	3	8	定府の面々、勝手次第在所へ下ることを許可する	松嶺史料 39
慶応４	1868	3	23	世子忠匡、松山着、忠盛（忠良男、鍈四郎）・忠堯（忠良男、鏘之丞）も着す	松嶺史料 39
慶応４	1868	閏４	-	浅草七軒町屋敷、甲斐庄帯刀名前にし置き、原庭屋敷は旗本小出多宮名前になり、隠居忠方は小梅辺りの小屋敷へ入ったとの由あり	松嶺史料 40
明治１	1868	9	16	鶴岡城中で重臣会議が開かれて降伏謝罪の適否を論ず、議論決せず宗家隠居酒井忠発の指揮を仰ぎ降伏帰順に決す	松山町史年表 p.114
明治１	1868	11	5	忠良、賊徒に与し官軍に抗す故を以て、官位停止と邸宅取上の沙汰を蒙る	酒井家譜
明治１	1868	12	8	忠良、王師に抗し大義を弁ぜざるのところ、出格の思召により領地 2,500 石召上、隠居を命ぜられるも、血脈の者へ家名相続は許される	酒井家譜
明治１	1868	12	15	家名相続出願のところ、世子忠匡へ２万 2,500 石下賜される	酒井家譜
明治１	1868	12	20	忠匡、出京を命ぜられ松山を発す、出立前忠良に目通り	松山町史年表 p.115/ 松嶺史料 40
明治２	1869	1	25	忠匡、従前のとおり浅草七軒町と四谷千駄ヶ谷の屋敷が下される	酒井家譜
明治２	1869	6	22	忠匡、松嶺藩知事に任ぜられる、松山を松嶺と改称する	酒井家譜
明治３	1870	7	-	忠匡、廃藩置県により知藩事を免ぜられ、命により上京	酒井家譜
明治３	1870	11	8	浅草七軒町元松嶺県邸を下され、四谷千駄ヶ谷邸を返上、浅草七軒町邸を住居とする	酒井家譜
明治６	1873	8	-	忠匡、第五大区小六区浅草七軒町二番地に居住	酒井家譜

【註】

・家ごとに作成したので、屋敷地移行期等一部重複する年月日がある

・出典の一部は略称を用いており、その各正式名称は下に記す

・出典の正式名称・著者・収載書誌・所蔵機関等は以下の通り（記載順）

「江戸全図」（臼杵市教育委員会所蔵）/「江戸大絵図」（公益財団法人三井文庫所蔵）/「備藩邸考」…生駒正直著、神原邦男・吉本勇「備前藩江戸屋敷の研究（一）―生駒正直『備藩邸考』翻刻」（『吉備地方文化研究』第９号、就実女子大学吉備地方文化研究所、1998 年、収載）/「御家史草稿」のうち「江戸藩邸土木」（岡山大学所蔵池田家文庫 A9-41、『池田家文庫藩政資料マイクロ版集成』、丸善、1993 年、収載）/ 御四代之記…「忠以公忠如公迄御四代之記　智」（いわき市教育文化事業団寄託「本多忠晃家文書」6-1）/「柳営日次記」（国立公文書館内閣文庫所蔵）/「新板江戸外絵図」（国立国会図書館所蔵）/ 寛政譜…『新訂寛政重修諸家譜』第十一 /「御当代記」（『東京市史稿 変災篇』第四、収載）/「屋敷渡預絵図証文」（国立国会図書館所蔵）/「月堂見聞集」（『東京市史稿 変災篇』第四、収載）/「天享吾妻鑑」（同前）/ 忠籌御代記…「忠籌公当御代記　信」（いわき市教育文化事業団寄託「本多忠晃家文書」6-2）/「松山藩史料」19 ～ 23…鶴岡市郷土資料館所蔵「阿部正己文庫」のうち請求番号 19 ～ 23「松山藩史料 」19 ～ 23/ 松嶺史料 29 ～ 34・36 ～ 40…同前のうち請求番号 29 ～ 34・36 ～ 40「松嶺史料」/ 酒井氏系図…同前のうち請求番号 70「〔松山藩主〕酒井氏系図」/ 相対替書抜…「相対替御書附書抜」（国立国会図書館所蔵）/『松山町史年表』（松山町史編纂委員会編、1975 年）/ 酒井家譜…「羽後松嶺 酒井家譜」（東京大学史料編纂所所蔵）

2　元浅草遺跡第 2 次調査地点から出土した遺構構成材の樹種同定と年輪年代学的検討

鈴木伸哉（東京都埋蔵文化財センター）・大山幹成（東北大学植物園）

1．はじめに

元浅草遺跡の第 2 次調査において、19 世紀末ごろまで利用された池跡と、それに先立つ地境の間知石列をはじめとした遺構が検出された。ここでは池跡に伴う上水木樋や、間知石列に用いられた胴木に用いられた木材の樹種を同定した結果と、木樋に用いられた木材の一部について、年輪計測に基づく年輪年代学的検討をおこなった結果を報告する。

2．資料と方法

樹種同定：樹種同定は木材組織切片のプレパラート観察によりおこなった。出土した遺構構成材から片刃カミソリによって木材の横断面・接線断面・放射断面の切片を採取し、これをガムクロラールで封入して同定用プレパラートとした。プレパラートには HAKHO 01-17 の標本番号を付した。プレパラートは他の資料とともに東京都教育委員会によって保管されている。

年輪計測：木樋に用いられた木材のうち、目視で多数の年輪が認められたものを中心に、横断面方向に切断し、円盤状試料を得た。断面を #80 ～ 400 のサンドペーパーで研磨した後、フラッドベッド型スキャナーを用いて解像度 1200 ～ 2400ppi の画像を撮像した。

撮像した画像上で年輪幅を約 0.01mm 単位で計測した。クロスデーティングは年輪年代学の常法（Baillie　1982）を用いて、年輪曲線グラフの目視評価と統計評価、そしてそれらの反復検証によりおこなった。

3．結果

樹種同定：プレパラート 17 点のうちには針葉樹 2 分類群が認められた。個別の同定結果は第 63 表にまとめた。以下ではそれぞれの分類群の木材解剖学的な記載をおこない、代表的な標本の顕微鏡写真を第 183 図に示し、樹種同定の根拠を明らかにする。

アカマツ *Pinus densiflora* Sieb. et Zucc.　マツ科（写真：HAKHO 16）

垂直・水平樹脂道をもつ針葉樹材。早材から晩材への移行はやや急で、晩材は量多く明瞭。放射仮道管の水平壁には著しい鋸歯状の突起がある。分野壁孔は大型の窓状で、1 分野にふつう 1 個。

ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endl.　ヒノキ科（写真：HAKHO 06）

垂直・水平樹脂道のいずれをも欠く針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材はごく少ない。樹脂細胞が早材の終わりから晩材にかけて接線方向に散在する。仮道管の内壁にらせん肥厚は認められない。分野壁孔は中型で孔口が縦に開くトウヒ型～ヒノキ型で、1 分野に 2 ～ 3 個。

年輪計測：88 号遺構 b 胴木東端（HAKHO 05）、88 号遺構 c 胴木西端（HAKHO 06）と間知石下の木樋（HAKHO 07）、96 号遺構木樋西端（HAKHO11）、東端（HAKHO12）の木樋の年輪を計測した（第 184 図）。

HAKHO 05 は 4 分割にした大径木の樹皮側を刳り抜いて樋を作り出している。樹皮および最終形成年輪は遺存しておらず、残存部の外側 5 層に辺材が残る。HAKHO 06 は 4 分割にした大径木の中央を刳り抜いて樋を作り出している。樹皮および最終形成年輪は遺存しておらず、心材と辺材の境界

は不明瞭である。HAKHO 07 は 4 分割にした大径木を分割して樋の蓋と本体に分け、本体の中央を刳り抜いて樋を作り出している。樹皮および最終形成年輪は遺存しておらず、心材と辺材の境界は不明瞭である。HAKHO 11 と 12 はいずれも角材に製材した大径木の髄付近を刳り抜いて樋を作り出している。外側 5 ～ 10 層前後は辺材の可能性があるが、心材と辺材の境界は不明瞭である。

これらの 5 点の資料に確認された年輪数はいずれも 100 層を超え、最も多いものは 427 層であった。それぞれの計測値は第 64 表に示した。

資料間のクロスデーティングの結果、88 号遺構 c 木樋西端と間知石下の木樋（HAKHO 06・07）がオーバーラップ 366 層・t_{BP}=23.00 でクロスデートし、96 号遺構木樋の西端と東端（HAKHO11・12）がオーバーラップ 137 層・t_{BP}8.61 でクロスデートした。

これらの資料と、年代既知の複数の標準年輪曲線とのクロスデーティングの結果、HAKHO05 の曲線と中央区八丁堀三丁目遺跡の木棺群に基づく標準年輪曲線（tkht：大山他　2001）とがオーバーラップ 313 層・t_{BP}=5.28 でクロスデートし、HAKHO 06・07 からなる年輪曲線の樹皮側 230 層（髄側 220 層の年輪データは個体間の変異が著しいため採用しなかった）と千代田区弥勒寺跡の木棺群に基づく標準年輪曲線（tkmr：大山他　2001）とがオーバーラップ 228 層・t_{BP}=6.50 でクロスデートした。これらは他の複数の標準年輪曲線ともクロスデートし、同じ年代値が得られている。その結果、各資料の残存最外年輪の年代値は HAKHO 05 が CE1623 年、06 が CE1567 年、07 が CE1544 年に決定した。HAKHO 11・12 からなる年輪曲線は既存の標準年輪曲線のいずれともクロスデートしなかった。

考察

元浅草遺跡第 2 次調査において出土した木樋にはいずれもヒノキが、胴木にはアカマツが用いられていた。これらの樹種はいずれも水湿に強く、ヒノキは耐朽性にも富むため、木樋や胴木の用材に適している。なかでも木樋には樹齢 400 年以上に達するものも含む大径木が用いられていることから、木樋の敷設にあたって木材を吟味して使用したものと推定される。

HAKHO05 の残存最外年輪は CE1623 年に決定された。この資料の最終形成年輪および樹皮は残っておらず、外側 5 層は辺材と見られることから、この木材は 1623 年以降の数十年のうちに伐採されたものと考えられる。同様に、HAKHO 06･07 の残存最外年輪は CE1544 年･CE1567 年に決定された。いずれも最終形成年輪および樹皮は残っておらず、心材と辺材の区別も明瞭ではないことから、これらは残存最外年輪の示す年代以降に伐採されたものと考えられる。

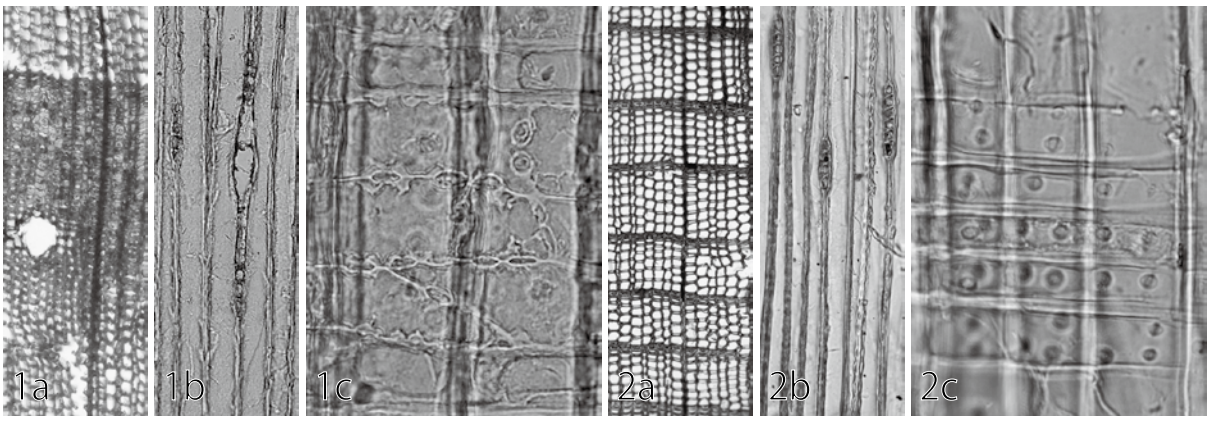
東京都内の大名屋敷では、本遺跡と同様に樹齢百年を超えるヒノキ科の良材が多数、木樋に用いられており、一部は年輪年代学的検討により遺構の上限年代の決定に成功している（鈴木・星野 2019）。今後の同種の遺構の調査においては、年輪年代学的検討がおこなわれることが望まれる。

引用文献

大山 幹成・米延仁志・鈴木伸哉・星野安治　2021「中部産ヒノキ属の 2000 年年輪幅標準年輪曲線構築」『日本文化財科学会第 38 回大会研究発表要旨集』A-001

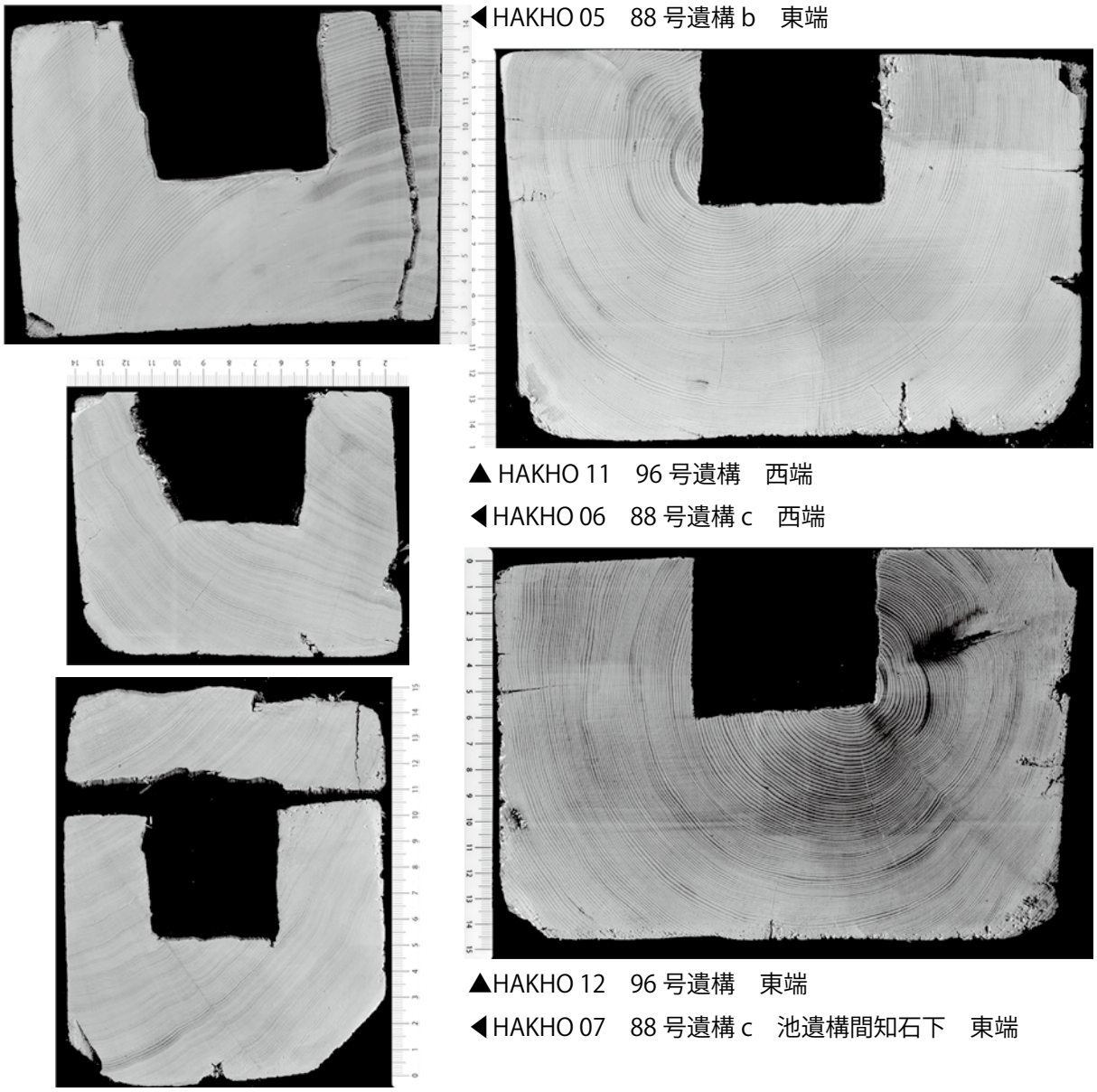
Baillie, M. G. L. 1982　Tree-ring dating and archaeology. The University of Chicago Press.

鈴木伸哉・星野安治　2019「遺構構成材の年輪年代学的検討」『愛宕下武家屋敷群 – 近江水口藩加藤家屋敷跡遺跡 - 発掘調査報告書』虎ノ門一丁目地区市街地再開発組合・大成エンジニアリング株式会社



1：アカマツ（HAKHO 16），2：ヒノキ（HAKHO 06）scale：a（横断面）：× 40, b（接線断面）：× 100, c（放射断面）：× 400

第 183 図　元浅草遺跡第 2 次調査地点から出土した遺構構築材の顕微鏡写真



◀HAKHO 05　88 号遺構 b　東端

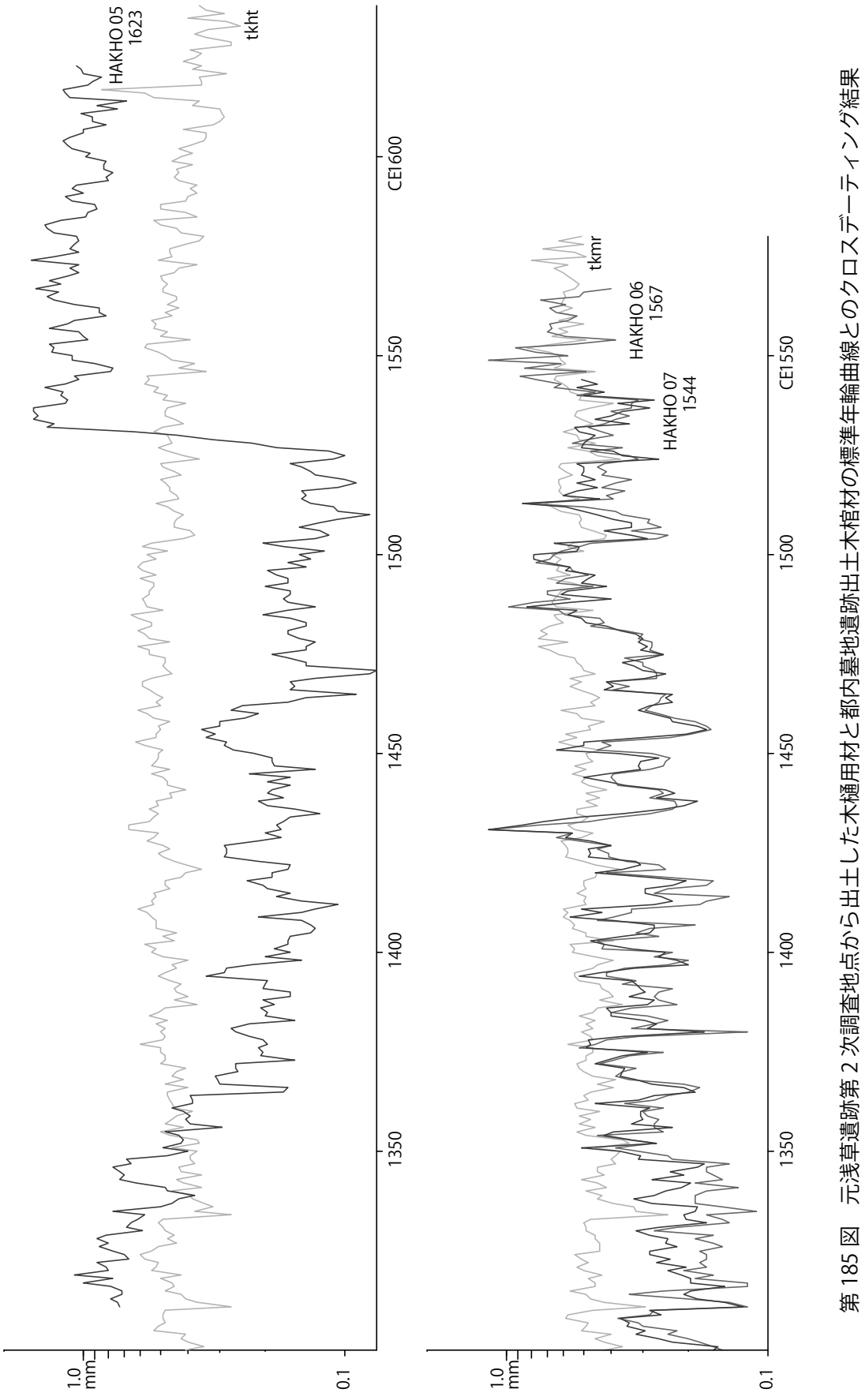
▲ HAKHO 11　96 号遺構　西端

◀HAKHO 06　88 号遺構 c　西端

▲HAKHO 12　96 号遺構　東端

◀HAKHO 07　88 号遺構 c　池遺構間知石下　東端

第 184 図　元浅草遺跡第 2 次調査地点から出土した木樋用材の横断面写真



第 185 図　元浅草遺跡第 2 次調査地点から出土した木樋用材と都内墓地遺跡出土木棺材の標準年輪曲線とのクロスデーティング結果

第 63 表　元浅草遺跡第 2 次調査地点から出土した遺構構築材の樹種

HAKHO	遺　構	部　位	樹　種
1	80 号遺構　胴	西端（75 号遺構連結部）	ヒノキ
2	80 号遺構　池遺構間知石下　胴	東端（池入口側）	ヒノキ
3	88 号遺構 a　胴	東端（88 号遺構 d 連結部）	ヒノキ
4	88 号遺構 b　胴	西端（継手連結部）	ヒノキ
5	88 号遺構 b　胴	東端（92 号遺構連結部）	ヒノキ
6	88 号遺構 c　胴	西端（92 号遺構連結部）	ヒノキ
7	88 号遺構 c　池遺構間知石下　胴	東端（池入口側）	ヒノキ
8	88 号遺構 c　池遺構間知石下　栓		ヒノキ
9	88 号遺構 d　胴	西端（88 号遺構 a 連結部）	ヒノキ
10	88 号遺構 d　胴	東端（継手連結部）	ヒノキ
11	96 号遺構　胴	西端（97 号遺構連結部）	ヒノキ
12	96 号遺構　胴	東端（95 号遺構連結部）	ヒノキ
13	33 号遺構　胴木⑤	東端	アカマツ
14	33 号遺構　胴木③	西端	アカマツ
15	33 号遺構　胴木③	東端	アカマツ
16	33 号遺構　胴木④	東端	アカマツ
17	33 号遺構　胴木⑭	西端	アカマツ

第 64 表　元浅草遺跡第 2 次調査地点から出土した木樋用材の年輪計測値

HAKHO	遺構	部位	年輪数（層）	残存最外年輪（CE）	最小（mm）	最大（mm）	平均（mm）	標準偏差（mm）
5	88 号遺構 b　胴	東端（92 号遺構連結部）	313	1623	0.07	1.58	0.53	0.42
6	88 号遺構 c　胴	西端（92 号遺構連結部）	389	1567	0.11	1.17	0.36	0.17
7	88 号遺構 c　池遺構間知石下　胴	東端（池入口部）	427	1544	0.12	1.21	0.37	0.16
11	96 号遺構　胴	西端（97 号遺構連結部）	137	—	0.52	1.67	0.95	0.27
12	96 号遺構　胴	東端（95 号遺構連結部）	190	—	0.33	1.86	0.95	0.26

3　EDX を用いた元素分析による元浅草遺跡出土煉瓦の分類

長佐古真也 (東京都埋蔵文化財センター)

緒言

煉瓦は、近代を象徴する遺構構築材の一つであり、都内の発掘調査においても度々報告の俎上に上がるようになっている (東京都埋蔵文化財センター 1997、2015 他)。しかし、近代首都圏における煉瓦生産および流通の様相は非常に複雑であるのに対し、煉瓦の形状は規格の整った単純な直方体で製作技法の差異にも乏しく、生産単位を推定する根拠が現状ではほぼ刻印に限られている。無刻印資料や部分欠損もしくは目地の付着により刻印の有無が不明の資料は考察の埒外に置かれたままであるが、本来は全体を対象とした考察が必須であることは明白で、今後はより詳細な製作技法の観察や胎土の特徴などの所見などから分類の可能性を模索していく必要がある。

近年、その打開策の一つとして、エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置（EDX）を用いた胎土の主成分元素組成による分類を試みており (長佐古 2021・2022、東京都埋蔵文化財センター 2021・2022)、既に関東地方の主要河川流域毎の特徴が明らかになりつつある。今回、元浅草遺跡各遺構から出土した近代煉瓦に対しても同様の分析を試みた。

1　分析対象資料

分析の対象とした煉瓦資料は挿図掲載資料を含む 145 点で、対象個体から採取した数グラム程度の小破片を分析試料とした。分析の目的は、①刻印が捺された煉瓦の分類根拠となる基礎データの蓄積、②無刻印および刻印不明煉瓦と刻印煉瓦の比較検討、③遺構内・遺構間における各種煉瓦使用状況の検討である。

試料には、本文で与えられた資料番号に依って D001 ～ D145 の試料番号を付した。各資料の詳細は本文第 65 表を参照されたい。敢えて試料片を採取したのは、調査後廃棄が予定されていた資料についても検証用試料を残すことと、汚染のない破断面を得ることで分析の精度を上げるためである。ただし、D139 は資料が小破片で試料採取が困難であったことから、資料本体の旧破断面を直接測定した。

2　分析方法と分析結果

分析には EDX（SHIMADZU EDX-8100 ／東京都埋蔵文化財センター）を用いた。Rh ターゲット、真空環境、分析対象 Al―U（4.00 ～ 35.00eV）の領域が 50kV ／ 240 μ A-Auto、C―Sc（0.00 ～ 4.40eV）の領域は 15kV ／ 1000 μ A-Auto、さらに S・K・Ca の精密定量を意図して設けた S―Ca（2.10 ～ 4.10eV）の領域は 15kV ／ 1000 μ A-Auto で #2 のフィルタを使用、各領域を 60 秒ずつ測定した。コリメータは 10mm とした。分析値の算出には、FP 法による定性定量メニューを設定した。岩石・土壌に含まれる可能性が高い珪素 (Si)・アルミニウム (Al)・鉄 (Fe)・チタン (Ti)・ナトリウム (Na)・カリウム (K)・マグネシウム (Mg)・カルシウム (Ca)・リン (P)・硫黄 (S) の主成分元素に加え、バナジウム (V)・クロム (Cr)・マンガン (Mn)・亜鉛 (Zn)・ガリウム (Ga)・ヒ素 (As)・ルビジウム (Rb)・ストロンチウム (Sr)・

イットリウム (Y)・ジルコニウム (Zr) の 19 元素を固定し、定性的に検出されたものを加えて存在比を算出してある。

第 1 表に分析結果を示した。分析値は、岩石学の習慣に倣って全て酸化物として算出してある。また、鉄については、すべて 3 価と仮定して算出した。主成分元素については％単位、その他の微量元素は ppm 単位で示した。

3　考察

3 － 1　各種刻印煉瓦の推定生産地域について

まず、第一の目的である刻印煉瓦の生産流域の推定、および第二の目的である刻印煉瓦と無刻印煉瓦・刻印不明煉との関係について検討する。瓦今回の調査では、35 号遺構の地表レベルと推測される初段および次段から円枠に「さ」・「サ」の刻印を伴う板目 (いわゆる手抜き成形) の焼過ぎ煉瓦が多く採集されているのが特徴である。類似刻印は旧島津家本邸事務所棟であった重要文化財清泉女子大学 3 号館の耐震対策事業の際にも採集されており (学校法人清泉女子大学 2022)、共伴した山傘に「サ」銘刻印に伴う「鹿濱」の文字から、これらは荒川区の荒川左岸域に所在した斎藤煉瓦の可能性が指摘されている。今回検出された円枠「さ」・「サ」刻印もこれらとの関連が想起されることから、まず、刻印を有する板目 (手抜き成形) 煉瓦について検討を加える。

第 186 図に、円枠に「さ」・「サ」の刻印を有する板目煉瓦胎土に関する主要 10 元素の二元分布図 6 種に示す。各図には、既に把握されている水系毎の分布範囲 (長佐古 2021) と旧島津邸「さ」・「サ」刻印煉瓦 (前掲清泉女子大学)、さらに「石監」刻印煉瓦と江戸後期の在地系土器カワラケの分析値 (未公表) を併せて示してある。いずれの分布図においても、今回検出の円枠「さ」・「サ」刻印煉瓦は、中円枠「さ」の二例 (D027・086) を除き、ほぼ近接した領域に分布し、同一生産者もしくは同一生産地域の所産と考えて差し支えない。ただし、[ケイ素 (SiO2) ／アルミニウム (Al2O3)] 分布図においては多摩川水系煉瓦 (横浜煉瓦・御幸煉瓦) の領域に、[ナトリウム (Na2O) ／マグネシウム (MgO)] 分布図においては荒川水系 (東京集治監等) の領域に、[カリウム (K2O) ／カルシウム (CaO)] 分布図においてはいずれの領域からも外れるなど、既に分布範囲が把握されている利根川・江戸川水系・荒川水系・多摩川水系の何れの煉瓦とも傾向を異にしており、過去の事例では未検討の地域 (以下、地域 a と呼称する) で生産された可能性が高いことが判明した。一方、今回検出の中円枠「さ」例に加え、旧島津邸採取のヤマ「サ」・円枠「さ」・「サ」刻印例は、すべて東京集治監を含む荒川左岸域の領域に集中している。すなわち、刻印の内容が共通していても異なる地域の所産である事例が確認されたことになる。今後、円枠・山傘を伴う「さ」・「サ」の刻印例に関しては、その生産地推定を慎重に行う必要がある。

では、不詳の地域 a はどこに求められるであろうか。実は、一例の参考分析のみであるが「石監」銘刻印を伴う事例が今回の円枠「さ」・「サ」群と同様の挙動を示している。「石監」銘は、隅田川河口の三角州に江戸期に設置された石川島人足寄せ場から維新期に改組された石川島監獄署 [明治 10 ～ 28 年 (1877 ～ 95)] の所産と推測されている。さらに、今戸を含む隅田川の沿岸域産と考えられる土器も近接領域にプロットされることなどを勘案すると、現時点においては隅田川流域が第一の有力候補地となろう。今後の資料増加を待って再検討したい。

第 187 図上段は、板目煉瓦のうち、「さ」・「サ」以外の刻印を有する例について検討を加えたものである。紙幅の関係から [ケイ素／アルミニウム] および [カリウム／カルシウム] 分布図のみを掲げるが、他の元素の分布図においても矛盾のない傾向を確認している (以下、同様)。「千葉本家」刻印の D084・085、円枠に「吉」刻印の D093、「◇」に「十二」を伴う D129 については、いずれも東京集治監を含む荒川領域に含まれた。一方、単独の「◇」刻印を持つ D051 と扇形の枠を確認した D107 はチヂレ目 (いわゆる機械成形) 煉瓦を生産した金町煉瓦と同じ領域にプロットされることから、利根川水系の江戸川流域で生産された可能性が高い。円枠に「千」例 (D139) については、ケイ素、アルミニウム共に既知地域よりも高い値を示したことから、生産地を特定することができなかった。第 187 図下段には無刻印もしくは刻印不明の板目煉瓦例について検討を加えたものである。無刻印のうち、D081・89・091・094・(095)・130 は荒川流域、D52・061 ～ 066 は江戸川流域、刻印を判読できなかった D082(35 号遺構) および 30 号遺構から採集された D145 は地域 a の産と考えられる。D073・126・133・134・135 については荒川領域と江戸川領域、D083 は荒川領域と地域 a の重複領域にプロットされたため、現時点において生産地は不明である。なお、便宜的に本図に含めた陶器質の D104・108 は、いずれも多摩川流域の範囲にプロットされるが、他の元素では異なる傾向が認められるため、生産地は不詳である。

第 188 図上段は、チヂレ目煉瓦で刻印を有する例を検討した図である。すべて輪違の刻印を有する金町煉瓦と同じ領域にプロットされ、江戸川流域で生産されたものと考えられる。今後は、これらの刻印が金町煉瓦に関連するものか、近隣の生産者のものかについて考察していく必要があろう。一方、同図下段に示した刻印無・不明例に関しては、有刻印例同様、江戸川領域に含まれるものも多く認められるが、D060・071・96 ～ 102・109 ～ 113・127・128 の 16 例は荒川領域にプロットされており、刻印を有する資料とは異なる傾向を有している。なお、D070 は多くの元素について他試料とは異なる挙動を示していることから、生産地域の判定は保留しておく。

3 － 2　各地生産煉瓦と遺構との関係について

以上、各煉瓦の生産地域が概ね明らかになったところで、第三の目的である遺構毎、35 号遺構においては遺構部位における構成煉瓦の生産地域分布について確認しておく。

第 189 図上段は、35 号遺構内で検出された板目煉瓦の生産地域を段毎に示したものである。初段は地域 a が主体を占める一方、次段は江戸川流域を主体に地域 a を若干含み、次次段と南側拡張部については荒川流域の所産で占められており、部位ごとに明確な差異があることが判明した。これは、チヂレ目 (機械成形) 煉瓦 (第 4 図中段) についても同様で、次次段および初段より上については江戸川流域、次次段よりも下位については荒川流域の煉瓦が用いられている。焼過ぎの板目煉瓦主体の初段および次段が塩害防止のために地表直上に用いられたと推測すると、35 号遺構は、地中に埋没する基礎部分を荒川流域のチヂレ目煉瓦で積み、地表直下の段のみ金町煉瓦を含む江戸川流域のチヂレ目煉瓦と荒川流域の板目煉瓦、地表直上段を江戸川流域の板目煉瓦、その上を地域 a の板目煉瓦で構成し、それより上位、すなわち建物壁体には再び江戸川流域のチヂレ目煉瓦を用いるという、かなり複雑な構造を有していたことになる。その背景としては、建築過程で逐次発注・納品を繰り返した所産の可能性も考えられるが、意図をもって使い分けていた可能性も考えられる。後者の場合は、成形技法・生産地域により煉瓦の性質に差異があったことを示唆することになろう。なお、南側拡張部

については構造が異なっていたようである。

第 189 図下段に示した 35 号遺構以外の遺構例については、遺構数に対して試料数が少ないことから明確な傾向を指摘することが難しい。今回は結果を示すのみに止めるが、35 号遺構併行期に属する遺構のチヂレ目煉瓦は 35 号遺構の地上部分と共通する江戸川流域と推定される一方、板目煉瓦については生産地不詳の D126・133 ～ 135 で占められている点を指摘しておく。

結語

今回の分析では、多くの成果を得ることができた。まず、35 号遺構で検出された「さ」・「サ」刻印を伴う板目煉瓦が従来確認されていなかった地域の所産であること、その有力な候補地として隅田川流域の可能性を検討すべきであること、類似の刻印を有する煉瓦でも生産地域が異なる可能性があること、荒川流域産のチヂレ目煉瓦や江戸川流域産の板目煉瓦が確認されたことなどを列挙できるが、最も大きな成果は、35 号遺構の基礎構築に際して様々な地域・性質の煉瓦が使い分けられていたことを確認できた点であろう。今後、こうした使い分けが想定される事例においては、綿密なサンプリングを行うことで、より実態に迫っていくことが求められる。また、こうした検討を行う際、無刻印もしくは刻印不明の煉瓦も対象としうる点で、EDX を用いた胎土の元素組成分析が非常に有効な手段であることを改めて確認できたことも、重要な成果である。

引用参考文献

清泉女子大学 2022『重要文化財級島津家本邸事務所　耐震対策工事報告書』

長佐古真也 2021「新港埠頭出土近代煉瓦胎土の元素組成分析と実体顕微鏡を用いた特徴把握」『神奈川県横浜市中区 横浜新港埠頭遺跡発掘調査報告書』(株) パスコ

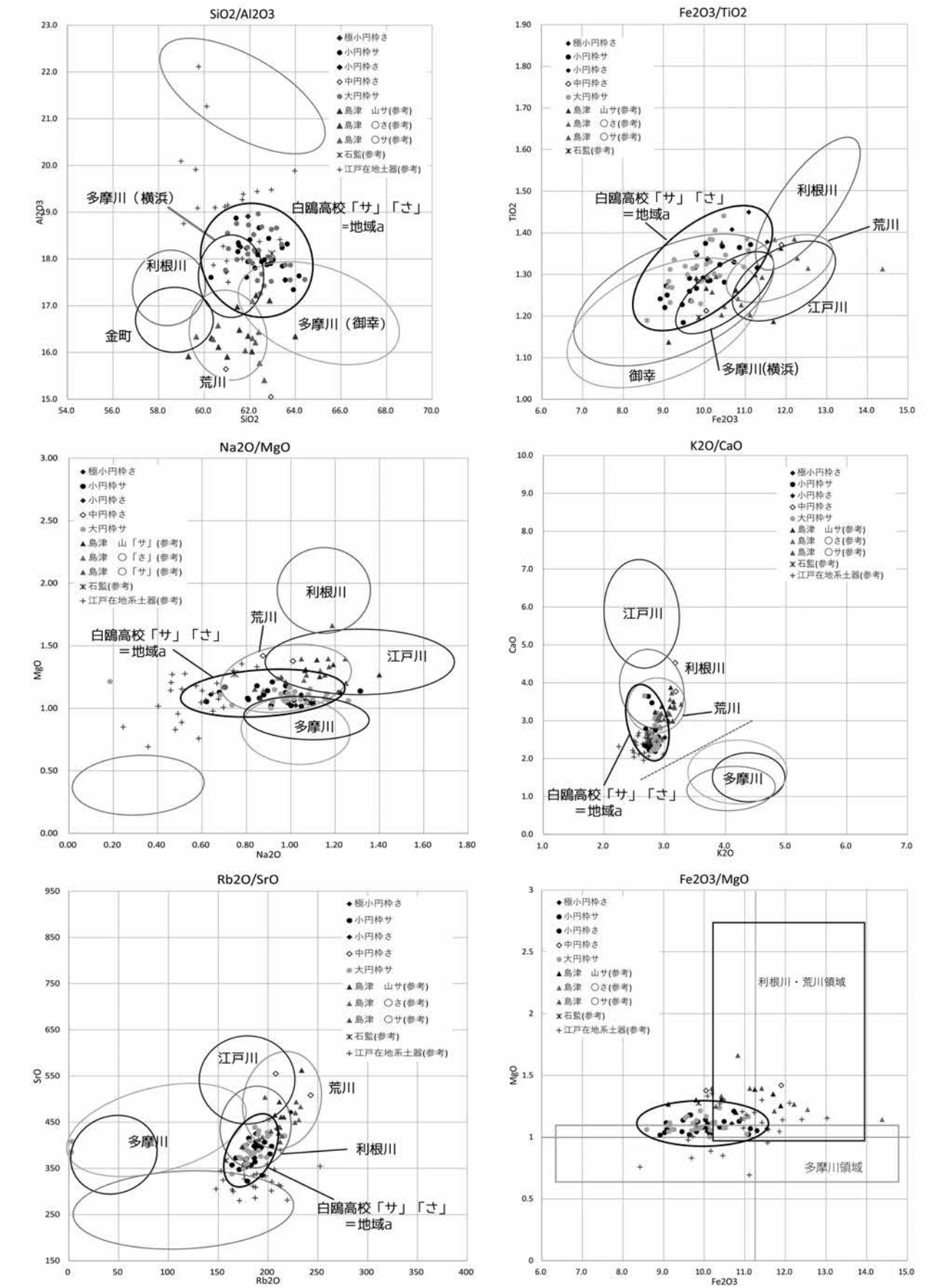
長佐古真也 2022「胎土の元素組成からみた近代玉地域煉瓦の特徴」『日野市ふるさと文化財課紀要』第 1 号 日野市ふるさと文化財課

東京都埋蔵文化財センター 1997『汐留遺跡Ⅰ』東京都埋蔵文化財センター調査報告第 37 集

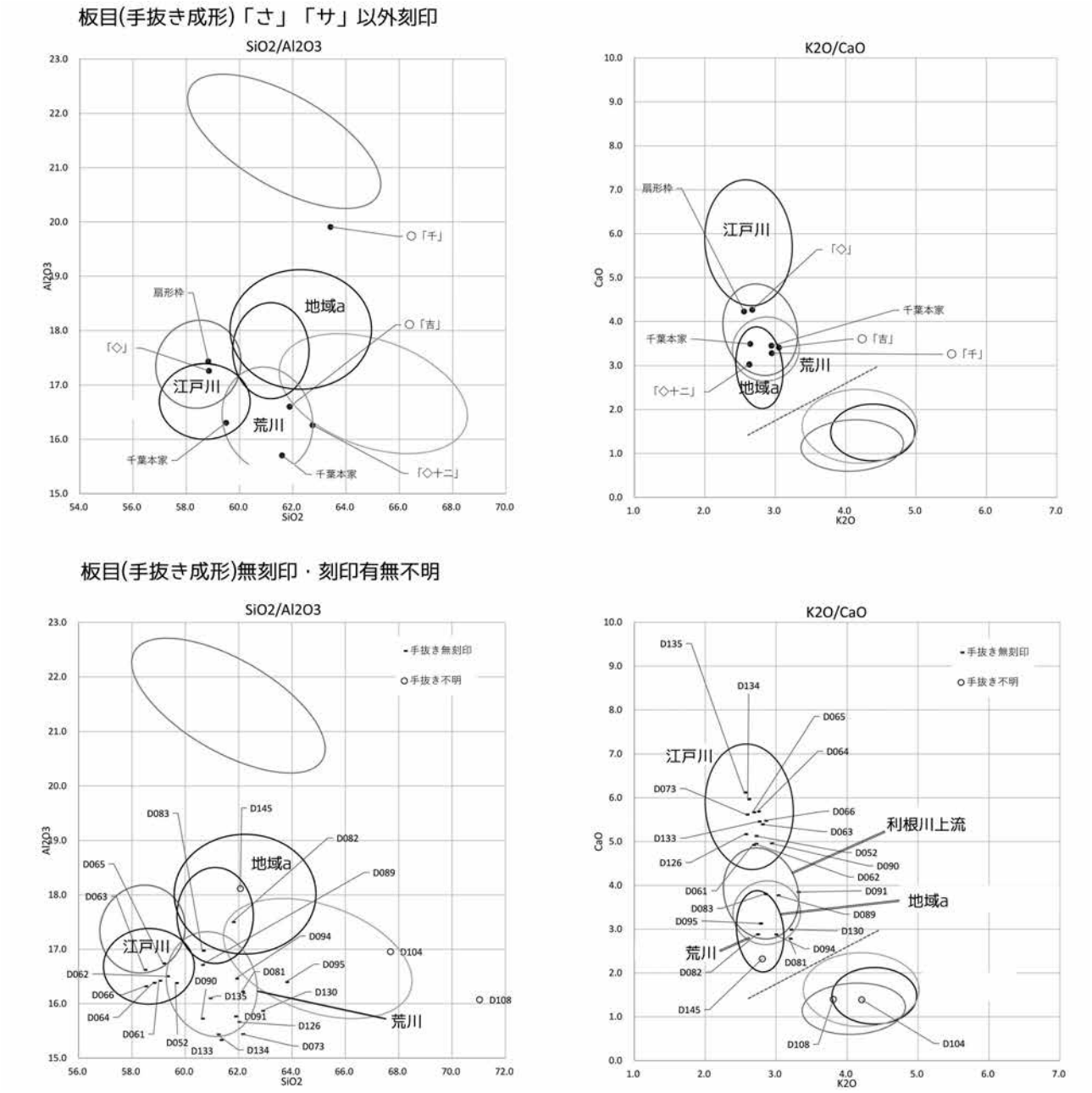
東京都埋蔵文化財センター 2015『港区旗本花房家屋敷跡遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第 306 集

東京都埋蔵文化財センター 2021『八王子市№ 987 遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査方向第 365 集

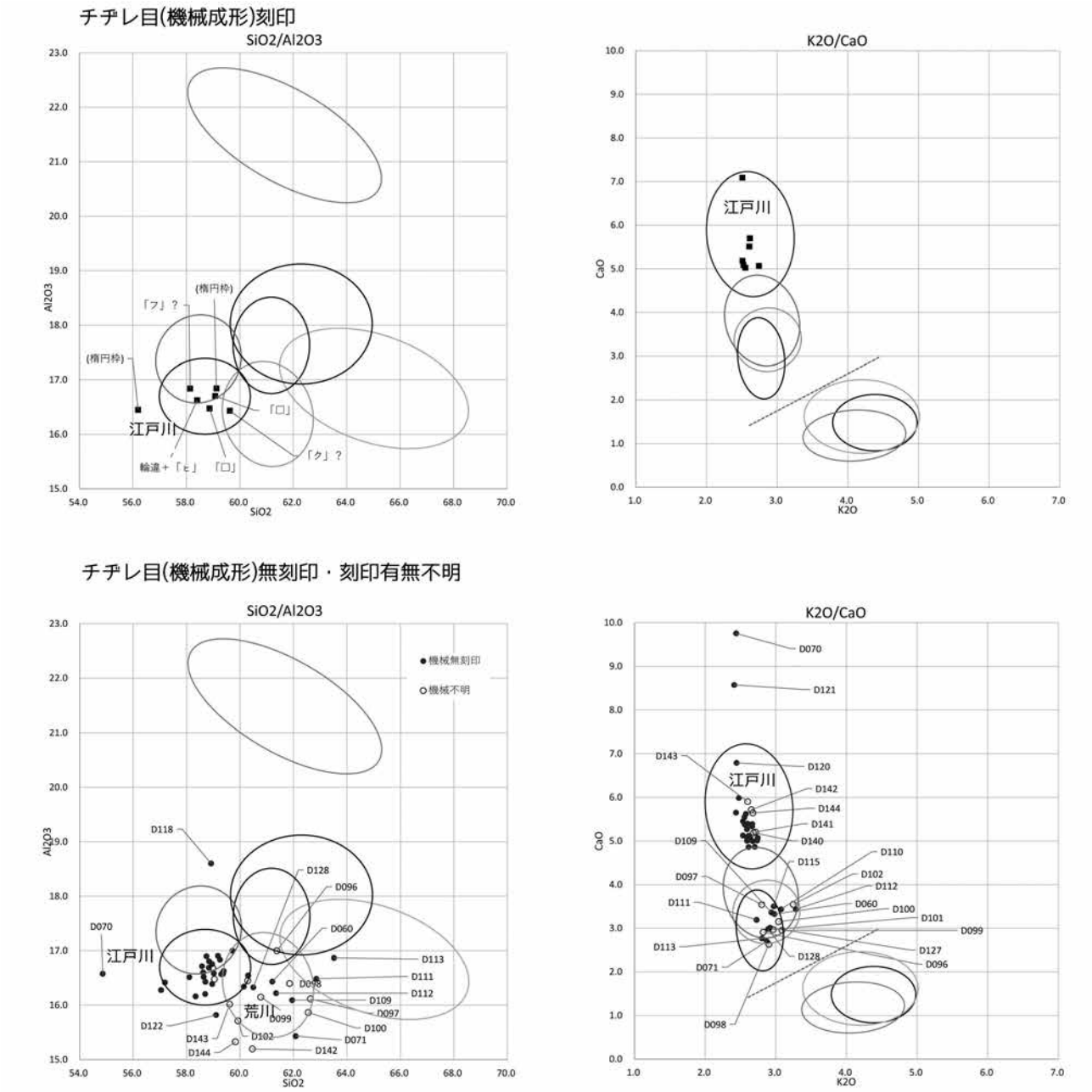
東京都埋蔵文化財センター 2022『港区高輪南町遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第 367 集



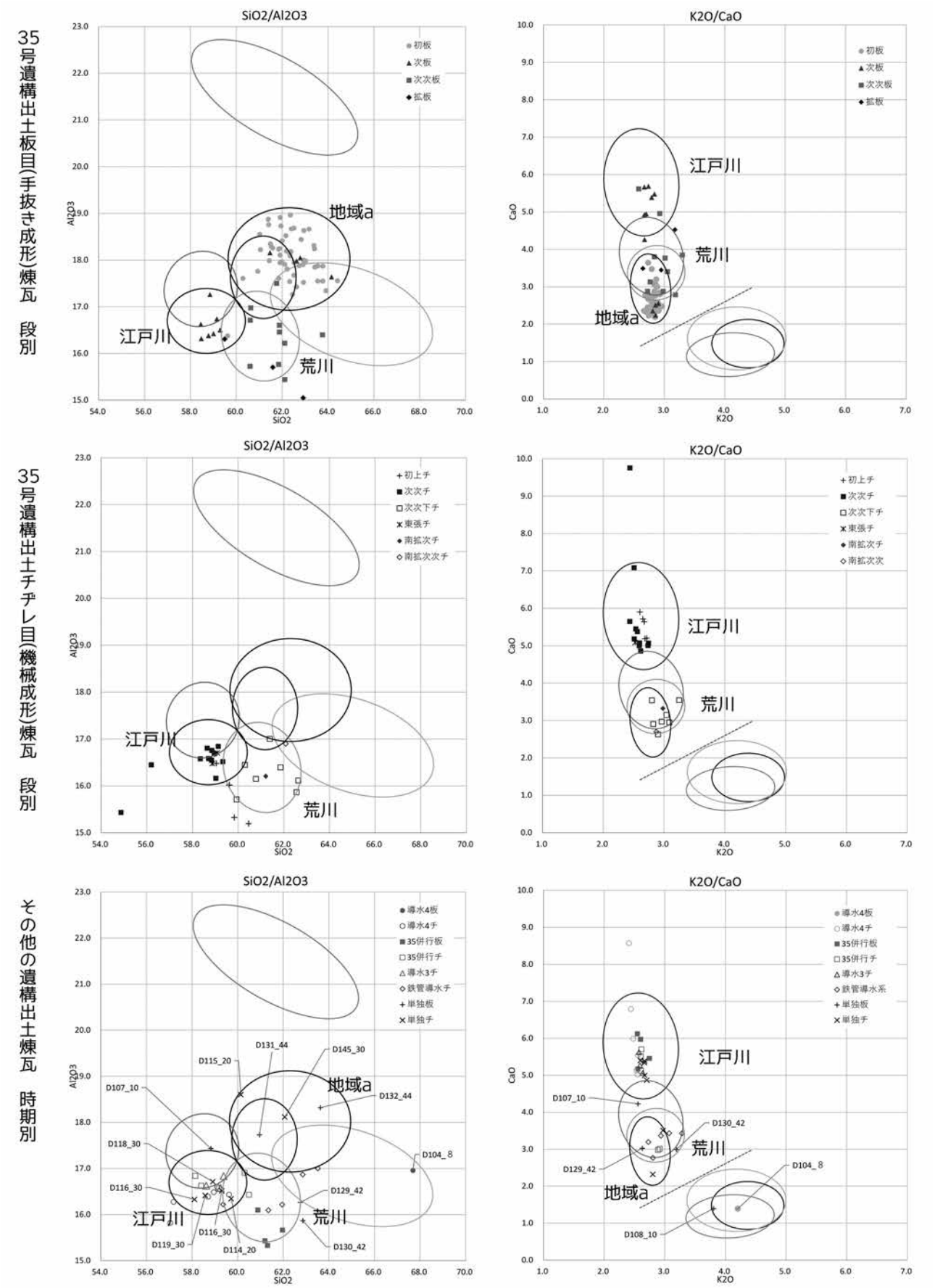
第 186 図　板目 (手抜き成形)[「さ」・「サ」刻印] 煉瓦分析値の二元分布図



第 187 図　板目 (手抜き成形)[他刻印、無刻印・不明] 煉瓦分析値の二元分布図



第 188 図　チヂレ目 (機械成形) 煉瓦各種分析値の二元分布図



第 189 図　出土煉瓦分析値の遺構別二元分布図

第 65 表　分析結果

番号	成形	刻印	判定	SiO2	Al2O3	Fe2O3	TiO2	Na2O	MgO	K2O	CaO	P2O5	SO3	Rb2O	SrO	Cr2O3	MnO	ZnO	V2O5	ZrO2	Y2O3	Ga2O3	Cl	NiO	PdO	Ag2O	Ir2O3	CuO
D001	板	小円枠「サ」	a	62.3	17.5	10.08	1.29	0.98	1.08	2.85	3.10	0.02	0.16	202	424	323	1714	260	630	390	88	69	1630	88				
D002	板	大円枠「サ」	a	63.8	17.9	9.90	1.23	0.19	1.21	2.84	2.30	0.14	0.13	175	348	269	1776	250	794	391	83	74						
D003	板	大円枠「サ」	a	62.6	17.4	10.15	1.33	0.98	1.06	2.84	2.88	0.06	0.18	199	419	372	1610	275	710	447	89	64		82	568			
D004	板	大円枠「サ」	a	64.4	17.6	8.58	1.19	1.26	1.06	2.83	2.49	0.04	0.19	164	338	255	1531	265	743	354	77	60		69				
D005	板	大円枠「サ」	a	61.0	18.6	10.97	1.32	0.93	1.15	2.73	2.45	0.07	0.18	181	386	333	1700	276	708	399	89	61	2230	72				
D006	板	大円枠「サ」	a	63.4	18.3	9.16	1.23	0.99	1.10	2.81	2.43	0.03	0.17	179	360	296	1484	244	638	386	83	58		80				
D007	板	大円枠「サ」	a	61.9	18.2	9.72	1.31	1.08	1.11	2.84	3.05	0.05	0.17	182	409	366	1608	257	639	394	93	62	1229	83				
D008	板	小円枠「サ」	a	62.0	18.4	10.03	1.37	0.90	1.14	2.73	2.68	0.08	0.17	186	373	413	1565	240	662	423	98	80	910					
D009	板	大円枠「サ」	a	61.9	18.1	10.52	1.35	1.01	1.07	2.94	2.49	0.04	0.12	201	456	350	1697	283	677	544	105	76		94				
D010	板	大円枠「サ」	a	62.9	17.5	10.05	1.32	0.99	1.17	2.89	2.38	0.10	0.20	193	376	320	1836	273	716	434	94	80						
D011	板	小円枠「サ」	a	62.5	17.9	10.08	1.34	1.10	1.05	2.90	2.36	0.06	0.14	197	407	264	2008	244	721	468	92	68	512				160	
D012	板	小円枠「サ」	a	61.9	17.9	10.44	1.37	0.98	1.08	2.89	2.58	0.03	0.19	204	398	345	1681	266	693	421	94	74	1443	86			186	
D013	板	大円枠「サ」	a	63.8	17.6	9.21	1.27	1.17	1.06	2.86	2.56	0.03	0.14	2	385	306	1583	240	653	393	96	73		88				
D014	板	小円枠「サ」	a	62.3	18.1	10.08	1.28	0.88	1.11	2.69	2.78	0.05	0.11	177	370	287	1706	229	712	396	88	70	1678	77				
D015	板	大円枠「サ」	a	62.4	18.2	9.81	1.32	1.02	1.13	2.85	2.58	0.06	0.10	191	389	322	1524	255	746	449	101	76	1434	87				
D016	板	大円枠「サ」	a	62.0	18.0	10.37	1.30	0.94	1.24	2.84	2.41	0.16	0.23	199	374	342	1889	273	699	369	97	75	873	99				437
D017	板	小円枠「さ」	a	61.9	18.2	11.09	1.45	1.02	1.02	3.00	2.56	0.05	0.12	223	472	341	1701	311	671	501	108	89						
D018	板	小円枠「サ」	a	60.3	17.6	10.14	1.29	0.91	1.02	2.79	3.47	0.03	1.78	193	397	289	1849	263	643	425	89	64	1947	84				
D019	板	小円枠「サ」	a	63.4	18.2	9.08	1.25	1.01	1.06	2.80	2.49	0.07	0.13	168	372	323	1499	231	681	349	81	70	655					
D020	板	大円枠「サ」	a	62.5	17.7	9.88	1.28	0.97	1.07	2.87	3.01	0.11	0.19	186	383	350	1710	245	678	357	94	66				206		
D021	板	小円枠「サ」	a	61.9	17.6	11.14	1.37	0.81	1.07	2.92	2.48	0.13	0.17	202	381	316	2004	280	737	445	98	82						
D022	板	小円枠「サ」	a	63.0	18.0	9.66	1.24	0.85	1.18	2.79	2.68	0.06	0.13	187	364	290	1695	229	722	394	89	75						
D023	板	小円枠「サ」	a	62.9	17.9	9.80	1.27	1.05	1.07	2.88	2.39	0.08	0.17	183	357	357	1724	251	703	354	94	73	515	78				
D024	板	小円枠「サ」	a	62.4	18.7	9.64	1.29	0.98	1.18	2.67	2.36	0.08	0.16	177	359	294	1543	255	710	374	77	71	1934	72				
D025	板	大円枠「サ」	a	61.1	18.2	11.08	1.36	1.00	1.17	2.79	2.59	0.04	0.13	184	384	265	1901	240	582	368	87	70	1461	86				
D026	板	大円枠「サ」	a	61.4	18.8	10.26	1.41	0.99	1.12	2.86	2.47	0.10	0.22	187	439	276	1473	278	686	476	96	76		86				
D027	板	中円枠「さ」	荒	60.9	15.6	11.90	1.37	0.88	1.42	3.19	3.77	0.10	0.18	243	508	290	2329	274	728	317	85	62	758	107			165	
D028	板	大円枠「サ」	a	62.5	17.3	11.05	1.38	0.74	1.03	2.96	2.48	0.04	0.16	217	420	319	1877	274	728	450	98	69						
D029	板	大円枠「サ」	a	62.9	18.6	9.10	1.27	1.01	1.10	2.86	2.50	0.08	0.14	178	371	260	1424	251	622	365	88	63		83				
D030	板	大円枠「サ」	a	62.2	18.2	9.79	1.35	1.05	1.07	2.93	2.80	0.03	0.13	190	423	328	1488	256	653	439	106	78		78	540	258		
D031	板	大円枠「サ」	a	61.4	18.0	10.48	1.44	1.10	1.08	2.92	2.84	0.07	0.14	199	428	331	1849	281	739	490	96	84	464				174	
D032	板	大円枠「サ」	a	62.1	17.9	10.13	1.38	0.91	1.00	2.88	3.01	0.01	0.17	190	431	349	1613	271	598	476	95	80	570	77				
D033	板	小円枠「サ」	a	62.2	17.8	10.73	1.33	0.92	1.21	2.70	2.33	0.13	0.10	194	335	269	2102	277	640	408	94	79	891	92				
D034	板	大円枠「サ」	a	62.9	18.0	9.15	1.31	1.16	1.11	2.78	2.73	0.11	0.14	183	379	321	1466	251	669	405	88	76	1877	81				
D035	板	小円枠「サ」	a	61.4	18.9	10.86	1.36	0.68	1.13	2.76	2.26	0.06	0.10	190	398	326	1638	266	758	424	82	74	967	81				
D036	板	大円枠「サ」	a	60.9	17.8	9.69	1.24	0.92	1.05	2.67	3.66	0.01	1.47	176	393	287	1620	269	703	402	97	68	1961	70				
D037	板	大円枠「サ」	a	62.4	19.0	9.58	1.30	0.70	1.17	2.78	2.53	0.09	0.12	172	373	395	1546	253	672	359	89	73		102				
D038	板	大円枠「サ」	a	62.2	18.5	10.19	1.38	0.96	1.12	2.82	2.26	0.04	0.15	177	400	313	1565	258	654	412	83	64		94				
D039	板	小円枠「サ」	a	62.7	17.9	9.84	1.28	1.22	1.13	2.83	2.46	0.07	0.15	178	353	265	1783	249	734	331	81	66		80				
D040	板	大円枠「サ」	a	62.5	18.7	9.53	1.32	1.09	1.16	2.89	2.30	0.03	0.10	171	374	328	1402	252	759	399	86	75		76				
D041	板	大円枠「サ」	a	63.6	17.9	9.26	1.34	0.98	1.06	2.88	3.20	0.02	0.19	3	408	287	1487	284	632	451	91	70	565	83				
D042	板	小円枠「サ」	a	62.3	18.1	10.49	1.28	0.98	1.13	2.85	2.19	0.07	0.10	186	399	415	1710	246	730	458	92	81		80				
D043	板	大円枠「サ」	a	63.2	18.7	9.12	1.28	1.07	1.04	2.79	2.19	0.11	0.19	172	372	365	1413	247	571	361	94	75		70				
D044	板	小円枠「サ」	a	63.4	17.8	9.63	1.26	1.00	1.02	2.77	2.42	0.10	0.15	171	348	299	1565	226	611	390	79	51		80				
D045	板	小円枠「サ」	a	63.9	17.3	9.48	1.18	1.31	1.14	2.74	2.23	0.15	0.11	179	322	288	1762	231	671	369	84	61						
D046	板	小円枠「サ」	a	63.6	17.6	9.45	1.23	0.99	1.04	2.87	3.20	0.00	0.18	192	394	264	1688	237	659	376	85	72						
D047	板	小円枠「サ」	a	61.5	18.3	10.38	1.32	0.86	1.08	2.88	3.00	0.05	0.18	188	408	324	1699	271	582	392	95	70						
D048	板	小円枠「サ」	a	62.8	18.4	9.06	1.27	0.99	1.12	2.85	2.76	0.02	0.18	186	398	278	2372	240	703	414	86	70		83				
D049	板	大円枠「サ」	a	62.3	17.5	10.08	1.29	0.98	1.08	2.85	3.10	0.02	0.16	202	424	323	1714	260	630	390	88	69	1630	88				
D050	板	小円枠「サ」	a	61.5	18.3	9.97	1.29	0.81	1.08	2.73	3.64	0.05	0.13	176	351	289	1693	258	729	406	95	60	787	79				
D051	板	◇	荒	58.9	17.3	11.86	1.23	0.89	1.57	2.67	4.26	0.18	0.20	185	458	349	3050	250	691	343	84	81	4608	85				
D052	板	―	江	59.6	16.4	11.47	1.31	1.16	1.50	2.70	5.13	0.07	0.17	184	538	296	2314	263	780	436	87	68						
D053	板	極小円枠「さ」	a	61.9	18.9	9.79	1.32	0.64	1.11	2.78	2.76	0.04	0.19	187	425	363	1484	264	794	496	91	73	1056	82				
D054	板	大円枠「サ」	a	61.9	18.7	10.24	1.30	0.68	1.11	2.71	2.65	0.06	0.19	179	389	348	1628	263	669	396	78	73						
D056	板	小円枠「サ」	a	62.6	18.0	9.81	1.35	1.08	1.04	2.90	2.55	0.04	0.16	181	415	302	1538	261	617	401	92	73	607	84				
D057	板	小円枠「サ」	a	64.2	17.6	9.02	1.22	1.10	1.04	2.81	2.35	0.09	0.14	164	357	281	1463	238	573	389	90	62	683	87				
D058	板	大円枠「サ」	a	62.8	18.0	9.93	1.28	1.15	1.08	2.86	2.24	0.06	0.13	177	359	233	1661	263	625	359	89	71	573					
D059	板	小円枠「サ」	a	61.5	18.2	11.30	1.32	0.62	1.05	2.85	2.51	0.05	0.24	189	393	308	1891	267	744	415	86	77						
D060	チ	―	荒	61.2	16.2	11.53	1.40	1.10	1.48	2.98	3.32	0.09	0.17	227	500	347	2430	266	656	430	98	80		106				
D061	板	―	江	59.0	16.4	12.06	1.28	1.41	1.39	2.67	4.93	0.08	0.20	180	541	310	2341	279	652	478	88	66	665					
D062	板	―	江	59.3	16.5	11.62	1.28	1.34	1.54	2.70	4.95	0.06	0.20	165	528	240	2201	255	667	388	86	82	620					
D063	板	―	江	58.5	16.6	11.85	1.34	1.03	1.46	2.79	5.39	0.10	0.25	168	542	261	2390	275	704	343	82	78	2346					
D064	板	―	江	58.8	16.4	11.69	1.25	1.04	1.48	2.74	5.69	0.26	0.21	171	581	254	2217	268	773	458	90	55						
D065	板	―	江	59.2	16.7	10.97	1.21	1.01	1.52	2.67	5.67	0.23	0.21	176	475	249	2102	230	655	363	79	71	1581	70		208		
D066	板	―	江	58.5	16.3	11.87	1.28	1.35	1.52	2.84	5.48	0.07	0.19	190	593	281	2340	290	703	458	90	79	1042					
D067	チ	―	江	58.7	16.6	11.78	1.25	1.16	1.54	2.60	5.08	0.06	0.67	156	490	286	2577	348	668	385	85	69	659	85			183	
D068	チ	―	江	59.0	16.2	11.90	1.28	1.30	1.50	2.59	5.00	0.10	0.65	176	495	261	2631	282	592	362	93	60						
D069	チ	―	江	58.3	16.6	12.03	1.32	1.14	1.57	2.44	5.65	0.03	0.41	171	546	310	2610	273	575	439	98	61		88				
D070	チ	―	?	54.9	15.4	11.78	1.27	1.18	1.49	2.44	9.75	0.31	0.65	157	540	265	2426	1062	687	416	60	67	2549					
D071	チ	―	荒	62.1	16.9	10.59	1.31	1.10	1.41	2.87	2.70	0.17	0.12	206	427	360	2169	276	658	429	86	78	2785	92				
D072	チ	―	江	58.7	16.6	11.54	1.26	1.24	1.41	2.56	5.38	0.03	0.61	159	507	305	2402	572	652	411	87	76	1234					
D073	板	―	?	62.1	15.4	10.02	1.24	1.02	1.28	2.58	5.62	0.11	0.21	150	602	258	1577	222	536	337	77	61						
D074	チ	―	江	59.3	16.5	11.43	1.29	1.26	1.48	2.59	5.08	0.05	0.49	167	502	280	2293	259	642	428	91	68		81				
D075	チ	（楕円枠）	江	59.1	16.8	11.18	1.26	1.33	1.52	2.51	5.18	0.03	0.51	153	494	288	2214	243	674	368	83	70	627					
D076	チ	―	江	58.6	16.8	11.29	1.24	1.41	1.44	2.54	5.45	0.04	0.65	151	479	236	2271	248	714	409	85	50	515					
D077	チ	―	江	58.8	16.8	11.75	1.30	0.98	1.40	2.74	5.01	0.09	0.62	164	494	267	2411	266	837	385	91	74		108				

番号	成形	刻印	判定	SiO2	Al2O3	Fe2O3	TiO2	Na2O	MgO	K2O	CaO	P2O5	SO3	Rb2O	SrO	Cr2O3	MnO	ZnO	V2O5	ZrO2	Y2O3	Ga2O3	Cl	NiO	PdO	Ag2O	Ir2O3	CuO
D078	チ	（楕円枠）	江	56.2	16.5	11.68	1.28	1.02	1.62	2.51	7.09	0.27	0.55	144	502	268	2492	262	657	395	79	63	1309					
D079	チ	ー	江	59.0	16.7	11.72	1.27	1.26	1.41	2.62	4.86	0.04	0.68	169	494	274	2478	276	725	429	91	60						
D080	チ	ー	江	58.8	16.5	12.08	1.31	0.98	1.51	2.74	5.07	0.04	0.26	170	512	322	2486	265	733	473	100	87	1133					
D081	板	ー	荒	62.1	16.2	11.45	1.38	0.83	1.35	3.18	2.78	0.02	0.19	230	455	344	2102	278	632	451	104	65		137				
D082	板	ー	荒	61.8	17.5	10.97	1.33	0.91	1.18	2.72	2.88	0.13	0.16	188	395	382	2078	254	740	404	104	74						
D083	板	ー	?	60.6	17.0	11.52	1.34	0.64	1.15	2.83	3.80	0.35	0.21	213	429	300	2170	291	608	444	96	62	742	76				
D084	板	角枠「千葉本家」	荒	59.5	16.3	14.02	1.31	0.72	1.14	2.65	3.49	0.10	0.21	205	829	317	2521	294	764	515	101	90						
D085	板	角枠「千葉本■」	荒	61.6	15.7	12.24	1.27	0.84	1.26	2.95	3.45	0.05	0.17	231	509	440	2213	268	585	418	104	78		89				
D086	板	中円枠「さ」	荒	62.9	15.0	10.04	1.21	1.01	1.38	3.18	4.53	0.01	0.21	208	555	344	2074	221	621	466	88	67		87				
D087	チ	□	江	58.9	16.5	11.68	1.29	1.20	1.56	2.52	5.09	0.14	0.50	159	485	303	2610	362	698	349	94	63	1612					
D088	チ	□	江	59.1	16.7	11.51	1.32	0.97	1.37	2.74	5.06	0.02	0.64	177	507	285	2277	315	669	383	100	85	991					
D089	板	ー	荒	60.6	16.7	11.29	1.35	1.08	1.07	3.01	3.77	0.39	0.14	210	420	245	2441	291	667	389	91	64	808	86				
D090	板	ー	荒	60.6	15.7	11.16	1.34	1.03	1.47	2.92	4.96	0.04	0.21	220	427	518	2356	244	624	366	87	74	392	120				
D091	板	ー	荒	61.9	15.8	10.82	1.45	0.79	1.38	3.30	3.85	0.13	0.10	194	399	435	2146	251	620	386	98	72	481	119				
D092	板	極小円枠「さ」	a	61.6	18.3	10.68	1.41	1.05	1.11	2.87	2.38	0.10	0.12	178	401	279	1542	247	720	450	94	74		94	486	242		
D093	板	円枠「吉」	荒	61.9	16.6	10.77	1.22	1.03	1.18	3.05	3.41	0.31	0.09	218	427	329	1958	244	745	367	101	64		88				
D094	板	ー	荒	61.9	16.5	10.98	1.21	1.13	1.05	2.98	2.88	0.21	0.77	203	403	269	1695	254	744	329	89	73	376	71				
D095	板	ー	荒	63.8	16.4	9.60	1.16	1.28	1.17	2.77	3.13	0.13	0.19	181	356	303	1846	224	618	371	81	66		78				
D096	チ	不明	荒	61.4	17.0	11.62	1.35	0.77	1.47	2.82	2.91	0.06	0.13	212	397	356	2517	257	614	431	96	71		98				
D097	チ	不明	荒	62.6	16.1	10.48	1.23	1.06	1.26	2.80	3.54	0.12	0.15	200	437	334	2603	218	657	326	91	70	989	102				
D098	チ	不明	荒	61.9	16.4	11.43	1.29	1.12	1.61	2.90	2.63	0.09	0.17	228	355	367	2421	233	633	353	91	69		107		246		
D099	チ	不明	荒	60.8	16.1	12.40	1.39	0.80	1.57	3.09	2.95	0.08	0.24	238	373	410	2740	250	715	426	99	71		119		228		
D100	チ	不明	荒	62.6	15.9	10.75	1.28	1.17	1.45	3.04	3.15	0.08	0.18	210	476	352	2388	234	638	411	88	78		99				
D101	チ	不明	荒	60.3	16.5	12.70	1.43	0.72	1.54	2.96	2.97	0.07	0.28	242	462	396	2664	289	807	451	104	72	412	111				
D102	チ	不明	荒	59.9	15.7	12.73	1.37	0.79	1.71	3.25	3.55	0.08	0.21	250	481	382	3052	272	609	445	109	82	1037	118				
D103	チ	「ク」ヵ	江	59.6	16.4	11.33	1.23	1.15	1.50	2.55	5.02	0.04	0.62	156	489	321	2433	312	573	337	90	70				247		
D104	ー	ー	—	67.7	17.0	6.67	0.91	0.72	0.95	4.21	1.39	0.07	0.12	143	190	262	1575	161	353	349	74	57		54				
D105	チ	ー	江	58.7	16.4	11.99	1.27	0.86	1.54	2.48	5.99	0.02	0.28	165	539	228	2383	251	751	415	79	74						
D106	チ	ー	江	59.0	16.5	11.42	1.29	1.24	1.46	2.56	5.55	0.07	0.48	163	540	263	2516	250	727	415	89	55						
D107	板?	扇形枠	荒	58.8	17.4	12.24	1.23	0.79	1.68	2.56	4.23	0.03	0.17	161	441	348	2807	251	669	374	86	72	2972	79				
D108	ー	ー	—	71.0	16.1	4.96	0.78	0.70	0.52	3.81	1.40	0.06	0.12	131	261	143	3977	163	310	358	62	53				221		
D109	チ	ー	荒	62.0	16.2	11.58	1.22	0.82	1.17	2.94	3.36	0.10	0.18	211	455	314	2057	254	663	393	101	80		95				
D110	チ		荒	59.4	16.2	13.67	1.39	0.84	1.20	3.07	3.44	0.13	0.17	245	458	380	2246	305	633	529	100	85		110				
D111	チ	ー	荒	62.9	16.9	10.13	1.11	1.27	1.23	2.73	3.19	0.07	0.16	182	381	260	1664	209	600	368	78	63						
D112	チ		荒	61.3	16.1	11.18	1.32	1.24	1.21	3.29	3.43	0.11	0.16	221	503	415	1624	810	647	542	112	68	1078	106		90		
D113	チ	ー	荒	63.5	17.0	10.11	1.17	0.89	1.18	2.81	2.77	0.04	0.15	179	392	274	1620	212	631	385	93	75						
D114	チ	ー	江?	59.7	16.3	11.12	1.25	1.41	1.33	2.67	5.00	0.04	0.60	161	494	271	2316	261	705	394	82	63			498			
D115	チ	ー	荒	60.1	18.6	10.96	1.29	0.74	0.87	2.97	3.51	0.05	0.36	220	439	241	1473	366	673	367	101	80	954				181	
D116	チ	ー	江	59.3	16.5	11.40	1.24	1.24	1.45	2.70	4.87	0.05	0.67	166	485	230	2378	272	655	341	100	68	911					
D117	チ	ー	江?	58.1	16.3	12.06	1.27	1.37	1.95	2.67	5.39	0.04	0.19	162	552	257	2630	274	662	350	93	74	1227					
D118	チ	ー	江?	58.9	16.7	10.82	1.22	1.28	1.53	2.60	5.40	0.23	0.69	145	483	278	2296	238	710	406	78	69	1433	74				
D119	チ	ー	江	58.6	16.4	11.50	1.25	1.32	1.50	2.67	5.34	0.04	0.68	171	570	269	2616	288	633	426	90	58	2042					
D120	チ	ー	江	57.2	16.3	12.07	1.26	0.88	1.51	2.44	6.79	0.26	0.56	150	520	307	2424	270	695	407	88	57	2621					
D121	チ	ー	江?	57.0	15.8	11.10	1.23	1.23	1.45	2.41	8.57	0.00	0.36	165	503	233	2237	274	643	327	79	51	3321					
D122	チ	ー	江	59.1	16.6	11.59	1.24	1.28	1.52	2.53	5.13	0.04	0.39	149	500	292	2452	421	741	361	87	68	711					
D123	チ	ー	江	58.6	16.6	11.85	1.29	1.22	1.51	2.59	5.27	0.09	0.47	154	517	245	2472	272	602	393	90	53						
D124	チ	ー	江	59.4	16.8	11.41	1.22	1.01	1.48	2.64	5.06	0.05	0.44	156	482	288	2325	256	762	296	86	54						
D125	チ	ー	江	59.3	16.6	10.90	1.21	1.22	1.50	2.58	5.62	0.07	0.61	149	475	273	2328	401	625	318	86	59						
D126	板	ー	?	62.0	15.7	9.89	1.23	1.37	1.45	2.56	5.17	0.10	0.22	140	559	245	1570	307	621	303	71	66						
D127	チ	ー	荒	60.3	16.9	12.37	1.40	0.76	1.50	2.92	3.01	0.10	0.15	233	433	361	2619	319	688	405	102	78	573	121				
D128	チ	ー	荒	60.5	16.4	12.45	1.38	1.04	1.55	2.89	2.98	0.09	0.17	233	421	391	2397	575	610	458	101	93		124				
D129	板	菱十字「十二」○	荒	62.7	16.3	11.13	1.25	0.90	1.10	2.63	3.03	0.17	0.29	190	425	308	1829	317	571	407	83	85	639					
D130	板	ー	荒	62.9	15.9	10.36	1.32	1.31	1.41	3.19	2.99	0.04	0.16	202	412	359	1921	297	676	412	93	61	416	100				
D131	板	極小円枠「さ」	a	61.0	17.7	11.55	1.38	1.07	1.07	2.78	2.60	0.06	0.16	209	436	360	1750	477	758	405	104	65	2065					
D132	板	小円枠「サ」	a	63.6	18.3	8.91	1.24	1.05	1.02	2.73	2.30	0.12	0.11	178	371	249	1292	364	580	437	91	73	2070	81				
D133	板	ー	?	61.3	15.3	10.47	1.23	1.17	1.30	2.75	5.46	0.08	0.27	175	654	248	1576	228	700	362	84	75	2285					
D134	板	ー	?	61.2	15.4	10.41	1.20	1.03	1.33	2.60	5.97	0.02	0.26	157	619	289	1677	243	659	333	80	63	1378					
D135	板	ー	?	60.9	16.1	9.70	1.19	1.08	1.37	2.55	6.12	0.03	0.30	161	572	290	1489	239	592	378	75	82	2873					
D136	チ	輪違・「ヒ」?	江	58.4	16.6	11.84	1.27	1.00	1.54	2.61	5.70	0.02	0.50	181	530	274	2462	266	582	423	91	76						
D137	チ	ー	江	59.2	16.6	11.48	1.23	1.40	1.47	2.61	5.12	0.04	0.42	160	512	272	2450	281	747	340	95	81						
D138	チ	「フ」ヵ	荒	58.1	16.8	12.03	1.25	1.01	1.88	2.61	5.51	0.03	0.17	180	548	245	2732	239	833	337	95	54						
D139	板	円枠「千」	?	63.4	19.9	9.00	1.25	0.85	1.24	2.95	3.28	0.09	0.27	173	386	249	1538	240	673	356	78	53	3787					
D140	チ	不明	江	59.0	16.7	11.63	1.32	1.09	1.37	2.68	5.19	0.03	0.54	167	564	298	2297	289	617	450	94	83						
D141	チ	不明	江	59.0	16.5	10.83	1.26	1.32	1.35	2.71	5.21	0.22	0.47	168	556	282	1951	296	588	457	96	79	6649					
D142	チ	不明	江	60.5	15.2	10.99	1.24	1.02	1.41	2.65	5.72	0.09	0.18	153	671	230	1818	246	603	432	86	82	5821			273		
D143	チ	不明	江	59.6	16.0	10.59	1.20	1.14	1.36	2.60	5.90	0.13	0.18	156	658	226	1769	348	606	379	81	35	8428					
D144	チ	不明	江	59.8	15.3	11.48	1.25	0.94	1.34	2.68	5.64	0.13	0.19	171	715	288	1779	249	694	434	88	80	7487					
D145	板	不明	a	62.1	18.1	10.26	1.33	0.87	1.03	2.80	2.32	0.04	0.17	183	425	259	1479	257	699	467	97	69	6008	78				

板：板目　チ：チヂレ目　荒：荒川流域　江：江戸川流域　a：地域a　？：不明　—：未判定

Ⅵ　調査の成果と課題

■遺物（陶磁器・土器）

【基本土層及び主な遺構の素材別・器種別出土量】

第 66 表に、素材・器種別の出土破片数と全体に占める割合及び重量をまとめた（パーセンテージは少数点以下第３位を四捨五入）。破片数を見ると、遺構、遺構外ともに、陶器が 60 ～ 70％、磁器が 25 ～ 35％、土器が４～ 4.5％で、全体としても陶器が 68.62％、磁器が 26.92％、土器が 4.47％であった。器種は、陶器 40 器種、磁器 30 器種、土器（瓦質、施釉を含む）32 器種、計 102 器種が確認された。これをさらに詳しく見てみると、最も多いのは陶器美濃高田産灰釉・飴釉徳利（以下、「高田徳利」という。）で 48.05％、次いで磁器碗の 11.66％、以下磁器皿 6.36％、陶器碗 4.40％と続き、それ以下はいずれも数％にも満たなかった。上位４位までの器種で全体の 70.52％が占められ、他の 98 器種のほとんどが 0.1% 未満という著しい偏りが看取される。第 191 図は、遺構、遺構外、全体に加えて、遺構出土の約半数を占める池遺構（93 号遺構を含む）についても、器種別出土量を折れ線グラフにして、パターンを際立たせたものである。高田徳利の突出とそれに続く磁器碗、陶器碗と土器灯火皿が目立つというパターンが明瞭に見てとれる。ここでは具体的に提示していないが、遺構外各基本土層（第１層…Ⅰ～Ⅱ面、第２・３層…Ⅱ～Ⅲ面、第４層…Ⅲ～Ⅳ面）、分析可能なだけの出土量があった６号遺構、35 号遺構の２遺構についても同様の傾向が確認できる。なお、基本土層第５層（Ⅳ面以下）、上述した３遺構以外の遺構については、傾向を読み取るには各々の出土量が少ないため、ここでは言及しない。

なお、第１次調査の出土陶磁器・土器についても報告書の記載をもとに同様のデータを作成し、表の末尾に付し、折れ線グラフ化したが、出土傾向は同様であった。

【基本土層、主な遺構の年代観】

第 67 表に、報告した個体の年代別点数と全体に占める割合をまとめた（パーセンテージは小数点以下第３位を四捨五入）。基本土層としては、第１層、第２・３層、第４層を取り上げ、第５層については、個体として報告したものがなかったため言及していない。主な遺構としては、分析可能なだけの点数を報告できた 35 号遺構（Ⅱ面確認：煉瓦製建物基礎）、池遺構（Ⅲ面確認：池）、６号遺構（Ⅳ面確認：遺物集中部）の３遺構を取り上げ、池遺構については、上層（覆土＝埋立土）、下層（掘方）、93 号遺構（中の島）の各層の形成過程と性格を踏まえた上で、層位別の集計も行った。また、年代については、出土傾向を踏まえた上で、１…17 世紀中葉以前、２…17 世紀中葉～ 18 世紀前葉、３…18 世紀前葉～後葉、４…18 世紀後葉～ 19 世紀前葉、５…19 世紀中葉～幕末・明治初頭、６…近代以降、？…不明もしくは時期を絞り込めないものとした。第 192 図は、これを折れ線グラフにして、パターンを際立たせたものである。時期４に最も大きなピークがあることが全体的な特徴として挙げられるが、第二のピークが時期２にあるａパターンと時期６にあるｂパターンが認められる。ａパターンに属すのは、池遺構、６号遺構、第４層、ｂパターンに属すのは 35 号遺構、第１層、第２・３層である。なお、池遺構については、全体としてはｂパターンであるが、① 17 世紀中葉以前のものが見られること、②層毎に見ると、上層は時期４に大きなピークがあるのみ、下層は時期４と時期

２に同程度のピークが見られ、93 号遺構は時期２～４が多いままで推移しており、パターンが異なることの２点を特筆しておく。以下、それぞれの層、遺構について記述する。

基本土層　いずれの層も 18 世紀後葉～ 19 世紀前葉のものを主体的に含む。第１層は関東大震災以降の整地層と昭和 62（1987）年に解体された昭和校舎の基礎による攪乱から成り、下位の第２層以下から攪乱によって上がってきた 18 世紀後葉～ 19 世紀前葉の遺物とこの層の形成時期である近代以降の遺物がともに多くなったと考えられる。第２・３層は、池遺構上位の盛土層で、池遺構埋立後から府立第一高等女学校建設までの間（土地履歴から明治 20 年代～ 35 年と推定）に他所から搬入された土で構成される。近代以降のものを相当数含むが、これは土の搬入元の土地履歴を反映していると考えられ、搬入元は 18 世紀後葉～ 19 世紀前葉を中心に近代に入ってからも利用されていた場所と考えられる。第４層も他所から搬入された盛土層と推定されており、17 世紀中葉～ 18 世紀前葉のものを相当数含んでいる。これも土の搬入元の土地履歴を反映していると考えられ、19 世紀中葉以降のものはほとんどないので、18 世紀後葉～ 19 世紀前葉ごろまでには当地に搬入されたと考えられる。

６号遺構　調査区外南側に続く浅い不整形遺物集中部で、廃棄土坑的な要素が強い。18 世紀後葉～ 19 世紀前葉を中心に 17 世紀中葉以降から基本土層第４層が盛土されるまでの間、比較的長期間にわたって利用されていたのであろう。

35 号遺構　府立第一高等女学校の講堂跡と推定される煉瓦製建物基礎で、遺物はその掘方から出土している。これらは建設地盤の基本土層である第２・３層から上がってきたものと考えられる。

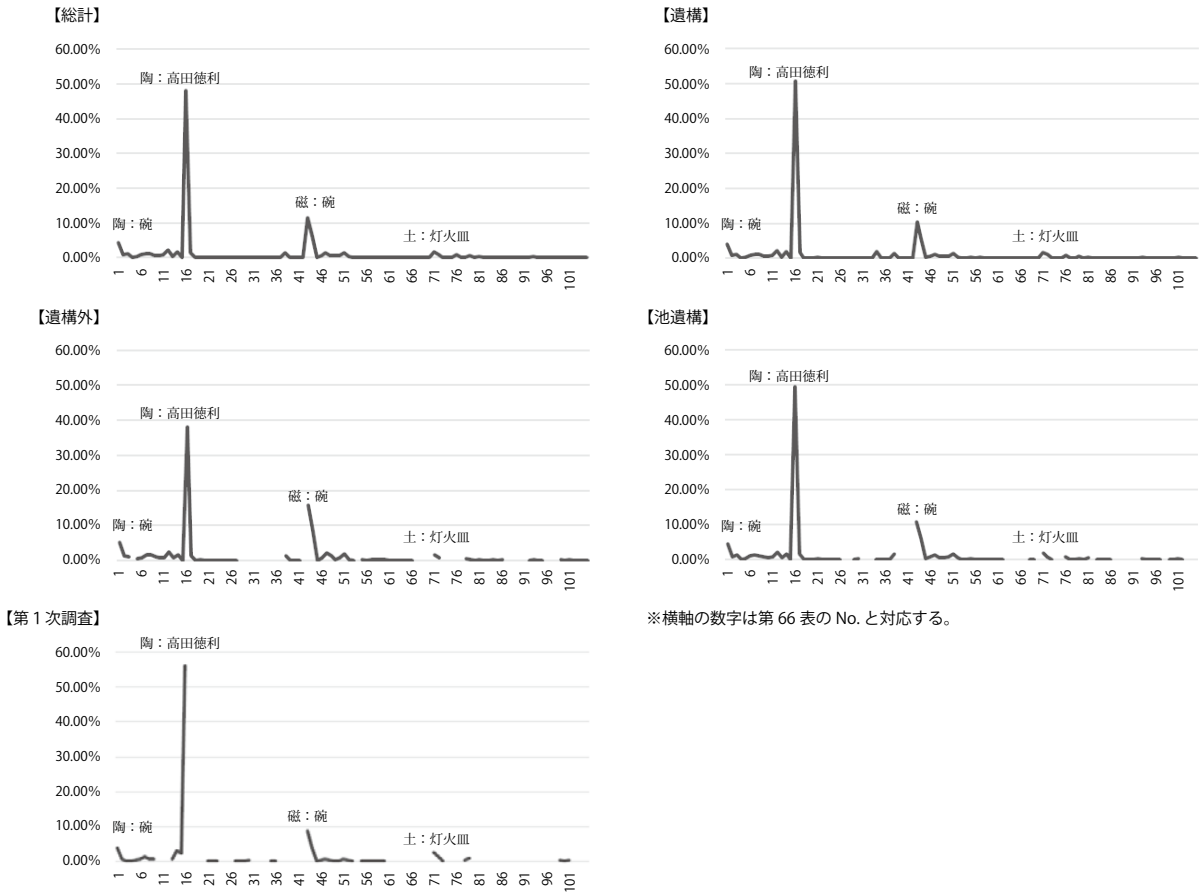
池遺構　上層は池の埋立土と推定されており、18 世紀後葉～ 19 世紀前葉の遺物を主体的に含み、他の時期のものはほとんど見られない。埋立（盛土搬入）時期は土地履歴から明治 20 ～ 30 年代頃のことと考えられるので、近代以降の活用が活発でなかった場所から、近世中に形成された土層を搬入したのであろう。下層は、ほとんどが掘方（池底として構築された層）であるが、局所的に周囲からの流れ込みと思われる遺物の集中も見られた。これらを層位的に掘り分けることはできなかったが、17 世紀中葉～ 18 世紀前葉の遺物は構築時期を示し、18 世紀後葉～ 19 世紀前葉の遺物は流れ込みによるものと考えておきたい。93 号遺構は中の島にあたり、17 世紀中葉以降、19 世紀前葉まで同程度の量の遺物が見られるので、中の島は築造以来、19 世紀前葉頃までたびたび手を加えて維持されたのだろう。間知石で護岸された下層とその上にさらに土を覆い被せ、北岸に土橋を接岸させた上層から成るが、上層出土の遺物の方が多い。上層にも 17 世紀のものが目立つので、築造後早い段階で大きな改修が行われたと考えられる。

なお、第１次調査については、データが層位別・時期別に提示されていないため、比較検討することができなかった。

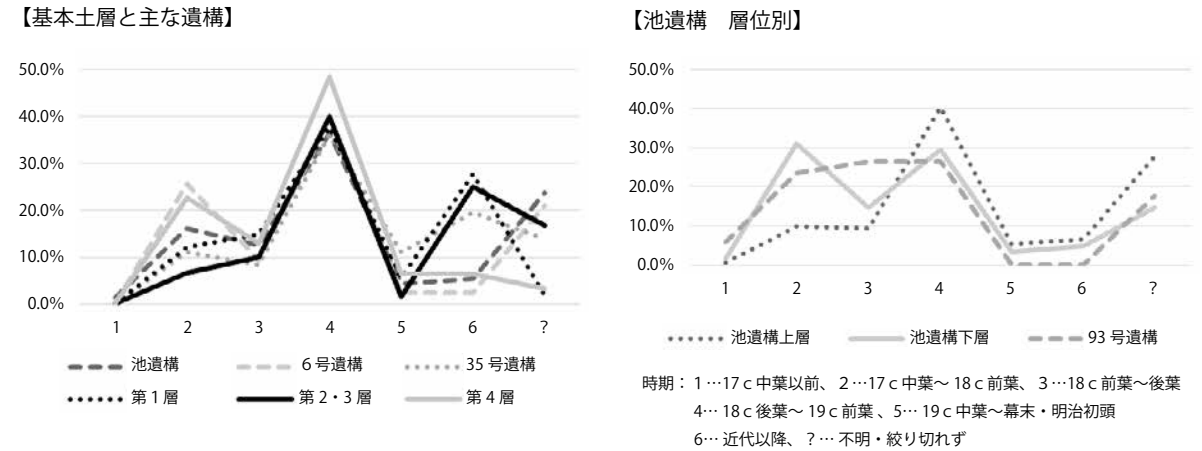
【遺構別・素材別出土量】

６号遺構、35 号遺構、池遺構以外の遺構については遺物出土量が極めて少なく、器種別、時期別の出土傾向を捉えることができなかった。ここでは素材別の出土量を第 68 表に示しておく。

（両角まり）



第 190 図　器種別出土パターン



第 191 図　時期別出土パターン

第 66 表　器種別出土量

No.	材質	器種	遺構外計			遺構計			遺構のうち池遺構のみ			第２次調査総計			第１次調査	
			破片数		重量 (g)	破片数		重量 (g)	破片数		重量 (g)	破片数		重量 (g)	破片数	
1	陶器	碗	219	5.24%	4733.5	625	4.16%	6594.4	430	4.41%	4286.4	844	4.40%	11327.9	2951	3.91%
2	陶器	皿	51	1.22%	740.8	121	0.81%	1404.0	91	0.93%	1002.7	172	0.90%	2144.8	492	0.65%
3	陶器	大皿	40	0.96%	2233.3	174	1.16%	8748.1	124	1.27%	6768.6	214	1.12%	10981.4	142	0.19%
4	陶器	蓋物				7	0.05%	97.5	5	0.05%	85.3	7	0.04%	97.5	17	0.02%
5	陶器	蓋	24	0.57%	583.0	56	0.37%	1245.7	36	0.37%	756.5	80	0.42%	1828.7	220	0.29%
6	陶器	片口・捏鉢	30	0.72%	1595.5	139	0.93%	5201.0	109	1.12%	4472.6	169	0.88%	6796.5	429	0.57%
7	陶器	擂鉢	62	1.48%	5669.4	174	1.16%	13103.1	124	1.27%	10710.2	236	1.23%	18772.5	1104	1.46%
8	陶器	大鉢	67	1.60%	6495.3	159	1.06%	11954.3	105	1.08%	9123.9	226	1.18%	18449.6	401	0.53%
9	陶器	植木鉢	48	1.15%	3457.1	83	0.55%	4873.2	72	0.74%	4573.5	131	0.68%	8330.3	474	0.63%
10	陶器	半胴甕	36	0.86%	1721.0	93	0.62%	3037.9	63	0.65%	2215.8	129	0.67%	4758.9		
11	陶器	大甕	32	0.77%	5240.8	120	0.80%	9157.9	87	0.89%	6215.0	152	0.79%	14398.7		
12	陶器	土瓶・急須	101	2.42%	1154.5	330	2.20%	3125.7	209	2.15%	2119.1	431	2.25%	4280.2		
13	陶器	鍋類	29	0.69%	351.4	52	0.35%	521.7	44	0.45%	434.9	81	0.42%	873.1	460	0.61%
14	陶器	甕・壺類	69	1.65%	2379.7	277	1.85%	10172.1	162	1.66%	6418.4	346	1.80%	12551.8	2319	3.07%
15	陶器	袋物	2	0.05%	6.1	8	0.05%	316.3	3	0.03%	93.1	10	0.05%	322.4	1736	2.30%
16	陶器	高田徳利	1589	38.02%	48637.7	7631	50.84%	184297.7	4841	49.69%	128042.2	9220	48.05%	232935.4	42325	56.10%
17	陶器	他の徳利	59	1.41%	1844.5	238	1.59%	7704.4	156	1.60%	4710.3	297	1.55%	9548.9		
18	陶器	灯火皿	2	0.05%	27.9	4	0.03%	22.6	3	0.03%	17.4	6	0.03%	50.5	162	0.21%
19	陶器	灯火受皿	5	0.12%	131.5	5	0.03%	99.5	3	0.03%	47.5	10	0.05%	231.0		
20	陶器	脚付灯火受皿	1	0.02%	66.9	5	0.03%	141.1	1	0.01%	49.5	6	0.03%	208.0		
21	陶器	香炉	1	0.02%	5.0	30	0.20%	594.0	21	0.22%	468.3	31	0.16%	599.0	175	0.23%
22	陶器	火鉢	1	0.02%	73.5	1	0.01%	29.0	1	0.01%	29.0	2	0.01%	102.5	115	0.15%
23	陶器	鳥の餌入れ	2	0.05%	71.9	9	0.06%	171.4	7	0.07%	161.1	11	0.06%	243.3	50	0.07%
24	陶器	灰落し	3	0.07%	112.7	15	0.10%	502.4	9	0.09%	316.1	18	0.09%	615.1		
25	陶器	盤	1	0.02%	61.8	5	0.03%	125.0	1	0.01%	125.0	2	0.01%	186.8	139	0.18%
26	陶器	小杯	3	0.07%	30.7	2	0.01%	19.3	1	0.01%	2.5	5	0.03%	50.0		
27	陶器	燗徳利	3	0.07%	14.0	5	0.03%	14.0				8	0.04%	28.0	134	0.18%
28	陶器	水滴				1	0.01%	8.3				1	0.01%	8.3	14	0.02%
29	陶器	鬢盥				1	0.01%	95.9	4	0.04%	85.7	5	0.03%	95.9	18	0.02%
30	陶器	鉢				15	0.10%	877.8	15	0.15%	877.8	15	0.08%	877.8	263	0.35%
31	陶器	筆立て				1	0.01%	13.6				1	0.01%	13.6		
32	陶器	湯こぼし				2	0.01%	61.7				2	0.01%	61.7		
33	陶器	硫酸瓶				1	0.01%	164.8				1	0.01%	164.8		
34	陶器	欄引				1	1.79%	47.2	1	0.01%	47.2	1	0.01%	47.2		
35	陶器	火入れ				5	0.03%	83.4	5	0.05%	83.4	5	0.03%	83.4	69	0.09%
36	陶器	合子				2	0.01%	37.4	2	0.02%	37.4	2	0.01%	37.4	60	0.08%
37	陶器	窯道具				3	0.02%	224.1	2	0.02%	210.5	3	0.02%	224.1		
38	陶器	不明	56	1.34%	1221.4	223	1.49%	3623.7	143	1.47%	2591.7	279	1.45%	4845.1	2296	3.04%
39	硬質陶器	洋皿	1	0.02%	13.8	2	0.01%	39.4				3	0.02%	53.2		
40	硬質陶器	湯呑碗	1	0.02%	22.7	1	0.01%	1.4				2	0.01%	24.1		
41	硬質陶器	碗	1	0.02%	56.5	0	0.00%	0.0				1	0.01%	56.5		
42	硬質陶器	不明				1	0.01%	13.0				1	0.01%	13.0		
陶器計			2539	60.76%	88753.9	10627	70.80%	278565.0	6880	70.61%	197178.6	13166	68.62%	367318.9	56565	74.98%
43	磁器	碗	654	15.65%	12070.5	1584	10.55%	14643.0	1050	10.78%	9765.7	2238	11.66%	26713.5	6626	8.78%
44	磁器	皿	357	8.54%	7970.1	863	5.75%	11907.0	599	6.15%	8614.9	1220	6.36%	19877.1	2885	3.82%
45	磁器	大皿	4	0.10%	607.6	35	0.23%	1517.7	17	0.17%	1171.3	39	0.20%	2125.3	178	0.24%
46	磁器	蓋物	35	0.84%	837.5	107	0.71%	1786.2	73	0.75%	1203.6	142	0.74%	2623.7	291	0.39%
47	磁器	蓋	94	2.25%	1498.7	172	1.15%	2383.1	118	1.21%	1622.2	266	1.39%	3881.8	482	0.64%
48	磁器	鉢	59	1.41%	2283.4	88	0.59%	1395.4	52	0.53%	966.6	147	0.77%	3678.8	268	0.36%
49	磁器	猪口	15	0.36%	202.9	87	0.58%	528.0	55	0.56%	298.3	102	0.53%	730.9	83	0.11%
50	磁器	小杯	36	0.86%	192.3	108	0.72%	601.9	66	0.68%	352.5	144	0.75%	794.2	78	0.10%
51	磁器	袋物	83	1.99%	1643.5	213	1.42%	3621.7	158	1.62%	2824.4	296	1.54%	5265.2	406	0.54%
52	磁器	壺類	7	0.17%	148.3	66	0.44%	1865.8	44	0.45%	1321.3	73	0.38%	2014.1	298	0.39%
53	磁器	合子	2	0.05%	49.9	3	0.02%	11.7	2	0.02%	10.1	5	0.03%	61.6	16	0.02%
54	磁器	合子蓋				3	0.02%	44.7	2	0.02%	34.2	3	0.02%	44.7		
55	磁器	香炉	14	0.34%	249.0	32	0.21%	516.3	20	0.21%	280.8	46	0.24%	765.3	13	0.02%
56	磁器	水滴	1	0.02%	3.3	6	0.04%	68.3	4	0.04%	34.6	7	0.04%	71.6	47	0.06%
57	磁器	土瓶・急須	10	0.24%	95.0	29	0.19%	261.3	12	0.12%	126.4	39	0.20%	356.3	52	0.07%
58	磁器	仏飯	6	0.14%	224.7	4	0.03%	121.9	3	0.03%	97.7	10	0.05%	346.6	45	0.06%
59	磁器	大鉢	5	0.12%	1510.7	11	0.07%	562.9	5	0.05%	320.4	16	0.08%	2073.6	176	0.23%
60	磁器	燗徳利	15	0.36%	83.9	18	0.12%	59.1	11	0.11%	36.0	33	0.17%	143.0	143	0.19%
61	磁器	蓮華	2	0.05%	23.5	4	0.03%	25.1	3	0.03%	15.7	6	0.03%	48.6		
62	磁器	紅猪口	1	0.02%	1.5	2	0.01%	10.3	1	0.01%	8.9	3	0.02%	11.8	3	0.00%
63	磁器	注口酒器	1	0.02%	28.0	0	0.00%	0.0				1	0.01%	28.0		
64	磁器	湯呑碗	3	0.07%	53.7	3	0.02%	81.6				6	0.03%	135.3		
65	磁器	火鉢	1	0.02%	120.0	1	0.01%	97.6				2	0.01%	217.6		
66	磁器	文具	2	0.05%	37.0	0	0.00%	0.0				2	0.01%	37.0		
67	磁器	鬢盥				1	0.01%	21.7				1	0.01%	21.7		
68	磁器	灰落し				1	0.01%	32.9	1	0.01%	32.9	1	0.01%	32.9		
69	磁器	植木鉢				6	0.04%	268.6	1	0.01%	26.7	6	0.03%	268.6	44	0.06%
70	磁器	目皿				1	0.01%	39.4				1	0.01%	39.4		
71	磁器	不明	63	1.51%	687.7	247	1.65%	2160.7	178	1.83%	1541.8	310	1.62%	2848.4	1903	2.52%
磁器計			1470	35.18%	30622.7	3695	24.62%	44633.9	2475	25.40%	30707.0	5165	26.92%	75256.6	14037	18.61%

No.	材質	器種	遺構外計			遺構計			遺構のうち池遺構のみ			第２次調査総計			第１次調査	
			破片数		重量 (g)	破片数		重量 (g)	破片数		重量 (g)	破片数		重量 (g)	破片数	
72	土器	灯火皿	30	0.72%	159.4	165	1.10%	1193.8	86	0.88%	612.1	195	1.02%	1353.2	1063	1.41%
73	土器	灯火受皿				3	0.02%	148.0	1	0.01%	144.6	3	0.02%	148.0	25	0.03%
74	土器	脚付灯火受皿				3	0.02%	36.9				3	0.02%	36.9		
75	土器	乗燭				1	0.01%	2.3				1	0.01%	2.3		
76	土器	焙烙	28	0.67%	415.5	124	0.83%	1499.0	77	0.79%	928.2	152	0.79%	1914.5	1284	1.70%
77	土器	火消壺				10	0.07%	470.3	10	0.10%	470.3	10	0.05%	470.3		
78	土器	蓋	18	0.43%	654.4	13	0.09%	363.1	7	0.07%	248.7	31	0.16%	1017.5	249	0.33%
79	土器	火鉢類	14	0.34%	670.5	93	0.62%	2850.1	39	0.40%	1337.8	107	0.56%	3520.6	716	0.95%
80	土器	焜炉類	1	0.02%	24.6	16	0.11%	937.3	10	0.10%	561.4	17	0.09%	961.9		
81	土器	植木鉢	13	0.31%	399.8	62	0.41%	1209.7	49	0.50%	988.8	75	0.39%	1609.5	141	0.19%
82	土器	灰落し	2	0.05%	59.6	3	0.02%	1052.9				5	0.03%	1112.5		
83	土器	五徳	1	0.02%	11.5	1	0.01%	20.2	1	0.01%	20.2	2	0.01%	31.7		
84	土器	塩壺	5	0.12%	238.2	12	0.08%	804.0	6	0.06%	123.6	17	0.09%	1042.2	199	0.26%
85	土器	塩壺蓋	3	0.07%	165.2	8	0.05%	323.7	7	0.07%	307.6	11	0.06%	488.9		
86	土器	胞衣皿	8	0.19%	261.8	19	0.13%	244.7	1	0.01%	25.4	27	0.14%	506.5	285	0.38%
87	土器	角形焜炉				2	0.01%	50.0				2	0.01%	50.0		
88	土器	目皿				1	0.01%	12.0				1	0.01%	12.0		
89	土器	竈				1	0.01%	135.1				1	0.01%	135.1		
90	土器	炉形土器				3	0.02%	347.8				3	0.02%	347.8		
91	土器	船かまど				1	0.01%	125.8				1	0.01%	125.8		
92	土器	瓦灯	1	0.02%	262.4	1	0.01%	13.9				2	0.01%	276.3		
93	土器	不明	13	0.31%	823.8	52	0.35%	891.6	30	0.31%	645.7	65	0.34%	1715.4	149	0.20%
94	土器［瓦質］	火鉢類	1	0.02%	124.3	10	0.07%	86.6	10	0.10%	86.6	11	0.06%	210.9		
95	土器［瓦質］	植木鉢	2	0.05%	210.5	15	0.10%	467.1	13	0.13%	407.9	17	0.09%	677.6		
96	土器［瓦質］	火消壺				4	0.03%	207.8	4	0.04%	207.8	4	0.02%	207.8		
97	土器［瓦質］	灰落し				2	0.01%	122.6	2	0.02%	122.6	2	0.01%	122.6		
98	土器［瓦質］	盤				2	0.01%	139.9				2	0.01%	139.9		
99	土器［施釉］	灯火皿	12	0.29%	110.2	8	0.05%	41.4	3	0.03%	26.4	20	0.10%	151.6	201	0.27%
100	土器［施釉］	灯火受皿	2	0.05%	12.7	7	0.05%	172.7	5	0.05%	142.7	9	0.05%	185.4	59	0.08%
101	土器［施釉］	脚付灯火受皿	11	0.26%	381.1	29	0.19%	866.8	18	0.18%	431.2	40	0.21%	1247.9	224	0.30%
102	土器［施釉］	乗燭	2	0.05%	51.4	4	0.03%	100.2	4	0.04%	100.2	6	0.03%	151.6		
103	土器［施釉］	土瓶	1	0.02%	3.3	0	0.00%	0.0				1	0.01%	3.3		
104	土器［施釉］	鍋類	1	0.02%	13.3	6	0.04%	56.8	5	0.05%	44.3	7	0.04%	70.1		
105	土器［施釉］	不明	1	0.02%	4.0	6	0.04%	306.5				7	0.04%	310.5	248	0.33%
土器計			170	4.07%	5057.5	687	4.58%	15300.6	388	3.98%	7984.1	857	4.47%	20358.1	4843	6.42%
総計			4179	100.0%	124434.1	15009	100.0%	338499.5	9743	100.0%	235869.7	19188	100.0%	462933.6	75445	100.0%

第 67 表　時期別出土量（パーセンテージ）

時期		池遺構上層	池遺構下層	93 号遺構	池遺構	6 号遺構	35 号遺構	第１層	第２・３層	第４層
1	17 ｃ中葉以前	0.5%	1.6%	5.9%	1.4%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
2	17 ｃ中葉～ 18 ｃ前葉	9.8%	31.1%	23.5%	16.2%	25.6%	11.1%	12.0%	6.7%	22.6%
3	18 ｃ前葉～後葉	9.3%	14.8%	26.5%	12.6%	9.3%	8.3%	14.8%	10.0%	12.9%
4	18 ｃ後葉～ 19 ｃ前葉	40.4%	29.5%	26.5%	36.3%	39.5%	36.1%	38.0%	40.0%	48.4%
5	19 ｃ中葉～幕末・明治初頭	5.5%	3.3%	0.0%	4.3%	2.3%	11.1%	5.6%	1.7%	6.5%
6	近代以降	6.6%	4.9%	0.0%	5.4%	2.3%	19.4%	27.8%	25.0%	6.5%
?	不明・絞り切れず	27.9%	14.8%	17.6%	23.7%	20.9%	13.9%	1.9%	16.7%	3.2%
計		100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
折れ線パターン					a	a	b	b	b	a

■遺構

今回の調査で検出した遺構は、それぞれ盛土（第２～５層）の上面または自然堆積層（第６層）の上面に構築されている。盛土の順序からⅡ・Ⅲ・Ⅳ面の３つの確認面を設定し、遺構の報告を行った。それぞれの確認面の遺構は切り合いや構築の順序、出土遺物から先後関係が認められ、特にⅡ・Ⅲ面において、細分することができた。

【Ⅱ面】

Ⅱ面の遺構は、府立第一高等女学校の明治期の校舎にあたる建物基礎（35・52・56 号遺構）、土管・鉄管と煉瓦製・木製枡からなる 10 の導水施設、コンクリート製礎石を伴う土坑列（59 号遺構）や十字型土坑列（53 号遺構）などを検出した。明治期の校舎との先後関係に従って３つの段階に細分した。

Ⅱ -1 期　関東大震災以降に建てられた昭和校舎に伴う時期である。第 192 図上にⅡ -1 期の遺構と昭和校舎の位置を重ねた図を示した。昭和校舎は現校舎の建設に伴って取り壊されており、その痕跡が第 1-2 層である。土管系統 1・2 や 11 号遺構は昭和校舎に沿っていることがわかる。また、鉄管系統 1 も昭和校舎に近く、土管系統 1 と鉄管系統 1 は順に使われた遺構であると考えられる。

第 68 表　遺構別素材別出土量

遺構名		陶器計	磁器計	土器計	総計
2 号遺構	破片数	56	36	27	119
	重量 (g)	904.7	376.5	331.3	1612.5
3 号遺構	破片数	31	7	1	39
	重量 (g)	424.4	129.0	88.3	641.7
4 号遺構	破片数	9	2	5	16
	重量 (g)	235.5	18.1	27.4	281.0
6 号遺構	破片数	1596	160	65	1821
	重量 (g)	38618.8	1970.5	1526.8	4211.6
7 号遺構	破片数	114	68	11	193
	重量 (g)	2595.9	892.8	230.4	3719.1
9 号遺構	破片数	9	1	11	21
	重量 (g)	121.4	0.7	89.8	211.9
12 号遺構	破片数	12	4	2	18
	重量 (g)	219.1	102.9	1008.7	1330.7
13 号遺構	破片数	34	10	2	46
	重量 (g)	544.7	107.4	80.2	732.3
14 号遺構	破片数	28	12	0	40
	重量 (g)	452.2	321.9	0.0	774.1
17 号遺構	破片数	89	45	27	161
	重量 (g)	1392.0	620.2	501.8	2514.0
22 号遺構	破片数		1	5	6
	重量 (g)		1.8	8.0	9.8
23 号遺構	破片数	19	4	4	27
	重量 (g)	153.5	11.7	20.6	185.8
24 号遺構	破片数	39	25	9	73
	重量 (g)	1092.8	331.8	367.4	1792.0
25 号遺構	破片数	1	3	1	5
	重量 (g)	42.8	11.9	27.5	82.2
26 号遺構	破片数	20	8	2	30
	重量 (g)	700.6	63.7	10.2	774.5
30 号遺構	破片数	4	3		7
	重量 (g)	53.3	10.9		64.2
31 号遺構	破片数	9	8		17
	重量 (g)	42.1	30.0		72.1
32 号遺構	破片数	22	5	4	31
	重量 (g)	349.9	23.9	34.7	408.5
33 号遺構	破片数	40	21	8	69
	重量 (g)	989.0	315.3	76.4	1380.7
35 号遺構	破片数	794	344	18	1156
	重量 (g)	14113.4	3221.8	777.4	18112.6
36 号遺構	破片数	3	2		5
	重量 (g)	40.6	4.3		44.9
37 号遺構（土管列）	破片数	198	96		294
	重量 (g)	2829.2	767.0		3596.2
37 号遺構（木製枡 a）	破片数	4	2		6
	重量 (g)	28.3	4.7		33.0
37 号遺構（木製枡 b）	破片数	1	1		2
	重量 (g)	4.7	3.2		7.9
39 号遺構	破片数	6	10		16
	重量 (g)	57.4	94.2		151.6
42 号遺構	破片数	1	2		3
	重量 (g)	3.8	10.0		13.8
43 号遺構	破片数	3	2		5
	重量 (g)	16.3	5.4		21.7
44 号遺構	破片数	1	2		3
	重量 (g)	4.2	16.3		20.5
46 号遺構	破片数	2	2	1	5
	重量 (g)	85.2	166.0	21.0	272.2
49 号遺構	破片数	9	2		11
	重量 (g)	77.6	6.2		83.8
52 号遺構	破片数	82	31	2	115
	重量 (g)	1845.3	583.0	66.9	2495.2
53 号遺構	破片数	11	5	2	18
	重量 (g)	255.8	42.8	48.6	347.2

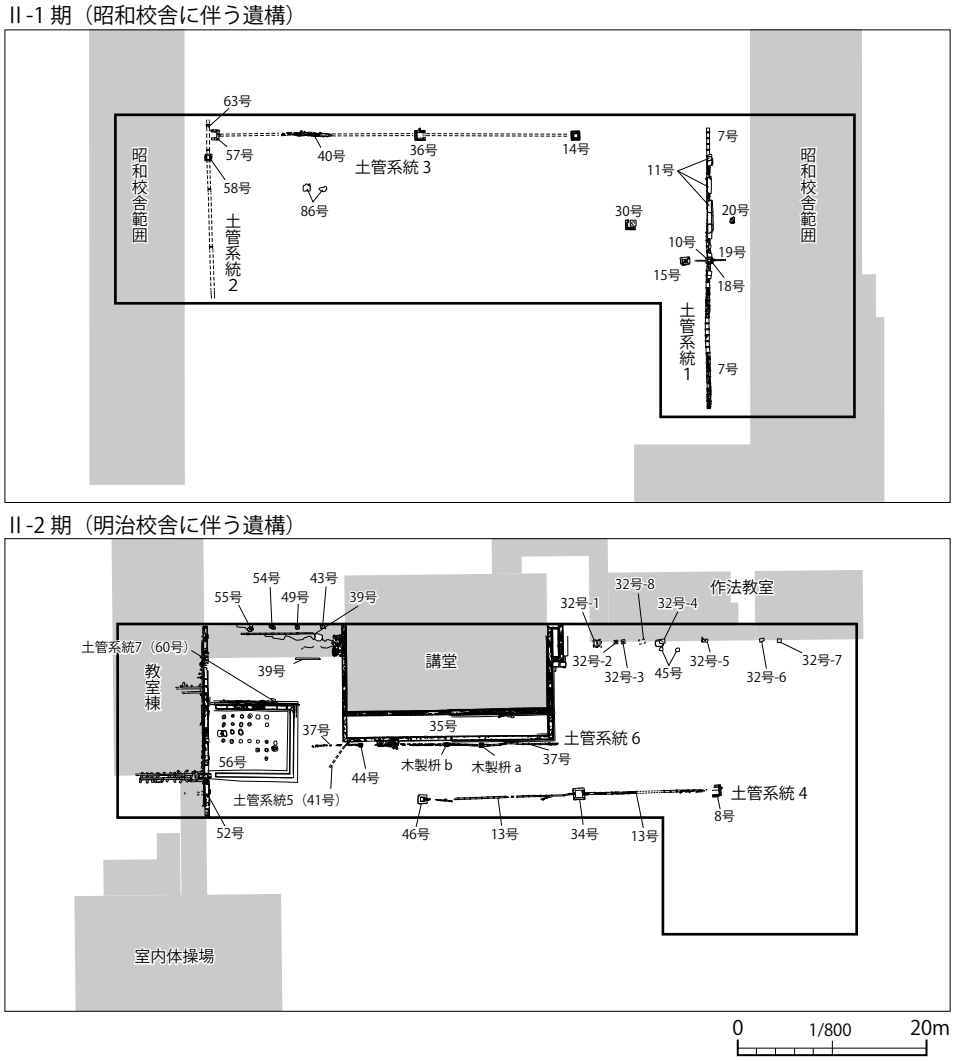
遺構名		陶器計	磁器計	土器計	総計
54 号遺構	破片数	2	0	1	3
	重量 (g)	4.3	0.0	9.6	13.9
55 号遺構	破片数	20	2	2	24
	重量 (g)	570.1	45.3	19.9	635.3
58 号遺構	破片数	12	7		19
	重量 (g)	84.1	20.0		104.1
56 号遺構	破片数	39	31		70
	重量 (g)	694.6	193.3		887.9
59 号遺構	破片数	36	13		49
	重量 (g)	479.7	58.3		538.0
60 号遺構	破片数	9	1	1	11
	重量 (g)	81.7	12.3	6.0	100.0
62 号遺構	破片数	5		1	6
	重量 (g)	785.5		12.5	798.0
63 号遺構	破片数	19	15		34
	重量 (g)	363.3	107.4		470.7
66 号遺構	破片数	11	6	1	18
	重量 (g)	348.4	225.7	26.6	600.7
68 号遺構	破片数	79	7	4	90
	重量 (g)	1406.2	52.8	273.8	1732.8
69・74 号遺構	破片数	23	29	39	91
	重量 (g)	1634.1	485.4	603.4	2722.9
70 号遺構	破片数	4	8	13	25
	重量 (g)	53.5	143.3	122.3	319.1
71 号遺構	破片数		1	2	3
	重量 (g)		6.1	28.8	34.9
72 号遺構	破片数	8	3		11
	重量 (g)	104.0	28.0		132.0
73 号遺構	破片数	2	1		3
	重量 (g)	21.0	4.5		25.5
75 号遺構	破片数	16	91	1	108
	重量 (g)	425.6	1097.7	16.9	1540.2
76 号遺構	破片数			1	1
	重量 (g)			1.5	1.5
77 号遺構	破片数	3	3	1	7
	重量 (g)	24.2	88.8	31.9	144.9
80 号遺構	破片数	3	1	1	5
	重量 (g)	10.9	21.2	5.6	37.7
81 号遺構	破片数		1		1
	重量 (g)		7.7		7.7
82 号遺構	破片数	1	1		2
	重量 (g)	2.4	30.0		32.4
84 号遺構	破片数	5	2	2	9
	重量 (g)	66.9	22.1	81.9	170.9
85 号遺構	破片数	112	24	8	144
	重量 (g)	3244.1	284.4	206.2	3734.7
86 号遺構	破片数	36	17	5	58
	重量 (g)	437.9	135.7	91.4	665.0
87 号遺構	破片数	30	22	2	54
	重量 (g)	1750.0	399.2	340.0	2489.2
88 号遺構	破片数			1	1
	重量 (g)			3.9	3.9
89 号遺構	破片数	5	1	2	8
	重量 (g)	62.6	11.0	52.7	126.3
90 号遺構	破片数	3	1	2	6
	重量 (g)	8.0	1.6	19.2	28.8
92 号遺構	破片数	1	2		3
	重量 (g)	9.1	9.6		18.7
94 号遺構	破片数		3	1	4
	重量 (g)		66.8	6.0	72.8
95 号遺構	破片数	16	3	1	20
	重量 (g)	419.7	102.8	13.0	535.5
池遺構（93 号含む）	破片数	6880	2475	388	9743
	重量 (g)	197178.6	30707.0	7984.1	235869.7

一方、昭和校舎の建築の前には震災後の仮設校舎があり、35 号遺構付近に建てられていたと記録が残る（東京都立白鷗高等学校 1989）。調査中にこの仮設校舎の痕跡を確認することはできなかったが、土管系統 3 はこの仮設校舎に伴うものと考えられる。

Ⅱ -2 期　明治校舎に伴う時期である。第 192 図下はⅡ -2 期の遺構と建設当初の明治期校舎の配置を重ねたものである。35 号遺構や 52 号遺構、39 号遺構は設立当初から所在していた校舎であるとわかる。一方で、生徒数の増加に伴って徐々に増築していったことが記録されており、35 号遺構の南辺や 56 号遺構がこれにあたると考えられる。土管系統 5 ～ 7 は校舎に伴うことがわかるが、土管系統 4 が伴う校舎はない。土管の刻印から、土管系統 4 は明治 43 年以降のものと考えられるが、明治期または昭和校舎のどちらに伴うものであるか、不明である。

また、Ⅲ面の項で報告した 32 号遺構 -1 からガラス製品が出土しており、明治時代の遺構と考えられる。講堂の東には作法教室があり、32 号遺構はこの作法教室の南辺に重なっている。45 号遺構も含めて作法教室の基礎であると推定され、ここに示した。

Ⅱ -3 期　府立第一高等女学校の建設以前の遺構と考えられる。39 号遺構の下層から出土した 53 号



第 192 図　Ⅱ面の遺構と学校校舎の配置図（1/800）

遺構や 59 号遺構は建物基礎と考えられる。また、土管系統 8 は 56 号遺構に、土管系統 9 は土管系統 5 にそれぞれ壊されており、府立第一高等女学校建設以前から敷設されていた可能性がある。

【Ⅲ面】

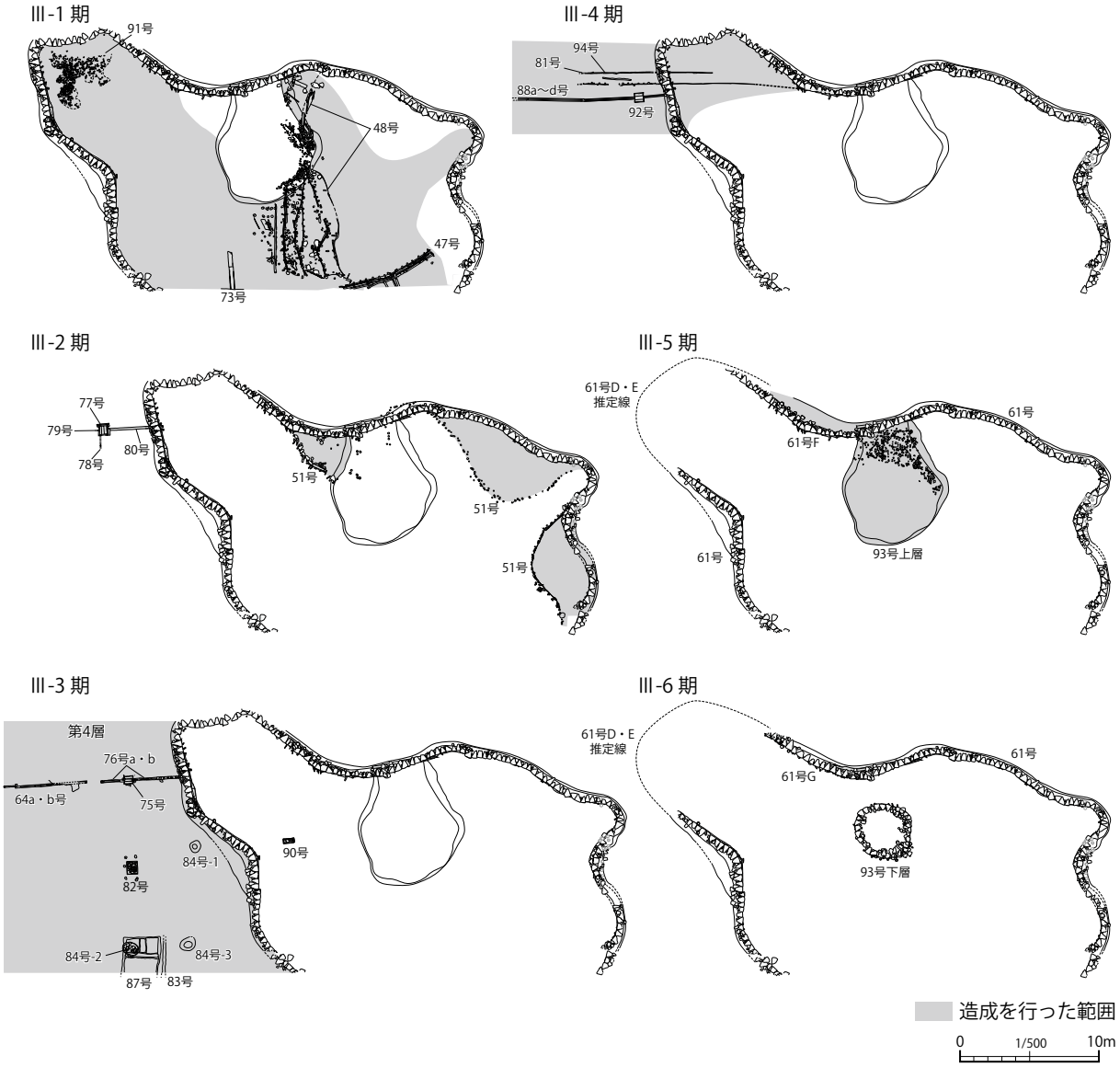
Ⅲ面には、池遺構に関連するものと、第 4 層に遺された遺構が分類される。池遺構は、松山藩酒井家の屋敷図（第 181 図）にも同様のものが確認され、明治の地図（第 7 図左下）にも 51 号遺構の形に近いものが確認されるが、いずれも形状が異なっている。発掘調査においても、池遺構を構成する石積遺構（61 号遺構）、中の島（93 号遺構）、木樋系統 1 ～ 3、土留板列などに段階的な構築が認められた。池遺構は改修や埋立てによって各段階によって形状が変わっていたと考えられる。ここでは、池遺構の形状と埋立てに着目して 6 段階を設けた（第 193 図）。

Ⅲ -1 期　池遺構が完全に埋立てられた時期にあたる。池遺構を西側から段階的に埋立てる途上で設けられたと考えられる 48 号遺構や、その前段階として池遺構を狭めた 47 号遺構、埋立てた土層上面に流れ込んだ 91 号遺構や 73 号遺構が属す。91 号遺構から、池遺構の埋戻しが第 3 層造成後にも継続していたことがわかる。Ⅱで確認したとおり、池遺構が完全に埋立てられたのは明治 20 ～ 30 年代と考えられる。

Ⅲ -2 期　明治 17 年の絵図（第 7 図左下）の時期に相当する。池を 51 号遺構の土留板によって狭め、北東部は細い角のような形状となっている。池としての機能は損なっていなかったと考え、導水施設の最終段階である導水系統 1 もここの時期まで利用されたと推測する。

Ⅲ -3 期　導水系統 2 を設置した時期に相当する。第 4 層上面は、導水系統 2 の設置に伴う盛土と考えられ、第 4 層上面に遺された 82 ～ 84・87 号遺構はここに属すものと考えられる。第 4 層の出土遺物から、盛土を行った時期は 18 世紀後葉から 19 世紀初頭と考えられる。90 号遺構は池が機能していた時期に設置されたと考えられ、ここに分類した。

Ⅲ -4 期　導水系統 3 を設置した時期に相当する。導水系統 3 は 61 号遺構 D の胴木よりも下層にあるため、池を造成した当初から利用された可能性も考えられた。しかし、導水系統 1 を設置した際の改修である 81・94 号遺構の出土遺物には 18 世紀後葉から 19 世紀前葉のものが多く、61 号遺構 D は、池を利用している途中段階で木樋の設置のために改修されて、検出した池遺構の形状になったものと考えられる。61 号遺構 E においても、石積の方向が他所と異なっており、池の北西側で大規



第 193 図　池遺構と周辺の遺構の変遷（1/500）

模な改修が行われたものと推測される。

また、導水系統３に利用された木樋（88 号遺構ｂ・ｃ）の木材の残存最外年輪は 16 世紀中頃から 17 世紀前半を示すと分析結果を得た。木材は分割材であり、木樋の外縁が木材本体の外縁を示すとは限らない。また、本所上水廃止後の古樋の売却が享保 19（1734）年に行われたという記録も残る（神吉 1998）。この木樋が本所上水のものとは断定できないが、古い木樋を再利用した可能性がある。

Ⅲ -5 期　93 号遺構上層や 61 号遺構北辺を改修した時期にあたる。池の改修は、土橋が石積遺構を埋めて構築されていることから、61 号遺構北辺（G → F）の後、93 号遺構上層の構築が行われている。93 号遺構の出土遺物から、中の島の改修は 17 世紀中葉から 19 世紀前葉にかけて、断続的に行われたものと判断した。また、前述のⅢ -4 期の池北東の改修を考慮して、池北東の石積の形状は推定線としている。

Ⅲ -6 期　池を造成した当初の時期である。池遺構は第５層を切って構築されている。後述のとおり、第５層が 17 世紀後葉以降の造成であり、池遺構も 17 世紀後葉以降の造成と考えられる。

【Ⅳ面】

Ⅳ面には、調査区を東西に横断する 33 号遺構をはじめ、33 号遺構構築後の盛土である第５層上層の遺構、地山層である第６層上面で検出した遺構が属す。

池遺構は第５層を掘り込んでつくられているため、第５層の構築時期は、池遺構の構築よりも早い時期となる。また、池遺構が機能していたころにも第５層は存在していた可能性があり、池遺構と併存することも考えられる。

第５層上面の 24 号遺構は、被熱した瓦を充填した建物基礎で、瓦の中には蝶紋のものが含まれていた。元浅草遺跡を利用した武家で蝶紋を用いたのは池田家のみであるものの、池田家家紋と出土瓦の蝶紋はやや異なるため、池田家のものと断定はできない。この瓦が池田家のものと仮定すると、17 世紀半ばに焼失した池田家屋敷の瓦を再利用した 17 世紀後葉以降の遺構と考えられ、第５層は 17 世紀後葉頃から存在していたと考えられる。その他の第５層上面で検出した遺構の年代は不明であるが、少なくとも 17 世紀後葉以降の遺構であると推測される。

33 号遺構は、江戸全図（第 172 図）に示された地境であると考えられ、17 世紀中頃まで利用されていた遺構と考えられる。間知石を積み上げた遺構であり、遺構北側の堆積状況から水路の護岸であったと推測されるが、調査区内では対岸を検出できなかった。本遺跡の北西に位置する上野広小路遺跡では、不忍池から忍川への出口にあたる三橋と考えられる石組水路を検出した（加藤建設株式会社 2007）。忍川は東へ流れ、本遺跡の南西にある三味線堀へと流れ込んでおり、本遺跡の近隣を流れていたと考えられる。33 号遺構も同様の水路の一部であった可能性がある。

85・89 号遺構は第４層の下位にあり、第４層造成以前の遺構である。第４層の造成は 18 世紀後葉以降と推測され、85・89 号遺構はそれ以前の遺構である。Ⅲ -5 期以前のものと考えられる。

95 ～ 98 号遺構は、池遺構下層の下位にあり、池遺構よりも古い遺構である。池遺構の構築時期は 17 世紀後葉以降と考えられるため、95 ～ 98 号遺構はそれ以前に利用された遺構と考えられる。

他の第６層上面の遺構については、昭和校舎の解体に伴って第６層の上面まで撹乱されており、遺構や盛土の先後関係から推定することは難しい。廃棄土坑と考えられる 69 ～ 71・74 号遺構は 17 世紀後葉から 18 世紀中葉の遺物を多く出土し、2・68・72 号遺構は 18 世紀後葉から 19 世紀前

葉の遺物を主体とするものの、他の時期の遺物も混入しており遺物から時期の特定することは難しい。これらの廃棄土坑の出土遺物には、被熱痕跡の著しい陶磁土器がしばしば見られる。文献調査により当地が幾度も火事に遭っていたことが判明しており、たびたび廃棄土坑を掘って後始末を行ったものと考えられる。また、廃棄土坑や木枠を伴う土坑は上端部が削平されており、これらの後始末に伴って当地を整地していたと推測される。（山﨑太郎）

【引用・参考文献】

江戸遺跡研究会 2009『江戸遺跡研究会第 22 回大会 江戸をつくった土木技術 発表要旨』

江戸遺跡研究会 2010『江戸遺跡研究会第 24 回大会 江戸城・城下と伊豆石 発表要旨』

江戸遺跡研究会 2013『江戸遺跡研究会第 26 回大会　江戸と木の文化』

江戸陶磁土器研究グループ 1992『シンポジウム 江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅰ 発表要旨』

江戸陶磁土器研究グループ 1996『シンポジウム 江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅱ 発表要旨』

小俣　悟 2011「台東区内遺跡調査検出の上水・下水関連遺構」『江戸の上水道と下水道』吉川弘文館

加藤　晃 1989「江戸時代の瓦における「江戸式」の展開」『國學院大學日本史学専攻大学院会史学研究集録』14　國學院大學日本史学専攻大学院会

加藤建設株式会社 2007『上野広小路遺跡』

神吉和夫 1998「享保七年江戸四上水廃止の研究」『土木史研究』第 18 号 土木学会

北野信彦 2000「近世出土漆器椀の用材に関する一考察」『考古学と自然科学』38 文化財科学会

木村充保 2022『下駄の考古学』同成社

斉藤　進・佐藤貴浩 2023「足立区内煉瓦遺構調査報告書―煉瓦造稲荷社３基、茂出木家煉瓦造蔵・煉瓦造防空壕―」『足立区立郷土博物館紀要』第 43 号 足立区立郷土博物館

佐藤貴浩 2022「現足立区域における煉瓦工場の展開」『足立区立郷土博物館紀要』第 42 号足立区立郷土博物館

鈴木裕子 2009「江戸遺跡出土の小型樽」『東京考古』27 東京考古談話会

鈴木裕子 2017「「瀬戸助」銘の陶器について」『東京考古』35 東京考古談話会

墨田区横綱一丁目埋蔵文化財調査会『本所御蔵跡・陸軍被服工廠跡』株式会社 NTT ドコモ・東日本電信電話株式会社、株式会社ＮＴＴドコモファシリティーズ、墨田区横綱一丁目埋蔵文化財調査会

「近世考古学の提唱」五〇周年記念研究大会実行委員会 2019『近世の酒と宴』

台東区史編纂専門委員会 2002『台東区史』通史編Ⅲ下巻　東京都台東区

東京都立白鷗高等学校 1989『百年史』

常滑市民俗資料館編 1994『土管の歴史～飛鳥から現代まで～』常滑市

野中和夫編 2012『江戸の水道』同成社

埋蔵文化財研究会 2017『第 66 回埋蔵文化財研究会『幕藩体制下の瓦―近世都市遺跡における生産と流通―』発表要旨・資料集』

森島知之 2021「明治 10 年代の千川上水再興と東京府」『文学研究論集』第 55 号 明治大学大学院

煉瓦研究ネットワーク関東 2022「第４項　煉瓦刻印」『重要文化財 旧島津家本邸事務所　耐震体先工事報告書』株式会社 文化財保存計画協会

図版 1



1. Ⅰ区Ⅳ面全景（南から）



2. Ⅲ区Ⅱ面全景（西から）

図版 2



1. Ⅱ・Ⅲ区Ⅲ・Ⅳ面全景（西から）

図版 3



1. Ⅰ区北壁土層堆積状況（南から）



2. Ⅱ区北壁土層堆積状況（南から）



3. Ⅲ区北壁土層堆積状況（南から）

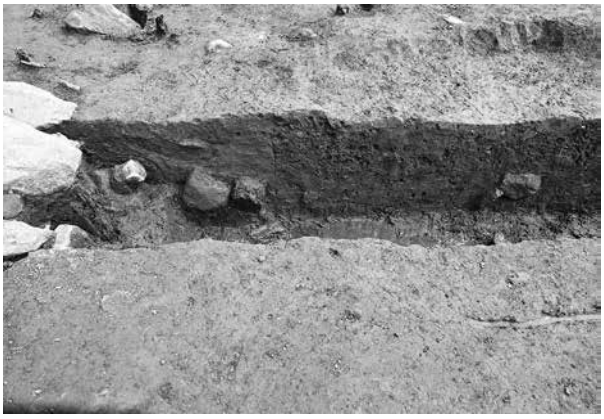


4. 35 号遺構建物基礎南側土層堆積状況（東から）

図版 4



1. Ⅰ区南北トレンチ土層堆積状況（1）（西から）



2. Ⅰ区南北トレンチ土層堆積状況（2）（西から）



3. Ⅰ区南北トレンチ土層堆積状況（3）（西から）



4. Ⅰ区南北トレンチ土層堆積状況（4）（西から）



5. Ⅰ区南北トレンチ土層堆積状況（5）（西から）



6. Ⅰ区東西トレンチ土層堆積状況（1）（南から）



7. Ⅰ区東西トレンチ土層堆積状況（2）（南から）



8. Ⅰ区東西トレンチ土層堆積状況（3）（南から）

図版 5



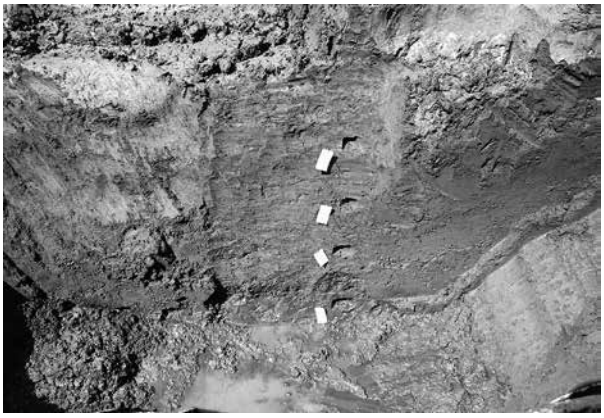
1. Ⅰ区東西トレンチ土層堆積状況（4）（南から）



2. Ⅰ区東西トレンチ土層堆積状況（5）（南から）



3. Ⅰ区東西トレンチ土層堆積状況（6）（南から）



4. Ⅱ区深掘トレンチ土層堆積状況（南から）



5. 35 号遺構東張出部（北から）



6. 35 号遺構東辺内部側面（西から）



7. 35 号遺構拡張部東辺内部側面（西から）

図版 6



1．35 号遺構東辺外部側面（東から）



2．35 号遺構南辺外部側面（南から）



3．35 号遺構中辺内部側面（北から）



4．35 号遺構中辺中央炭書き「ロ下」



5．35 号遺構中辺中央炭書き「ハ下」

図版 7



1．35 号遺構西辺中央炭書き「二下」



2．35 号遺構中辺中央炭書き「へ下」



3．35 号遺構西辺炭書き「と下」



4．35 号遺構東辺中央炭書き（文字不明）



5．35 号遺構拡張部土層堆積状況（西から）



6．35 号遺構東辺外側土層堆積状況（北東から）



7．35 号遺構中辺南側土層堆積状況（西から）

図版 8



1. 35 号遺構胴木検出状況（北から）



2. 35 号遺構拡張部胴木検出状況（西から）



3. 35 号遺構東辺・南辺胴木結合部（南から）



4. 35 号遺構南辺胴木・横木撤去状況（西から）



5. 35 号遺構南辺胴木・横木撤去状況（南から）

図版 9



1．52 号遺構東辺内部側面（西から）



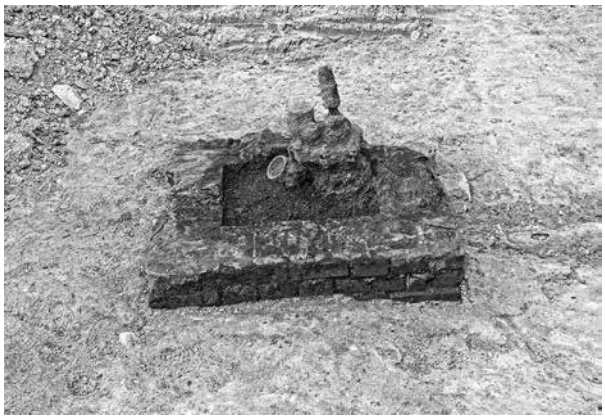
2．56 号遺構北辺外部側面（北から）



3．39・40 号遺構検出状況（東から）



4．15 号遺構上段（南から）



5．15 号遺構下段消火栓検出状況（南から）

図版 10



1. 7 号遺構北側（北から）



2. 7 号遺構南側（南から）



3. 13・34 号遺構検出状況（西から）



4. 13・38・46 号遺構検出状況（東から）



5. 34 号遺構検出状況（南から）



6. 46 号遺構検出状況（西から）



7. 62 号遺構検出状況（南から）



8. 67 号遺構検出状況（北西から）

図版 11



1．14 号遺構検出状況（東から）



2．36 号遺構検出状況（北から）



3．37 号遺構検出状況（東から）



4．37 号遺構木製枡 a 遺物検出状況（南から）



5．37 号遺構木製枡 b 底面検出状況（南から）



6．44 号遺構底面検出状況（南から）



7．63 号遺構土管検出状況（南から）

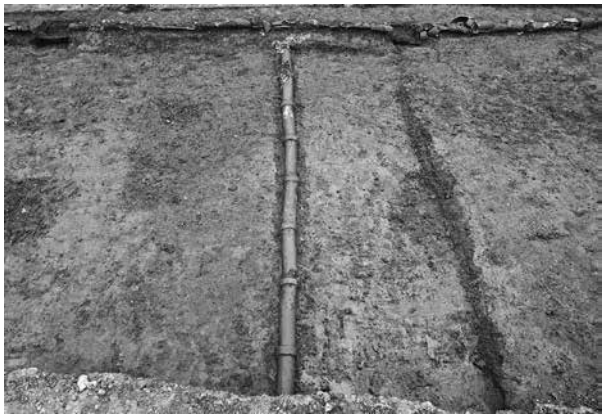


8．10 号遺構検出状況（南から）

図版 12



1. 30 号遺構検出状況（西から）



2. 38 号遺構検出状況（南から）



3. 41 号遺構検出状況（東から）



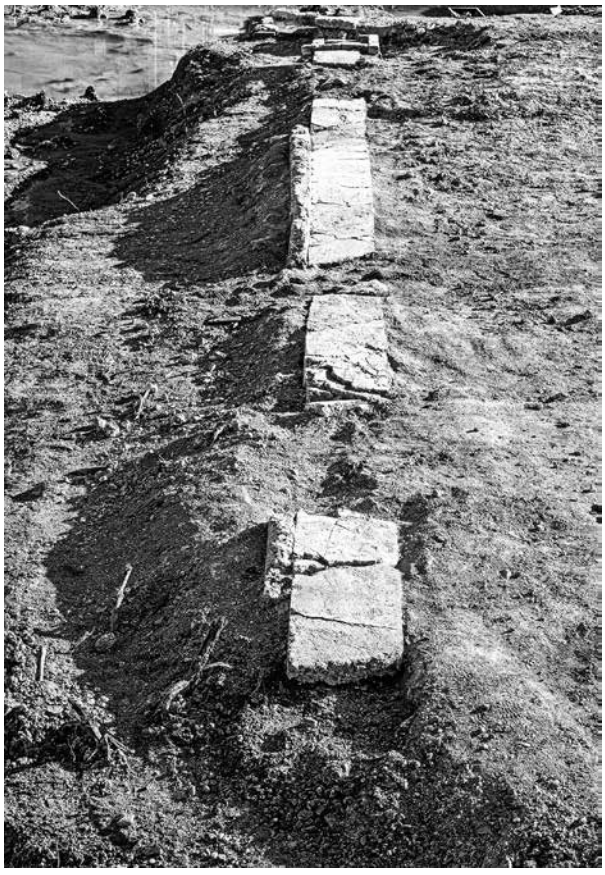
4. 60 号遺構検出状況（北東から）



5. 59 号遺構 -1 完掘（南から）



6. 53 号遺構 -1 完掘（南から）



7. 11 号遺構検出状況（北から）

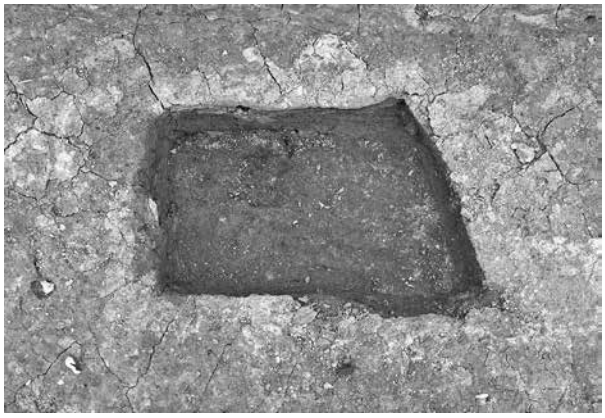
図版 13



1．42 号遺構底面検出状況（南から）



2．50 号遺構検底面出状況（北から）



3．43 号遺構完掘（南から）



4．49 号遺構完掘（西から）



5．54 号遺構完掘（北から）



6．55 号遺構礫検出状況（北から）



7．35 号遺構調査作業



8．30 号遺構煉瓦サンプル採取作業

図版 14

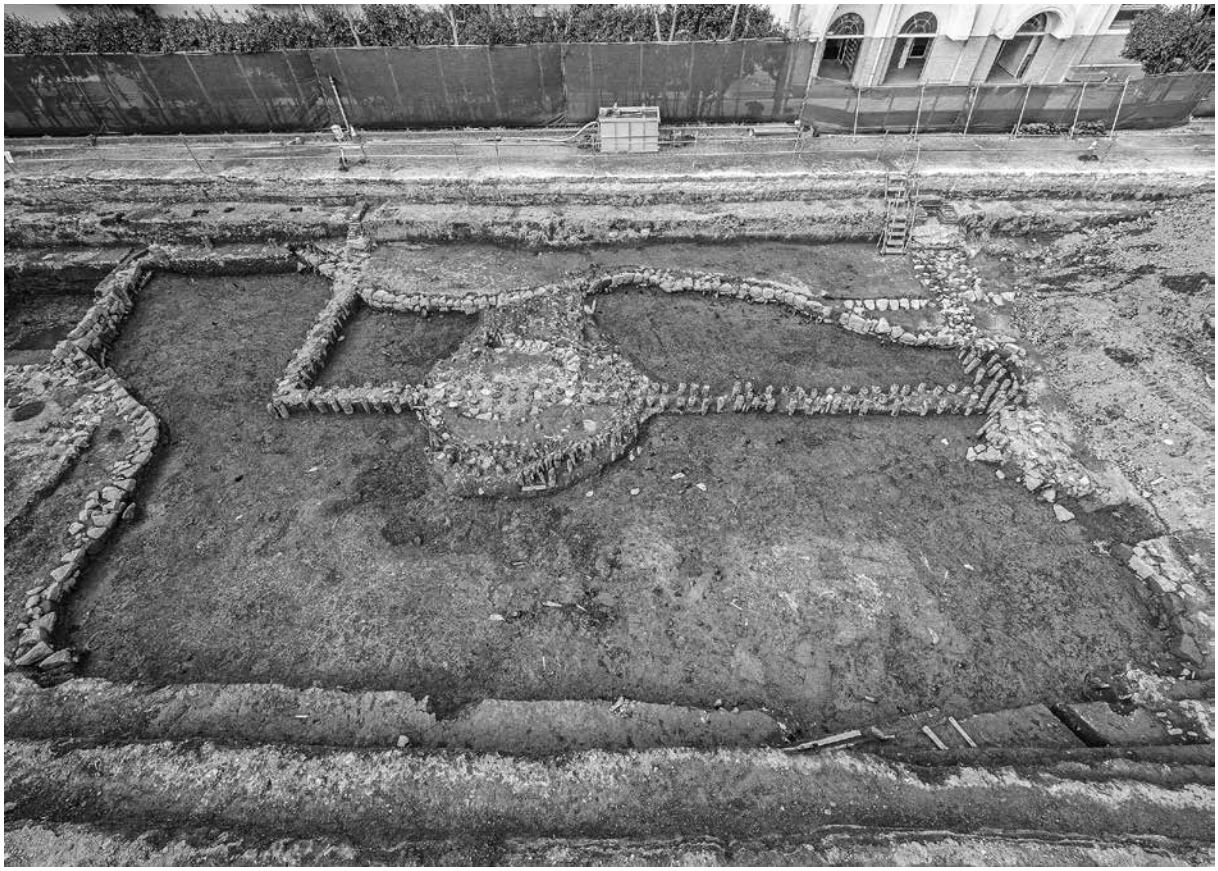


1. 池遺構検出状況（南から）



2. 47・48・51・61・93 号遺構検出状況（南から）

図版 15



1．池遺構底面検出状況（南から）



2．池遺構完掘（南から）

図版 16



1. 61 号遺構（A）石積検出状況（北東から）



2. 61 号遺構（B）石積前面（東から）



3. 61 号遺構（B・C）石積前面（北東から）



4. 61 号遺構（C・D）石積前面（東から）



5. 61 号遺構（D）石積前面・木樋出口部分（東から）



6. 61 号遺構（E）石積前面（南から）



7. 61 号遺構（F）石積前面（南西から）



8. 61 号遺構（F）石積前面（南西から）

図版 17



1．61 号遺構（G）石積上面（北西から）



2．61 号遺構（G）石積前面（南西から）



3．61 号遺構（F・H）石積前面（南から）



4．61 号遺構（H）石積前面（南東から）



5．61 号遺構（I）石積前面（南西から）



6．61 号遺構（I・J）石積前面（西から）



7．61 号遺構（K・L）石積前面（西から）



8．61 号遺構（L）石積検出状況（北西から）

図版18



1．61 号遺構（C）胴木検出状況（北から）



2．61 号遺構（D）胴木検出状況（北から）



3．61 号遺構（G）胴木検出状況（西から）



4．93 号遺構土層堆積状況（東から）



5．93 号遺構土層堆積状況（北から）



6．47 号遺構検出状況（西から）



7．47 号遺構土留板側面（北西から）



8．47 号遺構土層堆積状況（北東から）



1．48 号遺構（南 1）検出状況（東から）



2．48 号遺構（南 1）コモ状繊維検出状況（1）（東から）



3．48 号遺構（南 1）コモ状繊維検出状況（2）（東から）



4．48 号遺構（南 2）側面検出状況（東から）



5．48 号遺構（南 3）側面検出状況（東から）



6．48 号遺構（南 4）側面検出状況（東から）



7．48 号遺構（南 5）側面検出状況（東から）



8．48 号遺構（南 4）側面（東から）

図版 20



1. 48 号遺構（南 5）側面（東から）



2. 48 号遺構（北 1）検出状況（東から）



3. 48 号遺構（北 2）検出状況（東から）



4. 48 号遺構（北 2）完掘（東から）



5. 91 号遺構瓦集中部検出状況（南から）



6. 90 号遺構底面・礫検出状況（西から）

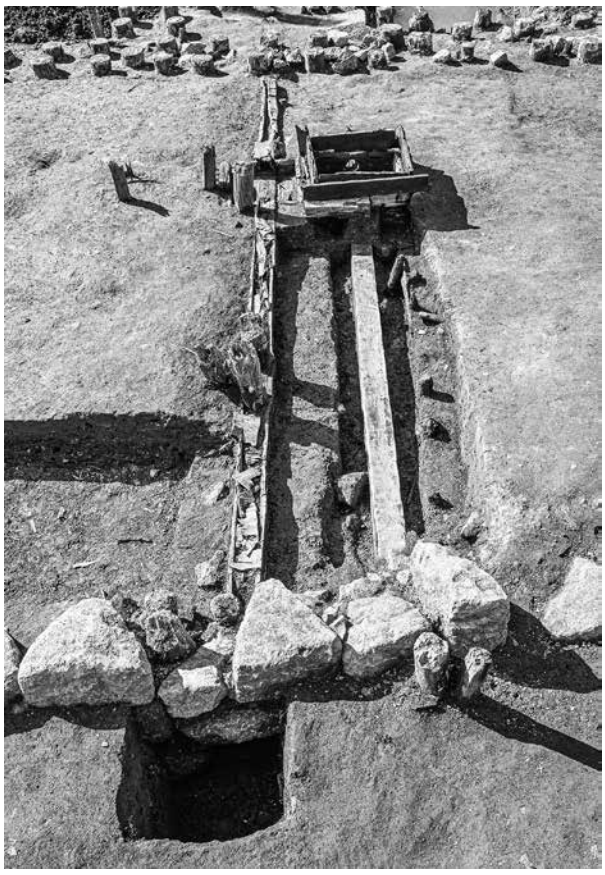


7. 64a 号遺構竹樋検出状況（東から）



8. 64b 号遺構木樋検出状況（東から）

図版 21



1. 75・76・77・78・79・80 号遺構完掘（東から）



2. 76・80 号遺構木樋検出状況（東から）



3. 77 号遺構底面検出状況（西から）



4. 75 号遺構底面検出状況（西から）



5. 80 号遺構木樋内部堆積状況（東から）



6. 81・88・92・94 号遺構検出状況（東から）



7. 88・92 号遺構検出状況（東から）

図版 22



1. 88 号遺構 a 木樋継手部分



2. 92 号遺構底面検出状況（南から）



3. 81・94 号遺構検出状況（東から）



4. 81 号遺構側面（南から）



5. 81 号遺構側面（南から）



6. 94 号遺構側面（南から）

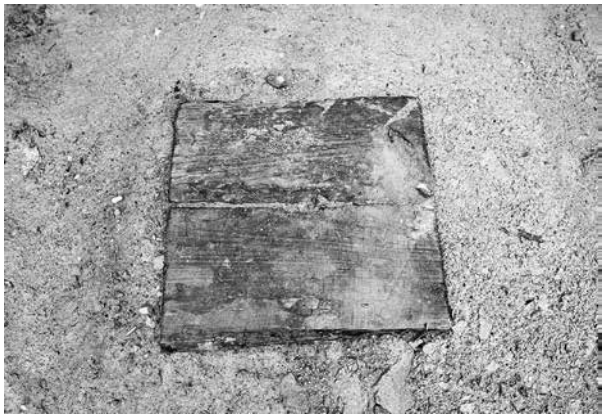


7. 94 号遺構側面（南から）



8. 32 号遺構 -1 礫面検出状況（南から）

図版 23



1. 32 号遺構 -2 検出状況（南から）



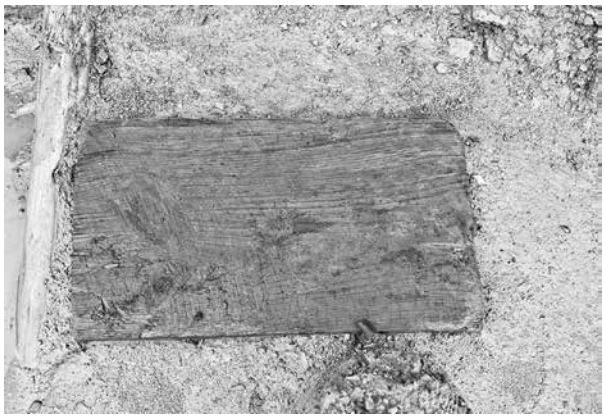
2. 32 号遺構 -3 検出状況（南から）



3. 32 号遺構 -4 検出状況（南から）



4. 32 号遺構 -4 礫面検出状況（南から）



5. 32 号遺構 -5 検出状況（南から）



6. 45 号遺構土層堆積状況（南から）



7. 66 号遺構検出状況（北から）



8. 66 号遺構底面検出状況（北から）

図版 24



1. 82 号遺構瓦出土状況（西から）



2. 84 号遺構 -2 礫出土状況（北から）



3. 84 号遺構 -3 完掘（北から）



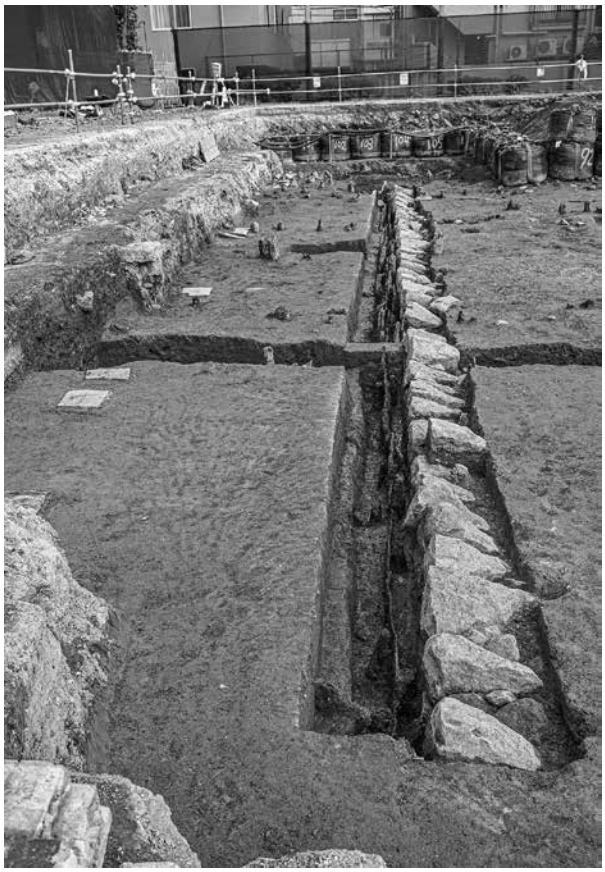
4. 83 号遺構完掘（北から）



5. 87 号遺構掘削状況（北から）



6. 33 号遺構検出状況（Ⅰ区東）（北から）



7. 33 号遺構検出状況（Ⅰ区～Ⅱ区東）（西から）

図版 25



1. 33 号遺構検出状況（Ⅰ区西～Ⅱ区東）（北から）



2. 33 号遺構石積近影（Ⅰ区）（1）（北から）



3. 33 号遺構石積近影（Ⅰ区）（2）（北から）



4. 33 号遺構石積近影（Ⅰ区）（3）（北から）



5. 33 号遺構石積近影（Ⅰ区）（4）（北から）



6. 33 号遺構石積近影（Ⅰ区）（5）（北から）



7. 33 号遺構石積近影（Ⅰ区）（6）（北から）



8. 33 号遺構石積近影（Ⅰ区）（7）（北から）

図版 26



1. 33 号遺構石積近影（Ⅰ区）（8）（北から）



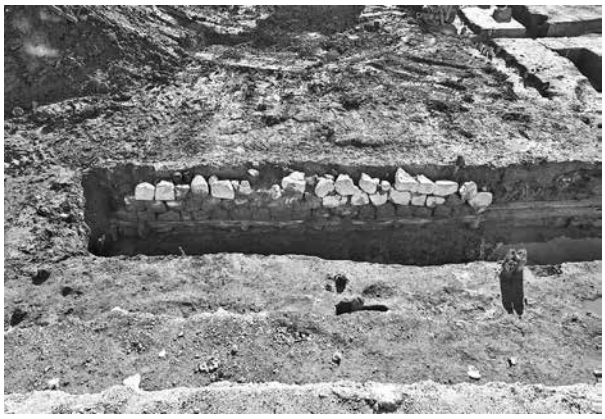
2. 33 号遺構石積近影（Ⅰ区）（9）（北から）



3. 33 号遺構石積近影（Ⅰ区）（10）（北から）



4. 33 号遺構石積近影（Ⅰ区）（11）（北から）



5. 33 号遺構石積前面（Ⅰ区東）（北から）



6. 33 号遺構石積前面（Ⅰ区西）（北から）



7. 33 号遺構石積前面（Ⅱ区東）（北から）



8. 33 号遺構石積前面（Ⅱ区西）（北から）

図版 27



1. 33 号遺構石積前面近影（Ⅰ区西から）（北から）



2. 33 号遺構アンカー状木製品あ出土状況（北東から）



3. 33 号遺構アンカー状木製品い出土状況（西から）



4. 33 号遺構アンカー状木製品う出土状況（南西から）



5. 33 号遺構アンカー状木製品え出土状況（北東から）



6. 33 号遺構アンカー状木製品お出土状況（西から）

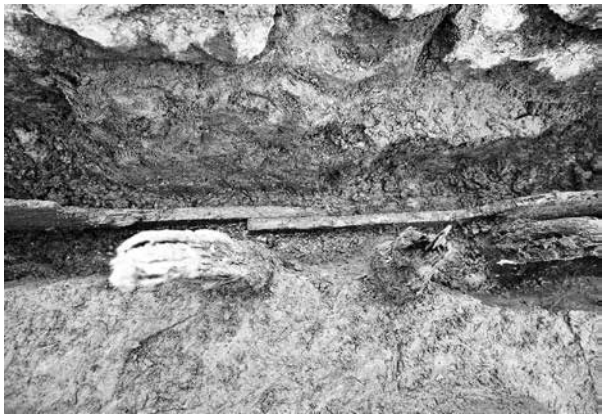


7. 33 号遺構アンカー状木製品か出土状況（北西から）



8. 33 号遺構アンカー状木製品き出土状況（北から）

図版 28



1. 33 号遺構土留板検出状況（北から）



2. 33 号遺構胴木検出状況（胴木①～④）（北から）



3. 33 号遺構胴木検出状況（胴木⑤～⑧）（北から）



4. 33 号遺構胴木検出状況（胴木⑦～⑩）（北から）



5. 33 号遺構胴木検出状況（胴木⑪・⑫）（北から）



6. 33 号遺構胴木撤去後（胴木支え②～⑤）（北から）



7. 33 号遺構胴木撤去後近影（胴木支え④・⑤）（北から）



8. 33 号遺構胴木撤去後近影（胴木支え②・③）（北から）

図版 29



1. 33 号遺構完掘（Ⅰ区東）（北から）



2. 33 号遺構完掘（Ⅰ区西～Ⅱ区東）（北から）



3. 33 号遺構完掘（Ⅱ区西）（北から）



4. 33 号遺構裏込め土層堆積状況（Ⅰ区東）（西から）



5. 33 号遺構土層堆積状況（Ⅰ区東）（西から）



6. 33 号遺構石積前面（Ⅲ区）（北から）



7. 33 号遺構胴木検出状況（胴木⑬～⑯）（北から）



8. 33 号遺構胴木撤去後（Ⅲ区）（北から）

図版 30



1. 33 号遺構土層堆積状況（Ⅲ区）（東から）



2. 99 号遺構検出状況（南から）



3. 2 号遺構検出状況（東から）



4. 24 号遺構西辺瓦面検出状況（南から）



5. 12 号遺構検出状況（南から）



6. 12 号遺構土層堆積状況（南から）



7. 12 号遺構井戸下段検出状況（南から）

図版 31



1. 26 号遺構土層堆積状況（西から）



2. 95・96・97 号遺構検出状況（西から）



3. 95 号遺構内部完掘（北から）



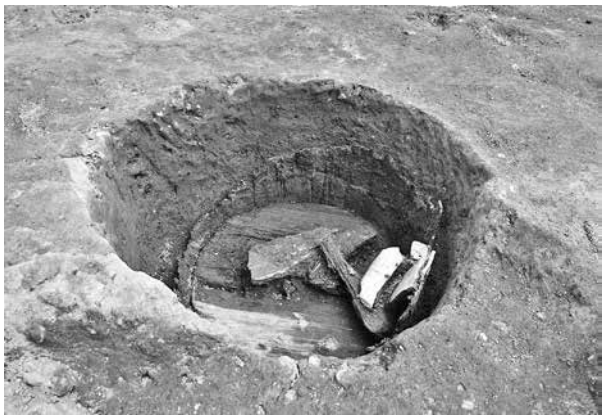
4. 95 号遺構木樋接続部分近影（東から）



5. 96・97・98 号遺構断割状況（北から）



6. 1 号遺構底面検出状況（北東から）

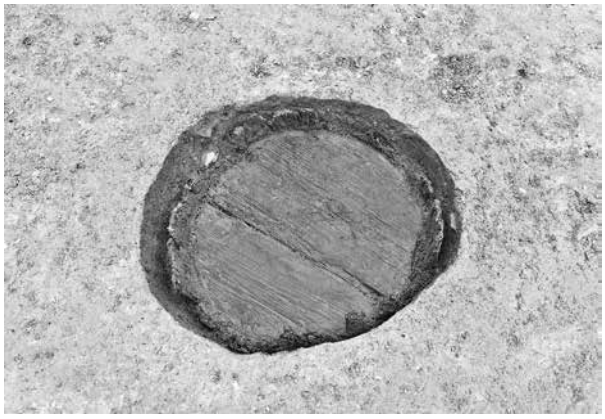


7. 3 号遺構遺物出土状況（西から）

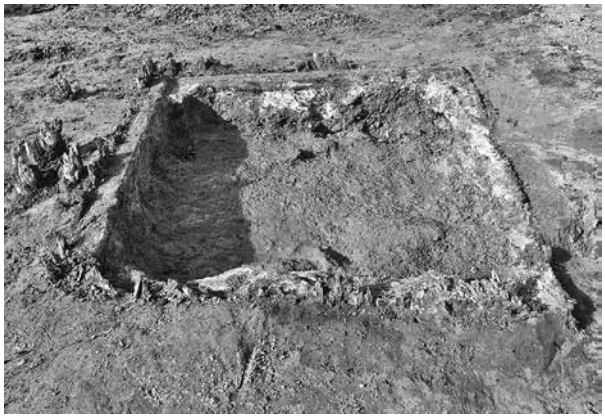


8. 4 号遺構遺物出土状況（西から）

図版 32



1. 22 号遺構底面検出状況（西から）



2. 21 号遺構底面検出状況（南から）



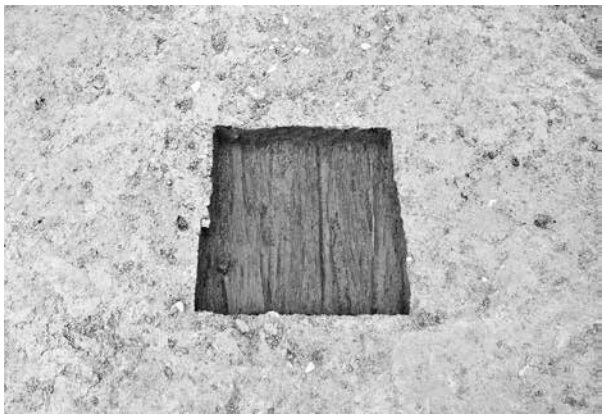
3. 9 号遺構側板・底面検出状況（南から）



4. 23 号遺構側板・底面検出状況（南から）



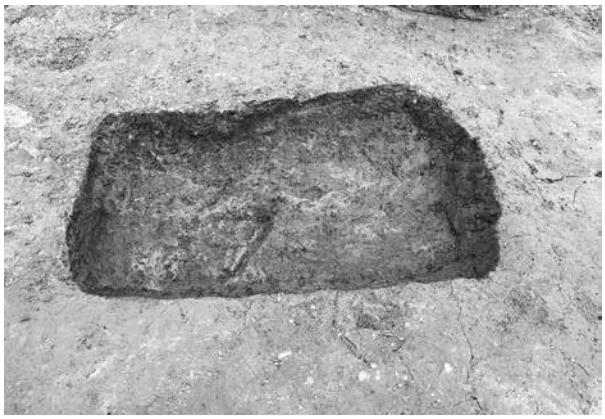
5. 25 号遺構側板・底面検出状況（南から）



6. 29 号遺構底面検出状況（南から）



7. 85 号遺構完掘（東から）

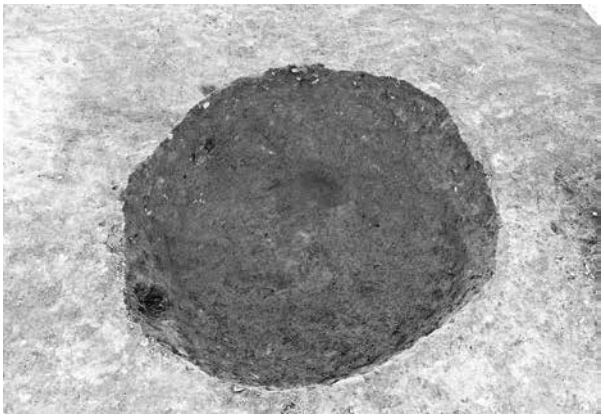


8. 89 号遺構完掘（南から）

図版 33



1．27 号遺構礫面検出状況（南から）



2．31 号遺構完掘（南から）



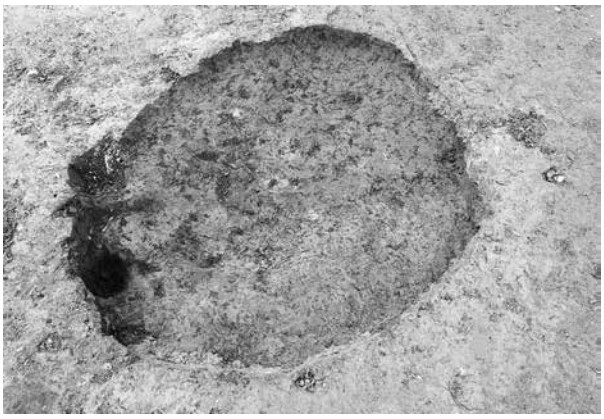
3．68 号遺構木材出土状況（南から）



4．68 号遺構完掘（南から）



5．69・74 号遺構完掘（西から）



6．71 号遺構完掘（北から）



7．72 号遺構遺物出土状況（北から）



8．72 号遺構完掘（北から）

図版 34



1．6 号遺構完掘（東から）



2．遺跡説明会（学校向け）（1）



3．遺跡説明会（学校向け）（2）



4．33 号遺構土留板取上げ作業



5．33 号遺構胴木取上げ作業



6．61 号遺構調査作業

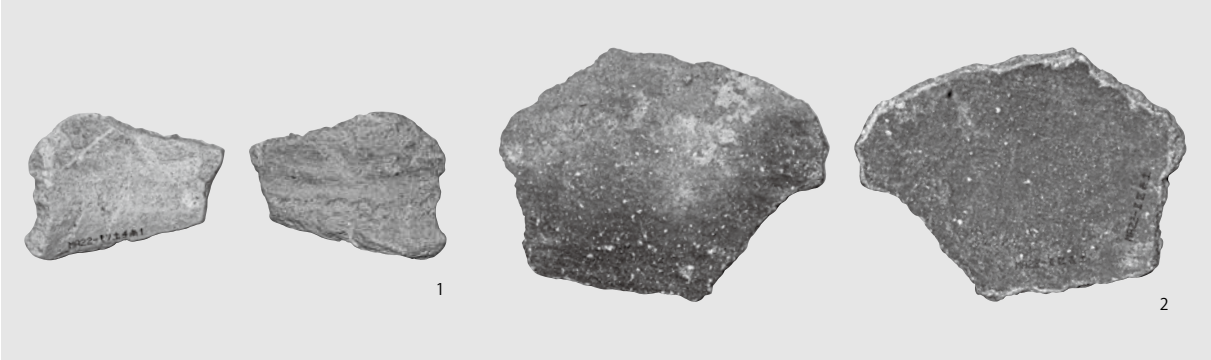


7．61 号遺構調査作業



8．Ⅰ・Ⅱ区雨天後水抜き作業

図版 35



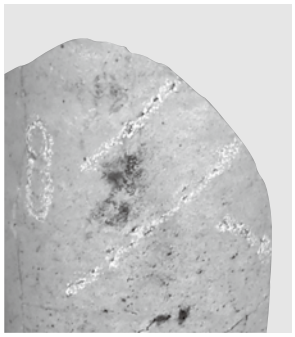




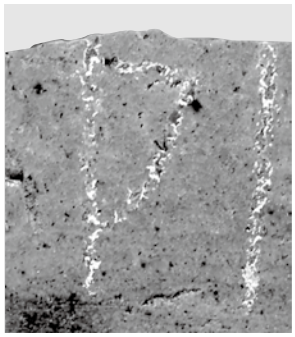
中世以前の遺物

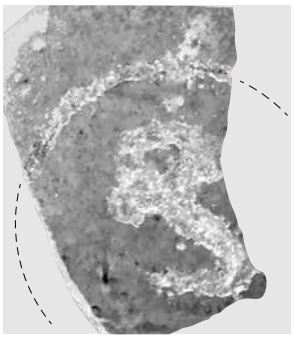
図版 36

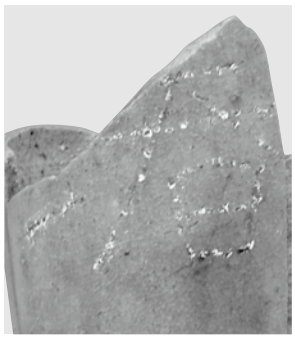

Kg13

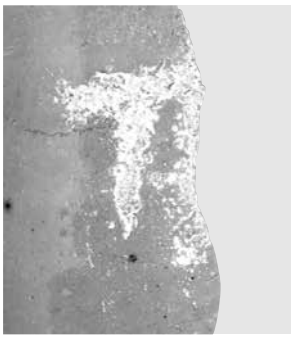

Kg14


Kg17


Kg18

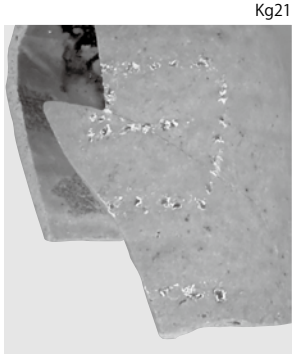

Kg19


Kg21

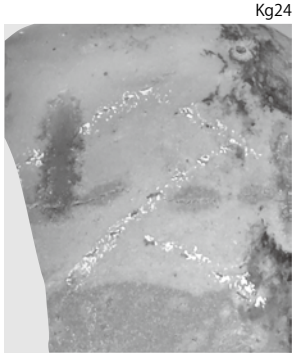

Kg23


Kg24

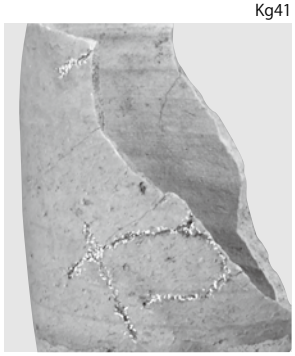

Kg40


Kg41


Kg49


Kg53


Kg66


Kg75


Kg78


Kg79


Kg81

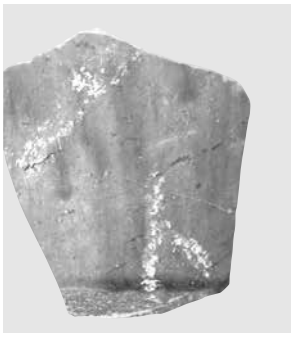

Kg83

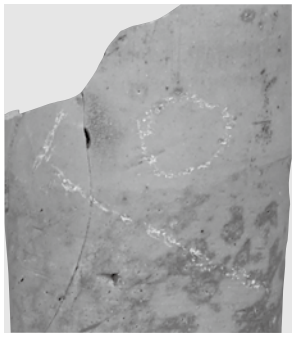

Kg88


Kg90

文字や記号が記された陶磁器・土器（1）

図版 37

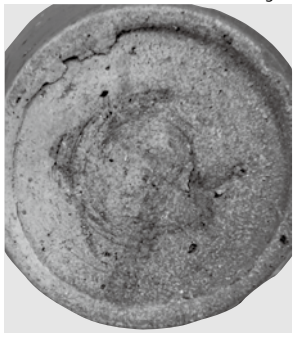

Kg94


Kg97


Kg98


B1


B3

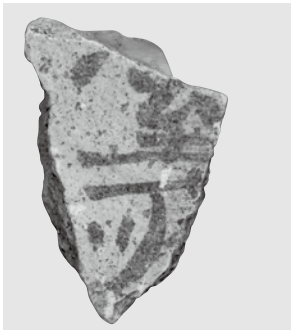

B7

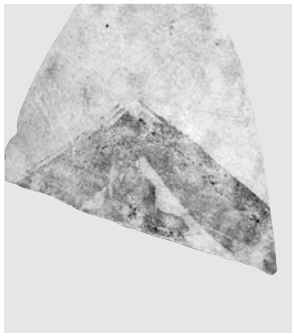

B13


B15


B28

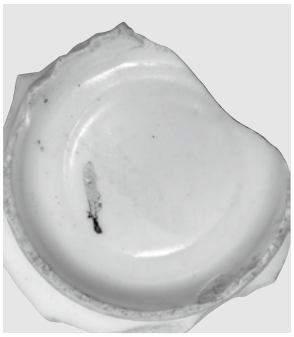

B29


B30

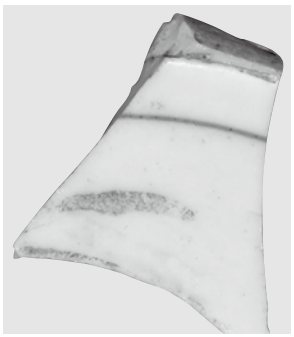

B32

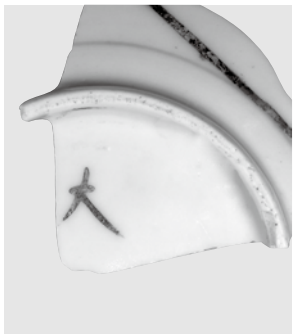

B34


Y3


Y4


Y6

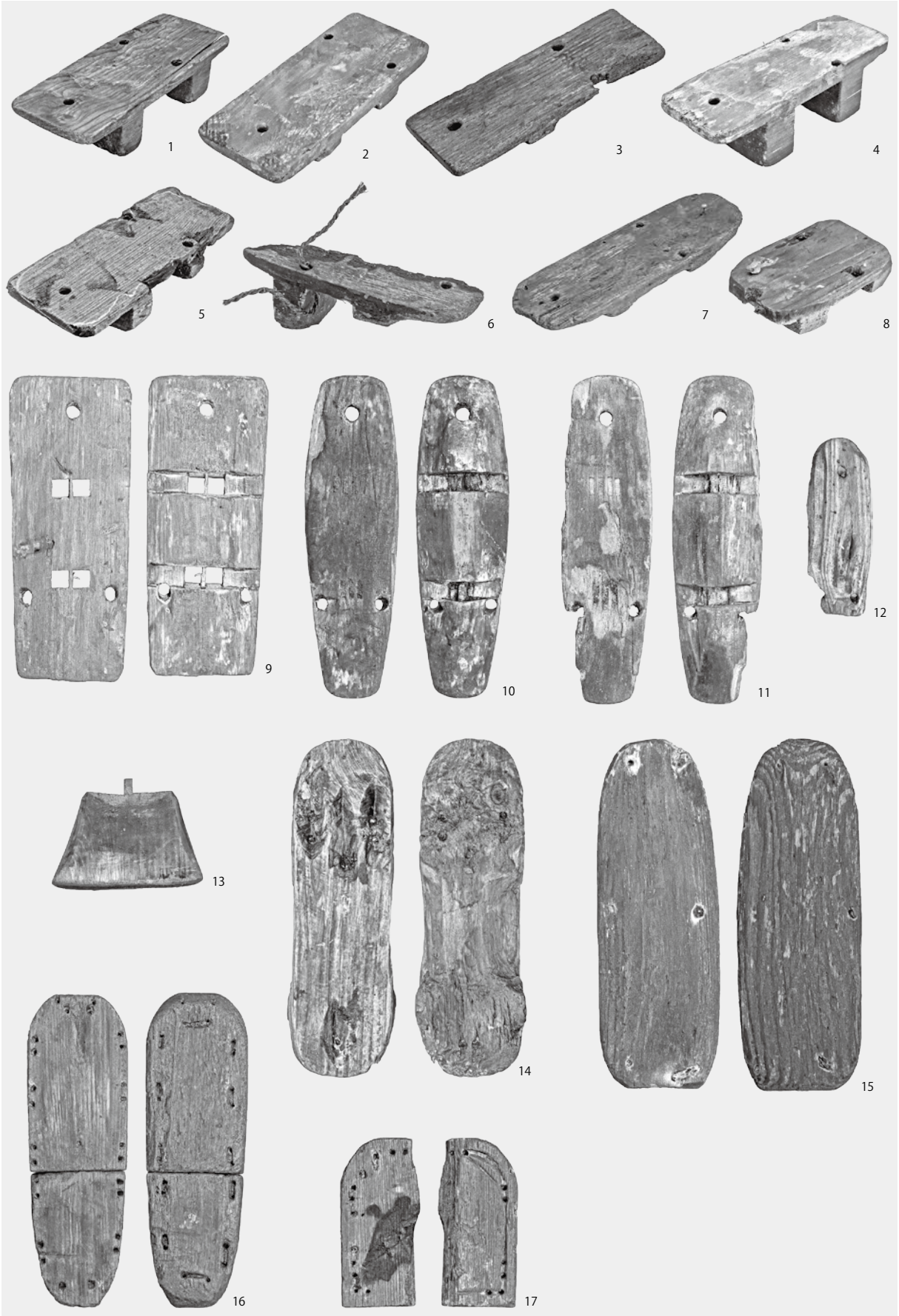

Y10


Y11


Y12

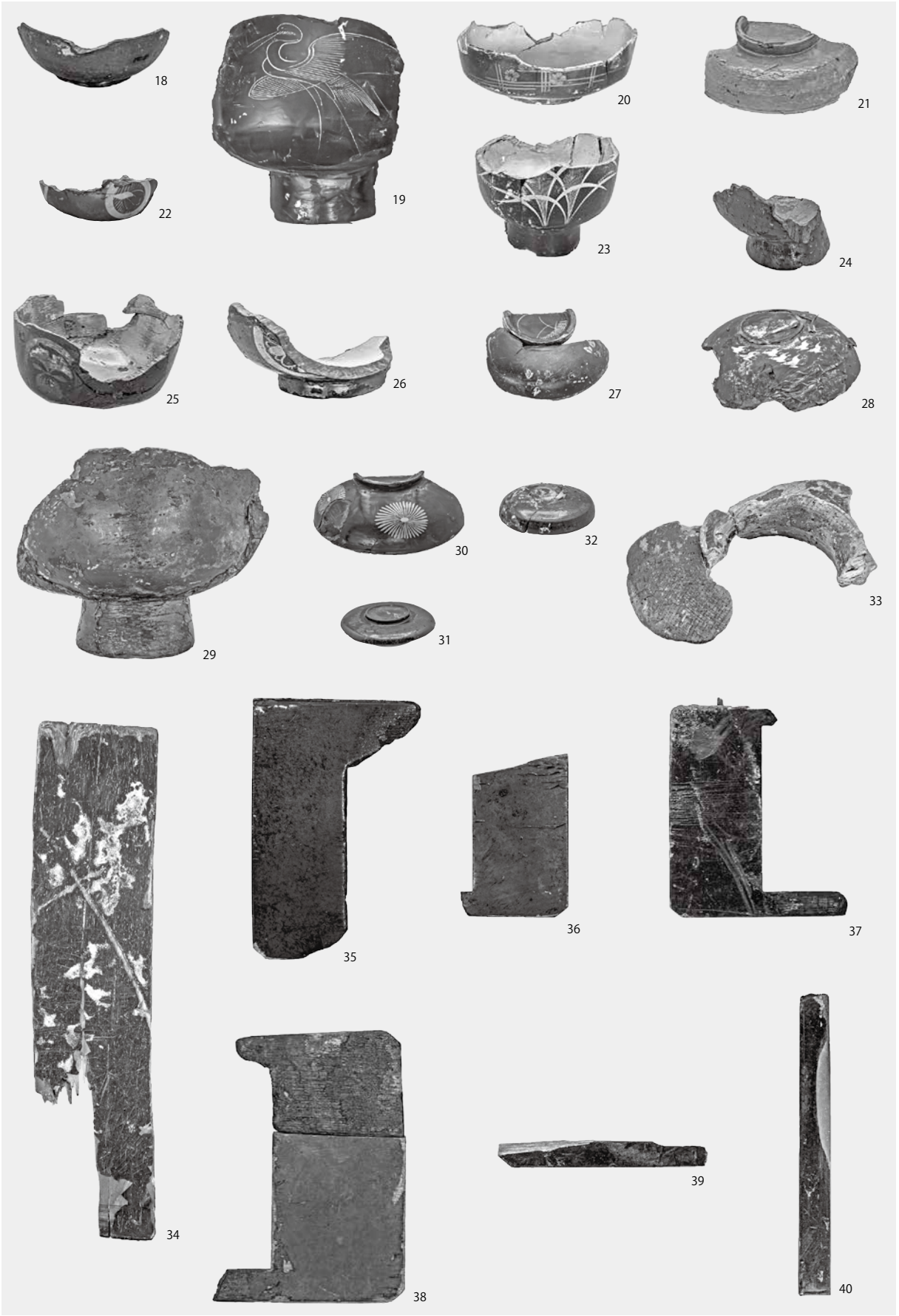
文字や記号が記された陶磁器・土器（2）

図版 38



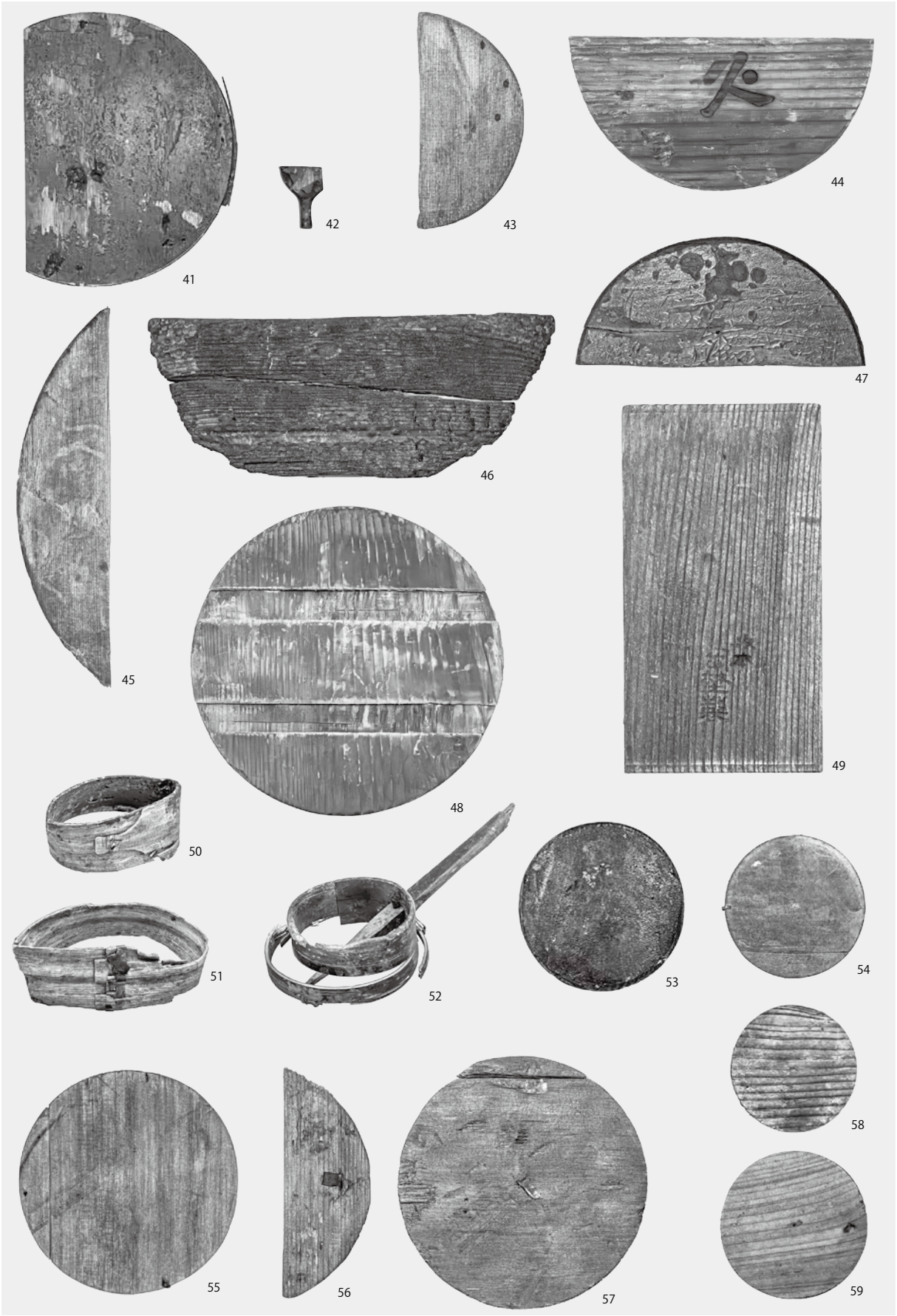
木製品（1）

図版 39



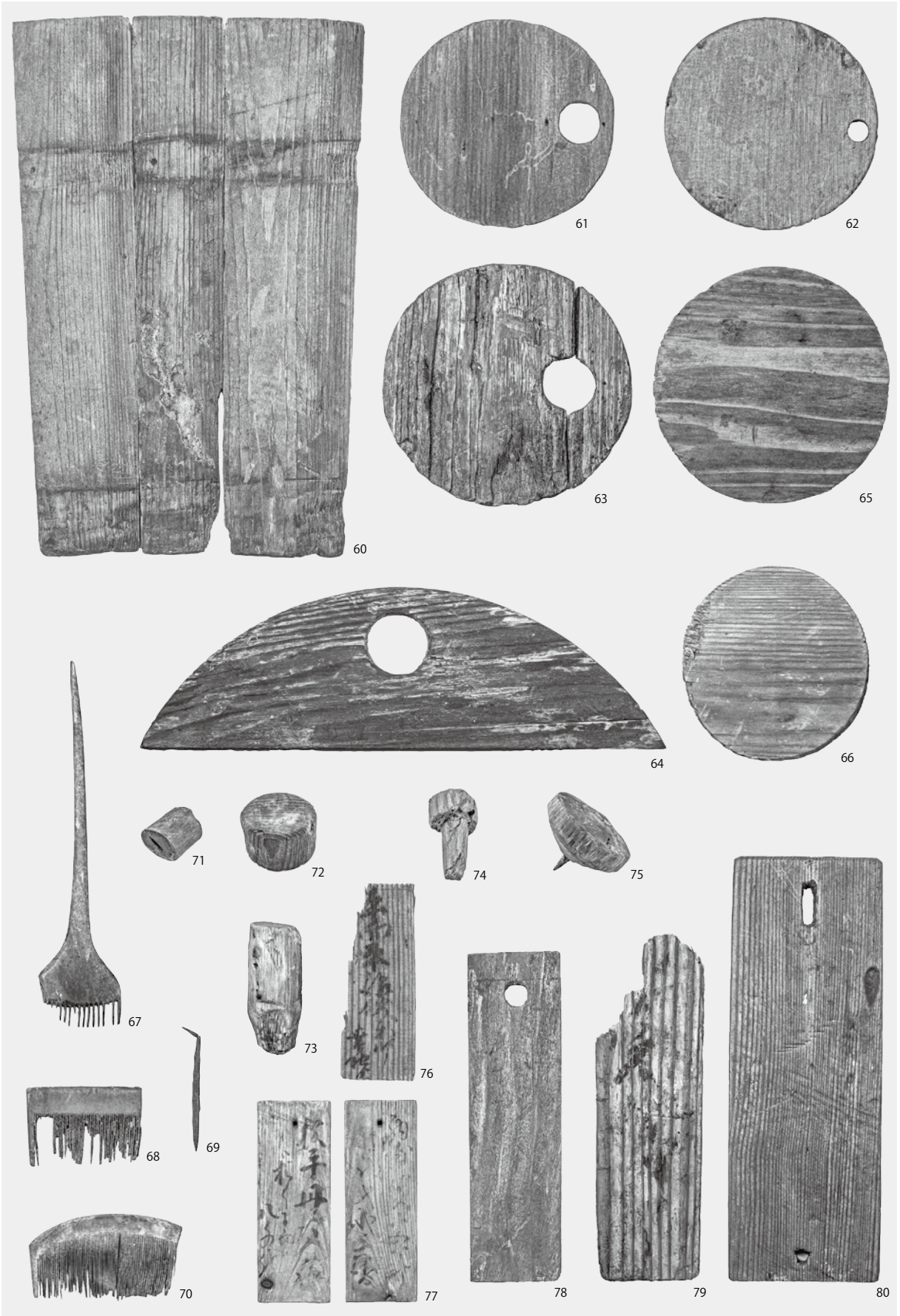
木製品（2）

図版 40



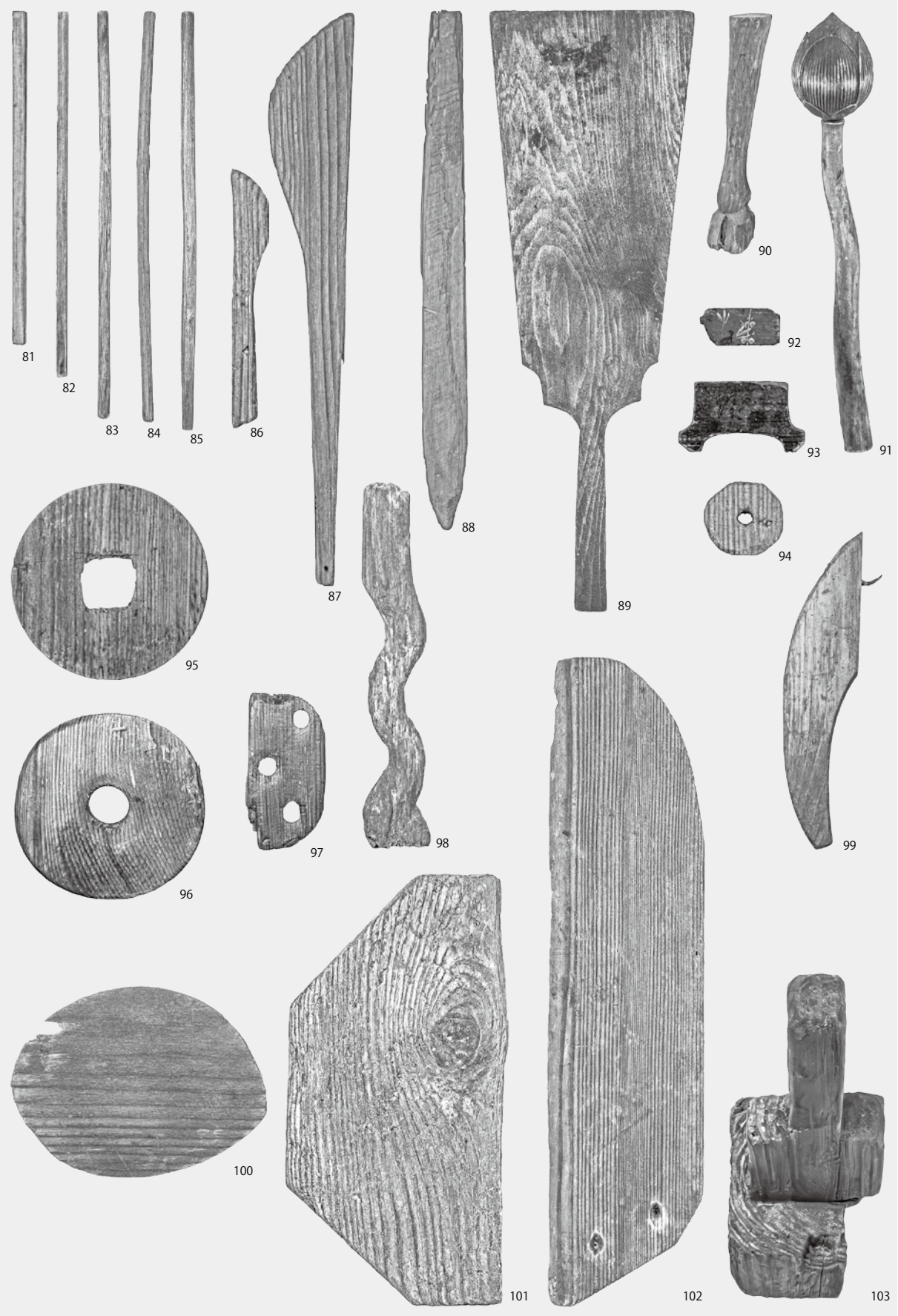
木製品（3）

図版 41



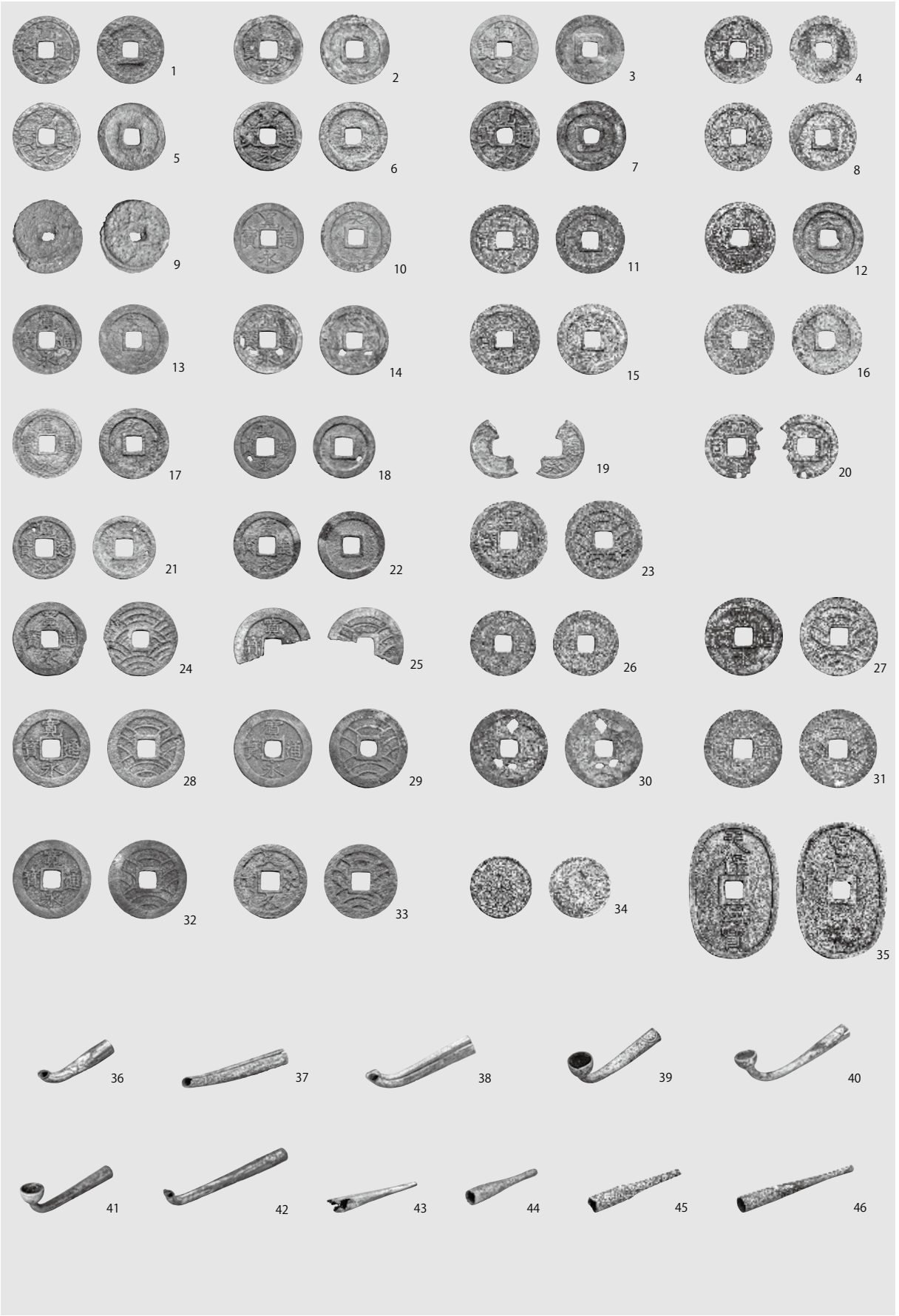
木製品（4）

図版 42


81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103

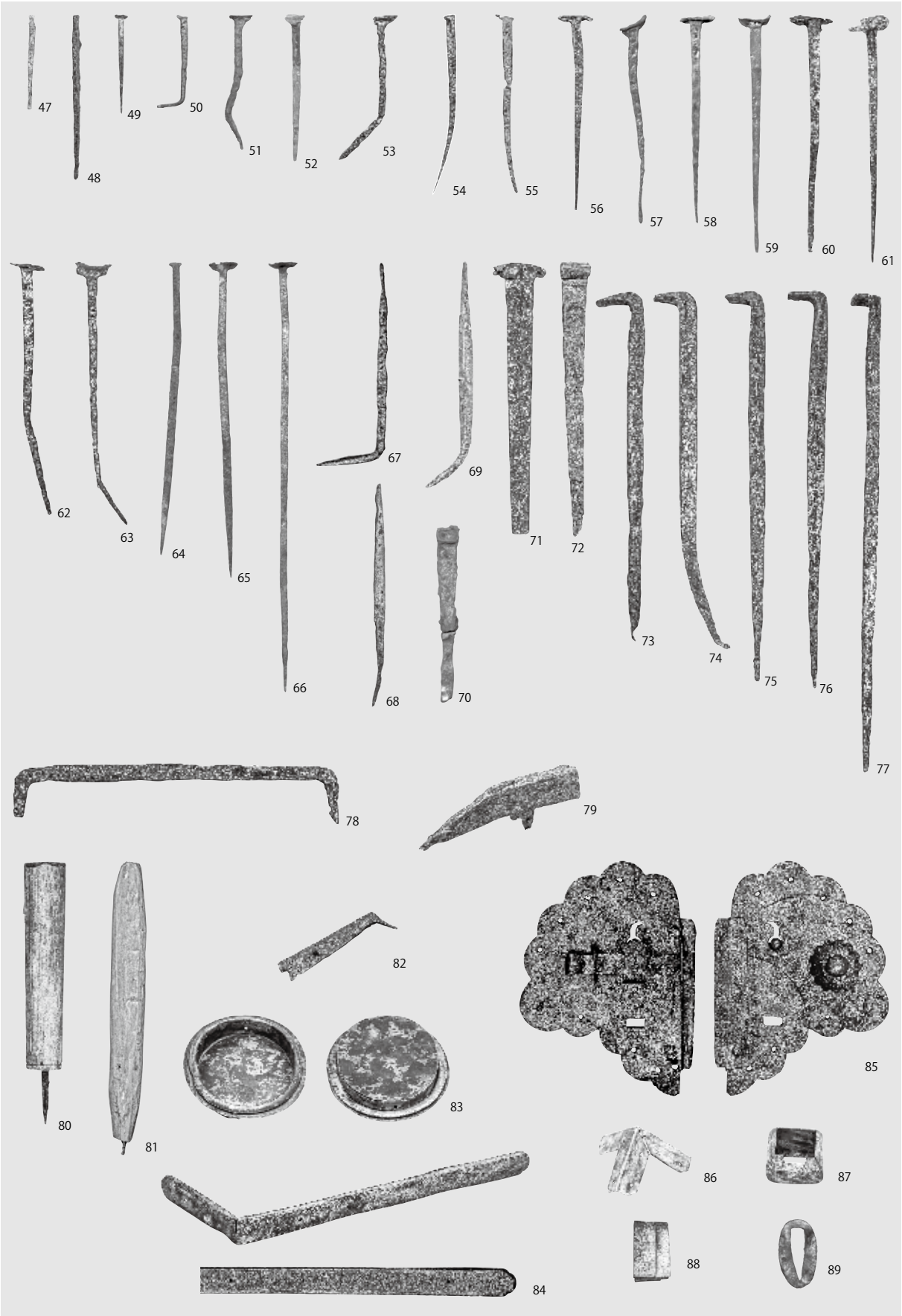
木製品（5）

図版 43



金属製品（1）

図版 44


47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
85
86
87
88
89
84

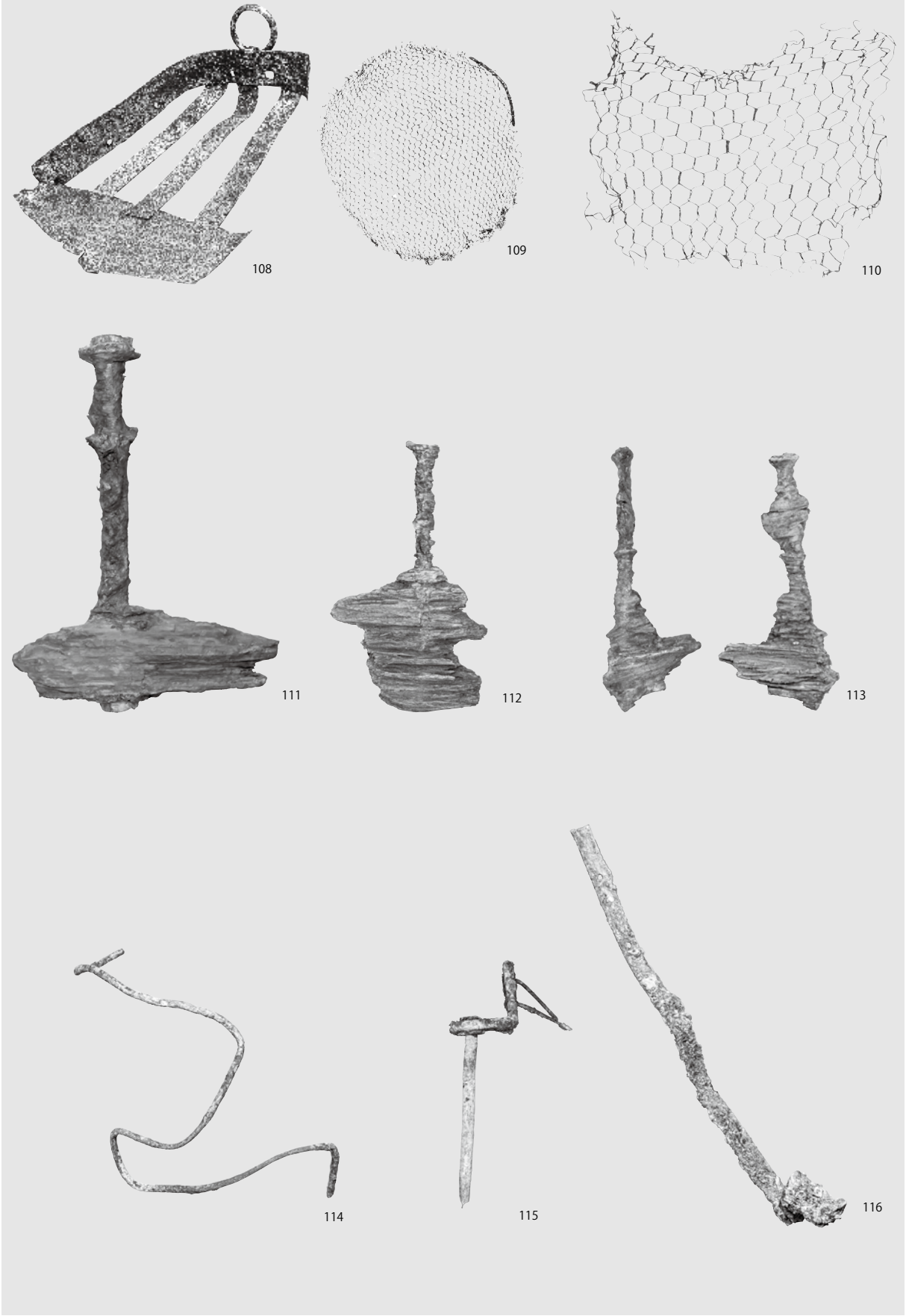
金属製品（2）

図版 45



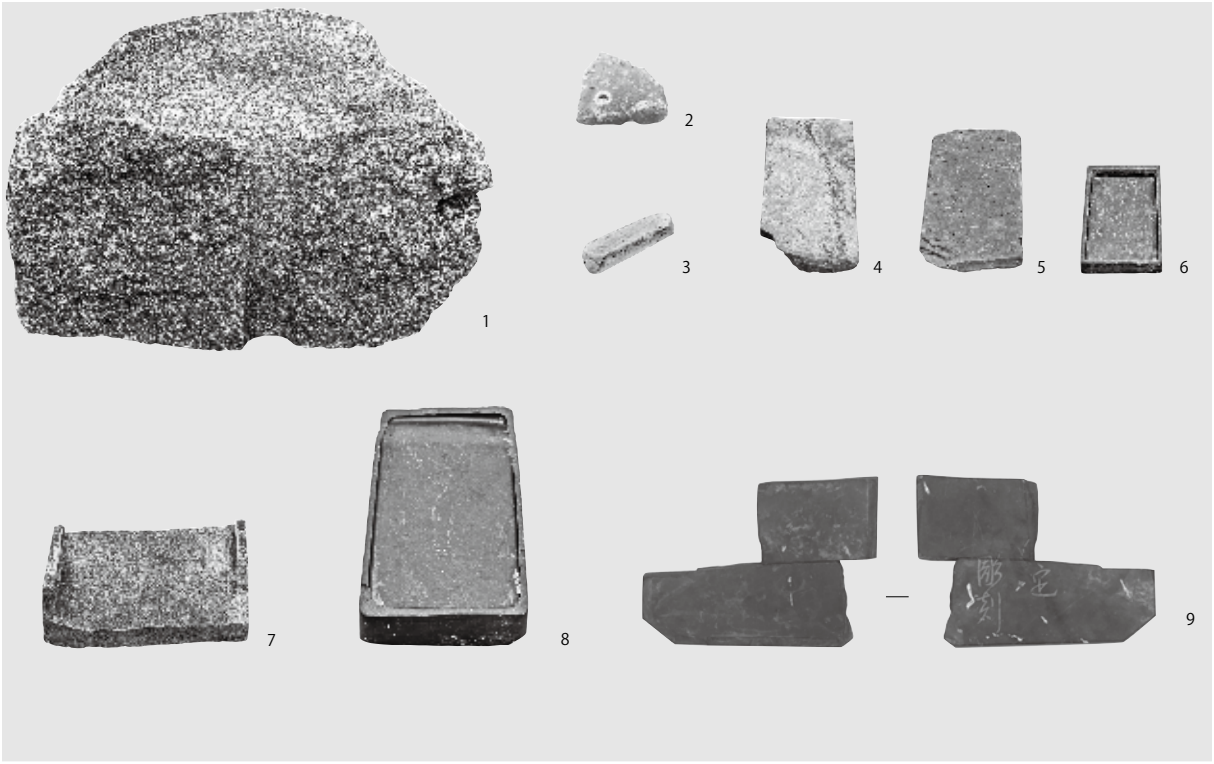
金属製品（3）

図版 46



金属製品（4）

図版 47

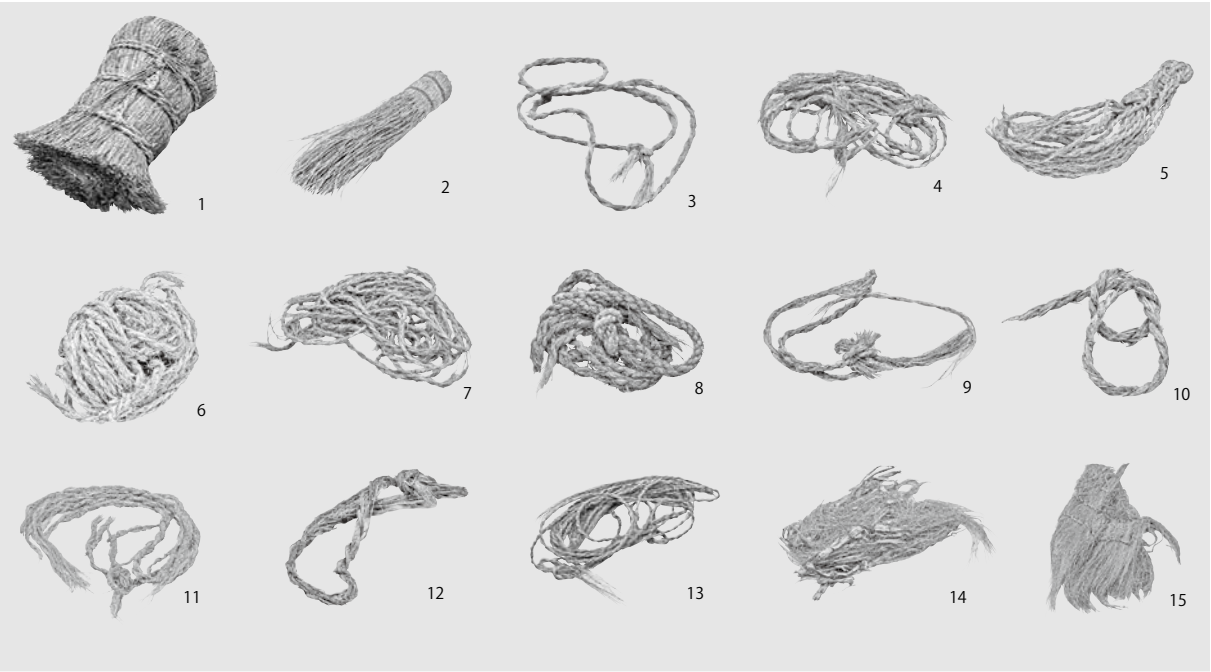


石製品

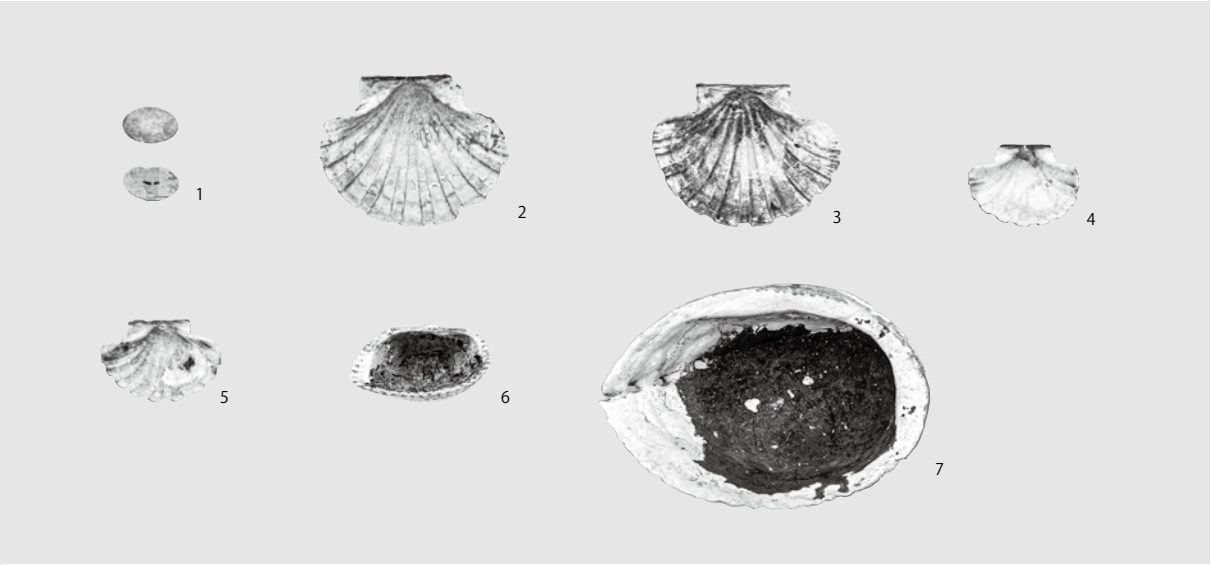


ガラス製品

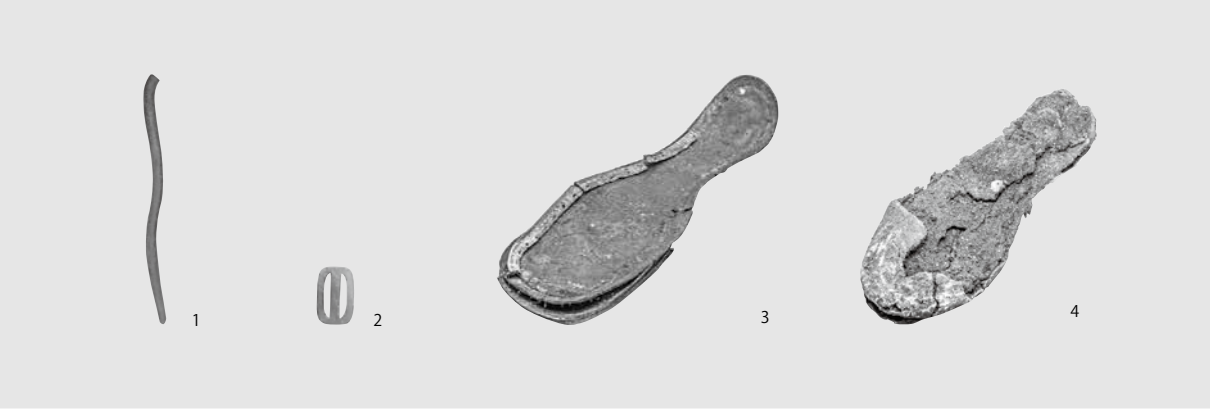
図版 48



植物質製品

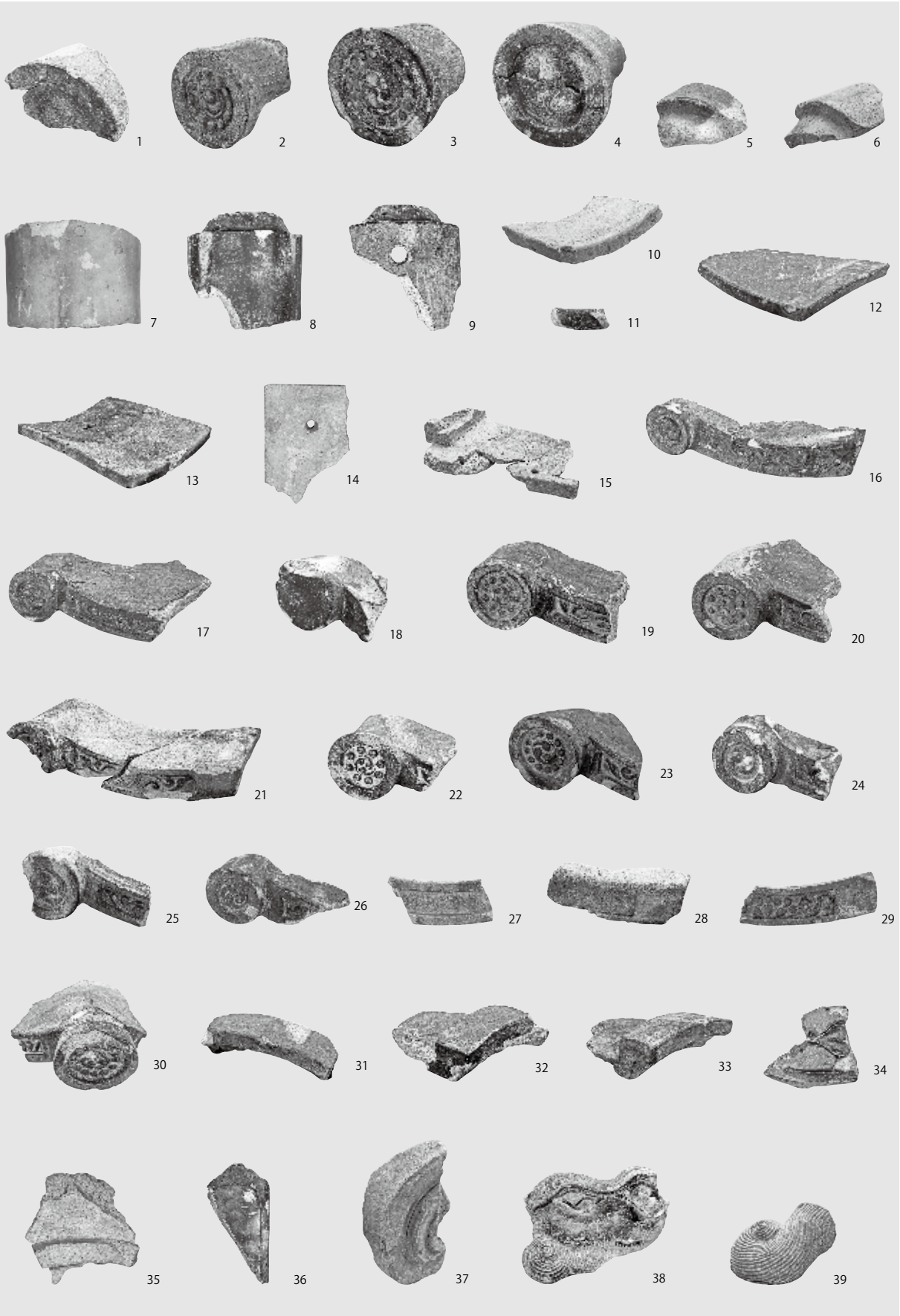


骨角貝製品



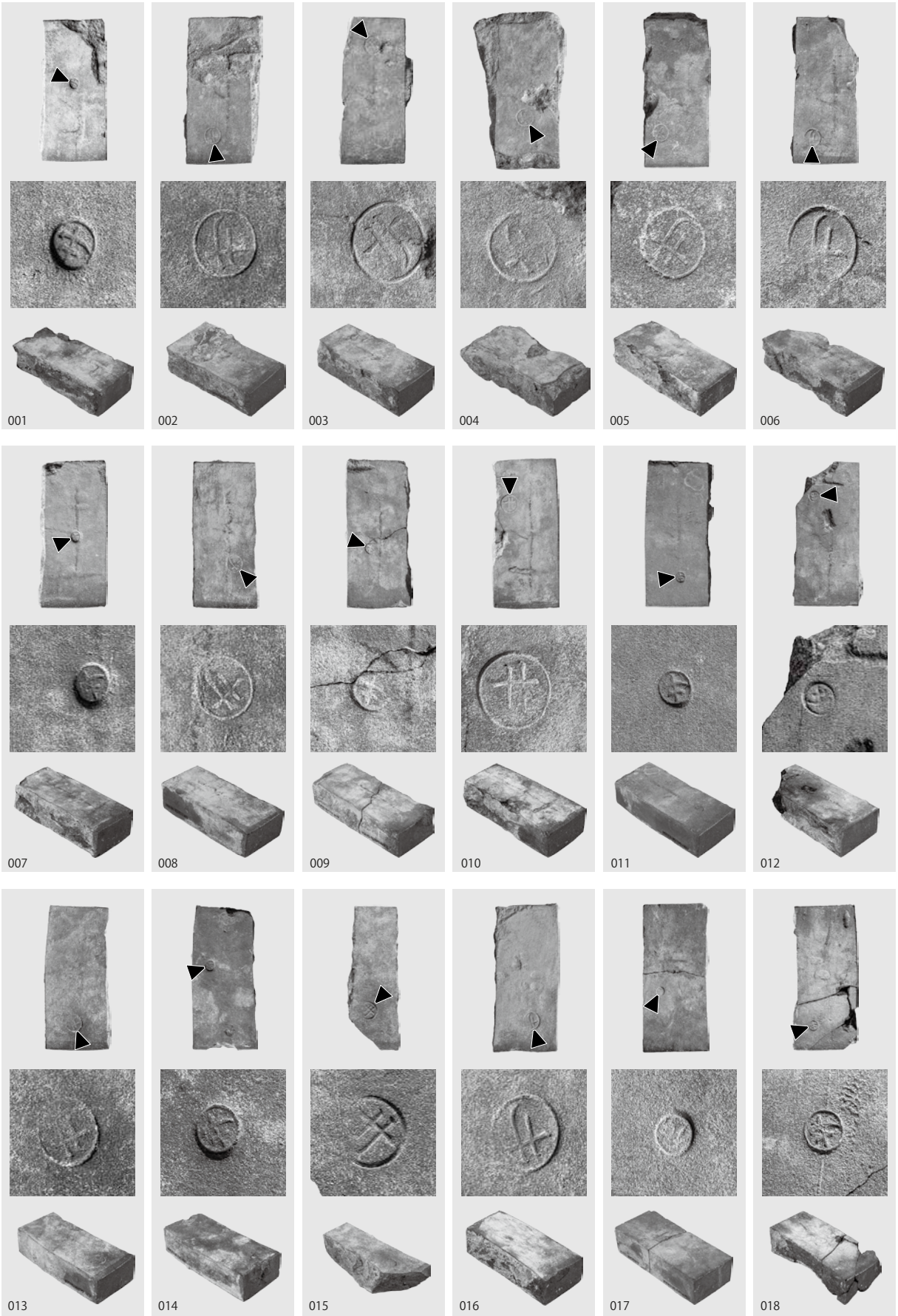
その他の素材の製品

図版 49


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39

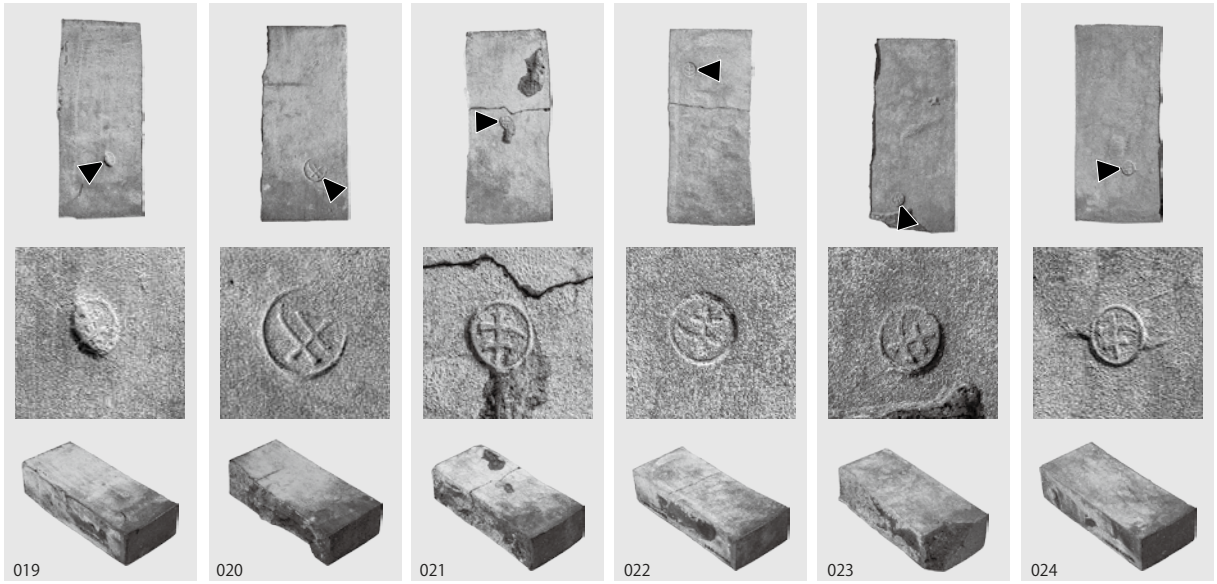
瓦

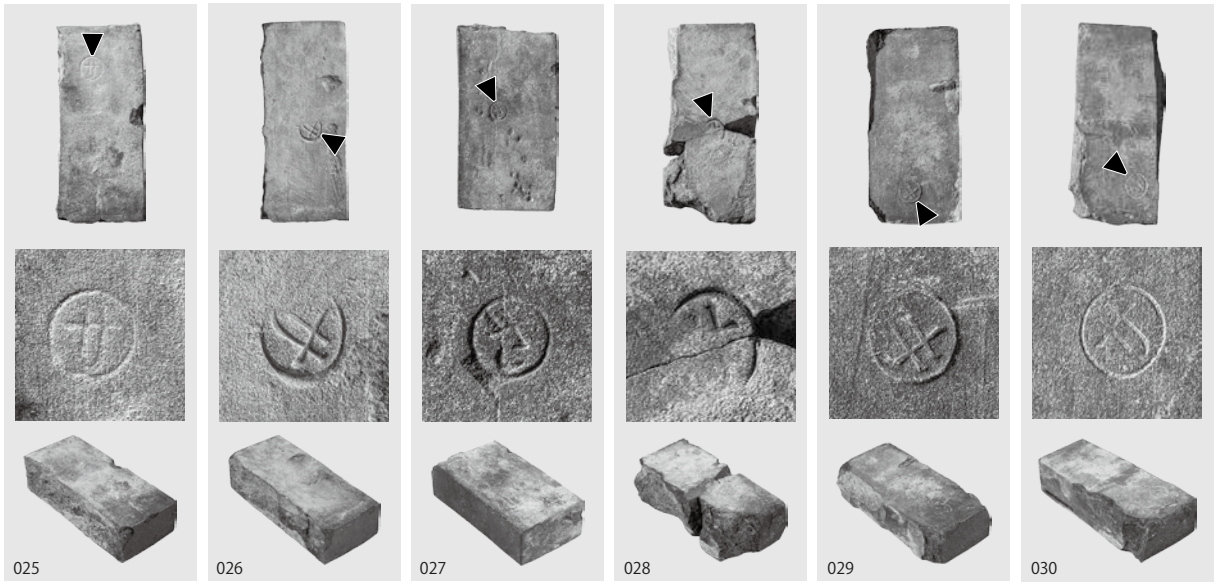
図版 50

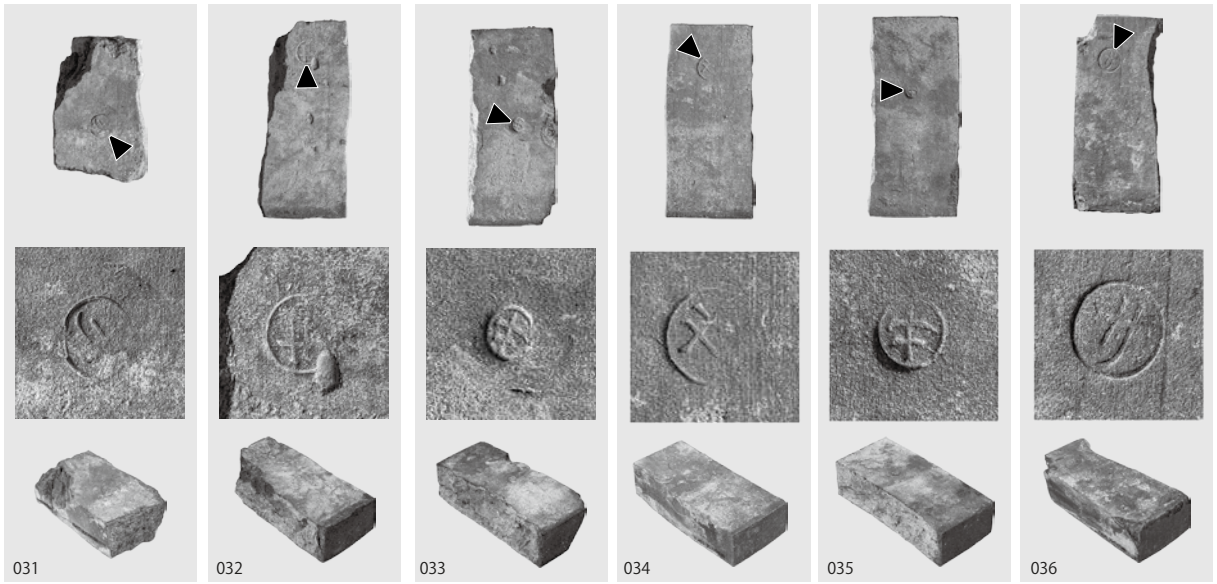

001
002
003
004
005
006
007
008
009
010
011
012
013
014
015
016
017
018

煉瓦（1）

図版 51

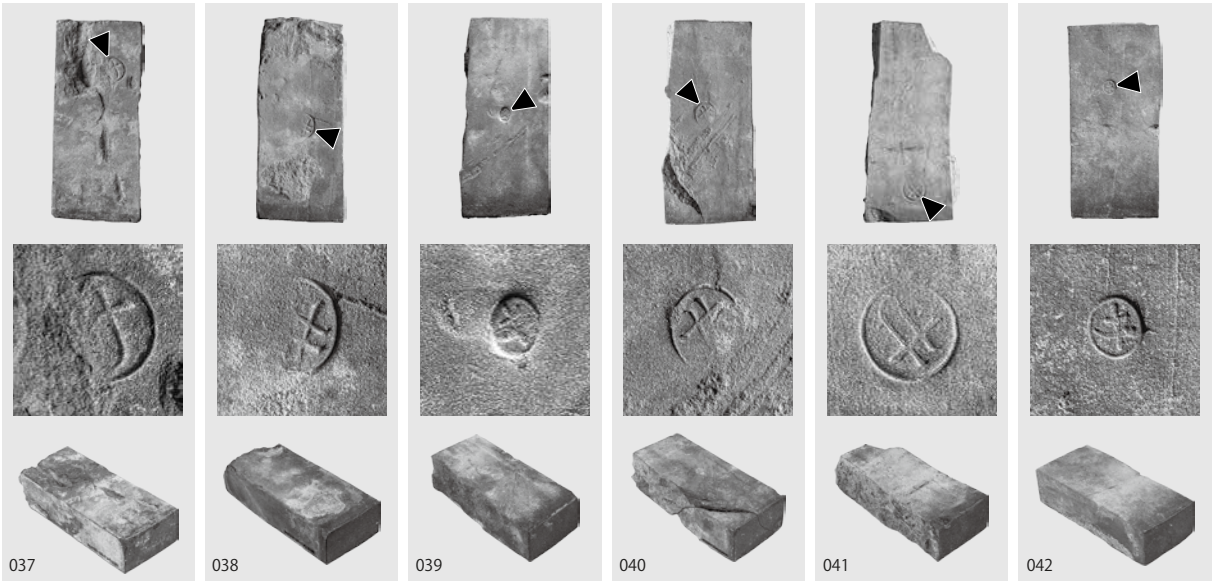

019
020
021
022
023
024

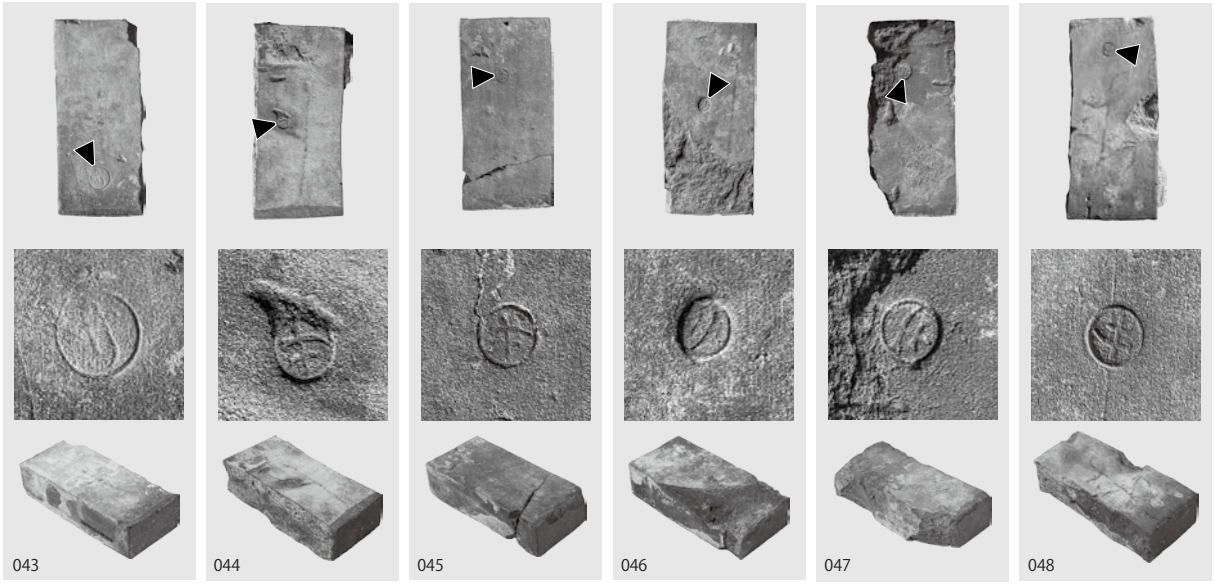

025
026
027
028
029
030

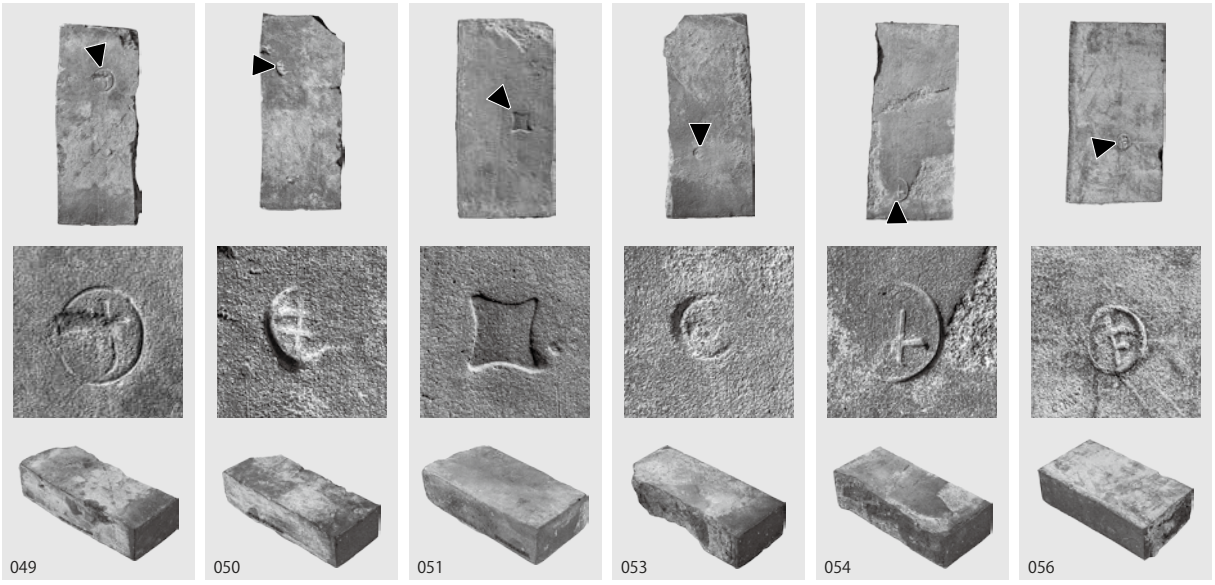

031
032
033
034
035
036

煉瓦（2）

図版 52

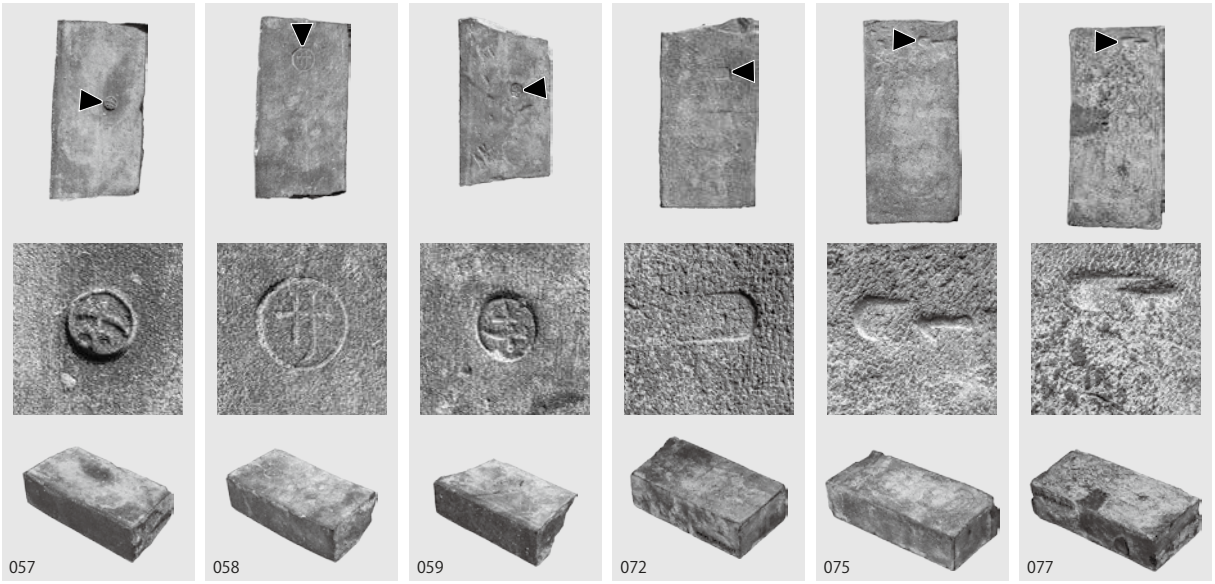

037
038
039
040
041
042

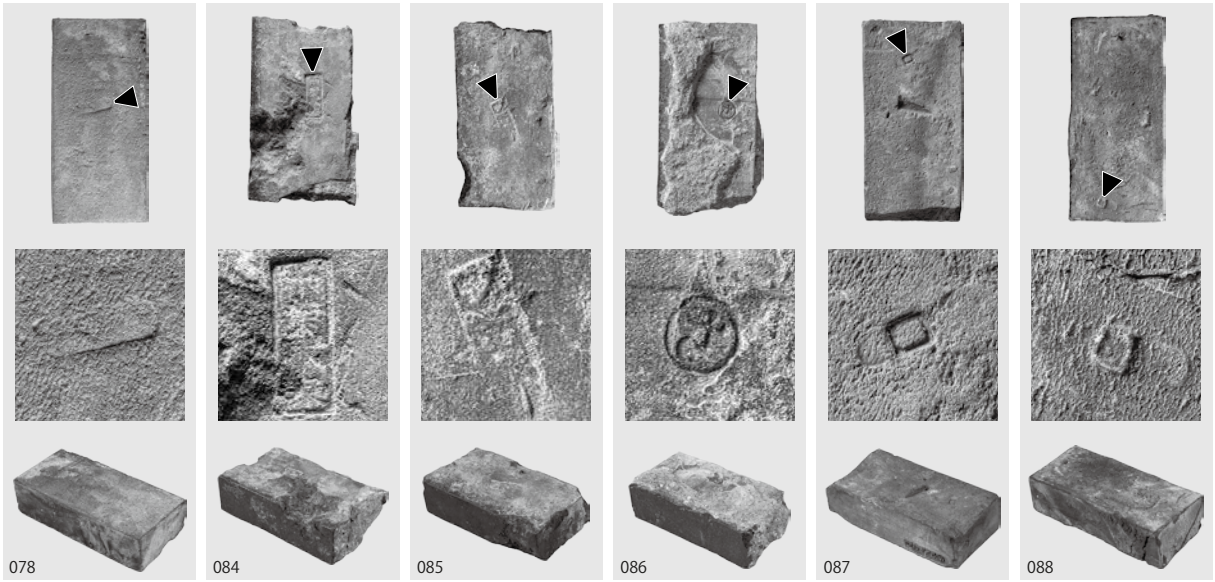

043
044
045
046
047
048

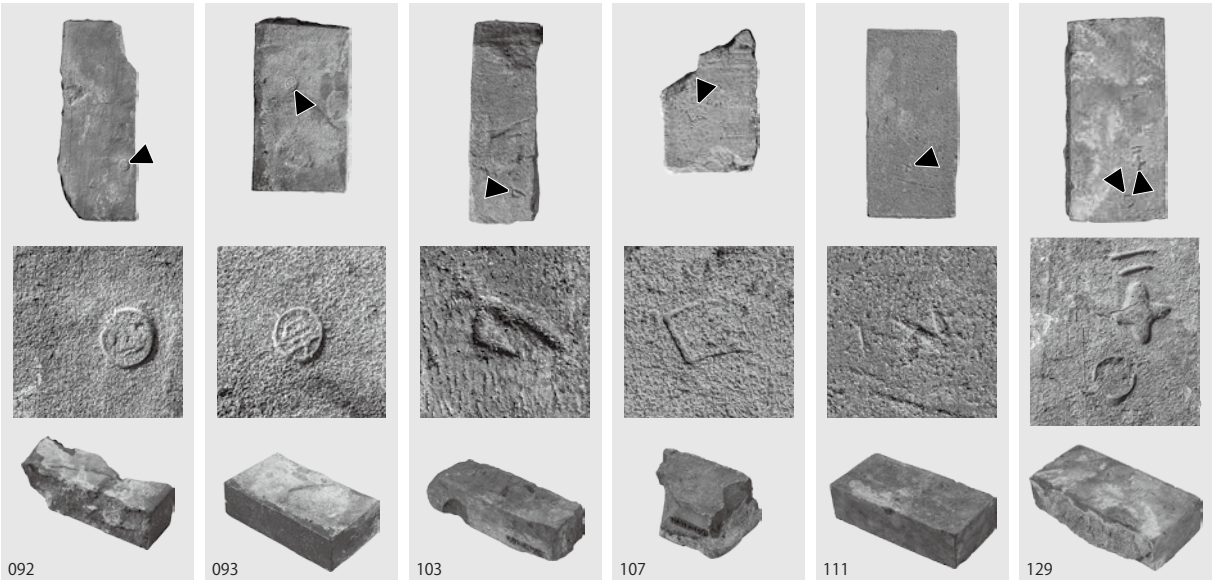

049
050
051
053
054
056

煉瓦（3）

図版 53


057
058
059
072
075
077


078
084
085
086
087
088


092
093
103
107
111
129

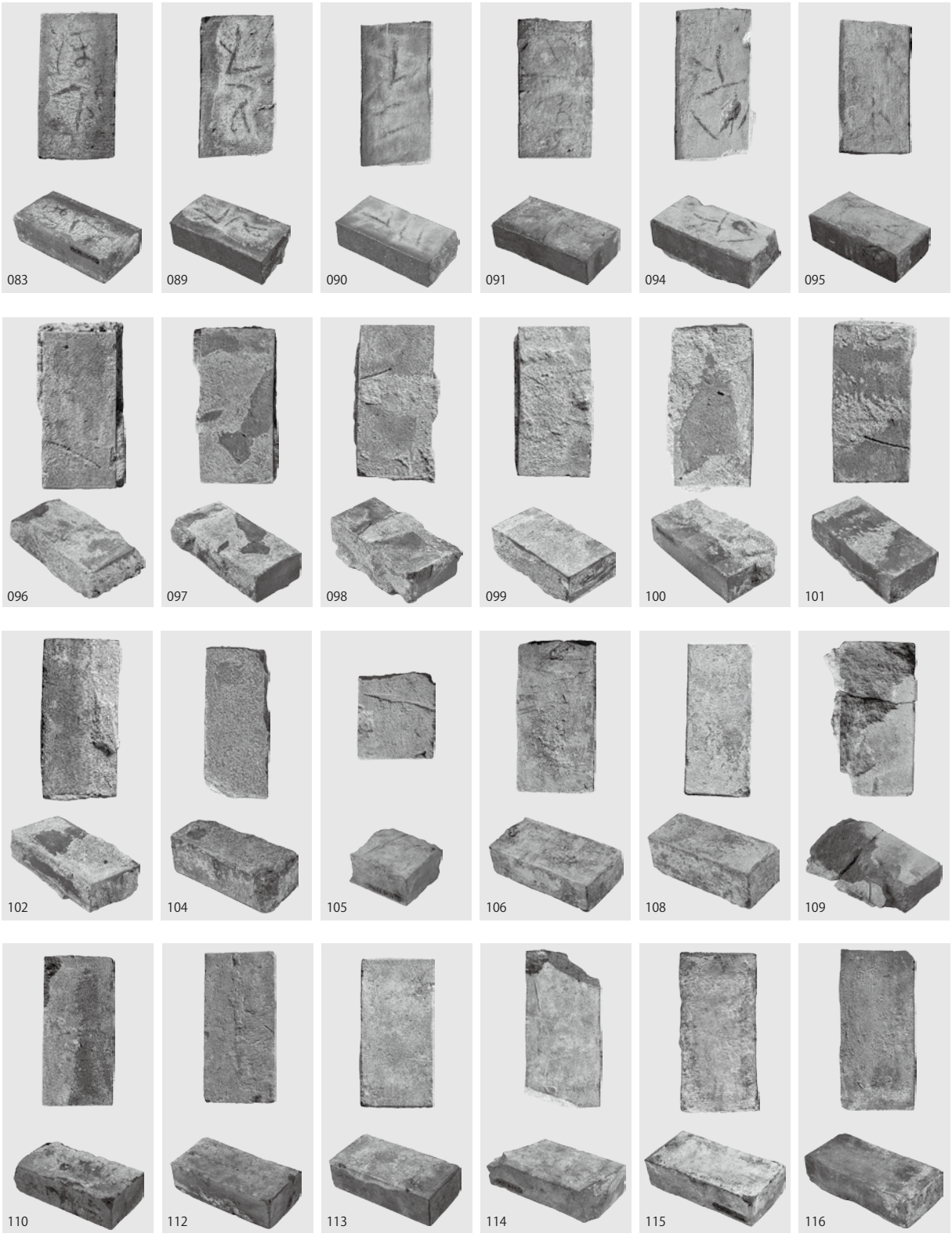
煉瓦（4）

図版 54


131
132
136
138
052
060
061
062
063
064
065
066
067
068
069
070
071
073
074
076
079
080
081
082

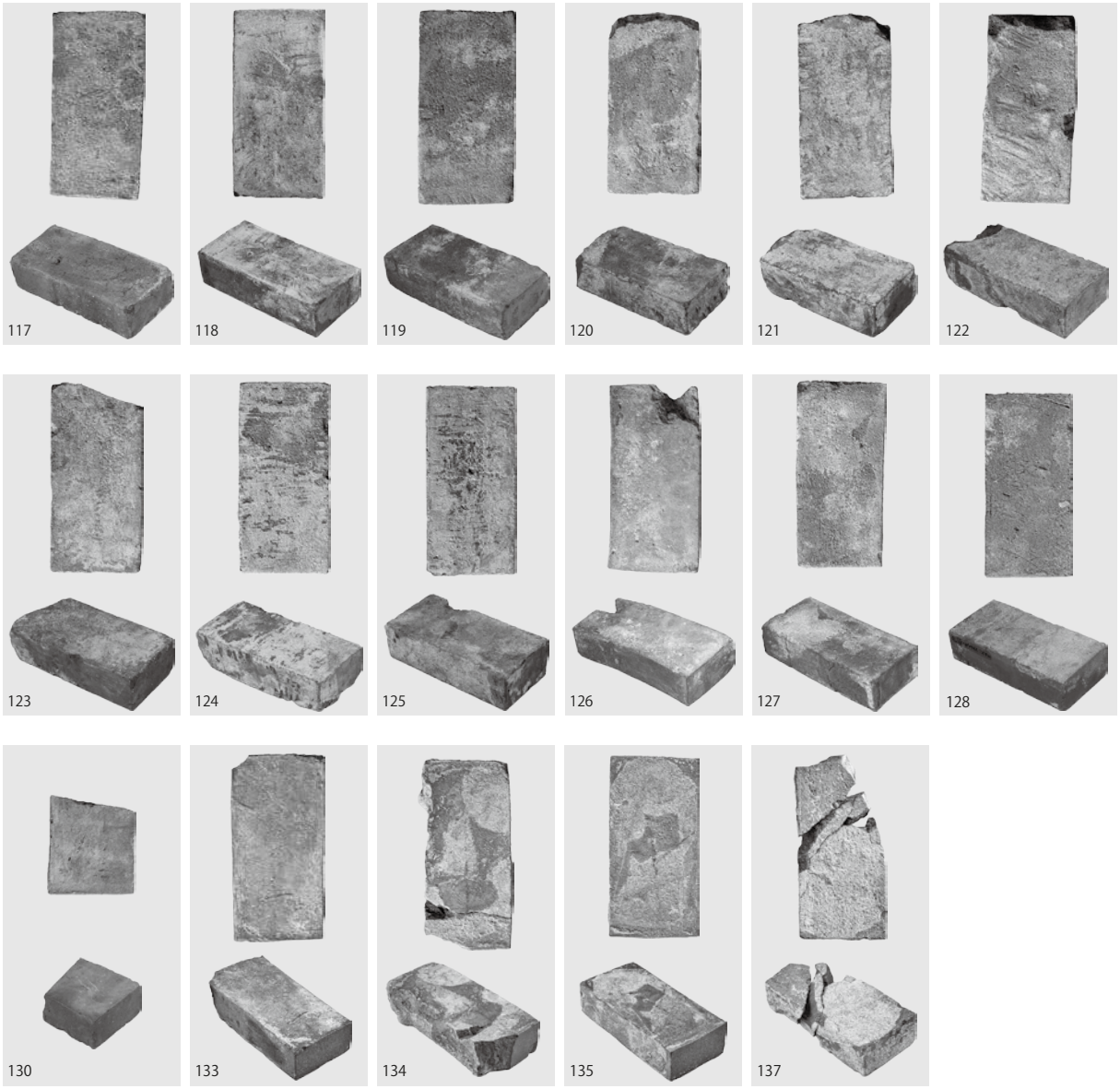
煉瓦（5）

図版 55


083
089
090
091
094
095
096
097
098
099
100
101
102
104
105
106
108
109
110
112
113
114
115
116

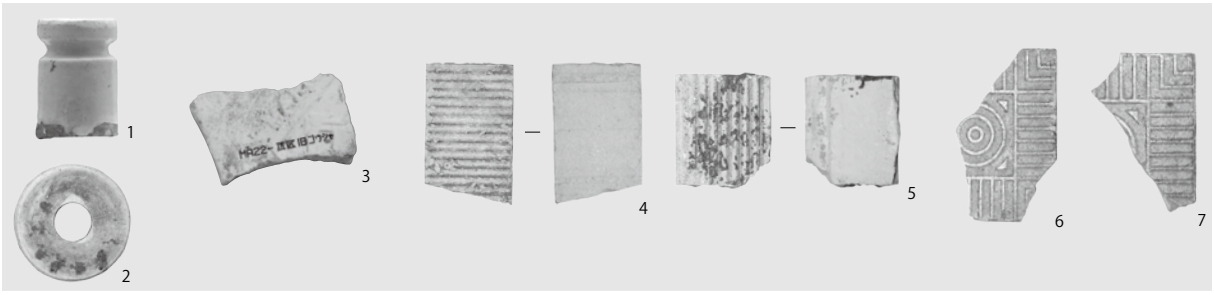
煉瓦（6）

図版 56

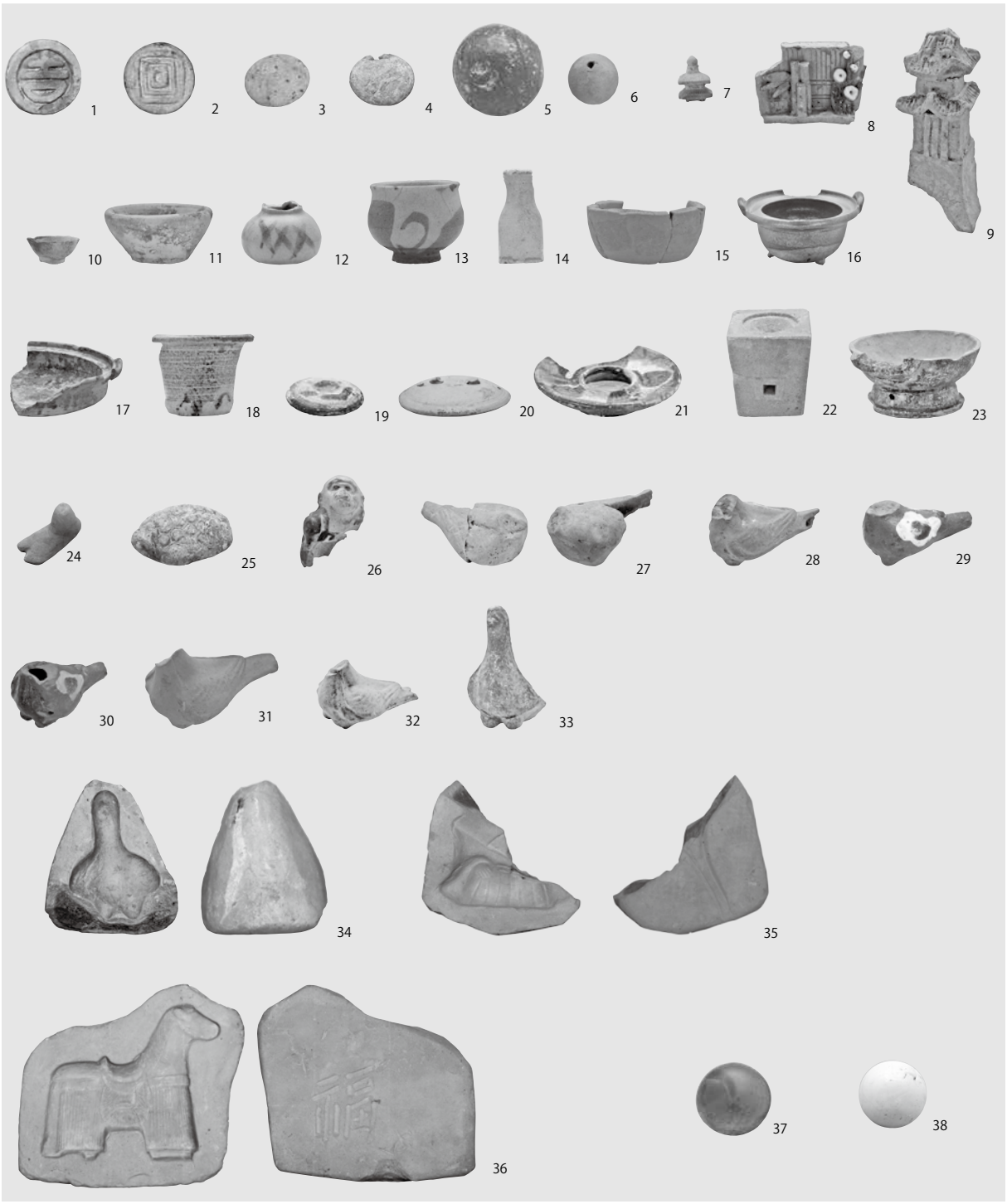

117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
130
133
134
135
137

煉瓦（7）

図版 57

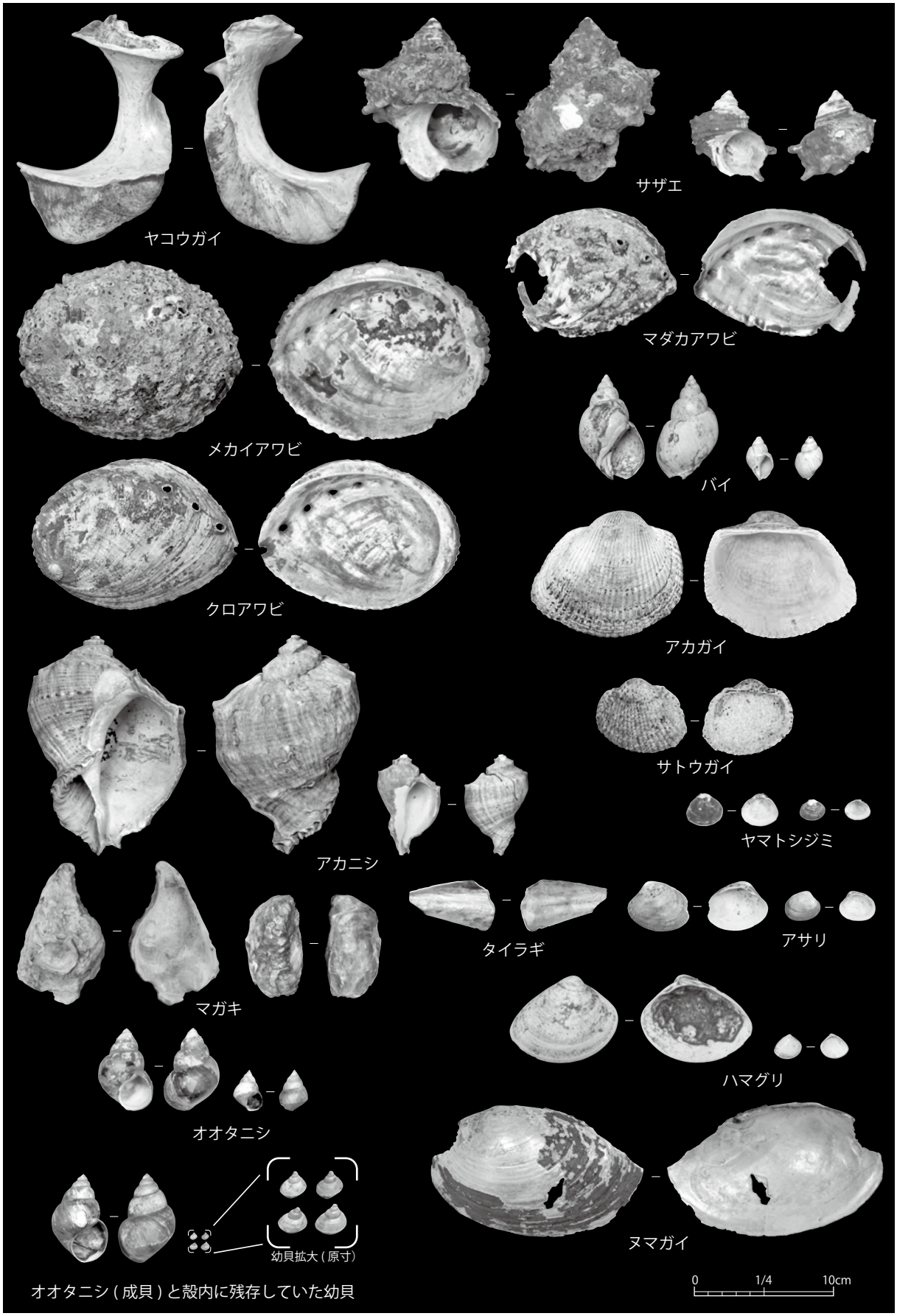


その他の建材など



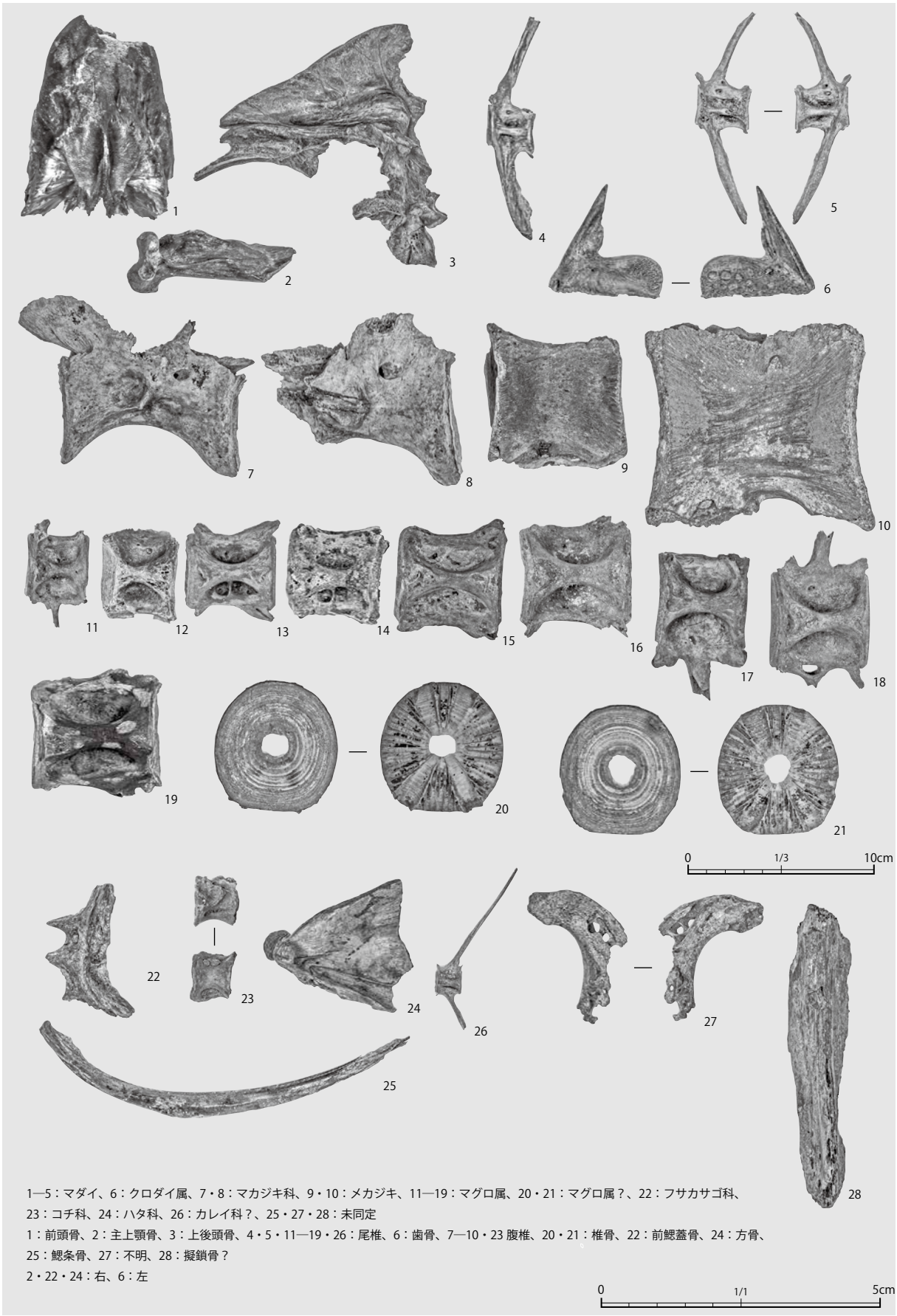
玩具・ミニチュア・人形

図版 58


ヤコウガイ
サザエ
マダカアワビ
メカイアワビ
バイ
クロアワビ
アカガイ
サトウガイ
ヤマトシジミ
アカニシ
タイラギ
アサリ
マガキ
ハマグリ
オオタニシ
ヌマガイ
幼貝拡大 (原寸)
オオタニシ (成貝) と殻内に残存していた幼貝
0
1/4
10cm

動物遺体（貝類）

図版 59



1—5：マダイ、6：クロダイ属、7・8：マカジキ科、9・10：メカジキ、11—19：マグロ属、20・21：マグロ属？、22：フサカサゴ科、
23：コチ科、24：ハタ科、26：カレイ科？、25・27・28：未同定
1：前頭骨、2：主上顎骨、3：上後頭骨、4・5・11—19・26：尾椎、6：歯骨、7—10・23 腹椎、20・21：椎骨、22：前鰓蓋骨、24：方骨、
25：鰓条骨、27：不明、28：擬鎖骨？
2・22・24：右、6：左

動物遺体（魚類）

図版 60



動物遺体（鳥類）（1）



図版 67
1：ツル科、2：キジ科、3：マガモ属、4：ピロードキンクロ属、5–7・9：カモ亜科、8：カラス科、10：ガン族。
1–4：上腕骨、5：烏口骨、6：橈骨、7・8：尺骨、9・10：手根中手骨。
1–3・9：は左、ほかは右。

図版 68
1：カモ亜科、2・3・7：キジ科、4・9：フクロウ科、5・8：ニワトリ、6：カラス科。
1–3：大腿骨、4・5：脛足根骨、6–9：足根中足骨。
2・3・6は左、ほかは右。

図版 62



1：スッポン、2：ウサギ類、3・5・6：ネコ、4：イルカ類、7：ウマ、8・9：ウシ
1：下腹骨板、2・5：脛骨、3：下顎骨、4：腰椎、6：大腿骨、7：上腕骨、8・9：頸椎
1・2・6・7：右、3・5：左

動物遺体（爬虫類・哺乳類）

報 告 書 抄 録

ふりがな	たいとうく　もとあさくさいせき
書名	台東区　元浅草遺跡
副書名	都立白鷗高等学校附属中学校仮設校舎建設に伴う埋蔵文化財調査
シリーズ名	東京都埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第386集
編著者名	山﨑太郎・両角まり・渋谷葉子・長佐古真也・宮本由子・鈴木伸哉・大山幹成・江田真毅・許開軒・阿部常樹・及川良彦
編集機関	公益財団法人東京都教育支援機構　東京都埋蔵文化財センター
所在地	〒206-0033　東京都多摩市落合一丁目14番2　　TEL 042‐374‐8044
発行年月日	西暦　2024年　7月　31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市区町村	遺跡番号					
元浅草遺跡（もとあさくさいせき）	東京都台東区元浅草一丁目6番22（とうきょうとたいとうくもとあさくさ）	13106	11	35°42	139°46	20220808 ～ 20230623	1,800㎡	都立白鷗高等学校附属中学校仮設校舎の建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
元浅草遺跡	社寺・屋敷	近世・近代	煉瓦製建物基礎3基、円礫充填建物基礎1基、瓦充填建物基礎1基、板基礎列1基、コンクリート製三和土1基、コンクリート縁石列1基、鉄管列1条、土管列10条、木樋列6条、竹樋3条、コンクリート製枡1基、煉瓦製枡12基、木製枡6基、石積遺構2条、土留板列13条、中の島1基、井戸5基、井戸囲い枠1基、埋設桶4基、木枠土坑5基、土坑16基、木枠2基、瓦集中部1ヶ所、遺物集中部1ヶ所	陶器、磁器、土器、木製品、金属製品、石製品、ガラス製品、植物質製品、骨角貝製品、瓦、煉瓦、ミニチュア、人形、玩具、動物遺体（貝類、魚類、鳥類、爬虫類、本虫類）、植物遺体	東京府立第一高等女学校の建物基礎3基と、渡り廊下部分を検出。 近世から近代まで利用されていたと考えられる池遺構とその導水施設、埋立ての土留板列を検出。 東西に延びる近世前半の石積遺構を検出。調査範囲外まで続く。

要約

元浅草遺跡は、武蔵野台地東端部と隅田川西岸の中間にある低地に位置している。今回の調査は、都立白鷗高等学校附属中学校の仮設校舎建設に伴って行われたもので、調査地点は都立白鷗高等学校の校庭にあたる。

近代では、東京府立第一高等女学校の講堂と教室棟にあたる煉瓦製建物基礎と、それらを繋ぐ渡り廊下と考えられるコンクリート製三和土を検出した。また、府立第一高等女学校並びに白鷗高等学校の昭和期の校舎に沿う土管列やそれらが接続する煉瓦製枡を多数検出した。

近世では、江戸時代から明治時代にかけて利用されたと考えられる池遺構や、調査範囲を東西に貫く石積遺構を検出した。池遺構は、周囲に間知石の石積による護岸を持ち、池の中央に中の島を設けていた。また、池の北西で、木樋、竹樋と木製枡を組み合わせた施設を検出した。木樋は石積の護岸を貫いて池内部へと突き出ており、池への導水施設と考えられる。さらに、池遺構には埋立てに伴う土留板列が設置されており、段階的に埋立てを行っていたことを確認した。

調査範囲を東西に貫く石積遺構は、間知石を積み上げた遺構である。最下部に胴木を設置し、その上に主として3段の石積を行っていた。石積の前面には土留板が設置され、土留板は木杭と丸太様の木材からなるアンカー状木製品によって支えられていた。この石積遺構は寛永江戸全図に見られる地境に相当すると考えられる。

印刷仕様

表紙	レザック	215kg（四六判）
見返し	上質紙	135kg（四六判）
本文	上質紙	70kg（四六判）
写真図版	上質紙	70kg（四六判）
印刷方式	オフセット印刷	
使用インク	エコマーク商品認定基準に適合	
製版線数	150 線（カラー 175 線）	

本書は永久保存を考慮し、すべて中性紙を使用

台東区

元浅草遺跡

−都立白鷗高等学校附属中学校仮設校舎建設に伴う埋蔵文化財調査−

東京都埋蔵文化財センター調査報告第 386 集

2024 年 7 月 31 日　発行

編集　公益財団法人東京都教育支援機構

発行　東京都埋蔵文化財センター

東京都多摩市落合一丁目 14 番２

TEL 042 - 374 - 8044

印刷　株式会社 外為印刷

東京都台東区浅草 2-28-31